
アルカナ～切り札の騎士～

悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルカナ〜切り札の騎士〜

【Nコード】

N7516J

【作者名】

悠

【あらすじ】

車に轢かれたわけでもなく神に連れ去られたわけでもなく、気が付けば遊戯王GXの世界にトリップしていた主人公、御堂切。使うデッキは『絵札の三銃士』。原作キャラとのカップリングは特に考えていませんが、希望があれば可能な限り。原作ではまだ出てないカードや効果の違うカードが現実設定で出たりします。あとトリップの特性上、原作からは離れていくこともあるでしょうし、原作キャラも多少影薄いところもあつたりしますが、どうか温かい目で見てくださいれば幸いです。あ、ちなみに初投稿です。

第四期開始。第二期からはオリカも出ますので苦手な人はご注意を。

第一話「入学」（前書き）

初投稿です。手探りの自転車操業ですので、決して更新速度は速いと言えませんが、できる限りがんばります。感想については忌憚なき意見を希望。ただし、理不尽な罵倒、展開が気に入らない等、作者にはどうしようもないものは申し訳ありませんが拒否させていただきます。

第一話「入学」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第一話「入学」

異世界トリップ、という単語は近年ネット上では割とお馴染みになってきている単語だろう。オリ主TUEEEEEEE！ という類のヤツだ。だが、それはあくまで架空の物語だからこそ成り立つのであって、まさかそれが自分に振りかかるなんてのは夢にも……いや、夢として見ることはあってもそれはただの自分のイタイ妄想であると理解した上での夢だろう。少なくとも俺は夢にも思っていないかったのである。

「で、遊戯王GXの世界にご招待、か」

とりあえず、自分の状況を確認。俺はあのデュエルアカデミアへの入学を控えた受験生。受験番号は112。十代の受験番号が確か110だった筈だから、その二つ後だ。

「ってことは、なんかもう一人くらいイレギュラーが混じっているわけだ」

具体的には、111番の人。

「まあなんにせよ、まずは入学試験のデュエルに勝たなきゃ話にならないな」

とゆる〜わけでデッキを確認。俺が現実で使っていたのは『終焉のカウントダウン』を使ったこの世界じゃ嫌われまくる特殊勝利系とか剣闘獣とか。まあグラディアルビーストはないな。つか、俺って

ば現実じゃ大分バーンデツキや特殊勝利、デツキ破壊とかの鬼畜デツキばかり組んでたんだよな。もしそなんだつたら孤立間違いなしじゃん。

「お……」

デツキを確認してみると、意外や意外。俺が作った数少ないビートデツキの一つだった。しかも、この世界なら結構いい感じで目立ってそうなタイプだ。俺も気に入っている奴だし、悪くない。

「くらえ！ スカイスクレイパーシユート！」

「マンマミーヤ！ 我が『古代の機械巨人』があゝ！？」

俺がデツキを確認している間に、十代が『フレイム・ウイングマシ』でクロノス先生に勝利していた。やべ、見逃した。

「……はあ、では次の111番、どうぞなノゝネ」

そういつてクロノス教諭は気分が悪くなったと壇上を降りて行った。どうやら試験は別の試験官が担当するらしい。……残念。クロノス先生と戦ってみたかったんだが。

ともかく、次は俺と同じくイレギュラーであろう111番だ。しっかり見ておかなくては。

「は、はい」

ちよつと困惑気味に舞台上に上がったのは女子生徒。俺と同じ状況の人間なら、ああなってもおかしくない。あとで接触してみるとに決め、まずはデュエルを鑑賞することにする。

「受験番号111番、天音アテナです。よろしくお願いします」

「うむ！ 全力でかかってきなさい！」

「デュエル！」

「行くぞ、先生のターン！」

……もしかして、先攻後攻って速い者勝ちか？ 少女もびっくりしている。

「先生は手札から『不意打ち又佐』を攻撃表示で召喚だ！ そして装備カード『デーモンの斧』を装備する！」

『不意打ち又佐』 ATK1300 2300

うわガチだ。又佐は二回攻撃でコントロールを奪えない1300の優秀モンスター。その低い攻撃力をデーモンの斧なら十分補える。攻撃力2300を超えるモンスターはおいそれと出せるもんじゃないしな。さて、どうするイレギュラー？

「ターンエンドだ」

「私のターン。手札から『ヘカテリス』の効果を使います」
お。

「『ヘカテリス』の効果で、デッキから『神の居城 ヴアルハラ』を手札に加え、そのまま発動します！」

ソリッドビジョンにより、フィールドに巨大な門が現れる。

「ヴァルハラの効果発動！ 手札から『アテナ』を攻撃表示で特殊召喚します」

『アテナ』 ATK2600

フィールド上に、神々しい光を纏った戦女神が降臨する。攻撃力は2600。十分不意打ち又佐を倒せる！

「おお……」

「さらに、私は手札から『ジェルエンデュオ』を攻撃表示で召喚します！」

『ジェルエンデュオ』 ATK1700

「ぬう！」

「『アテナ』の特殊効果起動！ 天使族モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚されるたびに、相手ライフに600ポイントのダメージを与えます！」

「ぐあ！？」

教師LP3400

あーそついや、ライフつて4000なんだよな。少ないなあ。

「『アテナ』の効果起動！ 『ジェルエンデュオ』をリリースして再び『ジェルエンデュオ』を特殊召喚！ 『アテナ』の効果！ 600ポイントダメージ！」

教師LP2800

出た！『アテナ』のループバーン！ こりゃライフ4000じゃ溜まったもんじゃないよな。

「バトルフェイズ！ 『アテナ』で『不意打ち又佐』を攻撃！ えと、じゃ、『ジャツジメント・レイ』！」

あ、名前考えるの苦手っぽい。顔赤いし。

「おおお！？」

教師LP2500

「『ジェルエンデュオ』でプレイヤーにダイレクトアタック！ うう…… 『セイント・アタック・デュオ』！」

とりあえずひねり出しました的なネーミングだ！

「うああ！」

教師LP800

まあなんにせよ試験官のライフはあと少しだ。『アテナ』の効果もあるし、このまま押し切れるだろう。

「カードを一枚セットして、ターンエンドです」

「くっ……やるな！ 先生のターン！ ドロー！」

「トラップ発動！ 『ソーラー・レイ』！ 1200ポイントのライフダメージ！ 私の勝ちです！」

「なにっ！？ うわあああああ！？」

教師LPO

あ……。

いや、別にいいんだけど。ほぼワンキルなのもまあいいんだけど。流石にこの世界でバーンフィニッシュはちよつと悪目立ちするんじゃないかなー？ ほら、なんかザワついてるし。

「よ、よし。もういいぞ。良いデュエルだった」

「は、はい。ありがとう、ございました……」

少女もなにやらビクついてるな。まあともかく、十代、少女と二人して目立ってくれちゃって。これじゃ俺が目立ってやしない。

「最後！ 112番」

「イエス、ティーチャー。112番御堂切、よろしくお願いしまっ

す！」

気楽に答えて舞台上がる。おーおー見てる。さっきの少女がガン見してるよ。こりゃ俺が話しかける前に向こうから話しかけられるかもな。

「今年の新生は粒ぞろいのようにだな！ 君にも期待しているよ」「ども。期待を裏切らないよう精いっぱいやらせていただきますってね」

「デュエル！」

ひゅ〜わくわくしてきた。さーて手札は……。

「先生の先攻だ！ ドロー！」

うお。またしても言ったもん勝ちの先攻。まあいいや。手札は揃いまくってるし。ぶっちゃけワンキルオーケーです。

「さっきは様子見が過ぎたからな。今度は全開だ！ 行くぞ！」
重装武者 ベン・ケイ』を攻撃表示で召喚だ！」

『重装武者 ベン・ケイ』 ATK500

おっと。今度はベン・ケイか。つか、この人矢ヶ城先生か？ そうつぽいな。

「ベン・ケイに『デーモンの斧』を二枚と『団結の力』を装備！
ターンエンドだ！」

『重装武者 ベン・ケイ』 ATK500 3300

おおう。これで3300の四回攻撃モンスターですかい。こりゃ
圧巻。

観客席もザワツついている。まあターン目からあんなの出てきたら驚くわな。

「さあ！ どうする？」

「すいませんセンセイ。ワンキル、行かせていただきますよ」
「なっ……」

観客席のザワめきが大きくなった。そりゃまああんなフィールドの相手にワンキル宣言とかどんだけ？ って気持ちもわかるけどな。

「俺のターン、ドロー！ 手札から『融合賢者』を使わせてもらいます」

『融合賢者』で『融合』をサーチ。

「んでもって『融合』発動！ 手札の『クイーンズ・ナイト』『キングス・ナイト』『ジャックス・ナイト』の三体を融合！ さあて、いきなりだけとお出ました！ 出てこい『アルカナ ナイト・ジョーカー』！」

『アルカナ ナイト・ジョーカー』 ATK3800

そう、俺のデッキは『絵札の三銃士』。『アルカナ ナイト・ジョーカー』があまりにもかっこよかったもんでデッキを組んでみたら案外強かった。以来お気に入りのデッキだ。

「攻撃力……3800!？」

「一ターン目からこんな……!」

おおー、目立ってる目立ってる。やりい。

「いつきまーす! 『アルカナ・ナイト・ジョーカー』で、ベン・ケイを攻撃! 『ロイヤル・ストレート・スラッシュ』!」

名前は即興。まあなんでもいいし。

教師LP3500

「ぐう！ だが、それではワンターンキルはできないぞ!」

「まだだ。まだ俺のバトルフェイズは終わっちゃいない!」

「なに!？」

「速攻魔法『融合解除』! 戻ってこい、三銃士!」

『クイーンズ・ナイト』 ATK1500

『キングス・ナイト』 ATK1600

『ジャックス・ナイト』 ATK1900

アニメで遊戯さんが使ってたやつ、俺もぜひ一度やってみたかったんだよね。

「そして『融合解除』で特殊召喚された絵札の三銃士には、まだバトルフェイズが残っている!」

キタ! キタコレ!

「絵札の三銃士のダイレクトアタック！『三位一体』！」

「ぐあああああああああ！？」

教師LPO

「っしゃ！ 宣言通りワンキル達成！ ありがとうございました」

「

なにやらザワめくを通り越して沈黙してしまった観客席を尻目に、俺は意気揚々と会場を後にする。さーとと、あの少女はっど？

「おーい！」

むっ、あそこで手を振っているのは十代！ それに翔とスリー・スワンプ・アース（三沢）じゃないか。

「なんだ、どした？」

無視すんのも感じ悪いので、とりあえず近寄ってみる。

「お前すんげーデュエルだったな！ まさかワンターニキル決めてくるとは思わなかったぜ！」

「ありや初手からアホみたいに手札が揃ってたからだったの。普通、あんなに上手行くもんかい」

事実だ。正直史上稀にみる揃い方だったと思う。

「まあ、たとえそうだとしても華麗なワンターニキルだったと思うぞ。確かに、揃いすぎだった気もするが」

「ところで、えーと」

知ってるが、一応初対面設定なので名前を知らないふりをする。

「オレ、遊城十代！ 十代でいいぜ！」

「僕は丸藤翔ツス。翔でいいツスよ！」

「俺は三沢。三沢大地だ」

「オツケ、把握。俺は御堂切。切でいいや」

「おう！ セツだな。よろしく！」

「み、御堂さん！」

「お？」

自己紹介が終わったところで、イレギュラーの少女が声を掛けてきた。

「ちょっと……お話があるんですけど、お話し中ですか？」

「んにゃ。悪い三人とも。またあとで」

「なんだ？ いきなりラブコメか？」

「そんなんじゃないの？」

意地の悪そうな笑顔で聞いてくる三沢を一蹴し、少女の下へ。

「あいよお待たせ」

「すみません。お話し中だったのに」

「いいっての。で？ 話つてのは？」

単刀直入に聞くと、少女は言おうかどうしようか迷っている様子でもじもじしていた。

「えと、笑わないで聞いて欲しいんですけど……」

「ういいうい了解」

「その、わ、私と……」

うん？

「私とお付き合いしてください！」

……あるえ〜？

第一話「入学」（後書き）

と、いうわけで、主人公とヒロイン登場の回です。

まあ初めてのデュエルだったので、ご都合主義として、そしてテンプレとしてめっちゃめっちゃ揃いまくった手札からのワンキルを決めさせてもらいました。

この小説は基本、今回出てきた二人を主軸としてまわしていきま
す。十代たちについてはさほど出番の予定はありませんが、扱いや
すい翔あたりは出番が多めになるかも。といっても、まあ比較的、
というだけの話ですが。あと、この小説で一番空気なのはおそらく
三沢ではなくコアラ君です。

第二話「流石にこれは予想外」(前書き)

第二話です。今回はデュエルがありません。遊戯王の話なのにデュエルがないのも変な話かもしれませんが、まあデュエルだけが遊戯王じゃないってことでどうか一つ。
では、どうぞ。

第二話「流石にこれは予想外」

アルカナく切り札の騎士く

第二話「流石にこれは予想外」

「わ、私と……私とお付き合ってください！」

……あるえく？

「……は？ いや、ちょ、はあ？」

やばい、理解が追いつかない！

「はあく？ ていうか、ええく？」

なんか混乱しすぎてくわけわからんポイント入ってしまった。いやだって、てつきり異世界トリップの話が来ると思ってたのにきたのはブラック・ホワイト……じゃない、告白つて。そりゃ流石に予想できんて。

「あ、あの……いきなりこんなこと、その、御迷惑だとは思ってんですけど、その」

しかもなんかガチ！？ めっちゃ顔赤いし！ すつごく必死だし！

「さっきのデュエル見てて、う、運命感じちゃいました！ お付き合いですか、お願いします！」

うわあ、俺の勘違い路線消えたわあ。

「わ、私、いつもは決してこんな惚れっぽいことなんてないんですけど！ 未だ恋人いない歴〃年齢なんですけど！ その、それでも無視できない衝動が、その……」

やばい、俺まだくわけわからんポイント入れた時以外発言してね

え。つかこの少女が別の意味でトリップしてる。救助活動を！

「いやその……はあく？」

うがぁ！ またわけわからんポイント入れちゃった！ なんか俺までトリップしてるっばい！ そりゃそうだよな！ 俺ブラック・ホワイトされたの初めてだもん！

「ご、ごめんなさい！ い、今は忘れて……欲しくはないですう」

ああ！？ なんか勝手に断られた感じで半泣きだ！ きゅ、救助……いや、救命活動を！

「あつ、と。その、別に迷惑とか、嫌だったとか、そんなんじゃないかな？」

よし、なんとか口は動いた。

「ぶらっ……じゃない、告白とかされたの初めてで……混乱の極地というかなんっつーか」

あつぶね。ブラック・ホワイトとか言いそうになった。

「迷惑じゃ……ない、ですか？」

「そりゃまあ、うん」

この少女、よく見りゃ絶妙に可愛いし。スタイルもバランスいいし。ぶつちやけ断る理由を探すほうが難しいくらいというか……。

「ただまあ、その。いきなりってのは流石に……」

そこ、ヘタレと言うなら甘んじて受けよう。なんも知らんで告白されたからとりあえず受けるとかいう選択肢は俺ん中にはないの。

「そ、そうですね。やつぱり……いきなり過ぎました……よね」

「い、いやその！ ぶつちやけ第一印象的には120%合格なんだけど！ オツケーなんだけど！ だからこそ不誠実な了解はしたくないっつーか」

ああどうせヘタレさ！ 俺は自覚もあるヘタレだ！ 文句あつか！

「じゃ、じゃあせめて！ あ、アドレスください！」

「お、おうとも。それくらいはお安い御用！」

なんだこの中学生カップル。我ながらそう思わざるを得ない。お

友達から始めましようとか、現代では化石扱いだろ。

とりあえずアドレスを交換し、登録する際に一つ問題が。

「あ、名前、教えてくれない？」

「はあうっ!？ そういえば自己紹介もしてないし」

なんか自虐モード入ったっぽい。いや、さっきの試験の時に聞いた気がするけど、あの時はそれどころじゃなかったしなあ……。

「こ、こほん……よし」

あ、現世に復帰した。

「あ、改めまして天音アテナと申します！ 13歳です！ 名前のまま『アテナ』中心の天使族デツキを使っています」

あーそうそうそんな名前だった。って13歳!？ そのスタイルで!？

「えーと、とりあえず俺も自己紹介。御堂切、デツキは『絵札の三銃士』。歳は……」

あり? そういやこの世界では俺って何歳なんだ? 現実では19なんだが……とりあえず携帯……っぽい通信機を調べる。15歳。おお、若返ってる。まあ今年で16みたいだけ。

「15だ。まあ、数えだと16だな」

「う……私、実は数えで13です」

うおい!？ ってこたあ12かよ! 後々出てくる早乙女さん家のレイちゃんとそう違わないじゃん! ……飛び級? まあ、3歳差くらいなら許容範囲か……。つか、12だとするとなおさらすごいスタイルだ。ぶつちやけ高校生と言われても違和感ない。

「ま、まあ、俺のことは気軽にセツとでも呼んでくれ」

「い、いいえ! そ、そんな年上を呼び捨てなんておこがましい!」「あー、でも切さん、とかって語呂悪くて呼びにくいだろ? だいたいぶだつて。近所の悪ガキどもだつてセツ呼ばわりだつたしな」

「は、はい。でしたら、その、思い切つてセツと呼ばせていただきます! あっ! 私のごとはアテナで!」

「ほいりょーかい。よろしくアテナ」

「は、はい！」

「えーと……とりあえず俺は十代たちのところに戻るけど……」

「そ、その、それじゃあ私も一端戻ります。あの、メールとかしても……いい、ですか？」

「おう、当たり前だろ。好きな時にしてこいな。あー、ただ、俺つてば結構筆不精だからな。メールとかそっけないかもしれんが、勘弁してくれ」

「はい！ じゃあ今晚、さっそくメールしますね！」
めっちゃ嬉しそうな顔で去って行った。やば、思わず顔がニヤける。

「まあ、可愛かったしな」

「ふう〜ん」

「へえ〜」

「ほお〜」

……………。

ギ、ギ、ギ、ギ、とブリキの案山子のような感じで振りかえれば、そこにいたのは十代、翔、三沢の三人。さっきの俺以上にニヤニヤしてやがる。

「『う、運命感じちゃいました！ お付き合いしてください！』だつて」

「……ええい！ その2828を止めい！」

「『まあ、可愛かったしな』だつたか」

「へへっ！ やっぱりラブコメだったな！」

「くう……この、デバガメどもが……」

流星に恥ずかしい。恥ずかしすぎる。

「いや〜さっきのデュエルといい、今のといい、初日からすっげー面白いモン見せてもらったぜ！ これからもよろしくな！ セツ！」
「う、うるせい！ 俺をギャグ担当扱いすんな！ てか純情少年おちよくつて楽しいか貴様らー！」

流星の俺もそろそろキレルぞ！？ ただでさえいきなりこっちき

て混乱してるのに次から次へと！

「おっと、そういやオレ、セツに聞きたいことがあったんだ」

「あ？」

十代は俺の後ろを指さした。

「そいつら、見えてるか？」

まさかと思つて振り向くと、そこにたたずんでいたのは紛れもなく絵札の三銃士！ マジか！ こいつら精霊なの！？

「ええー……」

驚きで硬直する俺の反応に、見えていると判断したらしい十代は確認を取ってくる。

「見えてる……みたいだな」

「ああ。えと、こいつらは？」

原作知識で知っているとはいえ、一応聞いておく。

「そいつらはカードの精霊だよ。仲よくしてやれ」

「……まあ、そりゃ仲良くはするけどさ……なんか、すでに一人不愉快そうなんだが」

『クイーンズ・ナイト』がめっちゃやさぐれた感じでつま先トントンしてる。『ジャックス・ナイト』は苦笑してるし。

『うむ。まあ、精霊にもちよつとしたオトメゴコロというやつじゃないな』

「うおっ！　しゃべった！」

『キングス・ナイト』がやたらフレンドリーに話しかけてきた！

『はは、クイーンも、やつとできた主がいきなり誑かされればいい気はしないでしょう』

『……別に、そういつた意図はありませんわ』

……よっし、性格把握。キングが好々爺チックでジャックが爽やか好青年。クイーンは姫様系ツンデレということで認識。各々一言ずつで決めつけるのも良くないかもだが、わりとわかりやすい反応返してくれたんで多分間違っちゃいない。

「あははっ、まあいきなりだとビビるよな。んで、こいつがオレの

相棒」

『クリクリ〜』

「おお、可愛い」

茶色い毛玉に天使の羽。つぶらな瞳が実にキュートな『ハネクリボー』だ。

『クリ〜』

ハネクリボー、間近でみると尚可愛いな。こりゃいいや。

「……アニキたち、さっきからなんの話してるッスか？」

「ああつと、いや、こつちの話」

そういや、翔たちには精霊見えないんだっけ。

まあともかく……精霊がいるってことは、まず間違いなく原作には介入することになるんだろうな。……気になるのはやっぱり、俺に告白してくれたアテナなんだが……うん。俺用のヒロイン？

いや、なんか調子乗った解釈だけど。原作キャラとのカップリングなんぞ認めるかボケエ！ ってことかもしれん。……ほついても原作キャラとカップリングすることなんざあり得なさそうだが。

……世界の平和、か。んなもん一介のオタクには過ぎた荷物だとは重々承知だけど……まあ、俺は俺らしく……ゆるゆる行きますか。まずは楽しむこと第一で、な。

「そういうわけで、ちつとばかり長い付き合いになりそうだが……ま、よろしくな」

俺の相棒たる三銃士に軽く会釈する。三銃士はさつきまで不機嫌そうだったクイーンも含めて全員笑顔で頷いてくれた。

『御意！』

第二話「流石にこれは予想外」（後書き）

はい。というわけで、わかる人にはわかるネタを入れつつ、精霊登場までです。多少ヒロインの設定が強引ですが、伝家の宝刀『都合主義』ってことで……駄目？

次は偽ラブレターの事件ですね。序盤の盛り上げどころのひとつのつもりですので、どうかよろしく。

第三話「偽ラブレター事件！ アテナとのデュエル」（前書き）

第三話です。早くも拙作をお気に入り登録してくださった方がいるようで、初投稿でドキドキしている身としては大変光栄です。

さて、第三話は一応最初の見せ場として設定しておりますので、楽しんでもらえることを願っております。長々と失礼しました。それでは、お楽しみください。

第三話「偽ラブレター事件！ アテナとのデュエル」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第三話「偽ラブレター事件！ アテナとのデュエル」

試験の結果、俺は十代たちと同じオシリス・レッドに配属されることに。

……何故。華麗なワンキル決めたのに！……なんか筆記試験の結果が十代以下だったらしい。バカな！？ 実際に受ければ三沢にだって負ける気しないのに！

「まあ、愚痴ってもしゃーなし、だな。むしろ三沢くらいしか知り合いのいないラー・イエローに入れられなくてよかった、としよう」
うむ。ポジティブポジティブ。

「……にしても、翔のやつ遅いな」

「あーそういや、今日一日ずっとトリップしてたよな」

この世の春一人占め！ ってな具合に。つーと今日はあれか、十代が明日香フラグ立てる日か ギャルゲー脳。

……原作じゃあ冤罪だったけど、もし本当に覗いててアテナも覗かれてたりしたら……そのときは明日香側に着こう。むしろ率先して吊るしあげてくれる。

ピッピー、ピッピーと電子音。一つは十代のから。もう一つは俺のから。

「ん……アテナだな」

「お、おいセツ大変だ！」

アテナのメールを開く前に、十代が血相を変えてこっちに通信機を近づけてきた。

『マルフジシヨウハアズカッテイル。カエシテホシクバ、ジヨシリヨウマデコラレタシ』

「むう……つまり、翔が誘拐でもされたのか？」

「かもしれないえ……オレ、迎えに行ってくる！」

「ちよい待ち！ 俺んトコにもほぼ同時にメールが来たんだし、こっちも見ってみよう」

「……それはいつものラブコールだろ？」

「……一応聞け」

十代の茶化をスルーし、アテナからのメールを開く。

『セツ、今平気ですか？ その、ちよつと話があるので、できれば今から女子寮の方に来てくれませんか？』

「やっぱいつものラブ……」

「いつも女子寮に呼び出されてたまるか！……明らかに関係してるっつの」

まさか……まさか翔の奴……やっちまったか？ やっちまったのか？ だとしたら生かしちゃおけねえ。が、まだ信じておいてやるう……今は。

十代と二人でえっちらおっちらボートを漕いでブルー女子寮へ。

そこには案の定、両手を縛られた翔を囲むようにして明日香とその取り巻きである枕田ジュンコと浜口ももえ、そしてアテナがいた。

「アニキ、セツ君」

「翔！ これは一体どういうことなんだよー！」

「それが、話せば長くなるようならなならないようなら……」

「こいつが女子寮の風呂を覗いたのよ」

「なんだって？」

「だから覗いてないって！」

原作通りならそうなんだろうが……。

「それが学校にバレたらきつと退学ですわ〜」

「そんな〜！」

「そこで、提案なんだけど……」

明日香が俺たちを指さしてきた。人を指差しちゃいけないんだぞ。
「私たちとデュエルしなさい。貴方達が勝ったらこのことは水に流してあげるわ」

揉め事はデュエルで解決。いいねー平和だねー。しかし……。

「私と十代、御堂君は……アテナとね」

「は、はい！ よろしくお願いしますませ……」

「ちよい待ち！」

「なに？ 何か問題でも？」

大アリだ。この返答如何で、俺はそつちの味方に着くからな。

「アテナ……お前も覗かれた、のか？」

「へ？ あ、いえそれはその……」

「その返答次第では……俺はむしろ率先して翔を吊るし上げる側に
回ることに……」

「ちよ！？ 違っツス！ 僕はやってないツスよ〜！」

「本当か？ 天地神明、お天道様に誓えるか？ 己がデュエリスト
魂に賭けて自分は清廉潔白だと主張できるか？」

「え？ せ、セツ君？」

「あいわかった俺はそつちに「わ〜！ 誓っツス！ 主張するツス
よ〜！」……いいだろう。お前を信じよう」

始めからわかってました的な笑顔を見せてやる。

「お前、性格悪いぞー」

「いや、わりい。だが告白までしてくれた娘の風呂覗かれてたら俺
だって向こう側に着くことになるのは当然だろい」

「……よかったじゃない。結構普通に愛されてるわよあなた」

「はうう……セツ……」

「くっ！　なんか妬ましいわ！」

「御堂さんも中々のイケメンですしね」

……向こうは向こうでなにやら騒がしいが、ともかく。

「じゃあデュエルは十代と天上院。俺とアテナか？　いや、当事者がデュエルなしてのもおかしい話か。んじゃ、そっちは残りの二人からどっちか選出してくれ」

「そうね。確かにそれは妥当な提案だわ」

「じゃあ、3VS3で二本先取のチーム戦ってことでおk？」

「ええ。それで構わないわ」

「まあなんでもいいや！　待ってる翔！　お前の無実はおれたちで晴らしてやるからな！」

「うううありがとうアニキ」

「しゃくねえ。まあアテナとのデュエルってのは面白そうだし、俺も頑張つてやらあ」

これも本音だ。あの『アテナバーン』チックなデッキにはかなり興味がある。明日香と十代は……多分原作通り『サンダー・ジャイアント』で勝つだろ。で、俺が勝てばそれでお仕舞い。けど、アテナの奴も強いしな。下手すりゃ翔までもつれ込む。……うん？　もしかしてもつれ込んだ方がいいのか？　だってそもそも当事者は翔なんだし……まあ、それで翔が退学になっても寝覚め悪いし、勝つに越したことはないだろ。

「デュエル！！」

おっ、始まった始まった。とりあえず観戦観戦。

しかし、改めてみるとなんとという運ゲー。戦略云々よりも『引

き』の強さが第一じゃね？ そら十代強いわ。毎ターンディスクティードローみたいになやつだし。

そうこう言う間にとっとと終盤。

「一気に決めるぜ！ 『サンダー・ジャイアント』の特殊効果発動！ 『サイバーブレイダー』を破壊！ そして相手プレイヤーにダイレクトアタックだ！ 『ヴォルテック・サンダー』！！」

「ああああ！」

「明日香さん！」

「大丈夫でございますか？」

おおー決まった決まった。さて、次は俺の番だな。

「うし。ナイス十代！ これでプレッシャーなしに戦えるってもんだ」

「おう！ 決めちまえ、セツ！」

「……いや、それはいいんだけどな。ここでもし俺が決めたら、翔は当事者のくせにデュエルしないというなんとも矛盾した結果になるんだが……」

「い、いいじゃないツスカ！ 細かいことは言いつこなしツスよ！」

「……貸し一だぞ」

まあ、明日香の目的は翔がどうこうってより俺らの戦力調査だろうし、ぶっちゃけ翔がどうなるうと構わないんだらうな。

「よっし、そんじゃあアテナ！ やろうぜ」

しっかりとアテナを見据えて、デュエルディスクを展開する。

「……ひゃ〜」

「ん？ どした」

「あらあら、御堂さんっていざデュエルとなると顔つきが変わってイケメンレベルが増しますわね 思わず見惚れてしまいますわ〜」

……そんな嬉し恥ずかしな評価はやめてくれ。ある意味それって顔芸扱いされてる気分になるから。

「ん、んんっ！ ほらアテナ。いつまでも惚けてないで、しゃきつとしなさい……」

「……っは!?!」

アテナ起動。

「す、すみません。……それでは一戦、お願いします!」

! ……ははっ。

「お前も、いつもとは顔つき違うぜ。プレッシャー感じるよ」

「光荣です。ボケつとしたままじゃ、カードに失礼ですからね」

……やべっ、こいつ改めて良い女かもしれん。

「んじゃ、俺も手加減なしだ。文句ないよな」

「はい。正々堂々、全力で!」

「「デュエル!」!」

「っーことで先攻もらっぜ! ドロー!」

全力でってことならレディーファーストもないよな!

「魔法カード『増援』発動! デッキから『クイーンズ・ナイト』を手札に加える!」

『増援』は、デッキから星4以下の戦士族を手札に加える戦士族のサーチカードだ。『クイーンズ・ナイト』がなければ展開が始動しない俺のデッキには必須ともいえるカードである。

「! 来ましたね」

「手札から『切り込み隊長』を攻撃表示で召喚! 特殊効果発動!」

『切り込み隊長』 ATK1200

『切り込み隊長』は召喚時に手札の四つ星を特殊召喚できる上、

自分以外の戦士族を攻撃対象から外してくれる戦士族のキーカード!

「『クイーンズ・ナイト』、来ますか!」

「ところがどっこい! 俺は『戦士ラーズ』を攻撃表示で特殊召喚! 効果発動!」

『戦士ラーズ』 ATK1600

『戦士ラーズ』は戦士族のサーチャー。四つ星以下の戦士をデッキの一番上に持つてくることが出来る。これだけだとドロー一回分のデイスアドバンテージだが……。

「『キングス・ナイト』を選択し、デッキの一番上に! さらに手

札から『強欲な壺』を発動！ デッキからカードを二枚ドロー！

「……速い！」

これでキングとクイーンが手札に揃った。あとは……。

「永続魔法『連合軍』！ さらにカードを一枚セット、ターンエンドだ！」

『切り込み隊長』 ATK1200 1600

『戦士ラース』 ATK1600 2000

「すつげー！ めちゃくちゃ良い感じじゃねーかセツ！」

「……とんでもないデッキ回りの良さね。強運もあるんでしょうけど、一枚一枚が無駄なく作用してる」

確かに、試験の時といい今といい大した鬼引き。……メインキャラ補正か？

「……さすがセツですね。私も、負けてはいられません！ ドロー！」

さて……どう回してくる？ こっちの場合は現在攻撃力1600の『切り込み隊長』に攻撃力2000の『戦士ラース』。攻撃力の高い天使デッキならなんとかかなりそうなレベルではあるが……。

「『ヘカテリス』の効果発動！ そのままヴァルハラ発動です！ 呼び出すのは『光神テテユス』！」

『光神テテユス』 ATK2400

アテナのフィールドに、一体の天使が現れる。あいつは確か、ドロ補助の上級天使！

「さらに『ジェルエンデュオ』を攻撃表示で召喚！ 私も手札から『強欲な壺』を発動です！」

『ジェルエンデュオ』 ATK1700

アテナはデッキからカードを二枚ドローする。

「私は『勝利の導き手フレイヤ』をオープンして『光神テテユス』の効果でカードをドロー！ 『アテナ』をオープンし、さらにドロー！」

っ！ 『アテナ』が手札に行きやがった。しかもまだドローは継続

中。

「『ヘカテリス』をオープン、ドロー！『シャインエンジェル』オープン、ドロー！」

うわ、いつまで続くんだよ。

「ドローは終了します。バトルフェイズ！」

来るか！

「『ジェルエンデュオ』で『切り込み隊長』に攻撃！『セイント・アタック・デュオ』！」

「トラップ発動！」

「!？」

悪いな。そう簡単にはいかねえぜ！

「永続罠『血の代償』！ライフを500ポイント支払って手札から『クイーンズ・ナイト』を攻撃表示で召喚！さらに500支払って『キングス・ナイト』も召喚！効果で『ジャックス・ナイト』を特殊召喚！」

セツLP3000

『切り込み隊長』 ATK1600 2200

『戦士ラーズ』 ATK2000 2600

『クイーンズ・ナイト』 ATK1500 2500

『キングス・ナイト』 ATK1600 2600

『ジャックス・ナイト』 ATK1900 2900

俺の場にトランプの三騎士が一気に並ぶ。流石に壯観だ。

「っ！ 攻撃は巻き戻されません。私はカードを一枚セットしてターンを終了します」

アテナは手札から溢れた『ヘカテリス』と『シャインエンジェル』を墓地に捨てる。

「すごい！ すごいツス！ いきなりモンスターが五体並んだツス！」

「けど、これで手札はあと一枚。ライフも消費したし、テテユスのおかげで手札が大量にあるアテナと、どっちが有利とは言えないわ」

そうなんだよな。手札が揃ってるのはいいんだけど、その分一気に使ってしまうからな。もしアテナが伏せたのがミラーフォースとかだったら一発で覆されて終わりだ。

「よっし、俺のターン、ドロー！」

引いたカードは二枚目の『クイーンズ・ナイト』。

「……どうすつかない？」

全軍で攻撃すれば勝てる。テテユスは2400だし、テテユスを倒せれば『ジェルエンデュオ』は自壊してくれる。だが……。

「怖え〜な〜あのリバースカード」

あれが『聖なるバリア・ミラーフォース』や『閃光のバリア・シヤインングフォース』だと十中八九負け。『次元幽閉』や『万能地雷グレイモヤ』、^{リアクティブアーマー}『炸裂装甲』で『ジャックス・ナイト』が除去されるのもやばい。LP的に『魔法の筒』も警戒対象だし……不確定要素が多すぎる。二枚ある手札もあんまし意味ないしここは……。

「……俺はターンエンドだ」

「え！？マジかよ！」

「なんで攻撃しないんすか!？」

「……賢明な判断ね」

「どういうことだよ明日香」

「あの一見絶対的に有利な状況は、実は罠カード一枚で簡単にひっくり返ってしまうのよ。ただでさえテテユスで豊富な手札があるアテナに、迂闊な攻撃はできないと判断したんでしょっね」

「天上院、その説明ずばり凶星だよ」

むしろ、ある意味では追いつめられているのは俺の方だ。遊戯さん曰く、『手札の数だけ可能性がある』だったか。それは逆に取れば、手札のない今の俺には可能性がない。そして手札の豊富なアテナには大量の可能性があるってこった。

「アテナは間違いなく最高クラスのデュエリストだ。イノシシみたく突進するだけで勝てると思えねえよ」

とはいえ、正直『アテナ』が出せる状況下であんまりもたもたし

てはいられねえ。あいつは間違いなく次のターンで『アテナ』を出してくる。その上、もし『ライトニング・ボルトックス』なんか食らったら一発で負け確定だ。ああクソ！ なまじ知識があるから色々考えちまう。

「私のターン、ドロー！ 『コーリング・ノヴァ』オープン、追加でドロー！」

ぬう。やっぱりテテユスはキツイ。あそこまで好き勝手ドローされるとなると早急に排除しなくちゃな。

「……………う。私は『ジエルエンデュオ』を二体分の生贄としてリリースし、手札から『アテナ』を攻撃表示で召喚します」

……………なんだ今の『う』は。もしかして、特に除去系カードがないのか？ 確かにテテユスの効果の関係上、引けるのは殆どモンスターだが……………。

「『アテナ』の効果を発動します！ テテユスをリリースしてテテユスを蘇生！」

「うあ！」

セツLP2400

「テテユスで『切り込み隊長』を攻撃！ 『ホーリー・サルヴェイション』！」

「くそっ！」

セツLP2200

「『アテナ』で『クイーンズ・ナイト』を攻撃！ 『ジャツジメント・レイ』！」

「うう！」

セツLP1900

やば、そろそろキツイ……………！

「ターンを終了します！」

アテナは手札から溢れた『勝利の導き手フレイヤ』を墓地に捨てる。

「うわわわ……………セツ君大丈夫かなあ」

「どっちもすげえよ！ まだ序盤のはずなのに終盤みたいな闘いでやがる！」

「……ほんと、そういえばまだお互い二ターンしか経過してないのよね。どっちもすさまじい速攻デッキね」

我ながら同感。つーかやばい。マジでやばい。どうにかしないと……。

「つく！ 俺のターン、ドロー！」

こいつは……。よし！

「なんとかしてやる！ 魔法カード『悪魔への貢物』！」

正直ギリギリだが、望みを繋いでやるさ！

「こいつはフィールドの特殊召喚されたモンスターを墓地に送って発動する！ アテナの場の『光神テテユス』を墓地に送り、手札から『クイーンズ・ナイト』を攻撃表示で特殊召喚！」

「テテユス！？」

『悪魔への貢物』は条件こそ通常モンスター限定だが、ある意味ノーコストの『ディメンション・マジック』だ。ほんとならアテナに使いたかったが、アテナは普通にアドバンス召喚されているので使えない。

「さらにカードを一枚セット、ターンエンドだ！」

これで手札は尽きた。次にアテナが何らかの除去カードを引いたら俺の負け。そうでないなら俺の次のターンに望みを繋げる！

「終わらせませす！ 私のターン、ドロー！」

どうだ！？

「……私は『コーリング・ノヴァ』を攻撃表示で召喚します。『アテナ』の効果起動！」

セツLP1300

「『コーリング・ノヴァ』を墓地に送ってテテユスを復活！『アテナ』の効果！」

セツLP700

「せ、セツ君……」

「……終わってたわね」

「バトルフェイズ！ テテユスで『クイーンズ・ナイト』を攻撃！

『ホーリー・サルヴェイション』！」

セツLP600

「トランプ発動！」

「ただ、まだ終わっちゃいねえ！」

「『正統なる血統』！ 墓地から『クイーンズ・ナイト』を蘇生！」

「っ！ 『アテナ』で『クイーンズ・ナイト』を攻撃！」

「すまん、『クイーンズ・ナイト』。何度も何度も墓地送りにしちゃまう。」

セツLP300

「う……ターンエンドです」

「俺のターン……」

「どうする……正直、俺の勝てる目は薄い。アテナがいる以上、間違はなくこれがラストターンだし、手札はゼロ。フィールドには『ジャックス・ナイト』、『戦士ラズ』、『キングス・ナイト』の三体。一番攻撃力の高い『ジャックス・ナイト』でも2500。『アテナ』には一歩届かない。モンスターを引ければ……だが、あの伏せカードは……。」

「そこでふと、『ジャックス・ナイト』がこちらを見つめていることに気付く。コクリ、と頷かれる。」

「……そうだな。普段バーンデッキとかばっか使ってるから、どうしてもビビっちゃまっていけねえ。けど……。」

「攻撃しなけりや次のターンで『アテナ』にやられる。あの伏せカードは確かに怖いが……。」

「アテナ……」

「……なんですか？」

「やっぱ、お前強いな。正直、ここまでとは思ってなかった」

「ありがとうございます。セツも強かったです。私の速攻にここまですべて着いてきたのはセツが初めてです。でも……。」

「でも？」

「今回は、私の勝ちです」

「はは……」

確かに、こりや絶望的な状況だ。けど……けどなアテナ。

「トランプの騎士に、後退の二文字はねえ！」

「！」

「俺のラストドロー！」

！ モンスター……じゃない！ けど！

「すまん！ またお前に頼る！ 魔法カード『戦士の生還』！ 墓

地から呼び戻すのは『クイーンズ・ナイト』！」

手札に呼び戻した『クイーンズ・ナイト』を、再び攻撃表示で召喚する。

「っ！ また……蘇生カード!？」

蘇生はアテナ……お前だけのもんじゃねえ！

「悪かったな皆。俺はお前たちの『王』なのに……罠と決まったわけでもないリバーカードにビビっちまってよ！ なあ十代！ お前なら、さっきどうしたよ!？」

俺が攻撃宣言するかどうかで勝敗が決定する……そんな状況下であいつが……。

「！ 当然、攻撃だぜ！」

「だよなあ！ 前門の虎、後門の狼。それなら俺は前門に行く！」

倒れるときは前のめり！ 好きな言葉は全速前進！ バトルフェイズ！」

攻撃しないはずだよなあ！

頼もしい騎士たちが、その四つの剣を煌めかせる。

「『ジャックス・ナイト』！ 『アテナ』を攻撃！ 『ブレイク・ソー

ド

「っああ!？」

『ジャックス・ナイト』が『アテナ』を切り裂く。リバーカード

ドは……発動しない！

アテナLP3900

「『ジャックス・ナイト』に続け！『戦士ラーズ』の攻撃！『レギユラー・ソード』！」

『戦士ラーズ』の剣がテテュスに突き刺さる。同時にテテュスの放った光弾がラーズを吹き飛ばす。

「犠牲を無駄にするなよ！キングとクイーンで、プレイヤーにダイレクトアタック！」

「そんな……ホントに、あの状況から……あああああっ!?!？」
アテナLP0

「つしゃあ！」

思わず思いつきりガッツポーズ！

「やったぜセツ！」

「めっちゃくちやすごかったッス！」

「おう！半端なくギリギリだったけどな！」

ああもうほんとにめっちゃその場凌ぎで後は十代バリの鬼引きでどうにかしたようなもんだ。危なかったああ……。

「……負け、ちゃいました」

アテナはどこかポカンとした様子で座り込んでいた。目をパチクリさせて、ちよつと可愛い。

「アテナ」

「あ……セツ……」

「ぶつちやけ、最後ら辺はラッキードローだったよ。結局イノシシ戦法だったしな」

「……いえ、そもそも二ターン目、セツが攻撃していたらその時点で私の負けだったんです。私の、完敗ですよ」

「う……そいつは言わんでくれ……ビビった自分が情けなくなる」

そう、あの俺のフィールドにモンスターが五体だったときに攻撃してれば多分、何の問題もなく勝負がついてた。結局あのリバーズカードはブラフだったわけだし。

「いえ、あの場合躊躇するのが普通です。それを狙って伏せたんで

すから」

「そういやあのリバーズカードはなんだったんだ？」

「『奇跡の降臨』です。ただ、手札に『神聖なる魂』がなかったの
で、結局使わずじまいでしたけど」

「うげ。そいつは助かったな……」

「とりあえず……」

十代が明日香の方を向く。

「これでオレたちの勝ちだぜ！ 翔は返してもらっぞー！」

「……ええ、そうね。それが約束だもの」

「ア、アニキ！ セツ君もありがとう」

「明日香さん、いいんですか？」

「いいもなにも、そういう話だったんだもの。約束は守るわ」

「まあ明日香さんがそうおっしゃるのなら、わたくしにも否やはあ
りませんわ」

よし、なんとか丸く収まりそうだな。

「それじゃ、もう門限も過ぎてることだし、見つからないよう帰る
としようか！」

「おう！ じゃーな明日香！ お前らもめっちゃめっちゃ強かったぜ！」

「……ええ。けど、今回は私たちの負け。次は負けないわ」

「楽しみにしてるぜ！」

あ、そうだ。

「アテナ」

「はい、なんですか？」

「お前とのデュエル、楽しかったよ。好感度に＋だ」

「へ……？」

「じゃあお休み！」

なんか言われる前に速攻帰還！ 全速力でオールを漕ぐ！ 十代
と翔がめっちゃニヤニヤしてるけど！ そ、それくらいは必要経費
だ！（どっかの空気男っぽく）

そうして、偽ラブレター事件は俺が夜通しからかわれる形で幕を

閉じた。……ちくせう。

おまけ

「はぁうう〜」

「ちょ、アテナ、しっかりしなさいよ！」

「……最後のセリフ、むしろアテナの好感度に+補正かったわね

……」

「わたくしの好感度にも+ですわ〜。やっぱり良い殿方はああじゃありませんと〜」

第三話「偽ラブレター事件！ アテナとのデュエル」（後書き）

はい、というわけで第三話でした。

お気付きの方もおられるでしょうが、アテナはひとつプレイングミスをしています。切が『血の代償』の効果でモンスターを五体並べたときです。あの時、攻撃力2400の『光神テテユス』であれば攻撃力が2200だった『切り込み隊長』をあのターン中に倒せていたことになりません。

このミスは話の展開上、切に勝たせるために仕方なく配置したミスでもありますが、一応意図的でもあります。アテナたちもまだまだ学生。一つのミスもなく戦い続けられることなどあり得ないと僕は思っております。自身も、遊戯王をやって長い身ですが、いまだによくプレイングミスを冒します。それが学生の、しかも13（数えで）のアテナならなおさらでしょう。これは今後出てくることで、切もプレイングミスを行います。まあ、作者のミスの言い訳くさいですけどね（笑）。

さて、次は試験の話ですね。純粹に試験というよりは、新たなキアラや新たな設定、新たな伏線など、ごちゃごちゃとした話になっってしまうかとも思いますが、どうかお付き合いのほどを。

んではでは、ご意見ご感想については常に大歓迎いたしております。レーネスでした。

第四話「月一試験！　そして新たな精霊！」（前書き）

そろそろストックが尽きてきた四話目です。今回はデュエルなし。タイトル通り新しく精霊が一人増える感じですよ。デュエルは次話です。ね。

それでは、第四話どうぞ。

第四話「月一試験！そして新たな精霊！」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第四話「月一試験！そして新たな精霊！」

「メザシとエビフライは俺のジャスティス！」

「……いきなり何言ってるんすか？」

「とゆーわけで、俺は明日の試験サボる。おやすみー」
言うだけ言ってるさつさと布団に潜り込む。

「ちょ！？ 何考えてるんすか！ 明日の試験でラー・イエローに昇級できるかが決まるんだよ！？ それをサボるって……」
えーだつて。

「この察意外と居心地良くてさー。メザシもエビフライもおいしいし、出ていく気が失せた」

ちなみに、本心だ。メザシいいよね。日本人の心だよ。

「メザシごときのために昇級のチャンスをふいにするとかありえないッスよ！」

「……お前は俺の大切なものを土足で踏み躪った！」

「どんだけメザシ好きなんすか！」

ネタだよネタ。好きなのは事実だが。

「でもほら、十代も寝てるし」

「アニキはサボるんじゃないかって試験自体気にしてないっばいッスからね……」

「だしよだしよ？ ぶっちゃけ俺ならペーパーテスト程度ならラク

ラク通過できるし、実技の方は別に上の寮上がらなくなつてできるじゃん。てか、レッド寮で十代相手にデュエルする方が絶対有意義だし。よって結論。実はこの寮天国」

「……その無駄な自信が心底うらやましいツス」

翔はずっと『死者蘇生』に向かつて祈り続けている。……よし、『死者蘇生』を『降格処分』と入れ替えておこう。いや、むしろ『墓場からの呼び声』の方にするか。

ピッピ、ピッピと最近すっかりお馴染となった電子音。メルボックスを開く。

『アテナです。セツ、明日はとうとう月一試験ですね！ 応援に行きますので、頑張ってください！ セツがオベリスク・ブルーに来る日を待ってます』

「すまん翔。俺も明日、出ざるを得なくなつた」

「……もうベタ惚れじゃないツスか。なんで告白オツケーしてないんすか？」

「別に惚れてるからってわけじゃねー。それを別にしたって可愛い女の子が応援してくれるってのに頑張らないのは男の子として恥ずべきことだ」

いや、確かにこないだのデュエルでかなり心が揺れたのも事実なんだが。

『そもそも主様。わたくしたちの主として、不真面目な生活態度は看過できませんわ……不純異性交遊などはもつての外です！』

『わしはいいと思うんじゃないのー。キャワイオンナノコのために頑張る方が精神衛生に良いわい』

『私は……その、ノーコメントとさせていただきます』

「だあ！ お前ら三人場所取り過ぎ！ この部屋せまいんだから、出るならせめて一人ずつ！ 三人一遍に出てきたら人口密度が高すぎるー！」

いつものように唐突に現れては説教してくるクイーンたちをカードに戻す。いや、キングの爺さんは説教とかしないけど。むしろ煽

ってくる。

「けど試験はめんどいなー。俺の嫌いな言葉ベスト100くらいには余裕で入るぜ」

「嫌いな言葉、そんなにあるんスか？」

「ノリだよノリ。いやまあ、嫌いだが。」

「ほれ翔、その問い7、間違ってるぞ」

「へっ!? あ! ホントだ」

「あと、その大問3、軒並み違う。っーかお前、各所にケアレスミスが目立つな。焦り過ぎ慌て過ぎ」

「うう……ホント、無駄に賢いのが悔しいツス」

「そらそうだ。せめて賢くなきゃオタクはただのニート予備軍だからな。これでも俺、勉強においてはクラスでも相当優秀だった。」

「しゃーない。臨時の家庭教師してやるぜい。貸し二な」

「雪だるま式に借りが増えていくツス」

「んじゃやめるか」

「あわわ、お願いします!」

「よっこいせと体を起して翔の勉強を見てやる。」

「いいかー。お前そこまでバカじゃないんだから慌てず落ち着いて行けや。ほれまたケアレスミス」

「あつう」

「言ってるそばから。」

「……ふむ。翔、やっぱり今日はもう休め」

「けど……」

「お前に必要なのは心の余裕だな。なにがあつたか知らんけど、急がば回れ、急いで事は損じる、だぜ」

「うん……」

「だーいじょぶだあって。落ち着いて〜余裕持って〜翔はできる子元気な子」

「なんか小さい子相手にしてる気になってきた。だって翔、必死に背伸びしてる子供みたいだし。」

「ありがとう……でも、せめてもうちよつとだけやってからにする
ツス」

「……つたく、しゃーねーのー。明日居眠りしても知らねーぜ？」
「大丈夫ツス。セツ君こそ、また入学試験の時みたいに回答欄ずら
して書かないようにしなよ」

むう、面倒なことを覚えてやがる。そもそも実質俺はその試験受
けてねーし。

「ま、別に落ちてもタマ盗られるわけじゃあるまいに。気楽に行こ
うや」

ポンポンと翔の頭を撫でてやる。つて、マジで子供扱いだな俺。
現実年齢なら兎も角、ここじゃ歳変わらんつてのに。

……さあて、俺もアテナに返信してから寝るとしますか。

翌朝。原作通り、トメさんを手伝っていた十代が遅刻ギリギリに
会場へ入ってきて、万丈目との一悶着。試験開始。五分で全部埋め
てやった。楽勝。

「お疲れ様ですセツ。どうでしたか？」

「おーお疲れアテナ。ぶっちゃけ楽勝」

「わあ！ ホントですか？ 回答欄ずれたりしてないですよね？」

「流石に連続でそれはねーつて。つか、十代つてば開始一分で居眠
りとか。翔も船漕いでたし」

原作では翔もたしか十代と一緒に居眠りしてたはずだから、前日
に寝るよう勧めといた甲斐は一応あった、つてことかね。

「三沢ー？ お前は十代たちとカード買いにいかねーの？」

「セツか。いや、俺は今の自分のデッキを信頼しているからな。特
に新しいカードを買うつもりはない」

「んだなー。つーか試験直前に新しいカード買って入れても計算狂
うだけだしな」

「まったくだ。デッキの構築は緻密な計算式の上に成り立つ。その場ののぎでどうにかするものじゃない」

全面的に同意。が、ぶつちやけこの世界じゃ、大事なのって計算よりリアルラックなんだが。十代が計画立ててデッキ構築してるとは思えん。あの鬼引きがなきゃ回らねーよあんなバランス悪いデッキ。

「アテナの方は？」

「えと、私も大丈夫です。この間のデュエルでちょっと気になったとことか修正したので、今日の試験で試してみようかなあって」

「なる。まさにテストデュエルってわけだ」

「はい！ちなみにこんな感じなんですけど……」

アテナにデッキを渡される。……んー。

「やけにモンスター比率の高いデッキだな」

三沢に同意。

「あー、もしかして、テテユスがいるからか？」

「はい。それと『アテナ』の効果も効率よく使うために……」

ん？今『アテナ』のカードが光った気が……おわっ。

『……んえ？ふあ、ああああ。よく寝たわー』

……精霊こっりーん。つか、なんか軽いですけど。『アテナ』

がなんかめっちゃ軽い感じなんですけど。

『ん〜？あー、キミよね。あたしを目覚めさせてくれたの』

「目覚めさせたって……あんた、アテナのカードだろ」

『そうよ。私はアテナ』

「……ベタな。んや〜そうじゃなくて。そっちの子、アテナってんだけど、お前さんのマスターはソッチ」

『ああ、そういうこと。みたいね。結びつきを感じるわ。けど、まだ見えてはいないみたいね』

「そうなん？」

『ええ。だから今の貴方ははたから見るとてもイタイ子』

……それはよ言ってくれい。確かになんかアテナ（人間）と三沢

の視線が痛い。

「えっと、セツ？」

「……あーいや、気にしないでくれ。ちよつと幽霊さんとO H A
N A S H I してただけだから」

『幽霊とはお言葉。これでも天使よ？ 偉い天使さまよ？』

「黙つとれ」

「セツ、昨日ちゃんとゆつくり寝ました？ 疲れてません？」

「……憑かれてはいるかもな」

上手いこと言った。座布団プリーズ！

「ほ、保健室……とか」

「いらんいらんいらん！ 俺平気！ 俺正常！ 全然だいじょびだから！」

つく！ おいその幽霊モドキ！

『せめて精霊つて言つてない』

「どうでもよろしい。後で話聞かせれ。今は黙れ」

『注文の多い……』

「料理店でもなんでもいいからとにかく黙れ。俺の社会的LPがそろそろゼロだ」

『もうゼロっぽいわねえ……』

見ると、すでに三沢は自分の席に戻つてデツキをいじっていた。

とりあえず、こつちを向く気はなさそうだ。ちくせう。そんなだからやがて空気君としてフェードアウトしていくんだい。

「セツ……」

ノウツ！ アテナがなんか憐れんだ目でこちらを見ている！ マズイ！ こうなりや自棄だ。無理を承知でアテナ（人間）にもアテナ（精霊）が見えるようにしてやる。

「アテナ、よく聞いてくれ」

がっしと肩を両手で掴んで目を合わせる。

「は、はいっ」

「……ちよつとこの辺りに注目して見てくれ」

アテナ（精霊）の居る辺りを指差す。「人を指差しちゃいけないでしょー」だかなんだかほざいているのは無視。

「なにか……見えないか？」

「え、えっと……」

……つく！ あまり使いたくなかった手だが、背に腹は代えられない。

「見るんだ！ 愛の力で！」

「あ、愛！？ がんばりますー！」

『なんやねんそれ』

なんか俗っぽいツッコミが聞こえた気がするけど努めて無視。

「むむむ……っは！？」

『うっそ、成功！？』

「あ、『アテナ』がいます！」

俺もまさか本当に成功するとは思わなかった。

「マジか……ひゅう、こいつはびっくりだぜ」

愛、恐るべしと言ったところか。

「せ、セツ。なんでソリッドビジョン通してないのに『アテナ』が？ 一体どういう……」

「まあ経緯はともかく、見えるようになったなら話は早い。そいつはカードの精霊っつーやつでな。ときどき出る」

『出るって……どこまでも幽霊扱いしてくれるわね』

やかまし。てめえの所為で俺の人としての尊厳が最低ラインまで貶められたんない。

「もしかして、セツも持ってるんですか？」

「んあ？ まあなー。クイーン」

『……はい』

呼びかけてみると、心なしかムスツとした様子のクイーンが現れた。

『……なにかご用でしょうか』

ありやりや、とつてもご機嫌ナナメ。

「わ、『クイーンズ・ナイト』ですか？ なるほど……ってなんか私睨まれてます!？」

「そりゃもうすごい形相だ。このっ……小娘が……! ってな具合である。……失敗したな。ジャック辺りにしとけばよかった。」

「とうわけでジャックー」

「……主様。できれば収拾つかなくなったら私を呼ぶのは勘弁していただけませんか？」

「うん。それ無理」

「使いやすいセリフだ。そして使われたらイラツとくるセリフだ眉毛さん。」

「はあ……ほら、クイーン。主様が迷惑していますよ」

「……わたくしとて、好きで不機嫌になっているわけでは……」

「それはわかっています。貴女も女であることも。ですがそれでも、貴女は騎士なので。主君を困らせることはなりません」

「……はい。申し訳ありません主様」

よし。丸く収まった。ジャックの不幸は能力があることだな。

「まあ、こんなやつらだ。あと、一応『キングス・ナイト』もいるめっさ好々爺チツクだが。」

「精霊つて……結構一杯いるんですね」

「どうだろね。俺が知ってる限りじゃ、十代の『ハネクリボー』くらいだけ」

「見たいです! 『ハネクリボー』は是非とも見たいです!」

わお。すごい食い付き。まあ『ハネクリボー』可愛いしな。

「あと、もうわかってるかもしれんけど、普通の人にや見えんから人前では話さないほうがいいな。……さっきの俺みたいになるから」

「さっきの俺を思い出したのか、アテナ（人間）は目を逸らして乾いた笑いを浮かべる。ってか、いい加減このアテナ（人間）ってものの面倒だな。」

「なあ、こいつに名前つけてやるうぜ」

「名前……ですか？ アテナじゃ……」

「紛らわしい。アテナって呼ぶだけじゃどっちに呼びかけてんだかわかりやしない」

『それもそうねえ……まあ、人間界での俗称くらい付けてもらってもバチは当てないわよ』

当たらない、じゃなく当てない、なんだな。流石天使。

「んー。セツ、なにか良い名前あります?」

「んにゃ。お前の精霊なんだし、お前がつけんのが妥当じゃね?」

そも、俺にネーミングセンスを求めんな。めっちゃ厨二な名前つけんぞ。

「じゃあ……シャルナ」

『それでよし。決定よ』

即断即決!?

「ま、良い響きではあるな。どうやって考えたんだ?」

俺がそう尋ねると、アテナはちよつと恥ずかしそうに頬を染めてはにかんだ。

「えと、フィーリングで……」

『……狙ってこの名前ならびっくりりだけど、偶然でつても逆に驚きね』

「なんか言ったかシャルナ」

『何でもないわ。それよりセツ、そろそろ試験とやらが始まるんじゃない?』

うお、確かに。そろそろ始まる時間じゃん。

シャルナの登場ですっかり忘れていたが、実技試験がこれから始まる。

「よし、まあ気を取り直して行ってみますか!」

「セツ、がんばりましょう!」

アテナの声援を受け、俺はさらにやる気をみなぎらせて実技試験に臨むのだった。

第四話「月一試験！そして新たな精霊！」（後書き）

第五話でしたー。……えー今までの話以上にいろいろと言いたいことはあるでしょうが、一応言い訳。

なんかふつーに主人公勉強優秀だった裏設定。入学試験では回答欄を間違えていたおかげで赤点ギリギリ。本来の学力は、前話でも自分で言っていたように三沢にだって負ける気しません。いやむしろ、現実のアドバンテージでデュエル関係については三沢を上回るでしょう。

次に、なんか精霊が簡単に出てきちゃっていますが、これについては次話で解説いたします。その他ご質問ございましたら感想の方で。

ご意見ご感想は随時募集いたしております。レーネスでした。

第五話「月一試験！ セツの能力」（前書き）

祝！ 一万PV！ 流石遊戯王。拙い文でもあつさり大台。名前負けしないようにがんばります！

というわけで第五話です。今回のデュエルはちょっとあつさり気味。っていうか、そろそろネタが尽きてきた……プロットに近いものはあれど、まだまだ練りが甘いなあとかいっちょ前に考えちゃったりしている初心者、レーネスでした。

第五話「月一試験！ セツの能力」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第五話「月一試験！ セツの能力」

「それでえ〜わ。これより恒例月一試験実技試験を始めるノ〜ネ」
相も変わらず特徴的なしゃべりしてるよな。クロノス先生。ん？
今こつち見たか？

「主様、あの教官の目、常ならぬ不穏な光を感じます。お気を付けてください」

「ああ、わかった。ありがとなジャック」

『いえ、これも騎士の務めでありませう』

ふうむ。原作だと十代が目をつけられててクロノス先生からレアカードもらった万丈目と戦うことになったはずだな。……俺も目をつけられた？ いや、特に先生の気に障ることはしてなかったはず……。

「あ」

もしかして、アテナとデュエルしたあのときか？ たしかあれってクロノス先生の策略だった筈だし、俺らのデュエルも見てたはず。この時分のクロノス先生はエリート意識が強くてオシリス・レッドに良い感情を抱いてなかったはずだから、もしかしてそれで？

「んー。つーとまた誰だか知らんが新キャラ登場か？ それとも脇キャラ？」

多分、俺の対戦相手はクロノス先生により操作されている可能性

が高い。

「……ま、誰が相手でもやることは同じか」

『御意。まさにその通り。わたくしたちは主様の意向のままに、相対するものを蹴散らして御覧に入れて見せますわ』

「心強いよ。ああ。トランプの騎士に敗退はねえ」

『無論でございますわ』

微笑む。綺麗な笑顔だ。……アテナさえいなけりや機嫌いいんだけどなあ。

「次！ オシリス・レッド、御堂切！」

そうこうしている内に、どうやらお呼びがかかったようだ。

「セツ、頑張ってください！」

「ういうい。まーちよろんとやってきますって」

気合の入った笑顔で応援してくれたアテナに軽く手を振って（アテナが来た瞬間、クイーンは引っ込んでしまった）、壇上上がる。「キミがボクの相手になるのかな。しかし、ボクも舐められたものだね。一年の、しかもオシリス・レッドが相手なんてさ」

はいオベリスク・ブルーのモブキャラ入りましたー。しかもどうやら上級生のご様子。

クロノス先生、ちよいと大人げなくありません？

「ま、お手柔らかにお願いしますよセンパイ」

ちよつと意識して嫌味っぽく返してやると、案の定センパイは簡単に逆上してくれた。

「ふん！ そんな顔でいられるのも今のうちだよ？　すぐにこの学園にいたくなくなるくらいの絶望を味あわせてやる」

「そのセリフ、すっごい小物臭、というかかませ犬臭がするのでやめたほうが……」

「な、何だと！？　も、もう容赦しない！　徹底的に潰してやるから覚悟しろよドロップアウト！」

親切に教えてあげただけなのに、なんて理不尽。一応オブラートに包んで「存在自体がかませ犬っぽい」とまでは言わないでにおいて

あげたのに。

「き、きさ、きさま……！」

おろ？

「あ、もしかして口に出してました？ いやー……わざとです。メ

ンゴ（笑）」

「……！」

よし、まあ挑発はこんなもんでいいっしょ。つか、これ以上やると俺の周りからの評価が地に落ちる。

「そんじゃま、始めましょか」

「……さて。ここまでこのボクをコケにして、ただ戦っただけで済むと思っっているのか？」

「なんすか？」

「……アンティだ。貴様が負けたら貴様の『アルカナ ナイト・ジヨーカー』をボクに渡せ」

急に小声になったかと思えば、アカデミアで禁止されているアンティを提案してきた。

というか、アルカナ単体で渡しても意味ないだろうに……。

「じゃあ、センパイが負けたら何くれるんですか？」

「そんな仮定は無意味だね。オシリス・レッドのドロップアウトが、エリートであるオベリスク・ブルーのボクに勝つなんてさ」

「それじゃ、そのアンティは成立しませんね。そんなこともわからないでゆーとーせーやってんすか？」

「ぐっ……このっ！ わかった、じゃあ万が一、億が一ボクに勝てたなら、なんでも好きなカードを持っていくといいよ。ま、ありえないだろうけどね」

「よっし、タダでカードゲット」

「……ぶっ殺す」

ありゃ、キャラ変わるくらい怒ってらっしやる。いかんよー、デユエルにも冷静さが肝要なんですから。

「「デユエル……！」」

「ボクのターンドロロー!!」

目が血走ってらっしやる。はてさて、一体センパイは何デッキなのかな？

「ボクは手札から『雷電娘々(らいでんにゃんにゃん)』を攻撃表示で召喚！ カードをセットしターンエンド！」

『雷電娘々』 ATK1900

うげ、攻撃力1900かよ。なんか向こうで翔がはしゃいでるし。そっぴや彼のアイドルカードでしたね。

「さあ！ ボクのニャンニャンを倒せるモンスターがいるのかい！？」

鼻の下伸ばしてニヤンニヤン言うな。キモイ。実にキモイ。ほら、なんか『雷電娘々』も心なしか顔が引きつってる。……あれ？ まさか精霊カードじゃないよな？

「ま、とりあえず俺のターン、ドロロー！」

手札は可もなく不可もなく。得意の超速攻はできないにしろ、そこそこといっていい。少なくとも、怒りに我を忘れているようなセンパイ相手には十分だろう。

「俺は手札から、『切り込み隊長』を召喚。効果により『コマンド・ナイト』を攻撃表示で召喚。カードを一枚セットする」

『切り込み隊長』 ATK1200 1600

『コマンド・ナイト』 ATK1200 1600

『コマンド・ナイト』は攻/守1200/1900。自分フィールドの戦士族モンスターの攻撃力を400ポイントアップさせる実質攻撃力1600の炎属性戦士族のモンスター。さらに自分フィールドに『コマンド・ナイト』以外の戦士族がいれば攻撃対象にならないといった防御能力もある。まあこれだけじゃ攻撃力1900の『雷電娘々』には敵わないわけだが……。

「さらに手札から『連合軍』発動！ 場の戦士族、魔法使い族の数だけ戦士族モンスターの攻撃力を200ポイントアップする！」

『切り込み隊長』 ATK1600 2000

『コマンド・ナイト』 ATK1600 2000
「なに!？」

これでさらに400ポイント攻撃力アップで二体とも攻撃力2000。

「さらに手札から『撲滅の使徒』を発動! その伏せカードを撲滅する!」

「そんな! ボクの『雷の裁き』が三枚とも!？」

「おーおーやっぱそんなカードだったか。『雷の裁き』は自分フィールドに雷族モンスターが召喚、反転召喚、特殊召喚されたときにフィールドのカード一枚を破壊するそこそこ優秀な罠カード。雷族か。除去カードが豊富で優秀な下級が多い種族だな。

「バトルフェイズ! 『切り込み隊長』で『雷電娘々』に攻撃! 『切り込み十字斬』!」

例によって技名はテケトー。

『きゃうつうつうんっ!？』

「ニヤンニヤーン!？」

相手LP3900

『切り込み隊長』の剣で十字に切り裂かれた『雷電娘々』が消えていく。……な、なんか妙な罪悪感が! 見学者からのブーイングもすごい! というか翔は後で覚えとけ! なにブーイングを扇動してやがる! 勝負の世界は非情なんだい!

「……『コマンド・ナイト』でプレイヤーにダイレクトアタック!

『エンチャントソード』!」

「ぐわあああっ!」

炎に包まれた剣がモブ先輩(仮)を襲う。ライフが一気に削られていく。

相手LP1900

「俺はこれでターンエンド!」

「くそっ! ボクのニヤンニヤンをよくも……万死に値する!」

おいこら翔。全力で肯定してんな。空き缶投げ込もうとするな。

十代は頑張つて止めてくれ。

「ボクのターンドロロー！ ボクはモンスターを一体守備表示でセツト。カードを一枚セツトしてターンエンドだ！」

またそんな不信心な……。

「俺のターン。ドロロー」

…… あー、まあ勝てるけど、なんか釈然としないな。

「……俺は手札から……」

「ストップだドロップアウト！」

何生意気に韻を踏んでる。

「ボクの伏せカードを発動するよ。トラップカード『サンダー・ブレイク』！ 手札から『電池メン単三型』を墓地に送つて『切り込み隊長』を破壊！ ニヤンニヤンの痛みを思い知れ！」

『ぐおおおおおっ！？』

進つた雷光が『切り込み隊長』を黒こげにして破壊する。……普通そこで破壊するのは『コマンド・ナイト』の方だろうに。そこまですごいかな。そして翔。小躍りするな。目障りだ。……まあ、どちらが破壊されてもやることは変わらない。

「俺は手札から『抹殺の使徒』を発動！ その裏守備モンスターをゲームから除外する！」

「なんだって！？」

除外されたのは『電池メン単一型』。なるほど守備力1900か。堅いな。

「さらに俺は『コマンド・ナイト』をリリースして『ジャックス・ナイト』を攻撃表示で召喚！」

『ジャックス・ナイト』 ATK1900 2100

まさかこいつをアドバンス召喚する日が来ようとは。

「そんな……」

まあなんにせよ、これで勝ちだ。

「バトルフェイズ！ 『ジャックス・ナイト』でプレイヤーにダイレクタアタック！ 『ブレイク・ソード』！」

「うわあああああつ!?!」

相手LPO

「勝者、御堂切!」

「うい勝利。……は、良いんだが、またクイーンの機嫌悪くなりそうね。しょうがないじゃん。キミ手札に來なかつたんだもん。がつくりとうなだれているセンパイを尻目に舞台から降りる。すぐにアテナや十代たちが駆け寄ってきた。とりあえず翔を捕まえてヘッドロツク。」

「いたたたたつ!?! ちょ、やめてよセツ君!」

「黙れ。散々ブーイングしてくれやがつてからに。昨日は勉強見てもやつたりもしたというのになんと友達甲斐のないやつだ」

「そうして翔を軽くいじめていると、アテナがちょつと苦笑気味だったが、笑顔で称賛してくれた。」

「それにしても、相手はオベリスク・ブルーの先輩だったのに、セツはやつぱり凄いです!」

「いやあ、デュエル前に散々挑発してプレイングミス誘ったりもしたからな」

「明らかに『サンダー・ブレイク』の使いどころがおかしかったし。普通攻撃に対するカウンターだろあの場合は。そうすりゃギリで持ちこたえられもしたつてのに。」

「それに勝つたとは言っても、正直俺もミスしてた。反省点は多いな」

「そう、実は俺も、挑発するのに調子乗り過ぎてプレイングミスをしてた。」

「そうだな。あの時だろう? 『撲滅の使徒』の発動タイミング」

「お、さっすが三沢。その通りだよ」

「なんか問題あつたか?」

「普通、除去カードが手札にあつたら、チェーン発動されないうちに自分フィールドが空きの時に発動させておくんだ」

「もしあの先輩が一ターン目に伏せていたのが『雷の裁き』じゃな

くて『サンダー・ブレイク』の方だったら『コマンド・ナイト』が破壊されて『雷電娘々』を倒せなかっただろう。

俺の伏せカードは『魔法の筒』だったから、なんとかなかったっちゃーなんとかあったが、大きなプレイングミスには変わらない。

「……ほへへ、そんなこともあるんすね」

「……一応、初歩的な戦術だぞ。ミスった俺が言えた義理じゃないが」

おっとそうだ、アンティがあつたな。

「すまん、ちよつと待っていてくれ。すぐ戻る」

皆にそう断りをいれ、未だガツクリ来たままのモブセンパイに近づく。

「センパイ。アンティもらっていきますね」

そう言つて俺はカードをいただく。……デツキ丸ごと。

「つな!? 待て、アンティはともかく、なぜデツキ丸ごと!」

「だってセンパイ、アンティのときなんでも好きなカードを持つていくといいつて言ったじゃないですか。ほら、俺嫌いなカードってないので『好きな』カード、もらっていきますね」

「ふ、ふざけるな!」

「いやいや、俺は別にふざけたりしてませんって。センパイがアンティ提案したときに調子乗つてアバウトな指定したのが悪いんだし」
「ぐ……」

「大体、アンティってのは基本等価交換ですぜ。俺の『アルカナナイト・ジョーカー』に釣り合うのなんて持つてやしないでしょ。

校則違反は黙つてあげますから、デツキ丸ごと頂戴します」

そも、本来校則違反なアンティ持ち出したペナルティと思えば安いもんだらう。

「……つくそお!」

反論はない様で、またさらにうなだれてしまったセンパイをとりあえず無視して皆の下へ。

「おまたへ」

「……お前、そのカードどうしたんだ？」

「親切で優しいセンパイからの贈り物」

その言葉で三沢は大体の事情は察したらしく、「しょうがないやつだな」と苦笑していた。

「それ、さっきのオベリスク・ブルーの人のデッキスよね？　じゃ、じゃあもしかして……」

「ん？　ああ、もしかして『雷電娘々』か？」

聞くとすごい勢いで頷かれる。そこまで好きか。

「えーと、あった。これだ……な？」

『えへへ〜こんにちわっ』

……ははは、なんかいるや。

『あつらー。また目覚めさせちゃってまあ』

「せ、セツ。『雷電娘々』が……」

「おー！　新しい精霊だな。オレ、遊城十代。よろしくな！」

十代は順応早すぎ。何故違和感なく受け入れるし。

『いやー助かったよ。あいつんトコから解放してくれてホントありがとね！』

「解放？」

『あいつすつごくキモイんだよ。夜自分の部屋でボクのカードに頼ずりしたりしてて怖気が走るったら』

それはひどい。

あのモブ（変態）んなことしてたんかい。

「せ、セツ君。そ、その良かったら僕にそのカード交換……いや、せめて良く見せてくれないかな……」

「……とかなんとかエロガキがモノ申しておりますがどないします？」

『ごめん、勘弁して。なんかその子からはあいつに似た雰囲気を感じるよ。断固お断り』

……哀れ翔。せつかくアイドルカードの『雷電娘々』の精霊なのに、見えないばかりか嫌われるとは。

「……あー、悪い翔。ちょっとワケあつてそいつは無理だ」
「な、なんでツスカ!？」

「……どうしよう。まさかバカ正直に「本人たつての希望で」なんて言うわけにもいかんし。色々な意味で。」

「あー、つと。まあ、自分のフェイバリットを信用できない奴に任せるわけにはいかないだろ？」

『にははは……なんか照れるなあ』

『……主様。後でお話しがございますわ』

「うぎゃあ。こうして俺の生活は精霊にガリガリ浸食されていくんだな。」

「友達じゃないンスか!？」

「デュエル中にブーイングしてくる奴を信用できるか」

「そ、それは……」

「ほら、そろそろお前さんらも呼ばれるんだから、話は後にしてデッキ調整してろ」

「会話を打ち切り、なんかどんどん増え始めた精霊たちに着いてこいと目配せする。ちゃんとその意図は伝わったようで頷いて返してくれた。」

「……で?」

『あたしらが出てきた理由、でいいかしらん?』

「ああ。俺が目覚めさせた、だのなんだの。全くなんも知らんから一から十までみんな教えれ」

『あなたのお姫様たちからは何も聞いてないの?』

『……わたくしたちは、もとより主様の精霊です。わたくしたちとて何も知らぬも同然。話したくとも、話すことがございませんでした故』

『つかえない脳筋!』

「煽るな阿呆娘。クイーンの額に青筋浮かんでるから。」

「それで? 俺の見たカードが日々精霊化するのなんだから」

『あなた自身が精霊に好かれやすい、というのももちろんあるけれど』

ど……』

それだけなら十代と変わらん。

『キミにはボクらを呼び覚ます力があるっばいね。』
『というか、キミ自身が極めてボクらに近いんだと思う』

「近い？」

『そうねえ……単語にするなら、“架け橋”とでも言うのかしらね。精霊界とこの世界との狭間に近いあなたは、精霊がこの世界に来るための“門”みたいになっている、といったところかしらん？』

うへ。異世界トリップだし、ぜってーなんかあるとは思ってたが、それって要はこれからも精霊が大量に出てくるっちゅーわけだろ？
「……今回はまだ『アテナ』と『雷電娘々』だから良かったけど、デーモンとかドラゴンとか、シャレにならん奴らも呼び寄せちゃうんじゃない？」

『あり得る。たいてーの雑魚ならボクの電撃で黒こげだけど、とても手がつけらんない奴らもいるしねー』

『使えない尻軽娘ですわね』

煽るなクイーン。『雷電娘々』の周囲に雷光が弾けてるから。

『ボクにどうにもできないんならあんたにだってできないもん！』

この弱つちい脳筋女！』

『わたくしの本分は仲間との連携です！ 同族としか組まない我儘女よりよっぽど戦えます！』

「喧嘩すんなし」

お前らなら実は同居できるからな？ クイーンも光属性だからな？

「む。っーか何気して今まで出てきた精霊って皆光属性だな」

十代のハネクリボーもそうだし。まあそのうち光属性じゃない奴らも出てくるけど。サイコシヨツカーとか。

『……そういえばそうねえ。もしかしたら、あなたの力で呼べるのは光属性限定なのかも。それならそんなに危なくなさそうね』

……いやそうでもないし。『邪神機 獄炎』とかも実は光属性だし。大体『青眼の白竜』を始めとしたドラゴン族なら清濁関係なく

危険極まりない。

『なににせよ、主様の御心身はわたくしたちがお守りします。思い悩むことはございません』

『ボクもやるよっ！ 脳筋には任せてらんないし！』
だから煽るなっつもの。

『まあ、あたしは基本アテナのそばについてるけど、余裕があれば助けるわ』

「心強いよ」

何せ攻撃力2600だ。大抵のモンスターには負けんだろ。

「けど、アテナ優先な？」

『わかってるわよ。あたしのマスターなんだもの』

……それならよし。っていうかそういや。

「そろそろアテナの番なんじゃないか？ シャルナ、お前ここにいるの良くないだろ」

『……あ』

多分シャルナがいないからといって影響があるということもないと思うんだが。万が一ってこともある。

『それじゃ、あたしはマスターのところに戻るとするわ。また話しましよっ、 “王様”』

は？ 王様って……。

『ところでシャルナってなあに？』

「ん？ ああ、あいつのここでの愛称。あいつのマスターもアテナだから、紛らわしいんで付けたんだよ」

事情を説明すると『雷電娘々』がキラキラと期待のこもった目でこちらを見上げてきた。

「あー……付けて欲しい、とか？」

『うん！』

うむむ……だから俺にネーミングセンスを求めるといって……よし。

「タイムで」

『オツケー！ ボクの名前はライムだね！ ちなみにどうして？』

……言うまでもなくラ ちゃんだ。だって『雷電娘々』とか、間違はなくあの子が元だろ。インスパイアも甚だしい。

「ま、まあフィーリング。フィーリングだよ」

流石に「アニメのキャラ名をちよつとパクった」とも言えず、アテナの理由をちよいと拝借。

「ってどうしたクイーン。また機嫌悪そうだが」

『羨ましがってるんだよ。ハイハイ醜い嫉妬乙〜』

『べ、別にそういった意図はありませんわ！ 大体、主様のカードになったってどうせ貴女が使われることはないのですから嫉妬することになるのは貴女のほうです！』

『へっへーん。ボクは別にデュエルで使ってもらっただけが存在意義じゃないもんね〜。そもそもあんたと一緒にデッキに入る気なんざも〜と〜ないし！』

……相性悪いなあこいつら。つか、いつもこんなこと思ってね？

「あー、やっぱりクイーンも名前欲しいか？」

『っ！ いいえ、結構ですわ主様！ 失礼します！』

『さつさとどっか行っちゃえ行っちゃえ』

このライム。さつきから毒舌である。まあ本気で言っているというよりからかって遊んでる印象が強いが。キングと同じ匂いにするし。

「……まあ、暇見て考えておくとするか」

『もう、優しいんだから〜』

「一応、俺の相棒みたいなもんだしな」

『……さつきはああ言ったけど、その内ボクを使ったデッキも考えといて欲しい、かな』

「ああ。幸いデッキごと快く譲ってもらったわけだし、こいつを基盤にして作っておくよ。お前もなんだかんだで新しい仲間なんだしな」

『……やっぱり、優しいね。うん、それでこそボクのご主人様とし

て相応しいよ！」

は？「ごしゅ……なんだと？

」これから改めてよろしくね。ご主人様！」

「ごぶっ！？」

……効いたぜ。これが美少女の『ご主人様』か。メイドコスだったら致命傷だったかもしれん。

ペタペタスリスリとじゃれついてくるライムを極力気にしないように意識しつつ（今思ったが、これって本末転倒じゃね？）、アテナたちの応援に向かうのだった。

第五話「月一試験！ セツの能力」（後書き）

第五話でした。……そろそろ化けの皮が剥がれてきたかな？ 僕
の。

回を重ねることに上手くなるどころかぐだ感が強くなってき
た感じがして悔しい。

今回出た『雷電娘々』それほど出番の予定はございません。デュ
エルでも使わないし。ぶっちゃけ元々予定になかったので。能力説
明の辺りも本来はアテナ（シャルナ）が一人でするはずだったとこ
ろを乱入させたがためにシャルナの出番まで減少傾向。

次回はまた試験の話。アテナのデュエルです。試験だけでどんだ
け話数使うんだという感じですが、この上まだ次々回も試験になり
そう。

では、段々メッキも剥がれてきて文にもまとまりがなくなっ
てしまっておりますが、なんとか踏ん張っていききたいと思
います。

ご意見ご感想は随時募集中。レーネスでした。

第六話「月一試験！ アテナ、勝利へのタクティクス」（前書き）

第六話です。今回はアテナのデュエル。ぶっちゃけ主人公より圧倒的にガチ臭いデツキですので、割と書いてて楽しくありました。それでは、第六話、お楽しみください。

第六話「月一試験！ アテナ、勝利へのタクティクス」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第六話「月一試験！ アテナ、勝利へのタクティクス！」

「次！ オベリスク・ブルー女子、天音アテナ！」
「は、はい！」

教官に名前を呼ばれ、少し緊張しながらも私はデュエルフィールドへ上がりました。相手は同じオベリスク・ブルー女子の人。あまり話したことはありませんが、目立って優秀ということも取り立てて落ちこぼれということもない、そんな印象のある人でした。

「……天音さん、で良かったよね〜」
「あ、はい。えっと、加藤さん？」

「うん。加藤友紀。今日はよろしくね〜」

「はい！ がんばります！」
よかった、結構いい人そう。

「デュエル！」
「先攻もらうね〜。ドロ〜！」

な、なんだか微妙に調子の狂う人です。

「わたしは手札から『切り込み隊長』を召喚するね〜。効果発動。

『切り込み隊長』〜」

『切り込み隊長』×2 ATK1200
っ！

「切り込みロツク!?」

『切り込み隊長』がいると、他の戦士族を攻撃対象に選ばなくなる……つまり、『切り込み隊長』が二体並べば魔法や罠、モンスター効果で除去しない限り、攻撃することができなくなるも同然。割とありふれたロックコンボだけど……

「魔法や罠の少ない私じゃ対応できない……！」

「というか、モンスター除去の方法が、私のデッキには何一つ入っていない。魔法・罠によるロックならどうにかあったかもですが、こうしてモンスターによるロックは対応できない！」

「カードをセットして、ターンを終了するよ〜」

「う……私のターン、ドロー！」

手札を確認する。……幸い、私のデッキならロックをどうにかできなくても勝つ方法……バーンはある。でもそのためのアテナが手札にはない。

「手札から、『神の居城 ヴァルハラ』を発動します！
ライトニングギア 光神機

轟龍』を特殊召喚！」

『光神機 轟龍』 ATK2900

私のフィールドに、輝く機械仕掛けの龍が現れる。一応、私のデッキに入っている天使族の中では最高攻撃力の2900。そう簡単に戦闘破壊はできないはず！

「さらにモンスターを守備表示でセット！ カードも一枚セットしてターンエンドです！」

「わたしのターン。ドロー！」

まだ二ターン目だけど、互いに硬直状態。私にはこれを打破することのできるカードはない。じゃあ、加藤さんの手札には？

「手札から、魔法カード『抹殺の使徒』を発動するよ」

私のフィールドに伏せられていた『マシユマロン』がゲームから除外される。

っ！ 『切り込み隊長』に『抹殺の使徒』……セツと同じ戦士ビート！

「さらに魔法カード、『洗脳 ブレインコントロール』を発動！」

「え!？」

私の轟龍がふらふらと加藤さんのフィールドに行ってしまう。

「ごめんね。天音さんの『光神機 轟龍』をリリースして、『サイレント・ソードマンLV5』を攻撃表示で召喚だよ」

『サイレント・ソードマンLV5』 ATK2300

『サイレント・ソードマンLV5』……どんな効果でしたっけ。

たしか、すごく面倒な効果だったような……

「『サイレント・ソードマンLV5』は、相手の魔法効果を一切受けないんだよ。わたしのフェイバリットなんだよ」

そういえばそんな効果でした。ただ、その効果はあまり関係ないですね。そもそも相手に効果を及ぼす魔法カード自体、私のデッキには入ってませんし。それよりも問題は……。

「轟龍が、容易く除去された……!」

それも、相手に利用される形で。

「一気に行くよ。手札から魔法『撲滅の使徒』発動! 天音さんの伏せカードを除外するよ」

「っ! チェーン! 除外される前に罨カード、『和睦の使者』を発動させます!」

巨大な剣が私の伏せカードを貫く直前、穏やかな顔の女性たちが私を護る結界を張ってくれました。

「ありやく。それじゃあわたしはターンエンドだね」

よし、とりあえずこれで加藤さんの手札も尽きました。セツもそうでしたが、戦士族は速くて強力な分、手札消費が激しいですね。

「私のターン、ドロー!」

とはいえ、状況は最悪。ライフこそ減っていませんが、数少ない防御カードを使ってしまった上に、フィールドはがら空き。救いはヴァルハラが残っていることですね。

「ヴァルハラの効果を起こします! 『テュアラティン』を攻撃表示で特殊召喚! さらにモンスターをセットしてターンエンドです!」

『テュアラティン』 ATK2800

『テュアラティン』は自分の場の天使族が二体以上存在するとき二体の天使族が戦闘破壊されたときに特殊召喚し、属性を一つ完全に封殺できる天使族の切り札的モンスター。

本来、こういう使い方をするモンスターじゃありませんが……背に腹は代えられません。攻撃力は2800ありますし、この場を凌ぐことはできると思います。

「わたしのターン、ドロー！ バトル！」

加藤さんは引いたカードを一瞥すると、何もせずにバトルフェイズへと移行してきました。幸い、除去カードではなかったようです。

「『サイレント・ソードマンLV5』で、守備モンスターを攻撃！」

『沈黙の剣LV5』！

サイレント・ソードマンの持つ巨大な剣が、私のフィールドのモンスターに突き刺さります。私が伏せていたのは『スケル・エンジェル』！

「『スケル・エンジェル』のリバース効果発動！ デッキからカードを一枚ドローします！」

引いたカードは『光神テュス』。私のキーカードの一つ。でも、今の状況だと出すに出せない。

「わたしは二体の『切り込み隊長』を守備表示に変更してターンを終了するよ〜」

「ドローします！」

引いたカードを確認する。……よし、行けます。

「私はモンスターをセット。カードも一枚セットしてターンエンドします！」

「うん。わたしのターンだね。ドロー」

できれば除去カードは引いて欲しくない。

「手札から『サイクロン』を発動するよ。ヴァルハラに消えてもらうね」

「また除去カード……それにしても、セツとデュエルしているみた

いです」

私とのデュエルだと使っていないかったけど、セツのデッキにも『撲滅の使徒』や『サイクロン』などといった除去カードが豊富です。『切り込み隊長』といい、まるで三銃士を使わないセツのようです。『ああ、そりゃそうだよ』。デッキ構築はセツくんの手伝ってもらったんだし〜」

……………。

「は？」

今、何やら聞き捨てならない言葉を聞いたような……………。

『ごめんねアテナ。ちよつと話しこんでたら遅れちゃ……………』

「デッキ作りで悩んでたら声かけてくれてね。同じ戦士ビートだから力になれるかもって」

ほ、ほほう……………。

『え、なんか取り込み中？ あたし空気？』

なんだか近くでシャルナの声が聞こえた気がしますますが今はどうでもいいです。

「戦士族は展開力があって攻撃力アップも簡単だからトラップでー掃されたりしないように除去系多めに入れろって言ってくれたのもセツくんだよ〜」

……………あれ、何でしょう。別に私はセツの彼女ではない（まだ返事は保留中）のに、なんだかすごく釈然としないというか……………そう端的にいえば。

「ものすつごく腹立ちます！」

「へっ？」

ぐりんっ、とセツたちがいる辺りを睨みつけてみると『雷電娘々にじゃれつかれて鼻の下を伸ばしている（アテナ視点）セツ。……………怒りメーター上昇、カンスト。

あ、なんか人生初めての『ぷつつん』しちゃう感覚を味わえそうです。

「え、ええつと……………とりあえず、『サイレント・ソードマンLV5』

で、守備モンスターを攻撃！ 『沈黙の剣LV5』！

「……トラップ発動。『血の代償』」

セツのいる方を一睨みしてから、私は伏せていたトラップを起動します。

「500ポイントライフを支払って、裏守備の『シャインエンジェル』をリリース。『光神テテユス』を攻撃表示で召喚します」

『光神テテユス』 ATK2400

アテナLP3500

『サイレント・ソードマンLV5』は攻撃力が精々2300。強化されていない今、私のデッキなら雑魚同然。手札はなくなりましたが、テテユスを出した以上何の問題もありません。

「うっ……戦闘は巻き戻されてバトルフェイズを終了。ターンエン
ド」

くふっ。さあ、加速しますよ！

「私のターン、ドロー！ 『アテナ』をオープンしてさらにドロー

！ 『ヘカテリス』オープンドロー！ 『ジェルエンデュオ』ドロー

！ 『オネスト』ドロー 『グリーン緑光の宣告者デクレアラ』ドロー 『光神テテユス』ドロー

『勝利の導き手フレイヤ』ドロー」

「え、えっと……」

途中から半ば機械的にドローを繰り返す。

「『バイオレット紫光の宣告者デクレアラ』 『ヘカテリス』 『アテナ』 『オネスト』 『スケ

ル・エンジェル』 『ムドラ』 『ゾルガ』……ああ、終わりですね」

最後に引いたカードを見て、私はクスリと笑う。……なんだか自分かひどく黒くなっているのがわかりますが、関係ありません。

「モンスターをセット。『血の代償』の効果でセットした『ジェルエンデュオ』を二体分としてリリースし、『アテナ』を召喚」

『アテナ』 ATK2600

アテナLP3000

「手札から永続魔法『エレメントの泉』を発動。また『血の代償』を使って『オネスト』召喚。『アテナ』の効果で600ポイントの

ダメージ」

『オネスト』 ATK1100

アテナLP2500

「きゃっ！」

加藤LP3400

「『オネスト』の効果を使い、自らを手札に戻します。『エレメントの泉』の効果でライフを500ポイント回復。『血の代償』の効果起動……」

アテナLP2500 3000 2500

「あ、あれ？ もしかして……」

「無限ループ」

これが、私の選んだデッキ。自ら手札に戻すことのできる『オネスト』と、自分のモンスターが手札に戻った時に500ポイントライフを回復させる『エレメントの泉』500ポイントライフを支払うことで何度でも通常召喚が可能となる『血の代償』。『アテナ』のダメージ効果と併せて使えば確実に相手ライフをゼロにできるワンキルループコンボ。

正直、あまり褒められた戦術じゃありませんけど、私はこれを選びました。

「え、えげつない……」

「知りません」

やがてライフはゼロになる。

「私の勝ちです」

「しよ、勝者、天音アテナ……」

……なんだか私が勝った時、いつもどもられている気がしますね。一度くらい、盛大な歓声の中勝鬨をあげてみたいです。……いえ、やっぱりそれも恥ずかしいですが。

私は溜息を一つ吐いて舞台上からおります。そして一目散にセツたちの下へ。

セツSIDE

ライムがじゃれついてくるのを阻止しつつ向かう途中、アテナの名前が呼ばれたのに気付く。速足で観客席へと向かうと、すでにデュエルは始まっていてアテナの戦況は不利と言えた。

「おーいセツ！ こっちこっち！」

「お、席とつといてくれたのか。サンキュ十代」

「いや、オレじゃなくて明日香が」

見れば、確かに十代の隣には明日香の姿が。

「こんにちは、でいいのかしら」

「おう、こんにちは。天上院」

「……前から思っていたんだけど、貴方の『天上院』って呼び方になんか違和感があるのよ。明日香でいいわ」

「そうか？ んじゃ、遠慮なく」

もともと現実じゃ明日香の方で呼称してたから呼びなれてなかったんだ。かといって初対面でいきなり明日香と呼ぶわけにもいかず、多少窮屈ではあった。まあその分、脳内では散々明日香と呼んでいたわけだが。

「む、というかあれ、ユーキちゃんじゃないか」

アテナとデュエルしていた女子に見覚えがある。

「あら、あなた彼女と知り合いだったの？」

「ああ。デッキのコンセプトが似てたから、お互いアドバイスしたりしてたからな。女子人中じゃ、アテナの次くらいには話してると思う」

「……そもそも、女子と話している順番をつけられるのがうらやましいツス」

「翔だつて、アテナや明日香とはそこそこ話すんじゃないか？」

「全部セツ君とアニキのおまけツス！ 僕個人で話しかけられたことなんて皆無ツスよ！」

……そ、そうか。なるほど、現実ではともかく、俺もこつちではリア充扱いされる立場なんだな。ううむ……なってみるとあまり充実してる実感が無いもんだな。

その時、背筋にゾクツとした感覚を覚えた。見ればアテナが何故かこちらを今まで見たことのないくらいおっそろしい眼で睨んでいた。

なんかアテナの目から『セツ、あとでO H A N A S H I があります』的な意志を強烈に感じる。

「俺、なんかしたか……？」

「さあ……？」

「けど、尋常じゃない感情を壇上の表情から感じるツス……」

おお、綺麗に韻を踏んだな。ライムのウイंकをあげよう（翔には見えない）。

『……主様、そんなお戯れをなさっている余裕はなさそうです。見てください。あのシャルナが、縮こまって震えています』

「……うむ。偉い天使さまとやらの威厳やプライドをかなぐり捨てても小さくなりたいくらいの恐怖を感じているんだろうな」

『冷静に観察している場合は……』

いや、むしろテンパってるからこそその分析だ。なんか、普段のアテナとはオーラが違う。オーラが。天使は天使でも墮天使系のデッキを使いそうな感じだ。

俺たちが冷汗をだらだら流していると、アテナは凶悪極まりないワンキルループコンボを決めて勝利してしまった。

「あいつ……あんなどこで考えてきたんだ……」

正直あんなもん止めようがない。パーツをそろえるのもテュスのおかげでそう難しくもないし、決まればどうしようもない。召喚反応型かフリーチェーンの罠でどうにかするしかないだろうが……。

「たしか天音の手札には『バイオレットデクレアラ紫光の宣告者』も加えられていたな……」

そうなのである。『バイオレットデクレアラ紫光の宣告者』は手札から自分以外の天使族を墓地に送って罠を無効化する擬似パーミッションモンスター。そ

れもまたテテユスのおかげで弾には困らないという驚異のコンボ。

「例え上級を墓地に送ったとしても『アテナ』で蘇生できるわね」

「ああ……13歳とはとても思えない、隙のないタクティクスだ」

明日香と三沢という二大成績優秀者も手放しで褒めるアテナのタクティクス。唯一アキレス腱があるとすればモンスター効果くらいのもんか……。

やば……なんかもう手に負えない感がある。アテナに勝てる気しねえー。

そのアテナはといえば、なんかこっちにすごい勢いで迫ってきている。こらお前ら、俺を盾にするな。むしろ俺の盾になれ。

「セツ」

「はい！」

重低音！？ 気のせいかな？ 今アテナの声がエコーまでかかって聞こえたぞ。

「加藤さんのこと……聞かせてください」

「は？ ユーキちゃんのこと？ えっと……とりあえず、戦士族デツキ仲間で、たまにデツキ調整と一緒に……」

「一緒に？」

いやだからなんで重低音！？ 女の子の声にすら聞こえないんだが！？

「……はい。一緒にテストデュエルなんかを少々……」

13歳にへこへここと頭を下げつつ言い訳じみた問答を繰り返す俺……直視しがたいくらいに情けない。さっき、こっちの世界じゃ俺リア充wwwとか調子乗ってマジすんませんでした！

「……では、加藤さんのことはどう？」

「え、どうって……女子ん中で、アテナの次位によくしゃべる女子……だが？」

「私の……次？」

「む？ ああ、まあアテナの方がよく話すな。メールも定期的にしてるし」

お、なんか正解引いたっぽい。プレッシャーが収まっていく。

「……ふう。あ、すみませんでした。なんだか問い詰めるようなことしちやって」

お、おお。アテナが普段の小動物チックな雰囲気に戻った。他のみんなもこれで安心……っていなえ！？ あいつらとつくに逃げていやがった！

「いえその、曲がりなりにも告白した身ですし、その返事ももらえないまま他の人に盗られてましたってなったら嫌じゃないですか。それで、その」

あ、ああそういうことか。

「いや、そういうことなら悪かった。そうだな。俺も不誠実だったか」

「あついえ、デッキ調節とかする分には確かに同じ系統の人とやった方が効率は良いですし、私もちよつと気にし過ぎでした。……ちよつと加藤さんの雰囲気は気になります」

「……もう大丈夫？」

「あれ、シャルナ。いつからいたんですか？」

『いやさっきのデュエルの途中からはいたんだけど……まあいいわ』
そういつてシャルナは大きな溜息を吐いた。……俺も吐きたいよ。
「後は十代たちが。まあ何とかなるだろ」

原作通りなら。

「じゃあ、応援に行きましょう！」

「そうだな。あ、ユーキちゃん」

「！」

ユーキちゃんが近くににいるのを見つけたので声をかけてみる。なんか一瞬アテナがピクリと反応した気がするが、とりあえず大丈夫だろ。

「セツくん。それに……天音、さん？」

「……こんにちわ。先ほどはどうも」

んー？ なんか硬いな。

むに。

「ふあつ!?!」

「ほ〜れぐにぐに〜」

ほっぺをぐにぐに。おお、程よく柔っこい。

「ふえ、ふえふ、ふあにを(せ、セツ、なにを)!?!」

「なに緊張してんだよお前さんは。年上かもしれんが同級生でクラスメートだぞ〜?」

「ふああああ〜?!?!」

何故かアテナから「そういうことじゃない」的な視線を感じるが、まあいいだろう。

「あ、あはは。仲いいわね〜」

む、ちよつとユーキちゃん苦笑している。そろそろやめるか。

「ぶあつ! そ、そうです。仲いいんです! バツリバリです!」

バツリバリの意味が俺にはよくわからない。

「えつと、もしかしてライバル認定されてる? わたし」

「ん〜、多分」

俺が好きだと告白してくれたアテナだから、俺と仲いいユーキちゃんに対しての嫉妬、という見方をしても別に自意識過剰じゃあるまい。

「だ、だいじょうぶだよ〜。別にセツくんにそういう感情今のところ持ってないし〜……まだ」

「今、非常に気になる一言が最後にくつついていた気がします!」

「いや、アテナ?」

『不純異性交遊……』

『女ツ誑しだね』

『敵ね敵。女の。天罰てきめんいつちやう?』

カオス!? ええい引つ込めお前ら! 收拾つかんわ! シツシ!

『こらあんた今天使さまを虫けらみたいにシツシしてたわね!?!』

『いくら主様といえどそれは騎士に対する侮辱で……』

『ご主人様冷た〜い!』

「でえええいつ！ ジャック、ジャーック！」

困った時のジャック頼り。本日も絶好のジャックス日和ですな！
意味分かんないけど。

「だからなぜ私を！？」

「精霊抑えるの任せた！」

「あるじさまー！？」

苦勞は分かち合い、喜びは共有するのが俺たちの関係だろう？

「貧乏くじを押しつけられているような……」

「気のせい！」

「そんな！？」

「弱きを助け、強きをくじけ、ジャックス・ナイト！」

「あああ〜！？」

よし、これで半分片付いた 外道。

「アテナ！ ユーキちゃん！ とりあえず俺は十代たちの応援に行
つてくるから！」

そして逃亡。アテナたちのことは丸投げで。

「あつ、待つてくださいいセツ！」

「うわ、置いてかないでよ〜」

しまったついてきた。

結局それから十代たちのデュエルが終わるまで、延々左右からの
プレッシャーに耐え続けることになったのであった。まる。

おまけ

「ですから、少し落ち着いてくださいクイーン！」

「いいえ、今回はかりは主様に一つ物申したいことが！」

「割といつでも好き放題言っているでしょう！？」

「まあよくわかんないけど、こいつにも天罰できめん、逝っちゃう
？」

『逝っちゃえ逝っちゃえ』

『逝かないでください!』

哀れジャックス・ナイト。彼が報われる日は……きっと来ない。

『……出番少ないわしと、どっちがマシかのう』

今日もジャックは、胃薬常備（精霊用）。

第六話「月一試験！ アテナ、勝利へのタクティクス」（後書き）

最後にジャックで落とした第六話でした。

あ、ちなみにタグのヤンデレあり？ のヤンデレってアテナじゃありません。念のため。この程度じゃまだちょっと嫉妬深いくらいのもんですしね。

そしてアテナのデッキ。つまりは宣告者パーミッションのギミックを搭載したアテナバーン、とでも言えばいいかな？ ちなみに現在なら、朱光が増えたのでモンスター効果にも対応できるようになりました。この小説ではシンクロがないので出てきませんが。

さらにアテナは今回は引いていませんがもう一体切り札的なモンスターを入れております。割と上級の多い重たいデッキのはずなのに、天使族はヴァルハラや場持ちのいいモンスターが多くて意外と回る。恵まれた種族です。

そして、新たなヒロインはい予感です。しかも微妙に原作キャラです。モブですが。モブヒロインにも愛の手を！

では、引き続きご意見ご感想は随時募集中です。レーネスでした。

第七話「月一試験を終えて」(前書き)

第七話です。や、やっとこさ試験が終わった。しかもこれで遂にストックが完全に尽きました。明日、アップできるかなあ……？

ちなみに今回は、全編コメデイ……というか壊れギャグチックです。存分に、キャラと一緒に突っ込みを入れてくださいませWWW
では、どうぞ！

第七話「月一試験を終えて」

アルカナく切り札の騎士」

第七話「月一試験を終えて」

「これにて、今回の試験の全工程を終了します」

十代が万丈目を下し、いつもの決め台詞が飛び出したところで、鯨島校長が試験終了の宣告をした。

お、終わったか……なんか、試験とはまるで無関係のところまで、経をすり減らした印象が強い。主にアテナとか精霊とか精霊とか精霊とか！

「いやしかし、誰もがとても素晴らしいデュエルを見せてくれました。特に、最後まで自分のデッキを信頼し、モンスターとの熱き友情を見せ、そして何より、最後の最後まで勝負を捨てることなく、終始デュエルを楽しみぬいた遊城十代君。君の熱いデュエル魂は、ここにいる誰もが認めることでしょう。よって、遊城君はラー・イエローに昇格です」

会場を揺るがすような大歓声。オベリスク・ブルーの一部の生徒以外は皆一様に十代へ祝福の言葉を投げかけている。

「そして……同じく御堂切君」

「ほへ？」

思わず間抜けな声をあげてしまった。

「格上であるオベリスク・ブルー、それも上級生に対しても、普段と変わらなまっすぐな目でのデュエル。観客のブーイングにも負け

ず、自らのデュエルを貫き通した意志。何よりも突出した筆記内容！
！ どれをとつても、昇格に相応しい。よつて君も、ラー・イエロ
ーへと昇格です！」

先ほどよりは小さいながらも歓声が湧く。が、何故か男子の数割はブーイングなんぞしてやがる。……あれか！？ やつぱり俺が『雷電娘々』を倒したからか！ そこまで好きかお前ら！

「おお〜！ やつたなセツ！」

「二人ともすごいや！」

「これで一步オベリスク・ブルーに近づきましたね！」

「ん〜……」

自分も当事者であることを忘れて祝福してくれる十代や純粹に喜んでくれているアテナたちには悪いが、俺自身はあまり乗り気じゃない。

「なー十代、どうんすんべ？」

「ん？ どうするって？」

「いやさ、俺あんまし昇格する気が起きねーんだが、十代の方はどうよ？」

俺がニヤリと笑いかけると、十代もまた、意図を察してくれたらしく、ニヤリと笑った。

「へへっ！ 気が合うな！ 実はオレも、昇級断ろうかと思つててさ」

そう言つて笑い合う俺たちに、翔が慌ててツッコミを入れた。

「ちょ、二人とも何言つてんすか！？」

「いいじゃねーか。オレ、レッド寮好きなんだからさ。あそこがオレの部屋だぜ！」

「あ、アニキ……」

なんだか感動したような翔が、今度は俺の方に顔を向けてくる。

「……昨日言つたじゃねーか。覚えてないのか？」

「え……」

ポカンとしている翔に、俺は昨日も言つたセリフを繰り返してや

る。

「『メザシとエビフライは俺のジャスティス!』」

「え、ええ〜!？」

「せ、セツ……本気、ですか？」

今度はアテナか。まあ、あんなメールよこしてきたし、期待してたのかもな。

「ああ。本気だ。正直、上上がるメリットが思い付かない」

「え、えっと……ご飯とか、おいしくなりますよ!？ ほら、メザシやエビフライでしたら頼めばそれだって……」

「ん〜正直美味いもん食いたかったらブルー寮とかお邪魔して貰えばよくな?」

「も、もらえませんか! 普通は皆さん、格下の寮に対して自分たちのご飯を……」

「けど、もう俺何度か女子寮のメシも食べてるぜ?」

あっけらかんと言うと、全員何を言っているのかわからないといったようにポカンとしてしまった。

「え? ちょ、ちょっと待ってください! もしかしてセツ……女子寮に侵入とか、しました?」

明日香から厳しい視線が向けられる。……いやいや。

「侵入で。俺は普通に真正面から入って堂々と食堂でメシ食って帰っただけだが」

「あ、ありえないわ」

「その時普通にアテナや明日香とも会話したぞ」
はっとした表情で記憶を辿るアテナと明日香。

「そ、そういうえば話してたような……」

「……普通に食事しながら会話してたわね……」
言いながら信じられないとばかりにこちらを見つめてくる。

ちなみに、その時の会話がこちら。

「アテナの時は……。」

『ようアテナ。こんばんは』

『セツ！　こんばんはです。今日はどうしたんですか？』

『レッドのメシも美味いんだが、たまには他の寮のメシも食ってみ
たくなつてな』

『そうでしたか。じゃあゆっくりしていつて下さいね』

「んで明日香の時は……。」

『あら御堂くん。今日は今から食事かしら』

『まあな。おつ、そうだ天上院、このカードなんだけどさ、お前
のデッキにどうだ？　いや手に入れたのはいいんだけど、俺のデッ
キじゃ合わなくてな』

『へえ……良い効果じゃない。もらってもいいのかしら』

『ああ。どうせ持っても腐らせるだけだからな』

『ありがとう。でも、まずは食事を済ませてからにしましょう。行
儀が悪いわ』

『へーい』

「とまあこんな具合で」

「何故疑問に思わなかったのかしら……？」

「ごくごく当たり前にセツが女子寮にいました……」

「……お前は一体どんな魔法を使ったんだ？」

「いやー、昔からどこにでも自然に溶け込める特技があつてな」

「三沢とは違うぞ。ある意味では確かに『空気』なんだが、フェー
ドアウトするんじゃないなくて、溶け込んでいくわけだな。」

「警備の人とかどう突破したんですか？」
「いや普通に」

『こんちやーっす』

『おう、こんにちは』

『毎日立ち仕事お疲れ様です』

『ははは、なに、これが仕事だからな』

『今後もお勤めがんばってくださいね』

『ああ。お前も、勉強頑張れよ』

「てな具合で」

「……警備の意味がないじゃない。人員異動を提案しようかしら」
無意味だぜ。そも、お前らだって違和感なく受け入れてんだから。

「もしかして、イエロー寮にも来てたのか？」

もち。あそこはやはりカレーが美味かった。ブルーほど高級じゃないにしろ、庶民の贅沢位の質があつてよかつたな。

「しかし、あの時はただ単に誰とも会わなかつただけだ」

イエローの人間は総じて影が薄くて困る。

「じゃあ、ブルーにも？」

「ああ。女子寮のも高級で美味かったが、やっぱり女子寮のメシは上品すぎてな」

「……他の寮はともかく、ブルーに知り合いなんかいないだろお前
顔見知りくらいなら、万丈目とかクロノス先生が。」

「……あの二人が見逃すとか、今まで以上にあり得ません」

アテナがすごく疑わしげだが、これもまた事実。

「実際、クロノス先生や万丈目にも会つたぞ」

「どう切り抜けたんだ？」

なんか十代はもう適応してわくわくと俺の話聞く態勢だ。こいつにもその内できそうだな。

「そうだな。クロノス先生の時は……」

『パルメザンチーズ』

『とろけるチーズ』

突破。

『……』
いやほんとだって。

万丈目の時は……

『ばじゃまでお・ジャ・マ』

『マッスルマッスルおジャマッスル！』

クリア。

『あり得ない！』

「ていうか今の誰だよ！？ ぜってー、万丈目じゃなかったろ！」

紛れもなくおジャ万丈目さんです本当にありが（ry

「事実だ」

全員もはや驚きを通り越して呆れたような表情だ。

「実はブルーが一番簡単だった罫」

「……そこまで何でもありだと、もしかしてセツ君、女子寮のお風呂とかに入っても気付かれないんじゃないか……」

むっつりスケベ乙。

翔の言葉を聞いて真っ赤な顔で記憶を辿ろうとしているアテナと明日香。

「それは無理だな。流石にそんなところ入ろうとしたら下心が露出して気付かれる」

無理だと聞いてほっと胸を撫で下ろす女子二人。

「まあネタばらしするとだな。俺は普段から自然体のプレッシャー知らずだから、どんなに堂々と女子寮歩いていても周りが自然に受け入れてくれる……らしい」

前に現実の友人から聞いた話だが。

「けどまあ、流石に女子風呂なんか入ろうとすれば自然体ではいらねんから、周りにも気付かれるってわけだ」

この妙な特殊能力のおかげで、学園祭では他クラスへのスパイに必ず任命されていたことを思い出す。

「……どっちにしろうらやましい能力ツス」

うらやましいと思っっている時点でお前には出来ん。

「まーそんなわけで、俺にとって昇級するメリットはさほどないわけだ」

「セツ……」

「大体アテナ。お前こそ、なんで俺に昇級して欲しかったんだ？」

別に俺が昇級しようとするまいと、アテナに対する態度は変わらなかったはず。俺がそのことについて聞くと、アテナは軽く頬を染めた。

「セツは……私の好きな人ですから。オシリス・レッドだってバカにされているのが嫌だったんです」

……。

「じゃあ、オレたちは帰るとするか!」

「そうね。アテナも、門限までには帰ってきなさい」

「新たな計算式が……ブツブツ」

「はあ……リア充乙ツス」

「でえい！ 帰るな貴様ら！ こんな空気の中二人にするな！」

『不純異性交遊！』

『天罰てきめん！』

『やつちやえー！』

「芸人かお前らは！？ ジャーック任せた！」

……………

……あれ？

『ジャーック殿でしたら、ストライキ中です』

「ジャーック!?」

心強い味方が消えた。これから俺はどうすれば!?

『偶にはわしを呼んでみるという手も……』

「ない！ 却下！」

むしろ出るな爺！

だがまあ少なくともあのむず痒い雰囲気は払拭された。そのことだけはぐっじよぶ！

「と、とりあえずアテナ！ 俺はむしろオシリス・レッドだからってバカにしてるエリートさんどもを軽く蹴散らして悦に入る方が性に合ってるから無問題！ 全然お前が気にすることあーない！ おk?」

「は、はい。すみませんセツ。あつ、それと、あんまり女子寮に入りするのは良くないですよ。倫理的に」

「お、おう」

『まったくですわ。自重なさりませ主様』

『ぶぶつ、子供に倫理観説かれてるわ。なっさけな〜い』

『子供っぽくてカワイイし、ボクはいいと思うけどな〜』

自重すんのはお前らだよこのお騒がし三人官女。

結局最後は騒がしく試験を終える俺たちなのだった。……帰って

きてくれ、ジャック！

おまけ

『わし、扱いがぞんざいじゃね？ 一応キングなのに……』

『キング……いえ、恐らく今はまだ、キングのターンに入っていないだけで……何故私はストライキに入って尚他人のフォローをしているのでしょう』

『それがお主の運命なんじゃな……』

『お気遣い、痛み入ります……』

第七話「月一試験を終えて」(後書き)

さて、みなさんご一緒に、『あり得ない!』

まだおジャ万丈目じゃねーだろとかそもそもんでも設定だよとかいろいろありますでしょうが、まあこの話は壊れです。

あ、ちなみにちゃんとアテナも評価されてますよ。「類まれなるデュエルタクティクスが」とかって。本人すらまったく聞いちゃいませんでしたが。

不憫なジャック。出番のないキング。すっかり芸人なクイーン。

三銃士は今日も元気です。

次回遂に、小説では聞かせられないのが残念なあのお方の登場です。ちよっとオリジナル設定色強めになります。まあがんばります。

では、変わらずご意見ご感想をお待ちしております。レーネスでした。

番外1「聖戦という名の殺戮」(前書き)

バレンタインなので番外投下。……いえ、決して本編が完成しなかった場つなぎじゃありませんよ？ 実際、そこそそ長いですこの話。それに、ここまでラブコメ色の強い遊戯王書いといて、このイベント逃すとかないでしょう。……よし、言い訳完了。

二話続けてギャグチックです。……あれ？ ラブコメだけどほほギャグじゃね？ という突っ込みは……。

こ、こほん。では、アルカナのバレンタイン、どうぞ！

番外1「聖戦という名の殺戮」

アルカナ〜切り札の騎士〜

番外1「ジハード聖戦という名のジエノサイド殺戮」

「出来ました！」

ブルー女子寮の厨房。他にもちらほらと同じ目的を共有する同志ライバルたちがヘラ片手に奮闘する中、私は一足先に目的のブツを完成させることに成功しました。

私が、さてラッピングをどうするかと次の問題に悩み始めていると、背後で奮闘中の同志たちの会話が耳に入ってきました。

「ねえ、あんた誰にあげる気？」

「もち、カイザー亮さまに決まってるじゃない！」

「うっわー、また無茶なところ行くわねえ……」

「む、無茶ってなによ！」

カイザー、カイザー亮。……丸藤翔さんのお兄さん。顔良し勉強良し運動良しデュエル良し性格クールでデュエル中は相手へのリスクを忘れない。確かに非の打ちどころがない女子寮内人気ランキングぶっちぎりトップのオベリスク・ブルー三年生。なるほど、やはり大半はそちらに流れそう。

「でも実際競争率高すぎだつて。亮サマどれだけ人気あると思ってるのよ」

「う、うう……そういうあんたはじゃあ誰にあげるのよ」

「ん〜とりあえずあたしも亮サマにはあげるけど……」

「ほらやつぱり！」

「違うって。だから、本命は別」

「え〜うそ、誰々？」

「ちょ、あんたら近寄ってくんない！」

「そうです。近寄るのではなく私のように耳をそばだてて盗み聞くのが正解です。」

「わたしは三沢君」

「……誰だっけ？」

「ちょ、イエローのナンバーワンでしょ。何言ってるのよ」

「あ、あ〜思い出した思い出した。確かに顔も性格も勉強も運動もデュエルもトップクラスだよな」

「……でもなんか地味」

確かに。

「でもさ〜わたしは御堂くんとか良いと思うんだけど
ピク。」

「え〜御堂君ってオシリス・レッドじゃん」

「イエローとかなら兎も角レッドはなあ〜」

「でもデュエルは強いよね」

「まあそれは……」

「顔だつて悪くないし、こないだの筆記、満点だったんだって」

「嘘!? あたし必死に勉強して70そこそこしか取れなかった」

「あたしなんか59点。出す問題が〜やらしいんだもん」

「た、確か三沢君で98点って……」

「お〜良く知ってるわね。流石」

「か、からかわないで!」

「そういえば、ユーキもこないだは結構良かったんだっけ？」
ピクン!

「そうなの？」

「そうよ。お〜いいユーキ!」

呼びかけられたことに気づいたらしく、加藤さんがいつの間にか

ら集団になつて話しこんでいる女子に近づいていきます。

「呼んだ〜?」

「呼んだ呼んだ。あんたたしか、こないだのテスト、すごい良かったって嬉しそうに跳ねてたじゃない」

「は、跳ねてはいないわよ〜」

「言葉のアヤよ。で、何点だった?」

「は、89……」

「うは、すごいじゃないユーキ。いつも60位をうろうろしてたあんたが、急にどうしたの?」

「え、え〜と……」

最早当初の話題はどこへやら。

「せ、セツくんが予想試験問題と勉強スケジュール作ってくれて……殆どそのまま出たからすると……」

む、むむう……。私にはそんなことしてくれなかったというのに……相変わらず加藤さんには甘い気がします!

「え〜嘘、それって超すごいじゃん!」

「野球とかの時も結構活躍してたみたいだし……」

「亮サマと違って気さくで話しやすいよね」

「クールさはないけどね」

「なるほど……結構優良株だ」

ま、まずいです。こ、こんな直前になつてセツの株が急上昇とか……流石に積み重ねの面で圧倒的優位な自信はありますが、うかうかもしていられません! こ、これは普通の中ではインパクトがなさ過ぎて……。

「それで? ユーキはそのセツくんにあげるのかにや〜?」

「え、え〜と。……うん」

「きゃ〜! キタ! 甘酸っぱいのキタ!」

「あ、でも御堂君って……」

女子集団の視線がこちらに集中するのを感じます。……気付いてないふりで作業を続けます。

「……まあ、こゝいうのは戦争だし」

「そうそう、これも一つの決闘だよ」
デュエル

デュエル……。

「それです!!」

思わず私は叫びました。これは……まさしく天啓！ シャルナ辺りの天啓に違いありません！

『いや、あたし何もしてないんだけど……まあ勘違いしてるならしてるでいいか。さあ！ あたしを崇め奉りなさい!!』

「早速準備です！」

『……アテナって、ホントにあたしのこと見えてるのよね？ なんかあたし、常に悉く無視がデフォになってきてる気がするんだけど』
私は降りてきたアイデアを形にするべく、急ピッチで作業を再開しました。

S I D E セ ッ ツ

今日という日を、心躍らせわくわくとした心持で迎えるか、目をギラつかせ、憎しみに狂った精神状態で迎えるかは、残念ながら人により様々だろう。もうはつきりと言ってしまうえば、前者は勝ち組、後者は負け組である。そして肝心の俺はといえば……。

「勝ち組……ふははっ!!」

告白までされている上、アテナから明日は楽しみにしてくださいとまで言質が取れている。そう、俺はもう家族からしかもらえなかった寂しい負け組とはおさらばぶっ!?

「リア充氏ね！」

「モテ男死すべし!!」

「でえい！ うっとうしい!!」

だめだ。このレッド寮においてリア充は敵！ 実際割と心労も溜まるということを知らない飢えた獣どもめ。

「ピッピー、ピッピー！」

「お、アテナだなげはあっ!?!」

「滅びろ!」

「これは正義の鉄槌じゃ!」

「がふう!?! おのれ、貴様らは普段からの好感度上げを怠るから
そういうことに……ぐはっ!?!」

「黙れリア充!」

「女子に話しかけることすらドキドキバクバクもののシャイボーイ
なめんな!」

「駄目だ。こいつらはすでに修羅! 或いは羅刹! ひとまずここ
から避難しないことにはアテナのメールすら読めん!

「つつたく……」

魔窟と化したレッド寮から満身創痍で逃げ出した俺は、とりあえ
ずアカデミアの方角へ向かって逃亡を続けていた。

いや、気持ちちはよくわかる。俺だってこっちに来る前は全面的に
あいつらの味方だった。

「まああいつらのことはいいか。さてアテナのメールはっ」と

『アテナです。お渡ししたいものがありますので、今からそちら…
…レッド寮の方へと向かいます』

む。じゃあちよつと戻らないと行き違いになるな。あんましあつ
ちへは戻りたくないのだが致し方ない。

「これも、アテナのチョコのため!」

そう、今日は聖・バレンタインデー。恋する乙女の聖戦であり、
男にとっての最後の審判とも言える日であるのだから。

アテナとは、レッド寮に戻る途中で合流した。すぐになれるものかと思っていたら、何故かまだあげませんともったいぶられた。

「大体、セツは八方美人なんですよ。もうちょっと自重してください！」

そして、何故か説教を食らっていた。

「んで、なんだってレッド寮に行くんだ？」

チヨコを渡してくれるのはすでに明言されているので別にもったいぶらなくても、と言外に聞いてみる。シチュエーション的な是非を問うなら、餓狼の徘徊するレッド寮はむしろ鬼門。というか万一今日奴らの前でラブコメってみる。確実に今日が俺の命日だ。

「もう……私だってホントは普通に手作りで頑張って作ったチヨコをロマンチックなシチュエーションでセツに渡してそのまま……とか考えてましたけど……」

そのまま……の後は何も無い。ありがとっ、大事に食べるよ、位のやり取りで帰宅である。断じてそれだけだ。最近はなんかもう半ば以上恋人みたいな関係にまでなっている気がするのも事実だが、まだ明確には返事をしていないのも事実だ。

「けど！ セツが八方美人すぎたから、この案は没にせざるを得なくなっただんです！」

え〜なにゆえ〜？

「それではインパクトに欠けます」
いらんし。インパクトいらんし。

「なので、ちよっと奇をてらってみることにしました」

普通であって欲しかった！

こういった場合、奇をてらったものは確実にコメディオチが来ることを、アテナはわかってない！

「で、その結果チヨコの分量が多くなりすぎたので、普段セツがお世話になっているレッド寮の皆さんにもおすそ分けしようかと」

「なるほど」

そりゃ奴らは滂沱の涙を流して喜ぶことだろう。基本、女日照り

のレッド男子だし。

「そこで、なんですけど、セツには皆さんを食堂に集めて欲しいんです」

「正に、命懸けのミッションだな」

「は？」

今の奴らは獲物チヨコを求めて徘徊する亡者の群れであり、獲物チヨコを手に入れた者の喉笛を容赦なく食い破るハンターだからだ。

「まあいい。アテナは食堂で準備するのか？」

「はい。まあ準備と言ってもそう時間がかかることじゃないんですけど」

「よしわかった。……ニプーカ・ニペーラ」

「？ ニプーカ・ニペーラ」

戦場から生きて帰るためのおまじないを唱え、俺は神風特攻を決行するのだった。

「ゲーム……スタート！」

リプレイは、ない。

「ほほう……今この時、俺たちの前に戻ってくるとは……勇氣のあるやつだ」

「或いは……よほど死にたいらしい」

「なんだ自慢か？ 俺は今日これだけ貰いましたよすごいだろうとでも言いに来たかああん！？」

「同情ならするな。嘲笑なら死ねばいい。おすそ分けなら殺してくれる」

そこは……ソリッドビジョンを通していないのに『万魔殿 悪魔の巣窟』が再現されていた。いやむしろ『アンデット・ワールド』の方だろうか。

「お、落ち着け。いいか、お前らに妖精の贈り物のお知らせだ！」

ピクリ、と亡者の群れが濁った瞳でこちらを見据える。……怖え。
「アテナが、日頃お世話になってお前らにも幸せのおすそ分けを……」

『犬と呼んでください御堂様』

「変わり身早え！」

「どこだ！ どこでその素敵イベントを行っている！」

「だからそれを今から案内してやるってんだ！ 少し落ち着け！」

全員が片膝ついて頭を垂れてきた。本当に調子いい奴らだこと。

「こつちだ」

まるで軍隊のように隊列を組んでぞろぞろと後を着いてくる奴らを不気味に思いつつも、アテナが待つであろう食堂の引き戸を開ける。

「おーいアテナばっ!？」

「あ、セツ。連れてきてくれたんで……」

「女神さまの降臨だ！ さあ、神輿だ！ 神輿を持てい！」

「神様仏様アテナ様！ ボクはこれから毎朝、女子寮に向かって最敬礼することを日課とします！」

「ひゃあっ!？」

奴らはアテナの前に跪き、おお神よとばかりに祈り始めた。ちなみに俺は引き戸を開けた瞬間に奴らに弾き飛ばされ顔を強打したところである。

「き・さ・ま・ら〜！ 落ち着けつつてんだろが！ アテナがおびえてるだろ！」

そう叫ぶと瞬時に大人しくなった。……こいつら、もうアテナの犬だな。

「あ〜とりあえずアテナ。連れてきたぞ。命懸けで」

「は、はい。ありがとうございます……?」

まだちよつとおびえてるっばい。まあ仕方ないだろ。こいつら眼がギラついているし。

「で、アテナ。説明してくれ。こいつらも呼び寄せた理由」

「はい。実はですね。このバレンタインをデュエルに例えまして、ドローパンならぬドローチョコというものに挑戦してみたいです！」
「さすがアテナ様」

「凡夫とは眼の付け所が違う」

「崇めよ、称えよ」

『はは〜！』

「せ、セツ……？」

「気にするな。こいつらはただの阿呆だ」

本気でアテナ信仰が始まっているレッド男子は放っておいて説明を始めさせる。

「は、はあ……。えと、これがそのドローチョコです。表面はみんなチョコでコーティングしてありますが、中身は結構色々です」

机に、黒かったり白かったりするチョコが並ぶ。どれもそこそこのサイズで、全部食べるとなれば確かに俺一人じゃ無理だろう。

「中身は秘密ですけど、普通のホワイトチョコか何も入っていないチョコが当たりです。チャンスは一人一回。どれが正解かは実は私にも……」

「初手は貰ったあ！」

一人のレッド男子が果敢にチョコに飛びつく。馬鹿！ 一番手は死亡フラグだ！

「がふう！？」

「佐藤ー！？」

…… オチたか。

ちなみに中身は納豆だった。……なるほど。ドローパンでも、納豆パンがあったな。

「こ、これは……」

「もしや……」

「とてつもない地雷臭が……」

ここにきて、レッド男子の威勢が急激に落ちた。

「……ここは、せっしやが逝こつ」

アテナ、恐ろしい子！

「食べて……くれませんか？」

……覚悟を決めるか。

「そうだ。俺だってここまでなんだかんだと鬼引きでデュエルに勝利してきたじゃないか。そう、俺はあたかも主人公補正と思わんばかりのラックの持ち主。いける、いけるはずだ……！」

いざ！

「俺のターン！ ドローオオオオオオオ！！！」

俺は特に数が少なかったホワイトチョコ（暫定）を掴み取った。数が少ないから当たりやすいと思ったのもあるし、俺はどちらかと言えばホワイトチョコの方が好きだからだ。

「俺は……このホワイトチョコ（暫定）を、召喚する……！」

そうして俺はひと思いにチョコに食らいついた！

「逝った！」

結果は……。

「アテナよ……」

「せ、セツ……どう、でした？」

いままで納豆だのステーキだのくさやだのと散々なチョコばかりだったが……。

「ロウソクは……食い物じゃない……」
げふ。

「そ、そんな……よりもよって最大のハズレを……！」

いや……きっとそれは最大の『当たり』だったんだ。そう、今の場では、主人公補正よりもギャグ補正が優先されたように……。薄れ行く意識の中で、俺はそんなことを思っていたのだった。

おまけ in 保健室

「セツくん、大丈夫？」

「ああ……なんとかね」

あの後、アテナはレッド寮におけるバイオハザード実行犯として三日間の謹慎処分を受けた。俺はと言えばまあロウソク食ったからと言って死にはしないので大事をとって保健室で休んでいる。

「ユーキちゃん？ どうしたんだそんなにそわそわと」

「え、えつとね。セツくん。もう、過ぎちゃったけど……」

そう言っただけでユーキちゃんが手渡してくれたのは何の変哲もないチヨコレート。

「これ……」

「えつと、ホントは当日に渡したかったんだけど、あんなことになっちゃったから……」

あ、ああそりゃロウソク食った後に食いたくはないな。

「だから、1日遅れだけど、ハッピーバレンタイン！」

「あ、ありがとう……」

軽く頬を染めてはにかむユーキちゃんを見て、やっぱり普通が一番だ。そんなことを思う俺なのだった。

番外1「聖戦という名の殺戮」(後書き)

あ、あれ？　なんか最後にユーキちゃんの一人勝ちに……？

……この小説のメインヒロインは、アテナです。

おかしいな。ギャグは書いてとてもスムーズだ。これ書くのに
かかった時間三時間くらいだし。八話は三日くらいかけて三分の一
も出来なかったのに。

まあそうはいつでも本編からして結構ギャグですけど。この小説

あ、ちなみにニプーカ・ニペーラは、ロシアのおまじないです。

意味は……ぐるぐる先生に聞いてみよう。思いがけず、これまでの
ネタの意味もわかるかも！　まあ今までにちりばめたネタが理解
できるなら、ニプーカ・ニペーラの意味も大体分かることでしょう。

あ、ちなみに三沢の98点。本人曰く、「つく！　ちよつとした
ケアレスミスだった……前日に夜遅くまで十代やセツ対策のデッキ
を作っていて寝不足だったから……」だそうですね？

では、なんとかがんばって次話も書きたいと思います。

感想は半永久的に募集中です。レーネスでした！

第八話「あの声が聞きたくて」（前書き）

ま、間に合わなかった……15日に間に合わなかった新話投稿です。

というか皆さんバレンタインネタ好きですね。いきなり感想増えましたよ。いや、いいことなんです。

さてついにあのお方の出番なわけですが。そのせいで前半ものすごくギャグです。……え？ いつも通り？ やだなあアルカナはシリアスラブを看板に掲げ……嘘です。

後半から次話にかけてはシリアスに入ります。というか久しぶりにデュエルを書い（ry

こほん。ではどうぞ！

「イーんが引いとるぞ」

ぬ……。

「むう。なるほど確かに傍から見るとアホっぽい。だが、この上がりに上がったテンションは下がりようがない！」

あの声は是非とも生で聞いてみたい。あの独特の重低音は一度聴いたら癖になる。

「あ、そっぴいや大徳寺先生が、今日はいいアナゴが入ったからそれを……」

「アナゴだとう！？」

「うおっ！？ 本当にどうしたんだセツ。今日はとことんおかしいぞ」

おっといかん。つい反応してしまった。だってしょうがないじゃないか。あの人は緑さんに次いで好きな声優さんなんだぜ？ もう今朝からテンション上がりまくりだったの！ ひゃっほう！

ピッピ、ピッピ。

そんな時、毎度お馴染アテナからのメールを受信。興奮冷めやらぬまま上機嫌でメールボックスを開く。

『アテナです。セツ？ ごめんなさいですけど、明日香さんの所在を知りませんか？ 寮内にはどこも見当たらず……十代さんたちと一緒に、十代さんたちにも聞いてくださると助かります』

……来たか！

「十代！ 明日香の居所を知っているか知らないかようしそうか！」

「はええ！ こつちが答える前に結論だすのかよ！？」

「どうかしたの？」

「アテナ曰く明日香の行方が知れないらしいさて君たちは居場所を知っているか知らないかさあとりあえず大徳寺先生にでも聞いてみようか！」

「一息！？ そしてやっぱり僕たちに意見は求めないんすね……」

「なんだか、ものすごく生き生きしてるんだなあ……」

もう今の俺を止められる奴などいやしないぜ！

をしていると、ようやく十代たちが追い付いてきた。

「ったく。いくらなんでも急ぎ過ぎだぜ。隼人が参ってるっつの」
見れば、確かにはるか後方でせいぜいと荒い息を吐いている隼人の姿。

「ま、待つて欲しいんだなあ」

「隼人、頑張れー！」

「ぼ、僕も結構キツイッス……」

「よしならば俺はこの逸る気持ちと高まり過ぎたテンションをどうにかして発散するでしょう」

セツは ふしぎなおどりを おどった！

「はーりゃほーれうまうっ！」

セツは こんらん している！

まわりが しろいめで こちらをみている！ なかまにしますか？

「イエーッス！」

「こつちからノーだよ！」

しょうはにげだした！ しまわりこまれてしまった！

「知らないのかい？ 大魔王からは逃げられない！」

「セツ君大魔王だったんすか！？」

だめだ！ しょうぶのさいちゅうに あいてにせなかはみせられない！

「ポケ ンだった!？」

しょうは がくぜんとしたためで こちらをみている！ とどめをさしますか？

「ためらいもなくイエス！」

「ためらってよ！ いやそれ以前にためらわずにノーだよ！」

「ノーと言えない日本人！」

「うわああああああつ!？」

「ふう……落ち着いた」

「僕は余計に疲れたよ！」

結論。翔のからかいやすさは神。

「日に日にセツ君がおかしくなってる気がするんだなあ」
実は俺もそう思う。

「とにかく、休憩終わり！ さっさと行こうぜ」
「行くも何も、それだろ？ 廃寮って」

十代が指差す先。そこには確かに古びた洋館……といった風情の建物があった。

「ここに明日香さんが……」

「な、なんか……すっごく雰囲気があるんだなあ」

翔と隼人はすっかりビビっている。対して十代は瞳を輝かせ、めちゃくちゃ面白そう！ とでも言いたげな顔をしていた。実に好対照。俺？ 当然、今もテンションはマックス！

「セツ〜！」

「ぬ？」

遠くから俺の名前を呼ぶ声が聞こえる。よく聞く声だから忘れるはずもない。アテナだ。

「アテナ……どうしてお前まで」

「は、廃寮で行方不明者が続出しているって噂は、はあっ、女子寮でもよく聞く話で……はふ、私心配で……」

息を切らせて、それでも心配そうにこちらを見上げるアテナ。

「けど、明日香もここに来たかも知れないからな。友人としては、放ってはおけない」

実際にはかも、ではなく確実にここにきているわけだが。そして俺がここに来た理由の九割九分は明日香より若 目当てだというのも伏せておく。……沈黙は金、多弁は身を滅ぼす。

「とにかく入ってみようぜ！ なんか探険みたいでわくわくしてるぜ！」

「んだな。ほれ、アテナ。お前も来るんだろ？」

「て、手を繋いでてもいいですか？」

う……チェリーボーイには多少難易度が高いが……まあ巻き込んだっぽい形だし、妹と手を繋ぐのと同じようなもんだ。

「わかったよ。ほれ」

左手を差し出す。一応念のため、利き手の方は開けておく。

「あ、ありがとうございます」

『……不純異性交遊』

「……クイーンよ。そのネタはそろそろ飽きてきたんだが」

『ね、ネタなどではありません！』

仕方ない。

「ほれ、クイーン」

『あ、主様？　なんでしようこの手は……』

「お前も掴まれ。実際触れやしないだろうが、ちよつとした気休めだ」

『な、何を……わたくしが、こわがっているとでも？』

「ん〜そうじゃなくて、アテナだけ手え握ってんのが不満なら掴まれってこつた」

『な……』

クイーンは顔を真っ赤にして口をパクパクとあけたりしめたり忙しい。ちらちらとこちらの手を見て自分の手を出したり引っ込めたり。

「だー！　もうまだるっこしい！　ほら！」

『ひあつ！？』

ひんやりとしたクイーンの手を掴む。……おや？

「なんか、掴めちまったんだが」

『な、な、な』

クイーンは驚きのあまり固まっている。

『いえ、固まっているのはそれが理由ではないかと……』

「おお、僕らのジャックが帰ってきた！」

帰ーって来たぞ！　帰ーって来たぞ！（某三代目巨大宇宙人のテ

ーマ）

これで俺の心の平穩が保たれる！

『いえ、どうもストライキとか関係なく私に平穩はないことがわか

りましたので。ならば主様に平穩を与えた方が……」

どこか遠い目をしたジャックが乾いた笑みを浮かべながらそんなことを言う。……なんか、悟っちまったのか。ジャック……。

「ともかく、主様がクイーンに触れられる理由についてはまた後でお話しします。そちらのお嬢さんも大分不満そうですし……」

む、確かにずっと放っておいたらアテナがムスツとしてしまっている。

「それに、他の方々はもうとっくに先に進んでしまったようですよ……」

「何イ！ しまった、出遅れた！ 行くぞアテナ、クイーン！」

「えー？ きゃあ！」

「あ、あうあうあ……」

「ほ、ほらクイーン、しゃんと立って、走ってください！」

「ウブじゃの〜。手を握られただけでオーバーヒートしとったんじや、この上更に進んでいけば憤死するのが目に見えるわい」

俺の手を握ったまま、ジャックに運搬されているクイーン。……

正直物凄く走りにくいのが、半ば意識がない状態でもしっかり俺の手を握って離さないで仕方ない。

とつても不格好な形でしか動けないのでなかなか先へ進めない。

ていうか、もしかしてもう明日香と別れちゃったりしてない？

「あつ、来た。おーいセツ君、アテナちゃん！」

「翔さん！ 明日香さんは？」

「それが……」

やはりもう会って別れた後だったらしい。まあここは原作通りだから仕方ない。

「なんか、明日香の兄さんも行方不明になったらしいぜ」

「それで、行方不明者が続出しているって噂のこの寮を調べに来たつてところか」

原作通りの流れだ。

「なあ、それならオレたちで明日香のお兄さんの手掛かりを探さな

いか？」

「ええ！？ これ以上奥に行くんスか！？」

「そ、それはちょっと、なんだなあ」

「大丈夫だって！ セツはどうだ？」

「行く。行くとも。むしろ行かせろ」

ここで帰ったらあの声が聞けないじゃないか！ そんなの死んでもごめんだ！

「セツが行くなら……私もがんばります！」
健気や……。

流石に自分より年下の女の子が行くと言っているのに男の自分たちが行かないとは言えなかったらしく、翔と隼人も着いてくることに決めたようだ。

五人でぞろぞろと寮内を練り歩く。途中で闇のゲームに関する資料を見つかりましたが、とりあえずそこは省略する。

「おいこれ！」

そう叫んだ十代が懐中電灯で照らした先には、原作通り吹雪さんの写真が。……10 JOINを天上院と読むのには無理があると思う人拳手。

キャーーーーー……。

「なんだ！？」

「明日香さんの声です！」

「行くぞ！」

とりあえずその写真は回収して悲鳴の聞こえた方向へ向かう。

「これは……」

そこに落ちていたのは『エトワール・サイバー』のカード。間違はなく明日香のカードだ。

「そ、そんな。まさか明日香さん……」

「いや、決めつけるな。見る、ここに何かを引きずった跡がある」

ガイシャは……まだ生きているッ！

「行くっぜ！」

「う、うん！」

「お、おう！」

「ッ！ マズイ！ 先を越されるわけにはいかん！」

「必殺Bダツシュ！」

「ふえっ？ きゃあ！」

半ばアテナ（と、未だオーバーヒート中のクイーン）を引きずるようにして俺は走った。

十代たちが立ち止まる。その先には気絶している明日香と、仮面をつけた大男。

「お前！ 明日香に何をした！」

「私はタイタン。闇のデュエリストだ……」

「お、おおおおおおおおおおおお！！ キタ！ 若 キタ！」

「その娘には、貴様らをおびき寄せる餌になってもらった」

「つと、興奮してる場合じゃないな。流石に。」

「お前……何が目的だ！」

「私の目的は、貴様らを闇に葬ることだあ！」

そういつてわかも……じゃないタイタンが指差してきたのは十代と……俺。

「それだけのために明日香を……こうなったらオレが……」

「いや、待て十代」

飛び出して行こうとした十代を止める。

「なんで止めるんだ！」

「ここは、俺が行く」

「セツ!？」

「明日香を……俺の友人を傷つけた罪は重い（訳：若 とやるのは俺だ）」

「ふん。後悔するなよ……」

「「デュエル!!」」

これが、俺が本格的に原作へと介入していく発端となるのだった。

第八話「あの声が聞きたくて」（後書き）

えらく長くなったのでここでいったん切ります。続きはウェブで……じゃなくて次話で。次話は基本的にシリアス……のはず。僕のテンションが爆発しなければ。

デュエルに関しては希望のあったアルカナの効果も使えたり、まあよかったかなと。後編に続きますが。

では、ご意見ご感想をお待ちしております。レーネスでした！

二月十六日改訂。尺の都合でデュエル部分を次話へ統合しました。

第九話「あの声が聞きたくて 後編」(前書き)

いつもよりもちょっと早い更新です。第八話を改訂し、デュエルの部分を完全にこの第九話にまとめましたので、改訂前の第八話を読んでいた方には多少最初は退屈かも。まあデュエルを全部まとめた方が読みやすくはあるかなと思います、こんな形に。あとは長さの都合。

では、若 編……じゃない、廃寮編後編をどうぞ！

第九話「あの声が聞きたくて 後編」

アルカナく切り札の騎士く

第九話「あの声が聞きたくて後編」

「私のターンだ。ドロー！」
ちっ、先攻取られた。

「手札から、『ジエネラルデーモン』の効果を発動！」

来たな『万魔殿バンデモニウム 悪魔の巣窟』のサーチモンスター！

「『万魔殿 悪魔の巣窟』を発動だあ！」

フィールドが恐ろしい地獄のようなフィールドに変化した。

「ひっ！」

「うっわ趣味悪う……」

アテナとシャルナは流石に気分がすぐれない。まあ当然だな。

「行くぞ！ 手札から、『デーモン・ソルジャー』を攻撃表示で召喚！ ターンエンドだ」

『デーモン・ソルジャー』 ATK1900

「俺のターン！ ドロー！」

しかしなんで俺とデュエルする奴らは皆ターン目からあんな高攻撃力モンスターばかり出してきやがるのかね？

「手札から『増援』を発動！ デッキから『キングス・ナイト』を手札に加える！」

「『キングス・ナイト』……ってことは」

「もう『クイーンズ・ナイト』は手札に……」

その通り。なんかさつきからやたらとやる気満々なクイーンがスタンバってますとも！

「『クイーンズ・ナイト』を召喚！ さらに『デュアル・サモン二重召喚』を発動するぜ」

『クイーンズ・ナイト』 ATK1500

『二重召喚』は一ターンに通常召喚を二度行う召喚補助カード！
「来いっ 『キングス・ナイト』！ そして『ジャックス・ナイト』」

！

『キングス・ナイト』 ATK1600

『ジャックス・ナイト』 ATK1900

「出た！ セツのお得意高速展開！」

「三銃士が出そろったッス！」

が、まだ『融合』が手札にない。

「俺はカードを一枚セツトしてターンエンドだ」

伏せたカードは『炸裂装甲』。時間を稼ぐ！

「フフフ……私のターン！ ドロー！ 私は『ジエノサイドキングデーモン』を攻撃表示で召喚。バトルだあ！」

『ジエノサイドキングデーモン』 ATK2000

「まずい！ 攻撃力が『ジャックス・ナイト』よりも上だ！」

「リバースカードオープン！ 『炸裂装甲』！」

「フハハ！ 甘いわあ！ 『ジエノサイドキングデーモン』の効果発動！ ダイスロールだ！」

「ちよい待ち！ そのダイスロールはこっちのダイスを……」

「……あれ？ イカサマを防止するためにサイコロを……ない。
「………忘れた!?」

しまった。テンションダダ上がりだったから持ち物確認を疎かに
！ 不覚！

「いや、続けてくれ」

仕方ない。イカサマを甘んじて許すしかない。

「ダイスの目は5！ 『炸裂装甲』の効果は無効にする！」

今にも纏わりつこうとしていた装甲が、『ジェノサイドキングデ
ーモン』によつて掻き消された。

「行けい！『炸裂ウ！五臓六腑』！」

『ぐ……あああつ！？』

応戦したジャックも力及ばず、闇の力に呑み込まれた。
「ぐう！」

ダメージは微々たるものだが、キツイもんはキツイ。

セツLP3900

「さらに『デーモン・ソルジャー』で『クイーンズ・ナイト』を攻
撃だあ！」

『きゃあああああ！？』

っ！クイーン！

セツLP3500

「そしてこれが闇のゲームの真の恐怖だあ！」

そう言つてタイタンが偽物の千年パズルを掲げる。

「消えてゆく……貴様の体が、ライフと共に徐々に消える……」

「っう、お……」

い、インチキだつてわかつてても結構怖いぞこいつは。

「せ、セツ君の体が……」

「透けて……」

「セツ！！」

アテナの悲痛な叫びが聞こえる。俺は不安そうなギャラリーに笑
顔で答える。

「心配するな！こんなもん、痛くも痒くもない！」

「で、でも！」

「フウハハハツ！見たか、こいつが闇のゲームだ！」

「うるせえぞ似非ヤロウ」

「なんだとう？」

「こんなもん、俺が勝てばいいつてだけの話じゃねえか。俺を怖が
らせるなら、それこそ地獄の劫火でも持つてくるんだつたな」

「強がっていられるのも今のうちだ！ カードを一枚セットしてターンエンドだ！」

「ドロー！」

そう、この程度で俺を怖がらせようなんざ百年早い！

「ぶっ倒す！ 俺は手札から、『強欲な壺』を発動！ カードを二枚ドロー！ さらに『早すぎた埋葬』を発動するぜ！」

俺のLPが減少し、同時に俺の体も消えていく。でも、そんなの関係ねえ！

セツLP2700

「墓地から『クイーンズ・ナイト』を蘇生！」

『クイーンズ・ナイト』 ATK1500

「ハッ！ 血迷ったか！ 態々攻撃力の低い『クイーンズ・ナイト』の方を召喚するとはな！」

「黙って見てろ！ 俺は手札から、『融合呪印生物 光』を召喚する！」

フィールドに、人の手らしきものとか色々なものが混ぜ合わさったような不気味な物体が現れる。

「な、なんだあれ！？」

「『融合呪印生物 光』の効果発動！ フィールド上から、『融合呪印生物 光』と融合モンスターによって決められた融合素材モンスターをリリースし、エクストラデッキからその融合モンスターを特殊召喚する！」

さあ久しぶりにお出ました！

「俺のデッキ最強のモンスターを拜ませてやるぜイカサマ野郎！ 来いっ『アルカナ ナイト・ジョーカー』！」

『アルカナ ナイト・ジョーカー』 ATK3800

三体のモンスターが光に包まれ、最強の騎士がその姿を現す。

「バトルフェイズ！『アルカナ ナイト・ジョーカー』で『ジェノサイドキングデーモン』を攻撃！『フォースブレード』！」

「甘いわあ！ リバーカードだ！『炸裂装甲』リアクティブ・アーマー！ 早々に消える

「がいい！」

「甘いのはどっちだ！ 『アルカナ ナイト・ジョーカー』の効果発動！」

「何い！？」

「お前のその、イカサマダイスを使わなきゃ効果が出せない似非と同じと思うなよ？ 俺は手札から『次元幽閉』を墓地に送り、『炸裂装甲』の効果は無効化する！」

『喝ッ！！』

『アルカナ ナイト・ジョーカー』はその体に纏わりつこうとする装甲を、一喝して掃った。そのまま『ジェノサイドキングデーモン』を真つ二つにした。

「さっきのお返しだ！」

「ぐおおおおおおおっ！？」

タイタンLP2200

「よっしゃあ！ やったぜセツ！」

飛び上がって喜んでいる十代に笑みを向けてから、インチキデュエリストに宣言する。

「どうだ！ これがトランプの騎士の力だ！」

俺は燦然と剣を構える『アルカナ ナイト・ジョーカー』と共にインチキ闇のデュエリストを見据える。

「ぬっう小癩なあ……」

「俺はターンエンドだ！」

「ドロー！」

引いたカードを見たタイタンは不敵ににやりと笑みを浮かべた。

……まさか！？ 俺は来て欲しくないカードを思い浮かべる。

「私は手札から『おろかな埋葬』二枚発動！ デッキから『暗黒魔族ギルファア・デーモン』二体を墓地に送る！ 『暗黒魔族ギルファア・デーモン』の効果発動！」

「ギルファア・デーモン！？」

「ギルファア・デーモンは墓地に送られたとき、攻撃力500ポイ

ントダウンの装備カードとなり、フィールド上のモンスターに装備する！ 私が選択するのは当然『アルカナ・ナイト・ジョーカー』！

「さつきみたく無効化しちまえセツ！」

「無理です！ アルカナの効果は、手札に対応するカードがないと発動できません！」

確かに、あのモンスター効果を無効化するには手札からモンスターを捨てればいい。だが……。

「通す！」

『ぐう……』

『アルカナ ナイト・ジョーカー』 ATK3800 2800

二体の悪魔が怨霊のように『アルカナ ナイト・ジョーカー』に取り憑き、アルカナは苦しそうに身じろぎをする。

「そして私は『デーモンの斧』を『デーモン・ソルジャー』に装備！ バトルだあ！」

『デーモン・ソルジャー』 ATK1900 2900

「やばいぜ！ 『デーモン・ソルジャー』の攻撃力がアルカナを上回っちまった！」

「セツ！」

「フハハハハッ！ 潰えろ『アルカナ ナイト・ジョーカー』！」

『デーモン・ソルジャー』の掲げた大斧の刃がアルカナを両断する……

「と、思うよな？」

「ぬう！？」

『アルカナ ナイト・ジョーカー』はその斧をしつかりとその手に持った剣で受け止めていた。その背に輝く翼をはためかせて。

「なんだ……どういうことだ！？」

「教えてやるよイカサマ野郎！ 俺は手札から『オネスト』を発動させた！」

俺の最後に残った手札。さっきの『強欲な壺』で引き当てたカー

ド！

「『オネスト』は、自分の光属性モンスターの戦闘時に手札から墓地に送って発動する！ 戦闘を行う光属性モンスターの攻撃力を、ターン終了時まで相手攻撃モンスターの攻撃力分アップさせる！」

『アルカナ ナイト・ジョーカー』 ATK2800 5700

「なんだとう！？」

「返り討ちだ！ 『熾天使の剣』！」

『アルカナ ナイト・ジョーカー』が暗黒魔族による戒めを打ち破り、『デーモン・ソルジャー』を光り輝く剣で両断した！

「バカなああああっ！？」

タイタンLPO

「セツ！」

「すっげーデュエルだったぜ！」

「やーやーどーもどーも。……………」が。

「あ、危なかったあ……………」

「せ、セツ？」

「いや、最後にあいつが引いたカードが『フォーリン・ダウン墮落』だったら負けてた。しかも自分のアルカナに殺された」

「まあいいじゃねーか！ 勝ったんだから！」

「そうだ、明日香は！？」

人質にされていた明日香を見れば、ただ気絶しているだけのよう
で一安心。

「くう……………まさかこの私が敗れるとは……………」

原作通りならデュエルに決着がつく前にこいつは逃げ出して、闇の力に吞まれるはずだった。俺はそれを知っていたから、インチキのカラクリを明かす前にこいつを負かした。これでこいつが闇に落ちることはないはずだ。

原作通りには進まなくなるが、だからって見殺しにするわけにも
いかない。

原作を知っているアドバンテージ？……そんなもんいらさないさ。
そんなのなくなつてハッピーエンドを迎えて見せる。俺がいること
で変わる未来も、みんなハッピーエンドに。それが、原作に思い切
り介入しちまつた俺の義務なんだ。きつと。

「主様？　どうかなさいました？」

「……いや、なんでもないよ。ありがとな、クイーン」

「？　いえ……」

不思議そうな顔で首をかしげるクイーンを横目に、俺は改めて決
意を固めるのだった。

その後……。

「う……ん。ここ、は？」

「お、起きたか明日香！」

「十代……それに御堂君？」

「よう、起きたか偏屈お嬢」

無事に廃寮を脱出し、女子寮へとアテナと明日香を送り届けるそ
の道中。それまで眠っていた明日香が目を覚ました。ちなみに明日
香は、一番体格がいいという理由で俺が背負っている。……一応疲
れてるんだが。

「私は……」

「心配すんな。全部が全部、万事解決だ。闇のデュエリスト語つて
荒稼ぎしてたアホはとっ捕まえたし、みんな無事だ。……どっかの
考えなしのイノシシお嬢以外はな」

「……」

「……つたく。ほれ」

「え？」

背中越しでも、暗い表情をしているのが理解できたので、ポケットにしまつてあつた吹雪さんの写真と『エトワール・サイバー』のカードを手渡してやる。

「それくらいしかなかつたけどな」

「あなたたち……これだけのために……」

「その『だけ』のために一人で突っ込んで行つたイノシシはこの誰だよ」

「それは……だって、私は身内の問題で……」

「同じことだろ」

「え？」

「お前は大切な肉親のために勇気を出した。俺たちは大切な友達のために勇気を出した。そこに、違いなんてねえよ」

「……」

固まつてしまった。

「もしあの時、お前が本当に一人で、兄貴と一緒にの行方不明になつてみる。みんなで心配して探し回るぞ。アテナとか……ジュンコやももえあたりは落ち込むだろうな。もしかしたら泣いちゃうかもしれないねえ」

アテナは優しい女の子だ。そんなこともあるだろう。

「いいか、俺たちはもう仲間で、友達。なんかあつたら頼れ。十代たちは喜んで協力するだろうし、俺も、愚痴くらいは聞いてやる。意地っ張りはもう卒業するんだな。その方が可愛いぜ？」

「なっ……！」

「あと……そうだな」

俺は言うべきかどうか迷つたが、考えた末に口を開いた。

「あなたの兄貴は帰ってくるよ。きつと、近いうちに」

「えっ……」

「だから、うん。……もう無茶すんな」

結局、言いたかつたのはそれだけだ。相変わらず俺は無駄に口数が多くて困る。もっと端的に、スパツと言えないもんかね？

「御堂君……」

「あーあとそれだ。仲間なんだから、他人行儀な呼び方してくれるな。セツでいい」

つか、俺だけ名字呼びとか、めちゃくちやさびしいんだからな！

「そうね。そうするわ。改めてよろしく、セツ」

「おう……って、もう大丈夫そうなら降りろ」

正直アテナとクイーンの視線が痛い。

「あら、女子寮まで運んでくれるんじゃないの？ 騎士クン？」

「お前な……」

「いいじゃない。仲間……なんでしょ？」

「……おう」

溜息を一つ。しょうがない。正直視線で殺されそうなくらいに針のムシロだが、ここは甘んじて受けることにしよう。だってさ……。

「広い背中……無事よね？ 兄さん……」

無意識のうちに涙まで流されちゃ、下ろすなんて選択、できるわけないだろ？

第九話「あの声が聞きたくて 後編」(後書き)

珍しくシリアス多めな第九話です。……というか、元々僕はシリアスの方が好きなんですが……この小説ではめっちゃくちゃギャグが書きやすかったのでそっちに流れています。

セツが、そろそろその本領(誑し)を発揮し始めました。別に現在明日香をヒロイン化する予定はありませんが、こうしておけば後で明日香のヒロイン化希望が出た時にスムーズにヒロイン入りが出るでしょう。……伏線を堂々とバラす作者。馬鹿ですね。

あと、タイタンのセブンスターフラグもぶち折っておきました。これで一つセブンスターズに空きができる。ふう、また伏線をバラしてやりました。作者は満足です。次回から、制裁タッグデュエルの話になります。予定されていたラストヒロイン、ヤンデレ一直線の娘が登場し、読者さん方の心証を大いに悪くしてくれることですよ(おい)。

それは、ご意見ご感想、お待ちしております。レーネスでした！

第十話「タッグデュエル 災悪の少女」（前書き）

……第、十話、です。これ書いただけで、作者のテンションが最低ランクです……。もはやタッグのヤンデレあり？ のクエスチョンマークは取っ払い、十五禁指定くらいにはすべきと判断。やりすぎか……？

ともかく、十五禁入るレベルの第十話、どうぞ……

第十話「タッグデュエル 災悪の少女」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第十話「制裁タッグデュエル！ 災悪の少女」

あの俺が原作に介入した廃寮の一件の翌日、寮で爆睡していたところを倫理委員会の人に叩き起こされ、廃寮への不法侵入を咎められた。そして原作通り十代と翔の制裁タッグデュエルが決定し、今回は俺とアテナにも同じくタッグデュエルが命じられた。

「誰が先導したのかはもうバレバレなノ〜ネ」

とのことで。まあ確かに一番ノリノリで突入したのは俺だが。

「シニョ〜ルには相手の方から逆指名が来ているノ〜ネ。スンバラシ〜イほどに強いデュエリストなノ〜デ、せいぜい覚悟しておくノ〜ネ」

……逆指名？

俺には特に心当たりがなかったのでアテナの方を見ても、やはり何も知りません、といった顔をするのみである。

首をかしげながら、とりあえずは寝なおすためにアテナと別れ、レッド寮に戻ったのだった。

……その俺がぐっすりと眠っている間に、翔の脱走事件が起こることはすっかり忘れていたわけだがな。

俺の寝ている間にすべて丸く収まつたらしく、翔は帰ってきて十代はカイザー亮さんとのデュエルがどれだけ熱かったかを語ってくれた。……ぬう。俺も見なかったかもしれん。

その後の隼人父乱入事件も無事原作通りに進み、とうとう十代と翔、俺とアテナの制裁タッグデュエルの日が明日に迫っていた。

「セツ、私のデッキはこんな感じで問題ないでしょうか？」

「んー、そうだな。タッグ、ってことならそんなもんか」

俺とアテナは明日のタッグデュエルに向けて互いのデッキをいじりまわしていた。ちなみに、場所は思い切りアテナの部屋。例によってナチュラルに通された。流石俺。

「タッグだと、セツのモンスターがいたらヴァルハラは使えないんでしたっけ？」

「いや、たしか結構変則的で、互いのモンスターは別個のフィールド扱い。例えば、アテナのフィールドにモンスターがいても、俺のフィールドにモンスターがいなければ俺はダイレクトアタックを受ける、みたいな」

現実だとそんなルールではないが、なんでかこのアカデミアだとそんなタッグルールだった。まあヴァルハラが使えないとアテナのデッキは速攻性が落ちるから都合だが。

「で、ライフは共有で8000ですか」

「『アテナ』のバーンでも簡単には倒しきれないな」

「……できれば、私もあんまりバーンで勝利は好きじゃないんですけどね」

「そうか？ あれだって戦術の一つだ。そう気にすることじゃないよ」

むしろ俺は現実じゃそういったデッキばかりだったんだ。そういう意味じゃ、アテナのことを悪く言えるはずもない。

「……ありがとうございます。やっぱり、セツは優しいです」「優しいとか、そういうんじゃないよ」

アテナは無邪気だ。まったく、どうも調子が狂う。まあ、今まで

傍にいた年頃の異性があんなのだけじゃ無理もないか。

「おっとそうだ、ここにこいつを入れてみるといいかもしれん。で、こつちを抜く」

「え、でも……」

「いいか。こいつは……」

「ふわ……な、なるほど。すごいかもしれせん！」

経過は順調。アテナとのタッグデュエルは初めてだが、俺もアテナも使うモンスターは光属性と少数の地属性で共通してる。どちらかと言えば種族統一ならテテユスやアテナが最大限に生きるんだが……。

「まあ、ないものねだりしても仕方なし。それに俺の相棒はお前らだもんな」

『無論ですわ。そう簡単に見限らぬよう』

「お、珍しく機嫌悪くないな。アテナもいるのに」

『……妙に引つかかる言い分ですが。ともかく、わたくしは騎士です。騎士として、共闘は望むところ。個人的な好悪など、連携時の妨げにしかありません』

つまり嫌いは嫌いだが、共闘するとなれば話は別、ということか。『ごうは言っておるが、最初は暴風雨のごとく荒れておったぞい。』

ジャックが苦心の末に説得したのじゃ

「さすがジャック。……で、そのジャックは？」

『体調不良で寝込んでおるわ……主に胃』

「ジャ―ック!？」

精霊でも体調不良になるんだ!? しかも胃。

「つく! お前の犠牲は無駄にはしない! クイーンを決死の想いで宥めてくれたお前の偉業、この俺が必ず役立てて見せる!」

『……随分な言われようですわね。まるでわたくしが聞き分けのない頑固者ではありませんか』

『まーさしくそうじゃろがい』

「ん。じゃあそろそろ戻るわ。また明日な」

「はい。おやすみなさいセツ」
そうして、その日は女子寮を後にした。

「……っは!? よ、よく考えたらまたセツが女子寮にいました!」
パジャマ着用さあ寝るぞ、と布団に入ったところで、アテナはようやく気付いたそうなの。

翌朝、俺たちはタッグデュエルの行われるデュエル会場へと赴いていた。

「ではこれより、タッグデュエルを始めるノ〜ネ!」
クロノス先生の言葉で、俺たちの制裁を賭けたタッグデュエルが始まった。

原作通り、十代たちの相手は迷宮兄弟。俺たちは……。

「それでは、入ってくるノ〜ネ」

クロノス先生の視線の先には一人の女性。その姿は……。

『あ、あいつは……!』

シャルナが戦慄している。それもそうだろう。なぜならそこにいたのは紛れもなく……。

『ルイン……!』

『破滅の女神ルイン』疑いようもなくそいつは『終焉の王デミス』と対をなす、レベル8の儀式モンスター。その精霊。

「おい……あれってルインじゃないか?」

「ああ……そう見えるけど」

周囲も戸惑っている。その様子をぐるりと一瞥したルインは、

「コスプレです」

などとのたまった。

「なるほど、コスプレか」

「見れば見るほどそっくりだ」

「いい出来をしている」

「うおいつ!? お前ら簡単に納得しすぎだろ!? もうちよっと

疑えよ! 大体……。

「あの……クロナス先生、もう一人は……」

俺がそう問いかけた時、首筋にゾクリとした感覚が。

「ひっ!」

「さだめならここよ。おにいちゃん」

いつの間に背後まで近付いてきたのか、一人の少女が俺に後ろから抱きつき、首筋を舐め上げた。そのままその手が俺の懐に……つて!

「運命!?!」

全力でそいつを振り払い、跳び退る。

「あん。どうして逃げちゃうの? おにいちゃん」

そこで妖艶に唇を舐めるその女は、紛れもなく俺の妹の御堂運命。その俺を見る恍惚とした表情は、どうしたって見間違えようがない。

「ん……ああ、はふ。久しぶりのお兄ちゃん分補給。……ちよつとさだめは控室に戻るね? だいじょうぶ。この感じなら五分で済むよ」

「何がだ!?!」

「ナニが。お兄ちゃんも来る? 大歓迎!」

「少し黙れ変態」

「聞いたのはお兄ちゃんなのに」

「もっと常識的な答えを期待したんだ」

「これ以上ない程に常識的だったよ?」

「お前の常識は世間一般の非常識だ」

不本意ながら、この類の会話が懐かしい。

「ああ……この容赦ないツッコミ、イイわあ……」

「ゾクゾクするな。ましてビクビクするな」

「ごめん。ちょっと下が大変なことになったから戻って着替えてくるね」

「少しは恥じらえ性的倒錯者」

「お兄ちゃんからの罵倒は麻薬のよう。なんだかまたきそう」

「もういいから控室に戻って賢者モードになって来い。じやなきやロクに話せもない」

「うん……想像以上に昂っちゃったから、十分は頂戴ね？」

「できればそのまま帰ってくれば尚良し」

「それはだ〜め」

やりたい放題やって、さだめは控室に一時退室して行った。

『……………』

む、無言だ。近くにいたアテナは元より、クロノス先生たちすらも無言。い、いたたまれない。

「あ、あの……セツ？」

結局、一番早く復活したのはアテナだった。一番近かった分、衝撃もかかったたろうに、大分早い復活だ。

「い、今は……」

「……不肖の……本当に不肖ながら、俺の妹だ。認めたく、ないが」「さだめも認めたくない。残酷だよね？ さだめたちが決して結ばれないなんて。おんなじ気持ちでいたなんて、さだめ感激！」

「うおあっ!?!」

気付けばまたもさだめが俺に背後から抱きついてた。

「控室に戻るんじゃないのか!?!」

「さだめもびつくり。まさか五分で八回なんて……流石に、お兄ちゃん断ちが数ヶ月も続いただけはあったよ」

早い！ ではなく！

「何度も言つが唐突に後ろから抱き締めるな気配を消すな息を荒げるな!」

「ああ……だめ。お兄ちゃん断ちが長すぎて、賢者モードが長続きしないよう……」

「俺の股間に手を伸ばすなああああつ!!」

渾身の力で振り払う。が、一体どんな吸着力かさだめは俺に絡みついたらま離れない。

「こうして後ろから組みついていると……お兄ちゃんを犯してるみたいで……ああ、エエエエクスタシイイイー!!」

「離れる常時モラルハザード女!」

「ふう〜」

「ひああつ! 息を吹きかけるな!」

「お兄ちゃんの弱点は開発済み。後は乳首で腰砕け」

「ぎゃあああああ!?!」

「せ、セツから離れてください!」

「あ?」

ガラ悪い! それまでのみつともなく垂れ下がった眼は瞬時にギリギリと吊り上がり、邪気すらも伴ってアテナを直撃した。

「ひうつ!?!」

一瞬でアテナが涙目に。……腰を抜かさないだけ根性あるよ。こいつは睨みだけで本職のヤーさんの頭失禁させた女だからな。

「お兄ちゃんとの前戯を邪魔するとか……何なの? 死ぬの?」

前戯言つなりアルシスター。

『な、何こいつ……禍々しさが尋常じゃないんだけど……』

シャルナまで引いてるし。

「相変わらずプレツシャーは地獄の閻魔以上だな」

「ああんそんなこと言わないで。お兄ちゃんの前では常に天使でいたいのに」

「俺の前だと淫魔だよ!」

「そんな……それほどにお兄ちゃんがさだめに欲情してたなんて……このさだめ、一生の不覚! こんなことならもつと早くヤツとけ

ば……」

「都合のいい解釈をするな! そして指をわきわきさせるな首筋に添えるな懐に手をつ突っ込むなああ!」

「カリッ」

「痛っ!？」

首筋にかみつかれ、血が流れる。それを運命は一心不乱に吸い続ける。

「あああ……甘露」

「吸血鬼か!？」

「お兄ちゃん限定で」

「ぎゃああああああっ!？」

こ、これだから! これだから会いたくなかったのに! こつちの世界に来てまでなんでこいつに苦しめられなきゃ……ちよつと待て。

「……さだめ、ちよつと離れる」

「ヤ」

一文字で拒絶された。

「……特別にそのままでもいい。質問に答える」

「今日は安全日」

「黙れ腐れシスター。そうじゃない。お前は……お前か? この世界の」

「んふふ。今晚約束してくれたら答えをあげるう」

「……その言葉で確信した。お前、『現実』のさだめだな」

「当り前でしょ。別世界のお兄ちゃんなら別人も同じ。体は疼かないし欲情もしない。こんなに体が熱くなるのはさだめのお兄ちゃんただ一人」

理由は全くあれだが……こいつは、こいつも異世界トリップしてきた俺の妹なのか。なるほど甚だ不本意だが、こいつなら別世界の俺かどうか一目で判断付けても違和感がない。

「アニメの世界に現実からトリップしてきた兄妹二人。張りぼての世界で唯一人間の肉親との情事に溺れる……すてき」

「……ツッコミどころが多々あるどころかツッコミどころだけで構成されたセリフだが……これだけは許せん。ここにいる人たちは張

りぼてなんかじゃない。皆生きてる人間だ」

俺の声に怒りが籠る。それを感じたのか、さだめもまた平坦な声
と表情になってぼそぼそと俺の耳元で呟く。

「興味ない。元々さだめにとって兄さん以外はカメムシ以下の存在
意義しかもたないから。いるだけで世界が臭くなる。兄さんとさだ
めの楽園エデンに湧ユいてる汚らしい蛆ユよ。踏フみつぶしても踏フみつぶしても
湧ユいてくる。その女みたいに楽園エデンの主じゆに擦スり寄ヨってくるのはもっ
と最悪。踏フみつぶして焼きつくして滅メぼしつくす。それでもまだ湧
いてくる。どうして蛆ユって絶滅ケツメツしないの？ 世界には、さだめと兄
さんだけでいいのに」

さだめは、やっぱり全然変わっていなかった。気分がハイなら所
構カわず俺に欲情ヨクセイし、ローなら全てを呪ノい蔑ヒみ罵倒バツトウする。ニユートラ
ルじゃないだけまだマシか。

「聞キいてるよ？ あの蛆ユ、兄さんに告白コトバシしたんだって？ 蛆ユの分際
でよくもまあ。ちょっと目を離リしたらこれだもの。まるで兄さんっ
て誘蛾灯ユウカトウね。それも周りからは清楚セイジョウで可憐コレンとか言イわれてるのばっか
り引き寄ヨせる。最悪」

俺はその言葉を聞いてピンと来た。俺は現実で一度も告白コトバシされた
ことがない。モテないからだとずっと思オモっていたが、今のこいつの
言葉から察サツするに……。

「お前、まさか……」

「でもその分業ブンギョウではあったな。そんな箱入りお嬢様おぢやうさまみたいな、ち
よっと潰つぶしてやればすぐコワレちゃうし。ああ別にヘンな男おとこに売ウり
とばしたりはしてないよ。面倒めんどうだったし、適当ていとうに闇討やみうちちしてゴミ捨
て場に捨てたし。その後どうなったのかは知しったこっちゃないけど」
こいつが俺に近ちかづく前に潰つぶしてたのか。こいつのことだ。きつと
自分の正体せいだいを悟さとらせるなんてことしていない。だがもちろん、そう
いう問題もんだいじゃない。

「おまえ、どこまで……」

「言ったでしょ？ 兄さん以外は蛆ユ同然どうぜん。兄さん、蛆ユを見たら気持

の。両親だって私には異形の怪物にしか思えない」

「まずい……一人称が『私』になった。ニュートラルだ。ハイでもローでもない。愛欲に狂っても破滅に囚われてもいない。でもその両方に囚われ狂った最悪のモード！」

「ねえ兄さあん……私、また我慢できなくなりそうなお……腕、腕一本でいいから……私にちょうだい……」

「ざけんな。誰が進んで腕折られるかよ」

ガリイツ！！

「がっ！？」

「は、ああ……兄さんの血。私が……兄さんをキレイにデコレーションして上げるから……」

っ！ もうやばい。限界ラインを突破した！ 俺は無駄と思いつつも腕を振り回して振り払おうとする。

「動くな！！」

「ぐあっ！」

それまでしがみついていたさだめの四肢がまるで万力のように俺を締め付けてくる。

「さ、だめ……やめる……」

どんな力が加わっているのか、抵抗できず、悲鳴を上げる体に苦悶の表情を浮かべる俺を見て恍惚と上気した頬を見せるさだめ。ゆっくりと俺の体の拘束を緩めていく。

「くふふふっ！ あっははははははははっ！ うん。物足りないけど許してあげるね。これからデュエルだもんね。さだめは負けないよ！ おにーちゃん！」

さだめは纏っていた暗黒物質ダイク・マターなオーラを消し去り、普通の、無邪気な少女といった笑顔を浮かべた。にっこりと笑って『破滅の女神ルイン』の下へと走り去っていく。

俺は深く深く息を吐き、全身から脂汗を流してへたり込んだ。ハンカチで汗をふき、首筋に流れている血を拭き取る。

「せ……ッ。こ、これ、ば、ばんそう……」

目に涙をためてガクガクと震えながらも必死で俺に絆創膏を手渡してくれるアテナ。……正直、あれでまともに動けるとは思わなかったが助かった。

「……よく動けたな。大分根性いるぞ」

「……あう」

とはいえ、顔色は蒼白で今にも吐きそうなくらいだ。……一番近くでのオーラを受けていたのに。観客席の奴らですら吐いたり気絶したりしてる中、アテナは危ういとはいえ意識を保っている。

会場の空気はいまだかつてないほどのローテンション。それでもそんな中、早々に気絶したクロノス先生の代わりに鮫島校長先生が十代と翔VS迷宮兄弟のデュエル開始を宣言したのだった。

第十話「タッグデュエル 災悪の少女」（後書き）

気分を害した方、すみませんでした。正直やりすぎたかもしれませんが、妹で、変態の色情狂かと思えば完全ヤンデレです。作者の中のヤンデレを、まったく何の規制もなしに書くところなるっばいです……。自分で書いという今日眠りたくないです。途中からこれが遊戯王のFFだって忘れかけてた作者がいます。

では……微妙に反応が怖いですが感想、お待ちしております……。レーネスでした……。

第十一話「タッグデュエル 終焉を告げる少女」(前書き)

第十一話です。今回は前回に比べてヤンデレ薄め。多分。

相変わらずギャグはほぼなし。ネタも控えめと、最近はこちらと作品の形式すら変わってきましたが、多分そろそろ戻るか。次の話終わった辺りからいつものギャグ成分を増量予定。では、今回は全編通してデュエルです。どうぞ！

基本的には衝動は俺にしかこない。が、裏だと見境なし。周囲への被害は災害に匹敵する（俺調べ）。

「さつさと上がりなさい！　そして堕ちろ小娘え！」
「ひいつ！？」

さだめ（裏）の殺意の波動を受け、さしものアテナも一瞬意識が飛んだらしく、ふらりとよろめいた。

……無理もない。あの状態でのプレッシャー直撃は暗黒物質オーラ（濃縮還元1000%）の大剣による一刀両断みたいなもんだ。

「せ、セツ……か、帰りたくなってきました……」

「アテナ……そいつはこの場にいる誰もが思っていることだ。下手に口に出すと大混乱が起きるぞ」

主に、逃げようと出口に殺到する人で。死者が出ることもあり得る（経験あり）。

というか、ここまでくると俺も若干泣きそうだ。俺が泣いたらさだめが狂喜して被害が拡大するだけなので必死に込み上げてくる涙をとどめる。

「アテナ、さつさとデュエルモードに入っちまえ。そうすればまだ耐えられるだろ」

「……力を貸して。私のデッキ！」

うし。若干厨二チックだが落ち着いたので良し。まだ多少震えてるが。

「……」

「あつ！」

マズイ！　裏さだめの進路上に気絶したまま放置されたクロノス先生が！

「邪魔よ蛆へドロが」

「ひっ！？」

さだめは横たわるクロノス先生を一瞥し、右足を振りぬいて蹴り飛ばした。クロノス先生は2、3度跳ねてから壁に叩きつけられた。「な、なんてことを……」

アテナたちは戦慄しているが、俺はむしろ安堵の息を吐く。

「良かった……機嫌は最低ってわけじゃなさそうだ……」

「あれですか!？」

「あいつの機嫌が最悪なら、顔面と股間を徹底的にけたぐり回し、
鳩尾にスタンピング入れてから空中コンボ決めて蹴り飛ばす」

裏の奴なら本気でやりかねない。

「……始めるよ。兄貴」

「……ああ。まあ、それが今回の目的なんだしな」

「サポートしなさい。破滅の」

「……わかった」

「行くぞ、アテナ。怯えることはない」

「……んっ! はい!」

アテナは首を振り、恐怖を払い落す。

『デュエル!!』

「わた……私のターン!!」ふあっ!？」

にやる! 強引に先攻撃いやがった!

「手札から『魔力儉約術』発動!

『魔力儉約術』!？ 魔法カードを発動する際のライフコストを
カットする永続魔法! こいつがあれを使っつてことは……。

「おいこらまさかそのデッキ……」

「アハハッ! わかる? わかるう? アハッそう、私はこれを使

うよ! 『終焉のカウントダウン』!」

「アテナ!」

「え!？」

「『緑光の宣告者』は!？」

「す、すみません! ないです!」

「マジか……」

一ターン目でパーミッション出来るとしたらそれしか道はなかつ
たんだが……。

「効果は知ってるよねえ? だってこれってば兄貴の常套手段だも

ん！」

「……………ああ、そうだよ」

『終焉のカウントダウン』ライフを2000支払う代わりに各ターンのエンドフェイズにカウントが一つずつ溜まっていき、20カウントで勝利を決める特殊勝利カード。一ターン目には誰も攻撃できない特殊タッグルール採用のここじゃ、めちゃくちゃに危険なカード。

「ターン終了！ さあ、なんでも出してきて。完封してあげるからあ！」

カウント1

「……………俺のターン！ ドロー！」

さだめのターンが終了したら、次は正面にいる俺にターンが回ってくる。俺の手札はそこそこ速攻性があるが、一ターン目には攻撃できない。

「手札から、『クイーンズ・ナイト』を攻撃表示で召喚！ カードを二枚セット！ ターンエンドだ！」

『クイーンズ・ナイト』ATK1500

「カウントダウン」

カウント2

「ぐ……………」

まだ二つ目。とはいえ、『終焉のカウントダウン』はその特性上、途中で効果をなくすことができない。その上タッグだと、実質的に自分のターンは5回しか回っては来ない。そして一ターン目は攻撃できない。実質さだめは俺の攻撃を四ターン防ぎきれば勝利が確定。……………こりゃキツイな。

「私のターン」

ルインがあくまで冷静にカードをドロウする。ルインが操る以上、デッキは……………。

「私は『マンジユ・ゴッド』を攻撃表示で召喚。効果で『高等儀式術』を手札に加え、ターンエンド」

『マンジユ・ゴツド』 ATK1400

カウント3

やっぱり。儀式モンスター主軸か。

「私のターン。ドロー！」

アテナがターン開始を宣言するも、さだめは全くそちらの方を見向きもしない。……当然だろうな。さだめにとってはアテナも『蛆』でしかないんだ。態々蛆に目は向けない、か。徹底してるよ。お前は。

「私は手札から、『ヘカテリス』を二枚発動！ 『神の居城 ヴアルハラ』を手札に二枚！」

ぬ。ヘカテリスが被ったか。まあそういうこともある。デッキ圧縮と墓地肥しにはなるのだから良しとしよう。

「手札から『神の居城 ヴアルハラ』の効果発動！ 『光神テテュス』を攻撃表示で特殊召喚！ さらにモンスターをセット！ ターン終了です！」

『光神テテュス』 ATK2400

カウント4

「……ふうん。天使、かあ」

「っ！ な、何か？」

「別に。兄貴に擦り寄る薄汚い蛆のくせして、随分綺麗な種族を使うのね、って思っで。『ワーム』とかの方がお似合いよあなた」

「っ！！」

アテナが唇を噛みしめる。そしてそんなアテナに、もうさだめは興味を失ったようだ。

「ドロー。カードを一枚セット。終了」

カウント5

一枚伏せただけ、か。ってことはあれは何らかの防御カード。そうは行くかよ！

「俺のターン！ ドロー！ 俺は手札から、魔法カード『撲滅の使徒』を発動！ さだめのリバーカードを撲滅する！」

全てが消え去ったことで機嫌が良さそうなさだめを横目で見ながら、俺は戦慄していた。

やっぱり間違いない！ ルインだからてっきり自分中心のデッキ構成をしてくるとばかり思っていた！ 違う、こいつのデッキは……。

「私は墓地の『甲虫装甲騎士』二体を取り除き、『デビルドージャー』を特殊召喚」

『デビルドージャー』 ATK2800

ルインのフィールドに、見上げるほどに巨大なムカデが召喚される。

これで決定だ……ルインのデッキは『デミスドージャー』！ 下手をすればワンターンキルも可能な強力デッキ！

「あ、ルイン！ 兄貴に攻撃するより、そっちの身の程知らずの蛆を潰してらっしゃい」

「……わかった。二体のモンスターでダイレクトアタック」

「きゃああああああつ！？」

「アテナ！」

全てが吹き飛んで茫然としていたアテナに、上級モンスター二匹の攻撃が容赦なく襲いかかる。

セツ&アテナLP3800

「カードを一枚セット。ターン終了」

カウント7

「アテナ！ おいさだめ、なんでアテナを……」

「ん？ なんで兄貴が怒るのぉ？ タッグなんだから、どっちを攻撃しようが自由でしょ？」

「……」

そう、それはそうだ。だが、それでも悪意を持って攻撃対象を選択するのはいただけない。

「だ、大丈夫です。ちよつとびっくりしただけですから」

「アテナ……」

「正直、驚きました。ロックしてくるだけかと思ったら、こんな高火力もあるなんて……」

「……多分、さだめのデッキには入ってない。あいつはビートを殆ど使わないしな」

「兄貴と一緒によね」

「っ！」

さだめが余計な茶々を入れる。

「さつきから、どういう意味です?」

アテナの問いかけに、さだめが嫌らしい笑みを浮かべる。

「なに? 聞いてなかったの蛆。特別よ。教えてあげる。私の兄貴、御堂切はね。元々フルバインデッキや私と同じ終焉ロックを主軸にしたの。そりゃあもう、私なんかメじゃないくらい嫌らしいデッキ構成してたんだから」

「……え?」

アテナが茫然とした表情でこちらを見つめる。それは会場の人間たちも一緒だ。……ここじゃ三銃士のビートしか使ってたから、まさか俺がそんなデッキ使いたったとは思っていなかったのだろっ。

「そう、なんですか?」

「……ああ。そうだよ。俺はフルバイン使いだ。相手に嫌がらせみたいな邪魔しながらバインで焼き尽くすのが俺の得意技だった」

「だから驚いちゃった。何を血迷ったのか兄貴、いきなりそんなくだらないビートデッキ使ってるんだもの。どんな心変わり?」

「……違う。ただ俺は、ビートの方が自分も相手も楽しめると思っただけだ」

「相手も? アハハハハハハハハッ! ヘンなこと言うね兄貴。相手を楽しませてどうするの? デュエルは勝つから楽しいんじゃない。相手に何にもさせないで、じわじわじわじわ殺すの。その方が何十倍も愉快よ? そうでしょう? 兄さん?」

「……そうかよ」

ニユートラルに入ったらしい。破壊衝動をまき散らす裏にくらべりやマシ。けど俺への被害は十割増し。

「そう考えれば、デミスの効果はクライじゃないなあ。相手のフィールドがどんなに整っていようとお構いなしに全部まとめて無に帰す。粉々のぐちゃぐちゃのボロボロにするの。ああ……イイ」

そういつて恍惚とした表情を浮かべる。

さだめの考えを、俺は間違ってるとは言えない。俺も同じだったんだから。やっぱりなんだかんだで俺たちは兄妹なんだ。お前のその極悪な精神が理解できるんだから。心の片隅で、確かに……って、思っちまうんだから。

「『何もさせずに勝つ』これは私が、お兄ちゃんから教わったんだよ？ お兄ちゃんに言い寄ろうとしてた女たちも、何もさせずにコワしたよ」

……結局、こいつの狂気にターボかけさせたのは俺、か。

「なら、俺が止めるしかないな」

「……いえ、ここは私に任せてください」

「アテナ？」

「……私には、セツが悪かったとは、どうしても思えません。セツがさだめさんを止めると言うのなら、私も手伝います！」

「アテナ……」

「ウウウウ煩い蛆虫！ 兄さんに擦り寄るなあ！ 兄さんを見るな兄さんと話すな兄さんに触れるな穢れが移るウウウウアアア！」

「セツ！ 見ててください！ きつと私は、セツの期待にこたえて見せますから！ 私のターン、ドロー！ 手札から魔法カード『打ち出の小槌』を発動します！」

「！？」

来たか。現実よりも圧倒的に強力なカード！

「このカードと任意の枚数手札をデッキに戻して、新しくカードをドローします！」

アテナは手札を確認し、『打ち出の小槌』を含めた三枚のカードをデッキに戻す。

「ドロー！ 私は手札からヴァルハラを発動！ 『アテナ』を特殊召喚！」

『アテナ』 ATK2600

アテナのフィールドに、自らと同じ名をもつ女神が召喚される。

『ルイン……』

シャルナは、ルインに何か思うところでもあるのか、先ほどからしきりにルインを気にしている。

「更に魔法カード、『死者蘇生』！ 『光神テテユス』を蘇生！」

『光神テテユス』 ATK2400

テテユスが特殊召喚されたことにより、シャルナの持つ杖から光線が走り、さだめたちのライフを減らす。

さだめ&ルイン LP5400

「最後の手札！ 『強欲な壺』！ カードを二枚ドロー！」

さあ……加速開始だ。俺も知ってる。アテナの、テテユスによるドロー加速！

「着いてこれるか？ さだめ！」

「なんで……なんでよ……ディステイニードローとかふざけてる……ふざけてるでしょおっ！？」

「『ジェルエンデュオ』をオープンしてドロー！ 『緑光の宣告者』

ドロー 『紫光の宣告者』ドロー 『オネスト』！ ドロー終了！」

「な、なによ。それじゃまだどうしようも……」

「手札から、『打ち出の小槌』を発動！」

「っ！？ な、あ……」

「手札を戻してカードをドロー！ 『オネスト』ドロー 『緑光の宣告者』ドロー 『虚無の統括者』ドロー 『ムドラ』ドロー！」

アテナのドローは止まらない。相変わらず、とてつもない加速能力だ。似たような『凡骨の意地』と比べて天使限定だが効果モンスターでも関係ない上ドローフェイズじゃなくてもお構いなし。

「『ヘカテリス』ドロー『スケルエンジェル』ドロー『ゾルガ』ドロー！ 手札から『打ち出の小槌』発動！」

「はあ！？」

しかもこの世界の『打ち出の小槌』は減らない。三枚積んでおけばすぐに手札に来る。好きなだけ手札を交換できるのと同じだ。

その後もアテナは次々とカードをドローする。そして手札の枚数が二十枚を突破したところ、ようやくアテナはドローを止める。

「揃いました。セツ。セツの教えてくれたコンボパーツ。全部揃いましたよ！」

「……………やつはお前はすげーよ。アテナ」

半ばあきれ顔でアテナを褒めると、アテナはそれでも首を振った。「いいえ。一枚しか持ってたなかつた『打ち出の小槌』も、セツが二枚くれました。レアカードなのに、頑張つてそろえてくれました」

「あー、いや……………」

一枚はそうだが、もう一枚は例のアンティ時に先輩のデッキに入っていた奴だ。きっとあれもクロノス先生から貰っていたんだろうが……………。

「これからやるコンボも、セツが昨日教えてくれたやつです。セツの、おかげです」

「決まってもいないコンボでもう勝つたような会話してるんじゃないっ！ 兄さんと会話するなあ！ 通じ合うなあ！」

「決まりますよ。このコンボは！ 手札から『大嵐』発動！ リバースカードを破壊！」

「！ チェーン。『和睦の使者』」

「手札から『紫光の宣告者』と『ゾルガ』を捨ててパーミッション！」

ルインの和睦は聞き入れられない。聞き入れてなんてやらない。

「手札から、『光神化』を発動！ 手札の『The splendid VENUS』を攻撃力と守備力を半減して特殊召喚！」

『The splendid VENUS』 ATK2800 1

アテナの場に、強すぎる輝きを持ったヴィーナスが現れる。輝きが強すぎて、今にも燃え尽きてしまいそうだ。

「速攻魔法『地獄の暴走召喚』！ 自分フィールド上に、攻撃力1500以下のモンスターが特殊召喚されたときに発動します！ 自分の手札、デッキ、墓地から同名モンスターを出せるだけ特殊召喚！ 来て！『The splendid VENUS』！」

『The splendid VENUS』 ATK2800

更にフィールドに特殊召喚されるヴィーナスたち。

「わかつてるよな！？ お前たちもフィールドのモンスターを選択して特殊召喚できる！」

「そんな……でも！」

「ああそつだ。お前らのフィールドにいるのは儀式モンスターの『終焉の王デミス』と召喚に制限のある『デビルドージャー』のみ！」

「よつてあなたたちには特殊召喚ができません！」

「例え出来たとしても、『The splendid VENUS』の効果により攻撃力守備力は1500ポイントダウンする！」

「更に『アテナ』の効果！」

さだめ&ルインLP3600

「『アテナ』の特殊効果！『光神化』によって呼び出された『The splendid VENUS』をリリースして再び蘇生召喚！」

さだめ&ルインLP3000

場に、完全な状態の『The splendid VENUS』が三体と『アテナ』そして『光神テュス』が並ぶ。ルインの場にしているのは攻撃力が低下し、たったの900となった『終焉の王デミス』と1300になった『デビルドージャー』。さだめの場に至ってはがら空き。

「そんな……うそ。あり得ない」

「現実だ。アテナは決めてくれたよ。必勝コンボをさ」

「っ！ それがあり得ないのよ！ なんであのタイミングで『打ち出の小槌』だの『強欲な壺』だの引いてくるのよ！？ そんな常識なドロ―があつてたまるか！ 認めない認めない認めないミトメタクナイイイイイイイイイイイイッツツ！！」

「さっきのお返しです。全モンスターで、さだめさんにダイレクトアタック！！」

「茶番、チャバンちゃばんよ！ 全部茶番ンンンン！！」

「ワールドゲーム」
「終焉だ。さだめ」

「ええええい！！」

光を纏った天使たちが、暗黒のオーラをまき散らすさだめに殺到する。

……勝負、有りだ。

さだめ&ルインLP0

第十一話「タッグデュエル 終焉を告げる少女」（後書き）

はい。というわけで、特に何もしてない癖にかっこいいセリフでセツがシメました。しかもネタで。

本来あの世界のタッグにおいては終焉のカウントダウンはとても強いはずです。あの二人のタッグの場合、終焉のカウントダウンが初手であれば迷いなく使い、そうでなくばデミスドージャーのビートで決めるのでしょう。相手としては絶望もんですよ。終焉食らえば守りきられて終わるかもしれないし、終焉なければまた別の終焉に全破壊食らうわけです。が、アテナのコンボはさらに凶悪。あれはもう実質完全なワンキルですよ。光神化+地獄の暴走召喚。ゲームで使ったことがあります。めっちゃくちゃ気持ちよかったです。

次回でしばらくさだめは退場。ルインは時々ふらりと現れます。さだめはそもそもそんなに出番ないです。……ええ、一人で作品の空気感変えられちゃたまりません。そしてついでにさだめが終焉デツキを使うのも多分これきり。今回は全く違う、しかしやっぱりこの世界の空気は読まないデツキを携えて現れるでしょう。

それでは、レーネスでした！

第十二話「恐怖、そして絶望へ」（前書き）

……。え。なんだか作者自身理解できないうちにこの作品がどんどん鬱ストーリー化してきています。タイトルから見てもわかるかもしれませんが。次回の途中からは多少いつものギャグペースが戻ってくるのですが。……。うん。この流れからギャグに戻すとか馬鹿なの？死ぬの？って感じですが、戻ります。戻します。さだめの影響力が想像以上に強すぎたのが原因です。正直、自重しとけばよかった気がします。作風にすら多大な影響を及ぼすヤンデレ、恐るべし。

では、批判も激しそうな第十二話、どうぞ。

第十二話「恐怖、そして絶望へ」

アルカナ、切り札の騎士」

第十二話「恐怖、そして絶望へ」

「……」

「私の、私たちの勝ちです。さだめさん」

アテナが呆然とするさだめに宣言すると、さだめは顔も上げずにつぶやきだした。

「……クソ食らえ」

「え？」

「最低よ。最悪よ。蛆のくせに粹がりやがって。犯し殺し碎き壊し地獄へと引きずり墮としてやる。殺すだけじゃ飽き足りない。細胞の一つ一つ全てに恐怖と絶望を刻みこんで生かし続けておいてやる……朝も昼も夕も夜も正面も背後も上下左右にすらも安息のない疑心暗鬼の日常を送ればいいわ……」

「お、おいさだめ……?」

な、なんだ？ 俺でも見たことないぞ。あれは。まだ他にもモードがあつたのか？

禍々しいのは同じだが、他のモードのようにわめきたてたりはしない。あえて言うならローが一番近い気もするが、ローの時はいわゆる自虐モードみたいなものだからこんなふうな毒々しいまでの邪気は持たない。

「もうお兄さまを諦めるだけじゃ終わらないと知れ小娘。私が飼っ

て上げるわ。堕ちた天使として。希望を奪われ、廃人になって尚も新たな絶望を味あわせて。闇に堕ち、光を失い地の底まで墮とされた貴女のココロをすり潰す。貴女には何物も渡しはしない。全てを奪われ嘆くがいいわ」

「さだめが一言しゃべる度、昏いオーラが濃縮されて、それで尚大きく強くなっていく。俺ですら、最早迂闊に近寄れない。」

「尤も、嘆くココロさえあげはしないのだけど。そう、それがあなた……」

運命、よ

「ぼそぼそと、しかし相変わらず良く通る声で呟くと、さだめは静かに会場を立ち去って行った。」

「ドシャツ、と何かが崩れるような音がして、会場の人間の何割かが崩れ落ちた。アテナたちでさえ腰を抜かしてへたり込んでいる。立っているのは俺と何故かその場に残ったルインのみ。」

「……お前は、行かなくていいのか？」

「……まだ、キミへの挨拶が済んでいない」

「俺？」

「キミも、私に聞きたいことがあるはず。その『アテナ』も」

『……今はシャルナよ』

「そう……何の冗談？」

『偶然よ。奇跡的な、ね』

「そう。いいマスター」

『そういうあんたのマスターは、名状しがたいほどに暗黒ね』

「あの子には一点の曇りもない。ある意味誰より純粹で誰より真っ直ぐな光の神子」

『……昔からだけど、あんたの言葉は理解不能よ』

「……いや」

俺には、ルインの言葉がよくわかる。理解できる。

「さだめは、最初に俺を殺そうとした二歳の頃から何も変わらない。何一つ自分を曲げず、一心に生きている。方向性こそ間違っちゃい

るが、あいつはいい子だよ」

『わかりません。わたくしには、主様の言葉が理解できません。何
度となく殺されかけ、自らの幸せを奪われかけ、今尚主様を苦しめ
続けるあの悪魔を……』

「クイーン！」

『っ！？』

「さだめを……悪魔と呼ぶな。それだけは、何があるつと俺が許さ
ん」

『……も、申し訳……ありません』

俺はあいつを嫌えない。何があっても、俺はあいつを怨めないし
怨まない。

「あいつは俺の妹で……俺は、どこまで行っても、何をされてもあ
いつの兄貴なんだ」

なんとかシヨックから抜け出せたらしい十代たちもこちらに近づ
いてきた。

「なあ、セツ……」

「……なんだ、十代」

「オレ、兄妹とかいないし、よくわかんねえんだけど……」

「ああ」

「あの子は、お前をホントに兄貴として見てるのか？」

「……見るよ。あるいは、俺なんかよりもずっと、な」

だからこそ、あいつはあんなに必死なんだ。誰より純粹で、誰よ
り弱くて、誰より怖がりなあいつだから。

「なら、オレはなにも言わない。きっと、オレじゃわかんないこと
だからな」

「サンキュ、な。十代」

「僕には、分かんないよ……」

「翔……」

「僕はお兄さんが好きだ。心から尊敬してる。だから、同じ兄を持
つ者として、あの子の考えがまったく理解できないんだ……」

……。
「翔は、それでいい。お前は、お前のままで、お兄さんを好いてやれ」

理解できない。それも仕方ない。さだめが異常であることは、俺にだって否定できはしない。

「俺には、彼女のお前に対する想いは、恋愛感情のようなものじゃなく、執着、妄執、何かに縋りつきたい心の表れ、のよう感じたな」

三沢……やっぱりお前は良く見ているよ。

「そうかもな……」

「セツ……失礼だとわかってるけど、聞いわ。貴方達の御両親は……」

「……母さんはベッドの上で生き人形。父さんはワーカホリックで殆ど家に帰らない。まるで、さだめと少しでも顔を合わせたくないように……」

「っ……！」

予想以上に酷い。そんな顔をしている明日香に、気にするなと手を振る。

「……二歳の頃に俺を殺しかけ、五歳くらいまで毎日のように殺された。さだめが小学校に通い始めるころ、あいつは俺から片時も離れようとはしなくなった。殺されそうになることは激減したけど、その分あいつは四六時中俺にべったりで……」

思えば、あの頃が一番平和だった。さだめが自分の想いを恋だと錯覚して、性の意味も知らず、俺にくつついていたあの頃が。

「小学校の高学年くらいからは貞操を狙われ始めたんだ。その辺りからは、今と大差ない」

「その……なんだ、病院とかには……」

「……連れて行っただ。母さんたちがな」

「どう、なっただ？」

「医師と看護師を廃人にして戻ってきたよ。母さんも、それで体調

崩して今もベッドの上さ」

「周りが息を呑むのが感じられた。」

「……周りはもちろん、母さんたちでさえ、あいつを悪魔呼ばわりだ。あいつはずっと……一人ぼっちだ」

「そしてここに来て、キミも傍にはいなかった。ここ数ヶ月の彼女は見るに堪えなかった」

「……ああ」

ルインの言葉には悲しみが籠っていた。

「ずっとキミだけを気にしていて、他の人とのデュエルでは、相手を徹底的に潰して再起不能にしていたあの子に、今回の話」

「俺と、ちゃんとした舞台上、誰にも咎められることなく会える。」

「そういうことか」

「……意外だな。あの様子を見た限りだと、こんな機会なくっても乗り込んできそうだが」

「あいつは、ヘンなところで臆病なんだ。俺から会いに行かなかったから、来るに來られなかった。そんなところだろ」

「多分、デュエルで相手を再起不能にしていたのも俺の耳に自分の噂が届くように、ってことだったんだろ。……結局、気付いてやれなかったが。」

「……やっぱ、俺の所為かな」

「道理でモードが不安定だったわけだ。あいつも、俺と会えて舞い上がってたんだろ。俺に拒絶されないか、不安で仕方なかったんだろ。」

「そこに、その子がいた」

「っ！」

アテナがビクツと反応する。

「やっと心の拠り所であるキミに会えたのに、傍には見知らぬ女の子。それも兄に告白までした、あの子にとっての怨敵」

「わ、わたし……」

「ああ……告白の返事、まだしてなかったっけか……」

「あ……………」

「お、おいセツ。お前まさか……………」

「……………悪い、アテナ。俺がここで、お前の気持ちに答えたら……………あいつは、さだめは支えを失って壊れる。俺は……………あいつのために、お前を振るよ」

「っ！」

アテナが息を呑む。ペタン、と地べたに座り込む。

「セツあなた……………！」

「悪い明日香。お前にあんなこと言った癖に……………やっぱり俺は、肉親の情の方が重いらしい。トモダチとあいつ（妹）、俺は……………さだめを一人にはできない」

「う……………あ」

「……………虫のいい話だけど、さだめだけは、怨まないでやってくれ」
俺は、アテナのすすり泣く声から逃げるように、その場を立ち去った。

「良かったの？」

俺についてきていたらしいルインがそう尋ねてくる。

「良くねえよ」

そんな質問、何の躊躇もなく答えられる。

「良いわけねえだろ……………！」

俺を信じてくれて、助けてくれて、好きだ、って言うてくれた娘を傷つけて……………。

「くそっ！」

壁を殴りつける。ミシリ、と嫌な音がしたが、痛みなんてもう散々さだめで慣れてる。悲鳴一つ上げなかった。

「……………好きだったのね。あの子のこと」

「……………当たり前だろ」

あんなに強くて優しい娘が、あんなに一途に慕ってくれて。

「惚れるに……決まってんじゃねえか」

「……そう」

ルインは何も言わない。慰めも、罵倒も、叱責の言葉も。それがありがたいと同時に苦しかった。

「キミは、これからどうするの？」

「……」

寮には、戻れねえな。

「……なら、精霊界に来るといい。そこでしばらく過ごせばいい」

『貴女……何を！』

「キミならその気になればいくらでも精霊界への扉が開ける。心の整理がつくまで、そちらにいればいい」

『ルイン……！』

「貴女だつてその方が都合いいはず。大好きな主様を、自分の手で癒してあげられるのだから」

『っ……貴様！』

「やめるクイーン」

『主、様』

「どつちにしろ、そこに行くくらいしか今はできない。いいさ。しばらくは会わせる顔もない。いや、一生……かな」

『そんな……ことは……』

「ルイン。お前も意地悪な言い方をするな。クイーンは真に受けやすい」

「そのよう。自重する」

あっさりと非を認め、謝罪する。

「それで、どうすればその精霊界に行けるんだ？」

「キミならどこからでも望めばそこに扉が開く。でも、始めは実際にある扉から行くのがわかりやすくもいいかもしれない」

ああ……温泉か。

「温泉の向こうにその扉はある。とりあえずそこに行く」

「アテナ……」

「うっ、ぐすっ！ うあ……」

「あいつは……セツは貴女が嫌いだから振ったわけじゃない。むしろきつと……」

「そっ、れでも……セツ、にはわ、私よりも、優先するものがっ！
ヒクッ」

「……それは」

「あのバカッ！ これじゃ妹さんの思い通りじゃねえか！」

さだめはアテナに、何も与えはしないと云った。希望を奪い、絶望を味あわせると。奪われて嘆けばいいと。それが、運命さだめだ、と。

「こつなるって、わかつて言っただのかな……あの子」

「例えそうでも、不思議じゃないな」

しばらく泣いて、ようやく少し落ち着いたアテナが口を開く。

「……きつと、セツにも分かっていたはずです。さだめさんの真意は」

「そっ……かもな」

「ずっと告白の、答えをもらえなかったのも、きつと……」

「アテナ、今日は女子寮に帰りましょう？ 帰って、休んだ方がいいわ」

「そうだな。天上院くんも付いていてあげてくれ。妹君が何か仕掛けてこないともわからない。俺たちが女子寮に行くわけにもいかな
いし……」

「……セツだったら、きつと何の違和感もなく入れるんでしょうね
……」

昨日だって、アテナは自分の部屋で、いつの間にか来ていたセツと一緒にデッキを組んだのだ。そのことを思い出し、また心が沈む。
「……」

そして意気消沈したまま、アテナは明日香に連れられて女子寮へと戻って行った。

「……正直、俺には妹君もセツも許し難い。アテナの心を弄んだと言われても否定できない」

「……けど、セツは妹さんを怨まないでくれって、言ってたぜ」

「……ああ。妹ではなく、自分を怨め、と。そういう意味なんだろうな」

「どこまで……どこまであの子はセツ君の人生を蝕むつもりだよ……妹でしょ!?!」

「わからない……わからないが……あの二人は、どうも普通じゃない。妹君だけでなく、セツもまた」

退学が取り消された、という事実があるにも拘わらず、この場で明るい表情の人間は誰ひとり存在しなかった。

「……おい、ルイン」

「なに?」

「温泉に扉があるのはわかった。わかったけどな……」

俺は裸にバスタオル一枚という少々青少年には刺激の強すぎる格好で温泉に浸かっているルインを、極力見ないようにしながら怒鳴った。

「別に浸かることないだろ!? さつさと精霊界に行けばいいだろうが!」

「温泉があるのだから、浸かる。何も不思議ではない」

「壮絶な葛藤と逡巡の果てに女を振って傷心の男が、その日の内に別の女と混浴とかねえよ! ただの最低男じゃないか!」

「それでなくとも最低」

「ぐはっ!?!?」

否定できない。

「だったらそのまま最低男の街道をひた走ればいい。鬼畜ルート乙

「断固として断る」

「そう。じゃ、こっち」

「……」

や、やりづらい。今までいなかったタイプだ。反応が予測できない。

「ここか？」

「正直位置はどうでもいい。キミがそうだと思ったならそれでよし
ルインのよくわからない回答と共に、俺の体は光の中に呑み込まれていった。

第十二話「恐怖、そして絶望へ」（後書き）

セツ死ねー！ との声が聞こえてきそうな第十二話です。おのれセツ…… あんない子を泣かせおつて…… はい。すみません。書いたのは僕です。あつ、石を投げないで！

ある意味、第一部のターニングポイントのような話です。ここら辺から、もうしばらくは完全に原作の面影がなくなります。ついでに、精霊界についてはほぼ完全にオリジナル設定。原作の精霊界とは色々の違い、というか別物な感じになります。

そしてアンケート。セツの精霊界からの帰還時期です。物語的にはセブンスターズとの戦いくらいで帰るのが一番いいんですが、そうするとレイフラグは完全に消滅すると言っていいでしょう。むしろ出番からしてほとんどなくなる可能性大。レイファンの方には申し訳ない。が、その代わりにレイは原作通り十代フラグが立ちますので、十代×レイが良ければそちらの方がいいでしょう。レイの前に帰して、セツにレイフラグを立てる場合、ちょっと予定を崩す必要が出てくるので色々やっかい。それでもセツにレイフラグを立ててほしければそちらで。読者様の希望が聞きたいです。要約すると、レイをどうするか、です。

それでは、ご協力をお願いいたします。レーネスでした！

第十三話「精霊界 沈む心」（前書き）

超速アップ！ 昨日までの話が重たく暗い奴ばかりだったので、気を紛らわすために書いてたら速攻できあがりました。というわけで、お久しぶりのギャグです。タイトルと前半こそシリアスですが、それが終われば後はギャグ一直線な内容になっておりますのでこれまでの暗い雰囲気消し飛ばしていけたらなあと思います！ ではどうぞ！

第十三話「精霊界 沈む心」

アルカナへ切り札の騎士へ

第十三話「精霊界 沈む心」

俺が目を開くと、そこに広がっていたのは滅びた街。生命の息吹を感じさせないその光景に、俺は何故か心が落ち着くのを感じた。

「……ここはもう終わってしまった街。私が管理していた、そしてデミス王の誕生と共に滅びた世界」

「エンド・オブ・ザ・ワールド……か」

「まさかここに出るとは思わなかった」

「え？ お前がここを選んだんじゃないのか？」

「扉を開いたのは、厳密にはキミ。ここを選んだのも、キミ」

「そう、だったのか」

ルインが一緒だから、俺の意識が潜在的にここを選択したのかも
しれない。

「……違う」

「え？」

「ここはきつと、キミの心象風景に最も近い地。ここを選んだのは、
キミのココロ」

そう話すルインの顔が悲痛に歪んでいるのを見て、俺は周囲を改
めて見渡す。

滅びた街。倒壊した家屋。風化した頭骨。そこには、そのような
息吹も感じることができなかった。

「これが……俺の」

「心象風景。キミのココロ。もうとっくの昔に傷つき壊れた、キミの精神」

「さっきのルイン達の例で言えば、俺の心はさだめが生まれた時に壊れた、ってことか」

「私に言わせれば、あの子のなんかより、キミの方がよっぽど病んでいる。あの子と十年以上も一緒にいて、今も明るく何事も無いように毎日を過ごしている、キミの方が」

「……俺の元気はから元気だよ。常に、な」

「……から元気で、あそこまで楽しそうにできるもの？」

「簡単だ。自分を騙してしまえばいい。今の俺はすごく楽しいんだって。幸せでしようがないんだって」

飯面ヘルソナを被り続けていれば、何時かそれが本当の顔になると信じて

「やっぱり、壊れてる」

「……いいさ。それでさだめの支えになれる。十分だ」

「何故、そこまでしてあの子を？」

「妹だからだ。俺にとっての唯一無二、絶対不可欠な肉親だからだ。おかしいか」

「その大事な肉親に、キミは殺されかかってる」

「ただの、じゃれあいさ」

「それは、紛れもなくキミの狂気」

「……言っただろ。一途にずっと慕ってくれて、惚れないわけないって」

「キミは……」

「ルインの言った通り、さだめは純粹で、曇りない瞳で、ずっと俺を、俺だけを見てきたんだ。何年も、何年も、ずっと、一途に」

俺は覚えている。あいつの、さだめの笑顔。今の歪んだ笑いじゃない、綺麗な笑顔。

「だから俺は……」

「自分を壊して、自分を騙して、支え続けるの？ その果てに待つ

のが、無残な最期でも？」

「さあ、な。さだめが二歳の頃から変わらずに、俺を慕い続けていたように、俺もまた、そのころからあいつの『支え』であり続けた。もう、他に思い付かない」

思い付いても、選べない。

「砕け散ったガラスのココロ。その破片でまたココロを傷つけて……見てられない」

「……俺も同じだ。見てられないだ。見たくないんだ。壊れたさだめを。俺の、妹を」

おかしいかもしれない。壊れているかもしれない。狂っているかもしれない。

「でも俺は、それを肯定する」

「清も濁も、併せて呑み乾す。キミは、聖者にでもなるつもり？」

「何にもなる気はない。ただ、妹を護る兄でしかない」

変だな。いつもみたいなの^{ベルソナ}仮面が被れない。素のままの自分でしか
いられない。

「それは当然。ここはいわば、キミの心が露出した地。そんなところ
にいれば、キミが^{ベルソナ}仮面を被れるはずもない」

困った場所だ。素のままの俺なんて、ただの狂って壊れたシスコ
ン兄貴でしかない。

「ここを出よう。素の俺ではいたくない」

「清濁呑み乾すキミが、自分だけは受け入れられないのね」

「それができたら……揺るぎはしないさ」

そうさ。それができたら……どうなるんだろうな。アテナの告白
を素直に受け入れたか、さだめのためにきっぱり断って、ああして
沈みもしなかつたらうにな。

滅びた街を出て、しばらく進む。その頃になって、俺はようやく

いつもの自分を取り戻していた。

「しかし、精霊界って結構混沌としてるなあ……」

ハッピーラヴァーがふよふよと飛んで行ったりしたかと思えば、すぐ近くでスカゴブリンが昼寝をしていたりする。道の向こうは昼で、反対側は夜だったりする。

「様々な精霊が混濁して、世界に整合性が取れていない。平和は平和。でも秩序なし」

「なるほどなあ……で、これからどこに向かうんだ？」

「王都。キミのお姫様たちが待つてる」

「クイーンたちか。そこまでどれくらいあるんだ？」

「……さあ？」

「さあってお前……」

「さっきも言った。混濁してる。現在地が不透明」

「それじゃ辿りつけなくね？」

「タクシーを使う」

「タクシーあんの！？ いや待て、タクシーと見せかけてツクシーだったりするオチはないだろうな？」

「流石にそれはない」

考えてはいたらしい。微妙に視線を逸らすルイン。

ルインがなんか魔法陣っぽいのを地面に描くと、そこから一体のモンスターが現れた。

「よう、お呼びかい美人の姉さん？」

ルインにそう気軽に声をかけるタクシー（仮）……っっていうか！

「サイクロイドだよなあ！ これどう見ても！」

「なんだいなんだい文句があるなら乗せないぜ兄さん。およ？ っつーか人間サマじゃねーか。こりゃ驚いた。珍しいお客さんだ」

「……なあ、タクシーじゃなかったのか？」

「タクシー」

ルインがサイクロイドを指差す。サイクロイドがぐっ！ とサムズアップした。

「えー」

「精霊界ではこれが一般的」

「え、精霊界ってサイクロイドが一般的な交通手段なの？ 何なの？ 死ぬの？」

「ほらほら、さっさと乗った乗った！ おれっちも暇じゃないんだから、早く目的地を言ってくれ」

「王都まで」

「オーケーわかった任せな」

「早く乗る」

待った。これ一台しかないんだが。

「二人乗り。経費節約」

「おれっちなら大丈夫だ！ これでもその昔、岩石の巨兵を二人乗りで送ったことがあるってもっぱらの評判さ！」

「乗ったの！？ あれが二つ！？」

物理的にあり得ん。

まあとにかく乗らなければ話は始まらないのでルインと二人乗りでまたがる。俺が前だ。

「おっ！ いいケツしてるねえ人間さん」

「車体の変更を要求する！ 俺こいつに乗りたくない！」

なんかこいつ怖いこと言った！ 下手したらさだめより怖いこと言った！

「冗談、冗談だって。さっ、早くペダルを漕いでくれよ」

「……」

え？ 漕ぐの？

「なぐに当り前のこと聞いてるんだい。自転車は漕がなきゃ動かないよー！」

そ、そりゃそうだが……これはタクシーじゃなく普通のレンタサイクルなのでは……。

「出発」

「お、おうー！」

それからの道のりは困難を極めた。

「お、おい！　なんか異常にペダルの足回りが悪いんだが！？」

「あゝすまんね。最近利用者少なかったからすっかり錆びついちまったらしい」

「ちゃんと整備してから来いよ！」

「ぐっ……坂道は……流石にキツイ」

「ほれほれ、もっときりきり漕げてばよ。こんな速度じゃ欠伸が出らあ」

「フアイトーいっぱーっ」

「主にペダルが重いのお前らの所為なんだが！？」

「おっ！　兄さん、ガソリンスタンドだ。そろそろガス欠だから寄っててくれ」

「お前完璧手動だろ！？　むしろガソリンつかエネルギー使ってる俺だからな！？」

「ひゃっほーう！　坂道だ！　ワイリー！」

「バカ野郎！？　何勝手にワイリー決めてんだ！　落ちるっ、落ちるって！」

「曲がり角さいこおー！　いえーい！」

「ドリフトすんなあー！　ていうかなことできんなら自分で動けこのポンコツー！！」

エトセトラエトセトラ。

基本的に道案内しかしない癖に態度だけ妙に偉そうなサイクロイドと一人だけ後ろで涼しい顔で煽るルインの所為で俺の体力精神力ゲージは完全にレッドゾーンに突入していた。

「ぜえ、ぜえ、ぜえ……」

「ほい到着。ここが王都だ」

「やっと……着いたか、ぜえっ！ はっ！」

「んで、料金になりますか……」

このポンコツ、自分じゃ殆ど何もしてない癖に料金までしっかり請求しやがるのか。

「料金決定ルーレットスタート」

「ルーレット！？ タクシー料金ってランダムなの！？」

しかもどう見てもルーレットというよりスロットだし！

「っじゃーん！ おおっ！ なんとおみごとスリーセブン！ フィーバーですぞお客さん！」

「ダメじゃね！？ 支払う金額フィーバーしちゃダメじゃね！？」

「カードで。一括」

「毎度ありー！」

「カードあるの！？ しかも一括！ え、結構安かったの？」

「王国の国家予算五年分」

「たっか！？ え？ なに？ この自転車、一夜にして億万長者じゃねー？」

「私の三日分のお小遣いが……」

「お小遣いすげえ！ 一体誰が払ってんの！？ つーか王国の財政末期じゃねー？」

「あーあ、でもこれっぽっちじゃ車体のオーバーホールもできないよ」

「どんだけ金かかるんだよその車体のオーバーホール！ そんなボロい癖に！」

「こりゃやっぱり国家転覆が急務かな……」

「なに言っちゃってんのこの自転車！？ 800の10000の弱小モンスターの癖に！」

精霊界における国家事情が混沌だ。わけがわからない。

「よし、早速パーフェクト機械王の暗殺を計画しよう！」

「無理だよ！ そりゃどう考えても実現不可能な夢幻だって気付け

ポンコツ！」

「おっと、その前に酸のラスト・マシン・ウイルスを調達してこないと……」

「それならイケる！　ってイケちゃダメだし！　反乱はダメー！」

「おいおい兄さん、この世界じゃ反乱なんて子供のお遊びの一環だぜ？」

「精霊界終了のお知らせ！」

「ここはそんなに反乱がありふれた魔窟なのか……」。

「じゃーそういうわけで、またなー」

そう言っただけでサイクロイドはチリンチリンとベルを鳴らして去っていった。……ってやっぱり自分で動けるんじゃない！

「うん……また会えるといいな……いやホント」

「墓地に行けば会える」

「死亡確定！？」

精霊界は、ツッコミどころ満載の世界だった。

「とにかく、お姫様たちのところに行く」

「ああ……そうだな。ちよっと休みたいけど。切実に」

あれ？　おかしいな。さだめによって摩耗されつくした俺の精神が痛みを訴えてきてるぞ？　枯れ果てたはずの涙が……うっ！

「これで、いつものキミ。お姫様も心配しない」

「……」

ふ、複雑だ。励ましてくれたような更に精神的に追い詰められたような……。

ともかく、なんとか気を取り直して王都に入る。周りを見渡せばモンスターたちがたくさんいる。中には格闘戦士アルティメーターのような懐かしい奴もいる。外見が全く変わらない同じモンスターもいたりして結構面白い。

「主様。お迎えに上がりました」

「おっ」

そんな風にして見物していた俺に一人の騎士が声をかけてきた。

「ジャック！」

「こうして直接お会いするのは初めてですね。ようこそ。精霊界へ。ようこそ。私たちの王国へ」

そういつて頭を垂れてくる。

「よしてくれ。普通に観光に来たってんならともかく、ただ現実から逃げだしてきたバカに、そんな礼を尽くす必要はない」

「は。ですが、例えここに来た理由がなんであろうと、主様が私たちの主様であることに、なんら変わりはありませんよ」

「……サンキュ、な」

「いえ。ですが、せめてクイーンの前ではいつもの主様で居られた方がよろしいかと。……随分と、気を揉んでおりましたので」

「……ああ」

クイーンには、ちょっと厳しく当たつちまったし、謝りたいとも思うが、確かにまずは安心させてやるのが最優先だ。

「……けど、いつも通りの俺とクイーンじゃ、またお前がストライキを起こしそうで心配だよ」

「……それを言わないでください。ですがまあ、その調子ですよ。少しずつ調子が戻ってきてらっしゃるようですねによりです」

「私のおかげ」

「……いや、ルインには凄まじい勢いで体力を奪われたんだが」

「無駄な体力があるから余計なことを考える。それを見越して敢えて疲れさせる私の妙手」

「体力がなくなったらその分気軽な考え事出来なくなると思っただが？」

「でも今は大分元に戻った。結果を見るべき」

「終わりよければすべてよし、なんてのは過程から目をそむけた後の向きな言葉だと、俺は認識している」

「ハハハ、大分仲良くなられたようで。これはやはり、私の胃が痛むことになりそうですね」

「なんで機嫌が良さそうなんだお前は」

やっぱりジャックは扱い使いだな。……苦労をかける。

「ほら、また表情に陰りが出てきましたよ」

「あ、ああすまん」

ホントに、よく気がつくこつて。

そんなジャックの先導で、王城の中へと案内される。

「む。ジャック殿か」

先頭を進むジャックに、精悍な面差しの戦士が話しかけてきた。

「おやネイ。今日は、あの鎧は着てらっしゃらないので？」

「今日は久々の休暇だ。我も、休日まで鋼鉄の鎧に身を包む趣味はないよ」

親しげな笑みを浮かべるのは紛れもなく剣聖ネイキッド・ギア・フリード。当り前だが、こんな奴も精霊なんだなと変なところで感心。

「おや、そちらの御仁はもしや……」

「はい。我ら、絵札の三銃士が主、御堂切殿です」

「おお、やはりそうか。なるほど不思議な気配をしている」

「ええと、どうも？」

「はっはっは！ そう硬くなられるな。ジャック殿たちの主ならば、この王国の元首も同じ。我のような一兵卒に恐縮することはない」

「い、一兵卒ですか……」

『アテナ』と同じ攻撃力を持つ剣聖に、これほど似合わない言葉もない。

「剣聖。久しい」

「おお！ ルイン殿！ 今日も変わらずお美しい」

「当然。美貌はいつでも最前線」

「はっはっは！ 違いありません」

なんかこの人、頬染めてね？ え、ルインてもしかして結構モテ

るのか？ 良く見ればネイキツドの他にも男たちがルインをどこか熱い視線で見ているような……。

「当然だぞジャック殿たちの主殿！ ルイン殿の美貌は、その美しさで何人も男を破滅させてきたことから破滅の女神と呼ばれているとも言われるほどだ」

「破滅つてそういう意味だったの！？」

「モテる女は辛い」

「うっわ余裕の発言！」

「でも私は処女」

「いいよそういう情報は！ っていうか俺、そんなルインと混浴したんだよな……」

うわ思い出すと恥ずい！

『何だとう！？』

「うおおっ！？」

何やら物凄い勢いでネイキツド始め男たちが詰め寄ってきた。

「あ、主殿、否！ セツ！ そ、それは真か！？ るるルイン殿とこここっ混浴！？」

「あ、ああいや、ルインの悪ふざけのようなもんで……」

「気持ち良かった」

『気持ち良かった！？』

「温泉のことだからね！？」

「彼は優しかった」

『おのれ貴様ー！ー！』

「ルインさん紛らわしいこと言わんといてー！？ っていうか面白がってるでしょ！？ 混浴の時といいさっきといい今といい、俺が困ってるの見て楽しんでるでしょ！？」

ルインは鷹揚に一つ頷く。

「私は破滅の女神」

「超納得！」

なるほどこいつは破滅するわ。

「セツ！ 我とデュエルしろ！ 騎士の誇りと……主にルイン殿との混浴を賭けて!!」

「すでにその言葉に誇りが一切感じられない！」
精神状態もあってまったく気が進まないが、こいつらの形相からしてやらないとは言えそうもない。

「ははは、これはやるしかなさそうですね。ネイはこうなったら引きませんよ」

「私のために勝ってー」

「お前らちよつと黙れ！ 特にルイン！」

「貴様、ルイン殿の麗しい発声を邪魔するか！」

「何より直々に激励の言葉をかけていただけると……うらやま、いや妬ましい！」

「お前らも黙れ！」

くそう……なんで精霊界まで来て女絡みのいざこざに巻き込まれなきゃ……。

「がんばー」

「ルインてめえ！ ……ええい！ やりやいいんだろ！ やれば！」

「そうこなくては！」

「デュエル!!」

こうして、わけのわからないままに俺の精霊界初デュエルが幕を開けた。

第十三話「精霊界 沈む心」（後書き）

ふう、久しぶりにタイピングする指が軽いよ。やはりギャグは気分が浮き上がりますね。というわけで、前半のかつこいいセツ（のつもり）なシリアスからは考えられないくらいギャグしてやりました。そしてもともとデュエルの予定はなかったのですが、やっぱり遊戯王のFFである以上やらないわけにもいきません。というわけで、準レギュラー予定だったルインさんがレギュラー昇格したと同時に色々ひつかきまわしてくださいました。おかげで剣聖のキャラがあんなことに……次回はラストからもわかるように絵札の三銃士VS剣聖のデュエルになります。出来れば今日中、一日二話という自分的快拳が上げられればいいなあ。

それでは、レーネスでした！

第十四話「戦士の決闘」(前書き)

第十四話です。今回もルインは大活躍。予定をはるかに超える活躍を見せております。

第十四話「戦士の決闘」

アルカナへ切り札の騎士へ

第十四話「戦士の決闘」

「デュエル!!!」

「私のターン！ ドロー！」

「っ！」

「私は手札から『増援』を発動！ デツキから『鉄の騎士ギア・フリード』を手札に加え、攻撃表示で召喚！ カードを一枚セットしてターンエンド！」

「俺のターン。ドロー」

手札を確認する。悪くはなさそうだ。

「俺は『クイーンズ・ナイト』を攻撃表示で召喚。手札から『二重召喚』を発動！ 『キングス・ナイト』召喚し、効果により『ジャックス・ナイト』を攻撃表示で召喚。バトル！」

リバーズカードは気になるが、ここは攻撃するべきだろうと判断する。

「『ジャックス・ナイト』で『鉄の騎士ギア・フリード』を攻撃！

『ブレイク・ソード』！」

「迂闊！ リバーズカード『炸裂装甲』！ 『ジャックス・ナイト』を破壊！」

「くっ！」

まずい、攻撃の起点が崩された！

「カードを一枚セットしてターンエンド」

「ふむ。私のターン。ドロー！」

ドローしたネイキッドは、これは面白い。とでも言いたげな顔をしていた。

「私は手札から『盗人の煙玉』をギア・フリードに装備！」

？ いやだがギア・フリードは……っあ！

「その顔だと気が付いているようだ。そうだ。ギア・フリードには装備された装備カードを破壊する効果が備わっている。そして『盗人の煙玉』は……」

「装備されたこのカードが破壊されたとき、相手の手札を一枚選択して捨てさせるハンデスカード……！」

「その通り！ さあ、手札を見せたまえ」

「くっ……」

「ほお……『融合呪印生物 光』と『オネスト』か。どちらも厄介だが、ここは『オネスト』を選択するでしょう」

オネストが……。

「更に我は手札から、『ライティングボルテックス』を発動する！
「っな！？」

「手札から『神剣 フェニックスブレード』を捨てて、セツのモンスターを全て破壊する！」

「ぐっ！？」

クイーンとキングが雷光に撃たれ、消滅する。

「我は『エヴォルテクター・シュバリエ』を攻撃表示で召喚！」

「げっ……」

『エヴォルテクター・シュバリエ』攻撃力1900のデュアルモンスター！ 特にデメリットもなくデュアル能力も優秀な戦士族モンスター！

「二体でダイレクトアタック！」

「カウンタートラップ『攻撃の無力化』！ バトルフェイズを終了させる！」

「おっと、そう来るか」

あ、危なかった……流石に1900と1800のダイレクト食らったら一発で瀕死だ。

「ターン終了だ。さあ、その『融合呪印生物 光』一枚でどう対処する？」

「くっ……俺のターン、ドロー！」

っ……やばい。どうしようもない。

「モンスターをセツト。ターンエンド」

「おいおい、この程度かい？ ドロー！ 『エヴォルテクター・シユバリエ』をデュアル召喚！ 『融合武器ムラサメブレード』を装備して、『エヴォルテクター・シユバリエ』の効果発動！ 装備カードを墓地に送り、その守備モンスターを破壊する！」

「ぐう……」

『融合呪印生物 光』が射出された剣に貫かれ、消滅する。

「本当に手詰まりらしいな……二体でダイレクトアタック！」

「ぐあああああつ！？」

セツLP300

「くそっ！」

どうする……こんな状況。自分の手札は一枚。向こうはモンスター二体に手札は一枚。次のドローでどうにかするしか……。

焦る俺を真剣な目で見つめていたネイキッドが、声をかけてきた。

「……なあセツ。お前、本当にこの程度か？ だとしたらあれだ。

失望したぜ」

「……」

「ジャック殿やキング殿がことあるごとに自慢する上、ウチの姫さんやルイン殿のお気に入り。どんな強さがあるのかと思ってたら迂闊に攻撃を仕掛けてくるわロクに対応できねえわ。惨めったらしいつたらありやしねえ。お前……「黙りなさい！ ネイキッド！」！？」

「っ！ クイーン……」

ネイキッドの言葉に打ちのめされ、俯くばかりの俺の後ろから、聞きなれた声がネイキッドに叩きつけられる。

「まったく……ジャック殿を迎えに出したのに、何時まで経つても来ないと思えば何やら下が騒がしい。何事かと来てみればお待ちしていた主様が負けそうになっているではないですか。わたくしの預かり知らぬところで一体何をやっておいでなのですか」

心底呆れたと言わんばかりのその顔に、俺はつい頭を下げた。

「あ……その、すまん」

「らしくありませんよ主様。素直すぎます。何をそんなに殊勝な態度でいらっしやるのです」

「う……」

「貴方も貴方です。ネイキッド」

「お、おう」

「我が王国の將軍ともあろう貴方が、何を私闘など……」

え？ 將軍？

「ネイキッドって、一兵卒じゃ……」

「……そんなわけがないでしょう。あの男が一兵卒なら將軍はどんな化け物ですか」

……そりゃそうだ。

「……ともかく、主様」

キツと鋭い目で俺を見つめてくるクイーン。

「本当に、今の主様はらしくありませんわ。この程度の苦境で何を焦っているのですか」

「いやこの程度って……」

「あの小娘に打ち勝った時も、残りのライフは今と同じ300。しかも手札はゼロ。その状況でも主様は勝ちを拾ったのです。今、ここで負ける道理はありませんわ」

「っ……」

小娘……多分アテナのことだ。今は、なるべく思い出さたくないけど、確かにクイーンの言っていることは確かだ。俺はあの時、手札がゼロでも負ける、という気にはならなかった。何故？ 今と同じくらいに絶望的な状況であったはずなのに。

「それは主の心の問題じゃな」

「キング……」

「心に迷いがあるようじゃ。今主は心ここに在らずじゃ。それでは、デッキも応えんし、デュエルに勝つこともできぬじゃろ」

「心ここに在らず……」

確かに、いくらテンション高く誤魔化したところで、一度外れてしまった仮面をかぶり直すのは困難だ。どうしてもそこには綻びができる。今の俺は、まだ立ち直れていない空虚なバカ兄貴のままだ。「素のままならば素のままでもいいのです。主様は主様のままで、ただこのデュエルに集中すれば、それで良いのですよ」

「ジャック……」

「まあ要するに、なにが言いたいかということじゃな……」

「諦めないでくださいまし、ということですよ」

「そういうことです」

……はは。

「……了解。やるだけやってみるさ」

本当にやれるかは分からない。だが、やるしかない。

出来る出来ないじゃなく、やるかやらないか。そんな使い古された言葉が脳裏を過ぎる。

「俺のターン……ドロー！」

ここで何を引いたらいい？ 何を引けば繋がる？ ……決まってる。

「俺は手札から『強欲な壺』を発動する！ デッキから新たに二枚

ドロー！」

「おお……」

重要なのは手札！ ドローソース！

「さらに手札から『貪欲な壺』の効果発動！ 俺の墓地に眠る三銃士と『オネスト』、『融合呪印生物 光』をデッキに戻し、二枚ドロー！」

これで手札は四枚！ ここから勝利までのタクティクスを組み上げる！

「……」

手札を確認する。賭けになる部分もあるが、やるしかない。

「俺はモンスターをセツト！ 手札から『二重召喚』発動！ 更に

モンスターをセット！ カードを一枚セットしてターンエンドだ！
「よし！ 私のターン！ ドロー！ バトルフェイズ！ 『エヴォ
ルテクター・シュバリエ』で右の守備モンスターを攻撃！」

倒されたのは『ネクロ・ガードナー』！ これで一ターンは凌げ
る！

「『鉄の騎士ギア・フリード』で守備モンスターを攻撃！」

ギア・フリードによって倒されたのは不気味に笑う壺モンスター。

「『メタモルポッド』のリバース効果発動！ お互いのプレイヤー
は手札を全て捨て、デッキからカードを五枚ドローする！」

「なに！？」

ネイキッドの手札が墓地に送られ、新たに五枚引く。俺は手札が
ゼロなので無条件にカードを引く。

しかし、カードを引いたネイキッドは不敵な笑みを浮かべる。

「フツ……手札増強カードをここぞとばかりに引き当てたのには驚
嘆する。だが、我も『メタモルポッド』には感謝せねばなるまい」
「なに……」

「行くぞ！ 私は手札から『拘束解除』を発動する！ 『鉄の騎士
ギア・フリード』をリリースし、我自身を特殊召喚！」

ギア・フリードの鋼鉄の鎧が開かれ、中からネイキッドが姿を現
す。

ついに出了か！ 『剣聖 ネイキッド・ギア・フリード』！

「ギア・フリードの鎧は我が力を制限するための戒め！ 私は今、
解き放たれた！」

確かに、2600の攻撃力と装備カードを装備するたびにこちら
のモンスターを除去してくる効果は脅威だ。

「私はカードを一枚セットし、ターンを終了する！」

「俺のターン！ ドロー！」

！ このカード……。

ドローしたカードを見た俺に、先ほどのクイーン言葉が蘇る。

『あの小娘に打ち勝った時も……』

クイーン。ほんとに、その通りだな。またこのカードに頼ることにするぜ。

「俺は手札から、『悪魔への貢物』を発動する！ 全フィールド上から特殊召喚されたモンスターを一体墓地に送る！ 出てきて早々悪いが散れ！ ネイキッド！」

「なんだと!？」

「そして俺は手札から通常モンスターを一体特殊召喚する！ 『クイーンズ・ナイト』！」

「主様！」

クイーンの弾んだ声が聞こえる。クイーンにぐっ、と親指を立てて応える。

「更に、『キングス・ナイト』を召喚！ 効果で『ジャックス・ナイト』を特殊召喚！」

「ぬうう…… 我を除去した上その速攻展開…… 見事」

「ジャックで『エヴォルテクター・シユバリエ』を攻撃！」

「だが、させん！ 『攻撃の無力化』！」

「っ…… カードをセットし、ターンエンド」

「私のターン!…… セツ。先ほどの言葉は詫びよう。事情は知らぬが、何か心を乱す大事があったのだろう。そして、姫たちの言葉を受けてからの立て直し、真に見事。我自身も、こつとも容易く除去されると感じるしかない」

「ありがとう。だけど、まだ、あなたには勝てなさそうだ」

「主様!？」

「…… フツ。ここにきて、自らの敗北を悟るか。なおさら見事、と言わざるを得ないな」

「あなたの目はもう勝利を確信した目だ。対して俺は、なんとかその場のぎでやってはいるが、所詮はその場凌ぎだ」

「…… それでも、立派な引きとタクティクスだった。行くぞ！ 我

は『死者蘇生』を発動する！」

「『死者蘇生』？ ネイキッド、あんた自身は呼びだせないぞ！」

「そんなことは百も承知！ だが、セツが先の状況から不死鳥のごとく蘇ったのと同様に、我の墓地にもいるのだよ！ 死してなお、不死鳥のごとく蘇る我を超えた我が！」

ギア・フリードのことじゃない？……っ！ まさかあいつか！？

だがそんな奴いつ墓地に……。

「……あ」

「そう！ 言っただけだ！ 『メタモルポッド』には感謝するとな！」

そうだ。ネイキッドは『メタモルポッド』発動の際、手札を二枚捨てた。その二枚の内片方が……

「蘇れ！ 『フェニックス・ギア・フリード』！」

炎の渦が巻き起こり、その中から深紅の鎧に身を包んだ騎士が姿を現す。

「そしてデュアル召喚！ さらに墓地に存在する『鉄の騎士ギア・フリード』と我自身を除外し、『神剣 フェニックスブレード』を手札に戻す！」

ああ……負け、だな。

「『神剣 フェニックスブレード』を『エヴォルテクター・シュバリエ』に装備！ 『エヴォルテクター・シュバリエ』の効果発動！ リバースカードを破壊する！」

俺の伏せていた『聖なるバリア ミラーフォース』が破壊される。

「『フェニックス・ギア・フリード』に、『融合武器ムラサメブレード』を装備！」

「『エヴォルテクター・シュバリエ』で、『クイーンズ・ナイト』を攻撃！」

「っ！ 墓地の『ネクロ・ガードナー』の効果発動！ 『ネクロ・ガードナー』をゲームから除外して戦闘を無効にする！」

「トドメだ！ 『フェニックス・ギア・フリード』で『クイーンズ・ナイト』を攻撃！ 『ブレイズ・ソード』！」

「リバーズカード！ 『収縮』！」
「させん！ 『融合武器ムラサメブレード』を墓地に送って『フェニクス・ギア・フリード』の効果発動！ モンスター一体を対象とする魔法・罠の効果が無効にして破壊！」
俺の『収縮』は効果を発揮することなく破壊される。
「最後まで足掻く、その意気やよし！ だが、今回は私の勝ちだ！」
炎に包まれた剣がクイーンを討ち倒し、炎の余波が俺を襲う。
「ぐああああああっ！」
セツLPO

「負け、か」

「なんだか、こうしてちゃんとしたデュエルで負けることって初めてな気がする。授業や十代たちとの模擬デュエルでは何度も負けてはいたんだが。」

「はっはっは！ 我はこれでも將軍だからな。そうやすやすと負けはせん！……そ、それでルイン殿……」

「イヤ。別に私は了承した覚えもない」

「そんな！？」

「……いやまあ、そりゃしょうがないでしょ。」

「？ 何の話です？」

「あ、ああいや、姫さんには別に関係のないことで……」

「ネイキッドが勝手に、彼に勝ったら私と混浴、なんて言い出した。私は関知していない」

「……」

「ああ！？ そんな汚物を見るような眼で見ないで下さいよ姫さん！」

「……というか、何をどうしたらそんな話になるのです」

「私が彼と混浴したことへの嫉妬。見苦しい」

あつ！ バカルインまたお前そんな火にニトログリセリンを投下するような真似を！

「……な」

ギシリ、とクイーンの体が硬直する。

これは……危険だ！

「あ、主様！？ だからって私を盾にしないでください！」

「すまんジャック！ またお前の胃を痛めつけることになるが……」

「その前に肉体的にも痛めつけられそうです！」

「大丈夫！ お前なんかそういうの好きそうだ！」

「好きではありません！ 人をマゾ扱いしないでください！」

「ほっほっほ。ちなみに感想はどうじゃった？ 精霊界でも有数の

美女との混浴じゃぞ〜」

「……そりゃ、お綺麗な体でありましたと……ハッ！」

「……ポッ」

「わざとらしく頬を染めるな！」

「マズイ！ クイーンどころか男どもからも殺気が放たれ始めた！

「『愚かなるバリア フールフォー』！」

「そんなカードはなかるうに！？ こ、これ、わしまで盾にするでない！」

「黙れ！ お前は俺の死亡フラグを一本から数十本単位に増殖させた！」

「私は完全なとばっちりなのですが！？」

「大丈夫！ お前は常にそういう立ち位置だ！」

「理不尽！？」

「彼が私の体を舐めるように見ながら『俺はこれから鬼畜街道を突っ走るぜうえっへっへっへ』と舌なめずりしていたのを覚えている」

「そんな事実は一切ない！ むしろ鬼畜道を提案したのはルインの方だった……ってお前から信じる気ねえな！？」

「今……私の怒りが有頂天に達したああ！！！」

「それを言うなら頂点！ どこの筋肉馬鹿だお前は！」

「というか何故こいつを連れてきたし。というかむしろこいつこそ真っ先に生贄に捧げるべきだった。」

「なんだかんだで女の子を放っておけないフェミニスト乙」

「ああもうそうですね、すよバカですよ畜生め！」

もうジャックの方は悲鳴すらも聞こえなかった。達観した精神のまま散って逝ったのだらう。さらばだジャック！

「サラダバージャックー」

「ジャックバカにすんな！」

「生贄にしたキミの言えることではない」

「まったくもっておっしゃる通りで。」

その後生贄が尽きてすぐに捕まった俺たちは、クイーンたちからの執拗な質問攻め（ルインが一々引っかき回した）からの肉体的拷問（ルインが煽った）、更には数時間にわたるクイーンからのお説教（ルインが茶々入れまくった）で心身ともに疲れ切った。

「っていつか最初っから最後まで全部ルインの所為じゃね!？」

そもそも、精霊界に来ることになったところからは全部ルインの手のひらの上だった。精霊界に来ることを提案したのもルイン。心情暴露したのもルインの前。サイクロイドを呼び出したのもルイン。ネイギットとデュエルすることになったのもルインの発言から。最後の騒動も全部ルイン。ルイン、ルイン、ルイン。全部ルイン。

「は、破滅の女神だ……」

「うむ」

「満足そうに頷くな」

「楽しかった」

「でしょうね」

あれだけ引っかき回して自分は被害ゼロ。俺はボロ雑巾じゃさぞかし楽しがるよ！

「満足した」

そういうとルインは微かに笑みを浮かべて、自分用に宛がわれた部屋へと戻って行った。

「まったく……」

思わずその微笑にどきりとした。

おかげで、微妙に文句が言い辛い。あんまり悪い気もしないし。

「なんでこんな……」

「好みのタイプなんじゃねえのか？ セツ」

いつの間にも部屋に入ってきたのか、そこには親しげな笑みを浮かべる男の姿。

「ネイキッド……別に、そういうわけじゃない」

「良い女だろう？」

「それは……認めるけど」

「……我はな、ルイン殿がああも楽しそうにしているのを初めて見る。人にいたずらしている姿もだ」

「……そうか」

「さつきは冗談交じりに男を破滅させるから破滅の女神、なんてことも言ったが、本当のところは違う」

「……あいつのいた街、か？」

「……知っているのか？」

「俺が最初に辿りついたのは、あの街だ」

「……そうか」

ネイキッドは、その意味するところをわかっているのだろう。

何も言わず、次へと移った。

「あの街は彼女が管理していた。我は当時を知らぬが、当時は『慈悲の女神』とも言われていたらしい」

「慈悲……」

「だが、幾度か王が替わり、最後の王デミスが王座に着いた時……」

「あの街は終焉を迎えた……か」

「……その日から、彼女は「破滅の女神」と呼ばれ、人々の同情の対象となった。それからの彼女はそれはもう酷いものだったらしい。来る日も来る日も、崩壊してしまって精霊の一人もない街にずっと一人で暮らし、街を復興しようとしていた。だが、そこはもう完

全に滅びた街。復興など出来るはずもなく……」

「……そっか」

「笑顔など、もうすっかり消えてしまったらしい。彼女の笑顔は、さぞ魅力的であろうに……」

「……さつき、さ」

「ん？」

「本当に、本当に微かだけど……良く見なくちゃわからないんだけど、笑ってたよ」

「……そう、か」

「そうか、とネイキッドは本当に嬉しそうに何度も頷く。

「それは、良かった」

その話はさておき、と前置きをして、ネイキッドはまた真剣な顔でこちらを見据えた。

「……ああ、それでな、セツ。我はお前に話があつてきたのだ」

「話？」

「ああ。本当はさつきのデュエルの後に言つつもりだったんだが……」

言い難そうに、しばらく逡巡していたネイキッドだったが、覚悟が決まったのか、真剣な目で俺を見据え、話を切り出した。

……それは、俺の今後に関わるとても重要な話。

「セツ。お前にあのデッキは合わない。お前はデッキを変える」

それは、とても衝撃的な言葉で……意味を測りかねる自分がいても同時に「ああ、確かに」と納得してしまう自分もいたのだった。

第十四話「戦士の決闘」（後書き）

ジャックはマゾではありません。第十四話でした。

セツ、敗北。相手の方が一枚上手でした。実は敗北書くのは初めて。でもよく考えて敗北するのも書かなきゃダメだろ、ということ

で。
ルインがセツフラグを立てて行きました。はい。立てたのはセツではなくルイン。そこがポイント。

ルインの過去話とラストの衝撃発言。次話に続く、と言いたいくところですが、引っ張ります。引っ張らせていただきます。次からはちよつと時間の進んだアテナたちの話。考えた結果、レイのフラグを多少強引に立てつつセツ復帰はセブンスターズで。そして、レイが出なくなるのもさびしいので次をレイの話に。どちらかと言うとレイとアテナが主役。結構時間は進んでますが、それでもまだ立ち直っていないアテナを立ち直らせる話にするつもりです。

それでは、レーネスでした！

前話も含め、ネイキッドの名前がネイギットとしていました。作者の勘違いで紛らわしい表記になったこと、深くお詫び申し上げます。

第十五話「恋する乙女の憂鬱」(前書き)

セツのデッキは！ 置いていて(おい

今回はアテナとレイのお話です。強引なレイフラグの形ですが、今回重要なのはレイフラグというよりも、アテナフラグの強化ですね。完全に落ち込みきっているアテナを元気付けよう！ みたいな。ではどうぞ！

第十五話「恋する乙女の憂鬱」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第十五話「恋する乙女の憂鬱」

「はあ……………」

静まり返った寮の自室で、アテナはもう何度目かもわからない溜息をついた。

「何してるんだろう……………いつになったら、割り切れるのかな……………」
セツに振られてから、もう何ヶ月と経った。いい加減割り切つて前に進まなくてはならないとわかっているのに、体は動かない。心が拒否している。

「セツ……………今どこにいるんでしょう…」

アテナに別れを告げたあの日から、セツはアカデミアから姿を消した。

定期船を使った様子も船が奪われた事実もないことから、まだ島内にいるのかもしれないと何度も島内全域を搜索したが、足取りの一つも掴めなかった。なにしろあの時はさだめの発していた瘴気のようなオーラによって殆どの生徒や教員がダウンしていたのだ。得られた情報は、港とは逆方向にルインと向かったらしいという情報くらいだ。

「セツ……………せめて、帰ってきて……………」

この数ヶ月、アテナはずっとこんな感じだ。振られたことに落ち込み、セツの無事を心配し、セツに会いたい気持ちでまた落ち込む。

明日香たちも何度が元気づけようとしてはいたのだが、何を言っても上の空。まるで魂が抜け落ちたようなアテナには何の効果もなかった。せめて時間が解決してくれたら、と願うも日々アテナの憂鬱は酷くなるばかりである。

「セツのお部屋……行きましょう」

そしてアテナは毎日のようにセツの部屋に通い、セツの部屋の掃除をする。

少しでもセツの存在を感じたくて。少しでもセツの役に立ちたくてセツが帰ってきたときに、埃だらけの部屋で過ごすことがないように来る日も来る日もセツの部屋に通い、掃除をしていた。

尤も、毎日掃除しなければいけない程大きな部屋でもないのが最近はおつぱらセツの部屋でボーっとしているだけだが。

アテナはすでに授業にすら出ていない。部屋から出るのは食事などの生活上必要な場合とセツの部屋に通う時だけだ。

『言っただでしょう？ 貴女にはなにも与えない。嘆いて狂って墮ちるといいわ』

アテナには、時折そんなさだめの嘲笑が聞こえてくる。幻聴だ。聞くことはないと思っても耳に残ったあの声が常にアテナを責め立てる。

『お兄ちゃんはさだめを選んだの。貴女じゃなくて、さだめと一緒にいることを選んだのよ』

「うるさい……」

『これでわかったでしょう？ いい加減未練つたらしいことはやめて……』

「うるさい……」

狂ってきている。アテナはそう自覚しながらも、幻聴に怒鳴り続ける。

「さだめさん……こんな気持ちだったんでしょか……」

心の支えがいなくなる。今までずっと自分の味方で、隣にいてくれた愛しいヒトが忽然と消えて、その傍に他の女性がいる。

これは……地獄だ。なるほど今ならさだめの狂気も理解できる。
これは狂いたくもなる。

『何馬鹿なこと言っているの？ たかだか数ヶ月一緒にいただけの貴女と、それまでの一生を共に過ごしてきた私とで、存在の重みが同じだとも？ 想いの深さが同じだとも？ 喪失感が同じだとも？ 絶望感が……同じだとも？』

「っ！」

さだめの幻聴が心を蝕む。もしこれら全て、さだめの思い通りのシナリオだったとしたら……。

「……大成功ですよ。私、そろそろ耐えられそうにありません」

部屋の隅で蹲り、震えてしまいそうになる体を必死の思いで動かして、アテナは今日もセツの部屋に向かうのだった。

そんな折、アカデミアのレッド寮。十代の部屋に一人の編入生が加わった。

「早乙女レイです。よろしくお願ひします」

「おう！ よろしくな！」

「いやー助かるんだニヤア。ホントは部屋数が足りないからセツ君の部屋に入ってもらおう予定だったんだけどニヤア」

「それは……ごめん、遠慮してくれ。大徳寺先生」

流石に、今はない仲間の部屋を勝手に使うのは気が引ける。なによりアテナが今心の抛り所になっているセツの部屋を、少しでも荒らしたくない。

「わかっていきますのニヤア」

「え……と、そのセツ君って……」

「ああ、オレたちの……仲間だ。御堂切って言ってな……」

「やっぱり！ あ、いや。そ、その御堂君はこの寮にいるんだよね？」

セツの名前に過剰反応を見せるレイに、ちょっと驚いた十代たちはレイの言葉にちょっと戸惑う。

「……えっと、その」

「どうしたんだ？」

「今、セツ君は行方不明なんだよ。何ヶ月も前から……。僕たちも必死で探してるんだけど……」

「……………え？」

何を言われたのか理解できない、といった面持ちで立ち尽くすレイ。

「う、うそ……………それ、本当？」

「あ、ああ……………島を出て行ったわけじゃなさそうなんだけど、どこをさがしても見つからなくて……………」

「な、なんで……………？　なんでそんな……………じゃあボクは何のために……………」

「お、おいどうしたレイ？　もしかして、セツの知り合いか？」

「……………」

「レイ？」

反応がないレイの顔を覗き込んで見ると、振られた時のアテナのような絶望的な表情をしていた。やがてポツリポツリと話し出す。

「御堂君は……………ボクがデュエルを始めるきっかけとなった人で……………」

ボク、その人のためにここに……………」

「……………そうだったのか」

そういえば、セツのここに来る以前の交友関係については何も知らないことを思い出す。前に聞いたこともあったが、その時は何故かはぐらかされてしまったのだ。

「その……………見てみるか？　セツの部屋」

「っ！　うん！　行く！　見せて！」

「お、おう。こっちだよ」

「じゃあアニキ、僕たちは先にお風呂に行ってるね」

「十代もあとで来るんだなあ」

「おう、すぐ行くぜ！」

洗面用具片手に部屋を出ていく翔たちを見送り、十代はレイをセツの部屋に案内する。

「ここがセツの部屋。まあ、あいつはいつもオレたちの部屋に遊びに来てたから、ここには殆ど寝るときくらいしか帰ってなかったけど」

「ここが……」

あまり多くの物が無い殺風景な部屋。幾つか机の本棚にノートが置いてある。机の上に開きっぱなしで置いてあるノートには、デュエルの研究だろうか。ちょっと読みづらい字でメモが殴り書きされている。

「……何ヶ月も放置されてたのに随分綺麗だな……」

「ああ、それは……」

「……十代さん？」

アテナのことを説明しようとした時に、ちょうどそのアテナ本人がやってきていた。

「おう。いつもの掃除か？ ごくろうさん」

「いえ……十代さんは？ それにそちらは……」

「え、えっと、早乙女、レイです。今日、こちらに編入してきました」

誰だろうと思いつつ、簡単に自己紹介を済ませる。

「そうですね……天音アテナです」

ぺこりと頭を下げるアテナ。そんなアテナに十代が声をかける。

「あー……悪いな、掃除の邪魔だろ？ すぐ出て行くよ」

「いえそんな……」

「いいから、ほら、レイも行くぞ」

「え？ う、うん……？」

「ね……な、なあ」

「ん？ なんだ？」

「あの女の人、誰なんだ？」

「さつき自己紹介したじゃねえか。アテナだよ」

「い、いやそうじゃなくて……み、御堂君とどういう……」
妙に強い視線で十代に問いかけるレイ。

「あー……えっと」

十代はちよつと言葉に詰まった。元々恋愛事に明るくないので、セツとアテナの関係をどう表せばいいのか分からなかった。その上今その話題はかなりデリケートな問題になっているのであまり詳しくは話せない。悩んだ末に十代は……。

「……そう、大切な人だ。アテナとセツはお互いに大切な人だな」
盛大に地雷を踏み抜いた。そりゃあもう見事なまでのブレイクダンスを地雷原の上で踊る感じで。

「そ……」

「レイ？」

「そんなのダメ〜！」

今来た道を一目散に引き返し、セツの部屋の扉を弾き飛ばす勢いで開ける。

中ではアテナがセツの椅子に座って日記と思われるノートを見ていた。

「え、つと……レイさん？　どうかしまし……きゃ！？」

いきなり詰め寄ってきたレイにびっくりしたアテナは椅子から落ちそうになる。

「お姉さん、セツの大切な人だってホントなの！？」

「ふえ？　え？　えっと、な、なんですかいきなり……」

「いいから答えて！」

その剣幕に押され、いざ答えようとした時、アテナは言葉に詰まってしまった。

なんと答えればいい？　セツと自分の関係を。

『告白して、振られたんでしょう？　そう答えればいいだけよ。何を迷っているの？』

(やめて……)

『事実じゃない。否定したい？ したいよねえ？ そろそろ私の気持ちもわかってきたでしょ？ そうよ、そんな惨めな思いを感じて生きてきたのよ』

「っ……………」

幻聴が酷い。頭が痛い。

「ねえどうなの答えて！」

「わ、たしは……………」

セツの……………なに？

「わかり……………ません」

「わからない？」

「私がセツにとってどんな存在なのか……………今の私には全然わからないんです」

「……………」

レイはそんなアテナをじーっと見つめて、おもむろにデュエルデスクを取り出した。

「アテナさん。ボク……………ううん。私と、デュエルして！」

そういつてレイは被っていた帽子を脱ぎ捨てた。帽子の下から現れたのは長い黒髪。

「え……………女の、子？」

そう、紛れもなくその風貌は女の子のそれ。その目に強い意志を込めて、レイはアテナに申し込む。

「私、アテナさんとデュエルしたい！ いいよね？」

「え、えつと……………」

「決定！ 行こう。寮の裏手でいいよね？」

「え、え？」

問答無用でレイに引っ張られ、何が何やらわからぬままアテナはレイとデュエルをすることになってしまった。

「な、なんでこんなことに」

「行くよアテナさん！ デュエル！」

「デュ、デュエル」

「私のターン、ドロー！」

戸惑うアテナをよそに、レイはさっさと自分のターンに入る。

「私は手札から『恋する乙女』を攻撃表示で召喚するよ！」

フィールドに人形のようにかわいらしい女の子が現れる。

「そ、それがモンスター？」

「私はターンを終了！ アテナさんのターンだよ！」

「わ、私のターン。ドロー」

アテナは伏せカードの一枚もなしに攻撃力400のモンスターを攻撃表示で出してきたレイに戸惑いを隠せない。

「ええつと……私は『シャインエンジェル』を攻撃表示で召喚してバトルします」

『はあ！』

『きゃああああん！』

『うつつ』

レイLP3000

「と、通った？」

しかし、何故か『恋する乙女』は破壊されずにその場に残り、うるうるとした目で自らを攻撃した『シャインエンジェル』を見つめていた。

『うつつ……』

その何するの？ 何でひどいことするの？ と問いかけるような瞳で見つめられて、『シャインエンジェル』が動揺している。

『りよ、良心の呵責が……！』

「『恋する乙女』は攻撃表示の間、戦闘では破壊されないんだよ！
そして、『恋する乙女』を攻撃したモンスターに乙女カウンターを一つ乗せる！」

『恋する乙女』からポワワーンとハートが飛び、それを『シャインエンジェル』が受け取った。

「お、乙女カウンター？」

聞き慣れないカウンター名にアテナは戸惑う。なんだか今日は戸

惑ってばかりだ。

「え、えと。ともかく、ターン終了です」

わからないものはしょうがない。何かと物知りなセツなら『恋する乙女』の効果についても教えてくれたんだろぅが……。

『でももう兄さんはいない。なにも言ってはくれない』

「つつ！」

また、幻聴。さだめの声だが、やっぱりこれは自分の心の声なのかもしれない。

「私のターン！ ドロー！」

レイの声が随分と遠くに聞こえる。

「私は手札から装備カード、『キューピッド・キス』を『恋する乙女』に装備！ バトルフェイズ！」

「えっ！？」

レイのフィールドにいるモンスターは相変わらず『恋する乙女』一体。装備魔法も、別段攻撃力を上げる類のものではなかったらしく攻撃力は400のままだ。

「これが『恋する乙女』の真髄！『恋する乙女』で『シャインエンジェル』を攻撃！『一途な想い』！」

『天使さま』

攻撃というよりどう見ても抱きつきに行っているだけとしか思えない『恋する乙女』は、『シャインエンジェル』にひしっ！と抱きしめられた。

レイLP2000

「え、ええ〜？」

自分からダメージを受けに行っているとしたか思えないレイのプレイングに、アテナは困惑の声を上げた。

「そして『キューピッド・キス』の効果発動！ 乙女カウンターが乗ったモンスターに攻撃してダメージを受けた時、そのモンスターのコントロールを貰うよ！」

「ええ！？」

『シャインエンジェル』が抱きしめた『恋する乙女』をそのままお姫様だっこしながら背中の中を翼を羽ばたかせ、レイのフィールドに移ってしまった。

「そして『シャインエンジェル』のダイレクトアタック！」

『申し訳ありませんマスター！ 私は……私は愛に生きます！』

そんな天使らしいようならしくもないようなことを叫びながら『シャインエンジェル』がアテナを攻撃した。

「きゃああああ！？」

アテナLP2600

「ターンエンド！ どう！？ 恋する乙女は強いんだよ！」

「恋する乙女……」

そのフリーズに、アテナの心はまた沈んだ。

そんなアテナに、レイが静かに問いかける。

「……ねえ、アテナさんってセツが好きなんだよね？」

「え……？」

「そつだよね。あからさまだし」

「わ、私は……」

もう、振られた。その事実がアテナの心に重くのしかかる。

「まあ答えなくてもいいよ。見ればわかるもん」

でも、私は宣言しておくね。とレイは大きく息を吸い込んでアテナに宣言する。

「私はセツが好き！ 私がもっと小さい頃に、セツは私にデュエルを教えてくれた！ 友達を作るのが下手で、いつも泣いてばかりだった私の友達になってくれた！ だから私はセツを追いかけてここに来たの！」

迷いの全く感じられないその言葉に、アテナは打ちのめされた気がした。

「それなのに、肝心のセツは行方不明だって言うし、セツの大切な人、なんて言うのもいるし……もうぐっちゃぐちゃだよ」

それはアテナだって同じだ。新しくレッド寮に入ってきたのは女

の子でしかもセツのことが好きでいきなりデュエルを挑んできて…。

「でも、その『大切な人』のアテナさんがどんな人なのかなって思ったら、すっごく暗くてうじうじしてるだけの人だった」

そうだ。確かにアテナはセツに振られたのがショックですっかり腑抜けてしまっている。

「……そんなのってないよ。せっかくデュエルも強くなって会いに来たのに」

「……ごめん、なさい」

「謝られても困るよ。それより、さっきの質問、もう一回聞くな？ いい？」

「さっきのって……」

「セツにとつてのアテナさんって……何？」

「……」

また、答えに窮する。

「わ、わかりません」

「じゃあアテナさんにとつてのセツって何？ これも答えられない？」

「そ、それは……」

自分にとつてのセツ。

考えてみる。

最初にセツが、『アルカナ・ナイト・ジョーカー』を召喚したときの凜とした横顔に引きつけられた。その後の『融合解除』を使うときの無邪気な笑顔が可愛かった。

本当に、一目惚れだった。

それから女子寮の裏で本気のデュエルをした。畏かもしれないのに恐れず向かってきたセツがカッコよかった。

セツと過ごす時間の中で、どんどんどんどん好きになっていった……。

『振られたんでしょ？』

「っ」

そうだ。どんなに思い出を振り返ったところで、最後に待つのは振られたときのあの絶望。目の前が真っ白になって、知らず涙がこぼれていたあの時に辿りつくだけ。

『それまでいい感じだったのに、あっさり振られた貴女はどう思った？ 兄さんのこと、怨んだんでしよう？』

「怨……んだ」

そうなのか？ 自分はセツを、大好きだったセツを今、怨んでいるのか？

『怨むよねえ。それまでどこまでも献身的に、一途に寄り添ってきたのに、あっさり捨てられて……憎いんだよね？』

「……ちがう」

『……』

「違う……！」

そうだ、違う。セツが自分のことを本当はどう思っているか。それはわからないし、本人に確かめてみるべきことだ。

それでもただ一つ、間違いのないこと。

「私にとって、セツは大切な人です。それだけは、確かです」

『振られたくせに……』

(それでも……)

「私は、セツが好きなんです」

セツの瞳に恋をして、セツの笑顔に胸がときめき、セツの声が愛しくて、セツの背中に憧れた。

一目惚れなんてしない。そう思っていた。

普通にしゃべって、普通に友達になって、その内にいつの間にか恋をして……そんな恋愛をずっと思っていた。でも……ちがった。

「全部全部全部、吹っ飛んじゃいました。それまで私が考えていた恋愛観。全部あの時セツに会って、なくなっちゃいました」

『運命感じちゃいました！』

あの時そう言った。

「でも、もう言わない」

『運命』なんかで、恋はしない。

「私は私の意志で、セツが好きになったんです。『運命』なんかじゃない。だから……」

『運命』には……さだめさんには、負けません。

『……ふん。好きなだけ吠えてればいい。直に、そんな余裕はなくなる』

「ありがとうございます。レイさん。私、ようやく前を向けそうです」

「……別に、そんなつもりはなかったんだけど……まあ、いいかな。恋敵が腑抜けたままじゃ、張り合えないもん！」

レイは満面の笑顔でそんなこと言う。アテナもくすりと笑う。

「それでは、復活記念ということで、手早く済ませてしまいたまおう！」

「へっ？」

「ドロー！ 私は手札から『ヘカテリス』の効果を発動！ デッキから『神の居城 ヴアルハラ』を手札に加えて発動！ 『アテナ』召喚！」

『まったく……心配させてくれちゃって。人騒がせな娘ね』

「えへへ。ごめんなさい。でも、もう大丈夫です。だからシャルナ

！ ちゃちゃつと済ませてしまいたまおう！」

『まゝかせなさい！ まずは、あの馬鹿天使からね』

『あ、アテナ様……？』

『まったく。天使ともあるうやつが、あつさり色香に参ってんじやないわよ。ちよいと反省しときなさい』

「バトルフェイズ！ 『アテナ』で、『シャインエンジェル』を攻撃！ 『ジャツジメント・レイ』！」

『さつさと……』

『ひいつ！？』

『役目果たしてこんか馬鹿モンがあゝ！』

『 たっ、ただいまあ〜! 』

「 きゃああ! ? 」

レイLP800

「 墓地の『シャインエンジェル』の効果発動! デッキから『コーリングノヴァ』を攻撃表示で特殊召喚! 『アテナ』の効果で600ダメージ! 」

「 わああ! ? 」

レイLP200

「 『コーリングノヴァ』で『恋する乙女』を攻撃! 『新星の輝き』! 」

「 うわああああっ! ? 」

レイLP0

「 ふう。すつきり! 」

「 ……私は複雑 」

迷いも吹き飛び、流れるように勝利を掴んだアテナはともかく、余計な助言の所為でちゃっちゃと片づけられたレイは不満げだ。

「 あ、あはは。ごめんなさい 」

「 ……ふうん。まだこんなに差があるんだなあって実感できたから、良かったよ 」

「 そう言って貰えると嬉しいです 」

「 ん。でもすごかったよ。とつても強かったんだね。アテナさん 」

「 セツには負けましたけどね 」

「 うんやっぱりセツはすごいね。私も強くなったつもりだったけど、もつと強くならなきゃだめだね 」

「 お互いに、ですね 」

「 うん! 」

お互いに笑顔で握手を交わす。

「お〜い！」

そんなときに、寮の影から十代たちが現れた。

「わっ！ やばっ……………」

慌ててレイが帽子をかぶり直そうとするが、念入りにバンダナで括って仕舞わないと入りそうにない。

「ああ、もういいって。全部そこから見てたからさ」

「そ、そうなの……………」

「ああ。レイの様子がなんかおかしかったし、とりあえず明日香も呼んで観戦してた。二人ともすっげえデュエルだったぜ！」

「…………アテナも、立ち直れたようだなによりよ。レイちゃんには感謝しないとイケないわね」

「明日香さん…………御心配をおかけして、どうもすみませんでした」

「いいのよ。元気になってくれたなら何よりだわ」

「はい……………」

「それじゃあ、レイはどうすんだ？」

「えっと……………」

「今日は、私の部屋に泊めましょう。明日、定期船を使えばいいと思います」

「…………いいの？」

「はい！ レイさんには恩ができてしまいましたから、恩返しです」

「うん！ ありがとう！」

「へへっ！ やっぱデュエルは最高だな！」

「ええ。二人とも、すっかり仲良しになったみたいね」

視線の先には、笑顔で話す二人の姿。

「今日は昔のセツのこと、聞かせてください！」

「いいよ〜。でも、アテナさんも、最近のセツのこと聞かせてね！」

「はい！ えへへ、今日は眠れなくなりそうですね！」

「うん！」

「…………なんか、ここにはいない奴が不憫になつてくる気もするな」

「…………まあ、自業自得じゃないかしら。ついでに、私も興味あるか

ら参加させてくれる？ そのパジャマパーティー」

「そうですね。どうせだから加藤さんとかも呼んじやいましょう！」

「え、誰々その加藤さんって！」

「それがですね……」

きゃいきゃいと、この場にはいない人間のことで盛り上がる女子たち。

「……セツ。オレにはちょっと力になれそうもないや。帰ってきたら覚悟しといた方がいいぜ」

それを見ながら、今はどこにいるともしれないセツに、十代は呼びかける。

「早く帰ってきた方が、説教は短く済みそうだぞー？」

だから、早く帰って来い。そんな想いをこめて、十代は空の向こうへと呼びかけるのだった。

「……せつかく趣向を凝らしたのに……」

闇に包まれた部屋。その部屋以上に暗い瞳をしたさだめは唇を噛む。

「早乙女レイ……腹立たしい。兄さんを好いているだけでも許し難いのに、私の趣向まで邪魔するなんて……」

さだめは少し考えて、くすつと笑った。

「そうね。ちよつとした肩慣らしでもしましようか。ちよつどいい贄ができたわけだし。くふっ！ くふふふっ！ アハハハハハハハハッ……」

狂気は止まることを知らず、やがて暴走する。その手に、悪魔の力を携えて……。

第十五話「恋する乙女の憂鬱」(後書き)

なんだかんだと過去最大の文量に。見てわかるかもしれませんが、デュエルはおまけです。その途中のアテナの立ち直りが書きたかったです。

というわけでアテナ復活。アテナはまたセツへの想いを再確認し、あきらめず進むことを決意しました。……アテナは順調に読者さんからの好感度上がる話ばかりだな……。

ま、まあとにかく、難産ではありましたが、なんとかレイフラグを絡めてアテナを立ち直らせることに成功しました。……ふう、よく頑張った!(自賛)

やっぱりレイフラグは多少強引に突っ込みましたけどね。あ、わかりにくいかもしれませんが、レイと会ったセツは『今』のセツではありません。トリップ……というか憑依する前の、この世界のセツです。といっても、両者に違いはありませんが、どちらもセツです。区別付くのはさだめくらい。

そのさだめも順調にダーク化。動き始めました。

ふう! 次回は……どうしよう。本格的に考えてません。やりた
いことやりつくした感が……い、いえ! 更新はがんばりますが!
それでは、レーネスでした!

第十六話「そして誰もいなくなる」(前書き)

セブンスターズ編に入った第十六話です。っていうかそろそろ一期は終わりかも。ギャグ含有率ゼロパーセント。混じりっ気なしのシリアス&ダークで構成されておりますので閲覧の際はご注意ください。
ではどうぞ！

第十六話「そして誰もいなくなる」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第十六話「そして誰もいなくなる」

「じゃあね〜！ 今度はー！ またちゃんと小学校卒業してから入学試験受けにくるからー！」

昨夜は遅くまで話し込んでいたというのに、まったく疲れた様子を見せないレイが定期船に乗って帰っていく。

アテナたちはそれを皆笑顔で見送る。

「おー！ 次来る時までー！ セツの奴連れ戻しとくからなー！」

「次はちゃんと連絡してくださいねー！」

「気をつけるのよー！」

声が届かなくなるまで大声で別れの言葉を投げ合う。本当に、レイには感謝してもしきれない。レイがいなければ、アテナは精神的に参ってしまっていたかもしれないのだから。

「でも、セツのことは別問題です」

「ふふ。調子が戻ってきたじゃない」

「大体、たかが一回振られたくらいで諦めてたらそもそもさだめさんには勝てませんから。押しして押しまくって勝利を掴んで見せませすとも！」

ぐっ！ と改めて気合を入れるアテナだが、明日香は別のところに引っかかりを覚えた。

「さだめ……彼女は、今どうしているのかしら？」

「……正直、あんま思い出したくないけどな」

「けど、彼女の執着具合を考えると、セツは彼女のところということも考えられるわ」

拉致、監禁。どちらもさだめならためらいなく実行することだろう。

「それに去り際のセリフも考えれば、放っておくわけにもいかない、か」

三人で顔を見合わせ相談していると、三沢が走り寄ってきた。

「おい！ 十代、アテナ、天上院君！」

「三沢？ どうしたんだよ」

「ああ。校長が俺たちを呼んでいるそうさ。なんでも俺たちに頼みたいことがあるらしくてな」

「頼みたいこと？」

「ああ。メンバーは俺・十代・アテナ・天上院君・カイザー・万丈目・クロノス先生の七人だそうさ」

「亮やクロノス先生も？」

「俺もまだ内容は聞かされていない。とりあえず、校長室に向かおう」

「わかりました！」

「七星門？」

三沢と共に校長室に入室したアテナたちは、その聞き慣れない言葉に首をかしげた。

「うむ。この島の奥には、かの『幻神獣』三体とも並ぶと言われるほどのカードが封印されているのだが、七星門は、その封印を護るための門なのです」

校長の何時になく真剣な様子に、アテナたちも表情を引き締める。「そして、最近この七星門を開こうと暗躍している者たちがいると

「いう情報を聞きつけ、急遽、対策を取ることにしたのですが……」
早い話が、七つある七星門の鍵をアテナたち七人に護つて貰いたい、と言うのが校長の話だった。

「暗躍している者たちの通称はセブンスターズ。彼らは恐ろしい闇のデュエリストで、闇のデュエルというものを挑んでくることでしょう。とても危険な任務になりますが……」

「任せとけて！ 鍵は絶対、オレたちが護る！」

「フン！ お前たちだけに任せておけるか。いいだろう。このオレ様もやってやる」

「はい！ 俺も必ず、任務を果たします！」

「ああ。デュエルを悪用しようとしている奴らを、放つてはおけん」

「イヤなノ〜ネやりたくないノ〜ネ。でもドロップアウトボーイたちに舐められるのはもつとイヤなノ〜ネ」

「アテナ、大丈夫？ 私はやるけれど、貴女は……」

「アテナ君。私としても、君のように幼い女の子をこんなことに巻き込みたくはないのですが……本当なら、御堂切君に頼むことも考えていたのですが……」

セツは今行方不明。頼むこともできない。

「……いえ、やります。私がセツの穴を埋められるのなら、喜んで！」

そうして、アテナたちが七星門の鍵の守護者を引き受けた頃、すでに闇の胎動は動き始めていたのだった。

「うう〜ん。でも、セツつてばどこに行っちゃったんだろ。ああ〜会いたかったなあ〜」

軽く伸びをしながら、レイは定期船を降りて本土へと到着していた。

「そう。でも、貴女が兄さんに会えることはもうないわ」

「っ誰!？」

レイが振り向いた先にいたのは、どこかセツと似た風貌をしている少女。

「貴女は……」

「私？ 私はさだめ。今は、セブンスターズのさだめ、とでも言えばいいのかな」

「セブン……スターズ？」

「ああ、貴女は何も聞かされてないんだっけ？ まあいいか。私の要件はね？」

デュエルディスクを装着し、昏い笑みを浮かべる。

「兄さんに近づく蛆虫を、消すことよ。早乙女、レイ」

「っひ!」

突如広がった闇に、レイは恐怖する。何だ、一体何が起きている？

「さあ、デュエルディスクを構えなさい。これから楽しい楽しい闇のゲームの始まりよ」

「あ、あああ……」

殺される。レイは直感的にそう思った。

「デュ、デュエルで勝てば……・見逃してくれるの？」

「ええもちろん。だってこのゲームの敗者は魂を永遠の牢獄に囚われてしまうもの。貴女が勝てば、私はもう貴女を消せない。簡単でしょ?」

なにが簡単なものか。つまり、勝てなければ自分は殺されるのと同義だ。

「逃げようたって無駄。もう闇のゲームは始まってしまったもの。今から逃げようとするれば、サレンダーとみなして魂を奪わせてもらうわ」

「そんな……」

つまり、もう勝つしか生き残る術はない。

「さあ、さっさと構えて、そして死ネエエエ!」

「ひいっ!？」

構えなければ殺される。その恐怖に震えながらレイはデュエルデイスクを手を取った。

「じゃあ始めましょうか。デュエル！」

「デュエル……」

「お姉さん優しいから、貴女に先攻は譲ってあげるよ。さあ、ドロ―しなさい」

「ど、ドロー！ 私は『恋する乙女』を攻撃表示で召喚！ ターンエンド！」

周囲の間に脅えているのか、『恋する乙女』も不安げだ。

「……フフ。私のターン。ドロー！」

そんな怯えるレイと『恋する乙女』を満足げに眺めるさだめ。

「私は手札から『処刑人 マキユラ』を攻撃表示で召喚！」

「えっ!?!」

レイは驚愕した。なぜならさだめが出した『処刑人 マキユラ』は……。

「き、禁止カードでしょそれ！ なんでそんなの……」

「貴女こそ何いつてるの。これは闇のゲーム。公式試合でもなんでもない、いわば野試合と同じ。なら、禁止だの制限だのなんて些細な違いよ」

「そんな……ズルイ」

「アハハツ聞く耳持たなあ〜い。改めて自己紹介しておくわ。私はさだめ。『禁止スタンダード』の御堂運命よ」

さだめの掲げたカードから迸った雷撃が、レイの『恋する乙女』を貫いた。

「ああああああ!?!」

「さあ……闇のゲーム、本領発揮だよ？」

そして十代たちも、大徳寺の企画した課外授業で、闇のゲームと

いうものを体験した。まるで本当に自分が攻撃を受けているかのよ
うな衝撃。恐怖もあった。だが、だからと言って守護者の任を降り
るわけにもいかなかった。

課外授業を終えて、数日としないうちに、第一のセブンスターズ
としてダークネス。即ち、明日香の兄である天上院吹雪が十代とデ
ュエルした。結果は辛くも十代の勝利。しかし、そのデュエルで十
代は大きく体力を消耗した。

続いて襲いかかってきたのはヴァンパイアのカミューラ。相手の
モンスターを全て破壊し、自らの墓地からモンスターを特殊召喚す
る凄まじい効果を持った『幻魔の扉』というパワーカードを使い、
その上人質や蝙蝠によるデッキの盗み見等、卑怯な戦術を駆使する
難敵にクロノスとカイザーが敗れるも、またそれを十代が撃破。今
に至る。

その日、アテナは未だ意識の戻らない兄を看病している明日香に、
差し入れを持っていくため病室へと向かった。

「明日香さん。アテナです。入っても大丈夫ですか？」

ノックと共に声をかけるが、しばらく待ってみても反応がない。

「明日香さん？ 入りますよー」

仕方ないので一応断ってから扉を開く。

「あれ？ いない……お手洗いにでも行ったのかな……」

とりあえず差し入れをテーブルの上に置こうとして、そこに置か
れている一枚のカードを発見する。

「何、これ……『ウィジャ盤』……？」

明日香のデッキコンセプトにも吹雪のデッキコンセプトにも合わ
ないカードだ。何より、病室に置いておくには不吉に過ぎる。

「不吉……」

ふと、アテナの脳裏に『終焉のカウントダウン』を使っていたさ

だめの顔が過る。

「まさか、そんなことないですよね……」

いくらなんでも考え過ぎだ。そう思っただけに決めたアテナ。

だが、その日いくら待ってみても明日香が帰ってくることはなかった。

「明日香さん、どうしたんでしょう」

「明日香まで行方不明って……セブンスターズのこともあるし、心配だな……」

十代にも相談したが、今度は前回の行方不明騒動と違ってセブンスターズの脅威もある上に明日香は七星門の鍵も持っている。

「やられちゃった、とか……ないですよね？」

「大丈夫！ 明日香の奴、すっげー強かったじゃねーか！ 簡単にやられたりしねーよ！」

「アニキ！」

十代がアテナを励ますように明るくそう言った時、顔を真っ青にした翔が部屋に駆けこんできた。

「ど、どうした翔、そんなに慌てて……」

「お兄さんが……お兄さんがいなくなっちゃった！」

「なんだって!？」

「亮さんが……!？」

「それで……お兄さんの部屋の扉にこれが……」

そう言っただけで翔が見せたのは……『死のメッセージ「E」』。

「これ……って」

アテナは明日香がいなくなったときに見つけた『ウィジャ盤』のカードを取り出す。

「犯人からの……死のメッセージ……ってことか」

「じゃ、じゃあお兄さんは……」

「つかまってしまった可能性が非常に高いです……」

「そんな……」

「くそっ！」

あのカイザー亮が誰にも気づかれぬ内に易々と。まだ見ぬセブンスターズに、アテナたちは戦慄した。

「これ以上やらせるか！ 翔、他の皆に召集かけるぞ！」

「う、うん！」

兄が倒されたかもしれないと落ち込みかけた翔だったが、十代の言葉に急いで他の仲間たちに連絡をする。しかし……。

「あ、アニキ！ クロノス先生に連絡がつかないよ！」

「なんだって！？ 行くぞ翔、アテナ！」

「うん！」

「はい！」

イヤな予感がした三人は急いでクロノスの部屋へ向かう。そしてそこには……。

「あ……」

「そんな……」

扉の真正面にある壁に何枚もの『死のメッセージ「T」』のカードがTの形に張り付けられていた。

「エスカレートしてる……」

「『死のメッセージ』は、特殊勝利までの準備カード……ってことは」

明日香や亮、クロノスは即ちまだ準備運動でしかない、ということか。

「ねえ……確か死のメッセージはEの次はAだったはずだよ！？」

「それじゃ……まさか」

他の誰かがもう一人……。

「これは……なんとということだ」

「校長先生！」

愕然とするアテナたちの後ろに、何時の間に現れたのか鮫島校長が立っていた。

わけを聞いてみると、万丈目の部屋の惨状と、今起こっている異常を照らし合わせた結果、クロノスも危ないのではということ確かめに来たのだという。

「万丈目の部屋が……どうしたんだ？」

「……万丈目君の部屋が、カードで埋め尽くされていると連絡があったんだ。それでそこに行ってみたら……」

「何のカードが……あつたんですか？」

半ば確信していたが、そうでなければいいと願い、アテナは尋ねた。

「……『死のメッセージ「A」』が、部屋中に散らばっていたよ。でたために、部屋を荒らしまわった後のような酷い有様だった」

もう……その答えは明らかだった。

「み、みんな……」

「う、うそでしょ？ うそッスよね……？」

信じたくない。そう思って周囲を見回す翔だが、全員その表情は暗い。

「あと残るメッセージはたった一つ」

そんな中で鮫島校長が重苦しい口調で語り出した。

「最後のHが揃ったときはあまり考えたくありませんが……」
「待ってくれ……三沢は？」

「あ……」

守護者にはあと一人、三沢大地がいたはずだ。その彼はここにいない。一同に不安が走る。

「……行ってみよう！ 三沢の部屋に！」

「っ……」

「ひい……」

三沢の部屋。翔は思わず腰を抜かしてへたり込んだ。彼らの目に飛び込んできたのは、壁一面に五寸釘で打ち付けられた大量の『死のメッセージ』H』』。

「し、正気の沙汰じゃない……」

恐怖に震えるように鮫島校長が漏らしたそのセリフに、アテナはこれをやった犯人が誰なのかがわかった。わかって、しまった。

「さだめさん……」

「え？」

「これ……さだめさんじゃ……」

「は、はは。ま、まさか……」

その可能性に、流石の十代も顔を引き攣らせた。大いにあり得る可能性だ。

この陰湿で、恐怖を煽る悪質な手口。途方もない憎しみの込められたメッセージ。

「だとしたら……」

一行は全員、アテナを見つめた。さだめがここまでの憎しみを向ける相手はアテナ以外にいない。まだアテナが無事なもの、アテナの恐怖を極限まで煽るためだと考えれば辻褄も合う。

「けど、なんでオレは無事なんだ？」

「十代さんは、大抵誰かとずっと一緒にいたからじゃないでしょうか」

「もしくは、彼女が十代君を危険視しているからかもしれません」
「オレを？」

なんだかんだで、今までのセブンスターズを全員撃退してきたのは十代だ。そのことでさだめが十代を避けた、と考えるのはそれほどおかしいことでもない。

「よし、じゃあしばらく、アテナにもレッド寮で過ごして貰うって
いうのはどうだ？」

「ふむ……悪くはないと思いますが……」

「アテナはどうだ？ 寝泊まりするところは、それこそセツの部屋
使えば……」

こんな状況だが、セツの部屋で寝泊まりするというのを想像し、
アテナは顔を赤らめた。

「そ、それもいいかもしれませんがね。そうしましょう」

即決。特にためらいもなく、アテナはそうすることに決めた。鮫
島校長も特例として許可してくれ、アテナはしばらくの間レッド寮
セツの部屋で寝泊まりすることが決定された。

「じゃあ私、部屋から数日分の生活用品取ってきますね」
「気をつけるよ」

流石に女子寮に入るわけにもいかず、十代たちは女子寮前で待機
する。

「大丈夫です。寄り道せずに取って帰ってきますから」
不安をふっ切るように笑顔でそう言って、アテナは部屋に戻る。

「えっと、カギカギ……っ」と

ポケットから部屋のカギを取り出し、扉を開く。

「……………き」

部屋に一步踏み入った瞬間、アテナは思わず悲鳴を上げた。

「きゃあああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああ
あああああっ!？」

アテナの絶叫は外にいた十代たちにも当然聞こえた。その時ばかりはここが女子寮だとかいうことを忘れ、アテナの部屋までダッシュした。

「アテナ！ 大丈夫か！？」

「アテナちゃん！」

「あ、あ、あ、あ」

アテナの部屋の扉の向こうには……。

「……！？」

「あ……」

十代は絶句し、翔は一瞬意識を飛ばした。なぜなら、扉を開けた先にあつたのは扉と同じ大きさの『墓場からの呼び声』だったのだから。

「……クソ！」

十代がその巨大な『墓場からの呼び声』を押しつけて部屋に押し入ると……。

「……いらっしやい」

悪魔が、手招きをしていた。

「さ、さだめさん……」

「余興は楽しんで貰えた？ 蛆虫さんたち」

悠然とアテナのベッドに座るさだめはごくごく自然体で、普通に遊びに来た客をもてなすかのよう。この異常な状況下で、そんな『普通』は逆にどこまでも『異常』。

「ああそうそう。これ、さだめちゃんからのプレゼント。ありがとうございます受け取って」

そう言ってさだめがアテナたちの足元にばら撒いたカード。それは……。

「お、お兄さん！？」

「明日香たちも！」

『魂の牢獄』そう書かれたカードに描かれていたのは行方不明になった仲間たちの姿が。しかもそれだけではなく……。

「レイ……さん!？」

そう。その中にはつい最近友達になった恋敵、早乙女レイのカードがあった。

「ああ、その子ね。肩慣らしとしてさくつと」

それがどうしたと言わんばかりのさだめ。

「なんで……レイさんを……」

「私の趣向を邪魔した。兄さんに近づこうとした。ほら、有罪は確定じゃない」

「貴女……」

「さ、それじゃあ最後の最後。クライマックスと行きましようか。蛆虫」

さだめがデュエルディスクを構え、アテナに視線を向ける。

「待て! あんたの相手はオレだ!」

アテナを庇うように十代が立ち塞がるが、さだめはにべもなく否定する。

「お断り。私の目的はこの蛆。三幻魔とか、ぶっちゃけどうだつていい。それに誰が好き好んで主人公補正バリバリのチートドロ〜なんて相手にするものですか」

「しゅじ……?」

十代たちはさだめの言った意味がわからず困惑する。

「わ、私が勝てば、みんな解放してくれるんですよ?」

「さあ? してくれるんじゃないかな? 解放の仕方とかしらないけど」

「な……」

「大丈夫だよ。どうせテンプレで助かるように出来てるから」

さだめの言葉の意味はさっぱりわからない。わからないが……。

「ごめんなさい十代さん。やっぱり、ここは私にやらせてください」

「アテナ……」

「さだめさんとは、やっぱり私が決着をつけなきゃいけないと思うんです。だから……」

アテナの瞳に、強い決意の色を見た十代は、しびしび頷く。

「……わかった。けど、絶対無理すんなよ！」

「はい！」

「テンプレ展開乙。それじゃ、ここからテンプレを外れるとしよっか」

「『デュエル！』」

「私のターンよ。ドロ」

さだめはアテナを先攻にする気はないらしく、問答無用で先手をとる。

「私は手札から魔法カード『名推理』を発動」

「『名推理』？」

「さあ、モンスターのレベルを一つ宣言しなさい。蛆」

「え、えつと？」

「『名推理』は、私のデッキの上から通常召喚可能な出るまでカードをめくり、それが貴女の宣言したレベルだった場合それをそのまま墓地へ。そうでなかった場合はそのカードを特殊召喚するの。さあ、さつさとしてよ」

「じゃあ……レベル4」

アテナは、通常最もデッキに入る割合の高いレベル4を選択した。

「くふつ！ ええ。いいわ。じゃあ始めましょう」

さだめはすごい勢いでカードをめくり始める。レベル4はおるか、モンスターさえ全然出てこなかった。

「あいつ、めっちゃくちゃ事故ってるんじゃないか？」

「じゃあもしかして、結構簡単に勝てちゃったりするかも！」

「フフ……これでいいのよ」

「え……」

そしてようやくモンスターを引き当てる。

「レベル1！ 『サイバー・ヴァリー』を特殊召喚！」

「サイバー流モンスター！？」

驚く翔に、さだめは愉快そうに解説する。

「アハハッ！ 貴方のお兄さんとはとってもいい贈り物をしてくれたわ。おかげでこんなデッキが組めたんだもの」

亮を倒した際に奪い取ったのだろ。卑劣な行為にアテナは憤慨する。

「死力を尽くして戦った相手のカードを勝手に……！」

しかしさだめはまったくきにした様子を見せない。

「さて、続けよつか。『サイバー・ヴァリー』の効果で自身をゲームから除外して墓地の『マジカル・エクスペロージョン』をデッキの一番上に戻す。手札から『手札抹殺』を発動」

「え！？」

アテナの手札の『オネスト』『神の居城 ヴアルハラ』『光神 テュス』『ジェルエンデュオ』『紫光の宣告者』が全て墓地に捨てられる。その中の『紫光の宣告者』を見てさだめは本当に愉快そうに笑った。

「アハハハハハハハハハッ！ ああ良かった良かった。私ってば最高！ アハハッ」

「な、なんですか？」

「貴女の勝ちほぼなくなっただってこと。カードを三枚セット！

『サイバー・ヴァリー』を攻撃表示で召喚してターンエンド！」

さだめの狙いがわからない。一体何を思っただのデッキを破壊したのか。

「私のターン！ ドロー！」

とにかく、さだめの真意がどうあれ、何かする前に速攻でケリをつければ問題ない。そう思っただのもののようにカードを展開しようとして……。

「前に言ったでしょう？ 貴女には何も与えない」

「……え？」

アテナが自らのライフゲージを啞然として見つめる。

L P O

「貴女のスタンバイフェイズにトラップカード『マジカル・エクス

ブロージョン』を発動したの。『マジカル・エクスブロージョン』は、墓地の魔法カードの枚数×200ポイントのダメージを相手に与える。私の墓地にある魔法カードの枚数は23枚。合計4600ダメージで死亡確定」

「そ……な」

「貴女には何も与えない。加速する時間も、カードを発動する機会も……兄さんも。何も与えないし、全部奪うよ。貴女の持っているもの全部」

そう酷薄な笑みを浮かべるさだめの声を、アテナは何処か遠くに聞いていた。

声が、上から聞こえてくる。目の前が真っ暗だ。

(……あ、わたし、たおれてるんだ……)

十代や翔の呼びかけももう聞こえない。聞こえるのは、こちらを見下したさだめの声だけ。

「永遠の闇を彷徨うがいいわ。貴女のは特別製。苦痛絶望が延々と繰り返される闇の奥底に沈めてあげる。それでも正気を失うことができない真の地獄だよ。悶え苦しみ、後悔しなさい。兄さんに手を出したこと。永遠に」

そして、アテナの意識は闇へ吞まれた。

第十六話「そして誰もいなくなる」(後書き)

さだめ無双。やりたい放題です。彼女にとっては制限だの禁止だのは全く関係ありません。禁止や制限完全無視の禁止スタンダードに所謂マジエクワンキル。正に、勝てればなんでもいい。といった風情です。批判は覚悟の上ですが、さだめというキャラの性質上、むしろそんなことを気にしたデツキ構成をする方がらしくないと判断。

というわけで、もはや味方勢は壊滅です。さだめ一人で。描写こそされていませんが、他の仲間たちは皆原作知識をフル活用したさだめの『禁止メタ』によってフルボッコでした。さだめはまったく自重しないヤンデレです。いまだかつてここまで遊戯王のルール無視したデツキ使いがいただろうか。というくらいめちゃくちゃです。さて、今回は時間軸的にはカイバーマン。内容的にはセツの帰還かな？ セツの精霊界での出来事とかも多少描写するかと。

それでは、レーネスでした！

第十七話「三銃士」(前書き)

しつこいくらいに引つ張り続ける十七話です。いまだセツの新デ
ツキ出ず、現実には帰還もしていません。が！ デツキについてはヒ
ントが作中にありますし、何より次回がさだめ編最終話みたいな感
じなので最後の引つ張りです。セツの新デツキも次話でお披露目。
これは意地でも明日書き上げないといけません。

しかもまた過去最長記録。文字数にして8663字。一日で書く
のキツイよこれ……。なんだかんだでここまで連続更新なので、い
っそのこと最後までノンストップで行きたいところですね。

ではどうぞ！

第十七話「三銃士」

アルカナく切り札の騎士く

第十七話「三銃士」

「アテナ！ おいしっかりしろアテナ！」

「そんな……起きて、ねえ起きてよ！」

必死でアテナに呼びかける十代たちがまるで目に入っていないさだめはその脇をすり抜けて部屋を出る。が、その腕を十代に掴まれた。

「待てよ……今度の相手はオレだろ……！」

「はあ？」

何を言っているのかまるで理解できないとでも言いたげに眉をひそめるさだめ。

「オレとデュエルしろ！ それでオレが勝ったら、アテナたちを解放しろ！」

「やだ」

「なっ……」

にべもないさだめの拒絶。

「もうさだめの目的は九割方終わったもん。後はお兄ちゃんを探して一緒に生きていく。それだけで十分」

お兄ちゃんを探して。つまりそれは、セツの居所をさだめも知らないということ。

「まあお兄ちゃんならそのうち自分からさだめに会いに来てくれるよ。だってお兄ちゃんだもん」

無邪気でありながら魔性の色しか感じられない不可思議な笑顔を浮かべる。

「それより、そろそろ手を離してよ。さだめのカラダに触れていいのはお兄ちゃんだけなんだから」

振り払おうとするが、十代はしっかりと握って離さない。

「オレとデュエルしろ。そうしたら離してやる」

「……もう、仕方ないなあ……」

「やれやれと溜息を吐き、さだめはデュエルディスクに手を……伸ばさなかった。」

「闇よ……」

「なっ!?!」

「さだめの周囲から闇が噴き出し、十代を呑みこもうとする。慌てて十代は手を離して後ろに下がる。」

「アニキ!」

「大丈夫。なんともない」

「じゃあ、さだめは帰るね。蛆虫さんたちは闇と遊んでるといいよ。そう言い残して、さだめは己の創りだした闇の中へと消えていく。後に残されたのは、アテナの部屋を覆う闇と、その中に閉じ込められた十代たち。」

「十代は気を失っているアテナを背負い、逃げ出す準備を整える。」

「くそっ! どこから出れば……」

『クリクリ』

「ハネクリボー!?!」

「迫ってくる闇を、ハネクリボーが被っていた。」

『クリ〜!』

「そのハネクリボーが示す先には出口の光。」

「よし! 助かったぜ相棒! こっちだ! 翔!」

「え? え?」

「いいから走れ!」

「う、うん!」

「闇を抜い、出口へ導く。十代たちは、ハネクリボーのおかげでなんとかことなきを得たのだった。」

「……そうですか。アテナ君までも……」

話の経緯を聞いた鮫島校長は両手を組んで額に当て、俯いた。その口から深い、深い溜息が洩れる。

「これで……残るは十代君ただ一人。いよいよ進退窮まりましたか……」

「校長先生……」

アテナを救えなかった無力を悔やむ十代。そんな十代に、鮫島校長は名案を思い付いたと言うように明るく声を上げた。

「そうだ！ 君たちは今日温泉にでも入ってくるといい」

突然の提案に十代たちは困惑した。

「えー？ いや、今はそんな場合じゃ……」

「十代君も二度にわたるセブンスターズとのデュエルや、さだめ君との一件で疲れがたまっているだろう。疲れの溜まった体では、満身に戦えない。戦士には休息も必要だよ」

「けど……」

「いいから、行ってきなさい。気分転換もしなければ、今度はキミも倒れてしまう」

「……はい」

しぶしぶ、といった感じで頷く。疲れがたまっているのも事実だ。闇のゲームはそれだけ体力と精神力を使う。さだめの一件ではなおさら精神力を消耗した。

「アニキ……」

「行くうぜ、翔。校長先生の言うとおり、オレもちよっと疲れた」

「うん……」

鮫島校長の提案を受け、十代は翔と共に校長室を後にした。

「うおっ。でっけー風呂だなー！」

「レッド寮の風呂とは段違いなんだなあ」

「温泉というより、スパリゾートみたいなところツスね」

校長室から退出した後、早速十代たちは隼人も誘って三人で温泉に来ていた。

「おー！　ここなんかプールみたいで楽しいな！」

「だからって泳いじゃダメツスよ！」

「へへっ！　……」

十代は湯に潜り、翔のタオルをはぎ取った。

「あっ！　こらー！」

「こっちこっち！」

「待てー！」

「結局翔も泳いでるんだなあ」

そうして十代が束の間の休息を楽しんでいると、ハネクリボーが何かを伝えたそうに十代の周りをクリクリと舞う。

「どうしたハネクリボー」

『クリ〜』

まるでついてこいとも言うつように飛んでいく。

「お〜い……なんなんだ？」

『クリクリ〜』

「へ？　うわっ！？」

突然床が抜けたような浮遊感と共に、十代は温泉の底へ沈んでいく。

「うわあああああああ！？」

十代が落ちた先にあったのは精霊界であった。後から落ちてきた翔、隼人と共に奥へと進むと、その先に待ち構えていた『正義の味方カイバーマン』と出会った。

「『青眼の白龍』が貴様と戦いたがっている」

カイバーマンはそう言っつて十代にデュエルを申し込む。

船で島から出た様子もなく、港と反対側。即ちここへの入り口のある温泉に向かったという目撃証言もある。

考えれば考えるほどにセツである気がする。

「その人間さんならボク見たよ」

「ホントか!？」

聞き込みに反応して声をあげたのはハッピーラヴァー。そう、セツがこちらにやってきたときに空をふよふよ飛んでいたハッピーラヴァーだ。

「うん。ルインさまのお供の人間さんでしょ？」

ルインのお供。目撃証言でもルインと一緒にであることが確認されているし、間違いなさそうだ。

「今、どこにいるかわかるか!？」

「わかんない」

「そっか……」

「それはわたしが知ってますの!」

そう言って飛び跳ねているのはキーメイスだ。小さくて可愛らしい体で一生懸命飛び跳ねながら自己アピールしている。

「今その人間さんは、ルインさまとかと一緒に色々な種族の里を回っているようですの」

「色々な種族の里？」

「特に天使族の多い辺りによくいるのです。わたしも何度か御挨拶をさせていただきましたの!」

セツと会ったのがそんなに嬉しかったのかぴよんぴよんと飛び跳ねまくって喜びを表している。

「よし! じゃあ早速その天使族の里に……」

「……その必要はない」

十代たちが天使族の里に案内してもらおうとした時、聞き慣れた、けれど久しぶりに聞く声がある場に響いた。

「セ、セツ？」

「……久しぶりだな。十代」

そこにいたのは、一体何があつたのか服を見るも無残なまでにボロボロに炭化させ、体中やけど塗れなセツの姿。

「セ……ツウ！ この馬鹿野郎ー！」

「がっ！」

十代はセツの顔に思い切り拳を入れる。始めからよろよろだったセツはあっさり吹っ飛ばされ、壁に背中を打ち付ける。

「……つつ。効いたあ……。いきなりずいぶんなご挨拶だな」

「お前な……！ お前がいなくなってどれだけアテナが……」

「……ああ」

「それに、今アテナは……！」

十代は今、アテナがさだめに倒されて魂を捕えられていることを説明する。

「……さだめの奴。早まりやがって」

セツはその事実の苦々しげな表情を浮かべたものの、随分と落ちていたものだった。その様子に十代は思わず掴みかかる。

「なんでそんなに落ち着いているんだよ！？ アテナがやられたんだぞ！ アテナだけじゃない。他の皆だって！」

「……予想はついてたからな」

「なんだって！？ じゃあなんで戻ってこなかったんだよ！」

「……今のままじゃさだめを止められない。アテナたちを助けることができない。だから俺はここにいる」

「……どういうことだよ？」

「さだめを事前に止めるだけなら、あいつが闇に落ちる前に俺があいつの所に行けばさだめが暴走することもなかったさ。でも、それじゃダメなんだ」

それはつまり、セツが一生さだめの奴隷になるに等しい。だがセツも、それで全てが解決するなら迷いなく自分からさだめのところに向かっただろう。

「……俺はアテナたちを救うと同時に、さだめのことも救ってやらなくちゃいけない。そのためには、まだ俺には力が足りてなかった」

セツは思い出す。あのネイキッドとのデュエルの後、そのネイキッドに言われた言葉を。

「セツ。お前にあのデッキは合わない。お前はデッキを変える」

「……………え？」

長い沈黙の後、俺はそう漏らすのが精いっぱいだった。と同時に、『ガシャンッ！』

何かが落ちて割れる音。驚いてそちらを見れば、そこにはお見舞い用なのか切り花の差してあったはずの壊れた花瓶と立ち尽くすクイーンの姿。

「く、クイーン……………」

「……………っ！」

俺が言葉をかけようとする、クイーンはハッとして走り去ってしまう。

「クイーン！」

「お待ちください主様！」

「ジャック!? どうして……………」

どうして止める? と聞き出そうとする前に、ジャックから口を開いた。

「まずはネイの話をお聞きください。クイーンについては、今は私が……………」

「……………わかった」

ジャックの表情に本気の色を見て、俺はしぶしぶベッドに戻った。

「……………ではネイ。主様を」

「おう。サンキュな」

ネイの感謝に一つ頷き、ジャックはクイーンを追って走っていく。

「……………さて。予定外のアクシデントがあったが、話を続けようぜ」

「ああ……」

正直クイーンを追いたい気持ちもあるが、ネイキッドも逃がすつもりはなさそうだ。

「お前とさつきデュエルしてみて、我が抱いた感想なのだがな。お前さん、デッキの構築能力とか運用、タクティクスの面ではすごく優秀だ。なんだが……どうも攻撃が下手くそだな。戦闘に入るときに迷いが見える」

実際、最初のターンの攻撃は迂闊だった。確かに返し of ターンで『ライトニング・ボルテックス』を使われればどっちにしろ全滅だったわけだが、それでも迂闊な攻撃だったことに変わりはない。

「んで、デッキのコンセプトも妙に戦術色が強い上保守的。あいつら使っんなら『メタモル・ポッド』とかもいいが、戦士族で統一して『一族の結束』とかを入れた方が攻撃力も高い。『オネスト』だのも優秀だが、やっぱり後手後手に回るカードだ」

確かに、それも言えている。種族統一は何かとおいしい面が多い。『一族の結束』然り『不死武士』然りだ。

「というか、自分から攻めるのに向いてないんだな。お前は……」

それは自分でも思っていたことだ。

「デッキもお前さんを信頼して、お前さんもデッキを信頼してるから、ある程度回りはいいしこぞという時いいカードも引ける。……だが、それでもセツは根本的にビートダウンに向いてない。それじゃあ、相手の回りが悪かったり相手が愚図なことしない限り勝てねえ」

セツは今までのデュエルを思い返す。試験官戦は、自分の初期手札が神懸かり的なほどに揃っていたので論外。

アテナ戦。思えばアテナは除去カードが思うように引けず、最後まで攻撃するしかなかった。

試験でのブルー生徒戦。デュエル前に相手の平常心を乱し、プレイングミスを誘導した。

タイタン戦が一番まともだっただろうか。それでも、あの時『墮落』を使われれば負けていた。

さだめ&ルイン戦。これは明らかだ。自分は何もできなかった。アテナに全てを任せ、自分は事前のデツキ構築で助言しただけ。

「そして、我に負けた」

「……」

「わかるな？ セツにはビートダウンは向いてない。これはもう明らかだ」

「……けど、俺の相棒は……」

「わかつてる。だが、やつらも騎士の端くれ。自分たちに固執された揚句主が負けたんじゃ、奴らだって気に病むさ」

「それはそうだが……」

「……まあ、我の話はこれだけだ。後は、自分で話してくるんだな。お前の『相棒』たちとよ」

「ああ。わかった。ありがとう」

「気にすんな。我とて、気に入った人間がやられるのなぞ気分のいいものじゃない」

「それでも、サンキュ」

俺は最後にもう一度お礼を言って、クイーンたちの後を追うのだった。

『申し訳ありません主様。クイーンの方は、もう少しお時間をくださいれば……』

「……そっか。わかった。じゃあまた後で来るよ」

『はい』

クイーンの部屋まで行ったはいいが、ジャックに追い返されてしまった。

キングはどこだろう。ちょっとバルコニーにでも出て探してみる

か。

「……いないな」

バルコニーから城の中庭を見降ろすも、その景色の中にキングの姿は見えなかった。

「……」

俺は、どうすればいいんだろう。

確かに、最近デッキに力不足というか、自分とのシナジーを感じていなかったのは事実だ。ビートダウンは楽しいし、アルカナは好きだが、やはり使い辛い。どこか運用するのに違和感が付きまとうのだ。これから先、セブンスターズや光の結社。異世界と敵も強くなっていく中で、今のままでは生き残れない。

「でも……」

それでも俺は、クイーンたち『絵札の三銃士』が好きだった。彼らをずっと相棒として傍に置いておきたい。一緒に戦っていききたい。そんな気持ち捨てられない。

「……ひどく悩んでおるようじゃな」

「キング……」

思い悩む俺の前に、探していたキングが現れていた。その顔はいつもの好々爺然としたものではなく。紛れもない騎士としての顔。

「……ああ。違和感を感じてたのは最初からだ。でも、それ以上にお前たちと戦うのが楽しくて……考えないようにした」

「儂らも、主とともに戦場に立つのには胸が躍った。久しぶりじゃったよ。あんな高揚感は。クイーンなぞ、事あるごとに儂やジャックに惚気ておるわ。いかに主が素晴らしい主かと」

「冗談めかしてほっほっほと笑う。空気が少し和んだ。

「……じゃから、儂らにとって何よりも恐ろしいのは、主と戦場に立てなくなること……」

「……………」

「では、ないんじゃない」

「……………え？」

あっさりと言を撤回したキングは優しい、年長者特有の安心する笑みを浮かべていた。

「儂らがな。真に一番恐ろしいのは、主が儂らの所為で敗れること。儂らが強く、凛々しい主のお姿を見れなくなる。それが、一番なのじゃよ」

「キング……………」

「主が儂らを好いてくれているように、儂らとて主を心から好いておる。主には、どうか儂らに縛られず、伸び伸びと主らしく戦って、そして勝って欲しいのじゃ」

もちろん、これはクイーンやジャックとて同じことじゃと言って、キングはまた笑った。

「クイーンは特別に主を好いておったから、まだ気持ちの整理がつかないだけじゃ。そろそろ落ち着くころじゃし、行ってやってください」

「ああ。ありがとうキング」

そして、ごめん。

「なあに、お安い御用じゃ」

キングは更に謝る必要はない、とも言ってくれた。……………聞こえない様に小声で言ったんだけどな。

コンコン。

少し緊張しつつ、クイーンの部屋の戸をノックする。ガチャリと扉が開いて中からジャックが顔を見せる。

「お待ちしております。クイーンもようやく落ち着きましたよ」

「ああ。ホント、お前にはずっと世話をかけるな。ジャック」

「なんの。いままでも、そしてこれからもずっと、私は主様のサポートをさせていただきまますよ。どんな形であれ、ね」

「……そっか」

参ったな。先に答えを返されちゃった。相変わらずよく気がつく男だ。

「クイーン……」

部屋のある中心にあるベッドで、クイーンは鎧を脱ぎ捨て、アンダーウェア姿で膝を抱えていた。

「主様……」

「クイーン、俺は……」

「申し訳ございませんわ。先に、わたくしの話をさせてくださいませ」

「……ああ」

クイーンが何故そこまで俺を慕ってくれるのか。それはずっと気になっていたことだ。

「……わたくしたち『絵札の三銃士』は、今まで特定の主を持っておりませんでした」

そう言えば最初にクイーンたちが出てきたとき、ジャックが言っていたな。ようやく出来た主だと。

「それというのも、わたくしたちは昔から扱い辛いとされて、誰にも手を取って貰えなかったからなのです」

え？ でも確か遊戯が……。

「……確かに、わたくしたちを最初に使ってくださいしたのはデュエル王、武藤遊戯様です。ですが、それでも所詮は神への布石。捨て駒。生贄のための騎士扱い」

……あー、それは確かに。まともに『絵札の三銃士』として活躍したのは遊戯王Rの時くらいか。

「そのわたくしたちを、デッキの中核に据えて、多くのデュエルを戦い抜く主。わたくしは昔から、それを夢にまで見ていたものです」
そして、その主は現れた。

「はい。その上主様はわたくしたちカードの精霊と心を通わすことのできる稀有なお方。精霊を顕現させる能力まで持っているわかり、狂喜したのを覚えていますわ」

「それで……俺に、か」

しかし、クイーンは首を振って否定する。

「それだけならば、ここまで心が拒絶することはありません。わかっているのでしょうか？ わたくしの気持ちも」

「そりゃ、な」

あそこまで明確に態度で表わされれば、どれだけ鈍感でもそうと気付く。

「きっかけはそれ。けれど育っていった心はわたくし自身が育てた紛れもない本物。……今更主様とお別れなんて、できるはずがありません」

「クイーン……」

「もちろん、主様がわたくしたちを捨てるなどとは思っておりません。ただ、それでもわたくしは、何か一つでも、主様と繋がりが……決して断ちきれぬ絆が欲しいのです」

絆、か。

デッキとして使う以外に、明確な絆が欲しい。クイーンの望みはそれだ。

「希^{shin}牙^{gaha}姫……」

「えっ……」

「お前の名前だ。ずっと考えてた」

月一試験の時。明らかに名前を欲しがっている様子だったから、なにかいい名前はないかと考えてた。やっと、思い付いた。

「希望^{kibou}の剣、^{shin}牙^{gaha}わたる姫。そんなところか。それと、クイーンだから妃^{きさき}つてのもある」

安直かもしれない。でも思い付いたらそれ以外に思い付かなかった。

牙^{gaha}えわたる、希望^{kibou}の剣をその手に構え、俺のそばで見守ってくれ

るお姫様。

「希冴姫……」

「どうだ？ これじゃあ、俺との絆にはならないか？」

「希冴姫……」

クイーン……いや、希冴姫は何度もその名前を呟き、心と体に馴染ませるように体を抱きしめる。

「十分ですわ……ありがとうございます。セツ様……」
希冴姫は始めて見るかもしれない満面の笑顔で俺を見つめる。セツ様、という初めての呼び名に、俺が戸惑っていると、ジャックが一度手を叩いた。

「っ！」

「うあっ！？」

「さて、話は纏まったようですね」

「じゃ、ジャック……脅かすな」

「そ、そうですね。も、もうちょっと空気を読んでくれても……」

「いえ、このままですと私とキングの存在を忘れたままベッドシーンにでも突入する勢いでしたので。流石にここらで止めるべきかと」
「べ、べ、ベッド……っ！？」

ぷしゅー。と蒸気を上げて希冴姫がオーバーヒート。目を回してベッドに倒れ込んだ。

……ちよつと面白かったのは内緒だ。

「やーれやれ。せつかく想いの一端が叶ったと言つに、相も変わらず純情じゃのう」

いつの間にかやってきていたらしいキングも嘆息気味だ。

「それでは主様。これから我々一同、これまでとは違った形でサポートさせていただきます」

「……ああ。そうだ、お前らも名前、考えないとな」

「はは、我らの事は後回しで構いませんよ。それよりも、新しいデツキのことですが」

「ああ。大体どんなデッキがいいかは決まっているんだ」

「そうでしたか。それでは、これからその使う精霊と契約しては？」

「……そうだな。ホントは今すぐにも人間界に戻ってアテナにも謝りたいけど……」

「はい。まずは御自身の方を固めるのがよろしいかと。どうやら今度の相手は一筋縄ではいかないでしょうから」

「……今度の相手。俺の予想では、十中八九それはさだめだ。あいつとは、色んな意味で決着をつけなくちゃならない。そしてあいつは、一筋どころか二筋も三筋もいかない。万全の態勢を整えていく必要がある。」

「よし、希冴姫の準備が整い次第、出発しよう。あんまり時間をかければ手遅れになる」

精霊のカードが持つ力は未知数。だが、その力は必ず俺を助けてくれる。せめて切り札級のあいつは精霊のカードとして着いてきて欲しい。

「待つてろさだめ。必ず、お前も救って見せるから」

回想を止め、現実に戻還する。

「十代。俺もお前と一緒に人間界へ戻る。アテナたちと……さだめを助けるために」

「……ああ。まだお前に言いたいこととかぶっ飛ばしたい気持ちとかあるけど、その辺はアテナのために取っておく」

「そりゃ怖い。アテナにはたかれるのなんて、想像したくないな」

「自業自得だろ」

「違うない」

互いに笑みを交わし、俺たちは人間界へと帰還する。

さだめと決着をつけ、皆を……アテナを助けるために。

第十七話「三銃士」（後書き）

クイーン、もとい希冴姫フラグ完成です。……うん。アテナほっぽって何他のフラグ強化してんだテーマって感じですね。

しかも盤石。希冴姫フラグがこれ以降折れる気配がないくらい濃厚に立ちやがりました。まあこれ以降は希冴姫イベント特になんてですけど。

で、キングがようやくまともに目立った……はずだけど、やっぱり希冴姫フラグの強烈さに押され、微妙に目立ってない気も……。

ジャックはもう執事でいいと思います。配役としてはキング＝旦那さま・希冴姫＝お嬢様・ジャック＝希冴姫の執事で……うん、十分これでなんかイケる気がしてきました。

それでは、レーネスでした！

第十八話「埋めてくれたよ……」（前書き）

さだめ編クライマックスの第十八話！……なのに長さはいつもよりも短いという。

セツの新デッキ。意外なほど誰にも当てられなかったです。割とわかるかとも思っていました……まあとりあえず、セツの強さを見よ。みたいな感じで第十八話、どうぞ！

先手を打ってやる。さだめはピクリとコメカミをヒクつかせた。

「……………どうして?」

「わからないか?」

「わかんないよ!」

そうか。なら言っただろう。

「お前が、アテナたちを倒したからだ」

「っ!?!」

もしここでさだめのものになる選択をしても、アテナたちは戻ってこない。さだめとデュエルして、勝たなければアテナたちの魂は解放されない。さだめの闇を、被わなければ。

「わかるかさだめ! お前のやったことは、俺を頑なにさせ、自らの首を絞めたと同じだ! もう、選択肢は一つしかない」
即ち。

「お前が負けて、皆を解放するか。俺が負けて……………お前のものになるか、だ」

「なら……………倒してあげるよ! 完膚なきまでに!」

そうだ。それでいい。

「じゃあやろうか。さだめ。俺の方こそ……………完膚なきまでに叩きのめして改心させてやる!」

「セツ!」

「止めてくれるなよ十代! お前にも思うところがあるかも知れんが、ここだけは何が何でも譲れない!」

「……………あつたりまえだろ! 絶対に、負けんじゃねーぞ!」

「それこそ、言われるまでもない!」

さあ、始めるか。

「「デュエル!」!」

俺とさだめの、最後の決闘!

「さだめ! 俺はもう、お前に何物も奪わせはしない! 俺のターン! ドロー! 俺は『豊穣のアルテミス』を守備表示で召喚! カードを二枚セット。ターンエンド!」

俺は助けるんだ。アテナたちだけじゃない。こいつを……俺の大事な妹を！

「私のターンだよ兄さん。ドロー！ さだめは『終末の騎士』を攻撃表示で……」

「カウンタートラップ『キックバック』！ 『終末の騎士』の召喚を無効にして手札に戻す！」

「っ！？ パーミッション……くすすつ！ なんだ、お兄ちゃんらしいデツキだね。なあに？ あの貧弱なお姫様は遂にリストラ？」

「……俺は『豊穰のアルテミス』の効果でカードを一枚ドローする『アハハツ！ まあなんでもいいや。そっちの方が兄さんらしくて私好き。私は手札から『闇の誘惑』を発動！ デツキからカードを二枚ドローして手札の闇属性モンスターを一体ゲームから除外。除外するのは『ネクロフェイス』！」

「永続トラップ『便乗』発動！」

「……まあいいよ。『ネクロフェイス』の効果発動！」

不気味な顔の人形らしきものが何処かへと消える。

「『ネクロフェイス』が除外されたとき、お互いにデツキの上から五枚を除外するよ！」

互いのカードが除外される。だが、その中にあるカードを見つけた。

「私はカードを三枚セット。ターンエンド！」

「……俺のターン。ドロー！」

手札は五枚。頭の中で戦力を練る。現在の手札で出来ること。勝つためのタクティクス。

「俺は『救済のレイヤード』を守備表示で召喚！ カードをさらに三枚セット！ ターンエンド」

「あんなに伏せるのかよ……」

「私のターン！ ドロー！」

「永続トラップ発動『シンセテエツンザエル人造天使』！」

俺は布石として、永続罠を発動させておく。これで、態勢は整っ

た。

「アハハッ！ 私は手札から『ハーピイの羽箒』発動！」

「なっ！？ 禁止カードじゃねーか！」

「ズルイッス！」

後ろで十代たちが驚いているが、俺はさだめならそれくらいやる
と端っからわかってたさ！

「もう何も奪わせない！ 俺のカードも、ライフの1ポイントだつ
て奪わせるか！ カウンター罠『魔宮の賄賂』！ 相手にカードを
一枚引かせる代わりに魔法・罠カードの効果を無効にして破壊する
！」

「つく……わ、私は『魔宮の賄賂』で一枚ドロ……」

「『便乗』！ カードを二枚ドロ！ カウンター罠『強烈なはた
き落とし』！ 相手がカードをデッキから手札に加えた時、そのカ
ードをそのまま墓地に捨てる！」

「そんなんっ……！」

「二枚のカウンタートラップが発動したことにより、『豊穡のアル
テミス』の効果でカードを二枚ドロ！『救済のレイヤード』の効
果で除外されていた『裁きを下す者 ボルテニス』『智天使ハーヴ
エスト』の二枚を手札に戻す！『人造天使』の効果で『人造天使ト
ークン』を二体特殊召喚！」

「す、すげえ……相手には何させずに自分だけ……」

「さらに、カウンター罠が発動されたことにより、俺は手札から『
裁きを下す者 ボルテニス』を、自分フィールドの全てのモンスタ
ーをリリースして特殊召喚！」

俺のフィールドのモンスターたちが、一斉にはじけ飛ぶ。

「ボルテニスの効果発動！ リリースした天使族モンスターの数だ
け相手フィールドのカードを破壊する！ 裁きよ！」

俺のリリースした天使族はトークン含めて四体。さだめのフィー
ルドには三枚のリバースカード。それら全てをボルテニスの雷が焼
き払う。

「うああああ!?!」

「こ、これ、妹さんのターン……だよな?」

「すごい……まるでセツ君のターンみたいにカードを展開してる」
「さだめ……。思い出してきたよ。これが俺だ。」

「つく!? そんな……ま、またそんなあり得ない引き……」

「あり得なくない。俺とこのデッキなら、絶対に出来ると確信していた」

なぜならこれが、俺と最もシナジーするデッキ。そう、これこそが自分から攻めるのが不得手で、迎撃することが得意な俺に合ったデッキ。言っなれば……。

「ずっと俺のターンだ!」

考えに考え抜いた。俺にシナジーするデッキ。『現実』の俺に合っていて、『この世界』の俺が持っていたビートを楽しむその気持ち。全てをひつくるめた『俺』そのもの!

「これが、俺の新デッキ」

「エンジェルパーミッション!? このつ……私はモンスターをセツトしてターンエンド!」

「俺のターン。ドロロー!」

さだめ……今のお前は、悪い夢を見ているんだ。

「俺は『智天使ハーヴェスト』を攻撃表示で召喚!」

お前の歪み。お前の狂気。お前の『運命』さだめ

「バトルだ! ハーヴェストで守備モンスターを攻撃!」

俺が断ち『切』る!

「ぐう! 『クリッター』の効果で『黒き森のウィッチ』を手札に加える……」

「ボルテニスでダイレクトアタック!」

元の世界は、辛かったよなあ……さだめ。

「あああ!?!」

さだめLP1200

「カードを三枚セット! ターンエンド!」

どこに行っても、お前は悪魔呼ばわりで……。

「ぐ……うあ……わ、たしのターン」

ずっと、狂気の裏で泣いてるお前を……見ているのが辛かった。

「認めない……お兄ちゃんは、絶対絶対、ずっとさだめと一緒にいるの……誰にも邪魔されない……二人だけの世界で、生きていくんだッ……！」

皆お前を恐れて、壊れてしまっただけ……。

「もう……もういい……もう、眠れ」

俺は……俺だけは、壊れなかったから……お前は俺に縋るしかなかったんだ。

「いやだやだやだやだあ！ 全部、全部消えちやえ！ 『幻魔の扉』

！」

苦しみも痛みも、全部俺と一緒に背負うから。

「！ あれはカミューラが使った……」

お前を、絶対に一人にはしないから……。

「私と兄さん、二人の魂を！」

だから……。

「させない！ させるか！」

今は……。

「カウンター罫『封魔の呪印』！ 手札から『光の護封剣』を捨てて無効化！ 貴様には、もう何も奪わせない！ さだめをもっ、苦しめるな！ 幻魔あ！」

今だけは……。

「眠ってくれ……！ 魔法カードを無効化したことによって、手札から効果を発動する！」

さだめ……俺の妹

「こいつは、お前のカードの効果をカウンターしたときに発動する！」

目が、覚めたら……

「魔法カードの効果が無効にした場合、召喚と同時に相手ライフに1500ポイントのダメージを与える……」

きつと……

「いや……いやぁ……」

世界は優しいから……

「さだめ……さだめの狂気……冥王の咆哮にて消え去れ！」

やってしまったこと、償おう……

「さあ……姿を見せろ……」

俺も……一緒だから

「冥王竜……」

一緒に償うから……だから！

「ヴァンダルギオン……！！」

お前は、ここで眠るんだ。

「うあああああああああああああああ……」

新しい朝を、迎えるために

「俺の、勝ちだ。さだめ！」

さだめLPO

「……あ」

闇が消し飛び、後に残ったのは、一人の、なんの力もない、女の子。

「うあ……え、えええええん……えぐっ、うあああああん……」

「さだめ……」

「お、兄ちゃん……うあ……」

「だいじょうぶ。だいじょうぶだよ……」

ゆっくり、包み込むように抱きしめる。

「お兄、ちゃん……」

「なんだ？」

俺の腕の中にいるさだめが、消え入りそうに小さな声を出す。

「さだめはね。生まれた時から、なかったの……」

「なにが？」

「……心の、一欠片」

まるで、イヴを創るため、肋の一つを掠め取られたアダムのように。

「順番は逆だけど……お兄ちゃんが、さだめにとってのイヴなんだって……思ってた」

欠けたココロ。それを埋めてくれるヒト。

「ホラ……」

埋めてくれたよ……。

そう言っつて、さだめは気を失った。

「セツ！ それ……」

「！」

さだめの影で、黒い霧のようなものがくすぶっている。

「こいつか……！ さだめの闇の根源は……！ ルインー！」

「っ！」

ルインが杖を振る。『ソレ』はさだめの影から追い出され、苦しげにうめいた。

「『終焉の精霊』か！？」
ジ・エンド・スピリッツ

「コイツ……コイツが！」

ルインの目が憎悪に染まる。

旅の途中、ルインから聞いた。ルインの街を滅ぼした元凶。デミスにとり憑き、終焉の王へと仕立て上げた邪悪な精霊！

「消えてっ！」

『ギイイイイイツ！？』

ルインの放った光弾が、闇の塊のような精霊を貫く。俺も、さすがにあいつは許せそうにない。

「ヴァンダルギオン！ あいつを……焼き尽くせ！」

『ゴオオオオオオオオオオオッ！！』

俺が必死の思いで契約した精霊、ヴァンダルギオンはルインによつて粉々になったその欠片を一欠片も残さず蒸発させる。

「これで……」

「全部、終わり」

ペタンとルインが地べたに座り込む。積年の恨みを果たし、気が抜けたのだろう。

「それにしても、あれは一体いつから……」

さだめの中にいたのか。あのタッグデュエルの後からだろうか？

「……それは違う」

だが、俺の考えはルインによって否定された。

「そもそも私がこの子に近づいたのも、この子から仇の気配を感じたから」

だとしたら……こちらの世界にやってきてすぐ？ いや、でもタッグデュエルの時、さだめからはいつもと同じ感覚しか受けなかった。じゃあ……？

「多分、最初の最初から」

「……おい、待て。じゃあまさか……」

思い出せ。さだめが最初におかしくなったのは何時だ？ どこからさだめは『外れ』た？

「さだめが……二歳の頃？ いやでもその頃俺とさだめは……」

こちらの世界にはいなかったはず。

「わからない。でもよく考えて。キミがさっきまでいた精霊界も……」

……」

異世界。

俺は愕然とした。そうだ。俺は渡ったじゃないか精霊界という異世界に。それに、未だに俺とさだめがこちらに来た原因はわかっていない。だが、こちらに飛ばされてくることのあるならその逆もあって不思議ではない。

「じゃあ……まさか本当に全部……」

あの精霊が原因だったのか。

「その可能性は高い」

「じゃあ……じゃあこれでさだめは……」

「治る。少しの歪みは残るかもしれないけど、矯正できる範囲」

「は、はは……」

良かった。

「ほんとうに……さだめ！」

溢れてくる涙が止められそうにない。俺は腕の中で眠るさだめを更に強く抱きしめる。

「……！ セツ、皆の魂が……！」

十代が持つカードから、人魂のようなものが飛んでいく。これでさだめに負けた皆も目を覚ますはずだ。……それに、アテナも。

「……お兄ちゃん」

「さだめ？ すまん、強すぎたか」

強く抱きしめすぎたかもしれない。苦しかったかと問いかけると、そうじゃないと首を振って答えた。

「アテナさんのところ……行くの？」

「……ああ」

「じゃあ、さだめも行く」

「え？ けど……」

さだめはゆっくりと立ち上がり、俺を見上げた。

「さだめは、謝らなくちゃ。許される許されないは関係なく、元凶がいたとかも関係なく……やってしまったことへの責任、果たすよ」

「さだめ……」

「それに、さだめはあの精霊によってずっと歪んでいたけど……元々は、皆さだめの願望だったから……お兄ちゃんが好きなのも……やっぱりさだめの本当の気持ち」

「それに、決着をつけるのか？」

俺が尋ねると、さだめはふるふると首を横に振った。

「決着するんじゃないよ。スタートラインに立つために、さだめは行くの。でもまずは……責任を果たすの」

「……わかった。行こう」

「うん！」

「そういうわけだ。十代、いいか？」

十代はまったく躊躇いもせずに頷く。

「おう！ セツ……」

「なんだ？」

「妹さんが治って、良かったな！」

……ははっ！ 本当に、こいつは……。

「ああ！ まったくだ！」

アテナたちは病院の個室でそれぞれ寝かされているという十代の後に続いて病院まで走る。

「！ セツ、あれ！」

「どうした!?!」

十代が指差す先に、窓が割れ、カーテンが風に靡いている病室が見えた。

「あそこの部屋……たしかアテナの部屋だ！」

「なんだと!？」

慌てて病院に駆け込み、その部屋に向かう。中は……もぬけの殻だった。

「アテナ……?」

「置いてあったデュエルディスクもなくなってる……」

「どこに行ったんだ……アテナ」

俺の呆然とした表情が、風に流れて消えていった。

第十八話「埋めてくれたよ……」（後書き）

さだめ編、完！……いやいやまだアテナが残っております。つかここで終わらせたらアテナじゃなくてさだめエンドです。あれだけ好き放題やってきたさだめがあれだけ健気になんばってきたアテナ差し置いてゴールインしちゃったら流石に……ねえ？

いくつか割と唐突な設定があったので補足とお詫び。

まず『終焉の精霊』とルインの因縁ですが、いずれ番外で書くかと。ネイキッドが言っていたデミスがいきなり街を滅ぼした、その原因です。一応、ものすごくわかりにくい伏線。

ヴァンダルギオンとの精霊契約。これもまあ番外で書くことに。使うカードの精霊と契約、というのは主にこいつとの契約でした。使うデッキは所謂ヴァンダルエンジエ。天使族が中心という点でちよつとアテナと被るのですが、割とわざと。あと、後々出てくるさだめのメインデッキとも関わりあり。

迎え撃つ。即ちカウンターです。以前からパーミッションデッキがみたいという声もありましたし、ちよつとよかったです。そしてやってしまいました。「ずつと俺のターン！」事実、禁止カードもまともに使えずさだめは敗れました。折角さだめ編のクライマックスデュエルだったのに、割とあっさり終わってしまったのは反省。もつと長引かせればよかつた気もしますが、禁止オンパレードなさだめに長期戦は厳しい。

さだめはこれで大分まともになるでしょう。……多少ヤンデレは残りますが、今までに比べれば微々たるもんです。どっちかと言うとこれからは最初に出てきた変態工口路線ハイモードに進路変更してくることでしょう。

で、失踪したアテナ。ここで目を覚ましていたアテナと和解して終わり、だと流石にあっさりしすぎです。世界も僕もそんなに優しくありません。次回がおそらく第一期の最終デュエル。対戦カード

はご想像ください。まあ、大方予想どおりでしょうが。
それでは、レーネスでした！

第十九話「絶対助ける！」（前書き）

第十九話です。い、今までで一番難産でした……が、なんとか一定のクオリティは出せた、かな……？

ここまで苦戦するとは思いませんでしたが、今回のデュエルはあの意味一番デュエルらしいデュエルかも。かなり力入れましたが、どうでしょうかね。

まあ前置きは置いて、第十九話、どうぞ！

第十九話「絶対助ける！」

アルカナく切り札の騎士く

第十九話「絶対助ける！」

「ごめん……なさい」

アテナが消えて、しばし呆然と立ち尽くしていた俺たちに、俯いていたさだめが突然の謝罪をした。

「どうした？」

「さだめ、アテナさんには特別に酷い事を……」

さだめが言うには、他の魂を閉じ込めただけの人たちと違って、アテナだけは口に出すのもおぞましい精神的凌辱を精神世界で繰り返していたらしい。

「口に出すのもって……」

「う、蛆虫が……」

「オーケーわかった皆まで言うな」

想像するだに恐ろしい。

「だから……その……」

もしかしたら、壊れてしまっているかもしれない。

「そんな……」

ここまで来て、アテナを救えなかったら。アテナが、壊れてしまっていたら。

「そんなことになったら……俺は……」

「……ごめん、なさい」

「……大丈夫だ」

「え？」

「十代？」

「妹さんは知ってるだろ？ アテナがどれだけ強いか」

「……うん」

「アテナは強い。簡単に潰れたりしないって」

「……そうだな」

「そうだ。アテナは強い。さだめとのタッグデュエルの時、会場の人々が皆気絶するような中でも、アテナは正気を保っていたじゃないか。」

「アテナはお前に振られても立ち直ってまた前に進もうとしてたくらいなんだぜ？ きっと大丈夫だ。それより、早く見つけて連れ戻してやるっ」

「ああ！」

まずは足取りを掴まないと。希冴姫たちにも協力してもらおうか。

「きさ……」

『その必要は……ないわ』

希冴姫を呼び出そうとした時、俺たちの耳に聞き覚えのある声が届いた。

「シャルナ！？」

『……久しぶりね。元気そうで何より』

そういうシャルナは、完全に憔悴して今にも倒れそうな面持ちだった。

「どうした？ アテナは無事なのか？」

「そうだ、こいつはずっとアテナと一緒にいたはずだ。それなら居場所も知っているはず。」

『……どのあたりを指して無事、と言うのかは知らないけど、あんまり大丈夫じゃなさそうね……』

シャルナは立っているのも辛いと言わんばかりにその場に座り込んだ。

「アテナは……どうなったんだ？」

恐る恐るそう聞くと、シャルナは言い辛そうに目を逸らしたが、俺たちが引くつもりはないとわかったのか口を開いた。

『……端的にいうなら、そうね。ダーク化した、と言うのが適切ね』
「なっ……」

「そんなッ……！」

「お、おい、どういうことだよ!？」

『貴方達が言ってた通り、アテナの精神は強かった。でも、流石に延々と体中を蛆に這い回られ続ければいくら精神が強くても限界があるわ』

「うっ……」

予想はしていたが、やっぱり聞くだけで吐きそうだ。

『それでもアテナの精神は抵抗を続け……結果、防衛本能から周囲の闇を取り込んだのよ』

つまり、闇と同化することによって精神の均衡を保った、ということだろうか。

『そんなときに、貴方が呪縛を解いたからでしょうね。アテナの精神は解放され、ダーク化したまま、当てもなく飛び出して行ったの。止めようとは、したんだけどね』

「……そのアテナは、今どこに？」

それが最重要だ。アテナがどうであろうと、俺はアテナを救いだす。なら今一番必要なのはアテナの居場所だ。

『……アカデミアのデュエル場。ポーっとしながらそこに立ったまま動いてないわ』

「デュエル場……」

俺とアテナが最初に出会った場所。思い返せば、シャルナと出会ったのもさだめと会ったのもあのデュエル場だった。

「よし、じゃあ決まりだ。アテナの所に行くぞ！」

「ああ！」

「……うん……」

十代は元より、さだめも覚悟と決意を秘めた目で頷いた。

「シャルナ、お前は休んでろ」

『嫌よ。アテナはあたしのマスターよ?』

「でも、もっとう見てもお前は限界だ。少なくとも、ちょっと休んでからの方がいい」

『……そうね。じゃあ、任せるわ』

「ああ！ 任せる!」

『マスターを、よろしく……』

静かに帰還していくシャルナを見届けてから、俺たちはデュエル場へと向かった。

「アテナ!」

夜の帳。闇の中に沈むデュエル場で、アテナは静かにたたずんでいた。

「アテナ……?」

「……」

声をかけても、アテナは特に反応も見せず、ただデュエルフィールドを見つめるばかりであった。

「……セツ……」

「! なんだ、アテナ?」

ボソリ、と小さく俺の名前を呟いた。すぐに返事をするも、アテナはまたしばらく無言で、俺の方を見てもいない。

「ここで……」

どれだけ黙っていただろうか。ようやくアテナが口を開いた。

「セツに、会って……」

「……ああ」

「ここで……セツに、振られました」

「……ああ」

否定はしない。出来るはずもない。俺は確かに、ここでアテナを振ったんだ。

「なぜ？ 私はずっと、セツだけを見ていました。セツも、私を見てくれていました」

「ああ、そうだ。俺は……」

俺は誤魔化さない。もう、そんなのはやめだ。

「俺は、お前に惹かれていたよ」

後ろで静かに、さだめが息を呑む。

「でも、セツは……私を捨てたんです」

「っ！」

「あんなに一緒にいたのに。あんなに一途に、献身的に、健気に一緒にいたのに。私は、振られました」

「アテナさんそれはっ！」

「絶望……目の前が真っ白になって、苦しくて、切なくて……」

さだめがなにかを言おうとしたが、アテナはまるで無視して言葉を紡ぐ。

「夜になる度。ベッドに入る度、私の中の誰かが呟くんです。『怨んでいるんでしょう？』って……」

「それはっ！ さだめがっ！」

「さだめ？」

「全部っ！ 全部さだめがやったことだっ！ お兄ちゃんは……」

「よせ。何があったのか、俺は知らんが……結局、俺があんな形で振ったのが悪い」

「否定しようとしても……その声はいつでも囁いてきて……。その度に、暗い暗い地の底に沈んでいくようで……」

「アテナ……」

アテナはゆっくりりと、しかし一歩ずつ確実に俺の方へと近づいてくる。

「なんで……ですか？ なんでセツは、私を振ったんですか？ 私、セツにとって迷惑でしたか？」

「そんなわけないっ！俺はっ……俺だっ……んむっ!？」

トンッと床を蹴って伸びあがったアテナの唇が、俺のそれに合わせられていた。軽い、それでいて確かな熱を帯びたその感触に、俺は一瞬意識がスパークしたような感覚を味わった。

「っは、あ、アテナ……」

「じゃあ……」

唇を離れたアテナが次に目を向けたのは、突然の口づけに驚き固まっていた俺の後ろ。

「答えは一つ、ですよね」

「っ!」

さだめだった。

「貴女が……私からセツを奪ったんです。貴女さえいなければ……セツは私を……」

ここに来て、ようやく俺にも理解できた。

このアテナは……さだめだ。さだめによって追いつめられたアテナの精神が、さだめの闇を取り込んで、アテナと混ざりあった……。

「私は……貴女を……」

「アテナ待て！今のお前は……」

「『兄さん』は黙っててください!」

「!？」

今、確かにアテナが俺のことを兄さんって……人格がかなり本格的に混ざり合っている。記憶も、想いも、何もかもが今のアテナは不安定だ。

「セツ様。デュエルディスクを!」

「希冴姫?」

いつの間にか現れていた希冴姫が、俺にデュエルディスクを渡してきた。

「今の彼女が妹君の闇を内包しているのですしたら、妹君の時と同じく、被ってしまうえば良いのですわ……闇の、ゲームで」

っ! そうか!

「よし、なら早速……」「待ってお兄ちゃん!」「さだめ?」

「さだめがやるよ。そのデュエル」

「お前が……って、お前はさっき!」

さだめはさっきの闇のデュエルでのダメージが抜けてない。なにより、本来これは俺の問題で……。

「二人の邪魔をしたのは、さだめ。アテナさんにとり憑いている闇も、さだめ。こうなったのはさだめの責任。言ったよね? 責任を果たすんだって」

「さだめ……」

「だから、これはさだめの役目。お兄ちゃんには、譲ってあげないっ」

こんなときだと言うのに、さだめの顔は明るい。いたずらっぽい笑みすら浮かべてデュエルディスクを構える。

「あ、大丈夫。禁止カードや制限無視はしてない。正真正銘、ガチのメインデッキだよ」

「いや、俺が心配してるのはそういうことじゃなくって……」

「さあ、やるっか。アテナさん」

「聞けって!」

「もー、どうしたのお兄ちゃん」

「どうしたもこうしたも、ここは俺が……」

「往生際が悪いよ。もうさだめもアテナさんもやる気満々。今更止める気ないよ」

「でも!」

闇のゲームの疲労が残っているのに、無理させるわけには……。

「……痛みから」

「え?」

「痛みからも、苦しみからも、もう目を背けちゃいけないんだ。もう目を閉じて、耳をふさいで聞かないふり見ないふりは、できないよ。さだめは、もう逃げない。だからお願い。ここはさだめにやらせて。心配は、いらなから」

「さだめ……」

俺はもうそれ以上何も言えず、デュエルフィールドに上がって二人を間抜け面で見上げるだけだ。

「セツ……」

「十代、俺は……」

「信じてやれ。オレには、それしか言えない」

「……ああ。そうだな」

俺は祈るような気持ちで、二人の大切な少女たちを見つめる。どうか、誰にとっても良い結末で終わりますように……。

「……これで、三回目かな。さだめとアテナさんがデュエルするのは」

「……」
アテナは何も答えない。ただ無言で、デュエルディスクを構えるのみだ。

「なんだかなあ……そのどれも、どちらかが正気じゃない、悲しいデュエルだね……全部、さだめの所為だけど、さ」

悲しいし、申し訳ない気持ちがあふれそう。だが同時に、別の感情もまた、ふつふつと湧きあがってくる。

「……まあ、どんな理由があっても、お兄ちゃんとドサクサ紛れにキスするとかさだめにとっては許されることじゃないんだけど……」

ちよつと前の黒い自分がまた戻ってきている気もする。が、前とはちよつと違う。

「これは……純粋な嫉妬かな？」

自分の思考にちよつと苦笑い。

「まあいつか。後でさだめもお兄ちゃんにしてもらおう」

下でその兄が悪寒に身を震わせていることを、さだめは知らない。

「……何言っても無反応、か。しょうがない。じゃあ始めよう」

「……デュエル」

「うん。デュエル！」

デッキからカードを引く。手札をざっと見て、さだめはすぐに宣言する。

「さだめの先攻！ ドロー！」

自分のデッキは多少準備が必要だ。まずはそのための布石を整える。

「『終末の騎士』を守備表示で召喚！ 効果でデッキから『ダーク・ネフティス』を墓地に送るね。カードを一枚セットしてターンエンド！」

「……私のターン、ドロ。手札から魔法カード『天使の施し』を発動、デッキからカードを三枚ドロして二枚捨てます」

「手札交換……」

さだめとしては、以前それで痛い目を見ているので苦い表情。

「私は手札から『墮天使エデ・アラエ』と『墮天使スペルビア』を墓地に送ります」

「墮天使……」

やっぱり。とさだめは表情を曇らせた。

「私は『ダーク・ヴァルキリア』を召喚。手札から装備カード『戦線復活の代償』の効果を発動。『ダーク・ヴァルキリア』を墓地に送って『墮天使スペルビア』を墓地から特殊召喚！ 自身の効果により『墮天使エデ・アラエ』を墓地から特殊召喚！」

「速い！？」

一ターン目からいきなり攻撃力2900と2300の貫通効果持ちの上級モンスターがフィールドに並んだ。しかも、アテナは手札を二枚しか消費していない。

「バトルフェイズ。『墮天使エデ・アラエ』で『終末の騎士』を攻撃。『墮天の翼』」

「きゃああああっ！？」

「さだめ！」

攻撃を受けたさだめ以上に悲鳴のような声を上げる兄に、思わず苦笑する。確かにこれで『墮天使スペルビア』のダイレクトアタックを受けてしまえばちょうどさだめは負ける。

「『墮天使スペルビア』で、プレイヤーにダイレクトアタック！」「トラップ発動！『サンダーブレイク』！手札からカードを一枚捨てて『墮天使スペルビア』を破壊するよ！」

スペルビアが雷に撃たれて消滅していく。

「さだめは『ダーク・アサシン』をコストとして墓地に送るよ」

「……カードを二枚セットしてターンエンドです」

「さだめのターン。ドロロー！手札から魔法カード『トレード・イン』を発動！手札から『ダーク・ホルス・ドラゴン』を墓地に送ってカードを二枚ドロロー！カードを一枚セットしてターンエンド！」

手札には、通常召喚できるモンスターがない。仕方なくそのままターンを終える。

(相変わらず事故るなあ……)

割と回りやすいデッキを使っているつもりだが、昔からどうしてもドロロー運がない。とはいえ、今回はまだ何とかなる。

「私のターン。永続トラップ『血の代償』発動。『ダーク・ヴァルキリア』を召喚し、ライフを500支払い『ダーク・ヴァルキリア』をリリースし、『墮天使ダイザイア』を攻撃表示で召喚」

アテナLP3500

紅い翼を持った全身甲冑の天使が召喚される。その攻撃力は……3000。

「『墮天使ダイザイア』で、プレイヤーをダイレクトアタック」

「トラップカード！『リビングゲデッドの呼び声』！墓地から『

ダーク・ホルス・ドラゴン』を攻撃表示で特殊召喚！」

「！」

『ダーク・ホルス・ドラゴン』の攻撃力は同じく3000。

「っ……バトル続行！ 『堕天使ディザイア』で『ダーク・ホルス・ドラゴン』を攻撃！」

「くっ!?」

『ダーク・ホルス・ドラゴン』と『堕天使ディザイア』の攻撃が激突し、両者が共に吹き飛んだ。

「『堕天使エデ・アーラエ』でダイレクトアタック！」

「あああああああつ!?」

さだめLP600

かろうじてライフは残ったが、セツとの闇のゲームによるダメージと併せて、さだめの体力が限界に近い。ともすれば血を吐いて倒れこみそうになるのを必死で耐える。

「アテナさん、は……さだめが、絶対助ける！」

それは誓い。自分の所為で、この純粹で強い少女を闇に堕としてしまったことに対する責任。それを果たすため、さだめは必至でデュエルを続行する。

「さだめのターン！ ドロー！」

戦況は最悪。あと一步で負け。そんな状況ですら、さだめの引きはいいとは言えない。

（あーあ。大山センパイにでも弟子入りしようかな）

ついそんなことも考えてしまう。修行でドロー運が良くなるならば非とも弟子にしてほしい。

「さだめは手札から『闇の誘惑』を発動するよ！ カードを二枚ドロー！」

だからさだめはドロー加速カードを多用する。そうでなければあんな鬼引きには対抗できない。

「うん！ 手札から除外するのは『ネクロフェイス』！ お互いにデッキの上からカードを五枚除外する！」

相変わらず不気味な顔のモンスターの効果でカードが除外される。「手札から『天使の施し』発動！ デッキからカードを三枚引いて二枚捨てる！ さだめは『ダーク・クルセイダー』と『ダーク・グ

レファール』を墓地に捨てるよ」

更にドロー。これでかなり良くなった。だがまだだ。

「手札から『異次元からの埋葬』を発動！ ゲームから除外されているモンスター二体を墓地に戻す！」

戻すのは『ネクロフェイス』と『ネクロフェイス』で落ちた『ダーク・クリエイター』。

「魔法カード『終わりの始まり』！ 墓地の闇属性モンスターの数は八体！ その内五枚をゲームから除外してカードを三枚ドロー！ やるだけやった。そう思っただロウしたカードを確認する。その中に、一枚のカードを見つけた。

「っ！」

そのカードを見たとき、さだめの体は強張った。

もう一度、さつきから何度も飛び出しそうになっただけで十代に止められている兄を見る。とても、心配そうだった。

「……さだめの墓地にいる闇属性モンスターはこれで三体。よって手札から『ダーク・アームド・ドラゴン』を特殊召喚！」

フィールドに、漆黒の龍が召喚される。

「墓地の『ネクロフェイス』をゲームから除外して、『ダーク・アームド・ドラゴン』の効果発動！ 『堕天使エデ・アールエ』を破壊！」

「くう……！」

「『ネクロフェイス』が再び除外されたことにより、デッキの上からカードを除外！」

そして、その除外されたカードの中に、もう一枚、不気味な人形の顔が。

「っ！ もう一度『ネクロフェイス』の効果発動！」

大分デッキがなくなつた。そろそろ決めに行かないといけない。

「っ……」

さだめは迷った。手札のカードを出すかどうか。だが、唇を噛んでそのままバトルフェイズに入る。

「『ダーク・アームド・ドラゴン』でプレイヤーにダイレクトアタック！」

「きゃああああああああっ！」

アテナLP700

「さだめはこれでターンエンド」

「っ！ 私のターン！ ドロー！」

互いにライフは互角。フィールドを見ればこちらが圧倒的優位だが、まだ油断はできない。

「リバーズカード発動！」

「！」

そういえば、あのカードはアテナが最初のターンにセットしたまま使われてなかった。一体何を……。

「まさか……あれ……」

その時、下で見ていたセツは気がついた。アテナとの最初のデュエル。その時も最初に伏せて、あの時は結局使われることのなかったあのカード。

「『奇跡の光臨』！」

「え！？」

「ゲームから除外されている天使族モンスターをフィールドに特殊召喚します。私が選択するのは『墮天使アスモディウス』！」

召喚されたのは、黒い翼を持った正に墮天使。攻撃力……3000。

「バトル！ 『墮天使アスモディウス』で『ダーク・アームド・ドラゴン』を攻撃！ 『ヘル・パレード』！」

「うあっ！」

さだめLP400

「ターン終了です」

「うくっ……さだめの、ターン……」

くらくらする。ドロウするためにデッキに手を伸ばそうとしても目の焦点が合わず、空振りする。

「さだめ！」

「お、兄ちゃん……?」

「もういい！ もういいからやめろ！ もう限界だ！」

それはさだめの体か、それとも我慢できないセツ自身なのか。そんなことを考えてさだめは苦笑する。

「だいじょうぶ。まだ、行けるよ」

「さだめ……！」

「それに、闇のゲームじゃサレンダーしたって結果は同じだよ。だから……最後までやらせて」

「っ……っく！」

その表情から、さだめが決して引かないことが分かったのだろう。悔しそうにしながらセツは沈黙する。

「それに、まだ本当に終わっちゃいないよ。ドロー！」

なんとかドローを成功させる。引いたカードを見て、さだめはこのデュエルの結末を確信した。

「さだめは手札から……『終焉の精霊』を攻撃表示で召喚するよ！」

後ろでセツたちが驚愕に目を見開いている気配を感じる。フィールドには、あの忌々しい影の精霊が姿を現していた。

さつき、『ダーク・アームド・ドラゴン』と一緒に通常召喚すれば勝っていた。だが、このカードを出す、という気にどうしてもなれなかった。だが、もうそんなことを言っている場合ではない。

「『終焉の精霊』は、互いのゲームから除外されている闇属性モンスターの数×300ポイントの攻撃力と守備力を得る！ 除外されているモンスターの数は、あわせて12体！ 攻撃力3600！」

アテナが瞠目する。『ネクロフェイス』による大量除外。それによって『終焉の精霊』はまさしく終焉を迎えるに相応しい攻撃力を持つていた。

「『墮天使アスモディウス』に攻撃！ 『ジ・エンド・バースト』！」

「ぐうあああああっ!？」

アテナLP100

終焉の炎に焼かれ、苦しそうなアテナを見て、さだめも表情をゆがませる。

「……っ！ わ、私は『墮天使アスモディウス』の効果でアスモトクンとデイウストークンの二体を特殊召喚します」

「……カードを一枚セットして、ターンエンド」

もう、お互いに限界だった。ライフも、自身の体力も。

「アテナさん……」

「……？」

「さだめは……謝ろうと思ってお兄ちゃんについてここまでできました」

でも、と言つてまたいたずらっぽく笑う。

「やっぱり、謝ってあげません。アテナさんが正気に戻ってから、改めて謝ることにします。ですから……」

死なないくださいね。お互いに。

「っ！ 私のターン！ ドロー！」

さだめの顔から壮絶な覚悟を読みとったアテナは慌ててドローする。

「……私の、勝ちです！」

「っ！？」

「私の墓地にいる闇属性モンスターは『ダーク・ヴァルキリア』、

『墮天使スペルビア』。『墮天使デザイナー』、『墮天使エデ・ア

ーラエ』、『墮天使アスモディウス』の五種類。よって手札から、

『墮天使ゼラート』をアスモトクンをリリースしてアドバンス召喚！

「喚！」

「ゼラート……！」

墮天使究極のリセットモンスター。それがこのデュエル終盤で現れた。

「相変わらず……タクティクスを馬鹿にしたような引き……」

さだめは苦々しげな表情でそうつぶやく。

「手札から『墮天使エデ・アーラエ』を墓地に送り、相手フィールド上モンスターを全て破壊します！」

『終焉の精霊』が消えていく。自分のモンスターながら、思わずホッとしてしまう。

「これで……終わりです！『墮天使ゼラート』で、プレイヤーにダイレクトアタック！」

ゼラートの剣がさだめに迫る。

「うん……これで、終わりだね」

さだめはどこかさびしげな笑みを浮かべて兄を見る。今にも泣きそうになっている顔が情けなくて……とても、愛しい。

「リバースカード発動！」

「っ！」

（さだめの罪は、きっと死んでも償えない）

だから、ここでは死ねない。償えない罪を、放り捨ててなんて逝けない。

「『破壊輪』！」

「なっ!?!」

リングにいくつもの手榴弾が取り付けられたような形をした首輪が、ゼラートの首にはまる。

「さだめは、勝てない！ 勝っちゃいけない！ あれだけ酷いことをして、涼しい顔で勝つなんてできない！」

でも、負ければ兄が悲しむし、アテナも救えない。だから。

「一緒に、吹き飛ばす！」

首輪が爆発を起こし、アテナも、さだめも、一切合財を吹き飛ばした。アテナの纏っていた闇までも。

「さ……」

吹き飛んだ二人を見て、セツが叫ぶ。

「さだめっ！ アテナアアアアアア！」

互いのライフが、同時にゼロになった。

第十九話「絶対助ける！」（後書き）

さっそく補足。この話では、禁止・制限について2005年6月つまりは大体原作でいうとカミューラ戦が放映された頃のリストを参考にしています。なので天使の施しは一応制限カード。死者蘇生が禁止カードです。破壊輪も同じく、あれはその当時は制限カードでした。なのでさだめもアテナも禁止カードは使ってません。

……ふう。難産でした。ものすごく書くのに時間がかかりましたよ。何せ僕は堕天使カードをほとんど知らない状態で完全手探り状態で書いてましたから。遊戯王ウィキにはお世話になります本当にあ、でももしまだ間違っていたりしたら遠慮なく指摘ください。

さだめのデッキは除外を多く組み込んだ『次元ダーク』になりませんね。で、さだめは遊戯王に出ている割に基本、引きがあまり良くありません。たくさんたくさんドロ補助を使ってなんとかやりくりしております。あれだけネクロフェイス使ったのに対してモンスターが落ちなかった辺りも運がないですね。あれだけやれば普通に終焉の精霊破格の攻撃力になりますよ。普通は。

またしても気になる終わり方で次話に続きます。ふふふ……これがアニメとかの手法さ！……嘘です長くなりすぎて切っただけです。

これ書くのにもものすごく体力使ったのでこの辺で。
それでは、レーネスでした！

第一期最終話「終わりの始まり」(前書き)

遂に第一期最終話です。特に言うべきことはありません。セツたちの物語。そのひとまずの終わりを感じていただければ幸いです。では、ごきげん。

第一期最終話「終わりの始まり」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第一期最終話「終わりの始まり」

さだめとアテナの盛大なドローから一週間。

あれからさだめとアテナはすぐに病院に担ぎ込まれ、丸一日目を覚まさなかった。

無事、アテナの取り込んでいた闇はあのゲームで取り除かれたように、目を覚ましたアテナはいつものアテナだった。

……ただ、ダーク化していた時の記憶はあったようで、自分の行いに対して落ち込むと共に真っ赤になって縮こまってしまった。……まあ、それに関しては俺はノーコメントとさせていただく。誰しも自分の恥は語りたくないものだからな。

さだめの方も憔悴しきってはいたものの無事に目を覚まし、とりあえず俺がありがたいお説教をくれてやった。説教されている時のさだめは苦笑気味ではあったが、どこか幸せそうで、俺もついつい説教の手を緩めない様気をつける必要があったが。

……セブンスターズとの戦いは、まだ続いている。だが、あんなことがあってすぐ戦線復帰ができるはずもなく、アテナは守護者から脱落。俺もアテナやさだめについていたので、結局余った七星門の鍵は大徳寺先生が代理で預かることになった。

「歴史は繰り返す……ってのとは、ちょっと違うか」

結局、あれだけすったもんだあったというのに、物語は原作に沿

う形に修正された。世界の修正力、という言葉はラノベを始めとした創作物ではたまに聞く言葉ではあるが、なるほど実感した。

タイタンをセブンスターズから除き、さだめがその空いた席に座ることになっても、世界は元の姿を取り戻すらしい。

結局俺のやったことは無駄だったのか。そう思ったこともある。

だが、例えさだめがセブンスターズにならなくても、結局は同じことが起きたと思う。それに、今はこうしてさだめの狂気も消え、万事上手く行ったのだから、それを無駄、と考えるのはやめた。

そのさだめの処遇についてだが、情状酌量が適用されたのか、軽い謹慎処分と反省文で済んだ。それも入院期間とさして変わらないので、実質お咎めなしみたいなものだ。

むしろ問題は俺とアテナだな。俺は元より、アテナも俺がいなくなつてから授業に殆ど出ていなかったらしく、出席日数がヤバかった。校長が掛け合ってくれたおかげで、なんとか先生方から渡されたありがた〜いレポートの山を全て片づけることで進級することができるようだ。

アテナに関しては完全に疑う余地なく全て俺の所為なのでアテナの分も全部やると言ったのだが、アテナがそれを固辞。曰く「それじゃあ私のためになりません」だとか。どこまでいっても真面目な奴だ。

「といたしますか、入院中つとつても暇なんです。もしセツがレポート取り上げて、それで私と会ってくれる時間が減っちゃったら最悪です」

「いや、俺ならあれくらい物の数ではないぞ？ 面会時間が終わって寮に帰ってからやり始めても一週間あれば終わる」

「えっと……そうじゃなくてですね。ほら、レポートがあればこうしてセツに勉強してもらえないですか。進級もできるし暇もなくなるし何よりセツがつきつきりで勉強を見てください。いい事尽くめですよ。ビバ！ レポートです！」

らしい。まあ、ポジティブシンキングで良いことだ。

ああつとそうだ。忘れちゃいけなかったな。俺とさだめは二人してアテナを始めとする関係者各所に頭を下げて回った。大抵皆カード一箱おごりとか下僕生活一週間（俺）とかで許してくれた。全く皆お人好しにも程がある。

……で、肝心のアテナとの折衝だが、俺にはデート十回。デートの間はアテナに絶対服従をオプションとしてつけることで手打ちとのこと。微妙に恐ろしい気もするが……俺もまあ、嬉しくないわけじゃないし、少しの不安くらい受け入れてやるさ。

そしてさだめ。こちらには二週間俺との接触禁止。要は俺限定の謹慎処分のようなものだ。そんなんでいいのかと拍子抜けした俺だったが、顔を真っ青にしてこの世の全てに絶望したようなさだめを見ると、相当に重い刑罰らしい。

……事実として、この刑が執行されて五分でさだめは血を吐いて倒れ、入院期間が延びた。んなバカなと言いたいだろうが、それが事実なんだから笑えない。アテナもここまでの被害は想定していなかったらしく、慌てて刑を解いた。代わりに自分のことは呼び捨てで呼ぶことをお願いする、という方向で決着がついた。ちなみにその時の会話は下記の通りである。

「さ、さだめさん大丈夫ですか？ ま、まさかここまで甚大な被害があるとは思ってもせず……」

「だ、大丈夫だよアテナさん。さ、さだめがしたことを鑑みればこのくらいは妥当なけば、げはあっ……」

「わ、わあああああつ！？ さだめさん、さだめさん大丈夫……じゃないですよねどう見ても！ わ、わかりました刑罰は別のに差し替えますから気をしっかり持って！」

「う、ううん……それでもやっぱりさだめのしたことは……」

「これ二週間も続けたら間違いない死んじゃいそうです！ 今の一

瞬でなんかリットル単位の喀血してましたよ!？」

「じぶうつ!？ あ……目が……かすんで……」

「き、きゃあああああ!？ さだめさん!？ さ、さだめさんの病室が一瞬にして血の海に!？ セツ、セツ……!」

アテナの悲鳴で病室に入ると、そこは血塗れでぶっ倒れているさだめと同じく血塗れでパニック状態のアテナ。その惨劇の現場を見て、俺は震える指でアテナを指差す。

「あ、アテナ……まさか、殺っちゃった……のか？」

な、なんとということだ。アテナの積もり積もった怨みがついに爆発してしまった。さだめが、さだめが！

「殺っちゃってないです!」

「お……兄ちゃん?」

「さだめ! 大丈夫か? 生きてるか?」

「あ、ああ……お兄ちゃん、お兄ちゃんだあ……復活!」

「何故明らかに致死量オーバーの血を吐いて普通に立ち上がれるんですか!」

「お兄ちゃんさえいればさだめはどこまでも高みに……イケる!」

「もうそれ中毒ですよ! ヤク中患者と大差ないです!」

「あ……でもアテナさん。さだめの罰は……」

「急にシリアスに戻るの止めてくれませんか!? テンションの違いに対応できません!」

さだめは治つても尚、人を振り回す存在であるらしい。

「ん、んんつ! え、えつとですね。その、アテナ『さん』つていうの、止めてくれませんか? さだめさんの方が年上ですし……」

「……え?」

兄妹二人して面喰った。

「……なんですかその『驚愕の新事実!』みたいな顔は」

「え、だってさだめって俺の一個下だぞ?」

「だから、私より年上じゃないですか。それも二つ」

「……」

「え、あれ？　なんでそこで黙るんですか？　私言いましたよね？　13歳ですって！」

思い返してみると、そういえば確かにそう言っていた。だが……。
「う、うそ！？　13歳！？」

「わ、忘れてた……全然そうは見えないからすっかり……」

「ぜ、全然そう見えないってなんですか！　もしかして私、とつても失礼なこと言われてますよねえ！？」

「じゅ、13歳にしては……」

「してはなんですか！？　老けてるとでも言いたいんですか！」

「い、いや……あ、アテナは大人びてるから……」

「全っ然フオローになってませんよ！　うわーん！　13歳で老け顔認定される私の不幸！」

「ち、違つよ！？　ほら、アテナさんおっぱいもおつきいし！」

「大して大きくないですよ！　さだめさんが絶望的なだけです！」

「ぜ、絶望的……」

orz　さだめ。

被害がさだめに飛び火していた！

「なぜ……？　お兄ちゃんに散々エロい事しても体は全然大人っぽくならないし……拳句二歳も年下の子に絶望的とか……」

「ふ、ふふ……どうせ私は老けてますよ。伊達にネタでやった精神年齢鑑定で39歳をマークしてませんよ……」

「マジで！？　妙に納得！　あ、いやそうじゃなくて！」

マズイ。なんだか知らんが鬱病患者が二人、しかも病院内で発生した。なんとか二人を宥めてさだめがアテナのことを呼び捨てにするようになったところにはすっかり日が暮れていた。

相変わらずの混沌とした状況に思わず涙が出るね。色んな意味で……うん。そういえばアテナって13歳だったよね。精神的にも肉

体的にも圧倒的にさだめより上だけだ。

あとは……そうだ、希冴姫たちのその後についても言っていなかったか。

希冴姫はもう完全にこつちの世界で生活している。住むところについてはまた一悶着あったが。

俺の精霊でパートナーなんだから一緒の部屋で過ごすという希冴姫に対し、まあ前と言えれば前だがアテナとさだめが猛反発。断固とした態度を崩さない希冴姫も希冴姫だが、まああの二人も凄まじい剣幕で激論を交わしてたな。結局議論は夜中まで続き、病院側から苦情が入ってストップ。結果として妥協案で俺の部屋に希冴姫。俺は部屋を追い出されて十代たちの部屋に居候、と。……なんか俺が一方的に被害者な気もするが、まあいい。十代たちの部屋はそこそこ楽しいし、元々あの部屋に入り浸ってたしな。

で、なぜかルインもちゃっかり希冴姫と同じく元俺の部屋に寄生していた。女つ気が増えてレッド寮の馬鹿共は狂喜乱舞していたが、その二人がいつも俺にべったりな所為で余計に俺が居心地悪くなった。周囲からの視線が最早物理的ダメージを伴って俺に突き刺さる。日常的に闇のゲームをしている気分になってきたね。

ジャックとキングは前と変わらず時々出てきてはひっかきまわして(キング)皆の喧嘩を仲裁して(当然ジャック)と変わり映えのない生活をしている。

さだめによつて魂を封じられていたレイも、無事に目を覚ましたと連絡を貰った。……正直レイと昔会っていたという設定には驚きを隠せなかったし何故か十代フラグも立たずに俺フラグ立ちっぱなのが納得いかん。いや、もちろん嫌いじゃないがここまで順調にハールムルートを邁進していると善良な……おいそこ笑うな。俺の心は罪悪感と言うか当然の倫理観でチクチクとした痛みを覚える。

同時に吹雪さんの意識ももどったそうで、明日香が兄を伴ってお礼にやってきた。……問題があるとすれば俺が吹雪さんに物凄く気に入られてしまったことぐらいか。亮さんと共に振り回される毎日

だ。その代わりと言ってはなんだが亮さんとも仲良くなれたな。今までそれほど接点がなかったのでちょっと嬉しい。

……回想も疲れてきたな。それだけ色んな事があつたってことなんだろうが、俺としてはあまり実感がわかない。それだけ充実した、忙しい日々だったからだろう。

そして今日。やっとアテナとさだめの二人が退院する。

「まったく……病室を血の海にするわ夜中まで騒がしいわ散々な患者だった」

「あ、あはは……ご、ごめんなさい」

「ごめんなさい」

「何度これのどこが病人だと叫びたくなつたことか」

「あうう……」

二人はせつかく退院の日だと言うのにすっかり顔見知りになった医師さんに説教を食らっていた。

「君もだぞ御堂君！」

「はい!？」

「まったく彼女らが騒いだり病室を血の海にする根本の原因は全て君だというのに……」

訂正。俺も一緒に怒られてます。

「……まあ、それでも君たちの起こす騒ぎは迷惑でありながら、何処か楽しいものだった。正直、これで君たちが全員ここからいなくなるというのは……不謹慎だが、とても残念でもある」

「先生……」

「うむ。だから君たち。いつでも運び込まれてきなさい。スタッフ一同大喜びで歓迎しよう！」

「いやいや喜んじやだめでしょう!？ 普通もう来ないように言うのが医者でしょうが！」

「だってさびしいじゃないか！」

「私事か！」

「なんなら私たちが怪我させてあげるから！」

「あんたら本当に医者か！？ 積極的に病人怪我人作ろうとすんな！ アホか！」

まったく……卒業を反対する教師といい（タッグフォース3参照）ロクな大人がいないなここは！

「でも……私もちよつとだけ残念です」

「アテナ？」

「私はずつと入院して、ベッドに寝た切りだったら……ずっとセツに世話してもらえるかな……なんて」

「あ、それさだめも思った。病院で禁断の一線を越えるっていうのも中々クるシチュエーションだよな！」

「いえ……そういう意味では、ないんですけど……」

……つたく、こいつらは……。

「……言っておくがな」

「「？」」

「俺は、介護が必要な妹を持つ気も……恋人を持つ気もないんだからな」

「「え！？」」

言うだけ言っさつさと荷物持って逃げる。

「ちよつとお兄ちゃん！」

「い、今の言葉の真意は……」

「ええいうるさい！ 勝手に想像してろ！ ただし！ 想像通りとは限らんことも考えておけ！」

「ま、待ってください！ 真意が聞けないことには今夜眠れそうにありません！」

「そうだよ！ このままじゃアテナもさだめもそのことを考えて枕を……じゃなくてパンツを濡らす羽目に……」

「そ、それはなりません！」

「さだめはなるもん！」

「なぜそこでキレルんですか！」

何事か口論しながら追いついてくる二人の声を聞きながら、俺

は空を見上げた。

突き抜けるような青い空。まだ危機は去ってなくて、三幻魔のじいさんは己の若返りを狙っていて……それだけじゃなく、この先光の結社だの異世界だのと色んな問題が控えているのも知っている。

「だが、まあ」

今はただ、この幸せに浸っていよう

だから世界よ

これが、単なる終わりの始まりだったとしても

今だけは

俺たちに平和な時間を

辛いこと苦しいこと。そんなものは全部まとめて、後で相手してやるからさ

とりあえずは

いつの間にか服の裾を掴んでいる少女たちに言い訳するくらいの時間は、さ

第一期最終話「終わりの始まり」(後書き)

はい。とりあえずこれで一区切りです。三幻魔の問題については結局最後までは介入しないことに。これ以上介入するのは得策ではないというか、蛇足的な感じになってしまいそうだったので。

他の諸々は後であとがきとして書いてアップしますので、ここでこれくらいで。

それでは、レーネスでした！

第一期終了あとがき

あとがき

はい。とりあえずアルカナ〜切り札の騎士〜第一部さだめ編の完結になります。

別にこれで完結にするつもりはありませんし、光の結社や異世界編も変わらずやるつもりではあります。が、ここから先の原作は本当に完全に全く見たことがないので、蔦谷等に行つてちゃんと原作を確認してからプロットづくりなどもする必要が出てきます。

なのでしばらくは本編が進まず、番外をチヨロチヨロ出して行くことになると思います。今のところ考えているのは定番の学園祭や海水浴。各ヒロインが主役のもの。セツの精霊界での旅などです。後は時期にもよりますがホワイトデーとかも。パツと思いつくだけでも結構な量があり、番外編だけで本編の文量に届きそうなくらいです。が、まだ他に書いて欲しいイベントや番外などありましたらご自由に感想にお書きください。出来る限りで実現させたいと思っています。

番外編は基本ギャグ路線を貫きますが、精霊界での旅などはシリアスを多めに含むと思います。

ふう。番外編についてはこのへんでしょうか。

第一期が終了と言うことでキリもいなのでキャラについての紹介も作って乗せたいと思います。本編では殆ど描写もしてませんでしたしね。気になっている方もいらっしやるでしょうから。

これからの活動についてはこんな感じです。それでは、いつまでもこんな作者の長ったらしい話に付き合っているのも酷でしょうから、ここからはおまけのキャラ対談でもするとしましょう。では、

どろぞろ！

「と、いうわけで突発企画みたいなもんを任されることになった御堂切だ」

「アシスタントのライムでーっす！」

「……え？ ライム？」

「あれあれ？　なんでそんな首を捻ってるの？　もしかしてボクのこと、忘れちゃった？」

「い、いやそんなことはないんだが……普通、こういつのってアテナとかが来るもんじゃあ……」

「ぶーぶー！　ボクだってヒロインなんだからおかしくないよー。

差別だー！」

「ヒロインねえ……ヒロイン（笑）とか言われてないといいけど」

「……」

「あ、いやすまん。笑えない冗談だったな……」

「どろぞろ……」

「ライム？」

「どうせライムは一発屋だよぉ……！！」

「うわっ！？」

「よし、立ち直った」

「速いな！？　慰める暇すらなかったんだが！」

「それでは早速コーナーの方へと参りたいと思います！」

「え、何このラジオ番組のノリ」

「でも突発企画なのでお便りはありません！」

「じゃあやるなよ！」

「でもゲストはいるので続行！」

「ゲストしかいないの間違いだろ」

「では第一のゲスト！　ボクの元持ち主のオベリスク・ブルー男子

生徒！」

「誰得！？」

「と、ツツコミが入りそうなので省略！」

「容赦ないな！？」

「では次のゲストへ言っただけで参りましょう！」

「実質最初のゲストだけだな」

「この人です！ 矢ヶ城先生！」

「だから誰得！」

「TFファン得！」

「だったら素直にユーキちゃん出せばいいんじゃないかなあ！？」

「そこはホラ、重箱の隅をつつくといいますが……」

「だからそれは誰得なんだ……」

「では、ご主人様がユーキちゃんを出せー！ と駄々をこねていまずので、加藤友紀さんです！ どうぞ」

「そういう誤解を招くセリフは勘弁してくんないかなあ！？」

「あ、あはは……セツ君、久しぶり」

「……ああ、久しぶり」

「なんだかすつごく疲れてそうだね」

「……主にこの電撃小娘の所為でな」

「実はユーキちゃんさんも出番はすつごく久しぶり！ 最後の出番は番外編でした」

「お前はもつと前だがな」

「ぐさー！ 乙女のハートが傷ついた！ これは……責任を取ってもらおう流れだね！」

「流れじゃねえよ！ っていうかゲスト！ ユーキちゃんおいてけ

ぼりだろ！」

「あはは〜元々自己主張薄いからね〜わたし」

「そんなことじゃダメだよユーキちゃんさん！」

「ふえっ？ っていうかユーキちゃんさんって……」

「ボクたちのように出番の少ないキャラはもつとこう、ドカーンズ

ギヤーンバリバリギャギャギヤーン！と目立っていないと！」

「え、えくと……」

「やめるライム！ この小説における俺の癒しを奪うな！」

「い、癒し？」

「ああっ！ それを考えたらむしろユーキちゃんにはもつと後で登場して貰えばよかった！ たび重なる精神疲労で遺書をしたため始める寸前に女神のごとく登場して貰えば良かった！」

「め、女神……」

「はいはいそのナチュラルジゴロご主人様ーそろそろ時間が押して来てますので次のゲスト行きますよー」

「そんな！？ お前は俺からこの癒しを奪おうと言うのか！」

「あ、あれ〜なんかわたし、結局あんまりしゃべってないようない？」

フェードアウト。

「では次が最後のゲストになります」

「早えよ！ まだ二人目じゃん！」

「正確には四人目だよ？ ご主人様が他二人を飛ばしちゃったからもういないの」

「あの二人を正規のゲストとして呼ぶ辺りが意味不明！」

「それでは最後のゲスト、サイクロイドさんです〜」

「よりにもよって最後がそいつか！？」

「よう！ 良い子の皆、元気にしてたかな？ サイクロイドお兄さんの登場だよ！」

「なに良い子の教育番組みたいなノリで話してんだよ！ ゲストの癖に司会気取りか！」

「全世界に存在する60億人のサイクロイドファンたちよ！ 今立ち上がれ！」

「いねえよ！ ほぼ世界の全人口がお前のファンであるはずがねえよ！ そして立ち上がって何するつもりだ！」

「そりゃもちろん国家転覆……」

「お前そればつかだな！ つつーか60億人がお前のファンなら国家を転覆するまでもなく世界はお前のものだよ！」

「おれっちは、新世界の神と……」

「ならねえよなねえよならせねえよ!?」

「あのー……ボク一応司会なんだけど……」

「いいか弱小ボロチャリ！ 何をどう足掻いてもお前が単体でパーフェクト機械王にかなうはずがないということをだなあ……」

「なあにいつてんだい！ おれっちの底力を知らねえな？ 補助輪付けたおれっちは超強いぜ？」

「大して強くない上に補助輪つけなきゃ強くないあたりがカツコ悪いよー！」

「……ぐすん」

「え、えくと……あ、アテナです！ 何やら場が混乱してカオスになって收拾つかない感じなので僭越ながら締めを務めさせていただきます！ まずはこの度、アルカナ〜切り札の騎士〜がこうして第一期分を終了させることができたのも、読者様方の熱い御支援あつてのことです！ 本当にありがとうございます！」

「このつ……てめえこのボロチャリが！ 毎度毎度出てくるたびに俺の精神に甚大な被害を……」

「はっはあ！ たかが人間が、おれっちに追いつけると思ってるのかい!?!」

「え〜ん誰もライムを見てくれないよ〜！」

「む、向こうはもうほんとにどうしようもなくなってるみたいですね……それでは、また番外編や第二期もアルカナ〜切り札の騎士〜をどうぞよろしく願います！ アテナでしたー！」

第一期終了記念「キャラ設定資料集」（前書き）

このキャラ設定は第一期のネタバレを容赦なく含んでおります。キャラ設定だからって本編を読む前に読まれることはお勧めしません。どうかこの小説は一番上から順々に読んでいってくださいと幸いです。

第一期終了記念「キャラ設定資料集」

アルカナ〜切り札の騎士

オリキャラ紹介

御堂 切男 みどう せつ 16歳（現実では19） 172cm 57kg

・使用デッキ マイフェイバリット

『絵札の三銃士』 『アルカナ・ナイト・ジョーカー』

『ヴァンダルエンジエパーミッション』 『冥王竜ヴァンダルギオン』

『雷族（未使用）』 『雷電娘々』？

・容姿

作者の好みから、完全にリトバスの恭介（CV緑川光）をイメージ。恭介を黒髪にしてちょっと幼くしたら大体セツ。

・キャラ設定

言わずと知れた主人公。気がつけば現実から遊戯王GXの世界にトリップ（後に憑依と判明）した大学生。ただし、年はGXに合わせて若返っている。

初期は『アルカナ・ナイト・ジョーカー』を切り札とした『絵札の三銃士』デッキを使う明るくさばさばとした好青年。だが後に、妹によって歪みすさんだ心に仮面を被り、それを主人格としていたことが判明する。

運動も勉強もできるし、容姿も可もなく不可もなくだったので、現実でもモテなかったわけではないが、妹さだめによって知らない

内に妨害され、未だ彼女ナシ。

自分と同じイレギュラーだと思っていたアテナから告白されたことで、女難の運命が幕を開けることに。

精霊と近い位相を持った人間で、精霊を人間界に現界させることができる。特に光属性の精霊と相性がいい。十代の場合はカリスマ的な好かれ方をするが、どうもセツの場合はチャーム的な好かれ方……というかぶつちやけ惚れられる場合が多いようだ。

素直に気持ちをぶつけてくるアテナのことは憎からず思っているようであるが、優柔不断な性格が災いし、未だ友達以上恋人未満。

現在は『絵札の三銃士』と共に『ヴァンダルエンジンジェパーミツシヨン』を併用している。たまにライムにせがまれて『雷族』も使うらしい。

天然ジゴロなので全く同情の余地はないが、女難に逢いやすく、癖の強い女性陣に振り回されて少々疲労気味。

当初はボケを多用していたが、周囲が混沌としていくにあたりツッコミ役として活躍することが多くなってきたように思える。

デュエル傾向としては相手の行動を阻害し、相手ターンであつても自由にカードを展開していく「ずっと俺のターン！」な戦い方を得意としている。

天音 アテナ（あまね あてな）女 13歳（飛び級） 157c

m 43kg B81W53H80

・使用デッキ マイフェイバリット

『アテナ』 『アテナ』 『光神テテユス』

『墮天使』 『墮天使スペルビア』 『墮天使アスモディウス』

・容姿

色素の薄いブロンドの髪を背中に届くか届かないかまで伸ばしている。カチューシャチックな白いリボンをハルヒっぽい感じでつけ

ている。結び目には天使の羽のアクセサリーがちょこんと確認できる。

・キャラ設定

一話目から明らかなメインヒロイン。本来のGXにはいなかったキャラのため、セツに自分と同じイレギュラーかと勘違いされていた。未だ、その存在の理由は明らかにされていない。

性格は純粹で健気。儂そうなイメージと裏腹に芯の強い一面を持つ。結構嫉妬深い。13歳、という年齢の割に精神的にも肉体的にも成熟していて、普通に高校生くらいに見える。決して老けているわけではない（笑）。

アカデミアに飛び級で入学して勉強で苦労もしていないあたり、かなり頭はいいようだ。運動については人並みより多少マシくらい得意と言っただけではない。

社交的で異性でも特にためらいなく話しかけられる性格と整った容姿もあって、小学校ではアイドル的な扱いを受けていた。が、セツに会うまでは心惹かれる異性はなかった。

デュエルとの出会いは小学校に入った頃。自分と同じ名前のカード『アテナ』を手にしたことでデュエルに興味を持ち始める。

セツに一目惚れし、その後は一途にセツを慕う。家族構成その他は不明。実はまだ色々設定が明らかにされていないヒロイン。

さだめとは色々あったが、今ではそこそこ仲はいい。元々誰とでも仲良くできるアテナは、過去の遺恨もさら々と水に流し、お友達関係を築いている。が、セツに関しては今でも一時間に一回は激突しているらしい。

そのさだめとのいざこざの中で一時ダーク化し、その際にセツにキスをするという大胆な行動に出る。記憶は残っているらしく、今でも時々思い出しては赤面憤死している。まあ、幸せそうではある。基本的にツツコミ体質。というか常識人。

デュエルの傾向は意外にも最上級天使を多用した重量級のハイビ

ート。アテナによるバーンも多用するので、ライフ4000だとすぐに決着がつく場合が多い。ダーク化した際にもやはり重量級の天使を多用していた。

御堂 みどう 運命女 さだめ 15歳（現実では18）146cm 42kg

B74W51H76

・使用デッキ マイフェイバリット

『終焉のカウントダウン』 特になし

『禁止スタンダード』 『処刑人 マキユラ』

『マジエクワンキル』 特になし

『次元ダーク』 『終焉の精霊』？

あとは各種メタデッキ。

・容姿

顔立ちや髪の色は基本的にセツと同じ。細長い黒いリボンで短めのポニーテールにしている。

・キャラ設定

第十話から登場。出番こそ遅かったものの、登場時から作品の空気を全て掌握していたといっても過言ではない。これでもメインヒロイン。

性格は複雑で、テンション等によって変わる。ハイならセツに対して異常な愛欲を向ける変態工口娘的な感じで、ある意味一番平和ローになると周囲に大した被害こそ及ばさないがこの世界に対する怨み事をブツブツつぶやき、ニュートラルや裏になった時に被害が増す。いわゆるチャージモード。ニュートラルだと本格的なヤンデレモードになり、嗜虐的な思考と常識無視の言動で周囲を恐怖に落とし込む。とはいえ、周囲への被害はそれだけ。主に被害はセツに向けられる。裏になるとそれが一変し、誰彼構わず手を出す暴走モード。セツに近づく女性たちを陥れてきたのは闇モード。理性を保

ったまま周囲を攻撃する最も危険な状態。セツはこのモードを知らなかった。

上記の性格はさだめの精霊である『終焉の精霊』によって生後すぐに歪められたものであり、本来のさだめはモラルハザードなところこそあれ普通に可愛らしい少女である。上で言うとハイモードが一番近く、アルカナのエロ担当。ただし、肉体的にはまったく色気はない。……特定の趣味の人なら話は別だが。

セツ中毒と言っていいほどセツに依存している。セツに二週間会えないと思っただけで死にかけるくらいには。だがどんなに死にかけていてもセツさえ与えれば全快で復活する。

アテナには罪悪感を感じているが、セツのことに關しては全く譲るつもりもないらしい。よくある、お兄ちゃんを任せるならせめてこの人。みたいなのも全くなく、依然兄を誰かに渡すつもりは欠片もないらしい。

完全にボケキャラ一直線。色んな意味で自重する、という言葉を知らないらしくメタ発言も平気でしゃべる。

デュエル傾向は相手に対するメタや禁止カードなど、手段を選ばない。

希^{きさき}冴^{さい}姫 女 精^{クイーンズ・ナイト}霊 165cm 45kg B82W56H80

・使用デッキ

なし（使うとしたら『絵札の三銃士』）

・容姿

そのままクイーンズ・ナイト。最近はや長い金髪を一房のみつまみにしてまとめている。服はロングスカートを好んでいるようだ。

・キャラ設定

セツの精霊の石柱。ツンデレ担当ヒロイン。最近はやほぼ完全にデレに移行してきた模様。二話から登場しているが、セツに名前を貰

うまではそれほどヒロイン的な立ち位置ではなく、むしろギャグ要員として使われることすら多かった。

性格はお姫様系ツンデレ。作中では実は一番純情で、手を握られただけでオーバーヒートするぐらい。

クイーンとはいうが、あくまで絵札におけるクイーンであるというだけで、別に王国の王妃とかではない。ただし、姫として扱われることが多いので性格もお姫様チック。

アテナを酷く敵視していて、アテナが出てくると大抵不機嫌。ようやく出会えた憧れの主様を横から搔つ攫っていくのが我慢ならならしい。それでも実力については認めているらしく、共闘することならやぶさかではないといったところ。

真面目な性格だが、浮世離れしているのでツッコミではない。天然ボケというのが妥当なところ。

ルイン 女 精霊（破滅の女神ルイン） 170cm 48kg

B87W57H85

・使用デッキ マイフェイバリット

『デミスドージャー』 『終焉の王デミス』

『ルインライフゲイン（未使用）』 『破滅の女神ルイン』

・容姿

そのまま破滅の女神ルイン。普段着はワンピースか七分丈のパンツルックなどを好む。

・キャラ設定

元々サブキャラ予定だったのが、書きやすさも相まって一気にヒロイン格へと昇格した精霊。クーデレ担当。

さだめの相手としてタッグデュエルに登場。ただし、さだめの精霊というわけではない。精霊界では絶大な人気を誇り、ファンクラブのようなものであるとのウワサ。

さだめには、さだめにとり憑いていた『終焉の精霊』の監視目的で近づいていた。セツのことも気にはしていたが、それよりも自らの復讐のために動いていたようだ。だが、セツの過去と心の歪みを知り、自らの過去と照らし合わせてセツに親近感のようなものを覚えたのがきっかけでセツと想いを共有し、共に在りたいと思うようになった。

ギャグでは煽りとボケを駆使してセツを振り回す。特に煽りが上手く、希冴姫をけしかけて楽しむのが最近のトレンド。

デュエルでは相手フィールドをとにかく殲滅していく傾向が強い。

ジャック 男 ジャックス・ナイト
精霊186cm 62kg

・キャラ設定

言わずと知れた苦勞人代表。事あるごとにケンカの仲裁に呼び出され、胃を痛める毎日を送っている。一度ストライキを決行したが、あまり意味がなく、結局変わらず仲裁役を務めている。

万能執事さん。人間界の料理や針仕事、掃除洗濯なんでもござれのすごい人。テキストには『あらゆる剣技に精通し……』とあるが、どうやら剣技以外も達人なようだ。

細かいところによく気が付き、気がきく。そんなところもやっぱり執事っぽい。

キング 男 キングス・ナイト
精霊179cm 60kg

・キャラ設定

ずつといるのに影の薄いじいさん。好々爺な言動が目立つが、そもそもキャラの濃いセツたちの中ではあまり目立てない。一応年長者らしくいい事を言うこともあるようだ、それでもやっぱり目立

たない。インパクトその他で言えばライムとかより影が薄い。

キングとは言うが、希冴姫と同じくただ絵札のキングであるというだけのことで別に王様ではない。それでも国の重鎮ではあるらしく、普段から政務をこなしている。

シャルナ 女 精霊^{アテナ}173cm 50kg B86W56H88
・キャラ設定

セツによつて目覚めさせられたアテナの精霊。最上級天使で偉い天使さまらしいが、威厳は皆無。ノリが軽いのが原因かと思われる。口癖なのかよく『天罰てきめん』しようとする。『アテナ』の効果だろうか？

アテナが落ち込んでたりダーク化したりするもんだからすっかり出番が少ない。当初の予定ではもっと出番もあったのだが……作者の見通しの甘さが良く分かるキャラの一人。

ライム 女 精霊（雷電娘々）155cm 42kg B84W54H85
・キャラ設定

月一試験にて満を持して登場……したはいいが、その後まったく音沙汰なし。次の出番はあとがきという結構不憫な子。それと言うのも元々この子の登場予定がなかったというのが大きい。

とはいえ、割と人気もあるような気がする辺りはさすがニャンニャン。アカデミアにもファンが多いだけはある。

加藤 友紀女 16歳 163cm 45kg B83W55H
84

- ・使用デッキ マイフェイバリット
- 『戦士族お触れビート』 『サイレントソードマンLV5』
- ・キャラ設定

正確にはオリキャラではない。PSPのゲームTGFシリーズにおいて登場したオベリスク・ブルーのモブ女子。当初はアテナの対戦相手としてセレクトしただけだったが、バレンタイン特別編にて何故か一人勝ちをかましている。

特に目立つたところのない普通の女子。だが、それだけに癖の強いヒロイン勢の中でセツにとっての癒しキャラとしての存在を確立している。なので何気にセツからの好感度かなり高い。いわゆるダークホース。出番さえあれば一気に他ヒロインを出し抜く可能性を持った危険人物。

ネイキッド 男 精霊（剣聖ネイキッドギア・フリード） 19
3cm 80kg

- ・使用デッキ マイフェイバリット
- 『ギア・フリードデュアル』 『剣聖ネイキッドギア・フリード』
- 『フェニックス・ギア・フリード』
- ・キャラ設定

作中でセツに勝利している唯一の人。セツがデッキを変えるきっかけになった。

ルインに惚れているらしく、色々アタックしているらしいが全く効果はなさそう。ルイン曰く『筋肉が暑苦しい』で、希冴姫曰く『おぞましい筋肉お化け』ととりあえず筋肉が嫌らしい。普段は鋼鉄の鎧を纏って自らを戒めているが、作中の場合は休暇だったので拘束は外していた。

「こんなもんか？ アテナ」
「はいセツ。多分これで全員だと思います」
「まあライムの元持ち主とかまでいれるのは何だしな」
「そもそもそんな人に詳しい設定なんてありませんよ……」
「つーか長い！ キャラ設定だけでどんな長さだよ！」
「そ、それだけキャラを作り込んであるんですよきつと」
「いや、ただ単に作者が短くまとめるのが下手なだけだろ」
「……否定のしようがないですね」
「あとがきも毎回散々書いてるし。あとがきそんなに長くしても仕方なかるうに」
「あ、あはは……」
「まあいいや。とりあえず、俺たちの設定はこんなもんだ。他にも気になることがあったら感想辺りにでも記入してくれ」
「……ところでセツ」
「なんだ？」
「私は加藤さんの欄が非常に気になるんですが」
「……気にするな」

第一期終了記念「キャラ設定資料集」（後書き）

番外編諸々の前にとりあえず設定資料アップ。ネタバレの宝庫。

とりあえずこの紹介に出てきた女性陣は全員番外編で主役張る話を作ろうかと。

他疑問等ありましたらお気軽に感想までお書きください。

それでは、レーネスでした！

第二期第一話「学園祭は波乱万丈」（前書き）

一日開きましたがその代わりに早めの更新。

学園祭です。完全に好き勝手やりました。最近シリアスばかりでちょっとギャグの勘を取り戻すのに苦労してます。まあこの話はギャグというよりドタバタ構成ですが。

では、どうぞー！

第二期第一話「学園祭は波乱万丈」

アルカナく切り札の騎士く

第二期第一話「学園祭は波乱万丈」

それはアテナとさだめが退院して、一週間と経たない内にやってきた。

「そういえば、セツのところは何をやるんですか？」

「お兄ちゃんのところはコスプレ喫茶ならぬコスプレデュエル。色んなモンスターの格好してお客さんとデュエルするんだよ」

「……なぜ私と同じく入院していたさだめさんが我が事のように答えられるのが不思議です」

「わかってないなあ。さだめはお兄ちゃんの事だったらなんだって知ってるんだよ」

ウソつけ。原作知識の癖に。

「私も遊びに行きますね！ 学園祭の出し物！」

そう、学園祭である。しかしアテナよ。勘違いして貰っては困る。

「お前もウチで接客手伝いだからな」

「え!？」

当然だ。アテナのような素材を見逃してなるものか。原作だと明日香のハーピー・レディだけだったか……。

「当然、お前もな。さだめ」

「お兄ちゃんのためなら喜んで！」

何が着られるのかなくなんて鼻歌すら歌っているさだめを見て、

アテナも決心したらしい。

「わ、わかりました。お手伝いさせていただきます。えっと……」

「衣装は当日まで内緒な。安心しろ。お前たちののは、俺が一針一針丁寧に縫いあげた自信作だ」

「つて、セツが縫ったんですか!？」

「当たり前だろう。何を驚いてるんだこいつは。」

「い、いえ……セツが針仕事得意だったなんて知りませんでしたから……」

「知る人ぞ知る、俺の特殊スキルの一つだ」

「相変わらず妙な特技を持つてるんですね……」

俺の無駄スキルは主に学園祭でこそ発揮させると言っても過言ではない。

「昔からさだめの服を繕ってくれるのはお兄ちゃんだけだったから

……」

「さだめさん……」

「……なんか勝手にしんみりしているが……」。

「繕うだけなら一から手縫いの技術まではいらんだろうが。ほぼ趣味の領域だよ」

コスプレ衣装はまた色々別の難しさがあつて苦労したもんだが……。

「ジャックにも協力して貰ったんだ。あいつは本当になんでもできるな」

まさか針仕事で俺に匹敵する技術を持っているとは思わなかった。

『むしろ私の方こそ、主様があれほどの腕を持っているとは夢にも思いませんでしたよ』

俺の言葉に反応して、ジャックがそうツツコミを入れてくる。

「俺は意外な特殊技能を大量に所持しているからな」

「役に立つのか立たないのか微妙な能力多いけどな」

「何をう。俺の特殊技能百八つの内の一つ『ゴキポンをサーチする程度の能力』でいくつの家庭が救われたと思ってる」

「……セツ、今度女子寮に来てください。そこであの黒い悪魔の根絶を！」

女子寮に招待された。

「それはいいけど、『混入された睡眠薬、媚薬を感じ取れる程度の能力』はなくて欲しい」

「……それはお前から貞操を守るために身に付けた生きるための知恵なんだが」

バレンタインだろうと普段の食事だろうとお構いなしに混ぜ物するからなコイツ。

「……なんか他の能力が聞きたいような聞きたくないような……」

「『旅行前日には眠れなくなる程度の能力』とか」

『主様、それはただ子供っぽいだけでは……』

などと冗談交じりの会話をしていると、完全に浮かれポンチと化した翔が駆け寄ってきた。

「みんなー！ やったツス！ 明日香さんが協力してくれることになったツス！」

「おお！ やったな翔！」

「……あんなに必死で土下座されたら嫌とは言えないわよ……」

明日香は多少辟易しているらしい。まあ確かに、翔のあのテンションは引く。

まあそれはともかく。

「これで希冴姫とルインも併せて、女子分は確保したな」

「セツ……何時の間に希冴姫さんたちまで……」

その時、廊下の先から女子の黄色い声が聞こえてくる。ああ、これは……。

「やあ諸君！ 元気に胸キュンポイントを溜めているかな？」

「あら、兄さんじゃない」

そう、復活したブリザードプリンスこと天上院吹雪さんだ。

「おお、アスリンじゃないか」

「アスリンはやめて」

「つれないなあ。ところでセツ君。例の物はどうなっているかな？」
「バツチリです。明日香の協力も翔が見事とりつけてくれたので、
万事が万事、上手くいっています」

「フフフ……それは何よりだ。僕も文化祭が楽しみで仕方がなくな
ってきたよ！」

二人していたずらっばい笑みを交わし合う。

「……ほどほどにしておけよ」

「あ、亮さん」

呆れかえったような溜息が聞こえたのでそちらに目を向けると正
にその通りの顔をしたカイザー亮さんが立っていた。

「まったく……お前は普段ごく真面目だというのに、どうしてそう

……」

「甘いですね。俺は学園祭では化けますよ？」

「吹雪のストッパーから吹雪の推進活性化剤に変貌するな。手に負え
ん」

しかし、それにしても……。

「なんか……視線を感じませんか？」

今まで感じたことのないようなプレッシャーを感じる。吹雪さん
や亮さんは特に気にしていないようだ……。心なしかアテナやさ
だめの視線も痛い。

「そりゃ当然だよ」

「ユーキちゃん？　なんか久しぶり？」

今日は千客万来だな。明日は学園祭だし、わからなくもないが。

「うん……わたしも久しぶりな気がするよ」

「と、それは置いといて。なにが当然なんだ？」

「吹雪さま、亮さま、セツ君といえばアカデミアではモテ男トップ
スリーだから」

「……初耳なんだが」

「ハッハッハッ！　いいじゃないか！　セツ君も女の子にモテモテ
で嬉しくないかい？」

「いや……今の俺の立場からするとあながち喜んでばかりでもいられないんですが……」

事実、アテナたちの視線が痛い。痛すぎる。ザックザクだ。

「というか、他二人は様付けで何故俺は君付けだし……」

「え、えつと〱庶民的で親しみやすいモテ男っていうか……」

「それ、地味って言わない？」

確かに三人の中では最下位だ。いや、別にいいんだけども。あの二人は最早不動のトップツーだし。

「吹雪様たちはなんとというか、アイドル的な人気でセツ君は普通にモテるみたいな」

「……やっぱり、素直には喜べないな」

「なんとという羨ましい悩みツスか……」

翔がうらみがましい目で睨んできている。……元喪男だった俺も気持ちわかるんだが……。

「あ、そうだ。ユーキちゃんも明日、俺たちを手伝ってくんない？」

「ふえっ!?! わ、わたし？」

「ああ。衣装はこっちで何とかするからさ」

この際だ。引き込めるだけ引き込んでしまえ。衣装は余ってるのを調整すればいい。それくらいは今日一日でも十分可能だ。

「サイズは……と。オツケー把握した」

「把握したの!?! 今の一瞬でわたしのサイズ把握したの!?!」

特殊技能『一目で服のサイズを見分ける程度の能力』だ。

「なんでもそれつけければいいと思ってませんか？」

「気にするな。仕様だ。」

「それで、どうかな？」

「う、うん。わたしでよければ……」

「いよっし! 癒し要員確保!」

「い、癒し……?」

「あ、いやなんでもない」

「そうなんだ。えつと、じゃあお願いします」

「これだ。この普通さが何よりの癒しなんだ。ちょっと拝んでおう。」

「南無……」

「せ、セツ君？」

不審な目を向けられてしまったので止める。

「あ、それで亮さんもどうです？」

これで亮さんまで入ってくれば鉄壁の布陣になるんだが……。

「悪いが、遠慮させてもらう。柄じゃない」

「ですよー……」

「ええっ！？ いいじゃないか、一緒にやろうよ亮！」

「……お前の提案に乗って得をした話が、今まで一度でもあったか？」

「むしろ乗ってくれたことがないじゃないか」

そりゃまともな提案がなかったからだろうな。

「でも、できれば出て欲しいなあ……カオス・ソルジャーのコスでカオス・ソルジャーのコスで……！」

大声で強調してみる。遠目から見ている女子にも聞こえるように。案の定、周囲からの期待する目線が増幅した。

「ぬ……」

「ハッハッハッ！ ナイスだセツ君！ さあ亮、女の子たちにここまで期待されてやらないのは男じゃないよ！」

「い、いやしかな……そもそもカオス・ソルジャーの衣装はすでに鎧だろう。本当に用意できるのか？」

「すでに用意しました！ むしろ錬鉄しました！」

『造ったの！？ 一から！？』

全員が驚愕していた。しなかつたのはさだめくらいか。

「なにかおかしいか？」

「おかしいツスよ！ 何もかも！」

「セツって鍛冶までできるんですか！？」

「いやー流石にマジな鎧じゃないけどな。アルミ製にメッキで」

それでも、段ボール製なんてチャチなもんで決してない、本物の質感をお届け！

「十分に異常だと思っわ……」

「俺の無駄スキルに限りはない」

「確かに、鍛冶スキルが役に立つことなんて滅多にないよね」

「何故そんなスキルを会得しようと思っただんだ……」

「中華鍋とかの修繕してたらハマりました」

針仕事と同じく、家事が趣味になったわけだ。

「中華鍋の修繕は、普通個人ではしませんよ……」

「まあそんなわけで、結構出来にも自信がありますから。是非」

「……すでに作ったものを無下にするのも悪いな」

『キターーーーーー！！！！！！』

ちなみに、俺たちではない。周囲を固めていた女子連中がすごい勢いで連絡網らしきものを回し始めた。

「……これで学園祭は決まりだな」

「ああ。これでイケなかったら嘘だ」

もうこの時点で成功はほぼ間違いない。

「あとはセツの作った衣装がどれだけすごいにかかっていますよ」

「ふ……俺は学園祭においては一切の妥協をしない」

「お兄ちゃんの凄さ……その目に焼き付けるといいよ」

「……さだめさんが嫌に誇らしげなのが目につきます」

そして、学園祭当日。

「さあ目にも見よ！これがカオス・ソルジャー・カイザーだ！」

『キヤアアアアアアアアアアッ！！』

「す、すげえ……女子連中の反応も不思議じゃないぜ……」

「まさか、ここまでとは……」

亮さんが目を剥いて驚愕してるのなんて実にレアだ。

「お前……これで十分食っていけるぞ」

「お褒めに預かり恐悦至極。さあ、続いてはお待ちかね、天上院兄妹！」

「ババン！ と吹雪さんが自ら用意したサーチライトを照らす。そこから登場したのは……」

「キミたちの頭上には……何が広がっている……？」

『天！！』

「ンンン〜ジョイン！ ブリザードプリンス改め、ブリザード・ウオリアー吹雪、今ここに降臨だ！」

『キヤアアアアアアアアアツ！！』

蒼銀の鎧に身を包んだ吹雪さんの登場で、一気に場が湧く。

「せ、セツ？ 本当にこれ、個人で作ったのかしら？」

『ウオオオオオオオオオオオオツ！！』

そしてコールド・エンチャントのコスに身を包んだ明日香の登場で、男子生徒も凄まじい熱気だ。……なお、原作だとハーピー・レディのコスだったが、敢えて俺はこちらを選択した。吹雪さんと並べるために。

「ハツハツハツ！ いいねセツ君！ まさか本当にアスリンとペアでプロデュースしてくれるとは思わなかったよ！」

「あ、重たくないですか？ それ結構重厚な奴で、結構重量がありますけど」

「無問題だよセツ君！ 確かに多少動きづらいが、ここまで立派なものに文句なんてつけられない」

「……そうね。不気味なくらいに立派ね」

「いよし！ 場のテンションは最高潮！」

いつの間にかデュエル関係なしにファクションショーになっている気がするが、まあ盛り上がっているので問題なし。学園祭なんてもんは盛り上がったもん勝ちだ。

「アテナ！ いけるか？」

「こ、この後だと物凄く気が進みませんが……」

「心配はいらない。俺が最高のコーディネートを披露してやる」
アテナの衣装は考えに考え抜いた末セレクトした自信作だ。

「続いては！ 天音アテナ扮する『勝利の導き手フレイヤ』〜！」

「ど、どうも……」

『キターーーーーー！！』

「ひゃあ!？」

ふふふ……アテナはすでにレッド寮では女神扱いだからな……この反応も予想済みだ。

「あれ、髪の毛とかどうしてるんだ？」

「まとめて上げて、ウィッグ使ってる。中々それっぽくなっているだろ？」

「むしろフレイヤの精霊にしか見えねえよ」

くくく……俺の無駄スキルもとうとう神の領域に足を踏み入れたな。

注目されまくって羞恥からボンボン使って縮こまるアテナ。それを見て更に熱狂の渦が巻き起こる。

「む……」

微妙に気に入らん。

「次！ さだめ！」

「はい」

とりあえず次に行く。アテナもこれ以上は羞恥で倒れそうだし。

「ホントにそれだけかろう？」

祭りだからということとで精霊界から来てもらったキングが茶化す。

「ええい黙れキング。さだめは『魅惑の女王Lv3』！」

『おおおおおおお……』

ちよつと他とは反応が違うな。まあさだめに関しては元々の印象が怖かったんだらうが。

「おにいちゃん！ どう？ 似合ってる？」

「ああ、似合ってるから擦り寄ってくんな」

「だって今のさだめは『魅惑の女王Lv3』だもーん。お兄ちゃん

を装備」

「するなっ！」

調子に乗り始めたのでチョップ。割と痛くしたつもりだが、全く堪えてないあたりは流石さだめか。

「そっぴゃ、お前は何もしないのか？」

「あん？ 俺か？」

というか十代。前から思っちゃいたが、なんだそのごちゃごちゃしたコス。ええと……『闇・道化師のサギー』に『エルフの剣士』に『鉄の騎士ギア・フリード』に『魔導戦士ブレイカー』に……カオスだな。

「というか、サギーだけ浮いてる」

他は戦士系なのに。いや、ブレイカーは魔法使いだけど。見た目は戦士。

「そりゃお前がオレたちのプロデューズはしてくれなかったからだろ！」

当たり前だ。確実に客が掴める亮さんや吹雪さんなら兎も角、なぜ態々男をプロデューズせにやなんのだ。

「ま、ウケ狙いとしちゃまあまあんじゃないか？」

俺がウケ狙いでプロデューズするとしたら確実に『ハーピー・クイン』のコスを強要するが。男に。

「……それ、トラウマになるぞ。やった方もやられた方も」

「確かに」

やはり俺はさだめの兄だな。こんなところで血のつながりを認識したくはなかったが。

「それで、お前は？」

「おっと。そうだったな。じゃあそろそろ俺も着替えてくるからその間場を持たせといってくれ」

吹雪さんが率先して司会を引き受けてくれるから問題なさそうだが。

「さあ皆！ 続いての登場は我らが万丈目サンダー！ 扮装は『X

YZドラゴンキャノン』だ！ 皆で万丈目君を迎えようじゃないか！ 1！」

『2！』

『万丈目サンダー！！』

『サンダー！』

……よし。大丈夫そうだ

盛り上がる会場の裏で、俺も用意しておいた衣装に着替える。ちよっと着るのに手間がかかるのが難点だな。仕方ないが。

「さて！ ここで僕を始めとした皆の衣装、演出をプロデュースしてくれた今回の立役者を呼ぶとしようじゃないか！」

おし、出番か。打ち合わせ通りに頼みますよ。吹雪さん。

「まずは彼を呼ぶ準備をしようじゃないか！ 希冴姫君、いや『クイーンズ・ナイト』！」

「……まったく、セツ様の遊び心にも困ったものですわね……キング殿！」

「ほっほっほ。まあ、後先考えずに突っ走るのは若者の特権じゃて……ジャックよ！」

「喧嘩の仲裁などに比べれば、なんと平和で容易いことかと……」
希冴姫たち扮する……というか本人だが。『絵札の三銃士』たちが剣を合わせる。態々このために精霊界から来てもらったのだ。流石にいい仕事をする。

「さあ、召喚よぼうじゃないか！ 御堂切君……いやさ『アルカナ・ナイト・ジョーカー』を！」

ドライアイスで演出。……ここまでは考えてなかったんだが、どうも吹雪さんがやってくれたらしい。さすが、気の利く人だ。

「はあっ！」

俺は手に持った剣を堂々と前に突き出す。『融合』のイラスト)

隼人ががんばつてもらつた)が突き破られ、その後ろから俺は悠々とした足取りで姿を現す。

息を呑み、静まり返つた会場を、俺は鋭い目で見回す。

「呼びかけに応え……我、降臨せり！」

『おおおおおおおおおおおおおおおつ！！』

爆発する歓声。よし！手ごたえ十分！

「素晴らしい！本当にすごいじゃないかセツ君！」

「……お前は本当に、その道で食っていけばいいんじゃないか……？」

「ば、バカな……俺様のXYZを超える完成度だと……？」

ふ、ふふふ……これでこそ何日も何日も貫徹で作業した甲斐もあるつてもんだ。

「ところでどうだろう？ここは一つ、僕とお手合わせ願えないかな？」

吹雪さんが手にしたダブルセイバーを構える。最後の演出。

「……いいだろう！」

俺も剣を手に構える。

「行くぞ！」

「はあああああああつ！！！」

ガインツ！ギイン！と剣同士がぶつかり合う。その戦いは真に迫っていて、会場の誰もが固唾を呑んで戦いを見守る。

「ははっ！やるね！このブリザード・ウォリアーの剣舞についてくるとは大したものだよ！」

「それは……こちらのセリフだ！」

……普通に考えて、攻撃力3800のアルカナに1400のブリザード・ウォリアーが拮抗しているのはありえないが。

「せえい！」

「ぐう……！」

俺の豪剣が吹雪さんを襲う。吹雪さんはギリギリ防ぐも、その表情は辛そうだ。

『吹雪さまぁー！ 頑張つてえー！！』

『セツくんも頑張れー！』

盛り上がる会場の傍で、さだめが亮さんに何事か耳打ちしていた。やれやれという顔をしつつも、亮さんはこちらに近づいてくる。

「吹雪っ！ 加勢する！」

「おおっ！ 亮！」

「ちい……最強剣士のお出ましか……」

俺は苦々しげにそうつぶやく。もちろん、亮さんの登場で会場のテンションはマックス！ 亮さんが了承してくれるかは正直賭けだったが、さだめの交渉術と学園祭という一種の固有結界の影響だろうか。なんとか無事、亮さんも参加してくれた。……あとは。

「せ、セツ！ 頑張ってください！」

「！」

キタ！ アテナの応援！ さだめよくやった！ あとで御褒美をやるう！

「我と互角に打ち合う氷結の剣士に最強剣士……絶望的な状況だ……だが！」

アテナを見る。顔を真っ赤にして今にもへたり込みそうだが、なんとかその場でボンボンを上下させ続けている。……正直萌えた。

「我には勝利の導き手が付いている。故に……我に負けはない！」

フレイヤは天使族にしか効果ありませんよーなんてのは最早KYな暴言にすぎないとばかりに吠えて俺は突貫する。

「おおおおおおおおっ！」

「はあああああああっ！」

亮さんとは特に事前の話し合いとかはしていなかったが、持ち前の運動神経と頭脳で見事に殺陣を演出してくれる。……まさかここまでとは。正直感服した。

そして、何合もの剣撃の末……。

「ここまで、だな」

「ああ。いい戦いだっただよ」

俺は盾で亮さんの剣を受け止め、吹雪さんの首筋に剣を押し当てていた。だが、吹雪さんの剣もまた、俺の首筋に。引き分けた。『う……』

静まり返っていた会場が、堪え切れじと爆発する。

『うおおおおおおおおおおおっ！！』

俺たちもめちやくちや上手く行ったことに舞い上がりながら吹雪さんとハイタッチ。

「ハハハ！ やったねセツ君！」

「ええ！ やりましたよ吹雪さん！」

こうして、俺たちの学園祭は始まったのだ。

おまけ。

「デュエルはどこに行ったのよデュエルは」

「それは、言わないお約束」

どこぞのライブ会場のようになっていいる場を見て、呆れたように呟く明日香を、完全においてけぼりで出てくるタイミングを逸したルインが宥めていた。

第二期第一話「学園祭は波乱万丈」（後書き）

やりたい放題（作者が）の第二期開始です。まだ学園祭は続きません。ブラマジガール出てませんしね。ホントは全キャラ出したかったんですが、流石に全員操るのは無理。ライムも出したかったのに……。

セツは元の世界にいたころは演劇部の助っ人に引っぱりダコでした。いろんな意味で。役者としても大道具小道具衣装作成など、演劇部からは大金積んでも来てほしい人材だったに違いありません。

それでは、レーネスでした！

間話だったのを全部第二部ということで改訂。

第二期第二話「オールスター戦」（前書き）

大分遅くなりました。学園祭の後編になります。

メインはもちろんブラマジガール！……と、言いたいですが、オリキャラ同士の掛け合いが書き易過ぎてちよつと埋没気味……いけない、それについて指摘があつたばかりなのに。

ともかく、デュエルの内容……というかメンツは豪華にしたつもり。

ではどうぞー！

第二期第二話「オールスター戦」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第二期第二話「オールスター戦」

存分に盛り上がったコスプレ披露イベントも終わり、いよいよメイン（ホントだよ？）のデュエルを開始することになった。

『それじゃー参加者をどしどし応募するよー！』

マイクを持ってノリノリのライム。散々ゴネられたので態々精霊界から連れてきた。まあ、お祭りだしいいだろう。男子生徒も嬉しそうだ。

「天音さん、俺！俺とやろうよ！」

「いや何馬鹿言ってるんだ！ここはフレイヤちゃんって呼ばなきゃだめに決まってるんだろ！ってことで俺とやろうよ！」

「え、えっと。あの……」

……蹴散らしてくるか。

「まあまあお兄ちゃん。ここはさだめに任せてよ」

「さだめ？」

「あのカイザー亮さんをも説き伏せたさだめの交渉術であの場を収めてくるよー！」

「あ、ああ頼む……？」

微妙に嫌な予感もするが、確かに亮さんを説き伏せた実績は確かだし……。

「ああ、わかった。任せるよ」

「うん！ 成功した暁には御褒美頂戴ね。お兄ちゃん！」

「あ、おいちよ……」

勝手な約束をしてさだめがアテナのいる辺りに歩いていく。

「まあ、お手並み拝見といきますか」

「はいみなさん整理券ですよー。フレイヤちゃんとやりたい人は五百円でさだめから整理券を買って行ってねー！」

「おいこら待てその妹」

飛ぶように売れていく整理券を満面の笑みで渡して行くさだめの肩をがっしと掴んだ。

「どしたのお兄ちゃん？」

「ほう、わからないか？」

「ちゃんと列を整理して場を収めてるんだよ？」

「整理券の値段が安すぎる。その倍は絞りとれるぞ」

「セツ……!?」

なにやらアテナが絶望的な叫び声をあげているが………すまん。耐えてくれ。

「金のために！」

「セツ。あとでお話があります」

O H A N A S H I ですなわかります。

「あっ！ セツ君セツ君」

アテナをダシに小遣い稼ぎ中だった俺たち兄妹に『荒野の女戦士』のコスプレ衣装を纏ったユーキちゃんが寄ってきた。

「セツ君を御指名だよ」

「俺を？」

「うん。すっごく可愛い『ブラック・マジシャン・ガール』のコスプレをした人」

「ブラマジガール!？」

何故俺に？ 十代を元氣付けるためにデュエルするんじゃないかっ
たのか？

「……そしてなぜキミたちはそうも不機嫌そうなのかね？」

「なんでって……」

「わかってるよねえ……お兄〜いちゃん」

「ヤバい。なんか知らんがまたさだめがちょっと黒い。」

「ちなみにセツ君の整理券は二千円で販売されているんだけど」

「高い！ ならアテナは五千円でも良かったか。」

「殆どさだめちゃんが買い占めちゃって」

「おいこら待てその妹」

じろりと睨みつけてやると、恥ずかしそうに頬を染めて目を逸らした。

「十万円は痛かったけど、それでお兄ちゃんを独占できるなら……」

「バカだろお前」

こいつ一人で五十枚も買ったのか。

「一回のデュエルを平均十分として五百分。時間にして八時間三十分三十三秒はさだめのものだよお兄ちゃん。それだけあれば何回戦できるかな？」

「デュエルだよな？ 何回戦つてのはデュエルのことだよな？」

さだめは無言でビクビク痙攣していた。……今日は徹夜で警戒だな。

「で？ そのさだめのお兄ちゃんを奪おうとする魔女はどこ？ と

りあえずトラウマを植え付ける必要があるんだけど」

「真顔で言っな。お前の場合は冗談ですまん」

「冗談じゃないよ？」

「小首をかしげるな。不思議そうな顔で見るとおぞましい物体を用意し始めるな」

ルインの言っていた通り、まだちょっと歪みが残っているらしい。

「あの一？」

「うおっ！？」

中々返事が来ない俺たちに業を煮やしてか、件の美少女……オホーン！ ブラマジガールがやってきた。

「お相手、して貰えるかな？」

輝かんばかりの笑顔ゴチです！ あっ、いやさだめ、顔がなんか『終焉の精霊』チックになってるから。お前の場合それはシャレになつてないから。

「！ ヤツの気配」

「嘘だよな？ 嘘って言ってくれルイン様！」

「ウン」

「ありがとう！ そして殴らせてくれ！」

「シャレにならんとゆるーに。」

「あははっ！ 本当に楽しそうな人だね！ 私も仲間に加えてもらえますか？」

「お、おう。もちろん。デュエルだったか？」

「うん！ お願いしまーす！」

「……うむ。翔たちが夢中になるのもわからなくも……。」

「シャルナ！」

「天罰てきめん！」

「久しぶぎゃあああああ！？」

流石に人目もあるから光線は出さなかったが代わりに杖で思い切り殴打してきた。地味に……いや！ 派手に痛い！

「続いて急所攻撃」

「待て！ それはシャレに……」

「待って！ お兄ちゃんだけのモノじゃないんだよ！？」

「いや俺だけのもんだよ！ 少なくともお前の物ではねえよ！」

「つーかアテナはあれだけの挑戦者をどうしたんだ。」

「勝つてきましたけど？」

「もう!？」

「この子、全員ワンキルで沈めてたわよ……」

「アテナ無双!？」

くっ……こいつらに付き合ってたら何時まで経つても話が進まん！

「謎のブラマジガルよ！ 我、アルカナの名の元に尋常の決闘を申し込む！」

頭を抑えたままカツコつかないことこの上ないが、これ以上漫才で彼女を置いてけぼりにするわけにはいかない。

「はあい！ その決闘を受けまあす！」

『実況は僕、丸藤翔がお送りします！』

「いきなり現れやがったな。まあいいや、始めるか」

『そして解説は伝説のXYZドラゴンさん！』

『はい』

『そしてそして！ アジテーションはボク、雷電娘々がやっちゃうよー！』

「ライム、お前は帰れ！」

「そんな！？ どうして！」

「アジテーションはいらん！」

「じゃあごしゅ……」

「その呼び方をここでするな！」

「セツ君のサポーター！」

「それもいらん！」

「そうだよ！ そのポジションはさだめが……」

そう言い合っている内にちゃっかりサポート席に座っているルイン。

『ああー！？』

「くく……無益な争い」

「……もういいから、始めるぞ」

デュエルの前から疲労困憊にはなりたくない。……もう、遅いか。

「それじゃーみんなー！ 応援よろピクですー！」

『はいー！ー！』

「デュエル！！」

『それでは先攻は僕の独断でブラマジガールから！』
だから覇肩すんな。

「横暴ですわ！ きちんと話し合いの上で当事者同士が……」
反論してくれるのは希冴姫だけだった。

「はい！ 私のターンでえす！」

結局聞き入れられず、ブラマジガールの先攻で始まる。まあ、そ
うだろうと思っちやいたけど。

「私はモンスターを一体守備表示でセット。ターンエンドでーす！」
「俺のターン！ ドロー！」

俺のデッキは一応こう言った余興のために組み直した特別デッキ。
こいつで勝てるかどうかはわからんが……盛り上げては見せようか。
「俺は『雷電娘々』を攻撃表示で召喚！」

「やったー！ ボクだー！」

「くっ……セツ様……何故このどらねこを……」

後ろでなにやら騒いでいるが、いい加減気にするのが馬鹿らしく
なってきた。

「うおおお〜！ ニヤンニヤンとブラマジガール！ 俺はどっちを
応援すればいいんだあ〜！」

「くそう！ 憎らしい！ よくもボクのニヤンニヤンを奪ってくれ
たなー！」

外野では何故か壮絶な葛藤が行われている。何気にライムの元持
ち主も来ていたようだ。

「バトル！ 『雷電娘々』で、守備モンスターを攻撃！ 『お仕置きサ
ンダー』！」

……この技名はどうかと思うが、ライムの奴が指定してきた。

兎も角、タカタカと太鼓をたたいて呼び出した雷が守備モンス
ターを……。

「残念！ 私の守備モンスターは『王立魔法図書館』でーす！」
「げっ！」

しまった。原作知識を当てにしすぎたか！

『雷電娘々』の雷は本棚に弾かれて余波が俺に襲いかかる。

「くう！」

セツLP3900

「なんてことを……どらねこなんて使うから……」

「ボク悪くないもん！ 脳筋姫ならもつとヒドかったもんねー！」
相変わらず奴らは仲が悪い。

『やったー！ ざまあみろー！』

そして翔、後で覚えてる。さだめをけしかけてやる。

「……俺はカードを一枚セット。ターンエンドだ」

「私のターンでえす！ ドロー！」

『さあ！ 僕らのブラマジガールのターンです！ みなさん大きな
声援を！』

『うおおおおおっ！！』

『がんばれー！』

『モテ男滅殺！』

お前ら、夜道じゃなくても気をつける。俺がけしかけるまでもなくさだめがゴツイガス銃を用意している。

「私は手札から『強欲な壺』を発動しまーす！」

カードを二枚ドロし、その上図書館に魔力カウンターが乗る。

「さらに『魔力掌握』も発動でーす！ 私はデッキから『魔力掌握』
を手札に加えて『王立魔法図書館』に魔力カウンターを一つ乗せま
ーす」

うわ、これで魔力カウンターが三つ。使用可能だ。

「『王立魔法図書館』の効果で、魔力カウンターを三つ取り除いて
カードを一枚ドロします」

『すごい！ いきなりのドロラッシュ！ 可愛い顔してやるぞブ
ラマジガール！』

『今の一連の流れで、手札を消費するどころか逆にアドバンテージ
を得ている。確かにいい戦術だ』

「みんなーありがとー！」

お前はどこのアイドルだ。

「私は『王立魔法図書館』をリリースして『ブラック・マジシャン・
ガール』をアドバンス召喚しまーす！」

『キターーーーーー！！！』

「むー、ボクの時より全然歓声が大きい」

「どっちも観客に媚び売っている尻軽ですわ」

希沓姫、色々な人を敵に回す発言は止せ。

「バトルです！」「ブラック・マジシャン・ガール」で『雷電娘々』を攻撃します！」

「1！」

「2！」

「サンダー！（万丈目）」

「『ブラック・バーニング』！」

「リバースカード『攻撃の無力化』！」

ブラマジガールの攻撃を、空間の渦が吸いこんでいく。

「アルカナ選手、足掻いています！そこまでして『雷電娘々』を護りたい気持ちは僕にもよく分かります！」

「セツ様。後でお話を」

O H A N A S H I フラグが凄まじい勢いで増殖していく。そろそろ命にかかわる。

「ご主人様の愛が、ボクを護ってくれたの……」

「お兄ちゃん？ 後でさだめともお話、ね？」

死亡確定。せめて遺書は書かせてください。

「あちゃーそうきますか。私はカードを一枚セットしてターンは終了です！」

「……俺のターン。ドロー」

この後の処刑が確定している俺はテンションがどうも上がりづらい。

「俺は手札から『エンド・オブ・ザ・ワールド』を発動！ 手札の『クイーンズ・ナイト』とフィールドの『雷電娘々』をリリースし、手札から『破滅の女神ルイン』を攻撃表示で儀式召喚する！」

「アルカナ選手、せっかく護った『雷電娘々』を儀式の贄としたー！？ 許すまじー！」

「ご主人様ー？ しびれるお仕置きと刺激的なお仕置き、どっちが

いいかにやー？」

「しびれるお仕置きでお願いします。こう、心臓マッサージみたいな。多分俺の心臓は止まっているから。」

「……そしてわたくしは完全にただの生贄ですね。これは念入りにお話をする必要が……」

「ジャック！ どこだ！ お願いします助けてください！」

「主よ、ジャックならばとうの昔に精霊界に叩き帰されておるぞ。」

ルイン殿の手で

「ルインー!?」

「当のルインは知らん顔である。くそう！ やはり貴様は破滅の女神か！」

「……俺はルインに『ダグラの剣』を装備。バトルフェイズ！」

ルインの両手にナックルダスターのような不思議な形をした剣が握られる。

「『破滅の女神ルイン』で『ブラック・マジシャン・ガール』を攻撃！ 『滅光吸斬』！」

『きゃあああああ!?』

『ああっ!? ブラマジガールがやられちゃった!』

『おのれ御堂!』

「そして『ダグラの剣』の効果により、相手に与えたダメージ分、俺のライフを回復する!」

ブラマジガールLP3200

セツLP4700

「更に『破滅の女神ルイン』は相手モンスターを戦闘で破壊した場合、もう一度だけ続けて攻撃することができる! 『滅光吸連斬』!」

「きゃあああああ!」

ブラマジガールLP400

セツLP7500

『ああ!? そんなあ!』

『引っ込め御堂!』

『相手は女の子だぞ！』

『大人げないとは思わないのかー！』

黙れ外野。

「さすが私。強い」

そこ、自画自賛しない。活躍できなかったライムや希冴姫の殺気が酷いから。

「……とはいえ」

ここまでいい。正直物凄くデッキは回ってくれている。が、そろそろ手詰まりだ。このまま押し切れればいいが……。

「うう……私のターン、ドローします！」

『がんばれー！ ブラマジガールー！』

『御堂を殺せー！』

『吊るし上げるー！』

「みんなありがとー！ 私、まだまだがんばるよー！」

『おおー！ー！ー！』

勝ってる気がしねえ。

「私は『見習い魔女』を召喚しまーす」

攻撃力の明らかに低いモンスターを召喚？ まさか……。

「私は手札から『ディメンション・マジック』を発動でーす！」

つやば……。

「『見習い魔女』をリリースして『マジシャンズ・ヴァルキリア』を攻撃表示で特殊召喚でーす！」

『『ディメンション・マジック』は相手モンスターを破壊して魔法使いを特殊召喚することができるカードです！ 反撃だあー！』

『こら！ 解説は俺の役目だろうが！』

ルインが破壊され『ブラック・マジシャン・ガール』と良く似た風貌の魔術師『マジシャンズ・ヴァルキリア』が召喚された。

「俺のフィールドがから空きか……」

「……私の出番終わった。何故対策してなかったの」

「一枚しかない手札でそうそう対策ができるか！」

「バトルします！『マジシャンズ・ヴァルキリア』でダイレクトアタックです！」

だが、まだライフには余裕がある。しばらくなんとか耐えて……。

「この瞬間、私はリバースカードを発動します！」

「っ！」

マズイ！ このタイミングで発動するのは……。

「『マジシャンズ・サークル』！ この効果で、お互いにデッキから攻撃力2000以下の魔法使い族モンスターを特殊召喚します！」

『ブラック・マジシャン・ガール』！」

「俺のデッキには魔法使い族はいない……」

「じゃあ、改めて行きますねー！『マジック・イリュージョン』！」

「ぐあっ!?!」

セツLP5900

「そして『ブラック・マジシャン・ガール』でもダイレクトアタック！『ブラック・バーニング』！」

「ぐあああっ!?!」

セツLP3900

くそ！ 回復した分丸々奪われたか！

『やったあー!!』 ブラマジガールさん！ 優勢です！ すごい！

強いッスー！」

『だが、まだセツの方がライフでは大幅に上回っている。勝負はまだついていないぞ』

「俺のターン！ ドロー！」

……くそ。

「俺はカードを一枚セット。ターンを終了する」

『キタキタキター！ さあみなさん！ 僕らのブラマジガールの勝利が近づいて来ました！』

言いたい放題言ってくれる。

「応援ありがとう！ 私のターン、ドロー！」

さあて、正念場だな。

「私は『サイレント・マジシャンLV4』を攻撃表示で召喚しま
す！」

レベルアップモンスター……。

「よし、いただきますよー！」『ブラック・マジシャン・ガール』で
ダイレクトアタックしまーす！ せーの……」

『ブラック・バーニングー！』

「ぐああっ……」

セツLP1900

「次です！ 『マジシャンズ・ヴァルキリア』でダイレクトアタ
ックです！ 『マジック・イリュージョン』！」

「くう……」

セツLP300

『決まり！ これは決まりましたね解説のXYZドラゴンさん！』

『……そうだな。これで『サイレント・マジシャンLV4』の攻撃
が通ればだが』

『通るッスよ！ いっけー！』

「『サイレント・マジシャンLV4』のダイレクトアタック！ 『サ
イレント・マジック』！」

「ここだ！」

「トランプ発動！ 『正統なる血統』！ 墓地から通常モンスター一
体を特殊召喚する！ 俺が呼び出すのは当然『クイーンズ・ナイト』
！」

希冴姫、任せたぜ！

「セツ様！」

「あちゃー。それじゃあ戦闘は巻き戻されるから私はターンを終了
します！」

『残念！ ブラマジガールの勝利は一ターン遠のいてしまいました
』！』

『……いや、どうかな』

『XYZドラゴンさん？』

「俺のターン！ ドロー！」

俺はドローしたカードを確認する。……よし、イケる！

「行くぞブラックマジシャンガール！ 俺の最強を見せてやる！」

「！」

『ま、まさか……』

「俺は手札から魔法カード『増援』を発動！ デッキから『キングス・ナイト』をサーチする！」

やっぱり、最後に決めるのはお前だよ！

「『キングス・ナイト』を召喚！ 効果によりデッキから『ジャックス・ナイト』を特殊召喚！」

「フィールドに『絵札の三銃士』が揃う。そして俺の最後の手札……」

「俺は魔法カード『融合』を発動！ 絵札の三銃士を融合し、エクストラデッキから俺の最強騎士。今の俺自身を融合召喚する！ 出てこい！ 『アルカナ・ナイト・ジョーカー』！」

『そ、そんなあ……攻撃力3800の最強騎士……』

『……決まったな』

「あちゃー、私の負けか……。でも、すつごく楽しいデュエルだったよ！」

「……ああ、俺もだ！」

「みんなも応援ありがとねー！ 楽しかったよー！」

『俺たちも楽しかったよー！』

やつら、若干涙声だ。……ここで攻撃するのは鬼畜呼ばわりされそうだが……しないわけにもいかないな。

「バトル！ 『アルカナ・ナイト・ジョーカー』で『マジシャンズ・ヴァルキリア』を攻撃！ 『ロイヤル・ストレート・スラッシュ』！」

「きゃああああああつ！」

ブラマジガールLP0

「……なあ、なんでお前は俺に声かけてきたんだ？」

デュエルが終わり、群がってくる野次馬（暴徒とも言う）を適当にあしらひ、最初から疑問に思っていたことをブラマジガールに聞いてみた。

「最初はもちろん、みんながなんだか楽しそうなことやってるなって思つて見に来たんだ」

そこで俺……精霊界と人間界を繋ぐ門を見つけたので、興味が抑えきれなくなつて出てきた、と言うことだった。

「でも本当に楽しかった。ねえセツくん、また来てもいいかな？ セツくんの周りにいれば、とつても楽しそうだから」

……当事者は結構命懸けだからな？ 特に今回お前の登場で死亡フラグが立ちまくつてるんだからな？

「まあ……好きにすりゃいいさ」
けど結局、そんな風に許してしまう。

「お兄ちゃんの優柔不断」

「セツはもつと節度を保ってください。セツだけに」

「すいません。そしてそのシャレはつまらん」

「い、いいじゃないですか別に！」

「……ふふっ」

ブラック・マジシャン・ガールはそんな俺たちを見て、本当に楽しそうに笑っていた。

「……しょうがないだろ。あんなふうに笑われちゃ。お前らはダメつて言えるのか？」

あんなに幸せそうに、嬉しそうに笑う彼女を、拒絶することなんて……。

「言えます」

「消える魔女」

「目触りですわ」

「精霊分は潤っている」

「もうこれ以上増えて欲しくないにやー」

「たまには空気を読もうと思わないのかお前は！」

こいつらまったく容赦ねえ！ ただの一人も歓迎の言葉を吐く気がねえよ！

さだめと希冴姫に至っては最早ただの暴言だった。

「ふふっ、愛されてるんだね」

「……一人残らずヤンデレ化しても不思議じゃないあたりが最大の問題だな……」

とりあえず遺書は常に携帯しておくことにしよう……。

「それじゃあ、今日はこれで帰りまーす！ ありがとう、楽しい一日だったよー！」

「そうか。それなら良かった……お、そうだ」

十代、悪いがセリフ借りるぜ。

「ガツチャ！ 俺も楽しい一日だったぜ！」

そして、あわただしくも楽しい学園祭の夜は更けて……。

「さあ、それじゃあお話を始めましょう。セツ」
いかなかった。

「さあ、長い夜はまだ始まったばかりだよお兄ちゃん」

「邪魔なジャック殿もいませんし、今夜はじっくりとお話できそうですわね」

「……連行」

「黒焦げのお仕置きは準備できてるよー！」

……遺書を携帯しよう、と思いいたるのは、少しだけ遅かったらしい。

せめてダイニング・メッセージくらいは残したい次第であります。

「どうにかして死から免れることは……」

「あ、お兄ちゃん。さだめにお兄ちゃんを食べさせてくれるなら……」

「……」
「いっそ殺せよ」

ひと思いにぞっくりと。

後夜祭で流れる人々の談笑が、どこかドナドナのような響きを持って俺の耳に響く。

それをどこか達観した眼差しで見つめながら、俺は女子たちに引かずられて寮の影まで引つ張り込まれるのだった。

第二期第二話「オールスター戦」（後書き）

学園祭の後編でした。お待たせした割にドタバタ過ぎてカオスですが。まとまりないですが。ちよっとスランプ気味。

セツのデッキは言うなれば光属性。希冴姫、ルイン、ライムが全員光属性なので無理やり同居させてみました。タイトルのオールスターはそのあたりが由来。

実際に作っただら間違いなく事故るでしょうね。融合と儀式を両立させようという時点で確実に。

ブラマジガールの口調が微妙。把握しきれていないというか……。次回は……特に決まってもませんが、海水浴かヒロインごとの個別短編かでしょう。ホワイトデーとかも考えていくつもり。

それでは、レーネスでした！

第二期第三話「ニヤンニヤンしよ」(前書き)

申し訳ありません大分遅くなってしまいました。

言い訳。

なんでもウイルス性の胃腸炎とかで九度二分とかいう高熱が出ましてしばらく伏せておりました。今回の話もそんな中作成したもののなので気になる点多々あるかとも思いますので、その時は遠慮せず一言物申してください。

ではどうぞ。

第二期第三話「ニヤンニヤンしよ」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第二期第三話「ニヤンニヤンしよ」

タイトルからしてギリギリ臭のする今回だが、賢明なる読者諸兄であればこの発言をかましてくれやがったどらねこが一体どこのどいつなのかは言わずとも察してくれると思う。そしてそこに悪意が何一つなく、ちょっとばかりし語彙が残念故の過ちであることも同時に察してくれるとありがたい。

ただしどうやら俺の周囲の女性陣はあまり賢明ではないらしく、そのセリフが聞こえてきた瞬間にそれこそ沸騰石を入れ忘れたビーカーの薬品のごとく急激な沸騰を開始して、俺を魔女狩りか宗教裁判かと言わんばかりに吊るし上げ、希冴姫に至ってはヤケにイイ笑顔で鞭を用意し始めた。

「新しい遊び？」

この小首をかしげるアホの子（暫定）に一言物申したい。これはキミが招いた事態であり、遊びは遊びでもチョット大人向けのしかも良い子は真似しちやいけない類の遊びだと。

「まあ落ち着け希冴姫。そしてさだめは俺の局部から手を離せシヤレになつてないんだよお前は！」

十字刑に処されているのをいいことに身動きできない俺をちよつと味見〜とかしようとしてるんじゃない。アテナさんも興味津々で覗きこまない！ 初期の純情清纯ヒロイン路線はどこに消えた。

「まずは話し合おう。いいか？ 古人曰く、話せばわかる、だ」
「それを言った人はそのまま情け容赦なくヌツ殺されたということを知っているよねお兄ちゃん」

余計なことを。俺が言いたいのは結果ではなくそういった過程を経てこそ円満な人間関係は築かれるというごくごく一般的な常識なんだ。つまり問答無用で魔女裁判はどうかと思う次第であります。

「でもほら、希冴姫さんを見てよ。すつごくノリノリ」

「うん。鞭の素ぶりで真空刃が発生してるな。いつそ剣じゃなくて鞭で戦えばいいんじゃないかい？」

というかいま重要なことはそこではない。

「？」

そこで今行われている奇行を興味深そうに見学しているアホの子（断定）に大変残念な語彙を吹きこんだ背信者を突き止め、本物の魔女裁判にかけてやることだ。

「とうわけでライム」

「ふにゃ？」

「先ほどのセリフを誰から吹き込まれたか、誤魔化すことなく正確に伝えることを要求する」

「ルイン様だけど」

「聞いたかお前ら！ 魔女裁判にかけるべきはヤツだ！ 立てよ国民！ 決起の時は今こそ来たれり！」

だから俺をここから下ろしてくださいお願いします（泣）。

「……どうします？」

「え、迷う余地あんの！？」

「とりあえず、ヤルことはヤツた上で解放するという方向でどうかな？」

「ノー……ウー……ウーウ！？」

ライム、ライムさーん！ ヘルプ、ヘルプ！

「助けたらニヤンニヤンしてくれる？」

「その言葉の表すところをライムさん自身の言葉でプリーズリピー

ト！」

その言葉はアウトですライムさん。むしろそれが発端ですから。

「ボクのデッキを使ってデュエルして！」

「ほら聞きましたかお嬢さん方！ ライムの言葉には決してキミたちの考えるような事実はなくごくごく健全な……」

「だからねお兄ちゃん」

「はい？」

「いま重要なのは、お兄ちゃんがその無抵抗な体をさだめの前に差し出しているという事実で……」

「ライム助けて！ デュエルくらいいくらでもして上げるから！」

「はい」

決死の攻防戦の末、ギリギリ救出された俺は、ライムから詳しい話を聞き出していた。

その理由を要約するところいうことだ。

「ボクのデッキを作ってくれてるって言ったのにまだ使ってくれてない」

らしい。

そう言えばそうだ。あれから怒涛の展開が待ち受けていたもんだからそんな余裕がまるでなかった。

「オーケーじゃあ準備しておくか」

「相手はその脳筋姫で」

「……何故セツ様たちまでその呼称で迷いなくわたくしを見つめるのですか」

「いや、指まで指してるし」

「お姫様ですし……」

「この中で脳筋っていったら……ねえ？」

「妹君以外は納得しましたわ」

しかし、希冴姫がデュエルするところなぞ見たことないんだが……。

「ご心配なく。わたくしとて精霊の一族。デュエルくらい可能です

わ

「そつか。それじゃあ早速……」

「あ、待って待って！」

「ん？ どうしたライム」

「できればボクのデッキはご主人様が使って欲しいな」

「俺が？」

「ボクは自分でデュエルするだけなら自分のデッキを使えばいいんだもん。ボクはご主人様の作ったデッキでご主人様にボクを使つて欲しいの」

……なるほど。理解できないでもない。

「じゃあ、そんな感じでいいか？ 希冴姫」

「……どことなく不満が残りますが、仕方ありません。良いでしょう」

「よつし、んじゃこいつをセット、と」

ライムのために作ったデッキをディスクにセットする。希冴姫もどこからか自分用のデュエルディスク（ネイキッドといいカイバーマンといい、精霊のディスクはカツコイイな。ズルい）を取り出して腕に構えた。

「セツ様だからとて、手加減は致しませんわよ！」

「デュエル！！」

「わたくしの先攻！ ドロー！」

初めて使うデッキなので様子見のため先攻を譲る。

「わたくしは『切り込み隊長』を攻撃表示で召喚！ 効果でわたくし自身を特殊召喚しますわ。カードを二枚セット。ターンエンドですわ」

なるほど。俺も良く使う『切り込み隊長』による『クイーンズ・ナイト』のターン防衛か。

「俺のターン。ドロー！ 俺は『雷電娘々』を攻撃表示で召喚！ バトルだ！」

「やっちゃえー！ お仕置きサンダー！」

……相変わらず声高らかに宣言したくない攻撃名だ。

「『切り込み隊長』に『雷電娘々』で攻撃！『お仕置きサンダー』！」

『雷電娘々』から放たれた雷撃が、いつかとは逆に『切り込み隊長』を撃ち抜く。

「この瞬間、リバーズカード『ガード・ブロック』を發動しますわ！ 戦闘ダメージを無効にし、デッキからカードを一枚ドロ！」

お、上手い。モンスター破壊は防げないまでもダメージを無効にして手札補充か。俺の使ってた時はいつも手札不足に悩まされたもんだからな。

「俺はカードを一枚セット。ターンエンド！」

「わたくしのターン、ドロ！ わたくしは『キングス・ナイト』を攻撃表示で召喚し、効果を發動しますわ！『ジャックス・ナイト』を攻撃表示で特殊召喚。手札から永続魔法『連合軍』を發動し、バトルフェイズに入ります！」

！ まだ『融合』は来てないか！

「『ジャックス・ナイト』でその小生意気などらねこを攻撃しますわ！」

「ご主人様〜！ ボクがやられちゃうよ〜」

「わかつてる！ そう簡単にやらせやしねえよ！」

「ご主人様……」

仮にもこのデッキの象徴なんだからな！

「トラップカード『サンダー・ブレイク』！ 手札の『電池メン単3型』を墓地に送って効果発動！『ジャックス・ナイト』を破壊する！」

……すまん！ ジャック！

「つく！？ わたくしは手札から『死者蘇生』を發動し、ジャック殿を蘇生させますわ！」

今さっきやられたばかりのジャックが再びフィールドに呼び戻される。

……ジャック、お前はデュエルでもこき使われるんだな。合唱。

「わたくしはターンを終了しますわ！」

「だが『死者蘇生』の使いどころを間違っただな！」

「まさか、学園祭の時と同じように護ったどらねこを生贄に……？」

「にやにやつ!? そ、それはあんまりだよ！」

流石にそんな二度ネタはしないから安心しろ！

「俺は『死者蘇生』を使って墓地から『電池メン単3型』を特殊召喚！」

セオリーとしてはここから暴走召喚に繋がりたいところだがその暴走召喚が手札にない。

「俺は蘇生した『電池メン単3型』をリリースして『充電池メン』をアドバンス召喚！」

正直セオリーガン無視も甚だしいが、ある意味これはライムのための接待デュエル（希冴姫の方はマジっぽいが）。出来るだけライムは生存させた上で勝ちたいところ（かなり厳しいが）。

……幸い相性はいい。押し切れれば何よりだ。

「『充電池メン』……攻撃力は……2400!？」

「まだまだぜ！『充電池メン』はアドバンス召喚された場合、デッキから更に『充電池メン』以外の『電池メン』と名のついたモンスターを特殊召喚することができる！俺が特殊召喚するのは『電池メン単1型』！」

フィールドに乾電池に手足がついた（そのままだが）モンスターが現れる。

「『充電池メン』はフィールドに存在する雷族の数×300ポイント攻撃力がアップする！『充電池メン』の攻撃力は2700！」

「くっ!？」

「俺はメインフェイズを終了し……！」

「リバーズカード『威嚇する咆哮』！攻撃宣言は行わせません！ピクッ！」

……なるほど。これがあるからさっきのターンで躊躇うことなく

『死者蘇生』を使ってきたのか。

「だが甘い！ 俺はこのままメインフェイズ1を続行！ 手札から魔法カード『魔霧雨』を発動する！」

「『魔霧雨』ですって!？」

「『魔霧雨』は自分の場の『デーモンの召喚』か雷族モンスター一体を選択し、選択したモンスターの攻撃力より低い守備力を持つ相手モンスターを全滅させる！ 俺が選択するのはもちろん『充電池メン』……といたいところだが『雷電娘々』！ ライム、お前だ！」

「ここはライムに花を持たせてやるべきだろう。攻撃力は十分だしな。」

「にゃーんおっ任せー」

ライムの放った雷撃が希沔姫のフィールドを包む霧に通電し、全てのモンスターを破壊する。

「代わりにこのターンバトルフェイズに入れないが、そもそも攻撃宣言を行えなくなってしまったことだし、丁度いいよな」

『魔霧雨』は基本的に『ライトニング・ボルテックス』に使い勝手で劣る。俺も基本的には四枚目以降の『ライトニング・ボルテックス』のような気分に入れていたのだが、今のよう『威嚇する咆哮』が使われた場合なら『ライトニング・ボルテックス』よりもアドが大きい。……まあ、あくまで限定された場合に限りだが。

「このっ……どらねごとき……!!」

「へっへーんだ。『連合軍』で攻撃力は上がっても守備力はザルだねー。これだから脳筋は……」

「くう……」

雷の強さはその除去能力の高さ。種類こそ少ないが、遊戯王で除去って言ったら雷だ。『サンダー・ボルト』から始まり『ライトニング・ボルテックス』、『サンダー・ブレイク』など他にも多数の除去カードが雷の名前を冠している。『魔霧雨』もその一つ。

「俺はカードを一枚セットしてターンエンド」

「わたくしのターンです！ ドロー！」

さて、どう立て直してくる？

「わたくしは『強欲な壺』でカードを二枚ドローしますわ」

出やがった。俺も同じこととして言うのもなんだが、どうしてこうこの世界じゃこんなベストタイミングで『強欲な壺』が来やがるのか。『神の見えざる手』みたいな力でも働いているんじゃないのか？ 正解。

「……更に『トレード・イン』！ 『ギルフォード・ザ・ライトニング』を墓地に捨て、カードを二枚ドロー！」

うわ、絶対事故るだろそのデッキ。

とは言えさつきあの三体を除去出来なければ全除去食らってたらしいので危なかったと言えば危なかったが。

「わたくしは更に『貪欲な壺』を発動ですわ」

「マジかよ……」

これが精霊補正か！

「……お兄ちゃんの主人公補正も大概だけどね」

後ろでさだめが呆れたように溜息を吐いている。

「墓地のモンスターは『切り込み隊長』 『クイーンズ・ナイト』 『キングス・ナイト』 『ジャックス・ナイト』 『ギルフォード・ザ・ライトニング』！ この五枚をデッキに戻してシャッフルしますわ」
さつき落とした『ギルフォード・ザ・ライトニング』まで利用するか。

「カードをドロー！ ……セツ様。わたくし自身、決して雷を馬鹿にしているつもりはありません」

「ん？ ああ、そうだろうな」

ただライムが個人的に気に入らないんだろ。希冴姫は人の好き嫌い激しいし。

「ですから、わたくしも使わせていただきますわ！ 『ライトニング・ボルテックス』！」

「げっ！」

「己が力に焼かれなさいどらねこ！」

「にゃああんそんなー！」

ライムを含めた全てのモンスターが雷で薙ぎ払われる。

コストとして捨てられたのは『放浪の勇者フリード』。

「わたくしは自身を攻撃表示で召喚し、バトルフェイズ！ すみませんセツ様。ダイレクトアタックさせていただきますわ！」

「くっ！」

セツLP2500

「ターンエンドですわ」

「……俺のターン！ ドロー！」

とりあえず、デュエルしてみてわかった。そもそも希冴姫はデュエル自体慣れてない。デッキ構築からして恐らく初心者だろう。本当にお嬢様の嗜み、くらいにしかやってなかったに違いない。

「だからこそ、そこに勝機はある！ 俺はカードを一枚セツト！ モンスターは出さずにターンエンドだ！」

モンスターは出せない。否、出さない！ なぜならこれは……。

「わたくしのターン！ わたくしは自らに装備魔法『団結の力』を装備しますわ！」

希冴姫のフィールドには自身が一体のみ。それでも攻撃力は800ポイントアップの2300！

「バトルですわ！ プレイヤーにダイレクトアタック！」

「リバーズ発動！ 『リビングデッドの呼び声』発動！ 墓地から呼び戻すのは『雷電娘々』！」

「っ！ そこまでもそのどらねこに拘りますのね……」

なぜならこれはライムのためのデュエルだから！

「それでも、わたくしの攻撃は止まりませんわ！ そんな我儘猫娘、わたくしたちの団結の前では無力です！」

いや、希冴姫のフィールドにいるのキミ一人だし。確かに『団結の力』は付けてあるけども。

「『エレガント・ハーツ』！」

あ、技名決まってたんだ。

「あーん脳筋姫にだけは負けたくないよー！」

「安心しろって！ 何のための俺だと思ってるんだ」

「ご主人様？」

「俺の得意技は迎撃！ 手札から『オネスト』の効果を発動するぜ！」

「そんな……」

「さっき言っただろ？ モンスターは『出さずに』ターンエンドってな！ 行くぞ！ 『雷電娘々』の……いや、ライムの迎撃！ 『エンジエリック・サンダー』！」

「黒焦げになっちゃえ〜！」

「くああ!?」

希冴姫LP2100

「くっ！ わたくしはターンエンドですわ」

「俺のターン！ ドロー！」

しかし、案外悪くなかったなこのデッキ。フィールドの制圧力だけならトップクラスだ。

「俺は『ライオウ』を攻撃表示で召喚！」

「わたくしの、負けですか」

「俺も楽しかったよ。希冴姫」

「……今度は、わたくしにセツ様のデッキを使わせてください。きつと使いこなして見せますわ」

「……おう！」

俺はこの騒動を巻き起こした張本人に目を向ける。

「にゃははっ！」

……聞くまでもない。めちゃくちゃ楽しそうだった。

「よし！ じゃあ締めと行こうか！ ライム！」

「はいにゃ！」

「バトルフェイズ！ まずは『ライオウ』でダイレクトアタック！」
「くう！」

希冴姫LP200

「ラストだ！『雷電娘々』のダイレクトアタック！『お仕置きサンダー』！」

「きゃああああああっ！！」

希冴姫LP0

「で、満足したか？ ライム」

「うん！ とつてもキモチ良かった！」

「そっか、そりゃ何より」

ライムで始めてライムで締めた。完全にライムの、ライムによる、ライムのためのデュエルだったからこれで満足してくれなかったらどうすればいいかと思っていたのでなによりだ。

「それにしても、精霊さんにとって自分のカードを使って貰うことってそんなに嬉しいものなんですか？」

アテナのふとした疑問に、希冴姫もライムも当然とばかりに頷いた。

「ある意味では、それがわたくしたちの存在意義とも言えますもの。己の認めた主君に自らの剣を捧げ、主の剣となり盾となる。それが至上の喜びといつても過言ではございません」

「まーボクみたいに自由気ままに遊び歩いてる精霊だって、やっぱり嬉しいもんなんだよ。自分を使ってデュエルしてくれるとさっ！

なんかほら、ドキドキワクワクしてもーぐっちやくぐちゃでっ！」

「は、はあ……」

ライムの説明は要領を得ず、アテナたちも困惑気味だ。希冴姫がそんなライムを冷ややかに見つめながら補足する。

「……人を脳筋呼ばわりしておいて、オツムの足りないおバカはどこちらですかまったく……。恐らく根源的なものなのでしょうね。潜在的に、わたくしたちはデュエルで使われることに喜びを見出すよ

うに出来ているのでしょうか」

もちろん、何事にも例外はあるものですが。と付け加える。

……たしかに、カイバーマンとかが使われて喜ぶとはとてもじゃないが思えないな。

「とにかくっ！ ご主人様、またその内ボクを使ってね？ 前はデュエルで使って貰うだけが存在意義じゃないって言ってたけど……やっぱり全然使って貰えないのは寂しいから」

「ライム……」

「だから……」

俺は不安そうに俯くライムの頭を撫でる。ちよつとツノが邪魔で撫で難かったが。

「悪かったな。そうだな、お前だって希冴姫たちと同じだ。俺の精霊、その一柱だ。差別しちゃダメだな」

「う、うん！」

「……わたくしと同じというのむぐっ!？」

「あ、あはは……たまには空気読みましょう希冴姫さん」

「むぐ……」

「そこで空気を読まない選手権世界一、さだめ選手の……」

「さだめさんも！」

……つたく。

「……じゅーぶん空気ぶち壊しだよ」

「ま、このメンツで綺麗な空気保とうってのが間違いか」

「じ、ごめんなさい……」

「さだめもこのデュエル中ほっとかれて寂しかったんだよ」

「……デュエル中は勘弁してくれ」

そんなときまで周囲に気を使ってられるか。

「えへへっ！ じゃあそういうわけです！ ライムさんは今日、とっても楽しかったよ。また呼んでねご主人様……じゃなくて、キリンー！」

「き、きりっ？」

「ばーいー!」

最後にわけのわからない呼び方をして、ライムは精霊界の方へと帰って行ってしまった。

「……キリリン?」

「おそらく……」

「セツ〓切〓きりだからだと……」

「……相変わらず独特な奴だ」

苦笑する。

そんな、精霊と自分たちの関係を再確認した今回の騒動はそうして幕を下ろしたのだった。

第二期第三話「ニヤンニヤンしよ」(後書き)

というわけで、結構難産だったライムの回です。といいつつ半分くらいは希冴姫のターンですが。やっぱりどうしても正ヒロインとして今まで書いてきたアテナやさだめ、希冴姫辺りは書きやすく目立つちゃいます。今回も、できるだけ目立たせないよう頑張りましたが……ホントはここにルインも出てきてたことを考えれば頑張った方だと思いたい。

今回は『魔霧雨』について。このカードは遊戯王ウィキでもあまりいい書かれ方されてないので、個人的にはそんなに悪くないと思っている一枚です。確かにバトルが出来ないのは痛いんですが、手札コストを要求する『ライトニング・ボルテックス』よりも使いどころが多いのですよ。遊戯王において手札つてもものがとても重要であることは疑いようありませんし。

たとえば『創世神』以外がミラーフォースとかで吹っ飛んでも次のターンこれで巻き返せます。『ライトニング・ボルテックス』とくらべて攻撃的には使えませんが、防御や立て直しには結構使いやすい気がするのです。なので、自分の雷デッキには普通に入ってます。

まあ、どんなカードも使いようだと思いますよ。
それでは、レーネスでした！

第二期第四話「沈黙のダークホース」(前書き)

ちよつとずつ更新が遅れがちになってきましたレーネスです。

ちよつと時間がかかりましたが、今回はクオリティ重視、のつもり。そこそこ上手く書けたつもりです(自画自賛)。

ユーキちゃん回です。今回はギャグでもシリアスでもなく完全に恋愛一色です。不思議だ。ユーキちゃんが完全にラブ担当と化している。

おそらくアルカナで最も恋愛色の強い話になりました第四話。ではどうぞ！

第二期第四話「沈黙のダークホース」

アルカナく切り札の騎士く

第二期第四話「沈黙のダークホース」

「はあ……………」

アカデミアブルー女子所属、加藤友紀は物憂げな瞳で溜息を吐いていた。

「セツ君……………なんか遠いなあ……………」

その視線の先ではさだめやルインに振り回されながら機嫌を損ねたらしいアテナを必死で宥めているセツの姿。

噂では今楽しそうにセツに抱きついていてさだめが暴走し、それを『冥王竜ヴァンダルギオン』を使ったセツが劇的な勝利で止めたのだそうだ。

「ヴァンダルギオン……………セツ君、もう戦士族は使わないのかな……………?」

自分とセツを繋ぐ唯一の接点。使うデッキ構成が似ている故の相談。セツがパーミッションデッキに変えてしまったのだったらもう自分との接点がなくなってしまうんじゃないか。そんな風に思う。

実際最近セツと会話することも少なくなってきた。

「はあ……………楽しそうだな」

本人としてはかなり必死なつもりだろうが、傍から見ている分には全員とても楽しそうにしている。

「はあ……………」

三度目の溜息。

「悩み事？」

「そんな彼女の肩をポンと叩く影。

「あ、明日香さん!？」

「こんにちは」

「どうしたんですかこんなところで……」

「それは私のセリフ。どうしたの？ さっきから溜息ばかりじゃない」

「あ、あはは……」

「……セツかしら？」

「あう……」

直球。ぐうの音もでないユーキに、クスリと笑みを浮かべる明日香。

「あからさま、かなあ」

「あからさま、ね」

傍から見てもユーキがセツを気にしているのは明らかだったらしい。

「セツ君も気付いてるのかな……」

女子ということ以外はあまり自分と接点のない明日香が気付いているのだから、もしかしてセツも自分が気にしていることに気付いてくれているのか。そんな風に思う。

「……そうね。案外気が付いているのかも。彼、意外と鋭いし」

「だよね〜」

顔が熱い。告白したわけでもないのに気付いてくれてる。それは嬉しいような何だか恥ずかしくてもやもやするような、不思議な感覚だった。

「少なくとも、今加藤さんが元気をなくしていることには気付いているはずよ。そういうところははずば抜けて鋭いから」

「そう、なのかな」

「ただ、セツにも立場があるから。自分から話しかけるのは難しい

わね」

つまり、自分から相談しなさいという遠回しな発破だろうか。

「……でも、あの中に飛び込んで行くのはちょっと……」

「……まあ、そうかもね」

さだめたちのように自分からセツに飛びついて行けるのなら、こんな風に悩みはしない。

「……アテナちゃんはすごいなあ……」

一目見て心に衝撃が走ったというアテナ。セツに直接、自分の気持ちをぶつけたアテナ。その勇氣、というか素直さが心底羨ましい。「それは人それぞれよ。一目惚れもそうだけど、お友達からの恋愛も普通じゃないかしら？」

「それはそうだけど」

「いつもみたいに話しかければいいんじゃないかしら。前は良く話していたんでしょう？」

「でも……」

いつもは大体、デッキ作りについての相談ばかりだった。それもデッキのコンセプトが似ていたからで……。

「セツは……そんなの気にしないわよ。まだアルカナデッキも使っているみたいだし」

「そう……だね」

成せばなる。成さねば成らぬ、何事も。その言葉を胸にユーキ、今発進……！

「あ、あのセツく……」

「オアシス発見！ 確保そして急速離脱ー！！」

「ひゃあああああああああ？」

声をかけようとした瞬間にセツの方から腕を引つ掴まれて連れ去られた。

「明日香ー！ 後よろしくうー！」

「はいはい。無理でも怨まないでね」

最初から打ち合わせてあったかのように（きつとそうなのだろう）

一言ずつのやり取りでその場を明日香に任せたセツに連れ回され、最終的に辿りついたのはユーキ自身の部屋だった。

「はあ、はあ……」

「大丈夫かユーキちゃん？ 悪いな。いきなり拉致るみたいに連れてきて」

「う、ううん。元々わたしが声かけたかったから」

「そうそう、俺も最近ユーキちゃんと話してないなーとは思ってたんだけどな。学園祭の時とかも結局巻きこんでおいてほったらかしちゃったし」

「あはは、あの時は色々忙しかったからね」

「ファクションショーとかブラマジガールとか。その後もお仕置きフラグの破棄に忙しかったのは確かだが、それでもほったらかしてしまったことには違いない。」

「それで、何かな？」

「あ、えつとね。またデッキを見て欲しいな。……いい、かな？」

「もちろん。任せてくれ」

「そんなの、断るわけがない。」

「よかつた。セツ君最近デッキ変えちゃって、もしかしたら見てくれないかもって不安だったんだ」

「そんなことねーって。別に同じ戦士デッキだからって見てたわけじゃないしさ」

「えっ……」

「ユーキちゃんの頬が少し色付く。」

「え、えつと、えつと……と、とりあえずお願いしますっ！」

「ほい、任せました」

わたわたとデッキケースを取り出すユーキちゃんに笑いかけてデ

ツキを受け取る。

「ふむ……」

基本的には以前と変わらない。『サイレント・ソードマンLV5』をエースにした戦士族ビートだ。

「ちょっと最近伸び悩んじゃって……『サイレント・ソードマン』だけだとちょっとパワー不足なのかなって」

「ふーむ……ユーキちゃん、確か引きが弱いつて言ってたっけ？」

「あ、うん。だからリクルーターとかも多めに入れてるんだけど……」

「うーむ……」

俺が精霊界で学んだことだ。自分に合ったデッキで、自分のデッキを信じていれば、必ずデッキは答えてくれる。なら……。

「ユーキちゃん『サイレント・ソードマン』は手札に来る？」

「うん。良く来るよ」

このデッキに『サイレント・ソードマン』は二枚しか入っていない。それでも良く来てくれるユーキちゃんのフェイバリット。なら……。

「『サイレント・ソードマン』を軸にして大幅にいじってみよう。多分だけど、その方がいい」

もしかしたらこいつは、俺と似ているかもしれない。

「ユーキちゃん、カードアルバム出してくれるかな？ ちょっと大きく改造してみよう」

「あ、うん。わかったよ」

そしてああでもないこうでもないと言われながら数日間。さだめたちの妨害をかわしながら組み立てては試し組み立てては試しと試行錯誤した結果……。

「はは……こりゃいいや。完成だ」

「か、勝っちゃった？」

俺のアルカナデッキが為す術なく敗れるほどのものが出来上がった。

「こいつは……皆にお披露目だな」

「セツ君とデュエルするの？」

「……いや」

こつこつのもってこいの奴がいる。そいつは……。

「……ええー!？」

「デュエル？ おう！ もっちらんいいぜ！ セツとか？」

そう、ご存知遊城十代。三幻魔の復活を阻止し、陰ながらアカデミアのカリスマと言われ始めているこいつだ。

「いや、俺じゃない。ユーキちゃんとやってみて欲しいんだ」

「よ、よろしくお願いします」

ユーキちゃんは当初絶対勝てないと及び腰だったのだが、ここに来てようやく腹を決めたらしい。若干どもりながらもしっかりと頭を下げた。

「良いぜ！ 今からか？」

「ああ。こつちの方で準備を整えておいた。デュエル場だな」

「デュエル場？ 使用許可とかとんなくていいのかよ」

「心配すんな。許可はとづくに取った」

その辺抜かりはない。

「観客も揃ってる。ちよつとしたイベント並みだぜ？」

「マジかよ！ 相変わらずそういうの得意だな」セツ

「まあな。とにかく、そういうわけだから行こうぜ」

「ああ！ どんなデュエルになんのかな？ 今から楽しみでしよ
うがないぜ！」

「ほら、ユーキちゃんも十代くらい気楽に行こうぜ」

「あはは……流石にちょっと無理かも」

確かに。十代くらいは流石に無理か。

「まあとにかく。大丈夫だ。ユーキちゃんならいけるよ。自分のデ
ッキを信じて」

「う、うん！ セツ君が、わたしのために頑張って作ってくれたデ
ッキだもん。きっと勝って見せるよ！」

『レディースアードジェントーメン！ みんなー！ 元氣ー？
ライムだよー！』

会場はすでにライムが盛り上げてくれていた。というか勝手に暴
走していた。

『今回はボクが司会進行実況解説全部一人でやっちゃうよー！』

「やっちゃうよじゃねえ！ 解説は俺と三沢がやるって言った
だろうが！」

勝手なことを言い出した馬鹿を止めるために飛び出して行ってマ
イクを奪う。

『皆、今日はいきなりごめんな！ 今回はちょっとしたサプライズ
企画！ 今やアカデミアでも知らぬもののない遊城十代と、ブル
ー女子所属の加藤ユーキちゃんのエキシビジョンマッチだ！ 楽し
んで行ってくれると嬉しい！』

「そ、そういう設定になってるのか……相変わらず仕事はえーな」

『早速デュエリストのお二人はフィールドにどぞー！』

「わ、わわ……」

ハイテンションまっしぐらのライムがユーキちゃんの背を押して
舞台上に。

『それでは、今回の舞台セッティングから実況まで受け持ってくれ
ましたキリリンと三沢っちの紹介です！』

『あー、今回は三沢と二人で解説をやるうと思ってる。俺は主に

ユーキちゃん側の解説な。ユーキちゃんのデッキに関しては構築に俺も大分関わっているから任せてくれ」

『三沢だ。十代サイドの解説を主にやらせてもらおう。今日はよろしく頼む』

さすが三沢。ソツがない分全く記憶に残らない自己紹介だ。

『そんじゃ早速行ってみよう 遊城十代はーさす加藤ユーキ！

デュエルスタンバイ！』

「なんかめちゃくちゃ怒涛の展開だけど……よろしくな！ デュエル！」

「う、うん。お手柔らかにお願いします。デュエル！」

『ボクの独断で先攻はユーキにやん！ 行ってみよう！』

またあいつは勝手な……まあいいか。

「わたしのターン、ドロー！」

さあ、見せてくれよ。ユーキちゃんのデュエル。

「わたしは『シャインエンジェル』を攻撃表示で召喚！ 手札から魔法カード『封印の黄金櫃』を発動。デッキから除外するのは『レベルアップ！』だよ。更にリバーズカードをセットしてターンを終了するよ」

『ユーキにやんのモンスターは『シャインエンジェル』だー！ この辺はどう見えますか？ 解説席のお二人！』

『妥当な布陣だろう。モンスター一体とリバーズカード一枚は基本に忠実で事故を起こしにくい』

『だな。俺はユーキちゃんのここからの展開を知っているから詳しくは言えないが、上々の立ち上がりだ』

「へっつオレのターンだな！ ドロー！ オレは手札から魔法カード『融合』を発動！ 手札の『E・HEROフェザーマン』と『E・HEROバーストレディ』を融合！ 『E・HEROフレイム・ウイングマン』を融合召喚！」

『イキナリの融合召喚！ フェイバリットカードの登場だー！』

『相変わらずの鬼引き……まあこのくらいならそうでもないか。と

もかく『E・HEROフレイム・ウイングマン』が一ターン目から召喚か……』

『十代の得意技はあの速攻だからな。俺もあいつとデュエルした時は『融合』を封じることが最優先にしたよ』

『で、結局その他のE・HEROサポートカードの対策をしてなくて負けたんだな』

『……うるさい』

『まあ見てなつて。ユーキちゃんが今度は完全な、遊城十代封じをやって見せてくれるからさ』

『何？』

『バトルだぜ！』『E・HEROフレイム・ウイングマン』で『シャインエンジェル』を攻撃！『フレイムシュート』！』

『おおつとダイダイ、リバーカードをまったく気にも留めない攻撃宣言！』

十代　じゅうだい　だいだい　ダイダイなんだろうな。ライムのネーミングは毎度毎度わけわからん。

『まだ序盤。例えばリバーカードで迎撃されたとしても立て直すのは難しくない。問題はないだろう』

『……まあ、あいつの場合は終盤であつても迷わず攻撃するだろうがな』

流石に三沢の解説は堂に入っている。筆記トップクラスは伊達じゃないな。

『きゃあつ！』

『E・HEROフレイム・ウイングマン』の炎弾で『シャインエンジェル』が黒焦げになる。

ユーキLP3300

『『E・HEROフレイム・ウイングマン』の効果発動だぜ！相手モンスターを戦闘で破壊したとき、そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える！』

『きゃああつ！』

ユーキLP1900

「く……うう。わたしは『シャインエンジェル』の効果起動します！」

「さあ、ユーキにゃんは『シャインエンジェル』の効果起動しました！」

『『シャインエンジェル』は戦闘によって破壊されたとき、自分のデッキから攻撃力1500以下の光属性モンスターを攻撃表示で特殊召喚するリクルーターだ。まあ、ユーキちゃんのデッキなら何を呼ぶかは決まってるな』

「わたしはデッキから『サイレント・ソードマンLV3』を攻撃表示で特殊召喚します！」

『レベルモンスターか。なるほど。万丈目の『アームド・ドラゴン』でもそうだが、貧弱な攻撃力しか持たない初期レベルはリクルーターから出せば安全に進化できる』

『たった攻撃力1400の『シャインエンジェル』を攻撃表示で出したのは、攻撃を誘うための布石だ。『サイレント・ソードマン』はLV3さえ乗り切ってしまうえば場持ちがいい』

「そうこなくっちゃな！ オレはカードを二枚セットしてターンエンドだぜ！」

「わたしのターン、ドロー！ このスタンバイフェイズで、わたしの『サイレント・ソードマンLV3』をレベルアップ！ デッキから『サイレント・ソードマンLV5』を攻撃表示で特殊召喚します！」

「攻撃力2300……『E・HEROフレイム・ウイングマン』の攻撃力を上回ってる！？」

「行きます！ 『サイレント・ソードマンLV5』で『E・HEROフレイム・ウイングマン』を攻撃！ 『沈黙の剣LV5』！」

「トラップカード発動！ 『ヒーローバリア』！ 『サイレント・ソードマンLV5』の攻撃を無効にする！」

「させません！ リバースカードをチェーン発動！ 『王宮のお触れ』

「！ トランプカードの効果を無効にします！」

「つならオレは速攻魔法『非常食』でライフを回復するぜ！」

十代LP5000

『サイレント・ソードマン』に『王宮のお触れ』……セツ、まさか彼女のデッキは』

『ああそつだ。』サイレント・ソードマン』と『王宮のお触れ』によつて相手を封殺する。正にサイレント（沈黙）デッキ、とでも言えばいいか？』

『サイレント・ソードマンLV5』の剣が『フレイム・ウイングマン』を両断する。

「ぐ……ああ！」

十代LP4800

「私は『サイレント・マジシャンLV4』を攻撃表示で召喚。カードをセツとしてターンを終了するよ」

「やるな……オレのターン！ ドロー！」

「この瞬間『サイレント・マジシャンLV4』に魔力カウンターが一つ乗るよ」

「オレは手札から『融合回収』を発動！ 墓地の『E・HEROバーストレディ』と『融合』を手札に戻す！ そして『融合』！ 手札の『E・HEROバーストレディ』と『E・HEROクレイマン』を融合！ 召喚するのは『E・HEROランパートガンナー』だ！」

十代のフィールドに数少ない女性型E・HEROが召喚される。

「『E・HEROランパートガンナー』は守備表示でも相手プレイヤーに攻撃力を半分にしてダイレクトアタックすることができる！ 行け！ 『E・HEROランパートガンナー』のダイレクトアタック！ 『ランパート・シヨット』！」

「きゃああつ！」

ユーキLP900

『まずいな……』E・HEROランパートガンナー』の守備力は2500。『サイレント・ソードマン』も『サイレント・マジシャン』

もランパートガンナーを倒せない』

『……と、思うよな』

『何？』

「オレはこれでターンエンドだぜ。さあどうする加藤さん！」

「えへへ……やっぱり遊城くん強いね。思ってたよりずっと早くてびっくりしたよ」

確かに、ロックが揃うまでの僅かな間に二体の融合ヒーローはキツイ。だが、それでもまだまだ予測の内。E・HEROが速攻デッキなのは俺もユークちゃんもよくわかっている。

「それでも、わたしだって負けたくない。セツ君と一緒に、頑張って作ったデッキだもん！こ、子供みたいなものだよ！」

……言葉のチヨイスが危険だ。

その単語をチヨイスされると後で非常に大変だ。無論俺が。

ほらほら！ すでになんか視線が痛い！ さだめはもちろんのこと何故かアテナの視線が一番痛い！

そんな俺の戦慄をよそにデュエルは終盤戦へ。

「ドロー！ この瞬間、わたしが除外していた『レベルアップ！』

が手札に戻るよ！」

『……そうか！ 最初に『封印の黄金櫃』で除外していた……』

『ああ、そうだ。これではほぼ完成だな』

「私はその『レベルアップ！』の効果で『サイレント・マジシャンLV4』をレベルアップ！ デッキから『サイレント・マジシャンLV8』を特殊召喚するよ〜」

「攻撃力……3500!？」

「バトル！『サイレント・マジシャンLV8』で『E・HEROランパートガンナー』を攻撃！『サイレント・バーニング』！」

「うあっ!？」

ランパートガンナーがなすすべなく破壊される。

「そして『サイレント・ソードマンLV5』でプレイヤーにダイレクタアタック！『沈黙の剣LV5』！」

「うわあああつー！」

十代LP2500

「私はターンを終了します！」

「くう……オレのターン……ドロー！」

さて……ここが山場だな。

いつも土壇場で逆転のカードを引く十代のディスプレイードロー。今回はどうか……。

「オレは手札から『ホープ・オブ・フィフス』を発動するぜ！ 墓地の『E・HEROフェザーマン』『E・HEROバーストレディ』『E・HEROクレイマン』『E・HEROフレイム・ウイングマン』『E・HEROランパートガンナー』の五体をデッキに戻す！」
うわ……。

『あのカードは発動時、手札とフィールド上に他のカードが存在しない場合、デッキから三枚カードをドローできる。十代お得意のドロー加速だ』

ユーキちゃん……ちょっとミスったな。

「行くぜ加藤さん！ オレは手札から『強欲な壺』を発動！ デッキからカードを二枚ドロー！ さらに『E・エマジエンシーコー』を発動！ オレはデッキから『E・HEROエツジマン』を手札に加える！ そして『融合』！」

『マジかよ……』

『これが、十代の引きの強さだ』

もうどうにでもしてくれ。こりやお手上げだわ。

「オレは手札の『E・HEROスパークマン』と『E・HEROエツジマン』の二体を融合！『E・HEROプラスマヴァイスマン』

「！」

あ……。

「オレは最後の手札を捨てて『E・HEROプラスマヴァイスマン』の効果を発動！『サイレント・マジシャンLV8』を破壊する！」

「あ……」

雷が沈黙の魔術師を巻き込み弾けた。

「そしてバトルフェイズ！『E・HEROプラスマヴァイスマン』
で『サイレント・ソードマンLV5』を攻撃！」

「きゃあっ！？」

ユーキLP600

「オレはターンエンドだぜ！」

「……」

ユーキちゃんは呆然としていた。流石に、切り札二体を一ターンで倒されるとは思ってなかったのだろう。

「……それでも」

「ん？」

「それでも、わたしは諦めたくない。このデッキは、セツ君と一緒に頑張って作ったの。アテナちゃんたちとも遊んで、すっごく疲れ
てる中でもセツ君いつも来てくれて……デッキ作り手伝ってくれた。
だから……もう無理って諦めることだけは、したくない！ ドロー
！」

ユーキちゃん……。

「……アテナくんといい、よくよく愛情深い娘に慕われるじゃない
か」

「……うっせい。今話しかけんな」

不覚にも感動した。そこまで大切に思ってくれることに。そして
ちよつと罪悪感。ユーキちゃんを今まで疲れた時の清涼剤のように
しか見てなかったことに。

「わたしは手札から『地砕き』を発動！『E・HEROプラスマヴ
ァイスマン』を破壊します！」

最後まで、ユーキちゃんは諦めてない。俺は十代のドロウの時点
で諦めてしまったのに。

「わたしは『サイレント・ソードマンLV3』を攻撃表示で召喚！
プレイヤーにダイレクトアタックします！」

「ぐあぁっ……」

十代LP1500

「ターン、エンドです」

『わからない。これなら、これならまだ……』

『サイレント・ソードマンLV3』をレベルアップさせることが
できれば……！

「オレのターン！ ドロー！」

「どうだ！？

「……加藤さん」

「……」

「ガツチャ！ めちゃくちゃワクワクするデュエルだったぜ！」

「あ……」

「オレは手札から『戦士の生還』を発動！ 墓地の『E・HERO
スパークマン』を手札に戻し、攻撃表示で召喚！ そして『サイレ
ント・ソードマンLV3』を攻撃！ 『スパークフラッシュ』！」

「きゃあああああっ！」

ユーキLP0

『勝負、ありだな』

『……ああ』

『決着ー！！ 最後の最後に激闘を制したのは、流石貫禄を見せつ
けた遊城十代選手だー！』

自分を負かした十代に対する大歓声の中、それでもユーキちゃん
は涙を見せず、ただ俯いていた。

「ユーキちゃん」

「あ……セツ、君」

デュエルの後、俺は無理言って三沢に後片付けの陣頭指揮を変わ
ってもらい、ユーキちゃんのところに来ていた。

「おしかったな」

「あはは……でも、ごめんね、負け、ちゃった……」
「いや……」

確かに、プレイングミスはあった。『レベルアップ！』で『サイレント・マジシャン』ではなく、『サイレント・ソードマンLv5』をレベルアップさせれば、間違いなくユーキちゃんの勝利だっただろう。ただ、ああすれば両方のモンスターを進化させられる。決して間違った判断ではなかった。

「それよりも、俺はユーキちゃんに謝ることがある」
「え？」

「ごめん。最後まで信じてあげられなくて、ごめん」

俺はユーキちゃんの勝利を諦めた。十代の引きを見て、もう無理だと考えてしまった。自分の張った『王宮のお触れ』で畏も使えず、切り札すら倒されてしまったあの状況でプラズマヴァイスマンを倒す手立てはない。もう負けるだけだと考えてしまった。

「でも、ユーキちゃんは諦めてなかった。だからきつとあの場面で『地砕き』が引けた。俺たちで作ったデッキを信じていたから」

ユーキちゃんは俺を信じてくれたんだ。けど俺はユーキちゃんを信じきれなかった。

「だから、ごめん」

深く、頭を下げる。けれどユーキちゃんはクスリと笑って頭を上げるようジェスチャーしてきた。

「いいの。きつとね、それは想いの差だから」

「想いの差？」

「そう」

ユーキちゃんは俺を真っ直ぐに見詰める。

「わたしは、セツ君のことが好き」

「それは……」

驚きは、なかった。やっぱり、とすら思った。自意識過剰かとも思ったが、それでもきつとそうなんだろうと思っていたことだった。「アテナちゃんみたいに一目惚れじゃなかったけど、気が付いたら

好きになつてた。もう、どうしようもないくらいに」

普段の控えめな立ち振る舞いからは考えられないくらいにはつきりとした告白。

「でも、セツ君はまだわたしのことを仲のいい女友達としか思っていない。ちよつと自惚れてもいいのなら、彼女候補くらいには入っててくれると嬉しいけど……」

それは、決して自惚れじゃない。少なくとも、アテナたちを除けば一番好きなのはユーキちゃんだろう。

「でも、やっぱりわたしの想いまでは届いてない。だから、これは想いの差。どうしようもないくらいに好きな人を最後まで信じられるのは当然。でも、あの場面じゃ普通は勝てないって思うのも当然。全然不思議じゃないよ」

「ユーキ、ちゃん」

「答えは知らない。今聞いたつて悲しいだけだから。でも……」

これからは、遠慮しないから。

そう言い残して、ユーキちゃんは寮の方まで戻っていつてしまった。

「はあ……」

緊張、した。

今までもアテナたちに告白されたけど、思いがけぬところからだったり緊張している余裕のないものばかりだったから、ここまで普通に、けど強烈に告白を意識するのは実は初めてかもしれない。

デュエル場の方からはあわたましい声が聞こえてくる。

戻らなくちゃ、とも思うのだが、ちよつとしばらくは休んでから行こうかと思う。

せめて。

この顔の赤みが引くくらいまでは。

第二期第四話「沈黙のダークホース」（後書き）

間話のくせに下手すると本編より力入れて書きました。そしたらなんと過去最長の話に。ダークホース覚醒編です。アテナはもちろんだめも希冴姫も告白してるんですけど、告白の強烈さはセツの中で群を抜いているユーキちゃん。相変わらず恋愛だといいいところガシガシ持っていく娘です。

デュエルの方は何気に初となる十代戦。まさかユーキちゃんであるとは思ってませんでした。ちなみにランパートガンナーはアニメ版の効果です。OCGだとモンスター無視して直接攻撃はできません。あしからず。

次はホワイトデーでしょうか。……またユーキちゃんが出てきそうです。おいしいところを持って行きそうです。がんばれ、アテナ！
それでは、レーネスでした！

第四話として置き換え。

番外2「もはや神スキル」(前書き)

段々セツが天才万能キャラになってきた番外2です。ホワイトデーです。今回は割とほのぼの、かな？ そんなに笑い要素も強くないですし、あんまり面白くはないかも……。

折角のイベントデーなのに自信なさげなレーネスですが、とりあえずどうぞ！

番外2 「もはや神スキル」

アルカナく切り札の騎士

番外2 「もはや神スキル」

3月14日。

言わずと知れたホワイトデー。

この日財布が軽くなればなるほど世間では勝ち組と呼ばれ、嫉妬と羨望の眼差しで見られることになるらしい。

俺と言えばこの日は毎年さだめにせがまれ（脅され）て手作り菓子、主に飴の類を渡して終了、というのがパターンだった訳だが。「今年は、そういうわけにもいかんよなあ……」

アレが順当なバレンタインの贈り物であつたかはさておき、アテナからも一応は受け取ったことになる（微妙に納得がいかないが）。ユキちゃんからは普通に受け取っているし、状況が状況だけに貰っちゃいないが世話になっている礼としてさだめや希冴姫、ルイン辺りにも渡してやるのが筋つてもんだらう。

「……そういえば、さだめから貰わなかったのは初めてだな」
毎年何かしら混ぜてはいたものの、さだめからは毎年貰っていた。そもそもクリスマスや元旦と一緒に過ごさなかったのも実は初めてだ。こう考えてみると、俺も大分さだめに依存していたのだからかという気になってくる。

「ずーっとずーっと一緒にいたんだもん……」
っと、いかんいかん。ついしんみりとしてしまった。俺は首を振

って雑念を追い出し、作業を再開した。

一方ガールズサイド。

「セツ、覚えていてくれていたでしょうか……」

「アテナさん、バレンタインのことは知ってるけど、あれでお返し貰おうってのは虫が良すぎるんじゃないかな」

「う……」

「……まあ、お兄ちゃんなら大丈夫でしょ。何にも渡してないさだめの分すら用意してそうなくらいだし」

流石に兄妹。セツの行動は完全に読まれていた。

「っていうか、お兄ちゃんに限ってホワイトデーを忘れることはないよ。さだめがしつかり毎年刻みつけておいたし」

訂正。セツの行動は完全に掌握されていた。

「お兄ちゃんの飴細工はすごいよー。女としてのプライドがどうか、そんなこと言ってもらえないくらいには」

「……ジャック殿に対しても思いましたけど、セツ様にできないことではないのですか？」

「お兄ちゃんなんだかんだで天才肌だから。本人は器用貧乏なだけって言ってるけど」

少なくとも無駄スキルに関しては天才だろう。勉強や運動もやって出来ないことは基本的にない。

「あ、でもお兄ちゃん泳げないよ」

「そうなんですか？」

「なんか『人類は地上で生活することに慣れ、水かきやエラも捨てて特化してしまっているのだから態々ホームからアウエーに移る必要はない』とかなんとか言いワケしてたけど」

「カナヅチなんだね」

「ちよつと意外ですわね」

「おかげで水着イベントが起こせなくて……」

「……それは逆に僥倖」

「どういう意味かな？ ルイン」

「洗濯板」

ルインはオブラートという言葉を知らなかった。

「じ、自分が余裕だからって……」

「幼児体型」

「がふっ!?!」

「寸胴」

「……」

「リバーシブル体型」

「も、もうやめてください！ さだめさんのライフはとっくにゼロです！」

しかも容赦なかった！

「は、話を戻しましょう。とにかく、セツはきつと用意してくれていると。ならばは一体どういうシチュエーションで渡されるんでしょうか？」

「……アテナちゃんみたいな方法じゃなければなんでもいいかな？」

「あつっ」

「バレンタインにロウソクプレゼントは論外」

「うっ……」

「そもそも何をトチ狂ったらロシアンルーレットなバレンタイン……」

「る、ルインさん？ このままだとわたしたち全員再起不能になっ

ちやうよ」

「……恐らくですが、それが狙いなんじゃありません？」

事実、すでにさだめとアテナは二人仲よく撃沈している。

「うっ……き、きつとお兄ちゃんのことだから全員まとめて、で確定だよ」

なんとか復活してきたさだめがそう分析する。

「確かに、セツ君は周りに角が立たないようにするよね〜きつと」
「参考までに、セツ様はこれまでどんな形でお返しをしていたんですの?」

これは唯一経験者のさだめに聞くしかない。

「別に、普通だよ?」

「……そうでしょうか? セツとさだめさんの普通は信用ならない気がします」

「同感」

「盆栽渡されたと思ったら飴細工だったり」

『突飛!』

「普通だよね」

「どこも普通じゃないですよ! 今のシチュエーションのどこに普通が入り込む余地がありましたか!」

「シャンパンタワーのグラスが飴細工だったり」

「だからその言葉のどこに『普通』と言う言葉を使つつもりですの!?!」

「え? ホワイトデーと言えばシャンパンタワーでしょ?」

「貴方達兄妹は常識を一から学び直すべき。早急に」

「もしかして、飴でスタンドグラスも非常識?」

「……それを本気で常識だと思ってるの……?」

「とりあえず、セツが路頭に迷うことはないというのがよくわかりました」

無駄スキルだけで一財産築けるだろう。もはや無駄とつけるのもおこがましいほどの才能だが。

「お兄ちゃん昔からヘンなところに凝る癖あったからねー。今年はどんな細工を見せてくれるか……」

「……なんかもう、シチュエーション云々よりもセツの技巧の方が楽しみになってきました」

ギスギスするよりは圧倒的にいいだろう。

「前に百八の無駄スキルとか言っていましたけど、ホントのところどれくらいあるんですか？」

「うーん……そこら辺はさだめにもよくわかんないんだよね。でも、ホントに百八くらいあっても不思議じゃないよ」

「さだめちゃんでもセツ君の知らないことあるんだねー」

「いや、お兄ちゃんの無駄スキルが節操無さ過ぎて把握しきれないんだよ」

それは確かに。いつの間にか増えたりもするのでなおさらだろうか。

結局、ホワイトデーのことについて話していたはずがセツの無駄スキル談議に没頭してしまふアテナたちなのだった。

そしてホワイトデー当日。

数日前からセツとの接触やレッド寮に近づくことを禁じられていたアテナたち（希冴姫やルインも追い出されてアテナたちの所に泊まった）は気が気でなく、朝からそわそわするのを抑えられなかった。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「ピッピ」。

「着ましたー！」

「レッツゴー！」

「待ちなさい」

セツからのメールを読むこともせず女子寮から飛び出そうとするアテナたちを制止する影。

「まったく……セツからきつところなるからって聞いていたけど、本当に向こう見ずね貴女たち」

「明日香さん！」

「どうしてここに？」

「……ここ、女子寮なんだからいるのは当たり前でしょう。私は伝令みたいなものよ。セツから貴女たちがメールも読まずに飛び出そうとするかもしれないからって」

本当にその通りになるんだから。と若干呆れ顔で溜息を吐く明日香。

「メール？」

そういえば、セツからのメールというだけで中も見ずに飛び出してしまった。

代表してアテナがそのメールを読みあげてみる。

『おはよう。今日はホワイトデーだが、ちょっとした余興ついでにパーティのようなものを開いてみることにした。よって来訪の際は正装で来ること』

「……正装」

「そ、そんなの持っていないよ」

「……パーティドレスですか。困りましたね。ドレスの類は精霊界に置きっぱなしですわ」

「私も。どうしよう」

「……心配のベクトルが私たちと違います」

仮にも女神と姫だけはある。

「あー……多分、お兄ちゃんのことだから……」

「……ええ。そのドレスとかも、今から十代が持ってくるわ」

「……ホワイトデーのお返しレベルを遙か超越してます……」

パーティドレスプレゼントの時点でホワイトデーのお返しというレベルではない。その上パーティセツティング。

「……お兄ちゃんって、手段と目的を入れ替えるのが得意技だから……」

「ところで、パーティドレスを前座的に渡しておいて、メインは飴細工、なんだよね？」

「……一体どれだけの物を……セツ様」

興味を通り越して恐怖すら感じる。

「おい！ 持ってきたぞー！」

十代がドレスの入っているらしいスーツケースを押しやってきていた。

それぞれその衣装を渡され、部屋で着替えてからレッド寮に向かうことに。

「ほい、明日香も」

「……っえ！？ 私も！？」

「伝令と足止めのお礼、だつてさ。吹雪さんからのたつての頼みでもあるらしいけど」

「ああ、兄さんの……」

ということとは吹雪も関わっているのか、と少し頭の痛い思いを感じながらも、明日香もしぶしぶ着替えに戻っていった。

数十分後、女子寮の前には合わせて六輪の華が咲いていた。

「……これ、とても手造りとは……」

そう言つて一番着つけに苦労したアテナは薄い蒼を基本色としたお姫様のようなドレス。まるでアニメに出てきそうなくらいの出来栄えに、アテナはもう何度目になるかもわからない驚きをあらわにする。

「露出が少な〜い。さだめもルインみたいのが良かった……」

そう文句を言いつつも満更でもないさだめはシヨッキングピンクの若干子供っぽいもの。それでもところどころに嫌みのない程度に付けられたフリルが可愛らしい。

「洗濯板には無理。というかこれイブニングドレスじゃ……」

ルインもその言葉通り胸と背中が大きく空いた紫のイブニングドレス風。その抜群のスタイルを強調しつつも下品ではない絶妙のバランスは、とてもじゃないが素人技ではない。

「……今度からは、このドレスでパーティに参加することにしますわ」

そう言って満足そうに裾をつまんで見せる希冴姫のドレスは、アテナと同じくお姫様調だが、こちらはより大人っぽい落ち着いた赤何処かクイーンズ・ナイトの鎧姿を彷彿とさせながらも女らしいものだ。

「こ、これはちょっと恥ずかしいくらいかも……」

頬を染めるユーキのドレスは淡い碧のスレンダーなもの。ななめにフリルがいくつも付いている辺りがセクシーだ。

「これ、兄さんの注文ね……まったく」

明日香のドレスは赤い正統派のパーティドレス。明日香もなんだかんだと言いつつ嬉しそうだ。

「……なんでセツ、アカデミアに来たんでしょう」

「素直にデザイナーにでもなつてれば良かったんじゃない……」

今からでもその道に進めば大成功することだろう。ひいき目なしで。

「ともかく、これで準備は整いましたわ」

「行く」

ドレスを着なれているらしい希冴姫とルインはそれほど大きな動揺はないらしい。

そんな少女たちの前に、燕尾服の青年が現れる。

「どうやら、準備は整ったようですね。主様がお待ちです」

「ジャック殿！」

そう、最近すっかりご無沙汰の（笑）ジャックだった。いつもの鎧を脱ぎ、燕尾服を纏った彼は元々の素質も相まってまったく違和感なく執事に見えた。

「私は今回皆さんの御案内役を仰せっております。それでは、

こちらに」

そういつて一礼し、レッド寮の方へと歩いて行く。

「……今さらですけど、開催場所はレッド寮で本当に良かったんでしょうか？ ブルーや女子寮の方がこの格好は……」

「まあさすがのお兄ちゃんでも勝手に他の寮を使うわけにはいかなかったんじゃない？」

「いえ、正確には規模的にレッド寮の大きさでないと飾り付けることができなかったためになります」

ジャックの補足説明になるほどと納得する一同。どっちにしても尋常ではない。

「ジャックさんも手伝ったんですか？」

「いえ……流石にあれほどの技巧は私にはありませんので、基本素材の飴を溶かす作業だけ、お手伝いさせていただきました」

「？ ジャック殿もお菓子作りはできた気がするんですけど？」

そんな希冴姫の疑問に、ジャックは苦笑した。

「いえ、あれはもうコック（料理）ではなくアート（芸術）ですので……」

一体何をした。

「まあ、詳細は見てのお楽しみということ」

そんな会話をしていると、件のレッド寮が見えてくる。

外見的には、さほどいつもと変わりはない。多少綺麗に掃除されてはいるらしいが。

「まあ、外見をどう取り繕ったところでボロはボロだからな」。その分内装に力入れてたよあいつは」

「あら、十代」

十代もちょっとした正装をしていたが……。

「あんまり、似合っていないわね……」

「だよな」。オレも動きにくくてあんま好きじゃないぜ」

活動的で子供っぽい十代に正装はまだ早かったのだろう。コスプレデュエルの時以上にコスプレ染みて見えた。

「けど、明日香たちは似合ってるな！ 流石だぜ！」

「あ、ありがとう」

「そ、それで、セツはどこに？」

屈託なく褒められると流石に恥ずかしい。気を取り直すようにアテナが問いかけた。

「おう、食堂だ。何日も前から殆ど寝ないで作業してたんだぜあいつ」

それは逆に心配になってくる。手段と目的が逆になるといつてもそれで体を壊してほしくはない。

「それでは、参りましょう。いらっしやいませ、お嬢様方」

実に堂に入ったジャックのお辞儀と共に食堂の扉が開かれる。そこでアテナたちが見たのは……。

「べ、別世界……」

「わたくしたちの城が……」

まず目に入るのは、きらきらと輝く琥珀色のシャンデリア。それに『光神機 轟龍』を象った像。

他にも飴細工で作られたと思しき希冴姫たちの城の模型。さだめの言っていた飴細工のシャンパンタワー。エトセトラエトセトラ……そんなとてもじゃないが元があの食堂とは思えない幻想的な光景に、一同は声を失った。

「……ようこそ。エレクトラム宮殿へ。お嬢様方」

そう言っただけで現れたのはやはり正装した吹雪。こういうことに慣れているのか、とても自然な様子で一礼してきた。

「兄さん！」

「やあ明日香。相変わらず、セツ君の技巧には驚かされるね。プロだっただけでここまでできる人はそういないよ」

「それよりも、エレクトラム宮殿って？」

聞き慣れない名称に首をかしげる一同。

「エレクトラムとは琥珀金のこと。その名の通り琥珀色に輝く、古くから魔除けとして用いられてきた貴金属だ」

そう言って姿を現したのは……。

「セツ！」

中世ヨーロッパの貴族風の衣装に身を包み、腰にはやはり飴細工らしいスウェプトヒルト（レイピアの柄）を覗かせたセツが背筋を伸ばし、凜とした立ち姿を見せていた。

「セツ様……よくお似合いでございますわ」

「うん……これは、ちよつとヤバイよ」

「いやなに、自分で作つといてなんだけど、皆のドレスの方が良く似合っている。見惚れて、思わずどもりそうになったよ」

そんなことをその格好でさらりと言わないで欲しい。相変わらず、役に入りきるとことん気障なセリフも臆面もなく言うセツに、全員顔を紅潮させた。

「それじゃあ、パーティを始めようか……といつても、音楽も料理もない、形だけのパーティだけだ」

「ちなみに、この飴って食べられるんですか？」

「それはもちろん。ただ、複雑な形してるからあまり食用には適さないと思うけれど」

というより、もつたいたなくて食べる気が起きない。

「お兄ちゃん……また今年はいつになく気合入ってるね」

毎年セツのお返しを貰ってきたさだめですらこれには度肝を抜かれたらしい。

「当り前だ。家族一人へのお返しと、多くの女の子たちへのお返しが同程度なわけがあるか」

「それは、ちよつと複雑だよ」

暗に異性として見られてないと言われたようなものなのだから、複雑になるのもしかたない。

「なに、冗談だよ。まあ去年までならともかく、今は割と意識もしているのだから、あまり気を落とさないで欲しい」

「えっ……？」

「というわけで、さだめ。こいつを受け取ってくれ」

そう言っつてセツが手渡してきたのは、小さな指輪……のように見える飴だった。

「そいつなら食えるだろ。遠慮せず食っつてくれ」

「……詰めちやダメ？」

「指がベタベタのアリニコ塗れになっつてもいいのなら」

「う……」

確かに、それはキツイ。

「ほい、ユーキちゃんと希冴姫にもこれだ」

「あ、ありがとう……」

「まあ……わたくしの剣ですわね」

二人に渡したのは剣状のスティック飴。ユーキはサイレント・ソードマンの、希冴姫は希冴姫自身の剣をモチーフにしている。

「その柄の部分を持っつて食べてくれ。一種のペロペロキャンディだと思っつてくれれば」

「……私は？」

「ホレサイクロイド型の飴。バキバキに碎いて召し上がれ」

個人的な怨みも含む。

「……なんか雑」

そうは言っつが、実は一番時間がかかっつた。

「あ、あのセツ……」

「アテナはこれ」

そういっつて取り出したのはどう見ても何の変哲もない飴玉。

「『神聖なる球体』だ」

「え……？」

「『神聖なる球体』だ」

それはつまり、ただの玉ですよね？ と言っつ言葉は言っつ前に封殺された。

「安心しろ。間違っつても飴玉に見せかけたただのビー玉ではない」

「えと……やっぱり怒っつてます？ バレンタインのこと……」

あのホワイトチョコに見せかけたロウソクは我ながら頭がどうか

していた。できれば忘れて欲しい。……まあ、やられた本人がそう簡単に流してくれるとも限らないわけだが。

「期待しててくださいねと言われてめちゃくちゃ期待してたところにあの仕打ち。だがそれを怒っているわけではないから安心してくれ」

「とつても怒ってます!？」

「あー……お兄ちゃん結構根に持つから」

あうーそんなー、と落ち込むアテナに、やれやれと肩をすくめたセツが何かを渡す。

「……冗談だよ。ほら、これが本命」

「これ……宣告者？」

そう、それはまさしく『緑光の宣告者』や『紫光の宣告者』にそっくりな飴玉。

「流石に、一番世話になつてるアテナに手抜きはできない。ちょうどいいのが思い付かなくてそれになつちまったけど、許してくれると嬉しい」

「そんな……許すも何も……」

あんなもののお返しに、こんなドレスやパーティ、その上二人一人にプレゼントまで用意してくれて……。

「私の方こそ、許して欲しいくらいです……」

「何言つてんだ。そりゃ結果としてあんななつちまったけど、あの時アテナが俺にバレンタイン用意してくれるって聞いてめちゃくちゃ嬉しかったんだぞ。始めっから怒つてないよ」

「セツ……」

「あーはいはいそこまでそこまで」

「きゃっ!？」

いい雰囲気が出るも、そもそもこんな恋敵の巣窟でそんな雰囲気が長続きさせてくれるはずもなく、あえなくさだめに割りこまれる。

「あーあ。さだめもお兄ちゃんにバレンタイン渡したかったなー」

「わたくしとて、その文化を知ってさえいれば……」

「来年こそは……！」

「えと、わたしも渡したんだけど」

全員不満タラタラである。結局、パーティーが終わるまでの間、いつものように全員のご機嫌取りに奔走する羽目になったセツなのだ。
った。

番外2「もはや神スキル」（後書き）

難産でした。何がって各キャラのドレスが。上手く伝えられた自信はまったくありません。そもそも服装に関心がなかったので尚更ですね。

今回は前回が自信あるできに仕上がった反動か、あまり上手く書けなかった気がします。遊戯王の小説である意義も薄いですし、微妙。

次回は……ルインか希冴姫の回になると思います。全く構想が出来ませんが、なんとか早めにアップしたいですね。

それでは、レーネスでした！

第二期第五話「昔語り ルイン」（前書き）

ルイン回です。ちょっと短めですが、内容は濃くしたつもりです。あと、番外ではなく間話にしました。番外というには本編に関わりのある話が多いので。

バレンタインやホワイトデーは番外ですが。あれは時期とかも謎なパレルワールド的なものになるので。

今回はできればあとがきまでしっかり読んでほしいかな。ちょっとアンケートっぽいがあるので。

では、どつぞー！

第二期第五話「昔語り ルイン」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第二期第五話「昔語り ルイン」

いつからだろう。世界を退屈に感じ始めたのは。

女神としての生を受け、一つの世界の管理を任されて……。

最初は充実していた、と思う。見るもの全てが真新しく輝いて、人々の営みが愛しくて。それを退屈、なんて思う暇なんてなかったはずなのに。

「長く生きると、娯楽に飢える」

いつか、誰かがそんなことを言っていた。当時の私はそれがさっぱり理解できなくて。

「何を言ってるの？ 世界はこんなにも楽しくて、希望に満ち溢れているのに！」

両手を広げ、そんなことを胸を張って言っていた。

……でも、この世に生まれ落ちてから、丁度千を数えた頃からだろうか。徐々にその言葉が真実味を帯びてきたのは。

変わらぬ世界。変わらぬ日常。あれだけ愛しく、輝いて見えた人々の営みが、どれも陳腐に、色褪せて見えて。

世界が、何度も繰り返し流れる壊れた映像のようで。

出来の悪い映画を、延々と強制的に見せられているようで。

変革を望むか？

だからきつと、あれは罰。変化を望んだ私。その心に付け込んだ

あの忌々しい『終焉の精霊』。同じく世界を我が手にしようとする野心を持った新たな王、デミス。

世界が、色を持たないモノクロに沈んでいく。

「やめて……私のセカイを壊さないで……！」

私の必死の抵抗も、所詮は焼け石に水。世界はどうしようもなく脆くて、現実には私に敵しかった。

女神。

そう呼ばれて。でも何もできなくて。

「馬鹿らしい……！」

なにが女神だ。自分の世界を、愛する世界を救えずに、なにが…

…！

そこで気付いた。

「愛する……世界……？」

つまらない。

そう思っていたのは誰だ。

変化が欲しい。

そう願っていたのは誰だ。

「私だ……！」

この世界をつまらないと思ったのも。世界の変化を望んだのも。

「全部、私だ……！」

世界は変化したじゃないか。崩壊というカタチで。

世界をつまらないとは思わなくなったじゃないか。世界に哀しみが満ちることで。

「馬鹿みたい……！」

「花嫁、ね……男の俺には似合わん単語だ」

「冗談めかして言う彼だけど、そこに笑顔はどこにもなくて。」

「終焉に見染められ、終焉の傍らで、セカイの終わりを伴侶とする者。それが……」

「『終焉の花嫁』か……」

「さだめ……さだめは、お兄ちゃんを……」

「……貴女に罪はない。私とは違う。貴女はアレと驚くほどに波長が合っていたから。だから無理矢理乗っ取られた」

「それでも……波長が合ってたってことは、元々さだめはそうだったんだよね？ さだめは……『終焉』そのものだったんだよね？」

「それは違う」

そう、それは違う。少なくとも今、ここにいるこの子は……。

「貴女はきつと『再生』の象徴」

コインの表と裏。光と影。終わり始まり。終焉と再生。

全ては表裏一体。

「プラスにマイナスをかければマイナスになる。それと同じ」

『再生』に『終焉』が取り憑けば、それは大きな『終焉』となっ

て。

「むしろ……『終焉』の象徴は……」

「俺……か」

「キミと私は同じ。私がそうだったように、キミも……」

私は……彼に過去の自分を見た。

セカイを壊され、それでも尚抗おうとする痛々しい姿。それも叶

わず、己をも誤魔化して生きている。そんな姿。

「でも、キミもやっぱり、私とは違った」

誤魔化して、壊れた本質を仮面ベルソナの下に押し隠して。それでも、彼は楽しそうだった。

「キミは、誤魔化しのプロ。私が引き剥がしたりしなければ、もう少しでキミの仮面ベルソナは真実の顔になっていたはず」

楽しそうに、日々を過ごす彼。それを仮面ベルソナだと見破れたのは、偏ひん

に私も同じだったからに過ぎない。

「私は、そんなキミに興味を持った」

どうして、そんなに楽しそうなのか。『終焉』によって壊れたココロとセカイを持っていて、なぜそんな仮面ペルソナが被れるのか。

「羨ましかった。今もまだ壊れたままの私には、その在り方が眩しく映った」

それは、久しぶりの感覚だった。

真新しく、輝いているモノ。壊れているはずの、心の底から愛しく思えた存在。

「キミと一緒になら、世界は優しい。そう思えた。キミと一緒になら、またあの頃の『慈愛の女神』と呼ばれた頃に戻る。また、世界を愛せる。そう、思った」

事実、彼と一緒に精霊界は楽しかった。あんなにはしゃいだのは久しぶりだっただろう。ほんの幽かにでも、笑みがこぼれたのは。

「ああ……きつとこれが私にとっての『希望』なんだ。これが、私の『救い』だった」

僅かに、世界が色付くのを感じた。それは、まるで恋のよう。破壊して、壊れてしまった私のセカイ。モノクロに沈み、光を失ったセカイ。

「キミと出会って、キミの心に近づいて
似ているのに、決定的に違うその心。」

「キミに触れて、キミと視点を共有したら」

世界は、優しくかった。

「眩しいの。あんなにつまらないって。もう飽きたって思っていた世界が……愛しいの」

まるで、この世界に生まれ落ちた時のように。

「キミの见ている景色。キミの心を、もっと見たい。もっと感じた
い」

そう思ったら、セカイは尚更輝いて。

「きつと、これは恋じゃない」

きつと、それよりもきつと深く、強いモノ。

「そう、愛」

かつての私が、世界の全てに抱いていたもの。注いでいたもの。

「私は、キミに愛を抱いたの。キミに愛を注ぎたい」

「ルイン……」

「私を癒して。私を愛して。私もキミを愛する」

恋でなくてもかまわない。そんなものは望まない。

「私が欲しいのは『愛』。『恋』とは似て非なるモノ」

私は女神だから。『恋人』なんて望まない。家族のように、母のよう。

「ただ、愛して欲しい」

「……本当に？」

「っ」

一言。その一言だけで、私の心は揺れた。

本当に、無様。

多くは望むまいと、望めば壊れるからと。

「また……自分の立場が悪くなりそうなことを……」

多くの女性に慕われているのに。いつも嫉妬で大変なのに。

「それでも、自分を押し殺しているのは見たくない」

「何故……？」

私は女神。自分を押し殺すのなんて昔からずっとしてたこと。

「何故、それを見破る……？」

そんな私の疑問に、彼は呆れたように溜息を吐いた。

「……お前が言ったんだろ。『似てる』ってさ」

「あ……」

そう、そうだった。私が彼の、誰にもわからないような仮面ペルソナを見敗れたように。

「俺にだって、ルインの心はわかるんだ。きつと、誰よりもな」

そう言う彼の笑顔は、本当に優しくして。

「キミは……天然ジゴロ」

いつか女に刺されそう。

「むしろ私が刺す」

「……やめてくれ。そういうのはもうこりこりだ」

「なら、自分の言動には気をつけるべき」

きつと彼は隣でぶつぶつ言っている妹にも気が付いてない。

「キミは不器用」

一つのことにも目を向けて、それに全力を傾けるあまり、周りが見えない。

「隣の子には気をつけて」

「っ……げ！」

「お兄ちゃん……？ ちょっとその口、閉じようか……？」

「い、いやまてさだめ。お前何をするつもりだ！？」

「大丈夫。刺したりはしないよ？ ちょっと唇で口封じし続けるだけだから……エイエンに……」

「それは刺されるよりある意味恐怖だ！」

「……ああ、この感覚。」

「くすっ……」

思い出した。

「ふふっ、ふふふっ！」

笑い方、思い出した。

「……ルイン？」

「楽しい……」

これからも、彼と一緒になら、こんなにも世界は色付くのだろう。

「……訂正する」

「ん？」

愛して。そんな陳腐で使い古された言葉は相応しくない。

「私の、光になって。私の世界を、輝きで満たして」

うん。これだ。私は、彼にこれを求めている。

「それが、私の望み」

やっぱり、恋人じゃなくてもいい。私の世界を彩って欲しい。

「……そういつことなら、喜んで」

ああ……。

「ありがとう……っ」

気がつけば、私は彼と唇を重ねていた。

「あー……っ！」

「るっルインおまつ!？」

「……ごめん、ちょっとトンだ」

主に、理性とか。けどまあ……。

「セカンド頂き」

ファーストは盗られたけど。

「お兄ちゃん！　せめてっ、せめてソードを！」

「うわっ!？　ちょ、待てさだめ、落ち着け！」

「落ち着けないーっ！　い、一度ならず二度までもさだめの目の前でーっ!!」

「ふふっ」

キスというより頭突きでもする勢いで顔面を彼に突き出す様子を見て、私はまた、声に出して笑った。

「はっ!？　こうなったらディープのファーストと本当のハジメテを頂くしか……!!」

「うおーっ!？　服を脱ごうとするな脱がそうとするなベルトを盗るなボタンを外すなー!!」

……流石に、そろそろ止めるべきかと思う。

私は慌てずに彼女の延髄に一撃。……うん。上手くいった。

「きゅっ……」

「はあ、はあ……助かった、と言いたるところだが、そもそも原因だから素直に礼を言う気になれん……」

追剥ゴブリンも真っ青な速度ではぎ取られたベルトやボタンを直しながら、彼が苦い顔をする。

「うん。ごめん」

そんなやり取りが楽しくて、笑顔が漏れる。

なんだ。

「こんなに、簡単だったんだ」
笑顔になるの。

「笑うって、こんなに嬉しいことなんだ」
きつと、昔の私ならそんなこと、当たり前すぎて知らなかった。
最近までの私なら、理解できなかった。

「……そうだな。俺も、笑顔はそろそろ仮面じゃなくなったよ」
この世界が楽しすぎてな。
そういつて笑う彼。

いつか、私も。

「そうになりたい」

笑顔が、当り前の私に。

「いつか、じゃねえ」

そして彼は、やっぱり優しくして。

「すぐにでも、だろ」

きつと、これが私の愛のカタチ。

「ふう……」

いきなりルインが俺とさだめに話があるって尋ねてきた時はなにかと思っただが……。

「すごく、嬉しそうだったな」

ルインの過去。ルインの傷。前にネイキッドから概要だけは聞いていたけど、本人から聞いたソレは想像以上に悲惨だった。

それでも、今のルインは楽しそうだった。それが俺のおかげって言うのなら……。

「光栄、だな」

俺は、女神さまを救えたんだ。

「責任、取らなきゃな」

どこかで誰かが言っていた。誰かを救うには、常に責任が付きまとうと。救って、その後にはバイバイなんて、無責任だから。救った以上は、最後まで。

「ルインが、心から笑えるように」

俺も含めて、もう仮面を被る必要のないように。

「がんばろう」

そう決意した、夜なのだった。

第二期第五話「昔語り ルイン」（後書き）

今回の話は割と思い切り本編に関わってます。ルインの過去話。以前ネイキッドが語った、その更に深いところまで今回は語りました。

というか、間話に入ってからガリガリ出番を削られているメインヒロインアテナです。さだめは比較的出てますが。……次は希冴姫予定なので、また出番がありません。その次はさだめ。その次。ヒロイン勢のトリを勤める予定なのですが、このままではメインヒロインの座が危ういです。アテナが主役の時とはことん力を入れにやあ……。

さて、それではアンケート。アルカナに、オリカを出すか否か、です。出したいとは思っていますが、それはちよつと……という読者さんも当然いるでしょう。どちらがベストなのか、アンケートを取りたいです。ちなみに、オリカ肯定だと、希冴姫たち絵札の三銃士が復活することになるでしょう。なしだとこのままパーミッションのみ。ただ、オリカを出してもパーミッションの方針は変わらないのでヴァンダルギオンも普通に使います。次回更新の際にオリカが出るか否か、という余りにも急な話ですが、どうかご協力いただければ幸いです。

それでは、レーネスでした！

第二期第六話「アルカナの剣 前編」(前書き)

希冴姫回です。といいつつあまり希冴姫がメインではないという。どちらかと言えば三銃士やセツのパワーアップイベントに分類されます。そして、案外好意的な意見が多かったためらわずオリカの登場決定。まだ名前だけです、次回から本格的に出てきます。

サブタイ通り今回は前後編。希冴姫のメイン率が低い分二話構成……いえ、ただ予想以上に長くなってしまっただけですごめんなさい。

では、どつぞー！

第二期第六話「アルカナの剣 前編」

アルカナく切り札の騎士く

第二期第六話「アルカナの剣 前編」

「セツ様」

珍しく一人部屋で数枚のカードとにらめっこしていた俺は、背後から聞こえた希冴姫の声に常ならぬ強い意志を感じた。俺は作業の手を止めて彼女に向き合う。

「どうした希冴姫。穏やかじゃないな」

「はい。少々真剣なお話ですわ」

そういう希冴姫は、久しぶりに見る騎士装束の懐から一枚のカードを取り出した。

「これは？」

差し出されたカードを見ると、そこには何もなかった。カードの名称、絵柄、テキスト。その全てが白紙。

「それは、寄り代です」

「寄り代？」

オウム返しに尋ねる。

「わたくしたち精霊を封じたり、新たな力をセツ様に与える。そのための寄り代とするためのカード。いわば、力の入れ物ですわ」

そう言えば、原作の魂のカードにも似ている。つまり、新たな力ードの入れ物。器か。

「これを、どうするんだ？」

「わたくしと共に、精霊界まで来ていただきたいのです。そこで、その寄り代に封じていただきたいものがございます」

「……それは、邪悪なものなのか？」

封じる、という言葉からそう想像したが、希冴姫は首を振って否定した。

「いいえ。むしろ、セツ様の力としていただきたいものです。わたくしたちの、剣ですわ」

「剣？ お前たちの？」

そんなカードは聞いたことがない。

「そんなものがあつたのか？ 俺は聞いたことないけど」

「はい。我ら絵札の三銃士が長『アルカナ・ナイト・ジョーカー』

の持つ至高の剣。わたくしたちの結束の象徴。『アルカナソード』」

『アルカナソード』……恐らくは装備カードなのだろう。

「にしても、随分と大げさだな。そんなに構えなくても、封印くらい……」

『話はそう簡単ではないのですよ主様』

「ジャック……」

相変わらず唐突に現れる奴だ。しかし、簡単ではない？

『うむ。当然、強力な武具は封印されておるのが相場じゃ。『アル

カナソード』もまた、例に洩れず……』

「封印ねえ……」

確かに、強力な武具にはそれを守る守護者やトラップがいるものだ。そういうことなのだろうか？

『まさしく』

『私たちは比較的政治や人間界とも関わりを持っているのですが、その守護の任に就き、外界との接触を絶った者がいるのですよ』

「名を『切り札の騎士 トランプ・ナイト エース』と『切り札の騎士 トランプ・ナイト テンス』」

「トランプ……ナイト？」

『本来はむしろその切り札の騎士の名を受ける筈だったのじゃが、あやつらが頑ななの……』

「あの者たちは人間が大嫌い……人間に尻尾を振り、誇りを捨てたわたくしたちに騎士の名は渡せぬと……」

『神殿に籠ってしまいました……私たちも少々困っているのですよ』
「ふむ……」

俺は今後も希冴姫たち絵札の三銃士を使って行くにあたり、戦力増強できるかもしれないという情報は確かに有益だ。

「そいつらに協力の意志は？」

『……いいえ。なにぶん人嫌いなものですので……』

「そいつは……梃子摺りそうだな」

「はい。ですが、騎士は自らの認めたまに仕え、剣を捧げることこそが本分。わたくしたちも、そのことを説き続けてはいるのですが……」

『自尊心の強い輩でう。人に良いように使われることに強い拒否感を持つておる。騎士でありながら、己にしか剣を捧げぬ』

『テンスの方はそうでもない……というよりエースに付き従っているだけです。エース……私たちのリーダー格の者ですが……』

リーダー……確かに、希冴姫たちにはリーダーがいなかった。我々の強い希冴姫が比較的リーダーシップを取ってはいったものの、どちらかと言うとジャックやキングが希冴姫に振り回されていた印象が強い。

「お前たちは、五人で一括りなのか？」

「そうですね。わたくしたち切り札の騎士は、元々五人で一つの部隊。三銃士と呼ばれてはおりますが、元々は切り札の五人衆。王の身辺警護を主任務とする王族親衛隊。それがわたくしたち切り札の^{トランプ・ナイト}騎士達」

完全に初耳な話ばかりだ。

『先ほど希冴姫も申しました通り、我らは仕えてこそその騎士。主様であれば、エースもわかってくれるのではないか。そう考えた次第です』

「いや……あんま過大評価されても困るが」

『ほっほ。何よりエースは女子。主なれば陥落は容易かるう』

「……一気に行く気が失せたぞ。キング」

『いえ……実は私も同じ意見でして』

「お前だけは信じていたのに！」

なんてことだ。ジャックまで俺をそんな目で見ていたのか。

「……わたくしとしては、実に不本意ですが」

『ここだけの話じゃが、ここまで主に話すのが遅れたのは希冴姫が散々にゴネておったからで……』

「キング殿！」

キングの暴露に希冴姫が反応して悲鳴じみた声を上げる。

『主様には、そういった資質があるのですよ。我ら精霊を惹きつける……そう、魅力のようなものが』

そう言われても。精霊限定のチャーム放っているとでもいうのか。

『まあ、ぶっちゃけそんなところじゃの』

……嬉しくない。

「……キング殿。でたらめはおよしくください。わたくしが、その……お慕いしているのは、そんな不確かなものではなく……」

『あー、あー、ようわかつとる。人柄心根、ついでに容姿と。お主がベタ惚れで主のあらゆるところを絶賛しまくつとるのはようわかつとるよ。まったく、惚気を聞かされ続ける身にもなつて欲しいもんじゃわい』

「キング殿！」

真つ赤になつた希冴姫が絶叫する。俺はといえば恥ずかしいような嬉しいようなむず痒い気分だ。

『……まあ、チャーム云々はともかく、魅力については本当のことですよ。私も、彼女らが心を開くとすれば主様以外にないと思つています』

「……そんなに持ちあげなくても行くつて。お前らとこれから戦い続けていく以上、そいつらの協力も欲しいところだからな」

希冴姫たちも困っているつて話だし、行かない理由もない。

「でしたら、すぐにでもご用意を。別段一刻を争うと言うほどではありませんが、早いに越したことはありませんもの」

それはもちろんだ。幸い今日は休日だし、アテナとの約束もない。

「まあ、準備するって言ったってデュエルディスクくらいだろ」

「そうですね。彼らとはデュエルすることにもなるかもしれませんわ」

「デッキはどうする？ お前たちのデッキを使えばいいか？」

「……いえ、むしろセツ様の本気。ヴァンダルギオンをお使いになつてくださいますし」

「なに？」

それでいいのか？

『主様のお姿。その在り方を彼らに示す必要があります。何より、ヴァンダルギオンを従えた主様のお力を見せること。それこそが大切になるでしょう』

「……なるほど」

ジャックの言い分も尤もだ。

「よし、わかった。……うん。準備できたぞ」

『では、参りましたよう。精霊界への行き方はわかりますか？』

「えーっと、強くイメージすればいいんだっけ？」

『うむ。主なら、それだけで精霊界への扉が開かれよう』

イメージ、イメージ……。

『よう！ 呼んだかい？ このサイクロイド様を！』

……雑念が混じった。どれだけあいつの印象強いんだ俺。

思い浮かべるのはあの筋骨隆々な立ち姿。俺がデッキを変えるきっかけを作ったあの男。

『なんとというか……主様は基本人物を対象にモノを捉えるのですね。横からジャックのそんな言葉が耳に届く。』

「……俺にとつては、人がいて、世界がある。世界があつて人がいるんじゃない。そう思っているからな」

人は世界に囚われない。どんな世界でも俺は俺だし、きつとジャ

ツクたちだつてそうだろう。俺は世界を想像できない。だから、そこに住まう人を想像する。

そして……。

「できた……」

俺たちの前には、いつか見た扉が現れていた。見た目的には魔の扉に似ている。俺の想像で作った扉だからだろうか。

「……なら、どこもドアを想像したらその形で出るのか……?」

「セツ様? どこかお加減でも?」

「ああいや、何でもない。ただの戯言だ」

心配そうにこちらを見つめる希冴姫にそう返し、俺もその扉を潜った。

「うおっ!?!」

俺が久しぶりの精霊界に足を踏み入れて、最初に聞いたのはそんな声だった。

「き、きやあああああ!?! な、なんて汚らわしいモノを露出しているのですか貴方は!?!」

「ちょ、ちよつと待て、そもそもお前らがイキナリ……っーかセツの奴だつて同じモノを持つて……」

「問答無用! 切り捨てますわ!」

「ま、待てえええええっ!?! そんなことをしたら多くの我のファンが嘆き悲しむことに……」

……着替え中だったらしいネイキッドの私室。というより丁度ポージングの最中だったらしく……おえっ。

「せ、セツ! お前さんからも姫さんになんとか……というよりこの状況の説明をだなあ……」

「あ……すまん。暴走状態の希冴姫を止められる自信、ないや」
だから、すまん!

「お、おいしいおいしいっ!? 手を合わせてないで姫さんを……」
「そ、そんなモノをブラブラ見せびらかさないでくださいまし!」
「うむ。実に目に毒。腐る。」
「ならせめて着替える時間を……」
「隙アリですわ!」
「はおっ!?!」
チーン…… (擬音)。

その後、著しく気分を害したらしい希冴姫を自室に戻し、俺はネイキッドの看病ついでに説明を行っていた。

「……なんつー人騒がせな」

「あー……すまん」

鞘で手加減抜きに打ち据えられたダメージは如何程のものだったろう?……想像するのは自分にも良くないので思考を停止。

「んで? あのエース殿やテンスのアホをひっ捕らえに来たと?」

「その表現には語弊があるが……つーか、やっぱり知ってるのな」

「これでも古株だな。姫さんたちが切り札の騎士隊の頃から我は將軍であつたし」

「……ホントに古参だな」

そのネイキッドが一体どの面下げて一兵卒だなどと言つたのか。

「まあ、確かにエース殿は姫さん以上に頑固者で一本気な女だったよ。昔から姫さんとは反りが合わなくてなあ」

「……まあ、希冴姫は人の好き嫌い激しいからなあ……」

「いや、我の見たところ、むしろ問題はエース殿の方にあつた様だぞ? 常に突つかかっているのはエース殿であつたし……」

「マジか」

それは流石に予想外。いや、希冴姫が悪いと思つていたわけじゃ

ないが、突つかかると言うなら希冴姫の方からでもおかしくないと思っていたのも事実だ。

「まあ、お前さんなら大丈夫だろう。この我も思わず惚れこみかけた男だからな！」

「え……」

ツツーっとな身を引く。まさかこの男、ルインに相手されないからってだ、だん……。

「待て待て待て！　そういう意味ではない！　純粹に人間性にという意味だ！」

「そ、そうか……いや、さっき衝撃映像見たばかりだったから……」

「あれはお前さんらの所為であろうが……」
確かに。

「と、ところでセツ」

「うん？」

「ルイン殿は……今回一緒ではないのか？」

「あ……」

筋肉男が縮こまってもじもじしている様子が気持ち悪くて吐きそうです。

「ルインは留守番……っていつかなんていうか」

そういえば誰にも言わずにこっち来ちゃったな！。アテナとかまた心配してないといいけど。

「そ、そうか……残念だ」

だから、その図体でシユンとするな。怖気が走る。

「あ、でも……」

そのルインについての朗報があったんだった。

「なんだ？」

「ルイン。笑ったよ」

「……」

俺がそう言くと、ネイキッドはしばらく何を言われたのかわから

ないという風にポカンとしていたが、やがて大きな声で笑い始めた。
「はっはっはっ！　そうか、ルイン殿は笑ったか！　そうかそうか
！　はっはっはっ！」

ネイキッドは本当に嬉しそうに膝を叩いて笑った。

「それは、本当に目出度いことよ。惜しむらくは、我がその笑顔を
拝謁できんかったことくらいか」

「心配すんな。またいつでも見れる」

あいつは、すぐに笑顔を取り戻すから。

「俺が、取り戻させて見せるから」

「よく言った！　よし、ルイン殿はセツ、お前さんに任せたぞ！

何としても、幸せにしてやってくれい！」

そう言ったバンバン肩を叩いてきた。……痛っ！　痛いつて！

「っ、っーかお前はいいのかよ。好きなんだろうが！」

俺の問いに、ネイキッドはちよつと表情を歪めるが、すぐに遠い
目をした。

「何を言っている。我が望むは、ルイン殿の幸せ一つ。何十年と共
にいて、笑顔の一つも引き出せなかった我に、それを為すことはで
きん」

だからこそ、それができる者に全てを託すのだ。

そう言つてネイキッドは笑った。

「……ったく、お前もつくづくいい男だな」

「当然だ。我はこの国の將軍ぞ」

そしてまた、二人して笑う。本当に……こいつとは仲良くなれそ
うだ。

「おお、そうだ忘れるところであった」

「ん？　どうした」

「近々、我もそちらに行くぞ」

「こつちつて……人間界に？」

「うむ。いや何。我のマスターが今度、セツと同じアカデミアに転
校するでな。我もそのパートナーとしてそちらに向かうことになる

う

「マスター？ お前、誰かの精霊だったのか？」

「まあな。何、少々誤解されやすいが、気の良い御仁だ。お前さんとも仲良くなれることだろう」

「お前と同じってわけだ」

誤解されやすくして気のいいやつ。正にコイツそのものだ。

「はっはっはっ！ 違うない！」

「んじゃ、そいつに伝えといてくれよ。アカデミアに来たら、デュエルしようぜってさ」

「承知仕った！ いやしかし、本当に気が合いそうではよりだ」

「ん？」

「我もマスターにセツの話したらな。あ奴も、セツと同じことを言っていた。『俺がそっちに行ったらデュエルすんぞ。首洗って待ってけ』とな」

……はは。

「んじゃ、楽しみに待ってる、とだけよろしくな」

「任せておけ」

そして俺はネイキッドと軽く拳を打ち合わせ、ネイキッドの部屋を後にした。

「あ……」

ネイキッドの部屋を出て、希冴姫の部屋に向かうと途中で何故かルインと遭遇した。

「ルイン？ お前どうしてこっちに……」

「私は、墓参り」

「墓参り？」

「正確には、墓じゃないけど……」

その言葉を聞いて俺はピンときた。

「ルインの世界か」

「……そう」

「……吹っ切れたのか？」

「……まさか。そんな、すぐには無理」

「だよな」

流石に、何年も積み重ねた哀しみが、すぐに癒されるということはない。それでも、ルインの表情は今までと比べてどこか柔らかく、幽かに微笑んでいるようにも見える。

「キミは、どうしてここに？」

「ああ、希冴姫たちの頼みでな。アルカナの剣を手に入れるために、な」

「ああ……」

「ルインも知っているのか？」

「伝え聞く程度。詳しくはない」

「そうか……」

ルインも来るか？ と聞こうとしたが、ルインは先に断ってきた。

「これは、キミと騎士たちの問題。私は口を挟まない」

「……随分物分かりがいいな」

いつもなら希冴姫たちに反対されようとも着いてくるような奴だが。

「デートとかなら邪魔するけど」

その人にとって本当に大切なことを邪魔はしない。ルインはそういった。

「その代わり……」

「ん？」

「今度、私の墓参りにも付き合って欲しい」

「……ああ」

ルインとも別れようとした時、ふと思い出した。

「そうだ、ネイキッドの奴が心配してるみたいだから、顔出してきてやれよ」

「……えー」

「えーってお前」

露骨に嫌そうな顔をするルイン。

「冗談。偶にはいいかも」

「……ったく」

「軽くからかって遊んでくる」

「哀れネイキッド……」

ルインに玩具程度にしか認識されてないのな……。

「あいつ、いいやつなんだけどなあ……」

「私が好きなのはキミ」

そついうことをサラツと言わないで欲しい。

「何より筋肉キライ」

「哀れネイキッド……」

結局はそこに帰結するのか……。

「じゃあ、今日はそついうことで」

「……ああ、せめて程々にしてやれよ」

「了解。軽くからかうだけに留める」

そついつてルインはあっさりと身を翻してネイキッドの部屋に向かつて行った。

「玩具的には、気に入ってるみたいなんだがなあ……」

どうしたって恋愛には発展しそうにない。いや、俺がこんなこと考えるのはどつちに対しても失礼か。

「まあ、ともかく今は希冴姫だな」

ジャックたちとも合流しなければならぬ。そして神殿だ。

「うっしっ！」

俺は改めて気合を入れ、もうすぐそこにある希冴姫の部屋へと向かった。

「……希冴姫、機嫌直つてるといいんだけどなあ」

淡い期待とまあ無理だろうなという諦観を胸に、俺は希冴姫の部屋の扉をノックするのだった。

第二期第六話「アルカナの剣 前編」(後書き)

あ、あれ？ 希冴姫回のもりがルインで締めた……？ ネイキ
ツドイベントといい、ルインのヒロイン化が止まらない……！？

と、ともかく、パワーアップイベント開始。オリカの登場も匂わ
せて、何よりようやくタイトルに物語を絡ませることが出来ます。

……うん。間話とかいいながら本編だよねこれ。十代がネオス手
に入れるレベルの大イベントだよな。

そしてカイナさんから提供頂いたオリキャラ登場の伏線も張りま
した。とりあえずこれで剣士くんも出せるでしょう。カイナさん、
お楽しみに。

新キャラだのオリカだので割と忙しい後編も、なるべく早く書き
上げるつもりです。こうご期待(ハードル上げ)。

それでは、レーネスでした！

第二期第七話「アルカナの剣 中編」(前書き)

すみません。伸びました。えっらい長くなった挙句またデュエルしてません。マジですいません。するする書けたんですがその分話が膨らむ膨らむ。

と、とにかく中編です。どうぞ。

第二期第七話「アルカナの剣 中編」

アルカナ（切り札の騎士）

第二期第七話「アルカナの剣 中編」

「ぐすつ……………」

「あー希冴姫？ そんなに落ち込むなって……………」

「あんな……………あんな汚らわしい……………筋肉の……………」

精霊界では筋肉って需要ないんだろっか。シャルナとかも同じようなこと言ってたし。

「……………ジャック」

「はあ……………仕方ありませんね」

俺にはちよつと処置なしだ。ここは希冴姫第一人者のジャックに任せよう。

「主ももうちつと希冴姫のことを任せられるようにならんとっか」

「面目ない。何分近くにいたのがさだめ（エロ）だったりするから、こっぴどい落ち込み方されるとどうすりゃいいかわからん」

あいつはむしろ積極的に覗いて舌舐めずりするタイプだ。

「まったく……………これからエースたちのところに行こうというのに、前途多難じゃ」

やれやれとキングが見つめる先では、ジャックが希冴姫を慰めている光景。

「いいですか？ 男性というものには必ず件の器官が存在しています。もちろん私にも、主様にもです」

「それは……理解しているつもりですわ」

「はい。ですから、こう考えてください。耐性をつけた、と」

「耐性？」

「希牙姫、例えば貴女が、首尾よく主様の御心を掴んだとしましよ
う」

「セツ様の、御心を……ほう……」

希牙姫の頬が淡く色付く。

「その交際が順調に進めば、やがてはあの部位を目にする機会も……
」

「せ、セツ様の……ほう……」

「その時、もし今日のような失態を犯してしまったらどうします？
嫌われるだけならいざ知らず、下手をすれば主様の未来までも奪
いかねないですよ」

幸い、ネイキッドの未来は奪われずに済んだが。

「わ、わたくしは……」

「ですから、そうならぬ内に耐性をつけることができたと考えまし
よう」

「そ、そうですね……筋肉の未来なぞ別段問題ありませんもの」

おーい結論がおかしいぞー。

「い、いえそうではなく……」

「……そう、貴女の言う通り」

「ルイン殿！？ 何故ここに……」

「野暮用」

「ルイン……お前、ネイキッドは？」

「……案外脆かった」

「ネイキッド……！？」

「冗談」

「心臓に悪い！」

「事の顛末を聞き出した。……正直後悔した」

まあシヨッキング映像想像しちゃったんだろうな。無理もない。

「ワイセツ物陳列剤を適用。極刑が妥当」

「妥当じゃないから。不幸な事故だから」

「……業務上過失暴行？」

「そんな罪名はない。あと、業務上じゃないし過失したのは俺の方。そして暴行を加えたのも希冴姫だ」

「精神的凌辱による慰謝料請求は？」

「……なんだ、法律にでもハマってんのか？」

「罪を被せようと思って」

「お前の嫌がらせは性質が悪いんだよ！」

「あれはいい玩具」

「すまんネキッド俺がルインにお前の部屋に行くよう勧めたばかりにー！」

「言い直す。あれはいいパシリ」

「ネキッドローラー！」

恐らくルインの頼みなら躊躇わずにパシリでもやったのであろう將軍を想い、俺はこの国の未来に絶望した。

「……ほれ、いつ終わるとも知れん漫才はそこまでにせい。希冴姫も立ち直った様じゃし、そろそろ出発するぞい」

キングが常識人に見える。不思議だ。

「うむ……わしも自分の立ち位置を色々模索しておつての……ただ煽るだけならルインがおるし、ボケに走ろうにも時代がわしについてこん。残された道はツツコミしかなかったのじゃよ……」

切実な悩みだった！

「……まあ、ホントにこれくらいにして行くか」

「移動手段は？」

「サイクロイドじゃなければなんでもいい」

「……そこまで嫌いますか……」

「そう遠くにあるわけでもありません。徒歩で構いませんわ。セツ様は、それでよろしいですか？」

「サイクロイドじゃないからそれでいい」

「苦手意識が根付いとるのう……」

「いつてらっしゃい」

「おう。ルインも、気をつけてな」

「私はもう帰るだけ」

「んじゃ、アテナたちによろしく」

「ん」

にぎにぎと手を開いて閉じて挨拶してくるルインに同じく返し、俺たちは一路アルカナ神殿へと向かった。

希冴姫たちと一緒にだからか知らないが、道中特に盗賊の類に襲われることもなく神殿へと辿りついた俺たち。アルカナの神殿と聞いてどんなものか楽しみをしていた俺は、実物を見て絶句した。

「結構、きらびやかなんだな」

そう、きらびやかなのである。あらゆるところに金銀財宝が散りばめられたどの神殿は、俺の想像を遥かに超えた威容を持って俺を迎えた。ぎんぎらぎんにさりげなく

「アルカナ……わたくしたちを司る四つの力。即ちスペード、ハート、クローバー、そしてダイヤ。ダイヤは中でも財宝を表すファクター。このくらいのもものは至極当然ですわ」

「こんな豪華絢爛な神殿、盗賊だったら格好の的だと思うんだがなあ……それだけ守護者が優秀ってことか……」

「まあそれもあります、何よりこういった精霊の象徴たるものはその精霊に認められなくば、聖石から魔石へと変貌します。盗んだところで己が身を滅ぼすだけなのですよ」

「いわば、財宝そのものが最大のトラップなんじゃ。鉄壁じゃろ？」

「へえ……」

「セツ様でしたら呪われることはありませんし、何ならどれか持ちかえりますか？」

「いや、いい。俺自身特に興味もないし……誰かにプレゼントした
りもできなさそうだしな」

「そうですか。でしたら……」

何かを思いついた風に希冴姫が辺りを物色し始める。

「何してるんだ？」

「んしょ、つと……あ、いえ。それでしたらわたくしがセツ様にプ
レゼントいたしますわ」

「希冴姫が？」

「はい。わたくしこれでも細工の腕には自信がありますの。まあ、
セツ様には敵う気がいたしませんけど……」

「あーいや、そういうえば細工には特に手を出してなかったな。嬉し
いよ」

これは事実だ。生活の延長やさだめ関連でなければ特に手を出し
てはいない。精々がカオス・ソルジャーコスとかの仕上げにやるく
らいだ。

「そ、そうですね？ それでは……是非とも受け取ってくださいま
し。わたくし、日頃の感謝を込めて精一杯作らせていただきますわ」

そういう希冴姫の顔は年相応の少女のように可愛らしく、姫の名
が相応しいほどに華やかなものだった。なんて言っただろう。花が
咲く前の蕾のようでありながら、可憐に咲き誇る薔薇のようでもあ
る。矛盾を孕んだ綺麗な笑顔。

「……ダメだな。俺に詩人の才能はないらしい」

今自分が考えたことが恥ずかしくてたまらん。こつ言ったことを
真顔で詠えるようでないし詩人にはなれなさそうだ。いや、別に詩
人を目指しているわけでもないが。

「やりおるのう希冴姫。主はすっかり動揺しておるぞ」

「ええ。今のは大分ポイントを稼げたようですね」

「そ、そんな……わたくしそんなつもりは……」

「嬉しそうじゃの」

「まったくです」

「え、ええい！ それよりもさっさと入るぞ！ いつまでも入り口で駄弁つてても仕方ないだろ！」

「……まったくだ。久々の狼藉者が。まさか我が前で睦言を交わしに来たのでもあるまい」

「っ！」

突如聞こえた俺たち以外の声に、俺は慌ててその声の方を見た。

「……よくも抜け抜けと我が前に姿を現せたものだ。三銃士」

感情の籠らない、伶俐な声音。その声音に相応しい氷の瞳。ショートカットの銀髪が幽かに風に揺れていた。

「お前が、エースか？」

希冴姫たちと比べ、大分軽装だ。白銀の胸当てこそ身につけてはいるが、希冴姫たちほど物々しい鎧ではない。

「貴様に語る舌は持たぬぞ。人間」

「……」

なるほど……人間嫌いは伊達ではなさそうだ。明らかに取り付く島もない。

「エース。この方はわたくしたちの主、セツ様ですわ。それ以上の侮辱はお止しくださいませ」

「近頃の主従は睦言を交わすのか。随分と愉快で不快な世になったものだ」

「っ……！」

カッと顔を赤くする希冴姫。こりゃ相当だな。

「エース……」

「……ジャックか。貴様も相変わらず、クイーンの犬か？」

「そんなつもりはないのですが……」

さしものジャックも苦笑気味だ。

「まったく……ちいっと見ぬ間にまーた石頭に磨きがかかるとるよ
うじゃのう」

「そう言う貴方はお気楽蜻蛉な鳥頭に磨きをかけられたようで」

「ほっほ。こりゃ一本取られたかの」

「エース。私たちは……」

「要件なぞ、聞くまでもない。手を貸すつもりも、剣を渡す気もない。とつとと世俗に塗れて溺れ死ね」

「お前ら、仲間じゃなかったのか？」

「思わずそんなセリフを口にしてしまう。それほどにエースの口調は過激だった。

「二度は言わぬぞ。人間」

「あー、語る舌は持たぬ、だっけか」
なるほど徹底している。

「けど、少なくとも神殿からできてここにいるってことは、希冴姫たちとは話す気があるんだろ」

「……」

無言。凶星かどうか、そのポーカーフェイスからは何も読みとれない。

「どうなのです？ エース」

「……希冴姫なぞ、我は知らぬ。どこの誰だ」

あ、そついや希冴姫に名前つけたことも知らないんだつたか。

「俺が付けた」

「貴様に聞いた覚えはない。口を閉じる」

ハハ……はあ。流石に強敵過ぎる。ここまで頑なだとは……。

「わたくしの名ですわ。セツ様に頂きました。自慢の名です」

「そうか。そこまで堕ちたか」

絶対零度の瞳はまるでその勢いを緩めない。心底から希冴姫を嫌っているのか。

「色欲に溺れ、騎士の誇りはおろか精霊としての矜持すらもなくしたか。哀れだな」

流石にカチンと来たらしい希冴姫が厳しい顔で反論する。

「愛も知らぬ小娘が、よくいいますわ」

ぶつつ、と何かがキレる音。

「黙れ騎士の名を汚す尻軽が。娼婦にまで身を墮としたか」

またぶちつ、とキレる音。

「尻軽……？ わたくしがどんな葛藤と精神的高揚を持って愛を感じているかも知らないで……」

「貴様の心情など知るものか。事実貴様が人間の男ごときに尻を振って媚びているのは事実だろう。なんだ？ 抱かれたか？」

こいつ、言葉を選ばねえな。

「どこまでセツ様を侮辱すれば気が済むのです……！」

「おや、我は貴様を侮辱したつもりだが。人間の男などどうでもいい」

「それが侮辱だというのは……！」

遂に希冴姫が抜剣した。

「凶星を突かれて逆上か？ みつともない」

「黙りなさい！」

希冴姫が斬りかかろうとしたその間に、重装備の騎士が割って入った。

「……」

騎士は無言。自らの剣を受け止めた騎士を見て、希冴姫が苦々しげに吐き捨てる。

「テンス……」

「突っ込むことしか知らんのか。その上相も変わらずの儀式剣術。

素直に鞭でも持ったらどうだ？ 貴様はそちらの方がよほど達者だろう？」

「エース……！」

「希冴姫」

「ジャック殿……」

「落ち着いてください。エースもそうですが、頭に血が上ったまま何かを為せるはずありません」

「……ふん」

「……そうですね」

「希冴姫。あいつとはいつもこうなのか？」

「大概是。わたくしも……まああまり好きではありませんが、エースはわたくしを目の敵にしていますので」

「実力もなく我儘放題のお飾り姫を好く趣味はない」

「そういうお前は言いたい放題だな」

流石に腹立つ。とはいえ……。

「仏の顔も三度までだ人間」

「んで、なんだかんだで話はしてくれるんだな。やっぱりお前、割と良いヤツじゃないか」

徹頭徹尾無視で無関心というわけではない。どちらかといえば……。

「なんか戸惑ってないか？　もしかして、人間と話すの初めてか？」

「……口だけは回る下衆か」

「そう言うお前は、何気に人見知り激しいシャイガールか？」

「……」

苦々しげにこちらを睨みつけるエース。

「人間が我らの話に口を挟むな。目障りで耳障りだ」

「人間も精霊も大差ないだろ。なんでそんなに拘るよ」

「何も知らぬ人間は黙っている」

「知らないから、知ろうとしてるんだろ」

「貴様が知るところではない」

「そういうわけにもいかないな。いわれもなくただ嫌われてますじや納得いかない」

「貴様の納得等知るものか」

「んじゃ、お前の考えも知らないな。教えてくれ」

「断る」

「断ることを断る」

「断ることを断ることを断る」

「断ることを断ることを断ることを断る」

「断ることを断ることを断ることを断ることを断る」

以下エンドレス。

二時間くらい経って、流石にお互い不毛であることに気付いた。いや、もつと前から気付いちゃいたんだが、半ば意地だな。一人の断る発言だけで十分くらい経つようになったし。

「はあ、はあ……で、教えてくれ」

「ぜえ、ぜえ……断る」

わーお……。

「断ることを断る」

「断ることを……」

「無限ループさせるつもりですか!?」

「口を出すなクイーン。最早これは意地だ」

「同感だ。この頑固頭をどうにかするまで譲る気はない」

「一生粘るつもりか貴様」

「お前こそ、一生気張るつもりか?」

ピクピク……。

「我が考えを変えろと思っただかこの粘着男!」

「変えるまで動かねえってんだよこの岩石頭!」

思い切りお互いの頬を抓る。

「ぐぎぎぎぎ……」

「うぐぐぐぐ……」

「あ、あああああ?」

「これは……少々予想外でしたが……」

「ある意味心を開くことには成功しておる気がするがのう」

「いやあ、実際ここまで子供っぽいエースは初めて見ますよ。テン

スもそうでは?」

「……知らぬ」

「こぶおぶあるー! (断るー!)」

「こっひこそこぶおぶあるー! (こっちこそ断るー!)」

「まーだやっとなるわい」

「どちらも目的を忘れてますね」

「セツ様のお顔が……おのれエース……!」

「こつちはこつちで頭が痛いろう」

「希牙姫。主様は大丈夫ですから抑えて」

俺とエースの争いはすでに泥仕合、というかドッグファイトの様相を呈してきていた。

「目潰し！」

「何の！ カウンター！」

「あたたつ！？ 女の髪を引っ張るとは何様だ貴様！」

「執拗に急所攻撃してくるお前に言われたくない！」

「急所狙いは戦では常識だ！」

「じゃあ戦じゃ男も女もないだろ！」

「あつ！？ 貴様胸をつ！ 胸を触ったな！？ どさくさ紛れになんて奴だ！」

「胸当てに当たっただけじゃねえか！ ノーカンに決まってるだろ！ あんな硬いモン触って何が嬉しいってんだ！」

「誰が貧乳だ！」

「胸当ての上からだつつつたるボケ！」

「あんなものあつたつて重たくて肩が凝るだけで戦場じゃ邪魔にしかならん！」

「だからそんなこと言ってないだろうが！ いつからそんな話になった！？」

「……そろそろ止めましょうか」

「うむ……ほれ二人ともその辺に……」

「「引つ込め爺！」」

「……お呼びでない。わし、お呼びでない」

「……自然に止まるのを待ちますか」

「気付いたら二日後、とか普通にありそうですねよ？」

「まあ流石に体力の限界があるでしょうし……」

結局、お互いに体力が尽きてデュエルで決着をつけようと至極真つ当な結論に達するまで、また丸々二時間を要したのだった。

第二期第七話「アルカナの剣 中編」(後書き)

エースが……エースがセツはおるか僕の予想を超えて頑固だったもので……伸びました。そしてなんだかんだでセツと相性は良さそうなエース。そして二回しか、それも言葉自体は一言しかしゃべってないテンス。目立ち方に差が大きい。まあ元々テンスは無口設定ですが。なのはでいうとザフィーラの立ち位置ですが。

新キャラオリカのエース。銀髪ショートの書かれてませんがレイピア持ち。男装が似合いそうな女の子です。

次回やっときさ、今度こそデュエルです。流石にもう伸びないと……いいなあ(遠い目)。

そ、それでは、レーネスでした！

第二期第八話「アルカナの剣 後編」(前書き)

うん。なんなの？ 死ぬの？ と言わんばかりに一日二話更新です。

一応終わりはしましたが予定とは大幅にずれた終わりかたになりました。

なんでしょうね。僕、プロットとか立てても自分でガン無視します。キャラが勝手に物語をガンガン進めてっちゃいます。作者すらおいてけぼりです。

オリカも出ますが、実はデュエルは諸事情によりおまけです。それよりも大事なやり取りをセツとエース。いえ、その場の全員でやっているのです、そちらの方にも注目していただければ。

では、どうぞ！

第二期第八話「アルカナの剣 後編」

アルカナく切り札の騎士く

第二期第八話「アルカナの剣 後編」

壮絶なドッグファイトを終えて、俺とエースはデュエルディスクを構えて対峙していた。

「ぜえ、ぜえ……覚悟はいいな、人間」

「はあ、はあ……お前こそ」

お互いなんかもうボロボロだ。整っていた銀髪も乱れに乱れ、抓られ過ぎてちよつとむくんでいるほつぺたも真っ赤。まあ、それは俺も同じだろうが。

「……で、元は何の話だったか」

「………忘れた。つかどうでもいい」

「同感だ」

「どうでもよくありませんわよ………」

呆れたような希冴姫の声。

「ああ、そうか。我らが力を貸すとか貸さないとか………剣がどうい
うという話だったな」

「………ああ、そうだったか」

「ふん………まずは力を見せる。話はそれからだ」

「こつちは端からそのつもりだよ」

「「デュエル!!」」

「先攻は貰うぞ。我のターン! ドロー!」

さて、どんなカードを使ってくるのか……完全に未知数だな。

「我は魔法カード『天使の施し』を発動する！ デッキからカードを三枚ドロロー！」

割とメジャーなカードを使う。

「そして、カードを二枚捨てる……この瞬間、墓地に送られた『切り札の（トランプ・）騎士^{ナイト} エース』の効果を発動する！」

「なに！？」

いきなり自分を墓地に？ しかもそれで効果起動？

「『切り札の騎士^{トランプ・ナイト} エース』が手札から墓地に送られたとき、デッキからカードを一枚ドロローする！」

ドロロー加速！？ 『天使の施し』と併せてアドバンテージ確保か！

「そして永続魔法『ポット』を発動する！」

「『ポット』？」

知らないカードだ。

「このカードは発動時、お互いに500ポイントライフを支払う
セツ・エースLP3500

「この時このカードにはチップカウンターが十枚乗る」

チップカウンター……一体どんな効果が……。

「そしてモンスターを一枚セット。ターンを終了する」

「……俺のターン、ドロロー！」

「スタンバイフェイズに『ポット』の効果発動！ そのターンプレイヤーはライフを100ポイント単位で支払わなければならない」

「何？」

「さあ、ライフを支払え」

「……100ポイント」

セツLP3400

『ポット』にチップカウンターが一つ乗る。

待て……このシステムどっかで……。

「どうした？ 貴様のターンはまだ始まったばかりだぞ」

「……俺はモンスターを守備表示でセット。カードを二枚セット。

ターンエンドだ」

「攻撃しないか。まあいい。私のターンだ」

『ポット』の効果不明瞭過ぎる。こういう時相手のカードしっかり確認できないこの世界は不利だな。

「私はスタンバイフェイズにライフを……そうだな私も100、支払おう」

エースLP3400

『ポット』にチップカウンターがさらに一枚。これでもう十二枚にもなった。

「我は手札から『忍者マスター SASUKE』を攻撃表示で召喚」

「カウンター罠『昇天の角笛』！ 俺のフィールドのモンスターをリリースして『忍者マスター SASUKE』の召喚を無効にして破壊する！」

「何!？」

「そして俺のリリースしたモンスターは『クリッター』！ デッキから攻撃力1500以下のモンスターを手札に加える！ 俺が加えるのは『シャインエンジェル』！」

「ふん……我はカードをセットしてターンを終了する」

「俺のターン、ドロー！」

「『ポット』の効果だ」

「……100ポイント」

セツLP3300

「なんだ。みみっちい。肝の小さい男だ」

「効果もロクにわかんねえのにライフを早々払えるか。つーかお前だって同じだろ」

「それもそうか。まあいい。続ける」

「……俺は『シャインエンジェル』を守備表示で召喚。カードを一枚セットしてターンエンドだ」

「私のターン。ドロー！ 我はライフを今度は200支払おう」

エースLP3200

『ポット』に乗ったチップカウンターは十五。一体この大量の力ウンターで何をするつもりだ。

「行くぞ！ 我は手札から『レイズ』を発動！ ライフを500支払ってデッキからカードを三枚ドロウする！」

エースLP2700

またドロウ加速……そしてまた『ポット』にカウンターが乗った。『レイズ』はフィールドに『ポット』が存在する時、500ライフを支払い発動することができる。そして『ポット』はライフコストをチップカウンターに変換する」

段々分ってきたかもしれない。『ポット』にチップ。更に『レイズ』そこに彼女らが切り札の（トランプ・）騎士^{ナイト}であることを考えれば……。

「ポーカーか！」

「ようやく気がついたか。愚鈍め」

間違いない。エースのデッキはあたかもトランプのポーカーのごときカードがひしめいている。そしてポーカーであるならあのチップカウンターは……。

「我は『放浪の勇者 フリード』を召喚！ 守備モンスターを攻撃する！」

「くっ……『シャインエンジェル』の効果を起動！」

「チェーンだ。モンスターを戦闘によって破壊したことにより『ポット』の効果を起動！ 『ポット』に乗っているチップカウンターの数×200ポイントライフを回復する！」

「マジかよ……」

ポーカーの賭けに勝った、ってことかよ！

『ポット』に乗っていたチップカウンターは二十。ってことは……。

「我はライフを4000ポイント回復する！」

エースLP6700

一気にとんでもない量のライフを回復しやがった。くそ。これじ

や迂闊にリクルーターは出せないな。

「俺は『シャインエンジェル』の効果でデッキから『救済のレイヤード』を攻撃表示で特殊召喚する」

「雑魚を並べたか……我はこれでターンエンドだ」

「俺のターン！ ドロー！」

とにかく相手モンスターを戦闘で破壊すればそれまで蓄積された大量のライフアドバンテージを得られる。あえて自分のターンに大量にチップを乗せ、相手の攻撃を誘う。色んな戦術が取れる良いカードだ。こうして大量にライフを稼がれると自分も……と心のどこかで考えることもあるだろう。

「本物のポーカーさながらの、心理戦だな」

とは言え、そもそも自分から攻撃するのに向いてないこのデッキだとそれも難しい。

「俺はスタンバイフェイズに、ライフを100ポイント支払う」

セツLP3200

「チップカウンターが一枚乗るぞ」

さてどうしたもんか。ニターン目、俺のフィールドがから空きになったにも関わらずエースのセットモンスターは攻撃してこなかった。とするとリバーモンスターか、それとも攻撃に向いてない守備要員なのか。

『ポット』の特性を考えれば後者の可能性が高く感じる。俺が知っている四つ星以下最強の守備力は2700。『アテナ』のような最上級でも攻撃が通らない場合だつてある。とすると表側攻撃表示の『放浪の勇者 フリード』狙い。だが……。

あいつは大量にハンド・アドバンテージも稼いでいる。『放浪の勇者 フリード』は光属性。今エースの手札に『オネスト』がある可能性は決して捨てきれない。

「どうした？ 随分と悩んでいるな」

奴の表情は読めない。さっきも考えた通り、大したポーカーフェイスだ。

「今は……耐える！ 俺は『豊穰のアルテミス』を守備表示で召喚！ カードを更に二枚セットしてターンエンドだ」

「私のターン、ドロ！ 我はリバーストラップ『チエック』を発動。このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分は『ポット』の強制効果を任意効果として扱うことができる。今回我はライフを支払わない」

十分なライフを得たからか、それとまたアルテミスを倒す手がないからか。どっちにしても……。

「チエーン！ カウンター罠『魔宮の賄賂』！ 『チエック』の発動と効果を無効にして破壊する！」

「何っ！」

本当はあんなどうでもいいトラップに使うもんじゃないが……。

「そして見せてやる。俺の力を！ トラップカードの効果をカウンターによってパーミッションした時、俺は手札からこのカードを特殊召喚する！」

「まさか!?!」

「そのまさかだ！ 出てこい！ 『冥王竜ヴァンダルギオン』！」

『ゴオオオオオオオオオオオッ!』

「くっ……まさかこの人間、冥界の主を精霊に……!?!」

「『冥王竜ヴァンダルギオン』第二の効果を発動！ 相手フィールド上のカード一枚を選択して破壊する！ 俺が選択するのは当然『ポット』!」

「くっ……我は『魔宮の賄賂』の効果によりカードを一枚ドロ……」

「カウンター！ 『強烈なはたき落とし』！ 今手札に加えたカードをそのまま墓地に捨てる！」

「馬鹿な……貴様」

「俺は『豊穰のアルテミス』の効果でデッキからカードを二枚ドロする」

「ちっ……だが、冥界の竜など勇者に討伐されるのが宿命！ 『放

浪の勇者 フリード』の効果を発動！ 墓地の『忍者マスター S A S U K E』と『サイレント・ソードマン L V 7』をゲームから除外し、このカードよりも攻撃力の高いモンスター一体を破壊する！」
サイレント・ソードマン？ 『天使の施し』か……。

「っ……冥界の王！ 闇は闇に還れ！」

一瞬何故か辛そうに顔を歪めたエースだが、迷いを断つとばかりに強く叫んだ。

「させるか！ 俺はもう一枚のカウンター罠を発動させる！ 『デスクショーン・ジャマー』！ 手札からカードを一枚墓地に送って発動！ モンスターを破壊する効果を無効にし、破壊する！」

「くっ！ このっ！ どこまでも邪魔を……！」

「エース！ お前にもう一度だけ聞く！ なんでそんなに人間を嫌う！ 過去の人間はお前たちに何をした！？」

俺は改めて尋ねる。ただ勝ったってダメなんだ。俺は、彼女たちの心に触れなきゃいけない。そうでなければ、力を貸してもらっ資格はない。

……そう、思っていた。

「……では……い」

「え？」

突然俯き、ぼそぼそと何事か呟くエース。聞き返すと、エースはキツと今にも泣きそうな顔で俺を睨みつけてきた。

「過去ではない！ 今だ！」

「なに……」

「精霊のカードだと！？ ふざけるな！ 我らは貴様らの道具ではない！」

「エース……」

「生贄だと！？ コストだと！？ 壁だと！？ 貴様らは我らをなんだと思っている！？」

「……」

「貴様らはいつもそうだ！ 我ら精霊をパートナーだと、口では綺

麗事を言いながら、すぐに私たちは使い捨てだ！ 我らは……人形ではない……」

「エー……」
「だから！ 我は貴様らに屈しない！ お前ら人間も一度死に臨んでみる！ その辛さも知らずに……もう、我らを……我らを殺すなあ……！」

エースの悲痛な叫び。

「何故精霊なんだ！？ 何故精霊のカードを使うことがある！？ ゲームがしたいならただの紙でも良いだろう！？ 精霊を殺し、墓地に送る意義とはなんだ！？ お前らは墓地の恐怖を知らない！」
カードも投げ捨て、狂ったように頭を抱えるエース。
「やめろ……やめろ、止めてくれ！ もう、嫌だ。嫌なんだ！……もう、止めてえ……」

遂には膝を着いて座り込んでしまうエース。そんな彼女に静かに近づく影が一つ。

「……デュエルは、俺が引き継ぐ」
「テンス……」

エースからデュエルディスクを外し、自らの腕に装着する。
「……俺は『切り札の（トランプ・）騎士^{ナイト} テンス』を攻撃表示で反転召喚。ターンを終了する」

テンスはあくまで冷静に、ターンの終了宣告をする。

……俺のターンだ。
しかし、俺はデッキに手が伸びない。

「……どうした。カードを引け」
「お、俺は……」
手が震える。

……エースの言葉が、心に鋭い棘のように突き刺さっていた。
「で、きない……」

「……何故だ。お前の目的は俺たちを同志とすることだろう」
「けど……けど……」

「Eー」スたちを使えば、俺は間違いなく彼女を殺す。墓地に送られることを恐れる彼女の力は、その墓地に行つてこそ意味を為す。なら……。」

「……続ける」

「無理、だ……」

「続けるー！」

「っ！」

声だけでぶっ飛ばかと思つた。それほどまでに大きな声だつた。

「力を見せる。お前を表せ。俺を、認めさせてみる」

「でも……」

「……俺を殺せ」

「っ!？」

「俺を殺して、お前は勝て」

「な、何を……」

「精霊使いとしての、覚悟を見せる。俺たちの、“王”たる器を見せる」

「何を……何を言つてる!? 俺に、これ以上お前たちを……希冴

姫たちを殺せつて言うのか!？」

「そつだ」

「な……」

テンスの口調は、あくまで静かなままだつた。

「嫌がる者を、従えることには反対だ。だが……奴らは違つ」

「テンスが見据える先には希冴姫たちの姿。」

「セツ様……」

「希冴姫……俺は……」

希冴姫は、特に多く墓地送りにした。戦闘で、コストで、融合のために。理由は様々だが、墓地送りにには違いない。

「セツ様。わたくしは、セツ様をお慕いしております」

「……え?」

「それが、全ての答えですわ」

「希冴姫……？」

「セツ様……セツ様になら、愛するが故の献身。死への恍惚。それがわかるはずですわ」

「愛するが故の献身……？ 死への……恍惚？」

「例えどんなに傷つこうとも、そのそばを離れずに、何時までだって共に居たいと望む……セツ様、本当に分かりませんか？」

「……さだめ。」

「きつと……エースは“普通”だったのでしょね。誰よりも人を嫌いながら、その心はどんな精霊よりも人間らしく純粹で……私たち精霊は、きつと……」

「誰もが歪んでいる。」

「主よ……」

「キング……」

「主は今、分岐点におる」

「分岐点？」

「優しさと思いやりに溢れた“神子^{みこ}”となるか。強さと厳しさを併せ持つ“王”となるか」

「神子が王か……」

「希冴姫たちを殺したくない。でも、それは希冴姫たちの“誇り”と“愛”を傷つける。それに、カードを墓地に送らない、なんて無理だ。希冴姫たちを使って、墓地に送らずに戦うなんて。」

「俺は……」

「……どうせ……」

「エース？」

「どうせ……貴様には“先”が見えているのだろう？ お前は、とつくの昔に選択している……」

「エース、貴女……」

「勘違い……するな。我は、力を貸す気はない」

「ああ……」

「ふふ……だが……」

精霊とドッグファイトする奴なぞ、貴様以外にいまい……。
エースはそれきり沈黙した。

「……………」
俺はデッキに手を伸ばす。

「セツ様……………」

「……………俺のターン！ ドロー！」

俺は……………俺は……………！

「俺だ……………！」

忘れるな。俺はいつだって……………。

「自然体。俺は、何にもならない。俺は、“俺”になる！」
いや、違うな。

「変わらない……………何も変わらないさ……………俺は、何にもならないんじゃない……………」

何にも、なれないんだ……………！

「キング！ 俺の結論だ！ よく聞いとけ」

「うむ」

「買い被るな！ 俺が“神子”だの“王”だの、そんなもんになれるか！ 俺は、お前たちの相棒で、友達だ！ お前たちに全力で迷惑かけて、お前たちに全力で報いる！」

傲慢だろうな。何様だつて話だよな。

「それでも……………俺は俺のままでしかいられない」

“神子”か“王”か。

「そんな選択肢はいらん！ 与えられた選択肢に、縛られるつもりはない！」

それが俺の選択。

「……………真実を知って、尚も揺るがず我道を貫く、と」

「……………ああ。そつだ」

「……………見事」

「それでこそ、主様です」

「……………ならば」

「ああ。行くぞテンス。まずは……お前を超える」

「……来い。“王”！ 否、御堂切！」

テンスの場にいるのはテンス自身。攻撃力は1000守備力は2000

態々攻撃表示にしたのは『オネスト』のためか？ ……いや、きつとテンスは……。

「手札から『ライオウ』を召喚！ 『豊穰のアルテミス』を攻撃表示に変更！ バトル！ 『救済のレイヤード』で『切り札の（トランプ・^{ナイト}騎士 テンス』を攻撃！」

「ぐ……う！」

テンスLP6300

「『豊穰のアルテミス』でダイレクトアタック！」

テンスLP4700

「『ライオウ』でダイレクトアタック！」

テンスLP2800

「これで終わりだ！ 『冥王竜ヴァンダルギオン』でダイレクトアタック！」

「うおおおおおおおおおおおっ！…！」

テンスLP0

「……俺は、お前に付こう」

「テンス……」

「だが、エースは……」

「……わかってる」

エースに、デュエルは無理だ。

「あ……」

「これは……」

「なんと……」

「どうした？」

「セツ様。わたくしたちのカードを」

言われて、希冴姫たちのカードを見てみる。そこには……。

「『切り札の（トランプ・）騎士^{ナイト} クイーン』……」

希冴姫たちのカード名とカードテキストが変化し、それぞれ『切り札の（トランプ・）騎士^{ナイト} クイーン』、『切り札の（トランプ・）騎士^{ナイト} ジャック』、『切り札の（トランプ・）騎士^{ナイト} キング』となっていた。

「それと……剣だ」

そう言ってテンスが差し出してきたのは五本の剣。

それぞれが俺の持っていた寄り代のカードに吸い込まれていき、そのカード名はこうなっていた。

『アルカナソード スペード』

『アルカナソード ハート』

『アルカナソード クローバー』

『アルカナソード ダイヤ』

『アルカナソード ジョーカー』

「これが……」

「はい。アルカナソードです」

「……五本もあったのか」

「わたくしたちは、五人衆、ですもの」

「そうか……」

「セツ。お前はどつする」

「ん？」

「俺を手にし、真なるクイーンたちも得た。お前は、この先に何を望む」

「……は、決まってるさ」

最初、こつちに来た時思った通りだ。

「俺は俺らしく……ゆるゆる行くさ。楽しくな
そうさ。」

「俺は、ずっとそうして生きてきたんだから」

第二期第八話「アルカナの剣 後編」(後書き)

はい。第八話、アルカナの剣の最後です。うん。間話とか言いながら本編最終話レベルでシリアスってますね。何がしたいんでしょう。僕は。迷走しております。

しかももうこれアンチだと叩かれるレベルですよ。自分で書いていて。

ガンガン墓地送りにする遊戯王自体否定するような話です。自分で批判するレベルです。

……けど、本音なんですよね。精霊も生き物であるはずなのに何度も何度も殺して墓地に送って。精霊は何故、そこに疑問を持たないのでしょうか。歪んでますよ。きつと。ええ。もういつそ批判覚悟でぶつちやけます。精霊たちは歪んでいます。エースこそが普通の反応しているのだと、遊戯王の小説書いている身ですが主張します。やられる度に精霊は悲鳴をあげてるじゃないですか。墓地に送られているじゃないですか。怖くないのでしょうか。痛くはないのでしょうか。

精霊を一生命体として見た時、どうしてもこの疑問にぶつかります。……ええわかっていきます。これはポケモンを見て、なんとという虐待だと憤るようなものだ。

でもきつと精霊の中にもエースのような精霊がいる。そう思ったのです。

ええと……オリカの詳しい紹介は活動報告に出します。そちらもご覧下さい。

すみませんでした。

レーネスでした。

特別編「デッキレシビ さだめ」(前書き)

ネタです。それだけ。

特別編「デッキレシビ」 さだめ

アルカナく切り札の騎士く

特別編「デッキレシビ」 さだめ

「いや、これはダメでしょ」

いきなりダメだし!?

「だってさだめのこれ友達とのネタにしか使えないし」

それがいいんじゃないか!

「希望はもらったけど……」

一人でもいるのなら……。

「それより本編、って人は一人どころじゃないんじゃない……」

うぐ……。

「ところでお兄ちゃんはく?」

ここにはいません。

「さよなら」

待つてく行かんといてく!

「報酬は?」

アテナはそんなの要求しなかった!

「甘い。さだめは読者の好感度すら気にしない」

「気にしようよ! 読者様の声がなければ君はヒロインにはなれないよ!」

「今のさだめは他人を蛆虫とまでは思っていないけどお兄ちゃんを世界の至宝として他人を路傍の石程度には思っています……これでもいいよ!」

「？」

「何が!? それで好感度稼げたと思ってるの!？」

「毒舌キヤラは人気が出るよ?」

「そうか!? 少なくともさっきのは毒舌じゃなくて暴言、爆弾発言の類だと思っぞ!?」

「許してぴよん」

「うん。キミの笑顔がギアスになると思ったら大間違いだ。そしてその語尾うざい。」

「お兄ちゃん以外にどうやって媚び売ればいいかわかんないんだもん!」

「逆切れ!? そして媚び!？」

「え? 媚びでしょ?」

「ぶつちやけ過ぎだから。キミは空気を読もう。」

「うん、それ無理」

「それアルカナだと二度目ですよ。」

「お兄ちゃんと同じことがしたかった」

「基本的にセツ中心なんですな。」

「基本的じゃなくて絶対的」

「……わかりました。キミの執念には負けました。妥協しましょう。」

「え」

「僕は消えてセツに任せる。さらばっ!」

「おいしいいい!?! 俺に丸投げ!?!」

「さっすが作者さんわかってるう」

「なるほど。スケープ・ゴートということが……」

「お兄ちゃん……二人つきり……だね?」

「甘い雰囲気を作り出そうとしてもお前の場合恐怖しか作りだせないことに気付いてくれ」

「ちえー」

「いいから、デッキレシピに行くぞホレ」

「はい」

・上級モンスター

『混沌帝龍 終焉の使者』×1

「マテ」

「なにお兄ちゃん」

「イキナリだがヤバい。そいつはダメだ」

「強いよ？」

「それが問題だと気付け」

「禁止スタンダードだから」

「限度を覚えよう。頼むから」

「まあまあ、とにかく次行こう」

『カオス・ソルジャー 開闢の使者』×1

「待て！」

「もう、また？」

「まただ！ そもそもお前は何をどうしてそんなカードを手に入れた！？」

「……世界の秘密に至るのはまだ早いよ。お兄ちゃん」

「え、何その盛大な伏線。お前の禁止スタンダードには世界の秘密に関わる何かが隠されてんの？」

「次逝ってみよー！」

計二枚

「よりによってその二枚！？」

「むしろこれ以外まで入れたって事故するだけだよ？」

「……そうじゃなくて。そうじゃなくて！」

「はいはいとつと次に逝くよー」

・下級モンスター

『八汰鳥』×1

「よし。待て」

「四度目」

「このままだと一枚ごとに制止をかける勢いだ」

「なんで？」

「お前が本気でそう言っているんだとしたらお兄ちゃんは泣きたくなってくる」

『処刑人 マキユラ』x1

「わーお……」

「さだめのフェイバリット」

「とんでもない輩をフェイバリットにしておられるんですね」

「何よりもまず響きが堪らないよね。処刑人だよ処刑人」

「そこに痺れて憧れているお前はおかしい」

『黒き森のウィッチ』x3

「お前は往年の八汰ロツクを再現する気満々だな」

「さだめちゃん強い」

「言い直せ。さだめちゃんエグイと」

『クリッター』x2

「制限だが、今さらだな」

「ホントにお兄ちゃん全部のカードで制止かけてる……」

『聖なる魔術師』x3

「よしわかったこのデッキは酷過ぎる」

「雑魚だよ？」

「効果欄みて言ってるか？」

『魂を削る死霊』x3

「盾にする気満々だろ」

「贅にする気も満々だよ？」

「なんでも満々ならいいわけじゃない」

『マシユマロン』x3

「禁止や制限無視以外には入ってないのかこれは」

「入ってるよ？」

「今だ出てこないんだが」

「次だよ次」

『コーリング・ノヴァ』x3

「うん？ また随分平和的な……イヤ待て、マシユマロン出てくる。」

カオスの素材になる！」

「うーん光属性は禁止制限少なくて……」

「そこ、笑うところか？」

計19枚

「闇属性9枚光属性9枚……完全にカオススタンダードだな」

「八汰烏は違うよ？」

「そいつは属性以前の問題だ」

・魔法カード

『苦渋の選択』x1

「これ一ターン目からカオス出てくる勢いだよなあ!？」

「カオスを五枚以上持っていればなあ」

「悪魔か！」

『天使の施し』x2

「腐らないよなあ……間違いなく」

「カオス出しやすいよー」

「禁止制限出してるコナミに謝れ」

『強欲な壺』x3

「謝れ！」

「何に？」

「全てに」

「ごめんなさい謝る気がありません」

「えー謝るところそこー？」

『サンダーボルト』x1

「これを良心的だと思ってしまっただけ、今までが酷かった」

「カオスの性質上『ブラック・ホール』の方が都合よくて」

「うん。どこも良心的じゃなかった」

『ブラック・ホール』x2

「魔法カードに禁止制限じゃないカードは？」

「入ってるって」

「きつとそれもどうせ……」

『ハーピイの羽簞』×1

「その心は？」

「エンペラーで全除去できるし良いかなって」

『遺言状』×2

「これクリッターとかじゃなくても八汰ロック完成するよなあ！？」

「さだめちゃん最強！」

「最凶或いは最狂」

『おろかな埋葬』×3

「準制限って……平和だよなあ〜なんて言うと思ったたら大間違いだ。

カオスだろ。カオス出てくるだろ。マキユラ使う気だろ」

「まあね〜」

『死者転生』×2

「……」

「平和だよね」

「一つ前に『おろかな埋葬』がなければな」

「どうして？」

「カオスのサーチと墓地肥しで大抵出せるよなこれ」

「バレたか」

計19枚

「驚いたことに『死者蘇生』が入っていない」

「カオスも正規の召喚手順踏めば蘇生できるんだけどね」

「ま、正規手順で出た瞬間ほぼ勝ちだから入れるまでもないのかもな」

・畏カード

『第六感』×3

「外しても殆ど損しないよなあこのデッキ！」

「ちなみに作者さんは『ダイス・ポット』マイスターを自称しているよ？」

「六割で6000ダメージ与えるって自称してるな」

「『ダイス・ポット』なら自分には運命力があるとまで豪語してた」

「馬鹿だな」

『聖なるバリア ミラーフォース』×1

「おや、制限通りじゃないか」

「たまにはいいじゃん」

「常にそうしろ」

『刻の封印』×3

「ドローくらいさせてやれよ」

「八汰ロツクの代用だよ」

「どうせマキキュラと組み合わせるんだろ」

「まあね〜」

計7枚

「マキキュラ使ってる割に少なめだな」

「マキキュラはアイドルカードみたいなの……」

「どんなアイドルだ！」

「デビューシングルは『あなたと愛の公開処刑』」

「ヤバイ聞きたい！」

「マキキュラを題材にしたモノマネ芸人まで出る人気っぷり」

「モノマネで死人が出るわ！」

「大丈夫だよ。そのモノマネ芸人の名前は『通行人 まきゅら』だ

から」

「まさかの一般人！」

「とにかく計47枚。でも以外と勝ち筋は限定されてるんだよね」

「その分凶悪極まりないがな」

「実は作者さんの中ではマキキュラ精霊化が検討されて……」

「考え直せ。このデッキを使わせるつもりか！」

「ううん。この小説のマスコットにして」

「ならねえよ!? どうしたってマキキュラがマスコットにはならね

えよ!？」

「ゆくゆくはヒロイン化」

「まさかの女の子! っていうかデッドエンド以外にルートあるか

!？」

「結婚式は公開処刑」

「結婚は人生の墓場ですわかりますこんちくしょう」

「ケーキ入刀ならぬ頭部入刀」

「俺じゃなくて作者の脳を切開した方がいいと思う」

「ライスシャワーはブラッドシャワー」

「血の雨が降る結婚式」

「狐の嫁入りだよ？」

「天気雨と一緒に考えるな！」

「ブーケトス」頭部トス

「幸せのおすそ分けが次の殺人予告に早変わり。ワアスゴイナー」

「さだめ、マキユラにならお兄ちゃんを取られても……」

「安心しろマキユラを選ぶくらいなら迷いなくさだめを選ぶ」

「本当！？ 嬉しい！」

「確実な死か生き残る確率が僅かでもあるか、くらいの違いしかないけどな」

「これは……イケるね！」

「イケねえよ！ これ以上そんな存在自体が死亡フラグな精霊出されちゃたまんねえよ！」

「じゃあ『通行人 まきゆら』ならどうかな？」

「そいつは精霊なのか」

「攻/守16/12効果なし」

「ゼロは！？ 攻撃力二ケタ！？ しかも16!？」

「『千眼の邪教神』なら倒せます」

「入れる価値ねえ！」

「レベルは12」

「神!？」

「テキストには『作者と友人たちの馬鹿話から誕生したマキユラのパチモン。当時はこの名前を出すだけで場を爆笑の渦に叩きこむことが可能だった最強モンスター』って書いてある」

「事実だ！」

「種族は人間族」

「ありそうで全くなかった種族出た！ 種族におけるメリットすらない！」

「まあ一般人だからこの種族は当然」

「ですよね！」

「お兄ちゃん、今日はツツコミが絶好調だね！」

「今の一連の流れでツツコミ放棄してたらアルカナは終わっていた」

「きつとルインだったらボケが連鎖したに違いないよ」

「そうだな。その時はルインが名実ともに破滅の女神になっていたことだろうな」

「というわけで、さだめの禁止デツキレシピでした」

「そういえばこれデツキレシピだったな。(笑)が付く」

「参考になつたかな？」

「ネタ以下の価値もないが」

「息抜きにしても酷いよね」

「反省するべきだな。さだめも含めて」

「サンダーボルト抜いてブラック・ホール三枚積みにした方がよかつたかなー？」

「そうじゃない！」

「実際に組んで見れないから回るかどうかわかんなくて……」

「だからデツキの出来についての反省じゃなくて！」

「実際はシリアスに疲れた作者が虚ろな笑いを漏らしながら書いてたから……」

「前々回のシリアスがそこまで尾を引いていたのか……」

「ギャグしないと精神的に無理そうだったって」

「次は期待していいのか？」

「多分。明日ちよつと仕事だから無理かもしれないけど、だって」

「進める気ないだる作者！」

「普通なら一週間放置くらい当たり前なんだから譲歩しろって」

「30話程度書いたくらいで随分偉そうになつたもんだな」

「ホントだね」

「他の作者さんの中には百話近く連続更新する人もいるというのに」

「そこら辺は神の一種じゃないかな？」

「まあともかく、すまん。最新話はもうちよつとだけ待っていてくれ

！ 今オリカ入れた俺のデッキを組むのに苦戦してる。エースが入らないのは作者としても予想外の展開だつたらしく……」

「というわけで、今回はこれでお茶を濁します」

「また、今度こそ本編……というか間話6で！」

特別編「デッキレシビ」さだめ（後書き）

ただネタが書きたかっただけです。

これをさだめの個人回に……は、流石にしません。殺されます。さだめに。

それでは、レーネスでした！

第二期第九話「戦野剣士」(前書き)

改訂一っ目です。

一気に半分近くになってしまっただかさみしく感じる悠です。

剣士の登場回。剣士は、エルやフレイがいなくなった以外に変更点はありませんが、それでも変更点がありますね。

第二期第九話「戦野剣士」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第二期第九話「戦野剣士」

セツが精霊界にて、エースの慟哭に体を震わせたその三日後。

セツがまだ帰還していないアカデミアでは編入生の噂で持ちきりだった。

「どんな奴がくんのかな〜？ 今からワクワクしてしょうがないぜ！」

「アニキはデュエルがしたいだけでしょ」

「へへっ！ まあな！」

という十代たちのようにそれを歓迎する生徒がいる一方、その編入生の素行等について問題視する生徒もちらほらといた。

「なんか、前の学校で不良集団のボス張ってたらしいよ」

「暴力団のアジトに乗りこんで壊滅させたとか聞いたことある」

「視線だけで犬に服従のポーズ取らせるくらいの威圧感が……」

などと何の根拠もない噂も溢れていた。

そんな教室に、クロノスが入ってきた時には、遂に編入生の登場かと一同はピタツと話を止め、クロノスの挙動に注目した。が……。

「え〜本日ウ〜ハ、編入生の紹介をする予定だったノ〜デスガ。パルメザンチ〜ズ。何故かこちらに顔を出していないノ〜デ、紹介は後日に回ス〜ノデス」

「え〜マジかよ！ せっかく新しいやつとデュエル出来ると思ってたのに」

「本当に貴様はそればかりだな」

「だが、確かに編入生のデュエルタクティクスを見ることができないのは残念ではあるな」

「あ、三沢君。いたんだ」

「……いたんだ。というか授業なんだからいるに決まっているだろ

う！」

「はいはい空気空気オキシゲドン」

「俺は空気じゃない！ それとオキシゲドンは空気じゃなくて酸素だ！」

「同じじゃない？」

「同じじゃない！ いいか、一般的に空気と呼ばれるものはその大部分を窒素が占めていて……」

「でも、空気より酸素って呼ばれた方が大事にされている感じしない？ 人が生きていく上でなくてはならないものだし」

「……確かに」

「三沢君、騙されてるツスよ」

「っていつかなんで中等部のさだめさんが普通に混ざってるんですか？」

「さだめはお兄ちゃんの妹だからね。空気に違和感なく溶け込むのは容易」

「セツと違って明らかかな存在感を醸し出してるんですけど……」

「……つく！ 羨ましい」

「静かにするノ〜ネ！ そしてまたモ〜ヤシニヨールセツはお休みなノ〜ネ？ いい加減校長ウ〜も庇いきれなくなってくるノ〜ネ！」

「す、すみません！ 多分もうすぐ戻ってくると思うんですけど……」

……

「お兄ちゃん……相変わらず頭良い割に感性で行動するんだから……」

……

「いいじゃね〜か！ こういう時、セツはまた強くなって帰ってくるパターンだろ？」

「そうツスね。今度は一体何してるんだらうね」

「フン。それで留年したら元も子もないだろうに。馬鹿な奴だ」

「はっ！？ そうすればさだめとお兄ちゃんは同学年……修学旅行も一緒に行動……これまでのように修学旅行のバスに隠れ潜んで餓死しかけることも、飛行機の貨物室に潜んで凍死しかけることもな

く一緒に旅行……クロノス先生！ お兄ちゃんを是非りゆうね……
モガモガ……」

「あ、あはは……すみません、セツには私からもよく言っておきま
すので……」

「……もうシニョールセツの監督ウゝはシニョールアテナたちに一
任しているノゝネ。煮るなり焼くなり好きにするといいノゝネ」

「はい是非……むゝむゝ！」

最近はさだめの暴走を止める役も板についできたアテナである。

「それでえゝワ、本日の授業を始めるノゝネ」

そうしてセツ不在、本来今日から参加のはずの編入生抜きで授業
が開始された。

その頃、件の編入生は……。

「……どこだよこは……」

アカデミアの森の中で絶賛迷子中だった。

「くそ……んだよこのアカデミアってやつは。無駄に広過ぎんだら
……ブツブツ」

何事か呟きながら森の中を当てもなく彷徨い続ける。

『マスター。何なら我がひとつ飛び周囲を探索してくるとしよう。
このまま闇雲に歩くよりは建設的だろう』

途方に暮れる編入生の傍らから、半透明の騎士がそう声をかける。
「ああ、そうしてくれネイキッド。こんな調子じゃ授業どころかレ
ッド寮にも辿りつけやしねえ」

溜息混じりにそう漏らした編入生に、半透明の騎士　ネイキッ
ド・ギア・フリード　はその逞しい胸板を張って頷く。

『了解した。任せておけ』

「んじゃ、頼むわ。こんなんもうお手上げだ」

そうネイキッドにひらひらと手を振って、その編入生はその場に

どっかりと腰を下ろすのだった。

本日の一連の授業が終了し、セツもいないので暇になったアテナはとりあえず女子寮に戻ってから散歩に出かけた。なんとなく、今はセツのいないレッド寮へと足を向ける。

「もう、本当にさだめさんの言う通りです。セツってばお勉強できるのにどうして直感頼りで行動するんでしょうか……」

十代やセツ本人に聞けば、その方が面白そうだから。とでも答えそう。ついでにルイン辺りに聞いても同じ答えが返ってくるだろう。

「……いえ、きつとさだめさんも同じですね。はあ……なんかそんな人ばかりです」

私が子供っぽい皆さんを上手く制御しなくちゃ！ と気合を入れるアテナ13歳（最年少）。

「……こんなだから年下扱いされないんですよ……」

その事実には思い至り落ち込むアテナ（精神年齢39歳）。

そんなアテナが女子寮を出て直ぐに、何やら正面玄関付近で騒ぎが起きているのに気付いた。

「なんででしょうか……」

通り道だったこともあり、アテナは騒ぎが起きている中心に向けて足を進めるのだった。

そして、その騒ぎの中心となっていたのは、やはりというべきが編入生の少年である。

『注目されているな』

「……悪い意味でな」

探索から戻ったネイキッドの先導でなんとか森を抜け、建物が見えるところまで来たはいいが、どうも女子寮だったらしい。遠巻きに自分たち（どうせネイキッドのことは見えていないが）を見つめているのは全員女子生徒だ。

「……っち」

その視線に明らかな戸惑いと恐怖が含まれているのを感じて、つい舌打ちしてしまう。

（もう慣れっこのはずなんだがな……）

昔からこうだ。眼つきが悪い、雰囲気怖いと遠巻きにひそひそと怯えられ、不良からはガンつけているなどと因縁をふっかけられ結局ここまで流れてきた。こういった状況は初めてではないというのに何故かいつも以上に気分が悪い。

（期待でもしてたか？ 柄にもねえ）

デュエルの精霊と出会い、彼らが受け入れてくれたからか。それともこの新しい生活のどこかに、儚い希望が何か抱いていたのか。

「くそっ！」

『マスター。そんなことではなおさら怯えられてしまうだけだ。冷静になれ』

「あーあーそうだな悪かったよ」

ネイキッドがそうアドバイスしてくれるものの、どうにも居心地の悪さが拭えない。

「大体オレが何をしたって……」

そんな風に思わずネイキッドに愚痴りそうになった時、横合いから声がかけられた。

「あー、何かお困りですか？」

時間はちょっとだけ巻き戻る。

ざわめく女子たちの集団に近づいたアテナは、その中心にいるリ

「ダー格の女子に声をかける。」

「海野さん。どうかしましたか？」

「……ああ、天音さん？ ちょっと、不審な男がいたので警備に通報するかどうか相談していただいただけですわ」

「不審な男性、ですか？」

「ほら、あれです」

彼女が指差す方向には、確かに男性がいた。燃えるような赤毛を無造作に切った眼つきの悪い男。それと……。

(ネイキッド・ギア・フリード……?)

精霊。彼は精霊を連れていた。それに仕草を見ていればわかるが、しつかり認識もしているようである。

「あの男、最初から見えていた子によれば森から出てきてこの辺をずつとろろろしているらしいですわ。あの凶悪な眼つきといい、とても堅気の間人とは……」

「あ、もしかして……」

「あら、何か知ってるんですの？」

「ほら、今朝クロノス先生が言っていたじゃないですか。編入生ですよ。あの人」

「……ああ、そう言えばそんなこともありましたわね。けど、なんでその編入生が授業にも来ないで、女子寮周囲をうろちよろしてるんですの？」

「それはちよつと……あ、じゃあ私、聞いてきます！」

「あ、ちよつとお待ちなさいな天音さん！」

「はい？」

海野の慌てたような声に、今にも駆け出そうとしていたアテナは制動をかけて振り向いた。

「あんな得体の知れない野蛮人に声をかけるだなんて……何を考えられているんですの？ 乱暴されても知りませんわよ？」

「大丈夫ですよ」

「どこからそんな根拠が……」

思わず、精霊を連れてくる人に悪い人はいませんと答えそうになったアテナだが、精霊が見えていない海野にそんなことを言っても通じないだろう。

「とにかく、私なら大丈夫ですから」

元々物怖じしない性格のアテナだが、さだめの一件を経た今なら例え相手が大量殺人鬼であろうと国家間テロリストであろうと笑顔でお友達になれる自信を持っていた。

「天音さん!？」

慌てたように、けれどとても心配そうな海野の声を置き去りにして、アテナは編入生の所に向かう。

「あのー、何かお困りですか？」

困惑していた。どうせ自分から声をかければ逃げられ通報でもされてしまうのだから当てがなくなるともとにかくここから離れようと思っていた矢先に、あちらから声をかけられたんだから、それも仕方ないだろう。

「……………あ……………?」

思わず間抜けな声が口から洩れる。後ろでネイキッドが噴き出し、ているのが癪に障った。

「な、なんだデメエ。オレに何の用だよ」

動揺のあまりついそんなぶっきらぼうな口調になってしまったオレに、ネイキッドが呆れたような視線を向ける。

『マスター……………親切に声をかけてくれた婦女子相手に、その態度はなかるう』

わかっちゃいるが、オレとしても予想外過ぎた。思わず警戒してしまったのは、仕方ないことだと思いたい。

「いえ、何かお困りの様子でしたから、何か力になれるかなって思っ
つて」

「……別に、困ってなんかねえ。さつさと消えるガキ」
言ってから失敗した、と内心頭を抱えた。戸惑った拳句突き放してしまった。こんなことだからオレは……と自分の口の悪さに呆れ果てる。

(つたく、結局なんだ。悪いのはオレじゃねえか。歩み寄ってこようが自分でこうして引き離して……これじゃこいつも……ほらな、やっぱり俯いてやがる)

罪悪感。溜息を一つ吐いて早々に立ち去ろうと踵を返そうとし……唐突に服の裾を引っ張られた。

「あ？」

「あ、あの！ 私、ガキですか！？ 私、ガキに見えますか！？」

「は……？ いや、ガキ……」

ずずい、と顔を近づけてそう聞いてくるその女に困惑し、ついまたガキ呼ばわりしてしまう。

(なに言ってるんだ！ ここは否定するところだろ！ せつかく逃げて行かなかったのにまた……)

「ホントですか！？ 良かったあ〜」

「……なんだと？」

女は逃げるどころか、嬉しそうに微笑みを浮かべてオレを見上げていた。

「最近誰からも年下扱いされなくてちょっと不安だったんですよ。私やっぱり老けてるのかなあって」

んなこと知らん。そう思ったが流石に今度は口を噤んだ。

「あ、私天音アテナといいます。貴方のお名前は？」

「戦野、剣士」

最初と変わらない笑顔で自己紹介されて、ついオレも名乗ってしまふ。いや、名乗って悪いというわけじゃねえが。

「イクサノケンジさん、ですね。どんな字を書くんですか？」

「戦う野原の剣士……」

「かっこいいお名前ですね！ 私は天の音で天音。アテナはカタカ

ナです」

「お、おう……」

「なんだかペースが乱れる。」

「戦野さん……いえ、剣士さんとお呼びしてもかまいませんか？」

「あ、もちろん私のこともアテナで構いませんから」

「い、いや遠慮しておく……呼び方はそれでいいが」

「そうですか……ちょっと残念です」

(な、なんだコイツ……)

自分に怯えるどころか驚くほど懐っこい。曇った笑顔を見て罪悪感で死にたくなるくらいには。

「あ、あーやつばアテナ……で」

今までロクに女子を名前呼びしたことなどないのについて承してしまふ。この少女の笑顔が曇ることがとんでもない犯罪に思えた。

「そうですか！ よかつたです！」

(う……っーかコイツ……)

落ち着いてみれば、とんでもなく整った容姿をしていた。

とりあえず世の中に存在する美辞麗句を片っ端から並びたてても遜色ないほどには。

『おやマスター、惚れたか？』

「ばっ……！？　んなわけあるか！　アホかつ！　あ、いやなんでもない」

ネイキッドが見えないと思い、慌てて誤魔化すオレだったが、その考えに反してアテナはあくまでも笑顔だった。

「あ、いいえ。私も見えますから大丈夫ですよ。ネイキッド・ギア・フリードさんですか？」

「は……お前、じゃねえあ、アテナはこいつが見えるのか？」

今まで自分以外にネイキッドが見えている人間を知らなかったオレは思わず目を丸くする。

「はい。私も精霊いますし……シャルナー？」

『あー……なんかリアルに久しぶりだよー一体いつ以来かしらん

？』

体育座りですっかりいじけている『アテナ』が姿を現す。何やらやさぐれているが……。

『おお、『アテナ』殿か！ 以前は遠目から見たただけであったが…なるほど近くで見れば尚美しい。我はネイキッド。マスターの少女も、我がマスター共々よろしく頼むぞ』

「はい！ よろしくお願いします！」

『あーはいはいヨロー。今はシャルナって呼んでねー』

感激したようなネイキッドの挨拶に対しても、気だるげな挨拶を返すアテナ……いや、シャルナ。女神だか天使だか知らないが威厳は欠片もない。

（そういや、ネイキッドが言ってた奴も精霊に囲まれてるようなこと言ってたな）

だとすれば、自分以外にこうして精霊と交流を持つものがあるのもおかしくはない。

「す、すみません。シャルナったら最近すっかりニートに……」

『呼び出してくれなきゃニートにもなるわよ。最近ネットゲ麻雀にハマって徹夜するくらいにはニートになるわよ』

「……精霊界にはネット麻雀があるんですか……？」

そんな感じで自分の精霊と会話するアテナを見て、オレもネイキッドにちよつとだけ文句を言う。

「つーかネイキッド。お前アテナが見えてること始めから知ってたろ」

『無論だ。我は自身に向けられた視線を感じとれぬほど間抜けではない』

「それならそうと始めっから言えっの……」

どうせその方が面白そうとかその辺だろう。オレは意地の悪い將軍に恨めし気な目を向ける。

「あの、それで結局剣士さんはここで何を？」

「あ……」

そうだった。つい忘れていたが自分は道に迷っていたんだ。せつかくこうして声をかけてくれたのだ。この機会を逃せばまたネイキッドに探索に向かって貰わなくてはならない。

「あー、アカデミア……いや、レッド寮って何処かわかるか？」

今から行ってもアテナがここにいる以上、もう授業は終了しているのだろう。ならばとりあえずこれから自分が住むところに挨拶に行った方がいい。

「はい。私もちょうどそちらに行こうと思っていたので、ご案内しますね」

アテナのような女子がレッド寮に用事があるとは思えない。下手な言い訳だと苦笑しつつ、アテナの気遣いに感謝する。

「ああ、悪いな。頼めるか？ 礼はする」

「そんな。お礼なんていいですよ。私が行くついでなんですから」

「いや、例えそうでも礼はする。オレの気が済まん」

「あはは、じゃあ期待して待ってますね」

「おう」

今度はアテナに案内されてレッド寮を目指す。ふと気になったオレはそのことをアテナに尋ねてみた。

「……なあ、なんでアテナはオレに話しかけたんだよ」

「え？ ですから……」

「違い。オレのこと、怖くねえのか？」

オレの疑問に、アテナは素でポカンと……というよりポケットとしていた。意味がわからなかったとでもいうように。

「えっと……すみません。怖い、ですか？ 剣士さんが？」

その顔はどう見ても真顔。本気でそう思っていないかったようだ。

「ほら、オレは眼つき悪いから」

「ああ……でもそれって、生まれつきのものですよ？ 性格とは関係ありません」

即答。迷いなく紡がれた言葉は、オレの心を大きく揺さぶった。

(なんだよ……？ これ)

「とういか、可愛い顔してこの世全ての悪的なプレッシャー放つさ
だめさんを見た後じゃあかなり今更ですし……」

アテナの言葉もちよつと耳に入らない。眼つきと性格は関係ないとすんなり言いさられた感動で、オレはかなり舞い上がっていた。

だからだろうか。

「お？」

「あ、セツ！」

ようやく見えてきたレッド寮から軽い足取りで出てきた男に、アテナが嬉しそうな声を上げて駆け寄って行くのを見て、頭に血が上つたのは。

「アテナ、三日ぶり。ちようど今から報告に……ぐえっ」

「もう！ 心配したんですからね！ ルインさんから聞いてはいましたけど……」

「わ、悪い悪い。ちよつと色々あつてな……」

心の底から心配そうなアテナに抱きつかれ、苦笑している男を見て、理性が抑えきれなくなったのは。

「おい！」

気付けばオレは、男を見て何やら驚いたような顔をしているネイキッドにも気付かず、男に怒声を張り上げていた。

「ん？」

頭を一撫でしてアテナを引き剥がした男が、こちらに初めて気が付いたとでもいうような顔を向ける。

「デメエ！ オレとデュエルしやがれ！」

殴りかからず、かろうじてデュエルを申し込んだのは最後の理性か。それともアテナを怖がらせたくなかったからか。

「……まったく事情が理解できませんが……まあ、デュエルするのは丁度いいか」

よく状況が理解できていない様子で、それでも迷いなくデュエルディスクを構える男。

「デメエ……覚悟しやがれ」

完全に逆恨みだと、相手には何の落ち度もないことを理性は叫んでいるが、ここまで来て後には引けない。デュエルして勝ち、その後でしっかり謝ろう。そう考えながら、オレは頭をデュエルモードに切り替えるのだった。

第二期第九話「戦野剣士」(後書き)

エルの出番がなくなったことで、必然的にネイキッドの出番は多くなりました。多分、他のキャラの穴もこつして他の既存キャラが埋めていくことになるのでしょう。

というか、改めて見て特別編の多さに驚きました。こんなにたくさんあったのか……。

それでは、悠でした！

第二期第十話「らしくない」(前書き)

改訂二つ目。モンスターの攻撃力とかを追加したくらいであまり変わっていませんが。二期の分はそんなに変化しませんね。

第二期第十話「らしくない」

アルカナ、切り札の騎士」

第二期第十話「らしくない」

互いにデッキをシャッフルし、自らのデュエルディスクにセットする。

その頃になると、血が上ってきた頭も大分冷え、冷静に相手のことを観察する余裕も出てきた。

(あいつも、ネイキッドのこと見えてやがんな……)

口には出さなかったが、さっきネイキッドの方をちらっと見ていたのに気付いた。

(つてことはオレのデッキは読まれてるか……)

しかし、その後にデッキを交換していた様子はなかったからメタデッキ使いじゃない。或いは元々自分に対するメタデッキだった可能性もあるにはあるが、可能性としては低いだろう。

(結局、やってみねえことには何もわかんねえか)

ある意味当然ではある。ネイキッドの姿をみられている時点で情報アドバンテージは握られているのが痛い。

「俺の名前は御堂切。セツって呼んでくれ。お前は？」

「……戦野剣士だ。好きに呼べよ」

「剣士な。先攻後攻はどうする？」

「テメエはどっちがいい」

「希望としては、先攻だな」

「んじゃオレが先攻だ」

「ありゃ」

苦笑された。それもそうだろう。気を取り直して互いにデュエルディスクを構える。

「デュエル！！」

「行くぞ！ オレのターン、ドロー！」

手札を確認。悪くない。

「オレは手札からフィールド魔法を発動する！ これが、己が武勇を信じて剣を取る合戦の舞台！ 『侍の戦場』！」

フィールドが折れた剣や矢が突き刺さった合戦の場へと変化する。

「これは……初めて見るな」

「このフィールドである限り、互いの戦士族モンスターは戦闘以外では破壊されねえ！」

「！」

「そして戦士族モンスターの攻撃力と守備力は500ポイントアップする。オレは魔法カード『増援』の効果でデッキから『切り込み隊長』を手札に加える！ 『切り込み隊長』を召喚！ 効果により、もう一体の『切り込み隊長』を特殊召喚！」

『切り込み隊長』 ATK1200 1700

「切り込みロック……！ しかも……」

『侍の戦場』が存在する限り、戦闘以外での除去ができない。

「ターンエンドだ！」

引きは上々。後は相手の戦法を見極め、それに応じた策を取る！

いきなりデュエルを挑まれた時は一体何事かと思ったが……。

「俺のターン、ドロー！」

俺の知らないカード。知らないキャラクター。色んな意味でのイレギュラー。しかも効果は強烈。救いは……。

「俺も戦士主体のデッキってことくらいか」

ミラーマッチ。それならとりあえず攻撃力上昇効果は怖くない。相手に応じて自分のモンスターも強化されるからダイレクトアタックでもなければ怖くはない。それよりも気になるのは……。

「アテナ、なんでまたあいつと一緒にこんなところまで？」

そつちだ。最初は展開が急すぎて気にならなかつたが、よくよく考えれば見たこともない男と一緒にアテナがレッド寮に現れたことが気にかかる。

「あ、剣士さんは編入生の方なんですけど……レッド寮に行きたがっていたのでご案内したんです」

「……お前のその物怖じしない性格とか人懐っこさは嫌いじゃないが、ちよつとは警戒することも覚える」

まあ、そんなことを言っても聞くアテナじゃないか。

「大丈夫ですよ。剣士さんは精霊を連れていましたし、良い人です！」

「……はあ」

……つたく。人の気も知らないで。つて、それは俺が言えたセリフじゃないか。

「……まあいいや。丁度いいから今回俺が心配させた成果、見せてやるよ」

心配かけたんだし、せめて最初にそれぐらい見せてやっても罰は当たらないだろう。さだめが当たりそうだが。

「……罰の方が数段マシだな。……俺は手札から『切り札の騎士クイーン』を攻撃表示で召喚！ 出番だ！ 希冴姫！」

『切り札の騎士 クイーン』 ATK1500 2000

少しテンションが上がりつつも、俺は希冴姫を召喚する。

『はいっ！』

「トランプ……ナイト？」

「『切り札の騎士 クイーン』は、そのカード名を『クイーンズ・ナイト』としても扱う。更に、フィールド上と墓地に存在する限り

このモンスターは通常モンスターとして扱う！」

言ってしまうえばリメイクカードと大差ない。が、これにより……。俺は手札から『アルカナソード ハート』を『切り札の騎士 クイーン』に装備する！」

希牙姫の持つ剣が深紅の飾り剣へと変化した。しかし、儀式剣なのか刃引きをされていて、攻撃能力はなさそうに思える。事実、希牙姫の攻撃力は500ポイントダウンしている。

『切り札の騎士 クイーン』 ATK2000 1500

「俺はカードを一枚セット。ターンを終了する」

「アルカナソード……これが、セツの新しい力ですか？」

「ま、そんなところだ」

オレは内心舌打ちしていた。ミラーマッチでは『侍の戦場』の真価が発揮できない。しかも、あちらもまた自分の知らないカードで展開してきた。

「オレは手札から『召喚僧サモンプリースト』を召喚！ 効果により守備表示に変更される。手札から『テラ・フォーミング』を捨てて効果発動！ デッキから『コマンド・ナイト』を攻撃表示で召喚する！」

『召喚僧サモンプリースト』 DEF1600

『コマンド・ナイト』 ATK1200 1600 2100

「高速召喚！？ 速い！」

「更に、オレは魔法カード『命削りの宝札』を発動！ デッキからカードを五枚ドロウする！ ただし、自分のターンで数えて五ターン後、オレは手札を全て捨てる必要がある」

デメリットも大きいように見えるが、この五ターンというのは意外と遠い。少なくとも、オレのデッキなら勝敗はどうあれ後五ターンもあれば決着は付くだろう。

(五ターンは必要ない！ 速攻で決める！)

カードを五枚ドロ―し、手札を確認する。

「オレは手札から永続魔法『連合軍』を発動！ フィールド上に存在する戦士、魔法使い族の数×200ポイント戦士族の攻撃力を上げる！ バトル！ 『切り込み隊長』でテメエの『切り札の騎士 クイーン』を攻撃！」

『切り込み隊長』 ATK2900

あの装備カードやりバースカードは気になるが『侍の戦場』でミラーフォースも怖くない。まずは斥候を放って探りを入れる！

『はああああつ！』

『ふっ！』

『切り込み隊長』が斬りかかるのを冷静に見極めた『切り札の騎士 クイーン』はその双剣を儀礼剣で受け止めた。

「なに！？」

「『アルカナソード ハート』の効果発動！ このカードを装備したモンスターは戦闘によっては破壊されず、超過分の戦闘ダメージを無効にし、その分だけ自分はライフを回復する！」

「くそっ！」

セツLP5400

「ただし、このカードを装備したモンスターは攻撃宣言を行うことができない」

例えそうでも、フィールドに残存することに意味がある『切り札の騎士 クイーン』。その上今はオレの『侍の戦場』が発動されている。

「まずったか……ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロ―！」

ん。よし。とりあえず凌いだ。今回は相手のカードに助けられた

な。

「にしても『命削りの宝札』か……チートドロいな……」

見たところ相手のデッキは下級戦士族の大量展開による速攻。五ターン後に手札を捨てるデメリット効果なんてあつてなきがごとしだろう。

「……俺は手札から『同族の絆』の効果を発動する。ライフを1000ポイント支払い、デッキから『切り札の騎士 クイーン』と同じ戦士族のレベル4以下モンスターを二体まで特殊召喚する！俺が特殊召喚するのは『切り札の騎士 テンス』と『切り札の騎士 キング』！」

セツLP4400

俺のフィールドに、寡黙な重装備の騎士といつもの老騎士が現れる。

『切り札の騎士 キング』 ATK1600 2100

『切り札の騎士 テンス』 DEF2000 2500

「そして『切り札の騎士 キング』の効果を発動！場に『切り札の騎士 クイーン』が表側表示で存在するときに、このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚された場合、デッキから『切り札の騎士 ジャック』を特殊召喚する！」

『切り札の騎士 ジャック』 ATK1900 2400

切り札の騎士として、最も成長を遂げたと言つても良いのがこのキングだ。希冴姫と同じくカード名を『キングス・ナイト』としても扱う効果と併せて、かなり扱いやすい効果になった。

「デメエも高速召喚だ！？」

とはいえ、あの切り込みロックはまだ破れない。あれを破るにはあのフィールド魔法を破壊するしか手はないんだが……くそ、先攻一ターン目だったからパーミッション出来なかったのが痛いな。

「セツ……また、希冴姫さんたちを使うようになったんですね」

「……ああ。詳しくは後で話すが、結構、色々あつてな」

そう、色々だ。脳裏にエースとのやり取りが思い起こされる。

「俺はカードを一枚セットしてターンエンド！」
今はこのデュエルに集中しよう。そう簡単に勝たせてくれる相手でもなさそうだしな。

「オレのターン、ドロー！」
本当にミラーマッチになるとは思わなかった。相手も自分と同じく下級モンスターを大量に展開することでフィールドを制圧するタイプ。

だが、その割には攻撃力アップに値するカードがない。恐らくは、自分のような純正ビートダウンではなく特殊なコントロールビートの戦士デッキ……。

さてどうするか。先ほどの戦闘では伏せカードを使用してこなかったが、それは恐らく『アルカナソード ハート』の効果があったからだろう。だとすればあれらのカードが攻撃を防ぐ系統のカードである可能性は少なくない。『侍の戦場』がある以上、ミラーフォースなどの破壊カードであるとは考えにくい。だとすれば『和睦の使者』や『威嚇する咆哮』などフリーチェーンの防御カード。或いは『攻撃の無力化』といった選択肢もあり得る。一番まずいのは『突進』や『収縮』などで迎撃されることだ。

(つーと、あの二枚残った手札も……)

『オネスト』。その可能性も高い。いずれにせよ、ロックの要である『切り込み隊長』で攻撃することは躊躇われる。

「だが、攻めないのはもつとやべえな」

あの切り札の騎士とやらが『クイーンズ・ナイト』たち絵札の三銃士として扱われるなら、三体残しておくことは即ち『アルカナナイトジョーカー』の融合に繋がる。さっきのターンに融合しなかったということは、まだ手札に『融合』がないのかもしれないが。『手札から魔法カード』ハリケーン』を発動！ 互いの魔法・罠を

全て手札に戻す！」

これで戦端を開く！

そう考えての『ハリケーン』だが……。

「よしっ！」

「！？」

ガッツポーズをしたセツに、悪手を打ったか！？ と戦慄する。

「カウンター罠『マジック・ジャマー』！ 手札を一枚捨てることで魔法カードの発動を無効にし、破壊する！」

なんだ、と安心した。ガッツポーズまで取るものだからよほどのことかと思えばただデイスアドバンテージを負っただけ。だが……。

「俺が手札からコストとして捨てたのは『ジャム・ウォリアー』！

こいつはカウンタートラップのコストとして墓地に送られた場合、デッキからカードを二枚ドロウすることができる！」

「なんだと！？」

デイスアドバンテージを回避してきた！？ しかもリバーズカードはそのままだ残っている。

「ちっ……ソイツも聞いた事ねえ奴だぜ」

兎も角、これでまた『オネスト』の危険性が増した。あんなカウンター罠専用のモンスターを入れているということは、相手は恐らく迎撃を得意とする後だしタイプ……それならなおのこと『オネスト』が怖い。

「くそっ……！ それでも攻撃しないわけにはいかねえ！ バトル！」

ここで情けなくビビってエンド宣告だけはしたくない。デュエリストとしても、一人の男としても。

ちらりとアテナの方を見る。こちらを見てはいるが、その意識は最初からずつと相手の男……セツに向けたままだ。

「クソっ！ バトルフェイズ！ 『コマンド・ナイト』で『切り札の騎士 キング』を攻撃！ 『ブレイズソード』！」

『コマンド・ナイト』の剣が炎に包まれ、セツの場の老騎士に向

かう。

「速攻魔法発動！」

「！」

『突進』や『収縮』の類だったか！？

「『絵札の結束』！」

また……知らねえカード！

「こいつはライフを1000ポイント払って発動する！ エクストラデッキから『アルカナ ナイトジョーカー』を選択して自分フィールド上或いは墓地に存在するクイーン・キング・ジャックの三体を融合！ 来いっ！ 『アルカナ ナイトジョーカー』！」

セツLP3400

『アルカナ ナイトジョーカー』 ATK3800 4300

「クソッ……！」

みすみすアルカナの召喚を許しちゃった！

攻撃力3800。現在存在する最強の戦士族モンスター……。

「なにやってんだ……！ オレは……！」

やることなすことが全て裏目に出ている。まったくいつものプレイングができていない。

「ガラにもねえ……！」

集中力が乱れているのを自覚する。焦っていた。最初の迂闊な攻撃も、さっきの『ハリケーン』も、そのどちらもがいつもの自分なら絶対にしないようなミス。その結果がこれだ。情けない。

「……ターンエンドだ！」

とにかく、今は凌ぐしかない。幸いアルカナではこちらのロックは崩せない。

「俺のターン、ドロー！」

相手は冷静だ。最初こそ自分と一緒にいたアテナを気にしていたようだが、今はすっかり気持ち切り替えてデュエルに集中している。

「俺はカードを二枚セット。ターンエンドだ！」

集中、集中しろ！ 雑念を払え、ネイキッドの将たる自分を取り戻せ！

「あぁっ！」

「パァンっ！」

「！」

「……っふうー」

思い切り両頬を叩く。衝撃で目の前がチカチカしたが、おかげで目が覚めた。

「ここからが本番だぜ……セツ！」

「……おう、来い！ 剣士！」

「オレは手札から『簡易融合』を発動！ ライフを1000ポイント支払ってエクストラデッキから『魔導騎士ギルティア』を攻撃表示で特殊召喚！ 更に手札の『鉄の騎士 ギア・フリード』と『融合』！ 来いっ！ 『鋼鉄の魔導騎士 ギルティア・フリード』！」

剣士LP3000

『鋼鉄の魔導騎士 ギルティア・フリード』 ATK2700 4600

「ギルティギア！？」

ギルティギアの攻撃力は『連合軍』と『コマンド・ナイト』『侍の戦場』によつて強化されて4600。

「アルカナを上回つて来た……！？」

「行くぞ！ 『鋼鉄の魔導騎士 ギルティギア・フリード』で『アルカナ ナイトジョーカー』を攻撃！ 『魔導鋼破斬』！」

「カウンター罠『攻撃の無力化』！ バトルフェイズを終了する！」「ちっ！ ならオレはカードを一枚セットしてターンエンドだ！」

流れは悪くなくなってきた。だがまだ相手のペースだ。

「……俺のターン、ドロー！」

カードを引いたセツの目の色が変わる。仕掛けてくる気か！

「だが、そうはさせねえ！ オレはリバースカード『王宮のお触れ』を発動！ トラップを封じ込める！」

「！ そつちこそ、やらせない！ カウンター罠『魔宮の賄賂』！
無効化する！」

「クソツ！ まだ、まだダメなのかよ！」

「そして、トラップを無効化したことで俺は手札からモンスター効果
を発動する！」

「カウンターして効果発動……！？ まさか！」

「来い！ 『冥王竜ヴァンダルギオン』！ トラップをパーミッション
した場合、カードを一枚破壊する！ 俺が破壊するのは当然『侍
の戦場』！」

『冥王竜ヴァンダルギオン』 ATK 2800

「しまった……！」

ロツクが……崩れる！

「これで最後だ……！ 俺は手札から『ライトニング・ボルテック
ス』を発動！ 手札一枚をコストに、剣士のモンスターを全て破壊
する！」

「くっ！？ だが『鋼鉄の魔導騎士 ギルティギア・フリード』は
魔法・罠の効果によつては破壊されない……！」

『鋼鉄の魔導騎士 ギルティギア・フリード』 ATK 4600 2
900

それでも、焼け石に水だが。

「バトルフェイズ！ 『アルカナ ナイトジョーカー』で『鋼鉄の魔
導騎士 ギルティギア・フリード』を攻撃！ 『ロイヤル・ストレー
ト・スラッシュ』！」

「があっ……！」

剣士LP 2100

「トドメだ！ 『冥王竜ヴァンダルギオン』でプレイヤーにダイレク
トアタック！ 『冥王葬々』！」

「ぐああああああっ!?」

剣士LP 0

「大丈夫か？」

「……ああ」

無然とした表情で座り込んでいる剣士に手を貸す。

「お前、大分テンパってたろ？」

「…… 未完成のデッキ使ってた奴に言われたかねえよ」

「…… バレてたのか」

苦笑する。こいつは思った以上に頭が良い。観察力もある。

「未完成、ですか？」

「ああ、そのことも……」

「あーっ！ なんかもう終わっちゃってる！」

「さだめ？」

アテナに事情を説明しようとしたところでさだめが十代たちを引き連れて駆け寄ってきた。

「うおっ ホントにいたぜ！？ すごいな妹さん……」

「さだめのお兄ちゃんリーダーは例え地球の裏側にいても感度良好

！」

「でもさっきまではわかんなかったツスよね？」

「…… 異世界だとさすがにジャミングが酷くて……」

「…… 発信器か？」

「ううん。気配」

「お前は何者だ……」

「あと声。脳内に響いてきた」

「テレパシー……!?!？」

「……で、何しにきたんだお前ら」

今更さだめの異常性については突っ込むまい。……そういえば今までさだめに盗聴器や発信器を取り付けられたことはなかったな。なるほど。自らがその代わりとなる優秀なリーダーそのものだったら、確かにそんなものいらぬな。……納得しづらいけない気もす

るが。

「あつ！ そうだよ、お兄ちゃんアテナには帰ってきてすぐ会っておいて、さだめの所には来ないってどういうこと!?」

「……帰って来て丁度アテナがいたんだよ。あいつを連れてな」

そこでさだめは初めて気付いたというように剣士に顔を向ける。

「誰？ アテナの愛人？」

「ち、違います！」

「っば……何言ってやがるこのチビ！」

「チビ……」

さだめが沈む。相変わらず体型の話題では打たれ弱い奴だ。というか、友達やら兄妹やらが出てくる前に真っ先に愛人をセレクトするさだめの脳内に末期を感じる。

「おつ！ もしかして編入生か!? なんだよセツ、いないと思ったら早速横取りしやがって」

「いや、それもかなり成り行きで……」

「つて、おおつ!? お前も精霊連れてるんだな！ オレ、遊城十代！ こいつは相棒のハネクリボーだ！」

『クリクリ』

『はっはっはっ、中々愛いヤツではないか。気に入ったぞ！』

俺はハネクリボーに笑顔で接しているネイキッドに声をかける。

「ネイキッド。さっきぶり、でいいのか？」

『うむ。無事、テンスの協力は得られたようで何よりだ』

「ああ。エースの方は、無理っばいけどな」

『何。エース殿とて、時が経てば理解もしてくれるであろう。何せ、お前さんは我が認めた男なのだから』

「なんだ？ ネイキッドと知り合いたったのか？」

「まあな。ついさっきまで精霊界で話してもいたから」

ネイキッドから、お前のことも聞いていたと話す。剣士も、それを聞いて俺がネイキッドの話していた人間だと気が付いたらしい。

「知らねえ間に、デュエルするっつー伝言は果たしていたわけだな」

「そうなるな。俺は途中で気付いたけど」

最初こそ気付かなかったが、剣士の後ろでネイキッドが見ていたことには気が付いた。

「……っーかよ」

「ん？ なんだ？」

「こいつら……全然オレ見てもビビんねえんだな」

そんな剣士の感心したような呆れたような呟きに、みんなも苦笑するばかりだ。

「はん！ この万丈目サンダー様が貴様ごときにビビるだと？ 冗談も程々にしておけ！」

「眼つきは悪いツスけど……今更ツス」

「さだめはお兄ちゃん以外どうでもいいし」

さだめは答えなくてもよろしい。

「まっ、オレたちは妹さんとかので慣れてるからな！ それよりオレともデュエルしよーぜ！」

「……そのチビが一体なにやっただってんだ？」

それは……。

「聞くも涙語るも涙、と言うか……」

「聞くも失禁語るも失禁」

『それだ』

あまりに的確な答えに思わず全員でルインを指差してしまう。

「いや何があった！？ そんなんでそのチビは照れ笑いしてんだ！？」

「いやーあの頃はさだめも若くて……」

チビ呼ばわりされている奴が年寄りぶるな。

「はあ……何だよ。悩んでたのが馬鹿みてえじゃねえか」

「そうですね！ 剣士さん良い人なんですから胸を張ってください！」

「お、おう……」

ん？ なんかちょっと頬を染めてる……？

「！ ほおーそっかそっかこれは……」

「チャンス」

何やらさだめとルインが顔を寄せてこそこそとしゃべっている。

「……おいセツ」

何を話しているのかと聞こうとした俺に、剣士が話しかけてきたのでそちらに対応する。

「ん？ どうした？」

「またデュエルすんぞ。今度はお互い万全の態勢でな」

「……ああ。もちろんだ。今日のはノーカンで……」

「ざけんな。負けは負けだ。言い訳させるんじゃねえよ」

「……そうだな。んじゃ、そういうことで」

「オレもオレも！ なあ剣士、オレともデュエルしよーぜ！」

「つたり前だ。お前らだけじゃねえ。誰とだってデュエルしてやらあ」

「よっしや！ んじゃ早速……」

「今日は勘弁しろって」

「えー！？」

「これでもやること溜まってんだよ！ 荷物の片づけだのアカデミアへの謝罪だのめんどくせえイベント盛り沢山だ」

「あ、じゃあお手伝いしますね」

「あ……お、おう」

そんな感じで話が流れていき、さだめたちの密談に注意を向けなかったのが、後日の騒動に繋がるきっかけになることに、俺はついに気が付かなかったのだった。

「……これはチャンス」

ルインの言葉に、しかしさだめは首を振る。

「甘いよルイン。確かに一見ライバルを減らして優位に立つチャン

ス。だけど昔の人は良いことを言ったよ。『ピンチの時こそ最大のチャンス』だって。それは裏を返せば『チャンスの時こそ最大のピンチ』とも取れる」

「なんと……」

「アテナと編入生をくつつける。その基本方針は悪くない。でも、そこに拘った拳句失敗するのはラブコメの鉄則。今まで特に気にしていなかったけど新しい男の影ができることにより相手を意識し始めて……なんて良くあること」

「……深い」

「だからむしろ、あちらは好きに泳がせる。そして無意識の内に邪魔をさせて……その間に自らの基盤を固めるのがベスト」

「……師匠」

「やめて。さだめなんて十五年以上もかけて未だに大金星を上げられない未熟者だよ」

「……では、この機会に」

「そう。ライバルを脱落させる要素は増えたけど、それを敢えて“利用しない”。邪魔ではなく攻めの姿勢を取る」

「あの計画……」

「そう。そのための準備も大方終わっているから、すぐにでも仕掛けるよ。……フフフ。大丈夫だよ、ルインにも十分甘い蜜を吸わせてあげる」

「……今回は従う」

「そう、それでいいよ。そうすればきっとだれもが幸せになれるから……フフフ」

……水面下でそんな陰謀が始まっていることに、セツは終ぞ気が付かなかったのだった。

第二期第十話「らしくない」(後書き)

ふむ。というか、以前のを知っている人からすれば退屈極りないですよ。もう一気にアップしてしましましょう。ほぼ変わっていない話もあったりしますし。

それでは、悠でした！

第二期第十一話「御堂さだめの陰謀」(前書き)

例によってタイトルからしてパクリ臭全開の第二期第十一話改訂版です。

とはいえ、改訂版とは名ばかりで、変更点は剣士の一人称を「俺」から「オレ」に直したくらいのささやかなものですが。

第二期第十一話「御堂さだめの陰謀」

アルカナく切り札の騎士

第二期第十一話「御堂さだめの陰謀」

どうして……。

どうしてこうなった……。

「さだめっ！ おいさだめしっかりしろ！」

目の前には、血塗れでぐったりとしている俺の妹。さだめの血液が俺の頬を伝う。

生温かい。

「なんで……こんなことに……」

俺は、こうなるまでの経緯を思い出していた。

「デュエル？」

「うん。新しいデッキができたから、お兄ちゃんとデュエルしてみようと思って」

「それはいいが……」

何をたくらんでいる。

そう声に出さなくてもそれは伝わったようで、バレた？ とか言いながら苦笑している。

「そりゃな。さだめが何の利もなく行動を起こすとは思えん」

「信用ないなあ〜」

「信用されるような行動を一度でも取ったと自信を持って断言できるか？」

「できる」

「お前に聞いた俺が馬鹿だったよ」

「こいつに常識が通じないことくらいわかっていただろうに。」

「……で、何が望みだ」

「さだめがこのデッキでお兄ちゃんに三連勝したら、デートに連れてって」

「デート？」

「思ったより要求が軽い。もっと無茶振りがくるかとも思ったが……」

「そう。デート。ただし、キス付きで」

「却下です」

俺が何か言う前にアテナが却下した。

「いいじゃんアテナはもうしてるんだし」

「ダメです！ というかあれはまったく正気じゃなかったの……」

「じゃあお兄ちゃんのファーストはルインということに……」

「私が最初です。異論は認めません」

「前言撤回早っ！」

「どっちにしても却下です！ なんとというか……さだめさんの言うデートは非常に不健全な香りがします！」

「そこには同感だな。デートだからとベッドインを強要されそうで怖い」

「え？ デートの締めはベッドインでしょ？」

「その常識は捨てなさい。お兄ちゃんからの忠告だ」

「そ、そうなんですか？ だ、だとしたら私……」

「アテナも間に受けるな。お前とはまだ強制デート権（絶対服従）が残ってるんだからその常識の下に行動されると危険だ」

主に、倫理委員会（運営）が。

「うん。さだめのウソだから本気にしちゃだめだよ」

「自分に不利になりそうならあつさり前言を翻すんだなお前は」

「でもせめてキス！ キスくらいは！」

「……マウストウマウスはなしだ」

「イエッサー！」

「セツ!？」

「経験上、ここら辺が妥協点だ。唇でさえなければギリギリ兄妹のじゃれ合いの範疇に……入るよな？」

「入りません」

断言された。

「いいじゃんアテナは散々お兄ちゃんとイベント消化してるんだしさだめもお兄ちゃんからフラグ立てて欲しいんだよ」

「……さだめさんの言葉は時々よくわかりませんが、とりあえず最近は良い目を見た記憶がありませんよ私」

「シリーズ全体を見ようよ」

「だから全く意味がわからないんですが、とりあえず危険なセリフだということは理解しました」

「さだめ関連のフラグは脆い！」

「例によって意味はわかりませんがここは絶対に否定しておくべき個所な気がします！」

「とにかく、お兄ちゃんはそれでいいんだよね？」

「……仕方ない」

「うう〜」

「すまん、アテナ。なんか頷かないと後が、というか今現在進行形で怖い。」

「じゃあ……デュエルしよう！ さだめの……禁止デッキと！」

「よし、待とうか」

「え？」

「何故不思議そうな顔をしているのかむしろこちらが聞きたいです……」

「だって普通のデッキで三連勝とか無理だよ？」

「禁止デッキ相手に一勝するのとどっちが難しいかなあ!？」

「じゃあ五連勝。これでどう?」

「禁止デッキを止める、という選択肢はないんですか……?」

「ない!」

「なんでも自信満々に頷けば許されると思ったら大間違いだ」

「ねえお願い! 良いじゃんデートくらいしてくれたって。減るもんじゃなし」

「将来の選択肢がガリガリ減りそうなんだが……」

「お願い!」

珍しいことに屁理屈捨てて頭下げてきやがった。

「……はあ、しょうがない。五連勝な。条件はそれ以上まからなからな」

「やった! お兄ちゃんありがとう!」

「セツ?」

ジト目で睨んでくるアテナに慌てて弁解する。

「いや、さだめがここまで頼み込んでくることって今までなかったし……」

問答無用か実力行使の二通りしかなかった。どっちも同じか。

「うう。わかりたくないですけど、仕方ありません」

「ありがとうございます! アテナ!」

「うっ……確かにここまで素直で普通なさだめさんは初めてです……」

二人とも、ここまでの経緯や禁止デッキには目をつぶっていた。

「よしそれじゃ、さだめの先攻でも良いよね?」

「……しょうがないな」

「「デュエル!」」

「さだめのターン、ドロー! さだめは手札の『処刑人 マキユラ』を捨てて『THE トリック』を特殊召喚! 『処刑人 マキユラ』の効果で罨カードを手札から使用! 『破壊輪』でトリックを破壊

してお互いに2000ダメージ手札から『地獄の扉越し銃』発動お兄ちゃんに2000ダメージ！」

「……わつつ？」

セツLPO

「まずは一勝！」

俺は……選択肢をミスった。

「で、結局こうなるのか……」

翌日。俺は結局さだめの思惑通りに五連敗を喫してデートをすることに。

「いやーここまで綺麗にハマってくれると色々策を弄したのが馬鹿らしくなってくるよ」

「素直で普通なお前を幻視した俺も馬鹿らしくなってきたよ……」
結局全部さだめの手のひらの上だったらしい。

「でも残念。ホントはもっと色んなところを見て回りたかったのにさだめの溜息も尤もだ。アカデミアには何だかんだで娯楽施設は少ない。デュエルという趣味と実益を兼ね合わせたものがあるのだから基本的にそんなものが必要なかったのだろう。だが、さだめたち思春期真っ盛りの少年少女たちの中にはこうしてデートをする際に苦言を呈すものも少なくない。

「そついやアテナも困ってたな。デートプランが作れないとかって」「こら、デート中に他の女の子の話題禁止！」

ちよつと不満げな顔のさだめにそう窘められる。感情の動きや好意自体には鋭いつもりだが、どうも俺はデリカシーというものに欠けるらしい。まあ相手が妹のさだめだからという理由もあるのだろうが。

「しっかし、いいのか？　なんかこうして島の中ぐるぐる回ってるだけで。見なれたもんだぞ」

「そりゃあさだめ自身としたらもつと色々刺激的なこともしたいし
アブノーマルちつくなデートも憧れるけど……」

「何故憧れるし」

「でも、お兄ちゃんは嫌でしょ？」

「……そりゃ、手放して歓迎は出来ないな」

「だから、今日はいいんだ。普通で」

「……そうか」

確かに、最近はずだめと二人つきりで何かするってこともなくな
ってきている。周りに喧しい友人が増えたからか。

さだめと静かに過ごす。ある意味では、昔からの夢だった。それ
が叶うというのなら、こういうのもたまにはいいか。

そんな風に俺は今日と言う日を……甘く見ていた。

(よし、とりあえず目標であつたお兄ちゃんをデートに連れ出すこ
とには成功したね)

さだめはすぐ隣にいる兄のぬくもりに恍惚としながら思考する。

(『チャンスは最大のピンチ』それならそれでライバルに『チャン
ス』を逆に与えてやればいい)

さだめはすぐ隣にいる兄の香りを胸一杯に吸い込んで思考する。

(即ち、さだめとお兄ちゃんのデートを邪魔“させる”。そしてそ
れを逆手にとつてごくごく自然に妨害を妨害する。これで勝ち)

さだめはすぐ隣にいる兄の感触に息を荒げながら思考する。

(そのための布石はすでに打った。あえてアテナのいるところでデ
ートを決めて、態々邪魔しやすいように島内でのデートに留めた)
きつとアテナは今頃自分たちの後方でやきもきしながらデートを
見守っていることだろう。純粹で単純な恋する乙女ほど騙しやすい
存在もない。

(後は、ルインが上手くやるだけ)

「……万事、抜かりない」
私は妹たちの右後方。つかず離れずの位置に陣取りながら邪笑する。

私の視界には、妹たちと、妹たちを後方から監視している“二人”の姿が鮮明に映っていた。

「……なあ、あーアテナ？ 別に何も起こりやしねえって。趣味良
いモンでもねえし、やめといた方が……」

「剣士さんはさだめさんの危険レベルを知らないからそう言えるん
です。あのさだめさんとセツを二人きりで置いておいたらセツの身
に何が起こるか……せ、セツのその、て、貞操が……」

本日は早起きしてデートを一日見張るつもりのアテナと、ルイン
によって唆されてアテナの付き添いとして同行している剣士の二人
だ。

「やっぱよお……尾行、なんてのは道理に反するっつーか……」

「甘いです。道理はおるか倫理や道徳性格思考その他諸々ありとあ
らゆる意味で反しまくっているさだめさんの前で、その考えは甘々
です。ストロベリークリームパスタ（苺味の Pasta に生クリームが
てんこ盛りの甘々パスタ）くらい甘いです」

「……それ、どこで売ってる？ 食ってみたいんだが」

実は無類の甘党である剣士はアテナとまったく違うところに目を
つけた。

「とにかく、今日一日は二人の監視です。剣士さんも付き合ってく
ださるというのでしたらマジメにお願いします」

「……くそう、なんでオレがこんなこと……」

あんな奴妹とくつついちまえばいいんだ、とかアテナの目的と正反対のことを考えながら、律儀にも二人を尾行し始める剣士だった。

「万事、抜かりないよ」

「なんか言ったか？」

「ううん、なんでもないよお兄ちゃん」

つまりはこういうことだ。さだめがセツとデートする。それを知ったアテナはデートを監視する。そこにルインが剣士を唆して同行させる。何かさだめが危険な真似をしたらすぐに飛び出してくるであろうアテナだが、裏を返せばさだめが何もしなければアテナも動かない。それくらいの良い良識、というか常識をアテナは持っている。

（なら、それを利用してあの二人もデートさせてしまえばいい。変則的なダブルデートによつて基盤を固める！）

そのために、敢えて今回のデートコースにはアテナが喜びそうなスポットを多数用意し、目的をさだめたちのデートから逸らさせるように調整もしてある。

（……後は、ルインの裏切りには気をつけておかないと。これが終わった後に、甘い蜜を吸わせてあげる約束を、さだめが律儀に守るはずがないことを、ルインは知ってるはずだし）

ルインはそんな間抜けではない。そうでなければ計画の片棒を担がせはしなかった。

（まあ、裏切ったら裏切ったで死の咎が降りかかるまでだけど）

さだめはちよつと前の闇モードチックな邪笑でルインのいるであろう方向を見つめた。

（表立って裏切るような真似はしない）

一方のルインも、さだめのそんな考えをしつかり見抜いていた。

(神を謀るうなどは、愚か)

ルインとてセツに焦られる一人。みすみす恋敵と二人のデートを成功させるつもりはない。

(手駒を使うまで)

自分で動けば証拠が残る。なら噂話などで自然と周りに働きかけるだけで良い。

(大丈夫。情報操作は得意)

どこぞのインターフェースのような事を考える。

(彼女は謀略の相方としては役不足。でも駒としてはとても優秀) 意図的に噂話が届くようにしておいた“彼女”を使って二人のデートを邪魔するつもりだった。

「まったく……わたくしの知らぬうちに逢引など……不純異性交遊はいけませんとあれほど申し上げたというのに……」

と、ルイン発信のさだめとセツのデート話につられてのこのこやってきたお姫様が一匹。

「今度こそはきつちりとセツ様に一言申し上げませんと」

しかし、そんな希^{ルイン}牙姫の思惑を邪魔するかのよう^{匹。}に現れた猫が一匹。

「あれー？ 脳筋姫だ。こんなところでなにしてんの？」

「今はどらねこに関わっている暇はありませんわ。というか、脳筋はおやめなさい」

「むー！ じゃあそっちこそどらねこやめてよ！ ボクは自由気ままなシャム猫だもん！」

「根なし草の野良猫の間違いでしょう」

「違うもん！ ぷりていきゅーとなマンチカンドもん！」

「短足なんですね。お可哀そうに」

「ムキー！ 誰が短足だこの我儘ツリ目の筋肉女ー！」

「そんなに筋肉筋肉してませんわよ！」

結局いつものように喧嘩になり、目的のデートのことはすっかり忘れてしまっ単細胞姫なのだった。

（ふふーん。ルインが脳筋姫を使ってくるくらい最初っからわかってたよ。そのために猫を一匹放っておいたから、その作戦は無駄だよ）

事前にジャックやキングといった辺りは無力化しておいたようだが、まだまだ甘い。

（このラブ・ウォーズを生き抜くにはもうちょっと経験を積むべきだよ。ルイン？）

しかし、そのさだめもただ一つ、見逃していることがあった。神の目についた、たった一つの小さな塵。しかしそれが時に神の思惑をも狂わせることにもなり得るのだ。

「あれー？ セツ君にさだめちゃん、こんなところでどうしたの？」

「ッー？」

「お、ユーキちゃん」

その出現に、さだめとルインの二人は同時に戦慄する。

（（しまった！ 沈黙の闇狩人！）
サイレント・ダークホース

存在をすっかり忘れていた。

（まずい……加藤さんに関しては対策を用意していなかった……）
（普段は出番が薄いのに、こと恋愛における影の濃さが半端じゃない……）

二人ともとても失礼なことを言っているが、それも仕方ないだろう。実際出番は少ないのだし。

（まだまだよ！ まだ終わらないよ！）

(戦いはこれから……)

「いやーさだめとの賭けにちょっと負けてさ。今日一日デートする羽目に……」

「ふーん……」

ちらり、とさだめの方を流し見てくるその目に、さだめは久しく感じていなかった恐怖を感じた。

(あれは……狩人の目！)

狙っている。覚醒したダークホースは明らかにこの場からセツを略奪していくことを狙っている。させない、させるわけにはいかない。

「ほ、ほらお兄ちゃん、そろそろ次のところに行こうよ！」

「え？ さ、さだめ？」

(ここからとにかく引き離さないと……！)

(これは、むしろチャンス？)

予期せず、自分の目的であったデートの妨害が成功している。しかも、真正銘自分は手を下していない完全な白。ある意味理想的な展開かもしれない。

(けど、油断はできない。チャンスはピンチ)

「あ、じゃあセツ君、丁度わたしも今は暇してて……」

まずい。デリカシー皆無のセツならここで簡単に「じゃあ一緒に来る？」とか言う可能性が高い。そうはさせない。

(くっ！ 大丈夫。焦らないでさだめ。相手は所詮天然系ナチュラルパーソンモブキャラ筆頭！ ここはさだめの華麗なナチュラルルーで……)

そしてここで、さだめにとっての救世主（？）が現れた。

「やあ諸君！ 今日も元気に胸キュンポイントを溜めているかな？」

（キタ！ ブリザードプリンス！ これで勝つる！）

さあ、ここで一波乱吹雪を巻き起こしてさだめの追い風となつて！ とさだめは吹雪にアイコンタクトを送る。

（つく……ここで流れを邪魔させるのはマズイ）

とはいえ自分が出ていくのはもつとマズイ。

（どうする？ ここはダークホースの力を信じる？）

「……ふむ。そうだね、加藤さんといったかな？」

さだめのアイコンタクトが通じたのか吹雪はユーキに声をかける。

「はい？」

「どうかな？ セツ君たちは今デート中のようだし、僕らも一つ」

「すみません今日は忙しいのでご遠慮します」

「そ、そうかい？ なら仕方ないなあハハハ」

にべもないユーキの拒絶に、百戦錬磨のブリザードプリンスも動揺を隠せない。

（ちっ！ 粉雪だったか！）

だが突破口は得た。それだけは感謝しても良い。

「それじゃお兄ちゃん、加藤さん今日は忙しいらしいし、さだめたちも行くろう？」

「あ！？」

「そっか、そうだな。じゃあユーキちゃん。また学校で」

(ちっ……未熟者)

所詮は天然系ナチュラルパーソンモブキャラ筆頭。高望みはするべくもない。

ここにきて、さだめもルインも悟っていた。

(やはり、他人は当てにならない)

(このラブ・ウォーズ、結局最後に頼りになるのは自分だけ！)

(そうやはり、自分の力で掴み取ってこそ……)

(イエス！ フォーリンラブ！)

ふたりの影に某芸人の姿が見えた。

「お兄ちゃんお兄ちゃん！ そろそろ今日の締めとしてさだめの部屋に行こう！」

「さだめの部屋って……危険な予感しかしないんだが……」

「そう。止めておいた方がいい」

「ルイン！？ 裏切る気！？」

「最早手段は選ばない。彼の貞操がかかっている」

「かかってないよ！ さだめ今日はプラトニック志向なんだから！」

「密室で二人きり。キス」

「襲うね。確実に」

「認めるの速えよ！ もうちよつと躊躇えよ！」

「は！？ つい極彩色の欲望がダダ漏れに！？」

「せめてピンク色であって欲しかった欲望！」

「語るに落ちたと言わざるを得ない」

「くっ……プラトニックに行こうと欲望を抑制しすぎた！？ 濃縮

還元された愛欲が制御できない！」

「だからか！ だから極彩色まで変色したのか！？」

その頃になってようやくこちらの異変に気が付いたらしい遙か後

方のアテナ　ちなみに森の動物たちに囲まれて地上のユートピアを作り上げていた　たちも駆け寄ってきた。

「さだめさん！？　そういうのはしないって話だったでしょう！　それに今の欲望の波動みたいなものの所為でうさぎさんたちが逃げ出しちゃったじゃないですか！」

「あの、アテナサン？　もしかして、それ俺はついであつぱくないですか？」

「ああ〜！　結局邪魔が入った！　折角色々考えたのに〜！」

「策士策に溺れる。よくあること」

「裏切り者が抜け抜けと！」

「私は破滅の女神」

「そのネタもう飽きた！」

「もうネタ切れ……」

「作者の都合か！」

「ああ〜もう少しでうさぎさんとコモドオオトカゲさんの夢のカップルが完成したのに……」

「この森の生態系カオス！　そしてそのカップルの未来前途多難！」

「こうなったら……お兄ちゃん！　せめてキス！　約束のキスだけでも！」

「させない。こうなつたらとことん妨害」

「セツ？　実の妹さんにキスとか……非生産的ですよ？」

「うさぎとコモドオオトカゲよりは生産的だよ！」

「ていうかアテナ怖い！　殺気！　殺気出てるから！」

「剣士……使えない子」

「いや、オレはあのユートピアに相応しくないかと……」

「意外と気が利く！」

「つていうかキス〜！」

焦れたさだめが捨て身で突っ込んできた。

「うわっ！？　ちょ、馬鹿んむっ！？」

「ツツツツツ！?!???!?!」

『ああ!?!』

時が、止まった。

「ん……………」

「……………」

ぶはっ!

突然さだめが鼻血を噴いた。

「さ、さだめっ!?!」

「ま……………まだ、死ぬわけには……………」

「さだめーっ!?!」

そして、話は冒頭に戻る。

「だ、だけど……………これは、いいもの……………ガクッ」

「くっやられた……………」

「や、約束が違います! マウストウマウスはダメって言ったのに……………」

「いや、あんたらが邪魔したからじゃ……………」

剣士の至極最もなツツコミに耳を貸す者はいない。

「お、俺は……………」

「セツ……………」

「俺は……………き、キスを……………」

「セツ、セツ? しっかりしてください!」

「さだめと……………? り……………^{リアル}実の……………^{シスター}妹?」

「ダメ……………呆然自失」

「あれ……………もしかして」

「そう。チャンス」

「今なら何してもバレなかったり……………」

「とりあえず……………脱がす?」

「待て待て待て! テメエら一体何するつもりだ!?!」

「ドキドキ……………」

「アテナ!?! お前まで……………」

とりあえず……………今この時点でのセツの貞操の行方はこの場で唯一

良識を保っている……。

「とにかく落ち着け！ いいか？ お前らは今正気じゃない。そしてセツの馬鹿もまた正気じゃない。こんな形でそんなことになればどちらも……」

剣士に全てがかかっているといっても過言ではないだろう。

第二期第十一話「御堂さだめの陰謀」(後書き)

こんにちは。

殆ど再アップでしかありませんが、十一話です。次の十二話や十三話は更にhん光展皆無です。消さなくても良かったレベル。

それでは、悠でした！

第二期第十二話「何度だって何時だって」

アルカナく切り札の騎士」

第二期第十二話「何度だって何時だって」

アテナが入院してた時に約束したデート十回。何だかんだと用事が重なってまだ四回ほどしかしていない。その時のことはまたいずれ語ることもあるだろうが、今回……即ちターニング・ポイントとなる五回目のデートは、俺たちの関係もまた転換期を迎えるに相応しいものになったと感じたので、今回はその時の話だ。

事の始まりは二日前。アカデミアの授業が終わり、放課後にいつものように駄弁っていた時まで遡る。

「セツ、日曜日……明後日は空いてますか？」

「ん？ ああ、今のところ何も無いな。デートか？」

「はい。大丈夫ですか？」

「ああ。問題ないぞ」

「……この会話に殺意を覚えるのはきつと罪じゃないツスよね？」

レッド寮男子を始めとした男子勢はすごい勢いで頷いている。…

…アテナ教の信者共が。

「……くっ、この件に関しては文句を言えないさだめの立場が憎い！」

「あ、そうだ。明後日は目覚ましをかけないでください」

「は？ それだと寝坊するかもしれないが……」

「いいんです。私が起こしに行きます！」

「なんでまたそんな面倒くさそうなの……」

「さだめにはわかる……眠っているお兄ちゃんが無防備な体 pensando 存分……」

「セツを私の手で起こして、私の作った朝食を食べて貰って……そんな感じのことがしたいんです」

「え、あれ？ さだめには文句はおろかギャグで口を挟むことすら許されないの？」

「そりやまた……やると宣言されると目が覚めそうだが……」

「あうう〜お願いですから寝てくださいよ〜」
「どうか……さだめに対する警戒態勢で目を覚ましやすい体質だから……」

「こんなところでも邪魔が……」

「うわなんか無視されてるのに邪魔者扱いされてる！ 流石に理不尽を感じるよ！」

横で何やらさだめが騒いでいるが、この話題ではあまり突っ込んで来ないので無視しておこう。

「朝ごはんも私が作ります！」

「へえ、アテナの料理か……」

「セツと比べられるとおままごとみたいなものですけど……」

「いや、むしろ俺のは料理じゃないしなあ……」

「セツの料理はアートですからね……」

「ん。まあ了解。じゃあ明後日は丸ごとお任せしますか」

「はい！ ふふ、楽しみです」

とりあえず……今はこの殺気立った連中からどう逃げ切って日曜日を迎えるかを考えた方が良いな。

そしてあっという間にデート当日。

「……ッ。……セツ、起きてください」

「む……あてな……？」

「はい。ふふ、良かった。ちゃんと寝てくれました」

「ああ……そっか。デート、だったか」

「……ホントに寝ぼけてますね。ちよっとレアです」

「むう……かお、洗ってくる」

「はい。私は食堂でご飯用意しておきますね」

「ああ……」

アテナに促され、洗面所へとふらふら向かう。冷たい水で顔を洗ってようやく意識が覚醒してくる。

「ふう……十代たちは、まだ寝てるな」

それほど早い時間というわけでもないが、休みだし早く起きる必要もない。寝かしておいてやろう。

「アテナは……食堂だったか」

アテナの料理の腕自体は、それほど問題ない。一度教えてくれと言われた時味見等もしたが、普通に美味かった。ちよっと包丁の使い方などはらはらするようなところもあつたとはいえ。

「あ……」

そういえば、俺が遅く起きたらレッド寮のメシ作るやついないじゃん。

「まさか、それもアテナが作ったのか？」

あいつはレッド寮男子に対して甘いところがあるからな。おかげですごい勢いで信者が増加している。

「アテナー？ 来たぞー」

「あつ、おはようございますー！」

食堂の戸を開けた俺を迎えたのはアテナのエンジェルボイスとレッド男子のアンデッドアイズ。寝起きだからかその禍々しさは五割増しだ。

「なあ、こいつらのメシって……」

「あ……それなんですけど、ごめんなさい。セツが食事当番だったなんて知らなくて……」

「あーってことは、こいつらは今飢えた獣なわけだ」

「あの、私やりますか……？」

「あーいいっていいって。こいつらの分は俺が適当に用意するさ」
殺気が増加した。せつかくアテナの手料理が食えるかと思つたのに何故責様が……！ みたいな感じだ。馬鹿が。そう簡単にアテナの手料理が食えると思うな。

「そうですか？」

「ああ。アテナ、そういうことだから、俺も手伝つよ」

「は、はい……じゃあ、お願いします……」

何故か顔を赤くして尻すぼみになっていくアテナ。

「どうした？」

「その……一緒に台所に立つってというのが……新婚さんみたいで……えへへ」

そのアテナを可愛いと見惚れる余裕は俺にはなかった。ぶつた切られたかと錯覚するくらい濃密な殺気が周囲から一斉に放出されればそれもしかたないだろう。さだめがいなかっただけ救われた。

「と、とにかくやるぞ。あ、あいつらも腹減って殺気立って来てるみたいだからさ」

殺気立っている理由はそんなことではないのだが、若干天然入っているアテナならこれで簡単に信じ込む。

「はい！ あ、あな、あなた……」

「……」

うん。だからそろそろ殺気が物理的圧力を持って襲いかかってきているから！ このポロいレッド寮食堂がミシミシ怪しい音立てて軋んでるから！

嬉しいというかアテナの積極性に恐怖を感じる。

「……アテナ。怖いから包丁プルプルさせるのは勘弁してくれ」

「す、すみません不器用なもので……って、そんなセツみたいに二刀流で空中分解させるような人と比べないでください」

「なればこっちのが楽でな」

「それは絶対ウソです」

そんな感じで朝食。

……その際起こった事件についてはまだ始まったばかりだということに俺の精神力が尽きかけているのでダイジエストでお送りする。

「セツ、あ、あーん……」

「皆の者！ 武器を、武器を持ってえい！」

「あつ、セツ口にご飯粒付いてます。私がつて……はむ」

「核！ 米軍に出動要請だ！ この島ごと焼き払ってくれる！」

「おうともさ！ 一思いに俺たちごと葬ってやれ！」

……すまん。ダイジエストにしても俺の精神が持ちそうにない。後、周囲から放たれる怒りの波動で燃え尽きそうになる。

……ここで燃え尽きそうになってる場合じゃないんだが……とにかく、一番重要なところはこのではない。ここまでは割といつも通り……ごめんなさい物を投げないで！……アテナの積極性はいつものことだが、この日は特にそんな感じがしていた。今思えばアテナも不安だったのか、それとも焦っていたのか……どちらにしても、その原因は俺にあったんだろうな。

「それじゃ、行くか……」

「だ、大丈夫ですか？ なんかすごく疲れってますけど……」

「だいじょうぶ私は平気」

「一人称すら変わってますけど……」

正直危なかった。さだめの所為で命の危機は何度も経験してきたが、その俺にして死の淵を見た。

「で、今日はどこに行くんだ？　って言っても、アカデミア内は大方向った気もするけど」

「今日は……」

顔を赤くして言い淀んだアテナが躊躇いの後に口に出したのは……。

「私のお部屋……です」

「な……」

アテナの決意を秘めた提案に、俺たちは二人して動きを止めて見詰めあった。

これは……危険だ。

「ど、どうぞ……」

「あ、あーお構いなく……？」

くそう……流石にこれじゃ自然体をキープすることは無理がある。いつもみたいな隠密行動ができやしねえ。

「……」

「え、えっと……ら、楽にしてください」

そりゃ無理な注文だ。正直すぐに気を失いそうだ。

「あー……つと、そっぴやシャルナとかはどうしたんだ？」

危険な空気を払拭しようと、つい最近見てない精霊の名前を出してみる。

「……シャルナなら今日はネトゲのイベントデーだから声をかけるなって言っていました。そ、それより、他の女性の名前は出さないでください。せつかく二人つきりなんですから……お、お部屋で」

……作戦失敗。

「そ、そうだ！　せつかくだからデュエルでも……」

「しゃ、シャルナが今日は呼ぶなって言っていました！」

「あ、だ……」

失敗！ というか成功する気がしない！

「ど、どうしたんだアテナ、今日ちよっとおかしくないか？」

「おかしい……ですか」

「あ、ああ。なんていうかいつも以上に積極的と言うかさだめチツクというか……」

「……さだめさんチツクはショックです」

「……そうだな。悪い」

でもそのおかげで少し空気が軽くなった。ナイスさだめ。

「で、どうしたんだ？」

少し余裕の出来た俺は、今朝からどうも様子のおかしかったことを尋ねてみる。しばらく言おうかどうか迷っていた様子のアテナだったが、やがて口を開いた。

「……私、自信がなかったんです」

「自信？」

「はい。セツに恋人に選んでもらえる自信です」

「うぐっ……」

そこまではつきり言われるとふらふらしている自分が情けなくなってくる。

「ルインさんもさだめさんもセツとキスして……希冴姫さんはまたセツのパートナーとして信頼を勝ち取って……加藤さんだって最近積極的になつてきました。私の持ってたアドバンテージ、全部なくなっちゃいました」

「アテナ」

「でも、私はセツが好きだから。絶対絶対、誰にも渡したくないから……」

「アテナ……アテナは、いつも俺の事を好きだって言ってくれるな」
「当たり前ですよ。好きなんですから。何度だって何時だって、セツに好きって言いたいです。でも、どれだけ好きって言葉を重ねて

も、セツの傍には居続けられない」

俺は……。

「セツ！」

「っうぁー！」

思い切りアテナに飛びつかれ、俺は背後にあったベッドの上に倒れ込む。その俺の上にアテナは馬乗りになって……。

「お、おいっ！？」

「……セツ、知ってましたか？」

「な、何を……」

「私も結構……えっち、なんですよ？」

「ツツツツッー！」

マズイマズイマズイマズイ！ 頭の中が段々真っ白になってきた。

何も考えられなくなりそうで……。

そりゃそうだ。憎からず想っている女の子にこんなことされて、

正気でいられるなんてどうかしている。

俺はアテナを勢いよく抱きしめる。

「きゃ……」

「アテナ……よく聞いてくれ」

それでも俺は自制心をフル稼働させて自分の情動に耐える。

「は、はい……」

「俺は……このアカデミアでアテナに会って、告白されて……その答えを保留した」

「はい」

「きつと、それが一番最悪な……俺の罪だ」

「セツ……？」

俺は考える。あの時、不誠実な答えは返したくない、なんて考え

ずにオーケーしていたら、一体どうなっていたのか。それはわからないが、それでも今、こうしてアテナを不安にさせて、こんなことをさせてしまったのは俺の罪だ。

「あれから……希冴姫やユーキちゃん、さだめにルイン。たくさん俺を慕ってくれる人たちがいて……もう、誰か一人なんて選べない。選びたくない」

「我儘……ですよ？」

「わかってる。最低だ、俺……でも、俺には……大切な人が出来過ぎた」

「セツ……」

俺は想い浮かべる。大切な人たちの顔。自分の想いを。

「さだめは……ずっと一緒に居てやりたいて昔から思ってた。希冴姫には、ずっと傍で支えてもらいたい。ルインには、笑顔を取り戻して、幸せにしてやるって約束した。ユーキちゃんと一緒の時間は心地よくて、疲れた俺に癒しをくれた」

「私……は？」

「……離したくない。絶対に、何があっても」

俺はアテナをさらに強く抱きしめた。

「あ……」

「だから、ごめん。俺がここでアテナをどうにかしてしまえば、きっとその先はバッドエンドだ。俺にとっても、アテナにとっても」

「私……」

「だからアテナ……いつかと同じで、答えは保留だ。今答えを出すのは遅すぎて……早すぎる」

「もう……愛想尽かしちゃいますよ……？」

「そうはさせない。離さないから」

「でも、隣においてはくれないんですね」

「ああ」

「勝手……です」

「ああ」

「勝手にすぎます。女の子の気持ち、全然わかってきてくれてません」
「ああ」

「でも……何ででしょう。すっごくセツらしくて……それでいいって、思っちゃいます」

「ああ」

「セツの心臓……とくんつとくんつて動いています。緊張、していますか？」

「当たり前だ。っていうか、アテナに言われたくない」

「だって……セツの気持ち伝わってきます。こんなにあったかくって幸せなモノが流れ込んでくるんです。私、どこかに飛んで行っちゃいそうです」

「そっか」

「しばらく……こうしててください。それくらいはいいですよね？」

「アテナの気が済むまで、な」

「じゃあ、一生です」

「……悪い。前言撤回する」

「もう、しょうがない人です」

「なんか、年上っぽい反応」

「酷いです。気にしてるのに」

「いいじゃないか。俺は年上好きだぞ？」

「そうなんですか？」

「少なくとも、アテナはそのままが良い」

「……じゃあ、いいです」

「そうそう。俺たちの優秀なツッコミ役兼ストッパーのままで居てくれないと」

「そんな理由なんですか!？」

「はははっ、その調子その調子」

「もうっ……」

すっかりいつもの調子で語り合う俺とアテナが、そのとんでもなく危険な体勢と距離にお互い真っ赤になって離れたのは、すっかり

日が沈んで夕食の時間になってからだった。

第二期第十二話「何度だって何時だって」(後書き)

こんにちは。

例によってピロートークなアテナメインの話。アテナメインの話はラブが濃厚。というかズシリと重いラブです。一撃が。それでは、悠でした！

第二期第十三話「天岩戸の駄女神さん」

アルカナ「切り札の騎士」

第二期第十三話「天岩戸の駄女神さん」

「セツく助けてくださいい」

「アテナ？ どうしたんだいきなり」

珍しく途方に暮れた様子のアテナが泣きついてきた。

「なんですの？ 折角セツ様に一矢報いることが……」

「ほいそれロン」

「あ……」

「やれやれ。これで希冴姫はハコですね」

「相変わらず腹芸は苦手じゃのう……」

「呑気に麻雀してないでください！」

「いや、希冴姫が興味あるっていうから……」。

「んじゃ希冴姫抜けてテンスなー？」

「……主、今はゲームを続けている場合か？」

「そうですね！ 私の話聞いてください！」

アテナがいつになく必死なのでギャグのノリを止めてアテナに向き合う。

「で、どうしたんだ？」

「シャルナが……シャルナが！」

「……シャルナがどうした？」

悲痛な表情のアテナ。そこにとてつもなくシリアスなものを感じ

て表情を引き締める。

「シャルナが完全にニートになっちゃいました！」

「……………なんだ、ただのギャグか。」

「あっ！ ちょっと麻雀に戻ろうとしないでください！ ホント、助けてくださいって！ 結構切実な問題なんですから！」

「……………まあ、話だけは聞いてみるか」

シャルナがニートって、なんか今更じゃね？

「今日、加藤さんとデュエルしてた時なんですけど……………」

『アテナ』のカードが全く来なくて苦戦したとのこと。……………それでも勝つたらしいところがアテナらしい。

「だからそのデュエルの後でシャルナを呼んでみたんですけど……………」

『今忙しい』とかってすぐ引っ込んでしまった

「なんとという……………主を守る精霊ともあるうものが個人の都合でその責務を放棄するとは……………」

「だから、セツに説得するのを手伝って欲しいんです。必死に呼びかけてたんですけど、途中から『レアアイテムゲットの邪魔だからしばらく放っておいて』とか……………」

もう偉い天使さまとか面影が欠片もないな。ただのヒツキーだ。

そんなシャルナに憤懣やるかたないといった様子の希冴姫が鼻息も荒く立ち上がる。

「セツ様！ 同じ精霊として看過できませんわ！ 説得などと甘いことを言わず、精霊界まで行って引きずり出してくるべきですわ！」

「あ……………まあ確かにデュエルにまで影響与えるのはマズイよなあ

……………」

「精霊界……………セツ！ 私、私も行きます！」

そういえばアテナはまだ精霊界に行ったことなかったか。

「前から行って見たかったんです！」

「良いのか？ 希冴姫」

「問題ないでしょう。冥界や万魔殿のようなところに近づかなければ危険はありませんわ」

「……俺、冥界にケンカ売った気がするんだが」
「流石セツ様ですわ。他の凡夫とは何もかも違いますわ」
「誤魔化してるよな？」
「ところで、どうやって行くんですか？」
「俺が扉を開く。そこを通るだけだ」
「……それも無駄スキルですか？」
「……それでいいや」
特殊すぎるが。
「それではセツ様。お願いしますわ」
「なんか最近魔法使いになった気分だ。」
「てい」
「……あの、これパソコンですよな？」
「さあアテナ。こう叫ぶんだ。『デジタルゲートオープン！』」
「デジ　ン！？」
「ぶつちやけ扉のカチは何でもいいらしくてな。ならそこは遊びを入れるかと」
「じゃあ叫ばなくてもいいんですか？」
「……叫ばなくちゃいけません。叫びましょう。レッツ・シャウト」
「！」
「嫌ですよ！ 恥ずかしいです！」
「むしろそれがいい」
「ドS!？」
「まあ、アテナ弄りはこんなもんでいいか」
「セツ……なんか意地悪です。この間はあんなに優しくかったのに……」
「……セツ様？」
「ナニモシテマセン。ボクハムジツデス」
「ベッドの上で……」
「セ・ツ・さ・ま？」
「お兄ちゃんどういうこと!?!？」

「お前は一体どこから現れた!? 一話に一回発言しないと気が済まないらしいな!？」

「出番がなければ首が回らなくなるからね」

「お前に関しては問題ないんじゃないかなあ……」

「セツ、また抱いてくれませんか？」

「ウソつかないで！ お兄ちゃんはまだ童貞！ さだめにはそれがわかる！」

「アテナもアテナだがお前も何言っちゃってんの!? そんな悲しい事実を明らかにしないで!? そして何故知っている!？」

「さだめはお兄ちゃんが今まで捨てた子種の数すら諳んじられる自信がある!？」

「もうお前は黙れ!？」

「……そろそろ軌道を修正しろ。女神はどうした」

「おっと、すまん。ついいつもの調子で」

「……前途多難だな」

テンスはテンション低くてストッパー役が板に付いている。ジャックの立場が危ういな。

「……心配するな。喧嘩の仲裁はジャックの仕事だ」

「……私は出番を奪われたいですが」

まあ、とにかくそろそろシャルナを連れ戻しに行くか。

「デジ ルゲートオープン!」

「ホントに叫ぶんですか!？」

アテナのツツコミを背景に、俺たちはパソコンに吸い込まれていた。

「ほい到着」

「ホントにあれで来ちゃいました……」

「へえ〜ここが精霊界なんだ〜」

結局さだめも着いてきた。こいつは意地でも出番をもぎ取ってくるな。

「シャルナはどこにいるんでしょう……？」

「……彼女はヴアルハラ在住」

「あ、やっぱりそうなんですか……」

「上級天使は大抵そう。私もそこに別荘がある」

「別荘つてすごいですね。ルインさんってお金持ち……え？」

「待てルイン。何故居る」

「神出鬼没は萌えポイント」

「そういう問題か……？」

「私ならヴアルハラフリーパス。道案内もする。今ならキミのキス

一つでお買い得」

「さよなら」

「また人間界で会いましょうね」

「……冗談。タダでいい。私は投げ売り」

「その発言も問題あるからな？」

「……まあ、素行に問題は残りますが上級天使の同行がなければヴアルハラに入るのに手間がかかりますから、同行させるべきですわ
基本嫉妬深い希呀姫（まあ全員そうだが）が同行を勧めるのは珍しい。

「ヴアルハラまでは少し遠い」

「……待て、この展開は」

「よう！ このサイクロイド様に……」

「カウンタートラップキックバーク！」

「ぎゃあああああつ！？ それただの蹴り！ キック！ なにしやがんでい！」

「もうお前ネタ良いよ！ なに準レギュラー気取ってんの！？ お前精霊界来るたびににいるじゃん！ 下手したらシャルナより出番多いよ！」

「それだけ俺っちの人气がすごいってことよ！」

「誰一人お前の再登場願ってなかったよ！ お前の人気、お前が思ってるほどすくなくないよ！」

「内心で燻ってるだけよお！ この出番によって隠れていた人氣が爆発すんのさ！」

「お前のそのポジティブさ何か怖いよ！」

「お兄ちゃん、お友達？」

「敵だ。不倶戴天の敵。マイ・エネミー」

「……流石に、これに全員は乗れませんよ」

「おおつと可憐なお嬢さん、俺つちを舐めちゃあいけませんぜ。俺つちには必殺の巨大化がありますさあ」

「誰が漕ぐつもりだ。誰も足届かねえよ」

「つち！ これだから近頃の人間は短足でいけねえ！」

「昔の人間でも無理だよ！」

「つたく……コイツを交通手段に使っている精霊界は何かが間違っている。」

「さてどうするか……俺たちが途方に暮れていると、地の底から響くような声が聞こえてきた。」

『我が運ぼう……』

「へっ……？」

「まさか……」

ズズズツ……と地面の影から現れたのは……。

「ヴァンダルギオン！？」

『こうして話すのは契約の時以来か。我が駆り手』

「あ、ああ……しかしまたどうして……」

『……カイエンに泣きつかれた。そろそろあの戦女神をどうにかしてくれと』

「どうやらシャルナの怠慢は精霊界でも問題になっているらしい。」

「しかも結構大きな。」

『そんな時、我が駆り手たちも同じ目的でやってきた。ならば手を貸すのが近道というもの』

そういうことか。まあタイミングが良かったんだかなんだか……。

「……シャルナがちゃんと働かないと冥界も苦勞する」

「そうなのか？」

「嘆願書を適当に処理して凶悪犯を勝手に蘇生させたりする」

「最悪だなあのアホ女神！」

「っていつかそんなに重要な役職に就いてたのかあの駄女神。」

「うう……私の精霊さんがご迷惑をおかけして……」

アテナはすっかり恐縮している。

「……まあそういうわけだ。我が下手にヴァルハラに干渉することもできぬ。できればお主らで解決してくれると助かるのだ」

「ま、こつちも困ってたし、願ったりかなったりだよ」

「よっしゃ！ じゃあ俺っちの体にロープを巻きな！ しっかり牽引してやんよお！」

「いらねえよ！ お前もういらねえから！ 大体誰が漕ぐ！？」

「旦那に決まってるじゃねえかよ！」

「殺す気か！ あんなでかいのに全員乗って、それを牽引とかどんな無茶振りだよ！」

「じゃあ俺っちはどうすりゃいいんだよ！？」

「帰れよ！ 適当に国家転覆の計画でも練ってるよ！」

「こいつは……出てくるだけでさだめの出番すら喰うのか……。」

「精霊界って……愉快なところだね」

「妹君にまでそう評されるとは世も末ですわ……」
「まっただくだ。」

「じゃあとりあえず頼む。ヴァンダルギオン」

『任せられよ』

「でかすぎてよじ登るのに苦勞したが、なんとか全員乗り込んでヴァルハラに向けて出発する。」

『着いたぞ』

「速いなおい！？」

「元々サイクロイドで十分な距離。ヴァンダルギオンならこれくら

「当然」

「ですよー!」

「自転車でいける距離に自家用ジェット使ったみたいなものか。そら速いわ。」

「とりあえずヴァンダルギオンには帰ってもらい、ルインが俺たちの入国手続き(?)をしてくれた。……恵まれたメンバーだなそういや。」

「あははっ! くすぐったいですって。もう、服を引っ張らないでください」

ルインを待つている間アテナは小さな天使たち(恐らくは『小天使 アル』とか『小天使 テルス』辺りだと思われる)に懐かれまくって戯れている。とりあえず癒し効果は抜群の光景だ。それに対し……。

「……お兄ちゃん。なんかさだめ、すつごくお呼びでない感が……」
ガジガジゲシゲシとちっこい天使たちに攻撃されているさだめもいたりするのでちょっと楽しい。対照的過ぎる。

「心配すんな。お前は万魔殿とか行ったらモテモテだよ。きつとみんな服従のポーズを取ってくれる」

「それ、あんまり嬉しくないよ。痛っ! 痛いってば! 食べるよ! 頭から!」

「喰うな!」

「……手続き終了」

「おっ、早かったな」

「元々私は住人。キミも冥王竜のお墨付き」
なるほど。アテナはあの通りだしな。

「つて、さだめお邪魔虫?」

「……おジャマトリオならもつと簡単に通れた」

「あいつら以下!? さだめの信用あいつら以下なの!?!」

「珍しくさだめが突っ込んだ。ま、あいつ等仮にも光属性だしな。」

「天空の聖域には通行許可が下りなかったけど」

「今回は問題ないだろ。シャルナのここに行ければいいんだし」

コクリと頷くルインの先導で、俺たちはシャルナの家を目指す。

「……っていうか」

シャルナの家……というかこれは既に……。

「お城……ですね」

「まあ、彼女も最上級の女神ですもの。これくらいの扱いは妥当ですわ」

今は駄女神も良いところだが。

「シャルナー！ 来ましたよー！」

トテトテとアテナがその城に足を踏み入れる。と、急に立ち止まった。

「どうした？」

「あ、えっと……」

中に入ってみて驚いた。それは城が豪華で金銀キラキラしていたから……というわけではない。

「きつたな……」

そう。さだめの言う通り、汚いのである。所謂ゴミ屋敷。文字通り屋敷だが。

「……ほう。これはあれか。俺たちに対する挑戦と取って良いんだな？ ジャック！」

「仰せのままに！」

俺とジャックは一瞬で箒やチリトリ、雑巾にバケツとエプロン三角巾というお掃除スタイルに変化してこの腐海を浄化しようとする……。

「ちよーっと待ってお兄ちゃん」

「なんださだめ！ 俺たちは今からこの主夫のお掃除欲を刺激する腐海を……」

「うん。お兄ちゃんたちの主夫的反射にはさだめもちよっと驚いたよ。でもとりあえず今はシャルナさん」

「ならばジャック！ 俺たちでこの腐海に血路を開く！ 俺に続けえ！」

「御意に！」

どちらにせよこのゴミ山を何とかしなければシャルナの部屋までは辿りつけそうもない。俺たちは戦った。戦って戦って……戦い抜いた。

「開通！ シャルナ寝室と思われる部屋までの道、開通だ！」

常人離れた掃除能力を持つ俺とジャックの二人掛かりでざつと半日。すっかり日も暮れ、俺たちはドロドロ。そして……。

「チエックメイト。弱い」

「あぐつ……ルイン、貴女イカサマしてませんこと？」

「希冴姫さん弱い」

「な、なら妹君がやってみなさいな！」

「いいよーさだめ強いし」

「……勝てる気がしない。実力者は相手の力量もなんとなく読み取る」

「ふふふー、流石にルインは賢明だね」

「……姦計謀略の類で貴方達兄妹に勝てる気がしない」

「貴女女神のように……」

「って何チエスに興じてるか！」

思いつきり遊んでいる他のメンバー。お前ら実はシャルナとかどうでもいいだろ。

「お兄ちゃんたちお疲れーって、すごいねそれ」

「ゴミの壁です……」

シャルナの部屋までに溜まったゴミの量は半端じゃなく、一体どれだけの年月を経過したのか底の方のゴミは液化化していた。正直周囲には毒素が充満していた。とてもじゃないが聖なる天使、とかの空気ではない。

「パンデモニウムだってもう少しマシな空気だったろうに……」

「……さっさとあの駄女神引き摺り 出して帰りますわ。こんなところ長居は無用です」

「同感だ……」

ジャックは引き続き清掃中。あのジャックでさえ心が折れそうだと涙ながらに言っていたのだから城の酷さは推して知るべし。

「シャルナー！ おい出てこーい！」

ドンドンと扉を叩く。乱暴かも知れんがそれぐらいしないと気が済まん。

「うう……腐臭が気持ち悪いです……」

「違う。これはもう毒素だからな。」

「開けるぞ！」

返事がないので声をかけてから扉を開く。むわっとした酒気が鼻に付く。

「うわ、酒臭……」

シャルナは机に突っ伏して眠っていた。パソコンが付きっぱなしなのを見ると、どうやら寝落ちしたらしい。

「なんとというはしたない格好を……」

タックトップ一枚と短パン。どこのアル中女子大生だと言わんばかりの格好でビールの空き缶片手にいびきをかくシャルナに、もう全員でこう思う。

「コイツだめだ。もうどうしようもない」

早くなんとかしないと。を通り越してもうこりゃダメだ。処置なしっばい。

「ぶがつ？」

人の気配に気づいたのか、最早女神以前に女としてどうよ的な声を漏らしてむくりと起き上がる。

「ん……寝落ち、したわあ」

そしてうげ、と口を押さえる。

「二日酔い……うぶっ！」

「げ」

一応エチケット袋にはしていただけ言っておく。シャルナはその袋の口を結んで放り捨てる……っておい！

「ちゃんと捨てるよ！」

思わず突っ込んでいた。うん、今は仕方ない。希冴姫は耐えきれずに逃げ出したし。

「あ……？ あらーマスターたちじゃない。どうしたのこんなところに」

そこでようやく俺たちに気が付いたらしいシャルナが濁りきった眼でこちらを振り向く。

「うう……」

……アテナもちょっと限界か。精神的には強くても毒素が充満するようなこの腐海じゃ体の方が耐えきれないな。

「……さだめ、アテナを頼む」

「了解。あとよろしくね」

「正直俺も帰りたいたい」

とりあえず全然平気そうにしているさだめにアテナを任せ、俺はシャルナに向き直る。

「シャルナ、単刀直入に聞くが何でまたアテナのデュエルに出てこなかったよ」

「んー？ ああーそういえばそうだったけ。ごめんごめん、丁度イベント期間中だよ」

「……もうちょっと悪びれるよ。女神の業務の方も滞ってるらしいじゃないか」

「……そうねえ。適当に処理してたみたいね」

「どうしたんだ？ 前から確かにノリは軽かったし適当そうな雰囲気ではあったけど、無責任な奴じゃなかったら？」

「言ってくれるわねえ……」

アテナを守る。そう言ってくれた時、シャルナは確かに目に力があつた。今みたいに脱力し濁りきってしまった目はしていなかったはずだ。

「そうねえ……なんでかしらね」

「シャルナ……」

意識せず、語調がきつくなる。それを感じたのか、シャルナも肩

をすくめる。

「落ち着きなさいな。ほら飲み物」

「ああ、サンキュ……ってチューハイだし」

「ジューズみたいなものよ。てか、ここにはアルコール以外じゃ水しかないわよ」

「……水でいい。っていうか、お前もそうしろ」

「迎え酒よ」

「やめとけ。マジな話だ」

ダルそうな仕草でビールを置く。その姿に以前の精彩は欠片も感じられない。

「本当に、一体どうしたんだ。今にも死にそうだぞ」

「あーもううっさいわね……。しょうがないじゃない。なんか馬鹿らしくなっちゃたんだから」

「何？」

「マスターを守るだとか言っついて、あたし結局ロクに役立ってないもの。さっきまでそこにいたあんたの妹さんにやられた時もダイク化した時も、あたし何もしてない」

「それは……」

「拳句マスターもあたしのこと呼びだすこと少なくなっちゃったし、あたしが守らなくてもどうせあんたは護ってくれるんでしょ？

だったらもう良いじゃない」

「もう良いって……」

「ここまであの子連れてきたならわかるでしょ？ あの子の精霊になつてあの子を守りたいってやつは掃いて捨てるほどいるわ。あたしの仕事だって同じ。あたしなんかいなかったって世界は回る。だったらもう好きにして」

「シャルナ……」

「世界なんてそんなものよ。誰もいなくちゃ回らないけど、誰か一人欠けたって小揺るぎもしない。それなら……いい加減にして……」

「ルイン？」

それまでずっと黙りこくっていたルインが珍しくも怒りをあらわにシャルナに杖を突きつけていた。

「世界が回る？ ウソつかないで」

「ウソなんて……」

「なら聞く。貴女の世界は回っている？」

「あたしの？」

「貴女の世界は貴女が回す。貴女がいなければ世界に未来は訪れない。貴女の見ている未来に色がある？」

「……」

「貴女のマスターは生きている。貴女の世界は破滅してない。その程度で世界を語るな。反吐が出る」

「無事だからこそ、その無事な姿を見る度に何もできなかった事実
に打ちのめされるのよ。一切合財綺麗さっぱり消え去ったのとはべ
クトルが違うのよ！」

「不幸の比べ合いをする気はない。護れなかった絶望や痛みも、私
と貴女で差があったとは言わない。でも、今の貴女は私と違う」

「……」

「今の貴女は、自分の思い通りに世界が動かず、不貞腐れているだ
けのただのガキ。昔の私でも、今の貴女ほど酷くなかった」

「……うっさいわね」

「また耳を塞ぐの？ 聞きたくない？ 自分の浅ましが妬ましい
？」

「あんたの声が二日酔いに響くだけよ」

「違う。貴女は酔ってなんかない。目を逸らそうと必死なだけ」

ルインはまったく容赦せず、シャルナに厳しい言葉を浴びせてい
く。それは過去の自分重なるシャルナに対する糾弾か。それとも早
く立ち直れという荒々しい発破か。

「貴女は何も失っていない。貴女はやり直す必要すらない。また、
始めればいいだけ。燻っている今は、時間の無駄」

「また……始める、か」

「貴女が立ち止まっている間に、彼女も私たちも先に進んで行く。私のように、世界から置いて行かれる前に。本当の意味で失う前に、また……歩きだして」

「……小走りくらいにはなる必要があるかしらね」

「私は全力疾走。文句言わない」

「あーあ……まずは溜まり溜まった仕事の処理かぁ……めんどくさいから全部認可でもいいかしら」

「それでいい」

「いやよくないだろ」

「思わず突っ込んだ。また妙な仕事されたらヴァンダルギオンたちが困る。」

「そーよねえ……つーか書類、どこいったかしら」

「……まずは掃除だな」

「……やつば寝ていい？」

「ダメ。俺たちも手伝うから、お前もやれ」

「見ればわかるでしょうけど、元々掃除できないのよあたし」

「だろうな。ありゃ数年単位のゴミだ」

「んにゃ数百年」

「世紀跨いでんのかよー！」

「予想以上のダメっぷりだ。数世紀放りっぱなしのゴミとか。そりゃ液状化するわ。土に還るわ。」

「最近のカップラーメンとかも増えてきて便利な世の中になったわよねー」

「ロクな食生活してねえなコイツ……」

「あーそだ、ジャック貸してねい。あたしの世話役で」

「どうぞ」

「いやルインが決めるなし」

「そろそろジャックを気遣ってやれ。」

「じゃあ坊やでもいいわよん」

「ジャックを差し出す」

「キミも中々……」

このゴミ溜めで執事をする気はない。というかいい加減留年する。

「あーしんど……お日様が眩しいわあー」

「女神が光で苦しむなよ……」

まだアンデッド扱いが、とりあえずは復活したシャルナに気付いたアテナが駆け寄って……鼻を押さえて後ずさりした。

「シャルナ……臭いです」

「華の乙女になんてことを！」

「その華の乙女にあるまじき匂いだから引いてるんですよ……」

「っていうかそんな歳じゃないでしょ女神」

「きつとドライフラワーですわ」

「私に対する挑戦と見た」

「これは全面戦争ね」

「ピチピチとカラカラじゃ勝負はみえてるよ。やめとけばー？」

挑発的なさだめのセリフに、いつかの不敵な笑みを浮かべたシャルナがいつものセリフを言い放つ。

「……天罰できめん！」

第二期第十三話「天岩戸の駄女神さん」(後書き)

こんにちは。

駄女神シャルナも改訂後は出番三割増し!……に、なるといいですね。うん、ホントに……。
それでは、悠でした!

第二期第十四話「冥界からのお客様」

アルカナく切り札の騎士く

第二期第十四話「冥界からのお客様」

『きゃうっ！』

……………。

「なあ、今なんか聞こえなかったか？」

「わんちゃんですか……………？」

「なら食料だね」

犬と聞いて真っ先に食料扱いするな。

「わんちゃん食べないでください！」

「知ってる？ 韓国だと一般的な食材らしいよ？」

「ダメです！」

『こあっ！ きゃうっ！』

「あ、また聞こえた」

「セツ……………上です」

お……………？

『きゃうっ！』

トサッ！

頭に重み加わった。

「わあ！ 可愛いです！」

「朱黒い……………竜？」

「赤黒いって言うと、なんかエロいね」

「ちっちゃいね」

ユーキちゃんがさだめの台詞を丸つきり無視して俺の頭の上に手を伸ばす。

「あはっ！ ツルツルしてる〜あっ、舐めた！」

「なんだなんだ？ これじゃ俺には見えないんだが……」

手探りで頭の上の謎の物体Xを下ろして顔の前に持ってくる。

「……えーと、どちらさん？」

「かうっ！」

それは確かにさだめの言ったようにとところどころが朱色の黒い竜であった。しかし『黒竜の雛』とはちよつと違う。あれよりも多少ゴツイというか……。

「あ……もしかして」

最近その竜と話した記憶が蘇る。

「ヴァンダルギオン？」

「かうっ！」

当たりー！ とでも言うように万歳して啼くヴァンダルギオン（？）。

「っていうか、なんでこんなちっちゃく……」

『きゅー！』

「ごそそと背中に背負っていた黒いバツク 色が同じで気付かなかった からやっぱり黒い手紙らしきものを取り出して俺に手渡す。

「……読めん」

『きゅー？』

その手紙は精霊界、それも（恐らく）旧字体で書かれているのでさっぱりだ。

「……ルイン辺りなら読めるか？」

「でもどこにいるのか……」

『……ねえ、ここであたしを呼ぶべきなんじゃないの？ だからあたし、不貞腐れるって理解してる？』

「……や、何か頭悪そうだったもんで」

「期待値がルインと比べると……」

『あんたら偉い女神さま何だと思ってるのよ!』

『オタニート』

全員息はぴったりだった。

『……ですよー』

本人も自覚はあるようだ。

『まあとにかく見せてみなさいな』

「……まあ、ダメ元で」

『端っからダメ元とか言われるとやる気失せるんだけど……えーと』

何々』

「どうだ？」

『……うん、あれよね。あたし、心は十代だから』

「読めなかつたんだな。うん、大方の予想通りだよ」

時間の無駄だった。ルインを探そう。

「……達筆過ぎて読みにくい。でもざっとで良いなら読みとれた」

「流石ルイン」

「オタニートとは格が違うね」

『あんたら兄妹容赦してよ』

「で？ 内容は？」

「要は、息子が生まれたので、しばらくキミに預けたいってこと」

「俺に？」

「っていつか息子……え、妻子持ち？」

「どちらかと言つと後継者のようなもの。お腹を痛めて産んだわけじゃない」

「あー……？ ヴァンダルギオンって雌？」

「……特に性の概念もないと思う。あれは神霊のようなもの。自然

発生が基本」

「精霊にも色々いるんですね」

「ともかく、色々な経験を積ませる意味も持って、信頼できるキミに我が子を託す……というようなことが書かれている。これも一緒に」

ルインに渡されたのは一枚のカード。チビヴァンダルの絵と共に『冥幼竜ヴァーミリオン』の名前が。

「ヴァーミリオン……朱色か。確かにちょっと朱っぽいな」

体に走るラインや瞳の色が朱色だ。仄かに輝いていて綺麗だ。

『きゅ？』

つぶらな瞳を潤ませて首をかしげるヴァーミリオン。……うん。

まあ……。

「可愛いです……」

アテナがもう涎を垂らさんばかりに見つめている。

「えーそうかなー？ もっとトゲトゲして抱きしめたら血塗れになるくらいの方が……」

「そんな拷問器具紛いのものを可愛いとは言いません！」

さだめの感性的にはドストライクなんだろうよ。

「私もそっちがいい」

「ルインさんやさだめさんの意見は参考になりません」

「わたくしとしてもそちらの方が自衛に適していますし、強そうでもいいのですが……」

「……もしかして、私が異端ですか？」

「そ、そんなことないよーわたしもこっちのが可愛いと思うよー？」

『あたしは……』

「あ、シャルナはいいです」

『またグれるぞこのやるー！』

積極的に外に出てくるようになったのはいいが、扱いの悪さはまるで変わってないシャルナだった。

「ん〜でもこの子、どうやってお世話すればいいのかな〜」

『きゅー？』

「可愛いですー……」

アテナがすっかりメロメロになっていた。

「セツ、私も手伝いますから一緒にこの子を育てましょう！」「

「うん、その物言いは引つかかる奴らがいるからやめような？」「

まるで俺たちの子供のように宣言するアテナに……というか何故か俺にさだめが（文字通り）嘔みついていていた。

「ガジガジ……あ、なんかおいしい」

「離れる性的倒錯者！」

「で、結局どうするの」

「ああ……ルインはこいつらが何食べるかとか知らないか？」

「……私は何もかも知ってると思ったら大間違い」

「まあそうだよな」

「シャルナは当てになりませんし……」

『ねえ、だからそうサラツとあたしを戦力外通告するのやめてくれない？』

「じゃあ知ってますか？」

『いや、知らないけどさ……』

「ほら見る」

「大体シャルナって何か知ってることあるんですか？」

『そりゃああるわよ。なんたって偉い女神さまだし』

「例えば？」

『え？ え、えつと……ネトゲのレアアイテムゲット場所とか能力なら一通り……』

『はあ……』

『わー今完全にあたし役立たず認定されたわあー』

シャルナは放っておいて、とりあえず考えることに。

「お兄ちゃんがヴァンダルギオンに聞いてくればいいじゃん」

「いや……最終手段としてはそうするけど、冥界は流石にもうあんまり行きたくないんだよな……」

「そんなにすごいところなの？」

「うん、まあ……その話も追々するよ。そういえばしてなかったし、ヴァンダルギオンに力を貸してもらおうと冥界に行った記憶はまだ新しい。あの場所は生者が在るべき場所じゃない。」

『うん……』

『きゅー……？』

考えに煮詰まった俺たちがヴァーミリオンを囲んで唸っていると……。

『セツ、ルイン殿』

「……ん？ ネイキッド？」

最近こちらでもちよくちよく見かけるネイキッドが声をかけてきた。近くに剣士の姿は見えないようだが……代わりに一人の精霊を引き連れていた。

『いや何、こちらの御仁がセツを探していたのでな。今の時間ならばここだろうと連れてきた次第だ』

「よう。久しぶりじゃねエかラブコメ野郎」

「って、ゴーズか!？」

非常に心外(？)な言葉と共に現れた青年は間違いなく『冥府の使者ゴーズ』その人。かつて俺がヴァンダルギオンとの契約を望んだ時に会った口の悪い熱血漢。

「セツ……こんな人とも知りあっていたんですか？」

「お兄ちゃんちよつと見ない間に顔が広くなつたねー」

だが、そのおかげで手間が省けた。

「ゴーズ、お前ならコイツの世話とかやり方知ってるんだろ？」

「あつたりまえだろオが。そもそもコイツが先走ってお前のトコにスツ飛んでかなきゃオレが色々説明するはずだったんだよ」

ちよつと訛りがちな日本語も懐かしい。というか、精霊たちの言語ってのはどうなってるのかね？ 普通に日本語喋ってるように聞こえるけど。

「じゃあ、これからどうすればいいか教えてくれ」

「はいよ。つか、基本的にコイツのメンドウはオレが見ることになつてんだ。世話とかもナ」

「え、そうなのか？」

「あのヴァンダルのオッサンが大事な後継者一人で人間界まで大冒険させるわきゃねーだろ。ちったアアタマ使え」

「相変わらず癪に障る言葉遣いだが、とりあえず問題は解決したわけだから良しとしておこう。」

「じゃあしばらくお前もこっちにいるのか……この島、ドンドン精霊の移住が進んでないか？」

「テムエの所為もあんだろ。寝ぼけたこと言ってるじゃねエぞうぐつ……言い返せない。」

『あーいいわね。あたしもそっち行こうかしらん？』

「シャルナはダメです」

『だからなんであたしだけそんな扱いなのよ！』

「シャルナが来たらパソコン料金だけで破産しちゃいます」

『……なんでこー否定できない正論ばかりあるのかしらね』

それだけロクな生き方してないんだろ。

「大体テムエが精霊界からいなくなったらカイエンのアホがどんだけやつれると思ってるんだ。そろそろマジメに仕事しろやゴミオタート」

もうボロクソに言われて自棄酒を呷り始めたシャルナはとりあえずまた放っておくことにする。

「まあこっちで生活するのはいいけど、住むところとかどうすんだ？」

「ンなモン、どこだっていい。どこだって冥界に比べりゃ天国だろある意味冥界こそ天国な気がしなくもない。文字通りの意味で。」

「まア、タダでここに居付こうなソレ考えちゃいなエ……そのチビスケ」

「……チビスケ？ 何処？」

「ここにさだめ以上にチビはヴァーミリオンくらいだぞ」

「orz」

落ち込むさだめの前にゴーズがピンッと弾いて渡したのは、自らの宿るカードだった。

「使え。報酬代わりだ」

「ふえ？」

「テメエが一番マトモにオレを使えそうなんぞでな。兄キが兄キだし、丁度いいだろ」

確かに、この中で悪魔族を扱うのはさだめくらいだ。ヴァンダルギオンと関係している割にはカウンタートラップと相性が悪くて俺も使えないし。

「さだめの……精霊？」

「はン。キチンと使いこなせや。腹立たしいが、兄キだったら使いこなすだろつよ」

「えゝもつと可愛い精霊が良かった」

うん。空気読もうなさだめ。さだめらしいつちやらしいが。

「希望としては『万力魔神バイサー・デス』とか『バイサー・シヨツク』辺りが可愛いよねえ……」

誰に使うつもりだ。俺か！？ 俺なのか！？ そしてそいつらは可愛くない！

「まあ、でもとりあえず使ったげるね。さだめをしつかり守ること！」

「超上から目線！ 何様！？」

それでもそこそこ嬉しそうなのは長年の経験で読み取れる。意外とさだめの奴、自分に精霊がないこと気にしてたしな。

「はン、やなこつた。オレが手を貸すのはデュエルの時だけだ。後は勝手にやってろ」

ゴーズもゴーズで全く素直じゃない。さだめのことを気に入ったからこそあいつは自分を預けたのだ。

『ばつっ！』

「ひゃっ！？ な、なに？ さだめに何か用？」

『かっう〜?』

さだめの頭の上に飛び乗ったヴァーミリオンがさだめの顔を覗き込もうとして……。

『きゅ!?!』

「うひゃ!?!」

そのまま滑り落ちた。思わず受け止めたさだめはひっくり返ったヴァーミリオンをじーっと見つめる。

「ほらほら、やっぱり可愛いですよね?」

「ん〜……さだめにはよくわかんない。アテナにあげる」

「いや、俺がゴーズに渡せよ」

「つかこのチビ竜、あり得ねェくらい懐っこいな。冥界の主候補としての自覚あのかコイツ」

今もかっう〜とか啼きながら一同の周りをピコピコ回っている。

特に懐いているのは俺と……何故かさだめ。アテナの方が圧倒的にラブコールを出しているのだが、むしろちょっと嫌そう。さだめの頭の上つたり俺の背中に張り付いたり忙しい。

『ご、ご歓談中失礼しますっ!』

また新たな精霊の声。一同が振り向いた先には少しゴーズと似た雰囲気の白い服を纏った女性の姿。

『げっ……』

「カイエン?」

『あつ、せ、セツ様。御無沙汰しておりますカイエンです! え、ええと今回はゴーズ様がマスターを定められたということで私もご挨拶に伺いました! そ、その少々仕事を立て込んでおりまして直接そちらに出向かぬ無礼をお許しください!』

あわあわとかなり焦りまくりながら挨拶をするカイエン。仕事って……。

『ああ!?! やっぱりサボってましたかアテナ……じゃなくってシヤルナ様! そろそろお仕事してください! もう書類やら嘆願書やら散々溜まって私だけじゃ対処しきれなく……。というか以前か

ら溜まってたやつも十分の一も終わってなくて……」

そろそろと隠れつつ移動していたシャルナが見つかってカイエンに捕獲されていた。もうなんか殆ど逃げる漫画家と追う編集みみたいな関係になっている。

「私が人間界に向かえないのも元はと言えばシャルナ様がお仕事を終わらせてくれないからで……」

「あ、あー……全部認可！ とか
やめれ。」

「いいわけないじゃないですかあ！ それでこないだ危うく『終焉の精霊』転生させかけたの忘れたんですか！？」

「うおおおい！ なんか裏で大変なことしてくれましたよこのオタニート！」

俺たちの必死の戦いが丸ごと無駄になるところだったらしい。

「ギリギリで私が気付いた……というか誰でも見ればわかったはずですけど兎に角もう少して大惨事だったんですよ！？ お願いですからマジメにやってくださいよお！」

もうカイエンは涙目だ。そしてありがとう！ 君のおかげで俺たちの戦いは無駄にならずに済んだ！

「私の説得で心を入れ替えたかと思ったら……」

「甘いわね。引き籠りの仕事ギライがそう簡単に直るはずないですよ」

「胸張って言うな」

確かにそうだけでも！

「と、とりあえずこの方は連れていきます！ セツ様！ また今度ゆっくりお話しかせてくださいね！ それでは！」

「た、助けてマスター！ あたしこのままじゃまた出番の少ないニートに……」

「それはきつとカンヅメという名のニートですからいいんじゃないでしょうか？ というかお仕事はキチンとしてください」

「そんなあ〜！？ 折角出番を増やそうと頑張ってたのに！」

非情にもアテナに見捨てられたシャルナは精霊界の方へと帰還していった。

「ところでセツ？」

「ん？ どうしたアテナ」

「なんだかカイエンさんの様子がちょおおっと気になったんですけど……」

その『ちょおおっと』は世間一般で言うところの物凄く、とかめちゃくちゃ、とかと同義語なのだろうな。

「いや……カイエンの場合はゴーズとヴァンダルギオンに認められた人間ってことで色々話を聞いたがっているだけでそこにお前らの思っているようなものは存在しない……善だ」

少なくとも俺はそう認識している。

「ま、このラブコメ野郎だからわからなくもねエが……アイツア昔ツから働き通しで、ある意味世間知らずだな。人間界なんて異界の話に興味持って聞いてただけだろ」

珍しくゴーズもフォローしてくれる。

「そうですね……流石にこれ以上増えてもらうとプチッと逝っちゃっても構いませんよね？ という意味を込めての確認だったんですが……何事もないんだったらいいんです」

……最近アテナが怖い。ある意味さだめより。

「カイエンのアホや駄女神は良いとして……これから少し世話になるぜ」

『きやううくん！』

そんなこんなで、俺たちに新しい仲間が増えた午後なのだった。

第二期第十五話「進級試験」準備編」

アルカナ「切り札の騎士」

第二期第十五話「進級試験」準備編」

アカデミアの一学年もそろそろ終わり、俺たちにも進級の時が近づいてきた。

だが……。

「出席日数が全然お話にならないノ〜ネ！ 一体どれだけサボれば気が済むノ〜ネ！」

「あー……ハハハ……」

俺はその進級についての説教をクロノス先生から受けていた。

そらそうだ。セブンスターズとの戦いの最中散々休んでいたのが大きい。ただそれだけならアテナも同じだし、その分のレポートは提出してある。だが俺はそれに加えて何度か精霊界に足を運んでその度にアカデミアを欠席している。どれも本意ではなかった……というか大事なことだったということは主張したい……したいが、したところで実質的にはただのサボりである。

「なノ〜デ……シニヨ〜ルセツにはそれ相応ウ〜ノ進級試験を受けてもらおうノ〜ネ！」

「進級試験……ですか」

ペーパーテスト……じゃなさそうだな。隼人と同じでデュエルだろう。だとしたら相手は……？

「進級試験の相手はワタクシの温情ウ〜デこの二人のどちらかから

選ぶことができるノ〜ネ！」

「二人……ですか？」

「どちらも本人からのたつての希望なノ〜ネ！ 光栄に思うノ〜ネ。その二人はシニヨ〜ルセツの妹、シニヨ〜ルさだめとなんとあのカイザー亮なノ〜ネ！」

「亮さん!？」

さだめは予想していた。あわよくば俺を留年させて同じ学年に……という腹積もりだろう。そうはいくか。

しかし亮さんというのは予想していなかった。本人も十代との卒業模範デュエルの調整に忙しいだろうに……。

「さあ、どっちを選ぶノ〜ネ？」

……決まってるよな。

「両方、お願いします」

「パルメザンチィ〜ズ!？ 何を言っているノ〜ネ!？」

「どちらともデュエルします。その結果如何で俺の進級の是非を決めてください」

「気は確かなノ〜ネ!？ シニヨ〜ルさだめだけデエ〜モ十分なノ〜ニ、態々カイザーとまでやるなノ〜テ！」

「理由こそわかりませんが、卒業模範デュエルとかで忙しいはずなのに俺の試験に立候補してくれたのを無下にはできません。それに……」

この世界に生きるデュエリストとしては、強者からの挑戦はいくらでも受けたいもんだ。

「そういうわけなんで、向こうの了承さえあれば俺は両方とデュエルします」

ただし、一対一で二戦。流石に二人まとめて二対一は不可能に近い。

「わ、わかったノ〜ネ。先方にはその通りに伝えておくノ〜ネ」

愕然とした様子のクロノス先生を尻目に俺はレッド寮へと戻る。デッキの調整をしないと。今回はかなりの難題だ。俺のデュエルの

癖を知り尽くしている上カードの知識も俺と同じくらいにあるさだめと、カイザーとまで呼ばれるアカデミアナンバーワンデュエリスト……万全に万全を重ねて、ようやく敵うかどうか……。

「……けど、それだけ楽しみでもあるな」

亮さんとデュエルしたことは、実はまだない。サイバードラゴンを軸にしたデッキ自体は現実で何度かデュエルしたことがあるけど、それともまた勝手が違うだろう。

「それに……さだめはやっぱ怖いな……」

あいつは大抵相手に合わせたメタデッキを用いる。俺の場合はやはり代表格は『王宮のお触れ』や『人造人間 サイコ・シヨッカー』か。あいつがサイコ・シヨッカーを持ってきているかどうかはわからないが、何せ『混沌帝龍 終焉の使者』とかまで持っていたあいつのことだ。持っていたとしても不思議じゃない。その上で融合封じをされれば俺に勝ち目はなくなると言っても良い。

「あいつはやる。間違いなく」

流星に禁止デッキまでは持ちだせないだろうが、周囲から忌避されるような戦術も当然のように使用するだろう。俺のデッキがパーミッションタイプだからワンキル系を用いるとは思えない。とはいえ、フルバーン系だと少々キツくなってくる。

「あー……くそ。敵に回すと半端なく厄介だなあいつは……」

メタデッキなど、ともに相手してられん。だが、それでもやらなきゃ留年だ。さだめと同学年というのも相当にアレだが、何よりアテナの後輩というのはちよつと……恥ずかしすぎる。三つも年下の女の子の後輩って……。

「屈辱的過ぎる……」

一応現実では優等生で通っていたからか、俺は少々プライドが強い。エリート意識……まではいかないだろうが、留年のようなものはどうしたって受け入れがたい。自分の能力に対する自負もある。

「負けられないな……」

この際だからアテナたちにも手伝って貰う。手は抜かない。

「はいっ！ そういうことなら私も最大限お手伝いします！」

「わたしもがんばるよ」

「……オレもか？ まあ、いいけどな」

とりあえず俺はアテナとユーキちゃん、剣士の三人に協力を頼んだ。

「つつても、オレはアイツとデュエルしたこともねえから、大して役に立たねえぞ？」

「それはわたしも……」

「私は三回くらいありますけど……あれは参考になるんでしょうか？」

「いや、あいつのデュエル傾向についてはむしろ俺自身が良く知っているから、それは良いんだ」

「じゃあ、何を？」

「……さだめの組んできそうなデッキを組んでみた。そのデッキを使って俺とデュエルしてくれ。後は俺がどうにかする」

「なるほどな……ん？ こりゃ……」

「ああ、そいつは『プロキシ』だ。さだめの使いそうなカードの中には俺の持っていないカードもあつたりするからな。あんまり褒められたことじゃないが、対策のためにそれを使ってくれ」

プロキシとは「代理」の意味。入手していないカードを、何らかの方法で代用した物の事を指す（遊戯王ウィキより）。

「なるほど……まあどこかの人みたいにカードに数式を書き込むよりはよっぽどマシですけどね……」

アテナ、それを言ってやるな。

「どーでもいいことだけどよ、たまにカードを手裏剣みてーにしてる奴いるだろ。ありゃどんな仕組みだ？」

そこらへんも世界の神秘だ。気にしてやるな。金属に突き刺さる

紙製カードは遊戯王ファン全員の謎だ。

「さあ、それじゃあ頼む。できるだけさだめの思考をトレースするような形で」

「……いきなり最大の難関だよ」

「……とりあえずセツに迫ればいいんですかね？」

「……それ、オレもやんのか？」

「……すまん。俺が悪かった」

さだめの思考トレースなぞやってもらったら俺の命が貞操が散る。というか出来ん。

「そ、それでこつちが亮さんだ。まあ亮さんのデッキそのままじゃないけど、できるだけ近づけたつもりだ」

実際に見せてもらったわけじゃないし、とりあえずサイバードラゴンデッキを組んでみただけだが。もちろんサイバー流モンスターは皆プロキシ。

「……あの、ところで質問いいですか？」

「ああ、オレも丁度聞きてえことがあんだが……」

「……セツ君だから、で納得できることではあるんだけど」

？ なんだらう。三人が納得いかない、という表情で俺を見つめる。

「このプロキシ、ホントにプロキシですか？」

「本物なわけないだろ？ サイバー流のカードを俺が持つてるわけもなし……」

「そうじゃねえ。このサイバードラゴンの絵柄！ そのままそっくりサイバードラゴンじゃねえか!？」

「俺が描いた。自信作だ」

「毎度のことですけど、プロキシの出来じゃないですよ！ 普通に模写、いえむしろこつちが本物でもいいくらいです！」

「うおっ!？ サイバーエンドまで……」

「そのまま公式大会で使ってもバレないんじゃない？」

それは言い過ぎだ。張替したりしてるからバレる。

「つまり、絵柄ではバレねえんじゃねえか！ お前隼人と一緒にカードデザイナーにでもなっちまえ！」

「断る。デュエルしてる方が楽しい」

「当り前だ。一人黙々と絵を描いているよりも皆とわいわいデュエルしてる方が絶対に楽しい。」

「っていつか、なんでプロキシにここまで力入れんだよ」

「何事も手を抜くのは良くない」

「ここは手を抜いても良いところだったと思うが……」

「……ぶっちゃけ途中から手段と目的が入れ換わっていた事実是否めないな」

「セツの得意技ですからね……」

「と、とにかく！ 今は対策だ。頼むぞ皆！」

「ちなみに、ご褒美とかあります？」

「……強かになつたな、アテナ」

「前はこんなこと言わなかったろうに……」。

「えへへ……ちょっと言ってみただけです」

「……別に良いぞ」

「へ？」

「俺だつてタダで手伝つて貰うのは気が引けるからな。無茶なことじゃなけりや最大限譲歩しよう」

「ほ、ホントですか？」

「わ、わたしも？」

「もちろん」

「オレはカードパックおごりでいい」

「了解」

真剣に悩み始めたアテナとユーキちゃんに対し、さっさと報酬を決める剣士。この辺りは女性と男性の違いか。

「まあ、そんな今すぐ決めることはないだろ。とりあえず対策をしてから……」

「いえ、これはデュエルのモチベーションにも影響します！」

「そつだよ！ さだめちゃんは来年同学年になれるっていう報酬があるからすごく高いモチベーションで来るはずだから」

「私たちも先に報酬を決めておくことでモチベーションを高めることができるんです！」

「そ、そうか……？」

よくわからんが、アテナたちがそういうならそうなのかもしれない。

「キス……いえ、いつもワンパターンでもアレですよ。でもしたい気も……ブツブツ」

「デート……うん。それくらいなら普通に頼んでもしてくれると思うし……やっぱりここはもつと……ブツブツ」

……早まったか？

何やらぶつぶつと物騒、というか不穏な、とも違うか。不純そうな“ご褒美”を考え始める二人を見て、ちよつとだけ自分の迂闊な発言を後悔した。

「……あの二人は放っておいて、先に始めとくか。剣士」

「……つち。オレはとことんモチベ下がったぜ……」

そもそも俺は根本的に人選を間違えたっぽい。といっても他の誰呼んでも結果は同じだった気もするし……あれ？ もしかして俺って意外と友人に恵まれてない？

「俺もモチベーション下がった……」

非常に残念な事実が付いて若干グダグダになりながらも俺は剣士とテストデュエルを始めた。

「『パワーボンド』だ」

「チエーンして『魔宮の賄賂』。うん。やっぱり融合系を相手にする場合は魔法をパーミッションするほうがよさそうだな」

「けど、サイバードラゴンは融合手段が豊富にあるぜ。全部パーミッションするつもりか？」

「それなんだよな。多分、全部はパーミッション出来ない。それは高望みすぎだ。だから優先するべきはその『パワーボンド』だな。普通の『サイバー・エンド・ドラゴン』ならアルカナを多少強化す

るだけで事足りる」

「いつそ『融合禁止エリア』とかを使うのはどうだ？ お前もアルカナを使えなくなっちゃうが……」

「それも考えたんだが……そうなると半上級モンスターの『サイバードラゴン』に対抗できない。その上亮さんのデッキには『サイバー・レーザー・ドラゴン』とかもいるから、こちらの方が受ける被害が大きい」

「だからお前は『冥王竜ヴァンダルギオン』中心で戦えよ。折角チビヴァンダルもいることだしよ」

「それも一つの手か……」

それでもやはり剣士は優秀だった。不良みたいな外見をしている癖に相当に切れる。

「……今、なんか余計なこと考えなかつたか？」

「なんでもない」

「……勘もいい。」

「決めました！」

「うおっ！」

アテナが突然大声をあげたのでびっくりした。

「セツ、デートしましょう！」

「デート？」

おや、案外緩い……というかいつもの強制デートと変わらないよ
うな……。

「アカデミアの外へ。い、一泊二日で！」

「違う！ 緩くない！ 危険だこれ！」

「ど、どうです……？」

「そ、それは……」

かなり、危険では……。いや、何かするつもりじゃないが、それでも十二分に危険。ただでさえ最近のアテナは積極的というか大胆さが増して来て理性を圧迫しているというのに……。

「……………」

が、こうも期待を込めた瞳で凝視されると断るのも……というか今回の報酬として頼んでるんだし、断るのは……。

「わ、わかった。そうしよう」

……頷いてしまった。最近アテナに甘くなってきた気がする。「わたしも、決めた」

アテナと違って静かにそう宣言したユーキちゃんが提案したのは……。

「これから一年間、授業でタッグを組むときはわたしと組んで？
それだけでいいから」

「え？ あ、ああわかった。ユーキちゃんがそれでいいなら」

これもまたやけに緩い報酬。特に何のためらいもなく頷くと、横でアテナがやられた……！ とばかりに苦々しげな表情をしているのに気付く。

「……やりますねユーキさん。これでセツと一緒に時間を増やして地道に好感度を稼ぐつもりですか……」

「アテナちゃんは即物的過ぎるよ。確かに一泊二日デートは強力。でも後が続かないもの」

「その上、授業で常にタッグを組むことで周囲の印象や空気から自分に有利な状況に持っていくつもりですね……やられました」

……そんな深い意味があったのか。タッグに。

「先生の采配でタッグを決める時もセツ君が提案してね？ わたしと組むからって」

……なるほど。確かにそんなこととしてれば周囲からは俺がユーキちゃんと付き合っているように見えると。

「これが……さだめさん曰く沈黙の闇狩人サイレント・ダークホースの実力……！」

「戦は長い目で見ないとダメだよ。アテナちゃん。だからさだめちゃんだつて自分と同学年にセツ君を置きたがつてるんだし」

「あいつら、オレよりよっぽど戦慣れしてるな……」

「さだめ曰く、ラブ・ウォーズらしいが」

「 teme 工当事者が何言ってやがる」

いや、もう客観的に俯瞰しないとやってられないというか……。
「ともかく、これでわたしたちのモチベーションは十二分だよ！」
「くっ……戦略的には敗北感が大きいですが、そのデートで勝負を
決めれば……！」
確かにやる気にあふれているのは伝わるが、それと反比例して俺
のモチベーションが下がっていく。
それでも二人を加えてその日はさだめと亮さん対策を進めていく
のだった。

……」

「え？ なんですか？ もしかして、また私が非常識なんですか？」
「セツ」

俺が妹の戦術に齒噛みしていると、亮さんに話しかけられた。

「亮さん！」

「今日はよろしく頼む。……しかし、また随分と思い切ったな。俺と自分の妹、二人とデュエルとは」

「さだめは断ると何しでかすかわかったもんじゃないかったですし……亮さんとは個人的にデュエルしたかったですよ。だから、二人ともです」

「……ああ。俺もお前とデュエルがしてみたかった。十代とはタイプが違うが、お前も大したデュエリストだ。卒業前に、二人とデュエルがしたかった」

「それは俺も同じです。そうじゃなきゃ、こんな不利過ぎる提案してませんよ」

「それもそうだな。では、今日はお互い全力を尽くそう」

「ええ。いいデュエルにしましょう」

ではな、と亮さんは俺たちに背を向けて去って行った。

「……ふう。亮さんには感謝だな。妙なテンションを払拭できた」

「あ、やっぱりギャグのテンションだったんですね。よかった、私が普通で……」

「キシヤシャシャシャシャー！！」

「きゃあ！？ さだめさんが殆ど妖怪みたいに！」

……コイツ錯乱しててもプレイミスしないから厄介なんだよな。

「シニョ〜ルシニョ〜ラ……それデェ〜ワこれより進級試験を始めるノ〜ネ」

クロノス教諭の言葉に、俺は気を引き締める。まずはさだめだ。

「ああ……お兄ちゃんと共に過ごす夢の学園生活への扉が今開かれた！ ウフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフフ……ジュルツ！」

……やりたくねーなーコイツと。

「デュエル!!!」

「先攻はシニョールセツなノ〜ネ」

「よし! ドロー! 俺はモンスターを一体守備表示でセット!

カードを二枚セットしてターンエンドだ!」

「さだめのターン、ドロー! さだめは手札から『トレード・イン』

を発動。手札の『闇より出でし絶望』を墓地に送ってカードを二枚

ドロー!」

『闇より出でし絶望』か……『強烈なはたき落とし』対策か?

「魔法カード『闇の誘惑』発動!」

「それはさせない! カウンター罠『マジック・ジャマー』! 手

札の『ジャム・ウォリアー』をコストに、そのカードを無効にする

!」

「ちえ……」

「俺は『ジャム・ウォリアー』の効果でデッキからカードを二枚ド

ロー!」

「なら、さだめは手札から『終末の騎士』を攻撃表示で召喚! 効

果によりデッキから『人造人間 サイコ・ショッカー』を墓地に送

るよ」

『終末の騎士』 ATK1400

「っ!」

やはり……入っていたかサイコ・ショッカー! わかっているも

冷汗が出る……カウンター罠主体のこのデッキであいつを出されれ

ばかなりキツくなる。

「お兄ちゃん……カウンターするカードを間違えたね。魔法カード

『死者蘇生』!」

「げっ……」

「さだめが蘇生するのはもちろん『人造人間 サイコ・ショッカー』

! パーミッシヨンする?」

「……通す」

ザワツ!

会場がざわめく。それも当然だな。罨カードの発動を封じるサイコ・シヨツカーはパーミツシヨンデツキ最大の急所。

『人造人間 サイコ・シヨツカー』 ATK2400

「……まさか一ターン目から出してくるとはな……」

想定内ではあった。だが、例え想定してあったとしても一ターン目からそれを防げるとは限らない。

……くそ! 『闇の誘惑』からの『ネクロフェイス』や『闇次元の解放』を意識し過ぎた! もっと単純なコンボで召喚された!

「さだめの得意技はセオリーブレイク……って言う“セオリー”をさだめが守るわけじゃないよね。お兄ちゃん」

「……相変わらず、俺なんかメじゃないくらい天才肌だな」

あいつは事あるごとに俺を天才肌扱いするが……あいつに比べれば俺なんかただの器用貧乏でしかない。

俺はあいつにチェスで勝ったことがないし、将棋でも囲碁でも勝ったことはない。唯一勝機があるのがこう言った運の絡むカードゲームくらいだ。

「さだめの弱点は幸運ランクが低いというただ一点! だけど、この間ゴーズが来てくれた時からかな……“引き”が強くなった気がするんだあ……」

「補正……ってやつか」

精霊との繋がりを得て幸運ランクに補正がかかった……と見るのがいいのか。ともかく、これは……マズイかもしれん。

「さだめのバトルフェイズ! 『人造人間 サイコ・シヨツカー』でセットされた守備モンスターを攻撃! 『電脳エナジー・シヨツク』!」

サイコ・シヨツカーの目から発射されたレーザーが俺のセットモンスターを貫く……。

「かかったな!」

「!?!」

「俺の守備モンスターは『異次元の女戦士』！一緒に消えて貰うぞ！サイコ・シヨツカー！」

『異次元の女戦士』DEF1600

女戦士の輝きが自らとサイコ・シヨツカーを包み込む。輝きが収まった時、そこに残されていたのは『終末の騎士』一体のみ。

「……流石お兄ちゃん」

「サイコ・シヨツカーは読んでたからな。できるだけモンスター効果で対処することができるようになっておいた」

デッキ構成を光属性の戦士で固めてヴァンドルギオンの要素は少なめに。それが今回の俺のデッキ。

「じゃあさだめは『終末の騎士』でお兄ちゃんにダイレクトアタック！」

「速攻魔法『速攻召喚』！俺はデッキから『切り札の騎士 クイーン』を攻撃表示で召喚する！」

『お任せくださいな。セツ様』

『切り札の騎士 クイーン』ATK1500

力強く剣と盾を構える希冴姫。ここからが真骨頂だ。

この世界には現実よりもよっぽど扱いやすいカードが溢れている。この『速攻召喚』もその一つ。完全な『二重召喚』の上位互換。デッキからも通常召喚できる上、速攻魔法なので扱いやすさが段違いだ。

「くっ……お兄ちゃん……やっぱりお兄ちゃんはいいい引きしてるよ」
「俺がさだめに勝ってる所なんか打たれ強さとラックぐらいだからな」

「そんなことないんだけどなあ……さだめはこれでターンエンドだよ」

「俺のターン！ドロー！俺は『切り札の騎士 キング』を攻撃表示で召喚！効果でデッキから『切り札の騎士 ジャック』を攻撃表示で特殊召喚！」

『切り札の騎士 キング』ATK1600

『切り札の騎士 ジャック』 ATK1900
いつもの三銃士による連携。そして……。

「バトルだ！ 『切り札の騎士 クイーン』 で『終末の騎士』 を攻撃
！ 『エレガント・ハーツ』！」

『行きますわ妹様！ はああっ！』

希冴姫の素早い連続攻撃が闇に堕ちた騎士を切り刻む。

「くう……」

さだめLP3900

「俺は……」

俺はジャックとキングに攻撃をさせようとしてふと思いとどまっ
た。

さっきのさだめのセリフを思い出す。

『この間ゴーズが来てくれた時からかなあ…… “引き” が強くなっ
た気がするんだあ……』

『冥府の使者ゴーズ』

この間からさだめの精霊としてさだめの守護に就いている粗暴な
男。

その効果の発動条件を、今のさだめは見事に満たしている。

「フフフフフフフフフフフフフフフフフフフフ……悩んで
る悩んでる」

……こういう駆け引きでさだめに勝てる気がしない。

「……けど、ここで躊躇ったら負けるような気もするな」

大体、例えゴーズが出てきても手札で対処可能。

「バトル再開！ 『切り札の騎士 キング』 でさだめにダイレクトア
タック！ 『貴光斬』！」

『少々気が引けるが……すまぬの』

「くあ……」

さだめLP2300

攻撃は通った。しかし……さだめの目が教えてくれる。やはり……
来るか！

「手札から『冥府の使者ゴーズ』の効果を発動！『冥府の使者ゴーズ』を攻撃表示で特殊召喚！今回は戦闘ダメージだから更に『冥府の使者カイエン』のトークンを守備表示で特殊召喚！」

『やれやれ、ようやく出番かよ』

『精いつぱい頑張らせていただきます！』

『冥府の使者ゴーズ』 ATK2700

『冥府の使者カイエントークン』 DEF1600

カイエントークンの攻守はダイレクトアタックしたキングの攻撃力、即ち1600。

「バトル続行！『切り札の騎士 ジャック』でカイエントークンを攻撃！『瞬光剣』！」

『張り切っていたところ申し訳ありませんが、早々に散って頂きます！』

ジャックの剣で為す術なく切り裂かれるカイエン。

『わ、私なんのために出てきたんですかー！？』

『……壁扱いに決まってるだろオがダアホ』

『ひあああーっ！？』

……なんか妙に萌えた。仕事忙しい中御苦労さまカイエン。

カイエンは守備表示だったのでさだめのライフに変動はない。そしてさだめのフィールドには攻撃力2700の『冥府の使者ゴーズ』

『よオ、ラブコメ野郎。またラブコメ的事件に巻き込まれてやがんなア』

「……うっせ。否定できないタイミングでその呼び方すんな」

『否定できるタイミングなんつーもンがテメエにあるかよ』

くそう。コイツにはなんか言い返せない。

「ま、まあ今はいい。とにかく俺はメインフェイズ2に手札から魔法カード『融合』を発動！」

「『融合』……？」

「俺の場にいる三体の切り札の騎士は、それぞれ『クイーンズ・ナイト』『キングス・ナイト』『ジャックス・ナイト』としても扱う

！ よつてこの三体を融合し、エクストラデッキから『アルカナ ナイトジョーカー』を攻撃表示で融合召喚！」

『アルカナ ナイトジョーカー』 ATK3800

「っ……出たね。お兄ちゃんの最強騎士」

「俺はカードを一枚セツト。ターンエンドだ」

「さだめのターン、ドロー！ ……お兄ちゃん。さだめに『アルカナ ナイトジョーカー』は効かないよ」

「何？」

「さだめは手札から魔法カード『おろかな埋葬』を発動。デッキから『ネクロフェイス』を墓地に送るよ」

『ネクロフェイス』……面倒なカードを。

「そして、さだめの墓地には『闇より出でし絶望』『終末の騎士』

『ネクロフェイス』の三体闇属性モンスターがいる……さだめは手札から『ダーク・アームド・ドラゴン』を特殊召喚！」

『ダーク・アームド・ドラゴン』 ATK2800

「っ！」

来たか大物！

「さだめは墓地の『ネクロフェイス』をゲームから除外して『ダーク・アームド・ドラゴン』の効果を発動！『アルカナ ナイトジョーカー』を破壊！」

「『アルカナ ナイトジョーカー』の効果発動！ 手札の『E・HEROプリズマー』を捨てて効果を無効化する！」

「……それが、アルカナの弱点だよお兄ちゃん。まずは除外された『ネクロフェイス』の効果発動。お互いにデッキの上から五枚のカードをゲームから除外する！」

「くっ……」

俺のデッキから除外されたのは『魔宮の賄賂』『聖なるバリア ミラーフォース』『異次元の女戦士』『神の宣告』『ジャム・ウオリアー』の五枚。

「マジかよ……」

除外されたカードはどれも有用で除外されたのはかなりの痛手だ。
「さだめも五枚、除外するね」

さだめの除外されたカードは『速攻の黒い忍者』『闇王プロメテ
イス』『漆黒のトバリ』『ダーク・ホルス・ドラゴン』そして……
『ネクロフェイス』
「ツツ!!」

「アハハッ！ ラッキー！ ラッキーだよさだめは！ これはもう
さだめに勝つように神様が操作してくれてるみたい！」

俺のデッキトップから除外されたのは……『デストラクション・
ジャマー』『融合』『アルカナソード クローバー』『アルカナソ
ード ハート』『冥王竜ヴァンダルギオン』……。

「ヴァンダルギオン……！」

マズイ……ヴァンダルギオンが落ちた……！

「さだめも除外除外」

「ご機嫌なさだめが除外したのは『ダーク・グレファア』『ダーク・
クリエイター』『ダーク・アサシン』『ジャイアントウイルス』『
D・D・R』の五枚。

「あちゃー『D・D・R』が落ちちゃったかー。まあ誤差の範囲だ
よね」

まったくだ。確かに除外されたサイコシヨツカーを復活されずに
済むのはラッキーだが、それよりもデッキをことごとく除外された
ことの方が大きい。

「それじゃ、改めて『アルカナ ナイトジョーカー』を対象に『ダ
ーク・アームド・ドラゴン』の効果を発動！ 墓地の『闇より出で
し絶望』をゲームから除外して『アルカナ ナイトジョーカー』を
破壊するよ！」

「そうか……アルカナは……」

「そうだよ。『アルカナ ナイトジョーカー』の弱点は、自分を対
象とする効果を『無効化』することはできても『破壊』することは
できない。しかもその無効化できるのは一ターンに一度だけ。そし

て『ダーク・アームド・ドラゴン』は……」

「墓地に闇属性モンスターがいれば何度でも破壊効果を使える……！」

「そう！ 消えちゃえアルカナ！」

「アルカナ……ッ！」

『ダーク・アームド・ドラゴン』の放った暗黒の衝撃波がアルカナを為す術なく呑み込んで行く。

「アルカナ破れたり、だよ。お兄ちゃん！」

「うそ……セツのアルカナが……」

「負けるところ、初めてみたよ……」

「つち……アイツ自身は気に入らねえが、ファイバリットカードが倒されるのを見るのは胸糞悪いな」

私たちはセツの『アルカナ ナイトジョーカー』が闇に吞まれて行くのを呆然と眺めていました。攻撃力3800を誇り、破壊耐性まで持っていたアルカナがこうして倒されるのを、私たちは初めて見ました。最初サイコサッカーを迎え討ち、希冴姫さんたちを連続召喚したところまでは、見事にセツのシュミレーション通り。良い流れでした。

「ゴーズの辺りから流れが変わり始めたな」

剣士さんの言う通り、さだめさんがゴーズを召喚した辺りから雲行きが怪しくなっていました。それでもセツが『アルカナ ナイトジョーカー』を召喚したことで、暗雲は晴れたと思っただら……。

「悪夢は、そこからでしたな」

「『ダーク・アームド・ドラゴン』……『ネクロフェイス』の連続発動……アルカナの除去……どれも完璧だ。隙がねえな」

「セツ君……」

このままだと、セツは……。

「留年しちゃったらわたしの御褒美が」

「……そう考えるとセツ留年でも良いかもしれません」

「おい」

「さあ！ 仕上げだよお兄ちゃん！ さだめは墓地の『終末の騎士』をゲームから除外してお兄ちゃんの伏せカードを破壊するよ！」

「チエーンする！ 『和睦の使者』！ このターンの戦闘ダメージを無効化する！」

「……粘るね。さだめはこれでターンエンド」

「……状況は……最悪、か。」

「けど、悪いな。この後に亮さんとのデュエルも控えてるんだ。ここで躓くわけにはいかないな。さだめ」

「……ここで、また奇跡的なドローにでも賭けてるの？ そんなに上手くいくと思う？」

「いくさ。何故ってお前が散々デッキ圧縮してくれたからな」

「っ！」

除外されたカードたちの中に俺の今望むカードは入っていないなかった。なら、いける筈だ。

「俺のラストターン！ ドロー！」

俺は引いたカードをフィールドに呼び出す。今更確認は……しな
い！

「俺は『放浪の勇者 フリード』のモンスター効果を発動する！」

『放浪の勇者 フリード』 ATK1700

「……あ」

「墓地に存在する『ジャム・ウォリアー』と『切り札の騎士 クイーン』をゲームから除外して、さだめの『ダーク・アームド・ドラゴン』を破壊する！」

「また……そんなバカヅキに……」

「俺はターンを終了する！」

「まだ……まだだよ。さだめのターン！ ドロー！」
引いたカードを確認したさだめの顔が歪んだ。

「さだめは……『終焉の精霊』を攻撃表示で召喚するよ」

『終焉の精霊』……あいつ……やっぱり入れてたのか……。

「ゲームから除外されている閻属性モンスターの数はお兄ちゃんのヴァンダルギオンも含めて13枚。攻撃力は3900。バトルフェイズ。『冥府の使者ゴーズ』で『放浪の勇者 フリード』を攻撃！」
『行くぜセツ！』

「俺は手札から『オネスト』の効果を発動！ 『冥府の使者ゴーズ』の攻撃力分『放浪の勇者 フリード』の攻撃力をアップする！ 迎え討てフリード！」

『ぬおっ！？ チイツ！ すまん、負けたぜ……』

さだめLP600

これで『放浪の勇者 フリード』の攻撃力はこのターンのみ4400。攻撃力3900の『終焉の精霊』にも負けない！

「さだめはターンエンド……やっぱり、負けちゃったか」

さだめはブラフを伏せる様子も見せず、どこか清々しい表情でターンを終了した。

「ああ。今回は、俺の勝ちだ。俺のターン、ドロー。俺は『放浪の勇者 フリード』の効果を発動。墓地の『切り札の騎士 キング』と『切り札の騎士 ジャック』をゲームから除外して『終焉の精霊』を破壊する」

勇者の波動を受け、禍々しい悪魔が消滅する。

「……一応、さだめは『終焉の精霊』の効果を使うよ。このカードが破壊され、墓地に送られた時、ゲームから除外されている閻属性モンスターを全て墓地に戻す……ねえお兄ちゃん。やっぱり、さだめと一緒に教室は嫌？」

不安そうなさだめの声。けど、そんなに不安になることはない。
「……そうじゃない。そうじゃないよさだめ。お前と一緒に嫌だっ

たら、俺はとつくの昔に逃げ出してるか廃人にでもなつてたさ。お前の隣は……まあ流石に心地良いとは言えないが……他の誰より、違和感はないかもな」

「ずつと一緒にいた妹。例えどんなに歪んでいても、永遠にそれは変わらない。」

「けど、俺はやっぱ普通に進級したいんだ。それに、この後に控えてる亮さんのデュエルも楽しみたい。そのためにも、ここで負けるわけにはいかなかったんだ」

「……うん。ごめんねお兄ちゃん。ありがとう……やって。お兄ちゃん」

「ああ。バトルフェイズ！俺は『放浪の勇者 フリード』で、さだめにダイレクトアタック！これで……勝ちだ！」

「あああつ！」

さだめLPO

「さだめ、またデュエル、しような。今度はもうちょっと普通にさ」
「……うん。その時は負けないよ」

「それは、俺もだ」

「そこまで！ なノ〜ネ！ シニョ〜ルセツの勝利なノ〜ネ！」
クロノス先生の勝利宣言を聞いて、俺は一先ず安堵の息を吐くのだった。

第二期第十七話「進級試験〜カイザー亮〜」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第二期第十七話「進級試験〜VSカイザー亮〜」

さだめとのデュエルを終えた俺は、小休止とデッキの調整のために一度アテナたちの所に戻ってきた。どうやら十代たちも来ていたらしく、全員笑顔で迎えてくれた。

「セツ！ お疲れ様でした！」

「危なかったね〜」

「ヒヤヒヤさせんなアホ」

「しょうがないだろ。さだめ相手に圧勝なんてできるか
いやまったく。ヒヤヒヤしたのは俺の方だ。」

「いや〜アルカナがやられちゃまった時はどうなるかと思ったぜ！」
「アルカナの効果の盲点を突かれたな。いや、それも想定済みだったのか？」

「ああ。さだめが『ダーク・アームド・ドラゴン』を使ってくる可能性は考えてあったからな。とはいえ、正直血の気が引いたよ」

「次はいよいよお兄さんツスね……」

「フン。コテンパンにされてくるといい」

「悪いな万丈目。そういうわけにもいかないんだ。あと翔。遠慮せず、亮さんを応援してくれていいからな」

心配そうにしている翔と相変わらぬ万丈目にもいつも通り返す。
「しかし、思ったよりメタでもなかったじゃねえか」

「ああ、それはきつと……」

「メタのメタ張られてるってわかってるのにそのまま使うわけないじゃん」

剣士の疑問に答えようとした時に、横からさだめ本人が答えを明かした。

「さだめさん？」

「何そんなに驚いてるのアテナ」

「いえ、さだめさんがいつになく普通に登場したので……」

「平和でいいじゃないか」

「最初はお兄ちゃんの股の下から顔を出そうとしたんだけど……」
やめれ。

「まあ偶には普通に出ても良いかなって。ギャップ萌えを狙ってた」

「戸惑っただけみたいだけど……」

「うん。やっぱり変態チックな方がお兄ちゃんの受けもいいみたいだね」

「さも俺が変態のように言うのはやめろ」

「たくこイツは……」。

「まあいいや。アテナ、サイド貸してくれ」

「はい。これですね？」

「サンキュ。えーとこれをこうして……」

さだめ用に調整したデツキを亮さん用に調整し直す。

「お兄ちゃん、気負ってない？」

「？……ああ。俺はいつでも俺だよ」

多分、原作の十代みたいなことにならないか心配してくれているんだろう……ん？ 原作の十代って……どうなったんだっただか。

「どうしんたんですか？」

「あ……いや、なんでもない。俺は元々バリバリの頭脳派、研究派だからな。これでいつも通りだよ」

「まあさだめとやってた時も大丈夫そうだったし、心配ないかな」

「よしっ……と。これでいいかな。希冴姫」

「はい。セツ様」

「次も頼む。一応、軸はお前たちだから」

「いつ何時も、わたくしたちはセツ様のために動くことに躊躇いはありませんわ」

「ああ。頼りにしてるよ」

さて……休憩時間もあと少しだな……。

「セツ……」

「どうした、アテナ」

「勝て、ますか？ また来年も、セツと一緒に勉強できますか？」

アテナ……。

「……相手はアカデミアのナンバーワンデュエリスト。カイザー亮勝てる、と断言するには、余りにも強すぎる相手だ」

引きの強さ。戦略の緻密さ。冷静に次の手を打つ戦術眼。どれをとってもナンバーワンの名を持つに相応しい。

「セツ君……」

けど……。

「負ける気は……ない！」

負けるつもりでデュエルするつもりなんてない。

「どうせならカイザーの名も、パーフェクトデュエリストの名も剥ぎ取ってやるつもりでやらせてもらおう。そのつもりで俺は、亮さんの挑戦を受けたんだ」

「ま、負け戦と決まったわけじゃねえ。勝機はどっかに転がってるだろ」

「そうですね！ セツならきつとパーフェクトを超えられます！」

アテナたちの声援に後押しされ、俺は亮さんの待つデュエルステージへと登った。

「……もういいのか？ まだ休憩時間は残っているが？」

「あんまり休憩が長いと中弛みしちゃいますから。調整も終わったし、心強い声援も貰いましたしね」

折角さだめにも勝ち、調子は良好な状態だ。下手に間を置いて気分を途切れさせる必要もない。

「お前も、良い仲間を持ったな」

「ええ。最高ですよ」

本当に、最高の友人だ。

「さて、それじゃあ亮さん。アカデミア卒業の前に、経歴に泥をつけさせて貰いますね」

「面白い。俺も、お前をここで留年させてみるとうかが」

互いに軽口をたたき合い、デュエルディスクを構える。

「クロノス先生！ こっちはもう準備完了ですよ」

「マンマミーヤ！？ 早いノ〜ネ、まだ休憩時間中なノ〜ネ！」

「まあまあ、いいではないですか。当人たちが大丈夫というのなら」

「鮫島校長……」

どっちかというと、自分が休憩したいだけだったっぽいクロノス教諭に、鮫島校長が助け船を出してくれる。

「ってことで、始めましょうか。亮さん」

「ああ。来い、セツ！」

「デュエル！！」

「先攻後攻は？」

「どちらでも」

「んじゃ、先攻貰います」

亮さんのデッキは後攻有利。そんなことは百も承知だが、正直俺のデッキが完全に先攻型のデッキだからな。相手に合わせるより、自分のやりやすいようにさせてもらう。

「俺のターン！ ドロー！ 俺は手札から装備魔法『未来融合 フューチャー・フュージョン』を発動！ デッキから『切り札の騎士 クイーン』『切り札の騎士 キング』『切り札の騎士 ジャック』の三体を墓地に送り、融合デッキから『アルカナ ナイトジョーカー』を攻撃表示で融合召喚！ カードを二枚セット。ターンエンド
！」

『アルカナ ナイトジョーカー』 ATK3800

会場がザワつく。一ターン目からの『アルカナ ナイトジョーカー』。それも手札の使用枚数はたったの一枚。

「……やるなセツ。お前も、前以上にアルカナを使いこなしている」「この一年、色んなことがありましたから。騎士たちとの絆は、どこまでも強く深く結ばれていますよ」

「そうか。では、俺も手を抜いては居られないな。俺のターン！ドロー！」

亮さんの手札に、すでに『サイバー・ドラゴン』はあるのだろうか。現実的に考えればあるはずがないが……相手はカイザー亮。どんな手で来ても不思議ではない。

「俺は魔法カード『融合』を発動！手札の『サイバー・ドラゴン』三体を墓地に送り、来い『サイバー・エンド・ドラゴン』！」

『サイバー・エンド・ドラゴン』 ATK4000
「っ！」

ホントに居やがった！

「行くぞセツ！『サイバー・エンド・ドラゴン』で、『アルカナ ナイトジョーカー』を攻撃！『エターナル・エヴォリューション・バースト』！」

「アルカナ！ぐあああっ！？」
セツLP3800

アルカナがあっさり倒される。相変わらずの火力。だが！

「リバーカードオープン！『アルカナソード クローバー』の効果を発動！自分フィールド上の『アルカナ ナイトジョーカー』

か、切り札の騎士と名のついたモンスターが破壊され、墓地に送られた時、破壊されたモンスター以外の該当モンスターを墓地から特殊召喚してこのカードを装備する！戻って来い！希冴姫！」

『わたくしたちの結末は破れません！』

「『アルカナソード クローバー』が装備されたモンスターの攻撃力は700ポイントアップする！その代わり、このカードが破壊

された時、装備モンスターも破壊されるんですけどね」

『切り札の騎士 クイーン』 ATK1500 2200

「エースモンスターが倒されても次に繋げるか……」

「当然！ 負けても次に勝てばいい！ 諦めたらそこで試合終了ですよ！」

「フ……俺はカードを一枚セット。ターンを終了する」

「俺のターン！ ドロー！」

手札を確認する。手札は四枚。ここから勝利に繋がるタクティクスを組み上げる！

「手札から魔法カード『死者蘇生』を発動！」

「アルカナか……」

「いいえ！ 俺が蘇生するのは『切り札の騎士 キング』！ 戻って来いキング！」

『ほ。年寄り遣いが荒いのう』

『切り札の騎士 キング』 ATK1600

「キングの効果により、デッキから『切り札の騎士 ジャック』を特殊召喚！」

『切り札の騎士 ジャック』 ATK1900

「再び三銃士を揃えてきたか……」

「手札から魔法カード『融合』を発動！ フィールド上の三銃士を墓地に送り、もう一度力を貸してくれ！ 『アルカナ ナイトジョーカー』！」

『はあ！』

『アルカナ ナイトジョーカー』 ATK3800

「装備魔法『アルカナソード ダイヤ』を『アルカナ ナイトジョーカー』に装備！ 攻撃力300ポイントアップ！」

『アルカナ ナイトジョーカー』 ATK4100

「サイバー・エンドの攻撃力を上回ったか……！」

「バトルだ！ アルカナでサイバー・エンドを攻撃！ 『ジュエル・フラッシュ・ソード』！」

アルカナのもつ宝石剣が『サイバー・エンド・ドラゴン』を切り裂く。

「ぐう！」

亮LP3900

「『アルカナソード ダイヤ』の効果発動！ このカードを装備したモンスターが相手モンスターを戦闘によって破壊した時、俺はデッキからカードを一枚ドロウする！」

「すぐさま手札補充……やはり、俺とお前はどこか似ている……」
「いいや違うよ亮さん！ あんたが完璧なら俺は……無敵だ！」

「そしてさだめは自由！」

「え、運命じゃないんですか？」

「……さだめちゃんは自由でいいんじゃないかな？ やりたい放題だし」

「つか、セツも含めてお前からこんな時にネタに走ってんじゃないやねえよ……」

「その辺りがお兄ちゃんの凄いとこだよ」

「気負うことなくいつでも自然にネタを絡ませてきますからね」

「……それは、いいことなのか？」

「面白い。ならお前の無敵のタクティクス、見せてもらおうか！」

「望むところ！ カードを一枚セツトしてターンエンド！」

「俺のターン！ ドロー！ 俺は永続魔法『命削りの宝札』を発動！ デッキから手札が五枚になるようにドロウする！」

手札補充……初手から揃い過ぎてるとすぐに手札が尽きる。その場合やキーカードを手札に加えるための手札補充カードはコンボデ

ツキではほぼ必須。

「魔法カード『パワー・ボンド』を発動！」

「つやば……」

今の俺に『パワー・ボンド』をカウンターできるカードはない。

しかし、亮さんだつて『パワー・ボンド』で素材にできるモンスターは……あのカードか！

「手札から『サイバネティック・フュージョン・サポート』を発動！ ライフを半分支払い、このカードを機械族融合モンスターの融合素材の代わりとすることができる！」

亮LP1950

まさかこんな序盤に高コストのそのカードを使ってくるとは……。決めに来るつもりか！？

「真のサイバー・エンドを見せてやろう……『サイバー・エンド・ドラゴン』！」

『サイバー・エンド・ドラゴン』 ATK8000
攻撃力8000の貫通効果持ちモンスター。やはり、圧巻だ。

「これで終わりだ！『サイバー・エンド・ドラゴン』で『アルカナナイトジョーカー』を攻撃！『エターナル・エヴォリュション・バースト』！」

「まだだ！ リバースカードオープン！『ガード・ブロック』！ 戦闘ダメージを無効にし、デッキからカードを一枚ドロウする！」
「だが、アルカナには消えてもらう！」

アルカナが、サイバー・エンドの放つ熱線に焼き尽くされる。

「『アルカナソード ダイヤ』の効果発動！ 装備モンスターが戦闘によって破壊された場合、デッキからカードを一枚ドロウする！」
「更にドロウ加速か……俺は『サイバー・ジラフ』を攻撃表示で召喚！ このカードをリリースして効果発動！ このターン終了まで戦闘以外によるダメージを無効化する！」

「そう来ると思ってましたよ！ カウンタートラップ発動！『天罰』！ 手札から『冥幼竜ヴァーミリオン』を捨てて効果発動！ 効果

モンスターの効果を無効化して破壊する！」

「何っ!？」

「まだです! 効果モンスターの効果をカウンターしたことによって手札の『冥王竜ヴァンダルギオン』第三の効果が起動! このカードを特殊召喚し、墓地に存在するモンスターを一体特殊召喚する! 今再び蘇れ! 『アルカナ ナイトジョーカー』!」

『冥王竜ヴァンダルギオン』 ATK2800

『アルカナ ナイトジョーカー』 ATK3800

「セツのデッキ、エースの揃い踏みか……」

「それだけじゃない。『サイバー・ジラフ』の効果を無効にしたことで、亮さんには『パワー・ボンド』のデメリット効果、融合召喚したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受けてもらいます!」
「これが通れば勝ちだ!」

「……そう簡単に俺が負けると思うか? 俺はカウンタートラップ『ダメージ・ポリライザー』を発動! このターンカードの効果によるダメージをゼロにする!」

「やっぱり、そう簡単には行かないな。」

「『ダメージ・ポリライザー』の効果で、お互いにカードを一枚ドローする! カードをドロー!」

「俺も、カードをドロー!」

「俺はカードを二枚セツトし、ターンを終了する」

「……………すい」

「お互い、超重量級の融合モンスターを自由自在に操ってる」

「……フィールド上のモンスターの平均攻撃力がどうかしてるぜ」

「ヴァンダルギオンの2800が最低ですか……」

「けど、未だカイザー亮さんのフィールドには攻撃力8000の『サイバー・エンド・ドラゴン』だよ……セツ君、大丈夫かな」

「大丈夫です。セツの手札はありますし、何よりセツの眼は死んでません！」

「ありゃ、完全に勝つ気満々って顔だな。突破口を見つけたか……ただ油断してるだけか」

突破口であればいい。だがそれがもし油断であるのなら……。

「……いや、あいつに限ってそりゃねえか」

基本的に慎重すぎるくらいのプレイングをすることが多いセツだ。この大事な一戦で、油断などする男ではない。

「俺のターン、ドロー！」

手札は三枚。更に……。

「墓地の『冥幼竜ヴァーミリオン』の効果発動！ このカードがカウンター罠の効果によって墓地に置かれている場合、スタンバイフェイズ時に手札に戻す！」

『きゃうー！』

墓地から戻ってきたヴァーミリオンが俺に纏わりついてくる。

……ええい鬱陶しい！

「ミーちゃんです！ 可愛いです！」

「ミーちゃんって……あのヴァーミリオンのこと？」

「はい！ ミーちゃんです！」

「略すなら普通リオンとかじゃない？ ほら、そっちのほうがかっこいいよ」

「ミーちゃんは可愛いんです！」

「わたしはミリーちゃん、っていうのもいいと思うなあ〜」

「あ、それも可愛いです！」

「ヴァーミリオンってオスなんじゃない？ 息子でしょ？」

「可愛さに性別は関係ありません！」

「ダメだ……こいつらと一緒に見てると緊張感がまるでねえ」

「更に魔法カード『貪欲な壺』の効果を発動！ 墓地の『切り札の騎士 クイーン』『切り札の騎士 キング』『切り札の騎士 ジャック』を二枚と『アルカナ ナイトジョーカー』一枚をデッキに戻してシャッフル。デッキからカードを二枚ドロウする！」

これで手札は五枚！

「まだだ！ 更に魔法カード『強欲な壺』！ カードを二枚ドロウする！」

六枚！ 仕掛ける！

「亮さん、このターンで決着をつけます！」

「！ 馬鹿な……この俺相手にワンターンで決着をつけるつもりか！」

「速攻魔法『トラップ・ブースター』！ 手札を一枚捨てることで手札からトラップカードを発動させることができる！ 俺は『切り札の騎士 テンス』を墓地に送る！」

『勝て……セツ！』

すまんテンス。お前のことも、またコストに使ってしまった……。

『俺のことは気にするな。お前は……勝利を見据えて進め！』

ああ！ 必ず勝つ！

「バトルフェイズ！ 『アルカナ ナイトジョーカー』で『サイバー・エンド・ドラゴン』を攻撃！ 『ロイヤル・ストレート・スラッシュ』！」

「馬鹿な。サイバー・エンドの攻撃力は8000！ お前のアルカナでも遠く及ばないぞ！」

「わかってますよ。速攻魔法『決闘融合 バトル・フュージョン』」

！『サイバー・エンド・ドラゴン』の攻撃力をアルカナに加える！
アルカナの攻撃力が増大し、11800まで上がる。

「まだ甘い！ こちらも速攻魔法『リミッター解除』！」

そしてその上を行く『サイバー・エンド・ドラゴン』の攻撃力は
16000。力が更に漲る。

「そのくらい、予想してないわけがないでしょう！ 俺は手札から
『オネスト』の効果を発動！ 更に攻撃力を上げる！」

『オネスト』の効果はダメージステップの発動！『決闘融合 バ
トル・フュージョン』などではチェイン出来ない！ 背に熾天使の
翼を生やしたアルカナの剣が輝きを帯びる。攻撃力27800。

「やるな……だが、俺の『サイバー・エンド・ドラゴン』も光属性
だということを忘れたか！？ 『オネスト』！」

「っ！」

サイバー・エンドの背にも翼。攻撃力43800。

「俺の……勝ちだ！ セツ！」

「……俺が、何故態々『トラップ・ブースター』を使ったと思いま
す？」

「……なに？」

「手札からカウンター罠『天罰』を発動！ 手札から『冥幼竜ヴァ
ーミリオン』を墓地に捨てて亮さんの『オネスト』の効果を無効化
します！」

『きゅー！』

ヴァーミリオンがその身を光に変え、『サイバー・エンド・ドラ
ゴン』の翼を消し去る。

「……俺を、完璧パーフェクトを超えるか……！」

「貴方はまだ、限界パーフェクトなんかじゃない！ 俺も……貴方も、もっと高
みへ行ける筈だ！ 勝手に限界を決めるな！ カイザー！」

「セツ……」

「それは驕りだ！ どんなに強くなったって、限界パーフェクトなんかには至ら
ない！ 誰が何と言おうとも、あんたも俺もまだまだ発展途上なん

だ！」

「フ……そうか。そうかも……しれないな」

「行け！『アルカナ ナイトジョーカー』！ その剣を以て『サイバー・エンド・ドラゴン』と共に……亮さんの未来も切り開いてやれ！『熾天使の剣』！」

『はあああつ！』

「ぐおおおおおおおっ！？」

亮LPO

「ポカーン……なノ〜ネ」

「まさか……カイザーに勝ってしまうとは……」

クロノス先生や校長先生が呆然と呟いています。

正直、私たちも同じ気持ちです。セツならきつと勝ってくれる。そう信じてはいましたが……それでも、実際に、本当に勝ってしまうと驚きが隠せません。

「……やりやがった」

「うわ……え、いいのこれ？ お兄ちゃん……」

さだめさんは何か別の方向で戸惑っているような雰囲気を感じます。

「セツ君……すごいよ〜！」

加藤さんがパチパチと拍手するのを皮切りに、会場の歓声が爆発しました。

「すっげー！ セツの奴、あのカイザーに勝っちゃった！」

「これは……凄まじいデュエルだったわ」

「いやはや……どうやらセツ君を侮っていたかな？」

「馬鹿な！？ くう、この万丈目サンダー様を差し置いて先にカイザーに黒星をつけるとは……」

「最後の最後、ダメージ計算時であってもカウンター罠は発動可能

というところを見事に活用した素晴らしいコンボだった。カイザーのタクティクスと併せて、非常に参考になるデュエルだったな」

「お兄さん、大丈夫かな……？」

翔さんが負けてしまったお兄さんを心配しています。確かにすごいデュエルでしたし、心配になる気持ちもわかります。とりあえず私たちはみんなでセツたちの方へと向かうことにしました。

「……亮さん」

「……俺がお前とのデュエルを望んだのは、お前が十代とは逆で、俺と完全に同じタイプのデュエリストだったからだ」

俺も亮さんも、タクティクスを重視し、相手の出方を見つつどんな状況にも対応できるようにデッキを組むタイプのデュエリストだ。「だからこそ、十代とは別の意味で、お前ともデュエルがしたかった。純粹に、お互いどちらが上かを見たかった。……もしかしたら、こうして俺の限界を否定して欲しかったのかもしれない」

「……俺も、まだまだ未熟です。今回勝てたのだから、幸運が大きく作用していることを否定できません。次やれば、手も足も出ずに負けてしまいかもしれませんし、逆に圧勝出来るかもしれません。運の要素が強く絡んで、毎回どうなるかわからないから……デュエルって楽しいんですよ」

「……そうだな。俺とお前は似ているが……やはり違うようだ。どこまでもタクティクスに固執してるかと思えば、最後には運に頼るような暴挙にも出る。俺には出来ないデュエルだ」

「できますよ。それに、俺は中途半端なだけです。どうしようもなくなったら神様に祈ることしかできない、半端者です」

「だが、お前はこうして勝利を掴んだ。それが結果だ」

「結果なんか後から勝手についてくるんです。デュエル中はただ楽しめばいい」

「……お前に負けることができ、良かったよ」
「光栄です」

今度デュエルする十代には気の毒だが、亮さんはこれでまた強くなってくれるだろう。願わくば……プロになってからも、負けることを怖がらないで欲しい。

「……しかし、お前たち兄妹には負け通しになってしまったな」

「へ？ 兄妹？」

「聞いていないのか？ 俺は以前の三幻魔事件の折、お前の妹に為す術なく敗れている。メタデツキではあったが……負けは負けだ」

あ、あー……そう言えばそんなことになってたんだっけ……。あいつはまったく……。

「ともかく、こうして見事に俺たちを打ち破ったんだ。お前は文句なしで進級できるだろう」

「あ……そう言えばこれ、進級試験でしたっけ」

「……忘れていたのか？」

亮さんの呆れたような視線が痛い。

「いや、俺って何かに集中していると他のこと忘れちゃうみたいで……」

デュエルに集中し過ぎてそんな大事なことをすっかり忘れていた。

「まったく……器用なようで不器用な奴だ」

「はは……さだめからもよく言われます」

俺たちの間で笑いが漏れる。こちらに駆け寄ってくるアテナたちに手を振って、俺はなんとか進級への切符を手にする事ができたことを喜ぶのだった。

第二期第十七話「進級試験〜カイザー亮〜」（後書き）

こんにちは。

以前のあとがきにもありましたが、今回も補足。セツが使った未
来融合はアニメ効果です。装備カードで、即時融合が出来る代わり
に、融合ターンに攻撃ができない効果になります。あと、最後のオ
ネスト 天罰の効果ですが、セツのオネストはダメージステップの
発動で、そのオネストにはチェインせず、その後ダメージ計算時に
カイザーが改めてオネスト起動。セツはそのオネストを天罰で跳ね
返しています。

それでは、悠でした！

特別編「さだめデッキレシピ2」(前書き)

中身は以前と変わっていませんが、順番がおかしいとの指摘を受けたので入れ替えです。

特別編「さだめデッキレシピ」2

アルカナ〜切り札の騎士〜

特別編「さだめデッキレシピ」2

「なぜこのタイミングで……」
息抜きです。

「そしてなぜお兄ちゃん居ないし……」
前回やり過ぎたんじゃないですか？ 大分お疲れでしたよ。

「お兄ちゃんはおれくらいでへコたれないもん！」

色々あつて疲れてるんですよ。そつとしておいてあげてください。
代わりも呼んでおきました。

「お兄ちゃんの代わりがいるとでも？」

……偶には譲歩してください。

「だが断る！」

では代わりのアテナさんです。

「無視された……」

「えと、セツの代理のアテナです。さだめさん、あまり気を落とさ
な……いえ、気を静めてください！」

「うううう〜！」

「デッキレシピ！ デッキレシピに行きましょう！ とりあえず、
り押しでも進めておいた方が良さそうです！」

・上級モンスター

『ダーク・アームド・ドラゴン』×1

- 『ダーク・ホルス・ドラゴン』×1
- 『ダーク・クリエーター』×1
- 『ダーク・ネフティス』×1
- 『人造人間サイコシヨツカー』×2
- 『闇より出でし絶望』×1
- 『冥府の使者ゴース』×1

計8枚

「比較的多いんですね」

「その辺ちよつとアテナと似てるんだよね。さだめはアテナと真逆の閻属性主体のダークデツキだけど、モンスター比率が高い辺りは似てるよ」

「一応作者さん曰く私とは真逆の存在みたいな立ち位置で作ってたみたいですからね」

「最近怪しいけどね」

・下級モンスター

『キラートマト』×3

『終末の騎士』×3

『ダーク・グレファア』×1

『ジャイアントウイルス』×3

『速攻の黒い忍者』×1

『ファントム・オブ・カオス』×3

『死霊騎士デスカリバー・ナイト』×3

『ネクロフェイス』×2

『闇王プロメティス』×2

『終焉の精霊』×1

計22枚

「『終焉の精霊』……さだめさん、まだ入れてるんですね」

「……抜こう、って思ったことは一度や二度じゃないんだけどね。

でもやっぱり、さだめのデツキには有用な効果だし、もう邪悪な精霊が宿っているわけでもないから」

モンスター総計30枚

・魔法カード

『闇の誘惑』×1

『漆黒のトバリ』×2

『おろかな埋葬』×2

『トレード・イン』×2

『死者蘇生』×1

『D・D・R』×2

『終わりの始まり』×1

『強欲な壺』×1

計12枚

「ドローカードと帰還カードですね」

「うん。墓地の枚数調整とかも含めてね」

「もしかして、罨カードは少なめですか？」

「アテナと同じでね」

「……そう言われればそうですね」

・罨カード

『閻次元の解放』×2

『リビングデットの呼び声』×1

『王宮のお触れ』×2

計5枚

デッキ総数47枚。

「さだめ的には『速攻の黒い忍者』は抜いても良かったかなあ〜って思ってるんだけどね」

「そうですね。でも、あまりデッキ枚数を減らすと……」

「そう。『ネクロフェイス』で自分が先にデッキが尽きたりしかないのが怖いんだよね〜」

「重要な下級モンスターは……『ファントム・オブ・カオス』ですか？」

「そうだね。もし『ダーク・アームド・ドラゴン』が腐ったりして、

墓地に捨てた時とかにコピーして効果を使ったりもできるから。後は『闇王プロメテイス』」

「墓地の枚数調整兼ビートの主力ですね」

「出来るだけワンキル狙いで使いたいな。元々の攻撃力は1200しかないし」

「墓地の闇属性を三枚まで減らして『ダーク・アームド・ドラゴン』が一般的なダムドビートと言われるデッキですね」

「そ。他には……そうだね。デスクリバーナイトも居るからサイコシヨッカーと出せば結構強力なロツクになるかな」

「魔法カードには対応していないのが穴になりますけどね」

「うん。一応『ダーク・ホルス・ドラゴン』はいるけど、あんまり抑制にもならないかな。活用できたことも少ないし」

「畏対策の『王宮のお触れ』とサイコシヨッカーですけど、さだめさんのデッキに入っている他の畏は……」

「うん。どちらも帰還用。サイコシヨッカーに使えば完全蘇生に繋がるし、これらのカードで帰還させた上で『王宮のお触れ』を使えばやっぱり完全蘇生だよ」

「結構サイコシヨッカー中心でもあるんですね」

「まあやっぱり強いからね。畏が使えなくなるのは。今回は負けちゃったけど、お兄ちゃんみたいなパーミッションデッキには致命的だし」

「そして『終焉の精霊』ですか……」

「……たくさん闇属性を除外してる場合は戦力になるし、やられたらまた色んなコンボに転用できるから、すぐ使えるカードだよ」
「気分的にはあまり良くないですけど……」

「……いつまでも引きずっても仕方ないよ」

「さだめさん……」

「お兄ちゃんをずっと苦しめてたさだめはもういない。……まあ、いまでも迷惑はかけ通しだけだよ。それでも、ずっとお兄ちゃんは傍にいてくれるから」

「ちょっと羨ましいです」

「それ、さだめはアテナにだけは言われたくないな。どれだけ自分がおいしい思いをしてるか理解してる？」

「う……はい」

「本音を言えば今ここで八つ裂きにしてしまいたいくらいには精神が昂っているさだめが居ます」

「……逃げてもいいですか？」

「逃げるならとりあえずさだめの理性が残っている内に。お兄ちゃんを連れて来てくれるとモアベター」

「い、今すぐ連れてきます！」

アテナフェードアウト。さだめが邪気眼症状っぽく呻いている間にセツ到着。

「……で、俺は何のために呼ばれたんだ？ もう大体デツキレシピ紹介は終わってるんだろ？」

「とりあえず、さだめの行き場のない情欲とか諸々を発散させるために」

「さらばだ」

「1%冗談だから待って」

「九割九分本気じゃねえか！」

「その1%に賭けてみようよ！」

「分が悪すぎる！ それで賭けられるギャンブラーは自殺志願者かただのアホだ！」

「大丈夫！ お兄ちゃんは気持ち良くなるだけだから！ 痛いのはさだめだけ！」

「黙れ人型モラルハザード！」

「……ふう、大分落ち着いた」

「漫才したら紛れるのか。どっちにしても疲れる奴だ」

「どっち道疲れるんなら気持ちの良い倦怠感の残る方を選択しようよ」

「その結果妹に一生憑かれることになるのはごめんだ」

「お兄ちゃんのイケズ」
「久しぶりに聞いたなイケズとか」
「ところでお兄ちゃんはさだめのデッキになにかコメントはある？」
「ん〜……ホントはきつとD・HEROとかE HEROも入れる
といいのかもな」
「まあ、こつちの世界じゃそれは厳しいよ」
「だな……といたいだが、すでに『混沌帝龍 終焉の使者』とか
手に入れてるやつが無理とか言ってもな」
「混沌帝龍はそこまでおかしくもないよきつと。ほら、双六おじい
さんのシヨップにもあつたみたいだし」
「ああ……そういやそうか。いや、でもやっぱり普通は持ってない
つて」
「これが、お金の力だよ！」
「買ったんだ……大金出して公式で使えないカード買ったんだ……」
「コレクシヨンのにもあの二枚は持っていたいという気持ちが強く
てね〜」
「ああ、確かにそれはわかるかもしれん。俺もレアカードは使えな
くても持っていたいと思う時あるし」
「ファンデッキとかも作つたりねー」
「……お前のファンデッキはただただ恐怖だったよ」
「主力は『振り子刃の拷問機械』。他にも『万力魔神バイサー・デ
ス』や『バイサー・シヨック』、『拷問車輪』に『悪夢の拷問部屋』
……あの拷問デッキは楽しかったな〜」
「……やめてくれ。なまじロック・バーンとしてはそこそこ機能し
ている辺りシヤレにならん」
「『悪夢の鉄檻』も使つてたしね」
「現実で使われても嫌だったんだ。ソリッドビジョンまであるこつ
ちの世界でやられたらトラウマになる」
「闇マリクさんのデッキは個人的に好き」
「最悪だな……」

「『悪夢の鉄檻』と『悪夢の拷問部屋』。そこに『拷問車輪』と『溶岩魔神ラヴァ・ゴーレム』を組み合わせた時はもう興奮が止まらなかつたよ」

「城之内さんの悲劇を繰り返そうとすんな！ 闇のゲームでならホントにああなるんだからな！」

「……お兄ちゃんちよつとやってみようか」

「俺は逃げる！ 逃げるからな！」

「あっ！ ちよつとお兄ちゃん！……お兄ちゃんが逃げちゃって相方が誰もいなくなっちゃったのでこの辺りで終わりにするよ。待ってーお兄ちゃん！」

特別編「さだめデッキリシピ2」（後書き）

今になって改めて見直すと、ちょこちょこ変えたくありませんね……
……というか、構築甘い……。スナイプストーリーカーとか入れようぜ悠……。
……。ホルス要らねえだる悠……。ウイルスもいらねえ。デスカリバーナイトも邪魔になりそうだし……。封印の黄金櫃入ってないし。まあ、ダメなところがわかるだけ成長したということにしておきましよう。

それでは、悠でした！

第二期第十八話「楽しかったんだ……」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第二期第十八話「楽しかったんだ……」

「ここ、か……」

冥界。生者に生無く、亡者にこそ真の生が存在する精霊界の魔境。そこに足を踏み入れたものが生きたまま現世に戻ることはできぬと言われるその地に、一柱の精霊が訪れていた。

「……行くか」

その精霊は揺るぎない足取りで王座へと赴く。……ショートカットの銀髪を冥界の風に揺らしながら。

「まったく、定例報告ってまだ一週間程度しか経っちゃいねエだろうが。我らが盟主はどこまで親馬鹿なんだよ」

「ゴ、ゴーズ様。盟主様に向かってそのような口は……後で怒られるの私なんですからね!？」

「ああ?　なんでテメエがどやされンだよ」

「ゴーズ様が常にそんな態度だからですよ!　あいつにいくら言っても聞かないからお前がしっかり監督せんかーって怒られるんですー!」

「そりゃゴクローなこったな。せいぜいこれからも怒られてくれや」

「ゴーズ様あ！」

カイエンはもう完全に涙目だ。シャルナとの折衝などの仕事も含め、毎日必死に仕事をしているのに報われた試しがない。

「はう……今日もいつぶりのオフだったんですよ……？　もし許されるならセツ様にお話を聞かせてもらいたかったのに……」

「一応言つとくがよ。あいつはやめとけ。世界報われない女ランキングダントツ一位のお前なんかじゃあの競争率を勝ち残れねえよ」

「わ、私はそんなつもりじゃありません！　人間界の話とか、普通の生活の話をお聞きしたいだけで……」

「尚更やめとけ。あいつの日常が世間一般の日常だと勘違いしたら益々テメエの浮世離れが進行しちまう」

むしろ非日常を日常として生きているようなセツだ。常識感覚が完全に麻痺していると云っても良い。

「ううう……こないだは折角の初デュエルだったのに出て早々切り倒されて出番終わってしまったし……どうしてこんなに理不尽なんですかあ！」

「テメエがトークンだからじゃね？」

「はう！？」

トークンとは、明確なカードに寄り代を持たず、精霊としての力も弱いものたちのことだ。カイエンの場合、ゴーズが誕生した時に副産物のような形で生まれたので、ある意味二人は双子の兄妹とも言える。

ゴーズの精霊としての力はかなり強いが、カイエンの場合は非常に不安定で時にはゴーズ以上の力を発揮することすらあるが、普段は力も弱く、あまり実力を発揮できない場合が多い。

「ま、テメエは精霊界で気張れやってこつたな」

「私は人間界に行きたいんです！　というか是非とも精霊界に週休二日制を導入したいです！　私にはオフが少なすぎます！」

「オレに言ってもどーしようもねえだろオよ」

「せめて、せめて有給休暇くらいくださいよう」

「だからオレに言っただけなの」

こんなカイエンでも仕事自体は優秀だった。尤もそれこそがカイエンにとつての不幸なのかもしれないが。

「オラ、そろそろ御前だろが」

「はう。すみません……」

冥王の間。即ち冥界の盟主であるヴァンダルギオンが常駐している部屋を前に、二柱の精霊は姿勢を正した。

「冥王様。我ら冥府の使者二名、人間界より帰還し、定例報告を「ちーっす。報告に来たぞヴァンダルのオッサン！」ってちよつとゴーズ様!?」

何のために姿勢を正したんだかわからない傲岸不遜なゴーズの口調に慌てて制止しようとするカイエンだが、すでに放たれてしまった言葉を取り消すことはできない。

『……入れ馬鹿共』

「はうう……また、また怒られますう……」

さめざめと涙を流すカイエンを無視して扉を蹴破りつつゴーズが冥王の間にズカズカと踏み入って行く。その様子に目上に対する尊敬や畏怖のようなものは何も感じられない。

「つーかたかだか一週間ちよつとで一々呼び戻してんじゃねエよ親馬鹿竜」

「じくずさまあ……」

最早止めることもできず、散々叱られるであろう己が不運を目の幅涙で受け入れることにしたらしいカイエンを尻目にゴーズは報告を始めた。

「ンで、報告報告つと。ふあ……チビ竜の奴は元気一杯。くるくるちよこちよここと、御堂兄妹の周りをウロチヨロしてんよ。目エ離しても、とりあえずそこにいるから楽でいいやね」

欠伸交じりにそう報告するゴーズに、ヴァンダルギオンは冷ややかな目を向ける。

『……そもそも目を離すな馬鹿者め。まあ、元気そうで何よりだが』

「大体たかが一週間でどうにかなるわきゃねエだろ。チビでも時期冥王竜だぜ？ 人間界みてエに温い世界で万一どうにかなったらその方が可らしいぜ」

「いいなあ、温い世界に行きたいですう……」

『……貴様らは……』

超強気なゴーズと超弱気なカイエン。双子のようなモノの癖に性格正反対な使者二人にヴァンダルギオンも対応を持て余しているようだった。

『む……』

「あん？」

「へ？ どうしたんですか？」

ふいに表情を険しくするゴーズとヴァンダルギオンにカイエンがきよとんとした様子で尋ねる。

「相変わらず鈍臭エなテメエは。侵入者だよ」

『しかし、随分と静かな足取りだ。どちらかと言えば、訪問者だろうな』

「こんなところにアポなしの訪問者だア？ 侵入者の方がまだ信憑性あるぜ」

気配が近付き、念のため武器を構えるゴーズとカイエン。冥王の間に繋がる門がノックされた。

『何者ぞ』

ギギギギと門が重たい音を立てて開いて行く。その先にはふらつく足を必死に真っ直ぐ立て、真っ青な顔色をしつつも強い意志を感じさせる眼をした一人の騎士。

「我は切り札の騎士が一人、トランプ・ナイトエース！ この度は冥王竜殿に、尋ねたいことがあつて参った！」

今にも倒れそうな風貌で、それでもエースははっきりとした声で名乗った。

「へエ。セツの親衛隊じゃねエかよ。今日は一人でどうしたよ」

「……我はまだ、奴の軍門に下った覚えはない。あのクレイジー共

と同列に並べるな」

不機嫌そうな顔を隠そうともせず吐き捨てるエース。

「それで、そのエースさんがどのようなご用件で……？」

「冥王竜殿に尋ねたいことがあると先に申した筈だ。同じことを二度も言わせるな間抜けめが」

「はう！？」

ふらついていても、その凍えるような眼光は変わらぬままにカイエンを貫く。

「つーかテメエ、端からボロボロじゃねエか。今に死ぬぜ？」

「……心配いらぬ。この程度で倒れるほど、柔な鍛え方はしていない。下がれ下郎。我は貴様に用などない」

「……あ？」

エースの歯に衣を着せない物言いにカチンと来たゴーズが表情を険しくする。

「テメエ……雑魚の風情が調子乗ってんじゃねエぞ。何様だテメエ」
「力だけのチンピラが粹がるな。この程度の挑発に乗るから下郎だと知れ」

「テメ……」

『よせ。ゴーズ。エースとやらも口が過ぎるぞ。貴様は招かれざる客だと、まさかわからぬわけでもあるまい』

「……チツ」

「……申し訳ありませんでした。以後、気をつけます」

『よい。して、貴様の尋ねたいこととは何ぞ？』

「……冥王竜殿の、御子についてです」

『……我が子が何か？』

たった今報告途中だったヴァーミリオンのお話と聞き、表情を引き締めるヴァンダルギオン。エースは続ける。

「何故、人間界に預けるような真似を？ デュエルの精霊として赴けば、色々と辛い目にも遭いましょう。我が子をそのようなところへ送る真意をお聞かせ願いたい」

「何かと思えば……そんなことが」

「そんなこと？ 貴殿は御自らの後継の事をどうお考えか！？ デュエルの精霊などとは、死に臨むようなもの！ 態々大切な御子をそのような……」

「貴様こそ、一体何を馬鹿なことを言っている？ 我らは元よりデュエルモンスターズの精霊。デュエルにおける死など、我らにとつては役割の一つに過ぎぬ」

「役割……？ 何度となく使い捨てられ、滅びを常に隣人とするところが、我らの役割だとも申すのか！？」

「いかにも。我らにとつての墓地とは、一時の休憩所であり控室のようなもの。我らの中には死してこそその本質を扱えるものとしていよう。我が子も、そしてエース。貴様とてその一人ではないのか？」

「それは……しかし！ だからと言って死をよしとするのは間違っている！ 我らにだって、死を恐れる権利があるはずだ！」

「なア……オレにやよくわかんねんだがよ。墓地に送られることのどこが怖エんだ？」

「……なに？」

「墓地に行ったところで別に痛くも痒くもねエ。そりゃ墓地の見た目は不気味かもしれないエが、そこまで怖がるモンでもねエだろ」

「馬鹿な！？ 貴様にはわからんのか！？ 自身を喪失する恐怖、墓地に送られる時の痛みと苦痛！ いつ終わりが訪れるかもしれない絶望が！」

「思い出すだけで足が竦み、体が震える。あの恐怖を、ゴースは何でもないことのように言う。」

「……わかんねエよ。オレたちにとって墓地だの死後の世界だの日常なんだ。テメエもここに来たのならわかなだろ。この冥界は、死を貴しとするような風潮すらあんだ。ここでテメエの望む答えは得られねエよ」

「くっ……どいつも、こいつも……」

クレイジーだ……とエースは苦しげに呻く。

「わ、私には墓地に送られるという概念がありませんので、やはりエースさんの望む答えはあげられそうにありません。すみません……」

カイエンはトークン。墓地に送られることはない故に、彼女は死を知らない。或いはエースと最も遠い位置に在るのがカイエンだった。

「……教えてくれ。どうすれば、死の恐怖を克服できる？ どうすれば、貴様らのように死を受け入れられる……？」

「……貴様は、我が駆り手の力となることを望むのか？」

「……奴の軍門に下る気など、更々ない。ない、が……知りたいたい。クイーンが、キングが、ジャックが。テンスまでもが奴と共に在り、死を受け入れ、共に肩を並べて戦っている。何故、命を賭して戦うのか。クイーンは『愛するが故の献身、死への恍惚』とまで言っていた。……我には、我が同胞たちの心が見えぬ」

クイーンたちは、心からセツのための死を受け入れていた。

「……あいつらだってよオ。認めてもいねエ奴のために死を受け入れたりはしねエだろオさ。あれだろ？ 敬愛すべき君主のために騎士は命を賭して戦うってやつだ」

「わからぬ……何故、奴に従う？ そこまで、奴は素晴らしい人間なのか？ いやそもそも、人間などに従う意味があるのか？ わからぬ。我にはわからぬ」

「エース様も、セツ様にはお会いしたんですよね？ その時、なんというかこう、魅力のようなものを感じませんでしたか？」

「……オイオイ」

「……知らぬ。我は奴と会った時はただお互い意地の張り合いからドッグファイトにもつれ込んだからな。そんなモノを感じている余裕はなかった」

「え、えっとそれは……か、可愛らしいところがあるんですね。セツ様」

「オイオイ」

苦しいながらもセツを擁護するカイエンに、ゴーズはやれやれと肩を竦める。

『……魅力云々はともかく、我が駆り手は主君としての力を示したのだろうか？ 自らを使うに値する存在とは思わなかったのか？』

「……我らのデュエルは結局流れたようなものだ。それに、我は人間に従う気はない」

相変わらず取り付く島のないエースに、ヴァンダルギオンはセツが自らの下に契約を望んでやって来た時のことを話し出した。

『……我も、初めはそうであつた。我が駆り手がここに三銃士や破壊の女神を伴つて現れた時も、初めは話にならぬと追い返そうとした』

「……あんどきや、結局オレがデュエルすることになつたんだつたな」

「で、見事に負けちゃつたんですよ」

「るせエ！ なんもしてねエテメエが言うな」

「ひゃう！？ す、すみません！」

『……我が駆り手は力を示した。そして、覚悟も。我が炎に一月もの間堪え切ることで』

「なん……だと？」

『我が炎は死を与える。我が駆り手はその炎に対し妹を助けたいという一心で一月の間耐え忍び、我に覚悟も示したのだ』

冥王竜の炎に一月。それがどれほどの苦痛か。ただでさえこの冥界に来るだけで相当な生命力の減衰を感じるというのにその上……。

「奴も……クレイジーか……！」

「オレは途中から暇になつて寝てたんだがよ。まさかマジで堪え切るたア夢にも思わなかつたな」

「あの時のセツ様は……少し怖かつたかもしれませぬ。鬼気迫るといふか……妹さんを助けるんだつてずっと言い続けていました」

『我が炎は一種の幻炎。決して物理的に燃え尽きるようなものではないが……易々と耐えられるものでもない。我が駆り手は意志と願

い。口に出し続けた妹への想いを言霊とし、我が炎を打ち破った。

我が力を貸すとすれば、この者以外にあり得ぬとまで思ったほどだ」

「我は……」

僅かに迷うようなそぶりを見せたエースに、カイエンが恐る恐る尋ねる。

「エースさん……あの、もう一度だけ聞いていいですか？」

「……なんだ」

「エースさんがここに来た理由を……もう一度聞かせてもらってもいいですか？」

「なんだ……それはさつきも……」

言った筈だ。そう答える前にカイエンが言葉を選んで改めて尋ねる。

「いえ……私が聞きたいのは、盟主様に尋ねたいことがある、ということではなく……尋ねた結果、貴女は何を望んでいるのか。答えを聞き、そして何を為したいのか。最終的なエースさんの願いです」

「……」

カイエンの問いにエースは俯き、目を泳がせる。

「エースさん……貴女も本当は、セツ様にお力を貸したいのでは？」

共に肩を並べて……仲間の騎士たちと共に……」

「……ち、がう。我は……ただ……」

「力を貸したくて……一緒に戦いたくて、でも怖くて……どうすればいいか、セツ様の精霊である盟主様に相談に来た……そんな風に感じました」

「違う……違うんだ。我は……あいつに力など……貸すつもりは……」

「……」

「では……？」

「我は……ただ、もう一度だけ……」

「もう一度だけ？」

「奴との喧嘩が、したかったただけ……」

「けんか……ですか？」

意外な答えにポカン、とするカイエン。

そんなカイエンに、エースは以前セツと初めて顔を合わせた時のことを思い出す。

「あいつとの喧嘩は……腹は立ったが、どこか愉快だった。楽しかったんだ……」

「エースさん……」

「だから……それでも……あんな別れ方……強く、強くならなきゃ……あいつと喧嘩もできそうにない……！」

「……ツケ。ズイブンとまア入れこんでやがんなア」

「そ、そういうことではない！ とにかく！ 我は恐怖を克服したい！ そのためにどうすればいいか聞きたいだけだ！」

僅かに顔を赤くしながら自棄のように叫ぶエースをしばらく眺め、何事か考えていたヴァンダルギオンが結論を下す。

『……カイエン。相談に乗ってやるが良い』

「ふあっ！？ わ、私ですか！？」

「そーだな。この貧乳と立ち位置も似てっから丁度いいだろ」

「き……さま……っ！ 人を捕まえて貧乳扱いだと……！？ どいつもこいつも……！」

「で、でも私恐怖心がどうこうって一番わかりませんよ！？」

「報われない女代表でアドバイスしてやれ」

「む、報われないってなんですか！？ ひ、人を不幸の権化みたいに！」

そうは言うものの、自分でも否定できる要素がなくて落ち込むカイエン。

「いいから。オレたちにだってロクなこと言えねエしよ。だったら同性の方がナンボかマシだろオよ」

「そ、そんなこといわれても……」

完全に自分に丸投げするつもりらしいゴーズたちに、戸惑うカイエン。

「我からも頼む。我も、一人で考えたのだが……正直見当もつかぬ」

「エースにまでそう懇願されて、カイエンは断り切れずに頷く。

「え、えつと……じゃあ……わ、わかりました！ 不肖カイエン、エースさんとセツ様たちのために一肌脱がせていただきます！」

「うーしんじゃ後は任せんぜ。オレは人間界にでも戻るわ」

『うむ。ヴァーミリオンを頼んだぞ。ゴーズ』

「心配センでもあのチビはどーせ御堂兄妹に纏わりついて元気だろオよ」

『万ーのことがあろう！』

「ヘイヘイ……」

「エースさん！ とりあえず一度冥界を回ってみましょう！ 死に最も近いこの冥界で死に触れることで徐々に恐怖心を慣らしていく作戦です！」

「う、うむ……？ なんだか少々不安が残るが……我に異存はない」

雲行きは多少怪しいが、こうしてエースの更生計画が始動したのだった。

『それと、エースの更生が済むまでの間、カイエン。お主を休暇扱いとしておく』

「ええっ！？ わ、私の数少ないお休みが……お休みでなくなつて

……そ、そんなあゝ！」

……若干名の悲鳴と共に。

第二期第十八話「楽しかったんだ……」(後書き)

こんにちは。

懐かしいですね。この頃はまだエース合流していなかったんです

よね。今となつては……。

それでは、悠でした！

第二期第十九話「乙女の勝負と謎の青年」

アルカナ、切り札の騎士、

第二期第十九話「乙女の勝負と謎の青年」

アカデミア、某所。

「……と、いうわけで見事セツとお泊り旅行の権利をげつとしたわけですよ」

「やったじゃない！ これはもうアレよ。ゲームでいったらちよつとRとかZとか必要になってくるイベントが待ってる流れよ！」

「ですよね！ わ、私としてもとっても勇気が要りますが……ここは……」

「キメちゃわないとマズイわね……何しろグズグズしてたら搔つ攫われても不思議のないメンツだし」

「ホントですよ……普通こういうのって抜け駆けはご法度っていう暗黙の了解があるのが相場だと思うんですけど……」

「……全員抜け駆け上等な攻撃的過ぎる乙女なのよねえ」

「……シャルナ、それもしかして私も含まれてます？」

「初期のアテナからして押せ押せ上等！ な感じだったじゃないの、初対面でいきなり告白したアテナとしては、そこらへんは全く否定できない。」

「……それでもさだめさんと一緒にされるのは心外ですよ」

「そのさだめもやってないベッドインした身で何言ってるの？」

「なっ……ま、まさか見てたんですか!？」

『むふっ』

「な、なんですかその下品な笑顔は！」

『何度だって何時だって、セツに好きって言いたいです』

「きやあ！？」

『私も結構……えっち、なんですよ？』

「いやあああーっ！？」

改めてあの時のことを思い返すと恥ずかしさで死にたくなる。けど幸せ。そんなアテナをニタニタと厭らしい笑みでからかうシャルナ。その光景は仲の良い姉妹のようでほのぼのとした雰囲気は漂う。『うふふー 思い出し照れは若い証拠だって誰かが言ってたわね』

『青春性春』

「二つ目の青春発音おかしくなかったですか？」

そんなこんなで翌日に控えた勝負に備えて作戦を練るアテナとシャルナ。時々シャルナがアテナをからかいつつも、二人の夜は和やかに更けていった。

一方、アテナに出し抜かれた形になつたさだめたち。

「……ふう。とりあえず、アテナたちの作戦会議はミリー（ヴァーミリオン）がしっかり盗聴してきたみたいなのでそれを元に対策会議を始めます。ミリー、報告」

『きゅー！ きゅー、かうっ！ きゃーっ！』

「って、誰も解読できないじゃありませんの！」

「盲点だったね……これじゃ報告じゃなくてただの咆哮だよ……」

「上手いこと言ってる場合じゃありませんわ！ どうするつもりですか！？」

『きゅ？』

「ああいえ、貴方は悪くないのですが……」

「まあそんなことは始めっからわかってたからルインが盗聴器を仕

掛けてありました」

「……抜かりない」

「じゃあ今までのやり取りは一体なんだったんですの!?!」

「面白かった?」

「心っ底腹立ちましたわ……!」

「それは重畳」

「きいーっ!」

一通り希冴姫を弄って満足したらしいさだめとルインが会議を始める。

「盗聴した限り、状況はマズイ」

「ほほう。その心は?」

「私のアドバンテージが失われる」

「なんですか? そのアドバンテージって」

「彼との混浴という絶対的なアドバンテージが……」

「聞き捨てなりませんわ!」

「右に同じく! さだめだっけしたことないよ!」

なんでも、幼い頃から警戒されて入ったことはないらしい。

「……まあ盗撮はしてただけだね」

「なっ……」

「悉く見破られて破壊されたよ。お兄ちゃんは目敏すぎるよ」

「セツ様……そんな小さな頃から防衛本能を磨かれていたのですね」

「……」

「ちなみにお兄ちゃんの小さい頃の写真、一枚十万」

「買った」

とんでもないぼったくりなのにも関わらずポンと支払う姫と女神。

それぞれ十枚の大人……というか貴族買いである。

「臨時収入ゲット! って流石にこうもあっさり二百万現金で渡されるとビビるね……」

思わぬ形で札束が手に入ったさだめはさすがに冷や汗ものだった。「というか札束いつも持ち歩いてるのこの二人……」

「後でもうちよつと持つてくる……一千万くらい」

「わたくしも、国庫から出させますわ……一億ほど」

「流石にヤバいんじゃないかな王国！ さだめでもツッコミに回らざるを得ないよ！」

ネガやメモリーカードだけでいくらでも量産可能な写真だけで億万長者になれるらしいさだめはいつになくビビって涙目だった。

「大丈夫。お小遣いの範囲」

「まあジャック辺りに無償奉仕させれば大丈夫でしょう」

「いくらさだめでもそこまで外道にはなれないよ……」

希冴姫の尻拭いにこき使われるジャックの姿が目には浮かぶ。

「……でも、今となっては他に手に入れる手段のない彼の幼少期の写真」

「うんまあ他の有象無象なんてどうでもいいよね」

…… ツッコミ役が不在のこの状況ではもうどうしようもなくなっていた。

「コホン……話が逸れちゃったね……そのおかげで一生遊んで暮らせそうだけど」

「この玩具の車に乗って遊んでいる写真は秀逸」

「ああ……幼い頃のセツ様の寝顔写真……」

「うわヤバい。さだめがツッコミに回らなければどうしようもないこの現状に寒気すら覚えるよ」

そもそも纏まりのなさすぎる連中である。さだめ自身その筆頭であるが。

「とりあえず尾行はするとして……泊まるところはどうしようか？ 流石に同じ旅館だと気付かれるから……」

「ジャックに調べさせましたら、近くには誰も使っていない洋館があることが判明しておりますわ」

希冴姫のジャック使いの荒さが、最近は特に目立つ。

「とりあえずそこで潜伏。妨害工作に回る」

「基本方針はそれだね」

「ところで、メンバーが一人足りないんじゃないでしょうか？」

「ああ、あのサイレント・ダークホースはそのダークホースっぷりを發揮して一年間授業でお兄ちゃんを一人占めとかいう暴挙に出たのでハブリました」

恋敵にはまったくなんの容赦もしないさだめであった。

「基本方針は決まった。後は煮詰める」

「うん。なんとしても既成事実だけは許すわけにはいかないよ」

「最近の小娘は段々手段を選ばなくなってますからね。各自、努々油断はなさりませんよう」

自分たちのことを棚上げするのは恋する乙女の得意技らしい。

各々の欲望と陰謀が渦巻くセツとアテナの一泊旅行はこうして幕を開けるのだった。

おまけ。

「これ、一千万。百枚頂戴」

「流石に一億は無理そうだったので同じく一千万ですわ。百枚」

「ねえいいの！？ こんなに簡単にさだめ億万長者になっちゃっていいのホントに!?!」

そして当日。

「セツ、今日から二日間、よろしくお願いします!」

「お、おう」

気合入りまくりといった様子のアテナに、ちょっと引きつつ返事をする。今日は朝からこんな感じだ。

さだめたちがどうも尾行しているらしいことにもまったく気付いていない辺り、かなり空回っているらしいが。

……まあ、今回ばかりはさだめたちに尾行されてた方が間違いを起こさずに済むから俺としては尾行については見過ごす方向で行こう。

「それで、ここが今日泊まる温泉旅館か」

「は、はい！ 眺めも綺麗な露天風呂とか、その……か、かか家族風呂みたいなのもあつたりなかつたりで……」

「露天風呂か！ いやー露天風呂好きなんだよな俺！」

家族風呂とか……混浴どころの危険さじゃない。あんなもん聞くところによると殆ど密着しないと入れないようなシャレにならない奴だという話じゃないか。まあ中には大きいのもあるんだろうが、相当値が張る奴だ。そもそも混浴の時点でマズ過ぎる。

「か、家族風呂みたいなのもあつたりで！」

まさかの家族風呂押し！？ 了承せよと！？ 最近のアテナは完全にフルアタックモード。防御無視な感じで扱い辛い！ というか危険極まりない！ それでいて純情そうな反応返してくるからさだめ以上に対処できない！

「そ、そうか……いや、流石にそれはマズイ」

「ルインさんとは入ったらしいじゃないですか。しかも私を振ったそのすぐ後に」

「がふっ！？」

そこを突かれると痛い！ というか本人から言われると罪悪感が半端ない。思わず家族風呂を了承してしまいそうに……。

スカッ！

「っ！」

その時突然俺の鼻先を掠るように飛んできたカードが木に突き刺さった。……ナイスさだめ。危ないところだった。ただまあ飛んできたカードが『終焉のカウントダウン』だった辺りが恐ろしい。さだめの中では既にカウントダウンが始まっているようだ。

「い、いやいやあれはルインが勝手に……」

必死で弁解し、なんとか家族風呂使用だけは思いとどまってもら

うことに成功した。

「うう……作戦失敗です。ルインさんのアドバンテージを消しておきたかったのに……」

いやもうアドバンテージとかそんなレベルの問題じゃなかった気がする。もう一気に決めてしまおう的な野望をヒシヒシと感じる。

……こんな時、世の主人公たちの鈍感スキルがとても羨ましく感じる。きつと幸せだろうなあ……何も気付かないって。

そんな愚痴はさておき、まずはチェックインをしようとフロントに……。

「はあ！？ 来てないって……まさか、旅館間違えた？」

「いえ、上月様のお名前は若様より伺っております。ただ……」

「その当の本人が来てないって？」

「はい。そのことについては特に連絡も受けておりませんが……」

何やらトラブっているらしい。アテナと二人して顔を見合わせる。

「あの……どうかしましたか？」

「ん……？」

振り向いた女性はまたえらくスタイルの良い美人だった。例の無駄スキル『一目で服のサイズを見分ける程度の能力』で見た限り、ルインと同等くらいのスタイルをしている。

「あんたたち、ここの宿泊客？」

「はい。御堂『夫妻』で予約しました」

「！？」

完全に初耳だった。いつから夫妻になった。そして突き刺さる死のメッセージ。

「今のは俺悪くないだろ……」

「……そのナリで夫妻は無理があるわよお嬢ちゃん」

「うえ！？ い、いえ！ ホントに私たちは……」

「無理しなくてもいいわ。どう見たって高校生くらいでしょうが」

「わ、私は13歳です！」

『……………』

「あ……………」

墓穴を掘ったな……………実年齢より年上に見られたのが気に食わなかったらしいが、それにより美人さんからの俺への視線が多少キツクなった。

「……………中学生こんな宿に連れ込んで何する気よ？」

「違う！俺にそんなつもりは……………」

むしろ連れ込まれたのは俺の方だということを目指したい。

「……………まあいいか。旅館には私から言っとく」

「あ、ありがとうございます！」

「別にいいわよ。気にしないで」

旅館に言っておく？

「もしかして、ここの偉い人だったり……………？」

「ん？ああ、私は別に直接偉くはないんだけどさ。ここの旅館経営の母体となってる会社の会長と個人的に関わりがあつてね。ある程度の融通は利くのよ」

十分すごくないか？ 子会社の旅館にまで融通が利くほどの人間と関わりがあるってのは……………。

「個人的に関わり……………つてもしかして」

が、アテナはまた別の所に食い付いたようだ。ここら辺は恋愛ごとに興味津々のアテナらしい。

「ん……………ま、そんなとこ。まあ今回はこうしてすっぱかされたような形だけどさ」

「わあ……………ファーストレディへの道ですね」

「そこら辺は割とどうでもいいことなんだけどね……………」

女同士、さっさと仲良くなったらしくて何よりだ。……………別に疎外感を感じてはいない。本当だよ？

「あなた、名前は？ 私は上月光」

「天音アテナです。こちらは、御堂切」

「よろしく」

「仲良くなった記念よ。女将さん、この子たちの部屋、グレードA

ツプしといて」

「ええ！？ そんな、いいですよ！」

「いくらなんでも……」

「いいからいいから。どうせ金払うのはあの馬鹿だし」

そう言えば、上月さんは何故トラブっていたのだろう。そのことを尋ねると、多少眉根を寄せた。

「……ああ、その例の奴が温泉旅行するからって言うついですっばかしたみたいでさ」

「それは……」

かなり最悪なんじゃなかるうか。

「まあ、どうせその内ひよっこり現れるわよ。あいつもあいつでそこそこ忙しい身だしね」

確かに、大企業の会長ともなればその忙しさは想像を絶するものだろう。ある意味仕方がないのかもしれない。

「ま、とりあえず部屋に行きましょう。あなたたちの話も聞きたいしね」

「はい。色々ありがとうございます！」

まあなんにせよ、これで二人っきりの旅行から来る緊張感みたいなものはなくなったし、純粹に楽しむとしようか。

「これは……想定外だったけど、僥倖だね」

お兄ちゃんたちが上月光を名乗る女と一緒に部屋に向かうのを見てさだめは安堵の息を吐く。これで下手な空気にはならないだろう。

「じゃあ、いったん引き揚げ。私たちは今夜の寢床を確保する」

「では、わたくしが監視を続けておきますわ」

「よろしくね。希冴姫さん」

こういう時は同志の存在がありがたい。一人で監視をしているとトイレに行くのも一苦勞だし。

さだめはルインと誰も使っていない洋館とやらに移動する。そこそこ不気味な雰囲気やさだめ好みだ。

「……待っていたよ」

「!？」

突然洋館の奥から聞こえてきた年若い男性の声に、一気に警戒心を強めるさだめとルイン。待っていた？ あの世への案内人かなにかかな？

警戒しつつも奥へと進み、大広間と思われる所に出る。そこに居たのは腰ほどまである黄金の髪を揺らした、長身の男性。

「久しぶり、というべきか。元氣そうで何よりだ」

相手はそういうけど、さだめにはさっぱり見覚えがない。元々お兄ちゃん以外の異性については何の興味もわかないし記憶にも残っていないけど、この人は何と言うか、一度見たらとてもじゃないけど忘れられそうにないほどの存在感を持っていた。

「ま、さか……」

隣でルインがジリツと後ずさる音が聞こえる。

「貴方は……あの時の？」

「誰？ ルイン」

どうやら知っているようだったので聞いてみる。見るからに怪しい登場をした謎の男。彼を見たルインはまるであり得ないものを見たかのような顔をしていた。

「……貴女にも話した。彼は、かつて私に『長く生きると、娯楽に飢える』と語った人」

確かに、ルインが過去を覚えてくれた時、そんなことを始めに言っていた。でも……

「まさか。あの人、人間でしょ？」

「……その筈」

目の前に立つ男は、どう見ても人間だった。ルインや希冴姫さんも今は実体化して人間界で暮らしてるけど、それでも独特の気配のようなものがある。あの人からは、そんなものは感じられない。

「人間だよ。かなり特殊だけどね。けど、それは君の言えることじゃないはずだ。異邦人^{イレギュラー}」

「！」

この人……さだめたちのことを知ってる？ 確かに、さだめの知る原作に、こんなキャラは居なかった。でも……それにしだって異質な存在感を感じるような……。

「ルイン。長く生きた、その感想はどんなものだったかな？ あの頃とは大分性格も摩耗してしまったようだけど」

「……本当に、あの時の男？」

「そうだよ。けどまあ、どうやら今はそこそこに幸せそうじゃないか。君は、希望の光を見つけられたのかな？」

「……格別なものを」

「それは良かった。悲劇的な物語は感動的で楽しめるが、悲劇的な現実には笑えない。やはり、現実では喜劇の方が幸せだね」

「貴方は何者？ 私よりも遙か昔に生を受け、今もなお生き続けている貴方は」

「さて、それが君たちにとってさほど有益な情報とは思えないのだけど」

「答えて」

ルインの表情は険しい。嫌悪じゃなくて、得体の知れない存在への恐怖と警戒の色が濃い。

「……ふむ。そうだね、折角君たちはデュエルの精霊なんだ。やはり、物事はデュエルによって決めるといのがこの世界の基本原則じゃないか？」

「私は構わない」

「そうか。それじゃあデュエルと行こう」

謎の青年は、腕にデュエルディスクを取りつける。

「……」

ルインもそれを見て、自前のデュエルディスクを腕に構える。

「さて、始める前に名乗りだけはあげておこうか。僕の名前は真中

希望。世界の記録者、とでも名乗っておくよ」「

「……ルイン。破滅の女神、ルイン」

「その號が変わることを、心から祈らせてもらおうよ」

「デュエル」

そして、真中希望と名乗った謎の青年と、ルインのデュエルが幕を開けた。

第二期第十九話「乙女の勝負と謎の青年」(後書き)

こんにちは。

この話ではメイドのシャインが省略されています。流れるに、居なくても進行に問題が出ないので思い切って削りました。

それでは、悠でした！

第二期第二十話「深まる謎と歪み」

アルカナ〈切り札の騎士〉

第二期第二十話「深まる謎と歪み」

「さて、先攻は譲ろう」

「……なら私のターン、ドロロー」

真中希望と名乗った男とルインのデュエル。さだめは前ダーク化していた頃に、ルインがデュエルするところを何度か見ているし、その実力的にはかなりの物だった筈だから大丈夫だとは思うけど……。

「私は手札から『天空の使者 ゼラディアス』の効果を発動。デッキから『天空の聖域』を手札に加えて発動」

フィールドが雲の上に浮かぶ神殿のようになる。この聖域では天使族に戦闘ダメージを与えることができなくなる。

「モンスターを守備表示でセット。ターンエンド」

「なるほど。『ホーリー・ジェラル』か。『天空の聖域』の影響下では良い効果を持つモンスターだ」

「!?？」

真中希望はあっさりルインの守備モンスターを見抜く。確かにあの場面で裏守備にするのは『ホーリー・ジェラル』が筆頭かもしれないが、あそこまで確信を持って宣言できる程ではないはずだよ。一体どうして……。

「まさか、イカサマ？」

さだめの疑問に、真中希望は涼しい顔で否定する。

「そんなつもりはないけど、そう取られても仕方ないかな。僕のターン、ドロー」

あくまで冷静に真中希望はカードをドローする。

「モンスターをセット。カードを一枚セットしてターンエンドだ」
「私のターン。ドロー」

相手は特に動かず、守りの姿勢。守備モンスターが守備力2000の『ホーリー・ジェラル』だとわかっているからなのか、まったく攻撃をする様子も見せない。

「……なら、守りに入ったことを後悔させる。手札から儀式魔法『エンド・オブ・ザ・ワールド』を発動する」

「ほう……手札の『英知の代行者 マーキュリー』とフィールドの『ホーリー・ジェラル』をリリースして君自身を呼ぶか」

「っ……その通り」

真中希望の宣言通り、ルインの手札からリリースされたのは『英知の代行者 マーキュリー』。そして儀式召喚されたのは『破滅の女神ルイン』。不気味なくらいにルインの手を言い当てている。

「私はリリースした『ホーリー・ジェラル』の効果でライフを1000ポイント回復する」

ルインLP5000

ルインと謎の男のデュエル。希望と名乗った男、なんでルインの手札や守備モンスターを一発で言い当ててるの？

「あれ……なんだろ、こんなことどこかであったような……」

さだめは思い出そうとするけれど、頭に靄がかかったようになっていてどうしても思い出せない。

「ともかく、状況は一応ルインが有利だね……」

ルイン自身の効果は戦闘でモンスターを破壊した後、もう一度だ

け続けて攻撃できるというもの。相手の守備モンスターが何かはわからないけど、あの伏せカードだけ注意していればほぼ確実に相手に大ダメージを与えられるはず。

「ルインが勝てば、もしかして色々教えてくれるのかな。結構色々知ってそうだったし」

ルインの過去に登場したという謎の人間。一体どんなデュエルをするんだろう……。

「更に私は装備魔法『ダグラの剣』を私に装備。手札から『創造の代行者 ヴィーナス』を攻撃表示で召喚。私自身で守備モンスターに攻撃。『滅光吸斬』」

ルインの手に不思議な形の剣が握られ、その剣が守備モンスターを切り裂く。切り裂いたのは三つの目玉を持った悪魔。

「僕は『クリッター』の効果を発動しよう。デッキから『クリボー』を手札に加える」

「……私は相手モンスターを戦闘で破壊した場合、もう一度だけ続けて攻撃することができる。私自身でプレイヤーにダイレクトアタック」

「手札から、今しがた手札に加えた『クリボー』を墓地に捨てて効果発動。戦闘ダメージを一度だけゼロにする」

「……『創造の代行者ヴィーナス』でダイレクトアタック」

「リバースカード『クリボーを呼ぶ笛』発動。デッキから『ハネクリボー』を特殊召喚しよう」

「続行。『ハネクリボー』を攻撃」

ルインの剣が十代の相棒と同じ『ハネクリボー』を切り裂く。

「……ターンエンド」

ルインとしてはこのターンで決めるつもりだったのか、少々不満そう。攻撃力2800のルイン自身と1600のヴィーナスの攻

撃が通つていれば、希望のライフはゼロだったはず。でも実際にはたった一枚のリバーカードと守備モンスターで全て凌がれ、相手ライフは1ポイントも減っていない。それに引き換えルイン自身はライフこそ回復したものの、手札はゼロ。相手の手札は未だ四枚。次のドローで五枚だ。結果的には大損といったところか。

「僕のターン。ドロー」

とはいえ、ボードアドバンテージは完全にルインの方が上。ルインの攻撃力は早々簡単には上回れないし、上回ったとしても『天空の聖域』がある限り戦闘ダメージは受けない。

「僕は魔法カード『天使の施し』を発動。三枚ドローして二枚捨てる。僕はこの時『暗黒界の刺客 カーキ』と『暗黒界の策士 グリン』を捨てることにより両者の効果を発動。『破滅の女神ルイン』と『天空の聖域』を破壊しよう」

「く、う……!?!」

自らの分身を破壊されて僅かに苦悶の声を上げるルイン。けど、こんなに簡単にボードアドバンテージまで……。

「更に『魔法石の採掘』を発動。手札から『スケルエンジェル』と『マシユマロン』を墓地に送って墓地の『天使の施し』を手札に戻す。そのまま発動」

真中希望はまた『天使の施し』でカードを引き、墓地に捨てる。今度は暗黒界じゃなかつたみたいで、特に何らかの効果が発動されるわけじゃなかつた。でも、墓地に送られたのは『紫光の宣告者』と『ワタポン』。どちらも光属性の天使族。まさか……。

「……さてルイン。すまないけど、僕はこれでも多忙の身でね。今も人を待たせているし、余り長々とやっては居られない。このターンでケリをつけよう」

「!?!」

「僕は墓地に存在する『クリッター』『クリボー』『暗黒界の刺客 カーキ』『ハネクリボー』をゲームから除外し、光と闇を統べる神を呼ぶ。『天魔神 ノーレラス』」

墓地から闇と光が放たれて混ざり合う。その混沌から現れたのは一柱の神。

「まだだ。僕は更に墓地の『スケルエンジェル』『マシユマロン』『ワタポン』『暗黒界の策士 グリン』をゲームから除外。ノーレラスの対。『天魔神 エンライズ』」

天魔が……もう一体。そして真中希望の手札は残り一枚。

「そして、僕はまだこのターン通常召喚を行っていない。手札から死霊騎士デスカリバー・ナイト』を攻撃表示で召喚。バトル」

ルインのフィールドに伏せカードはない。手札もゼロ。モンスターは攻撃力1600の『創造の代行者 ヴィーナス』ただ一体。

真中希望のフィールドは、攻撃力2400の天魔神二体と1900の死霊騎士。

「手札もないから、特に『オネスト』を警戒する必要もなさそうだね」

「うそ……一ターンでボードアドバンテージまで逆転して……ワン、キル？」

完璧だ。手札も使い切り、ライフを全く減らすことなくワンター

ンキル。正にパーフェクトデュエル。完全封殺。

「終わりにしよう。三体のモンスターで攻撃」

「く……ああ!？」

ルインLPO

デュエルが終わった後、さだめは真中希望を問い詰める。

「どうしてルインの手が読めたの? どんなイカサマ?」

「さつきも言ったけど、僕はイカサマなんてしていないよ」

「信じらんないよ」

「そこは、信じてくれとしか言えないな」

問い詰めても話にならない。

「じゃあ、今度はさだめとデュエルして。それで勝てば……」

「すまない。さっきも言ったけれど、これでも多忙なんだ。今日はここまでにしておう」

「……なにも話すつもりはないの？」

「まさか。それじゃあ本格的に何をしに来たのかわからないじゃないか」

「え、それって……」

「こんなデュエルしなくても、必要なことは答えてくれた、ということ」

ルインの説明でようやく理解する。つまり……。

「……私の負けは無駄骨」

珍しく苦々しげにルインがそう答える。

「さて……まずは今日僕たちが現れた理由だけど、一つはルインへの挨拶だ」

「私……」

「君のことは気になっていたのでからね。元気なのは知っていたけど、直接顔を合わせるのも良いかと思ってね」

「もう一つは何なの？ ルインへの挨拶とかは思い切りいいじゃない」

「ごもつとも。もう一つは君だ。御堂運命。君に忠告……というかアドバイスを少々」

アドバイス？ というか今更だけどこの人さだめの名前とかも知ってるんだ。

「君のお兄さん。御堂切を起点として、異邦の存在が次々と現れてきている。それにより、この世界に歪みが広がっている」

「異邦の存在……イレギュラーのこと？」

「そう。例えばこの場にいる全員がそうだ。僕はまた別枠だけどね」とするとさだめとルイン。お兄ちゃんもそうなら希冴姫さんやもしかしたらアテナとかもそうなのかも。

「世界はそれほど脆くはない。一つ二つの異邦人イレギュラーなら世界の方で勝

手に修正を施す。例えば、鍵の守護者が色々な要因が重なって元々あるべき形に修正されたりね」

「!?!」

この人、セブンスターズの事件も知ってる。

「だが、世界の修正力。或いは強制力はそう何度も使っていれば逆に世界のバランスが崩れる。それほどに大きな力だからだ。そしてそのバランスを整えようとして世界は更に力を使う」

「完全に負の連鎖だね。それが？」

「わかるだろう？ バランスを失った世界が行きつく先は、当然終焉だ。そうだね。君たちがこの後に遭遇する破滅よりもよほど危険な、世界自体の終焉さ」

この後……遭遇する。

「その終焉を引き寄せているのは……」

「……さだめだとも？」

「いいや。お兄さんの方さ」

「お兄ちゃんが？」

何故？ その疑問に反応したのはルインだった。

「……終焉の花嫁」

「それだ」

満足そうに真中希望はルインを指差した。

以前、ルインから聞いた。ルインとお兄ちゃんは終焉に好かれる。それが今回も当てはまったということ？

「だからこそ僕は、君にも会いに来たんだ。ルイン」

「私と彼が、終焉を呼んでいる？」

「そうなるね。そして、その時寄り代となるだろう存在が……」

「……さだめ？」

「その通り。終焉との相性が抜群で、終焉を引き寄せる者を兄に持つ君こそが、その寄り代だ。だからこそその忠告さ」

また、さだめが迷惑かけるのか……。

「君たち兄妹の存在は、過去を捏造し未来を壊し現実^{いま}を変質させる。

『世界』としては、そろそろ黙ってはいられない頃だろうね」

「そんな……」

過去を捏造する。つまり、ルインの過去なんかも……。

「そう。君たちが現れなければ存在し得なかった過去となる。君たちの存在が、様々な形で異邦人^{イレギュラー}を引き寄せて世界のバランスを狂わせる」

「さ、さだめたちは……」

どうすればいい？　もしかしたら、さだめたちの存在がこの世界を壊してしまうかもしれない。流石にさだめも焦らざるを得ない。

「そこでアドバイスだ。異邦の力を集めて束ね、歪みを消してくれ。僕たちは世界が終焉に呑まれるのを良しとしない」

「集めて束ねる……？」

一致団結するってこと？　そもそもどのあたりまでをイレギュラーと呼ぶのかわからない。

「……もし、それが成らなかつた場合、僕は君たちをこの世界から抹消せざるを得なくなる。そうならないよう、頑張つてほしいものだね」

「なら、全部聞きたいことを教えてくれてもいいじゃない」

そうすれば話は速いのに。

「……それができれば早いけど、世界としては君たちのような存在を消したくてたまらないらしいね。僕の発言にもある程度の規制がかかっている。ほら、禁則事項ですつてやつだよ」

……そう上手い話はないよね……。

「というわけで、僕はこれで」

言いたいことだけ言つてさっさと去ろうとする真中希望。

「あつとそうだ。ルイン。プレゼントだ。受け取るといい」

「……これは？」

ルインが手渡されたカードに目を向ける。さだめもつられて覗き込む。

「君に与える力だよ。是非使いこなして、さだめたちの力になって

あげるといい」

「これは……」

数枚のカード。それはさだめにとっては見たことのあるカード群。そして、ルインのデッキには非常にシナジーするカードだった。

立ち去り際、真中希望は首だけこちらに向けて質問を投げかけてきた。

「ああそついえばさだめ。君たちは……」

「なに？」

「原作知識、どのくらい覚えてる？」

「っ！」

「じゃあね」

コツコツコツ……。薄暗い洋館に真中希望の革靴の音だけが響く。そうだ……。そうだよ。

「さだめ、原作がこの後どうなったか、全然思い出せない！」

さつきから頭に靄がかかったようになっていた正体がようやくわかった。こつちに来た時はあつたはずの、原作知識が綺麗さっぱりなくなってるんだ。

横で原作知識つてなに？ と尋ねてくるルインの声を半ば無視して、さだめは呆然とその場に立ち尽くした。

その頃、旅館で寛いでいるアテナとセツ。そしてすっかり意気投合した上月光の三人は……。

「へえ、それじゃアテナったら出会ったその場で告白しちゃったんだ？」

「は、はい……」

「いいわねいいわねそついうの！ ドキューン！ ときてズバキューン！ となつちやったわけね！？」

「いや、光さん飲み過ぎですよ。つかペース早いな……」

すっかり酒盛り状態と化していた。肴は主にアテナとセツの恋愛話である。

「大丈夫よ。私すごいウワバミだから。底なしよ」

「いや、そりゃこのペース見ればなんとなくわかりますけど」

既に一升瓶を二本空けている。もうすぐ三本目も空に……今なった。

「ぶはっ！ んぐでもやっぱり私、お邪魔よね。折角こうしてアテナたち二人で旅行に来たのに私が居たらイチャつけないでしょ？」

「えと、でも光お姉さんのお話は楽しいですよ？」

確かに目論見とは違ったが、こうしてセツと楽しい時間を過ごすのも望んでいなかったわけじゃない。

「いやダメダメ。やっぱり若い二人の邪魔はできないわよ」

「光お姉さんだって十分若いんですが……」

「んぐどれくらいに見える？」

「えと、二十歳くらい……ですか？」

「ふふー。まあそんなところにしておいてよ。それじゃあアテナ。

折角アテナはアカデミアの生徒なんだし、部屋に戻る前に一度デュエルしてみましようよ」

「え？ 私はいいですけど……」

「大丈夫。私だって結構強いんだから。油断していると足下救われるわよ？」

「ディスクは……」

「大丈夫よ。私二つ持つてるから」

アカデミアのデュエルディスクは流石に旅行先までは持って来れなかった。だが偶然にも光が二つ持ってきていた。なんでも、連れの人とやるために持ってきていたらしい。

「よーし！ それじゃあ景気づけに一発派手にやりましょ！ デュエル！」

「はい！ よろしくお願ひします！ デュエル！」

こうして、さだめたちの方とは違い、和気あいあいとした雰囲気

の中アテナ対光のデュエルが開始されるのだった。

第二期第二十一話「楽しいかい？」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第二期第二十一話「楽しいかい？」

「さつて、先攻後攻はどうする？」

「えと、どちらがいいですか？」

「私はどちらでも。そうね。じゃあ後攻つてことで」

「わかりました。じゃあ先攻、行かせてもらいますね。ドロ〜！」

さて……あの光さんは一体どんなデツキなんだろうな。名前そのまま光属性でミラーマツチつてもあるかもしれないが……なんとなく、あの人の性格にはあつていない気もする。

「私は手札から永続魔法『神の居城 ヴアルハラ』を発動します！手札の『The splendid VENUS』を攻撃表示で特殊召喚！更にモンスターを一体セットしてターンエンドです！」

早速アテナはいつも通りヴァルハラで最上級天使、しかも今回は実質攻撃力3300クラスの『The splendid VENUS』だ。悪くない展開と言つていいだろう。

「へえ。天使ビートかあ……大人しい顔してパワーデツキなんだ。ちよつと意外ね」

「ただのビートダウンのつもりはありませんよ？」

少し挑発的な調子でアテナが言う。確かに、他のハイビートとは一線を画す程の爆発力やギミックを搭載している。バーン要素もあるのでかなり凶悪なハイビートと言つていいだろう。

「ちょっとセツ。凶悪は酷いです」

「心の声を読むな。さだめかお前は」

「最近ちょっとだけさだめさんの言い分が理解できるようになってきました」

「あれが二人とかマジで勘弁してくださいアテナ様」

流石にそれは体も心も持ちそうにない。

「楽しそうねえあなたたち……」

なんかちょっと呆れられてる。まあ確かに結構愉快的な関係性ではあるかもしれない。

「ま、私の方も他を言ってられないけど。私のターンでいいかしら？」

「あ、はいすみません」

「んじゃ私のターン、ドロー！……ちょっと似たようなタイプのデッキで驚いたわ。アテナ」

「え？」

やはり光属性のデッキか……？

「ああ違うわよ。私が似ているって思ったのはね……こういうこと！ 私は手札から『神獣王バルバロス』を攻撃表示で召喚！ バルバロスはレベル8だけど、攻撃力を1900に下げることによりリリースなしで召喚できるわ！」

「まさか……上級モンスター主体のハイビート……！？」

「デュエルは全速前進あるのみ！ ってのが信条なの。個人的には、海馬瀬人さんとかのデュエル、結構好きよ？」

あの『粉碎玉砕大喝采うわーはっはっはっはっはっはっ！』のデュエルか。

「というわけで、手札から魔法カード『アドバンスドロー』の効果を発動！ フィールドに存在するレベル8以上のモンスター一体をリリースして効果発動！ デッキからカードを二枚ドローするわ！」

「ドロー補助？ 確かにバルバロスでは『The splendor of VENUS』は倒せませんが……」

フィールドも結局空になる。どうするつもりだ？

「そして速攻魔法『デーモンとの駆け引き』発動！ 自分フィールド上のレベル8以上のモンスターが墓地に送られたターンに発動可能！ さあ、私のエースを見せてあげるわ！」

「『デーモンとの駆け引き』！？ やば、その手があったか！」

それなら『神獣王バルバロス』と『アドバンスドロー』を使えば実質手札消費一枚で特殊召喚できる！

「来なさい狂気の屍竜！『バーサーク・デッド・ドラゴン』！」
「こ、これは……」

攻撃力3500！ アテナの『The splendid VENUS』でも太刀打ちできない凶悪な全体攻撃モンスター！『The splendid VENUS』の効果で攻撃力は500ポイント下がっているが、それでも尚『The splendid VENUS』を上回る攻撃力！

「さあ行くわよ！ バトルフェイズ！『バーサーク・デッド・ドラゴン』で、アテナの場の『The splendid VENUS』を攻撃！『バーサーク・デッド・ブレイズ』！」

「きゃあああ！？」

アテナLP3800

「まだよ！『バーサーク・デッド・ドラゴン』はフィールドに存在する全てのモンスターに一回ずつ攻撃が可能！ アテナの裏守備モンスターを攻撃！『バーサーク・デッド・ブレイズ』！」

「っ私の守備モンスターは『ジェルエンデュオ』！ 戦闘によつては破壊されません！」

よし！ 次に繋いだ！『バーサーク・デッド・ドラゴン』は最初こそ凶悪極まりないが、徐々に攻撃力がダウンしていく。これで後次のターンだけ凌げれば……。

「面倒くさいモンスター。私そういう戦闘で破壊できないモンスターとか嫌いなよね。まあいいわ。私はカードを二枚セットしてターンエンド。エンドフェイズ時に『バーサーク・デッド・ドラゴン』

は攻撃力を500ポイントダウンする。狂気の暴走は長くは続かないってところかしらね」

「わ、私のターン。ドロー！」

アテナの奴、動揺してるな。元々あんなハイビートを扱っている以上、ああもあっさり攻撃力を上回られたことが少ないんだろう。慣れない状況かもしれないな。元々アテナや光さんみたいなハイビートタイプは先手を取られると痛い。こんな状況だと特にどうすればいいのかわからないのかもしれない。

「私はモンスターを一体守備表示でセット。ターンを終了します……」

「しゃらくさい！ 守りの姿勢はもつと好かないの！ リバーストラップ発動！ 『最終突撃命令』！ その裏守備はともかく『 Jewel エンデュオ』には攻撃表示になってもらうわ！」

「そんなっ!?!」

「まずい……こいつは……」。

「私のターン、ドロー!……アテナ。あんたのデッキの真の力、見てみたかったけど、残念ながらこれで終わりみたいね」

「え……」

「一応『オネスト』対策だけはしておくわ。トラップカード『あまのじゃくの呪い』!」
げっ……。

「このカードの発動ターンのみ、攻撃力守備力のアップダウンは反転するわ! よって攻撃力が500ポイントダウンしている『バーサーク・デッド・ドラゴン』の攻撃力は500ポイントアップして4000! そして『オネスト』は発動したところで無意味よ!」
このタイミングで『オネスト』を使えば『バーサーク・デッド・ドラゴン』の攻撃力4000ポイントダウンする効果に変わる。

「あ……」

「蹴散らさない! 『バーサーク・デッド・ドラゴン』で『 Jewel エンデュオ』を攻撃! 『バーサーク・デッド・ブレイズ』!」

「きゃああああっ！」

アテナLP1500

アテナの『ジェルエンデュオ』は、ダメージを受けたので自壊してしまう。

「そしてその裏守備モンスターにも攻撃！『バーサーク・デッド・ブレイズ』！」

「ま、『マシユマロン』の効果で1000ポイントのダメージです」
光LP3000

「ダメージステップ時に『最終突撃命令』の効果！『マシユマロン』の表示形式は攻撃表示として処理！ 終わりよ！」

「きゃああああああっ!?!」

アテナLP0

正に……『粉碎玉砕大喝采』的なデュエルスタイル……。『最終突撃命令』と『バーサーク・デッド・ドラゴン』の攻撃はライフ4000じゃとても堪え切れるもんじゃない。その上『あまのじやくの呪い』で『バーサーク・デッド・ドラゴン』のデメリットすらメリット扱い。そして『オネスト』も効かない完全なパワーデッキ。「まあ相性が悪かったのもあるわよ。アテナのデッキ、殆ど畏カードとか入ってないでしょ。私のデッキなんて『魔法の筒』一発で大ダメージちゃうしさ。その癖『最終突撃命令』とか使うとなるとお触れとか使うわけにもいかないし」

確かに、真正面からぶつかり合うタイプのデッキに対しては滅法強いが絡め手を使われるとあっさり瓦解しそうなデッキではある。『バーサーク・デッド・ドラゴン』の攻撃力もアルカナよりは下だし、もしかして俺がやったら結構あっさり勝利してしまいそうな感じもする。

どこか呆然とした様子で座り込んでいるアテナに手を貸して立ち上がらせる。

「私……そう言えば負けちゃったのってすごく久しぶりかもしれないせん」

「そういえば……最後に負けたのっていつだ？ テストデュエルは除いて」

「いえ……それを入れたとしても最後に負けたのは闇モードのさだめさんにワンキルされた時以来かと……」

マジか……そんなのもう数ヶ月は前のことじゃないか。そんな前から無敗だったのか……恐れ入った。

「まー基本的にデュエルも色んなものと同じで負けて成長するものよ。私も散々アイツに……まあそれはともかく、アテナもこれしつかり負けられたんだし、良かったんじゃない？」

「……そうかもしれませんが。このままだと私、慢心して嫌な子になっちゃうかもしれませんでした。光お姉さん。ありがとうございますました」

「いえいえ、どういたしまして」

負けて成長……か。そう言えば、俺も最後に負けたのはいつだったかな。テストデュエルとかでは散々負けてる気もするけど、ソリッドビジョンを通したデュエルだと俺はネイキッドにしか負けてない。そして、そのデュエルのおかげで俺は強くなれた。

「俺も……負けるべきなのかもしれないな」

もちろん、手加減して、ということじゃない。それじゃ何の意味もない。本気でデュエルして、完膚なきまでに負ける。そんな経験が必要なかもしれない。

「それじゃあ私はこれで部屋に戻るわね。楽しかったわ。それと、邪魔して悪かったわね」

「いえそんな……私の方こそ、色々ありがとうございました」

アテナがぺこりとお辞儀をして、光さんを部屋から送り出す。と

……。

コンコンツ。

「あら？」

「誰でしょう……旅館の人でしょうか」

「もしかして、騒ぎ過ぎたか？」

心当たりは大いにある。何しろアテナと光さんのデュエルで光さんが散々大声で宣言とかをしている。……光さんが。

「う……そんな目で見ないですよ。悪かったってば」

「はい。どなたですか？」

とりあえずアテナが応対するために声をかける。すぐに返事が返ってきた。

『すまない、入らせて貰っても構わないかな？』

「！この声……」

「お知り合いですか？」

「ええまあ。私は居るわよ」

光さんが声をかけると、扉の向こうから安堵した気配が伝わってくる。

『ああ良かった。呆れて帰ってしまったんじゃないかと、心配していたんだ』

ガチャリ。

「ごめんね。光。急に用事が入ってしまった」

「ないわね。あんたのことだから、どうせ端からそれが目的でこの旅館に来たんでしょ？ ったく……人をダシにするのも大概にしなさいね。“希望”」

扉を開けて入ってきたのは超絶美形の欧州系の顔立ちをした長身の男。

「君たちも。いきなり上がり込んでしまってますまない。光が迷惑をかけてないかい？」

「わ。い、いえ光お姉さんにはとてもよくして頂いて……」

一々行動が絵になる男だった。男の俺でも周囲にキラキラエフェクトがかかっているような錯覚を覚える。ここまでだと嫌みにもならん。ただ呆れるだけだ。

「それでも、恋人同士の旅行を結果的にこうして邪魔していることに違いはないだろうに」

「……よく言うわよ。何も話してくれなかったけど。そういうこと

でしょ？ あんたの目的の、そのためのピースとして私を配置したのよね」

「付き合いが長いだけのことはあるね。お見通しか」

「……ったく。そんなことしていると、いつか愛想尽きちゃうわよ」

「それは困るな。これでも君のことは本気で愛しているつもりなんだけど」

「……ばか」

「な、なんだか話はよくわかりませんが、いいなあ……」

「なにが？」

「あんな風に、ストレートに愛を伝えてくれるのは、女の子にとっては憧れみたいなものなんです。セツも見習ってくださいね」

無理だな。あんな気障つたらしいセリフ、所謂『ただし、イケメンに限る』みたいなもんだし。あの欧州系のいかにも王子様チックな外見で言われればそりゃあときめくこともあるだろうが、平凡な日本人の顔立ちであんなこと言ってみる。恥搔くだけだ。

「……こないだのだってそこそこストレートだったつもりなんだけどな」

「何か言いましたか？」

「なんでもない」

希望と呼ばれた男は顔を赤くする光さんの額にチュツと軽いキスを落としてからこちらに向き直った。

「まあともかく、君たちには何かお詫びをしなくちゃいけないね」

「い、良いです別に！ 私たち、もっとランクの低いお部屋だったのを光さんがこうしてグレードアップしてくれましたし……」

「おや、そんなことをしていたのか。まあそれでも、僕の方は何のお詫びもしていないからね。台無しにしてしまうお詫びだ。どうか受け取って欲しい」

ん……？ 台無しに“してしまう”？ してしまった、ではなく？

「これ……海馬ランドのプレミアム招待券！？ ど、どうしてこんなものを……」

「何イ!？」

彼の言葉のニュアンスにちょっとだけ違和感を覚えた俺だったが、さらっと手渡されたとんでもないものにそんな疑問はあっさりと吹き飛んだ。

「プレミアム招待券って確か……」

「そう。一日どころか年間完全フリーパス。飲み放題食べ放題特典付き。あの気に入った相手には太っ腹な瀬人らしいね。とりあえず六人分あるから、全部渡しておくよ」

いや、渡しておくよってあんたの方が百倍太っ腹だろう。何者だこの人。

「うん？ ああそう言えば、まだ自己紹介していなかったね。僕は真中希望。これでも、真中グループという企業で会長を務めさせてもらっている。まあ、ただ生家だったから後を継いだだけなんだけどね」

「ま、ま、ま、真中って……」

「知っているのか？」

俺はまったく知らないが、アテナがすっかり真っ白になっている以上、相当でかい会社のようだ。そんなところの会長をこんな若さで？

「知らないんですか!？ あの海馬グループやI&I社にも技術提供や多額の投資をして、海外貿易を中心に世界でも有数の規模を誇る大企業ですよ！ その会長さんだなんて……」

「何、僕は会長。ただ高い椅子にふんぞり返って座っているだけのお飾りさ」

なんてこった。この男、人生の勝ち組を地で行ってやがる。で、この旅館もグループの子会社が経営してるのな。

「まあ、僕の素性なんてどうでもいいじゃないか。それに、こうしていつまでも邪魔をするのは僕も本意じゃない」

「あつすみません。私たちと同じで、光お姉さんたちも旅行の最中だったんですよ」

「別にいいわよ。どうも、これで帰ることになりそうだしね」

「え……？」

今日泊まりに来たのに、もう……？ 今から夜になって、恋人同士ならこれからが本番といったところだろうに。

「流石、光はよくわかってる」

「もしかして、お仕事……ですか？」

「……さて。そんなところかな。それじゃあ、良い夜を。それと……」

… 「？」

「っ！？」

真中希望は、スツとアテナの耳元に顔を寄せると、何事か呟いた。アテナはサツと顔を蒼白にしてへたり込んでしまった。

「お、おいアテナ！？ どうした！？ おいお前！」

しかし、その時には既に真中希望と光さんは姿を消していた。廊下を覗いてみても、その姿はどこにも確認できない。

「一体何を……アテナ、どうしたんだよ？」

「……………な……………んで……………」

血の気の引いた顔でそれまで真中希望の居た場所を呆然と見詰めるアテナ。

一体なんだって言うんだ。あんな短い言葉だけでアテナがここまで動揺するなんて。俺にも幽かに聞こえてきた。確か……。

『人生は、楽しいかい？』

そう言っていたように思える。この言葉のどこに、アテナがここまで動揺する要素が隠されていたのか。俺にはさっぱりわからない。

「教えてくれ……アテナ」

しかしアテナは何も言わず、ただ「なんで……どうして……」と呟くばかりだ。

「これじゃ……確かに」

“台無し”……だ。

「私、あの娘と友達になっただわ」
「そうか。それは良かった」
「いい娘だった。とつてもね」
「ああ、知っているよ」
「……あの二人、どうなるの？」
「……さて。未来は常に流転する。正確なところはわからないよ」
「どうして、あの娘たちに？」
「……彼女が目覚めてくれないと何も始まらない。だから今回、彼女に手を出した」
「そんなに重要なことなの？」
「運命を寄り代として終焉が胎動し、其を切り開く剣が眠る扉を開く。彼女は鍵だ。まずは鍵を開ける必要がある」
「私、携帯番号とか交換したの」
「そうか」

「アテナ、かけて来てくれるかしら……」

「……未来は常に流転する。正確なところはわからない。……ただ」

「ただ？」

「きつとかけて来てくれるさ。ちゃんと自分を受け入れて、全てが丸く収まった頃にね」

「そう、願うわ」

「人の祈りは、きつと現実になる。強く祈れば、きつとね」

希望たちは夜の闇に消えていく。その目に確かな光を携えて……。

第二期最終話「確かなもの、一つ」

アルカナく切り札の騎士く

第二期最終話「確かなもの、一つ」

アテナが落ち着くまでは一刻ほどの時間を要した。

その間アテナはずっと何故、どうしてと何かに問いかける声を発して、俺の呼びかけにも全く答えようとはしなかった。

「……セツ」

「なんだ。アテナ」

「私……私は……」

縋るように俺の腕にしがみつき、また口を閉ざしてしまおうアテナ。一体何が、アテナをそこまで追いつめているのか。一体あの男の言葉に何の意味があったのか。

「教えてくれ、アテナ……」

しかしアテナは俺の問いには答えず、悲しみと後悔の念を湛えた瞳で俺を見つめてきた。

「セツ……すみません」

「何を謝ってるんだ？ 俺はお前に謝られることなんて……んっ」

唇が塞がれる。また、アテナの唇で。そのまま体重をかけてきたアテナに押し倒される。

「アテナ……？」

「確かなもの、一つ。私にください」

「む……アテナ……？」

目を覚まして、最初に探したのはアテナの姿。そして目に入ったのは一つの書置き。

『ごめんなさい。私には皆の傍に、セツの隣にいる資格はありません。』

後のことは任せてください。全部、終わらせてきつとセツたちが穏やかに暮らせるように、幸せになれるようにしてみせますから。さようなら』

泣きながら書いていたのか、涙でインクが滲み、文字はどれも書いていた時のアテナを表すかのように震えて掠れていた。

……なんだよ。

「なんだよ……！ 資格って！？ 後の事って何のことだよ！？ 穏やかに！？ 幸せに！？ ふざけんな！ どっちも俺は……」
わからなかった。あの男のたった一言で、なぜアテナが……。

「お兄ちゃん！」

「さだめ？」

「ごめんお兄ちゃん！ ついてきてたことは謝るけどそれよりも…

…」

「アテナが居なくなつた！ お前たち、俺たちを見張つてたんだろ！？」 アテナがどこに行つたか知らないか！？」

「……申し訳ありませんセツ様。わたくしとしたことが、何が何やらわからぬ内に気絶させられてしまいました……」

「私たちも……色々あつて呆然としてたから……」

「くそつ！ アテナがこんな書置き残して消えたんだ！ あの男…

…真中希望とか言う奴に何か言われて……それから様子が……」

「真中希望！？」

「知ってるのか！？」

「知ってるも何も、昨日さだめたちに接触してきたんだよ。それで

……」

「詳しく聞かせろ！」

「何者なんだ……あいつは」

ルインがあっさり、一瞬で倒されたという話を聞いて、流石に俺も絶句した。

「わからない……それで、アテナに囁いた言葉って……」

「『人生は、楽しいかい？』だった筈だ。それ以上の言葉は言つてなかつたと思う」

「何かの言霊が含まれていた可能性があります。精神干渉の類の」

「それじゃ、アテナは……」

「決めつけるのはダメ。そうだと、彼女に接触した意図が読めない」

「それは……」

「どちらかと言えば、私たちの気がつかなかった意味が、その言葉に含まれていたと考えた方がいい」

ルインの言葉に考え込む。『人生は、楽しいかい？』その言葉に別の意味……？

カサツ……。

「？ お兄ちゃん、何か落ちたよ」

「え？ あ、これはあいつから……」

海馬ランドのプレミアム招待券が入った封筒。その封が解けて、中身が少し出ていた。

「また物凄いモノくれたね……あ、これ！ 手紙！」

「なに！？」

封筒を拾い上げたさだめがその中に入っていた短い手紙……というか紙切れを取り出して中を読む。

「えと『終焉は君たちのすぐそばに。鍵は天使の少女。過去を見つけて』だつて」

「なんだそれ……終焉が傍に？ 鍵？ 過去を見つけ出せ？」

「……天使の少女はアテナのことでしょ？ やっぱり」

「では、過去とはアテナの過去……ということですか？」

そういえば、俺はアテナの過去について何も知らない。家がどこに在るのか、家族構成は？ そもそもアカデミアに飛び級という時点で何か特別な事情があるのでは？ そういったことを俺は何一つ知らない。

「……一先ず、アカデミアに戻る」

「そうだね。学園長先生なら何か知ってるかもしれないし」

「アテナ……」

昨日のアテナの温もりを思い出す。唇に感じた感触は、今でもしっかりと覚えている。

「何で……何でお前とのキスは……」

いつもこんなに、悲しいんだ……。

帰りの船の中、俺たちは全員表情を暗くして、まるでこれから誰かのお通夜にでも行くのかと言わんばかりだった。中でも最も落ち込んでいたのは……。

「さだめ、大丈夫か？」

「……………あんまり」

さだめは仲直りしてからアテナとはぶつかり合いながらも仲良くやっていた。多分……いや、間違いなくアテナはさだめにとって初めてできた友達だった筈だ。その失踪が辛くないわけがない。

「違う……………」

「え？」

「違うよ……………わかってるでしょう？ 別に鈍感じゃないもの“兄さん”は」

「……………俺と、アテナのことか？」

「……………いつもそう。いつも“わたし”は後れを取る。これだけ好きなのに。好きな気持ちじゃ絶対に負けてる気しないのに。なぜ？」

“わたし”の何がいけないの？ “わたし”が劣ってる部分って何？ どうして“わたし”じゃダメなの？ 答えて……………答えてよ。“

兄さん”……！」

「っ！」

何だ……………？ さだめの奴、人称が……………。

「っ……………なんでもない。忘れて。“さだめ”、もうちょっと外で風に当たってくるから……………」

ズズツ……………。

「っ！ さだめっ！」

ゆっくりと振り返るさだめ。そこには、覇気こそなかったが一応いつものさだめの幼さの残る顔があるだけだった。

「……………何？ “お兄ちゃん”」

「……………いや、なんでもない」

ちよつと風に当たって行くといいよ」

「……ん」

ルインをその場に残し、さだめは船室へと戻る。

「そう……船酔い、なんだよ。きつと……」

「わたくしは……」

セツ様の役に立っているのでしょうか？ シャルナ様ではありませんが、いつもいつも大事な時にいつも役立たずで……今回だって、知らない内に気絶させられて……。

「せめて……これだけでも早く完成させましょう。セツ様の身を守るため……少しでも心の支えになれるように」

アカデミア校長室。

俺たちは定期船から降り、島に着くなり荷物を置くことも忘れて校長室へ駆け込んだ。

「ふむ……そうですね。そんなことが……」

「はい。それで、できればアテナの事を教えて欲しいんです。もちろん、個人情報だから無理なら……」

「いえ、そういうことでしたら。それに、アテナ君も君たちになら、嫌とは言わないでしょう」

鮫島校長は快諾してくれて、アテナの入学用の書類を探しに行ってくれた。しかし……。

「馬鹿な……」

「どうしたんですか？」

「ないのです……アテナ君の入学願書やプロフィール。家庭事情などの情報も……」

「そんな……」

アテナの情報が根こそぎ消去されている？ 誰が、何のために？

「まさか、またあいつか？」

「考えにくい。彼は怪しかったけど、立場的には私たちの味方である筈。過去を見つけると指定してきたのに、それを妨害するのは筋が通らない」

「じゃあアテナ本人が処分……」

「それも不可能ですわ。わたくしたちは今日、朝一番の定期船で戻りました。そして脇目も振らずこの校長室に来ましたし……セツ様、昨晚アテナ様を最後にお見かけしたのは何時頃になりますか？」

「え？ ええつと……よく覚えてないけど、少なくとも深夜だった」
「……では、その頃にはこの島への定期船はありませんし、可能性は消えましたわね」

何も聞かないでくれるのは優しさなのかただ気がついていないだけなのか。

「……………」

「さだめ？」

「いいよ。続けよう。とすれば、始めからなかったと考えるのが有力だよ」

「ですが、それではアテナ君は始めから入学していないことに……」
流石にそれは荒唐無稽すぎるな。

「そもそも校長。アテナは飛び級みたいですけど、どういう経緯で？」

アカデミアに飛び級するくらいだからなにか特別な理由があるのでは？ そう考えての質問だったが、鮫島校長の返答は予想に反して困惑したものだっただ。

「いえ……そもそも改めて考えてみると何故アテナ君を入学させたのか、その辺りの記憶もあやふやで……」

どういうことだ？ アテナに繋がるもの全てが消えている。でも、誰もアテナについての記憶を失ったりしているわけではないので消

失した、というわけではないはず。じゃあ……？

「……部屋に行ってみよう。何かあるかも」

「そ、そうだな。ここに居ても仕方がなさそうだ」

「うむ。私の方でもアテナ君の搜索と情報の検索は進めておこう」

「お願いします」

アテナ……本当に君は一体何者なんだ……？

「部屋は……特に変わりないね。昨日部屋を出た時と変わらないと思う」

「後は、家探しでもするしかありませんわね」

「……流石に、俺はやめておいた方がよさそうだな」

「任せて」

女性陣に搜索を任せ、俺は部屋の前で待つ。

「あれ？ セツ君、どうしたの女子寮で……」

「ユーキちゃんか？」

「うん。そこ、アテナちゃんのお部屋だよな？ アテナちゃん、そこにいるの？」

「……いや、実は……」

俺はユーキちゃんにも事の経緯を話した。

「そっか……そんなことが……」

「ユーキちゃんは、何か聞いてないか？ アテナの昔の話とか」

「うーん……そういえばアテナちゃん、そういう話何もしてなかったなあ……セツ君も知らないのにわたしが知ってることもないかもだけど」

「そっか……そうだよな」

「ん。とにかくわたしも協力するよ……って言ってもどうすればいいのかわかんないけど」

「いや、ありがとう」

正直、俺たちだって何をどうすればいいのかわからないんだ。協力してくれる。その言葉だけで随分と救われるもんだ。

ガチャ。

「どうだった？」

アテナの部屋から顔を出したルインたちに成果を聞く。ルインは懐から数枚の写真を……ってそれは。

「キミの隠し撮り写真。中々巧妙に隠されていた」

「けどまあ無駄だよ。さだめたちにかかればそんなもの、隠し通せるわけないもん。っていうかよくお兄ちゃんに気付かれずに撮れたよね。さだめ、いつつも失敗してるのに」

それは信用してるかどうかの違いだ。

「っていうか何を探してんだ何を！ アテナの事はどうした!？」

「いえその、特に何も見つからずこれが見つかったので……」

「探し物や片づけをしている時、ふと目に入ったもので注意が逸れることって……よくあるよね？」

「今そんな場合か!？」

この期に及んでそんなバカみたいな……。

「ユーキちゃんからも何か……」

「セツ君の写真……」

ちくしょう！ 味方が居ない！

「っていうかお兄ちゃん動揺し過ぎ」

「え?」

「アテナ様が居なくなっただことはショックでしょうが、焦りは何も生みませんわ」

「いつも自然体。それがキミ」

「みんな……」

そうか……そうだったな。アテナが居なくなっただこの状況でも、

下手に焦ったらダメ……。

「いや、それでも馬鹿してる場合でないことも事実だろ」

「バレたか」

「バレないでか。っていうか危なく流されるところだった。」

「でも実際何も見つからなかったことは本当だよ」

「この部屋に在ったものは全部、この島で買ったと思われるものばかり」

「アルバムや日記帳のようなものもありませんでしたわ」

「徹底的に過去を感じさせるものがないのか……アテナ」

「うーん……あ、過去と言えば」

「何か知ってるのか？ ユーキちゃん！」

「セツ君が初恋だって」

「……そうか」

役に立つ情報ではなさそうだった。いや、嬉しくないわけではないが。

「しょうがない。とりあえず荷物を置きに部屋に戻るよ」

「そうだね。いつまでもここにいるも仕方ないし」

「そうだね、さだめちゃんはもうすぐ入学式なんだし、準備もあるよね」

「……………？」

「ああ！ そういえばさだめはまだ中等部だったか！」

一瞬ユーキちゃんの言葉に首をかしげた俺たち（さだめ本人も含む）だったか、ようやく思い至った。

「最近あまりにもさだめが居るのが普通になっていたから」

「そういえば、さだめって今度入学式だっけ。すっかり忘れてたよ」

「忘れてたって……さだめちゃん、自分のことなのに……」

「……ともかく、そういうことなら尚更一端解散するべきだろ。アテナのことは……また改めて考えよう」

可能性としてはシャルナだが……あのちゃんばらん天使が知ってるかどうか怪しいし、それにアテナについて行っているのなら連

絡を取ることも難しい。

「そうだ……それにアテナのこと以外でも考えることは山ほどある」
真中希望が残していった言葉はどれも謎めいていて、解読することからして難しい。が、それを一つ一つ解いていけばアテナ失踪にも繋がるかもしれない。

「アテナ……言っただろうが……お前を離さないって」
なのに。だから。

「絶対連れ戻してやるから覚悟しておけ。アテナ」

俺はどこにいるとも知れないアテナに向かって自分の決意を固めたのだった。

第二期最終話「確かなもの、一つ」（後書き）

こんにちは。

これで第二期分の改訂完了。……すごいですね。事情さえ知らなければ凄まじい更新速度だと思います。ええ、事情さえ知らなければ。ほぼ全て大した変更点もなしにここまでアップしたただけですか。ぶっちゃけ二期分は一々削除しなくても良かった気がします。今更ですが。

それでは、悠でした！

第三期第一話「全略」

アルカナ〜切り札の騎士」

第三期第一話「クルンテーパーマハーナコーンアモーンラッタナコーシンマヒンタラーユッターマハーディロツカポップノツパラットラーチャターニーブリーロムウドムラーチャニウエートマハーサターンアモールピマーンアワターンサティットサツカタティヤウイツサヌカムプラシット」

アテナが失踪して数日。俺の周りほとりあえずの平穩を取り戻していた。

あの後、間違いなく何らかの情報を握っているだろう真中希望に連絡を取ろうとしたのだが、相手は大企業の会長ということもあって全くつかまらない。ならばと以前番号を交換した光にかけてみるのだが留守電になるばかりだ。

「八方塞……か」

「大ニュース！ 大ニュースス！」

はぁ、と溜息を吐いたセツたちところに翔が息を切らせてやってきた。

「どうしたんだよ。そんな慌てて」

「今日の入学式、あの水原凜ちゃんが入学するらしいッス！」

「何イ！？ 水原凜だと！」

……………。

しかし、反応したのは万丈目だけだった。

「って、なんでみんな無反応なんスか！？ あの小悪魔リンちゃんで有名なアイドルデュエリストの水原凜ッスよ！？」

「いや、オレそれが誰だか知らねえし」

「さだめも知らない」

「わたくしたちが知っているとでも？」

「……私はテレビを見ない」

十代を始めとして、皆一斉に首を振る。

「……ここまで世情に疎い人たちばかりだったとは知らなかったッス」

「お前と万丈目がミィハーだから丁度いいんじゃないか？」

「さん、だ。それに俺様は別にミィハーなわけじゃない！」

例によって十代にかみつく万丈目は置いて翔はやっぱ興味無さ気にボケーっとしていた剣士と俺に矛先を向けた。

「剣士くんも知らないッスか？」

「ああ。別にアイドルとか興味もねえしな」

「セツ君も？」

「御堂切の無駄スキル。有名人を記憶できない程度の能力」

「ついに出たッスね……本当の本当に無駄スキル……」

仕方ないだろ。現実を生きるのに一杯一杯なんだ。テレビにまで脳細胞を消費したくない。アニメやらはそこそこ見てたけどこつち来てからはデュエルなんていう最高の娯楽があるわけで。俺のテレビ離れはどんどん深刻化していったのであります。まる。

「はあ……」

そして俺は今絶賛憂鬱中。見たこともないアイドルではしゃぐ元気はない。

「重症だな……おいセツ。世界一長い名前を持つ首都の名前は？」

突然三沢から投げかけられた質問に訝しみながらも、俺は答えを返す。

「クルンテープマハーナコーンアモンラッタナコーシンマヒンタラーユッタヤーマハーディロッカポップノッパラットラーチャターニブリーロムウドムラーチャニウェートマハーサターンアモラーピマーンアワターンサティットサツカタティヤウイツサヌカムプラシット」

「……どこだそれは」

「タイの首都」

「え？ バンコクじゃないんすか？」

「正式名称だ」

「つーか三沢、お前は答えを知ってたのかよ？」

「……正直すまん。バンコクだ、ということは知っていたが正式名称までは覚えていなかった」

「っていうかもう一度言ってくれないかしら。とても覚えられそうにないわ」

明日香がコメカミを抑えてリピートを要求してきたので仕方なく復唱する。

「クルンテープマハーナコーンアモーンラッタナコーシンマヒンタラーユッタヤーマハーディロッカポップノッパラットラーチャターニブリーロムウドムラーチャニウエートマハーサターンアモーラピマーンアワターンサティットサツカタティヤウイツサヌカムプラシットだ」

「……ごめんなさい。例え何億回聞いたところで覚えられそうにないことがよくわかったわ……」

「別に『寿限無寿限無五劫のすりきれ海砂利水魚水行末雲行末風行末食う寝るところに住むところやぶら小路ぶら小路パイポパイポパイポのシューリンガンシューリンガンのグリーンダイグーリンダイのポンポコピーのポンポコナーの長久命の長助』を覚えるのと大差ないだろ」

「……現代日本でそれを丸暗記している高校生が一体どれだけいるのかしらね」

本職なら。素人

「……そもそも、三沢はなんのためにこんな質問したんだ？」

「いや……例え憂鬱でも頭脳スペックは変わりないようだな」

そういうのは馬鹿が落ち込んでいる時にとる手段だろう。十代とか。

「オレ、例えどんだけ落ち込んであんなもん答えられる気がしないぜ……」

「そもそも知っていても即答できる人はまずいない。普通。さすが

「キミ」

ルインに褒められた。ちょっと癒された。

「……………」

「……………どうしたんですの？」

「うつん。ちよつと……………ねえお兄ちゃん。ちよつと来て。あ、さだめはそのまま入学式の会場に行くから」

「ん？」

さだめに引つ張られて教室の外に連れ出される。周りに聞こえないようにヒソヒソと小声で耳打ちしてくる。

「ねえ、水原凜なんていう新入生、原作にいたっけ？」

「……………悪い。俺ももう殆ど原作は記憶に残ってなくてな。でも、確かにちよつと違和感はあるな」

「イレギュラーの可能性が高いよ。お兄ちゃん、とりあえず整理しよう？ 今現在判明しているイレギュラーは……………」

さだめが指折り数えていく。

「とりあえずさだめとお兄ちゃん。ルインに希冴姫さん……………だけど精霊まで含めたらかなりの数だね。ジャックやキングもそうだし、ヴァンダルギオンやゴーズたちだってそうだもん。後人間では剣士さんと……………アテナ」

ピクッ……………。

「アテナは……………その中でも特別なのかも。真中希望の置き土産からすればね」

「真中希望……………」

正直複雑だ。どうも俺たちに助言してくれているようだが、その所為でアテナは失踪してしまった。それは絶対に許すことができない。なのに……………。

「くそっ……………」

行き場のない怒りを言葉として吐きだす。あいつの眼は真摯だった。とても俺たちを陥れようとか仲を引き裂こうとか、そう言った悪意のある感じじゃなかった。それでも実際にアテナは失踪して……………

…。俺の感情はあいつを許せないのに、冷静な部分はあるわけじゃない。アテナ自身になにかがあったから、だからアテナは自分から姿を消したんだと主張する部分もある。こんな時、自分の二面性が嫌になる。

表層……俺の仮面。感情と、深層……素の俺自身。仲間想いでアテナに惹かれていて……いつもの俺自身は消えたアテナを心配し、すぐにでも飛び出していきそうなのに、俺の根っこが邪魔をする。

「？ どうしたのお兄ちゃん」
さだめが、ここにいる。俺にとっての唯一無二、絶対不可欠な肉親。絶対に一人にしないと誓った。支えであり続けると。

「はは……」
ルインの言ってた通りだ。俺は、病んでいるよ。

「さだめ……」
「なに？」

「いや……入学式、がんばれよ」
「？ うん……まあ頑張るっていったってさだめは特にすることもないんだけど」

怪訝そうな顔をするさだめは、じゃあ先行くね。といって入学式に向かつて行った。取り戻した素のさだめ。やっぱり素でも困る奴だけど、それでも愛しい妹。

素のままの俺は、このままでいい。このままさだめを、さだめだけを守り続けていれば。そんな風に考える。

「いや……もうどっちが素の俺なのか、わからないな」
アテナを心配している俺と、さだめだけを守り続けようとしている俺と。

「仮面を被り続けなければいつかそれが真実の顔に……か。結局、どっちが真実かわからなくなっただけみたいだな……」

俺は自嘲気味にそう呟き、皆が待っている教室へとゆっくりと戻るのだった。

事件は、やはり入学式に起こった。

翔の言っていたなんとかというアイドル（無駄スキル発動中）が入学するからか、今年の入学式には数台のカメラもやってきているようだ。しかも生特番。なるほど翔が騒ぐのもわかる話題性だ。

『えーそれでは新入生代表の言葉。新入生代表、御堂運命君』

この時点で良い予感はず片もなかったことはまあいい加減言うまでもないことだろう。

鮫島校長（何故さだめを代表にしたし）の言葉にはい、と答えて静々と壇上上がるさだめ。だが俺にはわかる。あいつ、真剣そうに全体を見つめている振りして俺に全神経を集中させてやがる。お兄ちゃん聞いててね（はあと）みたいなこと考えているのが丸わかりだ。

静かに壇上上がり、真剣な表情でゆっくりと原稿を開きコホン、と一つ咳をして……。

『……みなさん。禁忌に萌えましょう』

……なんのこっちゃ。

会場にいる全員と、恐らくはテレビの前の皆さん方も含めて一言で混乱に陥った。

『禁忌はさだめの神経回路を甘く刺激し禁断という文字に甘く切ない快楽を覚え背徳の響きはさだめの心を震わせます。具体的には兄萌え。つて言うかお兄ちゃん萌え。禁忌に足を踏み入れることに躊躇することは無いの。四十過ぎのオジサンが幼女を略取し大の大人が未成年を己の城に監禁し団地妻に三河屋さんが欲情する。そこに共通する言葉は即ち禁忌！ 禁断！ 背徳！ 人はその言葉だけで遙かなる高みへと至れるの。具体的に言えばお兄ちゃん愛してる。それだけでさだめの精神はかつてない高みへと至りああそろそろ我慢できなく』

「希牙姫いいいいいい！ ルイーーーーーン！ ヤツを止めるお

おおおおお！ これ以上公共の電波にヤツの言葉に乗せるなああああああ！！！！」

「御意！」

「了解」

「ちい！ 余計な邪魔を……お兄ちゃんのイヌめ！」

「違う。雌犬」

「希牙あああああ姫！ そのアホもまとめて摘み出せえええええ！！！！」

テレビに生出演してなんたるアホを！ 何たる毒電波を公共の回線に流してしまっただ！ 放送事故だよこれもう！

「なんで！？ さだめのこの実兄に対する溢れんばかりの愛を全世界に知らしめようとして何が可笑しいの！？？」

「マイクを離せそのモラルハザアアアアアアアアアアド！！！！」

『所詮は一方通行の愛。その幼児体型で何を吠える。彼は私に責任を取ると言ってくれた』

「おんどりやどこまで俺を貶めれば気が済むんじゃダアホオオオオオオ！！！！」

何故マイクに向けて言うし！

「そしてA Dの皆さんも何奴らにカメラ向けちゃってんの！？ 放送事故にも程があるだろ！？」

『近親相姦を禁じるこの世界など滅びてしまええええええ！！！！』

『異種族でも婚姻を結べる法律を作るべき』

終わった。ただの入学式で特番が組まれるほど注目されているアイドルが来ている時に全国のお茶の間に毒電波を生放送。ぶっちゃけ俺以上にデュエルアカデミアが終わった。

「これが……っ！ 終焉かっ……！！！！」

シリアスな展開を予想していたところを途方もないギャグ展開で俺と共にデュエルアカデミアを終焉に導くなんて……なんて知能犯だ！ 終焉！

……なんてアホな話があるわけもなく。

希冴姫がなんとか毒電波の発信元を排除し、俺や鮫島校長。クロノス先生たち教師陣でどうにかこうにか場の混乱を収束させ……何より助かったのは空気を呼んでくれたらしいアイドルさん（相変わらず名前覚えてない）が上手く場を取り繕ってくれたことだな。これは後でお礼の一つもせねばなるまい。

「で、なにか申し開きはあるか？」

そして現在、俺はさだめとルインを目の前に正座させての説教タイムである。

「さだめ的には大方満足。でも出来れば決定的瞬間の一つや二つは見せつけたかったな」

「……微妙に不満。彼女と違ってウソは一つも言っていないのに」

「黙れ痴れ者コンビ。なんとか……本当になんとか何事もなかったかのように処理されたから良かったものの、一歩間違えればアカデミアが問題になるばかりか俺は臭い飯を食うはめになっていたかもしれない」

しかも事実無根の近親相姦的な意味で。

「……大体、なんでまたこんな暴挙に出たんだ。さだめ」

如何にこのモラルハザードといえど、特別理由もなくここまで騒動は起こさないだろう。そもそもそんなに人前に出たがるタイプでもなし。

「……だって」

これまた珍しいことにさだめが拗ねたような表情をしていた。

「だってお兄ちゃん、最近落ち込んでばかり。いっつもアテナのことばかり考えてるし、なんかちよっとピリピリしてるし」

「……それ、は……」

否定できない。アテナの失踪から数日。そんなすぐに立ち直れるほどアテナという存在は俺の中で小さくない。

「そんなこと、さだめだつて知ってるよ。だから思い切り爆発させ
たんだもん。あれだけ叫べば少しくらいマシになったんじゃない？」
「……………どうかな」

そう言いつつも、俺の顔には軽く笑みが浮かんでいるだろう。

「……………それにしたつて、もうちょっとやり方というものがあります
わ。あれでは……………」

「日本中にさだめとお兄ちゃんの爛れた性活（誤字にあらず）が生
放送。これで公式。既成事実どん。やったね！」

「俺は旅に出る。とりあえず富士の樹海あたりまで」

或いは一生引き籠つて衰弱死する方を選ぼうか。

「そして全国生放送つてことは……………誰かさんも見てたかも、ね？」
え……………。

「だつて人気アイドルの入学式生放送だよ？ まあ全国各地とまで
は行かなくても、結構色んなところで放送されて色々話題にもなる
でしょ」

「……………確かに、そうなればセツ様に御執心のアテナ様のこと」

「黙つてはいない」

「まさか……………さだめお前……………」

「まあ望み薄だけどね。とりあえずお兄ちゃんを励ます、全国に既
成事実を垂れ流すの二つは達成できたわけだし、一石二鳥であわよ
くば三鳥つて感じかな」

「……………感謝すべきところなのかもしれないが、達成されてはならない
事項も同時に達成されてしまつてるので素直に感謝できない」

でも、結果元気づけられたのは事実なわけで。

「……………いやしかし、さだめに借り一つというのは即ち婚姻届にサイ
ンすると同義！ ここで迂闊な返事はできない！」

「……………ちっ！」

「ほらやつぱり舌打ちとかしてるし！ うわあつぶねーっ！ もう
少しで真の策略にはまるところだった！」

「貴女は姑息」

「その姑息な策略に便乗した貴女の言えたセリフではありませんわ」

「一人だけ気がつかなかった脳筋姫は哀れだねー」

「なんですって!?!」

そして、いつもの調子で馬鹿騒ぎ。

きつと皆気がついていている。俺が無理してること。

少しマシになったのは事実。でもそう簡単に立ち直ることはできなくて。

でも……しばらくは、なんとかやっていってみるぞ。

「から元気は、俺の得意技だからな」

いつかルインにもそういったのだから。

真中グループ会長室。

「……もう。この子たちは馬鹿なのかどうなのか……」

呆れたような様子を見せる光に対し、真中希望はただ楽しげに口元を緩ませている。

「愉快的な子たちじゃないか。それに、これは経過確認でもある」

「経過確認?」

「そう。考えてみてくれ。そもそもデュエルアカデミアに明確な入学式なんていうイベントはない。いいや、“なかった”んだ」

「あ……」

確かに希望の言う通り、セツたちの入学時……即ち前年度には普通の学校が行うような入学式は存在しなかった。

「しかし、今はある。順調に世界が変質している証拠だよ。言いかえれば、歪みの具現でもある」

「でもほら、今年はアイドルの子が入学したから……」

「そもそもそのアイドル……水原凜自身がイレギュラーだからねえ」
希望は苦笑する。あらゆるところに齟齬が出来始めている。

「さて……ここまで本来の歴史とズレが生じているわけだけど……
彼の方はどうなっているのかな」

「ああ……そっちも気にしなくちゃなんないのね。メンドクサイわ
……」

心底嫌そうに溜息を吐く光を宥める。

「仕方ないさ。これでも一応この世界の平和を守る立場にあるんだ。
職務は全うしなければね」

「希望様」

スツ、といつの間にか背後に近寄っていた秘書が次の仕事の予定を促す。

これからまた分刻みで仕事が続いている。そう考えるといくら希望でもうんざりしてしまう。

「……やれやれ。君よりよほど忙しい身の僕を労って欲しいね」

光などよりよほどかったるそうに希望は腰を浮かし、秘書を従えて会長室をあとにするのだった。

第三期第二話「異常と普通」

アルカナく切り札の騎士く

第三期第二話「異常と普通」

入学式の騒動の後、俺はさだめを連れて一連のお詫びをアイドルさんにするため一年教室へと向かっていた。

「お？」

途中にてポケーっとしていた剣士を発見。話しかけてみる。

「よ。どうしたんだ、なんか黄昏てるみたいだけど」

剣士は俺たちを一瞥すると、表情の読めない顔で皮肉った。

「よう、変態兄妹」

「いかにも」

「肯定すんな。つか、剣士もやめれ。違うっつーに。お前だって知ってるだろ」

「……おう。まーな」

「本当にどうした？ 随分へこんでいるっつーか、自己嫌悪ーって顔してるぞ」

「ったく。なんでデメエはそうム力つくくらい鋭いんだよ」

溜息と共に吐きだすような言葉だった。

「鋭かないさ。鋭かったらアテナに逃げられたりしてないって」

アテナの件については剣士にも説明してある。思いつきりぶん殴られたけどな。あれは痛かった。と、それはいいとして。

「それで、結局どうしたんだお前は」

「……なんでもねえよ。テメエの言う通り自己嫌悪してるだけだ」
「ふむう。それならどうだ？ 俺に悩み相談してみないか？ なに、心配するな。これでも俺は相談された悩み事を即座に解決する程度の能力持ちだ」

「……そりゃ嘘だな」

「なんと。その根拠や如何に？」

「お兄ちゃん、さだめ、お兄ちゃんが好きすぎて悩んでいるの。この股間から溢れそうな激情を解決して！」

「その御相談にはお答えすることができません」

「ホレ見ろ」

「っは！？ つい条件反射で！ いやしかし安心しろ剣士。何事にも例外は付きもの。少なくともさだめは例外中の例外だ。さあ、遠慮せずに話しかけてみるといい」

返答は呆れかえったような溜息だった。肯定の溜息。

「お前らはさ、なんでそう在れるんだ？」

「ん？ どういう意味だ？」

剣士の言葉の真意が掴めず、首をかしげる。

「お前らはさ、そう。どう考えたって異常だ」

入学式の一件、だけではないだろう。

「……そうだな。返す言葉もない」

俺もさだめも、一般的とはかけ離れた人間性や行動をしている。

その自覚はある。

「で、今の社会って奴は腹立つことに“人とは違う”ってことに敏感だ。オレならこのチンピラめいた容姿。お前らなら行動全般。そういう異端ってのは当然のように排斥されるのが普通だ」

「そうだろうな。俺はともかく、さだめは大分その煽りを食ったと言っても良い」

「けどよ。お前らはそうしていつでも明るく自分らしく、幸せそうに馬鹿やってる。ここの奴らも全然お前らを差別したりしねえ。良いことだ。わかってる。わかっちゃいるが……」

「納得いかない？」

「……ああ」

前に軽く話を聞いたただけだが、剣士は昔から大分イジメに遭ってきたらしい。もちろん、直接的なイジメとかじゃない。剣士の眼つきが悪く、恐怖の対象となってきたために友達といったものがまるで作れなかったというらしい。

「こんなこと言いたかねえが……お前らは異常で異端で異分子だ。そんなお前らが楽しく普通の学園生活を送れているのが納得いかねえ」

「なるほど」

俺は思わず苦笑した。遠慮するなどは言ったが、ホントに直球ど真ん中で来たな。

「わかっただよ……別になんも悪くねえ。ただ、オレが周りに溶け込めなかったのになんで……くだらねえやつかみだっただよ……考えちまうんだ」

だから、罪悪感で自己嫌悪してたわけだ。

「いいだろう。その悩みにお答えしよう。さだめ」

「あい？」

「お前、俺のことどう思ってる？」

「モノにしたい犯したい食べちゃいたい具体的に言うとなっつ「もういい黙れ」ちえー」

「まったく……まあいいか。」

「このようにコイツは異常者なわけだが……さだめ、お前のその異常のこと自分ではどう思ってる？」

「別にどうも思っていないよ。さだめがお兄ちゃんを好きで愛していて今すぐにもベッドインしちゃいたい気持ちにウソはないもの」

「だ、そうだ」

「それがどうしたってんだ」

「さっき、お前は言ったな。異端は排斥されるものだ」と

「ああ。違うか？」

「いいや。違わない。人間なんてそんなもんだ。じゃあどうすれば排斥されなくなると思う？」

「……それがわかるなら、オレは……ってかこの世界に差別される奴なんかいねーよ」

「そうか。俺はその問いに即答できる自信があるぞ。異端じゃなくなればいいってな」

世界は複雑だが、答えてもんは常にシンプルなものだ。

「異端じゃなくなればって……それこそできるなら誰だって……」

「剣士の今考えていることとは違う。俺が言っているのは、物理的な問題じゃなく、もつと観念的、或いは精神的な問題だ」

剣士の場合で異端じゃなくなる。例えば整形するとかだが、俺が言っているのはそんなこつちやない。んなことしたってどうせまた「あいつ整形してんだぜー」とかって異端視されるに決まっている。「そもそも差別や異端視してもんが人間の精神的な病の一種だからな。意識改革こそが差別をなくす唯一の道だ」

「……社会風刺染みた説法はいい。結局どうということだよ」

「要するに、だ。他者に対して自分は異端ではないと思わせれば勝ちだ、ということさ」

「あ……？」

「例えば剣士。ルインは少なくとももう千年は生きているそうだがどう思う？」

「そりゃ……精霊なんだからそういうのもあるんじゃないのか？」

「そうだな。精霊だからそれもアリだ」

剣士には俺の言いたいことがまだ上手く伝わっていないようだ。

剣士の奴も普段は意外と頭も良いが、今回は事が事だけに頭の回転が鈍くなってるな？ 前回俺とデュエルした時もそうだが、自分のコンプレックスに関する事例になるとコイツは極端に処理能力が落ちるな。それだけトラウマなんだろうが。

「つまり、ルインは精霊だから千年生きていても“普通”だ、とお前は認識している。が、他の極々“一般的”な見解で言えば、千年

以上も生きる生命体なんて異端中の異端だ。俺やさだめなんかメジヤない」

「おい……お前そりゃ」

「それなら話は簡単だ。周囲に対し、俺やさだめは『異常であることが普通』だと思わせてやればいい。俺たちは異常だ。それが普通だ。だから俺たちは異常じゃない」

正に、コペルニクスの転回。

「いやいやいや、お前今相当飛んだぞ。端から端に、一気に」

「元々異常かそうでないかの二極しかないんだ。そりゃ飛ぶさ」

表と裏に中間はない。表でなければ裏である。異常でなければ普通である。

「……なんつー強引な論法だよ」

「だが、現に俺たち兄妹はこうして普通に、幸せそうに過ごしている。それはお前が言ったことだろう?」

論証に於いて最も証明が簡単なのは結果論だ。だって今こうだもん。と言ってしまえば数ある反論は無意味な文字の羅列と化する。

要するに俺とさだめが異常である、ということが周囲にとっては普通になっているわけだ。普通の存在は早々排斥されない。排斥されるには何かしら特別が必要なんだ。

「だからさ。お前もただ“らしく”してる。そうすりゃ自ずと周りがお前にチューニングされてくさ」

自分で自分を異常だと思ってるいや周りだってそういう風に扱う。こいつはこういうもんだと周りに錯覚でも何でもいい。認識させてしまえばこっちの勝ちだ。

「かの偉人。アインシュタインはこう言ったそうさ。『常識とは、人が二十歳までの間に集めた偏見のコレクションのことを言う』と。実に全くその通り。俺たちは俺たちが設定した認識の上に生きている。ならその認識を味方にしてしまえばもう怖いものなしだ」

「暴論だ……」

「暴論をまかり通せ。お前の普通を世の中の普通にしてしまえ。そ

うすりゃ誰もお前を異端とは扱わない。お前は普通で居られる」

自分とその在り方に誇りを抱く事。イジメを受けていようがなんだろうが、きつとそれさえできれば世界はきつと優しい。

「少なくとも、俺はそうやって生きてきた。後悔もするし間違いも犯す。でも死ぬ間際にでもそれを笑って思い出せれば俺の勝ちだとそう思っ生きてるよ」

どうせ後悔しない人生なんか夢幻。なら死ぬ間際まで誇り高く。自分の選り歩んだ道を。

「ま、カッコいい事言っは見たが、結局は剣士の心の持ちようで世界は変わるぞっでことだよ」

「お兄ちゃんは説明が長い。最後の一言だけでもよかつたじゃん」
「俺だつて偶には語りたくなることだつてある。タダでさえ今は色んな事が続いてナイーブになつてるんだ。少しくらい語つたつて罰は当たらん」

物を語るつてのは気持ちを落ち着けるのにちょうどいいんだ。で、その鎮静効果は相手にも及ぶ。だからみんなして物語を書いては読んで楽しむんだろっさ。

「……つたく。オレにやどーにも理解できねえな」

「ありや、そーなの」

「だから、もうちつとお前らの在り方つーもんを見学させてもらうぜ。退屈しなさそーだし」

「今に退屈な日々が恋しくなるよー」

まったく同意だ。どう考えてもロクなことにならんのは目に見えている。

「不吉な予言すんなよ。まあいい。ところでお前ら、どこ行こうとしてたんだ？」

おつと、そう言えば当初の目的を忘れるところだつたな。

「いやなに。あの入学式の騒動で随分迷惑かけたからな。そのお詫びと礼を言いに行こうと思つて」

「つーと、あのなんとかつーアイドルのどこか？」

「そうそう。そのなんとか」

「……この今からお詫びと礼に行く相手に対する認知度の低さは我がお兄ちゃんながら酷いもんだよね。まあお兄ちゃんに下手に女の名前覚えて欲しくないから好都合と言えば好都合なんだけど」

仕方ないだろ。無駄スキル発動中なんだから。

「確か……んー水属性！」

「水原だよ。デュエルに関係あるとこだけ抜き出して覚えてるのはある意味すごいけど」

「おおそうだ。そんな名前だ。良く覚えてたな」

「これから挨拶に行く相手の名前くらいは把握してるよ。ってさだめに常識を語らせないでよ。なんか似合わない過ぎて寒氣してきた」

「俺もだ」

「……だから、てめえらはどんな兄妹だよ」

常識を語ると微熱症状が出るくらいだ。特に可笑しくない。

「可笑しいつつの」

そんな会話をしつつ一年生の教室前。

「……あれ、つかなんでオレはここまでついて来てんだ？ オレ関係ねえじゃねえか」

「ま、ここまで来たんだからついてになんとかってアイドルの顔くらい拜んで行けばいいだろ」

「お兄ちゃん、もう名前忘れたの？」

忘れた。

「水原だろ。下の名前は知らねえが」

「凜だったと思うよ」

あー、そんな名前だったか。五秒後には忘れてる自信があるが。

「それじゃあえーと……水ー！」

「忘れるの早っ！」

呼びかけてみたが、案の定それじゃあ誰を呼ばれているのか判別できなかつたらしく、初々しさの残る新生生たちは困惑気味に顔を見合わせるのみだ。あと、微妙に怯えの色が見て取れる。

「まあ入学式で散々問題起こした兄妹とヤクザもびっくりな眼つきの上級生がつるんで現れたらビビりもするよね」

「ごもつとも。」

「えーと、水原さんいるー？」

「ちよつと待て。今更だがさだめも新入生の一員。要はこいつらと一緒に教室内にいる人間なんじゃないかよく考えたら。」

「……まあさだめのことを深く考えることほど無駄な時間もないか」
「酷っ！ まあいいけど」

「あの」

兄妹揃って不毛なやり取りを始めると、何やらすんごく顔立ちの整った黒髪の女子生徒の姿。

「ん？ なんか用か？」

「え？ いえ、先輩方が私に用があるのでは……」

「つーとあれか。この女子が。」

「水」

「原凜ね。いい加減覚えてお兄ちゃん」

「ああすまん。実はな。入学式の件で大分世話になったから、一応お詫びと礼を、な」

「そうですか。まあ大分はっちゃけてくれましたしね。主役で特番組まれたのに脇役でフォロイ役やらされるとは夢にも思っていました」

流石に度胸あるな。アイドルさんは。あんな騒動巻き起こした連中に対してここまで強烈な皮肉を言える奴は早々いない……いや、なんか知り合いの奴らはみんなできそうだが。

とはいえ、この子はちよつと作ってる感があるな。かなり隠してるけど、結構な緊張感に溢れているようだ。んーキャラ作り？ まあアイドルならそういうのも必要だわな。

「私の顔になにか？ それで、先輩と御堂さんとはかくそちらの……？」

「あ……？」

む？ なんだ？

「剣士さんはただの付き添い。というか流れでついてきただけだよ。何か気になるの？」

「……いえ。なんでも。ちょっとデジャ・ヴュを感じただけです」

「……オレも似たようなもんだ。で、オレは戦野剣士」

「御堂切な。こっちは妹のさだめ。クラスメイトになってるから仲良く……うん。仲よくしてくれると兄として嬉しい」

「ちょっと仲良くは厳しいかとも思ったがまあ何事も言わなければ始まらない。」

「はい。私は水原凜です。芸名というわけではなく、本名ですのでそのあたりは勘違いしないで頂けると助かります」

「オーケー凜な。名前了解。今度こそ覚えた」

「り……いえ、構いません。というか、今まで覚えていなかったと？」

「悪いが、アイドルの名前は覚えられない特殊技能があつてな」

「それは特殊技能ではなく一種の欠陥では？」

「耳に痛いな。まあこうして実際に会話したらちゃんと覚えられるから」

「つつーか初対面の女をいきなり名前で呼び捨てつてのがありえねえだろ」

「俺は基本、いつもそうだぞ？ 明日香とかは最初こそ名字で呼んだが、違和感バリバリあったしな。まあ嫌ならやめるが」

「いえ結構です。それで、本題は」

本題。ああそうだ。お詫びと礼だったか。

「何がいい？ 理不尽なことじゃなきゃ大体叶えるけど」

俺のその言葉に、凜はしばし思考していたようだったが決まったようで顔を上げた。

「では、折角このような場所ですし、一局ご指導お願いできますか？」

そう言って凜は支給品のデュエルディスクを手取る。

「ん。そうだなそつちがそれでいいならそつしよつか。じゃあデッキを……」

「あ、ちよつと待ってお兄ちゃん」

「どうした？」

「ねえ水原さん。確か水原さんって悪魔デッキでしょ？ ならさだめがやるよ」

珍しいな。こいつが自分からそんなこと言いだすのは。

「ってか何でさだめは凜のデッキ知ってるんだ？」

「……今更ですが、本当に先輩は私の事を知らないんですね」

「ああ。気を悪くしたなら謝るが」

「いえ。私はメディアに於いて主に悪魔族主体のデッキを用います。尤も、その実力があまり褒められたものではないのでこのアカデミアに来たのですが」

なるほどな。まあさだめも純粹な悪魔デッキじゃないが、そういうことならさだめの方が適任だろ。

「じゃあここじゃあなんだし、ちよつと広いところに行こう。なんならデュエル場使わせてもらうか」

「いえ、そこまでしていただかなくても結構です。ですがまあ確かに教室では目立ち過ぎますし、移動しましょうか」

まだアカデミアの地理に疎いであろう凜を先導して俺とさだめが先頭に行く。剣士はさつきから何やら難しい顔をしていた。凜もまた時折剣士の方を見て考え込んでいるようなので、もしかしたらどつかで知り合いだったりするのかもな。

「ん。この辺でいいか」

「じゃあお兄ちゃん、審判お願いね」

「任せろ。凜も準備いいか？」

「はい。構いません」

凜は何やら腰に二つついているデッキケースの内片方の上にはしばらく手を置いていたかと思うと小さく深呼吸してもう片方をデッキを手に取った。

「デユエル」

こうして“小悪魔リンちゃん”（後で聞いた凜の通り名）対“アカデミアの悪夢”（巻き起こした数々の事件でそう呼ばれている）さだめのデユエルが始まるのだった。

某県某所

「ようやく見つけました。終焉の欠片」

『ちい……なれの果てが……』

「なんとでも言ってください。私はただここで貴方を滅ぼすだけです」

『むざむざやられると思うのか？』

「やられて貰います。私も、欠片程度に梃子摺ってあげるほど悠長な時間の使い方はしたくないので」

『ほざけええええっ！』

「『デユエル！』」

第三期第三話「盤面の世界で」

アルカナく切り札の騎士く

第三期第三話「盤面の世界で」

「それじゃあ先攻は新入生の水原さんに譲るよ」

「……確か御堂さんも新入生ですよね？」

「おっと、そうだったね。何かさだめの場合新入生らしさが自分で感じられなくて」

何しろ前年度から散々俺らの教室に忍び込んでいたからな。いや、むしろ堂々とふんぞり返っていたと言ってもいい。

「では……私のターン、ドロー！ 速攻魔法『終焉の焰』発動します」

「へ？」

あー……。

「……何か問題でも？」

ちよつと向こうも困惑しているらしいので補足説明を入れてやる。

「その『終焉の焰』は使用したターンにモンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚が封じられる。折角速攻魔法なんだから、セットして相手ターンのエンドフェイズ時に発動するのが基本になる。どうせ自分のターンに発動するなら『迷える仔羊』でいいわけだし」

「あ、そうでしたか。すみません。ありがとうございます」

プレイングに難あり、だったか？ というよりそもそもデュエルに慣れてないというか……なんかきこちないな。

「では、二体の『黒焔トークン』をリリースしてモンスターをセツトします」

お、上手い。確かにセツトなら可能だな。とはいえ、半端な守備力のモンスターなら下級モンスターにも勝てないが。

「ターン終了します」

「さだめのターン、ドロー！ さだめは手札から魔法カード『デビルズ・サンクチュアリ』を発動！『メタルデビル・トークン』を一体特殊召喚するよ！」

「ん？ もしかしてさだめ、それ普通に悪魔デッキなのか？」

「ううん。でもいつものダークとは違うんだけどね」

とはいえ、これでさだめのフィールドにも上級を召喚するチャンスが出来た。『デビルズ・サンクチュアリ』ならモンスターの召喚を阻害しない。

「さだめは『メタルデビル・トークン』をリリースして『バイサー・シヨック』を攻撃表示で召喚！」

『バイサー・シヨック』 ATK800

げっ……アイツまさか……。

「『バイサー・シヨック』のモンスター効果発動！ このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、フィールド上の全てのセツトされたカードを手札に戻す！」

「っ！」

凜のセツトした最上級モンスターが手札に戻される。これで凜のフィールドは空。

「バトルフェイズ！『バイサー・シヨック』でプレイヤーにダイレクトアタック！『処刑攻撃』！」

……その攻撃名はなんとかならんのか。

「え？ うひあつ！？ きゃあああああつ！？」

ガシャンガシャンと自分の体が拘束されていく様に凜のクールフェイズが一瞬崩れる。っていうか……。

「うわ、ちょ！ さだめ、待て！ 流石に絵面的にまずい！」

闇のゲームじゃないから実際にダメージがあるわけじゃあないんだろうが、それでもあれは酷い。少なくとも人様の……じゃない。売れっ子アイドルに対して行う攻撃方法じゃない！

「う……だ、大丈夫です。すこし、驚いただけですから」

凜LP3200

とりあえず問題なさそうで一安心。しかし、やはり絵的にどうかと……。

「くふっ……たーのしっ」

こらこら。

「そもそもなんでまたそんな拷問カードを……」

十中八九趣味なんだろうが。

「さだめはカードを一枚セットしてターンエンドだよ」

「私のターン、ドロー！……えと……『ゴ布林エリート部隊』を攻撃表示で召喚。バトルフェイズ」

『ゴ布林エリート部隊』 ATK2200

ふむ……。

「『ゴ布林エリート部隊』で『バイサー・ショック』を攻撃」

「トラップ発動！『和睦の使者』！このターンさだめのモンスターは戦闘によつては破壊されず、戦闘ダメージも無効になるよ！」

「……ターンエンドします」

「……ん？」

「え、どうしました？」

「いや『ゴ布林エリート部隊』の効果処理忘れてるよー」

「あ……すみません。『ゴ布林エリート部隊』を守備表示に変更し、ターンを終了します」

『ゴ布林エリート部隊』 DEF1500

「じゃあさだめのターンね。ドロー！……んー」

やっぱりなんかさだめのやつも調子悪そうだな。

「さだめは『終末の騎士』を攻撃表示で召喚！効果でデッキから『儀式魔人リリーサー』を墓地に送るよー！」

『終末の騎士』 ATK1400

儀式魔人！？　もしかしてあいつ……真中希望に渡されたってカードか！

「更に手札から儀式魔法『奈落との契約』発動！　墓地の『儀式魔人リリーサー』とフィールドの『バイサー・シヨック』をリリースして手札から『闇の支配者　ゾーク』を儀式召喚！」

『闇の支配者　ゾーク』 ATK2700

「墓地から儀式召喚！？」

「儀式魔人は墓地から儀式召喚のためのリリースとして除外することができない。更にリリーサーの特殊効果発動！　リリーサーを儀式の贄としてリリースした儀式モンスターがフィールド上に表側表示で存在している限り、貴女は特殊召喚を行うことができないよ！」

こいつのために『バイサー・シヨック』入れてたのか……。フェイバリットでもあるわけだしな……。

「効果発動するよ！」

『闇の支配者　ゾーク』の効果は強烈。凜のフィールドにモンスターが一体しかないこの状況なら……。

「さだめの勝率は六分の五！　さあ、ダイスロール！」

さだめは意気揚々とサイコロを転がす。

ゾークはダイスで一か二が出れば相手モンスターを全て破壊する『サンダー・ボルト』となり、三・四・五なら相手モンスター一体を破壊。そして……。

「……六。えー……」

六なら、自分フィールドのモンスターを全破壊。

orz　さだめ。どうもさだめばかり落ち込んでいる気がする。ひ、酷い不運……さだめの幸運ランクはEランクにちがいないよ……」

ともかく、これでさだめの場はゼロ。手札も一枚のみ。

「た、ターンエンド……」

「は、はい。私のターン。ドロー！」

流石にあちらさんも困惑している。まあもう「勝った！」とばかりに得意げな顔でサイコロ振って結果壮絶な自滅だしなあ……。

「私は『ゴ布林エリート部隊』をリリースして『偉大魔獣ガーセット』を攻撃表示でアドバンス召喚します」

『偉大魔獣ガーセット』 ATK4400

あー……『偉大魔獣ガーセット』はリリースしたモンスターの攻撃力を倍にした攻撃力を得る。デメリットアタッカー故の高い攻撃力を持つ『ゴ布林エリート部隊』はリリースとしては妥当な判断だ。

「『偉大魔獣ガーセット』でプレイヤーにダイレクトアタック！」

「うきやあ！？」

さだめLPO

……いや、負けんなよさだめ。

「うー負けたー」

「この流れで負けるか？ 普通」

「思い切り上から目線で始めといて壮絶な自爆。何と言っか……さだめ」

「お兄ちゃんがすっごい憐れむような眼をしてる!？」

「最後の自爆は……まあともかくとして」

「なかつたことにされた!？」

「お前にしては珍しいデッキ使ってたな」

「いや……ちょっと調子乗って未調整のデッキ使ってみたら……」

おいおい……。

「お前、それは失礼だろ……」

「あっちだっておんなじようなもんだし、良いじゃん別に」

「え……」

「そりゃそうだが、それでも手加減するのは違うだろ。マジメにや

れ

「あの……」

「いや、真面目にやってはいるよ。っていうか、ミスしたり効果把握してなかったりする割に引きはいいんだよねえ……」

「その……」

「おい馬鹿兄妹。対戦相手が困惑してるぞ。反応してやれ」

おっと。そうだった。

「どうした。凜」

「いえ……何故その……私が本気ではない、と？」

ん？ そんなことか？

「あれだけプレイミスしてればな。プレイングに難あり……っていうかそもそもその悪魔デッキを使い慣れてないとか思えないミスだったし」

「それにさつきデュエル始める時、もう一つのデッキに触ってたでしょ？ あつちがホントのメインデッキなんじゃない？」

メディアでは悪魔を使ってるって話だったから、リアルではむしろ殆ど使わないのだろう。というか……。

「悪魔族嫌いでしょ。水原さん」

身も蓋もないさだめの言葉に一瞬息を詰まらせた凜だったが、やがてポツポツと語り始めた。

「嫌い……というか、苦手……でしょうか」

聞けば、この悪魔族デッキは事務所から渡されて渋々使っているだけだそう。本来の凜は別のデッキを使うのだという話だ。

「なるほど……キャラ作りって奴か」

「胸糞悪いな……まあそういうもんなんだろうが……」

「ちなみにメインデッキの方はどんなデッキを使っているんだ？」

俺が尋ねると、凜はこれです、と自分のもう一つのデッキケースからデッキを取り出した。

「私は水属性デッキを主に使用しています。あの……」

「ん？ なんだ？」

「……いえ、なんでもありません。それではこの辺で失礼させていただきます。御指導、ありがとうございました」

「負けたけどな」

「お兄ちゃん……もう言わないで」

相変わらず打たれ弱い……。

最後にちらりと剣士の方を一瞥し、凜はさっさと教室へと戻って行った。どうも剣士が気になるようだった。

「で、お前の使ってたデッキなんだが……」

「うん。悪魔族の儀式モンスター中心のデッキだよ。採用してるのはゾークと『終焉の王デミス』『破滅の魔王ガーランドルフ』『サクリファイス』の四種類。ルインと一緒に組んでただけ……さだめ、儀式モンスターデッキなんて組んだことなかったからどうも勝手がわからなくて」

んー……そうだな。

「まず、四種類は多すぎるんじゃないか？ 儀式はただでさえコストパフォーマンスが悪いし事故率も高いんだ。二種類くらいにしておいた方がいい」

「デミスゾークみたいにすればいいかな？」

「そうだな。だが敢えてその二体を使わずに『儀式の準備』を採用するのもありだと思う」

「うーん……やっぱりそういうのはお兄ちゃんの方が上手いね。後で手伝って」

「了解した。……で、剣士はどうした？ なんかまた浮かない顔してるけど」

「……大したことじゃねえよ。ただ、どーもどっかで見たことある気がするんだよな。水原のこと」

「テレビじゃなくてか？」

凜はアイドルなのだからそういうことがあってもおかしくはないだろう。尤も、向こうも剣士に興味を示していたようだからどちらかというと……。

「いや、もつと昔だ。多分な」

「……典型的なラブコメ展開の序章が始まったよお兄ちゃん」

「当人が居る前で堂々とそういう発言できるお前の感性の鈍さには感動すら覚えるわ」

当然褒めちゃいないが。

「なら、今度あった時にでも聞いてみるんだな。向こうも意味あり気にお前のこと見てたし、何かあるかもしれない」

「……いや、別に良い。んな安っぽいナンパ染みたことできるか」

まあ確かに『キミとオレ、いつかどっかで会ったことない?』とか聞くのは安いな。古いな。陳腐だな。

「別にナンパってわけじゃないんだから気にしなくてもいいだろうに」

それに、真中希望の言葉を信じるならば、あの水原凜もイレギュラーの可能性が高い。当然剣士もだ。ならその二人に関わりができるのは今後の展開に於けるメリットになるはずだ。

「ま、そんなものなくても純粹に友達を増やそうぜって感じでいいだろう」

「……オレがそんな社交的なキャラに見えるか?」

「甘いな。生せば生る。成さねば生らぬ。何事も。生らぬは人の生さぬ生りけり、だ。お前だって、友達が増えて困ることはないだろう?」

「そりゃそうだけだよ……」

「黙ってるだけでは何もならんぞ。アテナは特殊だ。特に何にもしなくても友達になってくれたアテナはな」

……今思えば、俺も特に何かしたわけじゃないのにアテナに告白されてるんだよな。アテナは基本的に唐突。しかも行動力あり過ぎ。

「……はあ。わあったよ。その内適当な時にでも聞いてみる。それでいいだろ?」

「お前がいいなら、いいんだろ?」

「……くっそ、いつかお前に口で勝ってやる」

「いつでも来い」

ただし、俺は強いぞ。何度さだめの襲撃を口八丁で潜りぬけてきたことか。こちらら命と貞操かかってますから。

ちっ！ と一ツ舌打ちして去っていく剣士を見て、もうちょい口調とか柔らかくするだけで大分違うだろうになあ、と思う。

「……あの二人、どうなるかな？」

少しワクワクしたような表情で聞いてくるさだめ。なんだかんだで、自分に関わりのない恋愛話なら、普通の女子と同じように興味津々なんだな。

「さあな。けど、どうも面白いことにはなりそうだ」

「根拠は？」

「ベッタベタなラブコメ展開だって、お前が言っただろ？」

「でも、現実だしさ」

「……そうなんだがな。気に食わないことに、真中希望の言うイレギュラーって奴がある。その繋がりを考えると、色々と仕組みられているような気がする」

「アテナのこと？」

「だけじゃない。ルインの過去にも関わりのある謎の男。極自然な流れでアテナと交友を持った剣士。その剣士と繋がりのありそうな新人生……笑えない繋がりだろう？」

「……そうだね。お兄ちゃんとルイン、二人の花嫁疑惑といい、出来過ぎな感はあるね」

「一度、剣士や凜に真中希望のことについて聞いてみた方が良さそう。そこでも何か繋がりがあれば、もう間違いないだろ」

まるでパズルだ。或いは、よく出来たチェスの盤面か。意図的に整えられたような、気味の悪い機能美すら感じる。

「相変わらず、お兄ちゃんは頭が回るね。さだめには無理」

「そんなこたない。お前は俺にはっかかり意識が向き過ぎているから周りに目がいかないだけだ。お前は俺以上に凄いや」

「お兄ちゃん以外に目を向ける気がないさだめには、何の意味もな

いけどね」

まったくコイツは……。

「さて、とりあえずお前のデツキ構築をしようか。部屋でいいだろうっ？」

「もちろん！ あ、それとルインも一緒にお願ひお兄ちゃん。ルインも、さだめと一緒に儀式魔人をデツキに組み込んでいる筈だからさだめのその提案に、俺は思わず目を丸くした。

「珍しいな。お前が俺と二人きりになれる機会を自ら逃すなんて」

「う……それを言われるとすっごく勿体なく感じるけど……さだめだって、デツキ構築くらいは真面目にやるもん」

「そっか。それならいい。大歓迎だ」

「……それもなんか釈然としない」

「お前と二人きりを心から歓迎するには、俺はまだ人生経験が足りないからな」

尤も、自惚れかもしれないが、さだめへの耐性で言えば俺に匹敵する人生経験持ちは早々いないだろうが。

その後も、何かと纏わりついてくるさだめをいつものように躲しつつ、俺たちはレッド寮まで戻るのがだった。

『ぐ……馬鹿な……』

パーフェクト。『終焉の精霊』はまともにカードをプレイすることもできずにそのライフを散らした。

「私の勝ちです。消えてください。欠片」

『おのれ……だが我らをいくら消そうとも、我ら終焉に終わりはない……』

「ならば永遠に、無限に砕き続けるのみです」

『ぐ、おおおおおっ！』

『終焉の精霊』はその体を周囲の闇に溶け込ませるように崩れて消えてしまう。私はそれを確認し、ずっと張りつめていた気を緩ませ、一息吐いた。

「これで、五体目……」

『終焉の精霊』が言ったように、いくら砕いたところで終わりはない。だが、欠片を砕き続けていればいつか必ず本体に辿りつく。いや、辿り着いて見せる。

「……それも偏に、セツへの愛のために……かな？」

「っ！ 誰！？」

「僕だ。真中希望だ」

振り向けば、確かにそこに悠然と立っていたのは真中希望その人。

「……終焉を滅ぼすのに理由なんて必要ありません。まして、愛なんて……」

私はセツを置いて、捨てて、逃げ出しました。そんな私が、どうして愛など語れましょう。どうしてあの手を握れましょう。かつて私が振られた時など比べ物にならない。散々好きだ、愛してると言っておいて。いつまでも傍に居たいと、離さないで欲しいと言っておきながら、あっさりと逃げ出して、裏切りを成したこの口、この手で！

「そうだね。理由なんていらぬ。けど、キミは持っているみたいだからさ。終焉を滅ぼす理由。その使命を果たす源を」

「……私はただ、セツに幸せになって欲しいだけ。悪意と侮蔑、拒絶から逃れ、“この世界”での幸せを全うしてほしいだけ」

「愛だよ。それは。見返りを求めず、ただ献身的に、健気に相手に尽くす。それが愛じゃなくてなんだという？」

「だとしても。今私が抱いているのが愛だとしても、私にはもう資格がありません」

私はもう舞台を降りた。裏切って、逃げ出して、背を向けました。

「愛することに資格を求めようとしても？ 人の感情をそんなもので支配できるものか」

「黙ってください」

「ああ、確かに僕の言葉は君には届かない。いつだって囚われたお姫様を救うのは勇者の役目だ。所詮僕は要所要所で現れては意味深な助言を残して消えていく端役に過ぎない」

「私が何に囚われていると？」

「囚われているじゃないか。凝り固まった罪悪感という名の檻に。自らに対する疑心と嫌悪の鎖に縛られて」

「……………」

「尤も、その盤面を整え、君を鎖に縛り付けた僕が偉そうな口を利くものではないね」

「……………それでよく、端役などと言えたものですね。黒幕の間違いではないんですか？」

「僕は一介の演出家。物語のエンディングにて滅ぼされる黒幕は他に居る。そうだろうか？」

「その黒幕すら、貴方の敷いた盤面の駒、と？」

「買い被り過ぎだね。どうしても僕を悪役に仕立て上げたくてたまらないらしい。やはり、憎んでいるのかな？ この僕を」

「憎んでいないとでも？」

セツの元から去らなければならなくなった、その切欠。私が憎まないわけがありません。

「やはり、愛だね。結局君の行動理由は、セツへの愛だ。今ので確かめられたよ」

「っ……………」

ギリツ、と齒を噛みしめる。

「だけど、そうだね。それで君たちの物語がハッピーエンドになるのなら、僕はいずれ、君たちの前に立ち塞がり、全ての黒幕、悪役を全うして斃れるでしょう」

なんて献身的だろうか、そう言いたげな彼を冷ややかに見つめま

す。

「気に食わない、と。まあそうだろうね。そんな僕の筋書き通りの結末が、君たちのハッピーエンドになる筈もない」

「なら、最初から言わないでください」

「でも、いずれ君たちの誰かが、僕を倒すことだろう。それもまた、殆ど確定した未来だ」

「……敵に回る、と？」

「乗り越えるべき壁として。そもそも、アテナも含めて皆僕には敵愾心を持っているのだから、いずれぶつかるだろうさ」

「そうでしょうね。その時は精々、セツにこっぴどくやられてしまつてください」

「その時が来たらね。何しろ、この整えられた^{フィールド}盤面の中、僕が一番の異端なんだ。バトルフェイズに、相手モンスターにデュエリストが殴りかかっているようなものだからね」

「……余計なお話はその辺りでいいでしょう。私は、そんな話よりも、貴方に聞きたいことがあるんです」

「ふむ。何かな？」

私の無理矢理な話題転換に、何の疑問も執着も見せずに乗ってくる真中希望。

「終焉の本体の居場所。貴方なら知っている筈です。話してください。今ここで、知っていることを全部。洗いざらいです」

私の問いに、真中希望は薄く笑みを浮かべるだけでした。

「物事には順序がある。優先順位がある。知らなくてもいいことがある。全てを知るといふことは即ち……」

「余計な説法は結構です」

「……やれやれ、忙しいね」

私は無言でデュエルディスクを構える。口を割らせるにはやつぱりこれが一番です。

「デュエルか。いいよ。それがこの世界の抗えぬ律法であるのだしね。ただし、僕は強いよ？ 恐らく、君たちが考えるよりもずっと、

ね

「御託はもう結構です」

「しょうがないな。それじゃあ、少しだけ頑張るとしようか」

真中希望も、あくまでゆったりとデュエルディスクを構える。：

…その面差しに、何故か一瞬、いつか私が憧れた、セツの横顔がよぎった。

「デュエル」

間話「水姫と武士 前編」(前書き)

すっかりアップするのを忘れていた間話です。いや申し訳ない。まあ変更点と言えば精霊が減ったくらいのもんですが。ここは、多
少さびしくなって残念かもです。

間話「水姫と武士 前編」

アルカナく切り札の騎士く

間話「水姫と武士 前編」

オレはセツたちと別れ、購買にでも行くかとアカデミアへ向かっていた。

「あん？」

視線の先には、さつき別れた水原の姿。なんだか知らねえが、ブルーの新生らしき男子生徒二人に話しかけられてやがる。

どうにもきな臭え。ふと、脳裏にセツの言葉が蘇る。

『生せば生る。成さねば生らぬ。何事も。生らぬは人の生さぬ生りけり、だ。お前だって、友達が増えて困ることはないだろう？』

「……下らねえ」

『だが、放っておくつもりもないのだろう？』

「だあってろ」

ニヤリ、とオヤジ臭い笑みを浮かべながら問いかけてきたネイキッドを黙らせる。

『お、オヤジ臭いっ!?!?』

何故か凹んだネイキッドを一端無視して、オレは水原に声をかけた。

「おい」

「あ……戦野、先輩」

「あにやってんだ？ こんなところで。教室に戻ったんじゃないのか

「？」

「いえ、それが……」

「なんだ？ オシリスレッドがリンちゃんになんのようだ！」

「お呼びじゃないんですよ。さっさと帰ってくださいませんかねえ」
……うぜえ。

その気持ちを込めて睨みつけてやると、新入生二人はヒツ！？

とか言つて及び腰になったが、それでもギリギリ強気な顔を崩さずに踏みとどまりやがった。エリート在意地、とかいう奴か。下らねえ。

『まったく。エリートだの何だのと言っている奴に限って根性のないのが相場だかな』

まったくだ。苦勞の一つも知らねえお坊ちゃんエリートなんぞ下らねえだけだ。

「あ……精霊……」

「ん？」

こいつ……見えてんのか？

「こらッ！ 俺たちを無視するな！」

「どうやら先輩のようですが……所詮はオシリスレッドのドロップアウトのようですねえ」

「……で、水原。コイツら、なんだ？」

「それが……」

「もーいい。大体わかった」

それが……、なんつー冒頭の時点でロクでもねえことはわかる。どーせ言い寄ってたんだろつが。

「この……リンちゃん言葉を遮るとはなんて無礼な奴！」

「ドロップアウトは礼儀まで知らないようですねえ」

「年上に対する礼儀も知らねえ teme いらに言われたかねえよ」

そろそろあいつらの堪忍袋の緒は限界か。経験上なんとなくわかる。

「くっ……こうなったら、俺とデュエルしろ！」

「貴方に任せては置けませんねえ。ここはボクが……」
俺がボクがと言い争う雑魚二人。

「めんどくせえ。二人まとめてかかって来い」
どうせどちらから挑んできても返り討ちにして二戦やらかすのは目に見えてる。なら纏めてブツ潰した方が早い。

「このっ……貴様！ 後悔させてやる！」
「ドロップアウトの分際で、エリートたるボクらに刃向かったことをねえ！」

……キレたな。安い挑発に乗りやがって。馬鹿が。

「あ、あの……先輩」

「あんたは引っ込んでろ。心配すんな。ぶちのめす」

止めようとしているらしい水原を遮って、オレはデュエルディスクを構える。

「……デュエル!!」

「俺のターン！ ドロー！ 俺は『馬頭鬼』を攻撃表示で召喚！」
……アンデットか。そこそこにウザいデッキだ。らしいっちゃらしいが。

「カードをセットしてターンエンドだ！」

「オレのターンだ。ドロー！」

手札を見る。片方の相手はアンデット。倒しても倒しても蘇生してくる往生際の悪いデッキ。もう片方は知らねえが、性格的に厭らしいデッキだろう。口調からして気色悪い。

「オレは手札から魔法カード『増援』を発動！ デッキから『切り込み隊長』を手札に加え、その『切り込み隊長』を攻撃表示で召喚！ 効果発動！ 手札から『コマンド・ナイト』を攻撃表示で召喚！」

『切り込み隊長』 ATK1200 1600

『コマンド・ナイト』 ATK1200 1600

『切り込み隊長』と『コマンド・ナイト』自身の攻撃力が上昇する。

「更に手札から永続魔法『連合軍』を発動！ ターンエンドだ」

『切り込み隊長』 ATK1600 2000

『コマンド・ナイト』 ATK1600 2000

永続魔法の効果が発動し、二体の戦士族の攻撃力が更に上昇する。このデュエルは変則タッグ。一ターン目は全員攻撃できないルール。ターンの回る順はアホA オレ アホB オレ、となる。

「ボクのターン、ドロ。ボクはモンスターを一体セット。カードを二枚セットしてターンエンドですねえ」

「……どうでもいいが、コイツの口調気色悪い。」

「オレのターン、ドロ！」

あくまでタッグの相方扱いなので、このターンにもオレは攻撃できねえ。もどかしい。

「オレは『翻弄するエルフの剣士』を攻撃表示で召喚。ターンエンドだ」

『翻弄するエルフの剣士』 ATK1400 2400

『切り込み隊長』 ATK2000 2200

『コマンド・ナイト』 ATK2000 2200

『翻弄するエルフの剣士』は攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破壊されねえ。攻撃力が上がっている今なら、戦闘で破壊されることはねえ！

「よし、俺のターン、ドロ！ 俺は『邪神機 獄炎』を攻撃表示で妥協召喚！ コイツは生贄なしで召喚できるんだ！ 驚いたかドロップアウト！」

『邪神機 獄炎』 ATK2400

知ってるよ。っーか。

「今はリリースっーんだ。生贄じゃねえよ。エリート」
「ぐ……」

顔を真っ赤にしてオレを睨むアホA。

「この……！ バトルフェイズ！ 俺は『邪神機 獄炎』で『切り込み隊長』を攻撃！ ダークネス・フレイム！」

「ちっ！」

剣士LP3800

『コマンド・ナイト』 ATK2200 2000

『翻弄するエルフの剣士』 ATK2400 2200

場の戦士族が減ったことで、他の戦士族の攻撃力も下がってしまった。

「俺は『馬頭鬼』を守備表示に変更！ エンドフェイズに妥協召喚した『邪神機 獄炎』は自壊するが、フィールドに他のアンデット族モンスターがいる場合、自壊しないぜ！ ターンエンドだ！」

「オレのターン、ドロー！ オレは墓地の『増援』をゲームから除外して『マジック・ストライカー』を攻撃表示で特殊召喚！」

『マジック・ストライカー』 ATK600 1600

『コマンド・ナイト』 ATK2000 2200

『翻弄するエルフの剣士』 ATK2200 2400

「ハッ！ そんな雑魚モンスターで何ができる！」

「その雑魚モンスターに、今からテメエはやられるんだよ！」

「なんだと!？」

「オレは『アーマー・ブレイカー』を攻撃表示で召喚！『マジック・ストライカー』にユニオンする！」

『マジック・ストライカー』の頭上に巨大なハンマーが浮かぶ。

「バトルフェイズ！『マジック・ストライカー』はプレイヤーに直接攻撃ができる！『ストライク・バツク』！」

「ぐああっ!？」

アホA LP2400

「ユニオンされた『アーマー・ブレイカー』の効果を発動する！装備モンスターが相手ライフにダメージを与えた場合、相手フィールド上のカードを一枚破壊する！」

オレが選択するのは……。

「お前の伏せカードだ！」

「なにに!？」

リバースカードは『ツタン仮面』。……なるほど。オレが『アー
マー・ブレイカー』で獄炎を破壊しようとしていたら引つかかって
たってことか。

「残念だったな。オレは『翻弄するエルフの剣士』で『邪神機 獄
炎』を攻撃！」

『邪神機 獄炎』が、闇を吐き出して攻撃してくるが、エルフの
剣士は素早いステップでその攻撃を躲しながら獄炎に接近していく。
一気に至近まで近づいたエルフの剣士の長剣が獄炎を連続斬りで討
ち取った。

「ぐっ……」

攻撃力が変わんねえから戦闘ダメージは発生しねえが、エルフの
剣士は攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘じゃ破壊されねえ。
「続け！『コマンド・ナイト』で『馬頭鬼』を攻撃！『ブレイズ・
ソード』！」

『コマンド・ナイト』の剣が炎に包まれ、馬面のゾンビを焼き切
る。

「……とにかく、オレはターンエンドだ」

「やれやれ。ブルーともあろうものが、不甲斐ないですねえ」

「なににい!？」

「ボクがエリートタクティクスというものを見せてあげますねえ。
ドロー！」

……間違いねえ。あいつら、チームワークはボロボロだ。

「ではメインフェイズにセットされた『ワーム・カルタロス』を反
転召喚しますねえ。『ワーム・カルタロス』のリバース効果でデッ
キから『ワーム・ゼクス』を手札に加えますねえ」

『ワーム・カルタロス』 ATK1200

……ワームかよ。口調通り、気持ち悪いデツキを使う奴だぜ。

「そしてリバースカード『毒蛇の供物』を発動しますねえ。フィー
ルドの『ワーム・カルタロス』をリリースして貴方のリバースカー
ドと『コマンド・ナイト』を破壊しますねえ！」

「ちっ！」

『翻弄するエルフの剣士』 ATK1800

『マジック・ストライカー』 ATK1000

アホBの癖に味な真似を……！！

「更にボクは『ワーム・ゼクス』を攻撃表示で召喚しますねえ。効果でデッキから『ワーム・ヤガン』を墓地に送りますねえ……そして墓地の『ワーム・ヤガン』の効果が発動しますねえ」

くそ、結構ヤベえな……。『ワーム・ヤガン』はフィールドに『ワーム・ゼクス』しか存在しない場合、裏守備表示で特殊召喚される……。

「墓地から『ワーム・ヤガン』を裏守備表示でセット。リバーサイド『太陽の書』を発動しますねえ」

……。ち。結構やりやがる。

「リバーズされた『ワーム・ヤガン』の効果が発動しますねえ。貴方の『翻弄するエルフの剣士』を手札に戻しますねえ」

『マジック・ストライカー』 ATK1000 800

これでオレの場には『アーマー・ブレイカー』を装備した『マジック・ストライカー』が一体。その攻撃力はたった800。『ワーム・ヤガン』にすら戦闘破壊を喰らうレベル。

「バトル。『ワーム・ヤガン』で『マジック・ストライカー』を攻撃！」

「『マジック・ストライカー』は戦闘によるダメージを受けねえ！そして戦闘破壊される時『アーマー・ブレイカー』を身代わりにする！」

「では『ワーム・ゼクス』で『マジック・ストライカー』を攻撃ですねえ」

「……戦闘ダメージは発生しねえ」

「しぶといですねえ。ターンエンドですねえ」

くそ、このねえねえ野郎。あの馬鹿っぽいのと比べりゃまだ賢い。「オレのターン、ドロー！ オレは手札から『強欲な壺』を発動！」

デッキからカードを二枚ドロー！……行くぜ！ フィールド魔法『侍の戦場』！」

フィールドが戦国時代の戦場に変化する。

「オレは『鉄の騎士 ギア・フリード』を召喚！ 来いよフリード！」

『鉄の騎士 ギア・フリード』 ATK1800 2500

フィールドに、ネイキッドが拘束としての鎧を纏って現れる。

『我、参上！』

アホな登場やってんな。だからギャグキャラ扱い喰らうんだよ。

「バトル！ 『鉄の騎士 ギア・フリード』で、ガラ空きのテーマを終わらせる！」

『むん！ 獅子、戦吼！』

遊ぶなアホ。

「ひっ！？ お、おい助けろ！」

「……仕方ありませんねえ……リバースカード発動『和睦の使者』。戦闘ダメージは無効化しますねえ」

「ちっ……ターンエンドだ」

「ほっ……お、俺のターン、ドロー！」

アホの目が喜色に染まる。

「よし！ 俺は墓地の『馬頭鬼』の効果を発動！ 墓地から『邪神機 獄炎』を特殊召喚！ 俺は獄炎を生贄に『龍骨鬼』をアドバンス召喚！」

……おい、まさかコイツ。

「行くぜ！ 『龍骨鬼』で『鉄の騎士 ギア・フリード』に攻撃！」

「……ま、迎え討てや」

『獅吼旋破！』

だから……。

『あのようなアホ、遊びでも入れぬとやっていられんわ』
「気持ちはわかるけどな……。」

「くう！」

アホA LP2300

「……何がしたいんだテメエは」

「ハッ！ やっぱり所詮はドロップアウトだな！ 特別に教えてやる！ この『龍骨鬼』は、戦士族と魔法使い族を相手に戦闘した場合、問答無用で破壊す……る？」

オレのフィールドには、普通に生き残っているフリード。

「な、なんで……」

「『侍の戦場』のもう一つの効果だ。戦士族モンスターは、戦闘以外では破壊されねえ」

「そ、そんなっ!？」

……付き合いきれねえアホだな。

「何をやってるんですかねえ」

「くっ……う、煩い！ 知らなかったんだから仕方ないだろ！」

「戦場で、知らなかったから負けました、なんつうのは最低の言い訳だ。覚えとけエリート（笑）」

「この……俺は『生者の書 禁断の呪術』を発動！ お前の墓地の『コマンド・ナイト』をゲームから除外して、『龍骨鬼』を守備表示で蘇生。ターンエンド！」

「オレのターン、ドロロー！ オレは手札から魔法カード『拘束解除』を発動！ 『鉄の騎士 ギア・フリード』の拘束を解き放つ！ 『剣聖 ネイキッド・ギア・フリード』！」

『剣聖 ネイキッド・ギア・フリード』 ATK2600 3300

『はあっ！ 今こそ真の力を見せてくれる！』

「更に『翻弄するエルフの剣士』を召喚！」

『翻弄するエルフの剣士』 ATK1400 2000

『剣聖 ネイキッド・ギア・フリード』 ATK3500

「オレは装備魔法『与奪の首飾り』をネイキッドに装備！ ネイキッドの効果発動！ コイツに装備カードが装備された時、フィールド上のモンスター一体を破壊する！ オレが選択するのは『ワーム・ゼクス』！」

「!?!」

まさか自分が狙われるとは思っていなかったらしいアホBが驚く。
『はああっ! 魔神剣!』

ネイキッドの放った剣圧が『ワーム・ゼクス』を吹き飛ばす。は
っ! ザマミロ。

「ま、待って……普通はあっちを狙う筈じゃあ……」

「テメエを先に潰しておくのが賢明だと判断したんでな。あばよ。

『翻弄するエルフの剣士』で『ワーム・ヤガン』を攻撃!」

「ひぎいいっ!?!」

アホB LP2700

「さよならだ! 『剣聖 ネイキッド・ギア・フリード』のダイレク
トアタック!」

『さあ、これにて終いだ! これぞ剣劇! 殺劇舞荒剣!』

「ぐぎゃあああああっ!?!」

アホB LPO

「っし、一匹終わり! ターンエンドだ!」

「へへ……なんだよ。偉そうなこと言っというて、結局自分が先にや
られてんじゃねえか」

「ぐっ……そもそも貴方を助けたりしなればですなえ……!」

「いいからさっさと続けるよ」

「くっ……ドロー! ……カードを一枚セットしてターンエンド」

「オレのターン、ドロー! ……終わりだな。『翻弄するエルフの剣
士』で『龍骨鬼』を攻撃!」

「う……トラップカード『聖なるバリア ミラーフォース』」

「無駄だ。『侍の戦場』の前では、そんなバリア屁でもねえ」

当然『侍の戦場』で『龍骨鬼』の効果も不発。

「終わりだ……! 『剣聖 ネイキッド・ギア・フリード』でプレイ
ヤーにダイレクトアタック!」

『覚悟は出来たか? ワールド……!』

「待てネイキッド。流石にそいつは許可できねえ」

とりあえず撃破。

「ぎゃあああっ!?!」

アホA LPO

少々苦戦はしたが、ダメージの方は最小限。まずまずってところだな。

オレはガツクリと膝をついてしまっているアホ二人に目を向ける。
「これに懲りたら、マナー守ってナンパしやがれ」

間話「水姫と武士 後編」

アルカナく切り札の騎士く

間話「水姫と武士 後編」

困った。

何がつて、さつき先輩たちと別れて教室に戻ろうとしたら、見知らぬブルー男子に話しかけられたから。

「だ、だからさ！ この後、時間が余ってた俺たちと……」
「いえ、心配することはありませんねえ。少しお茶でもどうですかというだけですからねえ」

……なんだろう。私は曲がりなりにも有名人だし、声をかけられること自体は予測していた。けど、なんだかさつきから特殊な人種にばかり絡まれているような……。

「類は友を呼ぶ、でしょう？ 諦めることね」

そうして戸惑っている私を精霊の『水霊使いエリア』が皮肉つてくる。……その私と一緒にいるあんたはどうなんだと小一時間ほど問い詰めた。

『……それと、新手もいるみたいよ』

エリアがそう言うと同時に、何故か不機嫌そうな声が聞こえてきた。

「おい」

「あ……戦野、先輩」

声をかけてきたのは先ほどまで一緒に居た戦野先輩だった。……

なんたる。さつきから、戦野先輩を見る度に何処か懐かしいという
か……どこかであった気がしてくる。

「あにやってんだ？ こんなところで。教室に戻ったんじゃないのか
？」

「それが……」

私が事情を説明する前に、戦野先輩はブルー男子の人と争いを起
こしてしまう。

「あ……精霊」

改めて見れば、戦野先輩の隣に精霊が居る。戦野先輩も認識して
いるみたいだ。

「……水原。コイツら、なんだ？」

「それが……」

「もーいい。大体わかった」

すつぱりと私の話を打ち切って、ブルーの二人と対峙する戦野先
輩。

「あ、あの……先輩」

「あなたは引っ込んで。心配すんな。ぶちのめす」

その言葉通り、戦野先輩は殆どライフを減らすこともなくあつさ
りとブルーの二人をやっつけてしまった。

「これに懲りたら、マナー守ってナンパしやがれ」

正直、マナーを守ったとしてもナンパは遠慮してほしいけど。

「……大丈夫か」

「は、はい……」

逃げ去っていった男子と、私を見下ろしてくる先輩の鋭利な目つ
きで、私は確信した。この人は、昔私を助けてくれた人だと。

小学校の頃だった。放課後、ちょっとだけ寄り道してジュースを
買い、公園で一人夕陽を眺めていた。……たかが小学生のとする行動

ではなかった気がするけど、当時友達も一杯いて、たまたま全員に用事があったから空いた時間の使い方を知らなかったんだと思う。

そこで、大分くたびれたサラリーマン風のおじさんに襲われそうになった所を助けてくれた目つきの悪い男子。明らかに身体の大きな大人相手に一步も引かず、拳叩き返してしまった男の子。

「……つたく、ロクでもねえ奴がいるもんだな」

「……」

恐怖で何も言えずに固まっていた私を一瞥したその男の子は、ややあつて口を開いた。

「……大丈夫かよ」

その、こちらを見下ろす鋭利で、でもどこか寂しさを湛えた目が印象的だった。

「あ……う……ん」

ただ小さくなつて震えていた私は、そんな意味のあるかどうかわからないような呻きしか口に出せなかった。

口下手なのか、しばらく何を言えればいいかわからないといった感じでそっぽ向いていた男の子は、「無事なら、いい。気をつけて帰れ」とだけ言ってさっさと帰って行ってしまった。

「あ……」

名前も聞けなかったその男の子を、当時ただの小学生だった私が見つけることは出来なかった。……思えば、あれが芸能界に入ったきっかけだったのかもしれない。男の子を見つけることができなかったから、代わりに貴方が私を見つけて。なんて。

「……夢見過ぎ（笑）」

「……エリアは黙ってて」

冷やかに鼻で笑うエリアにちよつと抗議。少しぐらい感傷に浸ってもいいじゃないか。

「おい？」

「あ、その……助けてくれてどうもありがとうございました」

「……おう」

ぶっきらぼうな返事。愛想がないのは変わらないらしい。

「あの！」

「つな、なんだ？」

しまった、少し大きな声を出し過ぎた。

「え、ええっと……」

う、そもそも呼びとめて何を話そうというのか。どうやら先輩も

私のことを覚えてはいないようだし。

ああ、どうしよう。えと、えと……こ、困った時は……。

「デュ、デュエルしませんか!？」

「……は？」

困惑させてしまった。そりゃそうだ。

「ああつと、その、助けてもらったお礼にですね、先ほどはお見せできなかった私のメインデッキをご覧いただければと!」

支離滅裂だが、まあいい。とにかく、会話を引き延ばす。

「いや、別にんなこと頼んじやいねえんだが……」

まったくもってその通り。

「……まあ、オレも一応デュエリストだし、挑まれたら受けねえわけにもいかないんだが……」

「じゃ、じゃあいんですね!？　いってことにしましょう!」

デュエル!」

勢いで押し切る!

「お、おう。デュエル」

よし。デュエルには持ちこめた。

『猫、剥がれてきてるわよ』

もうそんなのどうでもいい!

「私のターン、ドロー!」

しまった。勢いで先攻までもぎ取ってしまった。気を悪くしてな

ければいいけど。

「モンスターを一枚セット、カードを一枚セットしてターンエンド！」

「……何が何だか。まあいい。オレのターン、ドロー！ オレは『鉄の騎士 ギア・フリード』を攻撃表示で召喚！ フィールド魔法『侍の戦場』を発動！ バトルだ！」

『鉄の騎士 ギア・フリード』 ATK1800 2300

っ！ いきなり『侍の戦場』！ 攻撃力2300は止められない！ 私の守備モンスターである『海神の巫女』が斬り裂かれ、墓地に送られる。

「ターンエンドだ！」

「私のターン、ドロー！」

『侍の戦場』は優秀なフィールド魔法。でも、フィールド魔法ならではの弱点がある！

「私は手札から『アトランティスの戦士』の効果を使います！ デッキから『伝説の都アトランティス』を手札に加えます！」

「……ちっ！ アトランティスか！」

「フィールド魔法『伝説の都アトランティス』を上書き発動！」

戦場が海の底に沈み、私の背後には海中神殿。失われた都が映し出される。

「アトランティスがある限り、私のフィールドと手札の水属性モンスターレベルは一つ減ります。私は『ギガガガゴ』を攻撃表示で召喚！」

『ギガガガゴ』 ATK2450 2650

アトランティスの影響下ではリリースなしで通常召喚可能な最大攻撃力2650を誇るモンスター。これなら！

「バトル！ 『ギガガガゴ』で『鉄の騎士 ギア・フリード』を攻撃します！」

「ぐっ！」

剣士LP3150

「ターンエンドです！」

「やるな……オレのターン、ドロー！」

『ギガガガゴ』の攻撃力はそう簡単には超えられないはず。どう凌いでくる？

「オレは『翻弄するエルフの剣士』を守備表示で召喚。カードを一枚セツト。ターンエンドだ」

『翻弄するエルフの剣士』 DEF 1200

なるほど。やっぱりそう来るんだ。攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘で破壊されないエルフ。でも！

「甘いです！ 私のターン、ドロー！ 私は『マーメイド・ナイト』を攻撃表示で召喚！『マーメイド・ナイト』で『翻弄するエルフの剣士』を攻撃します！」

『マーメイド・ナイト』 ATK 1500 1700

『マーメイド・ナイト』の攻撃力はアトランティスの影響下で1700。それに……。

「連続攻撃能力……！」

そう。『マーメイド・ナイト』はフィールドが『海』なら二回攻撃することのできるモンスター。アトランティスは『海』として扱うから、この場合も二回攻撃できる！

「だが、迂闊だぞ。トラップカード『聖なるバリア ミラーフォー』」

攻撃反応型！？ さっきのデュエルじゃあ使わなかったからてつきり罠の入っていないデッキかと……。

「それでも！ チェーンして『水霊術 葵』を発動します！『マーメイド・ナイト』をリリースして先輩の手札を確認させて貰います」

先輩の手札は『コマンド・ナイト』『マジック・ストライカー』『拘束解除』の三枚。

「私は『マジック・ストライカー』を選択します」

「……わかった」

簡単に特殊召喚が出来る上、直接攻撃能力とダメージを防ぐ能力を持っている『マジック・ストライカー』は邪魔。さっさと叩き落とせてよかった。

「ターンエンド」

「オレのターン、ドロー！」

ただし、私のフィールドもガラ空き。ダメージだけを見るなら『コマンド・ナイト』のパワーアップは驚異的。

「オレは魔法カード『強欲な壺』を発動！ デッキからカードを二枚ドローする！」

手札増強…… タイミングが悪いなあ。

「オレは『コマンド・ナイト』を攻撃表示で召喚し、『翻弄するエルフの剣士』を攻撃表示に変更する」

『コマンド・ナイト』 ATK1200 1600

『翻弄するエルフの剣士』 ATK1400 2000

…… やばいかも。

「バトルだ！ 二体でダイレクトアタック！」

「きゃああっ!?!」

凜LP600

早くもライフはギリギリに。やっぱり叩き落とす対象間違えた？ ううん。もしかしたら引いたカードもモンスターカードだったかもしれないし、それならこの手で間違ってはいなかったはず。

「ターンエンドだ。どうする？」

「まだ、行ける！ 私のターン、ドロー！」

こんな簡単に負けられない。そうだよね！ エリア！

『まったくね。こんなあっさり負けるのは屈辱的だもの』

「私はモンスターを一体守備表示でセット。カードを一枚セットしてターンエンド！」

今は、耐えるしかない。必ず逆転は出来ると信じて。

「オレのターン、ドロー！ オレは手札から『戦士の生還』を発動し、墓地の『鉄の騎士 ギア・フリード』を手札に戻す。そのまま

召喚！」

『鉄の騎士 ギア・フリード』 ATK1800 2200

「さっきオレの手札を見たから知っているよな？ オレは手札から魔法カード『拘束解除』を発動！ 鉄の戒めを打ち破り、真の姿を見せる！」剣聖 ネイキッド・ギア・フリード！！」

『剣聖 ネイキッド・ギア・フリード』 ATK2600 3000

やっぱり！ あの剣聖の能力は危険。でも、どうすることも出来ないし……。

「バトル！ 『翻弄するエルフの剣士』で守備モンスターに攻撃！」

！ 効果を使つて来ない？ なら……。

「リバーカード『グラヴィティ・バインド 超重力の網』！」

このカードが存在する限り、レベル4以上のモンスターは攻撃することができません！」

「ちっ！ やっぱり入つてやがったか……」

やっぱり、ということとは、先輩もこのカードを警戒していたということ。アトランティスで水属性モンスターのレベルが一つ下がるので、アトランティスデッキには当然のように入れられているから、警戒するのは当然だと思うけど。

「カードを一枚セット。ターンエンドだ」

何もない。と言うことは先輩の手札に装備カードは存在しないということ。なら……。

「私のターン、ドロ！ 私は速攻魔法『非常食』を発動します！」

『伝説の都アトランティス』と『グラヴィティ・バインド 超重力の網』を破壊してライフを2000ポイント回復！」

凜LP2600

「更に、セットされたモンスターを反転召喚！ 『水晶の占い師』のリバー効果でデッキの上から二枚を確認……私は『逆巻くエリア』をデッキの一番下に置き、『壺の中の魔術書』を手札に加えて発動！ お互いにデッキからカードを三枚ドロする！」

これは先輩にもドロを許してしまう両刃の剣。でも、これで！

「私は手札から魔法カード『テラ・フォーミング』を発動！ デッキから『ウォーター・ワールド』を一枚手札に加え、発動！」

フィールドが南国風の海辺に変化する。

「私は『水晶の占い師』をリリースして『ブリザード・プリンセス』を攻撃表示でアドバンス召喚！」

『ブリザード・プリンセス』 ATK 2800 3300

「なに！？」

『ブリザード・プリンセス』はレベル8。通常ならアドバンス召喚に必要なリリースの数は二体。でも。

「『ブリザード・プリンセス』は、魔法使い族一体をリリースすることでアドバンス召喚できる！」

それだけじゃない。

「さらに、このカードが召喚されたターン、先輩は魔法・トラップを発動出来ません！『ブリザード・プリンセス』で、『剣聖 ネイキッド・ギア・フリード』を攻撃！『ブリザード・スター』！」

『ブリザード・プリンセス』の手に持つ巨大な氷で出来たモーニングスターが、剣聖を殴り倒す。……正直、あの見た目からは想像もできないけど。

「うおっ！？ ネイキッド！」

『ぐ……すまん。奴の方が上手のようだ……』

剣士LP 2850

「ターンエンドです！」

「ちっ……オレのターン、ドロー！……オレは『与奪の首飾り』を『コマンド・ナイト』に装備。二人を守備表示に変更してターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！……よっし、行くよ！ エリア！」

『やっと出番ね。遅すぎるわ』

「そう文句言わないで！ 私は『水霊使いエリア』を召喚！」

「リバースモンスターを通常召喚？ ってことは……」

そう、これじゃあ終わらない。

「手札から魔法カード『神霊の継承』を発動！ フィールド上に存在するエリア、ヒータ、アウス、ウイン、ダルク、ライナの内いずれかの名がついたカードを一枚選択し、そのカードと同じ属性、レベル8以上のモンスター一体を選択。それぞれの霊使い、その頂点を手札かデッキから特殊召喚する！ 来て！ 『水神使いエリア』！」

『水神使いエリア』 ATK2800 3300

『さあ、本気よ』

私のフィールドには、背後に『ゴギガ・ガガギゴ』らしき影を従えた、神官服のエリアの姿。攻撃力は2800！

「手札から装備魔法『幻惑の巻物』を『翻弄するエルフの剣士』に装備！ 属性を水属性に変更します！」

「何っ!?!」

これで『翻弄するエルフの剣士』の攻撃力が500ポイントアップした。先輩は戸惑っている。態々相手のモンスターを強化した理由が掴めないんだと思う。

「私は手札の『憑依装着エリア』を墓地に送って、『水神使いエリア』の効果を発動！ 相手の水属性モンスター一体のコントロールを得る！」

『さあ、『水神使いエリア』が命じるわ。貴方は、私に従いなさい』
『Yes, your majesty!』

……エリア。珍しくノリが良いのはいいけど、ネタに走らなくてもいいんじゃない？

「くっ……そういうことかよ」

「と、とにかく、私は『翻弄するエルフの剣士』を攻撃表示に変更。『水神使いエリア』で『コマンド・ナイト』を攻撃！ 『水神の粛清』！」

『行きなさい。私の手足』

エリアの言葉に従い、背後の『ゴギガ・ガガギゴ』の幻影が『コマンド・ナイト』を襲う。衝撃は突き抜けて背後の先輩をも襲った。

「ぐっ……!! 貫通能力持ちか……!!」

「オレは『与奪の首飾り』の効果でデッキからカードを一枚ドロースする！」

「トドメです！『翻弄するエルフの剣士』でプレイヤーにダイレクトアタック！」

これが通れば、私の勝ち！

「トラップ発動！『ガード・ブロック』！ダメージを無効にしてデッキからカードを一枚ドロースする！」

耐えられた！なら……。

「メインフェイズ2に『水神使いエリア』のもう一つの効果を発動します！自分フィールド上に存在する水属性モンスター一体をリリースして、相手の手札を確認、一枚を墓地に送ります！」

つまり、『水霊術「葵」』のモンスター版。選択するのはもちろん『翻弄するエルフの剣士』。

「ち……コイツだ」

先輩の手札は『切り込み隊長』『神剣 フェニックスブレード』

『デーモンの斧』『連合軍』『召喚僧サモンプリースト』『命削りの宝札』『簡易融合』の七枚。

「……うわぁ」

正直悩む。どれを捨てたものか……。

「私は『デーモンの斧』を選択します」

とりあえず、攻撃力を1000ポイントも上げることのできる『デーモンの斧』は危険だから、それを選ぶ。他のカードも皆危険だけど、手札がこれだけあるのなら『命削りの宝札』はとりあえず無視できる。『神剣 フェニックスブレード』は墓地に送るだけ無駄後のカードで悩んだけど、貫通能力持ちのエリアがいる以上、モンスター的大量展開よりも攻撃力の高いモンスターを出されて『デーモンの斧』で戦闘破壊されるのが一番怖い。

「私はターンエンド！」

手札はこれで使いきった。後は、運を天に任せるしかない。

「オレのターン、ドロー！……」
どう！？

「オレは『切り込み隊長』を攻撃表示で召喚！ 効果で『召喚僧サモンプリースト』を攻撃表示で特殊召喚！」

その二体はさつき確認した。後は……。

「『召喚僧サモンプリースト』の効果発動！ 手札の『神剣 フェニックスブレイド』を墓地に送り、デッキから『鉄の騎士 ギア・フリード』を特殊召喚！」

モンスターが揃ってきた。でもまだ！

「更に魔法カード『簡易融合』発動！ ライフを1000ポイント支払って、融合デッキから『魔導騎士ギルティア』を攻撃表示で特殊召喚！」

剣士LP450

「更に手札から魔法カード『融合』を発動する！」

あ……。

「フィールドの『鉄の騎士 ギア・フリード』と『魔導騎士ギルティア』を融合！『鋼鉄の魔導騎士 ギルティギア・フリード』を融合召喚！」

その攻撃力は……2700。

「そしてオレは手札から『連合軍』を発動！ オレのフィールドには戦士族と魔法使い族のモンスターは三体。よって攻撃力600ポイントアップ！」

エリアに並んだ。でも……。

「墓地の『神剣 フェニックスブレイド』の効果を発動！ 墓地の『マジック・ストライカー』と『翻弄するエルフの剣士』をゲームから除外し、このカードを手札に戻す！ ギルティギア・フリードに装備！」

攻撃力、3600。

「バトルだ！『鋼鉄の魔導騎士 ギルティギア・フリード』で『水神使いエリア』を攻撃！『魔導鋼破斬』！」

「きゃあつ！ エリア！」

『くっ……まずったわ』

凜LP2300

「更に、『切り込み隊長』と『召喚僧サモンプリースト』でプレイヤーにダイレクトアタック！ 終わりだ！」

「きゃあああああつ！？」

凜LP0

「ほらよ。大丈夫か？」

「うん。ありがと……う？」

しまった！ 安心してついキャラ作りを……。

「やっぱりか。デュエルしてた時からそんな気はしてたけどよ」

「あ……」

そういえば、デュエル中も殆どキャラ作りなんてしてなかった。

「猫かぶりか」

「き、キャラ作り！ 猫かぶりなんて人聞きの悪い……」

『同じでしょうが』

「エリアは黙ってて！」

「……ま、オレはどっちでもいいんだがな」

うう……。

「あ、あの……」

「あん？」

「私のこと、覚えてない？」

聞いてみた。私はもう間違いなく、あの時助けてくれたのがこの人だっただけで確信している。けど、先輩は……？

「……悪いが、覚えてねえ。微妙に見覚えがある気もしないでもねえが」

「そ……っか」

少しだけ、残念。

でも、それでもいい。別に過去のことを覚えていたからってどう
ってことはない。……そ、それに、あの時は襲われそうになって恐
怖でもしかしたら私おもら……私も忘れた。だからいい。

「大事なのは、過去じゃなくて今！」

「……なかつたことにしたわね」

聞こえない。

とにかく、別に先輩が忘れていたところで関係ないんだ。スター
ト地点は変わらない。だから、まずは第一歩。

「あの……」

「今度はなんだ？」

「私と、お友達になってくれませんか？」

これから、全部育んで行けばいいんだから。

『でも結局、アイドルになった思惑は完全に外れたのよね』

「……エリア。一言多いよ……」

第三期第四話「バッドエンドは見飽きたよ」

アルカナ〜切り札の騎士」

第三期第四話「バッドエンドは見飽きたよ」

コンコン。

「ルインー居るかー？」

希冴姫とルインに占拠されてしまった元・俺の部屋の扉をノックする。中からドガラガツシャンという凄まじい音と共に「ひゃああああーっ!？」とかいう希冴姫のものと思われる悲鳴が聞こえてきた。……まあルインがあんな悲鳴を上げるのは考えられないし、もし上げるのなら逆に見てみたい。

「……あー、希冴姫？ 大丈夫か？」

『ご、御心配には及びませんわセツ様！ しょ、少々取り乱しただけですので！ で、ですがその、申し訳ありませんが少々お時間を頂いてもよろしいでしょうか？』

「ああ、別にいいよ。ゆっくり準備しな」

俺がそう希冴姫に声をかけ、数秒もしない内に「ちよ、お待ちなさいまだわたくしの用意が終わって……」というか貴女もなんて格好で……』という希冴姫の焦った声が聞こえてきた。

「お待たせ」

「な」

思わず絶句する俺。

「あ、ああああああセツ様これはその……い、いえ何と言います

か……あうあう」

俺が見たのは着替え途中でかなり着衣が乱れた状態であわあわしている希冴姫と、平然と下着姿で、堂々と俺を出迎えたルインの姿。……お兄ちゃん。ちよおおおつといい子にしててねえ……」
さだめは空恐ろしい笑顔で俺を牽制しつつ、固まっているルインを部屋の中に蹴り込んで扉を閉めた。

「……あー」

希冴姫たちの口論が聞こえてくる。

「なんと……という生き恥……セツ様にこのような……それもこれも貴女が……！」

「彼に肌を見られることに羞恥の感情はない。むしろ喜ばしい」

「それには全面的に同意するけどさだめ以外の女がやることには許容できない。っていうか他の人居たらどうするの」

「人の気配には気を配った。私も彼以外に肌を見せる気はない」

「そもそもお兄ちゃんを誘惑しようとするその性根が……」

「自分の武器を使わずに戦争には勝てない」

「くっ！ この忌々しい巨乳族が！ 万死に値するよ！ 地獄に落ちて閻魔に舌じゃなくて乳抜かれて転生してくればいいのに……」

「きつと、前世でそうされたのが貴女」

「くきやー！！」

「い・い・か・ら、早く服を着なさいな貴女は！」

……あー。って俺さつきからこればかりだな。

まだしばらくドツタンバツタンと騒いでいたが、やがてそれも落ち着いたのか、再び扉が開かれた。

「……ま、予想はしていたが」

現れたのは目を回して突っ伏している希冴姫と下着姿の二人。一体何がどうなってそんなアホな状態になったのか、小一時間ほど問い詰めたい。

「どう！？ お兄ちゃん」

「服着れアホ」

「冷ややか!?!」
「妹の半裸に反応するとても?」
「義妹!」
「実妹だ!」
「設定変更!」
「できるかつ!」
「私は?」
「服着れ。目の毒」
「顔が赤い!?!」
「満足した」
「おのれ巨乳族!」
「これがブラの力」
「さだめもしてるし!」
「ベビードールレベルで何をほざく」
「くにや!」
「いいからとつとと服を着る馬鹿二人!」
結局この馬鹿二人が服を着るまでに、小一時間。俺と希冴姫の二人で説教するのに二時間近い時間をかけて、漸くデツキ調整に入れたのは、もう日も暮れかけた後の事であった。

「先攻後攻はお好きにどうぞ。僕はどちらでも構わない」
あくまでも余裕の姿勢を崩さない真中希望。舐められていると言
うよりは強者の余裕といった雰囲気強く感じます。なら……。。

「私のターン、ドロー！」

その余裕、打ち崩して見せます！

「手札から『ヘカテリス』の効果を発動！ デッキから『神の居城
ヴァルハラ』を手札に加えて発動します！」

いつも通り。ワンパターンと言われても、私はこのスタイルを崩さない。

「手札の『ジェルエンデュオ』を特殊召喚！ 『ジェルエンデュオ』
を二体分のリリースとして、『虚無の統括者』を攻撃表示でアドバン
ス召喚します！」

『虚無の統括者』 ATK2500

残念ながら『虚無の統括者』をヴァルハラで特殊召喚することは
できませんが、『ジェルエンデュオ』と絡めれば一ターン目から出
すことができます。これで特殊召喚は封じました。通常召喚できる
モンスターでは攻撃力2500の『虚無の統括者』はそう簡単には
倒せません。

「更に、カードを一枚セットしてターンエンドです！」

「ふむ……伏せカードは『和睦の使者』、かな？」

……動揺は、顔に出なかつたと思います。何故、この人は……。

「何。別に大したことじゃない。ただ君のデッキに入っているトラ
ップは『和睦の使者』か『血の代償』くらいだからね。適当に言っ
たって二分の一で当たるさ」

心を読まれた？ それともなにか別の……。

「さあ、どうだろうね。知りたくば、力を見せてもらおうか」

やっぱりです。私の考えていることは相手に筒抜け。

「……随分と卑怯な真似をするんですね。実力では勝てないからっ
て小細工ですか？」

「さてね。ただ言えるのは、僕の力は常時発動していてね。正々堂
々とはどうしてもいかない」

「……私はこれでターンエンドします」

「僕のターンだね。ドロー」

私のデッキは相手に筒抜け。でも私は相手のデッキを何一つ知らない。情報のアドバンテージは圧倒的に不利。

「……でも、そんなことは始めからわかっていたことです」

「勇ましいね。では、僕は手札から速攻魔法『トラップ・ブースター』を発動。手札からカードを一枚捨てることで手札からトラップカードを発動することができる。僕が捨てるのは『おジャマジック』！」

「な……」

「手札から『おジャマジック』が墓地に送られたことにより効果発動！ デッキから三体のおジャマたちを手札に加える。手札からトラップカード『サンダー・ブレイク』を発動する。手札の『おジャマ・グリーン』を捨てて『虚無の統括者』を破壊する」

『おジャマ・グリーン』が体を雷に変えて『虚無の統括者』を撃ち抜く。

「つく！」

そんな……あんなモンスターで『虚無の統括者』が……。

「どんなカードも使い様。さて、僕は手札から『融合』を発動。手札の『おジャマ・イエロー』、『おジャマ・ブラック』を融合し、エクストラデッキから『おジャマ・ナイト』を融合召喚する」

『おジャマ・ナイト』DEF2500

二匹のおジャマが飛び跳ねて融合の渦の中に入り、中から鎧姿のおジャマ・イエローが。……ぶつちゃけ鎧が似合ってますん。

「更に手札からトラップカード『おジャマ・トリオ』を発動。君のフィールドに『おジャマ・トークン』を三体特殊召喚」

「っ！ しまっ……」

「気付いたようだね」

私のフィールドが気色悪いおジャマたちによって占拠されてしまっ。これじゃあ……。

「キミのデッキはモンスター特化型。モンスターが出せなければ何もできない。今まではそんな弱点を突いてくる相手が居なかったよ

うだけどね」

「まさか……」

「そう……君のデッキの弱点は……」

「おジャマ……!?」

愕然とする。い、いままでこんなアホな対策されたことは……。

「なかった？ だろうねえ」

真中希望はくつくくと愉快そうに笑っている。

「さて、僕はこれでターンエンドだ。モンスター破壊カードを持ってないアテナはどうするのかな？」

……っ！

「わ、私のターン、ドロー！……ターンエンドです」

「僕のターン、ドロー。僕は『弾圧される民』を守備表示で召喚。ターンエンド」

『弾圧される民』って……あ、あの人まさか……。

「あ、気付いた？ そう。これファンデッキ。『大革命』が使ってみたくてね！。戦闘力皆無だけど」

ば……。

「馬鹿にされてる……!」

でも、私にはどうすることもできない。

「ドロー……エンドです」

「ドロー。僕は魔法カード『強欲な壺』を発動。デッキからカードを二枚引く。『逃げ惑う民』を守備表示で召喚してターンエンド」

「こ、この……」

ここまで腹が立ったのは初めてです。相手に、というよりもむしろ自分に。ファンデッキに良いようにやられるこの屈辱！

「た、ターンエンドですっ！ もう好きにしてください!」

半ば以上に自棄になっているのを自覚する。でも仕方ないじゃないですか！ あれだけシリアスに決めておいてなんですかこのグダグダ感！

「僕のターン。ドロー。残念、レジスタンスは来なかったか。『キ

「『メイス』を攻撃表示で召喚。装備カード『光学迷彩アーマー』を『キーメイス』に装備。ダイレクトアタック」

「『キーメイス』 ATK400

「可愛い妖精がステルスモードで……ってせつかく可愛いのに隠しちゃダメじゃないですか！」

「きゃ……」

アテナLP3600

「はい。ターンエンド」

「ぐっ……ドロー！ ターンエンドです！」

「ちまちまと削るだけ。こっちに対抗策がないのをいいことに！」

「僕のターン。ドロー。おっと、ちよつとだけ『革命』が成功したね」

「きゃああつ!?!」

アテナLP2400

「で、更に『キーメイス』でダイレクトアタック」

「う」

アテナLP2000

「ターンエンド」

「ど、どこまでコケにすれば……」

「温厚な天使として有名なアテナちゃんもいい加減怒りますよ！」

「いや、微妙に温厚じゃないよね。君。というか結構壊れてきてる？」

「誰のせいですかあ！」

「さつき「僕は強いよ。君たちが考えているより、ずっとね」とかなんとかカッコよく言ってた癖になんてバカバカしいデッキを……」

「いやいや、これでも結構強いんだよ？ 『トランス』って言ってね。最高クラスのロックを……」

「少なくとも『キーメイス』は関係ない筈です！」

「アイドルアイドル。いいじゃないか。マキュラとかをアイドル設定するよりよっぽど健全だよ」

「ロリコンは健全ではありません！」

「さて、十三歳の君と半ば付き合っていたセツと、光みたいな子を恋人にしている僕。どっちがロリコンか……」

「私だっておっぱいありますもん！ セツはロリコンじゃありません！」

「爆弾発言だねえ。さだめが聞いたら怒るよ？」

「そっちの方が似合うのに意地張ってベビードール着ないさだめさんはどうでもいいです！」

「ちなみに丁度セツたちの方でもベビードールの話題が」

「だから何がしたいんですか貴方は！」

「ほらほら、君のターンだ」

「はいはいエンドですよ何もできませんよ！ わかってるんだから勝手に『ずっと俺のターン』とかやってればいいじゃないですか！」

「いやー『ずっと俺のターン』かー。それはセツの専売特許だからねえ……」

「セツのだってパクリですよ！」

「じゃ、とにかくドロー。おお、『団結するレジスタンス』だ。揃った揃った。……『大革命』以外」

「肝心のカードがない！」

「『キーメイス』でダイレクトアタック」

「ああもうチクチクチクチクとお！」

アテナLP1600

どうせなら一思いにドカンとやって欲しい。これ以上屈辱的な会話を続けたくないです！

「はいエンド。アテナの「エンドですっ！」おやおや……」

我ながら乱雑です。ですがいい加減イライラが頂点に……。

「お、来た来た『大革命』だ」

「さっさとやっちゃってください！」

「残念だけどこのカードはトラップだからターンおかないと「私はエンドですってば！」ごめんねーまだ伏せてなかった。もう一度

「ドロー」

「あああああゝもう!」

「お、『革命』」

「つてちよつと!」

アテナLP400

「おや、丁度400。『キーマイス』でダイレクトアタック」

「せめて『大革命』使ってくださいよー!」

アテナLP0

私はがっくりと膝を着く。悔しさとかより単なる疲労感で。

「ふむ……ここはこう言っておくべきなのかな? ガツチャ! い

いデュエルだったよ!」

「死・ネエエエエ!!」

私は思わず立ち上がって叫んでいた。

「おお、キャラが完全に崩壊した」

「誰の所為ですかあああああああつ!」?

「十代君じゃない? セリフ的に」

「貴様ダアアアアアア!」

「さあ、誰が予想したでしょうか。あのアテナが貴様とか叫ぶ光景を!」

「こつ、これはもう精神的凌辱です!」

「楽しかったでしょ? セツたちとしゃべってるみたいで」

「どこが! セツたちとのやり取りはもっと楽……し、くて……」

……………。

一気に頭が冷えていく。

いつの間にか、希望さんも真剣な、けれど柔らかな微笑みを浮かべています。

「楽しかったんだらう? 幸せだったんだらう? なら、戻ればいいじゃないか」

あの、微温湯のように温かで、優しい世界に。

「君は負けたけれど、教えてあげよう。終焉の本体は君の愛する者

のすぐそばに。今にも弾けて呑み込みそうなほどに大きく強く」

「っ！」

「欠片をいくら潰しても意味はない。いずれその生成速度に追いつかなくなつて世界は終焉を迎える。セツもろとも」

癌細胞をチクチク潰しているようなものだ。そう言つて希望さんは首を振る。

「じゃあ……どうすれば」

「随分と簡単な問いだ。答える価値すら感じない」

帰れと……セツたちの下へ……。

「だめ……ダメです。私は……」

「またセツの優しさに触れるのが怖い？ 弱くなつてしまひそう？ もう一人では立てなくなる？ きつと……」

「依存してしまいます……」

きつともう、離れられない。

「恋は人を弱くする。慣れ合うことで隙が生まれる。……なんだい？ 君は僕に『恋は人を強くもするんだよ』だの『助け合い、協力することは何より尊い』とかそんなテンプレートでチープな説教をさせるつもりかい？ まったく冗談じゃない。僕はただアテナ、君とセツたちの協力が要る。君たちが力を合わせなくちゃ終焉は打倒できない。世界を守るため、君には何としてもセツたちの下に戻つて貰わなくてはならない。だからそのために、君がセツことを好きだというファクターが有利に働きそうだったから利用させて貰つていただけ」

その言葉に愕然とする。まさか……。

「私がつ！ 私がセツのことが好きになつたのはっ！ まさか、まさか……」

「おっと、悲しい勘違いはすれ違いの元だ。君の感情を操作なんてするもんか。そんなことをするなら手っ取り早く君をセツたちの下に縛り付けておくような暗示をかけている。君の気持ちは君だけのものだ」

「あ……………」

「すぐく、ほっとした自分がいました。セツへの気持ちは……………」

「ウソじゃない。偽物の、人から強制された勘違いの愛なんかであ
そこまで人を愛することはできない」

「……………」

「偽ることの天才であり常に自分すら偽り続けているセツが、偽りの愛に心動かされる筈もない。君の、君たちの愛は本物だ。何にも恥じることはない」

「希望さんの言葉がスーッと心にしみてくる。セツへの気持ち、大好きな気持ち。全部本物だと、その言葉だけで泣きたくなくなるほどに嬉しい。」

「でも」

「君は尚更自分を許さない。愛が本物だとわかったからこそ、疑心が消えて罪悪感が顔を出す」

「そう……………そうです。私は、セツを。」

「それは、君がセツを“この世界に引き込んだ”張本人だから？」

「それとも、さだめが“欠片にとり憑かれる”原因となったからか？」

「やっぱり、知っていた。この人は、何もかも。」

「そんなの……………」

「そんなの。」

「両方に……………決まっているじゃないですか……………っ！」

「私は今にも零れそうな涙を堪えて希望さんに向かって叫ぶ。今にも掠れて、消え入りそうな声だったけど。」

「……………血の滲むような慟哭だ。積みり積もった幸せが、取り戻した記憶と共に癌となって君の心を蝕んでいる。幸せな記憶を、心に突き刺さる棘として感じる不幸は、一体どれほどのものなのだろうね」

「帰って……………ください」

「もう、この人の言葉は聞きたくない。」

「また逃げるのか？ 現実から目を背けて？ その行為が君を苦しめると知っていながら」

「帰って!!」

「……」

希望さんは背を向けた。

「……光が、君とまた友達になりたい、メールがしたいって、言ってたよ。僕も……次に会う時は、彼の傍らに佇む君を、見たいものだね。……もう、バッドエンドは見飽きたよ」

希望さんは最後に小さな声で何事が呟いて、立ち去って行きました。

「……………セツ」

逢いたい。逢えない。

「……………最低、です」

貴方に不幸を押し付けて。貴方に好意を押し付けて。

「最後は裏切る。……本当に、最低」

夜の帳が落ちてくる。しばらくは、動きたくなかった。

第三期第五話「未来に望む光」(前書き)

お待たせしました。第五話です。

この第五話は、ほぼ完全に書き下ろし。何しろ改訂前だと朱雀とルインのデュエル回でしたからね。朱雀が出ない以上、完全書き下ろしです。カードはルインVSさだめになります。では、どうぞ。

第三期第五話「未来に望む光」

アルカナ、切り札の騎士、

第三期第五話「未来に望む光」

一通り説経が終わった後、俺は希冴姫に慌てていた理由を尋ねていた。

「で、希冴姫は何をそんなに焦ってたんだ？」

「実は、その……これを」

希冴姫が見せてくれたのは親指大の宝石を五つ、五芒聖の形で集めたペンダント。それぞれの石はゴールド・シルバー・ブルー・グリーン、そしてルーシユ色に透き通っていて、思わず目を奪われた。「その……以前、細工物をプレゼントすると言ったことを覚えていますか？」

「あ、ああ。確か……」

エースとの争いがあった時だ。その後にあつた事件ですっかり忘れていたが、確かにそんなことを言っていた。

「あの時から、コツコツとやっていたのですが、ついさっきようやく完成いたしました……本当はもう少し包装やシチュエーションにも凝りたかったのですが……」

目を逸らして頬を染める。

「……ありがとう。貰っていいか？」

「は、はい！ どうぞ、お納めくださいませ！」

パアツと笑顔を見せてくれる希冴姫。

折角だから付けてもらおう、と提案しようとしたところで……。

「そおい！」

「あっ！？」

さだめにペンダントを奪われ、付けさせられた。

「ふう……危ない危ない。もう少して『じゃあ、折角だし付けてもらおうかな？』『はい！喜んで！』とかいうクソつたれイベントが行われるところだった……」

鋭い……。まあ奪って壊したりしなかったただけ自重したと思っておこつ。

「くつ……チャンスが……」

「ぐつじょぶ」

悔しげに顔を歪める希冴姫とさだめにサムズアップを向けるルイン。

微妙に険悪な雰囲気だが、こいつらは何だかんだで普段はそこそこ仲が良いのは知っているので放置する。というか、下手に俺が口を出すと泥沼化するのは目に見えて明らかなのでスルーが上策。

「賢明」

「何か言ったか？ ルイン」

「さあ？」

相変わらず、さらっと俺の心を読む奴だ。

「それで、貴方は何故ここに？」

「ん？ ああそうだった。ちよつとさだめのデッキ構築するから、お前も一緒にどうかと思つてな」

ルインに問われて、ここに来た理由を思い出す。

「ん。ありがとう。でも……」

「でも？」

「最初は、自分の力で組んでみたい。それから一度デュエルして、その後でアドバイスを貰いたいから」

「……なるほどな。そういうことなら」

ルインも、色々考えてるんだな。

「貴方に頼るばかりじゃいけないから」

「そんなことは気にしなくてもいいが……そうだな」

ルインにも何か思うところがあるんだろう。それなら、その意志は尊重したい。

「むう……そんな風に言われると、さだめがお兄ちゃんに頼りきりなイメージに……」

事実だろうに。

「ま、お前はそれでもいいんだよ。人それぞれだからな。こういうのは」

「それでは、わたくしはお茶でも用意させていただきますわ」

「え……」

そう言っただけ席を立つ希冴姫に、さだめがへんな顔をした。

「……なんですか？」

「希冴姫さんって……お茶淹れられるの？」

「し、失礼な！ わたくしだってお茶くらい淹れられますわ！」

「いやだって、そういうのって全部ジャックさんに任せてるんじゃないの？」

ジャックは執事じゃないぞ。一応な。

「それは……まあ普段はそうですが」

「そうなのかよ」

「で、ですが少し喉が渴いた程度の時まで呼びつけたりはしません。そういう時は自分で淹れますもの！」

「……まあなんにせよ、そういうのはお兄ちゃんに任せとくといひよ」

「信用ゼロですよ!？」

丸つきり信用してないさだめに愕然とする希冴姫。

「彼と貴女、どちらの方が美味しく淹れられる？」

「……それは、セツ様の方が」

「なら、彼に任せるべき」

「……わかりましたわ。何だか釈然と致しませんけど」

ムスツとした様子の希冴姫に苦笑して、俺はお茶を淹れるため、食堂に向かうのだった。

「パワー・ウォール!!」

「カードを捨てるな!」

デッキ構築を初めて小一時間ほどで、さだめがカードを投げ出した。

「あーもう! ダメ! さだめに儀式は合わない!」

「あっさり諦めたな」

「だって手札に儀式魔法と儀式モンスターと生贄揃えて……とかまどろっこしいんだもん。全然来ないし」

「……ま、確かにお前が使うと『マンジュ・ゴット』も来てくれな
い始末だしな。それも仕方ないか」

とことん天使族に縁がないんだな。コイツは。

「やっぱさだめはいつも通り、次元ダークで組むよ。ごめんねルイン。儀式魔人借りという」

さだめはルインに儀式魔人のカードを返しつつ謝る。

「別にいい。人それぞれに合ったデッキがある」

「ルインは、儀式魔人合うの?」

「……私は元々儀式モンスター」

「あ、なる……」

そりゃ、抜群のシナジーだろうな。

頭を抱えるさだめに、俺は少し頭を捻って考えてみた。

「さだめ、仮想敵を作って構築してみればどうだ?」

「仮想敵?」

「ああ。相手の戦略を読み、メタメタのメタデッキで嫌がらせをして高笑いするのはお前の得意技だろう?」

「言葉を選んで!?!」

「…………ん？ ああ悪い。相手の弱点を、ネチネチ生かさず殺さず執拗に攻撃して敵の戦意というか心を徹底的に蹂躪するのが、お前のデュエルだろう？」

「選んでないよ！？ むしろ更に印象悪くなってるから！」

「…………いや、他に言い回しが思い付かないというか、実には的確な表現ができたと我ながら感心しているところなんだが…………」

「的確ならいいってもんじゃないよね！？ オブラート！」

「さだめには言われたくない単語の一つだよな。オブラート」「そうだけど！」

「まあ兎も角、お前は基本的なデッキの構築能力は俺よりも高いんだよ。ただ、その能力がメタる方向に特化してる所為で、仮想敵なしだと構築できないだけで」

事実、コイツは相手のデッキを見切ると一分足らずで即興のアンチデッキを組み上げる。それで事故を起こさないんだから、コイツのデッキビルダーとしての能力は相当なものだ。

「だから、最初にデッキを組む時から、誰かとデュエルすることを前提に組めば絶対に良いデッキが組めるさ」

「なるほど。つまり、アテナをボロクソのメッタメタに叩きのめして鼻で笑えるようなデッキを組めばいいと…………」

「言葉を選べ！」

「…………え？ ああ、だからつまり、天使族や光属性を地の底に引きずり込んで背中羽をむしり取って犯し尽くすイメージで組めばいいと」

「選んでねえよ！ むしろ残虐性が増しているよ！」

「よし、大体の構想は固まった。ククク、待ってるといいよアテナ。アンチやメタを作らせたらさだめの右に出る者はいないということを思い知るといいよ」

「速えよ！ 今までの苦勞は何だったんだよ！」

「……。」「……。」

「……似た者兄妹」

「ですわね……」

「えーっとこれをこうしてああして……よっし出来た！」

「速えよ！ さっきの小一時間何だったんだよ！」

残像が見える程のスピードでデッキを組み上げたさだめに思わず突っ込む。

「……まあいいか。じゃあ、試しにそのデッキでルインとデュエルしてみろ」

「私？」

「ルインも出来てるんだろ？ デッキの調整も、使ってみなきゃ出来ないからな」

「わかった」

「えーと、ルインのデッキか。じゃあこれを入れて……よし、アンチデッキ構築完了！」

「だから速えよ！」

ものの数秒でアンチデッキを組むその手腕は脱帽に値するが……何だかなあ。

「……あまり気が進まない」

「気持ちはわかるが……まあ頑張ってくれ」

「……わかった」

「「デュエル！」」

「私のターン、ドロー。私は『終末の騎士』を召喚。効果により、デッキから『儀式魔人リリーサー』を墓地に送る」

『終末の騎士』 ATK1400

ルインは定石通り、儀式魔人を墓地に送ったか。

「私はこれでターンエンド」

「さだめのターン、ドロー！ さだめは『霊滅術師カイクウ』を攻撃表示で召喚するよ！」

『霊滅術師カイクウ』 ATK1800

「げ……」

俺は思わず呻いた。

「セツ様？ あのモンスターは……」

「カイクウは……儀式魔人の天敵だ」

「そうなんですの？」

「ああ。儀式魔人は、墓地から除外することで、儀式召喚のリリース源として扱える効果を持っているんだが、カイクウは相手プレイヤーが墓地からカードを除外する効果を阻害する効果を持つ」

「ということは……」

「今さつき墓地に送ったリリーサーの効果は使えない。更に、カイクウは……」

「バトル！ カイクウで『終末の騎士』を攻撃！ 『靈滅独鈷杵』！」

「くっ……！」

ルインLP3600

「更にカイクウが相手プレイヤーにダメージを与えた時、墓地のモンスターを二体まで除外することが出来る！ 墓地のリリーサーを除外するよ！」

「!?」

『ハアッ！』

カイクウが念じると、墓地にいたリリーサーの靈魂が消滅していった。

「あれが、カイクウのもう一つの効果だ。相手の墓地のモンスターを除外する」

「……確かに、基本墓地にあつて除外してこそその儀式魔人にとっては天敵ですわね」

「さだめはカードを一枚セツト。ターンエンドだよ」

「……私のターン、ドロー。私は『マンジユ・ゴット』を守備表示で召喚。『マンジユ・ゴット』の召喚に成功した時、デッキから儀式モンスターか儀式魔法一枚を手札に加える。私はデッキから『高等儀式術』を手札に……」

「カウンタートラップ発動！ 『強烈なはたき落とし』！ 手札に加えたカードをそのまま墓地に落として貰うよ」

「っ！」

アイツ……マジでアンチっていつかメタデッキだな。その内『ライオウ』とか出てきそうだな。

「……私はカードを一枚セツト。ターンエンド」
ルイン、苦しそうだな。まあ、とことんメタられているんだから気持ちはわかるが。

「……悪いことしたか」

デッキ調整するためのデュエルには不適當な采配だった。どっかから三沢あたりでも連れてきてやればよかったか。

「さだめのターン！ ドロー！」

さだめの方はノリノリだな。

「さだめは『ライオウ』を攻撃表示で召喚！」

『ライオウ』 ATK1900

「うわ！ マジで出しやがった！」

「セツ様、あれは？」

「ああ、『ライオウ』はメタビートの代表的なモンスターだ。下級のメリットモンスターとしては最高クラスの攻撃力、チェーンに乗らない特殊召喚を、自らをリリースして封じる効果、更にドロー以外の方法で、デッキから手札に加える効果を無効化する。例えばさっきの『マンジユ・ゴット』とかな」

「それは……」

二つもメリット効果を持っていながら1900の攻撃力は脅威だ。かなり卑怯と言ってもいい。

「バトルだよ！『ライオウ』で『マンジユ・ゴット』を攻撃！『ライトニング・キャノン』！」

「リバースカードオープン。トラップ発動『ドレイン・シールド』！『ライオウ』の攻撃を無効にしてライフを1900ポイント回復する」

ルインLP5500

「むう……ならカイクウで攻撃！『靈滅独鈷杵』！」

カイクウの攻撃が『マンジュ・ゴット』に突き刺さる。今度はなんのトラップも発動せずに倒される。しかし、守備表示だったため、カイクウの効果は発動しない。

「やるね。さだめはターンエンドだよ」

「私のターン、ドロー。私はモンスターを一枚セット。カードを一枚セットしてターンエンド」

ルインは淡々と、冷静にカードをプレイする。この辺りが優秀だな。ポーカーフェイスも崩れないし、読みにくい。俺みたいなパームリション使いからすればやり難い相手だ。

「さだめのターン、ドロー！ バトルだよ！ 『ライオウ』で守備モンスターに攻撃！ 『ライトニング・キャノン』！」

『ライオウ』の放った雷の砲弾が、裏守備モンスターを貫く。ルインの守備モンスターは……。

「……私は『メタモルポット』の効果を発動する」

「んげっ」

なんかさだめがへんな声出したが、兎も角互いの手札がリセットされる。ルインの手札は三枚、さだめの手札は四枚だったため、さだめの方が損をしている。

「お、でも悪くないかも。とりあえずカイクウでダイレクトアタック！」

「リバースカードオープン。『ガード・ブロック』。ダメージを無効にしてデッキから一枚ドロー」

「むう、また防がれたか……さだめはメインフェイズ2に『靈滅術師カイクウ』をリリースして『ヴァニティ・デビル虚無魔人』をアドバンス召喚！」

『虚無魔人』 ATK2400

「最悪だ……」

ここに来て、お互いに特殊召喚を封じる『虚無魔人』。儀式召喚主体のルインにとっては最悪も最悪。さだめの手札を交換したのが仇となったか。

「むふふ」。更にカードを一枚セットしてターンエンドだよ！」

「……私のターン、ドロー。私は速攻魔法『禁じられた聖杯』を發動。『虚無魔人』を選択」

「んえっ!？」

またヘンな声出した。

「禁断の聖杯に口を付けし者は、理性を失い暴走する。攻撃力を400ポイントアップする代わりに、効果を無効にされる。これで、特殊召喚は可能」

『虚無魔人』 ATK2400 2800

「ぬう、流石にやるね……けど、これで『虚無魔人』の攻撃力は2800! ルインの攻撃力じゃ勝てないよ!」

「……なら、勝てるようにするだけ。私は手札から儀式魔法『エンド・オブ・ザ・ワールド』を發動。墓地の『儀式魔人プレサイダー』二体をゲームから除外して手札から『破滅の女神ルイン』を儀式召喚」

『破滅の女神ルイン』 ATK2300

ルインを出せたか。とはいえ、ルインの攻撃力は素の『虚無魔人』にも敵わない2300。果たしてどうするか。

「私は装備魔法『ダグラの剣』を私に装備」

『破滅の女神ルイン』 ATK2800

「……なるほど。『虚無魔人』の攻撃力が上がっているのはこのタインのみだから、次のターンまで耐えるつもりだね」

しかも『ライオウ』を倒すには十分な攻撃力だ。

「バトル。『破滅の女神ルイン』で『ライオウ』に……」

「甘い! リバースカードオープン! 永続トラップ、発動! 『超古代生物の墓場』!」

げ……。

さだめの罠が発動し、ルインの身体が凍りつく。

「『超古代生物の墓場』がある限り、特殊召喚されたレベル6以上のモンスターは攻撃することも、効果を発動することも出来ないよ!」

なるほど。『虚無魔人』を突破されることは予想済みか。さだめらしい、えげつないアンチデッキだ。

「ま、ルインには相応しいカードだよな。超古代生物。ぷくくっ！」
「……カチン」

あ。

「……なあ希冴姫。何か今、キレちゃいけないモノがキレなかったか？」

「わたくしにも、聞こえましたわ」

「……まあ、散々アンチされた拳句超古代生物呼ばわりされたら、いくらルインでもキレルか。」

「……流石に、今はカチンときた。イラっとした」

「ふふん。じゃあどうするの？」

「……全力で勝ちに行く。私はカードを一枚セット。ターンエンド」

「さだめのターン、ドロー！ さだめは『昇霊術師ジョウゲン』を
守備表示で召喚！ 効果発動！ 手札をランダムに一枚捨てて、フ
ールド上の特殊召喚されたモンスターを全て破壊するよ！」

アイツまた特殊召喚メタを……。

「くっ……！」

「さあ、バトルだよ！ 『ライオウ』でダイレクトアタック！」

「っ！」

ルインLP3600

「続いて『虚無魔人』でダイレクトアタック！」

「くあっ!？」

ルインLP1200

「さだめはカードを一枚セット。ターンエンドだよ」

「私のターン、ドロー」

さあ、どうするルイン？ 手札は三枚。逆転が不可能だとは、言
わせないぞ。

「私は手札から魔法カード『ライトニング・ボルテックス』を発動。
手札を一枚捨てて、全てのモンスターを破壊する」

「にゅあつ!?!」

「お前、そのへんな声マイブームなのか？ さだめの中では奇声が来ちゃってるのか？」

「そ、そういうことじゃないけど！ 思わず漏れた呻きと言っかなんというか……」

兎も角、さだめの場のモンスターは全滅。勿論、それだけじゃまだルインに勝ち目はないわけだが……。

「永続魔法『命削りの宝札』。デッキからカードを五枚ドロウする」「いつも思っただけど、そのカードずつこい！」

同感だ。俺も使うけど。

「手札から装備魔法『契約の履行』を発動。ライフを800ポイント支払い、墓地から『破滅の女神ルイン』を蘇生する」

ルインLP400

『破滅の女神ルイン』 ATK2300

「そして手札から儀式魔法『未来への光』を発動する」

「何それ？」

さだめの疑問に、ルインはニヤリ、と珍しく得意げな笑みを見せた。

「……貴女の知らない、逆転のカード」

少なくとも、儀式魔法。そして、態々ルインを蘇生させたからには、それに関連するカードだろうが……。

「私は墓地の『儀式魔人プレコグスター』と『儀式魔人ディザーズ』、そしてフィールドの『破滅の女神ルイン』をリリースする」

「何その儀式魔人！ 何時の間に……って、そっか『メタモルポット』と『ライトニング・ボルテックス』……!」

いやそれよりも、プレコグスターのレベルは3。ディザーズのレベルは1。そしてルインのレベルは8だから、儀式召喚のルールに従えば……。

「レベル12……神に並ぶレベルのモンスター!?!」

「私は……女神。貴方のお陰で、未来に希望を見出した女神。だから

「らこそ、私はこの力を、貴方のために使うと誓う。『希望の女神ルイン』を儀式召喚！」

『希望の女神ルイン』 ATK2500

ルインは、先ほどの得意げな笑みとも、普段の無機質な笑みとも違う、透明で綺麗な笑顔で俺に言う。

「更に手札から『デュナミス・ヴァルキリア』を攻撃表示で召喚」

「と、トラップ発動！『奈落の落とし穴』！『デュナミス・ヴァルキリア』には消えて貰うよ！」

「構わない。手札から魔法カード『死者蘇生』で、貴女の墓地の『霊滅術師カイクウ』を蘇生させるから」

『霊滅術師カイクウ』 ATK1800

「うあ〜……ちよい、ちよい待ってよ。まださだめの場には『超古代生物の墓場』が……」

「……さだめ、わかってるんだろ？ だからルインの儀式召喚に重ねて『奈落の落とし穴』を使わなかったんだろ？」

「ううう……」

「どっぴうことですか？」

「……『儀式魔人ディザース』を儀式召喚に使った儀式モンスターは、畏の影響を受けなくなるんだ。つまり、墓場を素通り」

「とういことは……」

「私の勝ち。ダイレクトアタック」

「うにゅあ〜〜！！」

さだめLPO

「うあ〜！ 負けた〜！」

「……さだめのアンチデツキ事態に問題は無かった筈だけだな」

実際、さだめの使ったカードは最後の奈落に至るまで全てルインにとってはご遠慮願いたいカードばかりだった筈。

「よくもまあ勝ったよな。ルイン」
「任せて」

ルインはいつもの無表情ながら、何処となく気分が良さそうだ。
「何せ、初勝利」

「なに？」

「貴方と会ってから、初めて勝てた」

「そうだったか？」

そもそもルインがデュエルすること自体あまりなかったか。

「むう……何が悪かったかなあ？」

「お前は油断し過ぎだ。伏せ除去くらいしてから突っ込め」

「うっ……それは、まあ……」

「とはいえ、あの一瞬でアンチデッキとしては完璧な位に組み上げ
てはいたけどな」

主に特殊召喚メタのデッキだったが。ルインに対してはこの上な
く作用していた筈だ。

「ルインのプレイングが良かったってことか」

「……ぶい」

得意げなルインに、さだめが無然とした表情を見せる。

「さだめ、アンチデッキ使つと負ける気がしてきた」

「……そうかもな」

俺も、なんとなくそんな気がしてきた。

「なにゆえ！？ ホワイ！？ 何故アンチデッキで勝てないの！？
今回のデッキだって、ルインのみならず、大半のデッキに互角以
上に戦えるスタンダードなメタビートのつもりだったのに！」

確かに、汎用性の高い強カードだったとは思うが。

「あー何と言うか、この世界のルールの、アンチデッキは許容さ
れ難いんじゃないか？」

「なんて狭量な世界……！ もっと寛容に、人に優しくならなきゃ
ダメだと思う！」

「そうだな。言ってみるといい。鏡に」

「うにゃ〜！ さだめ最近勝率低い〜！！ いつかはアカデミアを恐怖の底に陥れるほどのボスの風格を醸し出してたのに〜！」

「よくあるだろ。敵の時滅茶苦茶強かったのにパーティーインすると全然使えないライバルキャラ」

「そんなキャラは嫌あ〜！！ 絶対、絶対もつと強くなって見返してやる〜！！」

日も暮れ始めたレッド寮に、さだめの叫びが響き渡るのだった。

第三期第五話「未来に望む光」（後書き）

こんにちは。

というわけで、ルインの勝利です。今回は希望だけです。慈愛は、またいずれ。一度に両方出すのはもったいないと気付きました。

今回のさだめは本人も言っていた通り、メタビート。主に特殊召喚に対するメタビートです。注目カードは『超古代生物の墓場』。現環境に於いては高レベルシンクロモンスターに対するメタですね。GXだと融合ヒーローとかには効果抜群です。ルインのデッキには刺さりまくりなカード群を使いましたが、世界の法則だか何だかの所為で敗北（笑）。というか、今回のさだめ、いいところなしです。前回のデュエルから、ずっとダメダメさだめちゃんです（笑）。通称さ駄目ちゃん（嘘）。

それでは、悠でした！

第三期第六話「新入生の日々」(前書き)

完全書き下ろし。ちなみに、改訂するにあたって改訂前とは話の順番が入れ替わったりとかがしますが、そこら辺も予めご了承ください。

第三期第六話「新入生の日々」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第三期第六話「新入生の日々」

「え〜ですから以上のように、フィールド魔法は魔法・畏ゾーンを
圧迫せずに効力を発揮できるという利点の他、その効果を相手にも
利用される可能性があることや、特性上魔法・畏除去カード以外に、
相手のフィールド魔法の上書き発動による破壊まで視野に入れなく
てはならないので、運用についての注意点は他の永続カードよりも
多く……」

「うあ〜……タイクツ」

さだめは、今更わかりきったことをつらつらと並び立てる授業に
うんざりしつつ、机に突っ伏した。

この世界では、これだけデュエルモンスターズが重要な意味を持
つてくる癖に元の世界のような所謂遊戯王Wikiと言っべきもの
がないらしく、デュエルに関する知識の習熟はさだめやお兄ちゃん
からすれば小学生レベルと言っても過言じゃない。

「むしろ、重要な意味を持っているからかも」

重要であるからこそ、経済の中心ともなり、Wikiにあるよう
な運用法や考察は研究者による参考書として売買されている、と見
るべきか。

「うう……」

我ながら、柄にもない真面目な思考。けど、そうでもないとくだ

らな過ぎる。なにしろさだめには、生けるウィキペディアことお兄ちゃんがいるのだ。元の世界じゃ遊戯王初心者でも知っているような講義しかないアカデミアの授業なんて、退屈でしかない。

うっ……やっぱお兄ちゃんここに遊びに行こうかなあ……でも授業には出るって散々言われちゃってるし……お兄ちゃんには言われたくない気がするけど。

そんなことをぼけーっと考えていると、次第に瞼が下がってくる。

「……御堂さん」

「むあ？」

退屈過ぎて半ば以上眠っていたさだめに、教師（名前は知らない）が声をかけていた。

「そんなに、私の授業はつまらないですか？」

「うん」

即答する。超つまんない。

「っ……そ、そうですね。なら、これから出す問題に答えていただきますが、よろしいですね？」

「いいけど、手短にね。さだめ眠いし」

毎晩お兄ちゃんとの情事をシミュレートするのに忙しくて寝不足だし。

「……！ では、フィールド魔法を守る際に最も有効なカードは何か、お答えください」

「はあ？」

あまりにバカバカしい質問に、さだめは眉をひそめた。

「わかりませんか？」

何故か得意げに問いかけてくる教師がむかつくので思い切り答えてやることにした。

「フィールド魔法を守る効果自体は『フィールドバリア』が一般的。フィールド魔法の破壊や上書き発動を防げるから。でも、バウンスや除外には対応してないから、例えば『ペンギン・ナイトメア』なんかの効果でバウンスされた場合『フィールドバリア』自体が足か

せになつて発動できないこともある」

どうせこの教師は『フィールドバリア』を正答として用意してたんだろうから、思い切り馬鹿にしてやる。

「他のカードを守ることでまで考慮するならカウンター罠によるパームシジョンが防衛には最適。でも基本的に永続的にフィールド魔法を守るのと考えるより、破壊されてもすぐさま二枚目を発動できるようにサーチ手段を確保する方が効率的。汎用性の高い『テラ・フオーミング』は筆頭として、特定のフィールド魔法はモンスター効果によつてもサーチ出来るんだから一々守るためにスロットを裂くのは非効率だよ」

大体最も有効なカード、なんてその場その時で変わるんだから唯一絶対の回答なんてないのにさ。

「つていうか、教える内容が薄い。そんなルールブック読めば誰にだつてわかること態々高い金払つて教えてもらうとか馬鹿らしい。もうちょっと実のある授業しないと眠くなるだけだよ」

あゝもうホント、お兄ちゃんの個人レッスンが懐かしい。昔からそうだった。学校の勉強も、全部お兄ちゃんに教わってきた。学校の授業なんて半ば素通りしていたさだめが無事に進級できたのも、お兄ちゃんが教えてくれたお陰だった。

「さだめ、お昼寝にお金かけるほど裕福じゃないよ？」

「くっ……！」

「御堂さん」

「んあ？ どしたの凜」

「言い過ぎです」

「凜は真面目だね。さだめだつて真面目に受けたくはあるんだよ？」
態々お兄ちゃんの所に遊びに行くのも我慢して出ているんだから、出来るならそれだけの意味のある授業を受けたい。

「でも、お兄ちゃんの愚痴とか雑談聞いている方が圧倒的に実になりそうなんだもん。それにさだめ、フィールド魔法みたいな、場持ちの悪いカードあんまり好きじゃないし」

「さだめがそう言った瞬間だった。」

「それは聞き捨てならないザウルス！」

教室の後方から、すっごく個性的な怒声が聞こえてきた。

「なに？ 今の……」

「御堂さだめ！ オレとデュエルするドン！ オレが勝ったら、フ
ィールド魔法が弱いとは言わせないザウルス！」

「は？」

さっぱり分からない内にどんどん話が進んで行く。

「ちよつと待つて。大体、きみ誰？」

「オレの名前はティラノ剣山！ 今年最強の新生ザウルス！」

「主席入学はさだめだけだね」

とりあえず反論はしておいた。

「それがまず納得いかないドン！ あんたみたいな奴がオレを差し
置いて成績トップなんてあり得ないザウルス！」

「うっさいな。大体なにその語尾。馬鹿にしてる？」

「愛すべき恐竜さんを最大限リスペクトした結果ザウルス！ いい
からオレとデュエルするドン！」

一応授業中んだけど……ま、いつか。授業聞いているより退屈し
のぎにはなりそうだし。

「いいよ？ 丁度最近負けが込んできて鬱憤溜まりまくってるし……
…アンタで発散してあげる」

「お、おい君たち……」

「別にいいでしょ。どうもフィールド魔法の有用性を示したいみた
いだし……ルールブックの音読聞いているよりは見世物になるしさ」

「ぐ……」

さっ、と括るのが面倒で下ろしたままだった髪を縛る。

「んじゃ、デュエルしよつか。自称一番君？」

「自称じゃ、ないドン！」

「デュエル……」

「オレの先攻ザウルス！ ドロー！ オレは手札の『キラーザウル

ス』を墓地に捨てて、フィールド魔法『ジュラシックワールド』を手札に加え、はつドン！」

はつドンって……兎も角、フィールドが原生林に囲まれた太古の時代に变化する。

「これこそが恐竜さんたちの楽園！ 最強のフィールド魔法ドン！」
「はいはい。それで？」

熱くなっている剣山に、水を差すように冷たい対応をして見せる。案の定不満そうな剣山は、舌打ちをしてからカードの説明をする。

「このフィールド魔法は、恐竜さんと鳥獣族の攻撃力・守備力を300ポイントアップさせ、畏の効果も受け付けなくなるドン！ 更に、攻撃対象に選択されたとき、守備表示にすることもできるザウルス！」

ドン、だのザウルス、だのうるさいなあ……。

「オレは手札から『俊足のギラザウルス』を特殊召喚するドン！」

『俊足のギラザウルス』 ATK1400 1700
へえ。まあ恐竜族なら定石通りだね。

「更に、オレは『俊足のギラザウルス』をリリースして『暗黒ドリケラトプス』をアドバンス召喚ザウルス！」

『暗黒ドリケラトプス』 ATK2400 2700

剣山の場に、なんか羽毛とかクチバシとか生えたヘンなトリケラトプスが召喚される。

「これがオレの愛する恐竜さんザウルス！ カードを一枚セットしてターンエンド！」

あー……確かあのフィールド魔法、さだめの知ってる奴と違って面倒なんだよね。畏の効果受けなかったっけ。

「ま、関係ないか。さだめのターン、ドロー！ さだめは手札の『ダーク・クリエーター』を捨てて『ダーク・グレファア』を攻撃表示で特殊召喚」

『ダーク・グレファア』 ATK1700

「ふん！ そんなモンスターじゃ、オレの恐竜さんは止められない

ザウルス！」

「わかつてるよ。さだめは『ダーク・グレファア』のモンスター効果。手札の『キラー・トマト』を墓地に送ってデッキから『ネクロ・ガードナー』を墓地に送るよ」

「そんなにモンスターを墓地に送ってどうするドン？」

「こつするの。さだめの墓地に存在する闇属性モンスターが三体になったことで、さだめは手札から『ダーク・アームド・ドラゴン』を特殊召喚！」

『ダーク・アームド・ドラゴン』 ATK2800

「げっ!? こ、攻撃力2800!？」

「更に『ダーク・アームド・ドラゴン』のモンスター効果! 墓地の闇属性モンスターを除外することで相手フィールドのカードを破壊するよ! 『キラー・トマト』を除外して『暗黒ドリケラトプス』を破壊! 『ダーク・ジェノサイド・カッター』!」

ダムドが『暗黒ドリケラトプス』を葬る。

「ああっ!? オレの恐竜さんが!」

「続いて『ダーク・クリエーター』を除外! 伏せカードを破壊するよ!」

「くっ! その効果にチェインするドン! トラップカード『生存本能』! 墓地の『キラーザウルス』と『俊足のギラザウルス』、『暗黒ドリケラトプス』を除外してライフを1200ポイント回復するザウルス!」

剣山LP5200

ダムドの伸ばした鎖に貫かれながらも、伏せカードはその効果を発揮する。

「む、破壊する順番ミスったね。んじゃ更にダムドの効果。アンタの大好きなフィールド魔法を破壊するよ!」

ダムドの鎖が暴れ回り、『ジユラシクワールド』を破壊しつつしていく。

「恐竜さんたちの楽園が! なんてことするドン!」

「楽園なんてね、いずれ滅び去る運命なんだよ！ 恐竜は絶滅した！ それは何よりの証拠でしょ！ さあ、行くよ！ 二体のモンスターでダイレクトアタック！」

「うぐわあああああああつ!?」

剣山LP700

「さだめはカードを一枚セット。ターンエンドだよ！」

「くうう……まだまだ、恐竜さんは、そう簡単には負けないドン！ オレのターン！ ドロー！ ガルルウ！」
「うひゃつ？ なんかヤバイ目。ど、瞳孔縦に裂けてない？」

「オレは手札から『トレード・イン』をはつドン！ 手札の『究極恐獣』を捨ててデッキからカードを二枚ドロー！」

デッキ圧縮ね。あ、でもそれだけじゃないかな？

「そして魔法カード『死者蘇生』！ 墓地から『究極恐獣』を蘇生するザウルス！」

『究極恐獣』 ATK3000

「っ！」

来たね……攻撃力3000の全体攻撃モンスター。

「カードを一枚セット。そして永續魔法『命削りの宝札』をはつドン！」

「うぐ、どいつもこいつも……！」

なんでこういう時にいつつもそんなカード持つてるのさ！

「バトルだドン！ 『究極恐獣』で『ダーク・グレファア』を攻撃！

『アブソリユート・バイト』！」

「くうっ！」

さだめLP2700

「続けて『ダーク・アームド・ドラゴン』にも攻撃ザウルス！」

「それはさせないよ！ 速攻魔法『異次元からの埋葬』！ 除外されているモンスターを三体まで墓地に戻す！ さだめのモンスターを全て戻し、墓地から『ネクロ・ガードナー』の効果を発動！ このカードを除外することで相手モンスターの攻撃を無効にする！」

『究極恐獣』の攻撃は確かに怖いけど、同じモンスターには一度しか攻撃できない。これでダムドは残せる。

「くっ……！ モンスターを一体セット。カードを更に三枚セットしてターンエンドだドン」

「さだめのターン！」

それにしても面倒くさい。『異次元からの埋葬』で墓地にモンスターは戻ったけど、伏せカード四枚とモンスター二体を破壊するにはカード不足。

「ドロー……！」

さだめはドローしたカードを見て、ああやっぱりと溜息を吐きたい気分になった。

「結局最後に決めるのは、コイツか。さだめはダムドの効果発動！

『キラール・トマト』を除外して伏せカードを一枚破壊！ 右側！」
破壊されたのは『激流葬』。危なかったね。

「そして次に『ダーク・クリエイター』を除外して左端のカード！」
破壊されたのは『狩猟本能』。むう、ブラフか。

「破壊するのを間違えたザウルス！ これで墓地の闇属性は一体！
例え『究極恐獣』を倒しても、オレには次のターンがあるドン！」

「……ないよ。次のターンなんてね」

「!？」

「さだめは『終焉の精霊』を召喚。攻撃表示」

『ケケケケツ！』

『終焉の精霊』 ATK900

笑い声を上げながら現れた、忌々しい闇の精霊。除外されているのは三枚だから攻撃力はたったの900。

「な、なんか禍々しいモンスターザウルス……」

剣山の台詞に、思わずクスリと笑ってしまう。そうだね。その感想は正しい。

「け、けど攻撃力900じゃオレの恐竜さんは倒せないザウルス！」

「わかってないね。この子で攻撃なんかしないよ」

「ど、どういうことザウルス？」

「ダムドの効果を発動。墓地の『ダーク・グレファア』を除外して『終焉の精霊』を破壊する」

ダムドは『終焉の精霊』を鎖で貫く。『終焉の精霊』は奇声を上げながら消滅していく。

「自分のモンスターを破壊した!? なんのつもりドン！」

「……『終焉の精霊』は、破壊された時、除外されている闇属性モンスターを全て墓地に戻す。『イビル・デッド』！」
除外されていたカードが纏めて墓地に戻ってくる。

「そ、そんな……じゃあ!？」

「そう。蹂躪しなさい。『ダーク・アームド・ドラゴン』。『ダーク・ジエノサイド・カッター』！」

墓地の闇属性は『終焉の精霊』も含めて五枚。『ネクロ・ガードナー』を残して全てのカードを除外し、剣山の『命削りの宝札』以外、全てのカードを破壊する。

「破壊したのは……ミラフォに奈落に『奇跡のジュラシック・エッグ』か……ふふ、やっぱりこの期に及んで良い引きしてるね」

もつとも、最初に『激流葬』を貫いた時点で、さだめの勝ちは決まっていたらしいけど。

「さあ……トドメだよ。ダムドでプレイヤーにダイレクトアタック

! 『ダーク・アームド・ヴァニツシャー』！」

「うわああああああつ!？」

剣山 L P O

「ま、どんな強力な効果を持つフィールド魔法も、破壊耐性を持ってない奴は弱いし、除去され易いんだよ。覚えといて」

さだめは、何だかんだで久しぶりの勝利にスツとした気分になりながらそう締めくくった。

「御堂さん、絶好調でしたね」

「ああ凜。まあね。凜とデュエルした時は、まあ凜と同じく使いなれないデツキだったってことで言い訳させてよ」

「はい。その内メインデツキ同士でデュエルしましょう」

「もちろん！ あ、でも気をつけてね。さだめのメインデツキって要するにメタデツキだから」

「う……お、お手柔らかにということ……」

「くふふー、どーしよっかな」

凜とは、こないだのデュエルから割と仲良くしてる。まあ……いちおートモダチ、って言ってもいい、と思う。

「どうしましたか？」

「あのだ、凜」

急に黙り込んださだめを不思議がったのか、凜が怪訝な顔で尋ねてくる。

「う……その」

こういうのって、どう言葉にすればいいのかわかんない。というか、言っているの不安になる。

「その、さ。敬語、なしにしてもらってもいい、かな？」

「え？」

「凜の敬語ってさ、キャラ作りのためでしょ？ できればその、そ

ーいうのなしにして欲しい、っていうのかな。あはは……」

「あ……」

らしくないな、とは思っけど、さだめは正直、お世辞にも人間関係得意じゃないし。全部お兄ちゃんに頼ってたから、トモダチかも、いなかったし。アテナはなんか知らない内に喧嘩トモダチっぽくなってたけど。

「その……」

「うん。わかった。ごめんね。他人行儀に接してて」

「あ……えと、その……」

「じゃあ、さだめって呼び捨てにしている？ さだめの方は、もう

呼び捨てにしているけど」

「え、あ、うん。いいけど……」

あっさりど、素の喋り方で話しかけてくれた凜に、さだめの方が戸惑う。

「ふふ、でもさだめって、いつでも誰に対しても強気っていうか、押し寄せゴーゴー！　みたいな性格だと思ったけど……こんなところもあつたんだね」

「う……」

そりゃ、さだめは押し寄せゴーゴー青信号な感じでお兄ちゃんには迫ってるけど……。

「だって、今までお兄ちゃん以外と話したことなんて殆どなかったし」

誰もがお兄ちゃんみたいになんでも受け入れてくれるわけがない。さだめはそれをよく知ってる。だからこそ、お兄ちゃんとか、それ以外のどうでもいい人にはいくらでも強気で話しかけられる。

「でも……」

トモダチ、なんて。

こないだ、お兄ちゃんが剣士さんに言っていた『甘いな。生せば生る。成さねば生らぬ。何事も。生らぬは人の生さぬ生りけり、だ。お前だって、友達が増えて困ることはないだろう？』『黙ってるだけでは何もならんぞ。アテナは特殊だ。特に何にもしなくても友達になってくれたアテナはな』……その言葉は、さだめにも向けられていた気がした。お兄ちゃんは、剣士さんを諭しながら、さだめの背中も押してくれた。だから……。

「……本当にお兄さんのことが好きなんだね」

「好きだよ。他人に何を言われても、こればかりは譲ってやらない。お兄ちゃん以上の人なんて、さだめ知らない。絶対ない」

だから、絶対、絶対……。

渡さない。誰にも、渡さない。

「さだめ？」

「っ!?!」

あ……。

「な、なんでもない。そ、それよりもう授業も終わりでしょ？ お兄ちゃんのとこ行こうよ！ 剣士さんもいるよ〜?」

「ちよっ！ わ、私はその……」

「いいていいてわかってるから〜」

「わ、わかってないって！ ちよっとさだめ!」

一瞬脳裏に浮かんだモノを、考えないようにして、さだめは凜とお兄ちゃんの所に向かうのだった。

第三期第六話「新入生の日々」（後書き）

というわけで、さだめVS初期剣山でした。まだこの時期の剣山は十代と出会ってないです。デュエルディスク狩りもしてないですね。というか、こんなの書いた後で今さらですけど、アカデミアって一年二年の教室って分かれてましたっけ？　なんか普通に剣山とか十代たちと同じ教室にいたような……（汗）。ま、まあこまけえこたあいんだよ（開き直り）！

前回さだめが想像以上に負け続けていることに気付いた作者が救済のために勝たせてやったというのは内緒です。

さだめは友達作りなんてしたことないですからね。人付き合いはセツの仕事でしたから。凜は、自分から歩み寄って得た最初の友達、ってことになるんでしょうね。

それでは、悠でした！

第三期第七話「圧倒」

アルカナく切り札の騎士く

第三期第七話「圧倒」

「やつほーお兄ちゃん。遊びに来たよ」

放課後、俺が帰り支度をしていると、教室の扉が開いてさだめと凜が顔を出した。

「よう、お前たちも授業終わったのか？」

「退屈だったけどね」

「言っな」

元の世界で大学生だった俺は元より、高三だったさだめも、高一レベルの授業やデュエルの超基礎的知識を問うアカデミアの授業はそりゃ退屈だろうが。

「あと、なんか突っかかっってきた一年坊をデュエルで叩き潰してきたから。それはそこそこ楽しめたかな」

「……トラウマ作ってないだろうな？」

「大丈夫でしょ。別にそれほどメタったわけじゃないし、極々普通の次元ダークでブツ潰したただけだから」

それなら大丈夫だろうが……。

「まあ、退屈でも授業はちゃんと受けておけ。俺みたいに、出席日数で頭悩ますのも馬鹿らしいだろ？」

「自分で言っんだ……」

当事者だからな。是非反面教師にでもなんでもしてくれ。

「……でもさだめって本当に頭良かったんだね」
半ば呆れたような口調でそう言う凜。

「まあ、何と言っても新入生代表だからね！」
思い出したくもないがな。

「コイツも、頭の出来は悪くないんだよ。残念な思考回路しているけど」

主に下ネタ方面に。

「うう、納得できないよ」セツ君もさだめちゃんも、何時の間に勉強してるの？」

どうもそれほど勉強が得意ではないらしいユーキちゃんが若干涙目で問いかけてくる。

「俺は時間の開いた時にやってるぞ。さだめは知らんが」

「別にやってないよ？ テストとかはお兄ちゃんにヤマ聞いて一夜漬けすればどうとでもなるし」

「セツ君は兎も角、さだめちゃんの何それズルイ」

「ふっ、表面だけ聞けばそうかもしれないけど、お兄ちゃんの勉強方法聞いたらさだめの方が幾分か常識的に思えるはずだよ」

「なんだ。人を非常識人みたいに」

少なくともさだめにだけは非常識人扱いされたくはないが。

「セツの勉強方法ってどんなだよ？ 教科書読んだだけ、とかか？」
からかい半分、といった様子で剣士が尋ねてくる。

「いくらなんでもそんなわけないだろ。何者だよ俺は」

「いや、お前ならあり得そうだ」

一体どういふ評価をされているんだか。

「それで、どんな勉強方法なの？」

それは、と俺が答える前にさだめが得意げに話し始めた。

「右手で古文、左手で数学の問題集を解きながら英語のリスニング」
「え……」

「要するに、色んな教科を同時進行で進めるんだよ。お兄ちゃんは両手にシャーペン持って、ヘッドフォン付けて三十分。これがお兄

ちゃんの勉強スタイル」

「教科書読んだだけよりよっぽど人外じゃねえか……」

「時間が取れないんだ。効率よく進めることを突き詰めたら、同時進行になるのは当然の流れだろう？」

「だろう？　じゃねえよ！　んなことできんのはテメエくらいだ！」

「というか、時間が取れないのってなんで？」

「無駄スキルに磨きをかけるのに時間がかかるからな」

「どれもこれも、一朝一夕には極められないのが無駄スキルでもあるんだ。」

「後は睡眠学習。これがまた効率いいんだ」

「何しろ寝ているだけで頭良くなるという優れモノである。授業中には必須のスキルだ。」

「いや……普通睡眠学習ってのはそういうもんじゃねえと思うが……」

「授業はちゃんと聞こうよ」

呆れたと言った様子のユーキちゃんにも言われてしまった。むう、一体何が悪かったのか。

「それはそれとして、凜もよくコイツに付き合ってここに来たな。大分迷惑かけたのに」

「いえ……」

凜は横目でチラリと剣士の方を見た。やっぱり、こいつらって何かあるのかね。まあ、詮索はしない方が良くかもしれんが。

「……勢揃い」

「ルイン、お前も来たのか」

「迎えに来た」

そんな必要もないんだが……。

しかし、本当にこれで勢揃いだ。そうなると、どうしてもあいつの言葉が思い起こされる。

「イレギュラーを集め束ねて……こういうこと、なのか……？」

俺が思案の海に沈もつとした、丁度その時。

「やあ、ちゃんと僕のアドバイス通りに行動してくれて嬉しいよ。セツ」

「っ!?!」

そいつは、平然と現れた。

「真中……希望……!」

「久しぶりだね。セツ。元気になったようで何よりだ」

「……アテナは何処だ」

「何故僕に聞く? 別に僕がアテナを連れ去ったわけでもないのに」
「だが……」

アテナが消えた原因。それに深くかかわっているコイツなら……。

「まあ、確かにアテナの居場所くらいなら知ってはいるんだけどね」

「! 何処だ!」

「……ふう。アテナといい君といい、どうしても君たちは“答え”

を知りたがる。RPGをやる時、必ず攻略本を見ながらやるタイプだね。現代人は誰しも……」

「そんなことはどうでもいい!」

コイツの言葉遊びに付き合うつもりはない。

「あ……」

「凜? もしかして、この人のこと知ってるの?」

希望を見て、びっくりした表情を見せる凜。

「私の所属している芸能事務所の、スポンサーです」

「なに?」

「職業柄、知り合いは多い方だよ。とはいえ、初めて会う子もいるけれど」

希望は剣士に目を向ける。

「まあ、それはいいさ。それよりも、だ」

真中希望は、俺に目を戻す。

「どうしても、聞きたいかい? “答え”を」

「当たり前だ」

「仕方ない。なら、アテナに言ったのと同じ提案をしようか」

「提案？」

「僕とデュエルして、勝てばいい。そうしたら、君たちの知りた
いこと、一言一句漏らさずに、解決法その他諸々プラス 含めて話
てあげよう。それが、この世界のルールであることだし、ね」

真中希望は悠然とデュエルディスクを構える。…… 上等だ。

「イマイチお前の目的が判然としないが…… アテナの居場所がわ
かるっていうんなら容赦しない。全力で勝つ」

「彼は強い。気をつけて」

以前戦い、負けたというルインが忠告してくる。

「そう、アテナにも言ったけど…… 僕は強いよ？ 君たちが考えて
いるよりもずっとね」

関係ない。ルインやさだめは、コイツが心を読む力を持っている
かもしれないと言っていたが、俺だって、負けるわけにはいかない！

「デュエル」

「さて、たまには先攻を譲ってもらおうか。ドロー」

ルインに聞いたコイツのデッキは光属性天使と闇属性悪魔の力オ
ス。だが、それを鵜呑みにするつもりはない。

「僕はモンスターをセット。カードを二枚セットしてターンを終了
しよう」

「俺のターン、ドロー！」

「リバースカードオープン」

「！」

「『ダスト・シュート』だ。手札を公開して貰おう」

「くっ……」

俺の手札は『オネスト』『切り札の騎士 クイーン』『豊穡のア
ルテミス』『マジック・ジャマー』『アルカナソード クローバー』
『切り札の騎士 テンス』の六枚。

「そうだね。『切り札の騎士 クイーン』には退場しておいて貰お
うか」

『セツ様…… 申し訳ありません』

希冴姫がすまなそうにデッキに戻って行く。

「ち……なら、俺は『豊穰のアルテミス』を攻撃表示で召喚！ バトルフェイズ！」

『豊穰のアルテミス』 ATK1600

アイツの守備モンスターが何かはわからない。だが、情報を得るためにリバーささせる！

「俺は『豊穰のアルテミス』で守備モンスターに攻撃する！」

「残念。僕の守備モンスターは『ペンギン・ナイトメア』だ。守備力は1800。残念ながら、『豊穰のアルテミス』では突破できない」

『ペンギン・ナイトメア』 DEF1800

「ぐ……」

セツLP3800

アルテミスの攻撃は、燕尾服を纏ったへんなペンギンにブロックされてしまう。しかもアイツは……！

「『ペンギン・ナイトメア』がリバーした際、バウンス効果が発動する。『豊穰のアルテミス』にはもうしばらく休んでいて貰おうか」

「くそ……俺はカードを二枚セットしてターンエンドだ」

俺が伏せたカードは、アイツにはバレバレだろうが、伏せないのもおかしい。

「僕のターン、ドロ。僕は『闇の指名者』を発動する。宣言するカードは『オネスト』だ」

「なに……？」

俺のデッキには確かにもう一枚『オネスト』が入っている。だが、なぜ態々……。

「……俺はデッキから『オネスト』を手札に加える」

「おや、カウンターはしないのかい？」

「アドバンテージを稼がせてくれるカードに態々カウンターして手札を減らすような馬鹿はしない」

アルテミスも戻されてしまったので、『マジック・ジャマー』を使えばディスアドバンテージにしかないしな。

「そうかそうか……甘いな」

「!?」

「僕は手札から『疫病狼』を攻撃表示で召喚。効果で攻撃力を倍の2000ポイントにアップ。バトルフェイズだ」

『疫病狼』 ATK1000 2000

不味い。俺のフィールドにモンスターはいない……！

「『疫病狼』でプレイヤーにダイレクトアタック」

「ぐあつ……！」

セツLP1800

「メインフェイズ2にリバースカードオープン『魔のデッキ破壊ウイルス』」

「なにっ……!?」

「知っていると思うけど、このカードは攻撃力2000以上の閻魔性モンスター一体をリリースして、君のフィールド上、手札に存在する攻撃力1500以下のモンスターを全て破壊し、墓地に送る。

僕は攻撃力2000の『疫病狼』をリリース」

「くっ……!?」

俺の手札には二体の『オネスト』と『切り札の騎士 テンス』。

辛うじて『豊穡のアルテミス』は引つかからないが……。

「僕はカードを一枚セット。ターンエンドだ」

「っ……俺のターン！ ドロー！」

「ドローしたカードを確認させてもらおう」

「……『ジャム・ウォリアー』だ」

「では、『魔のデッキ破壊ウイルス』の効果で破壊だ」

「……俺は」

「ストップ。リバースカード発動だ。『マインド・クラッシュ』」

「な……」

「宣言するのは、当然『豊穡のアルテミス』。捨てて貰おうか」

これで……。

「君の手札はゼロ。リバーカードは二枚とも判明しているしね」

「……………」

何も……出来ない……？

「た、ターン、エンド」

「僕のターン、ドロ―。残念だ、セツ。君は……思った以上に、弱いな」

「っー!!」

「僕は『ペンギン・ナイトメア』をリリースし、『野望のゴーフア―』をアドバンス召喚。バトルフェイズにダイレクトアタックだ」

『野望のゴーフア―』 ATK2400

「ぐあああああっ!?!」

セツLPO

「……そんな」

「ここまであっさり……？」

「何も……何もできないままに……？」

「ずっと、僕のターンだったね」

「……………」

圧倒的だ。コイツが人の心を読めるとか、読めないとか。そういう問題じゃない。

「心なんて読めなかったとしても、全く関係のない戦略……………」

「そうだね。正直、僕の力を考えれば、別にピーピングカードなんて使う必要もなかったわけだけど。それじゃあ君たちも納得できないだろう?」

確かに……コイツがもし、ピーピングも何もなしでハンデスを使ってきたのなら、卑怯だ、とでもなんとでも言えた。だが……。

「僕は、この力の性質上、どう足掻いても正々堂々とはいかない。だから、本来なら君とデュエルして徹底的に叩きつぶすような役回りには向いてなかったんだけどね」

愕然とする俺を前に、真中希望は淡々と言葉を紡ぐ。

「隔絶しているから。君たちとは。だが、それでもセツには敗北を見て貰いたかった。本来なら、その役目は他の……そう。君たちにやって貰いたかったが……」

そう言つて、真中希望は俺たちのデュエルを呆然と見学していたメンバーを見渡す。

「結局、セツがまともに敗北したのはネイキッドだけ。ここまで負けなしを続けていたら、セツが弱くなつてしまいそうだね。過干渉はしたくなかつたが……」

「思った通りにことが運ばなくてイラついたのか？」

むしろ自身がイラついているような剣士の言葉に、真中希望は苦笑気味に肩をすくめた。

「さだめたち、貴方のコマでもなんでもないんだもん。思い通りにいかないのは当然だよ」

「ゲームマスター気取りなら帰つて」

さだめとルインの容赦ない口撃にも、真中希望は特に気にした様子も見せない。

「……嫌われたものだね。そこまで悪いことをしたかな？」

「貴方が来てから、みんなおかしくなつちやつたんだよ？ アテナちゃんがいなくなつたのも、セツくんが元気をなくしたのも……好きになんてなれないよ」

「……そうだね。もつともだ」

寂しそうな笑顔で頷く。

「言い訳はしない。確かに、アテナが行方不明になつたのは僕の一言が原因だ」

『人生は、楽しいかい？』だつたか。

「一体、あの言葉に何の意味があつたんだ」

「セツ。君はもう、僕に質問する権利を失つた。僕は敗者の言葉に耳を傾けない」

「っ！」

そうだ……俺は、負けたんだ。何もできず、あっさりと。圧倒的

な実力差で。

「……じゃあ、オレが質問する。それなら構わねえだろ」

「剣士……」

「じゃ、さだめも。お兄ちゃんやルインの仇もとってやりたいし」
他の皆も一斉にディスクを構える。

「みんな……」

「事の次第は、さだめから聞きましたから。正直、許せません」

「……本当に、嫌われたものだね」

なら、とことんまで嫌われ役に徹そうか。

他の皆には聞こえない。近くに居た俺にもギリギリ聞こえるかどうかといった声量でそうつぶやいた希望は、その背の高さを使ってその場に居る全員を見下す。

「いいだろう。一人一人、なんてそんな悠長なことをしている時間はない。……全員纏めてかかってくるといい」

「なっ……！？」

この場に居る全員……！？ 希望の言うところの敗者である俺とルイン、デュエルをしない希冴姫を除けばその人数は四人。それを纏めて……！？

「ば、馬鹿にしてんのか！」

「そうだ。馬鹿にしている」

「……」

はつきりと、断言した。馬鹿にしていると。冷たい目で、彼らを見下しながら。

「無様に大声を張り上げ、気合でドロ―が変わると本気で信じている。滑稽過ぎて最早笑いも起きないね。優雅さの欠片もない」
クツクツと心底から馬鹿にしたような笑い声を上げる。

「セツを負かしてくれるかと期待していたのに、情けない。もうちよつとくらい優秀だと思っていたんだが」

「デメエ……」

全員の殺気染みた視線を浴びても、真中希望の余裕は崩れない。

涼やかに、ただ視線を受け流すだけだ。

「そうだね。どうせだからハンディキャップもつけようか」
それどころか、更に怒りを煽るような言葉を続ける。

「君たちは一人につきライフ4000。僕は……」

真中希望は、あくまでも不敵な笑みを浮かべたまま……、

「1、あればいい」

とんでもない条件を平然と繰り出した。

第三期第七話「圧倒」(後書き)

改訂前だと、ユーキちゃんとのタッグがあつたりしましたが、それを削除。ただし、ユーキちゃんの出番は別に作ります。ご安心を。次回のハンデデュエルも、改訂前の七対一に比べれば難易度が下がっています。当然決して楽ではないデュエルになると思います。それでは、悠でした！

第三期第八話「革命」(前書き)

お久しぶりです。今回もデュエル内容を完全に一新したので、中々苦戦いたしました。ただし、希望のデッキの基本コンセプトは変わっていません。要するに、例のおジャマ大革命。

切「そんなデッキで大丈夫なのか？」

希「大丈夫だ。問題ない」

ぞ！ 問題ないらしいので、見てやってくださいな(笑)。では、どうぞ！

第三期第八話「革命」

アルカナく切り札の騎士」

第三期第八話「革命」

「ライフ……1だと……!？」

「そんなの……」

一瞬頭の中が真っ白になったのか、呆然と呟く彼ら。僕はそんな彼らを見渡して、余裕たつぷりに告げてやる。

「ああ。加えて、ライフを回復するカードも使わない。最初から最後まで、ライフのまま勝利して見せようじゃないか」

「貴方は……何処まで……」

馬鹿にすれば気が済むのか。そんな言葉は、口にするまでもなく伝わっていた。更に、追い打ちをかけてやる。

「ああ、それと一人一人がエンドを迎える度に僕のターンじゃむしる僕が有利になってしまっうね。よし、君たち四人のターンが終了してから僕のターン。これで良いだろう」

いくら僕でも、この条件は流石に厳しい。だけど、それでも尚、僕は自分を不利に追いこんで行く。

「僕の使うデッキも教えておこっ。『おジャマ大革命』。もちろん、僕なりの調整は加えてある」

アテナを相手にしたときのデッキ。当然、あのままじゃいくらなんでも勝ち目がないし、改良はしてあるけど。

「フアンデッキ……!？」

「当然、このデッキを使う以上『大革命』も決めて見せよう。これも、僕の勝利条件に加えておくか。『大革命』を使わずに勝利したら僕の負け、とね」

相手が複数いる以上、アテナに使ったようなロックの形は使えない。その状態で発動難度の高い『大革命』の使用……やりがいがある、どころの話じゃないな。

「……本当にそんな条件で勝てると思ってるの？ さだめたち、これでも結構強い自信あるんだけど」

「プライドに拘るのは好きじゃねえが……それでも、全く気にならないわけじゃねえな」

だろうね。プライド、いや、自負と言ってもいいだろう。それを持たないデュエリストなどいない。少なくとも、ここまでコケにして黙って引き下がるような子たちじゃない。

「ふふ、まだ条件が欲しければ、考えても構わないが」

「結構です。それでも私たち、怒ってるんだから」

「そうだね。そのようだ。なら、改めて始めよう。究極のハンデデュエルをね」

『デュエル!!』

「先攻も譲ろう。特に必要性を感じないからね」

「ちっ、ならオレのターン、ドロー！ オレは『切り込み隊長』を攻撃表示で召喚！ 効果で『コマンド・ナイト』を攻撃表示で特殊召喚だ！」

『切り込み隊長』 ATK1200 1600

『コマンド・ナイト』 ATK1200 1600

展開力に優れた下級戦士、それに除去力のある剣聖を組み合わせたビートダウン。なるほど、確かにバランスがいいね。

「オレはカードを二枚セットしてターンエンドだ！」

「私のターン！ 私は『海神の巫女』を守備表示で召喚。効果で、フィールドは『海』として扱われます。カードを一枚セット。ターンエンドです」

『海神の巫女』DEF2000

「さだめのターン、ドロー！ さだめは『終末の騎士』を攻撃表示で召喚。効果でデッキから『ネクロ・ガードナー』を墓地に送ってカードを一枚セット。ターンエンドだよ」

『終末の騎士』ATK1400

「わたしのターン、ドロー。わたしは『サイレント・ソードマンLV3』を攻撃表示で召喚するよ」

『サイレント・ソードマンLV3』ATK1000 1400

サイレント・ソードマン……『切り込み隊長』がいる以上、狙うことは出来ないか。

「カードを一枚セットしてターンエンドだよ」

「僕のターン、ドロー」

さて……漸くターンが回ってきたか。自ら科したルールとはいえ、もどかしいね。

「僕は手札から『ライトニング・ボルテックス』を発動。手札を一枚捨てて、フィールドのモンスターを一掃する」

「それくらいは予想済みだ！ リバースカードオープン！ 『我が身を盾に』！ ライフを1500ポイント支払って『ライトニング・ボルテックス』の効果を無効にするぜ！」

剣士LP2500

そう。発動するしかない。例えばライフを支払おうとも、全体破壊は避けなきゃならない。

「いいだろう。ちなみに、僕が手札から捨てたのは『おジャマジック』。よってデッキからおジャマ三体を手札に加える」

例え無効化されても問題はない。手札が増えるだけのことだ。

「更に魔法カード『強欲な壺』を発動。デッキからカードを二枚ドロウする」

これで、手札は十分。

「僕はモンスターを一体守備表示でセット。カードを四枚セットし、ターンエンドにしようか」

「なら、オレのターンだ！ ドロー！」

「リバーカード連続発動。畏カード『凡人の施し』を二枚発動する。カードを二枚ずつドロウし、手札から『おジャマ・グリーン』と『おジャマ・イエロー』を除外する」

「手札交換!？」

本来なら、ただ手札を入れ替え、デッキ圧縮をするだけのカードだけど、『おジャマジック』と組み合わせれば、手札の不要なおジャマを処理しつつ、新たな手札を四枚ドロウするに等しい超アドバンテージカードに化ける。

「ちっ、オレは『鉄の騎士 ギア・フリード』を攻撃表示で召喚！
更に手札から永続魔法『連合軍』を発動する！」

『鉄の騎士 ギア・フリード』 ATK1800 3200

『切り込み隊長』 ATK1600 2600

『コマンド・ナイト』 ATK1600 2600

『我がマスターをあも侮辱されては、我とて堪忍袋の緒が切れる。と言うものだ』

「僕は君のことは、高く評価しているんだけどね？ セツに勝った

のは君くらいのものだし」

『ふん。敵からの世辞など、虫唾が走るのみよ』

「言ってくれるじゃないか」

さて……さだめやユーキの場の戦士も合わせて戦士族は五体……
下級モンスターとは思えない攻撃力だ。

「まずは『切り込み隊長』で守備モンスターに攻撃だ！」

「この瞬間、僕は手札から『牙城のガーディアン』の効果を発動する。手札から捨てることで、守備モンスターの守備力を1500ポイントアップさせる。僕の守備モンスターは『弾圧される民』。よってその守備力は3500だ」

『弾圧される民』 DEF2000 3500

「なに!? ぐあっ!？」

剣士LP1600

民の前に現れた守護者が、弾圧されている民を、身体を張って守り切る。その光景はまるで……。

「まるで、君たちが悪者のようじゃないか」

皮肉気に口の端を釣り上げてみせる。

「くっ……オレはカードを一枚セツト」

「おっと。そのメインフェイズ2にトラップ発動。永続トラップ、『ディフェンダーズ・マインド』。このカードはメインフェイズにのみ発動することができる永続トラップ。僕の守備モンスターの守備力は更に倍になる」

『弾圧される民』 DEF7000

「なっ……守備力7000だと!？」

「ただし、僕はモンスターを攻撃表示にすることが出来なくなるけどね。ああ、勘違いしがちだけど、『牙城のガーディアン』の効果が切れても守備力は7000のままだよ。『ディフェンダーズ・マインド』を破壊しない限りはね」

「くそっ……ターンエンドだ」

「わ、私のターン、ドロー！ 私は『水陸両用バグロスMk-3』を攻撃表示で召喚します！」

『水陸両用バグロスMk-3』 ATK1500

「ほう……そのカードを引いたか」

「バグロスは、フィールドが『海』の時、相手プレイヤーにダイレクトアタックが可能です！ どんなに守備力が高くても無意味ですよ！」

フィールドは『海神の巫女』の効果で一時的に『海』になっている。ダイレクトアタックには不都合がない。

「バトル！ バグロスでプレイヤーにダイレクトアタック！」

「手札から『速攻のかかし』を墓地に捨て、ダイレクトアタックを無効にする」

バグロスから放たれた魚雷を、僕の前に現れたかかしが身を呈して防ぐ。

「くっ、ダイレクトアタックでも無理なの……!? ターンエンド！」

「さだめのターン、ドロー！ 要するに、そのトラップを破壊すればいいんでしょ!? 速攻魔法『サイクロン』！」

「よし、これなら……!!」

剣士たちの顔に、笑みが浮かぶ。だが……。

「甘いね。甘過ぎる。それは鬼門だ」

「え……?」

僕は、むしろ笑みを深めてトラップを発動する。

「カウンター暴発動! 『アヌビスの裁き』! 手札から『おジャマ・ブラック』を捨てて『サイクロン』を無効化! そして『鉄の騎士ギア・フリード』を破壊する!」

「な……」

『馬鹿なっ!? ぬおおおっ!?!』

「更に、破壊したモンスターの攻撃力分、ダメージを与える!」

「ぐああああっ!?!」

剣士LPO

「まず……一人だ」

「く、そっ……!!」

全体攻撃力の底上げを担っている剣士を最初に排除出来たことは大きい。

「そんな……」

「全てが裏目に出たね。『我が身を盾に』でライフを削らなきゃ、今で終わることもなかったらうに」

「っ……」

「ついでに、これで『終末の騎士』たちの攻撃力も元に戻る。僕にとっては、いいこと尽くめだね」

『終末の騎士』 ATK2800 1400

『サイレント・ソードマンLV3』 ATK1000

「くっ……さだめは『ダーク・グレファア』を攻撃表示で召喚!

効果で、手札から『キラートマト』を墓地に送ってデッキから『ネクロフェイス』を墓地へ！そして『ネクロフェイス』と『キラートマト』を除外することで、手札から『ダーク・ネフティス』を墓地に送るよ！」

『ダーク・グレファア』 ATK1700

なるほど……次のターンへの布石か。『ディフェンダーズ・マインド』の場持ちは望めそうにないな。

「そして除外された『ネクロフェイス』の効果を発動！全てのプレイヤーはデッキの上から五枚をゲームから除外する！」

味方にも影響するカードを躊躇いなく使う。この辺りは、流石と言っておこうか。

「そして速攻魔法『異次元からの埋葬』！除外された凜の『ゴキガガガゴ』と『水霊使いエリア』それにさだめの『ネクロフェイス』を墓地に戻す！」

アフターケアも万全か。悪くない。

「さだめはこれでターンエンド。ごめんね剣士さん」

「いや……あの場面なら、オレもきつと同じことをした筈だ。それより……」

「うん。後は任せて」

「わたしのターン、ドロ！わたしは『サイレント・ソードマンLV3』をレベルアップさせるよ！デッキから『サイレント・ソードマンLV5』を特殊召喚！」

『サイレント・ソードマンLV5』 ATK2300

「更に『サイレント・マジシャンLV4』を召喚。マジックカード『レベルアップ！』を発動！『サイレント・マジシャンLV8』！」

『サイレント・マジシャンLV8』 ATK3500

「中々の攻撃力だ。僅か二ターンでそれだけの攻撃力が並ぶのは壮观だね」

「……『サイレント・マジシャンLV8』の倍の守備力を盾にして言われると、嫌味にしか聞こえないよ」

「本心なのだけどね。気を悪くしたのなら謝ろう」

「……ターンエンド」

「さあ、僕のターンだ。ドロー！」

とはいえ、僕も大分手札を使った。受け身なだけじゃ、押し切られるだろう。

「スタンバイフェイズに、『ネクロフェイズ』の効果でゲームから除外された『異次元からの宝札』の効果を発動。このカードを手札に戻し、全てのプレイヤーはデッキからカードを二枚ドローする」
相手にもドローさせてしまうけど、それは仕方がない。

「手札から二枚目の『ライトニング・ボルテックス』を発動。手札の『異次元からの宝札』を墓地に送り、君たちのモンスターを全て破壊する」

「でも、わたしのサイレントモンスターは、貴方の魔法効果を受けないよ！」

「構わない。いくらでも沈黙を守り通せばいいさ」

ともかく、サイレントモンスター以外はこれで全て処理出来た。

厄介なバグロスも倒せたのだから結果としては上出来だ。

「カードを三枚セット。ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！ 私は『憑依装着エリア』を攻撃表示で召喚。ターンエンドです」

「……………」

凜の精霊か。僕をみる目には猜疑心こそあるものの、他の人間たちに比べて冷静な視野が見て取れる。なるほど、優秀な精霊だ。

それにどうやら、まだアトランティスは来ないらしい。アトランティスを出されると少々面倒だから、出来るだけその前に片付けておきたい。

「さだめのターン、ドロー！ スタンバイフェイズに墓地から『ダーク・ネフティス』の効果を発動！ 特殊召喚して、魔法・罫カードを一枚破壊するよ！ 『ディフェンダーズ・マインド』を破壊！」

『ダーク・ネフティス』 ATK2400

『デイフェンダーズ・マインド』が破壊されたことにより『弾圧される民』の守備力が元に戻る。

『弾圧される民』 DEF7000 2000

「バトル！『ダーク・ネフティス』で『弾圧される民』を攻撃！」

「迂闊だね。トラップ発動『聖なるバリアーミラー・フォー』！」

「させないよ。カウンタートラップ『トラップ・ジャマー』！バトルフェイズ中のトラップカードを無効化するよ！」

「悪いが、それも想定済みだ。カウンタートラップ『魔宮の賄賂』を発動。魔法・畏の発動を無効にし、相手はカードを一枚ドロースる」

「くっ！？」

畏を阻害する効果を無効にされ、フィールドのモンスターが聖なるバリアによって跳ね返された暗黒の焰に焼き尽くされていく。

「サイレントモンスターも、畏には無力だからね」

「う……」

これで改めて、フィールドを一掃できた。

「さだめには感謝しないといけないね。見事に僕をサポートしてくれている」

「……っ！」

悔しそうにさだめが唇を噛む。

「ふふ、それにしても……」

敵である僕が、聖なるバリアとは……、我ながら皮肉が効いているね。

「さだめは、ターンエンド」

「わ、わたしのターン、ドロ。わたしは……『シャインエンジェル』を守備表示で召喚。ターンエンドだよ……」

『シャインエンジェル』 DEF800

「おやおや、急に元気がなくなっただな。若い内はもつと元気を見せてくださいな」

「このっ……！」

憎々しげに僕を睨むさだめたちだが、言い返すことは出来ないらしい。

「さあ、僕のターンだ。『ディフェンダース・マインド』を破壊してくれたお陰で、僕も攻撃に移ることが出来る。本当に、ありがたい話だ」

「ぐ……」

自分のしたことが、次々と裏目に出ていることが悔しいのだろう。さだめが俯く。

「とはいえ、手札がなければ何もできない。僕は魔法カード『天よりの宝札』を発動。全てのプレイヤーは手札が六枚になるようにデッキからカードをドローする」

これも、相手にまで手札を与えてしまうカードだけど……まあ構わない。何故なら……。

「僕は手札から『団結するレジスタンス』を攻撃表示で召喚。魔法カード『悪魔の供物』の効果で、さだめの場の『ダーク・ネフティス』を墓地に送り、手札から『逃げまどう民』を守備表示で特殊召喚する」

『団結するレジスタンス』 ATK1000

『逃げまどう民』 DEF600

「っ！」

三人のみならず、傍から見ていたギャラリーも息を呑む。それはそうだろう。何せ……。

「これで、『大革命』の準備が整ったのだから」

僕の場合に伏せられた一枚のリバースカード。それが殊更にゆっくりと持ち上がって行く。

「トラップ発動。『大革命』！」

最早説明は不要。『天よりの宝札』によって増えた手札すら、この効果により全て墓地に送られる。

「そして魔法カード『死者蘇生』を発動。墓地から『おジャマ・ブラック』を守備表示で特殊召喚。カードを一枚セットし、更に永続

魔法『命削りの宝札』デッキから手札が五枚になるようにカードをドロウする」

まったく。『天よりの宝札』といい、非常識なドロウカードだが、四人ものデュエリストを相手にしている僕にとっては非常にありがたい。

「よし。では装備カード『団結の力』を『団結するレジスタンス』に装備する。僕の場のモンスターは四体。よって攻撃力は3200ポイントアップ」

『おジャマ・ブラック』DEF1000

『団結するレジスタンス』ATK1000 4200

「バトルフェイズ。そうだね……凜に攻撃するでしょうか」

アトランティスやバグロス、『ギガガガギゴ』などの純粋に強いモンスターの登場や、モンスターを奪われる、ピーピングハンデスを受ける。どれもライフがたった1しかない僕にとっては防御を崩され易く、非常に危険だ。早々に倒してしまいたい。

「っ！」

「バトル！『団結するレジスタンス』で凜にダイレクトアタック！」「待った！ さだめは墓地から『ネクロ・ガードナー』の効果を発動！ ゲームから除外してモンスターの攻撃を一度だけ無効にする！」

「残念、止められてしまったか」

当然、さだめの墓地にそのカードがあったことは知っていたので、然程の落胆はない。

「あ、ありがとうさだめ」

「うっん。さだめ、今回足を引っ張ってばかりだもん。せめてこれくらい……」

「ふふ、それじゃあ、僕はカードを一枚セットし、ターンエンドだ」「私の、ターン！ ドロー！」

凜の手札は、今ドロウしたカードのみ。果たして何が出来る？

「私はカードを一枚セット。ターン、エンド」

「さだめのターン、ドロー！ さだめはモンスターを一体セットしてターンエンド」

「わたしのターン、ドロー。カードを一枚セットしてターンエンド」
全員動かさず、か。いや、動けないんだろ。『大革命』を使われれば、手札すら空っぽにされるのだから。

「僕のターン、ドロー。さて、随分と時間がかかってしまった。そろそろ行かせて貰うよ」

「っ！」

僕の言葉に、全員が身構える。

「フィールド魔法『おジャマ・カントリー』を発動する」

フィールドが、どこかファンシーな集落のように変化する。

「フィールド魔法……！？」

「フィールド魔法『おジャマ・カントリー』は、手札のおジャマをコストにおジャマを蘇生する効果と、おジャマが存在するときに、全てのモンスターの攻守を反転させる効果を持っている」

「それじゃ……！」

『おジャマ・ブラック』 DEF1000 0

『弾圧される民』 DEF2000 400

『団結するレジスタンス』 ATK4200 3600

「二体目の『弾圧される民』を攻撃表示で通常召喚。そして、僕はもう一体の『弾圧される民』を攻撃表示に変更する」

『弾圧される民』×2 ATK2000

『団結するレジスタンス』 ATK3600 4400

「っ、れは……」

「さて……二人に消えて貰おう」

僕はモンスターのいない凜とユーキを眺める。

「バトルだ。『弾圧される民』二体で凜を。『団結するレジスタンス』でユーキをそれぞれ攻撃する」

「と、トラップ発動『和睦の使者』！ このターンの戦闘ダメージを無効にするよー！」

「そうはさせない。リバーズカードオープン『トラップ・スタン』
！このターン、トラップカードの効果は無効になる」

「あ……」

「きゃあああっ!?!」

凜LP0

「うあああっ!?!」

ユーキLP0

「凜っ！ ユーキさん！」

「さて……これで、残るは君一人。さだめは僕を支援してくれたからね。一人だけ残してみた」

「くっ……」

「とはいえ、そろそろ決着だ。僕は手札を全てセットし、ターンエンドだ」

「さだめのターン……」

「どうした？ ドローしないのかい？ サレンダーでも、僕は一向に構わないが」

「だ、誰が……!」

強がるが、さだめの顔色は悪い。デッキに手が伸びない。

「さだめ!」

「……お兄ちゃん?」

「頑張れ。さだめ」

「え?」

「今の俺には、外から見ていしかできないから……だからせめて、
今だけは目を逸らさない」

「お兄ちゃん……」

「正直に言う。最近、アテナの事が頭からずっと離れなかった。お
前たちという時も、きつと心ここに在らずな状態だったと思う……」

「……うん。わかってる。お兄ちゃん、ずっとカラ元気だったもん。

さだめたちにはわかるよ」

「ああ……でもだからこそ、今はお前から目を逸らさない。最後まで

で……見てるぞ」

「ありがとう。お兄ちゃん」

セツの励ましで、さだめはその目から怯えが消え、その手がデツキに伸びる。

「さだめの……ドロー！」

セツ、さだめ。君たちの覚悟、しかと見届けた。

「……だが、現実には残酷に、滅びを告げる」

「っ!?!」

「カウンタートラップ発動『強烈なはたき落とし』。その逆転は、実らない」

「あ……」

さだめの手から、カードが落ちる。そのカードは『終わりの始まり』。さだめの墓地に闇属性モンスターは『大革命』などの影響で八枚。内五体を除外して三枚ドロー。ドローする筈だったカードは『ダーク・アームド・ドラゴン』『冥府の使者ゴーズ』。そして『終焉の精霊』。僕の場合、全てのカードを殲滅し、フィニッシャーとなっていた筈の、正にデイスティニードローだった。

「……素晴らしいラストドローだった。君たちの、健闘を称えよう。だが、今回は……」

僕の勝ちだ。

「僕のターン、ドロー。マジックカード『抹殺の使徒』を発動。裏守備モンスターを除外するよ」

さだめの場に残された、最後のカード。『魂を削る死霊』が消滅する。

「……数々の暴言、ここに詫びよう。君たちは、素晴らしいデュエリストだった。これから先、もっともつと強くなる。世界を救う希望となる決闘者だ」

だからこそ、一度徹底的に潰れておかなきゃならない。挫折を知らない強者ほど、脆いものはないのだから。

「負けない強さより、負けて立ち上がる強さの方が、尊いものだから」

ら。誰かを救うなら、救われる立場としての経験が、きっと必要になるから」

ここで一度、負けて貰おう。踏みつけられて尚、綺麗に花咲かす事を願って。

「バトル。『団結するレジスタンス』でプレイヤーにダイレクトアタック。『団結の旗印』」

「あ、あああああああっ!?!」

さだめLPO

「這い上がり、強くなれ。そしてまた、僕とデュエルしよう。いつか全てが終わった、その時に」

そして、その時は……。

「僕を倒せるくらいまで、強くなってかかっておいで」

第三期第八話「革命」（後書き）

こんにちは。

というわけで、パーフェクト勝利の希望さんでした。

ううん。それにしてもチートドローカードを超多用しましたね。

強欲な壺を始めとして。

『異次元からの宝札』（アニメオリジナル）

ゲームから除外されたこのカードを、次のターンのスタンバイフェイズに手札に戻し、お互いにカードを二枚ドロウする。

『天よりの宝札』（アニメ効果）

お互いのプレイヤーは手札が六枚になるようにデッキからカードをドロウする。

『命削りの宝札』（アニメオリジナル）

デッキから手札が五枚になるようにカードをドロウする。発動後自分のターンで数えて五ターン後のエンドフェイズ、このカードを破壊する。このカードが破壊された場合、自分は手札を全て墓地に捨てる。

……いやちょっと自重しましょう希望さん。自分で書いておきながら。ちなみにディフェンダーズ・マインドも原作、ゲームオリジナルカードです。効果は大体以下の通り。

『ディフェンダーズ・マインド』永続罫

このカードはメインフェイズにのみ発動することができる。自分フィールドの守備モンスターの守備力を倍にする。自分フィールドに存在するモンスターは全て守備表示となる。

効果により増減した守備力を倍にするので、今回のように守備が上がっている時に使うと破格の守備力を得られる実にアステカ向きのカードです。

それでは、悠でした！

第三期第九話「これから」(前書き)

モンハンをやりつつも、一応更新はします。まあ、改訂前からあんまり変わっていませんしね。とりあえず投下です。

第三期第九話「これから」

アルカナく切り札の騎士く

第三期第九話「これから」

「……立てるかい？」

「……いい。自分で立つ」

「ふむ。じゃあセツ。手を貸してやってくれ。それならいいだろう？」

「大歓迎」

「ったく……」

調子のいいさだめの言葉に苦笑しながら手を差し出す。それから、希望の方を向く。

「真中……希望」

「希望でいい。僕は、呼ぶ時も呼ばれる時も必ず名前で、と決めているんだ」

「お前の言葉に従う義理もないが……まあいいか。希望」
「何かな」

優雅に、洗練された、と言ってもいい微笑みを浮かべる。そんな希望に、俺は……、

「ありがとう」

礼と共に、頭を下げた。

「……どういたしまして」

それでも奴はピクリとも動揺せず、涼しい顔で礼を受ける。

「ちえ。少しは裏をかけたかとも思ったんだけどな」

「甘いな。僕の裏をかく、というのは4000年に一度の奇跡でも起こらない限り不可能だよ」

「言ってる」

「ふふ……さて」

一頻り微笑した後、希望は先ほどよりも幾分敵意の薄れた目で自分を見つめる俺たちを見渡す。

「さだめ、最後のドロー。あれは中々良かった。土壇場での引きが出来たのは、流石にセツの声援あつてのものかな？」

「……どっちにしろ、はたき落とされちゃったけどね」

希望の讃辞に、僅かに面食らったようなさだめが、ぷいっと目を逸らして皮肉気に返す。

「それでも、だよ。そもそもあれは、さだめのドローが何なのか、あらかじめ知っていた僕だからこそ出来た反則に過ぎない。もちろん、『強烈なはたき落とし』自体は『大革命』と相性が良いから入れている、と言うのもあるんだが」

そうだろうな。『大革命』で手札全滅した後でドローをはたき落とされたら後は基本的に為す術なくやられる。だが……。

「別に俺の声援は関係ないだろ。あれはどっち道ドローしてたカードだし」

そう言う俺に、希望はふっ、と柔らかな笑みを浮かべた。

「違うな。そうじゃない。確かに現実的に考えて、デュエリストのメンタルが次のドローに影響することはあり得ないオカルトかもしれない。けれど、確実にそれはあるんだ」

「……そういうものか？」

「そうとも。例えば今回、君たちは有効なカードをあまり引くことができず、僕はその場に最適とも言えるカードを引き当てることが出来た。何故だと思う？」

「そりゃ……ついてなかった、とか」

「違うね。間違っているよ剣士。確かに運でもあつたのかもしれない」

い。だけど、やっぱり大事なのはデュエルに臨む心構え。あんなハ
ンデを提示されて、『勝って当たり前』みたいな心境でデュエルす
るより、絶対に負けない、負けたくない。勝ちたい！ って強く想
うデュエルをしてこそ、デッキは答えてくれるのさ。最後の、さだ
めみたいだね」

「……………けど、それって精神論だろう？」

「何事も、最後にモノを言うのは心の強さだよ。それって、結構冗
談抜きで力を持つものさ」

「意外だな。お前って、もっとガツガチに理論武装したりロジッ
ク中心に物事を捉えるタイプだと思ってたんだが」

俺の言葉に、希望はチチチと指を振る。……………どうでもいいが、コ
イツさつきから一々拳動が大げさだな。

「確かに僕は、基本的にはロジカルに考えるタイプだよ。けど、奇
跡ってものが、強く願う者に力を貸すってことも、僕は知っている
つもりだから」

奇跡、ね。

「さて、それじゃあこれで講評は終了！ 後は、君たちの成長を願
って幾つか情報を公開しておこうか」

「は？」

希望のあっさりとした言葉に俺たちは目を見開いた。

「お前……………だって、俺たちは負けたのに……………」

「ああ。君たちの言葉に耳を貸して、質問に答えるつもりはないよ。
けど、僕自身は話さない、なんてことは一言も言っていないしね」

愕然とした。

「じゃ、じゃあ、私たちが貴方とデュエルしたのって……………」

「うん。まあ基本的には無駄骨だね」

あっさりとその暴露する希望。

「ま、また……………またやられた……………」

「……………やっぱり」

さだめは特に落ち込んでいるし、珍しくルインが溜息を吐いてい

る。そう言えば、初めて会った時も同じような返し方されたって言うてたっけか……。

「さて……と言っても、言うべきことはそれほど多くない。君たちのこれからの動きについての提案、といったところだね」

「提案？」

「そう。別に言った通りにしなくても構わない。僕のことを、そう簡単に信用は出来ないだろうしね。が、少くくは考慮して貰えると嬉しいかな」

確かに、散々引つかき回されて直ぐ信用出来るほど、俺たちは人が出来ちゃいない。

「……わかった。聞くだけ聞いておいてやる」

「まずは君たちが一番気になってるであろうアテナのことだけ……多分、近い内アカデミアには戻ってくるはずだ」

「っ！？ 本当か！」

それは、多分今一番知りたい情報。それを知っているというのなら……。

「ただし、彼女にも君たちと会えない理由がある。ここに来たとしても、決して君たちの前には姿を現そうとしないだろうね」

「なんで……！」

「こればかりは、どうしても言えないな。これは彼女の……アテナ自身の口から語られるべきだと思うから」

「そう、か……」

期待していなかったと言えばウソになる。だから、こうして断られると落ち込んでしまう。だが、アテナのためだというのなら我慢するしかない。

「なに、心配することはない。アテナを見つけた時、全てを聞いて判断するだけだろう？ 君なら、悪いようにはしないだろうしね」「当たり前だ。アテナにどんな隠しことがあると、今更引くわけないだろう」

俺がそう言うと、希望は安心したように微笑む。

「そうか。いや、そうだろうね。君ならばそれも当然か。これでも心配していたんだ。僕にも理由があるとはいえ、君たちを引っかき回してしまった負い目というものがある」

「アテナが無事に帰って来さえすれば、水に流してやってもいい。元々、人を恨むのは苦手なんだ」

もちろん、その理由にもよるがな。

「それはありがたい。では、続いてのアドバイスだ。一度精霊界に行くといい」

「精霊界に？」

「僕とデュエルしてわかつただろう？ 君たちはまだ、力が足りない。精霊界、即ちデュエルの力の源泉に触れることで、君たちはより強くなるだろう。精神的にも、より成長すると思う。行ってみて損はないだろうね」

「精霊界、ね。そんな簡単に行けるもんなのか？」

剣士が胡散臭げにそう漏らす。だが、その点は問題ない。

「その点は、セツがいるから問題ないね」

「ああ。俺なら精霊界まで皆を連れていける」

未だに原理が良くわからんこの力だが……まあ、そんなものは後でもいい。

「うん。精霊界での交通手段は僕の方で手配しておくでしょう」

「！」

俺はその言葉を聞いて、物凄く、そう物凄く嫌な予感がした。

「お、おい希望……まさかその交通手段って……」

「当然、サイクロイドだね」

「ぎゃああああああっ!？」

俺は悲鳴を上げてその場にしゃがみこんだ。さ、最近やっと忘れかけていたのに！

「……何故そこまで嫌うかわからない。彼は気の良い二輪」

「……今更だが、気の良い二輪というその状況に冷汗が止まらない俺がいます。何処の九十九神だ」

「ビークロイド系は基本みんなそうかと……」

「っていつか本当にニガテなんだねお兄ちゃん」

「思わず寒気がするほど。アレとは致命的に相性が悪い。自転車怖い。」

「饅頭怖い？」

「ヤメロ」

その小鼻のままもしヤツに囲まれるようなことがあれば……。

「俺は……死ぬかもしれない」

「どれだけ苦手なんだ……」

「一応、精霊界では最も標準的で、愛されている乗り物なんですけど……」

溜息混じりの希冴姫だが、俺からすれば、その感覚がわからない。「どうやら俺は、精霊界とは相容れぬようだ」

「というかあの馬鹿高いレンタル料で愛されてるとか。王国の国家予算レベルじゃなかったか？」

「なあ、それ俺も一緒に行かなきゃいけないんじゃない？」

「おや、行きたくないのかい？」

「奴に遭いたくない」

「徹底してるね」

まあ、そうも言ってもらえないんだろうけどさ。

「にしても、存外色んな事を教えてくれるんだな」

もっと思わせぶりに、色々なことを隠すかと思っていた。

「まだまだ、隠していることはあるさ。大事なこと、色々だね」

「それは……」

確かに、アテナのこと、終焉のこと、イレギュラーのこと、希望自身のことなど教えてくれないことは多々あるが……。

「まあ、あれだよ……」

希望は遠い目をして、遙か過去を思い返しているようだ。

「……悲劇なんて、物語の中だけで十分だ、とは思わないか？」

「……そうかもな」

創作、フィクションだからこそ楽しめる。でも、現実は……。

「……こんなことしておいて、虫が良いかもしれないが……」
「ん？」

「僕も、君たちに出来る限りの協力はするつもりだ。僕の連絡先を渡しておくよ。何か……そう、何かあれば、頼ってくれ」

「……気が向けばな」

色々思うところはあるが、希望の支援というのは必ず役に立つだろう。

「大事にしてくれると嬉しい。一応、僕の彼女たちを除けば極少数しか知らないプライベートナンバーだからさ」

「そんな凄いもの……ってイヤ待て。お前今なんて言った？」

「うん？ 極少数しか……」

「その前！」

「大事に……」

「ベタ過ぎる！」

「僕の彼女たち、かな？」

「彼女『たち』ってなんだ『たち』って」

「ああ、言っただけだったかな。僕は彼女が複数いる」

「なあっ……！？」

ざわり、と一瞬周りが騒然とした。

『なにいいいい！？』

「おまつ！ それ、光さん知ってるのかよ！？」

俺は思わず希望の彼女であるはずの名前を出す。希望は別段特に問題ないといった風情でサラッと返す。

「もちろん。っていうか、隠れてやってたら僕今頃ミンチだから」

あの光さんがどうやって希望をミンチにするのかも多少興味があったがそれ以上に！

「それって……その……」

「ハーレム？」

「そうそれ！」

ルインがあっさり口に出してしまっただが、マジでか!?

「その言葉を使うと、途端に薄っぺらく、というか軽く感じるけど……まあ、そうだね」

啞然とした。いや、確かにコイツ超絶美形の金持ちでデュエルも神懸かり的に強くて……って別に不思議じゃないじゃん。けど……。

「よく、ハーレムなんか作ろうとしたな」

「作ろうとした、なんてつもりはないよ。ありがたいことに、僕に好意を寄せてくれる娘たちが複数人いた、ってだけ」

「いやだから、それを全員、その……受け入れることにしたなって……」

「なに。僕は、こういう立場だから全員を養っていく力はあった。後は、覚悟だけさ」

「覚悟?」

「全員を養う力はある。けどその立場から、スキャンダルってのは結構致命的だね。そういう、所謂世間の目とかから彼女たちを守る覚悟、って奴だよ」

「……覚悟、ね」

複数に好意を寄せられている、という状況自体は俺もそう変わらない。それに悩んで、アテナを受け入れることを悩んでいる俺に対し、コイツは全員受け入れる、という選択肢を選んで実行してしまったわけだ。

「なに。君ならきつと、皆納得できるエンディングを迎えられるさ」
「……なら、いいんだけどな」

正直、コイツの決断力とか覚悟は羨ましくも思う。俺は……。

「まあそもそもセツなんて今全国的に“妹を手籠めにし、銀髪美女を雌犬にしている鬼畜界の英雄”的立場になってるんだから今更と言えば今更……」

「うおおおおおおおおおおっ!? そういやそんなことがああああああっ!?!」

「さだめたちの蒔いた芽は、確実に花を咲かせようとしているよ!」

「計画通り（ニヤリ）」

「わ、わたくしもテレビには映っていたハズですのに……」

「せ、セツくん……あんまり気を落とさないで……」

ユーキちゃんが慰めてくれていたが、何と云うか、焼け石に水だ。周りからの同情の視線も逆に痛い。

「あー……アレは、痛かったな。ツツコミを入れるとか、いつそ笑うとか、そんな次元を遥か超越してたしよ」

「ネットでもお祭り騒ぎだったからねえ……凄いよ？『鬼畜王子を祭るスレ』とか」

「どるうあああああああああああ！？」

まさかの追い打ち！ハンカチとかハニカミとかのノリで王子化すんなよ！

「割と羨ましがられているみたいだよ？俺もあやかりたい！みたいなコメ多かつたし」

「見た目だけなら可愛いもんね。さだめ」
「色んな意味で、自分で言うな、ですわ」

得意げなさだめに、希冴姫が突っ込んでいた。まったくその通りだが、今の俺は突っ込んでいる余裕がない。

くっ！まさかここに来てあの入学式のダメージが襲ってくるとは！

「……一応、私が場を収束させてはおいたんですけど……」

「まあ、流石にアイドルといえど、あのインパクトじゃなあ……それこそ、焼け石に水ってヤツだろ」

「もう……許してくれ」
これ以上恥の再確認はしたくない。

「はっはっは。まあ、そう難しく考えることはないよ。軽く考えるのは良くないが、考え過ぎて手遅れになるのはもっと辛い。セツ。願わくば、誰も後悔しない結末を望んでいるよ」

希望はそう言って俺たちに背を向けた。今回はこれで、ということうらしい。

「……ああ、そうそう。最後に一つ、アドバイスを」
「？」

「今日は早めに休むといい。セツも、色々と疲れが溜まっているはずだから」

「はあ？」

最後にそんな、物凄く一般的なアドバイスを残して、希望は帰って行った。

俺たちは顔を見合わせつつも、これからのことを話し合っただけの日には解散することにした。

翌日、俺は疲れから風邪を引いてダウンし、改めて希望のアドバイスの正しさを実感することになるのだった。

第三期第九話「これから」（後書き）

以前程の酷評にはなりませんでした。まあ、改訂後のデュエルはそれほどさだめたち悪手は打ちませんでしたしね。

ちなみに一昨日くらいから、モンハンばかりで全然タッグフォー
スはやれていない悠ですが、最近自分なりにさだめデッキを構築
中。一応次元ダーク。いや素人構築ですが、意外と回るもんですね。
キラー・トマトからスナイプ・ストーリーカーリクルートして除去、す
かさずダムドと繋ぐのが理想的。ダムドが初手になければなんとか
ネクロ・ガードナー使いまわして耐えつつ闇王プロメティスからダ
ムド・終焉の精霊でコンボ。次元ダークとかいいつつ、殆ど普通の
ダムドビートですが、一応除外ともコンボしてるので次元と言うこ
とにしといてください。上手く決まるとめっちゃ気持ちいいです。

それでは、悠でした！

祝・100万PV記念特別編(前書き)

タイトル通りです！ ちょっとした企画もやりますので、どうか協力くだされば幸いです！

祝・100万PV記念特別編

アルカナ（切り札の騎士）

祝・100万PV記念特別編

というわけで、タイトルの通り特別編になります！

「……まあ、色々言いたいことはあるが、まず一つだけ言わせろ。作者」

なにかな？ 主人公。

「……う遅い！ 遅すぎる！ おま、アクセス数見てみる！ 10万どころか今118万行ってるぞ！？ 今まで何してた！」

「118万って……端数として切り捨てられるレベル遙か越してるよ……いつそ120万行くまで待ってからやればよかったんじゃないか？ さだめは思うんだけど」

し、しょうがないじゃないか！ まさかここまで行ってるとは思わなかったんだよ！ 祝・六十話！ とか前々話で言ってる場合じゃないかった！

「あはは……その気持ちはわかりますけど……」

おや、メインヒロイン（笑）のアテナじゃないか。本編では今大変な状況だけど、こんなとこ来ていてもいいの？

「今の私は異時空同位体の……って！ 今サラリと聞き捨てならぬいこと言ってますでしたか！？ 誰がメインヒロイン（笑）ですか！」

いやだって……出番が……。

「じゃあ出してくださいよ！ ほら、あるじゃないですか！ 私がセツたちのために華麗に終焉の欠片相手に無双するところとか！」
今は希望が無双状態で……。

「端役が無双してメインヒロイン（笑）が出番なしって……ってだからなんで（笑）とかついてるんですか！ これ取ってくださいよ！ こんなもの、ペいっ、です！ ペいっ！」

いや、ってというか希望を端役呼びわりって……君が最初に無双され始めたんだし……。

「ってというか、何気に私敗戦多くありません！？ 作者さんの中じや一番ガチなデッキだって言ったのはウソですか？」

いや、そのはずなんだけどね。話の流れ的かというと……。

「あ、あーそろそろいいか、アテナ……」
「うう……」

「唸らない唸らない」

「きゅうううううううううー！」

「威嚇しない威嚇しない。……ってというか威嚇になってない。むしろ可愛い」

「か、可愛いくないですもん！」

何この子可愛い。

「あ、別に貴方に言われても嬉しくはないです
ですよね！」

「……そろそろ話戻そうよ。お兄ちゃんもアテナも作者さんも」
『さだめ（さん）に突っ込まれた……』

「そこで絶望的な雰囲気醸し出さないでくれるかなあ！？」
とりあえず、話を戻しましょうか。

「まだ本題にも入ってないけどな」

……訂正。本題に、入りましょうか。
「そうしてください」

要するに、なんかこう、ねえ？

「要してないし、そもそも要する話が出てなかっただろっが」

口下手なんだよう。

「それは物書きとしてどうなんでしょう……」

コホン。冗談はさておきまして、拙作がここまでの来れたのもアルカナを応援してくださった皆様のおかげです。つきましては、何か企画の一つや二つやるうかなーと思いついてございますはい。

「いきなりみょうちきりんな口調で話だすな……まあ、そういうことだ」

「100万記念に企画を、ってことだね」

そんなとこ。ほら、他の作者様方はやってる方もいるわけですし。

「……尻馬に乗っかるうということですねわかります」

「浅はかですわ……」

「そんなことよりとっとと本編進めた方がいいんじゃないかな？」

「でえい！ いきなりどこから湧いてきたヒロインズ！ いいじゃないか！ 時代の流れには乗るもんだよ！

「で、例えばどんな企画が思い付いてるんだ？」

「そうだねー。とりあえずキャラ人気投票で一位のキャラに番外を

……。

『却下』

アテナ以外からダメだし！？

「ダメだよ！ さだめ全然読者に媚び売ってないもん！」

「まずお前は、その読者に媚を売る、という考え方から矯正していかうな？」

「そうでなくとも、残念ながら読者人気ではアテナに勝てる気がしない」

「……まことに遺憾ながら、同意見ですわ」

「わたし、そもそも出番も少ないし……」

「い、いいじゃないですか！ 私は今、本編で殆ど出れないんですから番外くらい優遇してくれたって！」

……君たちだけが対象じゃないんですけどね。

『……………』

「……みんなすごい表情で黙ってしまったから代表して俺が聞く。……どういうことだ？」

いえね。ダークホースってのは案外色んなところに転がっているわけでした。

「前置きはいいい」

……例えばホレ、様々な人から深く愛されている気のいい二輪さんとか。

「ひっ!？」

意外といるんだよねーあの二輪のファン。作者的にもあの二輪の恋愛話とか書いてみたかったりも……ね？

「は、はは……まさか」

……。

「なんで黙るの!？ ねえなんで黙ってんの!？ なんとか言えよおい!」

…… まあ九割方本気の冗談はさておき。

「冗談一割!」

一割は真実。

「笑えねえ!」

さておき! まあ人気投票っぽいのはありかもしれないと思っっている。御褒美とか関係なく。

「それじゃあ誰も投票してくれないんじゃない……」

企画内容のアンケートと一緒に書いて貰えばいいのです。それならきつと。まあこれまでの反応的に考えるとやっぱりアテナが強そうですが。

「メインヒロインですから!」

「あれ? なんで(笑)ついてないの? 折角つけといたのに」

「さだめさんが犯人だったんですか!？」

「さだめ以外に誰がやると」

「……それもそうですね。とにかく、あの不名誉極まりない修飾は取って捨てました。こう、ぺいっと」

まあ、とりあえず人気投票は人気投票でやっときましよう。投票対象は、アルカナに出てきてさえいれば誰でも結構です。余裕さえあれば一位のキャラの短編も。

「で、肝心の企画はどうするんだ？」

「そーですねーぶっちゃけこれもアンケートしたいくらいですけど……。」

「無責任すぎるー！」

「なので、ある程度絞ってみようかと。とりあえず考えてるのはこんな感じで。」

「他作品とのコラボ」

「人様任せ過ぎないか？」

「もう一々考えるのめんどくさくて。」

「最低だね」

「アルカナ外伝／＼暗黒さだめ無双伝」

「何だこれ!？」

「要するに、元の世界におけるセツとさだめの一エピソードを公開という。」

「……悪くないね。さだめが如何にして有害な雌をお兄ちゃんの傍から排除してきたか、その暗黒の歴史が語られる外伝……これは、アリだね！」

「ナシだよ！　なんかそれもう、残酷描写アリどころじゃすまなそうだよ！」

「あ、ギャグですから。」

「ギャグなの!？」

「題名からしてギャグっぽいじゃないですか。暗黒さだめ無双伝ですよ？」

「その、無駄な語呂の良さが気になります……」

「人気投票三位のキャラの短編」

「だからそれじゃあ……」

「いやちよつと待て。良く見る。一位じゃなくて……」

「……三位？」

です。一位だとアテナになる確率が高そうだったので、調整も兼ねて三位に。

「あの……それって逆に言えば私になる確率低いってことですよね……？」

一位になったキャラは人気高いつてことで、本編でも優遇するから。

「だから！ その本編に私最近出れてないんですけど！」
出てきたときに。

「いつですかそれ！？」

……まあ、夏は、跨がないと……思うよ？

「遠い！ べらぼうに遠いですよ！」

「……アテナ、自分が一位になるのを前提にして話してない？」

「え！？ い、いえ……そんな、ことは……」

「つていうか、それって二位には特典なしってこと……？」
その通り。

「二位悲惨！ 二位なのに！」

で、人気投票の形式をこうしてみよう。

「ん？」

好きなキャラクター上位三名まで選出し、読者様方の中での一位、二位、三位を決定してください。一位には三ポイント。二位には二ポイント、三位には一ポイントのポイントが投票されます。最終的にはポイント合計の一番高いキャラの優勝となります。

「……めんどくさくない？」

「でも、これなら可能性がある」

「いやー……むしろアテナちゃんはコンスタントに点取りそうな気がするんだけど……」

メンドクサイのは主に集計する作者だからいいんです。どうせだから、企画はみんなやりませう。何と言っても100万ですから。あ、あのコラボは希望者ありの場合ですが。もし複数人いらっしやうた

場合、そうですね……何人もは流石に無理なので……先着三名、つてことにしておきますか。余ったら余ったで僕が楽できるし。

「怠惰！」

仕方ないだろう。コラボデュエルって結構大変だし。どんなデッキ使ってくるのか聞かないといけないし。

「……そうだけど。ちなみに、その場合シンクロは？」

……アリにしておきます。セツなんかはシンクロの存在自体は知っているわけですし、問題ないでしょう。

「相手をするのは俺なのか？」

そこら辺も相手の希望に合わせます。アテナが良ければアテナでもいいし、さだめの禁止デッキ希望するような方がいればそれでも

「え あのデッキ使ってもいいの？」

……相手が希望すればね。さだめの禁止、一応二種類あるのでどつちか言ってください。まあ、居れば、の話なんですが。

「……ちなみに、相手にネイキッドとかを指定するのもアリなのか？」

当然。そこら辺のルールはゆるゆるです。希望でも光でもシャインでも、投稿されたオリキャラ指定するのも構いません。……流石に、ライムの元持ち主、とかの無茶振りはアレですが。

「……そう考えると、沢山いるね」

「節操なし」

セツに言っただけなさい。

『節操なし』

「ホントに言った!? しかも全員声を揃えて!?!」

さて、まあこんな感じで100万PV記念はやりたいたと思います。今まで感想書き込んでなくて、今更書き込むのもちよっと敷居が高いと思っっている方もいらっしやれば、まるで気にせず投票してください。投票だけの記入も全然オツケーですので。ちなみに、投票締切は切りのいいところ……一週間後の六月十二日土曜日終日と致します。

「……敷居、高くないだろ。こんなもん」

「いいの！ 少しでも投票数増やそうと思ってるだけだから！」

「あの投票システムもそれが目的。意地汚い」

「う……と、兎も角！ この度、アルカナはついに100万の大台に乗ることと相成りました。これも偏にアルカナを応援してください。読者諸兄皆さまのおかげです。よって厚く御礼申し上げます。」

『ありがとうございます』

この100万PV記念の短編のみならず、本編の方も鋭意執筆中ですので、今しばらくお待ちくださいますようお願いいたします。

「まずは次回、お兄ちゃんが風邪をひいてしまったことで始まるほのぼのを……ほのぼの？」

「ほのぼのにしような？」

「エロティカルにならいくらでも」

「ほ・の・ぼ・の・に・し・よ・う・な！」

「それでは、また近いうちにお会いしましょう！」

「……投票、待ってる」

「是非とも、ご協力お願いいたしますわ」

「じゃあ、またね」

「え！？ あ、ちょっと待ってまださだめ読者に媚売ってな『ブッ

！』(強制終了)」

祝・100万PV記念特別編（後書き）

というわけで、人気投票やります。まあなんか本文ではアテナ勝つだろみたいな前提で話してますが、投票の得票が多少変則的なんで他のキャラが一位とる可能性も十分ありうるでしょう。投票は、おひとり様一度までとさせていただきます。ちなみに、作者たる私も投票します。作者票です。この作者票は最後まで誰に入っているか謎なので、最後まであきらめず投票お願いしますね。

それでは、悠でした！

第三期第十話「慈愛の女神の看病日誌」(前書き)

連投です。まあ、ほぼ以前と変わっちゃいないのですがね。

第三期第十話「慈愛の女神の看病日誌」

アルカナく切り札の騎士く

第三期第十話「慈愛の女神の看病日誌」

「けほっ！……あー」

希望のアドバイス通り早めに寝たつもりではあったんだが……見事に風邪をひいた。

「あの時の寒気は……ヤツのことだけじゃなかったのか……」

てつきりサイクロイド関係での悪寒だとばかり思っていたんだが……油断した。症状は発熱と少しの咳。鼻水や下痢になるよりはマシだが、気だるさがハンパない。

「つくしゅ！　しかし……」

もしかして俺、風邪なんてひいたの初めてじゃないか？……そこ、馬鹿っていうな。

「俺が風邪なんか引いたりした日にゃ……」

「お兄ちゃん！　看病しにきたよー！」

「そうか、ありがと。まあぶぶ漬けでも食え」

「間髪いれずに!？」

こうなることは目に見えていたからな！

「お兄ちゃんそう邪険にしなくても。さだめ、役に立つよ？」

「ほう。例えばどんな風に？」

「風邪は誰かにうつせば治るっていうから「もういい。オチは見えた」さだめと風邪がうつりそう……ってまだ言い終わってもない

のに!？」

ベタ過ぎる。今時そんなネタで迫るヤツがあるか。

「風邪引いて看病という時点で使い古された感が……」

「それは言っな」

「でも知ってる？」

「何をだ」

「病気の時は、性欲が高まるって「だれか! このアホを摘み出せ

!」ちよ!？」

「ったく……オラ、病人を騒がせてンじゃねエよ」

「ゴーズ!? アンタ誰の味方を……にゃ~~~~~!？」

ぱたむ。

「ふう……これで静かに「お見舞いに来た」ならねー」

連れ出されたさだめと入れ違いに入室してきたのはルインだ。心

配してくれるのはありがたいんだが……。

「……何これ? 漬物？」

「ぶぶ漬けた」

「おいしそう。貰っていい？」

しまった。精霊のルインには日本独特の暗喩が伝わらない。

「ちなみに、帰らない」

「伝わってんじゃねえか!」

敢えて無視したのかコイツは。

「私は彼女と違って騒がない」

まあ、確かにルインが騒ぐのは想像つかないが……。

「お前がいると、騒ぎが二乗三乗と大きくなるんだよなあ……」

「何という評価。凹む」

「これくらいで凹むタマか」

「タマはない。私は女」

「下ネタ自重」

まったく……。

「……お腹、すいてる?」

「ん？ あーそうでもないけど……食った方がいいんだろうな」

朝から何も食べてないし……。薬も食後だしな。

「おかゆとか？」

「まあ、定番と言えばそうだな」

「……よし。作る」

「なに？」

ルインって……料理できるのか？

「……やったことはない」

「よし、待とうか」

それは明らかかな失敗フラグです本当にありが（ry

「……平気。ちゃんと味見はする」

「……ほう」

確かに、大抵の失敗料理は味見をしないことが原因らしいし……

っていうか何故味見をしないという選択肢を取るのかわからんが。

「……ダメそうなら他の人に頼む。私は見栄を張らない」

「まあ、それなら……」

その辺は希冴姫とかと違って信用できるところだ。何だかんだで

ルインは常識弁えて……いや、まあそれはともかく。

「何故言葉を濁す」

「気にするな」

ルインを含めて全員、常識があると断言しては怒られそうな気が
しただけだ。

「……失礼な」

「普段の行動を省みる」

「……とにかく、行ってくる」

「ああ……あ、いやちょっと待て」

「？」

俺は手近なメモ用紙をとり、おかゆのレシピを書いてルインに手
渡す。

「レシピくらいないとどうしようもないだろ。とりあえず簡単にレ

シピ書いといたから」

「……ありがとう」

「いや……看病して貰ってるのはこっちだし、お礼をいうのは……
やっぱ、ちゃんとおかゆが出来てからにしよう」

「……捻くれてる。お礼くらい言っても罰は当たらない」

「じゃ、素直に礼を言えるくらい、いいおかゆ作ってきてくれ」

「……がんばる」

「ああ。がんばれ」

最後に薄く微笑んだルインは意気込んで部屋を出ていく。……案
外平和だったな。

「セツくん、いる？」

そして入れ替わりでユーキちゃん。って……。

「なんだ？ 今日面接か何か？ 俺は面接官なのか？」

「？ 何のこと？」

「……いや、なんでもない。気にしないでくれ。多分、風邪引いて
ボーっとしてただけだから」

「そう？ 大丈夫？」

「……ああ、大丈夫だ」

まあ、心配して来てくれてるんだろうし、文句を言うのは筋違い
だよな。ユーキちゃんなら、さだめとかと違ってヘンに騒いだりし
ないだろうし。

「って、あれ？ ユーキちゃん授業は？」

ルインは関係ないし、さだめは躊躇なくサボるだろうが、ユーキ
ちゃんはそんなことない。基本的に真面目なので、今日はアカデミ
アの授業に出ているはず……。

「今はお昼休みだよ。レッド寮って遠いね。ここまで来るのに結
構時間経っちゃったよ」

だから、あんまり長くはいられないらしい。ユーキちゃんに関し
ては風邪で弱っている今その癒しオーラが非常にありがたいので居
て欲しいくらいなのだが、そうそう都合よくもいかないようだ。

「…………熱は？」

「ん、さつき測った。37・6。まあ、そこまで酷くはないよ」

「そっか。良かった。でも、油断したら長引くから気をつけてね？」

「ああ、わかってるよ」

平和だ。やはり、ユーキちゃんは平和だ。最近ちよつと怪しかったが、やっぱりユーキちゃんは癒されるなあ…………。

結局、ユーキちゃんとは少しの間しか話せず、ユーキちゃんは名残惜しげにアカデミアへと戻っていった。多分、居て欲しいと言えは残ってくれただろうが、流石にそれは気が引けた。

「…………ん」

人がいなくなり、少し静かにな「ドンガラガツシャン!!」…………らない。

「…………今の、食堂の方だよな」

ルイン…………大丈夫かアイツ…………？」

ドンガラガツシャン!!

重ねられた鍋やフライパン等が崩れて凄まじい音を響かせる。

「…………おのれ」

私は、料理というものの思わぬ難易度について恨めし気な呻き声を出した。

「…………というか…………」

自分の不器用さに凹む。あと、調理器具多過ぎ。何が何やら。

「これが…………フライパン……………必要ない。ぼいちよ」

放り投げたわけじゃない。置いただけ。

「圧力鍋…………圧力？」

意味が良く分からない。彼のメモには、土鍋で…………と書いてあった。ど…………なべ？ 土の鍋？

「……まずい。これは、料理以前の問題」

まず基本的な知識が足りてない。外食オンリーだったツケ。

「えと……」

「……どうしよう。」

『お手伝いしましょうか？』

「！」

背後からかけられた声に振り向くと、彼の騎士ジャックが柔和な微笑みを浮かべて佇んでいた。

「……執事騎士。久しい」

『ハハハ……執事ではないのですが……あとそれは言わないでください。それよりも、お困りのようですね』

「……ヘルプ」

私は迷わず助力を頼む。下手なプライドより実を取る。というか、このままじゃ何もできそうにない。

『分かりました。私は見ての通り実体ではありませんので、実際に料理をするのはルイン殿となりますが』

「それは、好都合。元よりそのつもり」

さすが、細かい気配りが行き届いている。アドバイス以外の口を挟まない辺りが。

『はい。では、一先ずおかゆに必要な調理器具から覚えましょう』

「わかった」

こうして私は、執事（騎士）の指導の下特製おかゆ作りに取り掛かるのだった。

「きゅ〜？」

「よしよし……風邪がうつるからあんまり近寄るなよ〜？」

ユーキちゃん帰ってから数刻。しばらくの間ウトウトとまどろんでいた俺は、部屋に侵入してきたらしいミリーに起こされて相手

をさせられていた。

「きゅきゅっ」

「だから風邪がうつるって……しょうがないな」

「きゅ〜！」

言っても離れないミリーをどうしようかと悩む。そこそこあったかいし可愛らしくていいんだが……やっぱり風邪引いてるやつに子供を置いておくのは……や、子供って言っても精霊だから免疫力とか人間と同じと思っちゃいけないのかもしれないが。

「きゅー！」

心配する俺を余所に、ミリーは実に嬉しそうだ。普段なら俺はアカデミアに行っている時間で、お留守番していなければならぬミリーにしてみれば、久しぶりに一日俺と一緒に居られるということ嬉しくて仕方がないらしい。

「でもなあ……けほっ」

なまじ人間じゃない分、人間のウイルスがどのように作用するかわからない。

「そういう時はさだめにお任せ！」

「何処から湧いた。そしてゴーズはどうした」

「偉大なる煩惱の前ではさだめの攻撃力は相手より1上回るんだよ！」

「邪神か！」

「とにかく、ミリーはさだめに任せて。さだめも結構懐かれてるし、さだめが相手しておいてあげるよ」

「……それだと、お前も俺から離れる必要があるぞ？」

「ふん縛って幽閉するね」

「お前にミリーは渡さん！」

お前も成長したな、とか褒めようと思ったのが間違いだった。

「夫婦の愛の営みを邪魔するものは、例えば子供でも容赦はしない！」

「夫婦じゃねえしお前の場合は愛じゃなくてただの性欲だろうが！」

さだめはミリーをむんずと掴み、俺の上からどかして飛びかかっ

てくる。ルパンダイブか!?

「くっ……力が……」

入らん! ヤバい!

バタン!

「ハア、ハア……ヤロウ、よくもやりやがったな……」

「ゴーズ!」

「オラ、テメエは退場だ!」

「性欲を持ってあますうううううう!!」
ばたむ。

……た、

「助かったああああ……」

今回ばかりは本気で奪われるかと……ルパンダイブでなければ危なかつたな。

コンコン。

「ん? 誰だ?」

「……私」

「ルインか?」

そういえば、ルインがおかゆを作ると張りきって飛び出して行ったんだっか。

「……入っていい?」

もちろん、と軽く許可を出すと、先ほどよりも遠慮がちにルインが扉を開けて入ってきた。その手には一人用の土鍋。

「お、出来たのか」

「……あまり、自信はない」

「なんだ、珍しいこと言うじゃないか」

ルインは割といつでも自然体で、自信無さ気に行っているところなんてあんまりなかったしな。比較的レアな表情かもしれん。まあ、相変わらず表情は薄いんだが。

「……食べる?」

「ああ。貰うよ」

正直、流石に腹が減ってきた。朝から何も食べてないしな。

「……」
しかし、ルインは中々土鍋を渡そうとしない。

「わ……」

「笑わないよ」

「……セリフの先読みは卑怯」

「意外と分かりやすいよな。ルインって」

「……どうぞ」

「おう。いただきます」

目を逸らしながら渡された土鍋の蓋を開ける。むわっと湯気が立ち昇り、柔らかな香りが鼻腔を刺激した。

「……なんだ。結構美味そうにできてるじゃないか」

一般的な玉子粥。まあちよつとベタつとしていたり玉子が卵白混じりだったりするが、概ね普通の玉子粥だ。初めてなら十分過ぎる。

「……キミの騎士に、手伝って貰った」

「ジャックか。相変わらずの気配り上手だな。後で礼を言っておかないと」

そう言っつてレンゲを手取る。

「あ……」

「自分で食べられるからな」

「……なんというラブコメ封じ。鬼畜の所業」

「これ以上体温上げてどうするんだ」

レンゲでおかゆを掬って、十分に冷ましてから口に入れる。味を

確かめるように何度か咀嚼してから呑み込む。

「……一応、味見はしたつもり」

「……味、薄いな」

「う……」

「炊くときにかき混ぜたな？ 米粒がぐちゃつとしてるぞ」

「う……」

どんどん小さくなっていくルインに苦笑して、でも、と付け加え

る。

「美味しいよ。ありがとな。ルイン」

「……………!!」

バツ！　っとルインが少し紅潮した顔を上げる。すぐに眼を逸らしてポソリ、と呟く。

「……………落ち込ませておいてこの感想……………ラブコメの基本を押さえてる……………さっきは封じたのに……………なんというギャップ」

別にラブコメのつもりで言ったわけじゃない。タダの本心だし。

「……………ツンデレに見せかけて普通にデレてきた。これは、いい」

「……………そーかい」

「これ、結構いいかも」

「ん？　なにが」

「料理して、美味しいって言って貰うの」

「そつか。じゃあ、俺が治ったら料理、教えてやるよ。慣れれば、結構簡単だからさ」

「……………うん」

ルインはまた、少し恥ずかしそうにはにかんだ。

「……………なんか、私も熱出てきたかも」

「……………気のせいだ」

「大マジ」

「じゃあ部屋に戻って休んだ方が……………」

「ここで寝る」

「寝るな。つーか、一応ここ、十代たちの部屋でもあるんだからな」

「それは盲点」

「忘れんな」

「でも、少しくらい添い寝してもいい？」

「だめ」

「ケチ」

さだめじゃないが、風邪の時と違ってのは結構性欲を持てあます。で、ルインはスタイル抜群の美女なわけ……………。

「そ、そうだ！　そう言えば希冴姫はどうしたんだ？　今日は姿を見てないけど」

「なんだか妙な雰囲気になってきたので、咄嗟に話を変える。気になつていたのは事実だし。自惚れじゃなく、希冴姫なら俺が風邪をひいたと聞けばすぐにでも見舞いに来てくれそうなものだが……」

「お姫様は……寝てる」

「は？」

「まだ起きてない」

「まだ、って……」

「もう夕方なんだが……」

「もしかして、希冴姫もどこか悪いのか？」

「彼女も、慣れない人間界で疲れが溜まっていただけ。心配はいらない」

「ああ……」

「そう言えば、希冴姫にしてみれば人間界は外国、もつと言えは異界なわけだし、色々と勝手が違うこともあるんだろう。」

「じゃあルイン、お前は大丈夫なのか？」

「人間界が異界だと言うのはルインだって同じだろう。」

「私は平気。元々順応能力は高いし……ずっと転々としていたからルインの世界が減びてから、ずっと精霊界を旅していたルインだから、別の土地にきててもすぐに順応出来たということらしい。」

「ゴーズは？」

「冥界に比べれば、人間界は天国。不自由はないと思う」

「なるほど……確かに、あの場所は出来ればもう近寄りたくないな。」

「で、お姫様な希冴姫は順応能力が低かったと」

「そう」

「そう考えれば、確かに頷ける話だ。しかし、なんだろう。この何とも言えない違和感は……」

「……おかゆ、冷める」

「あ、ああすまん。今食べる……っあち！」

慌てておかゆを掬って食べるが、思ったよりも冷めていなかったので火傷しそうになる。

「……これは、所謂『あ〜ん』フラグ……張りきらざるを得ない」「いやだから……」

いい、と拒否する前に、素早くレンゲを奪い取られる。おかゆを掬い、ふーつと息を吹きかける。

「もぐ……ん。大丈夫そう。あ〜ん」

「う……」

流石にここに来て拒否は失礼だし、男らしくない。腹を括っていざ、と思ったのだが、冷めたか確認するためにルインが先に一口食べてしまった。

「ふーふー+あ〜ん+間接キス。どうだ」

「ど、どうだってお前な……」

複合技にも程がある。流石に恥ずかしすぎる。

「……あ〜ん」

「う……わかったよ。あ〜ん」

覚悟を決めて口を開ける。何故か、さっきは感じなかった甘味を感じた。

「はっ!? どいてゴーズ! 今凄く羨ましい事態に陥っている電波が届いた!」

「うっせエ! つーかテメエ、本気で人間か……? オレ、かなりマジだぞ……!?!?」

「煩惱解放! リミットブレイク! 待っててお兄ちゃん! お兄ちゃんの貞操は、さだめが奪う!」

「普通そこは守るじゃねエの!?!」

「ダルビツシュ・アダルト、セーット・アープ!」

「色々間違っ……ぐおおっ!?!」

「くっ……流石手強い！ こうなったら、行って！ 私の使い魔、
ミリー！」

「きゅー！」

「だっ、ばっ！ 卑怯くせエ！ オレがコイツに攻撃できねエの知
つてて！」

「勝てばいいんだよ！ 勝てば！」

「つかソイツはテメエの使い魔じゃねエだろ！？」

「タダで言うこと聞くなら使い魔も子供も奴隷も家畜も似たような
もの！」

「一々発言がロクでもねエな！？」

「おーっほっほっほ！ 人質を兵士にすればそれ即ち最強の軍
隊！」

「外道に堕ちることに対する躊躇がカケラもねエ！？」

「お兄ちゃんの貞操を奪うためなら、さだめはどこまでもおおおお
！！！」

「テメエ、カイエンのアホよりよっぽど冥府の使者向きだ！ 何処
までも常軌を逸してやがる！」

「これで、終わりにするよ！ 吹っ飛べー！！！」

「なにつ！？ ぐはアっ！？」

「対象の沈黙を確認。今行くよお兄ちゃん！」

さだめが辿りついた時、絶賛ラブコメ中だったセツとルインにさ
だめがまた癩癩を起こすのだが……それはまた、別のお話。

第三期第十話「慈愛の女神の看病日誌」(後書き)

というわけで、ルインの看病日誌的なアレコレでした。

コレ、実はそこそこお気に入りのお話だったりします。というか、どうもルインとさだめの二人がメインになる話は個人的にお気に入り。いえ、アテナとかも好きではあるんですが、個人的に丁寧語苦手だったりするんで。希冴姫も同じく。ユーキちゃんに関してはダイクホース故に影が薄く……いえ、なんでもありません。

まあそんなわけで、ルインとさだめの二人が登場しているこの回は、ギャグ的な意味でも全話通してトップクラスにお気に入りです。なので、あんまり変えませんでした。変えるべき箇所がなかったのもあります。

そして次回からは遂に……彼女か。作者の依怙贖を一身に受けている精霊か。よし、あんまり変えるところもないし、とっとと進めてしましましょう。

それでは、悠でした！

第三期第十一話「アカデミアの……」（前書き）

更に連投です。……決してモンハンで勝てないからって理由じゃないですよ？ ええ、ホントです。鳥竜種三連撃な大連続狩猟で、あっさり二死したとか、そんなバカなハハハ……。

第三期第十一話「アカデミアの……」

アルカナく切り札の騎士く

第三期第十一話「アカデミアの……」

ルインの看護の甲斐もあってか、俺の風邪は見事に完治し、俺は普段通りの生活に戻っていた。

それにしても、今回は風邪で一日休んだだけだったのに、クロノス先生の嫌味が多いこと多いこと。……まあ、タダでさえオシリス・レッドの人間で、去年も殆どお情けで進級させてもらっただけみたいな出席率だったから、気持ちはわからなくもないが。

「ただいまーつと……ん？」

そのクロノス先生の説教も済まし、いつものように十代たちの部屋に戻つてくると、十代と翔といういつものメンバーの中に、一人見慣れないラー・イエローの制服を纏ったガタイの良い男がいた。

「おっ、帰ってきたな」

「おかえりッス。セツくん」

「おう、ただいま……で、そちらさんは？」

「アンタこそ、誰ドン？ 人に名前を尋ねるときは、自分から名乗るものザウルス！」

ド、ドン？ ザウルス？ え、なにその語尾。ギャグ？

思わぬ言葉遣いに、一瞬ポカンとしてしまったが、気を取り直して俺も自己紹介することにした。言っていること自体はまともだったからな。

「悪い。俺は御堂切。諸事情あつて、十代たちの部屋の居候をやっている。セツって呼んでくれればいい」

「オレはティラノ剣山。本日付で、十代のアニキの舎弟にして貰ったんだドン！」

「僕は認めてないけどね」

「丸藤先輩に認められる必要なんてないザウルス！」

あ、あー……これは、アレだな。イレギュラーじゃなさそうだな。ここまで『あり得ない』個性の在り方は、うん。ない。

「それにしても、驚いたドン！ まさか、『デュエルアカデミアのカリスマ』であるアニキに引き続き、あの……」

「お、なんだ？ 俺にも通り名みたいなのがついてるのか？」

そうだとしたら、なにやらこそばゆいものがあるな。まあ、ユーキちゃんの『沈黙の闇狩人』みたいに不本意な二つ名である場合も考えられるんだが……あ、さだめの『アカデミアの悪夢』は、正にその通り、これ以上なくピッタリだから除外。

「『デュエルアカデミアのラブコメ担当』までいるなんて……」

「よっし剣山くん……オモテ、出よか？」

「な、なんだドン！？ 今、このオレの生存本能が警告を発したザウルス！」

「つていうか、なんで関西弁なんスか！？」

なんちゆう二つ名だ！ まったく……

「不本意、極まらない！」

「この上なく、ピッタリだと思うツス」

「オレも……同感」

「お前らまで何言つてんだ！ 俺は……」

ふと、今までの俺の日常を振り返ってみた。

入学初日、告白される。

妹と彼女候補のイザコザで大変な騒動。

計五人の女性からの告白を未だ保留中。

その他諸々恋の鞘当て的騒動の数々。

……ゴメンナサイ否定できる気がしません。

「つていうか、我ながら酷い……特に三番目」

「オレとしては、あの入学式の騒動では度肝を抜かれたドン！」

「ああっ！ 会う新入生皆に言われる！ おのれあの馬鹿今度お仕置きを……あ、いや、アイツにどんなことをすればお仕置きになるのか想像もつかん。温いと悦びそうだし、やり過ぎると危険だし……ああもう！」

「な、なんだか良くわからないけど、すごく苦労してそうだドン……」

「うん、まあ……羨ましいのと等量くらいには遠慮したくもなるッスね……」

「オレは絶対ゴメンだぜ……」

恋愛事に然程の興味を持っていない十代からすれば、ただ苦労してるだけだしな。

「で、それよりなんで剣山はそんな大荷物なんだ？」

「今日からここでお世話になるドン！」

「……ちよつと待て。流石にこれ以上は定員オーバーじゃないか？」

「そうそう。だから大人しくイエロー寮に戻りなよ。剣山君」

「嫌だドン！ オレは、絶対にここで暮らすザウルス！」

「だから定員オーバーだって言ってるでしょ！？」

「ガウウ〜！！」

「うっ〜！！」

「あー……」

「つたく……仕方ないな。」

「じゃあ、俺が部屋変わるよ。それで問題なしだ」

「えー!?」

「お、おいセツー！」

「さ、流石にそれは気が引けるドン！」

「心配すんな。当てはある」

幸い、最近になってこのレッド寮に知り合いは増えたんだ。剣士にでも頼みこもう。編入生は全員レッドからって制度に感謝だな。

そう思って、とりあえず剣士の部屋に来てみたのだが……。

「すまん、定員オーバーだ」

「ぬぐつ……」

剣士のところも、何やら三人くらい纏めて押し込められていてもじゃないが俺が入るスペースはないようだった。

「なあセツ、やっぱオレたちの部屋に戻ろうぜ？」

「そうツスよ。剣山君をイエローに戻らせればいいんすから」

「オレとしちゃあ、アニキの部屋にいたいとは思うザウルス。けど、御堂先輩を追いだしてつてのは気が引けるドン」

「あー、いいっていいって。お前こそ、ヘンな遠慮すんなよ」

いやまあ、確かに道理で考えれば剣山をイエローに戻るのが当然なんだろうが。

「まあ確かに……他に交流あるレッド男子は特にいないのも事実なんだよな……」

そもそも、下手に相部屋にでもなるうものなら寝首を搔かれる心配をしなくちゃならない。主に、アテナの件とかアテナの件とかアテナの件とか。

「何言つてんだよ。いるじゃんか。まだ二人しか入ってなくて、セツを喜んで受け入れてくれそうな部屋がさ！」

「……あるツスね。まあちよつと別の意味で問題ありそうツスけど」

「元々お前の部屋だったんだろ？」

十代が明るく提案してくれたその部屋は、確かに受け入れてくれ

そうではある。あるのだが……。

「お前ら……敢えて考えないようにしてきた可能性をここで穿り返すのか……?」

なんというか……あそこはダメだ。色々、ダメだ。確かに寝首を搔かれる心配はする必要はないが、それ以外に、ある意味もつと大事な心配をしなくちゃいけないくなる。

「私たちは大歓迎」

「つつ!?!?!?」

突如首に回された腕と、聞き覚えのある声に思わず体が硬直する。

「……そこまで驚かなくても」

慌てて振り向くと、ちよっぴり傷ついた表情のルインがそこにいた。どうでもいいが、さだめといいルインといい、普段攻めツ気の強い奴は打たれ弱い傾向にある気がするな……アテナなんかは結構打たれ強かった気がするんだが……。

「い、いや、あんまりタイミング良く現れたもんだからつい……」

ちよつとだけ、捕食者に目をつけられた獲物の心境だったことは黙っておこう。

「……そう」

「で、なんでいきなり現れたんだ? こいつらに何か用でもあったのか?」

「噂されたから、影が差した」

「諺に忠実!」

「本当のところは、キミが部屋を探してることを聞いたから、攫いに……じゃなくて、勧誘しに来た」

「うん、ベタな言い間違い本当にありがとございました。そして断らざるを得ない」

その、本音を隠す気もないらしい正直さは、時として美德にも悪徳にもなると言うことを学んで欲しいところだ。

「据え膳を食わないのは、恥」

「むしろ、俺自身が据え膳な気がするのですが」

俺、思わず敬語。

「否定はしない」

ルイン、大真面目に肯定。

結論。

「謹んで、お断りさせていただきたく……」

「拒否することを、拒否する」

「拒否することを拒否することを、拒否する」

「……私は乗らない」

「そうか。なら、俺は拒否するぞ」

「問答無用という言葉がある」

「彘？」

「実力行使、という言葉も、ある」

「ありますね」

「私は、言葉の意味に忠実」

「割とさつきから、そんな感じですねルインさん」

現に、今後も手に縛られそうになっているのを必死で抵抗しているところだ。文面からは伝わり難かるうが。今、必死の攻防戦が行われております。

「……じゃあ、選択肢」

「……ほほう。一応聞いておこうか」

「私たちの部屋と、妹のh「さあ、お前たちの部屋に荷物を運ぶぞ。手伝ってくれ」……計画通り（ニヤリ）」

「待て待て待て！ お前、今賢明な判断をしたように見えて、物凄く危険な、言うなればアメリカと不平等条約を結んだ日本みたいな感じだぞ！」

「そ、そうツスよ！ 妹さんの部屋は女子寮ツス！ 選ぶ選はない以前に、そっちで暮らせるハズが……」

「さだめなら、やりかねん」

「……た、確かに……」

一言で納得するこの説得力。さだめの名が持つネームバリューは

凄まじいな。

「……妹さんが許しても、他の人間が許さないんじゃないか？」

「俺の無駄スキルに、『場の空気に溶け込んでしまう程度の能力』
というものが、あってだな」

本来ならありえない、非常識非日常でも、このスキルの前では常識日常に早変わり。

「……初めて、あのスキルが無駄なところで発揮されたな……」

だからこそ、無駄スキルであることを御理解いただきたい所存。
「そもそも、男子だ女子だと言う時点で発生する問題なら、ルインと希冴姫の時点で発生して然りだろうが」

俺の言葉に、三人はハツとして顔を見合わせた。

「ま、まったく不思議に思ってたなかった……」

「素直に、受け入れていましたね……」

「これが、セツの無駄スキルの本領……」

……まあこれも、普通じゃないさだめや俺を、少しでも馴染ませるために培われたスキルなんだが……。

「とにかく、さだめの部屋で生活とか、十分後には奴がシンデレラを卒業している事請けあいだろうな」

「わかりにくい表現だが、わかった」

こっちも少しでも規制から逃れるので必死なんだ。悪いな。

「……大丈夫。私は抜け駆けをしない。前にも言った」

……まあ、確かにそこら辺も安心要素の一つなんだよな。何だかんだで、ルインと希冴姫なら安心なんだ。

「……むしろ、アテナとかだったりした方が危険そうで……」

いや、何も言うまい。

「あ、ちなみに加藤さんの部屋とかだったらどうだったんスカ？」
少しからかい気味に、そんなことを言いだした翔。俺は如何にも呆れた、という表情で返してやる。

「……あのな？ ユーキちゃんはその子なんだぞ？ 女の子の部屋に男が同居とか、やっちゃダメだろう。常識的に」

「お前、今までの一連の会話を思い出してからしゃべれ」

「何かおかしいか？」

「おい、コイツ真顔なんだが……」

「誰か、翻訳頼む」

「多分、今のセツのセリフには“普通の”っていう修飾語が抜けていたんじゃないのか？ ほら、女の子の前に」

「なるほど」

「そういや、希冴姫は？ アイツもいって言っているのか？」

「心配ない。あのお姫様が、キミを拒絶する筈がない」

「それは……まあ、そうかもしれないが」

それでも、一応は聞いてみるのが筋つてことで、荷物を運び入れる前にルイン達の部屋に行くことにした。

「ええ、もちろん大歓迎ですわ！ それに、元々この部屋はセツ様のものですよ。もし問題があったら、どちらかと言えばわたくしたちが立ち行かねばならないでしょう」

「いや、そんなことないって。もうここは、お前たちの部屋だよ」

案の定、と言っていいのか、希冴姫はあっさり許可してくれた。

むしろ結果的に部屋を追い出す形にしまったことを謝る形で。

「……ところで、希冴姫。やっぱり体、良くないのか？」

ふと、気になったことを尋ねてみる。希冴姫は、もう放課後の時間だと言うのに寝間着姿で、ベッドに横たわっていた。昨日ルインから、体調を崩したと聞いてはいたが……。

「なんか……今の希冴姫は……」

すごく、弱々しい感じがする。ただの体調不良と言うには、ちょっと……。

「だ、大丈夫ですわ。少し……慣れない人間界に体が驚いただけですわ。御心配してください、ありがとうございます」

「そっか……もし、何日かしてもまだ体調が良くないときは言ってくれ。それまでは、俺が看病するよ」

「本当に……お気遣い、感謝しますわ」

覇気がない。いつもの希冴姫から感じる、澁刺とした、凜とした雰囲気を感じられない。

「ルイン、荷物運び、手伝ってくれ。今日から、とりあえずここで寝起きするよ」

「……わかった」

希冴姫の看病もできるし、ここで過ごすことは間違っていないだろう。ルインだって、こんな状態の希冴姫を無視してどうこう、なんてする奴じゃない。

むしろ、ルインがこの部屋に俺を誘ったのは、そう言う理由もあったのかもしれない。

その日は引越すと、希冴姫の看病で一日が過ぎて行った。

「え？ カイザーの次の対戦相手が決まった？」

「そうッス！」

数日後、めでたくラー・イエローに昇格することが出来た翔が持ってきたのは、そんな知らせだった。

相手はエド・フェニックス。以前、十代と売れ残っていた8パツクのみで組んだ即席デッキでデュエルして、十代を敗北寸前まで追い詰めた相手らしい。

……というか、その時のデュエル内容を聞かせてもらったが、売れ残り8パツクで十代を追い詰めたことよりも、売れ残り8パツクでよりにもよつて『大天使ゼラト』を召喚できるデッキを組みめた事実こそが脅威だと思う。元の世界でアレを、あのカードを手に入れるためにどれだけ苦労したと……。

「これまで30戦負けなしのプロデュエリスト、ね……」

エド・フェニックスについての情報は、それこそ山のようにあった。『プロデュエル界の貴公子』とかいう通り名も持つ、非常に将来有望な若手ということで、いくつもの雑誌で特集が組まれていた。

……なんだろう。この、胸に宿る苛立ちは。方や『貴公子』方や『ラブコメ担当』……うん。これは、怒ってもインジャナイカナ？
「畜生……！ こんな厨二極まりない二つ名を、羨ましく思う日が来ようとは……！」

「セツ君？」

「あ、いやなんでもない。なんでもないぞ翔。まさか、この俺が、厨二病に憧れなど。ハハハ……」

「なんだ？ その乾いた笑い」

「ええい黙れ！ とにかく、そのデュエルは何日後なんだ？」

「三日後ッス！」

「なるほど、じゃあその日を楽しみに待つとしよう」

「セツ君は、どっちが勝つと思う？」

「セツは一回カイザーに勝ってるんだよな」

ああ……あの時のデュエルは良かった。正直、今までデュエルしてきた中で一番大迫力のデュエルだったな。

「俺は、そのエド・フェニックスってヤツの実力を知らないから何とも言えないが……」

「フン。十代に負けた程度の奴が、カイザーに勝てるわけがない！」

「万丈目、決めつけにかかるな。実際、プロとしての経験はそのエド・フェニックスの方が長いんだろ？ プロだからって、特別なルールがあるわけじゃないが……」

本人にも言ったが、カイザーだってまだ発展途上。負ける可能性だってある。というか、エドが負けたデュエルって即席デッキだろうが。そんなデッキで、カイザーと引き分けた十代を追い詰めたんだから、その実力は相当高いと見るべきだ。

「そんなあ……」

「……けどま、一度デュエルした俺としては、勝って欲しいってのが正直なところだな」

「そ、そうだよね！」

不安そうな顔から一転、安心したような顔になった翔を、もうひ

と押し元気づけてやる。

「第一、ここで俺たちが論議したところで結果は変わらない。今は信じて待てばいいさ。我がアカデミアの、誇るべきデュエリストをな」

「フン。お前も、中々いいことを言うじゃないか」

「お前に褒められる日が来るとは思わなかったよ。万丈目」

「さん、だ。オレがカイザーの勝利を疑っていないのは、正にそういう理由だよ」

「どーかな。プライド高そうだな。お前」

「なんだと!？」

「あはは、言えてる!」

一頻り笑い、落ち着いた頃に三沢も自らの感想を述べた。

「エド・フェニックスは、今回のカイザーとのデュエルで今まで使ってた来なかったメインデッキを披露すると言っていた。そのメインデッキがどんなものなのかが気になるところだな」

「あ、三沢君。居たんだ」

「……居たんだ」

三沢はかなり苦しそうな笑顔だった。

「甘い三沢。居たことに違和感を持たれる空気感じゃあまだまだ甘い。俺のように、居る筈のないところに違和感なく入り込める空気感を目指すが良い」

「し、師匠! って、俺は別に空気の道を極めようとしてるわけでもなんでもない!」

また笑う十代たちを横目に、俺はエド・フェニックスについて調べた限りで、好ましくないものを見つけていた。

「エド・フェニックスの好む言葉は、『運命』……か」

エド・フェニックスは、デュエル中やデュエル後、その言葉を好んで使うらしい。それが、どうも俺には気に食わなかった。

そして、その不満はついに爆発することになる。数日後、エドと十代のデュエルをきっかけにして。

第三期第十一話「アカデミアの……」（後書き）

ここもそんなには変わってないですね。ただ、零たちの居なくなつたところを十代たちがカバーしている形になります。流れ自体は以前のままです。

うん。これでさだめイベントと彼女のイベントを経て、ようやくメインヒロイン……とは、行かないんですよねこれが。それでは、悠でした！

特別編「アルカナ？クロスワールドX？」（前書き）

こんにちは。

とりあえず記念特別編一本目。カイナさんの『遊戯王X』とのクロスで、レオVSセツになります。結構苦戦しましたが、なんとか形にできました。
ではどうぞ！

特別編「アルカナ？クロスワールドX？」

アルカナく切り札の騎士く

特別編「アルカナ？クロスワールドX？」

「ん……？これは……」

朝、俺が目覚ますと、部屋の中に謎の渦が出現していた。

「なんだ……？」

見た感じは『攻撃の無力化』とかのエフェクトに似ている。

「つてことは、時空の渦？」

「そんなところだね」

「おわっ！？」

突然聞こえた言葉に振り向けば、そこに居たのは真中希望。相変わらず唐突に現れる奴だ。

「正確には、時空の歪、と言ったところか。近頃終焉が力を増してきて、世界に綻びが各所に生じ始めている。これは、その内の一つだね」

「つてことは、消さないと不味いんじゃない……」

「そうだね」

「そうだね、つて……」

「うん？消すのは君の仕事だよ？だからここに歪が生まれたわけだしね」

「そうなのか？」

「ああ。消す方法は簡単。この歪の向こう側。一種の平行世界に移

パラレルワールド

動して、その人間とデュエルしてくればいい。勝敗は問わない」

「……そんなことでいいのか？」

「おや、信用できない？」

「……分かったよ」

完全に信用できはしないが、ウソとも思えない。……行ってみるか。

「うん。行ってらっしゃい」

ひらひらと手を振る希望に見送られ、俺は時空の歪へと飛び込んだ。

ドサツ！

「つた！？」

時空の歪から放り出された俺は、着地に失敗して尻もちをついた。

「きゅっ！」

更に、頭にポスツと軽い衝撃。

「み、ミリー！？ どうしたんだお前……まさか、ついて来ちゃったのか！？」

「きゅー！」

あちゃー……まあ別に帰れないってわけじゃないんだし、いいかもしれないけど……。

「きゅ？」

「はは……いや、それよりまず、ここはどこだ……？」

どこか中世欧州的な建物に、中央にそびえ立つ銀の尖塔。俺の記憶が正しければここは……。

「魔法都市……エンディミオン？」

ということとは、精霊界なのか。いや、しかしいつもの精霊界とは微妙に空気に差異がある。なんとなく違和感と言っか……。

「あ、そうか。平行世界パラレルワールドって言うてたっけか」

「こちらに来る前の、希望の言葉を思い出して納得する。

「とするど……」

とりあえず、あの尖塔を目指してみるとするか。そこなら確実に誰かがいる筈だしな。

「きゅー！」

「あつこら待てミリー！」

尖塔に近づいてすぐ、ミリーが定位置となっている頭の上から飛び立って先行してしまう。慌てて追いかける。

「きゅ〜？」

『きゅきゅー！』

「ぬ、あれは……」

上記のセリフだけだとどっちがどっちやら分からないが、片方はミリーもう片方は……。

「『黒竜の雛』、か……？」

疑問形で言ったが、まず間違いないだろう。ミリーと似た、しかし更に輪をかけて黒い鱗。赤い瞳に卵の殻。どこからどう見ても『黒竜の雛』そのものである。

『きゅ〜』

「しっかし何でエンディミオンに黒竜……？」

両者にシナジーは欠片もないし……。そもそも、雛が一匹だけどこにいたと言つのもおかしい話だ。

「迷子か……？」

『きゅ？』

試しに抱き上げてみると、特に抵抗もなく雛は腕の中に収まった。

「きゅー！」

「おとと」

じーっと雛を見つめていると、ミリーが頭の上に飛び乗ってきた。

「……？」

ふと、視界が暗くなる。日の光が遮られたらしい。

「うわ……」

上を見上げると、案の定そこには巨大な黒い影。漆黒の翼を羽ばたかせ、真紅の瞳を輝かせる巨竜。『真紅眼の黒竜』だ。

『息子を離せ！ 人間！』

その声に滲む明らか敵意に、思わず後ずさるが、すぐに雛を頭上に掲げて、敵意のないことを示す。

「俺は敵じゃない！ ここで偶然この仔を見つけたから保護しただけだ！」

バサツ、バサツ、と翼をたたみつつ降下してくるレッドアイズ。

その背には、青年が一人跨っていた。

「お前は……？」

とりあえず親竜に雛を返してから青年と相対する。剣を佩いている事を除けば、ごく普通の青年と言った感じだ。青年はレッドアイズから降りると、少し意外そうに口を開いた。

「驚いたな。ここに俺たち以外の人間がいるなんて」

「どういうことだ？」

「まずは自己紹介だな。俺はレオ。今はここで救世主とかやってる救世主？ 聞き慣れない単語に、少し首をかしげるが、この世界の事情って奴だろうと勝手に納得しておく。

「俺は御堂切。セツって呼んでくれればいい。ここに来たのは……あー、なんて説明すればいいのか……」

事情を説明しようとして、言葉に詰まる。

「俺は……」

迷った末に、俺は……ネタに走ることにした。

「宇宙人でも未来人でも超能力者でもないが、異世界人なんだ」

「何そのハヒ的説明！」

おお、伝わった。

「まあ、冗談のような真実は置いておいて」

「真実なの！？ 冗談じゃないの！？」

「ちよつとした事情でお前たちの世界に迷い込んでしまつてな。帰るには、誰でもいいから一度デュエルして、問題を解決しなくちゃならん」

「なんだそのアバウトな解決法……」

同感だ。しかし、勝敗は問わないとの事だつたから、この説明で正しいんだよな。

「まあ……そういうことなら、俺とデュエルするか？ チビスケを保護して貰つたお礼もしたいしさ」

「お、そうか？ なら、お願いしようか」

お互いにデッキをシャッフルしてディスクにセット。これで準備は整つた。

「デュエル！」

「先行は貰う！ 俺のターン、ドロ―！」

俺のデッキは先攻有利！ 相手のデッキがどんなデッキか分からない以上、先攻を取る！

「俺は『切り札の騎士 クイーン』を攻撃表示で召喚！ 手札から装備カード『アルカナソード ハート』を装備！ カードを一枚セツトしてターンエンドだ！」

希牙姫の手に儀礼剣が握られ、その実用性の低さから攻撃力が低下する。

「切り札の騎士……？ あれは、『クイーンズ・ナイト』か？ それに、初めて聞く装備カードだな……俺のターン、ドロ―！」

レオは僅かに訝しげな顔でカードをドロ―する。聞き慣れないカード名に戸惑つたのだろうか。

「俺は手札から『調和の宝札』で『伝説の白石』を墓地に捨ててカードを二枚ドロ―！ 『伝説の白石』の効果で『青眼の白龍』を手札に加える！」

「なに……！」

しかし、俺もレオの使うカード一枚一枚に驚愕せざるを得なかつ

た。チューナーにブルーアイズ……どちらも元々の世界では割とありふれたカードだが、GXに於いてはあり得ないはずのカード。

「いや……そもそもここは平行世界だったか」

一瞬慌てたが、そう思い直して落ち着きを取り戻す。

「更に、俺は魔法カード『トレード・イン』発動！『青眼の白龍』を墓地に送って二枚ドロロー！」

デッキ圧縮。ドラゴン族でバニラであるブルーアイズなら、蘇生は容易だろう。

ここまで見た限り、相手はドラゴンデッキ。それも、俺が元居た世界にあったカードをフルに使えると見ていい。俺もレオの知らないカードを持つているにしても、向こうもないとは断言できない。

「……敵しそうだな」

チューナーが居るということは、相手はシンクロ召喚すら使ってくるかもしれないということ。正直、シンクロ召喚についての対策ができていないデッキではないので、使われると敵しいかもしれない……よし。俺は手札から魔法カード『融合』を発動！手札の『神竜 ラグナロク』と『ロード・オブ・ドラゴン ドラゴンの支配者』を融合し、『竜魔人 キングドラグーン』を融合召喚するぜ！

「……いきなりか」

思わず舌打ちをしたくなる。『竜魔人 キングドラグーン』。ドラゴン族の召喚&魔法・罨耐性に関するサポート効果を持った優良カード。このモンスターがいるだけで魔法・罨の対象にならないドラゴン族が次々現れるのだからシャレにならない。

「更にキングドラグーンの効果で『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』を攻撃表示で特殊召喚！」

「げ……」

思わず呻いてしまう。が、それも仕方ないことだろう。キングドラグーンに続き、ダークネスメタル。ドラゴン族召喚サポートの二強とも言える二体が一ターンで召喚されたのだから。しかも……。

「レオの墓地には……」

「その通り！ 俺は『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』の効果で、墓地の『青眼の白龍』を攻撃表示で特殊召喚する！」

「あらら……」

「更に、俺はこのターンまだ通常召喚を行っていない！ 俺は手札から『ミラーージュ・ドラゴン』を攻撃表示で召喚！ バトル！」

おいおい……俺は思わず苦笑してしまう。ここまで流れるように召喚されては色々成す術がない。しかも、バトルフェイズ中の罫の使用まで制限されてしまった。

「……が、ここで情報アドバンテージの差が出たな」

思わず、口角を釣り上げる。

「まずは『青眼の白龍』で『切り札の騎士 クイーン』に攻撃！ 『滅びの疾風爆裂弾』！」

そう来るよな。普通は。『ミラーージュ・ドラゴン』は確かにトラップを封じるが、速攻魔法までは封じられない。『突進』で迎撃される可能性を考えたら先に攻撃力の高いモンスターに攻撃させたい。しかも、なるべく倒されたとしても害の少ないモンスターで。

「……それが、仇となる！ 『アルカナソード ハート』の効果発動！ このカードの装備モンスターは攻撃力が500下がる代わりに戦闘ダメージを受けず、戦闘では破壊されない！」

「何！？」

「更に、その際に発生するハズの戦闘ダメージ分ライフを回復する」

「くっ……厄介な装備魔法を……」

セツLP6000

「決まったと思ったんだけどなあ……俺はターンを終了するぜ」

「そんな簡単に決着付いたら面白くないからな。俺のターン、ドロ
ー！」

とはいえ、流石に焦った。まさかあんなめちやくちな速攻かけてくるとは思いもよらなかった。思わず先攻を取ったことを後悔しそうになった。

「俺はカードを一枚セットしてターンエンドだ」

布石は整った。後は、向こうが狙い通りのカードを使ってくるかどうか……。

「俺のターン、ドロー！俺は手札から『スタンピング・クラッシュ』を発動！『アルカナソード ハート』を破壊する！」

「来たな。俺はこの瞬間、カウンタートラップを発動！『アヌビスの裁き』！」

「！カウンター！？」

「フィールドの魔法・罫を破壊する効果を持つ魔法カードの発動と効果を無効にし、破壊する！俺はコストとして、手札から『冥幼竜ヴァーミリオン』を墓地に捨てる」

『きゅー！』

「あ、さっきのチビ竜！」

「俺の相棒。その一体だ。過保護な王様から預かっててな」

「へえ。レッドアイズと話が合いそうだな」

「かもしれないな。……処理を続けるぞ。『アヌビスの裁き』は、カウンター処理後、相手フィールド上の表側表示モンスター一体を破壊し、その攻撃力分のダメージを相手ライフに与える！」

「けど、『竜魔人 キングドラグーン』の効果で、こちらのドラゴン族は効果の対象にならないぜ！」

「悪いな。『アヌビスの裁き』の破壊効果は、そのテキストに反して“対象を取らない”んだよ」

「あれ！？ そうだったっけ！？」

めちやくちや勘違いしやすいんだけどな。

「俺が破壊するのは『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』！」

「くっ！？」

レオLP1200

まずは先制だ。ドラゴンを調子づかせると止まらないからな。トコトン出鼻を挫かせて貰うぞ！

「くっ……なら俺は『竜魔人 キングドラグーン』の効果で手札から『タイラント・ドラゴン』を攻撃表示で特殊召喚！ カードを一枚セツトしてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！ スタンバイフェイズに墓地の『冥幼竜ヴァーミリオン』の効果発動！ カウンタートラップのコストとしてこのカードが墓地に送られている場合、手札に戻す！」

『きゅー！』

「俺は『切り札の騎士 キング』を攻撃表示で召喚！ その効果により、デッキから『切り札の騎士 ジャック』を攻撃表示で特殊召喚する！」

「うわ、まんま絵札の三銃士……リメイク？ ってことは……」

「手札から魔法カード『融合』を発動！ 切り札の騎士三体を融合し、来い！ 『アルカナ ナイトジョーカー』！」

「来たな……攻撃力3800……！」

「バトル！ 『アルカナ ナイトジョーカー』で『竜魔人 キングドラグーン』を攻撃！ 『ロイヤル・ストレート・スラッシュ』！」

「速攻魔法『突進』！ 『竜魔人 キングドラグーン』の攻撃力を700ポイントアップ！」

「それでも、アルカナには勝てない！」

「くっ！」

アルカナの剣が、キングドラグーンを両断する。しかし、その一瞬前にキングドラグーンが懐に飛び込んできたために多少剣筋がブレ、威力を軽減された。

レオLP500

「くそ……」

レオのライフを削りきれなかった。出来ればこのターン内に決着をつけたかったんだが……狙うのはキングドラグーンじゃなくて『ミラージュ・ドラゴン』にしておくべきだったな。ミスだ。

「俺はメインフェイズ2に魔法カード『地砕き』を発動する！ 破壊されるのは守備力が最も高い『青眼の白龍』！」

巨大な手が、ブルーアイズごと大地を砕く。

「俺はターンを終了する」

俺の手札はミリーのみ。……なんとなく、嫌な予感がするな。レオは手札ゼロ枚。普通に考えたらこれで逆転なんて……とは思うんだが……。

「やるな……俺のターン、ドロー！」

ドローしたカードを見た瞬間、レオの目が輝いた。……来るか!?

「俺は魔法カード『竜の鏡』を発動するぜ! 墓地の『伝説の白石』

『青眼の白龍』『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』『神

竜 ラグナロク』『竜魔人キングドラグーン』の五体をゲームから

除外し、エクストラデッキから『F・G・D』を融合召喚する!」

「げっ……!」

「まず……!」

「行け! 『F・G・D』で『アルカナ ナイトジョーカー』を攻撃

! 『ファイブ・ゴッド・ブレイズ』!」

「ぐおっ……!」

アルカナが、五つの竜頭から吐き出された炎に巻かれ、倒れる。

セツLP4800

「たたみかける! 『タイラント・ドラゴン』でプレイヤーにダイレ

クトアタック!」

「ぐああっ!?!」

セツLP1900

「いつけー! 『ミラーージュ・ドラゴン』でダイレクトアタック!」

「ぐ、う……!」

セツLP300

「俺はターンエンドだ!」

くそ……これは、マズいな……。

「俺のターン、ドロー! 俺は手札から永続魔法『命削りの宝札』

を発動! デッキからカードを四枚ドローする!」

「うは、反則っばいなーそれ」

まったくだ。手札がゼロなら一方的に四枚のアドバンテージとか……。

「だが、おかげで望みが繋がる！ 俺はリバーズカード『リビングデッドの呼び声』を発動！ 墓地の『切り札の騎士 ジャック』を攻撃表示で特殊召喚！ 『ミラーージュ・ドラゴン』に攻撃！」

「うわっ!?!」

レオLP200

「カードを二枚セット。ターンエンド」

「俺のターン、ドロー！ 手札増強カード、俺も使わせてもらっぜ！ 『壺の中の魔術書』！ お互いのプレイヤーはデッキから三枚カードをドローする！」

「俺も三枚ドロー！」

「……そろそろ終わりにしようぜ！ 俺は手札から装備魔法『D・D・R』を発動！ 手札の『青眼の白龍』を墓地に捨て、除外されている『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』を特殊召喚！ 再び現れる漆黒の鋼鉄竜。この流れは……！」

「行くぜ！ 『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』の効果で墓地から……！」

断ち切れる！

「ちよつと待った！ そのモンスター効果にチェーン発動！ 『天罰』！ 手札の『冥幼竜ヴァーミリオン』を墓地に捨て、その効果無しにして破壊する！」

「ぐっ!?!」

「更に、モンスター効果をパーミッションしたことにより、手札から『冥王竜ヴァンダルギオン』を特殊召喚！ 第三の効果を起動する！」

「なっ……！」

「モンスター効果をパーミッションした時、ヴァンダルギオンは冥界からモンスターを一体呼び戻す！ 再臨しろ！ 『アルカナ ナイトジョーカー』！」

ヴァンダルギオンの咆哮に導かれ、俺の最強剣士が蘇る！

「くっ……バトルだ！『F・G・D』で『アルカナ ナイトジョーカー』を攻撃！」

「切り札の騎士は、二度同じ相手に負けはしない！ 手札から『オネスト』の効果を発動する！ 迎え討て！『アルカナ ナイトジョーカー』！」

「しまっ……」

アルカナが、五頭の竜を斬り捨てる。これで……。

「勝ちだ！」

「ぐあああっ!?!」

レオLPO

「いやー負けた負けた。強いな、異世界人」

「いや、正直ギリギリだった。最後の『壺の中の魔術書』がなければ、俺は『オネスト』引けなかったしな」

「……あれ、俺もしかして余計なことしたか？」

「いや、まあ一応『攻撃の無力化』は伏せていたから、あそこで負けはしなかったと思うけど……微妙だな」

「用意周到じゃないか。くっそー手札自体は良かったんだけどなー」

「まあ……ドラゴン族に対しては『アヌビスの裁き』が結構メタだし、アルカナソードの情報アドバンテージもあったから。あそこで攻撃してなきゃ俺のライフは『F・G・D』出されたターンでなくなってた」

実際、汎用の『サイクロン』や『大嵐』のみならず、ドラゴンに限れば『スタンピング・クラッシュ』『巨竜の羽ばたき』といった除去カードに対しても『アヌビスの裁き』は使える上、基本攻撃力の高いドラゴン族に対してあのバーン効果は相性抜群なのだ。

「お……?」

俺の身体がスウ、と徐々に透け始める。どうやら、歪が消えたらしい。

「……お別れ、か」

「……みたいだ。ありがとな。デュエルに付き合ってた貰って」

「気にすんな。俺も楽しかった……けど、勝ち逃げは許さないからな。また、いつか再戦しようぜ！」

「ああ、もちろん」

「……けど、なんていうかこう……借りを返したって言いたくなるのはなんでだろうな？」

少し不思議な感覚を覚えながら、俺はレオに別れを告げて、元の世界に帰還するのだった。

「よつ、と……」

「おかえり」

帰還した俺を待っていたのは希望。しかも思いつきり寛いでる。

「……こら。人の部屋で勝手に寛ぐな」

「いいじゃないか。それより、無事任務達成おめでとう。それも、勝利してきたみたいで何よりだ。どうだった？ 他の世界は」

「……良かったよ。ちなみに希望」

「うん？」

「あの世界にまた行く方法って……何かあるか？」

「おや、大分気に入ったらしいね」

「またやろうって約束してきたからな」

「なるほど。心配しなくても、キミの力さえあればまた行けるさ」

「あれ？ そうなのか？」

「ああ。ただし、今は遠慮してくれ。その力も、世界のバランスに影響を与えるから。行くとしたら、終焉を倒し、バランスを整えた後、だね」

「そっか。なら、尚更とつとと終焉を倒さないとな」

「ああ。頑張ってくれ。その暁には、君たち全員で異世界旅行でも何でもすればいいさ」

「ああ。そうさせてもらおうよ」

軽口を叩きながら、俺は改めて終焉打倒に意欲を高めるのだった。

特別編「アルカナ？クロスワールドX？」（後書き）

結果はセツの勝ち。いや、人のオリキャラホント、負けさせるとかコラボ主催者としてどうなんだ。……言い訳としては、セツの語った「アヌビスの裁き」。これほんと、ドラゴンに効きすぎて。あの場面でヴァンダルギオン出したら終わり、くらいのレベルで。後、カイナさんとこの遊戯王Xでセツモドキ（笑）が痛い目に遭わされたので仕返しの意味も込めて（あ

ま、まあともかく、カイナさんとのコラボ、もう一つエルフィの奴もあるんですが、これは申し訳ありませんが後回しということですよ、やるつもりではあるんですけど、他の方とのコラボもやっちゃいたいです。

そして、本日六月十二日の零時をもちまして、投票が締め切りとなります。まあ今更投票する人がいるかはわかりませんが、とりあえず、もしまだ投票していない方で投票したいと言う方がいれば、本日以内なら投票可能ですので、感想若しくは悠へのメッセージにでもどうぞ。

それでは、悠でした！

修正しました。

特別編「第一回アルカナ人気投票結果発表！」（前書き）

こんにちは！

アルカナ人気投票、ご協力ありがとうございました！

それでは早速結果発表をどうぞ！

特別編「第一回アルカナ人気投票結果発表！」

アルカナ〜切り札の騎士〜

特別編「第一回アルカナ人気投票結果発表！」

というわけで、一週間かけて行われた人気投票の結果発表〜!!

「どんどんぱふぱふ〜……」

おや、どうしたねライム。随分とまあテンションの低いことで。

「それを本気で聞いているのなら、とりあえずここで一発かましておくよ！」

待て、プリーズウェイト。話し合おう。暴力は何も生まないアンダスタン?

「ジנגスカン」

ちよつと語感は似てる！ ってそうじゃなくて！ やめて!?!?

キミの雷撃とか喰らったらそれこそジングスカンのごとく黒焦げに……。

「……うう、もういいや。なんかここで作者痛めつけても気は晴れないよ……」

ほ、ホントにテンション低いな……らしくない。

「そりゃ、一ポイントも入ってないモブキャラレベルの人気じゃテンションも落ちるよ……はあ」

ま、まあまあ。同じゼロ票でここにすら呼ばれていない駄女神さんとかに比べれば、まだ優遇して 天罰できめん!! ギャアアアッス!?! 何処からか天罰!?!

「うよしっ！　いつまでも落ち込んでても仕方ないよね！　せめて持ち味である明るさだけは維持して行こう！」

お、おお……その意気だ……（プスプスと黒焦げになりつつ）おかしいなあ、こういう役って秋代さんとかその辺りの作者さんの役回りじゃないのかなあ……？

「はいはい。他の作者さんの事はいいから、早速人気投票の結果を発表して行くよー！！！」

はい。ではまず、尺の都合上、一票も入らなかった方々は省略させていただきますね。

「……省略された。こうなったら一番最初に名前を呼ばれる榮譽くらいは手に入れたかったのに」

……な、なんかまたタイムが落ち込んでいますが、とにかく！ポイントを獲得したキャラクターは全部で十四人！　ということで第十四位から行ってみましょうか！

「多いよねーしかも全部オリキャラか半オリキャラ。どれだけ作ってるのかって話だよ」

……確かに。まあ、主要キャラだけでも六人いますしね。

「よしそれじゃあ行ってみようー！」

あ、その前に、作者票にの行方について公開しておきましょうか。「うにゃ。確かに、それでランキングに差が現れるかもしれないしね」

では、僕の中でのランキング上位三人をご紹介しますしょう。

・一位　ルイン

・二位　エース

・三位　カイエン

でしたー。

「うにゃ……なんか割とへんなところ来たにゃーあんまりランキングに変動来なさそう……」

まあ作者とはいえ所詮一投票者ですからねー。まあ、ともかく、この作者票を含めて結果発表行ってみましょう！

第十四位 作者 得票数1ポイント

.....

「.....」

.....え、えと.....ふふん (得意げに)

「うう八つ当たりサンダー!!!」

あばばばばばばばばっ!?!?

「何故!? ホワイ!? 何で作者に1ポイントとはいえ入ってて、ボクには入ってないの!? っていうか一番最初に名前を呼ばれる榮譽まで持つてかれた!」

ぼ、僕としても予想外ですよ! まさかポイント頂けるとは微塵も思ってませんでしたから!

「じゃあ渡せー! その他の恵まれないキャラにその一票渡せー!」

ちなみに、渡した場合この一票はネイキッドに行くらしいですよ?

「うにゃ!?!.....やっぱリアルカナに於いて唯一全裸を晒したサービスシーンが.....」

いやいやいや! あれは間違いなく投票理由には入って来ないから! っていうか、とつとと次に行きましょう!

第十二位 剣士&カイエン2ポイント

第十二位は……また異色な組み合わせですね。全く絡んでない。

「別にペア投票でも何でもなしにゃ〜」

まあそうなんですけど。剣士はアルカナで初めて出した他人のオリキャラということ、他のオリキャラに比べれば出番も多いですね。

「というか、他の皆はまだ出てきたばかりだよ。不利にもほどがあるよ」

確かに。とはいえ、どの時期に始めたとしても割を食うキャラは出てきますからね。そこら辺は運が悪かったとして諦めてもらうしか。

「……ところで、最初期の方に出てきた割に、ボクの出番は絶望的に少なくないかじゃ？」

……頑張れ！

「作者が頑張ってくれないと出れないんだよ〜!!」
次ー！

第十一位 ヴァーミリオン3ポイント

ということ、第十二位はアルカナのマスコットことヴァーミリオンのミリーちゃんでした〜！

「別にマスコットと言える活躍はしてないよーな……」

細かいことを気にしちゃいけません。現にこうして人気は出ているのですから。

「う……何故マスコットに票が入ってアルカナのアイドル（自称）ことライムに票が全く入ってないの……って（自称）ってなんだよ

「！」

いや、あれしきの出番でアイドルはないわ。

「出番を作らない原因が言うにゃー!!!」

では続いて第十位！ ここからは個人の応援では取れない点数になつて来ます！

第十位 エース4ポイント

というわけで、作者の個人的な支援も含めて4ポイント獲得のエースがベストテンの先陣を切りました！

「割とコメディ色も強いアルカナで、ただ一人シリアス路線貫いてる子だね」

出番は殆どない割に、印象に残る出番だけ持つて行つてますからねー。

「ボクだつて印象には……」

“今ライムはどうしてるー？” みたいな印象ならあるみたいですよ？

「そうならないように努力して欲しいにゃー！」

さて、そろそろ票数が多めになつて参りました。続いての第九位は……

第九位 希冴姫5ポイント

ヒロイン勢一人目、希冴姫が早くもやって参りました！

「納得いきませんわ！」

「おや、呼んでもいないのにご本人登場です。よほど腹に据えかねることが何かあったのでしょうか？」

「不思議だねえ〜」

「まったくどこもおかしくありませんでしょう！？ むしろここでわたくしが『まあ妥当な順位ですわね』とか言い出したらそっちの方が問題でしょう！？」

「でも妥当な順位だよ〜」

「貴女のゼロ票よりは妥当じゃないことだけは確かですわ！」

「ボクはさつきからそこに何度も意義を申し立ててるけど、通ったためしがないよ〜」

「これでもわたくし、第二話から登場の古参ですよ！？ セツ様のパートナー！」

でも、主要ヒロイン五人の中で一番恋愛イベントが少ない希冴姫さんでしたー。

「ちょ！？ 屈辱的かつ殺意の沸く流し方しないでくれませんか！？」

第六位 ユーキ&ジャック&ゴーズ6ポイント

一気に飛んで第六位！ ヒロイン勢二人目の沈黙の闇狩人ことユーキちゃんを筆頭に、苦勞人執事騎士ことジャックとワイルドな兄貴分、冥府の使者ゴーズの三人がランクインしましたー！

「みんな〜ありがとね〜」

「ははは……正直、希冴姫に申し訳ありませんが……ありがと〜」

ざいます」

「は。なんだこれ？ 表彰？ メンドクセエから帰っていいか？ 帰らないでください。最終日まで3票だったのにいきなり追いついてここまでの上がってきたある意味六位メンバーの主役ですから。」

「……くだらねエ。……が、まアカイエンのアホに負けるよかマシか。サンキユ」

ジャックは最後の最後で希冴姫を抜き去りました。それについて何かご感想を。

「いえ、その……とてつもなく答えにくい質問ですね。控室から希冴姫が射殺さんばかりに殺気を叩きつけてきているので勘弁してくれませんか？」

「ユーキちゃんとは登場時期被ってるのに、何このボクとの扱いの差は……」

裏話ゝ実はユーキちゃんは急遽参入が決定した……というか作者も知らない内にヒロインの座に収まっていたシンデレラ的ヒロインです。

「さすが……サイレント……」

「うう……その二つ名、もう最近じゃ会う人皆に言われるようになってしまったよ」

いえ、実際美味しいとこ取りのエキスパートですから。

「そんなつもりはないんだけど」

さ、次に行ってみましようか。ベスト5！

第五位 サイクロイド&ポイント

……おや？

「目の錯覚……じゃ、ないよね？」

「おかしいですね。一体何をどう間違ったら人気投票でサイクロイドがベスト5に来るような異常事態になるのでしょうか……。」

「納得できませんわ！」

「うわ！？ 何故か希冴姫さん登場！？」

「最終日21時35分を回るまではわたくしと同率であったはず……」

「それが……それが！」

「三人ゴボウ抜きでベストファイブ入って来ましたからねー。では、ご本人登場！」

「いよう！ 良い子の皆！ サイクロイドお兄さんのご降臨だよ！」

「……この登場シーンがまた腹立ちますわ……」

「というかヒロインを二人抑えてのベストファイブ入りとか……」

「古今東西あり得なかつた珍事でしょうね。ウチのサイクロイド。」

「やあやあ。どうもどうも！」

「しかも何やら声援に応えてますよあの二輪。今までのキャラの中で一番楽しげにしていますよあの二輪。」

「……スクラップ処分が妥当かと思われますわ」

「おいおい姫さん止してくれよ。そんなことしたら、全60億のおれっちのファンが黙っちゃいねえぜ？」

「いくらなんでもいませんわよそんなに！」

「応援してくれたおれっちファンの皆！ ありがとう！ いつか語られるおれっちの、国家転覆物語〜サイバーライダーチュチュ〜で、また会おう！」

「って意味わからない予告しないでくれませんか！？ 書くの僕なんですからね！？」

「つ、続いては第4位〜！ この圧倒的存在感を誇るサイクロイドを打ち負かした猛者たちが出てくるよ〜！」

「……そもそもサイクロイドを打ち負かせなかつたわたくしたちは……」

……第四位！

第四位 ルイン11ポイント

というわけで、初の十ポイント台突入は我らがルイン様〜！！
はい拍手〜！ 左舷！ 拍手薄いよ何やってんの！？

「……テンション高いね〜引くわ〜」
そりゃ僕が一位票上げたの彼女ですもん！ ご本人登場！

「……………」

あ、あら？ 案外テンション低い……？

「あと……一人……………」

「あーあと一人抜けばご褒美短編だったんだよね〜おしかったね〜」
い、いやほら！ それでも四位ですし！ あと、僕の中では一位
です！

「一位じゃご褒美なし。あと、作者的に一番でも特に嬉しくはない
酷い！」

「本編で優遇するべき」

してますよ！ めっちゃ優遇してますから！ 間違いなくヒロイ
ン勢の中で最も優遇してますから！ 出番と質、両方ともトップク
ラスですから！

「けど四位」

う……そこはほら、流石にメインヒロインとかには……。

「何故私はメインヒロインじゃないの？」

いやその……ぶっちゃけルイン様も追加ヒロイン枠ですし……ッ
ンデレヤンデレがいるならクーデレも……みたいな。

「すごい数合わせ臭に全私が泣いた」

でも予想以上にイイ感じのキャラになったので僕は満足しています！

「……作者票なかったらサイクロイドと同率だったと言う驚愕の事実。凹む……」

そ、それでは、遂に残すはあと三人！ ベスト3の発表です！

しかも、次の第三位にはご褒美短編の座もかかっております！ さあ！ その栄えある第三位は……

第三位 セツ14ポイント

ここで来ました我らが主人公！ 俺の無駄スキルは108式まであるぜ！ 御堂切〜！！

「……なんだその紹介は」

いきなりツツコミから入るとは、やりますね流石主人公。

「意味わからんヨイシヨはいいから」

「ここは結構妥当なところだったりするのかな？」

…… ええまあ、良く考えるとそうかもしれません。上二人はやっぱりメインもメインですし……となるとやっぱりこの位置には主人公が来て然りだったのかも。

「けど……ユーキちゃんや希冴姫は残念だったな……まさかヤツがここまで上に来るとは……」

天敵ですからねー。良かったですね。サイクロイドとのカップリング短編にならなくて。

「それは……もしそうだったら俺は、死ぬかもしれん……」

「廃人くらいにはなりそうだね……丸々一話あの調子でやられると作者的にはあのテンションだと書いて結構楽しいんですけどね。やめてくれ。俺には耐えられそうにない」

ともかく、三位おめでとうございます主人公。

「ああ。応援してくれた皆。ありがとうな。きつと、本編ではハッピーエンドを迎えて見せるから……また、これからも応援してくれソツのないお礼メッセージ、ありがとうございました！

「さあ！ ここからついにラスト二人！ 票数もきりりんを突き放した“あの”二人！」

果たしてどちらがアルカナの頂点に立つのか……活目して見よ！

第二位 アテナ18ポイント

第一位 さだめ22ポイント

決つつつつ着！！ 第一回アルカナ人気投票、その頂点に君臨したのは！

「第一期第十話登場からいきなりアルカナの空気を掌握し、第二期以降はコメデイの主役ともなった……」

御堂さだめさんです！

「いよつしや勝ったあああああ！！」

いきなり喜びの雄たけびを上げてくれました、さだめさんです！
「世論は我に味方した！ これはもう、お兄ちゃんとの禁断の一線越えを推奨していることと同義！」

いや同義じゃないから！ 自重して！

「さだめは今、自重を知らぬ戦士！ いざ新床！」

「そのセリフからして自重してない！」

あ、あーところで……。

「orz」

仮にも二位を取ったのにこの世の終わりとはかりに落ち込んでいる娘が一人いるんですけど……。

「問・題・外！ 人気も出番もさだめに負けた負け犬は黙ってこのままフェードアウトするがいい！」

ド外道！

「……そうです！」

うおっ！？

「出番さえ……出番さえあれば……今この時期、新規キャラと同じくらいバッドタイミングで催されたこの人気投票。私は今、レギュラーから外れています……レギュラー復帰すれば……」

「見苦しい敗戦の言い訳はそれだけえ？」

「うぐっ！」

……なんとというさだめの見下し精神。これで一位なんだから世の中はわからない。

「というか、読者に媚売るだの売らないだの言ってた子が一位で健気にきりりんを想い続けてた子が二位……この世の不条理を体現してるにゃ〜」

……今、あの二人は正に明暗分かたれてますね。闇属性悪魔使いのさだめが明で、光属性天使使いのアテナが暗ですけど。

「結構、面白い対比だね」

さだめは投票開始時から延々ぶつちぎり。最後多少失速してアテナが最後にすこく追い上げましたが、僅かに届かず、最終的にはさらに引き離される結果に終わりました。

「く、くくくくく……あーっはっはっはっはっはっはっ！ これではつきりしたねアテナ！このアルカナの……お兄ちゃんの人生にお

ける真のヒロイン！ それはさだめ！ さだめなのだよ！」
「ぐ、うう……なにが、一体なにがいけなかったと……」
「無様だよねえ……始まる前はあんなに自分が一位前提で話していたのに……終わってみればこの結果！ 無様無様！ アハハハハハ！」

……なんか、調子乗り過ぎた拳句少しダーク化している気がしないでもありませんさだめ。Sモード全開です。

「やれやれ。そろそろ止めてくるか」

「……そうした方が良さそうですね」

「彼女は調子に乗り始めると際限なし」

「けど……すごく、嬉しそうだね。さだめちゃん」

「ああ。滅多にないほど超ご機嫌だな。それだけに、下手に触れたくないが」

と言いつつ、しっかりさだめとアテナの方に向かうセツ君。何だかんだで、いいお兄ちゃんしてます。

「あつ！ お兄ちゃん！ さだめ、勝ったよ！ これで心置きなくさだめルートに入れるよお兄ちゃん！」

「俺が心置きなくさだめルートに入るときは、他の選択肢がマキユラルートのみの場合くらいしかないと思うがな」

「そこまで優先順位低いの!？」

「せ、セツ……私、負けちゃいました……しかも、一度もさだめさんを扱いませんでした……」

「ああほら、泣くな泣くな。自分で言ってただろ？ 時期が悪かったんだって。アテナ最近出てないんだし、ある程度は仕方ないっ

て」

「む〜お兄ちゃんアテナの味方なの？」

「いやだから、さっきのお前は調子に乗り過ぎ。最近のアテナの出番補正を入れれば、大体同じくらいだよお前は」

……すっごいいいところ取りな仲裁。流石、さだめと十年以上付き合ってきただけあります。場を収めることに關しては天才。

「ところで、みなさん気になっていることを聞いてもよろしいのですか？」

はい？ 为什么呢。

「……ご褒美短編」

「三位はセツくんだったけど……その場合どうするの〜？」
そりゃあもちろん、セツの短編ですよ。

「……俺の、って……」

セツ単独短編。

『ちよつと待て』

おおつ。全員から総ツッコミ来たわあ〜。

「ちよ、それギャルゲーでいったらバッドエンドじゃん！ さだめが一位になったんだからさだめとのカップリングで書いてよ！」

「それを言うなら、私は最近出番がないんですから、埋め合わせとして私を……」

「……ヒロイン内順位は私が三位。私を出すべき」

「ヒロインの人気を平均化するためにも、わたくしにチャンスを……」

……

「え、えつと、わたしも……」

みなさん必死ですね（笑）

『笑つな！』

すいません（土下座）。じゃあ……こうしましょう。セツを中心

に、ヒロインオールキャスト。全員でドタバタ。

「ちよつと待て！」

おや、セツ君なにか問題でも？

「俺の御褒美短編なのに、俺が一番苦勞しそうな匂いがぷんぷんする！」

がんばれ主人公！

「せめて否定しろよ！」

ネタはこれから考えます。セツが中心な時点で普段のコメディ本編とあんまり変わらないような気もしますが、とりあえずそんな感じを考えます！

「つつたく……まあいい。とにかく、人気投票に協力してくれてありがとう。こっちとしても、色々と参考になった」

『ありがとうございます！』

100万アクセス記念の特別編は、コラボや外伝も含めて色々残っているのです、その辺りもよろしく願います！

それでは、今回はこれにて失礼します！

特別編「第一回アルカナ人気投票結果発表！」（後書き）

ということ、優勝はさだめ。ご褒美短編はセツという御堂兄妹
オンステージの結果に終わりました！

しかし、ホントにサイクロイド強かったなあ……かつてここまで
サイクロイドプッシュの遊戯王は……あるはずがない。

ちなみに、投票者数で言うとさだめが十人、アテナが九人、セツ
六人のルイン五人。サイクロイドが四人と、なんだかんだでポイン
トと同じような順になります。サイクロイド……。

それでは、悠でした！

第三期第十二話「何度も、何度でも、ありがとう」（前書き）

ホント、どうしたんでしょう。こんな時間になってもまだ連投は続きます。完全に昼夜逆転しているらしい悠です。

第三期第十二話「何度も、何度も、ありがとう」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第三期第十二話「何度も、何度も、ありがとう」

その日、アカデミアには二重の意味で衝撃が走っていた。

『迎え討て！ シャイニング・フェニックス・ガイ！』

『ぐああっ……ぐう……』

カイザー亮さんの『サイバー・エンド・ドラゴン』が、エド・フェニックス操る『E・HEROシャイニング・フェニックス・ガイ』に迎撃され、亮さんのライフが、0になった。

「お兄さんが……負けた……」

『ぐ、うう……俺は、自分に……』

『いいや、戦う前からお前の運命は決していた』

カイザー亮の敗北。そして、もう一つの衝撃。

『彼は確かに強い。だが、僕が勝つのは、運命でした』

『今回、秘蔵のHEROデッキを使いましたが、何故、このタイミングで？』

『僕が入学したデュエルアカデミアに、僕と同じ、HEROデッキを使うデュエリストがいるんです』

「ええ！？」

「それって、アニキのことドン？」

『元々HEROデッキは、僕の方が早く作っていたんですが、このデュエリストが、マニアの間で有名になってしまった。先日そのデ

ユエリストがカイザーと引き分けたという話を聞きました。ならば僕がカイザーに勝てば、僕の方が強いと言うことになる。だからこの機に、デツキを披露したんです」

「この男、カイザーを山車に使ったというのか……」

『でも、ファンの中には、それでは不十分だと言う人もいるでしょう。だから僕はこの場を借りて、同じHEROデツキを使うデユエリスト、遊城十代に挑戦することを、宣言したい!』

もう一つの衝撃。それは、プロデユエリスト、エド・フェニックスの遊城十代への挑戦である。

『遊城十代。明日僕は学園に行く。その時、本当の決着をつけよう。どちらが、HEROを使うに相応しいのかを』

そして、インタビューは終了した。教室は未だ二つの衝撃に揺れている。そんな中、俺は益々エド・フェニックスに不審感を強くしていた。

「戦う前から運命は決していた……勝つのは運命だった……?」

「……お兄ちゃん?」

「おいセツ。どうしやがったんだコイツ……?」

「あ……お兄ちゃん、運命とか、そういう言葉で片付けちゃうの、何より嫌ってるから……」

「そうなのか?」

「そう。酷い話だと思わない? さだめ、名前からしてお兄ちゃんに嫌われてるんだから」

「……さだめ。俺は別に、言葉自体を嫌っているわけじゃない。ましてや、さだめを嫌っている、なんてことは万が一にもありえない。自虐するな」

「はあ〜い。ごめんねお兄ちゃん」

「……俺は、むしろ運命とか、さだめって言葉を知っているから……だから、ああも軽々しく使う奴に、好感が持てないだけだ」

特に、カイザーとのデユエルを運命の一言で終わらせてしまったのが、何より気に入らない。山車に使ったとか、そんなことよりも、

だ。

「……十代」

「セツ？」

「これは、俺の個人的な頼みなんだが……」

「おう！ セツから頼みなんて珍しいな。なんだ？」

「……奴に、勝ってくれ」

「え？」

「……いや、なんでもない。忘れてくれ。ちょっと、頭を冷やして
くることにする」

何を自分勝手なお願いをしてるんだ。それで、十代が気負ってしまったりしたらどうする。俺は頭を振って、皆に背を向けた。

「あ、おいセツ！」

十代たちの制止も聞かず、俺は教室を後にした。

「待て。エド・フェニックス」

インタビューを終え、帰路につこうとしていたエドに、凜とした声がかかる。

「おや、どうしましたカイザー亮。僕に連勝を留められたからって恨み事ですか？」

「そんなことではない。勝負は時の運。今までは調子よく勝ててはいたが、負けることもあるだろう。特に、今回は俺の未熟さがはつきりとわかった。恨み事など、言う筈もない。それとは別件だ」

エドが思っていた以上に冷静なカイザーの態度に、逆に違和感を持った。

「……では、なんですか？」

「……遊城十代に、挑戦状を送りつけたらしいな」

「ええ、テレビ越しですけどね。それが何か？」

「……俺は、アカデミアに居た時、十代とは別の、ある兄妹に負か

「されている」

「それが何か？ 僕に態々未熟を強調する必要なんて……」

「大したことじゃない。どうもお前は、自分の力を過信する傾向にあるようだったからな。余裕ぶつていれば、足下をすくわれることもある、ということを忠告しに来た」

「……僕が、過信……？ ツハ！ 何を言い出すかと思えば、結局は恨み事じゃないですか。僕に油断などあり得ない。遊城十代にもその兄妹とやらにも、負けなどしませんよ。それが運命ですから」

「……そうか。なら、いい。最後に一つだけだ」

「まだ何か？」

「兄の方は、運命たぐひめを打ち破る男として有名だ、とな」

それは、ラブコメ担当、などというふざけた二つ名とは別に、セツにつけられたあだ名。アカデミアで、悪夢のごとき力を振るった妹……即ち運命さだめを打ち破り、アカデミアを、三幻魔による滅亡の運命からも救った男として。

「……くだらない」

エドは、むしろその言葉に、相当な嫌悪を抱いたようで、不機嫌そうにそう吐き捨て、立ち去ろうとする。そんなエドに、カイザーはもう一度だけ声をかける。

「また！ デュエルをしてくれるな。今度は、俺もまた一つ強くなつて、お前に挑もう」

「……敗北の運命に、腰が引けなければね」

忌々しげに、エドは海馬ドームを立ち去るのだった。

「……俺は、まだ発展途上……か。そうだなセツ。俺はこれでまた、強くなれる」

完璧の名は捨て、また、一から行こう。カイザー亮……いや、丸藤亮はそう決心し、彼もまた、海馬ドームから立ち去るのだった。勝者でありながら苦々しげな表情のエドとは違い、どこか、清々しい表情で。

俺はグラウンド脇の芝生で、爆発してしまいそんな感情と戦っていた。

「……ふう。ったく、なんだろうな。俺としたことが、全然ダメだ。感情が制御できない」

それでも、感情制御は得意だったつもりなんだが……。

「運命……か」

確か、アテナに告白された時にも言われたっけな。『運命感じちゃいました』って。

「俺は運命って奴を信じている。信じているからこそ……抗いたい」
今まで……ロクな運命じゃなかった。大半がさだめに端を発することではあったが……。俺だって、さだめを怨もつとしたこともある。そうすれば、楽になれるって。

「……でも、お兄ちゃんは結局、さだめのことを怨みはしなかったよね」

「さだめか……」

気付けば、後ろにさだめが追いかけてきていた。ま、コイツなら追いかけてくるだろうって予想はしていたから驚きはないが。

「ロクな運命じゃなかったよ。確かに。でも、お兄ちゃんは絶対に運命から目を背けよう……逃げようとしなかった」

「……どうかな。むしろ、全力で逃げていたのかもしれない。運命って言葉から」

「運命だからって言えば、楽になれたんじゃないの？」

「いや……俺はむしろ、運命だって認めてしまうことが怖かった。だって運命だったら、もう覆しようがないじゃないか」

幸せになれないってことを、認めたくなかった。

「それに、ぶつちやけて言えば、もうそんなのどうだっていいんだ。だって、俺たちは今こうして、そこそこ面白可笑しく生きていられるんだから。運命だったとしても……俺たちは覆したんだ。この世

界に来てな」

「……そうだね」

さだめがトン、と俺の背中に自分の背中を預けてくる。いつもの、行き過ぎなまでの愛情表現と違って、どこか純粹に、妹が兄に甘えるように。

「お兄ちゃんは、勝っちゃった。クソつたれた運命の輪に。断ち切ったんだよ。お兄ちゃんは。ルインの言ってた、終焉の花嫁でありながら。終焉の運命を」

「……そう、なのかね」

「きつと。……皆の力も借りて、精霊の力でだけど、ずっとさだめたちに纏わりついていた終焉。それにお兄ちゃんは、ずっと、少なくともさだめがおかしくなった二歳の頃から十五年以上、耐え続けた。それは、それだけは間違いなく、お兄ちゃんにしかできなかったこと。さだめとお兄ちゃんが終焉に屈さなかったのは、お兄ちゃんのおかげ」

「……そっか」

「だから、ありがとうお兄ちゃん。もう何度も、何度もお礼は言ったけど。何度も、ありがとう」

いつになく、しつとりとしたさだめの声。

「じゃあ、俺も。ありがとう。さだめ」

「え？ なにが？ さだめ、お兄ちゃんにお礼言われることなんて……」

今日は珍しい日だ。さだめの見たことないような反応が、一々見れる。

「ん……生きていてくれたことに、かな。終焉に屈さなかったのは、俺だけじゃない。さだめ、お前も戦ってたんだよ。きつと。心の何処かで、クソつたれた運命に抗って」

さだめが驚いたような気配を背中に感じる。俺は続けた。

「そりゃ、元の世界で散々、お前は酷いこともしてきたさ。でも、たった二歳の頃、そんな、自我も口々に発達していない頃から終焉

に魅入られていて、尚お前はこうして心を取り戻したんだ。お前も、すごい。強かつたんだよ」

後ろのさだめは、何やら震えている。次に聞こえてきた言葉は、涙声だった。

「……もう、困るなあお兄ちゃんはっ！ そんな、そんなこと、言われたら……そんなこと言うから……さだめ、お兄ちゃんから離れないんだよ？」

「さだめ？ お前、泣いて……」

さだめの声が、背中が震えている。その震える声のまま、さだめは言葉を紡ぎ続けた。

「お兄ちゃんは、さだめを受け入れてくれたから……だから、好きでも、それだけじゃない。さだめを受け入れてくれるだけなら、多分、他にも居たかもしれない。周りをもっと見渡せば、他にも、そんな人が居たのかもしれない。でも、さだめには……お兄ちゃんしか見えない」

だって……と、さだめは一呼吸置いてから、俺の前に回る。

「お兄ちゃんの全てが、さだめを助けてくれるんだもの。そうだよ。このクソつたれた運命の中の、唯一の救い、唯一の、最上の運命。それが……」

お兄ちゃんが、お兄ちゃんであったことなんだから。

そういつて微笑む、涙に濡れたその顔を、俺は綺麗だと思った。

見惚れた、ということなのだろう。今まで、さだめを可愛いと、妹としての好意を持つことは何度もあったけど、今初めて……、さだめを、女の子として意識したかもしれない。だから、だろう。「んっ……」

押しつけられた唇を、避けるという選択肢が浮かばなかったのは。

「……ねえお兄ちゃん。お願いがあるの」

「……なんだ？」

俺は、どこか熱に浮かされたような気持ちだった。不意打ちや、事故。哀しみに溢れたキスじゃなく、喜びを……歓喜を乗せた、幸

せな口づけ。そこに在った心地良さに、ただ浮かれて。

「さつき十代さんに言ってたセリフ。そのままお兄ちゃんにあげたいの」

「なんだって？」

「十代さんとアイツのデュエルが終わった後、なんとかしてお兄ちゃんもアイツとデュエルして。そして、勝って。勝って欲しいの。さだめ、わかるんだ」

アイツは、エド・フェニックスは、ただ軽く『運命』を口にしてるわけじゃない。きつと、何か耐えがたいことがあって、運命という言葉に逃げているだけなのだろう。

……そんなことは、俺にだってわかってた。

「だから、勝って。お兄ちゃん。あの人に、運命は変えられるって、運命だからって、あきらめちゃダメだって、そんな、当たり前のも、でも一番大事なことを、教えてあげて」

……ああ。

「ああ、そうだな。そうしよう」

兄妹で交わす、必勝の誓い。まだ、デュエルしてくれるかどうかも決まっていないのに、傍から見れば、なんと馬鹿げた皮算用。それでも交わす、その誓い。

「守るぞ」

意地でもエドをデュエルのリングに引き摺り出して、そして勝つ。そう決心して、俺はレッド寮に戻ろうと……。

「そうか。ならば、尚のこと我の力は欲しい筈だな？」

背後からかけられたその声に、思わず目を見開いた。

「お、お前は　！？」

白く染め上げられた広間。そこで、やはり白いフードを被った人影が、手慣れた手つきでタロットカードと思しきものをシャッフル

していた。

エドは、その男に近づく。と、男が口を開いた。

「行くのか？」

「僕はいつまでも、回り道をしていられない。僕は世界を周り、一刻も早く、奴を見つけて出す！」

「急がずとも、必ず運命の扉は開く」

「……」

「エド。“あの”カードを使うのか？」

「そのつもりです。遊城十代に、本当のHEROの姿を教えてやる」「同じHERO使いとしてのプライドが許さないとわか……ならば私が観よう。お前のデッキに宿る、闘志と未来を」

エドは、その男に自らのデッキを手渡す。男は、数秒の間デッキに手を当ててから、すぐにエドに返す。

「僕の運命は？」

「占うまでもなかったようだな」

「ふふ……すぐ戻ります」

満足げにそう言い、立ち去ろうとしたエドだったが、ふと気がついたことをその男に尋ねる。

「……ああ、そういえば、アカデミアにカイザー亮を破った男がいると聞いたのですが」

「……何？」

それまで不敵な笑みを浮かべていた男が、そこで僅かに怪訝そうな顔をする。

「カイザーはやけにその男を推していました。油断をすれば、足下をすぐわねると。……まあ、どうせただの負け惜しみでしょうけどね」

「……そうか」

「ただ、どうも僕がソイツに劣っていると聞いたげな態度だったの……で、少し気になったんですよ。それだけです」

「……待て、エド」

立ち去ろうとしたエドを、男が呼び止める。

「……その男の名は？」

「いえ、それは言っていないかもしれません。なんでも、運命を打ち破る男で通っていると。バカバカしい話ですが」

「……待っている。私が観よう」

しばらく、シャツ、シャツとカードを繰る。その男、セツを象徴するカード、それは……。

「『吊るされた男』……？」

「待て。まだだ」

何かを感じたらしい男が、更にカードを繰る。

「『吊るされた男』傍に、力を持つ者がいる……それが……」

「まさか！？『審判』のカード！？」

「それも、逆位置の、だ……」

「確か、『審判』の意味は……」

「そうだな……逆位置ならば、アンラッキー、嫉妬心、疑い、執念などになるか……」

「……なんだ。それなら、大した話ではないでしょう。それよりも、結果を」

「……そうだな」

まだ、疑惑の色濃い男だったが、エドに急かされ、カードを繰る。

「……」

「『戦車』……やはり、僕の勝利は揺るぎない」

「……ああ。だが、その男も『吊るされた男』の象徴……もし余裕があれば、この男も倒し、さらなる力をつけるといい」

「ええ。元よりそのつもりです。運命を打ち破るなんて傲慢な通名、引っぺがしてやりますよ」

今度こそ、エドは立ち去り、広間には男一人が残された。

「……」

その目は、先ほどに比べ、何処か剣呑な光が宿っている。

「……『吊るされた男』の正位置……意味は、忍耐、辛抱の時、初

めは辛く、やがて報われるといった意味を持つ……」

そのタロットをしばし見つめ、男は頭を覆っていたフードを取りつつ立ち上がる。

「辛き運命に耐え、勝利を掴み取ったとでもいうのか……？ 彼もまた、我が手駒にすれば……ククク」

フードの男 斎王琢磨はその瞳に穏やかならざる白き光を湛えて、一人静かに哄笑を漏らすのだった。

第三期第十二話「何度も、何度も、ありがとう」（後書き）

というわけで、さだめ回。基本ギャグに走りがちなイメージあるさだめですが、普通に背負っている過去はシリラス一直線なので、まあこんなことも。

っていうか、ホントに有言実行しないというか、言ったことを守らない作者ですね我ながら……モンハン買えたら更新速度落ちるとかなんとか言っときながらこの連投ですよ。わけがわからん。これから信用されなくなったらどうすんだ。

それでは、悠でした！

第三期第十三話「騎士の誇り」(前書き)

……何故か、止まりません。まあ、いいんですけどね。早い分には文句も言われないでしょう。さっさと書きたいところもありますし、この調子で以前の話まで追いついてしまいたいところです。

第三期第十三話「騎士の誇り」

アルカナく切り札の騎士く

第三期第十四話「騎士の誇り」

「十代。既に運命のカウントダウンは始まった。お前はもう。敗北と言っ運命から逃れることはできない」

俺は、耐えていた。

「運命？ そんなもんオレは信じないね。未来は常に、自分で、切り開くもんだろ！」

十代は、エドの操る『D・HERO』に苦戦していた。

「エド・フェニックス……この男とD・HEROは、本当に未来を操るといつのか……!?!」

「……違うさ」

「セツ？」

「違う。間違っているぞ三沢。未来を操る？ 違うよ。あれは、カードの効果を正しく理解して、相手の行動を先読みする。つまり、俺たちが普段のデュエルでやっていることと同じだ。未来は、操れなんかしない」

「お兄ちゃん。落ち着いて」

「……ああ。すまん」

どうしても、堪え切れない怒り。エド・フェニックス……お前の過去に、何があったのかは知らない。だけど……。

「運命は、その瞬間になるまで決しない……!」

ギリツ、と歯を食いしばり、十代とエドのデュエルを見る。デュエルは、エドが『D・HEROダイヤモンドガイ』の効果で、『ミスフォーチュン』の効果発動が決定したところだった。

「マズいな……『ミスフォーチュン』の効果は、相手モンスターの攻撃力の半分をダメージとして与える効果……次のターンには、『E・HEROシャイニング・フレア・ウイングマン』が戻ってくる

……」

俺の言葉通り、デビルガイの効果で除外されていたシャイニング・フレア・ウイングマンは、戻ってくるなり十代へのダメージを与えてまたデビルガイに除外されてしまう。

「オレはネクロイド・シャーマンの効果を発動！ お前の場のダイハードガイを生贄に捧げ、フェザーマンを召喚！」

「上手いドン！」

「これなら、ネクロイド・シャーマンの攻撃は有効！」

「この攻撃で、十代の勝ちだわ！」

「……いや、ダメだ」

「え？」

「どうして？ だってもうエドの場には……」

「時計塔の針が、既に……零時を指してしまった」

俺は時計塔を見上げる。他の皆も、釣られて見上げる。

「アレがどうしたって……」

「時計塔が出現して、五ターン。今この時点を持って、十代からの戦闘ダメージは、決してエドに届かない」

俺の言葉通りになった。

「セツ……さつきから思っていたんだが、お前は奴のD・HEROの事を知っているのか？」

「……ちよつとした事情でな」

「残念だったな。どんな攻撃を仕掛けようと、お前が敗北する運命は変えられない」

……くそ。

そして十代は、『幽獄の時計塔』から『D・HEROドレッドガイ』の特殊召喚を許してしまう。

「確かに、お前は良い腕をしたデュエリストだ。だが、お前は絶対に、僕には勝てない。なぜなら、僕にはあるモノが、お前にはないからだ！」

「オレにないモノ……？」

「HEROを、渴望する理由さ！……僕は、このD・HEROの力を使い、父さんを殺した奴に復讐する！」

「復讐？」

復讐……そうか。それが……。

「お前が、運命に縛られたきっかけか」

I&I社のカードデザイナーだった父親を、強盗に殺された恨み。それが、今のエドを構成する要素となってしまうている。

「表の世界で裁けぬのなら、僕がD・HEROの力を使い、裏の世界で裁いて見せると！」

「けど！ 折角お前の父さんが残してくれたカードを、復讐の道具に使うなんて！」

「わかったような口を利くな！ 十代！ ムカつくんだよ！ お前のように、憧れだけでヒーローを使う奴が！ 僕には必要なんだ！ 奴に罰を与えるために、僕に力を与える本当のヒーローが！ 僕のターン！ これで最後だ！ 行け！ ドレッドガイ！」

ドレッドガイにより、十代のサンダー・ジャイアントが破壊され、十代のライフがゼロになった。

「フン。消えろ、雑魚が」

「あ、ああ……」

『十代！？』

明日香たちが、十代に駆け寄る。俺は……さだめと共に、エド・フェニックスの前に立ち塞がっていた。

「……なんだ？ お前は」

「俺は、御堂切。デュエリストだ」

「同じく、御堂さだめ」

「フン。それがどうしたって……いや、待て。もしかしてお前たち、カイザーに勝ったというデュエリストか？」

「……それが？」

「丁度いい。お前も相手をしてやろう。どうせ、僕の勝利は運命に決められている」

まさか、向こうから挑戦してきてくれるとは、な……。

「……手間が省けて、結構だ」

「お兄ちゃん」

「任せる。絶対に勝つ」

「セツ！」

「明日香。お前は十代についていてやれ。こっちは任せる」

「……わかつたわ」

エドが俺を見る目は、厳しい。だが、それは俺も同じこと。タダでさえ気に食わないのに、十代を雑魚と一蹴することなぞ、認めない。

「さあ、勝負だエド・フェニックス。運命って奴が、決して定まっていないことを、教えてやるよ」

「無駄だよ。お前も、運命に踊らされるがいい」

「そんなの……」

「今更だ。デュエル！」

「デュエル！」

「俺のターン、ドロー！ 俺は『切り札の騎士 テンス』を守備表示で召喚！ カードを二枚セットし、ターンエンド！」

『切り札の騎士 テンス』 DEF2000

「フン。僕のターン、ドロー！ 僕は魔法カード『テラ・フォーミング』を発動する！ デッキからフィールド魔法『幽獄の時計塔』を手札に加え、発動する！」

フィールドが、さっきの十代戦と同じく時計塔に変わる。

「時計塔のエフェクトはもう知っているな？ あと、四つカウンタ

「ーが乗れば、時計塔は僕を守る無敵のエフェクトを発動させる！」
「ああ、知ってるさ。無敵の時計塔を破壊すれば、幽閉され、怒りに狂ったプレデターが呼び覚まされる」

「そうだ！ お前に勝ち目はない。僕は魔法カード『デステニー・ドロウ』を発動！ 手札のD・HEROと名のつくカードを墓地に送り、デッキからカードを二枚ドロウ！ 僕は『D・HEROダッシュウガイ』を墓地に送る！ ドロウ！」

「ダッシュウガイ……なるほど。墓地に居た方が都合のいいモンスターだ。」

「僕は魔法カード『D・スピリッツ』を発動。手札から『D・HEROドウムガイ』を攻撃表示で特殊召喚！ 更に『D・HEROドレッドサーヴァント』を攻撃表示で召喚し、そのエフェクトを発動する！」

『D・HEROドウムガイ』 ATK1000

『D・HEROドレッドサーヴァント』 ATK400

「っ！」

「その顔……知っているようだな。そう、『D・HEROドレッドサーヴァント』は、時計塔の針を一つ進める！」

時計塔の針が三時を示す。これで、後三つ……。

「僕はカードを二枚セットし、ターンを終了する！」

「ターン目から手札を全て使い切りやがった。よっほどの自信って奴だな。あれは。」

「俺のターン、ドロウ！」

ドロウしたカードを見る。そうか、早速力を貸してくれるか。

「この瞬間、『幽獄の時計塔』の針がまた一つ進む！」

カチカチと、針が六時を指すが、俺はもうそんな古びた塔に注目することはなかった。

「俺は『切り札の騎士 テンス』をリリースする」

俺がテンスをリリースしたことで、周囲から意外そうな声が漏れる。

「リリース？」

「セツのデッキに、レベル5か6のモンスターなんて、ジャックくらいしか入ってなかったと思うのだけど……」

「力を貸してくれた子がいたんだよ。お兄ちゃんに。自分のトラウマを乗り越えて」

頼むぞ……。

「俺は『切り札の騎士団長 トランプ・ナイト・リーダー エース』を攻撃表示でアドバンス召喚

！」

『切り札の騎士団長 エース』 ATK2000

『推して参る！』

「トランプ・ナイト・リーダー！？」

「新たなトランプ・ナイトか！？」

怪訝そうな表情のエドと、驚いているギャラリーのために、少しだけ解説をする。

「『切り札の騎士団長 エース』は、切り札の騎士と名の付くモンスターをリリースする場合、一体のリリースでアドバンス召喚することが出来る！」

エースのレベルは7。通常なら二体のリリースを必要とするそのアドバンス召喚は、騎士の絆に導かれ、軽減される！

以前のエースは、団長とは付かず、レベルも4。攻守も1000だったが、トラウマを乗り越えたエースはその真の力を解放することに成功した。

俺は、この間さだめと共に必勝を誓った時のことを思い出していた。

「そうか。ならば、尚のこと我の力は欲しい筈だな？」

「お、お前は……！？」

銀に輝くシャギー。輝く銀の胸当てと、同色の細剣。懐かしいそ

の怜悯な瞳には、以前になかった自信が溢れている。

「エース!？」

「久しぶり、とても言えばいいか？ 人間」

「エース、なんで……」

「……ふむ」

俺が尋ねると、何故かエースは困ったような顔で黙り込んだ。

「エース？」

「……実のところ、明確な“何故”は見つかっていない。そうだな。敢えて言うなら、決着がついていないから、だろうか」

「決着？」

「ケンカの決着だ」

「は？」

思いがけない言葉に、俺は絶句する。

「まあ、そんなことはどうでもいい。今貴様が、やるべきことはなんだ？ あるのだろうか？ 我を振るうに相応しい戦いが」

「我を振るうって……俺に、力を貸してくれるってこと、か？」

信じられない、という感情をストレートに出し過ぎたのが気に食わなかったのか、エースは少々不機嫌そうになってしまう。

「それ以外にどう聞こえる。耳も腐ったか？ クズめ」

……相変わらず、言葉は辛辣でした。

「だ、だがなんでだ？ 前はあんなに……」

デュエルに対する恐怖。精霊にとつての死。トラウマ。そう言ったしがらみを抱えていたエースは、俺と来ることを拒んだ。それなのに……。

「……気がついたことがある」

「気がついた、こと？」

「そうだ。我を、我たらしめるモノ。我にとって、何よりも尊いモノ。我は、それを守るため、剣を取り、ここに来た」

「何よりも尊いモノ……」

「そうだ。貴様にもあるのだろうか？ 貫き通すものが。我にも、そ

れがあつた。それに気がついた。ただそれだけのこと」

「……参考までに、聞いてもいいか？ その、尊いモノって奴を」失礼かもしれないが、以前見たときとは何もかもが違うエースの顔に、聞かずに居られなかった。意外にもエースは渋ったり嫌な顔をしたりすることもなく、素直に答えてくれた。

「……プライド。騎士としての尊厳と誇り。持ち続けるべき矜持。そんなところか」

騎士として。確か、以前にもエースは騎士としての誇りを口に出していた。しかし、その時と今では、明らかに違うものがあつた。眼だ。

以前の、昏い負の色は消え、希望に満ちた、言葉通りの誇らしい光だ。

「以前の我は、恐怖から、トラウマから逃れるために、誇りや矜持を口に出し、従属を否定してきた」

エースは、隠せぬ憤りを滲ませた口調と表情で語る。

「……それが、真に騎士としての誇りや、矜持を裏切る行為とも知らずに、だ」

誇り高き騎士は、壁やコスト、生贄だのと言つた使われ方を厭う。だからこそ、人間に従属しない。

「しかし、それはただの逃げだ」

恐怖から、トラウマから逃げるため、その言い訳に“誇り”や“矜持”を口に出していただけなのだ、と。

「……未だに、死は怖い。体が震えそうだ。だが……恐怖から逃げ、背を向けることだけは、もうしないと決めたのだ。己の……そう、プライドにかけて」

結局、自分が最後に縋るのはそれしかなかった、とエースは自嘲する。

「だが逃避ではなく、立ち向かう覚悟の果ての誇りとは……プライドとは、これほど清々しいものだ、その時初めて知つたよ」

だから、自分は今もう逃げない。恐怖、トラウマに立ち向かい、い

つか乗り越えて見せるのだと。

「……そのために、俺のところには？」

「我が最初に、乗り越えた姿を見せるのは、以前無様を晒した貴様意外におるまい。そうしなければ、疼くのだ。私の……」

プライドが。

「……そっか」

そんなエースに、俺は笑顔を向ける。

「……お前は、強いな。弱くて、弱くて……とても、強い」

「そっか。我は弱い。だからこそ、強くなると決めた。その意志だけは、弱いつもりはない」

一度目を閉じたエースは、一つ深呼吸して、キツ、と目を見開いた。

「御堂切！」

ビツ！ といきなり細剣を突きつけてくるエース。俺が戸惑っているのと、エースは不敵な笑みで告げる。

「我は、貴様を主とは認めん！」

「な、なに？」

力を貸してくれる、と言った傍からこの否定。意味がわからず硬直する俺に、エースは更に言葉を重ねる。

「その代わり……」

ニヤリ、と笑みを更に濃くしたエース。

「その代わり、我が友となることを、認めよう。力を、貸してやる」
剣をクルリ、と反転させて、柄を俺の方に差し出してくるエース。
俺はその剣を受け取り、エースに習い、ビツ！ とエースに突きつけた。

「よろしく頼む。我が友、『ガッツ！』エー……ス……」

徐々に、言葉尻が弱くなる。思わず、手元の細剣を、上から下までじっくりと見る。

……ガツ？

恐る恐る、と言った感じでエースを見る。

眉間に、剣が、突き刺さっていた。そりやもう、ぶつすりと。だ、だいじょうぶかな？ し、死んでないよね？ とか、さだめが心配するくらい、思いつきり。

「あ、あー……エース、その……大丈夫か？」

ブツツ！ と、ナニか、大事なものがキレたような気がした。

「き……」

「き……？」

「キリマンジャロ？」

「きい〜さあ〜まあ〜！！」

「うわっ！？」

や、やつぱり怒った！？（当たり前です）

俺の手から剣をはぎ取り、自分の眉間からズブツと抜くと、エースはその剣を構えて一目散に俺の方へ切りかかってきた！

「このっ……！ この剣が儀礼剣だったから良かったようなもの

！ し、素人が思い切り剣を突き出すな戯けがあ〜！！」

「す、すまん！ 今回は全面的に俺が悪かった！ 男女の手足の長さの違いを考えてなかった！」

「！！？ き、貴様それは我が短腕短足とでも言いたいか！？」

「い、いや決してそんなつもりは！？ というか、儀礼剣だったとしても思いつきり突き喰らって良く無事だったな！？ 随分と頑丈な頭をしていらっしや……」

「こ、今度はまた石頭呼ばわりするつもりか！？ ど、何処までコケにすれば……ええい！ もう許さん！ やつぱり貴様は、この場で精肉売り場に送ってやるわ！」

「精肉売り場！？」

脳裏に、『セツ右腕二の腕グラム100円』とかいう嫌なテロツブが流れた。

「あ、それさだめが買う！ 全身丸ごと！」

「おまつ！？ 今そんなふざけたこと言ってる場合か！？ 愛しの兄が、今ここで解体ショーの見世物にされそうになってるんだぞ！

？」

「お兄ちゃん……さだめ、お兄ちゃんなら例えひき肉でもブロック肉でも骨付きカルビでも、美味しく頂く自信があるよ！」

「この上なく嫌な自信！」

……最後に、とんでもなくアホなオチがついてしまったが、ともかく、エースが力を貸してくれるようになった経緯はこんな感じだった。

「頼むぞ。エース」

『ふん。気に食わんが、貴様の事は希冴姫からも頼まれたのでな。不本意ながら、力を貸してやろう』

希冴姫、という言葉に、俺は少し顔を曇らせる。今このデッキに、三銃士は入っていない。理由は、希冴姫が体調を崩したまま、かなり辛そうにしていたからだった。

エースとのすったもんだを終え、ブチブチと文句を言われながらも、とにかく希冴姫にも報告しなければ、と希冴姫とルインの部屋に行った俺たちは、相変わらず……いや、どう見ても以前より酷そうな病状の希冴姫と、看病するルインに出くわしたのである。

「希冴姫！？ る、ルイン、希冴姫は……」

「……平気。少しひどい風邪のようなもの」

そうは言うが、それにしてもう寝込んでから大分経つというのに、快復するどころか悪化して行く一方だ。どうしたって心配になる。

「……ふん。なるほどな。セツ、ルイン殿。少し、こやつと二人きりにさせよ」

「え？」

「……わかった」

「……な……」

ルインはあっさりと言き、俺の手を引いて部屋から出る。部屋には、希冴姫とエースが残された。部屋を出る直前、エースが何か呟いたような気がしたが、それを聞き返す間もなく俺は部屋を追い出された。

「……希冴姫」

「はあ、はあっ……エース、ですの……？」

「そうだ。ジャックとキング殿。テンスも居る」

『希冴姫……いつの間にこんなことに……私がついて居ながら……』

『なんとということをお主、そこまで……』

『……くっ！』

「……まったく、何処まで惚れこんでいるのだ。クレイジーに過ぎる」

「あ、あなたに……何が……大体、なぜここに……」

「ふん。代理だ代理。貴様がそんな調子では、奴を護る者がおらん
だろう。我は、少しだけの代理に過ぎぬ」

「そう……ですの。良かった……」

「……何がだ」

「ふふ……エースも、やっとわかりましたのね……騎士の心が」

「……貴様に言われるのは、大層不本意だ」

「相、変わらず……素直じゃ、ありません、ゴホッ!? ゴホッ！」

希冴姫は、まともにしゃべる体力も怪しいらしく、すぐにせき込んでしまう。

「……まったく。今から貴様の主は、己の信念を、意志を貫く戦場に赴こうと言うのに、なんだ貴様のそのナリは」

「な……それでは、騎士装束を……」

ベッドから這い出ようとする希冴姫を、テンスとジャックが慌てて止めた。

『行けません希冴姫。流石に、今無理すれば……』

『ならん。大人しくしている』

『ですが……』

「アホか貴様は。そんなナリで、剣など振れるか。構えるどころか立つことすらも危うい癖して。足手まといだ」

「し、かし……！」

「……ジャック。希冴姫の看病。キング殿も、そのサポートだ」

『わかりました』

『承知じゃ。団長』

「テンスは、我と来い。貴様はこちらだ」

『承知』

「え、エース何を……！？」

「わからぬか？ 病人は大人しくベッドに縛り付けられているがよい、と言うことだ。貴様の主は、不本意だが、我が任された」

「エース……」

意外そうな目でエースを見る希冴姫。

「我らは……騎士だ。騎士の本分は主君を護り抜くこと。だが……」

エースは、希冴姫と、他の三人を見渡してから告げる。

「我は、騎士団長。団長であるからには、貴様ら団員も護り通す義務がある」

特に、前に騎士団をバラバラにってしまった我には、な……と自嘲気味にエースは呟く。

「それに、貴様は主を、どうしてもその身で護りたいようだが……忘れるな」

エースはまたこの場にいるメンバーと、この場にはいない、セツを取り巻く精霊たちを想い浮かべる。

「貴様の主は、貴様にしか護って貰えないような奴ではない。ジャ

ツクも、キング殿も、テンスも、先のルイン殿も、冥界の者たちも、皆が奴を護っているのだ。思い上がるな。貴様一人が奴を想ってないぞい

「エース……貴女……」

「ふ……心配するな。我は奴に惚れたりなどしていない。ただ……友として、背中くらいは護ってやる。」

「行くぞ。テンス」

『ああ』

「我らの……誉れ高き戦場が待っている！」

『……ああ！』

エースは、テンスを引き連れて部屋から出て行ってしまふ。

「……まったく、なんですのもう。言うだけ言って、さっさと……」

『照れ臭かったのでしょうか。彼女らしい』

『ほっほ。しかし、まあ……よくも団長らしくなりおって』

『今の彼女なら……主様を任せることができますね』

「ええ……まったく、口惜しいですわ……こんな時に、こんなザマとは……」

『今は、ゆっくり休みなさい。希冴姫。また、共に……』

『うむ。また、五人揃って主を護ろうぞ。希冴姫よ』

「……ええ。必ず」

「さっきから何を惚けている？ さっさとデュエルを続ける。それとも臆したか!？」

「……慌てるな。ちよつと思ひ出話に耽っていただけだろ」

俺はエースと顔を見合わせ、コクリと頷く。

「さあ、行くぞ運命野郎！ 騎士の力を思い知れ！」

第三期第十三話「騎士の誇り」（後書き）

というわけで、最新の人気投票にていきなり三位を勝ちとったエースさんです。作者の依怙贖（せめて寵愛辺りにしておけ）を一身に受ける精霊さんです。残念な娘と化しているアテナとは偉い違いです）あ

それでは、悠でした！

第三期第十四話「運命を切り開く剣」(前書き)

結局夜通しとなる連投。もうわけがわからない！ ま、まあいいでしょう。調子のいい時にやるだけやって、後はモンハン漬けにでもなんでもなれば良いんです。女王に踏みつけられて殺された鬱憤とか、そんなはないです。ないっいたらないです。畜生……まさかこやし玉が欲しくなる時が来ようとは……。

第三期第十四話「運命を切り開く剣」

アルカナ〜切り札の騎士」

第三期第十四話「運命を切り開く剣」

「さあ行くぞ運命野郎！ 騎士の力を思い知れ！」

エースの攻撃力は2000。奴の……エドのドレッドサーヴァントの攻撃力は400。なら！

「俺は手札から装備魔法『アルカナソード スペード』をエースに装備する！」

『来たれ！ 猛き剣よ！』

エースの手に、美しい、しかし鋭い気を放つ神剣が握られる。

「攻撃力が変わらない……？ エフェクトを付加する装備魔法か！」

「そんなところだ。行け！ エース！ ドレッドサーヴァントを攻撃！ 『スペード・フラッシュ』！」

『せえいやあああああああ！』

「甘い！ リバースカードオープン！ 『エターナルドレッド』！ このカードは……」

「させん！ リバースカードオープン！ カウンタートラップ『トラップ・ジャマー』！ 『エターナルドレッド』の効果は無効にし、破壊する！」

「何っ！？」

「行けエース！」

『承知！』

エースの剣が、ドレッドサーヴァントを細切れにする。

「っ!? ぐああああああっ!?」

想像していた以上の衝撃に、エドが思わず吹っ飛ばされる。

「な、なんだ今のは……」

「戦闘の時、『アルカナソード スペード』の効果が発動したのさ。スピードの剣は、装備モンスターの戦闘ダメージを倍にする。尤も、自分が受ける戦闘ダメージも倍になるんだけどな」

「くっ……」

エドLP800

「なら僕はトラップカード『ステニー・シグナル』を発動！ デツキから『D-HEROダイハードガイ』を特殊召喚！ ダイハードガイは、破壊されたD-HEROを次のターンに復活させる！
ワンダーアライブ！」

『D-HEROダイハードガイ』 ATK800

くそ……元の世界のダイハードガイじゃ、そんなコンボはできないんだが……。原作の、細かい効果の違いまでは想定できない。

「俺はカードを一枚セット。ターンエンドだ」

「くっ……僕のターン、ドロー！ 僕はダイハードガイのエフェクトによりドレッドサーヴァントを蘇生！ ワンダーアライブ！」

エースに倒されたドレッドサーヴァントが再び特殊召喚される。

「そして僕は、カードを一枚セット。ドゥームガイを守備表示に変更し、ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！」

「この瞬間、『幽獄の時計塔』の針が進む！」

時計塔が指し示すのは九時。あと一ターンか。

「行くぞ！ 俺はエースでダイハードガイを攻撃！ 『スピード・フラッシュ』！」

『瞬光に散れ！』

「リバースカードオープン！ 『D-シールド』！ ダイハードガイは破壊されない！」

……やるな。

「俺はターンエンドだ」

「僕のターン、ドロ―！ 僕は手札から魔法カード『強欲な壺』を発動！ カードを二枚ドロ―！ 更に『D・HEROダイヤモンドガイ』を守備表示で召喚！ エフェクトを使う！」

『D・HEROダイヤモンドガイ』DEF1600

来たか。ダイヤモンドガイ。コイツの効果だけは、『天罰』でも使わないと防ぎようがない。次のターンに発動が決定した魔法カードの効果にはカウンターができない。

「僕が引いたのは『終わりの始まり』よってこの瞬間、次のターンにこのカードの発動が決定した！ ターンエンド！」

「俺のターン、ドロ―！」

「この瞬間、『幽獄の時計塔』の針は零時を指す！ よって、僕を護る無敵のエフェクトが発動する！」

これで、ドレッドガイの召喚条件が整った、か……。

『無駄だ』

「エース？」

「彼奴らは既に、墜ちた英雄……エド・フェニックスという復讐鬼に取り憑かれ、誇りをなくした者どもだ。誇りなき剣に、我は倒せぬ」

「……な、なんだ？ 今の声は……」

『ほう。我が声が聞こえたか。心底の愚者ではないようだ』

「これは……ソリッドビジョンが……？」

『先ほど貴様は、あの者に言っていたな。お前にはないモノが、自分にはある、と』

「それが……どうしたと言うんだ」

『勘違いするな。愚か者。ヒーローを渴望する理由？ ふん。ふざけるなよ』

「なんだと……！？」

『貴様は、貴様こそ、ヒーローをなんだと思っているのだ？ 復讐』

? 力? 真のヒーロー? 笑わせる』

「貴様!」

「貴様の眼には復讐しか映っていない。負の感情に支配された者が、ヒーローを語るなクズが」

エースは、エドに対しても全く変わらない態度で罵倒する。

「英雄キローとは……希望だ。幼子にとっての救い。護りの存在。敵を倒すのがヒーローではない。殺し、奪い、絶望させるヒーローの、何が真のヒーローだ」

「黙れ! 貴様に……貴様に何がわかる!?!」

「貴様こそ黙れ。今は私のターンだ。貴様に発言の権利などない。

私の話が終わってから、存分にわめけ。聞く耳は持たんが」

理不尽だ。相変わらず、基本的に取り付く島もないんだなコイツは。

「ヒーローが常に光に満ちていると思うな! ヒーローの真実は、闇に塗れている!」

「だが、ヒーローが子供たちに齎もたらすモノは、常に希望だ。光だ。ヒーローがその背中に庇うもの。それらは全て、希望に満ちていなければならぬ。ヒーローは、相対した者にのみ闇を与える。護る者には、希望を。貴様は……ヒーローの背中に在りながら、絶望しか見ていない。そんな貴様が、ヒーローを語るな」

「くっ……」

エースの言葉は、俺の胸にも届いた。ヒーローが、その背中で語るモノ。それは……。

「それは我ら、騎士とも同じ。安堵を、憧れを、希望を。その背中で語るのだ。そこに、我らは誇りを、プライドを、名誉を感じて、更に猛る。真実が闇であろうとも、血に塗れていようとも、我らの力の源は、我らの護る者たちの希望。それだけは、変わらぬ」

「お前は……」

「忘れるな。貴様にも辛いことがあったらう。しかし、貴様のその絶望が、恨みが、悲しみが、彼らを……魔物にしている」

俺には……俺には見える。エースも、エドのD・HEROも……
「泣いてる……」

『我は騎士！ 高潔なる切り札の騎士だ！ 英雄ならずとも、同じ
守護の剣！ よって、魔物に負けることは許されん！ セツ！』
「……ああ、任せろ。エド・フェニックス。俺は……お前を、運命
を……超えるぞ」

「くっ……！？」

「バトルフェイズ！ 『切り札の騎士団長 エース』で、『D・HE
ROダイヤモンドガイ』を攻撃！ 『スピード・フラッシュ』！」

『瞬光輝刃……』

エースの持つ剣が煌めく。

『尖晶斬！』

一瞬の交錯。

『散れ。哀れな墜ちた英雄よ』

また一瞬の間を置き、ダイヤモンドガイが細切れになった。

「ぐうっ！ だが、『幽獄の時計塔』の効果でダメージはない
！」

「わかってるさ。ターンエンドだ！」

「僕のターン、ドロー！ 僕だって、言われっぱなしではいられな
い！」

「ああ、来い！」

「この瞬間、『終わりの始まり』のカードエフェクトが発動する！
三枚ドロー！」

うわ……わかつちやいたが、きつつい効果だぜ……。

「更に『D・HEROダイヤモンドガイ』のエフェクト！ 『ダイヤモ
ンドガイ』を蘇生！」

エドの手札は五枚。一気に手札が増えたな。流石だ。

「行くぞ！ 僕はドレッドサーヴァントでその騎士を攻撃する！」

「攻撃力400のモンスターで攻撃！？」

「時計塔の効果でダメージを受けないからって……」

外野は困惑しているが、俺にはわかる。ドレッドサーヴァントのもう一つの効果、それは……。

「迎え討て！ エース！」

『当然！』

ドレッドサーヴァントはエースの持つ剣が煌めくと同時に霧散してしまう。だが……

「この瞬間、『D - HEROドレッドサーヴァント』のモンスターエフェクトが発動する！ このモンスターが戦闘によって破壊された時、自分フィールドの魔法・罫を一枚破壊することができる！」

「自分のカードを破壊！？ それって……」

「それって、『幽獄の時計塔』の効果が、発動するドン！」

「そうだ！ 来い！『D - HEROドレッドガイ』！」

『オオオオオオオッ！』

『現れたか……殺戮の囚人』

『D - HEROドレッドガイ』 ATK？

「ドレッドガイが召喚された時、自分のD - HERO以外のモンスターを全て破壊し、墓地からD - HEROを二体まで蘇生することができる！ ドレッド・ウォール！」

「マズイッス！ これでモンスターが蘇生されたら、エドのフィールドにモンスターが五体も……」

『させん！ セツ！』

「任せろ！ カウンタートラップ『オーバーウェルム』！ コイツは俺の場に、アドバンス召喚されたレベル7以上のモンスターが存在する場合にのみ発動可能！ モンスター効果が罫の発動と効果を無効にし、破壊する！」

『闇に還るが良い……囚人よ』

エースを中心にして描かれた魔法陣が、ドレッドガイを光で包み、消し去ってしまう。

「何！？ ぐっ！？」

「更に、カウンタートラップにより、相手モンスターの効果を無効

化したことで、手札の『冥王竜ヴァンダルギオン』第三の効果が発動する！」

『グオオオオオオオオオオッ!!』

『冥王竜ヴァンダルギオン』 ATK 2800

「冥王竜……ヴァンダルギオン!?」

「天冥流転!」

『主よ……俺も、戦おう!』

「頼むぞ……俺は墓地から『切り札の騎士 テンス』を守備表示で特殊召喚!」

『切り札の騎士 テンス』 DEF 2000

『フン。また頼むぞ。守護騎士テンス』

『その名で呼ばれるのも……懐かしい。神殿騎士エース』

「『切り札の騎士 テンス』は、フィールド上に表側表示で存在する限り、自分の他の切り札の騎士と名のついたモンスターを攻撃する時、このカードにその攻撃を移し替えることができる!」

『守護は任せる。団長』

『ああ……我は攻める。遅れるな』

「くっ……まだだ! 僕は手札から魔法カード『死者蘇生』を発動! 墓地からドレッドガイを……」

「させねえって言っただろ! カウンタートラップ『マジック・ジャマー』! 手札を一枚捨て、相手の魔法カードの発動と効果を無効にし、破壊する! 俺は手札から『ジャム・ウォリアー』を捨てて効果無効化する!」

「ここから、俺の真骨頂!」

「更に俺は墓地に捨てた『ジャム・ウォリアー』の効果を発動! このカードがカウンタートラップのコストとして墓地に送られた場合、自分はデッキからカードを二枚ドロウする!」

「まだだ。まだ終わらない! 俺のターンは、まだ続く!」

「そして『切り札の騎士団長 エース』の効果も発動! このカードがフィールド上に表側表示で存在する場合、一ターンに一度プレ

イヤーが手札を墓地に送った時、手札を墓地に送ったプレイヤーはデッキからカードを一枚ドローする！」

「馬鹿な……コストが……コストにならないだど!?」

そつだ。エースが力を貸してくれたことで、俺のカウンターデッキは……手札消費の激しいカウンターのデッキでありながら、手札を絶やさず、相手ターンでもいくらでもカードを展開できる形まで完成した！

「さあ、何やってる。お前のターンだろ」

「ぼ、僕のターン、ドロー……」

「違う違う！ “まだ” お前のターンってことだよ！」

「あつ……」

プロにあるまじきミスとっていいだろう。ターンの把握に失敗するなど。

「くつ……僕は、カードを二枚セット。ターンエンドだ……」

「なら、改めて行くぞ。俺のターン！ ドロー！」

このターンで決める！

「俺は魔法カード『トラップ・ブスター』を発動する！ 手札を一枚捨て、このターン俺は手札からトラップカードを発動することができる！ 俺は……ッ！」

捨てようとしたカードを見て、一瞬躊躇う。なぜならそのカードは……、

「捨ててくれ。セツ。我が……過去と決別するために」

俺が捨てようとしたのは『切り札の騎士 エース』。以前の……

俺に、死への恐怖を語ってくれた、あの時のエースだ。

「っ……！ 俺は、『切り札の騎士 エース』を墓地に捨てる！」

「っ……！ う、あ……」

エースが、辛そうな顔をする。だが、俺は謝らない。謝れない。

エースの決意を、無駄にしたいくないから。

「この瞬間、墓地の『切り札の騎士 エース』と、『フィールドの『切り札の騎士団長 エース』の効果が発動！ まずは『切り札の騎

士 エース』の効果で、このカードを手札から墓地に捨てた時、カードを一枚ドロウする！」

『さあ、我を存分に振るえ！ セツ！』

「ああ！『切り札の騎士団長 エース』の効果！ 手札を捨てたことにより、デッキからカードをドロウ！」

「くっ……！？ なんてタクテイクスだ……これが学生……！？」

「行くぞ！ まずは邪魔なその盾をぶっ壊す！ 速攻魔法『サイクロン』！『D-シールド』を破壊する！」

渦巻く風が、ダイハードガイの盾を吹き飛ばす。

「俺は更に、『豊穣のアルテミス』を攻撃表示で召喚する！」

『豊穣のアルテミス』 ATK1600

アルテミスの本領はドロウ加速。だが、アタッカーとしてもそこその能力を持つ。少なくとも、攻撃力の低めな下級D-HERO相手なら！

「行くぞ！ テンスを攻撃表示に変更し、バトルフェイズ！ テンスでダイハードガイを攻撃！『轟断剣』！」

『切り札の騎士 テンス』 ATK1000

『おおおおおおつ！』

テンスの持つ大剣が、ダイハードガイを一刀の下に両断する。

「次！ ヴァンダルギオンでダイヤモンドガイを攻撃！『冥王葬送』！」

「ぐうっ！」

「もう一つ！『豊穣のアルテミス』でドウムガイを攻撃！」

天使の放つ光に耐えきれず、ドウムガイが爆散する。

「ラストだ！ エースでプレイヤーにダイレクトアタック！『スピード・フラッシュ』！」

「リバーズカード『ドレインシールド』！ この効果により僕は……」

「無駄だよ！ 手札からカウンタートラップ『魔宮の賄賂』！ 相手に一枚ドロウさせる代わりに『ドレインシールド』の効果を無効

にする！」

「まだだ！『トラップ・ジャマー』！これならどうだ！」
テレビで亮さんにやったコンボか……しかし！

「悪いな……少なくともカウンターなら、俺は亮さんの先に行く！
更に手札からカウンタートラップ『神の宣告』！ライフを半分
支払うことで『トラップ・ジャマー』の効果は無効化する！」

セツLP2000

「なんだと!？」

「カウンタートラップ二枚が発動したことにより、俺は『豊穡のア
ルテミス』の効果でカードを二枚ドロー！」

『終わりだ。我が友は、立派に使い手としての責務を果たした。な
らば、次は私の番だ!』

「そんな……斎王の預言が、運命が外れると言うのか……？ 御堂
切……コイツ、一体……!？」

『兄の方は、運命さためを打ち破る男として有名だ、とな』

エドの脳裏に、カイザーの言葉が蘇る。

『運命に縛られし愚か者……我が剣にて浄化する！ せえええええ
いっ!』

「僕が……父さんのD・HEROが……！ ぐああああああっ
!?!」

エドLP0

「エド……」

俺は膝を着いてしまったエドの傍により、手を伸ばす。

「運命って言葉に、逃げるな」

「っ!」

「逃げるための理由を探すことほど、無駄なことはないぞ」

「……認めない」

「エド」

「認めないぞ。僕は。斎王の預言は間違っていない。僕のプレイン
グが甘かったただけだ。D・HEROは……父さんの作ったヒーロー

は最強だ」

「……………ああ」

わかつていた。俺が例えコイツに勝っても、コイツには届かない。コイツの心に届くのは……………。

「また、いつか十代と再戦してくれ。エド」

同じHERO使いである、十代だけだ。

「なに……………？」

「今は……………無理だが、アイツはきつと、すぐに立ち直るから。だからその時は、またアイツとデュエルしてみな。きつと、何か見えるものがある筈だ」

HERO使いじゃない俺には、きつとエドや十代の心に届くメッセージはあげられない。

「エド・フエニックス」

「お前は、さつきの……………！」

「ヒーローを使うなら、希望を持って。遊城十代のように。ワクワク、だったか。奴は、ヒーローの使い手として、お前よりも数段優れた資質があるぞ。今はまだ、未熟だがな」

「何を……………」

「ヒーローは、希望でなくてはならん。ならばその使い手もまた、希望を胸に宿し、光を知れ。……………騎士の使い手が、胸に誇りを持つように」

エースの言葉はエドだけじゃなく、俺にも向けられている。

「眼を覆い、耳を塞いだままでは、お前を護る精霊の鼓動も聞こえない。貴様の曇った眼が晴れることを、祈っているぞ」

「……………」

エドは俺の手を無視して立ち上がり、デュエル場から出て行った。アイツにも、考える時間が必要だろう。

「お兄ちゃん」

「さだめか。なんだ？」

「勝ったね」

「ああ。約束、したしな」

「ん……」

さだめが嬉しそうに微笑む。少し頬を染めて、はにかむ様に。最近のさだめは妙に殊勝だ。なんか逆に恐ろしく感じてしまう俺がダメだ。

「明日香、十代の方はどうだ？」

「……多分、気を失っているだけよ。少しすれば、眼を覚ますと思っけど……」

「そうか。なら良かった」

「セツ。何をボサツとしている。行くぞ」

「エース？ 行くなって……」

「決まっている。希冴姫の見舞いだ。三銃士とルイン殿に戦果報告もせねばなるまい」

「ああ、そうだな。けど、十代は……」

「十代のことなら心配するな。俺が責任持って保健室に送り届けよう」

「そっか。なら、頼む。三沢」

「アニキの看病は、オレたちに任せるザウルス！」

「むっ！ アニキの看病をするのは僕！ 剣山君はただの運び屋！」

「何言ってるドン！ アニキを背負うこともできない丸藤先輩は引っ込んでるドン！」

「はは……」

問題なさそうだな。なら、お言葉に甘えて、俺たちは部屋に戻りますか。

「エース」

「？ なんだ」

「ありがとう。今回は、お前のおかげで勝てたよ」

「……フン。希冴姫の代理だ」

「だとしても、だよ。それに、お前いつから希冴姫のこと、名前で呼んでくれるようになったんだ？」

「……そんなこと、どうでもよかるっ」

エースの顔が、微妙に赤い。

「照れなくても……」

「照れてない！」

思い切り照れてますがな。

「素直じゃな……」

「ええい黙れ！ それ以上言うなら貴様をその妹への貢物として捧げるぞ！」

「待て！ それはシャレでは済まん！」

そんなことになったら……。

「そんなことになったら、さだめ、エースさんに全財産あげてもいい！」

「貢がれる側が金払ってどうする！？ って、そうじゃなくて……」

「ふ、フフフ……なるほど、貴様の弱点がわかったぞ。その妹か！」

「しまったバレた！」

エースの奴、これは面白いモノを見つけたとばかりに嗤っていてやる！ くそ、ならこっちも……。

「はん、高潔な騎士様が随分と腹黒い、卑怯な真似をするな？ そりゃ人質と大して変わらんぞ！」

「な、なに……？」

「誇りだプライドだと言っておいて人質とは……片腹痛い！」

「き、貴様……」

「いや、人質でも何でもない気が……」

さだめが至極最もなツツコミをしていたが、既に頭に血が上っているエースには聞こえなかったらしい。

「ええいやはり貴様とは直接決着をつけねば気が済まん！ そこに直れ！」

「だが断る！」

「な、なんだと！？」

「今は一刻も早く、戦果報告に行くべき時だ！ よって俺は帰る！」

「くっ……お、おのれ、後で覚えているがいい！ 必ず泣かせてやる！」

「その言葉、そっくりそのまま返してやろう。石頭ひんぬー小娘」
「なあっ！？ き、キサマ……」

エースが顔を真っ赤にしてプルプル震えている。引きつった顔で、今にも腰のレイピアに手を伸ばしそうだ。

「……ははっ！」

俺は、思わず笑った。

「な、何がおかしい！」

「いや……やっぱいいなあ。お前は」

「なっ！？」

こんな風に、嫌味ったらしくケンカ出来て、こんなに楽しい友人を、俺は持ったことがない。

「やっぱりお前とは、こういう関係がしっくりくるよ。エース」

希冴姫たちのような、異性の感情はなく、かといって剣士や十代たちのような、男同士の友情、といったものでもない。純粋にケンカし、笑いあえる。そんな友人。

「俺は、お前の親友になりたいよ。エース」

それは、俺の偽らざる気持ちだった。

「……フン。貴様なぞ、精々が悪友止まりだ」

顔を逸らしてそんなことを言うエースの頬は、隠しきれない喜色に染まっていた。そんな、予想通りの表情に、また笑う。

「エースさん顔真っ赤」

「頬が緩んでるぞ。エース」

「く……ええいもう黙れ！ そ、それ以上は言うな！ ジグソーパズルにしてくれるぞ！」

「ははっ！ バラバラにされちゃ敵わないな。逃げるぞ、さだめ！」

「オツケー！」

「ま、待て！ 置いて行くな！ 我一人では道がわからんだろうが！」

慌てたようなエースの声が背後から聞こえてきて、やっぱり、笑う。

アテナは、未だ帰って来ないし、希冴姫は寝込んでしまっている。だが、今この場においては、俺も、さだめも、エースも。皆、笑顔だった。

「待てこのっ……待たんかー！」

「うおっ！？ ちょ、おま！？ 剣投げるな！」

「全力で投げた剣を普通に白刃取りするあたり、底が知れないよね。お兄ちゃんって」

「全部お前関係で培った生存本能だけだな！」

言い争い、でも笑顔。そんな、俺たちの関係が嬉しい。

俺たちはただ笑いあった。終焉の影が、すぐ傍に迫っていることにも気付かずに。

再会と、そして別れが、すぐ傍に迫っていた。

第三期第十四話「運命を切り開く剣」（後書き）

改訂前と変わらずにエース無双。登場してから一切倒されてもいません。というか、ほぼエースさんしか活躍していない件。希冴姫はこんな活躍したことないのに！

まあ、それはともかく。改訂前だと、次でアテナ帰還だったので、ちよつと二、三話追加で話入れます。主に、修学旅行あたり。以前の話だと、精霊界から帰ってもセツたち修学旅行いけないじゃん！ と読者の皆様のご指摘にて気付きました。よし、ならアテナ帰ってくる前に行っちゃおう！ と。……え？ アテナ？ ええとその、ごめんなさい。ユーキちゃんの出番を削っちゃった分、お詫びにユーキちゃんのメイン回にしたいんです。アテナ帰還しちゃうたらユーキちゃんが……。

それでは、悠でした！

第三期第十五話「迷える少女と偽りの現在」(前書き)

……すみません。修学旅行編ですが、ユーキちゃん軸にしようとするのでアテナ復帰後のアイドルデュエルと時期がかみ合わないことに気が付きました。よって、ユーキちゃんのメイン回は別に用意して、修学旅行編はアテナ帰還後にアテナも交えてやりたいと思います。

第三期第十五話「迷える少女と偽りの現在」

アルカナ↳切り札の騎士

第三期第十五話「迷える少女と偽りの現在いま」

『グオオオオオオオオオオオッ!?!?』

夕闇に染まる空の下、欠片の断末魔と共に周囲の闇が晴れて行きました。

これで、もう何百匹目になるんでしょうか……もう、数えるのも馬鹿らしくなるくらい、私は終焉の欠片を消滅させてきました。

「……けど、本体は未だ現れない……もう、時間がないのに……!」
焦る気持ち。

とにかく、次の欠片を潰さなきゃ、と踵を返した私の視界に、意外な人物が写りこんできました。

「……光、お姉さん……」

悲しげに顔を伏せた短髪の女性。それはあの時、私がセツの下から去ったあの日に、仲良くなったお姉さん。光お姉さんが口を開く。

「……無駄よ、アテナ……」

光お姉さんは、後ろ手に引き摺っていた『ナニカ』を私の前に放りだす。

「ッ欠片……!」

それは無数の欠片。そのなれの果て。光お姉さんに放りだされたそれらは、あっさりと消滅する。

「……こんなもの、いくら潰したところで意味はないの。わかって

いるんでしょ？」

「……わかってます。でも、私にはこうするしか……本体を見つけ出すには、これくらいしか……」

「ウソね。貴女は知っているはずでしょう？ 終焉の本体の居場所。希望が言っていたはずだもの」

「……あの人は、信用できません。あの人が本当のことを言っているのか、判然としませんか」

「それもウソね。希望が本当の事を言っていると、貴女は分かっている。だって、希望が言っていた言葉は全て、事実起こっていることだもの。そしてアテナ、貴女はそれを理解しているもの」

お姉さんの言葉が、私の虚勢を次々と突き破ります。私は、ただ目を逸らすことしかできません。

「デュエルアカデミア。そこに本体はいる。希望は、そういうことを言っていたはずでしょう？ 何故、貴女はアカデミアから遠く離れたこんな辺境で欠片狩りなんてしているの？ そんなにセツに会いたくない？」

「……会いたくありません」

「それもウソ。じゃなきゃ、そんな痛みに塗れた顔で目を逸らすはずがない」

「っ……！」

「……ねえアテナ。なんでそこまで恐れるの？ 貴女の犯した罪つて本当にもっ……」

『いい加減にしなさい！』

「シャルナ！？」

シャルナは、光お姉さんに向けて杖を構えていた。憎しみの籠った、とまで言える凄まじい形相で、殺気すらも伴って。

「……何のつもり？」

『もう、やめなさい。この娘をこれ以上苦しめないで！』

「シャルナ……」

『最初は……あたしだって坊やたちの所に帰って欲しかった。そう

することがこの娘にとっての幸せだって、思ってた……」

「じゃ、今は？」

「……変わってない。今でも、坊やたちの所こそが、この娘にとっての安息だと……理想郷だと思ってる。でもね……」

フツ、とシャルナの顔から表情が消えた。先ほどの、烈火のとき怒りの表情とは打って変わり、冷徹な、氷雪のとき怒り。

「あんたたちのやり口が、気に入らない」

「……………」

光お姉さんは、ただ無言。こちらも表情を消して、私たちを静かに見据えています。

「散々この娘を追い詰めて……苦しめて苦しめて、もう駄目って所を坊やに救わせてハッピーエンドがお望み？ 絶望の淵に置かれたこの娘を、救世主よろしく坊やが救う。こんな感じかしらね。あんなたちの描いた筋書きは……反吐が出る」

シャルナは淡々と、光お姉さんに言葉の矢を突き立てて行きます。
「……させないわよ。もうこれ以上、アテナを苦しめさせるもんですか。あたしは、もう……“二度もこの娘を失っている”んだから。三度も……失って溜まるもんですか」

シャルナ……。

「アテナ……もういいから、もういいから休みましょう？ 貴女はこれ以上、苦しまなくていいのよ。終焉のことも、貴女が罪と呼んでいるものも、全て忘れて休んで、元気になってから、あの坊やの所に帰りましょう。ね？」

「……シャルナ、でも私は……」

「……また、貴女は死ぬの？ あたしを置いて、一人責任を背負ったまま、幸せを放棄して？ あたしはもう、貴女を守れないのは嫌」

「……………」

シャルナ……。

「……………気に入らない、かあ」

「……………」

ボソリ、と呟いた光お姉さんに、シャルナはまた鋭く睨みつけます。

「おあいにく様。私も気に入らないのよね。今のあなたたち」

「なんですって……!?!」

「私はね、希望に言われてここに来た。それは認める。でも、あんなたちをどうしようなんて、欠片も思っちゃいない」

「何を……!」

「信じる、とは言わない。けどね、アテナ。貴女が望むのなら、私は貴女に協力するわ。希望のこととか、終焉のこととか世界のこととか、そんなこと無視してね」

光お姉さんは、優しい瞳で私を見つめます。その瞳に、ウソは見当たりません。

私は、その赤い瞳の魔性の輝きに、一瞬見惚れて、思わず手を伸ばしかけます。でも、そんな私の手は光お姉さんにスツ、とかかわされてしまいました。

「……でも、今のアテナには協力できない」

「え……」

「……ねえアテナ。アテナは、セツにどうして欲しいの？ 貴女はセツに、何を望んでいるの？ 聞かせて。アテナ」

私が、セツに望んでいること……? そんなこと……、

「……何も、望んでなんかいませんよ」

私に、そんな権利はありませんから。

「………はあ。ダメね。これは」

光お姉さんは、そう言っつてやれやれと肩をすくめる。

「この期に及んでまだそれ？ 呆れた。いいわ。もう一度ボコボコにして、ついでにあんたの本心を暴いてやるわ」

「え？ え？」

いきなりデュエルディスクを構える光お姉さん。反射的に私もデュエルディスクを構える。

「ま、待ってください！ 今光お姉さんとデュエルする意味があり

ません！」

「意味を見出すのよ！ このデュエルから！ デュエル！」

「デュ、デュエル！」

なし崩し的に、デュエルをすることに。光お姉さんの意図は読めませんが、デュエルをする以上……。

「本気で、行きます！」

「そうしなさい。じゃないと、すぐ終わっちゃうから。私のターン、ドロー！」

光お姉さんのデッキは高攻撃力モンスター主体のパワーデッキ。そして、エースに『バーサーク・デッド・ドラゴン』を据えた完全なパワータイプ。

「私はモンスターを一体守備表示でセット。カードを二枚セットして、ターンエンドよ」

「私のターン、ドロー！ 私は永續魔法『神の居城 ヴアルハラ』を発動します！ 手札から『アテナ』を攻撃表示で特殊召喚！」

「あなたたちの思い通りにはならないわ。あたしは、この娘を守る！」

「更に『聖なるあかり』を攻撃表示で通常召喚！」

「……へえ、そう。『聖なるあかり』……ね」

「これが、光お姉さんの『バーサーク・デッド・ドラゴン』対策！ 『聖なるあかり』が表側表示で存在する限り、闇属性モンスターの召喚も特殊召喚もできません！」

「『アテナ』の効果で600ポイントのダメージです！」

「ちっ……」

光LP3400

「更に、もう一枚永續魔法『コート・オブ・ジャスティス』を発動！ 手札から『光神テテウス』を攻撃表示で特殊召喚！ 『アテナ』の効果でダメージ！」

光LP2800

『バーサーク・デッド・ドラゴン』は出させません！ 一気に決

めます！

「まずは『光神テテユス』で守備モンスターに攻撃！」

「……目が曇っているわよ。アテナ。私の守備モンスターは『マシユマロン』。裏守備表示のこのカードが攻撃されたことで、1000ポイントダメージを与えるわ。知っているでしょう？」

「くっ……」

アテナLP3000

失敗しました………てっきり、バルバロス妥協召喚のセットだと思っ
ていましたが………リリース確保のための壁………。

「私はターンエンドします」

「私のターン、ドロ。リバースカード『メタル・リフレクト・スライム』。永続魔法『冥界の宝札』発動。二体のモンスターをリリースし、『火之迦具土』を攻撃表示で召喚。『冥界の宝札』の効果でカードを二枚ドロ！」

『火之迦具土』 ATK2800

『火之迦具土』！？ それは………マズイです！

「更にリバースカード『無力の証明』！ アテナの場に居るレベル5以下のモンスターを纏めて消し去る！」

「きゃ………！」

私の場のモンスターは『アテナ』を除いて全てレベル5以下。そんな………。

「行きなさい『火之迦具土』………！ あの子に現実を思い知らせてやりなさい！『紅蓮滅殺拳』！」

『ぐ、ああっ！？』

「きゃああっ！？」

アテナLP2800

「私はメインフェイズ2に『アドバンスドロ』を発動！『火之迦具土』をリリースしてカードを二枚ドロ！手札から速攻魔法『デーモンとの駆け引き』を発動。デッキから『バーサーク・デッド・ドラゴン』を特殊召喚してターンエンドよ」

『バーサーク・デッド・ドラゴン』 ATK3500 3000
結局『バーサーク・デッド・ドラゴン』まで出されてしまいました。攻撃力は500下がるとはいえ……キツイです。

「くっ……私のターン……」

「ドローの前に、『火之迦具土』の効果で手札を全て捨てて貰うわよ。まあ、元々残りの手札は一枚しかなかったわけだけど」

「……ドローします。……！ 私は『神の居城 ヴアルハラ』の効果で手札の『The splendid VENUS』を攻撃表示で召喚します！」

『The splendid VENUS』 ATK2800

「あら。いい引きしてるじゃない」

『バーサーク・デッド・ドラゴン』 ATK3000 2500

攻撃力が下がった『バーサーク・デッド・ドラゴン』なら……倒せます！

「バトル！『The splendid VENUS』で、『バーサーク・デッド・ドラゴン』を攻撃！『ホーリー・フェザー・シャワー』！」

「く……」

光LP2500

「私はこれでターンエンドです」

「つつ……私のターン、ドロー。カードを一枚セット。ターンエンドよ」

「私のターン、ドロー！」

「行けます！ 今なら！」

「『The splendid VENUS』でダイレクトアタック！」

「リバースカード『サンダー・ブレイク』！ 手札を一枚捨てて」

The splendid VENUS』を破壊！」

「くっ……ターンエンドです」

「私のターン、ドロー！ 私はモンスターを一体守備表示でセット。」

ターンエンドよ」

光お姉さんのデッキは最上級軸。だからこそ、一度崩されれば立て直しに時間がかかります！

「私のターン、ドロ―！ 私は『強欲な壺』を発動します！ カードを二枚ドロ―！」

これなら……！

「私は手札から魔法カード『儀式の準備』を発動します！」

「！ 儀式……ですって……！？」

「デッキから『神光の宣告者』を手札に加え、墓地から『宣告者の預言』を手札に戻します！」

「……『火之迦具土』の時か……！」

「私は手札の『光神機 桜火』をリリースし、『宣告者の預言』を発動します！ 来てください、完全にして絶対なる宣告の神！『神光の宣告者』！ 守備表示で特殊召喚！」

『神光の宣告者』DEF2800

私の、新しい切り札！ 最強の宣告者！

「ちっ……面倒なのが出てきた……でも、これでわかった。確信したわ……アテナ」

「更に『宣告者の預言』の効果を発動します。儀式召喚に成功した時、このカードを墓地から除外することで召喚の贄を手札に戻します。ターンエンドです」

「……私のターン、ドロ―」

光お姉さんは、どこか複雑そうな表情です。嬉しそうでもあり、腹立たしげでもある。そんな表情。

「……アテナ。やっぱり、貴女は間違ってるわ」

「な……どうということですか」

「今のあなたは、ウソばかりつてことよ！ ハリボテ同然の今のあなたが、私に勝てると思うな！ 私のターン、ドロ―！」

無駄、です……例えば光お姉さんが最上級モンスターを主軸としていても、私の手札には既に二体の天使族。二回までなら、どんな効

果だって無効化して見せます！

「手札から魔法カード『ライトニング・ボルテックス』を発動！手札の『レベル・ステイラー』を捨てて……」

「無駄です！『神光の宣告者』の効果を発動！手札の『シャインエンジェル』を捨てて無効化！」

「なら私は守備モンスターの『神獣王バルバロス』を反転召喚。墓地の『レベル・ステイラー』の効果を発動するわ！」

『神獣王バルバロス』 ATK1900

『レベル・ステイラー』？ 一体どんな効果で……。

「『神獣王バルバロス』のレベルを一つ下げて、墓地から特殊召喚するわ！」

「さ、させません！手札の『光神機 桜火』を捨てて『神光の宣告者』の効果発動です！」

『神光の宣告者』は、手札の天使族を捨てることで魔法・罫・モンスター効果のどれであっても無効化できる最強の宣告者。これなら……！

「あっそう。んじゃ、もう一度『レベル・ステイラー』の効果を発動するわ」

「な……」

「別に、一ターンに一度しか発動できない効果じゃないのよ。残念だったわね」

「し……」

「しまった……余計なことを……これで私の手札はゼロ。『神光の宣告者』の効果が使用できない！？」

「更にもう一体の『レベル・ステイラー』の効果を発動！『神獣王バルバロス』のレベルを更に一つ下げ、墓地から特殊召喚！」

『レベル・ステイラー』 ATK600

「そんな……もう一体！？」

まさか、『サンダー・ブレイク』！？あの時既に……。

「さあ、まとめてぶっ飛ばすわよ！私は三体のモンスターをリリ

「スし、二枚目の『神獣王バルバロス』を召喚！ 効果発動！」

『神獣王バルバロス』 ATK3000

「そんな……また、私は……、」

「目を、覚ましなさいよ。アテナ。『神獣王バルバロス』で、プレイヤーにダイレクトアタック！ 『トルネード・シエイパー』！」

「あ、あああああああつ！？」

「負ける……の？」

アテナLPO

『アテナ……っ！』

「あ……わたし……」

「気を失ったたのよ。大分、疲れが溜まってたんでしょね」

「ひかり……お姉さん……」

「そ。光お姉さんよ。大丈夫？」

『あなた……よくも抜け抜けと……！』

「いきり立たない。ったく……」

苛立たしげなシャルナに、光お姉さんもつられて不機嫌そう。

「……ねえ、アテナ。やっぱりアンタは、ウソだらけよ」

「……」

「最後の『神光の宣告者』。あれではつきりわかった。アテナが、セツのことでどうしようもないくらい大好きだったこと。助けて欲しいって思ってること」

「……なんで……」

「最後の最後に『神光の宣告者』が出てきた時点で、もう明らかよ。パーミッションの親玉みたいな天使。助けて欲しいんでしょ？ セツに。伝わってきたわ。貴女の気持ち」

「私は……」

セツと離れて、心細くて、辛くて……でも、セツには会うわけに

はいかなくて……。

「その代替。パーミッションデッキ使用のセツに準えて、構築の難しい儀式召喚のギミックも組んで……もう、分からない方がどうかしてるわ」

「……………」

「アテナはウソつきね。そんなにセツの事好きなのに、ヘンな負い目を感じて一人離れて……ホント、馬鹿」

「だって、私はセツに酷いこと……謝ったって、許されることじゃなくて……きつと、光お姉さんみたいに嫌われて……」

「……私が、今のアテナが嫌いつて言ったのはね……アテナ。今のアテナが、ウソつきだからなのよ」

「え……？」

「初めてアテナと会った時、なんて素直で健気で、真っ直ぐな娘なんだろうつて思ったのよ。真っ直ぐ、正直に、自分の気持ちを大好きな相手に伝えられる、そんな貴女が好き。そんな貴女だから、お友達。でも、今のアテナは、ウソつき。だから、嫌い」

それは、何も……何も知らなかっただけで……知っていたら……。「そうかしらね。例え、最初から知っていたとしても、アテナなら告白してたんじゃないかしら。それくらいじゃなきゃ、初対面でいきなり告白なんてしないと思うわ」

あの時……セツと初めて会った時、殆ど衝動的に告白しました。断られるかも、とか、ヘンな子だと思われるかも、とか、そんな危惧、あつて然るべきだったのに。

「ウソじゃないって……わかったんでしょ？ セツへの気持ち、本物だって、わかったんでしょ？ なら、戻ればいいじゃない。自分の心に正直に、さ」

でも……でも私は！

「罰を受けたいの？ セツたちに酷いことをした罰を？ だからセツに会わずに、自分を追い込んでいるの？ さっきシャルナが言っていたけど、ホントにアテナを追い込んでいるのはアテナ自身よね

「？」

「そう……です」

「だったら、いい方法があるでしょうが。罪を償い、罰を受ける、最善の方法が」

「え……？」

思わず顔を上げる。あつさりと、罪を償う方法があると言いだした光お姉さんに目を向ける。

「殺人者が罪を償えないのは、犯した罪の対象が既にいないから。既に死んだ人には、どう足掻いたって罪を償えない。でも、アテナは違うでしょ。セツも、さだめも、普通に生きてるんだから。あの二人の前まで行って、正直にゴメンナサイしてくればいいの」

「そんな……そんなこと……」

「できないって？ そう思うアテナだからこそ、これが一番なのよ。罪悪感で潰されそうになるくらい酷い罰を、受けられるんだから。」

「一番酷い罰よね」

あ……。

「このままここに居れば、罪を償うこともできず、世界は、滅びるわよ」

「わ、たし……」

「それでも罰を受け足りないなら、セツを誰かに譲っちゃいなさいな。目の前でラブシーンでもして貰うといいわ」

「それはダメです！ あ……」

思わず、といったように口から出た言葉に、私は呆然とする。でも、光お姉さんは笑顔を浮かべる。

「ほら、正直な娘。舞台から降りたーだの、私には資格がないーだの言っても、結局アテナの望みはそういうことですよ。なら、素直になっちゃえばいいのよ」

私の、望み……。

「……もう少し、もう少しだけ、時間をください」

例えそうだとしても、すぐには無理。勇気が、足りない。

「……いいえ、待たない」

「え？」

「力尽くで、引っ張ってってあげるわ。いつまでもウジウジ悩むな！」

「や、ちょ、ちよつと……待ってください！」

「あんたに勇気をくれるのは何！？ セツでしょ！ だったらここでいくらウジウジしてても勇気なんざ湧いて来ないわよ！ セツに会えば勇気も貰えて罪も償えて一石二鳥！ 違う！？」

「ご、強引すぎます！ 無茶苦茶な理屈です！」

「ちよつとでも前向きになった今行くのが一番いいのよ！ また一人で勇気が湧くまで……なんて言ったら、また延々悩み続けて落ち込んで行くだけよ！」

「そ、それは……でも！」

「デモもストもない！ 無理矢理、力尽くで、セツの所まで速達よ！」

「や、やあああああつ！？」

『ちょ、ちよつと！』

「セツに会えば全部解決すんのよ！ 希望みたいに心理的に操ってセツの下に連れ返すようなことはしないわ！ 私は！ 最終的には！ 力尽く！」

『力強く言っな！』

「でも、これが手っ取り早いでしょうが！ 私の見たところ、アテナみたいなのは、ここ一番で度胸があるの！ 追い詰められたら夜這いだってするタイプと見たわ！ 自分から押し倒すタイプよきつと！」

『……確かに』

「ちょ！？ シャルナ！？」

「……あれ？ もしかしてもう押し倒しちゃった？」

『……ノーコメントしておくわ』

「……なら尚更！ 無理矢理強引に力尽くでセツの前に叩きだせば

上手く行くわ！」

『……ホントに、それが良いかもしれないわ』
「シャルナ〜!?」

ひよい、と軽々と片手で抱えられ、光お姉さんのものと思われる車に放りこまれる。

「さあ！ デュエルアカデミアに向けて……全速前進！」

「ちょ、まっ……いやああああああああああああっ
!?!」

……追記、光お姉さんの運転は、酷く豪快かつ荒っぽかったです。
「し、死ぬっ！ 死んじゃいます！ セツに会う前に死んじゃいますってばあ〜!?」

「大丈夫！ 私は車が木っ端微塵になっても無傷で助かったことあるから！」

「私は死にます！」

「アテナなら大丈夫！」

「何を根拠に!?」

「シャルナが守る！」

『無茶言わないで!』

「やっぱり死にます！ セツ！ セツ！ 助けてくださいいいいいい
!」

「やっと本音が出たわね！」

「あからさまに死を目前にしていますからね！ 死ぬ前に一目会いたいですよ！ 悪いですか!?」

キキイイイイツツ!! とか物凄い音を立てて車がドリフトします。……住宅地で。

「つと！ あつぶねー子供轢くところだったわ」

「なんで免許持つてるんですか！ 取り消しです取り消し！」

「持ってないわよ？」

「論外じゃないですかあ〜!?」

「ゲーセンで散々練習したから！」

「だからなんだっていうんですかあ!?!」
「同じくクルージングも練習だけはしてあるから。……ゲームで!」
「殺される!?!」
「ヘリの方が良い? 練習してないから面白そうね」
「希望さんを! 希望さんをお呼びください! あの人ならなんでもこなしそうです!」
「ジャンボジェットとかなら予習バッチリよ!……コナンの映画で」
「いやああああああ!?!」
「野暮な悩みなんか吹っ飛ばしましょう?」
「物理的に吹っ飛びそうです! って前! 前見てください! 崖です!」
「近道なのよ」
「あの世への!?!」
「ジャンプ!」
「うきやああああああああああつ!?!」
「エーキサイトイキング!」
「デンジャラスですよ極めて!」
「セツ……ここまで来たらもう素直になります! 会いたいです! 物凄く会いたいです!……死ぬ前に!」
『荒療治にも程があるわね……良かったーあかし、精霊で。実体なくて』
「私を失いたくないんじゃないかなかったですか!?!」
『いや、多分大丈夫よ』
「だから何を根拠に!」
『ギャグ補正かかっているから、吹っ飛んでも無傷よ。きっと』
「現実にギャグ補正なんてものはありません! シャルナはもっと現実と向き合ってください!」
『え? そうなの?』
「あああああああああああああ!」
「二トロ!」

生きて……会えたら……。
どぼっしゃああああああああん!!

第三期第十五話「迷える少女と偽りの現在」(後書き)

とりあえず、アテナをサクツと帰還させてしましましょう。次話は書き下ろしでユーキちゃん回をやる予定。それからアテナ帰還、修学旅行したいと思います。

それでは、悠でした！

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者？」（前書き）

こんにちは。

今回は豆フクロウさんの「遊戯王GXの旋風の守護者」より、主人公甲斐祐騎君とヒロイン紅龍蓮さんにお越しいただきました。とはいえ、デュエルするのは祐騎君だけです。お相手は現在活躍中の本音担当ツンデレ（！？）エース。結構難産でしたが、なんとか完成しました。どうぞ！

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者？」

アルカナく切り札の騎士く

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者？」

「む……」

早朝、エースが散歩に出かけっていると、一ヶ所だけ妙に景色が歪んでいる。

エースは今、希冴姫たちの部屋に居候している。男がいるのは不健全だということ部屋に入ったばかりのセツを追い出しての入居である。

「お前ら……言い分はわかる。わかるが、そんなに俺をたらい回しにして楽しいか！？俺は一体、何回部屋を変えれば落ち着けるんだ！？」

「少なくとも、我は楽しい」

「鬼か！？」

「騎士だ」

良く言う、と我ながら苦笑した。だが、どうにも毎回やり込められるセツを、ようやくやり込めることに成功したので気分が良かった。結局空き部屋もなく、途方に暮れたセツはテント暮らしの憂き目に遭っている。今も気分よく散歩をしていたのだが……。

「これは……」

不用意に近づくことはせず、やや遠巻きにその歪みを観察するエースに、背後から声をかける者がいた。

「それは、時空の歪。終焉の影響で生み出された、異世界への扉だ」
「何者だ！」

牽制と威嚇の意味を込めて銀の細剣を振るう。しかし、その剣は軽くないなされ。そればかりかキーン……と軽い音と共にエースの手から奪われる。

「なっ!？」

「危ないな。こんな物騒なモノ、人間界ではあまり振り回さない方がよい。問題になるよ？」

そう言っつて苦笑するのは、エースよりも頭一つ半は高い、長身の男。風に靡く金の長髪といい、隙のない身のこなしといい、タダものではないオーラから、エースはその人物に当たりをつけた。

「……真中希望か？」

「正解。セツから話は聞いているね？ 切り札の騎士団長、エース」

「そうか、貴様が……」

セツたちからは、大雑把にしか話を聞いていないが、相当な強者であり、一種のゲームマスター的存在であることは聞いていた。

「なに、そんなにいいものじゃない。権限自体は君たちと何ら変わらない、何処にでもいる一般市民さ」

「戯けたことを」

希望のジョークをエースは一蹴する。あからさまにからかっているのが丸わかりだ。

「それで？ この……時空の歪、だったか。これはどうするべきだ」

「当然、放っておくのは良くないな。以前、セツもこれに遭遇してね。異世界でのデュエルで、歪みを正してきたのだけれど……」

希望は、エースとその歪みを交互に眺める。

「今回は、キミを御指名のようだ」

「何故我が。貴様が行けば良かるう」

「いやいや……物語のメインキャストを退けて主役などとてもとて
も」

「ふざけた奴だな……」

「けどまあ、実際こういつた歪が目の前に現れた以上、今回はキミが主役なのさ。だから、行っておいで」

真面目なのかふざけているのかは分からないが、確かにこの歪は自分と呼んでいる気がしたエースは、訝しげな顔をしながらも仕方ないと首肯する。

「だが、確かこの歪は異世界へと繋がる扉なのだろう？ 向こうの世界で正してしまえば、こちらにはどうやって戻ってくる？」

「なに。基本的にはキミを、世界がこちらの世界に引っ張り戻してくれる。歪がなくなることによって異世界とのパスが切れ、修正がかかる、と言った具合さ」

「……とにかく、元に戻れるのならばそれでいい。余計な説明はいらん」

「そうかい？ なら、いつてらっしゃいな。僕は、ここで待っていてよう」

「待たなくとも構わんが」

「いいじゃないか。キミをけしかけた手前、無事を確認する責任があるしね。責任は取らなくちゃいけない。そうだろう？」

「そうだな。それには、同意してやる」

それだけ言い残し、エースは歪の中へと身を躍らせた。

「あ、ちよつと待って」

……訂正、踊らせようとした。

「……な、なんだ人の出鼻をくじいて！」

「いや、君には今説明したけど、良く考えれば相手方にも説明が必要だろう。いきなり現れてデュエルしろ！ じゃあ辻斬りみたいだし。辻斬り扱いされたくないでしょ？」

「……当然だ。我は騎士なのだから」

「というわけで、今回は僕も同行しようか。ストーリーテラーとしての役割、存分に発揮させてもらうよ」

説明好きの血が騒ぐのか、何処となく嬉しそうな希望を伴って、エースは歪に飛び込んだのだった。

「……む、ここか……」
気がつくくと、目の前にはいつものレッド寮。特に代わり映えもしない、普通のレッド寮である。

「……？ 異世界、と言っていたが……」
「なに、平行世界も異世界の内だよ」
屁理屈ばかり言う奴だ、と顔をしかめる。

「まあとにかく、中に入ってみるといい。キミのデュエル相手が……まあ、待っているというか、待ちぼうけているというか……」
「なんだそれは。はつきりしないな」
希望の指示する部屋の扉を開ける。と……

「……寝ているな」
「寝ているね」
部屋の中では、一人の男が平和そうな顔で一人眠っていた。確かに、待ちぼうけている、様にも見える。

「とりあえず、起こさんことには始まらないな。おい、起きろ」
適当に声をかけて揺るも、少し反応しただけで中々起きない。
氷水でもぶっかけるか、とエースが少々物騒なことを考えていると、男が身動きした。

「起きたか？」
「……zzz」
ギョツ！
「っ！？ ひ……」

眼を覚ましたかと思ったその男は、寝ぼけてエースに抱きついてきた。

「しッ……」
「あ、剣は預かっておくねー」
「痴れ者があああああっ！……」

突き飛ばしてから渾身のアッパー。幸い剣を持っていなかった
剣があればブロック肉にしていたので、仕方なく思い切りぶ
ん殴った結果、男は更なる深い眠りに……

「つかないつかない」

「め、滅したか!？」

「滅さない滅さない。倒すならデュエルで。リアルで殴り倒しちゃ
ダメだから」

「きゃあああつ!?! ま、マスター!?!」

「む?」

突如聞こえてきた悲鳴に、何事かと振り向けば、そこにいたのは
半透明の、鷲のような帽子をかぶった天使の女性。

「……確か、『ガーディアン・エアトス』……だったか」

「そ、そうですマスターの精霊をやらせていただいていますエアト
スです! というよりいきなり何を……!」

「痴れ者を成敗しただけだ」

「ウチのマスターぶん殴っておいて何を抜け抜けと……!」

「いきなり見知らぬ男に抱きつかれれば、自衛のために鉄拳くらい
は当然だろう」

この際、希望が剣を回収していなければ刃傷沙汰だったことは黙
っておく。

「あ、またマスター寝ぼけて……なるほど。ですが、だからといっ
てマスターが殴られたのを平然と見逃すことも……!」

「職務熱心なことだな。エアトス」

「当然です! 私はマスターをお守りするために居るんですから!

あ、あと私のことはエールと呼んでください!」

「断る。我の名前はエース。エールだと紛らわしい。エアトスと呼
ぶ。文句は好きにだけ言え。聞く耳持たんが」

「取り付く島なし!?!」

その時、コンコンとドアがノックされ、真紅の髪をしたポニーテ
ールの少女が入ってきた。

「祐騎、起きてる？ また何かへんな世界に……って、あんたたちは？」

「む……来客か」

「こんにちは。お邪魔しているよ」

未だにムスツとしたエースが少女を一瞥し、相変わらず自然体な希望が軽く手を上げる。

両者を眺め、少女はなるほど、と一つ頷いた。

「……今回のゲストは、あんたたちなのね」

「話が早くて助かるね。紅龍蓮」

「……なんで私の名前を？」

「禁則事項です」

伝家の宝刀一閃。これを言われたら黙るしかない。

「って、祐騎！？ え、なんで祐騎が寝相じゃ説明つかない体勢でベッドから転がり落ちているの!？」

混乱する蓮に、希望が一通りの説明をこなす。ここにはデュエルをするために来たこと。祐騎が寝ていたこと。エースが起こそうとしたら抱きつかれたので自衛のため（強調）全力のアップercutで吹っ飛ばしたことなど。

「……ああ、またやったのね祐騎……とりあえず、事情は理解したわ」

顔を赤くしていることや、また、という言い回しから、恐らくは以前やられたことがあるのだろう。この状況も含めて。

「じゃ、とりあえずエースは、祐騎とデュエルをする必要があるのね？」

「そつだ。その痴れ者の女ならしっかりコントロールしておけ。危うく奇怪なオブジェを作りだすところであつた」

「お、女!？ ち、違つわよ私と祐騎はそんな……」

「なんでもいいから起こせ。話が進まん」

「おや、もうその話題を終わらせてしまふのかい？ もっと弄れそつうなだけど」

かかった獲物をあつさりとりリリースしてしまったエースに、希望は何やら不満げだ。

「弄らなくていいから！ 起こせばいいんでしょ!?!」

蓮もこれ幸いと赤くなつた頬を隠すようにして祐騎を起こしに向かう。慣れたもので、ものの数分で深い眠り（気絶）に落ちていた祐騎を起こすことに成功してしまう。

「流石、手慣れたものだね。まるで熟練夫婦のような手並みで……」

「アンタは黙っていなさい!」

「説明役は引っ込んで後ろで解説している。誰も聞かんが」

「……辛辣。では、お言葉に甘えるところでしょうか」

希望は肩を竦めて背を向ける。

「え、えーと……すみません、なんか、状況が良く分からないんですが……」

突然起こされたと思つたら知らない人間が二人。しかも何やら顎も痛むという状況に混乱する祐騎に、今さっき下がったばかりの希望が嬉々として戻ってきて説明する。よほど説明するのが好きらしく、瞳が輝いている。

「なるほど……では、僕はエースさんとデュエルすればいいんですね?」

「そつだ。出来れば付き合つて欲しい」

「はい。僕で良ければ喜んで」

「ふふ……そのセリフだけ抜き出せば告白っぽいね」

「だから、アンタは黙つてなさい!」

相変わらず余計な茶々を入れてくる希望を半ば無視し、エースと祐騎はデュエルデスクを構える。

「デュエル!」

「僕の先攻、ドロー! 僕は『暴風小僧』を攻撃表示で召喚。ターン終了です」

「私のターン、ドロー! 我は永続魔法『ポット』を発動する!」

「『ポット』?」

初めて聞くカード名に、祐騎だけでなく蓮も首をかしげる。

「解説しよう。永続魔法『ポット』は、発動時互いに500ポイントライフを支払わなければ発動できない。このカードが存在する限り、ライフを支払う効果を使う度、100ポイントごとにチップカウンターを一つ、このカードに乗せる。更に、互いのスタンバイフェイズ時にも、最低100、最高500のライフポイントを支払う。そして、戦闘によってモンスターを破壊した時、破壊したプレイヤーはこのカードに乗っているチップカウンターを全て取り除くことで、その数×200ポイントライフを回復するゲインカードだ」

「なるほど……と言うことは」

「ああ。賭けようか。我らのライフを。まずは500ずつ、な」

エース&祐騎LP3500

「そして、我は『お注射天使リリー』を攻撃表示で召喚する」

「リリー!?!」

「そうか、リリーの効果は……」

「そう。『ライフコスト』だ。バトル! 『お注射天使リリー』で『暴風小僧』を攻撃! そして我はライフを2000ポイント支払って効果発動!」

エースLP1500

「お注射天使リリー」の注射器が巨大化し、『暴風小僧』に突き刺す。

「子供になんて仕打ちを。トラウマになったらどうするんだい?」

「……だ、黙れ」

「ところで、攻撃名は言わないのかい? ほら、『検診のお時間です』って」

「黙れと言っている!」

希望の茶々はともかく、リリーの攻撃により、『暴風小僧』は破壊される。

「くっ……!」

祐騎LP1600

「そしてこの瞬間、永続魔法『ポット』の効果が発動する！ 今のコストで、『ポット』に乗っているチップは三十枚！ よってライフを6000ポイント回復！」

エースLP7500

「なっ……」

蓮が絶句する。初手からライフ差が6000近く開いたのだから無理もない。

「何よあのチート！」

「いやまったく。リリーはキツイね。あの効果と相性抜群だ」

何しろ、『ポット』の影響下ではライフコストがコストにならない。これでは『お注射天使リリー』は実質攻撃力3400の三つ星しかも攻撃する度2000ライフを回復するようなものだ。

「更に我はカードを一枚セット。ターンエンドだ」

「つつ……いきなり手痛いダメージだ……僕のターン、ドロー！」

「『ポット』の効果だ。ライフを支払え」

「くっ……僕は100ポイントライフを支払います」

祐騎LP1500

「祐騎！ 頑張つて！」

とはいえ、序盤からこのライフ差はキツイ。

「祐騎……」

心配そうに祐騎を見つめる蓮に、希望はフツ、と微笑みかける。

「大丈夫。彼は、打開策を見つけているよ」

「え？」

「行きます！ 魔法カード『死者蘇生』！ 墓地から『暴風小僧』を蘇生します！」

「させん！ カウンタートラップ『神の警告』！ ライフを2000ポイント支払い、モンスターの特殊召喚を含む効果を無効にし、破壊する！」

エースLP5500

そして、ライフを支払ったことにより『ポット』にチップカウン

ターが20枚乗る。

「祐騎！」

「いや、これでいい」

「え？」

なんでもないことのようにそういう希望に、蓮が一瞬顔を向ける。蓮の耳に、祐騎の力強い声が聞こえてくる。

「僕は装備魔法『早すぎた埋葬』を発動！ ライフを800ポイント支払い、『暴風小僧』を蘇生！」

祐騎LP700

ライフを支払ったことでチップカウンターが乗る。

「くっ……馬鹿な。『死者蘇生』を囿に『早すぎた埋葬』だと？」
通常なら、まったく反対の戦術をとるだろう。だが、『ポット』の発動下に於いてはこの“セオリー外”こそが妙手となる。

「更に『暴風小僧』をリリースして『神禽王アレクトール』をアドバンス召喚！」

「っ！ アレクトール!？」

「そして、これがリリースの攻略法」

「行きます！『神禽王アレクトール』の効果発動！ このターンのみ、『お注射天使リリース』の効果を無効化します！」

「しまった!？」

「バトル！ アレクトールでリリースを攻撃！『デルタ・リバー・トルネード』！」

「くあっ!？」

エースLP3500

「更に、モンスターを戦闘で破壊したことで僕もライフを回復します！」

現在『ポット』に乗っているチップカウンターの数は29。

「よって、僕はライフを5800ポイント回復します！」

祐騎LP6500

「これで、形勢逆転だ」

「すごい……」

ライフ差約6000を一気にひっくり返した祐騎。それを、あたかも未来を読むかのごとく言い当てた希望。どちらも尋常ではない。「僕はカードを二枚セット！ ターンエンドです！」

「私のターン、ドロー！ 私は『ポット』にライフを100支払う。我は手札から魔法カード『レイズ』を発動！ ライフを500支払ってカードを三枚ドロー！」

『レイズ』は『ポット』が存在するときのみ使用可能なドロー補助。エースはカードを三枚ドローする。

「我は『切り札の騎士 テンス』を召喚。魔法カード『二重召喚』を発動！ 『切り札の騎士団長 エース』。即ち我自身をアドバンス召喚する！」

エースLP3400

「レベル7モンスターを一体のリリースで!？」

「我はリリース軽減能力を持っている。さあ、これで私の準備は整った」

エースは祐騎に向かって、無敵な笑みを浮かべる。

「我は手札から魔法カード『ブラック・コア』を発動！ 手札を一枚捨てることでアレクトールを除外する！」

「うっ……アレクトールが……」

「更に、私のモンスター効果を発動！ 我が存在する限り、我も貴様も、手札を捨てる度、カードを一枚ドロー出来る」

「手札コストまで……まさか、そのデッキは……」

「そうだ。我と、この『ポット』の効果を利用したコストレス・ポーカー！ 我はたった今引いた装備魔法『閃光の双剣 トライス』を我に装備！ 手札を捨てたことによりカードをドロー！」

「コストレス……!」

なんとという恐ろしいデッキ。コストとは基本的に、強すぎる効果の規制のために設けられていると言つのに、それを無視するなど。

「バトル！ ダイレクトアタックだ！ 二連続攻撃！」

「ぐう！」

祐騎LP3500

「またライフが並んだ……」

「良い勝負だね」

そう言った希望だが、すぐに表情を鋭い笑みに変えて呟く。

「だが、もう終わる」

「え？」

「我はカードを一枚セットし、ターンエンドだ！」

「僕のターン、ドロー！僕は『ポット』にライフを100支払います。僕は墓地の『暴風小僧』を除外して『シルフィード』を攻撃表示で特殊召喚！」

「さっきアレクトールを除外ではなく、破壊しておくべきだったな。エース」

希望の言葉。確か、祐騎の墓地にはこれで……。

「僕の墓地にモンスターがないことで、僕は『ガーディアン・エアトス』を攻撃表示で特殊召喚します！」

「エースさん、私のマスターを殴った分は、きっちりお返ししますよ！」

「バトルフェイズ！僕は『ガーディアン・エアトス』でエースさんに攻撃！『フォビドゥン・ゴスペル』！」

「させん！トラップカード『サンダー・ブレイク』！悪いが倒させてもらおう！」

「なら、僕も『サンダー・ブレイク』にチェーンしてトラップカード『ブラスト・モード』！」

「出たわ！祐騎の切り札！」

「説明しよう。『ブラスト・モード』は、特定のモンスターをノブラストと名のついた上位種に進化させることができる通常罠カードだ」

「……なんで別世界のアンタが説明できるのよ」

「解説キャラなもので」

その癖解説になっていないことを言う。

「『ブラスト・モード』の効果で、エールを進化！『ガーディアン・エアトスノブラスト』！」

「力が漲る……！これなら！」

「そして『ブラスト・モード』の効果で特殊召喚されたエールは、このターンエースさんの魔法・畏・モンスター効果を受け付けません！」

「なにっ!？」

よって『サンダー・ブレイク』は不発。更に、進化した守護者の、真の力が解放される……！

「『ガーディアン・エアトスノブラスト』の効果発動！お互いの墓地に存在するエアトス以外のモンスターを全てデッキに戻し、その数×500ポイント攻撃力がアップします！」

「……私の墓地に存在するモンスターは二体だ！
『墓地に眠る魂よ。私に力を！』」

リリーとテンス。二体の魂が守護者の銃に吸い込まれ、攻撃力が1000ポイントアップする。これで、攻撃力は3800。

「更にトラップカード『ダブル・ショット』！このターンのエンドフェイズを対象を破壊する代わりに、エールの攻撃力を倍にします！」

攻撃力7600。

「バトルを再開します！『ガーディアン・エアトスノブラスト』で、切り札の騎士団長 エース』に攻撃！『コミュニオン・ブラスト』！」

「ええい！スピリット・ブラスター、シュート！」

「ぐあああああっ!？」

エアスLPO

「大丈夫ですか！？ すみません、エースさんの分身に……」

「否、心配するな。むしろ今は、気分が良い」

「え？」

言葉の通り、どこか清々しい表情のエースはエアトスと祐騎に顔を向けた。

「最後、テンスとリリーをデッキに戻してくれて、ありがとう」

困惑する二人に、エースが言ったのはそんなことだった。

「何、我もお前と同じだ。出来れば、墓地にあいつらをとどめたまデユエルを終えたくはなかった」

「エースさん……」

「……やはり、別世界にも、居るものだな。我々を道具ではなく、生き物として、友として扱ってくれるものが。それがわかっただけで、我は満足できる。勝敗など、些末事に過ぎん」

エースの身体が透け始める。歪が消え、世界に引き戻されるのだらう。

「さらばだ。異世界の精霊使い。願わくば、その優しき心が陰らなことを」

「は、はい！ エースさんも、どうかお元気で！」

お前もな、という言葉と笑みを残して、エースは消滅した。

「さて、じゃあ僕も後始末をしてから帰るとしようか。君たちも、元の世界に送ってあげるよ」

「え？ そういえばあんたはなんで帰ってないのよ」

「フフ。さつき説明した事情だけど、実は嘘なんだ」

世界が徐々に綻びていく。端から糸が解けるように。
「嘘？」

「彼女の前に歪なんて現れていない。今回は僕の自作自演。君たちは、無自覚の仕掛け人。悪かったね。利用しちゃって」

「え、えつと……よく事情が……」

困惑する二人に、希望はまた笑顔を向ける。

「彼女は……エースは少々、繊細な子だね。モンスターが墓地に送

られる。とりわけ精霊が墓地に行くことが我慢ならない性質なんだ」
希望は二人に、エースの事情を話して聞かせる。

「そんなことが……」

「だから、エアトス。墓地から魂を救いだす守護者を使うキミに、彼女の相手をして欲しかった。それが、今回の主題。ありがとう。優しい勇者殿」

「いや、僕は！」

いきなり勇者などと言われ、思わず顔を赤くする祐騎。

「それじゃあ、二人も元の世界で仲良くね。君たち二人の前に、光差す道があらんことを」

希望が指差す先、そこには光の道らしきもの。

「さあ、その道を行くといい。元の世界に戻るハズだ」

「あ、あの」

「うん？」

「ありがとうございます。僕を選んでくれて」

「……どういたしまして」

純朴な言葉に心からの笑みを浮かべ、希望は返す。

「それじゃあ、行きなさい。もうすぐこの世界が壊れるよ」

「え、ええ。行きましょ。祐騎」

「はい。蓮さん」

二人の少年少女は手に手を取り、光の道に行く。それを見届けて、希望は解けて逝く世界を見上げる。

「すまなかつたね。使い捨ての世界。キミの残骸は、決して無駄にはしないと誓おう」

解けた光の糸を、希望は掌に集め、光の珠をその手に抱える。

「さあ、次はどんな物語を紡せかいごうか」

世界が全て光の珠に消えると共に、希望もまた、その世界から姿を消した。

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者？」（後書き）

とりあえず二つほどコラボを終えた感想。

コラボって思いの外難しい！ あと、自分が作ったオリカがちよ
うどいいと思っけていても、やっぱりチート臭い！ リリー強い！
『ポット』あるとリリーめっちゃ強い！ 最強のメリットモンスター！
なにコストレスデッキリって！？ 反則！
やっぱり、使ってみないとわかんないもんだなあ……制限くらいは
行きそっだ。

そしてエースより希望を目立たせてしまった。反省点多し。

どうにも微妙な感じになってしまいましたが、豆フクロウさんの
旋風の守護者。こちらにもよろしく願います。シンクロを導入す
る流れとかが秀逸です。あと、僕はテイルが好き。このコラボ
では出してない癖に。

それでは、悠でした！

第三期第十六話「心理作戦！」（前書き）

大分更新が遅れてしまい、申し訳ありません。

少々風邪を引いて、とりあえずは病み上がったので更新です。

完全書き下ろし。ユーキちゃん分補充回の前編になります。……
はい。二話あります。ユーキちゃんの話。まあいいでしょう。ダイ
クホース的活躍はともかく、普段はあまり影が濃くないユーキちゃ
んですし。後、アルカナに於いて不足気味の原作キャラの出番もあ
りますので、どうかお楽しみください。

第三期第十六話「心理作戦！」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第三期第十六話「心理作戦！」

先日のエド・フェニックスとのデュエルに敗北した十代が、精神的ショックからか、カードが全て真っ白にしか見えなくなってしまうたと報告を受けた俺は、急ぎ足で保健室へと向かっていた。

「十代！」

「あ……セツか」

保健室についた俺が見たのは、今まで見たことがないほど覇気がなくなっている十代の姿だった。

「十代……」

「へへ……情けないぜ。セツに勝って欲しいって言われてたのにな。それに、セツは勝ったんだろ？ 明日香たちから聞いたぜ」

「ああ……」

なんとか笑顔を見せようとする十代に、俺は何も言えずに目を逸らした。

「参っちまうよな。全然、見えないんだ。カードが。相棒の声も、聞こえなくなっちゃまってさ……」

「ハネクリボーの？ そういえば……」

十代の傍に、ハネクリボーの姿がない。十代が見えなくなったかなのか、或いは……。

「十代」

俺は考えた末、このことは十代自身の問題だと結論付けた。

「セツ？」

「俺は信じてるからな」

「え？」

「お前は、こんなところで潰れる奴じゃないって。それに、まだ俺はお前と、本気のデュエルしてないんだ。こんなところで終わって貰っちゃ困る」

俺に言えることはこの程度。後は十代自身が立ち直る切欠を掴まないでダメだろう。

「セツ……」

「んじゃ、今日の所はこれで。お前はゆっくり休めよ。俺はこれから授業だからな」

どちらにせよ、今みたいにどんよりと沈みきったままじゃ立ち直るも何もない。今はゆっくり休むことが一番の特効薬だろう。そう判断した俺は、十代を残して教室へと向かった。

「それでえゝわ。本日の授業を始めるノゝネ。……シニョゝルセツも、ちゃんというノゝネ？」

「見ての通り、いますよ」

以前からクロノス先生は、俺がちゃんと授業に出席しているかどうかを本来の出席確認とは別に行うようになった。……そんなに信用ないか。俺。

「よろしいノゝネ。本日ウゝわ、タッグデュエルのお勉強なノゝネ。ルールの確認をしてから、各自ペアを組むノゝネ」

何だかんだ、クロノス先生の授業は他の授業と比べればやはり実践的だ。実技指導の責任者というのもあるんだろうが、ルールとかは各自で確認。兎に角実践してみましようという授業スタイルは俺からすれば好感が持てる。

「つと、タッグデュエルということは……」

俺は目的の人物を探す。丁度向こうも俺を見つけたようで、少し小走りで此方に向かつてきた。

「セツくん、組も？」

「ああ、約束だったしな。ユーキちゃん」

以前進級デュエルの際にユーキちゃんとタッグを組む約束をしていたことを思い出す。

「えへへ〜ちゃんと覚えていてくれたんだ。良かった〜」

「忘れたら後が怖そうだからな」

「あーわたしそんなことで怒ったりしないよ〜」

一頻り談笑し、改めて今回のルールに目を通す。

「……なるほど。フィールドは共通。ライフも共通で8000。先攻一ターン目のターンプレイヤーのみバトルフェイズを行えないルールか」

所謂タッグフォーメーションと云う奴だ。まあ、標準的なタッグルールだな。

「じゃあ、少しお互いのデッキを弄ろうか。そのままだと色々不都合も出てくるだろうし」

「うん。と言つても、わたしの方は大体出来てるよ〜。タッグのことは考えてたから」

そう言つてユーキちゃんがデッキを手渡してくる。ふむ……。なるほど。特に問題ないかな？ 後は……」

ユーキちゃんのデッキに合わせて俺もデッキを調整する。と言っても、今は希沓姫がダウンしているのでエース主軸のコストレスパームミッションだが。

「よし、こんなもんだろ」

「それじゃあ、デュエル相手を探そっか」

ユーキちゃんの言葉に頷き、誰か空いている相手はいないか周囲を見渡す。

「おい、セツ」

「ん？ 万丈目か？」

「さん、だ。デュエルの相手を探しているなら、オレたちが相手になつてやる」

見れば、万丈目と組んでいるのは翔だ。

「また、珍しい取り合わせだな」

「フン、十代の奴が潰れていては、コイツと組む奴がいないだろうが」

「そ、その言い方は酷いツス！ 大体、万丈目君だつて組む人いないじゃないツスカ！」

「馬鹿言え！ オレ様は組む相手を選び好みしているだけだ！ 今回貴様と組んでやったのも、十代の代わりに仕方なくだ！ わかつたら精々オレに感謝するんだな！」

「はいはい、わかつたからやろうぜ。授業時間がなくなるだろうが、なんだかんだで、コイツも十代のことを気にしているので安心だし、意外とこれで面倒見がいいことも承知しているので安心だ。」

「フン、まあいい。お前らがオレの相手になるのか知らんが、精々楽しませろ」

「相変わらず、プライド高い奴だな……お前と気が合つんじやないか？ エース」

『馬鹿を言うな。騎士のプライドとエリート思考のプライドを同列視するな』

「そりゃ悪かつた」

まあ、万丈目もこれで大分丸くなつただけだな。

「セツ君、今日はよろしくツス」

「おう、しかし、翔たちと真面目にやるのは何だかんだで初めてじゃないか？」

「そうかもしれないね。じゃあ、尚更負けられないツス！」

「同感だ」

笑い合い、お互いに向かい合つてデュエルフィールドに着く。

『デュエル……！』

「オレの先攻！ ドロー！」

先攻は万丈目か。とすると、俺のターンが回ってくるのは最後だな。

「オレは永続魔法『前線基地』を発動！ 手札から『W-ウイング・カタパルト』を特殊召喚！ 更に『V-タイガー・ジェット』を攻撃表示で召喚する！」

『W-ウイング・カタパルト』 ATK1300

『V-タイガー・ジェット』 ATK1600

万丈目はVWXYZデッキか。まあ、翔とタッグを組むならアームド・ドラゴンよりもそっちだよな。

「行くぞ！ オレは二体のモンスターを除外し、『VW-タイガー・カタパルト』を特殊召喚！」

『VW-タイガー・カタパルト』 ATK2000

「早速か」

攻撃力2000は、アルカナ軸の俺なら決して高くはないが、ヴАндルギオンを除くと最大攻撃力がエースの2000でしかない今の俺からすれば十二分に高い攻撃力だ。

「オレはカードを一枚セット。ターンエンドだ」

「わたしのターン、ドロー！ わたしはモンスターを一体守備表示でセット。カードを一枚セットして、ターンエンドだよ」

ユーキちゃんは目立った動きは見せず、カードだけ伏せて終了する。守備モンスターは……『シャインエンジェル』か。

「ボクのターン、ドロー！」

先日めでたくラー・イエローに昇格した翔。表情からも心なしか自信を見てとれる。

「僕は『ドリルロイド』を攻撃表示で召喚！ バトルだ！」

『ドリルロイド』 ATK1600

「これは……マズイか！」

「『ドリルロイド』で加藤さんの守備モンスターを攻撃！」

「ぎゃっ!?!」

守備モンスターの『シャインエンジェル』が破壊される。

「『ドリルロイド』は相手の守備モンスターと戦闘する場合、ダメージ計算を行わずに破壊できるんだ！」

「リクルーター封じか！」

これで俺たちの場合はガラ空き。

「更に『VW - タイガー・カタパルト』でプレイヤーにダイレクトアタック！『VW - タイガー・ミサイル』！」

「きゃああつ！？」

「ちっ！」

セツ&ユークLP6000

「僕は永続魔法『機甲部隊の最前線』を発動。カードを一枚セットして、ターンエンド！」

「くっ、俺のターン、ドロー！」

しかし、面倒だな。手札一枚をコストに表示形式を変更出来るタイガー・カタパルトと守備モンスターを問答無用で破壊する『ドリルロイド』か。即席タッグの割に、効果がシナジーしてやがる。

「俺は『切り札の騎士 テンス』を召喚！魔法カード『二重召喚』！ テンスをリリースし、『切り札の騎士団長 エース』をアドバンス召喚！」

『切り札の騎士団長 エース』 ATK2000

早速頼む！ エース！

『ふん。いいだろう。任せておけ』

俺の手札に、翔たちの伏せカードを破壊出来るカードはない。仕方ないか。

「バトルフェイズ！ エースで『ドリルロイド』を攻撃！『リッター・ブリッツ』！」

『せいっ！』

『うくっ……！』

『うくっ……！』

万丈目&翔LP7600

「この瞬間、『機甲部隊の最前線』の効果発動！そしてチェーン

して永続トラップ『サイバー・サモン・ブラスター』を発動！」
「む……」

機械族の特殊召喚に応じてダメージを与えるトラップか。機械族の融合召喚を主体とするあいつらには合ったカードだな。

「僕は『トラッククロイド』を特殊召喚！『サイバー・サモン・ブラスター』の効果でセツ君たちに300ポイントのダメージッス！」

『トラッククロイド』 ATK1000

「ぐっ！」

「きゃあ!？」

セツ&ユーキLP5700

「……やるじゃないか。翔」

「僕だって、いつまでもアニキたちの足手纏いじゃないッスよ！」

イエローに昇格し、表情にも幾分か余裕が出てきた翔。

「俺はカードを二枚セット。ターンエンドだ」

「フン、オレのターン、ドロー！」

「この瞬間、トラップカード発動！『砂塵の大竜巻』！『サイバー・サモン・ブラスター』を破壊する！」

継続的にダメージを与え続ける永続罫はさつさと破壊しておくに限る。ただでさえ特殊召喚を多用する機械族デッキなんだから。

「ああっ!？」

「更に、効果により手札のカードを一枚セットする」

多くの人が忘れがちなこの効果だが、ことタッグデュエルに於いては有効に作用する！

「フン、だがお前は破壊するカードを誤った。見るがいい！この万丈目サンダー様のデュエルタクティクスを！オレは手札から魔法カード『天使の施し』を発動！デッキからカードを三枚ドロし、二枚を墓地に捨てる！」

「む……」

手札交換？ いや、万丈目のデッキタイプを考えると……。

「そして、墓地に捨てた『おジャマジック』の効果発動！デッキ

から雑魚共を手札に加える！」

『オイラたちの出番だわ〜ん!』

「ええい！ お前たちに出番などない！ たまたま手札に来たから捨てただけだ！」

『ああん、アニキつたらイケズう〜』

……なんか変な奴らも来たな。

「うるさい！ オレは『X・ヘッド・キャノン』を攻撃表示で召喚！ 更に永続魔法『前線基地』の効果により手札から『Y・ドラゴン・ヘッド』を特殊召喚！」

『X・ヘッド・キャノン』 ATK1800

『Y・ドラゴン・ヘッド』 ATK1500

「ま、マズイ……！」

この流れは……！ ということはあの伏せカードは恐らく……。

「リバーズカードオープン『ゲットライド!』を発動！ 『天使の施し』で墓地に送った『Z・メタル・キャラピラー』を『X・ヘッド・キャノン』にユニオン！ 更にユニオンを解除して特殊召喚！」

『Z・メタル・キャラピラー』 ATK1500

「やっぱり……！」

くそ、油断していた。まさか……。

「オレの場のX・Y・Zの三体をゲームから除外し、融合デッキから『XYZ・ドラゴン・キャノン』を融合召喚！ そして『VW・タイガー・カタパルト』と共にゲームから除外することで『VWX・YZ・ドラゴン・カタパルトキャノン』を融合召喚だ！」

『VWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノン』 ATK3000

まさか、たったの二ターンでの召喚条件が鬼畜なモンスターを呼び出すとは！

「ハッハッハ！ どうだ見たかセツ！ これが万丈目サンダーのタクティクスだ！」

「……ああ、認めるよ。確かに、大した引きだ。驚嘆に値する」

「フン、それでいい。行くぞ！ 『VWXYZ・ドラゴン・カタパルト』

トキヤノン』の効果発動！一ターンに一度、相手フィールド上のカード一枚を除外する！オレはセツの伏せた二枚目の伏せカードを除外する！『VWXYZ-アルティメット・ディストラクション』！」

「くっ……『トラップ・ジャマー』が……」

『トラップ・ジャマー』はバトルフェイズの発動しかできないので、『ゲットライド』をパーミッションすることは出来なかった。

「チッ、ただのカウンターか。ならばバトルだ！ヴィトウズイで切り札の騎士団長 エース』を攻撃！『VWXYZ-アルティメット・ディストラクション』！」

『ぐおおおおっ！？』

「エース！ぐああっ！？」

「きゃあああっ！？」

セツ&ユーキLP4700

「そして『トラックロイド』でプレイヤーにダイレクトアタックだ！」

「ぐう……」

「うっ……」

セツ&ユーキLP3700

「オレはこれでターンエンドだ！」

「うくっ……わたしの、ターンだよ」

マズイな……大分旗色が悪い。砂塵経由でユーキちゃんにトスしたカードも速攻性はないし……。

「しかも、対して役に立ってない俺の方は手札ゼロ、か……」

どうにも、アテナとの時といい俺はタッグデュエルが苦手らしい。パーミッションの特性的な理由もあるんだろうが……。

「ドロー！……」

ユーキちゃんはどうすればいいか迷っている風だった。手札に逆転の手はあるが、ヴィトウズイの効果を考えて下手な手は打てないと考えているのだろう。

「セツくん……」

ユーキちゃんが不安そうな表情で俺に目を向けてくる。俺も助言してやりたいが……。

「ダメなノ〜ネ。タッグパートナーのターン中に、助言は許されないノ〜ネ！」

「ぐ……」

クロノス先生の言う通りだ。今はユーキちゃんのターン。俺が口を挟むことは許されない。ここは、ユーキちゃん自身の力で乗り越えてもらうしかない。ない、が……。

「ユーキちゃん」

「え？」

せめて、意志を込めてユーキちゃんの目をみつめる。これで、意志が伝わるかどうかはわからないが……これまで、ユーキちゃんのデッキ構築やタクティクス指南は俺と一緒にずっとやってきたんだ。それを思い出してもらえれば！

「セツくん……」

わたしは改めて自分の手札を眺める。手札は五枚、フィールドのカードはセツくんがトスしてくれたカードとわたしのターン目に伏せた『リミット・リバーズ』。こちらの方は、『シャインエンジエル』が除去されてしまった時点で今は無用の長物と化しているからアテには出来ないし〜。

「セツくんのくれたカードは……」

『封印の黄金櫃』。

「えっ!?!」

思わずセツくんを見る。……なんで、自分で使わずにトスしたの……? ううん、それよりも今は、これを使ってどうするか考えないし……。

「多分、セツくんはわたしの方がキーカードが多いからって渡してくれたんだろうけど……」

確かに今、手札に『レベルアップ!』のカードがない。それを使えば、どうにかなるのは手札の『サイレント・マジシャンLV4』が物語っている。よし、なら……。

「リバーズカード、オープン……」

そこではた、と気付いた。

そんな安易な使い方でもいいの……？

いくら手札がそう出来る手とはいえ、サーチには時間がかかる。

ライフも正直心許ないし、そんな悠長なことはしてられない。

「でも……」

今すぐにかすには、『封印の黄金櫃』じゃあ役に立たない。じゃあどうすれば？

「どうした？ 戦意喪失か？」

「ちよ、ちよっと待って〜！ 考え中だから〜！」

うん、そうだ。もっと考えよう。セツくんの目を思い出すの。セツくんとデッキ作りとか、戦術指南とか、そういうセツくんとのおい出を！

「えへへ〜……って、浸ってる場合じゃないよ〜！」

っそうだ！ 確かセツくん、『封印の黄金櫃』のデメリットである情報アドバンテージについてもなにか言ってた！ 確か……。

「……うん、決めた！ わたしはセツくんの渡してくれた『封印の黄金櫃』の効果を使うよ〜」

「なに！？ そんなものを何故伏せカードに……」

「わたしはデッキから『オネスト』を選択してデッキから除外するよ〜。そして手札から『サイレント・マジシャンLV4』を攻撃表示で召喚。カードを一枚セットしてターンエンドだよ〜」

『サイレント・マジシャンLV4』ATK1000

……これでいい、筈！ だよね、セツくん！

「僕のターン、ドロー！」

「この瞬間『サイレント・マジシャンLV4』にカウンターが二つ乗るよ〜」

『サイレント・マジシャンLV4』 ATK1000 1500
大丈夫。きつと大丈夫。そう思っただけでも、心臓がバクバク言ってるのがわかる。

「……………うん」

丸藤くんは迷ってる。多分、ヴィトウズイの効果で何を除外するか迷ってるんだ。わたしの場には前のターンから残っているカードを含めてリバーズカードが二枚。攻撃表示の『サイレント・マジシャンLV4』が一体。ずっと発動していない『リミット・リバーズ』は選択しないとして、残る選択肢は二つ。

「おい翔!」

「な、なんスか万丈目君?」

「……………つむん!」

「ってそんな気合入れて睨まれても、僕たちにセツ君たちみたいな意志疎通は無理ツスよ〜!」

……………なんか変なことしてる。

「う、うう……………ぼ、僕は加藤さんがさつき伏せたカードを除外するツス!」

「う……………除外されるのは『奈落の落とし穴』だよ〜」

丸藤くんが効果を使う前にモンスターを出していたら引つかかったかも知れないんだけど……………。

「よし、そのまま押し潰してしまえ!」

「わかったツス! 僕は『スチームロイド』を召喚! バトル!」

『スチームロイド』 ATK1800

「行くよ! 『VWXYZ・ドラゴン・カタパルトキャノン』で『サイレント・マジシャンLV4』に攻撃するツス!」

「っ!」

瞬間、わたしは思わずセツくんの方を振り向いた。

「やった、やったよセツくん!」

「!?!」

「この瞬間、手札から『オネスト』を捨てて効果発動するよ〜!」
「ええっ!?!」

「バカなっ!?! 『オネスト』だと!?! 何故今持っている!?!」
丸藤くんも万丈目くんも凄く驚いていた。だってその筈。『オネスト』はさっきわたしがデッキから除外して、手札に引き入れようとしていたカード。

「えへへ〜。『オネスト』はデッキに一枚きりじゃないから〜」
わたしは、セツくんの言葉を思い出して考えた。

『『封印の黄金櫃』の欠点は手札に何を加えるか特定されてしまう
つてことだが、それはつまり、相手に対して、その時点で手札に欠
けている物を誤認させる手段にもなり得るんだ』

つまりは、そういうこと。一種の心理トリックの様なもの。『オ
ネスト』がデッキに複数入っているくらい、万丈目くんたちなら普
通想像出来る。でも、さっきわたしが『封印の黄金櫃』でデッキか
ら手札に加えようとした時に、二人は勘違いしちゃった。

「わたしは今『オネスト』を持っていない、つて」

そして思わせぶりに攻撃表示で出されたモンスターと伏せカード。
ヴィトウズイの効果で除去できるのは一枚だけ。なら……。

「伏せカードを除去したくなるよね〜」

何せ、二人からすればわたしは今『オネスト』を持っていないか
ら。なら、攻撃表示の『サイレント・マジシャンLV4』はただの
攻撃を誘い、トラップを発動させるための罠程度にしか思わなくて
も仕方ないよね〜。曲がりなりにも、もしかしたらどうにかできる
かもしれないトラップだったこともあるし。

「うん。はじめから持ってたんだ。『オネスト』」

にこっ、と会心の笑顔でわたしはセツくんを見る。セツくんもま
た、笑顔で見返してくれた。

『サイレント・マジシャンLV4』 ATK1500 4500

「うわあああああっ!?!」

「ぐづづづづづづ！？」

万丈目&翔LP6100

『VWXYZ-ドラゴン・カタパルトキャノン』の砲撃を、光の盾で受け止めた魔法少女が、反撃の魔法で変形合体ロボを破壊する。

「さあ、反撃開始だよ」

わたしはセツちゃんと顔を見合わせて、小さくハイタッチするのでした。

第三期第十六話「心理作戦！」（後書き）

こんにちは。

というわけで、セツ&ユーキちゃんVS万丈目&翔のタツゲデュエル前半部分です。いや〜ホントはデュエルを前半後半に分けるのはあんまりしないタイプなんですけどね。思った以上に長くなってしまったので、キリの良いところで分けました。なるべく早い内に、後編をアップしたい所存。

翔がなんか『機工部隊の最前線』とか使ってますが、仕様です。いえ、ロイドとの相性は悪くないので、問題はないかなと。ついでに、VWXYZとの相性もいいです。まあ、両者の相性は良くないですが、属性が違うので。

心理作戦については……まあ、悠の頭ではこの程度が限界か（あいやいや攻撃表示の時点で『オネスト』疑おうよ！とかいう意見があるのは承知の上です。でもまあ、ある程度は理にかなった行動のは、ず……？ だといいなあ……。

それでは、悠でした！

ちよつとだけ修正。天使の施しの際、捨てたカードのもう片方を『おジャマジック』にしました。

第三期第十七話「御堂切の突発的ヤンデレ対策講座」(前書き)

まずはじめに謝るときです。すみません！二話使っても終わりませんでした！……ま、まさかここまで長引くとは……いえ、デュエルどころじゃなく……まあ本編を見れば一目瞭然なのですが……とりあえず、もう一話続きます。今回は、ユーキちゃんよりもタイトル通りセツが目立っている話です。

第三期第十七話「御堂切の突発的ヤンデレ対策講座」

アルカナく切り札の騎士」

第三期第十七話「御堂切の突発的ヤンデレ対策講座」

「さあ、反撃開始だよ」

私はそう言う加藤さんたちのデュエルを見ていて、驚いた。

「天上院くん……」

「ええ……」

侮れない。その一言ね。加藤さんと言えば、セツと関わるようになってから成績が随分良くなったということこそ聞いていたけれど、セツ自身や元ブルーの万丈目君。最近イエローに上がって調子の良さそうな翔君と言ったメンツの中では、正直埋もれてしまおうと思っていた。その彼女が、万丈目君のエースモンスターを打倒した。

これまでの授業の中でも、時々そんなことがあった。以前、十代とのエキシビジョンマッチの時にも、あわや十代を倒しそうなるまで行ったことも覚えている。それでも尚、彼女のことは正直眼中になかった。

「けど……違ったわね」

「カードの効果だけじゃなく、デメリット効果やそれによる相手への情報アドバンテージ、その全てを利用した高度なプレイングだ。

“速攻性のないサーチカード”としてのデメリットを、まさかメリットに逆転させてしまおうとはな……」

三沢君の分析に頷く。情報アドバンテージ……そんな使い方があったなんてね。

「……セツが教えたのかしら？」

「だとしても、実践で使うことが出来る以上、彼女の實力だろう。以前、加藤と十代のでエキシビジョンがあったが……」

「ええ。あの時も、あと一歩のところだったわね」

「いや、あのデュエル、加藤のプレイングミスがなければ十代が負けていたんだ」

「え？」

「詳しくは省くが、『サイレント・ソードマンLEV7』の魔法封殺能力。あれを発動されていたら、十代はお得意の融合も、サポートカードも、ドロー補助カードも使えず負けていた筈だ。とはいえ……」

「その時は、まだ隙があった」

「そうだ。プレイングミスという隙があった。だが、今の彼女には……」

「……強敵ね」

「ああ。正に『サイレント・ダークホース』の沈黙の闇狩人』と言ったところか」

「ダークホース、ね……」

「ちいつ！ まさかセツならまだしも、貴様に煮え湯を飲まされるとは……！」

「ダークホースだったツス……」

「だ、だからあゝ！ どうしてみんなしてわたしをダークホース呼ばわりするのよ〜！」

顔を赤くして、恥ずかしそうにそう叫ぶユーキちゃん。相変わらず、サイレント・ダークホースの呼び名は不満なようだ。

「いや、まあ……イメージ？」

「セツくんまで〜!」
「いやだつて。」

「わたしはただ、普通に頑張つて普通に結果が出ているだけだよ」
「まあ、確かに……周囲の人間（俺含む）が目立つ分、普段は目立たないものが、ここぞと言う時に成果を上げてるから……」
「つて、それは正にダークホースそのままじゃないか？」
「うっ……」

むしろ、成果もきっちり出しているのに毎回ダークホースになる
辺り、天然のダークホースというか……。

「も、もう！ い、今はデュエル中ですよ〜！」
「おっと、そうだったな」

「え、えっと、まだ僕のターンだったよね？ 『機甲部隊の最前線』
の効果を使いたいところだけど……僕のデッキに光属性の機械族は
入ってないから効果は使えないツス。僕は『トラックロイド』を守
備表示に変更。カードを二枚セットしてターンエンド」

「よし、俺のターン、ドロー！」
タッグになると、妙にいいとこないからな。俺は。なんとかした
いところだが……。

「バトルだ。『サイレント・マジシャンLV4』で『スチームロイ
ド』を攻撃する」

「バカが！ 『スチームロイド』の方が攻撃力は上だぞ!？」

「うっ、それが……『スチームロイド』は、相手から攻撃を受けた
場合、攻撃力が500ポイントダウンするツス」

『スチームロイド』 ATK1800 1300
「な、なにい〜!？ なんて打たれ弱いモンスターを出してるんだ
貴様は!？」

「だ、だつてヴィトウズイがやられちゃうと思わなかったから……
そ、それに攻撃するときは逆に攻撃力が500ポイントアップする
んすよ!？」

まあ、確かに『スチームロイド』はアタッカーとしては優秀なん

だが……所謂デメリットアタッカーという奴だからな。

「ともかく、攻撃続行！」

「うわあっ!?!」

「ちいっ!?!」

万丈目&翔LP5900

「うぐっ……でも、『機甲部隊の最前線』の効果発動ツス！ デッキから『エクспレスロイド』を特殊召喚！」

『エクспレスロイド』 ATK400

「また何と言う低攻撃力モンスターを呼び出してるんだ貴様は!?!」

「だ、大丈夫ツス。セツくんたちにもうモンスターはいないし……」

『エクспレスロイド』の効果発動！ 墓地の『エクспレスロイ

ド』以外のロイドと名の付くモンスター二体を手札に戻すよ。僕は

『ドリルロイド』と『スチームロイド』を手札に戻すツス！」

俺たちに追撃モンスターがない？ 甘く見て貰っちゃ困るな翔。

「俺はユーキちゃんの伏せた『リミット・リバー』の効果発動！

墓地から『切り札の騎士 テンス』を特殊召喚！」

『切り札の騎士 テンス』 ATK1000

「うわわっ!?!」

「ほら見る言わんこっちゃない！」

「ははっ、悪いな翔。テンスで『エクспレスロイド』に攻撃！」

轟断剣『!』

『ぬうんっ!』

「うわっ!」

「くっ!?!」

万丈目&翔LP5300

「そしてテンスの効果発動！ 俺のフィールドの切り札の騎士と名の付くモンスターが相手に戦闘ダメージを与えた時、墓地から切り札の騎士と名の付いたモンスター一体を手札に戻す！ 戻って来いエース！」

『……ふん。戻すのが遅い』

「無理言うなつて。これでも最速だ」

憎まれ口を叩いちやいるが、多少エースの身体が震えている。やっぱり、トラウマが完全に拭い去れたわけじゃないんだな……。

「俺はメインフェイズ2にテンスをリリースしてエースをアドバンス召喚。カードを一枚セツトしてターンエンドだ」

『切り札の騎士団長 エース』 ATK2000

「チツ。オレのターン、ドロー！」

「この瞬間、『サイレント・マジシャンLV4』にカウンターが一つ乗る」

『サイレント・マジシャンLV4』 ATK1500 2000

さて、これで万丈目のエースは倒したわけだが……。

「フツ、セツ。まさかVWXYZだけがオレの切り札だと思っているわけじゃないだろう？」

「ああ……おジャマだろう？」

『そう！ 万丈目のアニキにはオイラたち三兄弟がいるのよ〜ん！』

『そつだそつだ〜！』

『行くぞ！ 弟たちよ〜！』

「違つ！」

『そ、そんなあ〜つ！?』

……哀れな。

「行くぞ！ オレは手札から魔法カード『強欲な壺』を発動！ デッキからカードを二枚ドロー！ オレは『B-1カブトツプ』を攻撃表示で召喚！」

『B-1カブトツプ』 ATK1700

ビー……トロン？

「なんだそれは？」

なんだかわからないが、ともかく『強欲な壺』でドローしたことにより、『サイレント・マジシャンLV4』にはもう一つカウンターが乗る。

『サイレント・マジシャンLV4』 ATK2000 2500

「フ、知らないようだな。オレは更に魔法カード『おジャマ・ゲツ
トライド!』を発動する! 手札の雑魚共を墓地に送り、デッキか
らレベル4以下の機械族ユニオンモンスターを三体まで守備表示で
特殊召喚できる!」

『捨てないでアニキ!』

……………哀れな。

「オレは『B - 2クワガターボ』と『B - 3スパイダーベース』を
特殊召喚!」

『B - 2クワガターボ』DEF1800

『B - 3スパイダーベース』DEF2000

「ぬ……………」

俺の知らないユニオンモンスター……………?

「融合合体! ビートロンメカ! 『アサルト・キャノン・ビートル』

!」

『アサルト・キャノン・ビートル』DEF2400

「だが、その攻撃力では成長した『サイレント・マジシャンLV4』
は倒せない」

まあ、エースなら倒せるんだが……………。

『……………ギロツ!』

……………何でもないから睨むな。擬音を口に出すな。

「いいや。まだオレは更に魔法カードを使う! 『フロントチェンジ』
!」

「『フロントチェンジ』……………?」

また、俺の知らないカード……………!

「コイツは、フィールドの『アサルト・キャノン・ビートル』と融
合デッキの『コンバット・シザーズ・ビートル』を、入れ替える!」

『コンバット・シザーズ・ビートル』ATK3600

「攻撃力3600!？」

マズイ。あの攻撃力はアルカナでないと……………! ユーキちゃんの
『サイレント・マジシャンLV8』でも太刀打ち出来ない! それ

に……！

ちらりとユーキちゃんの方を見る。

「ユーキちゃんの手に、今度こそ『オネスト』はない。そもそも今は、俺が受けプレイヤー……くそ」

ああもうホントに、なんでかわからないがタッグだと調子悪いな俺は！

「行くぞ！『コンバット・シザーズ・ビートル』で『サイレント・マジシャンLV4』を攻撃！」

「ぐあああつ！？」

「きやああつ！？」

セツ&ユーキLP2600

「そしてこの瞬間『コンバット・シザーズ・ビートル』の特殊効果が発動する！ 相手モンスターを破壊した場合、相手ライフに1000ポイントのダメージを与える！」

「なにっ！？ ぐあああつ！？」

「うううっ！」

セツ&ユーキLP1600

「どうだ！？ オレはこれでターンエンドだ」

「うう……わたしの、ターン。ドロー！」

「すまん、ユーキちゃん。俺、何も役に立ってないよな……」

「そんなことないよ。セツくん、わたしを立てるために動いてくれるもん」

「いや……結果的にそうなってるだけだ。どちらかと言うと、ユーキちゃんに頼らないとどうにもならないだけで……」

しかし、そんな俺の弱音にも、ユーキちゃんはフルフルと首を振って手を握ってくれる。

「だいじょうぶ。セツくんのおかげで、凄く助かってる。さっきのプレイングだって、セツくんの授業がなければ出来なかった。セツくんが、わたしを信じて心を伝えてくれたおかげで、教えてくれたことを思い出せたの。だから、みんなセツくんのおかげ」

「ユーキちゃん……」

「それにね……」

ユーキちゃんは、少し恥ずかしそうな、それでいて嬉しそうにはにかんだ。

「わたし、ずっとセツくんに頼ってばかりだったから……こうして、少しでも頼ってくれると嬉しいの」

「あ、えっと……」

別に……頼られてばかりな自覚もなかったんだが……というか、結構今までだつて頼ってたような……主に、精神安定的な意味で。

『……貴様ら、いい加減にしる』

「ぬおっ!?!」

「ひゃっ!?!」

多方向から殺気!?!

「その女騎士の言う通りだ! セツ貴様……毎朝毎晩寮でも教室でも所構わず……誰かれ構わずイチャつきおつて!」

「ちよつと待て! 誰かれ構わずは納得いかん!」

「……“不”特定多数が特定多数であったところで、僕らの怒りに微塵の変わりもないツス」

……我が事ながら、まっただな。

「……ちなみに、今俺は不特定多数から殺気を受けている真っ最中なんだが」

「フン、殺気で済んでいるだけマシだと思え! いつか刺される! 或いはあの妹に監禁でもされてしまえ!」

「いや、前者はともかく後者はマズイ! 俺の貞操が!」

「いやいやいや! 前者もマズイよセツくん!?! 死んじゃうよ!?!」

「今更俺が、刺されたくらいで死ぬと思うか?」

「いや……とつても説得力はあるんだけど……やっぱり刺されたら死んじゃうんじゃ……」

「甘いな。甘過ぎる」

例えるなら、ストロベリークリームパスタ（苺味のパスタに生クリームがてんこ盛りの甘々パスタ）くらい甘い。

「……気のせいかな。オレ、丸つきり同じ料理名をアテナから聞いた気がするんだが……」

遠くで剣士が何か言っているが、それは置いておけ。

「さだめと十五年以上も兄妹をやってきたこの俺、御堂切のヤンデシ対策論を聞かせてやろう」

『……おい、デュエルはどうした』

「その一！」

『無視か！？』

「刺されても死なない丈夫な身体作り！」

「一つ目から過激なのキタ！」

「尚、メッタ刺しても耐えられると尚良し！」

「尚良しじゃないよ！ 耐えられないよ！」

「その二！」

「その一の時点で無理臭いぞ！？」

「銃弾をかわせる反射神経！」

「クラ ストロ人！？」

「至近距離でせめて狙撃銃程度はかわせるようになっておこう！」

「無茶言っつな！？」

「それ以前に、至近距離で狙撃銃を使うな！」

細かいことを気にするガンマニアがいるな。誰だか知らんが。

「その三！ 殴られても割れない頑丈な頭蓋骨！」

「カルシウム……？」

「その四！ 何時電撃喰らっても良い様に鉄製品アース常備！」

ジャラツと服の下から腕輪と腰元のチェーン、ネックレスを取り出して示す。

「それお洒落じゃなかったの！？」

命綱だ。

「その五！ 一服盛られても大丈夫なように毒に身体を慣らさせて

おく！」

「どこの忍びだ！？」

ちなみに、最重要項目だ。これを怠ると、呼吸すら安心して行えなくなる。

「その六！ 縛られたり関節極められても抜け出せる、関節外しの技能！」

「怖えよ！」

「その七！」

「まだあのかよ！？」

「腹に穴くらいでは一々騒がない」

『無茶言うな！？』

何かクラス全員唱和したが、まあ気にしない。

「総括。殺されかけても生き残る強靱な生命力」

「全部それでよかつたんじゃ……」

内訳だ。総括だって言っただろう。

「それ強靱っていうより狂人な生命力だろ……」

剣士め。人を捕まえて何を失礼極まりないことを。

「他にもまあ、色々あるが、とりあえずは以上を持ってすれば、ヤンデレ恐るるに足らず。みんな、良い勉強になったな」

『ならない、ならない』

「その教訓、今後活かせるものが何一つねえよ……」

「と言うか、セツくんはその全部を体現してるの？」

「全て、体験談だからな」

「懐かしそうにうんうん頷いてるんじゃないよ。なんで生きてんだ
よ」

「む、じゃあ言い直す。……総括。ゴキブリ並みのしごとさ」

「なんで言い直したの！？ ねえなんで態々カツコ悪い方に言い直したの！？」

「最悪、人間急所だけでも守れば即死はしない。後はなんとかしごとく生き延びる」

『……貴様は精霊連中以上に死線を潜り抜けてきているな』

自慢じゃないが、バトロワやつたら世界トップクラスだと自負している。……生き残り戦的な意味で。

「万丈目君、どうしたんスか？」

「……オレも、ノース校で散々地獄の底を這いまわっていたつもりだったが、どう足掻いても地獄レベルで次元が違つたと知つて、少々、凹んだ」

「……それは幸せなことだと思うツス」

「ん？ なんならヤンデレ的地獄巡りツアー体験談をレクチャーしてやつてもいいぞ？」

「お断りだ！」

何やらデュエルフィールドの向こうで膝を付いている万丈目が目に入って、ようやく今はタッグデュエルの最中だと言つことを思い出した。

「すまん。話が脱線に脱線を重ねたが、デュエルを再開しよう」

「まったく！ 役に立たないだけならまだしも、パートナーのプレイを妨害するな！」

「ぐっ……おっしゃるとおりで」

そういえば、ユーキちゃんのターンだったか。

「う、うん。わたしのスタンバイフェイズ時に、除外されていた『オネスト』が手札に戻ってくるよ」

これで、『コンバット・シザーズ・ビートル』を戦闘破壊すること自体は問題なくなつたわけだ。例えユーキちゃんの手にもンスタ―がなくても、エースも光属性だからな。

「わたしは魔法カード『強欲な壺』の効果を発動するよ」

これでユーキちゃんの手札、現在五枚。俺、ゼロ枚。……なんだろ。活躍の度合いと比例したかのようなこの手札差。いや、普通逆だろ。活躍すればするほど手札がなくなり、事故れば事故るほど手札が温存されるのがこのゲームの常識だろう。

「ということはあるか？ 今回俺は、俺なりに活躍して尚、この戦

果なのか……？ タツグデュエル苦手過ぎだろっ俺……」

「え、えつとっだからセツくんは十分に活躍しててっ、わたしたちへのダメージ源を破壊したのも、キーカードの『封印の黄金櫃』を渡してくれたのも、戦闘でモンスターを破壊してるのも何だかんだで大体セツくんだからっ」

「……つまり、今回俺は地味なんだな」

ユーキちゃんの気持ちは、若干わかつた気がする。

「そ、それは少し複雑だけどっ。とにかく、わたしは手札から『サイレント・ソードマンLV3』を召喚！ マジックカード『レベルアップ！』を発動！ 来て！『サイレント・ソードマンLV5』！」

『サイレント・ソードマンLV5』 ATK2300

流石に、あれだけ手札があれば『レベルアップ！』も引き入れてるか。

「バトル！『切り札の騎士団長 エース』で『コンバット・シザース・ビートル』を攻撃！『リッター・ブリッツ』！」

「ちっっ！」

ユーキちゃんの攻撃宣言に、苦々しげに顔を歪める万丈目。普通なら攻撃力は『コンバット・シザース・ビートル』の方が上だが、当然奴も知っている。ユーキちゃんの手札に『オネスト』がいることを。

「させないよ！ 僕はトラップカード『進入禁止！NoEntry！』を発動！ 相手の攻撃表示モンスターを全て守備表示にして、手札を一枚捨てさせる！」

「ええっ!?!」

『サイレント・ソードマンLV5』 DEF1000

『切り札の騎士団長 エース』 DEF2000

俺たちのモンスターが守備表示にされ、ユーキちゃんは手札をシヤッフルし、その中から一枚を抜き取る。そのカードは……『オネスト』。

「やったッス！」

「フン、上出来だ！」

「ふう……わたしはこれでターンエンドだよ」

先ほどとは逆に、翔に一杯喰わされた形になったユーキちゃんがターンを終了する。

「僕のターン、ドローツス！ さあ、こっちも反撃開始ツス！」

元気を取り戻した翔が、そう言っただけでターンを始めるのだった。

……あれ？ 前回と終わり方が酷似しているような……気のせい
か？

第三期第十七話「御堂切の突発的ヤンデレ対策講座」(後書き)

というわけで、めっちゃギャグ色の強い話に……。どうしてこうなった。多分悠の、ギャグを思いついたらやらなきゃ気が済まない体質が原因でしょうが。……。ちなみに、万丈目のビートロンですが……。もしかして、あれ斎王に貰ったカードなんですかね？ レイとのデュエルでも使っていたので、普通に万丈目の持ち物だと思っただけですけど。ほら、ホワイトナイツと違って白関係ないですし。まあいいか。

ちなみに、最後の翔が使った進入禁止はアニメ効果です。アニメだと守備表示になるのは相手のみ。その上、相手の手札を一枚捨てさせる鬼畜効果でした。いや、普通にずっこいだろこの効果。相手に得が何一つない。自分得し過ぎ。

ヤンデレ対策論は……。セツはバトロワでは確実に生き残るでしょうね。うん。どうやってたら死ぬのか。急所貫くしかないような。それ以前に拉致できねえ。

しかし……。十代といい、万丈目・翔といい、ユーキちゃんは妙に原作キャラと縁があるなあ。

それでは、悠でした！

第三期第十八話「近くて、遠いその手」(前書き)

お待たせしました。まさかの三部構成となったタツグデュエル、後編をお届けいたします！ ユーキちゃんも、今度はセツも大活躍の後編なので、お楽しみ頂ければ幸いです。

第三期第十八話「近くて、遠いその手」

アルカナく切り札の騎士」

第三期第十八話「近くて、遠い、その手」

「さあ、一気に勝たせて貰うよ！」

一発逆転の『オネスト』を封じられた上、あいつらの『コンバット・シザーズ・ビートル』は健在……確かに、かなりマズイ状況だ。

「僕はトラップカード『チェーン・マテリアル』を発動！」

「なにっ!？」

『チェーン・マテリアル』!? しかも、翔のデッキはビークロイド。とくれば……。

「僕は魔法カード『ビークロイド・コネクション・ゾーン』を発動するッス！」

やっぱりソイツを持っていたか!

「これはビークロイド専用の融合魔法。この効果で融合召喚されたビークロイドは、効果によっては破壊されなくなる上、効果も無効にならなくなるッス！」

「ええっ!?! 確か、『チェーン・マテリアル』の効果って……」

「除外ゾーン以外のあらゆるところから、融合を行うことが出来る代わりに、そのターン攻撃することができず、そのターンのエンドフェイズ時に破壊される効果だ」

つまり、『チェーン・マテリアル』の効果であらゆる場所から融合出来る上、デメリットを最小限に抑えることが出来る。

「僕は墓地の『トラックロイド』『エクस्प्रेसロイド』とデッキの『ドリルロイド』『ステルスロイド』をゲームから除外して、『スーパービークロイド』『ステルス・ユニオン』を融合召喚！」

「四体融合!？」

『スーパービークロイド』『ステルス・ユニオン』 ATK 3600
「くっ……これで、攻撃力3600のモンスターが二体並んだか……!」

攻撃力だけなら、まだいい。攻撃時に攻撃力が半分になるデメリット効果のお陰で、貫通効果もそこまで怖くはない。だが、もう一つの効果は厄介だ。

そして『コンバット・シザース・ビートル』の効果も、ライフが心許ない今、相当に脅威だ。1000ポイントのダメージは安くない。

「このターン、僕はバトルを行えない。でも、効果は使えるよ!」
『スーパービークロイド』『ステルス・ユニオン』の効果発動! 『切り札の騎士団長 エース』を装備カードとして装備!

『ぬわっ!?!』

ステルス・ユニオンに吸収されたエースは、ステルス・ユニオンの胸部から顔がポコン、と……。

「……カツコ悪」

『な、なんだと貴様ー!』
いやだつて。

「僕はこれでターンエンド!」

「ふう、俺のターン、ドロー! 俺は魔法カード『強欲な壺』を発動。デッキからカードを二枚ドローする」

ふう、さてどうしたものか。このままなら……いや、なんとかなるか? さっき伏せたカードがアレだから……よし。問題なさそうだ。あと残る問題は……。

「俺は『放浪の勇者フリード』を攻撃表示で召喚。効果を発動する」

『放浪の勇者フリード』 ATK 1700

「フリード!? 確か効果は……!」

「俺は墓地の光属性モンスター、『シャインエンジェル』と『サイレント・ソードマンLV3』をゲームから除外し、『コンバット・シザーズ・ビートル』を破壊する!」

「ちいつ!」

まあステルス・ユニオンは破壊できないから、選択肢はなかったわけだが。

「俺は『サイレント・ソードマンLV5』を攻撃表示に変更、バトルだ!」

「えっ!?!」

「馬鹿な!? 『コンバット・シザーズ・ビートル』を倒したとはいえ、まだ攻撃力3600のステルス・ユニオンがいるんだぞ。まさか、奴も『オネスト』を引きいれたとでも言うのか!?!」

そうじゃない。俺は『オネスト』を引きいれてはいない。だが……。

「無理矢理にでも引き入れる! リバースカードオープン! 『光の招集』!」

これは、さっきのターンに伏せておいたトラップカード。ユーキちゃんとお互いに光属性を多用するからと念のため入れておいたのが役に立った。

「俺は一枚の手札を墓地に捨て、墓地から『オネスト』を手札に戻す!」

「おのれ、そういうことか!」

「更に墓地に捨てた『切り札の騎士 エース』の効果発動! カードを一枚ドローする!」

これでいい。これで……。

「準備は整った。行け! 『放浪の勇者フリード』で『スーパービークロイド ステルス・ユニオン』を攻撃!」

「む、迎え討て! ステルス・ユニオン!」

「無駄だ。俺は手札から『オネスト』を捨てて効果発動! 攻撃力

をアップする！」

『放浪の勇者フリード』 ATK1700 5300

「うわあああああつ!?!」

「くつ!?!」

万丈目&翔LP3600

「で、でもこの瞬間『機甲部隊の最前線』の効果発動! デッキから『スチームロイド』を守備表示で召喚するツス!」

「続けて『サイレント・ソードマンLV5』で『スチームロイド』を攻撃! 『沈黙の剣LV5』!」

「うわあつ!」

『機甲部隊の最前線』の効果は一ターンに一度。これ以上の増援はない。

「俺はカードを一枚セット。ターンエンドだ」

とりあえず、これで役割は果たした。手札が二枚あれば、『オネスト』二枚重ねでこのターン中に倒せたんだが……そう上手くはいかないな。

「やってくれる……! オレのターン、ドロー!」

万丈目の手札は今ドローした一枚のみ。一枚でこの状況を打破できるとも思えないが……。

「フ……どうやらまだ天はこの万丈目サンダーを見放してはいなかったようだ。装備魔法『次元破壊砲 スパー・サンダー・ユニット STU』! このカードの効果

果で、墓地に存在する『VWXYZ ドラゴン・カタパルトキャノン』を、召喚条件を無視して特殊召喚し、このカードを装備する!

このカードを装備した装備モンスターの効果は無効となり、守備表示モンスターを戦闘で破壊した場合、貫通ダメージを与える!」

『VWXYZ ドラゴン・カタパルトキャノン』 ATK3000

「なにっ!?!」

何のリスクもなしにヴィトウズイを復活させる装備魔法!?

「そんなのアリか……!?!」

「行け、ヴィトウズイ! フリードを蹴散らせ! 『VWXYZ ア

ルティメット・キャノン』！」

「ぐああああああつ!？」

「きゃああああああつ!？」

セツ&ユーキLP300

「ターンエンド! 流石にもうどうしようもあるまい!」

確かに、効果が無効になっているとはいえ、攻撃力3000の壁は厚い。しかも貫通効果まで付加されてしまったのは、守備で耐えることもままならない。

「う……わたしのターン」

つまり、このユーキちゃんのドローに全てがかかっている。

「……ドロー!」

どうだ!？」

「……わたしは手札から『レベルアップ!』を発動。『サイレント・ソードマンLV5』をLV7にレベルアップ!」

『サイレント・ソードマンLV7』 ATK2800

「LV7が存在する限り、フィールド上の魔法カードの効果は無効になるよ。わたしはこれでターンエンド」

「僕のターン、ドロー! 攻撃力を高めてギリギリ持ちこたえようとしたのかもしれないけど、その選択はミスだよ! 魔法カードの効果が無効になったことで、『次元破壊砲 STU』の効果も無効になる。だからヴィトウズイのモンスター効果も使えるようになるツス!」

更に言えば、自壊効果もなくなって完全蘇生ってことになる。もしかして、ユーキちゃん……!？」

「ヴィトウズイの効果発動!『サイレント・ソードマンLV7』を除外するツス!」

「ミスじゃ……ないよ」

そうだ、ミスじゃない。ユーキちゃんは、ここに来てそんな単純な、自分のモンスター効果で自滅するようなデュエリストじゃない! 「えっ……!」

「セツくんが残してくれた、リバーズカードが残ってる！ カウンタートラップ発動！『天罰』！」

「よし！」

俺は思わずガッツポーズをとる。手札がなかった俺には使えなかったカウンター。しつかり発動してくれた！

「わたしは手札を一枚墓地に捨てて、ヴィトウズイの効果を無効化！ 破壊するよ〜！」

「うわっ！？ そんな……」

「ええい！ 貴様はさつきから！」

「ぼ、僕の所為ツスか！？」

いや、ユーキちゃんが一枚上手だったんだろ。しかし、それにしても……。

「考えたな。装備魔法が無効化されることを利用した心理誘導か」

これまで悉く『オネスト』で撃退されたら、戦闘で倒すより効果で除外したくなるだろう。普通に戦闘したんじゃライフが削りきれないことや、無効化されていた効果が使えるようになっていたことも、効果を使用したくなる一つの誘導になっていただろう。

「カード効果の使い方が上手くなったな。ユーキちゃん」

「セツくんのおかげだよ。いいカードを伏せていてくれてありがとう」

ともかく、これでまた一つ、危険を脱した。しかも、もうこれで魔法カードは封じたも同然だ。

「うう……僕はモンスターを一体守備表示でセット。ターンエンドツス」

「俺のターン、ドロー！」

あとは、俺が下手を打たなければいい。

「バトル！『サイレント・ソードマンLV7』で守備モンスターを攻撃！『沈黙の剣LV7』！」

翔の守備モンスター、『ドリルロイド』が破壊される。

「『機甲部隊の最前線』は……」

「既に発動している魔法カードも、『サイレント・ソードマンLV7』の効果で無効だ」

これで後続を呼ばれる心配もいらない。

「俺はカードを一枚セット。ターンエンドだ」

「くっ……オレのターン、ドロー！……ちっ、ターンエンドだ」

万丈目も有効な手を打てずにターンを終了する。仕方ないな。基本におジャマたちは魔法カード依存のモンスターだ。魔法が封殺されていては使える効果もないだろう。

「わたしのターン、ドロー！ わたしは『サイレント・ソードマンLV7』でプレイヤーにダイレクトアタック！」

「ぐあああああっ！？」

「うううっ！」

万丈目&翔LP800

「ターンエンドだよ」

「うう、僕のターン、ドロー！ モンスターをセット。カードを一枚セットして、ターンエンドッス……」

「俺のターン、ドロー！」

随分と、静かになったな。やはり、魔法カードは封じられると相
当にダメージが大きいか。

「俺は……あー、『雷電娘々』を攻撃表示で召喚する」

『ひっさびさー！！ ライムちゃん久々の登場だ〜！！』

……テンション高いな。まあ、わからなくもないが。

「ああっ！？ 『雷電娘々』ッス！」

「いやー……ほぼ光属性だし、打点高めだし、空きスロットに差し
ておいたんだが……まさかこのタイミングで引くとは……」

まあ、相手が翔だし、コイツで決めてやるのも悪くない……か？
『あ〜もうチョ〜久々だよ！ キリリンったらライムのこと忘れちゃ
ったんじゃないかって不安だったんだからね〜？』

「あー、ずっと呼んでやれなくて悪かった。ほら、ヴァンダルギオ
ンとの兼ね合いとかもあるから、微妙にデッキに組み込みづらくっ

て……」

シナジー皆無だしな。

『でもでも、呼んでくれたからにはがんばるよ〜!』

「ああ、頼む。バトルだ! 『サイレント・ソードマンLV7』で守備モンスターに攻撃!」

「ニャンニャンッス〜……」

「おいコラ貴様、何をボサツとしている!??」

「はっ!?? そ、そうだ、デュエル中だった! と、トラップ発動
『聖なるバリア ミラーフォース』! ごめんッス、ニャンニャン
!」

『にやにやっ!??』

「させん! リバースカードオープン、カウンタートラップ『トラップ・ジャマー』! バトルフェイズ中のトラップの発動と効果を無効にする!」

「うわっ!??」

「ここに来て、そんなチャチなトラップに引っ掛かるわけないだろう! 行け! 『沈黙の剣LV7』!」

沈黙の騎士の大剣が、伏せられていた『トラックロイド』を貫く。

「翔! このモンスターでトドメをさすことが、俺のせめてもの手向けだ! 『雷電娘々』でプレイヤーにダイレクトアタック! 『お仕置きサンダー』!」

『おいしいトコいただき! お仕置きサンダー!』

「うわああああああああっ!??」

「くそおおおおおおおっ!!!」

万丈目&翔LPO

「やったね、セツくん!」

「ああ。ユーキちゃんのおかげだよ」

いやホントに。今回は完全にユーキちゃんの一人舞台だったと言ってもいい。

「そ、そんなことないよ」。『封印の黄金櫃』も『天罰』も、どちらもセツくんが伏せてくれたからだし……それに、セツくんだって攻撃力3600のモンスター二体も一ターンで倒してるんだし」

「俺は、ただモンスター効果を単純に使っただけだから。それよりも、ユーキちゃんの効果の使い方は上手かった。俺、あそこまでは教えてないぞ?」

事実だ。『封印の黄金櫃』の情報アドも、一応ちらつと話はしたが、あんな使い方まではレクチャーしていない。そこら辺は、全部ユーキちゃんが自分で考えて使ったものだ。

「今回勝てたのは、ユーキちゃんのおかげだよ」

「そうね。今のデュエル、素晴らしかったわ」

「明日香さん?」

突然声をかけてきた明日香に、戸惑うユーキちゃん。

「今のデュエルは貴女の独壇場よ。セツたちも十分に良い働きをしたと思うけど……貴女の活躍の前には、霞んでしまうでしょうね」

「そ、そんな……」

明日香、ベタ褒めである。アカデミアクイーンと呼ばれていた（今はどうだか知らないが）明日香にここまで絶賛されて、ユーキちゃんも真つ赤だ。

「セツ、加藤さんの実力、底上げしたのは貴方の力?」

「まさか。俺はきっかけを教えただけだ。あそこまでのことは教えただ覚えはない。あれは全部、ユーキちゃん自身が磨きあげたものだよ」

「そう……」

「すんばらしいデュエルだったノ〜ネ! シニョ〜ラユーキ、アナタの成績い〜に、加点しておくノ〜ネ!」

「あ、ありがとうございます」

「先生、俺は？」

「シニョ〜ルセツは、まず欠席を減らしてカ〜ラものを言うノ〜ネ！」

「たはは……」

そりゃごもつともで。

「しか〜シ、タッグデュエルに於けるカードスヤパートナーへの信頼〜ニヨ、見るべき点は、評価に入れておくノ〜ネ」

「ありがとうございます」

「シニョ〜ル万丈目とシニョ〜ル翔も、よく頑張ったノ〜ネ」

「フン」

「結局、負けちゃったツスけどね」

しかしまあ、クロノス先生も丸くなったもんだ。しっかり生徒の頑張り評価している辺り、去年とはエライ違いだ。

「それでえ〜わ、今日の授業はここまでなノ〜ネ。各自、復習をしっかりとやっておくノ〜ネ」

クロノス先生の言葉と共に、ユーキちゃん大活躍のタッグデュエル授業は終わりを告げた。

「……セツくん」

「ん？ どうした、ユーキちゃん」

「ありがとう、ね」

「……？ なんの話だ？」

「わたしが強くなれたの、セツくんのおかげだから〜
何かと思えば、そんなことか。」

「それは、ユーキちゃんが頑張ったからだろう？」

「……違つよ」

「ユーキちゃん？」

「わたし、セツくんに会えたから、きつとこんなに頑張れた。セツ

くんを好きになったから、セツくんの役に立ちたいと思ったから、頑張って勉強したんだよ。だから、わたしが強くなれたなら、それはセツくんのおかげ、なんだよ」

「ユーキちゃん……」

「セツくんが……こつこつという気持ちにさせてくれるから……だから……」

ちゅ……。

「あ……」

それは、余りにも一瞬で。

「……こんな時間が、いつまでも続けばいいのね」
「あ、その……ユーキちゃん」

すぐ傍に居たユーキちゃんが、何処か遠くに見えて。

「ホントに……ずっと……」

「ユーキ、ちゃん？」

思わず俺は、手を伸ばしていた。

「……なんでもない。ごめんね。いきなり」
「あ、いや……」

その手はしっかりとユーキちゃんに届き、手を握られた。

「みんなもしてるんでしょ？ わたしだけ、なんて悔しいじゃない」
「あー……その、なんていうか……」

けど、どこかその手は冷たくて。

「ふふ、セツくん顔真っ赤」
「し、仕方ないだろ。っていうか、前から思ってたけど、何で、俺みたいな奴に……」

近くに居る筈なのに、どこか遠く感じて。

「セツくんだから、だよ。わたしも、さだめちゃんも、アテナちゃんも、ルインさんや希冴姫さんも、セツくんだから、何でもしてあげたくなるの」

「俺は……」

俺は、思わずその身体を抱きしめていた。

「セツ……くん？」

「……わからない。何故だか、ユーキちゃんが、いなくなってしまうような気がして……」

「……… だいじょうぶ、だよ」

「ユーキちゃん？」

「セツくんが望んでくれるなら、わたしは何時でも傍にいるよ。きつとそれは、他の皆も同じだけど………わたしも」

「………悪い」

ユーキちゃんを抱きしめていた腕を解く。今になって、顔が熱くなってきた。

「ううん、いいよ。だ、大歓迎、だから」

ユーキちゃんの頬も赤い。まったく、これじゃラブコメ担当、なんて言われても否定出来やしない。

「じゃ、じゃあユーキちゃん。俺は寮に戻るから………」

「………うん。じゃあ、またね。セツくん」

「ああ。また明日な」

小さく手を振るユーキちゃんに手を振り返して、俺はその場を後にした。

「また………また、ね………セツくん」

背後で、そう呟くユーキちゃんに気が付きもせず。

第三期第十八話「近くて、遠いその手」（後書き）

まあ例によって不吉極まりない終わり方なわけですが。改訂前を御存じの読者さんなら想像はつくでしょうが。今回はアテナ帰還になります。まあ……さほど変更点もないんでさっさかアップ出来るかと思えます。あんまり変えたくないですしね。あの話は。

今回万丈目サンダーの使った装備魔法『次元破壊砲 STU』。どう考えてもチートでしょう。いや、禁止とかになるほどじゃないのかもしれませんが、ノーコストで特殊召喚モンスターを蘇生、且つ貫通効果付与と、ずいぶんなカードです。ちなみに、原作だとV Sアモンで使用されました。異次元格納庫とかも……強いなあアレ。どう考えてもOCGより出しやすいだろ。ヴィトウズィ。

なんというか、オネストの使い方百選、みたいなデュエルでしたね。今回。散々オネスト使いまわし。まあ、オネストに関する駆け引きは実際のOCGでも色々あるんで考えてみると面白いです。光の招集だって、オネストが出てから随分と有用性上がりましたしね。それでは、悠でした！

第三期第十九話「再会と、悪夢の始まり」(前書き)

というわけで、アテナ帰還回です。ここからが急転直下なわけですね……。少々暗い話が続きますが、お付き合いの程、お願いいたします。

第三期第十九話「再会と、悪夢の始まり」

アルカナ〜切り札の騎士

第三期第十九話「再会と悪夢の始まり」

十代がデュエル出来なくなってから数日、アカデミアは衝撃に揺れていた。

なにしろ、あの遊城十代である。アカデミア随一のデュエル馬鹿と言っても過言ではない程のデュエル好きが、デュエルできなくなったというのだから、生徒たちが動揺してもおかしくないことだろう。

「原作に、こういうイベントあったっけ？」

「わからん。もう正直原作がどうとか、そういう境界があやふやになつて来ているからな。俺たち」

「だねー……」

ため息交じりにさだめと一緒にレッド寮へと帰る。さだめは女子寮に帰るべきなのだが、毎日必ず俺の部屋　　というかテントに寄ってくる。あわよくばお泊りなんかもしちゃおっかなー？　的　なオーラを感じるので、女子寮の門限までには丁重にお帰り頂いているのだが。

「ところで、希冴姫さんの具合どう？」

「……芳しくはないな。一度精霊界に戻った方が良いんじゃないかって提案してみたんだが、ルインもエースも意味がないって一蹴するし。今はその二人が交代で看病してるよ」

もちろん、放課後など俺の身体が空いた時は必ず俺も参加しているけど……ちなみに、ルインは俺の看病からどうも料理その他家事に興味湧いたらしく、希冴姫の食事の世話なども率先してやってくれている。以下は、その例である。

『……できた』

『あ、あのルイン様……お気持ちは嬉しいのですがわたくし仮にも病人でしてそのあからさまに危険そうな物質Xを口にするのは……』

『大丈夫。おいしい……と、錯覚する筈』

『今錯覚って言いましたわよねえ！？　ゴホッ！』

『かまわん。ルイン殿。好きに実験台にするがいい。団長の名に於いて許可する』

『え、エース貴女つい先日団員を護るのも団長の務めだとか言っておいて……げふっ』

……なんだろう。すごく今更だが、希冴姫が回復しないのも当然な気がしてきた。

「ターゲット、ロックオン！」

「え？」

いきなり遠くから、しかし明瞭に聞こえてきた女性の声に、俺とさだめは二人して振り向く。

遙か遠くに、いつか会った短髪女性と、襟首を掴まれ今にも投擲体制に入れられようとしているアテナの姿が……

「……アテナ！？」

「超電磁アテナ、全弾発射ああああああつー！！」

「いいいいやああああああああつー！？」

「アテっ……」

「避けてえええー！！　避けてくださいいいいいいいー！！」

「これはまさか某食い逃げ・うぐうとの出会いイベントでお馴染……」

衝突確定。……正直、ヘンな解説せずに受け止める体勢にでも入っていたらよかったと思う。今は反省している。

「じぶうううううつ!?!」

腹に突っ込んできたアテナと共に軽く十メートル近くぶっ飛ばされた俺は、そのまま意識を失った。

「っていうかあんな遠くから一人投擲して且つ十メートル以上吹っ飛ばすとか、どんな勢いで投げられたんだろ……」

というさだめの声を、薄れ行く意識の中で聞いたような……がぶつ。

「……ん」

独特の消毒液の匂い……あまり俺自身は世話になったことがないが、さだめを精神疾患という名目で度々連れてきていたので、なんとなく覚えのある保健室の匂い。

「あら、目が覚めたのね」

俺が眼を覚まして最初に声をかけてきたのは、保険医の鮎川先生。

「鮎川先生……初登場ですね……」

「ほつといて頂戴!」

「つと、寝ぼけたこと言ってる場合じゃなかった! アテナ!」

アテナが戻ってきたんだ! こんなモブ教師を相手にしてる場合じゃなかった!

「……誰が、今まで看病していたと……orz」

頂垂れる鮎川先生を尻目に、俺はカーテンを引く。

「アテナ!」

「あ……せ、セツ……」

「お兄ちゃん……」

そこには、ベッドに腰掛けて俯くアテナの姿。俺と一瞬目が合うも、すぐに逸らされてしまう。アテナ……。

「あ……わ、私……」

「無事で、良かった……」

「え……」

「正直、聞きたいこととか、言いたいこととか、色々あって頭はぐちゃぐちゃしてるけど……とにかく、無事で良かった」

「あ……」

アテナを抱きしめる。アテナの驚いたような、戸惑ったような気配が伝わってくる。その手が、一瞬俺の背中に回されそうになっ

……

「や、やっぱりダメ！」

すぐに、突き飛ばされた。

「アテナ……？」

「わ、私はっ！ 私は……やっぱり……セツ、ごめんなさッ！？」
がしゃあああああん！！

「アテナ！？」

アテナが何か言おうとした瞬間、何処からともなく飛来してきたタライに頭部を強打された。

「きゅ……」

眼を回すアテナに光さんが近づいてくる。

「ったくこの子は……」

「ひ、光お姉さん……でも……」

「ええい、デモもストもないっつたでしようが！ いいからさっさとさつきみたいに飛び込んで……むう……！！」

「はいはい。キミは基本的にムードブレイカーだから黙ってようね」

「ぶはっ！ ちょっと希望！ 今回の立役者に対して……」

「はいはいわかったわかった……アテナ」

「は、はい……」

「キミの心を信じて、素直に……ね？ 頑張りなさい」

「あ、う……」

「さ、行くよ光。……あと、君には改造車のこととかミサイルのこととか、とにかく色々お話がありますからそのつもりで……あ、鮎川先生も一緒に来てください。美味しいお茶とお菓子でも、如何

ですか？」

「あ、はい是非！」

おいそれでいいのか保険医。運び込まれた生徒ほっぽってナンパされてどうする。いや、正直ありがたくもあるんだが。

ばたん。

「……………」

三人が出ていき、保健室には俺とさだめ。そしてアテナの三人が残される。いや、もう一人いたか。

「……………久しぶりね。坊や」

「シャルナ……………」

シャルナも、アテナと一緒に居なくなっていた。連絡が取れないとカイエンが嘆いていたのも記憶に新しい。尤も、仕事だけはきちりしてあつたらしいが（それが逆に不気味だとカイエンは怖がっていたが）。

「ねえアテナ……………話しましょう？　いつまでも黙っているわけにもいかないし……………彼らなら大丈夫だって、自分でもわかってるんでしょう？」

「シャルナ……………」

シャルナに促され、しかしまだ躊躇うようなそぶりを見せるアテナ。そんなアテナに、やがてシャルナは痺れを切らしたのか、俺たちの方を向く。

「ああもう……………あの女に同調するようで気に食わないけど……………あのねセツ。アテナがあんたたちの前から姿を消したのは……………」

「シャルナあ！」

「あんたが言わないならあたしが言う。全部ぶちまける。そうされなくなかったら言いなさい。自分で」

「わ、私にだって心の準備とか……………」

「これ以上待ってたら来世まで持ち越しそうなんだもの。ほら、勇氣を出して」

「うう……………」

アテナは、尚も躊躇っていた様子だが、俺たち三者の視線に覚悟を決めたのか、俺の方を向いた。

「セツ……聞きたいこと、なんですか？ 私、答えます」

「無理……してないか？」

この期に及んで、そんなことを聞いてしまう。もしこれでまたアテナが口を閉ざしたらどうするんだ。俺は馬鹿か。

しかしアテナは、俺のそんな懸念を余所にふるふると首を振った。「いえ、ここで甘えたら、私きつと一生話せなくなります。せつかく、光お姉さんたちが作ってくれた機会ですから……セツ。私に、遠慮しないでください」

「……わかった」

アテナの覚悟が伝わってくる。まだ、その覚悟を決め切れた、というわけではないようだが……遠慮するなというアテナの言葉を信じ、俺は話を聞くことにした。

「じゃあ……まず、何で俺の前から姿を消したりなんかしたんだ？」

「……罪悪感、です」

「罪悪感？」

「私は、絶対に許せない事をしました。セツに……それに、さだめさんに」

「さだめ、に……？」

コクリ、と頷くアテナ。

「さだめさんが、かつて終焉の精霊に取り憑かれたこと……セツたちがこちらの世界に呼びこまれたこと……その二つの原因となったのが、私なんです」

「！？」

流石に、これには驚いた。アテナが、俺たちの事をトリッパーだと認識していたことや、こちらの世界に来る原因となった……くらいまでは、なんとか予想の範疇だ。しかし……。

「さだめが……アレに取り憑かれる原因？」

そればかりは、予想していなかった。

「かつて……そう、かつての私の犯した過ちが、終焉の精霊をセツたちの世界に追いやり、そこでさだめさんに取り憑いた……そう、終焉の花嫁であるセツの、最も近しく、寄り代として相応しい存在として、さだめさんに」

「ま、待てアテナ、話が読めない。お前は今十三歳だろう？ もうわかっていていると思うから言うてしまおうが、元の世界の年齢と併せると俺はもう二十歳のさだめも十九歳……どう考えても年齢が……」
「そこまで話してからはつとした。そうだ……俺たちは……」
「セツたちがトリッパであると同様……私も似たようなものなんです」

アテナは、ふいに立ち上がり、部屋の中央に歩いて行く。そして胸の前で手を組み、眼を閉じた。

「私は……」

アテナが光に包まれ、光が収まるとそこには……。

「転生者、なんです」

純白の法衣と翼を持った、一人の天使がそこに居た。

「それも、私の前世は精霊。そしてそのまた前は人間……二重の転生者。人としての生を終え、また精霊としての生を終えて人間界へと舞い戻った……それが私。それが、天音アテナの真実……」

アテナが翼を仕舞い、服装も元に戻る。

俺は、アテナが失踪する前、希望の言葉を思い出していた。

『“人”生は、楽しいかい？』

「人の……生……あれはそういう……」

俺の呟きに、アテナはクスリと小さく、力なく微笑んだ。

「あの時までには、忘れていました。私が転生者であること。また、精霊としての最期の時……追いつけていた終焉の精霊を取り逃し、貴方達の世界に墮としてしまったことを……」

それが、希望のあの言葉をトリガーに思い出されたのか……。

「記憶を失っていた私は、それでも最期に残された、精霊としての矜持か義務か……取り逃した終焉の精霊を捕捉し、無意識の内にこ

こちらの世界へと引つ張つて来た……そう。終焉の花嫁、セツごと巻き込んで」

そういう、ことだったのか……。こちらの世界にトリップしたと……むしろ、さだめがメインだったんだ。俺は、言わばおまけ。さだめとの繋がりから、巻き込まれただけ。

しかし、話はそれだけではないらしく、アテナはまた話を続けた。「そして、私は精霊として転生する以前……人間だったときにも、終焉の精霊と関わっています。その時は……花嫁として」

「な……」

アテナも、終焉の花嫁だったのか……？
『補足しておく、あたしも転生者。人間から精霊に。人間だったときは、アテナと同じ街の、裕福な商人の家に生まれた普通の少女だったわ』

「シャルナも……」
『で、その当時のあたしの名前は“シャルナ”。……だから、驚いたのよ？ アテナがあたしに、フィリングでシャルナって名前をつけた時にはね』

そういえば、その時のシャルナはシャルナって名前に酷く反応していたな……。そういうことだったのか……。

『ルインなんかは、その辺りの事情知っているから、後で聞いておくといいわ。一応、古いなじみだから』

「私は終焉の花嫁として、シャルナと一緒に終焉に巻き込まれ、私は街やシャルナと共に一度終焉を迎え……その後、精霊として転生。私の街を終焉に追い込んだ精霊を探して、追い込んだんです」

そして、取り逃がした……か。

『あたしは、人間のアテナと精霊のアテナ……二回もこの娘を失った……一度目は、奇跡的に精霊として再会できた。今回も、またこうして再会できた……でも、次はどうなるか分からない。なにより、もう目の前でこの娘を失うのは嫌』

ああ……だから、引き籠りになった時はあんなに……護れなかつ

た。“また”護れなかつたって苦しんでいたのか……。

『アテナがあの子だつてことは、会つてからしばらくたった頃には気がついていたわ。ホント、以前のあの娘そのままなんだもの……まあ、多少色恋に酔っちゃいたけど』

それは……今は置いておいてくれ。

「私は……憎しみに囚われ、自分の全てを奪つた終焉の精霊に復讐しようとして、結局、セツやさだめさんに災厄の種を蒔いただけ……シャルナを悲しませ、自分は全てを忘れ、のうのうと転生し……拳句の果てには、自分が不幸に、絶望に突き落とした相手に恋をして……。私一人が幸せに……。最悪です。最低です。ホントに……。最低」

吐き捨てるように……。いや、まるで血反吐を吐くがごとく、アテナは自分を罵つた。

「アテナ……」

「やめてください」

伸ばした手は、アテナに届かない。

「セツは、私を赦します」

アテナの言葉が、俺には届く。

「セツは、間違いなく私を赦すんです。私にはわかる。でも、だからこそ、私は貴方達の傍から消えた……。赦されたくないから。罪人つみびとは、罪を受けるべきなんです。でも、セツはそれを私に望まない」

俺の言葉は、アテナに届かない。

「例え、セツが“赦さない”と言つたととしても、セツは心の中で、私を赦します。私に、今まで通り接してくれるでしょう。もしかしたら、好きにもなってくれるかもしれない。恋だつて……。してくれませんか。でも……。だめ。それは、だめ」

アテナは、自分を抱きしめる。

「怨み、憎しみ、執着……。私の原動力は……。私が今、ここに居るのは、生きてるのは……。全てそれに絆されたから……。ただ、終焉を滅ぼすために……。そのためだけにここに居て、なのに……」

俺の腕は、アテナを抱きしめられない……。

「だから、私はやっぱり、また消えます。私に、セツの……優しく暖かなあなたの傍に、いる資格はないから」

「っ！」

違っただろ……。

「違っただろっ！」

伸ばした手が届かない？ 声が届かない？ 抱きしめられない？

「そんな筈……ないだろ……っ！」

足が地を蹴る。一瞬身を引こうとしたアテナを、思い切り抱きしめる。

「届くじゃないか……！」

「せ、セツ……」

「資格とっかっ！」

「っ！？」

思い出せ、御堂切。俺は、どんな奴だよ……？

「お前の事情なんか、端から聞いちゃいない……！」

いつだっつて自然体で、マイペースで……。

「俺はっ！ 他人の事情なんか露ほどにも気にしないマイペースな最低男なんだ！ だから、アテナの事情なんか知らない！」

俺は主人公なんかじゃない……さだめのトリップに巻き込まれただけの、ただの脇役みたいなもんだ。なら……。

「自分の、好きに生きるさ」

アテナを赦してハッピーエンドとか、そんなの俺の柄じゃない。

「俺は……そんな主人公じゃない。だから……っ！」

アテナの目を見て、告げる。

「俺を不幸にしたと……絶望に突き落としたと思うなら……」

更に、アテナを強く抱きしめる。

「今よりもっと……俺を幸せにして見せる……！ 俺に、希望を見せてくれ！ 不幸に、絶望に突き落としたまま消えて貰っちゃ、困るんだよ！」

「…………あ」

「離さないって、言っただろ…………！ 忘れたとは言わせない…………俺は、お前を離したくないんだ…………！」

「セ…………ツ…………」

「それに…………」

辛いことも、あった。さだめのことで、色んな辛い目に遭ってきた…………でも！

「俺は、一度だって自分を不幸だと思ったことはない…………！」

さだめの兄であることに、不満を感じたことなんてない。さだめの兄であることに、誇りすら感じていたんだ…………。

「そして、この世界に来て…………俺は、どんどん幸せになってたんだ」
アテナと出会い、希冴姫やルイン、ユーキちゃんと出会い…………。

「さだめも…………助かった…………」

何処の誰とも知らない、俺たち兄妹をこの世界に送り込んだ存在に、感謝していたんだ。それが…………。

「お前だったなら…………尚更だ」

強く、強く、抱きしめる。

「お前は、俺を幸せにしてくれたんだ…………！ だから、もう、居なくなるな。もっと、俺に感じさせてくれ」

幸せを。

誰かを想うということ。

愛しさを。

「恋なんて…………とつくの昔からしてるんだよ…………！」

始まりは、きっと初めて会った時…………。

恋なんて、したことなかったからわからなかったけど…………きっと…………最初から…………！

「あ、ああ…………もう…………これだから…………だから、来たくなかったんです…………」

少し苦しそうなアテナが、それでも文句一つ言わずに俺の背中に手を回す。

「ぜつたい……離れられなくなるから……依存、してしまつから……」

どちらともなく、少しだけ、体を離す。

「一度目のキス……不意打ちだった。何も考える間もなく、錯乱しているアテナと……」

「二回目は……悲しかった……もう、会わないつもりだったから……」

だから、三度目は……。

俺とアテナの唇が、重な

『ちよつと……！ま、待ちなさいっ！！』

ドンッ！！

「なっ……！？」

「え……」

突然、凄まじい力で弾き飛ばされた俺が、その目にしたのは……。

「さ、だめ……？」

「幸せなキスなど……赦さない……」

アテナの飛びつくように、アテナに“ナニカ”を突き立てるような体勢の……

「苦しいキスも……赦さない……」

さだめ

「さだめ、さん……」

俺の、妹

「悲しいキスだつて……赦しはしない……」

抑揚のない、どこか空虚な響きの声。

僅かに覗く、歪んだ口元。

「別れのキスなら……」

いつか見た……狂気の具現。

「潔く、去ね……！」

そして

その小さな体が

崩れ落ちた

第三期第十九話「再会と、悪夢の始まり」(後書き)

改訂前と、特に変わったところもありませんので、ノーコメントとさせていただきます。

それでは、悠でした！

第三期第二十話「真実と裏切り」(前書き)

続けて連投です。おなじく、改訂前と違いはありません。

第三期第二十話「真実と裏切り」

アルカナく切り札の騎士く

第三期第二十話「真実と裏切り」

その小さな体が、崩れ落ちた。

「さ……」

さだめの、小さな体が。

「さだめっ!？」

「え……あ、私、なんとも……え、じゃあ……“コレ”……何……？」

アテナは呆然としているが、怪我はしていない。

アテナの足下に広がる、赤・朱・紅。

零れ落ちていく命の滴。

さだめの……最愛の妹の、命の……っ!

「さだめええ!!」

さだめの影から、ズルリとナニカが抜け出る……。

『グッ……愚かな、自決だと……?』

「き……」

ソイツを目にした時、俺の視界が真っ赤に染まった。

「キサマアアアアアアアアア!」

思い切り拳を振りおろすが、俺の拳はソイツをすり抜けて空を切る。

『コイツは、コイツだけは……』

シャルナが俺と同じ血走った眼で杖をその終焉の精霊に突き立てる。

『消えなさい……災厄!』

カツ!

『グオオオオオオオオオツ!?!』

また……またコイツなのか……! また、コイツに、俺たちは……!

「さだめさん!」

「っ! さだめ!」

アテナの悲鳴染みた声に、俺はすぐにさだめの傍に戻る。

自らの腹部にナイフを突き立てたさだめは、腹部から大量の血を……!

「さだめっ! お前、なんでこんな……っ!?!」

コヒュー、コヒュー、とパンクしたタイヤのように呼気を漏らす

さだめは、それでも笑っていた。

「お、にいちゃ……さだめ、耐えたよ……」

その一言で、俺は察した。コイツは……あの終焉の干渉に対して、最後の抵抗をしたんだ……止まらない手足を、それでも動かして、アテナを殺さないために。

「馬鹿っ……! それでお前、自分に……!」

「さだめさん!」

「らしくねえ……らしくねえよ……っ!」

「ア……テナ、は……」

さだめが、アテナに何かを伝えようとしていた。

「さだめさん!?!」

「アテナは、トモダチ……さだめにとって、さい、しょの……初めでできた……だから……」

「あ、ああ……」

だから、殺したくなかった……? 初めての友達を……。

「セツ!」

「希望!?!」

「何してる!?! すぐに処置しなければ、死ぬぞ!」

「!?!」

希望の言葉にハッと我に帰る。そうだ、泣いてる場合じゃない!

「けど、どうすれば……!?!」

「ここが保健室で助かったな……光の行動が、巡り巡って吉と出たか……!」

希望はさだめの手からナイフをはぎ取り、そのナイフでさだめの制服を裂く。さだめの、血が出ている場所をすばやく針で縫って行く。その動きに淀みはない。そして何処からか持ってきたのか大量のガーゼや包帯でさだめのむき出しの腹部を覆って行く。

「ルイン!」

「っ! わかつてる……!」

ルインも連れてこられたのが、手から出した淡い光をさだめに当てるていく。

「心配すんな……」

「ゴーズ……」

「一応よ……これでもオレたちや、コイツの精霊だから……コイツの魂、冥土になンぞ送って溜まるかよ! テメエなンぞ、冥界に来ても門前払いにしてやらア!」

「私たちは、この娘を冥府に連れていくために来たんじゃないません……!」

カイエンも……。

やがて、希冴姫に肩を貸したエースも現れる。

俺は、その場に集まってきた皆を眺め、涙を流す。

「さだめ……良かったな、さだめ……」

俺は、何もできなかったけど……。

「お前にも、トモダチが一杯できたぞ……!」

ずっと、一人ぼっちだったお前にも……俺以外に、お前の傍に居てくれる奴が、こんなに増えたぞ……。

後は、さだめ次第……か。

「大丈夫だ。信じる。セツ。貴様の妹は、それほど柔ではなかつた」
「ああ……」

殺しても死なないような奴だ。きっと、すぐにケロツとした顔で目を覚ますに決まっている。

「良かった……さだめさん」

僅かに、その場の全員から安堵の息が漏れる。

「なあんだ。誰も死ななかつたんだ。ざあくんねん」

「っ!?!」

全員が、驚いて振り向く。

「にしても……くだらない三文芝居だったね。せつかく色々お膳立てしてあげたのに、つまんないなあ」

保健室のドア。そこに背を預けて、クスクスニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべる人影。

「私……私には、分かります……」

「私も、わかる……忘れもしない……!」

アテナとルインが戦慄する。希望が、二人の言わんとしていることを引き継いで言った。

「現れたか……。終焉の闇……本体!」

「ぴんぽくん。もう、さだめちゃんなら、きつちり殺してくれるかなあ。って思ってたんだけど……買い被り過ぎだったかな?」

どこか間延びした声。綺麗に整えられたブラウンの髪……余計な肉のない、女性らしくもスレンダーなその肢体を包むオベリスク・ブルーの制服……。

「まさか……キミが……？」

どうして……

「どうしてだよ……っ！」

混乱する頭で、俺はその娘の名前を呼んだ。

「ユーキちゃん！」

加藤友紀。

今、俺たちの前でニヤニヤと昏い笑顔を浮かべているのは、間違
いなく、ユーキちゃんだった。

「フフ……その答えだったら、そっちの人がよく知っているんじ
やないかなあ〜？ ねえ、希望く〜ん？」

俺たちの視線が、一斉に希望の方を向く。希望は、いつもの微笑
みを消した、一切の無表情で、俺たちに説明する。

「終焉は……イレギュラーその他による世界の改変……世界のバラ
ンスが崩れることで生まれ、活性化する……そう、イレギュラーが
関わり、世界が本来のルールから外れることで、終焉は生まれる……
……」

「つまり、どういうことですか……？」

「イレギュラー……君たちが最も深く関わり、最も改変が顕著に表
れた、ただ一人の人間……イレギュラーでなく、イレギュラーとな
った……この世界の、狂ったバランスのクロスポイント……」

それが……、

「ユーキちゃん……？」

「大正解」

そんな……。

『終焉は君たちのすぐ傍に』

希望の手紙に書かれていたそのフレーズの意味が、漸く理解できた。俺たちが深く関わり、未来が改変された、その中心。そこに……終焉は居たんだ。

「終焉の闇。その本体だけは、他の欠片たちとは違い、憑依したりはしない。闇が潜むのは、世界の異常。その存在。その狂界」

狂界……。狂った世界……。

「ユーキちゃん、いつから……」

いつから、終焉になっていたのだろうか。今まで俺たちと一緒に居たユーキちゃんは、どこまでが……。

「……ん？何か勘違いしているようだから言っておくけど」

今や終焉の闇と化したユーキちゃんは、少しさびしそうな表情をしていた。

「この体……加藤友紀の想いは、本物よ」

ユーキちゃんの……終焉の口調が変わる。

「私は、宿主の……加藤友紀の恋心と共に、育ってきたのだから。

我が花嫁……いえ、花婿」

「ユーキちゃん……」

「宿主の、貴方への想いが、我が源泉。彼の者の恋情と共に、私は目覚めた」

「……加藤友紀はイレギュラーではない。彼女をイレギュラー足らしめたのは、偏にセツへの恋心。キミに恋をし、元あったレールから外れた、これがその結果」

希望の言葉が、何処か遠くから聞こえてくるような感じがした。

「まあ、今日はただの顔見せだよ。ホントなら、さだめちゃんかアテナちゃんを失って絶望するセツくんが見られれば最高だったんだけど。まあ、誤差の範囲かな？」

口調を戻したユーキちゃんは、クスリと笑って俺たちに背を向けた。

「逃がすか!」

「待て！」

「何故止める！？」

「あの体は、紛れもなく加藤友紀のものだ。剣で斬りつけたりしたら、加藤友紀が死ぬだけ。終焉の闇自体は、他の場所で生まれるだろう。他の……そう、イレギュラーとの接触によって運命が変わり、バランスを崩す要因となっているものたちの所に。例えば、丸藤亮やタイタン、早乙女レイ辺りに、ね」

「フフッ！ そういうこと。だから、今日は見逃してね？ セツくん。アテナちゃん」

「くっ……」

「じゃあ、バイバイ。また、近い内……そう。終焉の時までさよなら。みんな」

ユーキちゃんは、闇に溶けるようにして消えていった。俺たちは、それを睨むことしかできない。何処からか、ユーキちゃんの声が聞こえてくる。

いつか、迎えに来るよ。それまで待ってて。セツくん。傍に……いるから。

「……………」

俺たちは、しばらく誰も何も話さなかった。ユーキちゃんが、敵の本体。倒すべき、敵……。

「……真中希望」

そんな中、ユーキちゃんとの関わりが薄かったからか、いち早く立ち直ったエースが、希望に剣を突きつける。

「なにかな」

「貴様は、知っていたのか？ 加藤友紀が敵……終焉の闇本体である」と

「ああ。知っていた」

淡々としたその答えに、ギリツと齒軋りをするエースだが、爆発するのを堪えて、質問を続ける。

「ならば、何故対処しなかった。何故、我らにそれを伝えなかった」

「本体が表に出てこなければ、対処も何も無い。それに、君たちにそれを伝えたところで、状況が悪化するだけだと判断した」

「どういう意味だ」

「仮に、ユーキが終焉の本体だと君たちに伝えたとする。君たちはどうした？」

「それは……」

言い淀むエース。俺たちも、それを想像してみた。

「どうすることもできない。それどころか、黒幕がユーキだとわかれば、君たちはユーキに対する態度を変えかねない。そうすれば、ユーキの心に淀みがたまり、さらに終焉は力をつけていただろう。負の感情は、終焉の餌だ」

「っじゃあ、今この場で奴が表に出ることを、貴様は予知していたのか？」

「していた。アテナがセツと再会する時。そしてさだめが再び闇に墮ちる時。奴が顔を出すなら、このタイミングしかないと思っていた」

「ま、待て。じゃあ何か？ お前は、さだめかアテナがこの場で死にかけることも……」

慌てて、俺は口を挟んだ。それに対しても、希望は淡々と答える。「当然、予測していた。さだめの中に欠片が潜んでいることは知っていたし、君たち二人が仲直りすれば、嫉妬で表面化するだろう、と」

「こうなることを知っていて、お前……」

アテナを、唆したのか。

「そうだ」

「っ貴様！」

俺より先に、エースが憤った。

「貴様、何様のつもりだ！ 彼らを、どこまでも自分の駒のように……神にでもなったつもりか！？ 彼らの命をなんだと思っている！？ 我らとは違う、我らが、デュエルで墓地に行くのとはまるで

違う…… 本当の意味での“死”をお前はっ！」

「だがそうしなければいけなかった」

「っ！」

一遍の迷いもない希望の瞳に見詰められ、エースは気圧されたように後ずさる。

「アテナに力を自覚させ、セツたちに力をつけさせ、君たちを鍛え上げるには、綱渡りが必要だった。君たちの命をかけた綱渡りだ。現実にはゲームなんかじゃない。それを一番よく知っているからこそ…… 守られているだけで、経験値が入ってレベルアップなんてできないことを、知っているからこそ」

静かな、しかし圧倒的な力を持って叩きつけられる希望の言葉に、エースはしかし怯まない。

「貴様自身には、何一つ賭けるものがない、失うものもない、そんな賭けを、我らを担保にしておいて良くも抜け抜けと！」

「失うものならある。僕は、この賭けに負ければ、この世界そのものを失っていただろう。自分の命も、君たちの命も、全てひっくり返してこの世界を。愛する者も、守るべきものも、全てだ」

「貴様っ…… 「よせ、エース！」 セツ……！？」

俺は、希望に顔を向ける。希望の目に迷いはない。初めて会った時から、コイツの目は変わらない。強い意志の籠った、揺るがない目だ。

「ありがとう」

ザワリ…… と空気が振動するのを感じた。皆が驚愕の目を向けてくるのがわかる。驚いていないのは、目の前の希望くらいのもんだ。「セツ、貴様何を…… なぜ、コイツに頭を下げている……？」

「ずっと、俺たちを護っていてくれたんだろう？ お前は」

「……………」

希望は無言。

「やっとわかった。お前が一体何者なのか。なんでここまであらゆる事を知っていながら、なんでもできるハズのお前が、終焉退治を

俺たちに託していたのか……」

「……答えを聞こう」

「出来なかったからだ。あの終焉だけは、お前じゃどうにも。例え倒しても意味がない。お前以外の誰かには出来ても、お前にだけは出来なかった。そうだろ……?」

俺は、確信を持って指摘した。

「世界の修正力」……いや、世界！」

「えっ……」

「修正力……?」

「世界……だと?」

「……」

アテナたちが、今日何度目かもわからない驚愕に身を震わせる。本当に、今日一日だけでどんどんわからなかった事実が浮き彫りになっていく。正直俺も、混乱しそうだ。が……。

「希望……どうなんだ?」

俺が、殆ど確信しながら希望に問う。希望は、しばらく黙っていたが、やがてフツ、と表情を緩める。

「……やっぱり、キミは頭が良い。良くわかったね。その通りだ」
認めた。

「セツ……どこで、そのことに……?」

「……初めは、コイツのデュエル。俺たちのデッキ構成はおるか、今の手札、リバースカード、次にドロウするカードまで知っているかのようなプレイング。この世界でもあるお前は、その気がなくとも、この世界に存在する全てを知覚している。そうだな?」

「いやまったく、その通りだ。僕が望む望まないに関わらず、僕はこの世界で起こっている全てのことを知覚している」

「もう一つ。ルインのことだ」

「……私？」

「ルインは、少なくとも1000年以上昔に、コイツと会っている。しかも、今と寸分違わぬ姿のコイツと」

「……そう」

「不老不死。そんな存在がホイホイいて溜まるか」

「だから、寿命もクソもないこの世界そのものではないか、と気付いたわけだ」

「もう一つは、さっき言った。お前がどうしても俺たちを使って終焉を倒させようとしている事実。最初は、自分が手を汚さないためとか、ゲームマスター気分だとか、そんな風にも思ってたさ。けど、希望の世界を救わんとする思いは本物に見える。だから……」

「自らが手を下せない理由があるのでは。そう考えたわけだね」

その通り。以前言っていた、世界のバランスの話。

「世界の修正力がかかればかかるほど、終焉は力を増す。お前が下手に干渉すればするほど、終焉は強く、大きくなっていく」

「その通りだ。一時的に消すことは出来るだろう。だが、所詮焼け石に水。どころかすぐにでも力を増して蘇ってくるだろう。……僕が手を下しても、どんどん状況が悪化するだけだった」

同時に、詳しい情報も、下手に与えたりすれば世界の干渉と同義となつてやつぱり終焉は力を増す。

「だから僕は、過干渉を避けた。君たちの心を操ったり、光みたいになんとかして君たちを導くようなことは、出来なかった。言葉で、な

当然、それらの情報も、俺たちが自分で気付くまでは過干渉に当た

たから漏らせない。
「僕は、あくまでそう……ゲームマスター的立ち位置で動くしかなかった。君たちを言葉で翻弄し、チェスの駒を操るがごとく心境で」

希望はアテナに目を向ける。

「すまなかつたね。今回の場合、キミに賭けるしかなかった。終焉の欠片の対であるキミには、随分と辛い想いをさせた」

「欠片の、対？」

「終焉の精霊が、終焉の端末なら、キミは僕の……世界の修正力、秩序を司る端末だった。これまで、ご苦労だった。ありがとう」

「い、いえその……私は……」

「人間で唯一、終焉の欠片に抗することができる者……アテナ。キミに、力を」

希望は、懐からカードを一枚取り出し、アテナに渡した。

「受け取るといい。キミのカードだ」

「私の……これは、私が、精霊だったときの……」

「ああ。『反魂はんこんのスピリチュア』のカードだ。これからの戦いで必要になってくるだろう。持っていないさい」

「……はい。確かに賜りました。盟主様」

「……君は人間だ。僕を主とする必要はない」

「ケジメです。今回だけ、ケジメとしてただけですよ。もうしません」

「うん。そう言われると、少し勿体なく感じるね」

「冗談交じりに言う。」

さて、と希望は俺たちを見回す。

「……僕はこれで失礼するよ。君たちも、精々僕を守るため、頑張ってくれたまえ」

「お、お前なあ……」

「はは、冗談だよ。今は、終焉のこととか、皆忘れて、さだめに付いていてやるといい。アテナとも、もう少し話すこともあるだろう」

「……ああ。そうさせてもらおうよ」

「……ああ、そうだ。希冴姫」

「？ なんですの？」

「これを」

希望は希冴姫に、なにかを渡した。

「これは……」

「」

「っ！ わかりましたわ。ありがとうございます」

「じゃあ、これで。また会おう」

希望に何かを耳打ちされた希冴姫は、一瞬顔を強張らせてから受け取ったものを大事そうに抱え、希望に頭を下げた。

「おい、また何か……」

「大丈夫ですわ。セツ様。わたくしは、彼にお礼を言わなければなりませんし」

「……そうだな。このクレイジーに関しては、我も特に言うこともない」

隣にいて、希望の言葉が聞こえていたらしいエースも、顔を顰めつつもそう答える。

「……いい加減、そのクレイジー呼ばわりはやめてくださいませんか？」

「クレイジーはクレイジーだ」

なんだか良く分からないが、エースが見逃しているなら、問題ないのだろう。希冴姫も少し調子いいみたいだし……今は。

「さだめ……」

コイツについてやろう。まずは病院にいったって、輸血だな。俺が血液型一緒だし、何よりコイツ、俺以外の血なんて嫌がりそうだから……そうだな。

「頑張った大賞だ。貧血くらい、我慢してやるか」

さだめの髪を撫でながら、俺はそんなことを呟くのだった。

第三期第二十一話「白熱!?! アイドルデュエル!」(前書き)

続けて連投です。多少改訂箇所もありますが、まあ概ね以前と変わりなしです。

第三期第二十一話「白熱!? アイドルデュエル!」

アルカナく切り札の騎士く

第三期第二十一話「白熱!? アイドルデュエル!」

十代失踪。

またしても届けられたこの知らせに、アカデミアは揺れた。

そして、追い打ちをかけるかのようにナポレオン教頭たちのレツド寮廃止作戦。

「私がない間に、そんなことになっていたんですね……」

俺はアテナに、先日のエドとのデュエルや、十代がデュエル出来なくなってしまうことを伝えた。

「わかりました。そういうことなら、心配させてしまった分、私も協力します!」

するとアテナは、勢い込んで明日香の方へ体を乗り出す。

「ということで明日香さん! 私も今日から、レツド寮に泊まり込みます! 相部屋、お願いしてもいいですか!?!」

「え、ええ私は構わないけれど……何か、不純な動機も感じるわ……」

そりゃ、ここんどこずつとアテナが俺にひつついているからだろう。周りから見れば引くくらいべつたりだった。俺としては……まあ、悪い気はもちろんしないのだが、正直、さだめに申し訳ないと言っか……戸惑っているのが現状だ。

「……しかし、俺たちも舐められたもんだな。十代がないからっ

て、レッド寮の攻略が簡単に出来るとでも思ってるのか？」

「あー……その件に関してだな」

「どうした、剣士」

「今朝方、オレのところにこんなもんが届いててな」

「えーと……これは、イエロー寮への格上げ通知？」

「……なるほど。実力のあるレッド生がいると都合が悪いからって、急遽格上げさせようってことか……」

三沢の分析に、それは少し甘い考えなんじゃないかと思う。急にイエローに格上げされたからって、レッド寮への愛着がなくなるわけでもあるまいに……。

「「納得いかん（行きません）！！」」

「おおー！？ どうしたアテナに万丈目！？」

突然怒りも露わに咆哮した二人に、俺は瞠目した。

「実力あるレッド生というなら、何故この万丈目サンダー様にその知らせが届いていないのだ！？」

「万丈目さんはともかく、セツにだってその知らせが届いていてもいいはずですよ！ というか、届いてなきゃおかしいじゃないですか！？」

「あー……」

二人とも似たような理由か……というか、帰って来てからこっち、アテナの俺リスペクトがすごい。

「いや、多分俺の場合は出席率その他が酷いことになっているからかと……」

「確かに、最近はまたさだめの看病とかで、セツ随分休んでいるからな」

「じゃあオレ様はどういうことだ！？」

「お前は……多分、おジャマトリオかと……」

まあ、おジャマトリオ使いが下手に格上げされると、他の生徒から反感が出かねないってのはあるかもしれんな……。

『んまあ〜！ オイラたちとアニキの絆を馬鹿にするのは許さない

わよ〜ん!」

『そうだそうだ〜!!!』

「ええい黙れ雑魚共!」

「とにかく、例え格上げがどうでも、オレもレッド寮廃止には反対だ。協力するぜ」

「よっし! これがオレらの、進化した結束ザウルス!」

「来るなら来なさい! クロノス臨時校長!」

と、俺たちが結束を高め合ったところで、外からギターの音色が聞こえてきた。

「この音色は……」

急いで外に出てみると、そこにはボートの上で、アロハシャツ姿でエレキギターを爪弾いている吹雪さんと、その後ろにちょこんと目を逸らし気味に俯いている凜の姿。

「兄さん!」

「凜!」

「誰ドン? あの、突き抜けたお人は」

「男の方は、年長さんだ」

「兄さん、どうしたの?」

「凜、お前まで一緒になってどうした?」

「そ、それは……その」

剣士に問われて、どうも気まずそうに身じろぎする凜。対して、吹雪さんの方は堂々としたものだ。

「お前を迎えに来た。ブルーに帰ろう。明日香」

「ええ!?!」

「その……私は、アテナ先輩を……」

「わ、私ですか!?!」

「まさか、兄さん……!!」

「そのまさかなノ〜ネ！」

声が聞こえた方に顔を向ける……と。

「ぶふっ！」

思わず噴き出した。く、クロノス臨時のウェットスーツ……凄い光景だ……。

「シニヨ〜ラ明日香。それにシニヨ〜ラアテナ。貴女たちには、ブルーのアイドル養成クラスに来ていただきますニヨ〜ネ」

「アイドル養成クラス？」

要するに、凜のような生徒を養成するためのクラスらしい。しかし、アテナも明日香もそれをきっぱりと断った。

「何故？ 可愛いアイドルになることが、そんなに嫌なのかい？」

「どうということツスカ？」

「クロノス臨時校長は、私と兄さんに、ユニットを組ませようとしているのよ」

「その……事務所の方から、アテナさんと組んでみないかって提案が……」

「わ、私ですか！？ いつの間にそんなことに……私のいない間に……」

いや、それは俺たちも初耳だった。

「デュエルアカデミアから、爽やか兄妹デュオと、小悪魔&天使アイドルデュオの誕生なノ〜ネ！」

「！……良い〜！」

「良くないわよ！」

「そ、そんなアイドルだなんて、私……」

「明日香もアテナくんも、アイドル界の金の卵だ。そうは思わないかい？ 万丈目君。セツ君」

「し、師匠……」

「いや、俺は……」

「せ、セツ。私は、その……」

アテナが不安そうにこちらを見上げている。

「……すみません吹雪さん。俺は反対です」

「セツ！」

「何故？」

「アテナは嫌がってますし、その……出来ればあんまり、アテナを衆目に晒したくもないので……」

『そつだそつだー！！』

「ん？」

突如聞こえてきた大勢の声に振り向くと、そこには大勢のレッド寮男子の姿。

「アテナ様はレッド寮の女神だ！」

「太陽だ！」

「俺たちレッド専用アイドルなんだ！」

「折角、俺たちの太陽を取り戻したのに……」

「我らが女神を奪おうと言うのか！？」

「アテナ様を欲望でギトギトに濡れた畜生共の目に触れさせてたまるか！」

……正直、お前たちに言われたくはないだろうな。まだ見ぬ視聴者も。

「皆さん……」

アテナが少し感動したように呟いているが、こいつらにそんな感動的な理由なんてないことを忘れるな。

「大体、折角アテナ様と一つ屋根の下になれるかもしれんのに、女子寮になんて戻してたまるかー！！」

『そつだそつだー！！』

「おいコラ待てや」

思わず突っ込む。ほら見るやっぱり邪な理由だった！

「よ、予想外の反対意見があったが、とにかく、俺たちは断固反対の姿勢だ」

「……結局、僕たちの意見は平行線だね。まるで夜汽車のレールだ。決して交わることはない」

「結局、私たちはデュエルでしか結論を出せないのよ」
「えと……私としても、出来ればアイドル養成クラス、認めて欲しいんです。そうすれば、お仕事で休んでも公欠にできるので……」
「すみません凛さん。私、レッド寮から離れるつもりはないんです」
最終的に、明日香VS吹雪さん。アテナVS凛のデュエルで決着をつけることと相成った。

翌日、デュエル場にて双方の意見をかけたデュエルが行われた。
先ほど行われた明日香と吹雪さんのデュエルは、無事明日香の勝利で終わった。次はアテナと凛の番だ。

「行きます。アテナ先輩。私のターン、ドロー！」
正直、さだめの傍から離れるのには抵抗があったが、ルインが看
ていてくれると言っていたので、俺はアテナの応援だ。なんでも、
「私なら、もし何かあっても応急処置ができるから、キミは彼女の方
に付いていて」だと。ホント、こういう時に限って気配り上手だよ。
ルインは。

「私は『デーモン・ソルジャー』を攻撃表示で召喚！」
『デーモン・ソルジャー』 ATK1900
「悪魔族!？」

凛のメインデッキが水属性だと言うことは、アテナにも言っている。
だから、態々悪魔族を選択した凛に驚いたのだろう。

「……一応、ここには“小悪魔リン”として立っていますので。こ
ちらを使わせていただきます。それに……」

凛はちらりとソリッドビジョンに映し出された『デーモン・ソル
ジャー』を見る。

「悪魔族の使い方については、さだめに何度も教えてもらいました。
私はもう、悪魔族だからって嫌ったりはしませんよ」

実際、凛と悪魔族デッキ自体の相性は悪くなかった。ただ、凛が

悪魔族デッキに抵抗感と言うか、拒絶していたからプレイングが甘かったり効果を理解していなかったりしただけで、そこさえ克服すれば、凜にとつて悪魔族は十分武器になる（さだめ談）。

「私はカードを一枚セットして、ターンエンドです」

「私のターン、ドロー！」

一方、アテナのデュエルを見るのは久しぶりだ。天使族デッキなのは変わっていないにしても、今どんな構成をしているのか、さっぱり聞いていない。

「私は魔法カード『打ち出の小槌』を発動します！ 手札のカードを三枚と、このカードを戻してカードを四枚ドロー！」

手札交換……いきなりしてきたってことは、初手にいつものカードがなかったのか……。

「む……私はモンスターを一体守備表示でセット。ターンエンドです」

「珍しいな」

「ああ、アテナの初手に、ヴァルハラがなかったのは初めて見たかもしれない」

剣士がポツリ、と呟いた言葉に俺も反応した。ん？ そういえば

……。

「なあ剣士、お前って今どっちを応援してるんだ？」

「は？」

俺の質問に、遠くで凜がピクつと反応するのが見えた。流石、恋する乙女は地獄耳。

「そりゃ、アテナに決まってるだろ」

ピクっ！

「あー……」

だと言つのにこの馬鹿は……。

「レッド寮潰されるわけにはいかねえしよ。アテナの方を応援するのは当然だろ？」

「あーソウダネ。当然ダネ」

遠目に見える凜は、明らかに戦意が増していた。

「私のターン！ ドロー！！」

「な、なんかすごく気合入ってますね……」

しばらくドローもしないで沈黙していたかと思うと、突然凜さんが吠えるようにカードをドローしました。な、なんとというか、鬼気迫るというか……。

「私は『デーモン・ソルジャー』をリリースして、『軍神ガープ』

を攻撃表示でアドバンス召喚します！ 効果発動！」

『軍神ガープ』 ATK2200

「っー！」

しまった！ ガープは……。

私のセットモンスター、『マシユマロン』が攻撃表示に変更される。

『マシユマロン』 ATK300

「『軍神ガープ』が表側表示で存在する限り、フィールド上のモンスターは全て表側攻撃表示となり、表示形式は変更できません。更に、手札の『クリッター』をオーブンすることで、ガープの攻撃力を300ポイントアップ！ バトル！ 『軍神ガープ』で『マシユマロン』を攻撃します！」

『軍神ガープ』 ATK2200 2500

「きゃあっ!？」

アテナLP1800

「っ……『マシユマロン』は、戦闘では破壊されません」

「はい。それでは、私はターンエンドします」

「っ私のターン！ ドロー！」

正直、余りよろしくない展開です。初手にヴァルハラや『ヘカテリス』も来なかったですし、『マシユマロン』がサンドバック状態では……。

「私は『マシユマロン』をリリースして『光神テテユス』を攻撃表示でアドバンス召喚！ バトルします！ 『光神テテユス』で『軍神ガープ』を攻撃！ 『ホーリー・サルヴェイション』！」

『光神テテユス』 ATK2400

「トラップカード『プライドの咆哮』！ ライフを200支払って、ガープの攻撃力をアップします！」

凜LP3800

『軍神ガープ』 ATK2200 2700

「テテユス!？」

テテユスがガープによって迎撃され、また私のライフが削られる。アテナLP1500

「どうです!？」

力強く宣言する凜さん。その目に宿る力に、想いに、私はハッとしました。

「……やっぱり私、調子に乗っていたみたいです」

私は、以前ユーキさんと初めてデュエルした時のことを思い出しました。

「……?」

そう、確かあの時、私は今の凜さんと同じ瞳を……恋する乙女の目をしていた筈でした。

「以前私、アカデミアで殆ど負けなしで、調子に乗っていたんです。それを、希望さんや光お姉さんに鼻っ柱を折られて……。そして今また、少し頭が冷えました。」

「!？ 城が……」

私の力の源、それが何なのか、やっと思い出しました！

「……テテユスが迎撃されたのは、予想の範囲内でした」

私にとって困ったのが、攻撃表示のまま放置された『マシユマロ
ン』。

「でも、場にモンスターがいなくなったおかげで、このカードが使
えます」

今回は、少しだけ出番が遅れましたが…… たった今、引くことが
できました。

「私はメインフェイズ2に『神の居城 ヴァルハラ』を発動しまし
た！ 効果によって、ターンに一度、天使族モンスターを特殊召
喚します！ 来て！ シャルナ！」

『アテナ』 ATK2600

私の力の源、それは間違いなく、セツへの気持ち！ セツを想う
だけで、いくらでも湧いてくるこの闘志！

『はいはい。お姉さんにお任せよん』

「私はカードを一枚セット。ターンエンドです！」

負けられません！ このデュエルに勝って、レッド寮に……セツ
の傍に！

「私のターン、ドロー！ 私は手札の『クリッター』と『クリボー』
をオープンして、ガープの攻撃力を600ポイント上昇させます！」

『軍神ガープ』 ATK2200 2800

ガープの攻撃力が『アテナ』……シャルナを上回った。

「更に『クリッター』を攻撃表示で召喚。バトルです！ 『軍神ガ
ープ』で『アテナ』に攻撃！」

『クリッター』 ATK1000

「トラップカード、『和睦の使者』！ このターン、私のモンス
ターは戦闘によっては破壊されず、ダメージも受けません！」

「くっ……カードを一枚セット。ターンエンドです」

「私のターン、ドロー！ 私は手札から速攻魔法『光神化』を発動
！ 手札の天使族モンスター一体の攻守を半減させて特殊召喚しま
す！ 私は『ジェルエンデュオ』を特殊召喚！ 更に速攻魔法『地
獄の暴走召喚』！ 攻撃力の半減した『ジェルエンデュオ』が特殊

召喚されたことで、私はデッキから二体の同名モンスターを特殊召喚します！」

『ジェルエンデュオ』 ATK1700 850

『地獄の暴走召喚』は、相手のモンスターも増やしてしまいます。でも、私の予想が正しければ……。

「う……私のデッキに同名モンスターはいません」

やっぱり。『クリッター』は制限カード。デッキには一枚しか入っていない。ガープの方はわからなかったけど、三枚積みにするようなカードとも思えなかったから、出てきても一体だと思っていた。

「そして『アテナ』の特殊効果起動！ モンスターが召喚、特殊召喚される度、相手プレイヤーに600ポイントのダメージを与えます！ 私は二回、天使族モンスターを特殊召喚しました。よって1200ダメージ！」

『天罰てきめーん！』

「きゃあっ!？」

凜LP2600

「永続魔法『生還の宝札』発動！ 更に、攻撃力の半減した『ジェルエンデュオ』を『アテナ』の効果でリリースし、墓地の『光神テュス』を攻撃表示で特殊召喚！ 『アテナ』の効果で600ダメージ！」

『てりゃー!』

「うくっ……」

凜LP2000

「そして、『生還の宝札』の効果を発動！ デッキからカードを一枚ドロ―！ 『光神テュス』の効果で、ドロ―した『紫光の宣告者』をオープン！ ドロ―！ 『緑光の宣告者』ドロ―！ 『オネスト』ドロ―！ 『ムドラ』ドロ―！ 『虚無の統括者』ドロ―！ 『シャインエンジェル』ドロ―!……!」

ちらり、と今ドロ―したカードを見る。

まだです。このカードは……“私自身”は、味方とのデュエルで使うようなカードじゃありません！

「私は『ジェルエンデュオ』を二体分のリリースとして、手札から『虚無の統括者』を攻撃表示でアドバンス召喚！『アテナ』の効果でダメージ！」

『虚無の統括者』 ATK2500

『それぞれまだまだ行くわよん！』

「っ……！」

凜LP1400

「バトルです！『アテナ』で『軍神ガープ』を攻撃！『デイヴァイン・クロス』！」

『ちよーち痛いわよ？』

「更に手札から『オネスト』の効果を発動します！」

「つく、手札から『クリボー』を捨ててダメージを無効化します！」

「続いて『虚無の統括者』で『クリッター』を攻撃！『トリニティ

ー・ヴァニツシュ』！」

「トラップカード『ガード・ブロック』！ダメージを無効化してカードを……！」

「させません！手札から『シャインエンジェル』と『紫光の宣告者』を捨てて、トラップの発動と効果を無効にします！」

「そんな……」

「すみません凜さん……私も、そうそう簡単には負けられないんです！」

少しでも、セツの傍にいたために。レッド寮で過ごす時間を、日々を……、

「無くしたくないんです！」

『虚無の統括者』の放った極光が、『クリッター』をその名の通り消滅します。その光の奔流は、『クリッター』を消滅させるだけでは飽き足らず、凜さんを包み込んで行く。

「きゃああああっ!?!」

「……はあ、負けました」

「ごめんなさい。大丈夫ですか？」

「はい。何ともありません。でも……」

「でも？」

「……悔しかったな」

「え？」

「デュエルに負けたこともそうですけど……アテナ先輩は、もう好きな人と想いが通じちゃってるんですもん。それが、悔しい。私なんて、まだまだですもん」

「あ、あはは……かなり、紆余曲折ありましたけど……」

「想いは通じた……ってことでいいんですかね？ まだ、ちょっと怪しい気がします。というか、何より私自身が今まで逃げちゃってましたしね。さだめさんのこともありますし、まだ正式に、ってわけにはいきません。」

「……それに、なんかどうも剣士先輩……ぶつぶつ」

「あの……？」

「アテナ先輩！」

「は、はい!？」

「負けませんかからね！」

「へ？ え、えっと……何が……」

「アテナ先輩は、もうガチな想い人いるんだし、いくらなんでも大丈夫だとは思っただけど……」

わ、私にはさっぱり何のことやら……。でも……。

「え、えっと凜さん」

「ぶつぶつ……は、はい？」

「その、敬語なんですけど、やめにしませんか？」

「え？」

「もうお友達ですし、それに……」

くすり、と笑みが漏れる。確か、さだめさんにも同じようなこと言ったんですよ。

「私の方が歳下なんですから、敬語で話されるのは、ちょっと違和感があるんです」

まあ、精神年齢というか、転生前まで含めれば歳上どころじゃありませんけどね私。

「……………え？ 歳下？」

「……………ええ。そうですよ？」

……………なんでしょう。この辺のやり取りも、さだめさんとした気がします。

「え？ なに？ ギャグ？」

……………ぷっつーん。

「ぎゃ、ギャグとはなんですか！？ 私はそこまで老けて見えますか！？」

「ひゃあっ！？ い、いえ！ じゃなくてううん！ そ、そういうことじゃなくて、なんて言うかその、お、大人びた容姿というか雰囲気と言うかその……………」

「精神年齢はともかく、肉体年齢はまだ十三歳なんです！ ピッチピチですよ！ 凜さんなんかよりもずっと若いんですからね！」

「そ、その言い方だとむしろ私の方が老けてるみたいじゃない！ や、やめてよ私だってまだ十五歳なんだから！」

「ああもう！ 何でみなさん私を同年代扱いするんですか私は一番歳下なのにい！」

「そう見えないんだからしょうがないじゃない！ むしろ羨ましいよ何そのおっぱい！」

「は、発育が良くて悪いですか！？」

「さだめや私からすれば敵だよ敵！」

「目の敵にするならルインさんにしてください！ 大体、さだめさんからすれば凜さんクラスだって十二分に敵です！」

「ルインさんはもう成長しないけど、アテナはこれからいくらでも成長する年齢じゃない！ それが胸囲……じゃなくて脅威なの！」

「……どうしてこう、必ず言い争いになるんでしょうか。もしかして私、友達作るの下手なんでしょうか……うう。」

「……まーた言い争ってるな」

「いいのか？ 止めなくて」

「いいっていいって。どうせ、しばらくすれば仲良く笑顔だよ。さだめ相手でもそうだったんだ。凜くらい余裕余裕」

「……ま、オレ相手でも躊躇いなく友達になるような奴だしな」

「なんだ？ もしかしてアテナに未練でもあるか？ 渡さないぞ」

「うっせえな。ねえよそんなもん。盗るかアホ」

「冗談交じりにそんな会話を。少し顔を赤くしている辺り、やっぱりちよつとは惚れてたっぽいな。コイツ。」

「ま、お前は凜についていな。あの子も、剣士を頼りにしてるっぽいし」

「……なんでだかな。別に特別何かしたわけじゃねえんだが」

「それ言ったら、俺だってアテナに何かしたわけじゃない。気付いたら今みたいになってたんだ。そういうもんだよ。恋愛なんて」

とかなんとか。偉そうに言っているが、俺だってそんなもん全然わかつちやいない。どうなったら恋なのか、どうなったら愛なのか、好きって言葉の違いすらまともにはわかってない馬鹿だ。けど、これだけは言えるな。

「ちゃんと見てやれよ。あの娘が思いつめてからじゃ、遅いんだから」

俺は、確かに何とかなった。でもそれは、いくつもの奇跡的な偶

然に助けられたものだし、何よりそうなる前に幸せになってしまっ方がいいに決まっている。

「……ああ。頭じゃ入れとくさ」

「……それでいい」

さて、まずはアテナの引っ越し準備をしなくちゃな。

「手伝えよ」

「わあってるよ」

俺たちは、案の定口論から笑い声に変わった少女たちに向けて足を動かすのだった。

第三期第二十一話「白熱!? アイドルデュエル!」(後書き)

こんにちは。

とりあえず、これで次回から修学旅行編に入ることができます。

元々ユーキちゃん回にする予定だったのが、この話との兼ね合いから急遽アテナ回に。しかもその代わりと書いたユーキちゃん回が妙に長くなったので、三期の話数が延びました。修学旅行も、まさか一話では終わらないでしょうから、二話、三話と……おや、凄まじい話数になりそうだ。

それでは、悠でした!

第三期第二十二話「攫われたアイドル」（前書き）

こんにちは。

修学旅行編です。改訂前ではスルーしたこのイベントですが、読者様方からの要望や、悠自身やっておきたいこともあったので、やることにしました。

タイトルからわかるかもしれませんが、最初はその二人です。一番修学旅行をプッシュしていた方のキャラでもあるので、しっかり活躍させたいところです。

第三期第二十二話「攫われたアイドル」

アルカナく切り札の騎士く

第三期第二十二話「攫われたアイドル 前編」

突然だが、アカデミアにおける修学旅行というのは全学年通して三年に一度だけ行われる。というのも、毎年毎年予算を組むのが厳しかったり、引率する教師に空きがなかったりと、妙にセコイ事情だったりするのだが……。ま、というわけで……。

「良かったな剣士。凜とも一緒だぞ」

「そこでオレに振るのか!？」

仕方ないだろう。本来なら飛び上がって喜ぶであろうさだめは寝込んだままだし……。本当なら付いてやりたいんだが、そうするとアテナも気を使って一緒に休んでしまうだろうし、何よりアテナと俺はクロノス先生から出席を厳命されている。曰く、出席日数を少しでも稼ぐくニヨ! だと。

「希冴姫も具合が良くならないし……。二人の看病でルインも行けないしな」

そのことが決まってから、ルインは事あるごとに「私、最近看病しかしていない」と愚痴っているのだが。

「十代は復帰して……。けど今度は明日香や万丈目がおかしくなってるしなあ……」

十代は、失踪からしばらくして復帰した。失踪しているときに何があったのか、ネオスとネオスペーションという新たな力を携えて

しかし、それからすぐに万丈目と明日香が、何やら光の結社がどうこうと言いだし、真っ白な制服を着て何やらおかしくなり始めた。しかも、どうやらその不可思議な現象は今も尚ブルー寮を中心に広がり続けているらしい。

「で、どうするよ。目的地は童実野町に決まったみたいだが……」

「そりゃ、俺はアテナと回るから、お前は凜と回ればいいだろう」

「……当たり前のように二人きりにしてんじゃねえよ。皆で回ればいいだろうが」

「え、修学旅行ってデートイベントじゃないのか」

アテナや、以前はさだめからもしつこくそう聞かされているんだが……。

「違えよ！ “学”を“修める”旅行だよ！ お前も、アテナが帰って来てからなんか変だぞ！」

「そりゃまあ、多少は自覚したからな。何を、とは言わないが」

言わなくても、想像は付くだろうが。

「それに、こんな時にこんなことを言うのは不謹慎だが、滅多にない機会だしな。アテナと二人きりなんて」

アカデミア入学時は兎も角、最近はさだめやルインをはじめとして周囲に人が増え、アテナと過ごす時間は減ってしまった。もちろん、今は今で賑やかで楽しいし、さだめなんかは隣に居るのが当たり前だったので、俺としては不満などない。

「けど、アテナとしては、やっぱり寂しいと思うことだってあるだろ」

アテナは特に、俺の周りに誰もいない時期に俺と出会ったのだから、その気持ちは強いだろう。

「セツ……」

「というか、アテナを不安にさせると暴走しそうだし」

部屋に連れ込まれたり押し倒されたり、例を上げるとキリがない。

「定期的にガス抜きしないと俺の貞操が……」

「急に安っぽくなったぞ、おい」

それまで神妙な顔をしていた剣士が、めっちゃ白けた目で俺を見る。まあ、それは冗談にしても、今アテナとどうこう、というのは出来ないのも事実だ。

「失うのが貞操だけならいいが、命までかかっているととなるとな」

「さだめはもちろん、今となってはユーキちゃんのこともある。下手は打てない。」

「だからさ、お前はそーゆーしがらみが出来ない内に楽しんどけ」

「一応言っとくが、別にオレは……」

「まだ好きになったわけじゃない？」

「……ああ」

「いいんだよ。それでも。憎からず思ってるなら、とりあえずデートしとけ」

「いいんかね。そんなんで。アイツだって一応アイドルだろうに」

確かに、俺のようなことはないにしろ、凜だって色々としがらみを抱えている。

「……ま、簡単な恋愛なんてそうないか」

「お前が言つと重みがあるな」

「良くも悪くも、それに振り回されてここまで来たんだ。きっとこれからも、振り回されるんだろうな」

勿論、俺が優柔不断なのが悪いのも承知の上だが。

「それに、どうせ誘われてるんだろ？ 凜に」

「……一応な」

「だったら、迷うことないだろ」

「……どうすりゃいいかわかんねえんだよ」

不機嫌そうな、拗ねたような表情で目を逸らす剣士。

「昔から……嫌われてばかりだったしよ。アテナの時でさえどうしていいかわからなくて……勘違いしちまつたくらいだ」

初めて剣士と出会った時のことを思い出す。アテナと親しい様子を見せた俺に対し、容姿と合わせて何処のチンピラが因縁をつけてきたのかと思ったくらいだ。

「オレにだって、わかってるよ……」

凜が、剣士に想いを寄せていること。言葉に出すまでもなく、態度でわかる。剣士は鋭い方じゃないが……それでもあからさまだろう。凜とアテナは多少似ている。主に、物怖じしない性格や、積極性などが。

「敵意に敵意を返すことは散々してきた。けど……好意への返し方なんて、オレは知らねえんだ」

「剣士……」

俺も、まあそれはわからなくもない。痛みと恐怖を伴う好意しか知らなかった俺が、アテナの純粋な好意でどれほど戸惑ったか。だが、剣士の場合はそもそも好意すら知らなかったのだ。

「じゃあ、尚更だ。今回の修学旅行で、少しでも慣れておけ。友達と一緒に回る、くらいの感覚でさ」

「だからっ！ 友達と街を回ったりする経験からしてねえんだよ！」

「……しっかりエスコートして貰って来い」

「ぐ……ダメエ」

女の子にデートのエスコートを任せる、という男としては相当に情けないことをニヤついた顔で宣言された剣士は、かなり恥ずかしそうな顔で俺を睨みつけてきたのだった。

そして、修学旅行当日。

「それじゃあ、私たちは行きますね」

「しっかりエスコートされて来いよ」

「るせえ！ 余計な御世話だ！」

「凜さん、頑張ってくださいね」

「うん！ お互いにね」

定期船に乗り込み、童実野町に到着した俺たちは、別行動をすると言い残して船着き場を去って行った光の結社と斎王琢磨を見送り、

自由行動と言い残して引率を放棄したナポレオン、クロノス両教諭に呆れつつも二手に分かれることにした。

「しかし……」

「どうしたんですか？ セツ」

「いや、光の結社とかいう集団なんだが……」

「ああ……変な人たちですよ。明日香さん、どうしたんでしょう」

「万丈目もな。あれ、明らかにいつもの二人と違うぞ」

洗脳された、といった感じた。正直、野放しにしておくのはマズイ気がする。

「ブルーの生徒さんを中心に、どんどん制服が白く染まっています。いるみたいです。私は、レッドに居候させて貰っているせいか、特に干渉されていませんけど……」

「関わるべきか、関わらないべきか……正直、さだめたちのこともある現状、余計なトラブルは避けたいところなんだけどな」

「ですね。ただ、このまま放っておくのも……」

アテナと二人、頭を悩ませる。

「……ああ、やめたやめた。折角の修学旅行で、二人して頭抱えるなんてやってられん。今は忘れよう」

「そうですね。臨機応変に、ということ」

要するに行き当たりばったりなわけだが、それが一番現実的だろう。

「じゃあ、どこから見て回る？ 正直、俺は童実野町にはあまり詳

しくないんだが……」

デュエルキング

「そうですね……決闘王武藤遊戯の生まれ育った街ということで、彼のデュエルしたところなんかは観光名所になっています。他には、バトルシテイ関連の……って、殆ど街中が観光名所みたいなものですよ。決闘王はこの街のあらゆる場所でデュエルしていますしね」

それだけ、武藤遊戯が周囲に与えた影響は計り知れないってことだな。

「ただ、そう言った名所は多いんですけど、二人で回って面白いと

ころは……」

「海馬ランドくらい、か？」

「はい。あ、そういえば希望さんから、フリーパス貰ってましたよね？ あれ、どうしました？」

「ああ、あれか……」

一応、持ってきてはいる。いるが……。

「どうせなら、皆で行きたかったな」

「それは……でも、年間フリーパスチケットですし、今使っても今年中なら」

「そうだな。そうするか」

それに、実は武藤遊戯の名所巡りもしてみたい。何しろ、俺は何だかんだで武藤遊戯の使ったカードの精霊を所有している。希牙姫たち三銃士やヴァンダルギオン。どちらも武藤遊戯が実際に使ったモンスターだ。

「後継者、なんて自惚れるつもりはないが……」

『ふん、奴のことが……』

「エースさん!？」

「お前、ついて来てたのか!？」

『当たり前だろう。我は貴様の護衛だ。ついて行かないでどうする』

「ああ、そりゃそうだが……」

『心配するな。別に貴様らの逢引きを邪魔はせん』

「本当でしょうか……」

エースの言葉に、アテナがジト〜とした目を向ける。

「まあまあ。それで、エース。お前も決闘王のこと、何か知っているのか？」

『……奴は嫌いだ』

「えっ?」

「嫌い?」

エースから発せられた思わぬ言葉に、俺とアテナは瞠目した。

『奴は、確かにデュエリストとして優れてはいたのだろう。希牙姫

「私たちを、見事に使いこなし、あ奴らに幾多の勝利を齎してきた」

「じゃあ、なんで……？」

「……奴は、精霊に慕われ、また精霊を感じられる優れた資質を持ちながら、我ら精霊を真の意味で見えていない。奴が見つめているのは、勝利のみだった」

エースの言葉は苦渋に満ちていた。なるほど、確かに俺の知っている武藤遊戯のデュエルでは、いつも希沔姫たちは神への供物だった。団員を特別大切に想っているエースからすれば、それは許し難いことなのだろう。

『我とて、最早そのことに疑問は挟まぬ。我らの意義、我らのプライド。勝利という最善へと至るための礎。今ならば、あの男のプレイングは正に“王”たる者の為すべきであったと認めることもできる。だが……』

一度付いてしまった苦手意識は、そう簡単には払拭出来ないのだろう。エースは苦々しげに首を振る。

『まあ、いい。私の個人的好悪など、今となっては些細なことだ。邪魔をしたな。我は一端消えるから……っ！？』

「っ！ セツ！」

突然、エースとアテナが身体を強張らせた。

「どうした？ アテナ、エース」

そこで、俺も気が付いた。

「空が……」

それまで晴れ渡っていた空が、突然暗雲に吞まれ始めた。暗雲は通常あり得ない速度で空を覆い尽くし、周囲にはピリピリとした緊張感が漂い始めた。

「セツ……」

「アテナ、どうしたんだ？ 一体、何が起こっている？」

「結果だ」

エースが実体化し、腰の剣に手をかける。

「結果？」

「そつだ。見る」

エースが顎をしゃくって示す方へと顔を向けると、そこには童実野町を囲むように佇む巨大な影。

「あれは……帝か!？」

元居た世界では、上級モンスターの中でも特に重宝されているモンスターだ。その数は四体。

「雷帝、氷帝、炎帝、地帝の初期四帝か……。どうということだ？」

帝モンスターは、此方の世界ではどうにも手に入らなかった。さだめも、『邪帝ガイウス』を入りたいのに手に入らないと嘆いていたのを覚えている。

「奴らが楔となつて、この街を結界で覆っている。奴らをどうにかせんと、我ら精霊はこの街から出ることが出来ん」

「多分、私も影響を受けます。セツの力なら、もしかしたら出ることが出来るかもしれませんが……」

「……どつちにしろ、放つておくのは得策じゃなさそつだな」

俺は直ぐに、十代に連絡を取つた。

『セツか!？ 丁度いいや、手伝つてくれ!』

「どうした？ 結界のことで何かあつたか？」

『いや、そうじゃなくて、いやそれもそうなんだけど、それより双六じいさんが居なくなつちまつたんだよ!』

「双六じいさん？」

確か、武藤遊戯の祖父の……。

『ああ、オレたち、双六じいさんに街を案内して貰つてただけどさ。途中で姿が見えなくなつちまつて……手分けして探してた、翔と剣山とも連絡が取れなくなつちまつたんだよ』

「……わかつた。そつちは俺たちも探してみる。十代、お前の精霊から聞いているかもしれないが、この結界を張つた元凶が何処かに居る筈だ。そつちの方も、並行して進めよう」

『わかつた! 気をつけるよ』

「お前もな」

そこまで話して、俺は剣士の方にも連絡を入れる。なるべく邪魔したくはなかったが、緊急事態だし、アイツもこの事態に気付いているだろう。

「剣士、俺だ。ちょっとばかり問題が発生した。お前も把握してるか？」

『ああ！ だが悪い！ 今ちょっと手が離せねえ！』

「どうした？ 何があった？」

『凜の奴が、ヘンな男に攫われちまった！ クソツ！ オレのミスだ！』

「なに！？」

凜が？

『凜の奴はオレが絶対取り戻す！ こんなことで、失ってたまるかよ……！』

「……わかった。気をつけるよ。お前の実力は知ってるが……」

『当たり前だ！ セツ、お前こそ気をつける。オレみたいに、無様に奪われるんじゃないぞ！』

「わかってる。アテナは絶対守り通す」

『それでいい。こっちは、オレが絶対に責任持って取り返す！』

そこまでで、剣士の電話は途切れた。

「セツ」

「凜が攫われたらしい。今、剣士が取り戻すために向かっている」

「そんな！？」

「チツ、下種が……！」

「向こうは剣士に任せる。俺たちは、この結界の原因を探そう。アテナ、俺から絶対に離れるなよ」

「はい。信じてます」

信じられたら、応えるしかない。俺はエースと頷きあい、走り出した。

「ちくしょう……！」

オレは、ギリツ、と音がなるほど歯を食いしばった。

一瞬の油断だった。突然曇り始めた空に動揺し、一瞬隣に居た凧から目を離した。その隙に、凧は何者かに連れ攫われた。

「畜生！」

気を失っているらしい凧を抱えた男は、一人を抱えているとは思えない程の速度で路地をするすると駆ける。地理にも精通しているらしく、スピードでは若干上回っているが、オレは中々奴に追いつけない。

幾つかの路地裏を通り、不意に視界が開けた。

「凧！」

そこは、丁度オレたちが童実野町に来た時に使った埠頭だった。

凧の奴を誘拐した男は、そこでオレを待ちかまえていた。

「中々しぶといな、お前？」

ニヤニヤと、無様に凧を奪われたオレを嘲笑する表情に、オレはまた歯を食いしばる。

「テメエ……ソイツを放せ！」

そう言つて聞かないことはわかっていたが、それでも言わないわけにはいかなかった。

「ハン、そう言われて素直に放す馬鹿がいるかよ。コイツは大事な人質だ」

「テメエ……！」

「しかし……水原凧、だったか。アイドルっつーだけあって、キレイな顔してんなあ？ お前の女か？ ああ？」

凧を肩に担いだ奴は、凧の顔を覗き込みながら、嫌らしい笑みを浮かべた。

「いい御身分だねえ。天下のアイドルと修学旅行デートか？ 俺もあやかりたいもんだ。ちよつと分けてくんねえ？」

「ざけんな……っ」

「おお？ なに？ 独占欲？ ちっちゃいねえ……女なんて、俺らの間じゃ共有財産だぜ？」

「っ……………！」
睨む。目つきが悪いと散々言われ、疎ましく思い続けたその目で、男を睨みつける。しかし、男は涼しい顔。

「おお怖い怖い。へへっ、しかし見れば見るほどキレイな女だ。髪もこんなにさらっさら」

男は、凜の背中まである黒髪をその手で梳く。

「……………よ」

「あん？」

「……………せよ」

「ああん？ 聞こえねえなあ。何か言ったか？」

「手、離せよ……………！」

「はあ？」

「手を、離せつつつてんだ……………！」

湧き上がる怒りに任せて、感情に任せて言葉を紡ぐ。

「ソイツは……………」

オレは、アイツをどう思ってるか、まだ知らない。だが……………。

「ソイツは、テメエが触れていい女じゃ、ねえんだよ……………！」

それだけは、確かだ。

「だから……………」

未だかつて、出したことのないほど低い、低い声が口から洩れる。

「手、離せよ……………！」

奴の濁った眼を、あらん限りの力で睨みつける。

「離して欲しけりゃ……………」

奴は、それでも濁った眼のまま、その手のデュエルディスクを構えた。

「俺と、デュエルするんだな。この、光丸様とな！」

「望むところだ……………！ 下種野郎……………！」

足下に用意されていた、デュエルディスクを装着する。

「戦野剣士……推して参る！」
絶対に勝つ。その覚悟と共に、そう吠えた。

第三期第二十二話「攫われたアイドル」（後書き）

こんにちは。

修学旅行といえば、あの四帝事件ですね。というわけで、ありがちではあるでしょうが、あの時に使われていない残りの四帝でアルカナの修学旅行は構成していきたいと思います。剣士の相手は……まあ、名前からわかりますわな。使うデッキのタイプも大体分かるかと。ただ、そこまで単純にはしません。

タッグフォースをやっていて、悠はネットの攻略ウィキを参照しているのですが……そのユーキちゃんの欄に書かれたことを見て、思わず笑いました。「欠点を挙げるとすれば、欠点がなさ過ぎてここに書くことが殆どなく、手がかからないゆえ印象に残りにくいのが欠点」……確かに！　っていうか結構べた褒めです。ユーキちゃん。ちなみに、同じウィキにはこうも書かれていました。「初心者にはカードの少ない序盤に彼女に教えを請うつもりで組んでみるのも面白いかもしれない。教師らしく序盤のデュエルを優しく導いてくれるだろう」とも。……大丈夫！　アルカナの読者さんたちはユーキちゃんへの印象を強く持つてくれたハズだから！　教えは請うたかもしれませんが。まず真っ先にユーキちゃんをクリアして、その難易度の低さに愕然とした作者。

さてさて、年内更新は、これで最後かな？　もしかしたら、筆が乗って更新するかもしれませんが、明日は夜にちよつと用事があるので難しいかも。

それではみなさん、良いお年を！　悠でした！

第三期第二十三話「翼に……」（前書き）

遅くなりました。予想以上に……いえ、内容を見てもらってか
らの方がいいでしょうね。とりあえず、剣士のデュエルです。

第三期第二十三話「翼に……」

アルカナく切り札の騎士く

第三期第二十三話「翼に……」

「戦野剣士……推して参る！」

光丸と名乗った下種野郎を叩きのめすため、オレはデュエルデイスクをその手に構えた。

「おおつと、ちよい待ちな」

「なんだと？」

「お前の相手は、俺一人じゃねえ」

光丸がそう言った瞬間、光丸の隣に風が渦を巻く。

「この風丸も、その決闘デュエルに参加させていただこう」

切れ長の目と、逆立てた長髪が印象的な風丸は、そう言って光丸に近づく。

「だが……その前に、その少女は離してやるといい」

「ああ？ なに馬鹿言ってるんだ」

「娘を抱えて決闘デュエルに臨むつもりか？ それとも、娘を盾に敗北を迫るか？ 私は、貴様デュエルが決闘前にどんな卑劣を働こうが関知せぬ。だが、決闘デュエルに限ってはその卑劣さを抑えよ。見苦しいぞ」

「チツ。マジメなヤローだ」

光丸の野郎は、ブツクサ言いつつ風丸の言葉通り凜をその場にする。風丸はそれを確認した後、オレに顔を向けてきた。

「戦野剣士」

「……なんだよ」

「そのまま逃げられるわけには行かぬ故、少女を返すことは出来ぬ。しかし、正々堂々決闘に臨むのであれば、私の矜持に賭けて、決して傷つけぬと誓おう」

「……どういうつもりだ」

下種の光丸とは全く違う態度に、訝しげな視線を向ける。

「勘違いはするな。私とて、所詮はこの光丸と同じ。人質を取り、徒党を組まねば決闘に臨めぬ下種に過ぎん。だが……」

風丸はそこまで言うを目を伏せ、無言でデュエルディスクを構えた。

「……いや、よそう。どれだけ言葉を重ねようと、私が下種であることに変わりはない」

「とつとと始めようぜ。ルールは変則タッグ。俺たちのフィールドはそれぞれ独立している。テムエへのハンデはライフ8000。充分だろ？」

口を挟んできた光丸に、オレは顔を顰める。

「……何でもいい。さっさとやるぞ」

「ははっ、勇ましいねえ……んじゃあ行くぜ！」

「デュエル！」

「先攻は俺、ドローだ！俺はマジックカード『おろかな埋葬』を発動！デッキから『光帝クライス』を墓地に送るぜ！」

「光帝？」

聞き覚えのないカード名に、訝しげに眉をひそめる。

「へへ。コイツが俺のエースモンスターだ。見せてやるぜ色男。俺はカードを一枚セット。そしてマジックカード『死者蘇生』！」

「なにっ!？」

「見せてやるぜ!『光帝クライス』を特殊召喚！」

『光帝クライス』 ATK2400

「クライスの効果発動! このカードの召喚・特殊召喚に成功した時、フィールド上に存在するカードを二枚まで破壊する!」

「二枚……？　だが、オレの場にカードは……」

「誰がテメエのカードを破壊するつつたよ！？　俺が破壊するのは……今俺がセットしたカードだ！」

「なにっ！？」

自分で伏せたカードを破壊する？　破壊されることで発動するカードか！

「俺が破壊したのは『呪われた棺』！　コイツはトラップカードだが、発動条件さえ満たせばセットしたそのターンでも発動するこ
とが出来る！」

「チツ……！」

確か、『呪われた棺』の効果は……。

「テメエは自分のモンスターか、手札をランダムに選択して一枚捨てる。だが、テメエの場にモンスターはいねえ。よってテメエは必然的に手札を捨てる方を選択する！」

「仕方ない……」

先攻ターン目じゃ、アテナでもなきやカウンターすることはできねえ。

「そして、クライスにはもう一つ効果がある！　クライスの効果でカードを破壊されたプレイヤーは、その枚数分、デッキからカードをドローする！」

「そっというコンボかよ……」

自らカードを破壊することで、ドローされるというデメリットをメリットに変換するのがアイツのデッキコンセプトか。

「さあ、手札を捨てな！」

「わかってる」

いきなりアドバンテージに差が付いた。思ったより、面倒だな……。

「俺はモンスターを一体セットしてターンエンドだ！」

「オレのターン！」

チラリと光丸の隣で沈黙を保つ風丸を見る。アイツ、一体……。

「なんだ？ ビビってんのか？ さつさとプレイしやがれ！」

「……まあいい。オレは墓地から『不死武士』を特殊召喚」

『不死武士』DEF600

「なににい！？ まさか、さっきの『呪われた棺』の効果で……」

「そういうこつた。残念だったな。思惑が外れて」

「ちっ……」

まあ、かなりラッキーだったな。五分の一で落ちてくれるとは。

「更に、オレは『マツシブ・ウオリアー』を守備表示で召喚。カードを一枚セットし、ターンエンドだ」

『マツシブ・ウオリアー』DEF1200

とはいえ、手札に上級モンスターはいない。仕方なく、オレは防御を固める。

「……私の番だ」

あくまでも静かに、風丸はカードをドローする。

「私は『有翼賢者ファルコス』を攻撃表示で召喚。戦闘を行う」

『有翼賢者ファルコス』ATK1700

ファルコスか……破壊した攻撃表示モンスターを、デッキトップに戻すモンスター。だが、オレのモンスターはどちらも守備表示。

戦闘破壊はされても、デッキトップに戻されることはない。

「私は有翼賢者で『不死武士』を攻撃する」

「くっ！？ だが『不死武士』は死なねえ！ 次のオレのターンに、再び戻ってくる！」

「それはどうかな？」

「なにっ!?!」

「私は手札より『D・D・クロウ』の効果を発動する。お前の墓地の『不死武士』を取り除く」

「マジかよ……」

「更に、札を三枚伏せ、終了する」

「ちっ……オレのターン、ドロー！」

よし。コイツだ。

「オレは『マツシブ・ウオリアー』をリリースし、手札から『無敗將軍フリード』をアドバンス召喚する！」

『無敗將軍フリード』 ATK2300

「はん！ たかだか攻撃力2300じゃ、俺のクライスには敵わねえな！」

「馬鹿が。戦士には、それぞれに相応しい得物つてもんがある！」

オレは手札から装備魔法『神剣 フェニックスブレード』をフリードに装備！ 攻撃力は300ポイントアップだ！」

『無敗將軍フリード』 ATK2300 2600

「クライスの攻撃力を上回りやがった！？」

「バトル！ フリードで『光帝クライス』を攻撃！」

「ちっ！」

「いけるか！？」

「させん。私は伏せ札『鳳翼の爆風』を発動。手札を一枚捨てることで、無敗將軍を山札の一番上に戻す」

「デッキトップに！？」

ちっ。ファルコスの段階でその予想はあったが……下手打ったぜ。

「へ、へへ。馬鹿はどっちだ。結局テメエのフィールドはガラ空きじゃねえか」

「……オレはカードを一枚セット。ターンエンドだ」

「俺のターン！ ドローだ！」

風丸に守られておいて調子に乗る光丸が、デッキからカードをドロウする。

「俺はセットされたモンスターをリリースして二体目の『光帝クライス』を攻撃表示で召喚だ！ 効果発動！」

二体目だと？ 今度は何を……。

「俺が破壊するのは風丸の伏せカード！」

「……私はその効果に連鎖発動し、二枚の『八汰烏の骸』を発動する」

「そういうことか……！」

やられた。コイツらのデッキは元々タッグ用。風丸が手札を消費して、カードを除去、メインでデュエルを進め、光丸はクライスの効果で手札を補充する。コイツは……骨が折れそうだ。

「逆順処理により、まずは『八汰鳥の骸』二枚の効果で札を引く。そして、光帝の効果により破壊され、更に二枚を引かせてもらう」

「手札が一気にゼロから四枚に……くそ」

しかも、フィールドには攻撃力2400の光帝が二体。俺のフィールドにモンスターはいない。

「へっ。安心しな。クライスは召喚・特殊召喚されたターンに攻撃することは出来ねえ。まあ、当然……」

光丸の場の、最初に召喚されたクライスが動き出す。

「こっちは動けるぜ？」

「くっ!？」

「バトルだ! クライスで、プレイヤーにダイレクトアタック! フラッシュ・ブレイク!」

「ぐあああっ!？」

剣士LP5600

「はははっ! モロだ! まともに受けやがった!」

攻撃が通ったことで、光丸の馬鹿は散々はしゃいでいる。

「……今の内に、いい気になっておけ」

「なんだと？」

「すぐ、後悔する」

「言ってる! 俺はこれでターンエンドだ!」

「その前に、オレはリバーズカード『トウルース・リインフォース』を発動。デッキから『デュアル・ソルジャー』を特殊召喚する」

『デュアル・ソルジャー』 ATK500

「ハッ! そんな雑魚モンスターで何が出来る!？」

「今にわかる。オレのターン、ドロ! オレは手札からマジックカード『天使の施し』を発動! デッキからカードを三枚ドロし、

二枚捨てる!」

よし。これでいい。

「オレは手札から装備魔法『スーペルヴィス』を発動！『デュアル・ソルジャー』^{デュアル}に装備し、デュアル状態にする」

「ほう……二重か」

「バトル！『デュアル・ソルジャー』で『有翼賢者ファルコス』を攻撃！」

「血迷ったか！？ テメエから自爆してやがる！」

「トラップカード『デュアル・ブースター』！ こいつは発動後装備カードとなり、フィールド上のデュアルモンスター一体に装備。攻撃力を700ポイントアップさせる！」

『デュアル・ソルジャー』 ATK500 1200

『デュアル・ソルジャー』の背にブースターが装備され、その勢いが増す。しかし、それでもファルコスの攻撃力には及ばず、弾き返される。

剣士LP5100

「くっ……この瞬間『デュアル・ソルジャー』の効果発動！ このモンスターは一ターンに一度戦闘では破壊されず、自分から攻撃した場合、デッキからレベル4以下のデュアルモンスターを一体特殊召喚する！ オレは『エヴォルテクターシュバリエ』を攻撃表示で召喚する」

『エヴォルテクターシュバリエ』 ATK1900

「なにっ!？」

「肉を切らせて骨を断つ……それが、お前の兵法か」

「兵法の一つ、っただけだ。兵法なんてのは千変万化。その時々で臨機応変が基本だろう」

「フッ……確かにな」

「オレのバトルフェイズはまだ終了していない！『エヴォルテクターシュバリエ』で『有翼賢者ファルコス』を攻撃！」

「ぬぐっ……」

風丸LP3800

「更に、メインフェイズ2に移行！『エヴォルテクターシュバリエデュアル』を二重召喚！ 効果発動！」

シュバリエが、その身に激しい炎を纏う。

「シュバリエの効果！ オレのフィールド上に存在する装備魔法一枚を墓地に送ることで、フィールド上に存在するカード一枚を破壊する！ オレは『スーペルヴィス』を墓地に送り、『光帝クライス』を破壊する！『壊刃炎霸斬』！」

「なにいつ！？ うおっ！？」

『エヴォルテクターシュバリエ』のサーベルから奔った炎が、光帝を焼き尽くす。

「クソッ！ だが、俺にはもう一体クライスが……」

「更に墓地に送られた『スーペルヴィス』の効果発動！ 墓地から『フェニックス・ギア・フリード』を蘇生させる！ 来い！ ネイキッド！」

『天使の施し』で捨てていた、ネイキッドを蘇生させる。

『今の我はフェニックスだが……まあよかろう。下種な漢に天罰を下すのは、我とて望むところであるし……何より、マスターが漢を見せたのだ。我も本気を出さねばなるまい』

「……余計な茶々は要らねえ。とつと構えやがれ
『うむ』」

「まだまだ！ 手札から装備魔法『自律行動ユニット』を発動！ ライフを1500ポイント支払い、テメエの墓地の『光帝クライス』をオレの場に蘇生！ このカードを装備する！」

剣士LP3600

「テメエ……俺のクライスを！」

「お前のモンスターだ。効果は知ってるんだろ？ オレは自分の『デュアル・ブースター』と『デュアル・ソルジャー』を破壊！ カードを二枚ドロウする！」

「まだまだ。まだ、オレのコンボは終わらねえ！」

「そして破壊され、墓地に送られた『デュアル・ブースター』の効

果発動！ オレのフィールド上に存在するデュアルモンスター一体を、再度召喚した状態にする！」

『おおおっ！』

ネイキッドがシュバリエと同じく、身体に炎を纏う。

これで、あいつ等のフィールドは殲滅し、俺のフィールドには攻撃力2000以上のモンスターが二体並んだ。

「ば、馬鹿な……一瞬で、あんな雑魚モンスターで、状況を一変させやがった……」

「……光丸」

「な、なんだよ」

「見るがいい。あれが、本物だ」

「ほ、本物……？」

「与えられた力ではなく、自らの才覚と努力によって手に入れた、本物の力を持つ決闘者だ。例え二対一でも、圧倒的不利な状況からでも、こうして逆転の一手を引き入れる」

「う、うるせえ！ テメエだって俺と同じ癖に、訳知り顔で語ってんじゃねえよ！」

「……そうだな。そうであった。私も、所詮は同じか」

光丸の焦ったような絶叫に、風丸が自嘲する。

「……オレはこれでターンエンドだ」

「私の番か……」

「風丸」

「なんだ」

「お前は、飛べるだろ？」

「なに？」

「お前が、与えられた力で潰れて行くだけの愚者とは思えねえ」

「戦野剣士……」

本来なら、凜を攫った敵に言う言葉じゃないのはわかる。だがコイツが、デュエリストの魂を持っている漢が、こんなくだらない形で潰れて行くのは見過ごせねえ。

「……そうだな。私にも、翼はある」

風丸は、フツと笑い、カードをドロ―する。

「私は手札から魔法、『死者蘇生』を発動。有翼賢者を蘇生する」

『有翼賢者ファルコス』 ATK1700

光丸のエースはレベル6の帝、クライスだった。とすれば、同じ力を貰ったと言う風丸のエースは……。

「お前が魔法カードを発動した瞬間、オレは『フェニックス・ギア・フリード』の効果を発動する！ 墓地から『デュアル・ソルジャー』を守備表示で蘇生する！」

『デュアル・ソルジャー』 DEF300

「私は『有翼賢者ファルコス』を生贄に捧げ『風帝ライザー』を生贄召喚！」

『風帝ライザー』 ATK2400

「我が風帝は、生贄召喚に成功した時、場の札を一枚、山札の一番上に戻る」

デッキトップに戻る効果だと!?

「私が選択するのは当然『フェニックス・ギア・フリード』だ」

「くっ!?!」

『ぬおっ!?! な、なんだこの竜巻は!?!』

風帝の巻き起こした竜巻に、ネイキッドが吹き飛ばされてしまう。

「ちっ! ネイキッドの効果は、モンスター効果には対応してねえ

……」

「これで、お前の山札は封じられた。次の引きで、状況を変えることは出来ん」

「くっ……」

「戦闘だ。我が風帝よ。『エヴォルテクターシュバリエ』を打ち倒せ! 『破魔風陣』!」

「ぐああっ!?!」

剣士LP3100

纏っていた炎ごと、シュバリエが身体を切り裂かれていく。

「更に速攻魔法『スワローズ・ネスト』！ 風帝を生贄に、山札デッキよ
り『神禽王アレクトール』を特殊召喚する！」

『神禽王アレクトール』 ATK2400

「なにっ!？」

「追撃する。守備表示の『デュアル・ソルジャー』を攻撃！」

「くっ!」

これじゃ、次のターンネイキッドをアドバンス召喚することもできねえか！

「私はこれで、終了する」

与えられた力、風帝を“繋ぎ”として追撃か……やるじゃねえか。
「オレの、ターンだ」

風丸。お前とは、もっとデュエルを続けたい気分だ。だから、そのため。

「ひっ!？」

「邪魔な奴は、とつと消させて貰う！ ドロー！」

「ふ、ふん。そんな勢い込んでドローしたところで、そのカードは……」

「そう。『フェニックス・ギア・フリード』だ。だがな……」

オレは、もう一枚の手札をオープンする。

「な……」

「オレは手札から魔法カード『トレード・イン』を発動！ レベル
8の『フェニックス・ギア・フリード』を捨て、デッキからカード
を二枚ドロー！」

「フ……山札デッキを封じること、出来んか……」

「て、テメエ風丸！ テメエがしっかりしねえから……」

「他人の所為にしてんじゃねえよ。オレは手札から『鉄の騎士 ギ
ア・フリード』を召喚！ そして、魔法カード『拘束解除』！ 『鉄
の騎士 ギア・フリード』の拘束を解除し、剣聖の真の姿を呼び醒
ます！ 来い！ 『剣聖 ネイキッド・ギア・フリード』！」

『おおおっ！ 再び参上！ そう簡単に、我を消せると思うな!』

『剣聖 ネイキッド・ギア・フリード』 ATK2600

「う、うわっ!?!」

「更に、墓地の『マツシブ・ウオリアー』と『デュアル・ソルジャ』をゲームから除外し、手札に『神剣 フェニックスブレード』を手札に戻し、ネイキッドに装備する!」

『剣聖 ネイキッド・ギア・フリード』 ATK2600 2900

『神剣か……手に馴染むっ!』

ネイキッドが神剣を一振りし、衝撃破が走る。

「剣聖が得物を手にしたその時! 相手モンスター一体を問答無用で破壊する! オレが破壊するのは『光帝クライス』!」

「ぐうっ!」

「オレはカードを一枚セット。バトルだ! 『光帝クライス』で光丸を攻撃! 『フラッシュ・ブレイク』!」

「ぎゃああああああっ!?!」

光丸 LP1600

「終わりだ! ネイキッドでダイレクトアタック! 『フェニックス・ギア・ソード』!」

『おおおおっ!』

「い、いやだ。いやだいやだいやだいやだ!……死にたくない!」

「……なに?」

死にたくない。その言葉に、幽かな違和感を覚えたが、ネイキッドの攻撃は止まらない。その剣で、光丸が切り裂かれる。

「う、うわああああああああっ!?!」

光丸 LP0

「あ、ああああああっ!?! あああああああああっ!」
絶叫する光丸が、身体を強く抱きしめる。

「なっ!?!」

その身体が、溶け崩れる。

「ど、どうなってやがる!?!」

「アア、アアアアアア……ッ」

溶けて行く。光丸の身体が、光の糸となって溶けて行く。

「ひ、光丸……」

「ア……」

溶けた。光丸の身体は、光の糸に分解され、消滅した。

「どう、いうことだ……どういう、ことだよ……風丸！」

目の前で起こったことが信じられず、オレは思わず風丸に叫んでいた。

「……これが、力の代償なのだろう」

「な……」

「身に余る力が、その身を滅ぼしたのだ。いずれ、私も……」

「なん、だよ……なんだよ、それ……!?!」

死ぬ？ デュエルで？ こんな、あっさりと？

「ふざけんな！ デュエルで……たかがデュエルで、人が死んでたまるかよ！」

「たかがデュエル……?」

「っ!」

風丸の鋭い目に、オレは気圧された。

「たかが、デュエル。そんな考えの男に、これだけの決闘はできないよ。そうでなくば……私たちは、光丸は、負けなかっただろう」

「……くっ!」

そうだ。わかってる。わかっていたはずなんだ。セツや、アテナたちを見ていれば。その話を聞いていたオレなら、知っていた筈だ。デュエルに、命を賭けなければならないこともある。だが……だが、オレは……。

「そんな……覚悟が……」

「……私に同情するな。私は、身から出た錆に殺される。光丸も同じこと。お前が気に病むことはない」

「そうじゃねえだろ!? なんて、なんでそんな、力を……」

そんな、身を滅ぼす力を、手に入れようとしたんだ……。

「……力も、意志も弱かった私が、変わるためには……背水の陣を
しかなければならなかった。それだけだ」

「なに……?」

「私は、力を得て初めて、変わることが出来た。力を得て初めて、
真正面から戦う意志を得た。それまでの私は、光丸と大差ない、矮
小な男でしかなかった」

風丸は、握り拳から血を滴らせながら、そう言った。

「力を持たねば、変わることも出来なかった。力がなければ、正々
堂々と戦うことも出来なかったのだ! 私は……!」

「風丸……」

「……さあ、決闘を続けるぞ。私の番だ^{ターン}」

「風丸!」

しかし、風丸はオレの言葉に耳を貸さず、デッキからカードをド
ローする。

「私は、手札から魔法、『死者転生』を発動する。手札を一枚捨て、
墓地の『風帝ライザー』を手札に戻す」

最後は……やっぱりソイツなのか……!

オレは、伏せてあるカードを思う。

(コイツを使えば、オレは勝てる。だが、そうしたら風丸が……)

「……戦野剣士。これを見る」

「なっ!?!」

風丸が、凜の首筋に刀を向けていた。

「本気でやれ。もし、私に同情などして、態と敗北を選んでみる。

この少女を、殺す」

「お前……!!」

なんで、そこまでして……。

間違いない。あいつは、オレの伏せカードがどんなものか、想像
が付いている。それなのに……。

「……良い夢を、見させてもらった」

「風丸ううう!」

「私は『神禽王アレクトール』を生贄に、『風帝ライザー』を生贄
召喚！ 効果により、剣聖を山札デッキに！」

「クソツ！ カウンタートラップ『畳返し』！ 召喚時に発動する
モンスター効果を無効にし、破壊する！」

風帝の放った竜巻が、風帝自身を巻き込み、吹き飛ばす。天高く
飛ばされた風帝は、その身を大地に叩きつけ、消滅する。

「これが……私の終焉か」

「終焉……！？ まさか、お前らに力を与えたのは……」

「……やれ。お前の番だ」

「クソツ……オレの、ターン。ドロー！ オレは……」

「……やれ。娘がどうなってもいいのか」

「っ！ オレはっ！ ネイキッドとクライスで、風丸をダイレクト
アタック！ 行けえええっ！」

「……それで、いい」

風丸は、凜の身体を優しく横たえ、静かな笑みを浮かべ、風に溶
ける。

「……翼だ。私は……風、と……翼、に……」

「風丸うううっ！」

風丸LPO

風丸は、風に溶け、消えて行く。

「やり過ぎ、だろ……！ こんな……」

先日、オレたちと決別し、姿を消した同級生を脳裏に思い浮かべ
る。

「これも……お前の望みなのかよ……加藤……！」

終焉と共に、消えた同級生。セツに懸想していた、という以外、
然程の特徴も、オレとの接点もなかったが、皆と同じで、オレを受
け入れてくれた一人。

「畜生！ こんな、こんなデュエル……」

「マスター……」

痛ましげな目を向けてくるネイキッドにも気付かず、オレはただ、

項垂れた。かつてデュエルキング武藤遊戯と、親友城之内克也が死闘を演じたという埠頭で、ただ、項垂れたのだった。

第三期第二十三話「翼に……」（後書き）

こんにちは。

いや、予想以上に大きい話になりました。風丸エ……。

うん。最初はこんな話にするつもりはなかったんですが、書いている内に……いえ、一応先の展望もありますが。風丸がとてもしいい感じになった分、光丸の小物臭がひどく……。そして、凜の出番が結局皆無に。なんてこった。

デュエルも、最初はもつと長くやる予定だったのが、尺の問題で……うん。色々、ままならないものです。もつとプロット通りに進めることが出来ればいいのですが。それにしても、剣士は二体一のシチュエーション多いなあ……二度目だし。ちなみに、今回の剣士のデッキは戦士族デュアルが中心の装備ビート、かな？ 以前ネイキッドが使っていたものに近いです。どんなもんでしょ？

次は、セツとアテナサイドの話になります。登場する敵は……まあ、お分かりでしょうね。問題の彼です。どうしよう。

それでは、悠でした！

第三期第二十四話「命を懸けて繋いだモノ」（前書き）

修学旅行編の最終話です。最近更新速度が落ちてきて、申し訳ないです。デュエル内容も……ある意味では見ごたえ十分だと自負しておりますが、ある意味では拍子抜けな内容に。

第三期第二十四話「命を懸けて繋いだモノ」

アルカナく切り札の騎士

第三期第二十四話「命を懸けて繋いだモノ」

少し時間は巻き戻る。

剣士が、光丸&風丸とデュエルを始めた頃、俺とアテナ（とエース）は童実野町を事件の元凶を探して駆けずり回っていた。

「アテナ……」

「なんです？ セツ」

「実はな……」

「は、はい……」

「たこ焼きが喰いたい」

「ずしゃあつ！」

「大丈夫か？」

走りながらずっこけるといって、中々芸人根性の据わったアテナに手を貸す。

「大丈夫じゃないです！」

「がばつ！ と身体を起こして俺に詰め寄るアテナ。

「元気そうじゃないか」

「なんで、この状況で、たこ焼きですか！？」

「いや、たこ焼きって時々ふと、無性に食べたくならないか？」

「この状況で！？」

「三大欲求は空気読んでくれなくて」

「ええそうですね！ セツの場合、性欲も空気読んでくれませんかね！」

「残るは睡眠欲か」

「がんばれ、睡眠欲！」

「……一番空気読まなそうだな」

「ってそんなことはどうでもいいんです！ 例え食べたくなくなったとして、それを今言う必要がどこに!？」

「いやほら、たこ焼きって食べたくなると他のものでは代替できないくらい食べたくなるんだよ」

「そんなの、後でいいじゃないですか！」

「だが、腹が減った」

「ああもう！ 普段ほぼ我儘言わないのに、なんでよりもよって今我儘を！ お好み焼きで我慢してください！」

「馬鹿者！ お好み焼きとたこ焼きを同一視するな！ 怒られるぞ！」

「今まさにセツに怒られました……」

「アテナがずーんと沈んでしまった。」

『貴様ら……こんな時に何を漫才しているか』

「私は真面目だったと思うんですが……」

「俺も、至極真面目だ」

『何故貴様らは、+と+をかけてマイナスになるんだ……』

「セツがマイナスだからだと思います」

「だって、たこ焼きだぞ？」

「ですから、TPOと言うモノをですね……」

『貴様ら、ヘンなところで喧嘩するのだな……』

「というか、セツがヘンなところに拘りを持っているんですもん」

「関西人ならわかってくれる！」

「セツ、関西人なんですか？」

「わしゃあ、バリバリの東北人じゃけん」

「嘘です！ どこだったかは忘れましたが、その方言は東北とは正

「反対だったはずですよ！」

「冗談だ」

「もう。なんでこんな非常時にふざけるんですか……」

「……ま、緊張しっぱなしじゃ、キツイと思ってるな」

「え？」

『っ！』

「迂闊だぞ、エース。俺が気付いたのに、お前が気付かないでどうする」

そう言っただけ俺が視線を向けた先には、二人組の男。二人とも両手にデュエルディスクを付けて、思い切り臨戦態勢だ。

「あの人たちは……」

「何者だ！？ 名を名乗れ！」

実体化したエースの一喝に、漸くその二人は顔を上げた。

「……闇丸」

「……邪々丸」

言葉少なに答え、二人は俺たちにデュエルディスクを放り投げた。

「状況からして、お前たちがこの結界を張っている一味か？」

「……」

「だんまりか。無口な奴ら……」

「デュエル」

「っておい！ 問答無用かよ！ 仕方ない。やるぞ、アテナ」

「は、はい！」

慌ててアテナもデュエルディスクにデッキを装着する。

「まったく……ホントはこの一年、タッグデュエルはユーキちゃんとって約束だったのに……」

「……始める前から、モチベーションが少し下がりました」

「勘違いするなよ。アテナとのタッグが嫌なわけじゃない。それに、わかってるだろ？」

「はい。私とセツの相性は最高です」

「その通りだ。俺たちのデッキは最高にシナジーする。二人で組み

ば、互いにサポートしあつて120%の力を発揮できる」

「はい！」

「『デュエル!!』」

セツ&アテナLP8000

闇丸&邪々丸LP8000

「私の、ターン。ドロ」

先攻は闇丸。俺の正面ということは、アテナがラストか。

「私は手札から『闇帝デイルグ』を墓地に送り、手札の『ダーク・グレファア』を特殊召喚する」

『ダーク・グレファア』 ATK1700

「闇帝……？ 聞いたことのないモンスターです」

なるほど……名前そのままか。だが、闇帝はその読み方と裏腹に、安定性というか、使い勝手はあまりよくない帝。だが……。

「アテナ。邪々丸のエースには気をつける」

「え？ セツ、何か知っているんですか？」

「……ああ」

さだめが手に入らないことを非常に残念がっていた、汎用性ではトップクラスの、もつとも採用率の高かった帝……。

「私は『ダーク・グレファア』のモンスター効果を発動。手札の『ネクロ・ガードナー』を墓地に送ることで、デッキから二体目の『闇帝デイルグ』を墓地に送る。そして『終末の騎士』を通常召喚し、デッキから『レベル・ステイラー』を墓地に送る」

『終末の騎士』 ATK1400

「『ダーク・グレファア』や『終末の騎士』による墓地肥し……まるでさだめさんですね」

「闇属性だからな。墓地からの特殊召喚手段は豊富だろう。闇帝は特殊召喚でも効果が使えるしな」

「私はカードを二枚セット。ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！」

さて……どうするか。出来れば邪々丸のターンに生贄を残したく

はないんだが……。

「俺は手札からマジックカード『二重召喚』！ このターン俺は通常召喚を二回まで行うことができる。俺は『切り札の騎士 キング』を召喚し、キングをリリースして『切り札の騎士団長 エース』をアドバンス召喚！」

『切り札の騎士団長 エース』 ATK2000

『ふん、早速か。精々我を守れ。セツ』

「……一応お前、俺の護衛じゃなかったのか。俺は手札から『ライトニング・ボルテックス』を発動！ 手札から『切り札の騎士 エース』を墓地に捨てて効果発動！ 相手フィールド上の表側表示モンスターを全て破壊する！」

『む……』

激しい雷が、闇丸のフィールドを焼き尽くす。

「更に、墓地に捨てられた『切り札の騎士 エース』の効果と、場の『切り札の騎士団長 エース』の効果でカードを二枚ドロー！ バトル！」

『ほう。お前にしては勇ましいな』

使ってくるエースモンスターがわかってるんだ。あまり長引かせるのは得策じゃない！

「エースでプレイヤーにダイレクトアタック！ 『シユバルツ・ドンナー』！」

『雷光ッ！』

「永続トラップ『リビングデッドの呼び声』。墓地から『闇帝デイルグ』を蘇生する」

「っ止まれエース！」

『ちっ……』

『闇帝デイルグ』 ATK2400

「『闇帝デイルグ』のモンスター効果。召喚、特殊召喚に成功した時、相手の墓地のカードを二枚除外し、相手のデッキを二枚削る」

『む、むっ……』

俺の墓地からキングとエースが除外されて行く。すまん、キング。

「デッキからは……テンスと『神の宣告』か」

「ちっ……我が団員を悉く……おのれ」

「俺はカードを三枚セツト。ターンエンドだ」

「私のターン、ドロ」

結局、邪々丸のターンにモンスターを残してしまった。しかも、墓地には『レベル・ステイラー』。確実にリリース確保を狙ってくる筈だ。

「私は墓地に存在する『レベル・ステイラー』の効果を発動。闇帝の星を盗み取り、蘇れ『レベル・ステイラー』」

『闇帝ディルグ』レベル6 5

『レベル・ステイラー』ATK600

「そして『レベル・ステイラー』をリリースし、『邪帝ガイウス』をアドバンス召喚！」

『邪帝ガイウス』ATK2400

「っ！」

やはり来たか。邪帝！

「セツ、あれが……」

「ああ。帝と名の付くモンスターの中でも、屈指の汎用性を持つカードだ。その効果は……」

「邪帝の効果発動。アドバンス召喚に成功したとき、フィールド上のカードを一枚除外する！『黒邪瘴気』！」

「そんなんっ!？」

『くっ!?!』

そう。カードの種類も、表示形式も問わない万能除外。属性や種族的な後押しもあり、帝モンスター最強とも言われるガイウス。だが……！

「効果を知っていれば、対策もとれる！カウンター罠『オーバーウェルム』！俺の場にアドバンス召喚されたレベル7以上のモンスターが存在する場合、相手の罠・モンスター効果の発動と効果を

無効にして破壊する！」

「なにつ!? くつ!?」

ガイウスの効果を知っていて、そう易々と使わせるわけがないだろう。

「ならば『闇帝デイルグ』で『切り札の騎士団長 エース』を攻撃!
『常闇の衝撃』!」

「カウンタートラップ『攻撃の無力化』! バトルフェイズを終了する!」

「……私はカードを二枚セット。ターンエンドだ」

「私のターンです。ドロー!」

さて…… エースを守ることはできた。だが、その結果アテナのヴァルハラによる展開を阻害してしまう結果にも繋がるわけだが……。

「……私たちの勝ちです」

「なんだと?」

「アテナ?」

「セツのターン内に勝てなかった時点で、貴方たちの勝利は消えました」

「何を言っている……」

「今から、その理由をお見せします。私は手札から『ヘカテリス』を捨てて効果を発動。デッキから『神の居城 ヴァルハラ』を手札に加えます」

『どういうことだ。ヴァルハラでは……』

そうだ。ヴァルハラでは、フィールドにエースが居る以上、効果を使えない。どうするつもりだ、アテナ。

「いいんです。私の目的はヴァルハラを手札に加えることじゃなく、墓地に天使族を送ることでしたから」

アテナは不敵な笑みを浮かべる。どうでもいいが、あんまり似合っていない。

「ちょ、どういう意味ですか!」

「不敵な笑みはさだめ辺りに任せておけてことだ」

根が純粹で優しいアテナに悪者っぽい笑みは似合わない。さだめならベストマッチするんだが。

「……何故でしょう。褒められているのにあんまり嬉しくありません。……兎に角、私は手札から速攻魔法『光神化』を發動します！手札の『アテナ』の攻撃力を半分にして特殊召喚！」

『アテナ』 ATK2600 1300

「はいはい！ お姉さんとうじょううって眩しっ！？ 溢れ出る威厳が目痛い！」

……いや、威厳はないだろ。

「そして更に速攻魔法『地獄の暴走召喚』！ デッキから『アテナ』を更に二体特殊召喚します！」

『アテナ』 ATK2600

『おおう、あたしが三人！ その中でも一際輝くお姉さんの美貌が眩しいっ！』

……いや、確かに眩しいが美貌は関係ない。皆同じ顔だし。

「くっ！？」

「貴方は邪々丸さん。フィールドにいるのは闇帝。でしたら、デッキにはいませんね？」

「ぐっ、だが墓地には存在する。私は墓地から『闇帝ディルグ』を蘇生する」

「ええ、分かりました。構いませんよ」

「まだだ！ トラップカード『激流葬』を發動！ 闇帝ごと、貴様のモンスターを葬る！」

「させません。セツの残してくれたリバースカードが、それを許しません。私はカウンタートラップ『盗賊の七つ道具』を發動します。ライフを1000ポイント支払い、トラップカードの發動と効果を無効にして破壊します！」

セツ&アテナ LP7000

「アテナのデッキは重量級天使によるビートダウン。性質上、リバーストラップに弱い。伏せておいて良かったな」

「ええ、ありがとございます。セツ。お陰で勝てますよ。尤も…
…戦闘する必要もありませんが」

「え……」

「まずは天使族モンスターが特殊召喚されたことにより600ポイントのダメージです」

『天罰てきめん!』

「く……」

闇丸&邪々丸LP7400

「そして、このターン私はまだ通常召喚を行っていません。よって手札から『フェアリー・アーチャー』を通常召喚」

『フェアリー・アーチャー』ATK1400

「天使族モンスターの召喚に成功したことで600ポイントのダメージです。ただし『アテナ』三体分……1800ポイントになります」

『はい皆さんと一緒に……』『天罰てきめん!』『』

「なにっ!?!? ぐっ!」

闇丸&邪々丸LP5600

「そして『アテナ』の効果発動。フィールド上の『フェアリー・アーチャー』をリリースし、再び『フェアリー・アーチャー』を蘇生。効果により1800のバーンダメージです」

『』『天罰てきめん!』『』『』

「くっ!?!? その効果は……!」

闇丸&邪々丸LP3800

「ええ。あと二回、使用できます。『アテナ』の効果で『フェアリー・アーチャー』をリリース、そして蘇生。1800のバーン効果です」

『』『天罰てきめん!』『』『』

「ぐあああああっ!?!?」

闇丸&邪々丸LP2000

「もう一度!」

「あああああつ!?!」

闇丸&邪々丸LP200

「ラストです! 『フェアリー・アーチャー』の効果発動。私のフィールドに存在する光属性モンスターの数×400ポイントのダメージを与えます。私のフィールドには光属性モンスターが五体。よって2000ポイントのダメージです!」

「があああつ!?!」

闇丸&邪々丸LP0

「……わ、ワンターンキル。そしてまた俺は目立たなかった。いやアテナ。そのコンボ、俺いらなないじゃん。俺のデッキとのシナジーを見せるまでもなく、一人でこの二人、普通に殲滅出来たんじゃね? 相変わらず容赦なく最強なアテナに若干引いていると、エースが複雑そうな表情をしているのに気が付いた。」

「エース?」

「……いや」

恐らく、アテナの墓地とフィールドを行き来させる戦術が気に食わないのだろう。とはいえ、それで勝てたこともあり、複雑なのだ。

「……エースさんには、少し酷だったかもしれません」

「いや、わかっている。わかっているが……やはり、簡単には割り切れぬものだな」

「これは、私の精霊としての性質にも関わってくるのですが……」
アテナの精霊としての名前……。

「『反魂のスピリチュア』……私は元々、生と死の狭間を操る天使。エースさんからは受け入れがたいでしょうが、それが私の本質なんです」

「……そうだな。わかっている。私の考え方は、精霊としては異質だと」

「精霊としては異質でも、人としては正しい考えだと思います。それに……」

「待てアテナ。あれを……」

「え？」

『なにっ！？』

何か言おうとしたアテナを遮り、俺は闇丸たちを指差す。

「……………」

虚ろな目をした二人の男は、緩やかに闇へと溶けて行くところだった。

「どう、いうことですか…………？」

「おい！ 闇丸、邪々丸！ お前ら、一体……………」

慌てて二人に手を伸ばしたが、時既に遅く、二人の身体は闇と消えた。

「これは……………」

その場に残された衣服とデュエルディスク、そしてデッキを見る。

「っ！」

闇丸と邪々丸のデッキ、双方共に入っていた一枚のカード。

「終焉の…………精霊！」

普通に考えれば、デッキとしてシナジーするから投入されたモンスター。だが、俺たちはこのモンスターに因縁があり過ぎた。

「まさか…………これも」

「とんだ修学旅行に、なってしまいましたね……………」

「ああ……………」

この分だと、剣士の方も…………。

「とりあえず、剣士と合流しよう。結界も消えていないみたいだし……………これからのことを話し合おう」

剣士が負けるとは思えない。だが、勝っていたとしても、この分だと…………。

「剣士！」

「…………セツ」

埠頭にいる、と言った剣士を迎えに行くと、気絶した凜を背負った剣士を見つけた。しかし、どうも様子がおかしい。

「なあ」

「どうした？」

「デュエルって……なんだ？」

そう言った剣士の表情は、今まで見たことがないくらい暗く沈んだものだった。

「なんで……デュエルで人が死ななきゃならねえ。デュエルって、命を懸けてまで強くなきゃいけないのか？」

デュエルした相手と何かあったのだろうか。剣士は一枚のカードを手にしていた。『風帝ライザー』……。

「強く、なつてよ。それで死んでたら、意味なんてねえだろうが…

…！」

「それは……違う」

「なんでだよ！？　どんなに強くなつても、何を為しても、それで死んだら……」

「違う！」

「っ！？」

「セツ……？」

「それは、違うんだ……剣士」

「なんで、だよ」

「命を懸けて……例え死んでも、成し遂げたいことが、あつたんだ……」

俺には……。

「他人からすれば、どうしてと思われることでも、命を懸けて。俺は……」

さだめを守ろうとしていた。どれだけ命を懸けて護つても、いずれその護るべき存在に殺されるかもしれない。それでも、俺は……。「お前が、何を見たのかは知らない。わからない。でも……そいつが命を懸けて得たものは、本当に無意味だったか？」

「無意味……だろっ……死んだら……全部っ！」

「お前に、遺したものがあ。違つか？」

剣士は苦しんでいた。だが、それでも何か思うところがあったから、こうして悔やみ、苦しんでいる。それは……。

「そいつが、命を懸けた結果だ」

俺は剣士の持つ『風帝ライザー』のカードを指差す。

「お前の苦悩が晴れた時、きっとわかる。命を懸けた、その理由。例え死んでも、遺したものがあるのなら……」

その死は、想いは、決して無意味じゃない。

「そう思わなきゃ……命なんて、懸けられやしない」

無意味じゃないから、命を懸ける。遺したものが、何かを繋ぐと信じているから。

「何かを、遺す……」

「何を遺したかは、遺された側が判断するしかない。剣士……遺されたモノ……繋いでやってくれ」

「……ああ」

まだ複雑そうではあったが、剣士は一先ず落ち着いた。

「あ、結界が……」

消えて行った。俺たちとデュエルした連中はあの結界を張っていた帝を持っていなかった。ということは、十代がどうにかしたのだろう。十代の方も、何事もなければいいんだが……。

俺たちは、それぞれに若干の蟠りを抱えつつ、帰路に就くのだった。

第三期第二十四話「命を懸けて繋いだモノ」(後書き)

こんにちは。

いえ、まずは言い訳をさせてください。本当は闇丸が闇帝を連続で召喚&特殊召喚しつつ、邪帝の効果で除外&1000ポイントダメージというデッキ破壊&ビートバーンな展開にしようとは思っていたのです！ セツの方もパーミッションが冴えわたり、アテナのデッキがエンジェルパーミで相手のサイコショットカーを桜火で除去、ヴィーナスとマジックドレインのコンボ、エースとアルテミスとテュスの効果で連続ドロ。俺とアテナのデッキ相性は最高だ！

みたいな展開持つて行こうとはしたのです！……ただ、思っていた以上に某メインヒロインが強すぎまして。折角ライフ8000もあつたというのに一瞬でワンキルしてくれやがりました。あれ、先攻ワンキル可能なレベルですよ。フェアリー・アーチャーでなくても7800ダメージ受けて瀕死ですよ。どないせーっちゅーんじゃ。ある意味さだめすら超える鬼畜バーン。セツみたいにガンガンオリ力を使うわけでもなく、さだめのように禁止・制限ガン無視するでもなく、極々当たり前に無制限カードだけでワンキルしてしまうメインヒロインです。どうかしてるぜ。現実でも可能ですが、アテナ、光神化、地獄の暴走召喚、フェアリー・アーチャーの四枚が揃わないといけないので悪しからず。まあアーチャーは墓地にいてもいいですが、代わりの天使族必須。……テュス使えば実現できそうであれですけど。ともかく、勝手にとつとワンキルしちゃった所為で特にセツのデッキとのシナジーを魅せることもなくデュエルが終わっちゃうあたり、流石に残念ヒロインですが。

今回は舞台をアカデミアの方に戻して改訂前にもあつた話に戻ります。修学旅行でのラブを期待していた方々には申し訳ありませんが、アテナとのラブコメは書き尽くし……いえ、なんでもありません。いい加減先に進めたいですね。

それでは、悠でした！

第三期第二十五話「光の結社 アルカナVSアルカナ」(前書き)

第三期クライマックス！ ということで、遂にアルカナとアルカナが激突します。まあ改訂前を読んでいた方々からすればもう結果はわかっているでしょうが……。特別変わったところもありませんが、どうぞお楽しみください。

第三期第二十五話「光の結社 アルカナVSアルカナ」

アルカナ（切り札の騎士）

第三期第二十五話「光の結社 アルカナVSアルカナ」

セツ様。

わたくしの、敬愛すべき主様。

「貴方を守るためなら、わたくしは……」

わたくしは……。

「希冴姫。本当に、いいのだな？」

エースが、柄にもなくわたくしを心配そうな目で見つめてきます。

「ええ。わたくしの心は変わりませんわ」

終焉とはまた別の、やはり恐ろしい影がセツ様に迫っているのを感じます。

その力は、邪悪な光の波動。我が主を脅かさんとする、憎むべき光輝。

「決して、やらせはしませんわ」

「……お前がいいというのなら、我には止めることはできぬのだろ
うな」

「クレイジー……ですか？」

「ああそつだ。不本意……そう、不本意極まりないが、私の口癖だ
な。それもこれも、貴様のような奴がいるから……」

エースが不機嫌そうに、ぶつぶつと文句を連ねる。

本当に、優しい娘……優しく、優しく、そして純粹過ぎて

……だから、精霊としては出来損なつた我らが団長。その心に惹かれて、わたくしたちはこの娘を団長と仰いだ……。でも、もしかしたらそれがまた、この娘の負担になってしまったのかもしれない。」

そして、わたくしたちは出会った。出会ってしまった。セツ様に。一目で、そう一目で惚れ込みました。恐らくは、ジャックやキングも。もしかしたら、テンスもそうだったのかもしれない。エースだけが、人に仕えることを拒み、わたくしたちは袂を別つた。ですがそれも、セツ様は取り戻してくれた。

ですから。

「後悔は、ありませんわ」

わたくしは、長らく身につけていなかった騎士装束と甲冑をつけ、その一步を踏み出したのです。

色々と波乱に満ちた修学旅行も終わり、俺たちは新たな問題に直面することとなった。

“ 斎王琢磨 ”

そう呼ばれる男。エド・フェニックスのマネージャー。そいつが、先日剣山とデュエルしていた。どうやら、以前からおかしくなってしまうていた万丈目や明日香も、コイツの影響を受けておかしくなってしまったようだ。

そして……。

そいつは今、俺の目の前にいる。

「……俺に、何か用か？」

「御堂切……エドを倒し、私の預言を覆した者……その力を見せて貰いたいのですよ」

「早い話、デュエルしようってことか？」

「そうなりますねえ」

「いいだ「待つてください！」アテナ？」

俺が斎王の挑戦を受けようとした時、アテナが急に割って入ってきた。

「セツ……この人は、ダメです。良くない感じがします」

それは、転生者としての嗅覚なんだろうか。しかし、奴が諦めるとも思えない……。それに……。

「……悪いアテナ。俺も、コイツとはデュエルするつもりだったんだ」

「で、でもセツ！」

「アルカナフォース……」

俺の呟いた言葉に、アテナがハツとする。

「同じアルカナ使いとしては、その力を使って得体の知れないことやって欲しくはない」

「セツ……」

「そう言うことでしたら、わたくしがいないことには始まりませんわね」

レッド寮から聞こえてきた声に、俺たちは振り向く。

「希冴姫！」

「セツ様。御心配をお掛けしましたわ」

騎士甲冑姿でこちらに歩み寄ってくる希冴姫の足取りに、特に陰りは見えない。

「大丈夫なんだな？」

「ええ。御心配なさらずとも、わたくしは、必ずセツ様をお守りいたしますわ」

「我も行ける。久々に、切り札の騎士団、集結だ」

「……よし」

斎王に向き直る。

「待たせたか？」

「いえいえ……こちらから不躰に挑んだのですから、準備に時間をかけることに、まさか文句など言いませんよ」

「そうかい。んじゃ、やるか」

デュエルディスクを展開。希冴姫たちを加えたデッキをシャッフルしてディスクにセットする。

「デュエル！！」

「私のターン、ドロー！」

さて……アイツのデッキは、タロット……アルカナフォースデッキ。本来アルカナフォースは、その強烈なメリット効果とデメリット効果をコイントスによって決定する、不安定ながら爆発力の高いデッキ……。

「でも、剣山に聞いた話が本当なら……」

“ 斎王は、運命を操る ”

正直眉唾もいいところだが、実際に自分にとって都合のいい方の効果を使ってきたのは事実らしい……。

「私は『アルカナフォース？ - THE EMPRESS』を攻撃表示で召喚。効果発動！」

『アルカナフォース？ - THE EMPRESS』 ATK1300
来たか！

『アルカナフォース？ - THE EMPRESS』のカードがソリッドビジョン上で回転する。

「ご存知かとも思いますが、私のアルカナフォースは召喚時、正位置か逆位置かでその能力が決定します。さあ、選んでください。貴方の運命を」

良く言う。結局お前の思う通りに決めるんだろうに。

「……ストップだ」

俺の宣言から僅かに惰性で回転したカードは、すぐにその回転を止めた。その結果は……。

「正位置！ よって『アルカナフォース？ - THE EMPRESS』

『S』の効果が決定的！ その効果は、相手が通常召喚する度に私の手札に存在するアルカナフォースを特殊召喚します！ 私はカードを一枚セット、ターンを終了します」

「俺のターン、ドロー！」

俺は手札を確認する。『アルカナフォース？ - THE EMPRESS』の攻撃力は1300……俺の手札には攻撃力1500の希沓姫。だが……。

「どうしました？ モンスターを出さないのですか？」

「っ……俺は『切り札の騎士 クイーン』を攻撃表示で召喚！」

『切り札の騎士 クイーン』 ATK1500

「この瞬間、『アルカナフォース？ - THE EMPRESS』の正位置の効果が発動します！ 私は手札から『アルカナフォース？ - THE EMPRESS』を特殊召喚！」

『アルカナフォース？ - THE EMPRESS』 ATK1400

再び『アルカナフォース？ - THE EMPRESS』の頭上で回転を始めるカード。

「さあ、ストップの宣言を」

「ストップ」

「正位置です。よって『アルカナフォース？ - THE EMPRESS』の正位置の効果が発動します。私の場のアルカナフォースの攻撃力は500ポイントアップ！」

『アルカナフォース？ - THE EMPRESS』 ATK1300

0 1800

『アルカナフォース？ - THE EMPRESS』 ATK1400

0 1900

「ちっ……」

これで希沓姫の攻撃力を上回った……。

「なら俺は装備魔法『アルカナソード ハート』を『切り札の騎士 クイーン』に装備！ カードを一枚セットしてターンエンドだ！」

『切り札の騎士 クイーン』 ATK1500 1000

「私のターン、ドロー！ 私は手札から魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動。手札の『アルカナフォースX? - THE HANGED MAN』を墓地に送り、デッキから『アルカナフォース0 - THE FOOL』を特殊召喚！ 回転を止めてください」

『アルカナフォース0 - THE FOOL』DEF0
「ストップ」

カードの回転が止まり、『アルカナフォース0 - THE FOOL』は逆位置の効果を得る。だが、コイツは珍しく逆位置で強力な耐性効果を得るモンスターだ。

「そして永続魔法『コート・オブ・ジャスティス』を発動します」
「な……」

「私はその効果により、手札から『アルカナフォース?? - THE MOON』を攻撃表示で召喚！ 効果発動！」

『アルカナフォース?? - THE MOON』ATK2800
3300

「……ストップ」

「またも正位置です。ふふふ、そろそろ信じて貰えましたか？ 絶対的な運命を。我ら光の結社の力を」

「……ほざけ。こちらら、もうちよつとやそつとのことじゃ驚かないくらい周囲に毒されてるんでね。そのくらいじゃ驚かぬえよ」

とはいえ、状況は最悪。相手のアルカナフォースたちじゃ、『アルカナソード ハート』を装備した希冴姫を倒せないが、それでも相手フィールドには計四体。しかも“皇帝”の効果で攻撃力がアップし、“月”に至っては攻撃力3300。最早俺のデッキでは、それこそ『アルカナ ナイトジョーカー』くらいじゃないと倒しようがない攻撃力を持ってしまっている。

「そうですか。それは残念です。私はこれでターンエンドですよ。攻撃はしてこない。流石に、もうハートの効果は割れてるか。」

「俺のターン、ドロー！」

だが、アルカナでしか倒せないってんなら……、

「俺は手札から『切り札の騎士 キング』を攻撃表示で召喚！ 効果発動！」

アルカナを出せばいいってことだよな！

「デッキから『切り札の騎士 ジャック』を特殊召喚、魔法カード『融合』！ 来いっ！ 俺のアルカナ！ 『アルカナ ナイトジョーカー』を攻撃表示で融合召喚！」

「おおっ！」

『アルカナ ナイトジョーカー』 ATK3800

「ほう……これが貴方のアルカナ……私のアルカナフォースと、似て非なる存在……」

「行くぞ！ 『アルカナ ナイトジョーカー』で、『アルカナフォース？？-THE MOON』を攻撃！ 『ロイヤル・ストリート・スラッシュ』！」

アルカナの持つ剣が謎のカプセルを内蔵したようなモンスターを切り裂く。

「ぐうっ！」

斎王LP3500

「俺はこれでターンエンド！」

「っ……やりますね。私のターン、ドロー！ 私は手札から『カット・オブ・エース』を発動！ さあ、回転を止めてください！」

そのカードもそういう形で決めるのか……仕方ない。

「ストップだ」

「ふふふ、正位置です。私はデッキからカードを二枚ドロー！ 今ドローした魔法カード『スト・オブ・ソード？』を使用させていただきます。さあ、正位置と逆位置を選んでください」

「ストップ！」

「残念、正位置です。このカードの正位置の効果は、貴方の場のモンスターを全て破壊します」

「くっ！？」

しまった、対象を取る効果じゃないから『アルカナ ナイトジョ

「カー」の効果じゃ防げない！

アルカナが無数の剣で貫かれ、爆発四散する。

「つだがこの瞬間、トラップカード『アルカナソード クローバー』の効果が発動！『切り札の騎士 クイーン』を蘇生し、このカードを装備する！」

「セツ様をやらせはしませんわ！」

『切り札の騎士 クイーン』 ATK 2200

「攻撃力2200……なるほど、残ったアルカナフォースでは太刀打ちできませんね。私はこれでターンエンドです」

「俺のターン、ドロー！俺はクイーンをリリースして『切り札の騎士団長 エース』を攻撃表示でアドバンス召喚！」

『切り札の騎士団長 エース』 ATK 2000

「ほう。エドを倒したカードですか。興味深い」

「ほざけ。我らを見ることすら叶わぬ愚物が。切り捨ててくれる！」

「俺は装備魔法『アルカナソード ダイヤ』をエースに装備！ 攻撃力300ポイントアップ！」

『切り札の騎士団長 エース』 ATK 2000 2300

「ふっ……装飾剣、だが悪くはないか」

一応お前らの宝剣だろうが。相変わらずだなお前は。

「エースで、『アルカナフォース？ - THE EMPEROR』を攻撃！『ジュエル・フラッシュ・ソード』！」

『煌めけ！』

「ぐうっ！」

齋王LP3100

「更に、ダイヤの効果でデッキからカードを一枚ドロウする！カードを一枚セットして、ターンエンドだ！」

「私のターン、ドロー！私は魔法カード『強欲な壺』を発動し……」

「させん！カウンター罠『マジック・ジャマー』！手札の『アルカナソード スペード』を捨てて、効果を無効化！更に、俺が

手札を捨てた時、エースの効果が発動する！一ターンに一度だけ、手札を捨てた時にデッキからカードを一枚ドロウする！」

「ならば私は『コート・オブ・ジャステイス』の効果が発動します。手札から『アルカナフォース??』-TEMPERANCE』を攻撃表示で特殊召喚、効果発動！」

『アルカナフォース??』-TEMPERANCE』 ATK2400
「……ストップだ」

もういい加減、その流れはわかっているので、さっさと回転を止める。やはり正位置。正直、普通ならイカサマを疑いたくなる光景だが、そんな感じではない。今更コインの裏表を自由に決められるくらいで驚きはしないが、困ることには違いない。

「行きますよ。『アルカナフォース??』-TEMPERANCE』
で『切り札の騎士団長 エース』を攻撃！『TEMPERANCE
ネイル』！」

『ぐっ………』

「エース！」

『も、問題ない。我のことは気にするな………っ！』

セツLP3900

「くそ、この瞬間、『アルカナソード ダイヤ』の効果が発動！
デッキからカードを一枚ドロウする！」

「私のバトルフェイズはまだ終了していません。『アルカナフォー
ス?』-THE EMPRESS』でプレイヤーをダイレクトアタッ
ク！『EMPRESS ブレッシング』！」

「ぐああっ………！」

「セツ！」

セツLP2600

後ろから心配そうなアテナの声。

「大丈夫、このくらいなら問題ない」

「私はこれでターンエンドです」

「俺のターン、ドロウ！」

幸い手札は潤っている。アイツの手札はゼロだし、なんとかやれないこともない。

「俺はカードを二枚セット。ターンエンドだ」

「ふふふ、私のターン、ドロー！ 私は手札から魔法カード『大嵐』を発動。魔法・罫を全て破壊します」

「待った。カウンタートラップ発動。『魔宮の賄賂』相手に一枚カードをドローさせる代わりに、魔法・罫の効果を無効にして破壊する！」

「では、お言葉に甘えてカードをドローさせていただきます」

「更に、魔法カードを無効にしたことで、手札から『冥王竜ヴァンダルギオン』を特殊召喚！ 効果発動！ 魔法カードを無効にした場合、相手ライフに1500ポイントのダメージを与える！ 『冥王咆哮』！」

『冥王竜ヴァンダルギオン』 ATK2800

「ぐっ!?!」

斎王LP1600

「冥王竜……なるほど。これが御堂切のパーミッション……」

しばらくヴァンダルギオンを眺めていた斎王は、すぐにターンエンドをする。

「行くぞ！ 俺のターン、ドロー！」

これは……。

「俺は『冥王竜ヴァンダルギオン』で『アルカナフォース?? - TEMPERANCE』を攻撃！ 『冥王葬送』！」

「ぬうう！ しかし、『アルカナフォース?? - TEMPERANCE』の正位置の効果で、私の受ける戦闘ダメージは半分になります！」

斎王LP1400

「わかっている。俺はこれでターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！ ふふふ……どうやら、運命は私の味方のようです」

「なに？」

「私は『コート・オブ・ジャスティス』の効果を発動します！ 見よ！ これが最強のアルカナフォース！ 私は『アルカナフォース』？？？ - THE WORLD』を特殊召喚！」

『アルカナフォース？？？ - THE WORLD』 ATK 3100
「やばっ……………」

アイツの効果は……………マズイ！

「ストップ！」

「無駄です！ 正位置！ バトルフェイズ！ 『アルカナフォース？？？ - THE WORLD』で、『冥王竜ヴァンダルギオン』を攻撃！ 『オーバー・カラストロフ』！」

「くっ！ カウンタートラップ『攻撃の無力化』！ 攻撃を無効にし、バトルを終了させる！」

「無駄なあがきを……………メインフェイズ2に『アルカナフォース？？？ - THE WORLD』のモンスター効果！ 二体のアルカナフォースを墓地に送り、次の貴方のターンをスキップします！」

「そんな！？」

アテナが後ろで悲痛な叫びを上げる。

「さあ、もう一度私のターン、ドロー！ 私は再び『アルカナフォース？？？ - THE WORLD』で『冥王竜ヴァンダルギオン』を攻撃！ 『オーバー・カラストロフ』！」

『グオオオオオッ！？』

「くっ……………ヴァンダルギオン！」

セツLP2300

「私は手札から魔法カード『死者転生』を発動。手札を一枚捨て、墓地の『アルカナフォース？？？ - TEMPERANCE』を手札に戻し、ターンエンドです」

「くっ……………俺のターン」

かなり、マズイ状況……………だが、この状況を打破出来るカードなら……………ある！

「ドロー！」

来た！ このカード！

「齋王！ 俺はまだ負けない！」

「ほう。この最強のアルカナフォースを前に、まだ自らの敗北を悟りませんか……」

「なら、こちら最強のアルカナを出すまでだ！」

「なんですと!？」

「行くぞ！ 俺は墓地に眠る四枚のアルカナソードをゲームから除外し、最後のアルカナソード、『アルカナソード ジョーカー』の効果をも、ライフを半分支払って発動する！」

セツLP1150

「コイツは、デッキ、手札、墓地から『切り札の騎士』と名のついたモンスターをこのターンのみ特殊召喚することのできるカード。集まれ！ 騎士たち！」

『この剣の下に……再び集う日が来たか』

『セツ様。必ず、何があってもお守りします』

『遂に、出すんですね。あのカードを』

『ほっほ。血が滾りおる』

『……俺に異存はない。やれ。セツ』

「五体のモンスターをいきなり……!？」

「更に俺は最後の手札を使う！ ライフを1000ポイント支払って速攻魔法『絵札の結束』を発動！ 俺は、融合デッキに眠る最強の騎士を呼び起こす！」

セツLP150

「俺はフィールド上の、五体の騎士を融合！」

「五体融合!？」

「来い！ 最強のアルカナ……」
『切り札の騎士帝 アルカナ ロイヤルジョーカー』！

『切り札の騎士帝 アルカナ ロイヤルジョーカー』 ATK45

00

「これが……最強の……」

「攻撃力……4500、だと？」

「行け！『切り札の騎士帝 アルカナ ロイヤルジョーカー』の攻撃！『ファイブ・オブ・ア・カインド』！」

「くっ……！ 私は手札から『アルカナフォー스？』 - TEMPE RANCE』を捨てて、ダメージを無効化します！」

「しかし、“世界”には消えて貰う！」

アルカナの剣が、“世界”を切り裂く。一刀両断された“世界”は白煙を上げながら消滅していく。

「ぬっ……」

「俺はこれでターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！」

とりあえず、危険な“世界”は潰した……コイツの攻撃力なら、そう簡単には倒されないだろうが……。とにかく、このターンを凌げば……。

「ふふ……驚きましたよ。御堂切。やはり、貴方は私の予知を超越する……ですが」

「っ！？」

「やはり運命には勝てはしない！ 私は『アルカナフォース？』 - T H E M A G I C I A N』を召喚！ さあ、最後の審判です。選びなさい。貴方の運命を……」

「……ストップ」

俺が選び取った運命は……。

「逆位置です！」

アテナの喜色に溢れた声。そう、確かに“魔術師”のカードは逆位置を示していた。

「どうだ斎王。これで……！？」

ぎょつとした。斎王が嗤っている。そして、“魔術師”の背後に、別の影が見えている。あれは……。

「ククク……甘い。甘すぎますよ御堂切。私は最初のターンから、

ずっとこの瞬間を待っていたのですよ。この、運命の瞬間を……」

「なにが……」

「トラップカード『アルカナコール』……フィールド上のアルカナフォースと、墓地のアルカナフォースの効果を入れ替えるカードです……」

「それがなんだって……あ」

そういえば、最初の方の『ワン・フォー・ワン』で……。

『私は手札から魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動。手札の『アルカナフォースX? - THE HANGED MAN』を墓地に送り、デッキから『アルカナフォース0 - THE FOOL』を特殊召喚!』

THE HANGED MAN……“吊るされた男”……。

「そう……正に貴方を象徴するこのカードによって、貴方は破れるのですよ……私は、ターンを終了します……そして、この瞬間、『アルカナフォース? - THE HANGED MAN』の逆位置の効果を発動!」

そうだ……“吊るされた男”は……逆位置がメリットになる……

その効果は……。

「終わりですね。私のターン終了時、貴方の場のモンスター一体を破壊し、その元々の攻撃力分のダメージを受けて貰います。さあ、貴方も私の下に来るがいい……御堂切!」

ロイヤルジヨーカーの効果は、手札を捨てることでこのカードを対象とする魔法・罫・モンスター効果を無効にして破壊する効果……

……でも、

「手札が……」

ない。

「う、ああああ……」

『お、お……』

アルカナに次々と亀裂が走り、遂には爆散してしまふ。

キーン……。

爆風に飛ばされたアルカナの剣……それが、今。

「さあ、我が光の洗礼を受けよ！」

セツルポ

俺の胸に、突き刺さった。

第三期第二十五話「光の結社 アルカナVSアルカナ」(後書き)

というわけで、アルカナ対決は斎王に軍配が上がりました。この所為で最強のアルカナが負けフラグ扱いされるように……ふ、フラグじゃありませんよ？ 究極嫁と一緒にしないでくださいね？

ちなみに、つるされた男はアニメオリジナルです。悪魔とかはともかく、なんでこれOCG化されてないんでしょうね。普通に悪くないカードだと思えますが。

さて、改訂前だと次回が最終話でしたが、後一話だけ追加されました。その話は実は改訂前から入れ忘れたー！ と後悔していた結構な重要イベントだったりするので、お楽しみに。まあとりあえずは次話ですが。

それでは、悠でした！

第三期第二十六話「想いの在り処」(前書き)

連投です。あんまり変わっていませんが、ラストだけ少し変わっています。そして、ようやく話数が100話に戻りましたね。一応百話目、と言っことなるのかな？

第三期第二十六話「想いの在り処」

アルカナく切り札の騎士く

第三期第二十六話「想いの在り処」

光が、広がっていく。

視界一杯に、白い……光が。

「セツ!!」

アテナの声も、何処か遠くに聞こえる。

ああ……意識が、薄れ……。

ポツ……。

「え?」

「……なんだ?」

俺の胸元が、淡く輝いている。そこには確か、希冴姫から贈られたペンダントがあったはずで……。

「……希冴姫?」

「……はい。セツ様」

白い光の中で、唯一違う輝き……。ルージュの光。

『先ほどのデュエル……お役に立てず、申し訳ありませんでした』

「何、言ってるんだ。希冴姫には助けられている。今も、さっきも……今までもずっと」

思い出す。最初にこの世界に来てから、今までの戦いを。

その間、ずっと傍で共に戦ってきた。何度も何度も召喚し、何度も墓地に送ってしまった。エースとの確執の時、希冴姫の想いを聞

いた。それでも、心のどこかにずっと引つかかっていた想い。

「お前は……幸せなのか？ 俺たちは、エースの言うように、お前たちを道具のように使い回しているだけじゃないのか……？」

今でも思う。俺たちは、交わるべきだったのか。俺なんかと戦って……いや、使われていて、希冴姫は……。

『……幸せですわ』

「でも……」

『セツ様』

「希冴姫……？」

ルージュ色の光が、希冴姫の形をとって俺の前に来る。

『んっ……』

一瞬だけ感じた温もり。

『幸せだから……貴方が好きだから、だから……ここに、こうしていますのよ。おわかりですか？』

「……あ。っ希冴姫！ 体が……」

希冴姫の身体がルージュ色の光輝となって広がっていく。その輝きが白い、俺を取り込もうとしていた光を押し返していく。

『そう……そうですの。触れてみて初めて分かりましたわ……これが、破滅の光……』

「破滅の光？ 何言っているんだ希冴姫、おい希冴姫！」

『セツ様。わたくしは貴方をお守りします。騎士の名誉、そして、女としての想いに懸けて。全身全霊、魂の全てで！』

「バカな……我が支配が、我が光が押し戻される……！？ これが、精霊の力……御堂切や遊城十代の持つ力か！」

『わたくしは……これから“破滅”より、何倍も恐ろしい“終焉”からセツ様を守り通さないといけませんの……この程度の力に、後れをとるわけにはいきませんのよ！』

完全に、ルージュの輝きが白の光を跳ね返した。

「ぬうっ!？」

白い光が完全に消え、ルージュ色の光の中に、俺と希冴姫だけが

残る。

『セツ様……ご無事ですか？』

「ああ。ありがとう。希冴姫のおかげだ……でも希冴姫」

『……なん、でしょう……？』

「なんで、お前……」

そんなに、ボロボロなんだ？

希冴姫の全身には、先ほどのアルカナのように罅が走り、希冴姫自身の輝きも徐々に弱まっている。姿自体も、時を経ることにどんどん薄く、透けていく。

これじゃまるで……。

「消え……ちまうみたいじゃないか……」

俺の言葉に、希冴姫はただ微笑むばかり。

「っ……！」

俺は思わず希冴姫に手を伸ばし……その手は、むなしく空を切った。

「っなん……なんでだよ！？ 何で……何でみんな、みんな……！」

『……言った筈ですわ。セツ様。全身全霊、魂の全てで、お守りし

ます、と……』

「守る……？ 守るって、こついうことじゃないだろ！？ 俺は、

こんなこと望んじゃいない！ 希冴姫っ……！」

『希冴姫……わたくしの、名前。セツ様に、付けていただいた、今

のわたくしにとって、何よりも愛しい、確かなモノ……』

「希冴姫……希冴姫！」

『セツ様……そのペンダント、ずっと身につけていただいて、とて

も嬉しいですわ』

希冴姫が、俺の胸元に目を向ける。そこには、例のペンダントが淡く光を放っていた。

『出来ればこれからも、それは肌身離さず身につけていてくださいまし。それが……わたくしの想いとなり、力となって、セツ様をお守りしますわ』

「お前が……」

希冴姫はもう、殆ど消えかけていた。罅も全身に回り、今にも砕けそうだ。

「お前が守れよ！ 俺の傍に居て、お前が！ そのための騎士なんだから！？ 魂の全てとか……そんなの、いいから……」

『……最早、叶わぬ願いです』

「なんで……」

なんで、こんなことを。

その時、フツ、と希冴姫の身体が風に揺らいだ。

「希冴姫！？」

『……セツ様。お別れの時間が、近いようです』

「希冴姫ッ！」

手を伸ばす。しかし、届かない。俺の手は、徐々に光の粒となっていく希冴姫の身体をすり抜けていくだけ。

「待てよ……待ってくれ……勝手だろ……！ 全部、全部お前の自己満足じゃないか！ 俺は、俺はこんなもの望んじやいない！ 希冴姫！ 破滅の光だか何だか知らないが、お前に守って貰わなかった、俺は囚われたりしない！ 勝手だ……勝手だよ……！」

違う。そうじゃない。そんなことを言いたいんじゃない。俺は、俺は希冴姫に……。

「何も……何もしてない！ お前の忠誠に、親愛に、何一つ応えてない！ 守ってもらっただけで、俺は！」

『……既に、頂きました』

俺の慟哭に、少しだけ悲しそうな顔をしていた希冴姫が、静かに口を開く。

『名を。希望を、光を、喜びを、幸せを。たくさん、頂きましたわ』

「……足りない」

足りるわけがない。

「……なあ」

『……はい』

「もう、会えないのか？」

『……………いいえ』

「え？」

『またきつと、会えますわ。セツ様』

希冴姫の身体は、もう上半身しか残っていない。

『貴方が……………願ってくださるのなら……………きつと……………また』

「きさつ……………！？」

光が、散った。

そしてその瞬間、フツとナニかが見えた。

理解した。

「……………そうかよ。これも、全部仕込みか……………！」

その“ナニか”……………黒い、終焉の影を思い、齒噛みする。

「……………舐めるな……………屈するとも思ってたか……………？ 絶望するとも、

思ってたか……………？」

「セツ！？ セツ！ しつかりしてください！ セツ！」

アテナの声も耳に届かない。

今まで、一度も感じたことのなかった感情が、俺の心を満たして

行くのを感じる。

“憎悪”

「絶望なんてしない……………そうか、そうだったか。希冴姫の思想も、

みんな織り込み済みだったか……………！」

お前を倒す。絶対に。そして、希冴姫もユークちゃんも取り戻し

て見せる。

『憎しみで繋がる愛もある』

「っ…！？」

『ありがとう。愛してくれて』

「な、あ……………！？」

『ねえ、セツくん……………』

「あ……………あ」

『大嫌い……』
だいき

「囚われるな！ セツ！」

「がっ！ はっ……！」

一瞬目の前がスパークした。自分が殴られたことに気がついたのは、少し経ってからだ。

「ぐ……エース？」

何かに堪えるように表情を消したエースが、少し赤くなった拳をさすっていた。

「……希冴姫の覚悟を無にするつもりか。愚か者め」

「今、俺は……」

「呑まれかけていたな。まったく……いくら希冴姫が守ろうと、貴様自身が望めば精神防壁などあつてないようなものだ。希冴姫の奴め……こうなることくらい予測しておけ。本当に、盲目でクレイジーな奴だ」

落ちていた一枚のカード 恐らく、希冴姫のもの と傍に落ちていた何かの結晶を拾い上げるエース。

「……案ずるな。まだ希望はある」

「え……？」

しばらく思案顔でカードと結晶を見つめていたエースが、突然そんなことを言う。

「希冴姫は確かに逝ったが、力も魂も残っている。これなら……」

「どついうことだ……？」

わけもわからず目を瞬かせる俺を、エースが助け起こす。

「そもそも、あのクレイジーが消えた理由を、貴様は勘違いしているだろう」

「消えた理由……?」

破滅の光による干渉から救うためじゃ……。

「違う。正確には、あの干渉があるのが無かるうが、奴の死は決していた」

「どういうことですか?」

「……お姫様は、彼のペンダントに、力を移譲していた」

アテナの疑問に答えたのは、いつの間にか現れていたルイン。異変を察知して駆けつけてくれたらしい。

「その通りだ。知っているかもしれないが、我ら精霊は、カードから離れるとその力を徐々に失い、やがて消滅する。今の希冴姫のようにな」

「希冴姫……」

「暗くなるな。兎も角、奴は随分前から、貴様のそのペンダントに自らの力をほぼ全て封じていた。最近体調が思わしくなかったのはそのためだ」

「あ……」

希冴姫が体調を崩していたのは、そういうことだったのか……。

「そしてそのペンダントの加護は、お姫様の死と共に、彼女の魂を吸収して完成する予定だった」

ルインの補足に、俺はペンダントをマジマジと見る。

「もつとも、本当にそのペンダントに魂を吸収されれば奴を蘇らせることはできなくなるところだったかな」

「じゃあ……」

「ああ。今そのペンダントの加護は完成していない。だからこそ少しばかり終焉の干渉を許してしまったが……まあ、結果的に無事だったから良しとしろ」

そしてエースは、俺に先ほどの結晶を見せた。

「そこでこれだ」

「え?」

「以前、世界の抑止力……真中希望が希冴姫に何か渡していただろ

う？」

「あ、ああ……」

アテナが戻ってきて、ユーキちゃんがいなくなった時だ。確かに、希望は希冴姫に何かを手渡していた。

「アイツが渡したのは一種のドーピングアイテムのようなものでな。力をほぼ失い、デュエルに力を貸すのが困難になっていた希冴姫の力を一時的に復活させるものだった」

「そんなものを……」

アテナが感心しているが、俺はそれどころではない。

「今、ドーピングと言ったか？」

「そうだ」

「じゃあまさか……」

「当然、副作用がある。復活するのは一デュエル限り。そして、終わった後には力を全て使い果たす」

「な……!？」

「じゃあ、希冴姫が消えたのはそれで……」。

「慌てるな。ただ使い果たすだけではない。この結晶は、死んだ精霊の魂を封じるものだ」

「……世界は、その機能だけお姫様に伝えなかった。彼女の蘇生には、魂が必要」

「ほつとしてもその内あのクレイジーは死んだだろうから、そのくらいなら、という奴だろう。次善策だがな」

「蘇生……じゃあ、希冴姫は」

「で、でも肝心の蘇生はどうやってするんですか？ そんなこと……」

アテナがそう懸念を口にすると、何故かエースとルインは呆れたようにアテナを見た。

「え？ え？ なんですか？」

「……大分、人間生活が長かったらしいな」

「……毒されてる」

二人して溜息を吐く。

「えっと……？」

未だハテナ顔のアテナ。だが、俺はピンと来た。

「アテナ。確かお前の精霊としての名前って……」

「え？ あ、はい。『反魂のスピリチュア』です……ってああっ！
？」

顔にでかかど『すっかり忘れてました！』と書かれている。

「……そう。まさに、適役がいる」

「……まったく。良くできていると言うかなんというか……これも、真中希望の筋書きか？」

それはわからないが、とにかく。

「希冴姫は、助かるんだな？」

「その間抜けがポカしなればな」

「ま、間抜けじゃありませんよ！ ちょっとド忘れしてただけです！ そ、それに、今は人間で、あんまり力もありませんし………確
実ではないですよ」

少し申し訳なさげにそうつぶやくアテナ。

『だいじょぶよん。おねーさんも補助するし、いざとなれば冥王竜もカイエンちゃんたちもいるからさっ！』

「シャルナ……」

「ま、そういうわけだ。そう悲観するな。儀式は我らの神殿で行う。あの場所が最も霊的な意味でも、希冴姫の魂が最も定着しやすいという意味でも優れている」

「あとは、キミ次第」

皆が俺を見つめてくる。答えは、当然決まっていた。

「……行こう。精霊界へ。どっち道、希望もそうした方がいいって
言っていたし、他の皆も連れて行こう」

「それでいい」

エースがニヤリと笑みを見せた。

「あ、でもさだめさんはどうしましょう？ まだ意識が戻っていない

「いみたいですけど……」

「……少なくとも、今は小康状態。私が離れても、時間で全快する」
「……さだめは……」

俺が、今回は置いて行こう、と言いかけたその時。

「ちよおおつと待ったあぁっ!!」

レッド寮、さだめを寝かせておいた部屋の扉が吹き飛んで、そこから見なれた小さな影が飛び出してきた!

「とっつ!!」

「うおっ!?!」

そこから一足飛びに俺に飛びついてくる。なんとか受け止めた。

「さだめっ!?!」

「さだめさん!?! もう起きて大丈夫なんですか離れてください!」

「うあたたっ!?! ちよ、アテナ痛い痛い! 心配しながら引き剥がさないで! いいじゃん久しぶりのお兄ちゃん分なんだから補給させてくれたって!」

「私の補給が終わってないんです!」

「あれから何日経ったと思ってるのさ! もういいでしょ!」

「ダメです! 足りてません!」

「気持ちわかる!」

「わかりあってないでさっさと退け!」

俺の上で言い合う二人をなんとか退かし、改めてさだめに向きあう。

「さだめ。お前本当に大丈夫なのか? 今の今まで寝ていたんだろっ?」

さだめは病人服のままだし、暴れたために少し肌蹴た服の下に見える包帯もそのままだ。

「ん? ああ平気平気。全然オツケー」

心配する俺たちを余所に、さだめは至って元気そう。怪我人とは到底思えない。……先ほどの動きも含めて。

「……いや、そもそもさっきの動き、明らかに怪我人じゃないだろ

「どう考えても」

死にかけて意識不明だったのがいきなりドア吹っ飛ばして二階からダイブ。一足飛びで俺にもダイブ。……健康な人間でも出来るか怪しい。

「怪我人？ 誰が？」

「いや、お前が」

きよとん、と何を言っているのかわからない、とばかりに首をかしげるさだめを全員で指差す。

「そんなもの、速攻完治だよ完治」

シウルシウルと包帯を解いて行くさだめ。その下からは、傷跡一つない綺麗な肌色。……待て、傷跡一つ？

「……あれだけ深くグサつと逝つといて、なんでそんな綺麗に傷跡なくなってるんですか」

「お兄ちゃんの血を輸血して貰ったから。それも大量に」

「理不尽！ けどすごく納得です！」

「いやいやいや！ 納得するな！ 理不尽だろ！」

「怪我なんて輸血して貰って直ぐ治ったよ？ 今まで寝てたのは、幼虫が成虫になる時にさなぎになるのと同じこと」

「貴様……本当に人間か？」

エースが引いている。俺も同感だ。

「さだめの細胞が、お兄ちゃんの血液によって進化したの。今なら百メートル10秒で走れそう！」

運動音痴のさだめにしては大きく出た、とかそういう問題じゃない。

「あの……錯覚かもしれませんがいえ錯覚の筈なんですけど……さだめさん、背と胸、少し大きくなってませんか？」

「進化したからね！」

「絶対有り得んだろっが！ 貴様はアレか、吸血鬼か！？」

例え吸血鬼でも、血を貰っただけで体まで変質はしないと思う。いや、知らんが。

「お兄ちゃんのDNAが、さだめを死の淵から蘇らせるだけじゃ飽き足らず、遙か高みまで昇華させてくれたの！今のさだめはそう！言うなれば新生ニューさだめMark-2セカンドツヴァイドスデュオ！」

「どれだけ二を被せれば気が済むんだお前は」

「というわけで、さだめも一緒に行くからね。当然」

「……こうなったら、何言っても聞かないだろう。」

「わかった。でも、一応病院で検査してからだぞ」

「いよし！」

「ほ、ホントに元気ですね……」

「まったくだ。お陰で、陰鬱な気分も吹き飛んだよ。」

「……まったく何なんだ貴様ら兄妹は……」

「疲れたように溜息を吐くエース。すまん。俺もそう思う。」

「その瞬間。」

「っ！？ エース！」

「後ろ！」

「っな！？」

突然、エースの後ろに終焉の精霊が現れる。俺たちの声に反応し、咄嗟に身を捻ったエースだったが、かわし切れず、終焉の精霊の腕がかすめる。

「ぐっ！？」

「エース！」

「わ、我は心配ない、それより結晶が！」

「な……」

ケケケツと馬鹿にしたような笑い声を上げる終焉の精霊が、その手に希冴姫の魂が入った結晶を摘まんでいる。初めからあの奇襲はあれを狙って……！？

「返せえ！」

「待ちなさい！」

「っ……！」

「Eーヌたちが一斉に攻撃するが、その一瞬前に終焉の精霊は煙のように消えてしまう。……希冴姫の魂と共に。」

「そ、そんな……」

「くっ……我が、油断したから……」

「くっ……」

「そんな……これじゃ、希冴姫が……」

「お兄ちゃん、今の大切なモノ？」

「俺たちが絶望的な気持ちで膝を着く中、唯一平然としていたさだめがそう聞いてくる。」

「さだめ……そうか、さだめは知らなかったか」

「俺はさだめに、先ほどまでの話をしようとして……さだめがその手にぶら下げているものに目が向いた。」

「さだめ……お前、それ……」

「ん？ ああ、さっきの奴の腕。なんか大事なものっぽかったから、取り返しておいたよ。はい」

「消滅する腕を放り捨てて、さだめは俺に希冴姫の結晶を渡す。」

「い、いつの間に……」

「皆の攻撃が届くちよつと前に。サクツと」

「い、いえそれよりも、どうしてさだめさんが終焉の精霊に……」

「そうだ。アイツに俺たち人間の物理攻撃は通用しなかった筈……」

「アテナたちの攻撃より早く動いたのもあり得ないが、そっちはもつとあり得ない。」

「だから、言ったでしょ？ 今のさだめは、さだめであつてさだめ

に非ず！ お兄ちゃんのDNAによって進化したさだめにとっては、それくらい造作もないこと」

「……理不尽」

「ルインに同意。」

「まあ真面目な話。さだめ、嫌ってほどアレに取り憑かれてたからね……多分、もう魂とか、その辺が精霊寄りになっちゃってるんだと思う。なんとなく、それがわかるよ。一回臨死体験したから、そ

れがきつかけかな」

「あ……」

「そうか……殆ど生まれてこの方ずっとアレに憑かれていたから……」

「ま、でもさだめ的にはお兄ちゃんのDNAぱうわの方が納得できるし、嬉しいけど」

「……はは」

「さだめさんらしいですけど……」

「さだめはやっぱりさだめのままだな。変わらない。」

「よし。とにかく、さだめのおかげで希冴姫の魂も無事だった訳だし、精霊界行きの件をみんなにも話して、早いところ精霊界に行こう！」

「はい！」

「わかった」

「了解だ」

「さだめにも説明よろしくね。お兄ちゃん！しかしそれにしても……」

「また、学園休まなきゃな……今度こそ、留年するかも」

「……言わないでくださいセツ。私も、似たようなものです」

「さだめも」

「ユーキちゃんもアレだし……はあ。」

「こうなりゃ、揃って留年してやるか……」

「半ば以上に諦観の籠った溜息を洩らす。」

「……いや、それとも」

「セツ？」

「……いや、精霊界に行く前に、やっておくことがあるのを思い出した」

「やっておくこと？」

「さだめ、お前が起きたのも、今考えれば丁度いい。少し……付き合っって貰うぞ」

「何々？ お出かけ？ デート？」

「いや……帰省、だ」

「っ……」

さだめの表情が強張る。

「そろそろ……決着着けないと、な」

携帯電話を取り出して、ディスプレイに表示された名前を見る。

『御堂 正ただし(父)』

第三期第二十六話「想いの在り処」(後書き)

次回、今まで謎のベールに包まれていた御堂兄妹の父親が登場です。かなりシリアス度合いの強い話になります。ご注意ください。
それでは、悠でした！

第三期最終話「決別」（前書き）

改訂版第三期の最終話です。もうなんでこんな大事な話を改訂前に入れてなかったのか。ある意味、ここが改訂作業のメインイベント。もちろん、キャラを削るのも理由の一つでしたが、この話だけはここに入れておきたかった。そんな話です。アルカナ史上、最もシリアスレベルマックスな話になったかとも思うので、そういう話苦手な人は……いえ、苦手でも見てもらった方がいいでしょう。それでは、どうぞ。

第三期最終話「決別」

アルカナく切り札の騎士く

第三期最終話「決別」

「……うん、そう。だからできれば、今度の休みには帰って来て欲しいんだ」

俺は携帯で、久しぶりに父親と連絡を取っていた。

「頼むよ。母さんの見舞い？ いや、だからさ。俺とさだめの話を優先して欲しいんだ。母さんの見舞いは……大事だってわかってるけどさ」

中々首を縦に振らない父親に、俺は根気強く頼む。

「さだめと……話してやって欲しいんだ。もちろん、俺も同席するし、というか俺からも話があるし。……ありがとう。父さん」

何とか話をつけ、俺は携帯を仕舞った。

「……明後日、か」

父さんとの、話し合い。もしかしたら初めての、家族会議だ。

「さだめ」

「……うん。わかってる。さだめは大丈夫。大変なのは、お父さんだから」

その大変は、何処を意味するのか。仕事か、それとも……。

「大丈夫。俺も付いてる。それに……」

「お兄ちゃん……？」

「いや、何でもない。兎に角、今日はもう休め。病院で保障された

とはいえ、病み上がりには違いないんだからな」

「……うん」

頷き、しかし動かないさだめに、俺は溜息を吐く。

「はぁ。仕方ない。……今回だけだぞ」

さだめを布団の中に。

「あ……」

「言つとくが、何もしないのが最低条件だ。調子に乗ってヘンなことしたら叩きだすからな」

「うん……ありがとう。お兄ちゃん」

「……そうやって妹してれば、普通に抱きしめてもやれるのにな」

「それは、無理かな。さだめにとってお兄ちゃんは、お兄ちゃん、なんて粹で収まりきるものじゃないから」

「……そっか」

ぎゅーっと強く顔を俺の胸に押し付けてくるさだめの頭を撫でながら、俺は眠りに就いた。

深夜、俺は布団を抜け出し、アカデミアの校舎を見上げていた。

「色々……あつたよなあ」

異世界トリップ、そんなベタな展開。だが、俺にとっては掛け替えのない日々で。いつの間にか、ずっとこの世界に居たような錯覚すらしていた。

だけど、もう決めたんだ。この揺り籠に、いつまでもは居られない。俺は意を決して、携帯電話を取り出した。

「もしもし。夜分遅くにすみません。俺です。セツです。実は、折り入って頼みがあるんですが……聞いて貰えますか？ 実は」

「通話口の向こうから、驚いたような気配が伝わってくる。だが、それと共に、どこか納得したような口調で、通話相手は俺の申し出を受けてくれた。」

「さて、と……」

二日後。準備を整えた俺とさだめは、定期船に乗り込み、実家を目指した。

「……っていつか、こっちの世界の実家に帰るのなんて初めてだよ」「そうだな。父さんとは何度か電話で話したが……」

どうやら、別世界の俺とか、そういう意識はないらしかった。希望に聞いてみれば詳しいこともわかるんだろうが……元世界の父さんたちと、そう大きな違いはないようだった。

「……」

さだめは、朝から妙に口数が少ない。普段のハイテンションさが嘘のようになりを潜めている。

「緊張してるのか？」

「……別に」

俺に対する言葉数も少なく、そっけない。珍しい状態と言えるかもしれない。

「怖いか？」

「……さだめを怖がってるのは、お父さんたちでしょ」

そう言っただけ否定するが、俺と目を合わせないさだめ自身、わかっているのだろう。

怖い。

自分を否定した両親に会うのが。

正確には、会うのは父親。母親は今、病院で療養生活を送っている。

「最初は、俺が話そう。さだめは、とりあえず自分の部屋にでもいるといい」

「……ん」

家に着いて……元の世界と寸分の違いもない我が家に、懐かしさ

を覚えた俺とさだめは鍵を開けて扉をくぐった。

まだ、父さんは帰って来ていないようだった。鍵がかかっていたことから想像はついていたが、いきなり鉢合わせしなかったことに、さだめは安堵のため息を吐いた。

「じゃあ、さだめは部屋に行ってるね」

「ああ。父さんが来たら……」

「うん。呼んで。行くから」

それだけ言い残して、さだめはさっさと二階の自室へ引っ込んでしまった。

「……あれ、なんだ？ 結構、寂しいぞ」

妹からそっけない対応をされる、なんて世のお兄ちゃんにはありふれているだろうに、これまで一切そういう経験がなかったからわからなかった。

「うわ、うわうわうわ。少し涙ぐんできた」

シスコンだ。我ながら凄いシスコンだ。さだめのことをとやかく言えない。

「しかし……」

あのさだめが、ここまで余裕をなくす辺り、やっぱり産みの親が持つ影響力ってものは大きいらしい。

「俺は……そうでもなかったけどな」

今日の覚悟も、あっさりと決まってしまった。もしかしたら、さだめ以上に俺は人間として大事どころが狂っているのかもしれない。

「ま、今更か」

兄を愛する妹くらい、いるだろう。行き過ぎた愛情から、刃傷沙汰になることもないとは言えない。両方を兼ね備えた存在だって、広い世界に居ないとも限らないし、創作でならありふれているかも

しれない。だが、それを甘受し、尚も愛そうという奴は……。

「……聞いたこと、ないかもな」
考えていたことがある。

さだめは、終焉に取り憑かれて、ああなった。だが、俺は？ 何かに取り憑かれたわけでも、異質な産まれだったわけでもなく、ただ普通の幼児でしかなかった筈の俺は、なんでさだめを受け入れられた？ それでいてどうして、曲がりなりにも普通の価値観を持って社会に溶け込める？

無駄スキル？ さだめのため？ ならその根源は？ 俺は何故……。

「こうして今、ここに居る……？」

『私に言わせれば、あの子のなんかより、キミの方がよっぽど病んでいる。あの子と十年以上も一緒にいて、今も明るく何事もないように毎日を過ごしている、キミの方が』

ルインにかつて言われた言葉が、脳裏を過る。

『清濁呑み乾すキミが、自分だけは受け入れられないのね』

「そうさ……俺は、何時だって……」

自分が、一番怖くて堪らない……！

ガチャリ……。

「お帰り」

「ああ……ただいま。切」

「父さん……」

さあ、ここからだ。ここから、俺は……。

「久しぶり、と言ったらいいのか？」

「……そうだな。最後に会ったのは、一年半くらい前か」

「……ああ」

本当のことを言えば、その頃俺はこっちにいなかったのだから、

知らないのだが。その辺りの事情は少々　今更アテナを恨むも何もないが　残念だ。俺たちの、実際の両親との決着は、もう望めないのだから。

「仕事は、順調か？」

「ああ。おかげ様で、今度昇進が決まったよ。お前たちへの仕送りも、なんならもつと増やせそうだ」

「……そうか。課長？」

「部長に、な。そうか。それも、話してなかったか……」

空気が、重たかった。家族の会話とは、とても思えないくらい、ぎこちなかった。そりゃあそうだ。なんってったって……。

「父さんとまともに会話したのなんて、二年やそこらじゃすまないしな」

「……そうだな」

会ったの自体、一年半ぶりくらいだ。物心ついてから、俺たち兄妹はロクに両親と会話した記憶もない。さだめに至っては、皆無に近いだろう。

殆ど、他人。そんな、親子関係。

「……」

「……」

だから、一端会話が途切れると、何を話していいのかわからなくなる。

それでも、何時までも黙っているわけにはいかない。態々時間を作ってくれた父さんに悪いし……第一、それじゃあここに来た意味がない。

「あの、さ」

「う、ん……なんだ？」

目も、合わせられない。気まずくて、ぎこちなくて。

「ホントは、さ。俺の話から先にしようかと思ってたんだけど、やっぱり、やめるな」

よく考えれば、まだ、希望はあるんだ。父さんの態度次第で、俺

からの話はなくなる……そんなことも、あるかもしれない。

「だから先に……話してくれよ。さだめと」

「ッ……！」

ぐっ、と身体を強張らせる父さん。

「いや……」

「頼むから……！ 話してくれ。もう、アイツは……さだめは、昔のアイツじゃないんだから……！」

この期に及んで、煮え切らない父さんの態度に、業を煮やしてさだめを呼ぶ。

トントン、と階段を下りる軽い足音が聞こえてくる。父さんの顔色は、悪くなるばかり。

「……なんで、そんな顔してるの？」

「っあ……！」

さだめの、暗く、沈んだ声に、父さんが小さく声を漏らす。

「いつも……そう」
階段を降り切ったさだめは、リビングの入り口で、顔を俯かせていた。

「いつも、そだよ。いつだって、お父さんたちはさだめを見てくれない……」

「……」

さだめの声に、父さんは何も言わない。言えない。

「わかってる……！ さだめが、さだめがおかしかったから、お父さんたち、怖かったんでしょ？ わかってるよ……でも」

顔を上げたさだめは、泣いていた。

「さだめ、お父さんに手を繋いでもらったこと、ないよ……。頭撫でてもらったこと、ないよ。抱きしめて貰ったこと、ないよ……！」
もちろん、さだめにもわかってる。狂気に染まっていた自分に、そんな普通の親子のように接することなど出来ない。それでも、その言葉を抑えきれない。その理由は……。

「いつだって……さだめの手を取ってくれるのはお兄ちゃん。撫で

てくれるのはお兄ちゃん。抱きしめてくれるのはお兄ちゃん。……
さだめを愛してくれるのは……全部全部全部！……お兄ちゃん、だ
け」

俺が、いたから……。

「一番、一番お兄ちゃんが怖かった筈なのに。お兄ちゃんが、一番
さだめに傷つけられていた筈なのに……。それでもお兄ちゃんは、
さだめを守ってくれたよ。なのに……」

さだめは、少しの間沈黙した。そして、やがてポツリと呟いた。
「さだめ、お兄ちゃんが好きな。兄妹だからってことじゃない。
一人の女の子として、お兄ちゃんが好き」

「さだめ……？」

今更だろう。俺は元より、父さんだって、そんなこと重々承知し
ている。なのに、どうして今更……？

「きっかけは、狂気。でも、想いが育まれたのは、お兄ちゃんだっ
たから。お兄ちゃんが、受け入れてくれなければ、さだめは狂気に
呑まれて終わってた。さだめにとって、お兄ちゃんは冗談抜きで全
てなの。狂気を抑えてくれたのも、狂気を消してくれたのも、全部、
お兄ちゃんだったから」

さだめは一步父さんに向かって足を踏み出す。

「お父さん。一度でいい。一度でいいから……さだめを見て」

それが、さだめの本音。狂気の元となった終焉が消えたさだめの、
本当の願い。

「……さだめは、こんなに素直な娘だっただんな」

長い、長い沈黙の後、父さんは疲れたような声でそう言った。

「そうだ。父さん。本来のさだめは、素直で優しい、普通の娘だよ」
即答した。そんなこと、俺は昔から、最初からわかっていた。

「切は……最初からわかっていたんだな」

「……兄、だからな」

「そうか……父さんは、いや、父さんたちは、親なのに、そんなこ
と考えもしなかった。ただ、異常な娘の暴走に、震えることしか出

来なかった」

「普通は、そつだよ。お兄ちゃんは、特別」

「そつだな……」

「おいおい、俺は別に……」

「はは……」

父さんが、少しだけ笑った。空気が少しだけ、ほんの少しだけ軽くなる。……しかし。

「……だが」

「父さん？」

「だがそれでも、父さんは臆病だ」

「お父さん……」

「本当のさだめを知った今でも、過去のさだめが目に焼き付いて離れない。あの時感じた恐怖が、父さんを縛るんだ……」

それは、何らおかしなことじゃないのかもしれない。目の前で息子が傷つけられ、妻が心を壊し、その原因となったのが自分の娘だった。父さんの心労はどれほどだっただろう。

「私の心は摩耗してしまった。何かに集中していないと、心が持ちそうにない。だから私は、遮二無二働き、現実から目を背けるしか出来ない。それが、さだめをまた傷つけると分かっている」

父さんは額に手を当てて項垂れ、首を振った。

「すまない、さだめ、切。私は……最低の父親だ」

涙。さだめの手を取ってやりたい親心と、心の底から湧き上がる根源的な恐怖の板ばさみになり、行き場を無くした想いが、雫となつて頬を伝う。

「十年だ。母さんが病院に入って、もう十年たった。それだけの時間、目を背け続けても、逃げ続けても、私は、まだ逃げ足りないらしい……」

「……え？」

「十、年……？」

十年。それは、俺たちの記憶と一致する。こちらの世界に来て若

返り、ずれた筈の記憶と。

「まさか……父さん？」

「こつちの世界の、とか……そんなんじゃないか？」

「……そうだ」

「な……」

愕然とした。確かに、しっかり確認したことはなかった。だが、まさか父さんまで……。

「私も、確信がなかったから話せなかったが……今日話してみて、漸く確信が持てたよ」

「じゃあ……本当に、父さんなのか？」

「そうだ。別世界、だったか。そんなものがあるなどと、想像もしていなかったが……見覚えのない会社、見覚えのないテレビ番組、各地で宣伝されているデュエルモンスターズ……それに、全てのことを話してくれた子がいてね……。それでも何処か信じられなかったが、お前たちとも話して、流石に頭の固い中年でも、信じずにはいられなかったよ」

「全てを話してくれた人……？ それって」

「可愛い、少女だったよ」

アテナ……！ 以前失踪していた時に、家にも来ていたのか……。

「こちらが気の毒になるくらい謝ってきてね。あの時はどうしようかと、途方に暮れたものだよ」

アテナ……。

アテナのことは気になるが、とりあえずアテナのことは置いておこう。今は……。

「お父さんが、お父さんだって言うなら……わかりやすいかな。お父さんはさだめを……」

「……すまない」

「……そっか」

長い沈黙の後、さだめは寂しそうにそう言って目を伏せた。

「……じゃあ、父さん。これで終わりにしよう」

結論は出た。俺は、話をしなくちゃならない。

「切……?」

「いつまでも、こんな……辛うじて繋がっているような親子関係じゃいられない。今日俺は、それをはっきりさせに来たんだ」

「お兄ちゃん……?」

「父さん。俺とさだめは、今日限りで父さんたちと縁を切る」

「切!?!」

「ゴメン。でも、もうこれ以上、さだめを苦しめるだけの関係を、続けさせるわけにはいかない。俺が……さだめを守るから」

「お兄ちゃん……」

「だから、もう仕送りは要らない。学費も、何もなくていいから……もう、さだめに近づかないでくれ」

「切……あ」

父さんは、自分でも気付いたのだろう。さだめに近づかないでくれと言われた瞬間、確かに自分が安堵していたことに。愕然とした表情で、自失している。

「……あ、し、しかし、どうするつもりだ。仕送りはいいって……学費まで」

「俺が稼ぐ。俺は……アカデミアをやめるよ」

「お兄ちゃん!?!」

俺の言葉に、父さんだけじゃなくさだめまで驚愕の声を上げた。

「アカデミアをやめるって……だが、それでは」

「そうだよ! お兄ちゃんがアカデミアをやめてまで、さだめを通わせることないよ! さだめは……さだめも」

「駄目だ。さだめは通え。絶対に」

「でも!」

「さだめは!」

「っ!?!」

「……さだめは、アカデミアで、やっと友達が出来ただろう? 学校で、友達と机を並べて勉強することだって、今まではしてこなか

つたんだ。俺は良い。元の世界で散々やってきたし、そもそも俺は実質大学生だ。高校レベルの勉強は修めてる」

「それは、でも……」

「切、お前が稼ぐって、伝手はあるのか？」

「当然。もう手は打ってある。俺は……プロデュエリストになるつもりだ」

「え！？」

「実は、もうカイザーに……いや、丸藤プロに話がついてる。俺の実力なら、十分以上にプロとしてやっていける。推薦してくれるってさ」

勿論、プロテストも受けなければならない。だが、プロテストの学科問題は俺からすれば話にならない低レベル問題だったし、実力の方はお墨付きだ。可能性としては、十分すぎるだろう。

「それに、実はもう大分アカデミアの方で欠席が嵩んでてな……潮時だと思ってた」

これからまた、休むことになるだろう。だから、それならいっそ、と言う奴だ。

「よしんばそれが駄目でも、俺は色々、十分以上に稼げる手段を持つてるしな」

無駄スキル……いや、もう無駄とは呼べないか。俺の技能は、どうやらみんなプロレベルに達しているらしい。

「だから……今日でお別れだ。父さん」

「切……」

「俺たちは、きつとまた、父さんを傷つける。父さんも……。だから、最後にしよう」

親子で、傷つけあうのは。

「父さんは今、俺たちを傷つけた。俺たちは今日、父さんを傷つける。それで、最後だ」

父さんがさだめを拒絶した時点で、腹は決まっていた。取り返しの付かないモノ。お互いに、それを失って……終わろう。

「ごめん。父さん。最低の息子で」

「……いいや。私こそ、最低の親だった。もしかしたら、それが最善なのかもしれないな」

「次善、だろ」

「……そうだな」

最善は、言うまでもなく、わだかまりを捨て、普通の親子に戻る
こと。でもそれは、最早叶わない。

「今日は……泊まって行くのか？」

「……いや、やめておくよ。もう、未練は残したくないんだ」

「そうか……」

俺は席を立つ。そして決別の証として、深く、深く頭を下げる。

「……今日は、どうもお邪魔いたしました。これでお暇させていただきます。御堂さん」

「お、兄ちゃん……」

涙は見せない。さだめも、父さんも流した涙を、俺だけは見せない。それは、未練だ。例え後で泣くことになったとしても、ここで涙は見せられない。

「……行こう、さだめ」

「う、うん……」

おずおずと、さだめも俺の後に続く。俺は、背後から聞こえてくる鳴咽に押されるようにして、玄関を抜けた。

「……さようなら」

「……お兄ちゃん」

「……なんだ？」

家から大分離れたころ、さだめはお兄ちゃんの背中に声をかけた。

「本当に、良かったの？」

「……ああ」

「でも、さだめはともかく、お兄ちゃんにとっては……」
「いいんだ」

こちらに顔を向けることもせず、そう言い切るお兄ちゃん。

「……ごめんね。お兄ちゃん」

「何がだ。お前が謝ることなんて何も無いよ」

「……………うん」

また、まただ。

「また……………」

さだめは、奪ってしまった。お兄ちゃんから。今度は、両親を。

さだめがいなければ。

それは、さだめが正気に戻ってから、何度となく考えてきた言葉。そして、何度となく首を振り、考えないようにしてきた言葉。でも今回は、何度首を振っても消えてくれない、その言葉。

さだめがいなければ、お兄ちゃんは家族と幸せに暮らせたはず。

さだめがいなければ、お兄ちゃんは普通に恋して、普通に結婚して、普通に生きていけたはず。

でも。

「……………そう思っちゃ、いけないよね」

そう思ったら、お兄ちゃんの今までの行動が無駄になる。お兄ちゃんの受けた痛みが、傷が、全て無意味なものになる。だから、だからさだめは……………。

「おに〜いちゃんっ」

甘えた声で、お兄ちゃんの腕に飛びつく。

「うわっ!?! どうしたさだめ」

「なんでもな〜い」

「なんでも無いなら離れろ」

「い〜や! 今日絶対離れてあげない!」

「ったく……………」

苦笑したお兄ちゃんが、さだめが抱きしめている反対の手でさだめの頭を撫でてくれる。

「えへへ……」

さだめが、お兄ちゃんから奪うことしかできないのなら。いくら奪っても、いくら傷つけても、それでも足りないっていうのなら。

お兄ちゃんが付き合ってくれる限り、さだめはさだめで居続けよう。せめて、世界中の誰よりも、幸せな人間で居続けよう。それが、さだめの義務で、責任だから。そのために……。

「さだめは、ずっと一緒だからね」

「……言われなくても、そうなるだろうさ」

さだめは、さだめの覚悟を決める。お兄ちゃんの覚悟を、無にしないために。お兄ちゃんに負けない、強い覚悟を。

そうでなければ、この絶対無敵で最高の男の人に、釣り合うことなんて出来ないのだから。

第三期最終話「決別」(後書き)

と言う感じで、第三期は終了になります。

いやー、しかし本当に重たい話になりました。ですが、そこそこの手応えは感じております。シリアスの方が手応えは感じやすいですね。やっぱり。

まあ……あんまり多くは語りません。疑問等ありましたら、感想の方へ願います。

それでは、悠でした！

特別編「？アルカナクロスワールド三人の転生者？」（前書き）

注意書きです。

今回の話はかなり異色です。純粹にアルカナを楽しんでいただいている皆さんに、受け入れられない可能性もあつたりします。そもそも、セツたちメインキャラが影も形もないので。その上、デュエルもアレです。一応、真中希望に関する設定が明かされていますが、アルカナ本編にはちつとも関係ないので別に無視しても構いません。知れば、少しは希望のことがわかるかな？ くらいのもんです。

あと、秋代さんにも先んじて謝つときます。ごめんなさい。酷いです。色んな意味で、酷いです。

とにかく、読む際は色んな意味で心して御閲覧ください。

特別編「？アルカナクロスワールド三人の転生者？」

アルカナ〜切り札の騎士〜

特別編「？アルカナクロスワールド三人の転生者？」

「……ふう」

静寂に包まれた夜のアカデミア。その来賓室を臨時の執務室として借り受けている真中希望は、自らの前の景色が歪んだことに、心からの嘆息を漏らした。

「まったく。書類仕事で忙しいロートルを、表舞台にあげないで欲しいね」

そう言いつつ、希望はその手にデュエルディスクを携えて、世界の綻び。通称“時空の歪”に体を滑り込ませた。

歪から出た希望の目の前には、一件のログハウス。

「ふむ。『魔法先生ネギま！』エヴァンジェリンのログハウス、か。本格的に異世界だね。ある意味、セツたちがこちらに巻き込まれなくてよかったと考えるべきか」

基本的に一般人のセツたちを、少しの間だけだとしても魔法だの鬼だの魔族だのが跋扈する（と言うほどいないけど）世界に連れていくわけにもいかない。

「とりあえず……お邪魔します」

「お、来た来た」

「待つとつたえ〜」

「今日はよろしく」

「……説明が不要なのは、尺を縮める上では合理的でも、僕としては実に不満だね」

何事もなかったかのようにこちらに挨拶してくる三人の転生者、南武貴史、近衛薫、カスミ・ヴェネーラに、少し希望は残念そうに溜息を吐く。

「おいカスミ。……？ ああ、お前か。今日カスミが言っていた客とやらは」

「はじめまして。エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。吸血鬼の真祖。『闇の福音』『人形遣い』『悪しき音ずれ』……さて、どの名で呼ばれるのがお好みかな？」

丁度いいカモが来たので強引に解説に持つて行く。

「……何でもいい」

「では、キティと」

「よりもよつてその名を選ぶな！」

「解説しよう。エヴァンジェリンの本名はエヴァンジェリン・アナシア・キティ・マクダウエル。本人はキティと呼ばれることを嫌っているよ」

「解説出来るほど熟知しているなら呼ぶな！」

一通り解説とエヴァ弄りが済んだ希望は、改めて三人を見渡す。

「さて。それじゃあ僕の相手は誰かな？」

「あ？ なんだ貴様まさかカスミたちに挑もうというのか？ 命知らずも居たものだな」

はん、と何処か馬鹿にしたようなエヴァに、希望は苦笑する。

「違うよ。それも楽しそうだけど、今回はコレ」

と腕に付けたデュエルディスクを示す。

「ああ……こいつらがたまにやっているカードゲームか……」
なるほど、とエヴァが頷いている。

「まあ、直に戦り合っても、そうそう負けるつもりもないけど、そんな大災害巻き起こしたいわけじゃないしね。僕も」

「だな」。俺らがマジでやりあったらホント、この麻帆良終わるし……それ以前に、私は全力出せないんだが……」

カスミはある事情（本編を見てね）により、魔力が封じられている。

「そやなあ……そういうんは、カスミが本調子に戻ってからやな」

「ふむ。じゃあこうしようか。キミらが僕に勝ったら、カスミの呪い、解いてあげよう」

「できるのか!？」

「全然余裕。僕は、キミらとは違うタイプのチートだからね」

「よし。勝て貴史!」

「そりゃ負ける気はないっての」

雑談はさておき。

「んじゃ、早速始めつとすつか!」

「あ、ちよい待ち。どうせなら、それらしい場所でやるうじゃないか」

そう言つと希望は掌から光球を生み出す。

「うは、チート魔力」

「やっぱ、アンタも大概チートか……」

「何するん?」

興味深げに尋ねる三人に、希望はシーつと唇に指を当てる。

「まあ、見てて。コホン。……解けよ、創世の光。紡がれよ、律法の世界」

希望の言葉に呼応して、光球が毛糸のように解け、当たりの風景が変化していく。

やがて、周囲はエヴァのログハウスではなくデュエルアカデミアのデュエルリングそっくりに変化していた。

「何だこれ? 固有結界か?」

「んにゃ。似てるけど、全く別物だよ。まあ、気にしないことだね」

気付けば貴史もデュエルディスクを装備していた。服装もデュエルアカデミアのものだ。

「うお、いつの間に……」

「世界と一緒に服も再構築しただけだから。気にしないで」

直接戦闘タイプのチートというより、こつこつ補助系のチートなのだろうか。

「よし。それじゃあ行け。薫」

「ってウチ？」

予想外だったのか、貴史の指名に自分を指差す薫。

「考えても見る。俺らの幸運ランクを」

「私なんて論外中の論外でしょうが。負けられないんだし。主に私の自由のために！」

「うーんしゃーないな」

貴史からデュエルディスクを受け取った薫がリングに上がる。

「ほんなら、今回はウチが相手になるえ。ええか？」

「もちろん。お手柔らかに、よろしく」

「それは、保障できひんなあ」

確かに。チートキャラ同士。互いに“お手柔らかに”済むとは到底思えなかった。

「デュエル！！」

手札を見た薫が嬉々としてカードをドロースしようと……

「はい。僕の勝ち」

「へ？」

『エクゾディア』

「へ？ ちょ、はあああああああ！？」

「いやーいい汗掻いたー」

「いや汗掻いてへんやん！ ちゅーかそれはないやろ！？」

「ふむ？」

希望はデッキを確認し、エクゾディアが各一枚ずつしか入っていないことを確かめてから、改めて首をかしげた。

「特に、問題はなさそうだけど」

「あるやる!?」

「君たちの挑戦状。触れ込みは『チートモンスターに勝てるか?』だったから。うん。いかなるチートであってもとりあえず100%勝てる展開が遊戯王にはあるということ……」

「積み込みか?」

「いや、君たちがチートカード全開で来るつもりなら、僕はチート能力全開で行こうかと」

「チート全開だと初手からエクゾディアが全揃いなのか」
「確実に」

貴史たちの顔には皆一様に『しまった。その展開は予想してなかった!』と書いてある。

「よし。歪を消すためのデュエル自体は終わった。帰るか」

『帰るな!』

引きとめられた。

「なになかな?」

「とりあえず、エクゾディアはヤメロ」

「良いだろう」

あつさり希望は頷く。

「じゃあ改めて……」

「『デュエル!!』」

「僕の先攻。ドロー。手札から永続魔法『魔力節約術』発動。更に『終焉のカウントダウン』をノーコストで使用。『ターンジャンプ』×3! 計18ターン経過。カード一枚セットしてターンエンド」
「……オチ、読めた。ウチのターンドロー」

「リバーストラップ『運命の火時計』ターンカウントを一進めて特殊勝利条件達成はいお疲れー」

「『特殊勝利はヤメロ!』」

「我儘だねー」

しかし、希望は良いだろう。と頷き、改めて別のデッキをシャッ

フルする。

「ウチ、もうやりたなくなってきたわ……」

「がんばれ！ 薫！」

「私の自由のために！」

「『デュエル！』」

「僕のターン。モンスターをセット。ターンエンド」

今度はまともか。いやしかし油断は出来まい。

「ウチのターン、ドロー！ 『ダンディ・ライオン』 を守備表示。カードをセットしてエンドや」

「僕のターン、ドロー。僕はモンスターを反転召喚」

現れたのは、物凄くリアルな顔の人面壺。そう……

「だ……」

「『ダイス・ポット』、だ」

あ、またオチ読めた〜と頂垂れた薫を尻目に、希望はダイスを振る。

「はい、6ね」

「頑張れ薫！ お前の幸運ランクならいける！」

「そんなこと言われてもなあ……」

薫の目は5。

「というわけで、6000ポイントダメージプレゼント。はいまたしゅーりょー」

「改めて聞くとひでえ！？ なんだ6000ポイントダメージって！？」

とりあえず、『F・G・D』のダイレクトの方がまだ良心的と言う辺りが狂っている。ライフポイント4000ではどちらも死に直結する辺りは変わらないが。

「なんだ。特殊勝利はダメっていうから……」

「その圧倒的な運命力はどうにかして頂けませんかねえ！？」

詰め寄る貴史に、希望はチツチと指を振る。

「僕は基本、チートに対しては容赦しない。折角作ったオリジナル

カードを名前すら出させない程度には」

「なら名前だけでも……『プーーーーー』ってない!?!」

「容赦は、しない」

「ホントにひでえ!」

「チートカードを作った時点で、僕はこうすることを決めていた。そう、まともなデュエルはさせてやらない、と」

「それでも徐々に理不尽では無くしていつていつてもりなんだよ? と言う希望。確かに、最後の『ダイス・ポット』くらいなら実際にあり得ないこともない。

「じゃあ、次はまともになるのか?」

「なるとも。実に合理的な手段で封殺して見せよう」

「結局封殺されるんやな……」

「デュエル」

「僕はカードを一枚セット。『王虎ワンフー』を攻撃表示で召喚。

永続魔法『強者の苦痛』を発動し、ターンエンド」

「ウチのターン、ドロー。ワンフーで……生贄揃えさせんつもりやな。けど、そうはさせへんで! 『サイバー・ドラゴン』特殊召喚モンスターをセットして『二重召喚』や! この二体をリリースして……」

「あ、リバースカード『生贄封じの仮面』ね。生贄禁止」

「なああっ!?!」

「おい……チートモンスターって、みんな生贄……」

「必要だな」

「ってことは……」

チート封殺。

「では、僕のターン。ドロー。『抹殺の使徒』と『地砕き』で二体を破壊。『ゴブリン突撃部隊』を攻撃表示で召喚し、二体のモンスターでダイレクトアタック。はい、四度目お疲れー」

完殺。

「ま、まともな手段で完封された……」

「いや、微妙にまともではなかった気もするけど」

「ふ……まあ元々君たちがフツかけてきたケンカだ。全力で買ってみた」

「とりあえず……前半三つはどうしようもないことはわかった」

「君たちとは、チートの土俵が違う。出直してくるといい」

「カッコいいこと言っているようで微妙なセリフだなそれ」

「でも実際、私らの能力自体はカードゲームに何にも影響ないな」

「そのためのチートモンスターなんだが……」

「僕の手にかかれば、自分と相手の手札やデッキを操作することも容易い」

「そりゃ勝てんなあ……」

「って、初めから私の呪い解くつもりなかっただろ！」

「そりゃそうだよ。許可もなしにそんなことするわけないだろ？」

「万一負けたらどうするつもりだったんだ……」

「億が一にもそれはないけど、そうなったら解いてすぐかけ直す」

「それ最悪じゃね？」

「+ も付けよう。名付けて、『にんにくを取らずにはいられないけど取ったらお腹を壊す』呪い」

「いらんわ！」

「そう？ じゃあネギを……」

「だからいらんわ！」

「じゃあ貴史に、『女性の胸を揉んだら死に等しい激痛が走る』呪いとか」

「酷い嫌がらせ！ 俺に死ねと言うのか！？」

「大丈夫。ほら、あくまでも『女性の』胸を揉んだら、だから、男の胸を……」

「怖気が走るわ！」

「キミんとこの作者さん好きでしょ？ そういつの」

「楽屋ネタかよ！ 俺は好きじゃねえよ！」

「じゃあ薫……は、いいか。別に」

「何でや！？　なんでここに来てウチは何にもないん！？　逆に気味悪いわ！」

「おや、そろそろツッコミ疲れてきたかな、と思ったから配慮しただけなんだが……物足りない？」

「お気遣いどうも！」

「物足りない。僕が」

「お前がかよ！」

「デュエルもあっさり終わってしまったし、解説らしい解説も出来なかった。ならせめて、散々弄ぶくらいしないと欲求不満が溜まってしまっよ」

「じゃああっさり終わらせるなよ！　何のためのコラボだ！」

「お互いの作品の宣伝のためだろう？　別にコラボ“デュエル”と言っわけでもなし」

「元も子もない！」

「あ、ちなみに、今回僕が君たちの世界に来たように描写されてるけど、ぶっちゃけたところ正確には君たちが僕らの世界に来ているが正解だから」

「それ言う意味あったか！？　そしてメタ！」

「すなわち、君たち僕に翻弄されるのは必定」

ああなるほど。要するに、自分たちがこの世界の神に弄ばれてるようなもんだといたいのだろう。

「くっそう……あの屑（神）ならどうとでもなっただが……」

「その神すら、僕の中の一因子に過ぎないのだからね。当然、格は圧倒的に上だ」

サラリと神以上を宣言する希望。貴史たちは俄然興味が湧いたのか、希望に問いかける。

「なあ、どうせだから、あんたの正体、もっと詳しく教えてくれな
いか？」

その質問に、希望はふむ。と少し考え込んで、やがて「いいだろう」と頷きを返した。

「それなら、僕の解説欲求も少しは収まるし。……本当は創世以来永遠とも思える歴史も含めて解説したいところだけれど……まあ、それはいくらなんでも蛇足に過ぎるか」

歴史の解説、までいったところで、貴史たちがげんなりとした顔を見せたので、少し残念そうに肩をすくめる。

「……さて。では、君たちにもわかりやすく、型月風に説明しよう」
貴史たちとはかく、この小説を読んでいる人間には果たして優しいかどうかは分からないのだが。

「僕は、根源の渦。アカシックレコード。それを裡に宿した、ただの人間だ。元々はね」

「人間？」

「キミらだって、一応はただの一般人から転生者として能力を手に入れたんだろう？ まあ、僕は元々持っていた資質が開花しただけなんだが」

それを言われれば頷くしかない。

「で、まあアカシックレコードなんてものを人間が扱いきれるわけもない。力を手にした時点で僕は人から外れた。いや、酷いものだったよ。何せ、創世以前からのありとあらゆる事象、歴史が一気に頭に流れ込んできたんだ。『人としての僕』なんてもの、一瞬で塵と化したね」

何せ、ありとあらゆる存在の生と死を、一瞬で体験したも同然だ。それだけでなく、あらゆる喜怒哀楽、悲劇も喜劇も問わず、丸ごとだ。欠片でも入ればそれだけで“人”ごとき小さな器などが耐え切れる筈もない。

「……とはいえ、僕は元々、アカシックレコードの器として用意された存在だったらしくてね。存在の変質と引き換えに、僕は耐えた。耐えられて、しまった」

常時送り込まれ続ける膨大過ぎる情報量。ありとあらゆる悲劇も喜劇も、常に刻みつけられながら生きている、そう希望は語った。

「丁度いい機会だ。転生者諸君。力があれば、何物も成せるとは思

われないことだ。僕でさえ、全知ではあれど全能ではない。あらゆる全てを知りながら、救えるのは一粒の砂の如し、だ。『力がなくては守れない』、『力があれば守れるのに』というのは、正しく都合のいい妄想にすぎない」

君たちも、それは既に知っているかもしれないけど。そう希望は付け足した。

「神も悪魔も、超越者も転生者も、世界すら、全てを救えない。なまじ大きな力を持っていると、救えなかった時の痛みは増す。だからせめて、絶望しないことだ。一つでいい、君たちが絶対に守る誓いを決めるといい」

「誓い？」

「そうだ。自分が必ず為すべきを決め、為すべきを為せ。それを誓い、その誓いを守る限り、君たちは最強だ。例え、他の何かを失っても、君たちは“何か”を得られるだろう」

「希望……」

「希望にも、あるん？ 守るべきもの」

薫の言葉に、希望はふつ、と寂しげな笑みを浮かべた。

「……いつも、守れないんだ。僕が守ると誓ったもの、皆。いつも、守られてしまうんだ。僕は。僕が守ると誓ったものに」

今は迷っている。そう、希望は話す。

「僕が守るものはなんなのか。愛すると誓ったヒトなのか、それとも理想か、或いは世界。あらゆるものを知っているから、わからない。あらゆるものと同ーだから、人が思う“守るべきもの”の数だけ、僕にも守りたいものがある」

人として生きた時間が限りなく少なかったから。数多の記憶に溺れてしまう。無数の想いにかき消される。

「……君たちにも、あるんだろう？ 守るべきものが。僕には、自分のことのようにわかるよ。……いや、『ように』じゃないな。僕は、君たちでもあるのだから」

だから、どうか悲劇にならないように。

「……喜劇もハッピーエンドも見慣れたさ。でもね。世界には、バッドエンドが多すぎる。喜びよりも、哀しみや苦しみが溢れている。だから僕は、会う人皆にこう言おう」

ハッピーエンドを見せてくれ。バッドエンドは見飽きたよ、と……。

「今、もし僕に、守りたい誓いがあるならば……」
少しでも多くの幸せを。

「僅かでも、些細でもいい。幸せな景色を、心に刻みたい。根源に刻まれる物語を、少しでも多くの幸せに染めたいのさ」

なんだ、結局自分のためでしかないな。と希望は苦笑を洩らす。

「……そりゃ勝てねえよなあ……」

「そうだな」

「やね」

今も尚起き続けている悲劇は、全て希望にとっての悲劇なのだ。

今も尚繰り返し返される喜劇は、希望にとっての喜劇なのだ。希望自身が最早数えることも馬鹿らしい程に非業の死を遂げ、幸せな最期を看取られ、大事な人を失い続けているのだ。

「……ある物語のセリフを振ろう」

希望が手をかざし、同時に世界がほどけていく。

「僕に勝ちたければ、僕以上の地獄を見つけるがいい。或いは……」

それ以上の天国を見つけて欲しい。

「さらばだ。別世界の勇者たち。君たちのこれから紡ぐであろう喜劇の全てを、僕もまた、この身に刻もう」

世界が解け、元居たログハウスに戻っていく。同時に希望の姿も薄れ、元の世界に戻っていく。

「……また来いよ！」

「まっとするえ」

「私の呪いが解けた頃に来い。今度は直接戦い合おう」

三者三様の反応に希望は微笑む。

「……来ることはない。なぜなら、僕は世界。僕はどの世界にも遍

在する風のようなもの。また会おう。願わくば、君たちにほんの少しだけ優しい世界がありますように」

言葉だけ。何の力もないおまじない。でも人は、時にその言葉に救われ、その言葉に奮起する。

「……僕との出会いが、君たちにとって佳いものであったことを、願っているよ」

そして、世界の境界は別たれた。

「あら、おかえり希望」

「ただいま。光」

「どうせ知ってるんでしょうけど、報告よ」

「ああ、わかっているよ」

……希沓姫が消え、セツは精霊界へと行く決意をした、ということ。

「……ここまでは、全て予想してあったメインプランの通り……最善とは言わないが、少なくとも、最悪ではない」

……やることは多い。

「とりあえず、凜の事務所に連絡をとろう」

「……希望」

「ん？ 何かな？」

「……なんでもないわよ。その内、息抜きに旅行でも行きましょってだけ」

「……そうだね。ありがとう、光。気遣ってくれて」

「あんたもたまには、息抜きしないとね。私一人くらいは、あなたのこと気遣ってやっても罰は当たらないでしょ。あんたが辛いと、私も辛いんだから」

光に言われて、僕は思いたず。

「……ああ、そうだった。別に僕は、特別でも何でもなかった」

人は、痛みを共有する生き物だ。それは、幸せもまた……。

「だから、わかってているかい、希汐姫。キミの選択は、決してセツを幸せにはしないんだ。他人と共有してこそその、幸せというものも、人にはあるんだ」

ま、それを促した僕が、とやかく言えたことじゃない、か……。

「本当に……僕は何もできないな」

所詮、脇役。

「全知であり、全能であらざるもの。それがあんなだし、ね」

「ああ。でも、それを齒痒く思う」

「そう思わない人は、居ないのよ」

「……かも、しれないね。ねえ光」

「なによ」

「じゃあさ。僕も、人なのだろうか？」

「さあね」

光の返答は、ごくさっぱりとしたものだった。電話が鳴る。凜の事務所からの連絡だろう。

「あんたが思う通りよ。どっちにしたって、私は愛してあげるから、へんな心配しなくていいの。ほら、さっさと出る」

「……まったく。どれだけ自分が不幸だ、って言うってみても、これじゃあ説得力皆無にも程があるな」

溜息を吐いて、僕は電話を手を取った。

「ああもしもし。お電話代わりました。……はい。それで、水原凜の長期休暇を頂きたく……ええ。わかっています。代わりの者は寄こしますし、経費も……」

事務所との交渉をしつつ、僕はソファにゆっくりと体を沈めるのだった。

特別編「？アルカナクロスワールド三人の転生者？」（後書き）

……もう二回謝っておきます。ごめんなさい。ごめんなさい。三回謝ったので許して下さい。だめか。

とりあえず、秋代さんに貰っていたチートオリカ案を載せておきます。せめてもの償いです。

邪眼を持つ超越者

x 8

闇属性

効果モンスター

魔法使い族

攻撃力 2800

守備力 2100

効果：デュエル中に三回

モンスター、または罨、魔法の

発動、攻撃を無効にし、伏せる。

（同じカードには効かない）

場から墓地へ行った場合。

自分のスタンバイフェイズに

攻撃力 200 上げて復活出来る。

蛇使い座

アクスレヒオス

x 10

神属性

効果モンスター

星神族

攻撃力 3000

守備力 2900

効果：このカードは通常召喚が出来ない。

邪眼を持つ超越者をリリースして

特殊召喚出来るカード。

このカードが破壊されると墓地から

邪眼を持つ超越者を場に復活させる。

このカードが除外されるとデッキ、又は手札より

モンスターを無条件で一体特殊召喚する

漆黒の吸血姫

×8

闇属性

効果モンスター

悪魔族

攻撃力 2600

守備力 2100

効果：闇属性のカードを装備カードとして装備可能。

その装備カードの現攻撃力、現守備力がこのカードに加算される

炎雷の女帝

×8

光属性

効果モンスター

戦士族

攻撃力 2600

守備力 2100

効果：このカードが場から墓地に

送られた時、手札又はデッキから
怒りの暴君・雷帝を特殊召喚出来る。

怒りの暴君・雷帝

×10

光属性

効果モンスター

雷族

攻撃力 4000

守備力 2700

効果：特殊召喚に成功した時

相手の場に存在する

モンスターカードを全て破壊する。

でした。まあ、色んな意味でアレですね。対戦相手に希望を指名
しなければ出せたんでしょうけど……希望だと、あんな感じに。

希望の設定については、元々あったものを流用しています。元々
こんなキャラでした。型月知らない人にはごめんなさい。アカシツ
クレコードくらいは知ってるか？ まあともかく、色々と黒歴史な
特別編です。

後は、残った野良猫さんのコラボを書いて、暗黒さだめで終わり
……まだ二つもありやがる……。へ、へへ……もう100万どころ
か150万超えたぜ……。

欲張りすぎは、身を滅ぼしました。

それでは、悠でした！

特別編「？アルカナクロスワールド精霊と転生者 前編？」（前書き）

こんにちは。

コラボ四つ目。今回は野良猫さんの『遊戯王GX 精霊と転生者』になります。

やっとこさ確定していたコラボが終わり……と思ったらまさかの前後編です。めちゃくちゃに延びました。今話だけでも、普段の話と同等か、それより長めな癖に、後編ではもっと長いという凄まじい長さ。HEROの書き易さが、異常です。

とりあえず、デュエルの途中まで、どうぞ！

特別編「？アルカナクロスワールド精霊と転生者 前編？」

アルカナ〜切り札の騎士〜

特別編「？アルカナクロスワールド精霊と転生者 前編？」

「だからな、俺は思うわけだ。ポニテという髪型は、あらゆる衣装にベストマッチする上、人種を問わない。基本的に俺は黒髪ポニテに和服の組み合わせを推奨するが、アメリカンに、金髪ポニテのチユーブトップ+短パンの組み合わせも実に王道でイイと思うんだ」
「わかるわかるぜ！ それにさ、ポニテってやっぱり、シヨートとロングの魅力をどちらも内包してると思わないか？」

「流石だな八雲。俺も、その点については以前から着目していた。ポニテは、シヨートの持つ活発な、それでいて僅かに覗く健康的な白いうなじという色気、更にはロングの持つしっとりとした、大和撫子的な美しさも兼ね備えていると言っても過言ではない」

正直、口が滑らかに滑り過ぎて自分でも引く。が、それについて来れる八雲も大したもんだと思う。……同志か。

まあそんな余談はさておき、どうしてこうなったのかは……まあ、今更説明するまでもないだろう。前回出張った分、希望には今回出番なしで居て貰う。要するにあれだ。また出てきたんだよ。時空の歪。

しかし、前回と違うのは、今回は向こうも異界に放りこまれた形らしいってことだな。なんでも、向こうは俺よりも多く、何度かこいう世界に巻き込まれたことがあったらしく、お互いに説明は不

要だったので助かった。

で、まあ折角こうして会えたんだし、お互いに交友を深めようぜってことになっただが……。

「いやしかし、まさかここまで話せるとは思わなかったな」

「俺もだ。というか、すごいこだわりだな。セツは」

「八雲もそうだろ。っていうか、奏が落ち込み気味だからフォローしておけ」

「え？ あ……」

「あ、あの八雲くん……わ、私もポニーテールの方がいいのかな？」

「いや！ 別に奏はそのままでも！ つかその、あれだ。俺とセツは所謂一つの萌え要素って奴を話し合っていただけで！ 現実の好みとはまた……」

おーおーやってるやってる。こうやって見てるのも楽しいが、とありえずあんまりのんびりしてるのもあれだよな。

現在、奏が作って来たと言う弁当を分けてもらって食べているところだ。

「しかし、すごいな君は。聞いた限りじゃ、運動に勉強、デュエルに家事全般。何でもできるらしいじゃないか」

「そ、そんなことないけど……私、人見知りするし……なんでか、セツさんはあんまり抵抗ないけど」

「そこら辺は、俺の特技だな」

基本的には何処にだって自然に溶け込めるスキルだからな。俺の前では、人見知りなぞあつてないようなものだ。

「それに運動も、水泳は苦手だよ」

「……気が合うな。俺もだ」

「そうなのか？ それこそセツも、何でも出来そうなのに」

「……いいか、八雲。人間はな。遙か昔サル同然の時代から、基本的に地上でのみ生活してきた種族なんだ。だから人間にはエラも、浮き袋も、水かきも付いていない。そもそもが、水中で生活するよっくに人間の体は出来ていないんだ。地上で生活することに特化して

きた俺たちは、態々敵に有利なアウエーに飛び込むことなく、地上でのみ生活していればいいんだ」

「……とりあえず、敵ってなんだよ」

「……私は、結構気持ちわかるなあ……水怖い」

「何より、水の中ではさだめから逃げられない！ しかも水着という極々薄いガード！ これはもう、自殺行為としか言いようがない！」

「い、いきなり気持ちが変わらなくなった……」

「しかも、そっちが本命の理由っぽいな……」

ふ、ふふふ……わからないだろうな。昔から風呂と言わずプールと言わず海と言わず、人目もガン無視で常に獲物と捕食者の関係だった俺たち兄妹のことは……。

「それより、八雲たちはどうしてこう言う世界に？ 俺は、さっき話した通りの理由なんだが」

「ああ……ちよつと、いやかなりアホらしい話なんだが……」

なんでも、謎の黒猫に呼び込まれて、勝てばご褒美、負ければ地獄のデュエルをすることになってるらしい。

「最初のデュエルは負けて……ちよつと、いや、思い出したくないから聞かないでくれ」

「……何か、辛いことがあったんだな（漢的に）」

「……ああ。で、二回目は勝って……」

「八雲くん？」

「……イエ、ナンデモナイデス。ワスレマシタ」

「……とても、いいことがあったんだな（漢的に）」

「……まあ、そんなところだ」

ふん。ご褒美と地獄、ね……。

「それ、面白そうだね」

「おわっ！？」

「だ、だれっ！？」

突然何処からか現れた希望に、八雲と奏がびっくりしている。ま

やダメだ負けちゃダメだブツブツ……」

「なんか、急に追いつめられてるけど……大丈夫なのかな？」

わかっていない。コイツがさだめの夜這いを全力サポートなんてしたら、100%大人の階段を登ることに……実妹相手はまずかう。今更感があるが。

「……さつて。それじゃ、そろそろ始めるとしますか」

いつまでも膝抱えて震えてるわけにもいかない。気を取り直してデュエルだな。

「え？ あ、ああそうだな。今回はよろしく頼むぜ！」

「ああ。非常に申し訳ないが、今少々わけありでな。万全のデッキ、と言うわけにもいかないが、そこは勘弁してくれ」

……というか、俺は万全じゃないデッキ使って勝たなくちゃさだめに……怨むぞ。希望。

「楽しいデュエルにしような！」

「……そうだな。やっぱり、それが一番だな」

一瞬、八雲が十代に被って見えた。……ああ。そうだ。デュエルは楽しむもんだよな。

「「デュエル!!」」

「先攻は譲る。一応、先輩だしな」

「そうか？ ありがたく受け取らせてもらっけど、後悔するなよ？
俺のターン、ドロー！」

さて……八雲のデッキはどうなっているか……。

「俺は手札から魔法カード『E・エマーゼンシー・コール』を使って、デッキから『E・HEROエアーマン』を手札に加える！」

「エアーマン!? まさか、漫画版HEROか！」

そう来るとは思わなかった。そうか。なら……。

「知っているなら話は早いぜ！ 俺は『E・HEROエアーマン』を攻撃表示で召喚！ エアーマンの効果で、デッキから『E・HEROオーシャン』を手札に加える！」

……間違いないな。漫画版のHERO。なら、属性的には光・風・

地・水を出せば危険になる……他はともかく、光だけは俺のデッキじゃ避けられない。シャイニングについては覚悟しておくか。

「俺はカードを一枚セットし、ターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー！」

……さて。どうするか。

「俺は『切り札の騎士 キング』を攻撃表示で召喚。更に、手札から装備カード『アルカナソード ダイヤ』をキングに装備する」

「切り札の騎士？ って、それ『キングス・ナイト』じゃ……まさか、オリジナルカード!?」

「ま、そんなところだ。ダイヤを装備したキングの攻撃力は300ポイントアップ。攻撃力は1900だ」

「エアーマンを上回ったか……」

「バトル。『切り札の騎士 キング』で『E・HEROエアーマン』を攻撃！ 『ジュエル・フラッシュ・ソード』！」

「ぐっ！」

八雲LP3900

「だがこの瞬間、トラップ起動！ 『ヒーロー・シグナル』！ デッキから『E・HEROフォレストマン』を守備表示で特殊召喚するぜ！」

シグナルからのフォレストマンか。常套手段と言えばそれまでだが、それは即ち有用性が高いのと同義だ。次のターンに融合されることは覚悟しておくか。

「更に、ダイヤの特殊効果起動。装備モンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊した時、デッキからカードを一枚ドローする」

コイツは……。

「……俺はカードを二枚セット。ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！ 俺はフォレストマンの効果で、デッキから『融合』のカードを手札に加えるぜ！ そして『融合』！」

来たか。現在わかっている八雲の手札で融合可能なモンスターは……アブソルートとガイア、ジ・アースの三体か。俺のキングも含

めるなら、シャイニングも可能性ありだな。ホントに、融合素材の縛りが緩くて困る。

「手札の『E・HEROレディ・オブ・ファイア』と『E・HEROオーシャン』を融合！」

「……アブソルートか！」

「行くぜ！『E・HEROアブソルートZero』を攻撃表示で融合召喚！」

いきなりか……！

「ただだぜ！俺は更に、魔法カード『ミラクル・フュージョン』を発動！墓地のオーシャンと、フィールドのフォレストマンを融合し、現れる！最強のHERO！『E・HEROジ・アース』！」

これは……ワンキルコンボじゃないか！

「悪いが一気に決めさせてもらうぜ！ジ・アースの効果でアブソルートをリリースし、攻撃力をアップする！」

っさせるか！

「カウンタートラップ『天罰』！手札の『冥幼竜ヴァーミリオン』を墓地に送り、ジ・アースの効果が無効にし、破壊する！」

『きゅー！』

「なんだって!?!」

「ジ・アースの効果はコスト……よってアブソルートも墓地送りだ！」

「くっ……けど、アブソルートの効果は起動するぜ！フィールド上から離れた時、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！」

「ぐっ……キングー！」

『ぬう……こりゃあたまらんわい!』

宝石剣ダイヤは戦闘で破壊されないと効果が使えない。氷の槍によって貫かれたキングはそのまま破壊される。

「まだだ！まだ俺はこのターン通常召喚を行っていない！」

「っ！」

まだいたのか！

「俺は『E・HEROザ・ヒート』を攻撃表示で召喚！ バトル！
ヒートでプレイヤーにダイレクトアタック！『ヒート・ナックル』
！」

「ぐあぁっ!？」

セツLP2200

く、初っ端から痛いダメージだ。だが、ワンキルを防いだけマシカ。

「俺は永続魔法『悪夢の蜃気楼』を発動し、カードを一枚セット。ターンエンドだ」

『悪夢の蜃気楼』……ってことは、もう一枚のセットカードはま
ず間違いないくアレだな……。

「俺のターン、ドロー！」

「スタンバイフェイズに、俺はカードを四枚ドローするぜ！」

「……俺はスタンバイフェイズに、カウンタートラップのコストと
した『冥幼竜ヴァーミリオン』を手札に戻す。戻って来い。ミリー」
『きゅ〜!』

「そいつがセツの相棒か？」

「まあ、そんなところだ。ミリーだけじゃないけどな。お前にもい
るんだらう？」

「そいつは、後のお楽しみだぜ」

「だろうな。俺は魔法カード『強欲な壺』でカードを二枚ドロー。
更に『早すぎた埋葬』を使う。ライフを800ポイント支払って、
墓地からキングを特殊召喚！」

セツLP1400

「クイーンもいないのにキングを？ 一体なにを……」

「……確かに、クイーンはいない。だが、切り札の騎士はまだいる
ぞ！ 俺は『切り札の騎士 キング』をリリースし、『切り札の騎
士団長 エース』を攻撃表示で召喚する！」

『相手は、別次元の者か。ならば、手を貸すのに否やはないな』

「レベル7をリリース一体で!？」

外野で奏が驚いているが、そちらは希望に任せる。折角だからお得意の解説しておけ。

「エースは切り札の騎士をリリースする場合、リリースを軽減する召喚ルール効果を持っているんだ。その代わり、攻撃力は低めだね」
「切り札の騎士……それがセツのデッキか」

「まあな。俺はエースで、『E・HEROザ・ヒート』に攻撃！
リッター・ブリッツ！」

『瞬光の剣……その身に受けよ！ ぜええいつ！』
「ぐっ！？ ヒート！」

八雲LP3700
「俺はカードを二枚セット。ターンエンドだ」

「エンドフェイズにリバースカードオープン！ 『非常食』！ 『悪夢の屋気楼』を破壊してライフを1000ポイント回復する！」

八雲LP4700
ライフ的には、大きく差をつけられたな。どうするか……。

「俺のターン、ドロ！ 俺も手札から装備魔法『早すぎた埋葬』を発動！ ライフを800支払って、墓地からエアーマンを蘇生！

効果発動！」
八雲LP3900

「俺はデッキから『E・HEROフラッシュ』を手札に加え、守備表示で召喚する！ カードを二枚セットしてターンエンドだ」

フラッシュか……効果は確かサルベージ。八雲の墓地には融合体も含めて四種類。条件は満たしているな。

「俺のターン、ドロ！ 俺は『切り札の騎士 テンス』を守備表示で召喚。エースでエアーマンを攻撃する！ 『リッター・ブリッツ』！」

『切り刻む！ せいやあつ！』
「く……！」

八雲LP3700

「更に、テンスの効果！ 切り札の騎士と名の付くモンスターが戦

闘ダメージを与えた時、墓地に存在する切り札の騎士を一体、手札に戻す！ キング！」

『やーれやれ。年寄り遣いが荒いわい』

『……文句を言うな。まだ隠居するような歳でもあるまい』

「俺はターンエンドだ」

「エンドフェイズに速攻魔法『異次元からの埋葬』発動！ 除外されているオーシャンとフォレストマンを墓地に戻す！」

このタイミングで戻してきた？ また『ミラクル・フュージョン』か？ それとも……。

「俺のターン、ドロー！ スタンバイフェイズにリバーズカード発動！『リビングデットの呼び声』！ 墓地のオーシャンを呼び戻し、効果発動！ 墓地のエアーマンを手札に戻す！」

「……流石に、使い回すなあ」

そういうことが、と納得する。オーシャンは、場に維持さえできればエアーマンと併せて抜群のカード・アドバンテージを得られる。その恩恵はハンド・アドバンテージに留まらず、エアーマンの効果や融合まで含めればあらゆるアドバンテージに直結する。

「それは、困るな」

俺はオーシャンをチラリ、と見る。とはいえ、相手はHERO。

しかも攻撃力1500の戦士族。となれば、サポートや蘇生、サーチには困らない。下手な除去に意味はない。

「さて……どうするか」

「俺は手札に戻したエアーマンを召喚！ 効果により、デッキからもう一枚の『E・HEROオーシャン』を手札に加える！」

来たか。と俺は心の中で笑みを浮かべる。

「更に魔法カード『融合回収』！ 墓地の『融合』と『E・HEROフォレストマン』を手札に戻し、魔法カード『R・ライトジャスティス』を発動する！」

ああ。そうだろうな。そう来ると……

「わかっていたぞ。カウンタートラップ『アヌビスの裁き』！ 俺

の魔法・罫を破壊する魔法カードの発動と効果を無効にし、破壊する！」

「なにっ!?!」

「俺は手札の『冥幼竜ヴァーミリオン』を墓地に捨て、『R・ライトジャステイス』を無効にする！」

「くっ!?!」

「そして『アヌビスの裁き』のもう一つの効果、相手フィールドのモンスター一体を破壊し、その攻撃力分のダメージを与える！俺が選択するのは『E・HEROフラッシュ』！」

「フラッシュユ？」

「ソイツ以外は、戦闘で破壊した方が都合良さそうだったからな」「なるほどな……」

そうは言ったが、本当の狙いは別にある。

「フラッシュの攻撃力、1100のダメージを受けてもらっぞぞ」

「ぐ……」

八雲LP2600

「まだ終わらないぞ。『切り札の騎士団長 エース』の効果。ターンに一度、手札が墓地に送られた時、デッキからカードを一枚ドロウする」

「手札補充か……やるな。俺は、手札のフォレストマンとエアーマンを融合！ 来い！『E・HERO Great TORNADO』！」

フィールドに凄まじい風が巻き起こり、その竜巻を従えるようにして風のHEROが現れる。威風堂々としたその立ち姿は、正にヒーローと言った風情だ。

「Great TORNADOは、召喚された時相手のモンスターの攻守を半分にする！『タウン・バースト』！」

強烈な下降気流が、エースやテンスを押し潰さんと迫る。

「だが、悪いがそれも、想定済みだ！ カウンターラップ『Overwhelm』！ アドバンス召喚されたレベル7以上のモンス

ターが存在する時、モンスター効果が罫を無効化し、破壊する！
エース！」

『任せろ！』

エースが巻き起こる風の壁を突き破り、そのままGreat TORNADOを貫く。

「うわっ!?!」

もちろん戦闘ではないのでダメージは発生しないが、八雲の眼前まで剣が迫る光景は中々迫力があるだろう。

「くっそ……まさかGreat TORNADOまで対処されるとは……」

「失敗したな。素直にオーシャンを素材にしてアブソルートを出しておけば、お前の勝ちだった」

そして、俺が真っ先にフラッシュを片付けたのも、シャイニングを出されることを警戒して、だ。

「やり難いぜ。そのパーミッションデッキは……」

「だろうな。正直、やってることちはいいが、相手からすれば腹立たしいことこの上ないデッキかもしれん」

相手のデッキの可能性を、次々に潰す。力を発揮する前に倒す。それがパーミッション。正直、これとのデュエルで早々楽しめるとは思えない。が……。

「いや、楽しいぜ。どうやってたらその壁を超えることができるのか。それを考えたらすっげーワクワクするからな！」

「……ふう」

苦笑した。やっぱり俺は、主人公向きじゃないな。八雲の方が、圧倒的に主人公向きだ。が……だからと言って容赦はしないが。

「俺はターンエンドだ。まだまだ、見せてやるぜ！俺のデッキをな！」

「……わかった。なら俺も俺らしく……その可能性、全部潰して見せようか」

俺お得意の、パーミッションでな。

「俺のターン、ドロ―！」
勝負はこれからだ。八雲！

特別編「？アルカナクロスワールド精霊と転生者 前編？」（後書き）

こんにちは。

書いていて改めて思いましたが、セツのデッキって絶対主人公のデッキじゃねえ……。相手の切り札が出てくるのを妨害するとか、主人公のやるこっちゃねえ。セツのスタイルが出鼻を挫くタイプなので仕方ないと言えはしかたないんですが。

後編は、なるべく早くアップします。八割方出来ているので、今日中にアップもできるかもしれません。

それでは、悠でした！

特別編「？アルカナクロスワールド精霊と転生者 後編？」（前書き）

どうも、自重しないことで有名な作家のタマゴ、悠です。

意味不明な挨拶はさておき、さっさと後編アップします。何しろ前編作ってるときに、あ、長すぎるわ。とか思って分けた奴なので、始めっから結構出来ていたという使用。だからと言って前編アップから三時間で挙げるのもどうかと思いますが。

とにかく、八雲君とのデュエルもクライマックス。果たして結末はどうなるのか、アルカナクロス、精霊と転生者編 後半、どうぞです。

特別編「？アルカナクロスワールド精霊と転生者 後編？」

アルカナく切り札の騎士」

特別編「？アルカナクロスワールド精霊と転生者 後編？」

「まだまだ、見せてやるぜ！ 俺のデッキをな！」
「……わかった。なら俺も俺らしく……その可能性、全部潰して見せようか」

わざと、不敵に笑ってみる。すると八雲も同じように笑みを浮かべた。

「やれるもんならやってみろ！」

「やってやるさ。俺のターン、ドロー！ スタンバイフェイズに、コストとなった『冥幼竜ヴァーミリオン』は手札に戻ってくる」「かうっ！」

「疑似『キラー・スネーク』みたいだな……厄介な」

「俺は『切り札の騎士 キング』を攻撃表示で召喚。バトルフェイズ！ キングでオーシャンを攻撃！」

「ぐっっ！」

八雲LP2500

「更に、エースでプレイヤーにダイレクトアタックだ！ 『リッター・ブリッツ』！」

「ぐああっ！」

八雲LP500

「ターンエンドだ」

万全。そう、今の状況は、限りなく万全に近い。だが、八雲が真に力あるデュエリストなら……まだ、油断は出来ない。

「八雲くん！ 頑張つて！」

『八雲！ がんばるですう！』

八雲くんの繰り出すモンスターは、全て相手のセツさんに妨害されて力を発揮できないでいる。あれだけ多種多様な八雲くんのHEROをああも的確に対処するなんて……。

「……………それほど不思議なことじゃないな」

「え？」

聞こえてきた声に反応して隣を振り向く。そこには、微笑みを浮かべて二人のデュエルを観察していた希望さん。

「八雲のHEROは、確かに様々な効果を秘めている。その全てに対応するのは難しそうに思える。が……………」

希望さんは指を四本立てて見せる。

「結局のところ、デュエルは四つの要素で成り立っている。何かわかるかい？」

「え、えつと、モンスター・魔法・罠……………後は……………」

「戦闘、だ。より正確に言うならば、モンスター効果・魔法効果・罠効果・バトル。デュエルで行われるものは結局この四つ。そして、十代もそうだが、HERO使いならば基本スタイルは共通している」

「融合……………」

「そ。基本的に、HERO使いの手は融合し、強力な効果で場を制圧、一気に積みかけると言ったものだ。であれば、対処法は見えてくるだろう？」

「モンスター効果封じ……………」

それは実際、私もやるうとした。その時は、結局『天罰』を読まれて負けちゃったけど。

「それもあるけどね。セツには八雲の使うHEROたちの情報がある。どのような素材でどのような効果を持つ融合HEROが出てくるのかを知っているセツは、その情報を上手く利用している」

例えばさっきの場面。と希望さんは指を立てて説明する。

「八雲のフィールドにはエアーマン、オーシャン、フラッシュの三體。この時点で八雲は三種類のHEROを呼べる。『融合回収』で手札には『融合』とフォレストマン。これで、呼べる融合体は五體。主だった八雲の主力は全て召喚できるようになったね？」

「う、うん……」

「そしてあのライトジャスティス。あれを防いだセツは、真っ先にフラッシュを消しかかった。何故か」

「それは、フラッシュが戦闘破壊をトリガーに効果を発動するタイプだったから？」

「それも、もちろんあるだろう。しかし、セツの狙いはどちらかと言うとシャイニングを防ぐため、というのが大きかっただろう」

「シャイニングを？」

「キミも経験があると思うが、シャイニングの攻撃力上昇効果は『天罰』などでは防げない。セツの伏せカードはまさしくその『天罰』と同じように、モンスター効果を無効にするタイプ。なら、それだけで防ぐことのできないシャイニングは鬼門。同様に、効果を使わなければ問題ないジ・アースやアブソルートでも、セツは負けていた」

でも現実には、八雲くんはGreat TORNADOを出して効果を無効にされ、ピンチに陥った。

「……序盤の布石」

「え？」

「デュエルの序盤に、セツはジ・アースやアブソルートを捌き、無力化して見せた。あれが布石。相手の無意識に、“その二体は通用しない”と刷り込ませるためのね。もちろん、それだって確実に通用するわけじゃないし、もしそれらのモンスターしか融合できないなら何の意味もなかっただろう」

なまじ、HEROには融合の可能性が多くあるからこそ、八雲くんは選んでしまった。まだ使っていないHEROを。

「それで……」

「そして、残る二体。Great TORNADOとガイアの効果は強制効果。『overwhelm』で無力化が可能なモンスター。まんまとかかった」

「全部、計算ずく……?」

「……だと格好いいけど、ある程度は、運だね」

おどけた様にそんなことを言う希望さん。でも、私にはその冗談交じりの言葉が冗談には聞こえなかった。

「ま、見ているといい。セツのデュエルを。君たちにも、いい経験になる筈だ。変わったタイプのデュエリストだから。セツは」

「……」

外から見ていれば尚わかる。あの人は、強い。だから私に今できること。

「頑張つて！ 八雲くん！」

応援しよう。少しでも力になるように！

「頑張つて！ 八雲くん！」

「任せる！ 俺のターン、ドロー！」

八雲の後ろから聞こえてきた声援に、八雲は更にやる気をみなぎらせたようだった。……いいなあ。応援アリつて。しかも美少女の

「がんばれ〜セツ」

「お前はいい！」

この差はなんだ！ 美人は美人でも、男の声援かよ！

「俺はモンスターを一体守備表示でセット。カードを一枚セットしてターンエンドだ！」

……まだ、その時じゃないらしい。

「……行くぞ！ 俺のターン、ドロー！ バトルだ！」

「トランプ発動！ 『威嚇する咆哮』！ このターン攻撃宣言は行えない！」

「……ターンエンド」

「……あの守備モンスターは間違いなくオーシャン。とすれば、今の『威嚇する咆哮』はドローしたカードか。やっぱり、間違いない！」

「俺のターン、ドロー！」

八雲には運がある。十代たちと同じ天性のドロー力、デイスティードローが。ならば……。

「俺はモンスターを一体守備表示でセット。ターンエンド！」

「守りに入ったか。俺のターン、ドロー！」

「……出せるモンスターはいない。元々モンスター数が少なめ、と言うこともあるが、間違いない。確信した。」

(今、“流れ”は八雲にある)

ハンド・アドバンテージ、ボード・アドバンテージ、ライフ・アドバンテージ、どれも俺が勝っている。八雲が勝っているのは精々が墓地アドバンテージくらいのもの。だが、それでも尚攻めきれない。なら、流れは八雲だ。

「……俺はキングで左、エースで右のモンスターに攻撃する！」

キングが切り裂いたのはやはりオーシャン。そして、エースが切り裂いたのは……。

「『メタモルポット』の効果発動！ お互いに手札を全て捨て、デッキからカードを五枚ドロー！」

「っ！」

やはり！ 必ず手札補充の手段があると思っていた。間違いない……このままなら、

「負けるな。このデュエル」

だが、もちろん座して負けを待つつもりはない。幸いこちらの方が有利だ。

「……俺はエースの効果を使用。手札を捨てたので、デッキからカ

ードを一枚ドロウする。本来なら、八雲も捨てたからドロウするんだが、一ターンに一度しか使えないからな。ターンプレイヤーの優先権行使で、俺が引かせてもらう」

これで、手札は六枚。八雲も次のドロウで六枚だ。まだいくらでも、逆転の手は残っている。しかも、俺のライフもさほど多くないのだから。

「俺はカードを二枚セット。ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロウ！」

(このターンだ)

このターンを、何としても乗り切る。

「……そして、俺が勝つ！」

「俺だつて、負けられないんだ！ 行くぞ！ マジックカード『戦士の生還』発動！ 墓地の『E・HEROエアーマン』を手札に戻す！ 召喚！」

「またそれが！」

「コイツが俺のエンジンなんでね。エアーマンの効果で、デッキから『E・HEROフォレストマン』を手札に加える」

……確かに、エアーマンの効果は文句の付け様がないくらい強力だ。こつも使い回されると、流石に認めざるを得ないな。

「さあ、行くぜ！ 『融合』発動！ 手札の『E・HEROフォレストマン』と同じく手札の『E・HEROクノスペ』を融合！ 大地の力を持つ二体のHEROを融合し、新たなHEROを呼ぶ！ 来い！ 『E・HEROガイア』！」

摩天楼に、黒金の光沢を放つ大地のヒーローが堂々と仁王立ちする。

「ガイアの効果発動！ 『切り札の騎士団長 エース』の攻撃力を半分にし、その分だけガイアの攻撃力をアップする！」

『ぐっ……力が、吸われる……？』

「エース！」

「これで、終わりだ！ ガイアで『切り札の騎士団長 エース』を

攻撃！『コンチネンタル・ハンマー』！」

『くっ……』

弱り、剣を支えに膝を着くエースに、ガイアの鉄塊のような腕が振り下ろされる。エースはそれを苦々しげに見つめる。

「トラップカード『聖なるバリア ミラーフォース』！ エアーマン共々、ガイアを倒すッ！」

極普遍的なトラップだが、伏せ除去もせず、リバーズカードもないならこれが徹る筈！

「悪いな、セツ。そういうカードを待つてたぜ！ 俺は手札から『ホシクリボー』の効果を発動する！」

『クリー！』

「何っ!?!」

八雲の手札から、白い輝きに包まれた龍翼のクリボーが飛び立った。

「これが俺の相棒さ。『ホシクリボー』は、手札から墓地に捨てることでモンスターを破壊する効果を無効にし、破壊する！」

『クリクリ〜！』

星屑の翼が大きく羽ばたき、ミラーフォースの輝きを奪って行く。エースを守ろうとしていたそのバリアは、結局ガイアの腕で粉碎された。

くそ……向こうにもきつと俺の知らないカードがあると思っただが……一発使いきりのスターダストか……なるほど。強力だ。

「そのままエースに攻撃だ！ ガイア！」

『させん！』

今にも激突せんという両者の間に、テンスが割って入った。

「『切り札の騎士 テンス』の効果だ！ このカードが表側表示で存在する限り、切り札の騎士と名の付いたモンスターへの攻撃を代わりに受ける！」

『俺は守護騎士っ！ 仲間を守ることこそが我が務めだ！』

『……すまぬ。テンス』

「テンスは守備表示。よってダメージは通らない」

「止められた……！　なら、エアーマンでエースを攻撃！」

『ぐっ……おのれ、ここまでか』

「くそ……エース！」

セツLP600

「俺はこれでターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー！」

しかし、想像以上に状況が悪い……これは“切り札”がどうとか言ってられないか……？　いや、まだ行ける。

「俺はカードを二枚セット。キングを守備表示に変更してターンエンドだ」

「よし。俺のターン、ドロー！」

八雲のガイアは、召喚ターンを守りできれば2200のバニラ同然。適当な上級モンスターでも返り討ちに出来るが……。

「俺のデッキだと、そう簡単にはいかない数値だな」

アルカナを欠く今の俺には決定打と言えるアタッカーがほとんどいない。エースが倒されたこともあり、今はかなり分が悪い。

「俺は手札から『E・HEROボルテック』を守備表示で召喚！
更に手札から魔法カード『H・ヒートハート』を使う！　ガイアの攻撃力を500ポイントアップ！　そして、ガイアは貫通効果を得る！　バトル！」

「トラップ発動！『ガード・ブロック』！　戦闘ダメージを無効にし、カードを一枚ドローする！」

「だが、キングは倒す！」

「くっ……」

『むう……すまぬ。力になれんようじゃ』

「いや、キング。お前の犠牲は無駄にはならない！　リバーソード発動！『アルカナソード クローバー』！　俺の場の切り札の騎士が破壊され、墓地に送られた時に発動！　墓地から破壊された切り札の騎士とは別の騎士を蘇生させる！　戻って来い、エース！」

『今度は、さっきの様にはいかん!』

「クローバーは、発動後攻撃力700ポイントアップの装備カードとなり、蘇生したモンスターに装備する」

エースの攻撃力が2700に。これなら……。

「くっ……俺はカードを一枚セット。エアーマンを守備表示に変更してターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー! リバースカードオープン『リビングゲデツトの呼び声』! 墓地から『切り札の騎士 ジャック』を攻撃表示で蘇生召喚!」

「ジャック!?」

「ああ『メタモルポット』の時に、ちよいとな。バトルフェイズ!」

「さあ、行きましようか。エース」

『団長と呼べ。ジャック』

「まずはエースでガイアに攻撃! 『リッター・ブリッツ』!」

『先ほどの礼だ! たっぷり取っておけ!』

エースの細剣が閃き、ガイアをなます斬りに討ち取る。

「速攻魔法『残留思念』! 墓地のレディ・オブ・ファイアとヒートをゲームから除外し、このターン俺へのダメージを無効化する! 炎の遺志が八雲を包み、ダメージを弾き返す。」

「ちっ……なら、ジャックでエアーマンを攻撃! 『ノーブル・ソー

ド

』ここはお任せを。はあっ!』

ジャックの騎士剣が、エアーマンを真つ二つに薙ぐ。しかし、ダメージは与えられない。

「くっ……」

お互いに、攻めきれない。ライフはもう残りわずか。だというのに、決め手が決め手にならない。

「やっばすごいな。セツ」

「ん?」

「これだけの数、融合体ヒーローを対処されることなんて滅多にな

いぜ。それが、セツのアカデミアで過ごした一年間の成果か？」

「……ま、そうだな。そういえば、まだ一年と半年くらいしか経ってないんだな。忘れてたよ。そんなこと」

それだけ濃い一年間だったんだろう。だが、それはきっとコイツらもこれから体験する、或いは、今も体験している最中なんだ。

だとすれば。

「やっぱ、負けられないよなあ……」

先駆者として。これから戦いに巻き込まれて行く奴らに。

「負けられないよな」

もう一度、確かめるように呟く。

「俺のターンは終了だ。来い。後輩」

「ああ！ 行くぜ先輩！ ドロー！」

八雲の手札はゼロ。フィールドにはボルテックが一体のみ。恐らく、このドローで決まる。それなら、きつと……。

「……来た！ このカード！ 俺は手札から魔法カード『ミラクル・フュージョン』を発動！ フィールドのボルテックと、墓地のフラッシュを融合し……」

やはり、“来た”か。いや、来て“しまった”か！

「ストップだ八雲！ その融合、する必要なし」

「なにっ!？」

「最後の最後、クライマックスに悪いが……俺にはまだ、最初で最後のリバーカードが残っている」

「……そう言えば、最初に伏せてから、結局使っていないかった。てつきり、発動条件が厳しいかブラフの一種かと……」

「そうか……なら、覚えておくといい。切り札は、最後の最後まで取っておくものだ」と

「どっついう、意味だ？」

わからないか？ なら、教える。

「俺は最初から、お前の“ディステイニードローを待っていた”！」

「何だっつて!？」

「リバーズカード発動！ カウンタートラップ『マジック・ジャマ
ー』！ 手札を一枚捨てることで、魔法の発動と効果を無効にし、
破壊する！」

「な、しまっ……………」

八雲の『ミラクル・フュージョン』は、発動されることなく俺の
作りだした魔法陣に囚われ、沈んで行く。そして…………。

「そして、これで決まりだ！ 八雲！ 魔法カードのパーミッシヨ
ンに成功したことにより、俺の手札に眠る真の切り札が目覚ます
！ 来い！ 『冥王竜ヴァンドルギオン』！」

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！』

魔法陣が更に広がり、その中心、地の底から冥王竜が呼び覚ま
される…………！

「そして、特殊召喚された冥王竜の、一番目の効果！ 魔法カード
のパーミッシヨンに成功し、このカードが特殊召喚された時、相手
ライフに1500ポイントのダメージを与える！ 『冥王咆哮』！！」
大きくその口蓋を開けたヴァンドルギオンが冥界の波動と共に凄
まじい咆哮を繰り出す。

「俺に、デイスティニードローはもう効かない」

「ぐ………… ああああああつ！！」

八雲 L P O

「いったたた………… やられた。まさか、デイスティニードローにピン
ポイントでカウンターブチ当てられるとはな〜」

「大丈夫か？」

「ああ。しかし、あれってマジで初めから狙ってたのかよ」

「一応な。お前がHEROデッキだとわかった時点で、ラストのビ
ジョンは見えていた」

「マジか………… 『マジック・ジャマー』なら、他にも使うべき場所あ

「ただらうに……」

確かに、他の場所ですべて使っていれば、そのまま勝てただらうと思われる個所もいくつかあった。だが、俺は敢えて最後まで温存した。最後の最後、あの場面でヴァンダルギオンと共に使うために。

「八雲くん、大丈夫？」

「ああ。ごめんな奏。折角応援してくれたのに」

「ううん。それはいいけど……」

「セツが最後まで『マジック・ジャマー』を取っておいたのが、理解できない？」

希望の言葉に、奏はコクリと頷く。

「……他の『神の宣告』や『魔宮の賄賂』みたいな汎用性のある、色んなカードに対応できるカウンタートラップならまだわかるんだけど……」

「そうだ。セツ。お前、最後にディスプレイニードローとして魔法カードが来るってことを確信してたみたいだった。あれはどういうことだ？」

奏と八雲が立て続けに質問してくる。

「ああそれは、ディスプレイニードローの特性と、HEROデッキの特色を考えた上で、まず間違いなく劣勢を覆すようなディスプレイニードローカードは魔法カードしかあり得ない、と思っただからだな」
十代や八雲の操るE・HEROは、その特性上キーカードを魔法に頼る。特に、絶体絶命を覆すようなカードとなれば、使えるカードは限られている。

例えば『融合』系。さっきの『ミラクル・フュージョン』をはじめ、『融合誕生』『平行世界融合』『融合回収』などなら、あの状況を挽回出来たかもしれない。

例えばドロウ補助。『強欲な壺』はもちろん、『貪欲な壺』も使えたし、『命削りの宝札』や『壺の中の魔術書』なども可能性としてはあった。

そして今挙げたどれもが魔法カード。もちろん手札補充の方法と

してはHEROならバブルマンもあつたが、あの状況ではどっち道使えないし、その上結局魔法カードに頼らなければ状況打破は出来なかった。

「性質上、デイスティニードローなら罠はない。HEROである以上モンスター効果もない。なら決定だ。あの場面、状況打破できるカードは魔法カード以外になかった」

「な、なるほど……」

「八雲は引きがいい。そりやもう、流石のドロー力だ。だけど、それを予め想定しておけば、こうやって対策もとれる」

「いないよ。初めからギリギリの状況で今引きしてくると想定して対策する人なんて。普通はね」

希望が苦笑を洩らしつつそんなことを言う。まあ、それはそうなんだけど。

「一応、先輩だしな。これから大変になっていくだろう後輩に、こういうこともあるってことを示してきたかったんだ。引きの強さが全てだと思つたら痛い目見るぞ、ってな」

「ああ。肝に銘じとく。それと、負けちまったけど、楽しいデュエルだったぜ。ありがとうな。セツ！」

「……ああ。こちらこそ。お前みたいなデュエリストの相手なら、またいつでもお願いしたいくらいだ」

「俺もだ。また絶対リベンジしてやるから、待ってるよ」

「ああ。とりあえずは、目の地獄を乗り越えられるように祈っている」

「……………あ」

どうやら忘れていたらしい。顔を青くした八雲を残し、俺も元の世界に帰還した。

「……………で、ご褒美ってなんなんだ……………ん？　メモか？」

現実に戻ってきた俺は、希望の言っていたご褒美が何なのか心待ちにしていたのだが、特に変わったことは起きない。仕方なくいつものテントに戻ると、そこには一枚のメモ。どうやら希望の残したもののらしい。

『誰でサービスカットをするか迷ったけれど、一番セツの貞操が危険にさらされない＆反応が面白そうと言うことで、彼女にしてみました。 追伸：ゆっくりして行ってね！』

最後のネタはともかく……彼女？

「セツ、戻っているか？」

「……エースか？」

このタイミングでってことは……。

「少し、出てきてくれないか？」

少し緊張気味のエースの声音に首を傾げながら、多分希望の言っていたご褒美はエースのことなのかと考えてテントから出て……思わず絶句した。

「その、わ、我は見えての通り西洋風の顔立ちをしているし、こういうた和装は似合わぬかもしれぬが……」

エースが少し赤く染まった頬で目を逸らしている。

「その、少しだけ興味はあったのだ。浴衣、というものに」

その言葉通り、エースが身に纏っているのは瑠璃色ベースに夜空の星々を散りばめた浴衣。短めの髪も綺麗に結われて、いつもと違う雰囲気醸し出していた。

「それで、希望が用意してくれたらしい浴衣を、奴のメイドに着付けを手伝って貰って着てみたのだが……その、似合うか？」

エースの言葉に、俺はコクコクと首を揺らすのみで答える。それほどまでに似合っていた。銀髪に和装。一見アンバランスだが、夜空を彷彿とさせる瑠璃色の浴衣に、エースの銀髪は驚くほど映えていた。

「そ、そうか。それなら、いい……」

両者、無言。

(これは……正直マズイ雰囲気だ)

……八雲との会話でもあったが、基本俺は和服系がツボだ。ポニテに留まらず、和服美人というのはかなり俺の好みにストライクなわけだ……。

(これがっ……これがギャップ萌えかッ……！)
なるほど認めよう。

「滅茶苦茶綺麗だ……」

「っ！ ばっ！？ なにをっ……」

「っ！」

うわしまった動揺のあまりベタベタなミスを……俺としたことが！

「……………」

「……………」

くっ！ マズイ、なんとかして空気を変えねば！

「ま、まああれだ。和服って胸ない方が似合っらしいし！」

「なっ……………」

これでどうだ。無理矢理にでもケンカに持ち込んでしまえばこっちのもん……あれ？

「そ、そうか……似合っているか……」

「え、あ、ああ……」

あ、あれー？ 何故そこでプラスに受け取りますかー？ 普通こ
こは怒る場面では……。こ、こうなったら話を逸らす……というか、
強引に話を進めるに限る。希望のことだ。既定のイベント終わらせ
れば終わるだろう。

「は、花火でも、するか？ 折角だし」

「む……そうだな。というか、何故そんなものを持っている？」

「手作り」

「……人間は、花火を手作りするのか？」

よし、とりあえず流れた！

「俺は出来る。あー尺玉は打ち上げに許可いるし……」

「尺玉！？」

「ま、騒がしいのは皆でやるとして……線香花火でいいだろ」

「……手作りか？」

「手作りだが？」

「……妹に頼まれたりしたからか？」

「そうだな。花火みたいつつーから作ってみた」

「……さだめが依存して調子に乗るのも当然だ。何でも買い与える馬鹿親じゃあるまいし」

「あー……」

そこら辺は多少反省してるんだが……。

「ふん。まあいい。お前謹製の花火、他の奴らに先んじて拝ませてもらうぞ」

「おーおー、いくらでもやりな。そこそこ上手く出来てるからさ」
「まったく、底知れない人間だ……」

いつになく穏やかな空気の中、俺たちの中で線香花火がパチパチと小さな音を立てるのだった。

特別編「？アルカナクロスワールド精霊と転生者 後編？」（後書き）

……最近ヒロイン街道を爆進しているエースです。

希牙姫……やっぱり失敗だったかもしれないぞ……お前、居ない間にNTR気配濃厚だぞ……。おかしいな。こんな予定では……？相変わらず、コラボしてもらっているにも拘らず、普通に自分とこの主人公に勝利させる、自重しない作者です。しかも、最初のタインから伏せつぱなしだったヨーとか、読んでもただじゃ気付かないっての。なんだその叙述トリック。違うか。

過去に類を見ないほどに長いデュエルでした。半端ない。鉄壁のライフスキル強え。ディステイニードローに関しては、書いたとおり。基本的にディステイニードローで引くのは魔法カードです。モンスターってのもあり得ますが。畏ってこたあんまりないでしょう。ちなみに、あんなこと言ってますが、このデュエル中に出てきたモンスターの中で、一体だけあの状況で引けば勝ちだった奴がいたりします。

ではとりあえず謝辞を。コラボ企画に賛同頂いた野良猫さん。ありがとうございました。そして、実に一ヶ月もの期間お待たせしてしまい、本当に申し訳ない。

八雲君たちの活躍は、野良猫さんの『遊戯王GX精霊と転生者』で楽しめます。お気に入りから飛べますので是非。

それでは、悠でした！

特別編「？アルカナクロスワールドX2 前編？」（前書き）

本当は一昨日、八月六日にアップするはずだったコラボのラスト作品をアップです。というのも、うん。いつものことですが、長くなりすぎたので書き切れませんでした。とりあえず前編。まだデュエルにすら入っていません。アルカナでは初となるバトルもの（弱）。

今回はコラボ第一弾でもお世話になったカイナさんの「遊戯王X」より、エルファイVSアテナになります、が。前述の通り、まだデュエルには入っていないので、そこら辺を留意してお楽しみください。

特別編「？アルカナクロスワールドX2 前編？」

アルカナ〜切り札の騎士〜

特別編「？アルカナクロスX2 前編？」

時空の歪。

まあ今更説明するまでもないが、ユーキちゃん 終焉の闇
の影響で世界に現れる綻びのようなもので、別世界に繋がっている。
消す方法は、繋がった別世界の存在とデュエルすることで、繋がりを
断ち切るしかない。

何故今そんな話をするかと言えば、取り込まれたからだ。アテナ
が。しかも、説明するより先に。何故そうなったか、といえば非常
にくだらなないことではあるんだが……。

「くだらなくないよお兄ちゃん。これは、お兄ちゃんを奪い合う泥
沼の聖戦なんだから！」

「泥沼の聖戦ってなんだよ」

まあ、そういうことだ。さだめと俺を取り合っていたアテナ……
うわ、自分で説明すると滅茶苦茶嫌な奴だなこれ……ともかく、最
近すごい勢いでパワーアップしたさだめが、そのパワーを持って俺
を独占しようとしたところ、アテナが精霊の力を使って引き剥がそ
うとして……まあ、実際に見てもらった方が早いかな。じゃ、回想ド
ン。

「さだめさん！ セツから離れてください！」

「イ・ヤ。パワーアップしたさだめなら、お兄ちゃんを無理矢理犯すことも容易！ さだめの時代キタコレ！」

「させません！ さだめさんがその気なら、私だって……」

アテナの背中から天使の翼が生え、服装が変わる。いつも思うが、折角服装が変わるならもうちょっとサービスっぽいシーンがあってもいいと思う。なんのタイムラグもなく一瞬で着替え終了とか、風情がないにも程がある。

「魔法少女ものの基本をわかってないな……」

実際の所、アテナは魔法少女ではなく天使なんだが。

「は・な・れ・て・く・だ・さ・い！」

そのアテナが人外の膂力でもってさだめを引き剥がす。意外にもあっさり引き剥がされたさだめは、すぐにアテナを振り払い、構えをとる。

「ふふん、やる？ 今のさだめ、強いよ？」

「……いいでしょう。力に溺れ、破滅しないよう……私が力の使い方を教えてあげます！」

「え、なにこのバトル漫画のノリ」

俺が戸惑っている間に、二人の間に不穏な空気が流れる。

「アテナ……わかってる？ 今のさだめ、理不尽に強いよ？ かつての欠片程度の力しかないアテナに勝てると思ってる？」

「……舐めないでください。経験が違います」

一触即発、という二人。そこに……、

「やあセツ。どうやらまた歪が……」

「先手必勝です！ 天上の煌めきよ！」

「無駄無駄あつ！ アルトーゲル！」

アテナの放った光をさだめが衝撃波で相殺する。つか、お前それ見た目そのまんまワルクの技じゃねえか。オーラは黒いが。

「遅い！ カルス イエーガー！」

「またネタ技……！ きゃあ！？」

目にも止まらぬ高速移動でアテナを掴み、そのまま投げ飛ばす。その先には歪が……！

「アテナっ！？」

「へっ？」

アテナは、あっさり与时空の歪の中に消えてしまった。

「あ、アテナああっ？」

「あっちゃー……さだめ、やり過ぎちゃった？」

いや、さだめだってわざと放りこんだわけでもないだろう。とりあえず言えることは……。

「希望、お前間が悪い」

「いいんじゃないかな？ どちらにせよ、アテナには向こうに行つて貰うつもりだったし、行った先の世界は、セツも前行つたことある世界だし」

「そうなのか？」

「まあ、向こうでちょっとした戦闘中みたいだけど、アテナなら大丈夫だろう」

戦闘中……というと、もしかしてレオのいた世界だろうか？ なら、大丈夫かもしれない。

「……仕方がない。さだめ、アテナが帰ってきたらちゃんと謝れよ？」

「はーい。わかったよ」

……というか、仮にも上級天使だったアテナをネタ混じりに撃退とか……どんだけ人間離れしてんだコイツは……。

俺は呆れたようにさだめを見て……その視線の先に、あるモノを見つけた。

「……おい、希望」

「……何かな？ セツ」

そのあるモノに、希望も気が付いたのか、苦笑しつつ答える。

「確か、あの歪みを消すには、向こうで誰かとデュエルしなくちゃいけないんだよな？」

「そうだね」

「……で、だ」

「うん」

「俺には、アレがどう見てもアテナのデュエルディスクとデッキにしか見えないんだが、そこんとこどう思う？」

「……なんとかなるんじゃないかな？ 多分、恐らく、きっと、めいびー」

「もし戻って来なかったら、お前が迎えに行ってくれよ？」

「ふう……仕方ないな。アテナも間が悪いというか……」

「近頃アテナ、どっか抜けてるといっつか、残念っ娘キャラになって来てるから……」

三人で、はぁ……と溜息を吐くのだった。

「へっ？」

さだめさんに投げられ、セツの焦ったような声を最後に、私の周りの景色が変わってしまいました。

「えっと……」

状況が掴めません。投げ飛ばされた直後に、何か抵抗感というか、違和感を感じましたが……もしかして、転移門のようなものだったんでしょうか？

見回してみたところ、魔法都市エンディミオンに程近い街道の様です。遠くに王城の尖塔が見えます。それに、あれは……

ドオン……

「！ 戦闘ですか！？」

エンディミオンの外壁の外側で、黒い点のようなものが多数舞っているのが幽かに見えます。こちら側からだと反対方向ですか……とにかく、行ってみましょう！

翼を飛ばたかせ、空に。この空を飛ぶ感覚も懐かしいです。精霊

だった頃は、それこそ毎日飛んでいたんですけど……。

戦況は……どうやら、エンディミオン側が押されていますね。相手の数がそれほど多くなく、エンディミオン側の精霊たちが各自バラバラに動いているところを見るに……。

「奇襲、ですか……」

隠密行動と機動力に長けた悪魔族による奇襲。今はなんとか水際で食い止めているようですが、向こうにも援軍があるはずですし、このままだとマズそうですね……。

「見慣れぬ天使族め！ 喰らえ！」

先を急ぐ私に、『ガーゴイル』らしき悪魔族がその爪を振りおろしてきました。

「……邪魔です。輪廻昇天」

爪をかわして手を悪魔族の身体に当てる。それだけで、勝負は決まりました。

「な、に……？」

悪魔族の身体がポロポロと崩れていきます。光の粒子となり、その粒が私の前で拳大の光球となります。

「ふう……久しぶりでしたけど……失敗せずに済んで良かったです。流石に、さだめさん相手に使うわけにもいきませんしね。文字通り一撃必殺です。私の攻撃って、手加減ができませんし……。」

「と、今はそれよりも……」

天使族の皆さんに加勢しないと……。

「きゃああつ！？」

「危ないエルファイ！」

「！ あれは……」

声の聞こえた方を振り向くと、人間の女の子（と言っても私より年上ですが）と、『勝利の導き手フレイヤ』の姿が。でも、女の子の背後から放たれた『スナイプ・ストーカー』の銃弾を、フレイヤが庇って倒れてしまいました。

「ふ、フレイヤ！？」

「う……」

「大丈夫ですか!？」

とりあえず、次弾を装填していた『スナイプ・ストーカー』を仕留めてから、フレイヤさんたちの所に向かいます。

「わ、私は大丈夫。でも、フレイヤが……」

見ると、フレイヤさんは『スナイプ・ストーカー』の一撃が急所に入ったのか、既に虫の息でした。

「……大丈夫です。私に任せてください」

先ほどの『ガーゴイル』から奪い取った命の輝き。それをフレイヤさんに埋め込んで行きます。

「……転生!」

命の光がフレイヤさんを包み込み、満たしていきます。

「……う」

「フレイヤ!」

「う……エルファイ?」

「! 良かった! フレイヤ!」

エルファイと呼ばれた女の子が目を覚ましたフレイヤに抱きつきます。フレイヤさんは少し苦しそうにしながら顔を赤くしています。

「ごめんね。私が油断してたから……」

「平気よ。あんたたち人間と違って、私たちはこうして転生して貰えば生き返ることが出来るんだから……って聞いている?」

「例え転生出来るとしても、身近な人が死ぬのを見るのは人間としては辛いモノがあるんですよ」

困惑しているフレイヤさんに助け船を出します。そこでフレイヤさんとエルファイさん（仮名）は私に気が付いたようで、二人してこちらに顔を向けてきます。

「あの……ありがとう。フレイヤを助けてくれて」

「……ありがとう。ところであんた、見慣れない顔なんだけど……何者? 私たち天使族の軍に、貴女みたいな天使はいなかったと思うんだけど」

「あ、あはは……私もちよつと良く分からないんですけど……とりあえず、お話はこの状況をどうにかしてからにしましょうか」

状況は、相変わらず良くないです。ほとんど何処からか増援が現れる悪魔族の団に、天使族や数少ない魔法使い族の人たちは押され気味です。

「この急激な敵増援の出現……相手方に召喚士がいますね」

「ええ。或いはパペット・マスターかも。さっきの『スナイプ・ストーカー』、私たち一度倒したから」

「なるほど……そういうことですか」

だとすると、状況は悪くなるばかりですね。今の状態で出来るかはわからないですけど……やってみましょうか。

「すみません。少し離れていてください。出来れば、術が完成するまでの護衛もお願い出来れば助かります」

「え？ ええそれはいいけれど……どうするの？」

「えと、口で説明するより見てもらった方が……行きます」

精神を集中し、高めていきます。この術を使ったのはかつての私でも一度きり。それ以降は、精霊界のバランスを崩すとして封印指定にされていた程の禁呪。

「……Ren、Ba、Ka、Sheut、Ib。我、反魂のスピリチュアの魂名に於いて命ず。黄昏の闇に沈みし者よ、転じて暁よりの輝きとなせ」

詠唱と共に、私の周囲に浮かぶ五つの水晶が輝きを放って行きます。その様子にただならぬものを感じたのか、周囲に居た悪魔族が私たちを攻撃してきますが、それをエルフィさん（仮名）とフレイヤが撃退していきます。

「させない！ 彼女が何をしようとしているのかはわからないけど……とっても暖かい力を感じる！」

「頑張つて！ エルフィ！ 次、右から来るわよ！」

「了解！」

フレイヤさんの指示に従って、エルフィさん（仮名） って、

もういい加減（仮名）は取りましようか。ぺいつ！ がレイピアの一撃を叩きこんで行きます。人間とは思えないくらい良い動きです。これなら大丈夫そうですね。私は安心して詠唱を続けます。

「……闇は光に、冥は天に、死は生に、狭間にてたゆたう魂魄よ、我が導きに従い希望を宿せ！ 力の在り処は、生と死を司る、天空竜の名の下に！ 反転呪魂の法、O・S I・R I・Sオシリス！」

五つの珠から、光が迸ります。戦場を切り裂く輝きが、触れた傍から悪魔族を消滅させていきます。

「す、すごい……」

「圧倒的ね……！？ 見て！ フレイヤ！」

「！？」

光の粒子となって消滅した悪魔族の魂が、戦場にて斃れた天使族たちに降り注ぐ。光の粒子に触れた天使族たちは、先ほどのフレイヤさんと同じように光に包まれ、蘇っていきます。

「うそ……」

詠唱の終了と共に、戦争を終結に導く。敵だけを滅ぼし、味方を蘇らせる、絶対不可避の転生術。私の初めての戦場で、相手悪魔族を根こそぎ消し去った、終末の一撃。

「な、なんとか……使えました……」

何しろ最後に使ってからウンウン年（何年かは聞かないでください）と経っている上、そもそも一度しか使っていない、更に言えば人間になって、力が落ちている状態でのこの術は、成功したのが奇跡のようなものでした。

「……尤も、出力は、数十分の一刻くらいまで落ちています」

「あ、あれで……？」

私たちの視界には、突然蘇って目を瞬かせる天使族と、同じくらいきなり味方が消滅したことで半ば恐慌状態に陥っている悪魔族。

「ええ。まだ敵が残っていますし。現役なら、本当の意味で根こそぎだったでしょう」

とはいえ、これで大勢は決したでしょう。

「……あ」

クラリ、と視界がぶれます。

「だ、大丈夫!？」

「……すみません。ちよつと、ヤバそうです」

久しぶりにこんな大きな力を使ったので、体が驚いてしまったのでしょうか。

「……後は、お願いしますね」

それだけ呟いて、私の意識は落ちて行きました。

「……ふぁ？」

目を覚ますと、最初に目に入ったのは立派な天蓋でした。えと、こういう時、なんて言うんですしたっけ？ 確か、セツが言っていたのは……

「えと、知らない天井だ、でしたっけ？」

「……目覚めて第一声が、聞きかじりのネタ台詞かよ」

横から聞こえてきた呆れたような声に目を向けると、そこに居たのは五人の男女。今のツツコミは黒の短髪をした男の人……って、二人いますね。似ていますし、兄弟でしょうか？

「ええつと、目が覚めた時の第一声はこれがメジャーなんだぞってセツが言っていたので……」

「セツ？ あんた、セツの知り合いなのか？」

「ふえ？」

驚いたように尋ねてくる男の人に、私の方が面食らってしまいます。先ほどの戦闘といい、私の知っている精霊界じゃなく、別世界の精霊界かと思ったんですが……どうしてそんなところにセツの知り合いが……。

「……いえ、別に驚くほどのことじゃないですね」

今更セツが何処に知り合いがいても驚くには値しません。人間な

のに自力で精霊界に辿りつける人ですからね。セツって。異世界に旅行していたところで不思議でもなんでもないです。

「セツは、えつと……」

セツとの関係性を説明しようとして、少し迷ってしまいました。なんて言えばいいんでしょう。友達……と言うには関係が少し深すぎる気がしますし、恋人だと断言するのはさだめさんたちのこともあって憚られます。

「……さだめさんなら迷わず恋人って断言してそうですね」

かといって詳しい事情を会ったばかりの人に説明するのも……。

ええい、ままよ！ です！

「こつ、恋人つ！……未満、です……」

あう……意気地なしです。いえ、これが一番適当な説明ではあるんですが……どうせなら、恋人って断言してしまいたかったです……。

「……セツの奴、こんな可愛い娘に慕われてるのかよ……羨ましい」

「レオ？」

「いや、何でもない！」

ボソつと何事か呟いた男性に、蒼い髪をポニーテールにした女の人がジト目を向けていました。その女の人が、ゴホンと一つ大げさに咳払いをしてから私に顔を向けてきました。

「……その話は今は置いておきましょう。それよりも、まずはお礼を言うておくわ。私の従妹を助けてくれてありがとう。私はメリオル。貴女の名前を教えてもらえる？」

「あ、はい。私は天音アテナといいます」

私が名乗ると、皆さんが少しヘンな顔をします。

「人間の名前みたいだけど……」

あ、そうでした。まだハネを仕舞ってませんでしたね。

「えと……えい」

服もいつものアカデミアの制服に戻す。セツは、一瞬で戻ってしまふことに風情がない、なんて言うていました。が、一々ハダカにな

るなんて恥ずかしすぎるじゃないですか。……いえその、セツが見たいのなら見せるのは吝かではないと言いますかなんと言いますかごによごによ……。

「私、人間なんですよ。ちょっと特殊ですけど」

私がそう告白すると、皆さんは更に驚いたような顔をしました。

「人間！？ あんなすごい術を使えるのに!？」

「あはは、あれはその………なんというか、昔取った杵柄といえますか……」

元精霊で転生しましたーなんてことまで話すのは流石に躊躇われたので、適当に誤魔化すことにしました。

「昔取った杵柄って………さっきも現役がどうのこうの言ってたけど、どう見ても高校生くらいにしか見えないんだけど……」

こ、高校生……？

「あの……私、確かに高等部に通ってますけど……一応、13歳です……」

「え……」

エルフィさんがマズ………といった顔をして固まってしまいました。

他の人たちも少し驚いたような顔で………って！

何故、何故こうも私は年齢割増で見られるんですか！ そこまで老けて見えますか！

「わ、私は13歳です！ なんてそんな意外そうな顔で黙り込むんですかあ!？」

「あ、いや。とても綺麗だったから、同い年くらいかと思ってたよ。ごめんね」

そう言っつて、メリオルさんと似たような髪をした端正な顔立ちの男の人が頭を下げてきます。とても格好いい人ですが、セツという想い人がいる上、とんでもない美形ということなら希望さんで割と見慣れている（とはいえ、あの人は人間離れし過ぎていて素直に格好いいとは言えないのですが）ので特に気になりません。

「お、すげ。初対面のアルフ相手に赤くならない女子見たのかなり

「久々かも」

確かに、格好いい人ですが、私はセツの方がいいです。多分、好きな人いる女の子なら誰でもそんな感じでしょうが。えと……、

「あ、俺はライ。よろしくな。アテナ」

名前がわからず、困っていたのが伝わったのでしよう。ライさんが人懐っこそうな笑みを浮かべて自己紹介してくれます。

「で、もう知っているかもしれないけど、私がエルフィ。さっきは本当にありがとう貴女が来なかったら危なかったわ」

「いえそんな……」

「謙遜しないで。本当に危なかったの。メリオル姉さんたちは、別の所で襲撃があつて出払つていて、アレ以上の増援は望めない状況だったんだから」

「俺たちの方はここを落とすための囮だったってわけか……流石悪魔族。悪知恵が回る」

「まあまあ……それで、エルフィが見たつていうアテナの魔法……相手だけを消し去つて味方を復活させた魔法は、一体なんだったのかな？」

悔しそつに舌打ちするレオさんを宥めながら、アルフさんが柔らかな笑みを浮かべながら聞いて来ます。

「えと、あれは転生術です。相手の魂を味方の魂に転用することで、敵だけを倒しつつ味方を蘇生する、という感じで……」

相手の魂を奪つて使うので、通常の転生術よりも少ないコストで大量に転生を可能にした転生術の極地だと言つて説明すると、皆さん一様に感心したように頷いていました。

「すごいな……最強じゃないか」

「あはは……ホントは、禁呪なんですけど」

人間界という核兵器みたいなもので、それを使うだけで戦場の常識を一変させてしまうとして、滅多なことでは使わないように言い含められていました。

「……まあ、今はもう人間ですし、精霊の法とか関係ないんですけ

ど」

許可なしに使えば捕えられて、封印されてしまつんです。三幻魔とかみたくない感じです。

「つて、神クラスじゃないか!？」

「そこまでの力はないんですけど……あの術以外は平凡ですし」

あれだけが浮いているんですよ……元々転生に特化した精霊だったので使えたもので、私以外には使えたものじゃないんですけど。それに、天使族の皆さんにしか効かない上、蒐集出来る魂も閻魔性に限定されていて……今回みたいな状況でならともかく、それ以外だとあんまり……」

「……それでも、私たちは助かったわ。ありがとう」

「も、もういいですつて。それよりも、セツの事なんですけど……」
私が聞きたいのは、どうすればここから帰ることができるかです。セツが心配しているかもしれない……さだめさんとか、意外と自分の所為だーって落ち込んだじゃうタイプですし……。

「ああ、この間ここに現れてさ。俺とデュエルしたんだけど……俺、負けちまったんだよなあ……リベンジしたいぜ」

どうやら、セツと話したのはレオさんだけのようで、レオさんが色々とその時のことを教えてくれました。

「あの……セツは結局、どうやって元の世界に帰ったんでしょうか?」

「ん? ああ、俺とデュエルした後で、スーツと消えてつたよ。あいつが言っていたのは、帰るためには誰でもいいからデュエルしなくちゃいけない、とか言ってたかな?」

「そうなんですか……じゃあ、私もデュエルすれば良さそうですね」
しかし、そこで問題が。

「あの……私、デツキ忘れてきました……」

「……ええー」

な、なんでしょう。なんだかすつごく残念な娘を見るような目で見られている気がします! し、仕方ないじゃないですか! さだ

めさん相手に立ちまわっている時に、デュエルディスクなんて持っているわけじゃないですか！

「あー……まあ、デュエルディスクならここに幾つかあるし、カードも、幸いここは精霊界だからなんとか都合できるんじゃないか？」
「そ、そうね。私、ちよつと聞いてくるわ」

冷汗を流したレオさんの言葉に、メリオルさんが頷いて部屋を出て行きました。

「……なんとというか、お手数をおかけします……」
縮こまって頭を下げます。

「い、いいわよ別に。それより、デュエルの相手は私にさせて？
助けてもらったお礼に、私がアテナを元の世界に帰すお手伝いがしたいから」

「はい……ありがとうございます。エルフィンさん」

こうして、色々問題はありましたが、私とエルフィンさんのデュエルが始まるのでした。

特別編「？アルカナクロスワールドX2 前編？」（後書き）

こんにちは。

とりあえず、出会いと準備編です。あと、アテナの力の一端。あ、さだめもか。遂に物理的な戦力まで揃ってきたセツの周囲です。とりあえず、これでアテナ自身のカード効果も、大まかには明かされたと思ってくれていいです。まあ、流石にあそこまで凶悪過ぎるものではありませんが。アテナの核兵器発言もあり、本当は六日に挙げたかった。誕生日でしたし。……毎年思っんですが、この誕生日は素直には喜べませんね。誕生日にテレビつけたら黙祷を捧げられる悠です。これで遂に悠も成人の仲間入り。ですが、酒もタバコもするつもりのない悠からしてみれば、エロゲー解禁になった18の誕生日ほどの感慨は湧かなかつたり。

それでは、悠でした！

特別編「?アルカナクロスワールドX2 後編?」(前書き)

はふう……なんとか書き上げました。後編です。

とりあえず、完全にミラーマッチになったので、出てくるモンス
ター殆ど被ってます。

それでは、どうぞ。

特別編「？アルカナクロスワールドX2 後編？」

アルカナ〜切り札の騎士〜

特別編「アルカナクロスワールドX2 後編」

「……うん。これでいいです。私のデッキ」

あのあと、メリオルさんたちが調達して来てくれたカードの中から、私がいつも使っているカードを選んでデッキを組みました。大体は元々の私のデッキの大差ないですが、幾つか私たちの世界にはなかったカードもあつたので、それらも入れさせてもらいました。

「さて、それじゃ始めましょうか」

エルフィさんは、デュエルディスクを構えて準備万端。フレイヤさんと仲が良かったようですし、多分エルフィさんも天使族……だとすれば。

「あの……」

「ん？ どうしたの？」

「いえ、ちよつと提案が」

「提案？」

「はい。ライフは8000にしませんか？ お互い天使族みたいですし、ライフ4000だと……」

どちらも破壊力の高いデッキなので、ライフ4000だと一瞬で終わってしまう可能性があります。特に、お互いに『アテナ』のカードを主軸にしているようですし。

「ああ……確かにそうね。いいわ、ライフは8000で行きましょう」

う

「はい。ありがとうございます」

エルフィさんは快く受け入れてくれました。下手をすればジャンケンゲームになりかねませんし、この変更は良かったと思います。

「それじゃあ、改めて……」

「ええ。いいデュエルにしましょう」

「デュエル!!!」

「先攻は私よ。ドロー!」

さあ、エルフィさんの初手はどうなっているでしょうか？

「……アテナ」

「はい?」

「ライフ、8000にしているよかったわね」

「ふえ?」

「行くわよ! 私は手札から『天使の施し』を発動! デッキからカードを三枚引いて二枚捨てる! 私は手札から『堕天使スペルビア』と『堕天使エデ・アラエ』を墓地に捨てるわ!」

「! 堕天使……」

「更に、手札から魔法カード『おろかな埋葬』! デッキから『アテナ』を墓地に送って、手札から『ヘカテリス』の効果発動!」

「っ!」

この流れは……マズイです!

「おいおい…… エルフィの奴、相当来てるぞ」

「その効果で、デッキから『神の居城 ヴアルハラ』を手札に加え、発動! 手札の『アテナ』を特殊召喚!」

「ひゃ……」

「更に、手札から『コーリング・ノヴァ』を攻撃表示で召喚! 『アテナ』の効果で600ポイントのダメージ!」

アテナLP7400

「『アテナ』の効果を使って、『コーリング・ノヴァ』をリリース。墓地から『堕天使スペルビア』を蘇生召喚! 効果発動! 墓地か

ら『アテナ』を蘇生！ 二体の天使族が特殊召喚されたことで、1
200ポイントダメージ！」

「うぐっ……」

アテナLP6200

「今蘇生した『アテナ』の効果で、スペルビアを墓地に送って蘇生
！ スペルビアの効果で『墮天使エデ・アーラエ』を蘇生！ 二体
のアテナの効果で2400ダメージ！」

「きゃああっ!?!」

アテナLP3800

「私はカードを一枚セットしてターンエンド！ さあ、どうするア
テナ!?!」

「う、うう……」

ま、まさか本当に一ターンで4000以上のダメージを受けるな
んて……流石に予想外でした……。

「これは……辛いですね」

その上、エルフィさんのフィールドは上級天使で埋め尽くされて
います。絶望的。

「でも、やられっぱなしは悔しいです！ 特に、同じ天使使いとし
ては猛烈に！ ドロー！」

よし！ これならまだ行けます！ それどころか……。

「エルフィさん……」

「なに?」

「私が先攻じゃなくて、良かったですね」

「え?」

「私も手札の『ヘカテリス』を捨てて、デッキから『神の居城 ヴ
アルハラ』を手札に加え、そのまま発動！ 手札から『光神テユ
ス』を特殊召喚します！」

「でも、私の『アテナ』の効果でダメージを受けてもらっわ！」

「く……」

アテナLP2600

これがあるから『アテナ』使い同士のミラーマッチはキツイんですよね……。それでも、私はテテュスを出さないわけにはいきませんでした。

「行きます！ 私は手札から『強欲な壺』を発動！ デッキからカードを二枚ドロー！」

「テテュスのいる時にドロー……ブースト」

「そうです！ 私はたった今引いた『The splendid VENUS』をオープンしてドロー！『コーリング・ノヴァ』ドロー！『緑光の宣告者』ドロー！『紫光の宣告者』ドロー！『ムドラ』ドロー！『虚無の統括者』ドロー！……ドロー終了」

「ふう……」

安堵したように息を吐くエルフィさん。ですが、甘いです。

「何を安心しているんですか？」

「え？」

「私は手札から『打ち出の小槌』を発動！ 手札のカードを五枚デッキに戻し、シャッフル、五枚ドロー！」

私のドローは終わりません。その程度で終わりはしません！

「私は『アテナ』をオープンしてドロー！『光神テテュス』ドロー！『ヘカテリス』ドロー！『シャインエンジェル』ドロー……！」

それから更に四枚ドローして、私のドローは終了します。これで私の手札は18枚。……十分です。

「すごい手札……あの分厚いデッキはそういうこと……」

「はい。普通の40枚構成だと、すぐデッキが終わっちゃうので天使族の枚数を増やして、ブーストを加速させるのも目的の一つです。」

「さあ、行きますよ。魔法カード『最終戦争』！」

「なあっ!？」

「手札を五枚捨てて、フィールド上のカードを全て破壊します！」

希望さんとのデュエルで思い知った、私のデッキの弱点、除去能力の低さ。それを補うために、セツに言われて真っ先に投入したの

がこのカードでした。通常のデッキならディスプレイアドバンテージがきつ過ぎるこのカードも、テテユスが居ればまったく問題なしで使えます！

「くっ！ ならチェインして『和睦の使者』！ このターンの戦闘ダメージは無効よ！」

「……通します」

残念。これではライフを削れませんね。

「もう一度手札から『ヘカテリス』の効果を使い、デッキから『神の居城 ヴアルハラ』を手札に加え、発動！ 手札から『光神テテユス』を特殊召喚！」

今『最終戦争』によって墓地にいった天使と、寸分違わぬ姿の天使が再度召喚されます。

「更に、手札から魔法カード『儀式の準備』！ 『最終戦争』で捨てた『宣告者の預言』を手札に戻し、デッキから『神光の宣告者』を手札に加えます！ 儀式魔法、発動！」

「あれは……最強の宣告者！」

「手札の『シャインエンジェル』と『紫光の宣告者』を儀式の生贄として、『神光の宣告者』を攻撃表示で儀式召喚です！」

私のフィールドに、純白の光が立ち昇り、その中から虹色の輝きを纏った宣告者が姿を現します。

「さあ、私はまだ、通常召喚を行っていません！」

「そんな……」

「私は手札から『ムドラ』を攻撃表示で召喚！ 『ムドラ』の攻撃力は、墓地に存在する天使族モンスターの数×200ポイントアップします。私の墓地には天使族が、えーと……ひい、ふう、みいの……九枚！ よって『ムドラ』の攻撃力は1800ポイントアップの3300！」

「うわぁ……」

しかも、私の手札は未だ7枚。ここからいくらでも展開出来る形です。

「私はカードを一枚セット。ターンエンドです」

「……まさか一気にひっくり返されるとは思わなかったわ……決まったと思っただけだ」

「まだまだ、始まったばかりですから」

「そうね。けど、この状況は厳しいわね……」

「……ライフ、16000くらいで始めた方が良かったんじゃないか？」

「……そうね。どちらも火力が高過ぎるわ」

「普通のデッキであんな真似されたら泣くしかないよね」

「まったくだ」

「私はモンスターを一体守備表示でセット。ターンエンドよ」

「私のターン、ドロー！ 『緑光の宣告者』！ テテユスの効果で、更にドロー！ 『朱光の宣告者』ドロー！」

ここで、メリオルさんたちに用意して貰った私が知らないカードが手札にきました。『朱光の宣告者』。宣告者シリーズの、モンスター効果版。チューナーというのとはよくわかりませんが、もう一つの効果の方は使えるので投入してみました。

「『光神機 桜火』、ドロー！……終了ですね。私はモンスターを一体守備表示でセットし、バトルに入ります！ 『光神テテユス』で守備モンスターに攻撃！ 『ホーリー・サルヴェイション』！」

「私の守備モンスターは『ジェルエンデュオ』！ 戦闘では破壊されないわ！ この効果は永続効果だから、その宣告者でも無効化できない！」

「……私はターンエンドです」

手札から溢れた三枚のモンスターカードを墓地に捨てます。これ

で、更に『ムドラ』の攻撃力はアップして3900。

自分でも使っています。下級天使は本当に場持ちが良いです。おかげで、折角さっきのターンに纏めて焼き払ったのに未だダメージを与えられていません。

「私のターン、ドロー！ 私は『ジェルエンデュオ』を二体分の生贄としてリリース！」

この効果も、ルール効果である以上『神光の宣告者』では妨害できませんね。むう……。

「私は『墮天使アスモディウス』を攻撃表示で召喚！」

「アスモディウス……」

攻撃力は3000。『神光の宣告者』の守備力を超えています。

尤も、今『神光の宣告者』は攻撃表示ですが。

「……」

エルフィさんは少しの間迷っているようでした。

「……攻撃表示つてのが意味あり気ね。正直、攻撃する気が失せるわよ」

……私の手札に『オネスト』があるかどうか思案しているのでしょう。少なくとも、エルフィさんに見せたドローカードの中に、『オネスト』がなかったのは事実ですが、それ以外にも大量ドローしている以上、油断はできない……と、考えているんでしょう。

「……けど、攻撃しなければどちらにせよ同じね。行かせてもらうわ！ 『墮天使アスモディウス』で、『神光の宣告者』を攻撃！ 『ヘル・パレード』！」

色欲の墮天使の放つ攻撃が、『神光の宣告者』を呑みこんで行きます。

「くっ……！！」

「え？ 通るの？」

アテナLP1400

「っ……！！」

っええそうですよハッターですよ！ あれだけ引いておいて、結

局『オネスト』は引けませんでしたよ！ 伏せカードも『光神化』ですし……ああもうホントに！ 引きが良いのか悪いのか！

「え、えっと……私はターンエンド」

「く……私のターン、ドロー！」

もう！ セツとの最初のデュエルでもそうでしたけど、どうしてこうピンポイントで欲しいカードが引けないのやら……。いえ、それが普通なんでしょうけど。

「……しかも、ここに来てブーラストができないという……」

手札にきた『和睦の使者』を睨みつけます。いえ、いいカードなんですけど。

「……とりあえず、アスモディウスには退場してもらいます。私はセツトされた『マシユマロン』をリリースし、『光神機 桜火』を攻撃表示で召喚！ バトルフェイズ！ 『ムドラ』でアスモディウスを攻撃！ 『スフィンクス・スラツシュ』！」

兎も角、『神光の宣告者』が倒されたことで、『ムドラ』の攻撃力は更にアップして遂に4300。もうまともな手段で戦闘破壊することはできない攻撃力です。

「くっ……！」

エルフィLP6700

「っ破壊された『墮天使アスモディウス』の効果発動！ 私のフィールドに、アスモトークンとディウストーンを特殊召喚するわ！」

「させません！ 手札から『朱光の宣告者』の効果発動！ 手札の

『コーリング・ノヴァ』を墓地に送って効果を無効化します！」

「しまった……！」

「行きます！ 『光神テテュス』でプレイヤーにダイレクトアタック！ 『ホーリー・サルヴェイション』！」

「きゃあっ!？」

エルフィLP4300

「続けていきます！ 『光神機 桜火』でダイレクトアタック！」

「うぐっ……」

エルファイルP1900

「ターンエンドです！」

ふう、これで漸くライフも横並びですか……普段ならワンターンキル級のダメージですが、普段とはライフが倍ですからね。

「私のターン、ドロー！ 私は魔法カード『貪欲な壺』を発動！

墓地の『アテナ』二体と『コーリング・ノヴァ』『ジェルエンデュオ』『墮天使アスモディウス』をデッキに戻してシャッフル。二枚ドロー！ 更に『強欲な壺』！ 二枚ドロー！」

「……よくよくブーストカードが来ますね」

「私は『勝利の導き手フレイヤ』を召喚！ お願い、フレイヤ！」

フィールドに、私にとつても見覚えがあるポンポンを手にした天使の少女が現れます。……そう言えば、私あの子のコスしたんですよね。懐かしいです。

「更に永續魔法『コート・オブ・ジャスティス』を発動！ 手札から『光神テテュス』を特殊召喚！」

フレイヤの声援を受け、輝きを増したテテュスが現れます。攻撃力2800。

「行くわ！ 『光神テテュス』で、アテナの『光神テテュス』を攻撃！ 『ホーリー・サルヴェイション』！」

「きゃ……」

アテナLP1000

これで、私のブーストは効かなくなりました。その上、今度は逆にブーストがかけられる形になってしまいました。それに、攻撃力2800は結構マズイです。『ムドラ』なら十分に超えられる数値ですが、やはり怖いのは『オネスト』ですね。手札が一枚でも残っている現段階では油断はできません。なにより、今の私のライフでは『オネスト』を受けた時点でお終いですしね。

「ターンエンド」

「私のターン、ドロー！」

手札を確認します。……試してみましようか。

「行きます！『ムドラ』で『光神テテユス』を攻撃！『スフィンクス・スラッシュ』！」

「手札から『オネスト』を使うわ！」

「っ！ やっぱりあるんですか！」

「なら、私は手札から『アルカナフォース？』 TEMPERANCEを捨てて、ダメージを無効化します！」

「っ！ TEMPERANCEか……なるほど。道理で躊躇いなく攻撃してきたわけね」

「ええまあ。『ムドラ』は倒されてしまいますけど、仕方ありません。リバーズカードオープン！『光神化』！手札の『ジェルエンデュオ』を攻撃表示で特殊召喚！『ジェルエンデュオ』を二体分のリリースとして『アテナ』を召喚します！」

「っ……なるほど。倒されても良かったのね」

「はい。私は『光神機 桜火』をリリースし、墓地の『ムドラ』を特殊召喚！『アテナ』の効果により600ポイントのダメージを与えます！」

「くっ……」

エルファイル1300

「カードを一枚セットして、ターンエンドです！」

「私のターン。ドロ！テテユスの効果発動！『アルカナフォース』 The Fool』をオープンしてドロ。『スケルエンジェル』ドロ。『光神機 轟龍』ドロ……たった今引いた『トリド・イン』を発動！轟龍を捨ててカードを二枚ドロ！」

「くっ……」

私と殆ど同一のデッキ構成。それ故に、この展開がどれだけマズイかも手に取るようにわかります。しかも、エルフィさんのフィールドには『コート・オブ・ジャスティス』とフレイヤ。最上級天使の召喚は覚悟しなければならぬ上、フレイヤによる攻撃力アップ。攻撃力が遂に4900まで上がった『ムドラ』は『オネスト』さえなければ気になりませんが、『アテナ』は危険です。

「更に『ダーク・ヴァルキリア』をオープンしてドロー！……終わ
りか。まあデッキも削れてきたし、こんなものかな」

「……今のところ、上級モンスターは来なかったようですが……」。

「私は『コート・オブ・ジャスティス』の効果を使って『ダーク・
ヴァルキリア』を攻撃表示で特殊召喚！ 更にデュアル召喚して魔
力カウンターを乗せるわ！」

デュアル召喚された『ダーク・ヴァルキリア』は、周囲から闇の
魔力を取り込み、力を増していきます。

「っ！ でも、特殊召喚とデュアル召喚で、二回分のダメージを受
けてもらいます！」

「く……」

エルファイルP100

あと……一歩！

「『ダーク・ヴァルキリア』の効果発動！ このカードに乗ってい
る魔力カウンターを一つ取り除くことで、相手モンスター一体を破
壊するわ！ 当然、破壊するのは『ムドラ』！」

「くっ！？」

『ダーク・ヴァルキリア』の周囲に満ちる闇の魔力が剣先に集中
し、私の『ムドラ』を撃ち抜きます。

「バトルフェイズ！ 『光神テテユス』で『アテナ』を攻撃！ 『ホー
リー・サルヴェイション』！」

「リバーカード発動！ 『和睦の使者』！ させません！」

流石に、マイフェイバリットの『アテナ』をむざむざ破壊されは
しません。……というか、どうでもいいんですが、あのソリッドビ
ジョンに映るキリリツとした『アテナ』の表情を見ると、なん
だか悲しくなってきました。

「……ウチのシャルナとは大違いですよ……」

聞けば、この世界の『アテナ』の精霊はとても凛々しい、立派な
天使さまらしいのですが……。いえ、あんまり深く考えないように
しましょう。テンションが落ちるだけです。

「私はカードを一枚セットして、ターンエンドよ！ さあ、来なさいアテナ！」

「……私のターン」

……問題ないです。あとたった100のライフ。『アテナ』が存在している以上、ただ手札の天使族を召喚すればいいだけ……あの伏せカードは気になりますが、例えば効果ダメージを無効化されても、ヴァルキリアを戦闘で倒せば私の勝ち……。

ちらり、と手札を確認する。手札は一枚。『打ち出の小槌』です。このドローでモンスターを引ければ……。

「ドロー！」

ドローカードは……『シャインエンジェル』。

「私は……っ」

迷わず召喚しようとして……躊躇いました。何故でしょう。このまま『シャインエンジェル』を召喚したら、負ける気がします。

「……精霊としてのカン、でしょうか」

このデュエルで使われた天使たちが、私に警告を発している気がします。

『ピキイ！』

『ピピッ！』

『ピーピー！』

「ふえっ？」

「わ……それ、宣告者たちよね」

私動きを止めていると、突然私の周りを朱、緑、紫色の光が飛び交い始めました。

「えと……懐かれた、んでしょうか？」

「そうじゃない？ 多分、だけど」

「はあ……」

兎も角、今この場で宣告者たちが輝いた意味……やっぱり、警告……なんでしょうか。

「……なら、それに従わない手はありませんね」

ここに、何の意味もないと考えるほど楽観的にはなれません。

「行きます。手札から『打ち出の小槌』を発動！ 手札を一枚デッキに戻し、一枚ドロ―！」

っ！ このカードは……。

「私は魔法カード『早すぎた埋葬』を発動します！ ライフを80ポイント支払い……」

アテナLP200

「墓地の『The splendid VENUS』を特殊召喚します！」

「なっ！？ いつの間に……」

「墓地に送るチャンスなんて、いくらでもありました」

最初の『最終戦争』然り、そもそも手札から溢れたカードもたくさんありました。

「そしてこの瞬間、『アテナ』の効果が発動し、『The splendid VENUS』の効果により、この効果は無効化されません！」

「っあ！」

エルフィさんの目線が一瞬手札に向きました。

「これで、決まりです！ 天罰てきめん！」

「きゃああああっ！？」

エルフィLP0

「それで結局、エルフィさんの伏せカードはなんだったんですか？」「ミラーフォースよ。手札に『ハネワタ』が居たから、バーン効果はそれで無効にするつもりだったの」

私はその『ハネワタ』というカードを知らなかったので聞いてみると、手札から捨てることで、そのターンの効果ダメージを無効化するカードらしいです。『朱光の宣告者』と同様にチューナー？

というものでもあるらしいですが、その辺はよくわかりません。

「でも……そのカードいいですね。私も欲しいです」

「持って行けばいいんじゃない？ 私も余っているし、今日会えた記念にあげるわ」

「本当ですか？」

「ええ。ただし、またその内リベンジするわよ」

「そうそう。今度はセツと一緒にな。俺もアイツにリベンジしなくちゃならん。このまま負け越しじゃ、ちよつとな」

「そうですね。セツなら、もしかしたら来られるように出来るかもしれないませんし」

いざとなれば、希望さんをお願いすれば何とかなるでしょう。なんでもアリですし。あの人。

『ピイ……』

「あの、この子たちは……」

「……まあ、連れていくつても、なあ？」

「でも、こんなに懐いているのを引き離すのも……」

『キイキイ』

「きゃっ？ ちょ、ちよつと潜り込もうとしないでください！」

お腹の辺りから制服の中に潜り込もうとする朱色。

「ハッ!? これは、セツの前にこのまま出て、できちゃったネタをすべしという……」

『いやいやいやいや!』

その場の全員から総ツッコミを受けてしまいました。

「ネタが古い！」

「あ、でもスイカとかでやるよりも、お腹が動く分リアリティが……」

……

「真剣に検討するな！」

「私、この子たちを連れて帰ります！」

「理由が理由だけに素直に領けない！」

はて、何かおかしいことがあったのでしょうか？

「……まあ、カードは持って帰ればいいと思うわ。きっと力になると思うし」

「はい　よろしく願いしますね？」

『ピィ！』

「ちよっ……だから服に潜り込まないで……十三歳のっ……サービ
スシーンはっ……うくっ……ひゃっ!?　若干犯罪……っ！」

誰ですか今精神的にはお婆ちゃんだるとか言った人は!?

「あ……」

スウ、と体が透けていきます。

「お別れみたいだな」

「セツに伝えといてくれ。リベンジするのを待っているからなっ
てさ」

「……もうちよっとお別れイベント何とかならなかつたんでし
ょうか?　すっごいドタバタとした最後でしたけど……ごめんなさいそ
れじゃあ私はこれ」

「あ、消えた」

「……別れ際の台詞も最後まで言えないのね。あの子」

「これで帰らせていただきます……って、え？」

「おーお帰りアテナ」

「……セツ？」

「どうした?　そんなキョトンとした顔して」

「あ、えと……あ、そうですー！」

『ピッ!?!?』

傍に居た緑色の子を掴んでお腹に突っ込みます。

「で、出来ちゃいました！」

「どうですー!?!?」

「……」

..... あ、そっか

「..... すみません。謝りますからその長過ぎる沈黙はやめてください」

「いやその..... 面白かった、ぞ？」

「いつそ蔑んでください.....」

「というか、まったく驚いていない上に心配していた様子が欠片もないんですが.....」。

「あの、さだめさんとかは.....」

「え？ ああアイツなら通販で買った『千の棘になって』鋼鉄の童貞』とかいう拷問器具兼拘束具を受け取りに行っていないぞ？」

「どこから突っ込めば!？」

「そのあからさまに怪しい商品名とか、心配のしの字も感じられない対応とか、明らかにセツ用っぽいのにサラッと受け入れているところとか！」

「どーセアテナならケロっと戻ってくるから心配しなくていいよね」とか言ってたな。あと、その拷問器具は所謂アイアンメイデンの男性版らしいぞ？ 俺の無駄スキルの一つに縄抜けEXがあるからとくに問題ない」

「..... 一つ一つ丁寧な回答ありがとうございます。あと、心を読まないでください」

「というか、例え信頼の結果だとしてもその対応は少しショックです！」

「ま、なににせよ帰って来てくれてよかったよ」

「..... はい。あ、セツに伝言です」

「ん？」

「リベンジするのを待っているからな、だそうです」

「..... レオか。そうだな。全部終わった暁には、それもいいかもな」
セツが遠い目で物思いにふけています。ポンポン、と唐突に、セツが私の頭を撫でてきました。

「どうしたんですか？」

「んや、なんとなくな。撫でやすい位置にあったから」

「そ、そうですか。ではその……存分にお楽しみください……」

「や、そうやって頭差し出されるのもなんか違うと思うんだが……
まあいいか」

しばらく、穏やかな時間が続きます。が、まあ私たちがそうそう長い時間ゆったりしていられるかというとそんなはずもないわけで

「お兄ちゃん！ 届いたよ」千の棘になって『鋼鉄の童貞』
が！ 試してみない？」

「拷問器具見せられて、うん！ 試してみるよ！ と笑顔で頷ける
奴を、俺はノーマルとは認めない」

「またまたあゝお兄ちゃんがノーマルとか……あ、アテナお帰り」

「あ、はいただいませ……って軽っ！ 軽いですよさだめさん！
もうちよつとごう、自分のミスで異世界に放りこんじやったこと
に対する誠意というか……」

「帰ってこれたんだし、いいじゃん。それに、悪いことがあったな
らともかく、結構幸せそうだし。ならいいじゃない」

「そ、それは……」

「……ま、そういうことだな。アテナも、もしまだ俺たちをこつち
に連れてきたことに負い目があるなら、気にしなくてもいいからな」
「……え？」

セツがサラッと云った言葉に、思わず目を見開きます。

「まだちよつと引き摺ってるだろ？ いいんだよ。別に。俺たちは
今、そこそこ楽しいんだから。悔やんで前に進めないくらいなら、
いつそバツサリ切り捨ててしまった方がアテナのためだぞ」

「あ……」

「アテナ、最近空回ってばかりだったもんねゝ気負い過ぎ気負い
過ぎ」

「さだめさん……」

「無理すんな。気負ったところで、するのは後悔ばかりだぞ」

セツの言葉は、何故か私の心にスツと入って来ます。

「……はいっ！」

私は涙ぐみ、セツの胸に思いつきり飛び込んで……

「おっと、そうは問屋がおろさないよ」

さだめさんに阻まれました。

「な、なんですか！？ 今の場面は感激した私がセツに抱きしめてもらう感動の場面でしょう！？」

「さだめがそれを許すとも？」

その後は結局、いつも通りのセツ争奪戦。でも、そのいつも通りがとても心地よくて、私はちっぽけな悩みなんて何処かに消えていくのを感じました。

おまけ。

「む。何このおチビさんたち。シャルナおねーさんになにか用かしらん？」

『ピイピイ』

『ピイイ？』

『ピキイイツ！』

「おおっ！？ なになに！？ なんかあたし、怒られてる！？ いたっ！？ いたたたっ！？ ちょ、やめっ…… ああもうケンカ売んならかうわよ！？ 天罰できめん！」

『ピキイイイ！！』

「へっ！？ 返してきた！？ ヴニャアアアアアアアッ！？ ……パタム」

『ピイ！』

『ピキイ！』

『ピイピイ！』

「お、おのれ、下級天使の分際でよくも……」

「シャルナ様〜？ どこにいらっしやるんですかあ〜……あつ！」
「げっ……見つかった!？」

「シャルナ様！ とうとう見つきました！ さあつ、いい加減キリキリ働いてください！ じゃないとまた私の休暇が潰れて……あれ？ ポロポロですね？」

「そ、そうそう！ そうなのよ！ だから仕事は……」

「丁度いいので、このまま拘束しておきましょう？ え？ 貴方たちがやってくれたんですか？ わあ、ありがとうございます。あの、これからお手伝いしてもらってもいいですか？」

『プイー!』

「ありがとうございますありがとうございます！ これで少しだけ負担が減りました！」

「く、くうう〜余計なことを……あ、待ってホントにお姉さんポロポロで……この子らの攻撃が案外効いていて……ってカイエン！？ 聞いている!？」

「シャルナ様。カイエンは学習したのです。シャルナ様の言葉をまともに聞いていたらまた逃げられると！ だから、シャルナ様の言葉はほぼ全て嘘偽りと捉えることにします！」

「あ、じゃあ今ぴんぴんしていて全然元気だから仕事バリバリやっちやおうかなあ〜？」

「ええ!？ そ、それは大変ですすぐに休まない!？」

「ふっ！ その素直さがチミの敗因だよん？ じゃあな〜とつつあ〜ん！」

「ってそんな手に引つ掛かるわけないでしょう!？ さあつ！ お屋敷一杯分のお仕事が溜まってますからねえ〜！」

「うええ〜ぜったいやりたくない〜ネットゲがあたしを呼んでいる〜」

「せめてアテナ様が呼んでいるとかにしたらどうですか……」

特別編「？アルカナクロスワールドX2 後編？」（後書き）

こんにちは。

前半のデュエルはともかく、後半の締めめに自信が持てないというか、もうなんか締めが上手くいかなくて最終的にやつつけ仕事になっってしまった感じが強い後編でした。

デュエルの方はもう思いっきりミラーマッチ。しかも、ライフを削る速度が半端ない。やむを得ず8000ルール解禁です。エルフイの最初の流れとか、実際やられたらほぼ詰みですけどね。上級五体一ターンでとか……不可能ではないにしろ、奇跡的な展開。で、特別編にも関わらず、強化イベントにしてみました。特別編であつても本編に絡ませる辺りが悠クオリティ。というわけで、アテナのデッキに『朱光の宣告者』と『ハネワタ』追加です。モンスター効果やバーン効果に対する耐性もでき、より一層強化されました。さて……後はもう一つコラボがあつたりするので……うん。いつになったら終わるのかわかったもんじゃありません。夏休み終了までに第四期に行けるのかどうか……無理しない程度に頑張ります。それでは、悠でした！

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者2 前編？」（前書き）

どうやら、コラボデュエルを一話に収める、ということを決めてきた感のある悠です。とりあえず、豆フクロウさんの旋風の守護者とのコラボ二作目、前編をお送りします。今回はさだめとのことでは

……書き易いなあさだめ……。

それでは、まだデュエルも始まりませんが前編をどうぞ！

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者2 前編？」

アルカナく切り札の騎士く

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者2 前編？」

時刻は深夜。

静寂に沈むアカデミアのレッド寮、セツのテント。そこに忍び寄る影一つ。

「ふ、ふふふふ……」

漆黒の、影のようなものを身に纏った小柄な人影が、堪え切れじとばかりに忍び笑いを漏らす。

「最近ご無沙汰だったけど……というか、元の世界に居た時以来？
兎に角、折角こんな素敵能力が手に入ったんだし、利用しない手はないよね」

ぶつちゃけさだめである。ぶつちゃけ夜這いである。特に訓練したわけでもないのに元々の力のように終焉の精霊の力を使いこなすその適応力や器用さは凄まじいモノがあるが、主にそれが発揮されるのが、セツを襲うことにのみ特化している辺りがさだめらしい。

「影を纏った隠密行動……力尽くでの逆レ プ……くふふ、夢が広がるね」

実の兄に対して公然と逆レ プを宣言するさだめ。そんなさだめが足下に一瞬光るものを見つけた。

「ん……？ 糸？ まさか罫……ふふ、甘いよお兄ちゃん。この糸はダメー。本命はその先に仕掛けられた闇に同化する黒塗りのピア

ノ線……と見せかけてっ！」

さだめは下に向いていた自分の視線を上にあげる。そこにあったピアノ線をニヤリ、としてやったりの笑顔で睨む。

「ふふふ……読み切った！」

さだめは更に、自分の横手に仕掛けられたピアノ線にも注意を払いながらその全てを回避する。

ピピッ！

「……彘っ？」

カツ！

「うそおっ！？」

一瞬の閃光の後、さだめが吹き飛んだ。

キユドッ！

「どおっ！？」

落下地点に今度は地雷。吹き飛ぶ相手の体重や空気抵抗等まで計算された完璧な設置位置。明らかにさだめをピンポイントで狙い撃ちしていた。

バゴウッ！

「はぶしっ！？」

追い打ちの地雷で吹き飛ばされたさだめがセツのテントのすぐ近くに転がってくる。

ガシャンッ！

「って檻！？」

最終的に、地面からせり上がって来た檻がさだめを閉じ込めた。目を白黒させるさだめに、気だるげに溜息を吐きながら近寄る影。セツだ。

「……ったく。嫌な予感がしたから念のために罾を仕掛けてみれば……なにやっつてんださだめ」

「お、お兄ちゃんこそ、これは実の妹に対して仕掛ける罾の域を超えてるよ……」

「馬鹿言え。ピンピンしてるだろお前」

「だからって、二重三重のトラップの上に赤外線センサーとか……
ただのテントが、どこの機密情報局のセキュリティ……？」

「ちなみに、それも回避した場合はテントの入り口にセンサーが仕
掛けてあった。入ろうとしたら電流」

「引つかかったのがさだめだからよかったけど、もしアテナが引っ
かかっていたらどうするつもりだったの？」

「アテナなら、最初のピアノ線で引っ掛かるだろ。その場合は、金
ダライが直撃して、その音で俺が目覚ます手はずになっていた」
つまり、トラップを回避すればするだけ酷い目に遭っていたらし
い。それなら素直に最初のトラップで引っかかっておけばよかった。
「っていつか、何時の間に爆弾なんて……」

流石に爆弾作成のスキルは法的にヤバいのでは……という目で見
るさだめに対し、セツは溜息を吐く。

「貞操を守るためには、無駄スキルも犯罪レベルにまで引き上げる
必要があつてだな……」

「近親相姦と危険物の作成&殺人未遂ってどっちが重い罪かなあ！
？」

「正当防衛だ」

どう見ても過剰防衛に見えるが、相手がさだめならばセツの言い
分が正しく聞こえてしまう。

「……どうせセンサーも手作りなんだろうね。材料は？」

「希望にねだった」

「きよ、強力なパトロンがお兄ちゃんに……」

「スポンサーと言えスポンサーと。パトロンだと俺と希望が愛人関
係にあるみたいに聞こえるだろうが」

それはぞつとしない。タダでさえ希望は絶世の美青年なのだ。兄
がそんな道に引きずり込まれるのだけは阻止しなければならぬさ
だめである。

「……悪し様に言われているねえ」

噂をすれば影、というか、噂をせずとも勝手に現れる希望がすぐ

近くに現れていた。

「希望。お前が来たってことは、もしかしてまたアレか？」

「動じないね。まあいいけどさ。うん。さだめの部屋に現れたんだけど、さだめ、ここにいるからさ」

「ああ……」

「えーつまりさだめが行かなきゃいけないの？　これからお兄ちゃんとの熱い夜が……」

「待ってないから。兎に角、さだめをそこに放りこめばいいわけか？」

「まあ、そういうことだね。都合よくセツが捕まえてくれたわけだし、このまま連れて行こう」

「ちょ、こんな猛獣を運ぶサーカスみたいな感じで連れて行かなくても……」

「似たようなものじゃないか」

「正確には淫獣だろ」

「違うない」

「極々自然な流れでさだめを獣扱いしないでよ！」

「ケダモノだろ？」

「お兄ちゃん限定で」

「このまま放りこむとするか」

「うわ〜んごめんなさい今日はもう何もしないから出して〜！」

とうとう泣きが入ったので、苦笑したセツが檻にかかっている鍵を開ける。

「チャンス！」

「バチィッ！」

「うにいいっ!？」

さだめが懲りずに突破しようとしたところ、すかさずセツが手に持ったスイッチを押した。瞬間、さだめの全身に電流が流れ、流石のさだめも目を回して気絶した。

「甘い。その檻は全体がスタンガンだ。名付けてスタンプリズン」

「いやはや。キミの発想には中々感服するね。将来は保障するからウチに来るといい。高待遇で雇わせてもらおうよ」

「……縁があればな」

目を回して気絶したさだめを担ぎあげ、セツは女子寮に向かう。

「ちなみに、その檻の電圧はどれくらいなのかな？」

「最大電圧は100万ボルト。クマでもイチコロだ」

「……つくづく、妹に仕掛ける罠じゃないね」

希望も溜息について、セツについて女子寮に。自然な流れでさだめの部屋のドアをピッキングでこじ開ける（所要時間約5秒）と、セツは部屋の中にある時空の歪を見る。

「……僕が言うのもなんだけど、サラッと犯罪技術を披露しないでくれるかな？」

「いいだる別に。妹の部屋だし」

「妹の部屋にピッキングで入るのは、果たして別にいい、と判断していいものか……」

「さだめだから大丈夫だ」

断言するセツ。

「で、コイツにさだめを放りこめばいいのか？」

「いや、どうせだから僕たちもついて行こう。それに僕は、この先に居る子たちと面識があるしね」

「そうか。ならそうするぞ」

特に動揺した様子も見せず、セツは躊躇いなく時空の歪に身を躍らせる。

「……もう少しくらい、からかい甲斐つてもものがあってくれと、僕好みなんだけど。まあいいか」

溜息をついて、希望も時空の歪に入ってしまった。

「あーもう。またこんなとこに……」

一方、最早見慣れた、と言っても過言ではない無人のアカデミアに放りこまれた真紅の髪をポニーテールにした少女、紅龍蓮は、いつものようについ最近想いの通じた恋人、甲斐祐騎を迎えにレッド寮に向かっていた。

「祐騎、今回もいるわよね……」

少し不安そうに呟く。こういう状況に巻き込まれたのは初めてではないが、それでも好きな人がいないのは不安なのだ。

「……ちよつと急ご」

『あらあらあゝそんなに慌てなくても、祐騎君ならちゃんというわよ？ エールちゃんの気配を感じるもの』

「い、いいでしょ別に！」

茶々を入れてくる自分の精霊、『椿姫ティタニアル』の精霊、ティルに言い返しつつ、速めた足を緩めることはしない蓮。

『ああゝんもう蓮ったら初々しくていいわあゝ！ 祐騎君が羨ましい！』

「うるさいわねこの色欲植物は……」

扱いにくい自らの精霊に辟易する蓮の視界に、ふと人影が映る。

「ゆづ………！」

一瞬自分の恋人かと思い、呼びかけようとした蓮だったが、どうも自分の知る祐騎に比べてシルエツトが大きい。単純に祐騎より背が高いのもあるが、どうも何か背負っているようだ。

「……ん？ あんたは……」

その人物は蓮を見て、驚いたように身を固めた。どうも背負っているのは女の子のようだった。

「シグナム………？」

その呟いた言葉で、蓮はその人物が自分と同じような立場の人間だと理解した。

「シグナム……?」

俺の目の前に現れたのは、リリカルな はに登場する夜天の騎士、シグナムに酷似した容姿を持つ女の子だった。いや、よく見れば違う。俺の知るシグナムに比べて背が低いし、髪ももつと赤い。が、全体的にはそっくりだった。とりあえず、これだけは言っておこうと思う。

「……ナイスポニテ!」

「は?」

「いや、なんでもない。衝動的に溢れ出た、魂の叫びみたいなもんだから」

実際に見事なロングポニテール。個人的に満点だ。

「鮮やか! ブラバー! 実にエクセレント!」

「は、はあ……」

「ふ……ここまで見事なポニテがあるとはな……」

膝を着く。負けたぜ……。

「あ、あの……」

おっと、感動的なポニテールの前に、思わず膝を着いてしまったぜ。

「あの、貴方もトリッパー……よね?」

「ん? まあ、そんなようなもんだな。正確には、ちょっと違うんだが」

俺たちの場合は、異邦者とか来訪者、客人まろうでって言った方がしっくりくるが、広義では変わらない。

「その背中の子も?」

「ああコイツは御堂さだめ。俺の妹だ。ちなみに俺はセツ。今回は妙なことに巻きこんでしまってますまない」

「いいえ、構わないわ。私たちも、何度かこういう状況は経験しているから」

「そうか。なら話は早い」

「あ、でもちよっとまって。多分、もう一人巻き込まれていると思

うから……迎えに行ってもいいかしら」

「ああ。もちろん。どうせコイツが目を覚まさないと、デュエルもできないしな」

俺は背中ではるさだめを示して見せる。

「あの、ところでその子はどうして眠っているの？」

「ああ、ちよいと電流を……いや、なんでもない」

正直に言おうとして、断片的に聞いてもまったく理解を得られないであろう事実気付き、口を噤む。

「で、電流……？」

案の定、シグナム似の少女は怪訝そうな顔で訝しむ。あ、そういえば……。

「君の名前も教えてくれるか？」

「あ、そうね。ゴメンナサイ。私は紅龍蓮。蓮でいいわ」

「ああ、よろしくな。蓮」

蓮と名乗った少女は、何処かそわそわした様子でチラチラと俺の背後を見ている。あれは……レッド寮か？ピンと来た俺は、少しイジワルな笑みを浮かべて蓮に尋ねる。

「……もう一人巻き込まれているっての、もしかして、彼氏か？」

「えっ！？ あっ、その……」

俺の問いに、蓮は顔を真っ赤にして慌てる。

『うふふ〜そうよ〜蓮は祐騎君の彼女だから、手を出しちゃダメよ』
「？」

俺の問いに答えたのは、蓮ではなくその後ろに控えていた椿の花の女性。

「君は……『椿姫ティタニアル』か？」

『ええ。ティルって呼んでね？』

「ああ、よろしく」

「それで、その……祐騎を迎えに行きたいのだけど……」

「それには及ばないよ」

おずおずとそう切り出す蓮に、それを遮る声。

「あ、貴方は……真中、希望さん？」

「やあ、久しぶり……と言っほどもないかな？ 蓮」

「蓮さん」

「あつ、祐騎！」

あいさつする希望。そして、希望の後ろから顔を出した祐騎に、蓮の顔が華やいだ。祐騎の後ろにいるのは……『ガーディアン・エアトス』の精霊か？

『ほらあ、だから言ったでしょ？ 祐騎君は来てるわよって』

『まあまあティルさん。蓮さんもマスターに会うまでは不安だったんですよ』

和気藹々と会話を交わす四人を尻目に、俺は希望に説明を求める。

「希望」

「ああ。前回の時に、彼の寝起きが悪いのは確認済みだったしね。時間の短縮のために、起こしに行っていたんだ」

「なるほどな……」

「んむ……？」

その時、背中から寝ぼけたような声。

「さだめ、起きたか？」

「……」

しばらくボケーっとしていたさだめだが、しばらくしてニヘラ、と表情を緩めて俺の首筋に顔をこすりつけ始めた。

「うへへへへ……お兄ちゃん的首」

「……コイツは」

尚も顔を擦りつけるさだめ。

「何してんだお前は……くすぐりたいからやめろ」

「マーキングマーキング」

「でえいつ！ 振り落とすぞ！」

「できるもんならっ！」

「ぐがっ!? コイツ……振りほどけない!? 絡みつくなこの……」

「……っ！」

さだめの手足が俺の身体に絡みつき、すごい力でしがみついている。

「えろっ……………」

「うひゃっ!? 舐めるな!」

「くふふふふふ……………」

「こっ……………っ!」

「仕方ない! あまりやりたくはなかったが……………!

「ぐ……………があっ!」

ボキメキゴキヤ!

「にゃっ!?!」

「だぁあっ!」

関節どころか骨まで外してさだめの拘束から脱する。ゴキッボキッと凄い音を鳴らして全身の骨を詰め直していく。

「……………これで良し」

「いやいやいやいや! 良くはないでしょう良くは! 関節外すだ

けでも驚きだけど、骨っ!?!」

「それ、脱臼って言うんじゃない……………」

「段々びっくり人間になつて来ているね。セツ」

「今、首から骨が外れる音が聞こえてきた気がするんだけど……………」

さだめの感想に、全員畏怖の籠ったような眼で俺を見る。

「……………セツ。キミも何だかんだで、人間離れしているね」

「生き残るためには…………… 人体の限界を超えなくてはならない時が……………」

「…ある」

「ないよ」

「っていうか、そこまでさだめの想いに応えるの嫌……………?」

さだめが若干傷ついている様子を見せる。

「……………なるほど。テイルの同類なのね。あの子」

『一度、じっくりと話し合ってみたい逸材ね』

『……………別の意味で、深く話し合うべきだと思います。主に倫理や貞操観念などの議題で』

「いえ、それより僕はあの雑技団顔負けの人体構造に興味があるんですが……」

「ぐ……いたた、流石に超激痛……だからやりたくなかったんだよな……」

全員から当たり前だ、と言いたげな視線が突き刺さる。

「むしろ、それだけで済むとは思えないんだけど……」

「痛みに耐えるのは慣れてる」

慣れたくはなかったけどな……。

「とにかく、これで役者は揃っただろ。とっとと始めてくれ」

「何を？」

「何を……ああそうか。さだめにはまだ何の説明もしていなかったか」

「説明なら、僕の担当だね。任せてくれ」

「……好きにしる」

「イヤ。お兄ちゃんからの説明しか受け付けません」

「どこまで我儘だお前は!？」

「何と言うか……凄い子ね……」

理解してもらえてなによりだ。仕方なく、俺はさだめに経緯を説明する。ここが異世界であり、さだめが蓮とデュエルしないといけないこと等々……それら一連の経緯を説明した時のさだめの感想がこれだ。

「じゃあ、デュエルしない! それで万事上手く行くね!」

「……話、聞いていたか？」

「もちろん!」

自信満々に頷かれる。ウソつけ。

「だって、今この世界に居るのはこの場に居る人たちで全員なわけでしょ? ということは、さだめとお兄ちゃんの間を邪魔されることなく、心行くまで愛の営みを楽しめるってことでしょ?」

「あつ、愛の営み……っ!」

想像したのか、蓮が真っ赤になる。祐騎の顔も若干赤い。

「ほら、蓮さんたちだって、恋人同士の甘い時間を過ごせるんだよ？　ね？」

「甘い時間……祐騎と二人っきりで……」

「れ、蓮さん!？」

「こーらこーら！　そこ！　悪魔の誘惑をするんじゃない！　」
「たたくコイツは……」。

「せめて既成事実くらいは作ってから帰りたいたいところだよね？　お兄ちゃん」

「さも俺がお前との関係に乗り気のように同意を求めるな」

しかし、マズいな。このままコイツがデュエルに乗って来なければ歪を消すことができない。それは希望としても旨くないだろうと、希望に助言を求める。

「……希望、なんとかならないか？」

「ふむ。そうだね。僕としては、実にからかい甲斐のある、面白い展開になって来た、と言う他ないね」

が、期待した返事は聞けなかった。

「あのな……」

「どうだろう？　このままアダムとイヴとして、産めや増やせやと励んでみるのは？」

「言うまでもなく、却下だ!」

「言うまでもなく、採用だね!」

俺とさだめの声が重なる。尤も、意味は真逆だったが。

「希望！　話をややこしくしてどうする!？」

「ね？　お兄ちゃん。希望さんの許可も出たことだし、心行くまでさだめという、禁断の果実を味わって？」

「却・下・だ!」

「え」

「……ティル。貴女ととても話の合いそうな子がいたわよ」

『私、あの子となら三日三晩飽きもせず語り合えそうな気がするわあ』

「……ま、このまま歪を放置しておいて欲しくないからね。デュエルしなければアテナたちを呼ぶ、と言うことにしようか」
「始めっからそうしてくれ……頼むから」
「ええ〜!? それじゃあ邪魔が入っちゃうじゃん!」
「後、僕が全力で妨害する、と言うことにしよう」
「そんな!?!」
「そしてもし、さだめがデュエルして勝つことができれば、キミにとって実に都合のいいご褒美をプレゼントすることにしよう」
「……報酬の内容は?」
「セツへの資金援助、またトラップの材料等支援物資を一切送らないようにしようじゃないか」
「やる!」
「おい」
なんて約束してるんだコイツは! 俺の生命線だぞ!?
「よしそうと決まれば早速やるよ〜蓮さん! いざ勝負!」
「え、ええ……何か釈然としないけど……」
「頼む! さだめに勝ってくれ!」
でないと俺の貞操が!
「今ここに、兄妹禁断の一線を賭けた大勝負が始まる……」
「妙なナレーション入れるな!」
「そんな大事な一戦に、私たちを巻き込まないでくれる!?!」
「いいじゃないか。面白そうだし」
くっそう……所詮他人事って顔しやがって……。
「正にそうだからね」
「だろうな! ああクソ! こうなったら何としても蓮に勝ってもらう他ない!」
「だから余計なプレッシャーかけないで!」
「れ、蓮さんあまり興奮しないで、普段通りにやりましょう。油断できる相手じゃなさそうですし……」
「う、うん。ありがとう祐騎……」

「くふふふふふふふっ！ お兄ちゃんとの蜜月のため……完膚なきまでに叩き潰すっ！」

「うう……なんかこの子、怖いわ……」

と、若干蓮のテンションは低いままだったが、こうしてさだめと蓮のデュエルが開始されたのだった。

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者2 前編？」（後書き）

というわけで、前編でした。

いやもうホント、さだめは書き易い……セツとの掛け合いが自然で自然で。我ながらサラサラ書けます。

セツもいい加減一般人枠から大幅にはみ出ている印象がありますね。あれ？ これも今更か。

というわけで次回、蓮VSさだめのデュエルが始まります。植物族は書いたことないので多少不安ではありますが……豆フクロウさんの小説を参考に頑張ってみます。

それでは、悠でした！

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者2 後編？」（前書き）

ふう、なんとかアップ出来ました。今度こそコラボ最終作品、旋風の守護者の蓮VSさだめの、全編デュエルでお送りいたします。

最近書いた中では比較的良質なものが書けたかなーと思いますので、どうかお楽しみください。

ではどうぞー！

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者2 後編？」

アルカナ〜切り札の騎士〜

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者2 後編？」

「あ、ちよつと待って、デッキが今、少し調整不足だから、一瞬調整させて」

「え？ ええもちろんそれはいいけど……」

「さだめは、蓮に許可をとり、自分のデッキのカードを何枚か抜いて別のデッキケースに入っていたカードと入れ替える。コイツ、まさか……」

「……ん、よし！ さだめはこれでいいよ。始めよっか」

「ええ。お互い、ベストを尽くしましょう！」

「『デュエル！！』」

「さだめの先攻！ ドロー！ さだめはマジックカード『闇の誘惑』を発動するよ！」

「手札交換……闇属性デッキ？」

「さだめはデッキからカードを二枚ドロー！ そして手札から『ネクロフェイス』をゲームから除外するよ！」

「なっ！？」

「出たな。さだめの除外の要。いきなりとは思わなかったが、普通にあり得るか。」

「『ネクロフェイス』が除外された時、お互いのデッキの上から五枚までゲームから除外するよ！」

「くっ……」

「マズイですね……蓮さんのデッキは植物族。除外にはあまり強くありませんし」

「さだめのデッキは、基本的に次元ダークだからな。相性としては、最悪ってことか……」

しかし、それでは俺が困る。

さだめのデッキから除外されたのは『闇王プロメテイス』『異次元の偵察機』『ダーク・アームド・ドラゴン』『闇より出でし絶望』『漆黒のトバリ』の五枚。

「あちゃ、プロメテイス落ちちゃったか……トバリもちよい痛いかな」

ダムドも落ちたのは痛手だろう。

「あ、それはいいの。どうせ今回のデュエルではダムドはあんまり活躍できなかっただろうしね」

さだめは、蓮の後ろで微笑んでいるティルを見ながら言った。なるほど。確かにダムドの効果はティタニアルにはまるで効かないな。そして蓮の方はというと……。

「えーと『グローアップ・バルブ』『イービル・ソーン』『ポリノシス』『ギガプラント』『茨の壁』……ってキツイわね。どれも結構主力なんだけど……」

特に、『イービル・ソーン』が一体落ちた、というのは少々痛いかな。その効果的に考えれば、『イービル・ソーン』は三体揃ってこそだ。一体でも落ちればその有用性はかなり落ちると言わざるを得ない。つか、シンクロありなのか。『グローアップ・バルブ』や『ウィード』って。

「んじゃ、さだめは『霊滅術師カイクウ』を攻撃表示で召喚するよ」「う……」

とことん除外するつもりか。イヤ待て。

「さだめお前、いくらなんでもそこまで徹底的な次元デッキじゃなかっただろ。まさかお前……」

嫌な予感を感じた俺がさだめに問いかけると、さだめはくふふ、とまた黒い笑みを浮かべた。

「お兄ちゃんの想像通りだよ」

「お前、あの一瞬でメタデッキに切り替えやがったな……？」

調整不足、とか理由をつけて、除外関係のカードを大量投入したのだ。恐らく、蓮のデッキが除外に弱い植物族だと当たりをつけて、「精霊が『椿姫テイタニアル』だったからね」ほぼ間違いないと思っただし

「ま、まさかあんた……」

戦慄したような声をあげる蓮に、さだめはニヤリと笑う。

「……改めて自己紹介しておくね。各種メタデッキ使いの御堂さだめ、よろしくね？」

「メタ使い……！？」

恐らく、そういつた使い手に遭遇したことがあまりないのだろう。驚いた顔だ。偶然にメタデッキに遭遇することはあっても、相手によつてデッキを変えるメタ使いはこの世界じゃ嫌われる傾向があるしな。

「更にさだめはカードを二枚セット。エンドフェイズに『異次元の偵察機』を特殊召喚してターンエンド」

さだめのフィールドに、不可思議な色合いの異空間の扉が開かれ、その中から人工衛星のような機体が姿を現した。

「っ私のターン、ドロー！」

さて……蓮はどうするか。できれば……いや、是が非でも勝つて貰いたいというのが本音だが……。

「そこんところどう思う？ 彼氏さん」

「……できれば、祐騎って呼んでください。まだ、そういうの慣れていないんで」

「へえ、まだ付き合い始めてそう経ってないのか」

ニヤニヤと、顔を赤くする。剣士もそうだが、こういう奴をからかうのは楽しい。というか、他人事するのは基本的に楽しいもんだ

しな。

「つい先日です。それより、今のこの状況をどう思うか……でしたよね」

「ん？ ああ」

「……蓮さんは負けませんよ。あんな卑怯な手に、負ける人じゃない」

「……すっかり俺の妹が悪者だな」

「あついえその、そういうつもりは……すみません」

「はは、悪い。こつちもそういうつもりはない。実際、卑怯臭いのは事実だしな」

「すみません……」

「いいつて。確かにああいうデツキ使いは嫌われる傾向にあるが……アイツはそんなの気にも留めないしな」

「あの……妹さんは普段からああいうデツキを……？」

「まあな。アイツは他人になにを言われても揺るがない強さを持つてる。何処までも一途で一本気。……ま、そうでなきゃ、実の兄貴に恋してる、なんて公言出来やしなかつただろうが」

或いは、単に周りが見えてないだけかもしれないが。俺は苦笑する。

「……俺も、何時までも兄妹だから、なんて言い訳で逃げてるわけにもいかないんだろうがな」

いつかしっかりと向き合う日が来る。その時は……。

「……真正面から、受け止めてやるさ」

それはまた、いつか、の話だけだな。

「私は手札から『ローンファイア・ブロッサム』を召喚して、効果を使用するわ！」

「む、来たね。植物族の必須カード」

「ええ。私は『ローンファイア・ブロッサム』自身をリリースして、

デッキからティルを攻撃表示で特殊召喚するわ」

『はあくいよろしくね?』

「はいごめん。トラップ発動『呪言の鏡』! デッキからモンスターが特殊召喚された時に発動して、そのモンスターを破壊。さだめはデッキからカードを一枚ドローするよ。あ、わかっているとと思うけど、この破壊は対象をとらない。よってティタニアルの効果では無効にできないよ」

「くっ……」

『あらら?』

ティルの姿が映り込んだ鏡がひび割れると同時に、ティル自身にもその破壊が及び、ティルが破壊される。

「……ならばカードを二枚セットして、ターンを終了するわ」

「さだめのターン、ドロー!」

ここまではいい。これで『霊滅術師カイクウ』による攻撃が成功すれば、今墓地に送られたティルや『ローンファイア・ブロッサム』は除外される。あとはそれを繰り返せば勝ちだ。

「……ま、そう上手く行くとは思っていないけど」

というより、そんな簡単に勝てるなら、蓮さんはこんなところにいるはずだし。何度もデュエルしていれば、とことんまで事故つてあっさり終わったりすることもある筈なのに、この世界ではそれがない。あっさりと終わる大事なデュエルなんてない。

「さだめは『トレード・イン』を使って『ダーク・ホルス・ドラゴン』を捨ててカードを二枚ドロー! 手札から『終末の騎士』を攻撃表示で召喚。効果により、デッキから二枚目の『ネクロフェイス』を墓地に送るよ」

着々とさだめの布石は積み上がっている。序盤は完全にさだめのペースをつかめたね。でも、このままだとどうせ逆転喰らうんだろうな。

「手札から魔法カード『D・D・R』を発動! 手札の『ネクロ・ガードナー』を墓地に送って除外された『闇より出でし絶望』を帰

還させる。更に、墓地に存在する闇属性モンスターが三体になったことにより、『ダーク・ホルス・ドラゴン』と『ネクロフェイス』をゲームから除外し、手札の『ダーク・ネフティス』を墓地に」

当然、除外された『ネクロフェイス』は効果を発動。またしてもデッキの上から五枚が除外される。今回除外されたのは……『速攻の黒い忍者』『異次元の偵察機』『人造人間サイコシヨッカー』『終末の騎士』『次元幽閉』の五枚。

「ん」『次元幽閉』は勿体ないけど、まあ許容範囲かな」

対して、蓮さんのデッキから除外されたのは『フレグランズ・ストーム』『増草剤』『大嵐』『ローンファイア・ブロッサム』『ブラスト・モード』の五枚。

「っ!?!」『ブラスト・モード』が……!」

『ブラスト・モード』? さだめの聞いたことのないカード。多分本来は存在しない特別なカードだったんだろうけど……それが落とせたのはラッキーだったな。効果はわからないけど強力なものだろうし、精神的ダメージも見込める。

とにかくこれで、今やるべきことは終わり、攻撃態勢は整った。

「これで終わってくれると楽なんだけどな。まずは『終末の騎士』でプレイヤーにダイレクトアタック!」

「残念だけど、簡単には終わってあげられないのよ! リバースカード『聖なるバリア ミラーフォース』!」

清浄な輝きを放つバリアに、さだめの攻撃は反射され、さだめのモンスターが全滅する。

「……普通に通るのね」

「通しても、何ら問題ないからね」

「なんですって?」

「さだめは最後の手札、『ダーク・クリエイター』を効果により守備表示で特殊召喚するよ! 知ってるだろうけど、一応解説。『ダーク・クリエイター』は、墓地に闇属性モンスターが五体以上存在して、さだめのフィールドにモンスターが存在していないときに特

殊召喚することができる。さだめの墓地に闇属性モンスターは六体。条件は満たしているね」

何せ、さだめのモンスターは蓮さんによって全滅させられたわけだし。

「貴女まさか……罫がミラーフォーアスだってわかって……!?」

「あの状況を打破出来るのなんて、それくらいしかないでしょ。別に和睦や威嚇、無力化でもいいけど、時間稼ぎにしかないし。それに……」

こういう時、物語の登場人物は、ご都合主義を体現するもんだしね。

「さあ、『ダーク・クリエイター』の効果発動！ 墓地の『異次元の偵察機』をゲームから除外して、『闇より出でし絶望』を攻撃表示で特殊召喚！ エンドフェイズに、除外された『異次元の偵察機』を二体特殊召喚！ ターンエンド！」

「そんな……モンスター四体を破壊されたのに、そのターン内で四体並べ直すなんて……」

「ご都合主義にはメタで対抗！ まさか、文句ないよね？」

「あいつ、あんなこと言ってるけど、自分自身都合良すぎる手札しっていたってこと気付いてんのかな」

恐らく、気付いているだろうが。気付いていて、無視しているんだろうが。

「あいつは、いつそ清々しいくらい利己主義だしな」

自分に都合のいいことしか考えない。都合の悪いことには目を瞑る。だってその方が幸せでしょ？ と自信満々に言っていた。

メタを使うことに関しても、さだめはまったく躊躇わなかった。

さだめは、

『だって、さだめたちはご都合主義っていうメタなんかより圧倒的

に卑怯な手口を使うんだよ？ 今更メタデツキくらいでガタガタ言うのも、なんか……ねえ？』

と言って苦笑していた。まったくその通り。反論のしようもない。チートドローだのデイスティニードローだのを公然とやるのと、相手に合わせたメタデツキを用いることと、どちらが果たして卑怯なのか、ということだ。

「俺たちは最低限の体裁を保って戦っているにすぎない、か……」
アイツは時々、誰も触れたがらない真実を躊躇いなく言い当てるから。

「アイツは、間違っていないながら、誰よりも正しいところにいるのかもしれないな」

俺は、得意げに笑う妹の顔を眺めながら、そんなことを思ったのだった。

「私のターン、ドロー！ 私はリバースカード『ボーン・テンプル・ブロック』を発動するわ！」

む……。

「お互いの墓地からレベル4以下のモンスターを選択して、自分のフィールドに特殊召喚する。私は貴女の墓地から『霊滅術師カイクウ』を選択するわ」

「……さだめは、選択の余地がないね。『ローンファイア・ブロッサム』だよ」

さだめのフィールドに『ローンファイア・ブロッサム』。蓮さんのフィールドに『霊滅術師カイクウ』が特殊召喚される。

「更に私は『偽りの種』を発動し、『コピー・プラント』を特殊召喚！ 効果により、貴女の場の『ローンファイア・ブロッサム』を選択し、レベルを3に変更するわ！」

「！ シンクロ……」

「レベル4『靈滅術師カイクウ』にレベル3『コピー・プラント』をチューニング！ 冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の華よ、開け！ シンクロ召喚！ 咲き乱れよ！『ブラック・ローズ・ドラゴン』！」

瞬間、フィールドに紅いバラの花びらが咲き乱れ、やがてそのバラが一体の龍を形作つた。

「っ……………！ 黒薔薇の龍……………！」

「包み込みなさい……………『ブラック・ローズ・ガイル』！」

吹き荒れる黒薔薇が、さだめのフィールドを根こそぎ吹き飛ばしていく。

「チエーンしてリバーズカード『異次元からの埋葬』を発動！ 除外されている『ネクロフェイス』を二体、墓地に戻す！」

「っな！？」

もちろん、直接これで状況を打破出来るわけじゃない。でも、無為に破壊されるよりはいいし、これで更にデッキ破壊する準備が整った。

「私は『ロードポイズン』を攻撃表示で召喚！ プレイヤーにダイレクトアタック！」

「くっ……………」

さだめLP2500

「カードを一枚セットして、ターンエンドよ！」

「っの……………悉く全体破壊してくれるね」

「そっちこそ、散々使い回すつもりでしょう？」

ニヤリと笑いあう。

「さだめのターン、ドロー！ 墓地の『ダーク・ネフティス』を効果で特殊召喚し、効果により蓮さんのリバーズカードを……………」

「チエーン発動！『奈落の落とし穴』！ ネフティスには消えてもらうわ！」

「……………なら、さだめは『強欲な壺』を発動。デッキからカードを二枚ドロー！」

これで手札は二枚。っていうかコイツか。

「さだめは『闇王プロメティス』を召喚！ 効果で墓地に存在する9体の闇属性モンスターをゲームから除外し、攻撃力3600ポイントアップ！」

「なんですって!?!」

「更に、除外された二枚の『ネクロフェイス』の効果発動！ お互いにデッキから10枚のカードをゲームから除外する！」

「デッキが……!」

さだめのデッキから除外されたのは『大火葬』『魂吸収』二枚『漆黒のトバリ』『闇の誘惑』『トレード・イン』『フロントム・オブ・カオス』二枚『ダーク・グレファード』『闇次元の解放』の十枚。もう今更何が除外されようが知ったことじゃない。

対して蓮さんは『アイヴィー・シャックル』『ギガプラント』『百花繚乱 桜の舞』『イービル・ソーン』二枚『ダンディライオン』『クリッター』『百花繚乱 椿の舞』『ボタニティ・ガール』『フエニキシアン・クラスター・アマリリス』の十枚。苦々しげな顔をする蓮さんだけど、蓮さんだっってここに来て今更何が除外されても同じだと感じているだろう。

「さあ、バトルだよ！ 『闇王プロメティス』で『ロードポイズン』を攻撃！ 『常闇の脈動』！」

「ぐっ……きゃあああっ!?!」

蓮LP700

闇王の攻撃は『ロードポイズン』どころか蓮さんすら呑み込んで行く。

「蓮さん！」

「だ、大丈夫、びつくりしただけよ……!」

そりゃそうだ。闇のゲームにすれば兎も角、これは普通のデューエルだし。

「っ『ロードポイズン』の効果発動！ 戦闘により破壊された時、墓地の植物族モンスターを一体特殊召喚する！ 私が召喚するのは

当然、『椿姫ティタニアル』！」

『さあ、そう何度もやられないわよ』

「……さだめはこれでターンエンド」

「私のターン、ドロー！ バトルフェイズに『椿姫ティタニアル』で『闇王プロメテイス』を攻撃！ 『ヘイト・カメラリア・ウィップ』！」

「くう……」

さだめLP900

召喚ターンを過ぎれば、『闇王プロメテイス』はただの攻撃力1200のバニラ同然。やられるのも当たり前だね。

「私はカードを一枚セットして、ターンエンドよ」

「さだめのターン、ドロー！ さあ、クライマックスだよ……」

結局、さだめが最後に頼るカードはこれなんだよね……。

「どんなに忌み嫌っても、捨てられない過去の象徴……さだめの影！ 行くよ！ 『終焉の精霊』を攻撃表示で召喚！」

これまでに除外されている闇属性モンスターの数は23枚。『終焉の精霊』の攻撃力は……。

「6900……！？」

ソリッドビジョンでしかないはずなのに、物理的な重圧すらも感じるこのできる程に、さだめの『終焉の精霊』は肥大化していた。

「これで……ラスト！ さだめは『終焉の精霊』で……」

「ま、待ちなさい！ リバースカード発動！ 『威嚇する咆哮』！ 攻撃はさせないわ！」

「……そっか。残念。じゃあさだめはカードを一枚セットして、ターンエンドだよ」

この時点で、さだめは半ば予感していた。

「私のターン、ドロー！」

さだめは、負ける。

「っ！ 私は手札から『チェリープロップサムセス桜花の王女』を召喚！ レベル8『椿姫ティタニアル』と、レベル2『桜花の王女』をチューニング！」

見たことのないモンスター。どうやらチューナーらしい。

「草木を総べし姫よ、今こそその真の姿を現し、新たな花を咲かせよ！ シンクロ召喚！ 君臨せよ！」カメリアフレス「椿女帝ティタニアル」！

「さあ、この姿になったからには、負けるつもりはないわよ」

「更に、シンクロに使用した『桜花の女王』の効果発動！ 自身を除外して、墓地の植物族モンスター一体を、効果を無効にして守備表示で特殊召喚！」

「よきよきと、『ローンファイア・ブロッサム』が蓮さんのフィールドに生えてくる。」

「……攻撃力は3300。『終焉の精霊』には敵わないけど、どうするの？」

「リバースカードは『聖なるバリア ミラーフォース』。だけど、さだめにはわかる。どうせ意味はない。」

「さあ、それはどうかしらね。『椿女帝ティタニアル』の効果発動！ 自分フィールド上の植物族モンスター一体を生贄に、相手の攻撃力の半分を自分の攻撃力にすることができるわ！」

「うふふ。どんなに高い攻撃力でも無意味よ」

「バトル！ 『椿女帝ティタニアル』で『終焉の精霊』を攻撃！ 『カメリア・ストライク』！」

「リバースカード『聖なるバリア ミラーフォース』」

「無駄よ！ 『椿女帝ティタニアル』の効果発動！ 一ターンに一度、墓地の植物族モンスター一体をゲームから除外して、あらゆる効果を無効にする！ 『サクリファイブ・サンクチュアリ』！」

「蓮さんの墓地から巻き上がった黒薔薇が、さだめのバリアを破壊する。」

「終わり、か」

「ええ。いいデュエルだったわ」

「先ほどの半分ほどになってしまった『終焉の精霊』を、ティルの持つ剣が切り刻む。」

「いくらメタ張っても……知らないカード相手じゃ意味ないよね」

……」

……悔しいなあ。

「……うん。いつか絶対、どんなご都合主義にも負けない、最強のメタ使いになって見せるよ！」

そのための、意味ある負けだと信じよう。

さだめLPO

「本っ当によく勝ってくれた！ ありがとう！」

「あ、あはは……どういたしまして」

「むっお兄ちゃん。妹が負けたのに、涙流して喜ぶのはどうかと思う」

「煩い黙れ。お前が勝つたら大変なことになっていたんだから仕方ないだろ」

「むう……」

にしても……やっぱりさだめは、『終焉の精霊』をデッキから抜くつもりはないんだな。まあわかっていたことではあるけど……やっぱり少し複雑だな。

「にしても、『ブラスト・モード』が除外された時は焦ったわ。切り札の一枚だったしね」

「あ、やっぱり？ 聞いたことないカードだったから、そうじゃないかと思っただ」

そして、スウ、と俺たちの身体が透け始める。

「……あー、今回はこれでお別れか。時間があれば、俺も祐騎とやってみたかったんだが」

「それは、僕も残念です。またいずれ、機会があれば」

「そうだな。それを待つことにするよ」

『それじゃあさだめちゃん、今度会った時は、思いつきりアダルトトークしましょうねえ』

「あ、うん。それは悦んで！　じゃなかった喜んで！」

『今、どこを訂正したんですか……？』

『エールちゃんは、知らなくてもいいのよ』

「そうそう」

「……程々にしておけよ」

「……ティルもね」

「はい。わかってます」

『もちろんよ』

「「本当か（しら）……？」」

最後に少し不安は残ったが、俺とさだめ（後一応希望も）は四人と別れて元の世界に帰還したのだった。

おまけ

俺たちが帰って来たのは朝方になってからだった。さだめの部屋から戻った俺は、テントの周りが死屍累々になっていることに気付いて頭を抱えた。

「……しまった。トラップ解除しておくの忘れてた……」

俺を起こしに来たのか、テントの周りではアテナがタライの下で目を回していて、ルインがテント前で黒焦げになって倒れていた。というか、アテナたちを救出しようとしたのか剣士たちまでトラップの餌食になってボロボロの状態で気絶していた。ミイラ取りがミイラ。

「……教訓。出かける時は、電化製品のスイッチやコンロの火が消えているかを確認してから、出かけましょう」

『そういう問題じゃない!!』

その場にいた全員から、総ツツコミを喰らう、俺なのだった。

特別編「？アルカナクロスワールド旋風の守護者2 後編？」（後書き）

こんにちは。

アルカナでは初めてになるのかな？ シンクロです。まあコラボでしか出しませんが。相変わらずアルカナ本編にはシンクロは出ません。

いくつかオリカが出ていましたが、それらの詳細は僕のお気に入りリンク辺りからでも豆フクロウさんの旋風の守護者に跳べば詳しい説明が乗っていますので、参考にして下さいな。

それでは、豆フクロウさん。コラボにご協力していただいた全ての作家さん。ありがとうございます。今度こそ、100万アクセス記念で予定されていたものは全て終わりました！……二か月かかった上、もうすでに180万近くいっぺんおいて実に今更ですが。後はオリカ紹介と、もしかしたら何か短編の一本くらいは挟むかもしませんがそれだけやって第四期に入ることになりますので、どうぞ応援、よろしく願います。

それでは、悠でした！

アルカナ オリカ紹介（前書き）

というわけで、オリカの紹介です。本当ならもっと早くにやっておくべきだったんでしようが……不親切設計ですみません。

しかも、今回アップしたのは僕の考えたオリカのみ。投稿されて使われたオリカはほとんどありません。ぶっちゃけ殆ど活動報告コピペしただけ。

それでも、一定の資料にはなると思うんで、どうぞです。

アルカナ オリカ紹介

アルカナ↳切り札の騎士

アルカナ オリカ集

・『切り札の騎士 エース』 4 攻/守10000/10000

光属性 戦士族

・効果

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、カード名に『切り札の騎士』とついたモンスターの攻撃力守備力は2000ポイントアップする。

このカードが手札から墓地に送られた時、自分はデッキからカードを一枚ドローする。

・『切り札の騎士 テンス』 4 攻/守10000/20000

光属性 戦士族

・効果

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分の『切り札の騎士』と名のついたモンスターが相手に戦闘ダメージを与える度に墓地から『切り札の騎士』と名のついたモンスターカードを一枚手札に戻す。相手の攻撃宣言時、他の『切り札の騎士』と名のついたモンスターが攻撃対象に選択された場合、代わりにこのカードを攻撃対象にすることができる。

・『ポット』 永続魔法

・効果

このカードの発動時、お互いのプレイヤーはライフを500ポイント支払わなければ発動できない。スタンバイフェイズ時に、そのターンプレイヤーはライフを100ポイント単位で支払う（上限500）。どちらかのプレイヤーがライフを支払う度、100ポイントにつき一つチップカウンターを乗せる。モンスターを戦闘によって破壊した時、破壊したプレイヤーはこのカードに乗っているチップカウンターをすべて取り除くことで取り除いた数×200ポイントライフを回復する。

・『レイズ』 通常魔法

・効果

フィールド上に『ポット』が表側表示で存在するときに発動可能。ライフを500ポイント支払ってデッキからカードを三枚ドロースる。

・『チエック』 永続罫

・効果

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分はスタンバイフェイズ時に『ポット』の効果でライフを支払う効果を使用しなくてもよい。

・『切り札の騎士 クイーン』 星4 光属性 戦士族1500 / 1600

・効果

このカードのカード名は『クイーンズ・ナイト』としても扱う。
このカードがフィールド上か墓地に存在する限り、このカードは通常モンスターとして扱う。

・『切り札の騎士 キング』 星4 光属性 戦士族1600/1400

・効果

このカードのカード名は『キングス・ナイト』としても扱う。

フィールド上に『クイーンズ・ナイト』が存在する場合にこのカードの召喚・特殊召喚・反転召喚に成功した場合、デッキから『ジャックス・ナイト』を特殊召喚することができる。

・『切り札の騎士 ジャック』 星5 光属性 戦士族 1900 / 1000

・効果

このカードのカード名は『ジャックス・ナイト』としても扱う。

このカードがフィールド上か墓地に存在する限り、このカードは通常モンスターとして扱う。

・『ジャム・ウォリアー』 星1 光属性 戦士族300/200

・効果

このカードがカウンター罠のコストとして墓地に送られた場合、このカードのコントローラーはデッキからカードを二枚ドロウする。

・『アルカナソード ハート』 装備魔法カード

・効果

このカードは『切り札の騎士』と名のついたモンスターか『アルカナ ナイトジョーカー』にのみ装備することができる。このカードを装備したモンスターの攻撃力を500ポイントダウンさせる。装備モンスターは戦闘によっては破壊されず、その際に発生する戦闘ダメージは無効になり、その分だけ自分はライフポイントを回復する。装備モンスターは攻撃宣言を行うことができない。

・『冥幼竜ヴァーミリオン』 星4 闇属性 ドラゴン族 攻/守

700/250

・効果

カウンター罠のコストとして墓地に送られたこのカードが自分のスタンバイフェイズに墓地に存在する場合、墓地のこのカードを手札に加える。

・『アルカナソード クローバー』 通常罠カード

・効果

自分フィールド上の『アルカナ ナイトジョーカー』か、切り札の騎士と名のついたモンスターが破壊され、墓地に送られた場合墓地から破壊されたモンスターとは別の上記のモンスターを一体選択して特殊召喚し、このカードを装備カード扱いで装備する。

このカードを装備したモンスターの攻撃力は700ポイントアップする。装備モンスターが破壊された場合、このカードを破壊する。装備されたこのカードが破壊された場合、装備モンスターを破壊する。

・『アルカナソード ダイヤ』 装備魔法カード

・効果

『アルカナ ナイトジョーカー』か、切り札の騎士と名のついたモンスターにのみ装備可能。装備モンスターの攻撃力は300ポイントアップし、装備モンスターが相手モンスターを戦闘によって破壊した場合、自分はデッキからカードを一枚ドローする。装備モンスターが戦闘によって破壊され、墓地に送られた場合自分はデッキからカードを一枚ドローする。

・『未来への光』 儀式魔法カード

・効果

『希望の女神ルイン』の降臨に必要。フィールド上から、『破滅の女神ルイン』を含み、レベルの合計が12になるように生贄に捧

げる。その後、手札から『希望の女神ルイン』を特殊召喚する。

・『希望の女神ルイン』 光属性 天使族 1 2 攻/守 2 5
00/2500

儀式・効果

『未来への光』により降臨。自分フィールド上の『破滅の女神ルイン』を含み、レベルの合計が12になるように生贄に捧げなければならぬ。このカードは『未来への光』の効果によってのみ特殊召喚することができる。

このカードは相手フィールド上のモンスターの数だけ攻撃することができる。

このカードが相手モンスターを戦闘によって破壊し、墓地に送った場合、その攻撃力の半分ライフを回復する。このカード以外に自分フィールドに女神ルインと名の付くモンスターがいる場合、このカードを破壊する。

・『過去への郷愁』 儀式魔法カード

・効果

『慈愛の女神ルイン』の降臨に必要。フィールドから『破滅の女神ルイン』を含み、レベルの合計が12になるように生贄に捧げる。その後、手札から『慈愛の女神ルイン』を特殊召喚する。

・『慈愛の女神ルイン』 光属性 天使族 1 2 攻/守 2 5
00/3000

儀式・効果

『過去への郷愁』により降臨。自分フィールド上の『破滅の女神ルイン』を含み、レベルの合計が12になるように生贄に捧げなければならぬ。このカードは『過去への郷愁』の効果によってのみ特殊召喚することができる。

儀式召喚に成功した時、自分の墓地に存在するモンスターの数×

200ポイントライフを回復する。

このカードはカード効果によっては破壊されない。このカードが相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えた場合、その数値分自分のライフを回復する。

一ターンに一度ライフを2000ポイント支払うことで自分が相手の墓地に存在する通常召喚可能なモンスター一体を自分フィールド上に特殊召喚することができる。

このカードが墓地に送られた場合、このカードの効果で特殊召喚されたモンスターをこのカードのコントローラーの手札に戻す。

自分フィールド上にこのカード以外に女神ルインと名の付くモンスターがいる場合、このカードを破壊する。

・『フェニックス・リボーン』 速攻魔法

効果

自分の墓地から鳥獣族一体を選択して自分フィールドに特殊召喚する。相手はカードを二枚ドローする。

・『水神使いエリア』 星8 水属性 魔法使い族 攻/守2800/2500

効果

このカードは通常召喚出来ない。『神霊の継承』の効果によってのみ特殊召喚する。一ターンに一度、手札の水属性モンスター一体を墓地に送ることで相手フィールド上の水属性モンスター一体のコントロールを得ることができる。

自分フィールド上に存在する水属性モンスター一体をリリースすることで、相手の手札を確認し、一枚を選択して墓地に送る。この効果は一ターンに一度だけ使用することができる。

このカードが戦闘で相手守備表示モンスターを破壊した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その分だけ戦闘ダメージを与える。

- ・『神霊の継承』 通常魔法

効果

自分フィールド上に存在するエリア、ヒータ、アウス、ウイン、ダルク、ライナと名のついたモンスター一体を選択して発動する。自分フィールドの、選択したモンスターと導属性・レベル8以上のモンスター一体を選択して両者を墓地に送る。デッキから最初に選択したそれぞれのモンスターと同じ名のついた神使いを一体選択し、特殊召喚する。

- ・『切り札の騎士団長 エース』 光属性戦士族 星7 攻/守
2000/2000

効果

このカードは、『切り札の騎士 エース』としても扱う。

このカードをアドバンス召喚する際、切り札の騎士と名のつくモンスターをリリースすることで、リリース一体でアドバンス召喚することができる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、お互いのプレイヤーはターンに一度、手札を墓地に送った時、デッキからカードを一枚ドローする。

- ・『アルカナソード スペード』 装備魔法

効果

『アルカナ ナイトジョーカー』か、切り札の騎士と名のついたモンスターにのみ装備することができる。このカードを装備したモンスターが行う戦闘によって発生する戦闘ダメージは倍になる。

- ・『アルカナソード ジョーカー』 速攻魔法

効果

自分の墓地の『アルカナソード ハート』『アルカナソード スペード』『アルカナソード ダイヤ』『アルカナソード クローバ

『』の四枚をゲームから除外し、自分のライフを半分支払うことで発動する。自分のデッキ・手札・墓地から通常召喚可能な切り札の騎士と名のつくモンスターを出来る限り特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターは、ターン終了時に破壊され、その攻撃力の合計の半分をダメージとして受ける。

・『切り札の騎士帝 アルカナ ロイヤルジョーカー』 星11

光属性戦士族

攻/守 4500/3800

融合・効果

『切り札の騎士 エース』 + 『切り札の騎士 ジャック』 + 『切り札の騎士 クイーン』 + 『切り札の騎士 キング』 + 『切り札の騎士 テンス』

このカードの融合召喚は、上記のカードでしか行えない。

このカードは守備モンスターと戦闘する際相手の守備力を攻撃力が上回っていればその分だけ相手ライフにダメージを与える。

このカードを対象にした魔法・罫・モンスター効果を、手札を一枚捨てることで発動と効果を無効にし、破壊する。この効果は、スペルスピードを3として扱う。

・『絵札の結束』 速攻魔法

効果

ライフを1000ポイント支払う。自分フィールド上、墓地から、決められた融合素材モンスターをゲームから除外し、エクストラデッキから『アルカナ ナイトジョーカー』か、切り札の騎士と名のついた融合モンスターを一体自分フィールド上に特殊召喚する（この召喚は融合召喚として扱われる）。

・『チューンアップ』 通常魔法

効果

自分フィールド上に攻撃力1000以下のモンスターが存在するときのみ発動することができる。デッキから『チェンジギアモーター』を特殊召喚することができる。

・『チェンジギアモーター』 星3 地属性 機械族 攻/守100/0

・ユニオン 効果

一ターンに一度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとして自分フィールド上の攻撃力1000以下の機械族モンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果で装備カード扱いになっている場合のみ、装備モンスターの攻撃力は800ポイントアップする。

自分のバトルフェイズ時のみ、このカードを装備したモンスターの攻撃力を800ポイントアップすることができる。この効果を使用した場合、装備モンスターは戦闘後、守備表示になる。

(1体のモンスターが装備できるユニオンは1枚まで。装備モンスターが戦闘によって破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する。)

・『ジャンク・リサイクル・フュージョン』 通常魔法
効果

エクストラデッキに存在する機械族の融合モンスター1体を選択する。その融合素材に指定されたモンスター2組を、自分の墓地から除外することで、その融合モンスターを融合召喚扱いで特殊召喚する。

・『バイクロイド』 星6 地属性 機械族 攻/守2400/1000

・融合 効果

『バイクロイド』 + 『チェンジギアモーター』

このモンスターの融合召喚は、上記のカードでしか行えない。

このカードは、機械族ユニオンモンスターの装備条件を無視してこのカードに装備することができる（この効果を使って装備したユニオンモンスターの効果は適用される）。

・『天剣 ネイキッド・ギア・フリード』 星10 光属性戦士族
攻/守2800/2400

融合・効果

『剣聖 ネイキッド・ギア・フリード』 + 『天使族モンスター』
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードに装備カードが装備された場合、自分の除外されている戦士族モンスター一体を自分フィールド上に特殊召喚することができる。この時装備された装備カードがフィールドに存在しなくなった場合、この効果によって特殊召喚されたモンスターを破壊する。特殊召喚されたモンスターが破壊された場合、その装備カードをゲームから除外する。

バトルフェイズ中、このカードに装備された装備カード一枚を破壊し、墓地に送ること、このカードは通常の攻撃に加えてもう一度だけ続けて攻撃することができる。

・『終焉の花嫁ルイン』 星12 闇属性天使族 攻/守2000
/2000

融合・効果

『慈愛の女神ルイン』 + 『終焉の精霊』

このカードは、融合召喚でしか特殊召喚できない。

このカードは、上記の融合素材でしか融合召喚できない。

このカードの融合召喚は、フィールドで行えない。

このカードの融合召喚に成功した時、このカード以外の、ゲーム中全てのカードをゲームから取り除く。この効果で除外されたカードの効果は無効化される。

この効果が発動したターンのエンドフェイズ、自分はデュエルに敗北する。この効果は無効化されない。

・『ジ・エンド・ウルフ終焉の餓狼』 星3 闇属性 獣族 攻/守1300/1000
効果

このカードが戦闘によって破壊され、墓地に送られた場合、デッキから同名モンスター一体を特殊召喚することができる。

また、このカードが戦闘によってモンスターを破壊し、墓地に送った場合、墓地に存在する同名カード一体を特殊召喚することができる。

このカードの効果によって特殊召喚された場合、このカードは特殊召喚されたターンに攻撃することができない。

・『加速する終焉』 永続魔法
効果

このカードが表側表示で存在する限り、各プレイヤーは自分のエンドフェイズに次の効果から一つを選んで発動する。

手札を一枚選択し、墓地に送る。

800ポイントのダメージを受ける。

デッキの上から五枚ゲームから除外する。

自分フィールド上のカード一枚を破壊する。

・『終焉の魔薬』 速攻魔法
効果

このカードは自分か相手のメインフェイズにのみ発動することができる。

手札を一枚捨てる。相手モンスター一体を選択し、選択したモンスターの攻撃力をエンドフェイズ時までゼロにする。

このカードを発動したターン、バトルフェイズ中に相手が受ける戦闘ダメージはゼロになる。

・ 『終焉の死神』ジ・エンド・ケリムリーパー 星4 闇属性 アンデット族 攻/守1700 /1400

効果

このカードがデッキから直接除外された場合、自分と相手の墓地に存在するカードを一枚ずつ選択し、ゲームから除外する。

・ 『終焉の死霊術師』ジ・エンド・ネクロマンサー 星4 闇属性 魔法使い族 攻/守600 /2000

効果

一ターンに一度、墓地の闇属性モンスター一体をゲームから除外することで、墓地の『終焉の』と名のつくモンスター一体を特殊召喚する。この効果によって特殊召喚されたモンスターは攻撃することが出来ない。

・ 『腐り堕ちる世界』 カウンター罠

効果

自分フィールドに存在する「終焉の」と名のつくモンスターが戦闘によって破壊され、墓地に送られた時に発動。ライフを2000ポイント支払い、フィールド上に存在する全てのカードを破壊してその数×300ポイントのダメージを相手に与える。

・ 『終焉の夜王』ジ・エンド・ナイトキーパー 星7 闇属性 悪魔族 攻/守2600/800

効果

このカードは「終焉の」と名のつくモンスター一体をリリースしてアドバンス召喚することができる。

このカードがフィールドに表側表示で存在する限り、フィールド上の表側表示モンスターの属性は「闇」としても扱う。このカードは一ターンに一度、バトルフェイズをスキップすることで、フィールド上に存在する闇属性モンスターの数×600ポイントのダメージ

ジを相手ライフに与えることができる。

・『反魂のスピリチュア』 星7 光属性 天使族 攻/守800
/2600

効果

光属性のこのカードがフィールド上に表側表示で存在する場合、
一ターンに一度、次の効果を発動することができる。

手札を任意の枚数捨てる。その枚数だけ、相手フィールド上に表
側表示で存在する闇属性モンスターを選択し、デッキに戻す。その
後、デッキに戻した闇属性モンスターの数だけ自分の墓地から光属
性モンスターを選択し、効果を無効にして特殊召喚する。

相手の墓地に存在する闇属性モンスター一体を選択し、デッキに
戻す。その後自分の墓地から光属性モンスター一体を選択し、効果
を無効にして特殊召喚する。

・『라이어』 星4 闇属性 悪魔族 攻/守 1900/11
00

効果

自分のメインフェイズに、墓地に存在するこのカードをデッキに
戻してシャッフルすることができる。

また、自分フィールドに表側表示で存在する闇属性モンスターが
戦闘を行うダメージステップ時に、このカードを手札から墓地へ送
ることで、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力は、エンドフェイズ
までそのモンスターの攻撃力の数値分ダウンする。

・『Sinアルカナ ナイトジョーカー』 星9 闇属性 戦士族
攻/守3800/2500

効果

このカードは通常召喚できない。

自分のエクストラデッキから『アルカナ ナイトジョーカー』一

体をゲームから除外した場合にのみ特殊召喚できる。

このカードの特殊召喚に成功した場合、自分フィールド上に存在するこのカード以外のモンスターを全て墓地に送る。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分はモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚することは出来ない。

このカードが表側表示で存在する限り、自分の他のモンスターは攻撃宣言できない。

フィールド魔法カードが表側表示で存在しない場合このカードを破壊する。

相手がフィールド上のカード一枚を対象にする魔法・罠・モンスター効果を発動した場合、手札を一枚捨てて、その効果を無効にする。

・『Sinアルカナ ロイヤルジョーカー』 星11 闇属性 戦士族 攻/守4500/3800

効果

このカードは通常召喚できない。

このカード以外の手札が二枚以上存在し、自分フィールド上に表側表示で存在する『Sinアルカナ ナイトジョーカー』が破壊された場合に、ライフが100ポイントになるように支払い、このカード以外の手札を全て捨てた場合のみ特殊召喚できる。

このカードの特殊召喚に成功した場合、自分フィールド上に存在するこのカード以外のモンスターを全て墓地に送る。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分はモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚することは出来ない。

このカードが表側表示で存在する限り、自分の他のモンスターは攻撃宣言できない。

フィールド魔法カードが表側表示で存在しない場合このカードを破壊する。

相手が魔法・罠・モンスター効果を発動した時、手札一枚を除外

して発動と効果を無効にし、破壊する。この効果は、ルール上スペルスピード3として扱われる。

・『リチュアルクイーン エル・アリア』 星8 水属性 魔法使い族 攻/守2800/3000

儀式・効果

「リチュア」と名の付いた儀式魔法により降臨。

フィールド上に存在する『リチュアルクイーン エル・アリア』以外の「リチュア」と名の付いた儀式モンスターをリリースする度に、相手の墓地・フィールド・手札のいずれかに存在するカードを一枚選択してデッキに戻す。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手はこのカード以外の「リチュア」と名の付いたモンスターを攻撃することは出来ない。

このカードが破壊され、墓地に送られた場合、自分の墓地に存在する『リチュアルクイーン エル・アリア』以外の「リチュア」と名の付いたモンスター一体を選択し、フィールド上に特殊召喚することが出来る。

・『チュートリアルバトル』 速攻魔法

効果

自分フィールド上に存在する「LV」と名の付いたレベル4以下のモンスター一体を選択して発動する。このターン、選択したモンスターが行う戦闘によって発生するダメージはゼロになり、戦闘を行う相手モンスターを攻撃力守備力はゼロとなる。

・『ミステイク・ソードマンLVMax』 星12 地属性 戦士族 攻/守3300/2700

効果

このカードは通常召喚出来ない。

自分フィールド上に存在する『ミスティック・ソードマンLV6』が、戦闘により相手モンスターを破壊した時、自分フィールド上の『ミスティック・ソードマンLV6』をリリースした場合のみ特殊召喚することが出来る。

このカードが戦闘を行う相手モンスターの効果は無効となる。

このカードが相手モンスターを攻撃した場合、ダメージ計算を行わず、そのままそのモンスターを破壊することが出来る。

この効果で破壊したモンスターを墓地へ送らず、相手のデッキに一番上に置くことが出来る。

・『サイレント・ソードマンLVMax』 星12 光属性 戦士
族 攻/守3800/2000

効果

このカードは通常召喚出来ない。

このカードは『サイレント・ソードマンLV5』の効果によって特殊召喚された『サイレント・ソードマンLV7』をリリースした場合のみ特殊召喚できる。

このカードの特殊召喚に成功した時、フィールド上に存在する表側表示の魔法カードを全て破壊する。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手は魔法カードを発動することは出来ない。

・『サイレント・チェンジ』 通常罫

効果

自分フィールド上のモンスターが攻撃対象となった時、そのモンスターを破壊することで、デッキ・手札からそのモンスターのレベル以下の『サイレント』と名の付いたモンスター一体を特殊召喚し、バトルフェイズを終了させる。

・『チートコード』 永続魔法

効果

一ターンに一度、自分フィールド上に存在するレベルモンスター一体を選択して発動することが出来る。選択したモンスターの効果を、発動条件を無視して発動することが出来る。

このカードが表側表示で存在する限り、自分はエンドフェイズ時に1000ポイントライフを失う。

・『切り札の騎士 ブラック・ジャック』 星8 闇属性 戦士族
攻/守2100/2100

融合・効果

『切り札の騎士 エース』 + 『切り札の騎士 クイーン』 又は 『切り札の騎士 キング』 又は 『切り札の騎士 ジャック』 又は 『切り札の騎士 テンス』

このカードの融合召喚は、上記のカードで行えず、融合召喚でしか特殊召喚出来ない。

このカードが戦闘を行った場合、相手プレイヤーに与える戦闘ダメージはゼロになる。

このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し、墓地に送ったバトルフェイズ終了時、相手ライフに2100ポイントのダメージを与える。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカードの攻撃力・守備力は変動しない。

アルカナ オリカ紹介（後書き）

こんにちは。

投稿されたオリカなどは、暇を見て追加していきます。これ以降に出るオリカも含めて。

にしても、結構出たなあオリカ……。最初は出さないつもりだったんだけど……。まあ今は出して良かったと思っていますが。それでも、あんまりオリカを増やしすぎるのは不親切でしょうし（今更か）、今はできるだけ抑えて行きたいと思っています。演出上仕方なく出すオリカはありますが。

多分、次回更新から第四期に入れると思います。長かった……。それでは、悠でした！

8 / 28日 オリカ追加

9 / 21日 オリカ追加

9 / 26日 オリカ追加

9 / 30日 オリカ追加

1 / 25日 オリカ追加

2 / 6日 オリカ追加

5 / 1日 オリカ追加

7 / 10日 オリカ追加

第四期第一話「始まりのバカンス」(前書き)

ついに改訂作業も第四期。そして、この第四期は一気に改訂を終わらせました。……はい。改訂終わりました。よって全部一気にアップします。十三話連続で。という更新速度だ。それでは、まずは一話目、行ってみましょう。

第四期第一話「始まりのバカンス」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第四期第一話「始まりのバカンス」

ザザーン。

この言葉から、諸君はまず何を思い浮かべるだろうか？

「私は、ヘドロ怪獣だと思います」

「アテナ。前から思っていたんだが、お前はネタが古過ぎると思うんだ」

今時誰が帰って来た光の国の宇宙人に出てきたマイナー怪獣を連想するのか。

まあ、そんなイレギュラーな連想ゲームはさておき、普通の人はこちら思うのではなからうか。

海だ、と。

「……なんで精霊界に来て、最初に来るのが海なんだろうな」

「夏、だからだと思えますよ？ セツも泳ぎませんか？」

「暗黒大要塞鯨とか要塞クジラとかが遠くに見える上、拳句黒き人食い鮫とか泳いでる海では、泳ぎたくないなあ」

そもそも俺は泳げない。尚も泳ぎましようよと誘ってくるアテナやさだめに断固拒否の構えを貫きながら、俺はこうなるまでの経緯を思い出していた。

希冴姫が消え、さだめが復活してから、俺たちは精霊界に行く準備を整えていた。剣士、凜といった、本来は無関係とも言えるメンツも、希望の助言で連れて行くことにした。もちろん、凜辺りは仕事の関係ですぐに、とはいかないようだったが、希望がスポンサー権限を発動させて事務所に話をつけてしまった。

凜自身も快く引き受けてくれたのは良かった。

「アイドルのお仕事は好きだけど、それは平和になってからでもできるから」

と。いつて。

剣士も、アカデミアを休むことになるにも拘らず、普通に賛同してくれた。

「アカデミアには、僕の方から話を通しておこう。この際だ。使える権力は総動員するさ。こういう時のために、偉くなったんだからね」

と、希望が色々な雑事を一手に引き受けてくれたのが大きかったが。

「よし……それじゃあ、みんな。覚悟はいいか？」

「当然だ。あのクレイジー、蘇生してからもう一度墓地送りしてくれる」

「……程々にしておけ。俺も、希冴姫には言うことがある」

真つ先に答えたのはエース。

「ユーキさんも、精霊界にいるはずです。諸々全部、終わらせてしましましょう」

「……ああ。そうだな。それがいい」

アテナが、小さくガツポーズしながら答える。

「さだめは、聞くまでもないよね？」

「……だな」

コイツは、何があるうと付いてくるだろう。いや、へばりついてくるだろう。

「……決着はつける。貴方も、私も、その相手がいるはずだから」

「……そうだな。俺は……」

「サイクロイドとか」

「そうそうあの二輪とはいつか決着をとって違う！　っていうかあれか、またお前は向こうでアイツを呼び出すつもりか！？」

「ムードメーカー」

「やめてくれ！」

まったく……ルインは。

俺は溜息を吐いて、周囲を見渡す。皆、覚悟は決まっているようだった。

「よし……じゃあ、ゲートを開くぞ」

ゴクリ、と誰かが域を呑む音が聞こえた。俺たちの目の前が光輝き、そして……。

「……パソコン？」

「さあ、みんなで叫ぼう！　デジ　ルゲート、オープン！」

「お前結構気楽だよなあ！？」

剣士が突っかかって来るが、俺は肩をすくめて受け流す。

「俺の知ってる一番ポピュラーなゲートなんだよ」

「気が抜けるだろうが！」

エースにも不評。なんだ、02の何が悪い。

「いや、別に02がどうか言う問題じゃないと思うんですけど」

「アテナ……お前ならわかってくれると思っっていたんだが……残念だ」

大ブーイングだった。さだめだけ妙に楽しそうに「デジ　ルゲート、オープン！」と叫んでいるが。そっぴやアイツもあの時代が好きだったか。

「でもさ〜ほら、俺たちが揃って『デジ　ルゲート、オープン！

選ばれし子供達イレギュラー、出動！』とかやったら、ぴったりじゃね？」

「セツ……一応シリアスな場面なんですし、自重した方が……」

「じゃあ、俺が先に行って向こうから使い魔召喚の儀式っぽく……」

「コントラクト・サーヴァントまで再現してくれるなら、私はそれでいいです」

「さだめも」

「私も」

「……すまん。自重する」

「ってなんでそこで引くんですか!」

ま、ふざけるのはここまでにしておくか。

「……希望。見送り、サンキューな」

「ああ。計画は最早、僕の手を離れた。もちろん、これからどうするかは提案はあるけれど……君たちは、それを望まないだろう?」

「ああ。いつまでも攻略本に頼りつきりじゃ、情けないしな」

「ふっ、言うじゃないか。ラストダンジョン目前で」

「だからこそ、だろ? ラストにする。だからこそ、最後は俺たちがやらなきゃいけない」

「……今、精霊界はそれほど安全じゃない。ユーキがいるからか、終焉の影響がモロに世界全体に及んでいる。くれぐれも、気をつけて」

「ああ……」

希望の差し出してきた右手に、俺の右手を合わせる。

「雑事は引き受けた。君たちは、ただ、心の導きのままに進むが良
い。世界はきつと、君に優しい」

「……ああ!」

もう一度強く握手して、希望は背を向けた。

「……セツ」

「ああ。行くか! 精霊界に!」

『応!』

「デジ ルゲート、オープン! 選ばれし子供達^{イレギュラー}、
出動!」

「ってそれはやるのかよ!?」

剣士のツツコミをBGMに、俺たちは光の中に吞まれて行った。

……うん、ここまではいいんだ。ここまででは。若干ふざけたところもあるが、概ねシリウスに纏まっていた。問題はここからか。

俺たちが精霊界について、さあまずはどうしようか。となったのだが……。

「ここは……海？」

俺たちの前に広がるオーシャンブル。キラキラと輝く白い砂浜。まごっこことなき海だった。

「暑……」

キラキラと照りつける太陽に、思わず感想が漏れる。

「お、おおおおおお……」

「……さだめ？」

「う……」

「う？」

「海……だっ！」

「さ、さだめ？」

「海だあああああつ！！」

「うおっ！？」

止める間もなくさだめが服を脱ぎ捨てながら海に突進していつてしまう。というか、その真っ黒な水着はいつの間に着たんだ。

「多分、あれ水着じゃなくて影だと思います……」

「実質裸じゃねえか！」

あの馬鹿！ ネ ま！ の脱げ女のパターンを忘れたのか！

「というか、何故あんなにはしゃいでいるんですか？」

「多分、海に来たのが初めてだからじゃないか？ アイツ、前から海やプールに行きたがっていたしな」

俺の答えに、アテナたちは意外そうな顔をした。

「え？ セツたちって、海に来たことなかったんですか？」

「当たり前だろ。俺は泳げないし、何よりさだめの前で一瞬でも半

裸になったら食われる」

一応、他にも理由はあるんだが……できればこれは言いたくない。あ、でもルインは知っているんだっただか。

「セツ……?」

「なんでもない。とにかく、さつさとあの馬鹿連れてこい」

何故かこんな浅瀬まで出てきていた『黒き人食い鮫』とガチバトルを繰り広げているさだめ（何故かめっちゃ笑顔）を指差す。あ、鮫狩られた。

「お兄ちゃん！ フカヒレだよフカヒレ！」

「落ち着けさだめ。フカヒレは乾燥させないとダメだ」

「あ、そう。じゃあいらない」

「ぼいつ、と力尽きた鮫を放りだすさだめ。」

「イヤ待て、もしかしてカマボコやチクワならいけるかもしれん。

専用の道具がないから原始的な方法になるが……」

「ホント!？」

慌てて逃げ出そうとした鮫をぐわしっ！ と掴み直すさだめ。びちびち跳ねてる様子が実にシユールだ。

「いえ、そもそも精霊を素手で狩らないでください！ あと、食料にしようとするのもやめてください！」

「ちえ、いいじゃん味見くらい」

アテナに突っ込まれてしまったので、仕方なく鮫をリリース（放す）するさだめ。

「けど、精霊界での食糧は必要」

「もう一回狩ってこいさだめ」

「ラジャ！」

「ダメですって！ 大体精霊は死んじゃったら消えちゃいますから、食べられません！」

「じゃあどうするんだ？」

「基本的には、野菜とかです。あと、羊」

「スケープ・ゴートか!? スケープ・ゴートだな!？」

「失礼な。迷える子羊のお肉なんかは、美味です」

「あ、アテナ……流石にそれは食べるのに罪悪感が……」

迷える子羊を、精肉売り場に送っちゃダメだろう。人道的に。

「冗談です」

「アテナの冗談は笑えない！」

白けるか、冗談じゃすまないかのどちらかの意味で。

「で、実際のところは？」

「お店がありますので、そこで」

アテナが指差す先には、海の家。

「……精霊界にも、海の家ってあるんだ」

凜が呆れたような感心したような声を漏らす。

「まあ、他にどうしようもないし、とりあえず入るか……」

「ここはどんな精霊が経営してるんでしょうね」

「……凄い嫌な予感がするぞ。俺は」

サイクロイド的予感をひしひしと感じながらも、全員揃って、ぞろぞろと海を家の暖簾をくぐる。

「おう、いらっしやい！ いいネタ入ってるぜ！」

同時に聞こえる威勢のいい掛け声。というか、すごい聞き覚えがある。

「おお！ 兄さんたちじゃねえかい！ 久しぶりだな！」

「……帰るぞ。皆」

案の定、俺の予感的中中だったので、冷静に皆の背中を押す。

「待て待て待て！ そりゃねえぜ兄さん！ まさかこの俺っちを忘れたわけじゃないだろう？ この、サイクロイド様を！」

「……俺が知っているのは二輪だ。一輪に知り合いはいない」

二輪の方も知り合いたくはなかったが。

「おいおい兄さん。今時の二輪はトランスフォームして一輪にも三輪にもなれるって相場は決まってるんだぜ？」

「そんなことはどうでもいい。俺たちは帰る」

「まあまあ、折角来たんだから、マズイラーメンでも食ってきな！」

かき氷もあるぜ！」

「わーい！ かき氷」

「マズイって言っちゃっていいんでしょっか……」

「海の家のレストランは大抵マズイ」

「それもそうですね」

「おいコラお前ら、何躊躇いなく席についてやがる！」

「いいじゃんお兄ちゃん。お言葉に甘えようよ」

「嫌だ！」

「つれないこと言っない兄さん。俺っちと兄さんの仲だろっ？」

「どんな仲だ！」

天敵が！

「大体、なんでお前がこんなところで海の家経営してやがる！」

「……意外なモンスターが経営している場合もありますよ？」

「意外すぎるわ！」

誰が海の家を自転車が経営していると思うのか。

「これがホントの自転車操業」

「やかましい！」

「なあに、俺っちはただのバイトよバイト」

「精霊もアルバイトするのか」

「……近頃の奴あ、何処に行くにもエクスプレスだのジェットだの
つてよお……」

「……要するに、金がなくて暇なんだな」

精霊界も不景気は変わらないらしい。

「だが、ハマの潮風に吹かれて一人黄昏るのも、また乙なもんよ……」

……

「そんなことしてるからお前錆びるんだよ！ 潮風舐めんな！」

「セツ。落ち着いてください。それより、丁度いいですから、ここ
で今後の方針を固めてしましましょう」

「あ、ああ。悪い、取り乱した」

アテナに言われて、確かに今のこの場所は仮の拠点として会議す

るには都合が良いことに気が付いた。

「よし。じゃあまずは基本方針から決めてしまおう」
全員の顔を見回して話始める。

「まず、俺たちの目的を再確認しておこう。俺たちの第一目標は、希沓姫の蘇生。次いで、ユーキちゃん……終焉の打倒だ」

これには、全員異存はなかったのか何も言わずに頷く。

「基本的に全員纏まって動こう。各個撃破されるのは痛い。実力的に不足とは考えちゃいないが……デュエルはともかく、下手すれば実力行使もあり得ないとは言えない」

実力行使の言葉に、誰かがゴクリと息を呑む音が聞こえた。

「実力行使って……」

「……あんまり考えたくはないが、物理的に攻撃してくることも考えられる。だから、基本的にエースやルイン、さだめからは離れないように」

「うわ、さだめ別枠？」

「黒き人食い鮫とガチバトルして狩る奴は単独行動でも問題ないだろう」

攻撃力は大したことないとは言え、精霊を一蹴出来るなら一応大丈夫だろう。

「行動指針だが、まずはこのまま希沓姫たちの城に行こう。ジャックにキング、それにネイキッドが居る筈だ」

実質、俺たちの拠点と出来るのはそこかシャルナの屋敷くらいだろう。そして、あんなゴミ屋敷を拠点にはしたくない。

「アテナ、希沓姫を蘇生させるのに、どれくらい時間かかる？」

「そうですね……希沓姫さんは、肉体が完全に消失してしまってますから……私の蘇生は、魂ソルトがメインで、肉体ハードは専門外ですから……多分、冥界側の協力が要ります。まずは、冥界に向かうべきですよ」

「……やれやれ。また向こうに行くことになるとはな……」

エースが辟易した表情を見せる。俺もあそこに行ったことがある

からわかるが、冥界はあまり好き好んで行きたいと思っ場所ではない。

「シャルナにも手伝って貰って、冥王竜のお力を借りられれば、希牙姫さんたちの神殿で、転生の儀が行えるでしょう」

ヴァンダルギオンの協力は得られるだろう。なんらかの妨害が入るかもしれないが、それ以外は問題ないな。

「よし、それじゃあ……」

「凜」

会議を終わろうとしたところで、海の家から、凜を呼ぶ凜とした声……いや、シャレじゃなくて。

「エリア！ どうしたのこんなところまで……」

「貴女たちが来ることは、真中希望から聞いていたのよ。今の話も、真中希望から事前に聞いていたわ」

「アイツ……俺たちの会議内容先読みしてやがったのか……」

「それで、ここに？」

「ええ。早速だけど凜。貴女が強くなる道は、正にここにある。貴女たちがここに来たのも、何か運命的なものを感じるわね」

「ここに……？」

「海底神殿よ。海の底に沈んだ、忘れられた神殿。そこで、貴女のが待つている。それが、エンディミオンの『水晶の占い師』によって導かれた貴女の運命」

「私の……」

「その二輪」

「あん？ 俺っちかい？」

「貴方、バグロスと知り合いなんでしょう？ 交渉を依頼するわ」

「おいおい嬢ちゃん。どうせならマブダチと呼んでくれよ。ま、構わねえさ。足が欲しいんだろ？」

「そうよ」

トントン拍子に話が進む。凜すらも戸惑っている内に話が纏まっていく。

「ちょ、ちょっと待ってエリアー！」

「なに？ まだ余裕はあるけれど、それほど悠長にしている時間はないのよ」

「その……とっても言い難いんだけど……」

「だから、何よ。言いたいことがあるならばつきり言いなさい。面倒くさいわね」

「うう……」

……あんま話したことなかったけど、エリアきつついな。

「えと……サイクロイドさん」

「おう、なんだい嬢ちゃん」

「ラーメン、頼んでいいですか？」

『はあ？』

思わず、全員で唱和した。

「だ、だって折角海の家に来たんだし……やっぱり、ラーメン食べたいし！」

「おう！ 任せな嬢ちゃん！ とびっきりの奴作ってやんよあー！」

「わあ！ どんなのが出てくるのかな。楽しみ〜！」

「……あのね凜。さっきも言ったように……」

「まだ余裕はあるんでしょ？ 少なくとも、私がラーメン食べる時間くらいはあるよね？」

「……はあ」

「あ、じゃあさだめかき氷ね！ シロップはイチゴ！」

「じゃあ、私は宇治金時にします」

「アテナ、渋いね」

「おいしいですよ？」

「……私は焼きそば。紅シヨウガ大盛りで」

「あいよ！」

さっきまでの真剣な雰囲気吹っ飛び、俄かに騒がしくなる店内。

「……なんつーか、女子はたくましいな。こんな時でもよ」

「いざと言う時、ああやって振る舞える胆力は必要だよ」

あんまり重たくなり過ぎず、普段通り振る舞えるのは流石だ。

「……我は、あそこまで樂觀できんがな」

「私もよ。まったく。これから精霊界が戦場になるかもしれないつていうのに、凜ったら……」

「ま、同じ女子でも個人差はあるよな。無理に自分を変えようとするこたない。あいつらもお前らも、自分らしくしてりゃいい」

俺も相好を崩して、届けられた料理を頬張る女子たちを見る。

「マズツ！ 何このラーメンマズイよ！」

「ツたり前よ！ ウチのラーメンは、速い、マズイ、笑顔がモットーだぜ！」

「……安くはないのか」

「そりゃあ、兄さんたちの運次第だな」

「ここでも料金ルーレット制かよ！」

「んじゃ、ルーレットスタート！」

「外れる、外れる、外れる！」

「おおっと確率変動キターー！」

「ぎゃああああああつ！？」

「平気。私のオゴリ」

「ルイン様あああああ！」

「いざとなればさだめが踏み倒すから安心してお兄ちゃん！」

「安心できるか！」

「かき氷はおいしいですね」

「むしろかき氷を不味く作る方が非現実的だと思うぞアテナ」

「あたぼうよ！ 俺っちのかき氷は一味違うぜ！？ 何せ俺っちから取り外した後輪がハンドルになっているんだからなあ！」

「手作りのリサイクル用品かお前は！」

わいわい、ガヤガヤと平和な時間が過ぎていく。

「マズイ！ もう一杯！」

「さも青汁のようにラーメンおかわり頼んでんじゃねえよ……」

「すげーな。わんこそばみたいだ……」

呆れる俺と剣士。一体どんな食べ方をしているのか、見る見るうちにラーメンがなくなっ行って行く。

「言うなら、わんこラーメンか？」

「不味いモンお代わりしまくるなよ……」

「やっべえよ兄さん！ 確率変動が終わらねえ！」

「……ルイン、大丈夫か？」

「平気。はした金。それにしても不味い焼きそば。貴方が作って」

「いや、別にいいけど」

「おおつと兄さん。悪いがいくら兄さんでも、俺っちの聖域は侵させねえぜ！？」

「たかがバイトがさも自分の店みたいに威張るな！」

「あぐうっ！？ あ、頭が……」

「ああこらそんなに急いで食べるから……」

精霊界についてから、最初の一日は、こんな感じで過ぎていくのだった。そして……。

「……じゃあ、行ってきます」

「気をつけるよ。何かあるかわかんねえんだからよ」

「それなら、剣士さんがついて来てくれれば……」

「残念だけど、バグロスは二人乗り。私と凜で定員よ」

「わかってるよー」

「俺たちここで待ってるから、頑張って来い」

「……はい。ありがとうございます」

凜がバグロスに乗りこむ。

『では、もう一度改めて、行ってきます！』

そう言い残して、凜とエリアを乗せたバグロスは海の底へと潜っていくのだった。

第四期第一話「始まりのバカンス」(後書き)

というわけで、記念すべき第一話。まずは凜の話が始まります。そして今まで殆ど音沙汰なかったエリアさん再登場。……一応、以前にも一回出てますよ？ 間話で。

次回はデュエル……と思いきやまだデュエルじゃないですね。それでは、悠でした！

第四期第二話「鏡の世界の水の国」(前書き)

二話目。この話と次話は、エリア&凜が主役です。特にこの話はエリアが主役、かな？

第四期第二話「鏡の世界の水の国」

アルカナく切り札の騎士く

第四期第二話「鏡の世界の水の国」

「ふわくすごいねエリア。海の中って、こんなに綺麗なんだね！」
「……あんまりはしゃがないで。恥ずかしい」

キラキラと陽の光が差し込んでくる海に感動している私を、エリアは何故か冷ややかな目で見る。

「どうしたのエリア。随分不機嫌そうだね」

「……ちよつとね」

少しアンニュイな雰囲気。元々物静かで、クールなエリアだけど、いつもとは何処か様子がちがう。ホントに何かあるのかな？

「……精霊には、母体からの出産、という習慣はないの」

「え？」

何の話かわからず、私はちよつと間抜けな顔で聞き返してしまっ
た。

「アイドルがそんな間抜け面しないの」

「そ、そこまで間抜け面してないよ！」

も、もうエリアったら……。

「それで、その話がどうしたの？」

「……私たちには母親、とか父親、みたいなものがない。だから、
兄弟関係や家族関係、みたいなものもないのよ」

「そうなんだ……」

まだ、話が見えない。

「……察しが悪いわね」

「うう……いくらなんでもこれだけじゃわからないよ」

「……厳密な家族はないけれど、家族のような存在はいるの。妹み
たいに可愛がっていた娘、とかね」

「エリア……？」

「私にも、終焉に弓引く理由がある、ということよ。それ以上は、
着いたら話すわ」

ぐっ、と杖を強く握りしめるエリアに、それ以上の質問は出来な
かった。

終焉に弓引く理由、か……。

正直なところ、私自身に終焉に対して思うところは余りない。当
然、放っておけば世界を滅ぼしてしまう、というのは聞いているし、
因縁の深いさだめやアテナは友達だから、そういう意味では終焉を
敵としてみるのに不都合はない。

「……でも、私自身の理由、っていうものはないんだよね」

友達が大変だから、助ける。それ自体は、理由として十分だと思
っている。でも、死に物狂いで敵を倒す、明確な理由みたいなもの
はない。

「それで、いいのかな……？」

それで、最後まで戦えるのか。それが、すごく不安。

その時、ピーッ、ピーッと船内に耳障りな警報が響く。

「な、なにっ!？」

『お嬢さん方、どうやらお客さんみたいだぜ』

「客!?! ど、どうということ?」

「敵ってことよ。バグロスに搭載された迎撃装置だけで、何処まで
対抗できるか怪しいわね……凜。私を使いなさい」

「ど、どうすればいいの?」

「いつも通り、デュエルする時の感覚でいいわ。何でもいい。海中
で戦えるモンスター出しなさい。私が指示を出して戦わせるから」

「う、うん！　じゃあ、『ガガギゴ』召喚！」

バグロスさんのコクピットから見える海中に、『ガガギゴ』が召喚される。

「……来るわ！」

『よっしゃ！　迎撃だ！』

徐々に敵影がはつきりと見えてくる。

「ほ、『砲弾ヤリ貝』と『魚雷魚』！？」

「ってことは、後ろに『暗黒大要塞鯨』がいるわね……凜。上級モンスターも用意しておきなさい」

「う、うん！」

『おらおらあ！　魚雷で俺様に勝とうなんざ百年早いわ！』

「次、右よ！『ガガギゴ』、貴方は専守防衛に努めなさい！　主な防衛はバグロスに任せて！」

エリアの言葉に頷いた『ガガギゴ』さんが、バグロスさんの撃ち漏らした弾幕を撃ち落としていく。爆発の衝撃で船内が揺れる。

「きゃああつ！？」

「落ち着きなさい。この程度で墜ちるポンコツではないわ」

『あたぼつよ！　まだまだいけるぜ！』

しかし、尚も弾幕は尽きない。

「くっ……いい加減に、しなさいっ！」

エリアが一匹の『砲弾ヤリ貝』のコントロールを奪って数体の『魚雷魚』を撃ち落とす。

『にやるッ……！　しつけえ！』

「召喚っ『グリズリーマザー』！」

青の毛皮を持ったグリズリーがその巨体を利用して弾幕を防ぐ。でも、いくらなんでも数が多過ぎて、耐え切れなくなった『グリズリーマザー』が消滅していく。

「『グリズリーマザー』の効果！　デッキから『ネオアクアマドル』召喚！」

「よし……それなら！」

『ネオアクアマドール』の作りだす氷壁が、全ての弾幕を防ぐ。
「これで、なんとか……」

しばらくすると、弾幕も止み、海中に元の静寂が戻って来た。

「油断するんじゃないわよ。弾切れしたのか無駄だと悟ったのか知らないけど、要するに今度は大物が来る」

「わ、わかつてる……！」

エリアの言葉に気持ちを引き締める。そうだ、ここはもう、人間界じゃないし、日常でもないんだ……！

「っ来る！」

『リーダーに反応アリだ！ 来るぜお嬢さん方！』

「凜！」

「うん！『ガガギゴ』をリリースして『ギガガガギゴ』召喚！」

海中に居た『ガガギゴ』が、更に強化されて『ギガガガギゴ』に進化する。

敵は多分、『暗黒大要塞鯨』。それなら、『ギガガガギゴ』の攻撃力でどうにかなる筈！

「……チツ。マズツたわね」

「え？」

「『魚雷魚』や『砲弾ヤリ貝』が飛んできたからって、敵が『暗黒大要塞鯨』だけとは限らないってことよ」

エリアの言葉通り、見えてきたのは『暗黒大要塞鯨』だけじゃなくて、それよりは小さいけど、もっと大きな力を持った深海の王。

「ちよ、『超古深海王シーラカンス』……！？」

「しばらくは『ネオアクアマドール』で耐え切れるでしょう。でも、そう長くは持ちそうにないわね」

「じゃ、じゃあどうすれば……」

視界の奥では、『超古深海王シーラカンス』の傍にぞくぞく集まってくる魚族のモンスターたち。確かに、これじゃあいくらも持たないかも……。

「私が出る。準備をして」

「あ、うん！　じゃあ『ネオアクアマドル』と『ギガガガギゴ』をリリースして『ゴギガガガギゴ』を召喚！　エリア！」
「わかってるわ！」

エリアが半透明になって海中へ飛び出していく。

「魔法カード『神霊の継承』！　『ゴギガガガギゴ』と『水霊使いエリア』をリリースして『水神使いエリア』を特殊召喚！」

『ネオアクアマドル』の氷壁が消えたことでこちらに攻撃を加えようとしていたモンスターたちは、轉身したエリアに驚き、身を固める。

『さあ、薙ぎ払うわよ』

エリアがその力を使って、次々と敵を殲滅していく。更に、そのお供となっている『ゴギガガガギゴ』もまた、一騎当千の働きを見せてくれている。

『ハッ！　負けられねえな！　うらうらあ！　墜ちろお！』

小粒なモンスターはバグロスさんが撃ち落とす。

『水神使いの名を以って命ずる……その身を縛る、あらゆる戒めを打ち破れ！』

エリアの杖から放たれたビームがシーラカンスの額に命中する。

同時に、シーラカンスの背中から黒い影が。

「あれは……」

『終焉の精霊ね。大方、私たちの妨害工作をするための端末でしょう。潰しておくわ』

エリアの指示に従って『ゴギガガガギゴ』が『終焉の精霊』を握り潰す。思いのほかあっさりと『終焉の精霊』は消えていった。

「あ……魚族たちが退いて行く……」

『元々、『超古深海王シーラカンス』の指示に従っていただけみたいな。深海王が正気を取り戻したことで、私たちが攻撃する理由がなくなったのよ』

「そっか……ありがとうエリア」

私がデュエルディスクをたたむと、エリアは元の姿に戻ってコク

ピット内に帰って来た。

「別に。降りかかる火の粉を払っただけ」

「それでも、ありがとう」

「……どういたしまして」

ぷいっ、と顔をそらして、小さな声でエリア。

「照れなくてもいいのに」

「煩い黙りなさい。……それより、そろそろ見えてくる筈よ」

「え……」

エリアの指摘通り、私たちの前には徐々に巨大な建造物らしきものが見えてきた。

「あれが……」

「忘れられた遺跡……『忘却の海底神殿』よ。あれが、今回の目的地」

『よお、エリアの嬢ちゃん。あんたらはどこで降ろせばいい？』

「え？ 下ろす？」

「そうね。神殿内部まで入り込めば、問題ないと思うわ。少し入口が狭いかもしれないけれど、入れる？」

『任しときなつて』

「あの、エリア。私、水中でそんなに長い間息を止めていられないんだけど……」

「安心しなさい。神殿内に入れば、普通に息できるようになるから。そこで降りるの」

そ、そっか。良かった……。

「……貴女は、ここにいいのかしらね……」

「え？ エリア今何か言った？」

「……何でもないわ。すぐにわかると思うし」

「ふーん？」

『そろそろ神殿内に入るぜ』

バグロスさんの言葉通り、神殿は目前に迫っていた。

「これが……『忘却の海底神殿』……」

忘れられたという言葉通り、放置されてから大分時間が経っているみたいで、柱や屋根の部分は大分老朽化している。

「く、崩れないよね」

「大丈夫よ。見た目はボロくても、仮にも太古から残る神殿よ」

『着水するぜ』

バグロスさんから降りて、私は神殿内に足をつけた。

「なんか……不思議。海底なのに、普通に空気があるんだね」

「そういうものだと思っておきなさい。説明するのが面倒だし」

「ふうん……それで、目的地は何処？」

「奥よ。こういう時、宝物は奥にあるって相場は決まっているでしょう？」

「た、宝物、なのかな」

「似たようなものよ」

私にとつてもね……と小さな声で言ったエリアの言葉は、深く聞かない方が良さいんだと思う。

エリアの先導で歩き出す。バグロスさんは待機。帰りの足に下手に動かれて帰れなくなっても困る、とはエリアの弁。

「……祀られた鏡、か。まず間違いなさそうね」

「エリア？」

「……着いたら話すって言うておいたわね」

溜息を一つ吐いて、エリアは話し始める。

「私には、妹がいたの。さっきも言ったように、血の繋がった、とかそういう妹じゃないけれど、妹みたいに可愛がっていた娘がね」

さっき聞いた通りなので、黙って頷く。

「名前も、見た目もそっくりで、周りの精霊からも、姉妹のような目で見られていた。私たちも、それを不満に思うことなんかなくて……」

エリアの表情は暗い。幸せな記憶を語っているはずなのに。

「……楽しかったのよ。魔術の修行も、勉強も、あの子と一緒にずつとやってきた。おっちょこちよいだったあの子の世話をするのが、

私の日課だった」

幸せな記憶を、まるで血を吐くかのような表情で語るエリアは、見ていて痛々しかった。

「……でも、楽園は壊された。他ならぬ、あの子自身の手によって邪法に手を出した、と公式では処理されているらしい。エリアの妹は、ある日突然人が変わったかのように精霊を殺し始めた。エリアがいくら止めても聞かず、ただ哄笑を上げながら。

「あの子は、今まで見たことのないような杖を持っていた。あの子の優しくかった妹が、あんな凶行に及ぶ筈がない。絶対、何かあるって思っていた」

答えを覚えてくれたのは、希望さんだった。

「『忘れられた海底神殿に祀られし魔鏡の儀式。君の妹は、その巫女だ』……あれはそう言っていたわ。その鏡に宿った『終焉の精霊』が、あの子を見初めて操り、惨劇を巻き起こしたことも含めてね」

また、『終焉の精霊』。全てはそこに帰結するみたい。

「それって……さだめとかと同じ……」

「ええ。あの子は……私の妹は、『終焉の精霊』の器として、利用されたのよ」

「酷い……」

「これが、私が終焉に対して引く理由。あの子の汚名を雪ぎ、あの子を取り戻すために。幸せな日々を、笑顔で語れるようになるために」

「エリア……」

「だからこれは、凜。貴女の力を得るためだけじゃない。私の過去の清算と、大切なモノを取り戻すための戦いでもあるの。手を……貸してくれる？」

「……もちろん」

エリアは友達。ずっと昔から、私の傍に居てくれた大切な親友。

「だから、絶対取り戻そう。そのためなら私、何だってやるよ！」

「……ありがとう」

エリアが、少しだけ笑みを浮かべる。けど、その笑みはすぐに凍りつくことになった。

「……居るわ。この扉の向こう。私たちを待っている」

私には何もわからない。けど、エリアが言うならそうなのだろう。「あの子よ」

巨大な石の扉を押し開けて、中に入る。中は祭壇のようになっていて、祭壇の上には、複雑な装飾が為された鏡が祀られている。

そして、その祭壇の下、祈るように片膝を着いて胸の前で両手を組んだ、蒼い髪の少女。

「やっぱり、ここにいたのね…… エリアル！」

エリアの悲鳴染みた叫びに、エリアル、と呼ばれた少女がゆっくり立ち上がり、此方を振り向く。

「っ！」

ぞつとした。別に何かされたわけでもないのに、その雰囲気だけで気圧されてしまう。

「……くすつ。久しぶりだね。おねえちゃん。くすすっ！」

無邪気な笑い声が、何処か空虚に感じる。瞳に光がなく、口元だけが嗤っている。

「エリアル……！」

「どうしたの？ おねえちゃん。そんなに怖い顔して。久しぶりの再会なのに」

「……ええ、そうね。久しぶりだね……ざつと七、八年ぶりくらいになるのかしらね」

「さあ？ あたし、何年経ったかなんて数えてないから、わかんないなあ……ずつとここで、祈りをささげて、儀式を続けてきたから「儀式、ですって？」

「そうだよおねえちゃん。ずつとずつと、おねえちゃんに勝てなかったあたしが、おねえちゃんに勝てるようになるための儀式。世界を滅ぼして余りある、偉大なる力を得るための儀式……儀式水鏡に捧げる、永久とわの祈りを……ずつと、続けてきたの」

「エリア……」

「あの子を、倒すわ。力を貸して」

「で、でも……」

「いいから！ 何でもするって言ったでしょう！？ デュエルディスクを構えて！ 殺されたいの！？」

「っ！」

絶叫するかのようなエリアの声に、反射的にデュエルディスクを構える。

『我に刃向かおうというのか……？ 大いなる儀水鏡……イビリチユアの力を持つ我に……』

「……黙りなさい。あの子の顔で、あの子の声で……それ以上、囁さえずるんじゃないわ」

エリアの目には、直視できない程の憤りと、決意が満ちていた。

「……待ってて。エリアル。おねえちゃんが、助けてあげる。目を、覚まさせてあげる。だから……」

エリアが私を見る。

「……もう一度、昔みたいに……完膚なきまでに負かしてあげるわ！」

「い、行きます！ デュエル！」

「ふふ、ふふははははははははっ！ いいだろう。我が力、超えられるものならば超えてみるがいい、“おねえちゃん”！ デュエル！……」

「その姿で……おねえちゃんと呼ぶなあ！！」

エリアの叫びが、私たちのデュエル開始の合図となった。

第四期第二話「鏡の世界の水の国」（後書き）

バグロス……じゃない、エリア大活躍。と言うほど活躍はしてないか。ま今までに比べれば活躍している方でしょう。凜も。

次回はデュエル。相手はリチュア。恐らく、二次創作でリチュア使ったのは初めてじゃないかな？ わかりませんが。改訂前だったらそうだったかも。今ならいるかも。

それでは、悠でした！

第四期第三話「水底の儀水鏡」(前書き)

連続更新三話目。凜VSエリアルをお届けします。リチュアは僕にとってはかなり好みのデッキ。儀式大好き。

第四期第三話「水底の儀水鏡」

アルカナく切り札の騎士く

第四期第三話「水底の儀水鏡」

「私の先攻！ ドロー！」

今や異形の怪物と化してしまったエリアルを救うため、私は気合を入れてカードをドローした。

「うん。私は手札から『アトランティスの戦士』を墓地に送ってデッキから『伝説の都アトランティス』を手札に加え、発動！」

「ほう……アトランティスか」

私たちの周囲は、殆ど変わっていない。もしかしたらアトランティスは、この海底神殿の過去の姿なのかも。

「アトランティスの効果で、私の手札とフィールド上のモンスターのレベルは一つ下がります！ 手札から『ギガガガゴ』を攻撃表示で召喚！ カードを一枚セットしてターンエンド！」

『ギガガガゴ』 ATK 2450 2650

「我のターン、ドロー！」

エリアルを使うデッキがどんなデッキなのか、私には見当もつかない。でも、エリアの妹みたいな子なら、多分同じ水属性……。

「我は手札から『リチュア・アビス』を攻撃表示で召喚！ 効果発動！ 『リチュア・アビス』は召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから守備力1000以下のリチュアを手札に加えることができる！ 手札に加えるのは『シャドウ・リチュア』！」

『リチュア・アビス』 ATK 800 1000

「リチュア……？」

聞いたことのないカード名に、少し困惑する。

「手札に加えた『シャドウ・リチュア』の効果！ 手札から墓地に捨てることにより、デッキからリチュアと名のついた儀式魔法一枚を手札に加える！」

エリアルの手に、禍々しい気配を放つカードが加わる。……あれは、良くない！

「我はカードを三枚セット。ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！」

大丈夫。幸い、エリアルの『リチュア・アビス』の攻撃力はたったの800。アトランティスの影響下で1000まで上がってはいけるけど、それでも私の『ギガガガギゴ』に比べれば！

「バトルフェイズ！ 『ギガガガギゴ』で『リチュア・アビス』を攻撃！」

「リバースカードオープン！ 永続トラップ、『忘却の海底神殿』

！ このカードは、自分フィールド上の水属性モンスター一体を、自分のエンドフェイズまで除外することができる！ 『リチュア・アビス』をゲームから除外する！」

「なら、ダイレクトアタック！」

「リバースカード発動『トルネードウォール竜巻海流壁』！ 我への戦闘ダメージは無効だ！」

「くっ……」

『ギガガガギゴ』の攻撃が、逆巻く竜巻に防がれる。

「なら、私はモンスターを一体守備表示でセット。ターンエンド」

「私のターン、ドロー！ 我は『リチュア・チェイン』を攻撃表示で召喚。効果を使う！」

『リチュア・チェイン』 ATK 1800 2000

エリアルのフィールドに、鎖を手にしたトカゲのようなモンスターが召喚される。攻撃力はアトランティスの影響下で2000。ま

だ、問題ない。

「チエインの効果は、デッキの上から三枚をめくり、その中に儀式魔法か儀式モンスターが存在すれば、その内一枚を手札に加えることができる」

エリアルがめくったカードは『イビリチュア・マインドオーガス』
『強欲なウツボ』 『リチュア・マーカー』の三枚。

「くくく……私は『イビリチュア・マインドオーガス』を手札に加える。更に魔法カード『天使の施し』発動。デッキからカードを三枚ドロウし、手札から『リチュア・マーカー』と『リチュア・ヴァニティ』を墓地に送る。リバーズカードオープン！」

僅か二ターンで、エリアルの手札はほとんど整えられていく。

「『儀水鏡の瞑想術』！ 手札の儀式魔法をオープンすることで、墓地のリチュアを二体、手札に戻す。我が戻すのは『シャドウ・リチュア』と『リチュア・ヴァニティ』！」

手札が六枚。例え儀式で三枚を消費するとしても十分な手札が揃った……。

「まだだ。我は魔法カード『強欲なウツボ』を発動。手札の『スノーマンイーター』 『リチュア・ヴァニティ』をデッキに戻し、デッキからカードを三枚ドロウする」

「凄い回転率……」

こんな序盤から、くるくると手札が入れ替わっていく。

「手札から永続魔法『昇華する魂』発動！ そして、儀式魔法『リチュアの儀水鏡』！」

エリアルが持っていたのと同じ意匠の鏡が出現し、禍々しいオーラを放ち始める。

「な、なにが……」

「ふ、ふはは……我は『シャドウ・リチュア』を儀式の贄にする。

『シャドウ・リチュア』は水属性の儀式モンスターの贄にする場合、一体で生贄を賄うことができる！ 出でよ。我が写し身。『イビリチュア・マインドオーガス』！」

『イビリチユア・マインドオーガス』 ATK2500 2700
現在のエリアルと同じ姿をした、異形の人魚がフィールドに召喚される。

「そして私の効果を発動する。儀式召喚に成功した時、お互いの墓地に存在するカードを合計五枚まで選択し、デッキに戻すことができる。我が戻すのは『リチユア・マーカー』 『儀水鏡の瞑想術』 『強欲なウツボ』 『天使の施し』そして貴様の『アトランティスの戦士』の五枚！」

「再利用効果……！」

「『昇華する魂』の効果により、儀式に使用した『シャドウ・リチユア』を手札に戻す。バトルだ！ その目障りな爬虫類を蹴散らしてくれる！ 『魔鏡黎明波』！」

「きやああつ！」

凜LP3950

マインドオーガスの下半身、もう一つの口のように開かれた魚の口から、極太のレーザーが放たれ、何とか持ちこたえようとした『ギガガガゴ』を消し飛ばす。

「まだだ！ 『リチユア・チェイン』で守備モンスターを攻撃！ 『魔鏡鎖』！」

トカゲのような『リチユア・チェイン』の手にした鎖が、私の守備モンスターを打ち抜こうとする。

「……リバースカードオープン！ 『海竜神の加護』！ このターン、私のレベル3以下のモンスターは戦闘では破壊されない！ リバースモンスターは『水霊使いエリア』！」

『水霊使いエリア』 DEF1500

『エリアル……必ず、解放してあげるわ』

「エリアのリバース効果発動！ このカードが表側表示で存在する限り、相手の水属性モンスター一体のコントロールを得る。私が選択するのは、当然『イビリチユア・マインドオーガス』！」

「なんだと!？」

異形の人魚をこちらの支配下におくことが出来た。でもまだ安心はできない。

「……エンドフェイズに、『忘却の海底神殿』の効果によって除外されていた『リチュア・アビス』は我がフィールドに特殊召喚される。効果発動！ デッキから『リチュア・ヴァニティ』を手札に加える。ターンエンド」

あっという間に手札が補充されて五枚。あれだけカードを使ったのに……。

「わ、私のターン、ドロー！」

『凜、吞まれないで。確かに大したタクティクスだけど、付け入る隙はあるわ』

「う、うん。すう……はあ……よし！」

声をかけてくれたエリアに返事をして、深呼吸。そうだ、これはいつもの、負けても何も失わない、甘いデュエルじゃない……。

「負けたら、色んなものを失っちゃうんだ」

エリアの家族。新しい力。もしかしたら、私の命や世界の命運すら。

「……負けられない。そのために」

もう一度、深く深く、深呼吸をする。

「……うん！ 行くよ、エリア！」

『了解！』

「私は『アビス・ソルジャー』を攻撃表示で召喚！ 効果発動！

手札の『マーメイド・ナイト』を墓地に送って、『竜巻海流壁』を手札に戻すよ！」

『アビス・ソルジャー』 ATK1800 2000

「ちっ……」

「バトル！ 『イビリチュア・マインドオーガス』で『リチュア・チエイン』をこっげ……っ！？」

ドクンッ……！

「かっ……はっ……！？」

「凜……？ どうしたの、凜！？」

「うく……あ、『アビス・ソルジャー』で『リチュア・アビス』を攻撃……！」

「くく……『忘却の海底神殿』の効果発動。『リチュア・アビス』を除外する」

「ぐ……わ、私はメインフェイス2にエリアと『イビリチュア・マインドオーガス』をリリースして、デッキから『憑依装着 エリア』を攻撃表示で特殊召喚……」

『憑依装着 エリア』 ATK1850 2050

「ふん……我をリリースするとは……不快」

「カードを一枚セットしてターンエンド……」

『凜……』

エリアが心配そうにこちらを見つめてくる。私はそれに、大丈夫と手を振って答えた。

今の……マインドオーガスで攻撃しようとしたら、いきなり息が出来なくなった……どういうこと？ マインドオーガスに、そんな効果はないのに……。

「我のターン、ドロォ。くくく……何故、我を扱えなかったか……不思議そうだな？」

「……………」

「当然だ。貴様ごときに我が操られるものか……リチュアとしての力を持たぬ者に、我は扱えぬ……」

「そんな……」

モンスター効果とか、そういう次元の問題じゃなかった。これは、カードゲームなんかじゃない……！

「戦い、なんだ……！」

私の知っている、デュエルモンスターの常識がいつまでも通用する世界じゃない。気を抜けば、呑まれる……！

「我は墓地に存在する『リチュアの儀水鏡』の効果を使う。このカードをデッキに戻すことで、墓地に存在するリチュアと名のつく儀

式モンスターを手札に戻す。舞い戻るがいい。我が写し身よ！」

除去したマインドオーガスが手札に戻っていく。しかも、あの儀式魔法までデッキに戻った。それに手札には……。

「我は手札の『シャドウ・リチュア』を墓地に捨て、デッキから『リチュアの儀水鏡』を手札に加える！」

「また……儀式召喚の準備が整った!？」

マインドオーガスの手札は八枚。手札消費の激しいハズの儀式召喚で、八枚!

「くく……リチュアにとって、デッキも墓地もない……皆等しく、手札も同然！」

「くつ……!」

確かに……これじゃ、キリがない!

「手札から『リチュア・ヴァニティ』の効果発動! 手札から捨てることで、このターン、リチュアと名のついた儀式を邪魔すること叶わず、儀式召喚時に効果を受けることもない！」

「そんなっ!？」

私が伏せたのは『奈落の落とし穴』……儀式召喚に合わせて、チーンする予定だったカード。

「更に魔法カード『サルベージ』! 墓地の『シャドウ・リチュア』と『リチュア・ヴァニティ』を手札に戻す」

リチュアには、アドバンテージを稼ぐカードが多過ぎる! また二対一交換……。

「さあ、もう一度行くぞ! 儀式魔法『リチュアの儀水鏡』! 手札の『シャドウ・リチュア』を生贄に、『イビリチュア・マインドオーガス』を儀式召喚！」

『イビリチュア・マインドオーガス』 ATK2500 2700

そしてこれでまた……!

「墓地に存在する『サルベージ』と、貴様の墓地の『水霊使いエリア』『ギガガガゴ』『マーメイド・ナイト』の四枚をデッキに戻す。更に『昇華する魂』の効果により、墓地の『シャドウ・リチュ

「エリアル……貴女は……貴女を、追い詰めたのは……」
劣等感。コンプレックス。出来た姉と出来そこないの自分。そんな、ごくありふれたとも思える想いが、エリアルの心の中に澱のよう溜まっていったんだと思う。

私にも経験がある。アイドルに成り立ての頃、演技も歌も、デュエルすらも未熟だった頃。先輩アイドルの足を引つ張ったり、番組の進行を遅らせたたり、どうしようもない大根役者だった。誰でも始めはそんなものだと言う周りの言葉も、お情け以外の何物にも聞こえなくて……。

「凜？」

「どうしようエリア。私、この子のこと他人に思えない」
似てるんだ。この子は。私と。

「エリアルも、私も、エリアみたいになりたかったんだ」

新人の頃、緊張のあまり笑顔を浮かべることも出来なかった私が考えたのは、クールなエリアの立ち振る舞いを真似ることだった。その考えは上手くハマリ、エリアの模倣をした水原凜というキャラクターは大ヒットし、私は一躍アイドルとして躍進できた。……まあ、そのクールなキャラを通すため、エリアのデッキが使えなくなったのは誤算だったけど。

「……でも、どれだけ人気が出ても、エリアの模倣でしかない。“私自身”を見ている人は何処にもいない」

私の被った、エリアの仮面を見ているだけ。自分で選んだことだけど、それは徐々に、私の心を浸食していった。

「悔しかったし、妬ましかった。自分で選んでおいて、自分勝手だとわかっていても」

だから、私にはわかる。優れた姉の影に隠れて、ダメな自分をずっと蔑んで。そんな時に“呼ばれた”んだ。魔鏡に。終焉に。

それは、とつても魅力的で、蠱惑的だったと思う。

「……でも、やっぱりそれじゃあ駄目だよ」

比べられるってことは、辛いこと。優秀な姉^{エリア}が居て、誇らしい気

持ちの影にある、嫉妬と自己嫌悪の闇。とつてもわかる。かつては私が抱いた想いだから。……だけど。

「例え、どんなに辛くても、いつだって私たちは『負けるもんか！』って思いながら頑張らなきゃいけない。どんなに惨めでも、どんなに這いつくばっても、『負けるもんか！』って立ち上がらなきゃいけないんだ」

『凜……』

「だから、ちよつとだけお灸を据えてあげよう、エリア。どんなに酷い時でも、楽な方に逃げようとする、弱い心に鞭打って、これから歩いて行くために」

相手はリチュア。儀式召喚でありながら、爆発的なアドバンテージを得ることができる、とても強い相手。負けたら死ぬかもしれない、絶望的な状況。

「だけど……『負けるもんか！』私のターン、ドロー！」

今の手札で出来ることを考える。手札は二枚。これじゃあ足りない！

「手札から魔法カード『強欲な壺』！ デッキからカードを二枚ドロー！」

これで三枚！

「まずは、永続魔法『ウォーター・ハザード』を発動！ 手札からレベル4以下のモンスター一体を特殊召喚するよ。『コダロス』を攻撃表示で召喚！」

『コダロス』 ATK1400 1600

私のフィールドに、小型のダイダロスとも言つべき海竜が召喚される。

「更に『巨大戦艦クリスタル・コア』を攻撃表示で召喚。効果により、カウンターを三つ乗せる！」

『巨大戦艦クリスタル・コア』 ATK2100 2300

フィールドに水晶で出来たような戦艦が召喚される。

「『コダロス』の効果発動！ 私のアトランティスを墓地に送るこ

とで、フィールド上のカード二枚を墓地に送るよ！ 私が選択するのは『昇華する魂』と『忘却の海底神殿』！」

リバースカードの片方は、恐らく『竜巻海流壁』。なら、フィールドが『海』でさえなければ発動できない！

「ぐぬっ……………」

「更に『巨大戦艦クリスタル・コア』の効果発動！ 一ターンに一度、相手攻撃表示モンスター一体の表示形式を守備表示に変更する！ 私が選択するのは『イビリチュア・マインドオーガス』！」

『イビリチュア・マインドオーガス』 DEF2000

異形の人魚が身を縮め、防御態勢をとる。

「バトルフェイズ！ まずは『コダロス』で『リチュア・アビス』を攻撃！ 『海流波』！」

「ぐあ……………」

エリアル LP3400

「続いてクリスタル・コアでマインドオーガスを攻撃！ 『アーム・レーザー』！」

クリスタル・コアから放たれたレーザーがマインドオーガスを撃ち抜く。

「ぐ……………おのれ、またもや……………」

「クリスタル・コアは、戦闘終了後、自らのカウンターを取り除く。カードを一枚セットして、ターンエンド」

これで手札は使いきった。ボード・アドバンテージは確保できたけど、ハンド・アドバンテージの差が大き過ぎる……………。

「私のターン、ドロー！」

六枚ものハンド・アドバンテージは、多少のボード・アドバンテージなんてひっくり返してしまう。それは、デュエルモンスターズの常識。

「墓地の『リチュアの儀水鏡』の効果発動！ デッキに戻すことで我自身を手札に戻す」

「くっ……………」

キリがない。これじゃあ、ギリ貧。どうにかするなら除外するしかないんだけど……。

「除外関係のカードなんて入ってないしなあ……」

さだめのデッキなら、多分結構あっさり勝てる。でも、真正面から勝とうとすると厳しいものがある。

「更に『シャドウ・リチュア』を手札から墓地に捨て、デッキから『リチュアの儀水鏡』

を手札に加え、リバースカード『儀水鏡の瞑想術』を発動！手札の『リチュアの儀水鏡』をオープンして、墓地の『シャドウ・リチュア』と『リチュア・チェイン』を手札に戻す！」

「負けるもんか！」って思うけど、でも、いくらなんでもこれは……。

「……どうしたら、どうしたらいいの……？」

どれだけ倒しても、すぐに立て直される。

「まずは掃除だ。速攻魔法『サイクロン』右側のリバースカードを破壊する！」

「くっ……！」

最初の方に伏せていた『奈落の落とし穴』は結局効果を発揮しないまま破壊されてしまう。

「我は『リチュア・チェイン』を召喚！効果によりデッキトップから三枚をめくる。『サルベージ』『儀式の檻』『イビリチュア・ソウルオーガ』……は」

エリアルが顔が、ニヤリと歪む。

「我は『イビリチュア・ソウルオーガ』を手札に加える」

「新しい……イビリチュア？」

「そうだ。我が切り札、その目に焼き付け屈するがいい。まずは『リチュア・ヴァニテイ』を捨てて効果発動。そして『リチュアの儀水鏡』発動！『シャドウ・リチュア』をリリースし、『イビリチュア・ソウルオーガ』を攻撃表示で儀式召喚！」

『イビリチュア・ソウルオーガ』 ATK2800

『ゴオオオオオツ！！』

呼び出されたのは、一見してドラゴンのような海竜。マインドオーガスと同じく、禍々しい気を放っている。

『イビリチュア・ソウルオーガ』の効果発動！ 手札の『リチュア・エリアル』を墓地に捨て、効果発動！

『エリアル！』

エリアルは、自分自身を捨てて効果を使ってきた。

『フィールド上の表側表示のカードをデッキに戻す！ 選択するのは『巨大戦艦クリスタル・コア』！』

『そんなっ……！』

戦闘破壊耐性を持つクリスタル・コアが戻されてしまう。

『バトルフェイズ！』リチュア・チェイン』で『コダロス』を攻撃！『魔鏡鎖』！』

『くっ……！』

凜LP3100

『更に『イビリチュア・ソウルオーガ』でプレイヤーにダイレクトアタック！『魔鏡狂爪』！』

『きゃあああああっ！？』

凜LP300

『ターンエンド。さあ、ラストターンだ』

『ぐ……私のターン……』

『凜』

『エリアル……』

『私を、信じなさい』

『え……？』

『……私は、あの子にとってカツコイイおねえちゃんだったから』
妹に、格好悪いところは見せたくない。

『……うん！ ドロー！』

『！ これなら、まだ！』

『永続魔法『命削りの宝札』！ デッキからカードを五枚ドロー！』

「ここにきて、手札増強だと……?」

「更に魔法カード『天使の施し』! 三枚ドロして二枚捨てます!
魔法カード『サルベージ』! 今墓地に捨てた『逆巻くエリア』
と『水陸両用バグロス Mk-3』を手札に戻す!」

「永続魔法『ウォーター・ハザード』の効果発動! 手札から『水陸両用バグロス Mk-3』を特殊召喚!」

『水陸両用バグロス Mk-3』 ATK1500

『いよっしゃあ! 任せな嬢ちゃん!』

「つて、バグロスさん!？」

何故か、バグロスのカードに精霊として宿っていた。

『話は聞いていたぜ! 俺様も手を貸すぜ!』

「えっと、気合入っているところ悪いんだけど……」

『あん?』

「えと……『逆巻くエリア』を召喚。バグロスさんをリリースして
効果発動するね」

『な、なにいいいつ!？』

『……哀れね』

いつも以上に大人びた容姿のエリアが、バグロスさんを逆巻く水
で包む。

『へっ……まあいいか。俺は俺の出来ることをやるさな』

「手札から『ゴギガガギゴ』を特殊召喚!」

『ゴギガガギゴ』 ATK2950

私のフィールドに、『ギガガガギゴ』が更に凶暴化した『ゴギガ
ガガギゴ』が特殊召喚される。

「魔法カード『神霊の継承』! 『逆巻くエリア』と『ゴギガガギ
ゴ』をリリースして、デッキから『水神使いエリア』を特殊召喚!」

『水神使いエリア』 ATK2800

『さあ、お仕置きをしてあげるわ。リアル』

「何を……まだ、攻撃力は同等……その程度では……」

「これだけじゃないよ! 『水神使いエリア』のモンスター効果!

手札から水属性モンスター一体を捨てて、相手の水属性モンスター一体のコントロールを得る！ 選択するのは当然、『イビリチュア・ソウルオーガ』！」

「馬鹿が！ イビリチュアが貴様に操られるとと思っているのか！？」
「操る必要はないよ」

「なに……？」
「リバースカードオープン！ 『リビングデッドの呼び声』！ 墓地の『ゴギガガギゴ』を特殊召喚！」

「っ……！」
「貴女のフィールドには、『リチュア・チェイン』のみ。もう、『イビリチュア・ソウルオーガ』で攻撃する必要なんてない」

「っ……また」
『エリアル……』

「また、あたしは負けるの……？ これだけ、これだけ強くなっても……あたしは……」

「エリアル……」

今までの狂気的な表情が消え、そこに居たのは一人の少女の顔。

『エリアル……ごめんなさい』

「おねえ……ちゃん……」

「気の利かない私が悪かったわ。あの頃の私は、貴女を守っていたつもりで、貴女を傷つけていたのね」

「……おねえちゃん」

エリアルの上に、もう狂気はない。

『凜』

「エリアル……」

『解放してあげて。デュエルに勝てば、終焉の精霊は排除できる筈』
『よ』

「……うん！ 『ゴギガガギゴ』で『リチュア・チェイン』を攻撃」
「！」

「ぐ……ああっ！？」

エリアルLP2250

「これで……トドメ！『水神使いエリアル』で、プレイヤーにダイレクトアタック！『水神の粛清』！」

『エリアル……！戻って来て！』

エリアの放った水流が、マインドオーガスと化したエリアルの下半身を吹き飛ばす。

「あ、ああああああああっ……！」

エリアルLP0

「エリアル！」

デュエルが終わった後、エリアが下半身を失ったエリアルに走り寄る。

「お、ねえちゃん……！」

「エリアル！」

エリアルは命の灯は、正直危うい。何しろ、これまで体を操っていたも同然な終焉の精霊が消えた上、下半身を丸ごと失ったのだから。

「ど、どうしよう凜！わ、私、やり過ぎて……！」

「エリア……！」

こんなに取り乱すエリアは初めて見る。でも……。

「わ、私に言われても……ど、どうしよう……！」

エリアルは、エリアに一言呼びかけてすぐ、気を失った。まだ息はあるけど、このままじゃ……。

「凜さん！」

「アテナ！？どうして……！」

「私もいる」

「ルインさんまで……！」

「バグロスさんに連れてきてもらいました！そんなことより、時

間がありません！　すぐに蘇生処置をしますから、手伝ってください！

「あ……」

「助かる……？」

「助かります！　完全に死んでしまっただけじゃ、私の能力の性質上エリアルさんの蘇生は出来なかつたと思いますが……まだ生きてますから、なんとか……！」

「……体の再構築は私がやる。貴女は生命力の補填を」

「はい！」

ルインさんとアテナが、今にも死にそうなエリアルの身体を治している。二人の治療術はとても凄くて、どんどんエリアルの身体が元に戻っていく。

『ふい……。どうにか間に合ったかよ？』

「バグロスさん……」

大きな機体を揺らして、バグロスさんがやって来た。

「バグロスさん……もしかして、さっき……」

『おうよ。なんかヤバそうだったんでな。速攻陸に戻って助っ人を連れてきた。言っただろ？　俺は俺に出来ることをやるってよ』

「バグロスさん……」

『勝つだけじゃ、ハッピーエンドじゃねえんだぜ。嬢ちゃん。ま、おっさんのやることってのはいつでも脇役だがよ』

「ありがとう……バグロス」

エリアも、目に涙を浮かべてバグロスさんに頭を下げる。

『止してくれ。俺はただのアッシーに過ぎねえんだからよ。礼は、ルイン様たちに言ってやってってくれや』

「それでも、貴方がいなければ、私は大切な妹を失っていたわ」

「そうだよ！　ありがとう、バグロスさん！」

『へっ……ま、それならこれからも、俺を使ってくれ。それでチャラにしていってやらあ』

「もちろん！　よろしくお願いします。バグロスさん！」

その時、エリアルルの持っていた杖についていた、あの鏡が光った。思わず身構える私たちだったが、どうもその鏡から邪悪な感じはしない。

「……リチュアも、元々邪悪ではなかったんです」

「エリアルル!？」

アテナたちの治癒が効いているのか、それほど辛そうではない。それでも、まだ下半身が完全に再生しているわけじゃないから、エリアが心配そうにエリアルルを見る。

「あたしが手にしたときのリチュアは、終焉に犯されて、もう闇に染まっていたけど……リチュアの鏡は、元々は退魔の神器だったんです。でも……」

「……強い神聖は、一転するととてもない邪悪に変わる。彼女と同じ」

ルインさんが言う彼女とは、多分さだめのこと。そうか、だから……。

「……凜さん」

「は、はい!」

「図々しいお願いですけど……あたしも力にならせてください。罪を償う時間を、得るために」

「エリアルル……凜。私からもお願いするわ。この子の力は、きっと役に立つはずだから」

エリアにも、頭を下げた頼まれる。

「頭を上げてよ。そんなことしなくたって、断ったりしないってば!」

「じゃあ……」

「うん。エリアルルも、これからよろしくね」

「っ……ありがとっ、ございま……」

「エリアルル!？」

安心したのか、エリアルルはそこで気を失ってしまふ。

「……大丈夫です。失った下半身の再生も、ルインさんのおかげで

上手くいってますし、生命力も、徐々に回復しています」

アテナの診断に、皆で胸を撫で下ろす。

こうして、私は占いの通り、新しい力と仲間を手に入れることができたのです。

『あ、やっぱ！？ 燃料がもう殆ど残ってねえ！ あと片道分も残ってねえぞ……』

「ええ！？」

「ちょ！ なにしてんのよ！？」

『し、仕方ねえだろ。慌てていたから、燃料補給すんの忘れたんだよ！』

「そ、それじゃあ帰れないじゃないですか！ 食料もないのに！」

「……最後まで締まらない」

溜息混じりのルインさんの言葉が、慌てる私たちの間に空しく響くのです。

結局、さっき倒した『暗黒大要塞鯨』に『サルベージ』してもらいました。

第四期第三話「水底の儀水鏡」（後書き）

と言うわけで、エリアルを解放することが出来ました。え？ プ
ラシド？ 誰それ？ 知らんなあ。

……正直な話、この話を書いたときまだあのプラシドを知らなかつたのでラストのエリアルは真面目に偶然、たまたまです。そうしようと思ったわけでは……でも似てるよね。結末。次からは凜のデツキがりチュア+エリア、ついでにバグロスに。……え？ バランス悪い？ 気にしなさんな。

それでは、悠でした！

第四期第四話「真夜中の襲撃」(前書き)

四話目！ この話で、エリアルの人気急上昇。何故だ。いやまあ、この話だけじゃないんでしょうが、この話くらいしか活躍してないのに人気が……。

第四期第四話「真夜中の襲撃」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第四期第四話「真夜中の襲撃」

「ま〜いど〜ありい〜」

間延びした声と共に、アテナたちを乗せてきてくれた『暗黒大要塞』が、ルインから代金（やつぱりスロット方式だった）を受け取って海中に沈んで行く。

「……私は財布か」

「ま、まあまあ……」

「……何か釈然としない。彼からご褒美の一つや二つ貰わないと納得いかない」

「……その内な」

「言質はとった。楽しみにしている」

「まったくちゃっかりしている。……いや、当然か。今んとこ会計全部ルイン持ちだし。」

「……特に、そこでこそそこそ隠れている駄女神も、金はある筈」

「ギクツッ！」

「あ、あー！！ シャルナ今まで何処に……」

「い、いやーちよつち道に迷って……」

「シャルナがいてくれたらエリアルさんの蘇生、もつと余裕を持って出来たんですよ！」

「あ、あはは〜……ま、まあ最終的に助かったからよし……だめ？」

『だめ』

「唱和で駄目出し!?!」

駄女神……。

「うっわー最早威厳以前に人間としての尊厳危うい……」

「無駄に韻踏まなくていい。ついでにお前は人間じゃなくて精霊だ」

「……チツ!」

「ちょ、今舌打ちしたの誰!?!」

「いつも肝心な時に役に立たないんですから……」

「あ、アテナちゃん……それおねーさんのトラウマ、モロに抉ってるんですけど……」

……まあ、駄女神は今更どうでもいい 冷たい? 違う、妥当なだけだ。

「……兔に角、凜たちが無事でよかったな。妹さんも」

「は、はい……えとお」

「ん? ああ、俺はセツ。御堂切だ。よろしく」

「は、はいよろしくお願いします! こ、この度は色々とご迷惑をおかけしまして……」

「いや……俺は何ら迷惑被ってないから」

「はう……そ、その通りでした……あの、その……」

ん……何かこの反応は……。

「ちょいちよい、エリアルちゃん」

「は、はいっ?」

「お兄ちゃんは駄目だよ?」

「駄目ですよ?」

「……駄目」

……さだめたちが牽制にいった。

「はい。諦めます」

「はやっ!?!」

余りに早い敗北宣言に、牽制したさだめたちが逆に戸惑っている。……あの子は、基本的に秒単位で諦めるのよ。ネガティブ且つ根

性無し。根っからの負け犬だから」

「……エリア、もうちょっとオブラートに包まない？」

「事実だもの。思い立った次の瞬間には挫折するような子なの」

「挫折と未練と後悔と諦観と絶望に満ちた生き方してますゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメ……（以下エンドレス）」

「……なんというか」

「とことん自信がないんですね……」

「さだめとは真逆だね！」

「ああ。お前は常に自信たっぷりだな」

「ない胸を反らすさだめにジト目を向ける。」

「あ、でもあたしにも、自慢できることが、一つだけあります！」

「そうなの？」

「意外そうに尋ねる凜に、リアルは笑顔で頷く。」

「はい！ 土下座です！」

「……え、土下座？」

「あたし、第2434508回精霊界土下座王決定戦に於いて、長年不動のチャンプとして君臨していた精霊さんを負かして、電撃優勝を果たしたことがあるんです！」

「……………」

全員、無言。エリアのみ、額に手を当てて溜息を吐いていた。

「……ルイン、精霊界ってのは、一体何をやっているんだ？」

「……多種多様」

「便利な言葉使うね」

「っていつか、第2434508回って、どんだけ歴史ある大御所大会だよ……」

「……ところで、不動のチャンプって誰だったんですか？」

「カイエン様です。カイエン様の土下座フォームはそりゃあもう完成されつくしていて、一体どれだけ関係各所に謝罪の嵐を重ね続けてきたのかと……」

「シャ〜ル〜ナ〜!!」

「あ、あははははは……」

カイエンの謝罪の理由であろうシャルナに、アテナが詰め寄る。

「そのスピード、角度、美しいシンメトリーを描く形、誠意の伝わり具合、躍動感、どれをとっても素晴らしく、土下座評論家たちも思わず涙するほどの……」

「いや、土下座についての講釈はいいから。っていうか、何か。精霊界ってのは案外暇なのか」

土下座評論家ってなんだ。そんな職業が存在するのか。

「……ちよつと興味ありますね。エリアルさんは、そのカイエンさんに勝つ程の土下座の使い手なんですよね？」

「いやアテナ、土下座の使い手って……」

「我も興味があるな。クソ真面目に評論家が語るような土下座ってのは見てみたい気もする」

「エース……お前もか」

「あたしの土下座が見たい……と？」

「はい！」

「いや、土下座って謝ることもなくするもんじゃ……」

「わかりました！ それでは、不肖この土下座マイスターたるエリアルが、土下座の真髓をお見せいたしましょう！」

俺のツツコミは届かなかった。というか、土下座の話だとイヤに積極的だな。

「それでは、すう……すみませんでした!!」

エリアルは一瞬息を深く吸い込んだかと思うと、がばちよつ!

と地べたに跪いた。

「お、おお……」

「こ、これは……!!」

「あ、余りに美しい土下座フォームに、『いいよ。許してあげる』とありもしない罪を許してしまいそうになるぜ……」

エリアルは地面に額を擦りつけ、ふわり、とエリアルに遅れて地面に辿りつく衣服までもが、完全なシンメトリーを構成する程の完

成度。更に、エリアルから放たれる弱者のオーラ。それが俺たちを圧倒的優位にありながら追い詰められたマンボウのような気分にならせて……。

「……さ、流石セツさん。精霊界の評論家にも劣らぬ、素晴らしい評論です。セツさんには、土下座評論家としての天性の才能があるんですね……」

「……そんな才能はいらん」
「無駄スキルに追加だね。名付けて、『土下座の美しさを見極める程度の能力』！」

「かなぐり捨てたくなるくらいの無駄スキルだな」

「何故ですか？ 精霊界でも、相当に榮譽ある職業ですよ？ 土下座評論家」

「精霊界はどこへ行こうとしているんだ……」

「……ちなみに、私も資格を持っている。土下座評論家」

「ルイン、お前まで……」

「……女神だから、土下座を見る機会は多かったから、必然的に得た資格。……別に、欲しくはなかった」

「だろうな。」

「……ちなみにエリアル。貴女がいない間に、王座奪還されているから、貴女はもうクイーンじゃないわよ」

「なになっ!?!?」

「カイエン……返り咲いちゃったのか……」

「あ、あたしはもうクイーンじゃない!?!?」

「いや、絶望的な表情の所悪いが、そもそも土下座のクイーンってのは決して誇れるものでも、目指すものでもないと思うぞ」

「むしろ、積極的に避けたい称号だろう。」

「……おい、いつまで土下座について語るつもりだ？」

「剣士の呆れ果てたような声に、俺たちは揃ってハツとする。そうだった。こんなことしている場合じゃない。」

「……土下座マニアという聞いたこともないキャラに、意識を持つ」

て行かれたのが原因か」

「すみませんでした！」

「や、やめろ……土下座をするんじゃない！ あ、ああああああああ許す！！」

バグロスが悶えながらエリアルを許している。というか、あれは既に洗脳の域に達しているのでは……。

「おい」

「おっとと。悪い。じゃあとりあえず、これから先の動きだな」

「またもや話がずれかかったところを剣士に諫められ、軌道修正する。」

「とりあえず、今日はこの海の家で休んで、明日王都に向かおう。」

「ジャックたちもそこに居る筈だから、拠点にはピツタリだろう」

「ネイキッドもいる筈だな」

「ああ。そして、城で旅立ちの準備を整えてから、さっき話した通り、冥界に向けて出発しよう」

「道中の足は……」

ルインが奴に目を向ける。やめろ。

「よろしくなつ、兄さん！」

「他の手段を探そう。まだ手はある筈だ！」

「これからの道中、ずっとコイツがついてくるとか……。」

「俺は、死ぬかもしれん……」

「お兄ちゃん、大げさ」

「大げさなもんか！」

「でもセツ、実際それしかないですよ？」

「ぐ、ぐうう……」

困ったようなアテナの言葉に、唸りながら思考する。

「……くそ。仕方ない」

結局、俺が折れるしかなかった。コイツと旅とか……気が休まる暇がなさそうだ。

「じゃあ、今日はこの海の家で一夜を明かすことになるわけだが……」

…」

ぐるり、とメンバーを見渡す。

「バグロス、休める部屋はいくつある？」

「あん？ そうだな……大部屋と中部屋が一つずつ、小部屋が二つ
つてところか。その座敷でも寝れなくはねえが、朝になるころに
や、体中ベツタベタだから、おススメはしねえな」

「内大部屋一つはバグロスが使うわけだ。とすると……」

メンバーは男性陣が俺、剣士、それにサイクロイドとバグロスで
四人。女性陣がさだめ、アテナ、ルイン、エース、シャルナ、凜、
エリア、エリアルで八人。

人数の多い女性陣に中部屋を使って貰うとして……。

「バグロス。各部屋には何人泊まれる？」

「そうさな。大部屋でも、詰めて四人だ。中部屋が三人。小部屋は
かなり押し込んで二人だな」

元々、泊まることを前提に作られていないのでそんなものらしい。
「それは……困ったな。部屋数が全然足りない」

「心配すんな。俺は海中でスリープモードにしておく。それで大部
屋を使える。それでどうだ？」

それでも、女性陣が一人あぶれて……あ、そうか。

「シャルナが外で寝れば解決じゃないか」

「ちよいと坊や」

「それでいいです」

「アテナサーン？」

「部屋割を決めましょう」

「ちよ、ガン無視とか！」

「そうだな……各々、希望はあるか？」

シャルナの抗議を黙殺し、俺は全員に話題を振る。全員、エリア
ル以外は心得ているようで、あっさりとシャルナの存在は忘れ去ら
れる。

「さだめはお兄ちゃんと小部屋に……」

「却下だ。男女は分ける」

「……エリアルと私は同室でいいわ」

「あ、じゃあ私も同室で」

エリアルとエリアル。そして凜で中部屋。となると……。

「私とさだめさんとルインさん、エースさんで大部屋ですね」

「……ちい」

さだめが何故か舌打ち。コイツ……。

「……お互いに相互監視体制もとれる。妥当なところ」

ルインの言葉が全てだな。アイツ、やっぱり夜這いかけるつもりだったか……。

「……あっさり決まったな。じゃあ男は適当でいいだろ。じゃあ、各自解散。ゆつくり休もう」

まだぎゃーすか吠えているシャルナを無視し、俺たちは海の家に入ってしまった。

「……おい。え、なに？ ホントにおねーさん野外なの？ ハネが塩塗れになるから出来れば遠慮したいかなーっなんて……お願い待って無視しないで〜！！ エリアルちゃん土下座教えて！ そしたらほら、謝るから！ おねーさん謝っちゃうから！ 偉い女神さまが土下座しちゃう！ だから野外は、野外は〜！！」

バタム。

「……本当に締め出されるとは……いいわよいいわよ。天界に帰る帰っちゃうからな！ 偉い女神さま、帰っちゃうわよ！ それでもいいのか〜！！」

反応なし。

「……帰ろ」

溢れる滴をそのままに、シャルナはトボトボと帰って行った。

深夜。

どうにも眠れなかった俺は、水の一杯でも飲もうと、海の家厨房に居た。

「んくつ……ふはつ。ん……？」

コップに注いだ水を飲み干し、ふと外を見る。

「これは……」

外に出て、そこに俺は、満天の星空と、星空が映り込む精霊界の海を見た。

「これが、精霊界の夜景……。人間界じゃ、とても見られるもんじやないな」

余計な光のない、大自然の星空だ。いつか旅行した、田舎の山奥。その星空だ。

「……守るぞ。世界を。この星空を」

そう決意した、その瞬間。

「危ねえ兄さん！」

「っ！？」

サイクロイドの声と、体が引つ張られる感覚。同時に、俺の今まで居た場所に振り下ろされる剣。

「っなんだ！？」

「ギチチッ！」

目を向けると、そこに居たのは騎士の格好をした甲虫。

「まさか……『インセクトナイト甲虫装甲騎士』か！」

「大丈夫かい、兄さん」

「ああ、助かった。でもお前、なんでここに？」

「トイレにでも行こうと起きたら、兄さんが出ていくのが見えたんでな。興味持って追いかけてみた」

「……トイレ行くのか。この二輪」

一体何処から何を出すというのだろうか。だが今は、そんなことを詮索している場合じゃない。

「ギチチッ！ さあ、デュエルを始めるぞ！」

インセクトナイトが、その腕にデュエルディスクを構える。

「ま、待て！ 俺は今、デッキを持っていない！ ディスクも！
だから、一端取りに行かせる！ そうしたら、いくらでも相手をし
てやる！」

「ギチチツ！ それは出来ない」

「何故だ！」

「なぜなら、ここには既にデッキがあり、デュエルディスクもある
からだ。そうでなければ、このフィールドは成立し得ない！」

俺は、周囲に広がった黒い炎を見る。

「だ、だが……どこにデッキなんて……」

「兄さん、兄さん」

「……なんだボロチャリ」

「デッキならあるぜ。ディスクも」

「……何処に」

「……」

サイクロイドが何処からかデッキを取り出し、ハンドルの辺りが
変形してディスクの形になる。

「……おい、まさか」

「兄さんは知らねえのか？ 精霊ってのは大抵、自分のデッキを持
っているもんだぜ？」

「そんなこと……いや、そういえば」

希冴姫もルインも、エースも持っていた。思い返せばネイキッド
もだ。

「ちょっと待て。じゃあなにか、このデッキは……」

「俺っちのデッキ」

「……ビークロイドデッキか？」

「サイクロイドデッキよ！」

「……」

終わった……。

「残念、俺たちの冒険は、ここで終わってしまった……」

「おいおい兄さん。そりゃちょっとひでえぜ」

「この、命がかかった大一番、特に専用サポートカードもないサイクロイドデッキでデュエルするとか……」

「見くびって貰っちゃあ困るぜ兄さん。見なよ」

「なに……?」

サイクロイドに手渡されたデッキを見る。

「これは……」

「人間さんたちが使っただけが、精霊じゃあねえんだぜ？ 人間には知らないカードも、俺たちたちなら持っている」

「……これなら。わかった。お前の力を借りる。手伝えボロチャリ！」

「おうよ！ 任しときなあ！」

まさか、精霊界最初のデュエルが、このボロチャリとの共同戦線になるうとは……。

「俺っちは思っていたぜ。いつか兄さんと組んでデュエルするっとなあ」

「……お前のその懐きようはなんなんだ。まあいい」

俺は律義に待っていてくれたインセクトナイトに顔を向ける。

「待たせたな。不本意だが、コイツのデッキを使う」

「ギチチツ！ いいだろう。かかって来い。デュエル！」

「自転車に跨りながらデュエルすることになるとはな……バイクならまだ格好ついたんだろうが……」

「細けえことは気にすんなって。ソイツは未来までとっときなあ！」

「……そうさせてもらう。デュエル！」

こうして、俺の精霊界最初のデュエルが始まった。

第四期第四話「真夜中の襲撃」(後書き)

ね。
次回、まさかのサイクロイドデッキ。……オリカは使いますが

それでは、悠でした！

第四期第五話「バイクロイド召喚！ フルスロットル！」（前書き）

記念すべき二次創作史上初めてであろうサイクロイドデッキです。
意外と強くなりましたが。

第四期第五話「バイクロイド召喚！ フルスロットル！」

アルカナ〜切り札の騎士

第四期第五話「バイクロイド召喚！ フルスロットル！」

「セツ！」

「お兄ちゃん！」

外が騒がしいことに気がついた私たちが起きて外に出た時には、既にデュエルは始まっていました。

「おいおい、セツの奴、まさかバイクロイドで戦う気か？」

「ええ！？」

「だって、セツのデッキはここにあるし……」

「お、お兄ちゃん……」

私たちが心配して見守る中、セツがカードをドローして、デュエルが始まりました。

「俺の先攻、ドロー！ 俺は『サイクロイド』を守備表示で召喚！
カードを二枚セツトして、ターンエンドだ！」

『サイクロイド』 DEF1000

『おっしやあ！ 早速行くぜえ！』

「ギチチツ！ ワタシのターン、ドロー！ ワタシは『甲虫装甲騎士』を攻撃表示で召喚。永続魔法『大樹海』を発動。『大樹海』は、

フィールド上の表側表示で存在する昆虫族モンスターが破壊された時、破壊されたモンスターと同じレベルの昆虫族モンスターを手札に加えることができる！」

『甲虫装甲騎士』 ATK1900

「面倒なカードを……」

「更に魔法カード『ダブルアタック』を発動する！」

「『ダブルアタック』!?」

「ギチツッ! 『ダブルアタック』は手札からモンスター一体を捨てることにより、フィールド上に存在するそのモンスターよりもレベルの低いモンスターに、連続攻撃能力を付加する魔法カード。ワタシは手札から『鉄甲装甲虫』メタルアーマードバグを捨てて効果発動！」

マズイな……『甲虫装甲騎士』の攻撃力は1900。守備力1000の『サイクロイド』じゃどうしようもない。

「ギチツッ! バトル! ワタシ自身で、『サイクロイド』に攻撃! 『インセクトスライサー』!」

「トラップ発動『スーパージャージ』! 俺のフィールドに、ロイドと名のつくモンスターのみが存在するとき、相手モンスターの攻撃宣言時にカードを二枚ドロウする!」

「ギチツ! だが、ワタシの攻撃は止まらない! その弱小モンスターを斬り裂け!」

『うおおおおっ!?!?』

「くっサイクロイド!」

「更に、『ダブルアタック』の効果でもう一度続けて攻撃! 『インセクトスライサー・ツヴァイ』!」

「ぐあああっ!?!?」

セツLP2100

「ギチツッ! ワタシはカードを一枚セットしてターンエンドだ!」

「エンドフェイズにトラップカード『奇跡の残照』を発動する!

このターン戦闘で破壊されたモンスター一体を特殊召喚する! 戻って来いボロチャリ!」

『サイクロイド』 DEF1000

『サンキュ！ 兄さん！』

「俺のターン、ドロー！ 魔法カード『融合』！ 俺は手札の『サイクロイド』とフィールドの『サイクロイド』を融合する！ 融合デッキから『ペア・サイクロイド』を融合召喚！」

『ペア・サイクロイド』 ATK1600

『俺っちの真の力を見やがれ！ 変形合体！』

「ただ連結しただけだろ……バトルフェイズ！ 『ペア・サイクロイド』で攻撃する！」

「ギチツ！？ 『ペア・サイクロイド』の攻撃力は1600。ワタシには敵わんぞ！」

「わかっているよ！ 『ペア・サイクロイド』の効果発動！ 攻撃力を500ポイント下げること、相手プレイヤーにダイレクトアタックすることができる！ 行け！ ボロチャリ！」

『行くぜ！ ダブルサイクリング！』

「ギチチツ！ そうはいかない。トラップカード『和睦の使者』！

戦闘ダメージをゼロにする！」

サイクロイドの攻撃が、修道服の女性たちに阻まれる。

『ちい、ご婦人方にあ攻撃できねえな』

「仕方ない。カードを二枚セットして、ターンエンドだ！」

「ギチチツ！ ワタシのターン、ドロー！ バトルする！ ワタシ自身で、そのポンコツを再びスクラップにしてくれる！ 『インセクトスライサー』！」

「速攻魔法『融合解除』！ 『ペア・サイクロイド』を融合デッキに戻し、墓地から二体の『サイクロイド』を守備表示で特殊召喚する！」

『サイクロイド』 DEF1000

「ならば、片方のポンコツを鉄くずに変えてくれる！」

『甲虫装甲騎士』の剣が、片方の『サイクロイド』を切り裂く。

「カードを一枚セットしてターンエンド！ ギチチツ！ いつまで

そんな雑魚に拘るつもりだ？」

インセクトナイトの言葉に、俺とサイクロイドは顔を見合わせ二ヤリと笑う。

『いつまで？』

「決まってる！」

『勝つまでさ！』

最後は声を揃えて叩きつける。

「俺のターン、ドロー！」

「何だかんだでセツとサイクロイドさんって、仲いいですよね？」

「相性いいよね。ポケッツコミ完璧」

「……それ、セツには言っておくよ。きつと凹むぞ」

「俺は手札から魔法カード『チューンアップ』を発動！俺のフィールド上に、攻撃力1000以下の機械族モンスターが存在する場合、デッキから『チェンジギアモーター』を特殊召喚することができる！」

『チェンジギアモーター』 ATK1000

「更に、魔法カード『機械複製術』！デッキから攻撃力1000の『チェンジギアモーター』を二体、守備表示で特殊召喚！」

『チェンジギアモーター』 DEF0

俺のフィールドに、一抱えほどの大きさを持つモーターが三体召喚される。

「ギチチツ！そんな雑魚を並べたところで、何の意味がある！？」

「コイツは、雑魚じゃない！『チェンジギアモーター』は、攻撃力1000未満の機械族モンスターに、ユニオンすることができる！」

俺は『サイクロイド』に『チェンジギアモーター』をユニオン！
「ユニオンモンスターだと!？」

サイクロイドに、『チェンジギアモーター』が装備される。

「『チェンジギアモーター』は、装備モンスターの攻撃力を、80
0ポイントアップさせる!『チェンジギア』!」

『サイクロイド』 ATK800 1600

『っしやあつ!』

ドルルルルつと音を立てて、サイクロイドが強化される。

「ギチチツ! だが、それでもまだワタシの攻撃力には及ばない!」

確かに、攻撃力が800上がったても、サイクロイドの攻撃力は1
600。1900の『甲虫装甲騎士』には敵わない。

「だが!『チェンジギアモーター』第二の効果! バトルフェイズ
中のみ、装備モンスターの攻撃力を、更に800ポイントアップさ
せる!『チェンジギア・セカンド』!」

『サイクロイド』 ATK1600 2400

『俺っちを舐めるなよ!?! クソ虫野郎!』

「攻撃力、2400だと!?!」

「行くぞ!『サイクロイド』で、『甲虫装甲騎士』を攻撃!」

『おおおつ! サイクリング・アクセル!』

サイクロイドの前輪が、『甲虫装甲騎士』を砕く。

「ギチチツ!?! こんなポンコツに、ワタシが!?!」

インセクトナイトLP3500

「クツ!?! だがこの瞬間『大樹海』の効果が発動する! ワタシ
はデッキから『ジャイアントワーム』を手札に加える!」

「『チェンジギアモーター』第二の能力を使用した場合、攻撃した
モンスターは守備表示となる。カードを一枚セットして、ターンエ
ンド」

『サイクロイド』 DEF1000

『ははっ! すごいや兄さん! まさか初見で、俺っちのデッキを
ここまで使いこなすとはよ!』

「さつき軽く確認したからな。速読術も、瞬間記憶術も、中途半端にだが修めている。それに、こういうタクティクスを考えるのは得意中の得意だ」

「ギチチツ！ ワタシのターン、ドロー！」
相手の手札は四枚。フィールドには『大樹海』とリバーズカードが一枚のみ。ここからどう展開してくる？

「ワタシは手札から魔法カード『天使の施し』を発動！ デッキからカードを三枚ドロし、二枚墓地に捨てる！ そして、墓地に存在する二体の昆虫族モンスターをゲームから除外し、手札から『デビルドージャー』を攻撃表示で特殊召喚する！」

『デビルドージャー』 ATK2800

『ギシャアアアアアアアツ！！』

『うおっ！？ なんじゃああのデカブツは！？』

「まだだ。ワタシは更に墓地の昆虫族をゲームから除外し、『ジャイアントワーム』を攻撃表示で特殊召喚！ そしてこれでゲームセットだ！ リバーストラップ『異次元からの帰還』！ ライフを半分支払い、ゲームから除外されているモンスターを全て特殊召喚する！」

インセクトナイトLP1750

「……ちっ。やっぱりそのカードか……」

メタルアーマードバグ

「ワタシは『鉄装甲甲虫』、『甲虫装甲騎士』、『ハウリングインセクト共鳴虫』を攻撃表示

で特殊召喚！」

『鉄装甲甲虫』 ATK2800

『甲虫装甲騎士』 ATK1900

『共鳴虫』 ATK1200

「バトルフェイズ！」

「来るか！？」

「まずはワタシ自身で『サイクロイド』を攻撃！ 『インセクトスライサー』！」

「っユニオンモンスターを装備したモンスターは、一度だけ戦闘破

壊をまぬがれることができる！」

インセクトナイトの攻撃を躲し切れず、『サイクロイド』に装備された『チェンジギアモーター』が破壊される。

「ならば『共鳴虫』で追加攻撃！」

『ぐおっ……！』

「サイクロイド！」

『心配ねえ！』

「ギチチツ！ 続いて『メタルアーマードバグ鉄甲装甲虫』と『ジャイアントワーム』で二体のモーターを蹴散らす！」

俺の場の『チェンジギアモーター』が押し潰され、食い破られる。

「トドメだ！『デビルドージャー』でプレイヤーをダイレクトアタック！」

『兄さん！』

「セツ！」

「お兄ちゃん！」

「まだまだ！ まだ終わらない！ トランプカード『ガード・ブロック』！ ダメージを無効にしてカードを一枚ドロウする！」

「ギチツ！？」

「トラップカード『異次元からの帰還』によって特殊召喚されたモンスターは、ターン終了時に再び除外される、だろ？」

「ギチ……だが、ワタシは速攻魔法『神秘の中華なべ』を発動。『メタルアーマードバグ鉄甲装甲虫』をリリースしてその攻撃力分のライフポイントを回復する！」

インセクトナイトLP4550

「ギチチツ！ このターンでの決着はつかなかったが……貴様のフィールドにモンスターはなく、伏せカードも一枚。手札も残りは一枚。ワタシの勝ちだ！」

「……なあ、お前は どうして、俺たちを襲って来たんだ？」

「ギチチツ！ 決まっている！ ワタシは力を得たのだ！ 偉大な終焉の闇に見染められてな！ 故に、その命により、貴様を殺す

！
「インセクトナイトの言葉は、まあ予想通りではあった。このタイミングで襲ってきたのだから、馬鹿でもわかる。」

「……殺せねえよ。お前なんかじゃ、俺は」
「なんだと？」

「力を得たつて言ったな？　だが、俺にはお前が、力を持っているようには感じられない。間違いなく、海中から感じたエアリアルの方が大きかった」

あの時、凜がデュエルしていたであろう時は、海が荒れ、天候すらも崩れていた。海中に居た凜たちは知らなかっただろうが……：終焉の力は、本来それほどに強い。

「噛ませ犬だよ。お前」

「っ 貴様！」

「精霊界に来た、俺たちに対する、ユーキちゃんからの挨拶。そんなところか。じゃなきゃ、お前程度の奴が刺客として送り込まれてくる筈がない」

「黙れ！　そんな台詞は、ワタシを倒してから言え！　現に今、貴様のライフはワタシの半分以下！　フィールドや手札も、絶望的な状況ではないか！」

「……そうか。わからないか。なら、見せてやるよ。俺のターン、ドロー！」

俺は、ドローしたカードを確認して笑みを浮かべる。来た！

「このカードを待っていた！　マジックカード発動！『ジャンク・リサイクル・フュージョン』！」

「何だそれは!？」

「『ジャンク・リサイクル・フュージョン』は、融合デッキから機械族の融合モンスター一体を選択し、その融合素材モンスターを二組、墓地から除外することで、そのモンスターを融合召喚することができる！　俺は、墓地に眠る『サイクロイド』と『チェンジギアモーター』二組をゲームから除外して、融合する！」

「おっしやああああっ！！ 来た来たあ！！」

スクラップ状態のサイクロイドとモーターの、使える部品をリサイクルし、融合素材とし流用する『ジャンク・リサイクル・フュージョン』。これが、俺の切り札！

「轟けアクセル！ 融合召喚！ 爆走開始！ 『バイクロイド』フルスロットル！」

ギャリイイイイイイツ！！

オートバイのような形に進化したサイクロイドが、ドリフトしつつ飛び出していく。

『バイクロイド』 ATK2400

『テンションマックス！ 行けるぜ兄さん！』

「これで、俺の勝ちだ！」

「ギチチツ！ 馬鹿め、ソイツの攻撃力は精々2400！ 『ジャイアントワーム』を破壊するのが精一杯だ！」

「そいつはどうか？ リバーズカード発動！ 『ゲットライド！』」

「なにっ!?!」

「俺は『ゲットライド！』の効果で、墓地の『チェンジギアモーター』を『バイクロイド』に装備する！」

「ふん、血迷ってルールすら失念したか!? 『チェンジギアモーター』は、攻撃力1000以下のモンスターにしかユニオンできない！」

「ところがどっこい！ ここで『バイクロイド』の効果発動！ このカードは、機械族のユニオンモンスターを、条件を無視してユニオンすることができる！」

「ギチチツ!?!」

「行くぜ兄さん！ ギアチェンジ！」

「ユニオンされた『チェンジギアモーター』の効果発動！ ユニオンしたモンスターの攻撃力を800ポイントアップする！ 更に、バトルフェイズ中追加で800ポイントアップ！」

『バイクロイド』 ATK 2400 3200 4000

「攻撃力……4000!？」

「俺も驚いたぜ。まさかこの二輪が、サイバー・エンドクラスの潜在能力を持っているとはな!」

「ギチツ! だが、まだだ! まだ『デビルドージャー』が破壊される程度では……」

「ふん、血迷って俺の手札も見えなくなったか？」

「ギチツ!？」

俺がさっきの奴の言葉を返してやると、奴はハツとして俺の手札を見る。

「ギチツツ!？ そ、それは……」

「ああ。終わりだ。速攻魔法『リミッター解除』! 俺の場の、機械族モンスターの攻撃力を二倍にする!」

『バイクロイド』 ATK 4000 8000

『おおおおおつ! つしゃあ! ぶつ飛ばすぜ!』

「ば、馬鹿な……このワタシが……無死虫団のエリート兵士たるこのワタシが……こんな弱小に……!」

「やっぱり、噛ませ犬だったな。エリートさん(笑)」

『今度は、俺たちのレンタサイクルタクシーをよろしく……そう、来世でなあああつ!!』

「バトルフェイズ! 『バイクロイド』で、『ジャイアントワーム』を攻撃! 『アクセル・ウイリー』!」

『アクセル・ウイリー!!』

大地が抉れるほどの高速回転をしたタイヤが、『ジャイアントワーム』を蹴散らし、奥に居たインセクトナイトすらも消し飛ばす。

「ギイイイイイツ!？」

インセクトナイトLPO

パキン。

駒が一つ潰えた。

「……流石、セツくん。あの程度じゃ、挨拶にしても失礼だったかな？」

クスクスと忍び笑いが漏れる。

「……リチュアも負けちゃったみたいだし、やっぱり強いなあ、セツくんたちは」

闇の中に浮かぶセツたちをみて、終焉の闇は一層笑みを深めた。

「セツ〜！」

「お兄ちゃん、怪我はない？」

「ああ、全然平気だ」

「良かった……」

怪我一つない姿を見せると、アテナたちは安堵の息を漏らした。

「でも驚いたな。何でまた、サイクロイドのデッキを？」

「外で星を眺めていたんだ。デッキもディスクもないところを、今の奴に襲われてな。コイツのデッキしかなかったから、仕方なく」

「え〜星見？　なんでさだめを呼んでくれなかったの？」

「最初は水を飲むだけのつもりだったんだ。偶然星空が目に入っただけ」

「……確かに、精霊界の星空は綺麗」

「そうですね。人間界だと、星が少なくて悲しくなっちゃいます」

「どちらにしても、護衛もなしに一人でうるつくな。今、単独で行動するのは自殺行為だ。我か、ルイン殿あたりに声をかけてからでなければ……」

「へえ、心配してくれているのか？」

「ば、馬鹿言え！」

「でも驚いたよ。サイクロイドって、結構強かったんだね」

凜がそう言ってサイクロイドの顔（ハンドル？）を覗き込む。

「あつたり前じゃねえか！ 俺たちは、国家転覆を狙う忠義の二輪だぜ！？」

「……国家転覆を狙っている時点で忠義もクソもないだろ」

「それにしても、そういう時のために外に最大戦力のシャルナを残しておいたのに……何処行ったんですかシャルナは……」

「え、そういう意図があったの？ さだめてつきり、嫌がらせか何かかな」と

「何言ってるんですか！ シャルナに嫌がらせなんて、するわけないじゃないですか！」

「いや、正直その言葉には説得力がないかと……」

「……せめて、その事は口頭で言っておけばよかったんじゃないか？ あの駄女神、今頃どつかで不貞寝でもしているんじゃないか？」

「あくありそう。シャルナって、結構拗ねること多そうだし」

「そうなんですよ。ホント、ちょっとしたことでも拗ねてやる気なくすので……」

アテナがブツブツと愚痴り出すのを横目で見ながら、俺は溜息を吐く。

「……まあ、アテナの口撃力が無自覚に高いのも、拗ねる理由の一つだと思っけどな」

今頃どうしているやら。次は、もうちょい優しく扱ってやるとしよう。

……で。

「ぶえつくしゅっ！ うう……まだ夜中じゃないの。誰かおねーさんの噂でもしているのかしらね？」

大方の予想通り、駄女神ことシャルナは、天界の自室で、自棄酒をして不貞寝していた。

「うう……何さ何よ皆して〜あたしだって好きで役立たずやっているわけじゃ……そりゃあ、ちよつと間が悪かったりで失敗も多いけど……もういい！ 寝てやる！ 今から十二時間睡眠してやるわ〜」

今まさに、間が悪いことで評価が下落の一途を辿っていることに気づかないまま、シャルナは再び寝床に潜り込むのであった。

第四期第五話「バイクロイド召喚！ フルスロットル！」（後書き）

今回使ったオリカは「チューンアップ」「チェンジギアモーター」「ジャンク・リサイクル・フュージョン」「バイクロイド」ですね。他にも、原作オリカから「ペア・サイクロイド」が。ホントは補助輪も使いたかったんですけど、展開上、使えませんでした。それでは、悠でした！

第四期第六話「銀髪騎士のホントのココロ？」（前書き）

六話目。

改訂前は「昔語り 御堂兄妹」だったんですが、まとめました。

消すには惜しかったのでデータ自体は残ってますが。エースさん爆発の回。

第四期第六話「銀髪騎士のホントのココロ？」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第四期第六話「銀髪騎士のホントのココロ？」

真夜中の襲撃から数時間後。

あれから、襲撃を警戒せずに眠るのは自殺行為だと判断し、少し早いが王都に向けて出発することにした。

バイクロイドにも変形できるらしいサイクロイドだが、頑張っても定員は3人がいいとこなので、結局徒歩での旅だ。

「……お前、ついてくる意味殆どないな」

「そう邪険にしないでくれよ。一緒に戦った仲間じゃねえのよ」

「あー、はいはい。言ってるボロチャリ」

まあ、緊急時にアテナたちを乗せて走って貰えばいい。そういう意味では役にも立つだろう。

「しっかし、王都ってのはまだ着かないのか？ 何度か休憩を挟んでいるとはいえ、もう昼だぞ」

うんざりしたように愚痴る剣士の言う通り、もう太陽はほぼ真上までこようとしている。

「王都から我らのいた海岸までは近くない。だが、我の記憶が正しければ、後半日はかからないだろう」

要するに、あと半日近くはかかるわけだ。

「……けど、お腹空きましたね」

「そうだね。私もお腹空いた。最後に食べたの何時だった……？」

「多分、さだめはかき氷……」

「凜、お前は散々食ってただろうが……」

「アテナ、凜、さだめの歳下組も、少し大変そうだ。」

「……休憩を挟んだとはいえ、確かに少し強行軍過ぎたな。おいボロチャリ。バイクモードになれ」

「ん？ 別に構わねえが何処行くんだい？」

「食料を調達してくる。皆は、ここで休憩していてくれ」

「食料調達？ ならさだめも……」

「着いてこようとしたさだめを押し留める。」

「いや、エースと一緒に来てもらう」

「我が？」

「ああ。お前なら、食べられる野草とか、そういうのもわかるだろう？」

「確かに、騎士の教練過程にサバイバルもあるから知っている。しかし、よくそんなことがわかったな」

「騎士だの兵士だのが、そういう知識ゼロなわけないだろ」

「……いや、希冴姫の奴なんかは知らんと思うぞ。一般からの叩き上げである我と違って、奴は貴族騎士の様なものだからな。そんな泥臭い知識、知らんだろう」

「確かに、希冴姫がそこらの野草摘んで食べるところは想像できないな。」

「でも、お兄ちゃん大丈夫？ 疲れてない？」

「心配すんな。こちとら、誰かさんのおかげでタフさだけは自信があるんだ」

「う、皮肉っばい……」

「よし。それじゃ頼むぞ」

「あいよ。モーターセット！ 変形合体！」

サイクロイドが掲げたカードから『チェンジギアモーター』が現れ、サイクロイドと合体する。

「変形完了！ 乗りな兄さん、エースの姐さん！」

「……姐さんはよせ」

エースも、俺と同じくサイクロイドのことは苦手らしい。姐さん呼ばわりに、物凄く嫌そうな顔をしている。

「じゃあ、行ってくる。何かあったら水鏡で連絡、もしこの場に留まっていられなくなったら、移動して安全なところで落ち合おう。まあ、すぐに戻ってくるつもりではあるから、大丈夫だとは思うけど」

「しっかり体を休めておけ。いざというときは、躊躇うことなく逃げろ。退却することは恥ではない」

「わかっています。セツたちこそ、気をつけて」

「ああ」

道端に座り込み、各々休憩の姿勢をとるメンバーに頷いてから、俺とエースはバイクロイドに乗りこむ。

「エース、運転は？」

「……悪いが出来ん。機械は苦手だ」

「じゃ、俺が運転だ。しっかり捕まっとけ」

「ああ。というか、お前は運転できるんだな」

「普通の乗り物は一通り。飛行機や船は無理だが」

そんな会話をしながら跨る。俺の腰にエースの腕が回される。

「……役得。羨ましい」

「なっ!?!」

「エースさんもさあ、なんかユーキさんみたく、妙にいいところ取りするよねえ。っていうか、立ち位置的にも希冴姫さんポジションだし、キャラ的においし過ぎる気がする」

「い、意味がわからん! ほら、さっさと出発しろ!」

「はいはい。まあ後ろに乗っているのがエースじゃ、背中感触は期待できそうになっ!?!」

「はっ倒すぞ!?!」

「……もう殴ってるだろ……運転中はやめろよ。クラッシュしてもいいなら話は別だが」

「貴様がへんなことを言わなければいいだけの話だ」

エースの文句を聞き流し、アクセルを回す。

「行くぞ、バイクロイド」

「おうよ！ いきなりフルスロットル！ 全開だぜい！！」

「うわ馬鹿勝手にアクセル全開にすんなっ！？」

「ひゃあああっ！？」

ドオンッ！！

妙に上擦った悲鳴と共に抱きついて来たエースの身体が押しつけられる。しかし、そんなことを考える余裕もなくバイクロイドは急発進。

「あっ！ お兄ちゃん！」

さだめたちの声を遠くに置き去りにして、俺とエースは遠くに見える森へとすっ飛んで行くのだった。

アテナたちから別れて、俺とエースは街道から少し離れたところにある森へと足を踏み入れていた。バイクロイドは、森の中まで入って来られなかったので、入口で待機だ。……まあ、物凄く不満そうだったが。散々ぶー垂れていたが。

「手近なところで食料を調達するとなると、やはりこの森だろう」

木漏れ日の降り注ぐ、繁った森だ。きのこや木の実、野草など、自然で育まれた恵みが多く取れるらしい。

「このまま奥まで進むぞ。その方が安全だ」

「奥の方が安全？ どういうことだ？」

普通なら、奥まで進むにつれて危険が増していくものだと思った俺が、エースに尋ねる。

「そうだな……確かに、普通の森ならそうだろうが、この森の奥は、遙か古から変わらぬ聖域がある。お前たちには『古の森』と言えば分り易かるっ」

『古の森』……フィールド魔法で、戦闘を行ったモンスターを破壊する、争うことを許さない森……なるほどな。

「つまり、その古森までいけば、俺たちを襲う獣や昆虫はいなくなるってわけだ」

「そういうことだ」

そこで、気になっていたことをエースに尋ねる。

「……これ、獣道だよな。それも、かなり大きなものだ。クマでもいるのか？」

「さあな。この精霊界には、人間界では想像もつかんほど巨大な獣もいる。もしかしたら、昆虫やもしれん」

「……人二人が楽に通れる獣道を作る昆虫か。ぞつとしないな」

「何を言う。中には森を丸ごと潰しかねん程巨大な昆虫とている。その程度で怯えるな」

別に怯えているわけではなかったが、妙に勝ち誇った顔のエースが微笑ましく口を挟まないことにした。こんな時にまで藪を突く必要はないだろう。タダでさえ、森に住む精霊たちを刺激するのは避けたいのだから。

「……おい」

「が、どうやら騎士様はそれが気に食わなかったらしい。」

「なんだ？」

「その……ああもうなんだお前は！？ 移動中は散々弄んでおきながらー！」

「……は？」

突然爆発したエースに、俺は困惑する。

「いきなり殊勝になるな！ 我は、お前に嘲笑の視線を向けたのだぞ！？ その……もうちょっと相応しい反応があるうー！？」

「えーと……とりあえず落ち着け馬鹿」

「ば、馬鹿とは何だ！？ わ、我は馬鹿ではないっ」

「いやなんでニヤけてるんだお前は」

コイツ、なに『そうだ、その反応だ！』みたいにしてるんだろう。

「なんだ、お前アレか、Mなのか？ 罵られないと満足できない体になっっちゃったのか？」

「？ えむ、とはなんだ？」

「ああもうやりにくいなあこの純真騎士！」

「そんな、きよとんとした眼でこっち見んな！ いたたまれないよ！ なんか、そんな反応されると、俺がいたたまれないよ！」

「その意味は、さだめの奴にでも聞け！」

「アイツなら、それこそ嬉々としてレクチャーしてくれるだろう。」

……余計な知識も大量に喋り倒しそうだが。

「……要するに、あまり健全ではない意味なのだな？」

「……お前がさだめに抱いているイメージが良くわかったよ」

「いや事実なわけだが。兄としては、妹のイメージが非健全で固定されているこの状況は、事実だとしても微妙に安心できない。」

「とにかく、争いを許さないような森に足を踏み入れる俺たちが、ここで争ってどうすんだってことだよ」

「……なんだ。張り合いのない……」

物凄く不満そうに、というか若干拗ねたように呟くエースに、俺は思わず呆れたような声を出していた。

「あのな……こんな時まで張り合ってたって仕方ないだろ。それはお前だってわかってんだろ？」

「むう……」

まだ不満そうなエース。というか、少し戸惑っているらしい。

「エースって、案外子供だよな。色々と」

「なっ何を……！」

「そうやって、すぐムキになるところとか」

「むぐっ……」

「意外と無知なところとか」

「こ、この……」

「それで……滅茶苦茶意地っ張りの頑固頭。まだ、まともに俺以外とコミュニケーションとれてないだろ」

エースが俺たちの所に来た時から、この精霊界での旅を見ていて、ずっと思っていたことだ。コイツは、あんまり人付き合いが得意ではない。

「ぬ……それは……」

「取るにしても、基本的に俺か希冴姫を通して。希冴姫が居なくなつてからは、ほぼ俺一択。仲間なんだから、その人見知りはそのそる治そうぜ」

「……………」

黙り込むエース。多分、俺に突っかかって来たのも、そこら辺が関係しているんだろう。ずっと神殿に籠つて、他人との接触を断ってきたコイツは、その接し方がわからない。

「だから、唯一まともにコミュニケーションのとれた俺との喧嘩を取っ掛かりにしているんだ。でも、喧嘩それがある程度非常識な手段だと理解もしているから、俺以外とはその手段を取れない」

流石に、俺の言わんとしていることが理解できたらしく、エースが俺を鋭い目で射抜く。

「……貴様、まさか我を連れてきたのは……」

そう。始めからコレが目的だった。イマイチメンバーと馴染めていないエースに、もう少し歩み寄りを求めるために。勿論食料も目的だが、それはあくまでついでだ。

「お前との喧嘩は楽しいからな。つい俺もお前にちよっかい出したりしてしまうんだが……いつまでもそれじゃあ、疲れるだけだぞ？」

「……………」

複雑そうな顔で黙り込むエースに、俺はさらに言葉を重ねる。

「エース。俺たちは、仲間だ。同志だ。それなのに、お前が遠慮して、イザって時に連携が取れなきゃどうしようもない。こんなこと、騎士団長のお前なら、当たり前のようにわかっていることだろう？」

「……当然、だ……素人に言われるまでもない」

その絞り出すような、弱々しい声に、まだ納得していないと感じた俺は、攻め方を変えることにした。

「……なら、言い方を変えようか」

俺は、戸惑いの表情を浮かべるエースに目を合わせる。

「俺たちは、皆友達だ。遠慮したりすることはない。固く考えず、自然なお前を見せてやればいい。そうすれば、皆受け入れてくれるさ」

「……だが、その自然な我と言うのは……」

「ほら、また難しく考えてる。子供っぽい癖に、無い頭使うな」

「な、無い頭とはなんだ!? わ、我が馬鹿だともいいたいのか!?」

ガーツと噛み付いてくるエース。その顔は、やはり生き生きとしている。やつぱコイツ、若干M気質あるんじゃないか……?」

「吠えるな吠えるな。そういう単純な思考回路に従って答えを出せばいいじゃないか」

「た、たんじゅん……?」

「単純だろ。物凄く。お前の行動、殆ど全部衝動的なもんだし、今お前の考えていることとかも、結構簡単にわかるぞ?」

「な、なんだと……」 『じゃあ読み取って見るといい!』 「……!?!」

「……ほらな?」

声を重ねられて愕然としているエースを見て、俺はククツと思わず悪い笑みを浮かべてしまう。

「単純過ぎるぞ。そんなの、俺じゃなくたって読み取れる」

「ぐ……」

「だからさ。お前は衝動的に、思ったまま行動してみる。意外とあつさり受け入れてもらえるぞ?」

「……そういう、ものか?」

「そういうもんだ。つか、そんな難しく考えたって完璧な友達との付き合い方なんてわからないよ。だったら、不器用なりに“らしく” やってりゃいいんだよ。知ってるか? 自然体つてのはある意味最強なんだぜ?」

「……そうか」

「……つたく」

「パァンっ！」

「ひゃあうっ!?!」

「まだ少し不安そうなエース。その背中を思い切り引っ叩く。」

「ほら、元気出せ。さだめみたいのでも友達になってるような奴らだぞ? お前くらいで尻込みする奴らじゃないっての」

「っ……っ……!」

「……エース?」

「なっ……なんでもない……!」

「……おや?」

「ま、まあとにかく、コミュニケーション不足ってのは思わぬ誤解を産んだりするからな。そういうのはしっかり話せよ?」

「わ……わかつている」

「若干涙目で頬を染めるエースを見て思う。」

「あー……もう間違いない。こいつ、ライトなM体質だ……。発覚した微妙に衝撃の事実を忘れることにして、俺はまとめに入る。」

「とりあえず、あいつらお前が俺に惚れているんじゃないかって誤解しているっぽいから、その誤解だけでも解いておけよ」

「む……その話が」

「落ち着いたのか、息を整えたエースが苦々しげな顔をする。」

「あ、やっぱり警告というか、忠告というか、されてるんだな」

「口には出さんが、目は口ほどに物を言う、というやつだ」

「目というか、オーラだが。とエースは苦笑する。」

「俺から見れば、例によって接し方が不器用だから誤解されているだけ、と見るが、その辺どうなんだ?」

「……さあな。私の思考は単純でわかりやすいのだろう?」

「ところが、感情の方はそうもいかない。頭でどう考えているのかはともかく、心でどう感じているのかは、読み取るのは容易じゃないな」

特に、恋愛感情だのという奴は、とことん複雑で難解だ。鈍感であるつもりはないが、想いの深度を図ることまでは出来そうにない。「俺はお前のことを、掛け替えのない親友だと思っている。だけどまあ、男女間の友情ってのはささいなきっかけで恋愛に変わったりもするからな。尚更わからん」

溜息を吐く俺に、エースは少し意地悪げな目を向ける。

「随分と積極的ではないか。希冴姫も含め、五人もの女に言い寄られておいて、まだ増やすつもりか？」

「……んなつもりはない。俺は、ただはつきりさせておきたいだけだ」

「……ふむ」

エースは、少し考え込むかのように顎に手を当てる。

「……ここで我が好きだ、と言えば……どうする？」

「俺は難攻不落だぞ、と返す」

「……もう少し考える。もしこれが私の、一世一代の告白だったりしたらどうする」

不満そうに唇を尖らせるエースに、苦笑を返す。

「言っただろ。お前の考えることはわかるんだ。そんなあからさまなジョークにうるたえるほど、俺は可愛らしくはないぞ？」

エースはむう、と小さく唸って黙り込む。

「これだから女慣れしている男は……」

「ちよつと待て。その言い方は看過できん」

「事実だろう。五人も侍らせておいて、今更」

「……だからこそ、妙な誤解でごちゃごちゃするのは嫌なんだよ。修羅場なんて、傍から見れば楽しいんだろうが、その当人としちゃどうしても避けたいもんだ。タダでさえ、ウチのお姫様方は物理的に武力が高いんだから」

「冗談交じりにそう言うが、ぶつちやけ冗談じゃない。ヤンデレる危険性すら濃厚なさだめ以下五名。冗談では済まされない。特に、最近わけのわからない力に目覚めたさだめや、精霊の力を行使でき

るアテナ、破滅の女神ルイン、騎士の希冴姫、終焉のユーキちゃん
……ああもうどいつもこいつも！

「……誤解では、なかったとしたら？」

「エースは立ち止まり、俺に体ごと向く。」

「その時は、その時で考えるさ」

「さあ、と森の風にエースの銀髪が靡く。」

「……」

「……」

「……我は」

「そこで一つ、間を置くエース。」

「……どうなんだ？ エース」

しびれを切らした俺の問いかけに、エースは徐々にこちらに近づいて来る。

「お、おいエース？」

そのままエースは俺の頬に手を伸ばし……。

「……ふあっ？」

俺の頬を引っ張った。

「ふえ、ふえーふ？（え、エース？）」

「……ふん。図に乗るな。誰が貴様なんぞに」

「ふあ、ふあらもっはいふるふあ！（な、なら勿体ぶるな！）」

「これで我の一勝、だろう？」

「いだっ！？」

最後に強く頬を抓り、エースは森の先に進んで行く。

「ちょ、待てよ！」

慌てて後を追う。と……

フッ……

「は……？」

振り向いた瞬間、頬に軽い接触感。それは本当に一瞬の出来事で。

「え、エース？」

「……貴様は気を使い過ぎる。仲間だ友だというのなら、余計な気

を回さず、どつしりと構えている。ただでさえ貴様は奴らのリーダーなのだ。このようなことで心を乱すな」

「いやっそれよりもお前いまっ……!!」

今さつき起こった事実混乱して、らしくない醜態を晒してしまふ。そんな俺に、エースは初めて見るかもしれない満面の笑みを浮かべて振り向いた。

「これで、二勝だ。さて、今のお前に、我の事が読めるかな？」

そんなもの、読めるわけがない。今のエースが何を考えているのか、どんな想いを抱いているのか、俺にはさっぱり分からなかった。

「……口で言うほど、難攻不落でもなさそうだな？」

「つてめ……!!」

「さあ、腹を空かした仲間たちが待っている。この森の食糧、根こそぎかつぱらって行くでしょう」

古の聖域だと言うのに、物凄く不謹慎なことを言ったエースは、話は終わりだ、とでも言うように先に進んでいく。俺も慌てて意識を切り替える。

「お、おう……これなんかどうだ!? このきのこ……」

「あつ馬鹿そいつは……」

俺が手に取ったきのこから糸のようなものが伸び、俺に巻きつく。

「……きのこマンだ」

呆れたようなエースがその糸（恐らく菌糸）を切り捨て、きのこマンを追い払う。

「くつく……なんだ。貴様、案外純情ではないか。我に散々子供だ子供だと言っておいて」

「う、うるさい。余りに予想外の展開が続いて、頭が着いてこないだけだ!」

くすくす笑うエースに、俺は体に残る菌糸を取り除きながら答える。完全にやり込められたことが悔しくて、どうにも顔が合わせられなかった。

結局、俺がエースの真意を体よく誤魔化されたことに気付いたのは、皆の食事を作り始めていた時なのだった。

第四期第六話「銀髪騎士のホントのココロ？」（後書き）

この辺りで、もうエースはメインヒロインだろう的なうわさが流れ始めました。実際、作者もめっちゃお気に入り。明らかに、他ヒロインを食ってます。エースさんの本心については……一応、闇の中ということだ。

それでは、悠でした！

第四期第七話「封じられたカードたち」(前書き)

七話目。そろそろ疲れて参りました。意外とこのアップする作業がめんどくさい。この前書きやあとがきがやっつけになっっているのもそれが原因。え、いらさない？そこはほら、なんていうか……書きたいんですよ。やっつけでも。

第四期第七話「封じられたカードたち」

アルカナく切り札の騎士く

第四期第七話「封じられたカードたち」

「……いただきまーす!!」「……」

全員で一斉に、俺の作った料理に箸を伸ばす。

「お、こりゃ美味しい」

「ホント、雑草にしか見えなかったものとは思えないわね」

エースと一緒に採取してきた野草を使った料理は、比較的好評なようで何よりだ。

「オレも料理はするが、こんな見たこともない食材でここまで物は作れねえな……」

「剣士は基本、料理に糖分を使い過ぎだ。もうちょい歯とスタイルに優しく作れ」

「オレは甘い方が好きなんだよ……」

「っていうかこれホントにサバイバル料理だよ……」

基本的には、そこらの食べる野草やキノコを摘んできて煮たり焼いたりしたただけだな。

「火はルインが出してくれたし、水はエリア姉妹がいる。……後は、バグロスの身体で煮たり焼いたり……」

「バグロスさーん!？」

「へ、へへ……俺の身体が、お嬢さん方の血肉になってくれんなら、脇役冥利に尽きらあ……」

「な、ならないよ!? 例え鉄板やお鍋扱いされていたとしても、バグロスさんの身体は血肉にはならないよ!?!」

「……凜、冗談だ。気付け」

バグロスの演技にまんまと騙されている凜に呆れ顔の剣士がツッコム。というか、あの潜水艦、ノリいいな。

「ま、こういうサバイバル料理みたいなのは、俺の専売特許だな」
ぶっちゃけ、俺は所謂家庭料理はそれほど得意ではない。勿論、人並みに出来る自負はある。だが、どちらかというともっとお洒落なフレンチ等の高級料理を如何に美しく飾りつけるか、或いは逆に、極限状況で器具も食材も満足にない中究極に美味しいサバイバル料理を作るか。

「俺の専門はそのどちらかだ」

「両極端過ぎる!」

だから、ロクな食材がないレッド寮食堂は俺にとってそこそこの環境だったりするんだな。

「はわっ!?!」

「……なにやってるのよ貴女は」

「ご、ごめんなさいおねえちゃんっ! あ、あたしおっちょこちょいで……」

「しょうがないわね。ほら、食べさせてあげるから口あけて」

「あ、あゝん……」

……あいつは介護老人かなにかか。

「お兄ちゃん、さだめにも食べさせて! あーん」

「……こっちは食虫植物だな」

「なんで!?!」

「あ、間違えた。食人植物」

「そこでなくて!」

「カニバリズム」

「それは否定できない!」

「カニ」

「それは否定する！」

「というか、カニバリズムを否定しようぜ。」

「そんな会話をしつつ、全員食事を終える。」

「まだちよつと足りないような……」

「我慢しろ」

まあ、基本的に野草とか菜っ葉系ばかりだし、物足りないのもわかるんだが、な。

「王都に行けば、少しはまともな食事も出よう。なんならジャックとセツに作らせればどこぞの宮廷料理染みたものが出てくるだろうしな」

「任せておけ。そういう、日常ではまず作らないような料理こそ、俺の本領だ」

なんせ無駄スキルだからな。

「そのためにも、さつさと王都まで行こう。これは俺の予想だが、多分俺たちの動きは読まれている、というか監視されていたりしても不思議じゃないしな。早い方がいいだろう」

各々に荷物を手に持ち、出発の準備が整ったところで……。

「お兄ちゃん待って!!」

「唐突にエクスクラメーション二連打!？」

ちなみに、今のは悲鳴だ。立ち上がったところをさだめに襟首を掴まれたことによる。

「どういふ悲鳴だよ……」

「げほっ！ な、なんだどうした!？」

「あれ!! アレ見てお兄ちゃん!!」

「常に二連打するほどの何が……」

怪訝に思いつつ、さだめが指差す方向を見る。するとそこには……

…。

「ま、マキユラ!？」

「マキユラ……!!」

さだめが異常にハイテンションだ。

「おい、何かこっちに近づいてくるぞ」

「こつちこつち〜！！ ちちち……！！」

「おいやめるマキュラは猫かなんかみたいなお小動物じゃねえ！」

「殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺……」

「……」

「あからさまにヤバげな雰囲気醸し出しててるー！？」

「呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪……」

「……」

「一体なんて発声しているのかよくわからないけどロクでもないことはわかる！」

「怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨怨……」

「……」

「もうやめて!? なんかホントに怨みで呪い殺されそう！」

「……我が封、解放たれし故……デュエル」

「さだめに任せて!!! デュエル!!!」

「え、これデュエルする流れだった!? 今のデュエルに至る流れ、唐突じゃなかった!?!」

「……………こちらの、ターン。ドロー……。『処刑人 マキュラ』を召喚。ターン、エンド」

「さだめのターン、ドロー!!!」

「え、あいつ思い切り禁止カード出してきたけどいいの!?!」

「さだめは手札からマジックカード『強欲な壺』発動! カードを二枚ドロー! 更に『強欲な壺』!」

「は!?!」

「は!?!」

「ツツコム暇も与えないとばかりにさだめがいきなり禁断の『強欲な壺』二連打。」

「更に『強欲な壺』! 『天使の施し』! 三枚ドローして手札を二枚捨てる! 更にもういつちょ『天使の施し』!」

「まさかの三連続『強欲な壺』に続いて『天使の施し』連打。一切の妥協を許さない超高速ドロー。」

「純粹に酷え！？ なんだあのデッキ!？」

剣士たち初見の人間が揃って驚愕している。俺はもう諦めた。あるいはアイツお得意の禁止スタンダード……というか、カオスだ。

「手札から魔法カード『苦渋の選択』！ デッキから『処刑人 マキキュラ』カオスエンペラードラゴン 混沌帝龍 終焉の使者』『カオス・ソルジャー 開闢の使者』『マシユマロン』『魂を削る死霊』を選択！ さあ、選んでマキキュラ!！」

「なんだそのラインナップ!？」

「……我、を、選択」

「やっぱり、自分を捨てさせることなんてできないよね。その気持ち、わかるよ!！」

「いや、あのラインナップなら誰でもそうするかと……」

「お前ら、一タツツコムな。突っ込んだら負けだぞ」

どうせ聞いちゃいないんだし。

「でもごめんねマキキュラ！ もっと貴女とのデュエル、楽しみたいけど……このデッキだと長くは楽しめないの!！」

「……そりゃそうだろう」

というか、何故お前はマキキュラを女だと断定しているんだ。声はどう聞いても男だったんだが。

「手札から魔法カード『死者転生』！ 手札のマキキュラを捨てて『カオスエンペラードラゴン混沌帝龍 終焉の使者』を手札に戻す!！」

……終わったな。

「更にマキキュラが墓地に行ったことにより手札からトラップカード『第六感』！ さだめは5と6を選択するよ!！」

もうやめたげてー（投げやり）。

「……ダイス、ロール」

出た目は6。よりもよって成功……まあ、どちらにせよ結果は変わらないのだが。さだめが一気にデッキからカードを6枚ドロースる。

「墓地の『マシユマロン』と『魂を削る死霊』をゲームから除外し

て、さだめは『混沌帝龍 終焉の使者』を特殊召喚！ 手札から

魔法カード『死者蘇生』発動！ 墓地から『黒き森のウィッチ』を

特殊召喚！ そして『混沌帝龍 終焉の使者』の効果発動！」

「おい、ちゃんと荷物持ったかー？ そろそろ出発するからなー？」

「ライフを1000ポイント支払って、お互いの手札とフィールド上のカード全てを墓地に送り、その数×300ポイントのダメージを与えるよ！ さよならマキュラ！」セメタリー・オブ・ファイヤー！！！」

「がつ……は……！」

マキュラLPO

ちなみに、今の一撃に耐えてもどうせ『八汰鳥』が手札に呼ばれてドローロックコンボで詰みだ。

「マキュラー！」

さだめは、マキュラが居た辺りに駆け寄る。

「ああっ！ マキュラが消し炭に!？」

「お前がやったんだろ。それはもう情け容赦皆無の一撃で」

「敵になった好きなものほど、全力で消し去りたくなるものなんだよ……」

「その理屈で行くと、俺はユーキちゃんを跡形もなく消し飛ばさなくてはいけないんだが」

「消し飛ばせばいいんじゃない？ ライバルが減って大助かり」

「ちよいとお嬢さん。正義の味方の台詞というものを、小一時間程語り合わないか？」

「さだめが正義の味方とか……笑っちゃうわあ〜」

「まったくもってその点には同意するが！ 一応そういうことになつてはいるんだから少しは自覚持て！」

「個人的には『わたし、皆みたいに優しくないから……』とか言いつつ容赦なく敵キャラを滅殺するダーク系ヒロインの立ち位置が妥当だと、さだめは思う」

「確かにさだめさんってそんなタイプではありませんけど……それを自分から主張するのって、どうなんでしょう……」

あのマキユラも、多分終焉の闇からの刺客かなにかだったんだろうが……まあ、相手が悪かったな。禁止デッキさだめ相手じゃ……。ところで、さだめってマキユラがファイバリットだったりするの？」

「あれ？ 凜に話してなかったっけ？」

コクコクと頷く凜に、さだめはデッキからマキユラを抜き出して説明する。

「そりゃあもう！ さだめにとって、魂のマイファイバリットアイドルカードと呼んで差し支えないね！」

「お前、その重複表現は癖なのか？」

「何と言っても、この処刑人っていう言葉が素晴らしいよね！ この対象を惨殺することに特化したようなフォルムといい、最高！

ああ、せめて消し飛ばす前に、あの武器貰っとけばよかったなあ……」

俺のツツコミを黙殺したさだめが得意げに語り出す。

「そ、そうなんだ……ヘンな趣味……」

「まあ、コイツの三大ファイバリットって言えば、『処刑人 マキユラ』『万力魔神バイサー・デス』『バイサー・シヨック』が三強だからな」

ちなみに魔法・罫では『拷問車輪』『悪夢の鉄檻』『悪夢の拷問部屋』などが該当する。

「……『バイサー・シヨック』は経験あるのでわかります。あんまり思い出したくないけど……」

「……あのデュエルは、さだめもあんまり思い出したくないから忘れてていいよ」

自滅だったしな。

「……禁止カードをそうポンポン使ってたのはどうなんだ」

「ああそれ？ 別に良いじゃん。公式デュエルでも何でもないんだ

し」

誰かがボソリと言った言葉に、さだめはこともなげにそう返す。

「大体闇のデュエルだとか、世界の命運が懸かった大事なデュエルでさ、律義に禁止制限守ったデッキ使う意味ないじゃん。さだめはモラルや体裁より、命と結果を優先するね」

さだめは自分の持つ禁止カードを大量に投入したデッキを見る。

「この子たちも可哀そうだね。デュエルで強いことはいいことなのに、強過ぎるからって禁止されて、以降誰にも使って貰えないんだよ？ 精霊って、デュエルで使って貰うことに喜び感じるような子が多いのにさ。この子たち、特に強過ぎると言われている混沌帝カオスエンペ龍ライやら『八汰鳥』やらマキュラやらは、もう禁止解除は絶望的だし」

「さだめ……」

「まあ本音は、いきなり禁止カード出てきて驚いた顔や、容赦ないゲームエンド効果使われて引きつった顔するのが見ただけなんだけど」

「いきなりぶち壊すな」

照れ隠しなのかどうなのか……まあ、さだめにはどうも他人が触れたがらないところにも躊躇わず踏み込むいい意味でのKY（まあ、普通にKYなところもあるんだが……）などところがあるのも事実だしな。

「……それに、こんなデッキ使ってれば嫌でも目立つし、狙われるよね」

「さだめ？」

「何でもない。行こ、お兄ちゃん」

小さな声で、何事か呟いたさだめだが、当のさだめはさっさと準備を整えて行ってしまふ。

「さだめさん……」

「アテナ？ 今のさだめの言葉、聞こえていたのか？」

「……ええ、まあ。セツは、知らなくても大丈夫です。大したことない呟きでしたから」

「そうか」

……そういう返し、大したことあるって言っているようなもんなんだがな。相変わらず隠しごととかは苦手だな。

「……あいつなら、大丈夫だろ」

必要以上の心配はしない。アイツが俺に聞こえないように言っただけのこととはそういうことだし、さだめのことは信頼している。……決して信用はしていないが。色んな意味で。

「……」

くいくい、と袖が引かれたので振り向くと、ルインが何事か言いかけた視線を俺に向けていた。

「ん？ どうしたルイン」

「……後で、話がある。王都に着いた後でいい。時間を頂戴」

「わかった。何の話かはわからないが……そこそこ深刻そうだな」

「……そう。大事な、話」

「了解だ。……部屋に行けばいいか？」

「……中庭で」

「りょーかい」

ふう……どうしたもんかな。さだめもアテナも、なにか考えているみたいだし……エースも何考えてるのかわからなくなったしな！

「ん……？」

「何か来るぜ。敵対的な反応じゃないが……一応気をつけておきな」
バグロスの言葉通り、遠くから何かがやってくる気配がある。かなりのスピードだが……。

「あれは……『スピード・ウォリアー』か？」

ギヤギヤギヤッ！ と俺たちの前で砂埃を上げつつ急停止した『スピード・ウォリアー』が、俺たち（主にエースか）の方に一礼してから話し始めた。

「唐突且つ急な推参申し訳ありません実は王都が何者か黒くて邪悪な一団によって襲われておりまして今現在は剣聖殿や無敗將軍様大將軍様方の奮闘により何とか持ちこたえては居りますがしかし相手

の数は一向に減ることがなく剣聖殿よりこちらに向かっているであろう剣士殿らへの状況説明と即刻引き返すようにとの伝言を承りまして私「貴様は言葉が早口に過ぎる！ 説明になっておらんだろっが！」はっ申し訳ありません！

顔を上げるなり猛烈な速度（上記の内容を話すのに秒とかかかっていない）で話し始めた『スピード・ウォリアー』を慌ててエースが押し留める。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

息も吐かずに一気に喋り倒そうとしたためか、『スピード・ウォリアー』は息が上がってしまっている。……こういう効果だからか？「要約すると、王都が襲われて危険だから来るのはやめて引き返せ、と」

「セツ……今の聞き取れたんですか？」

「まあ、大体な。その黒くて邪悪な集団ってのは、やっぱり『終焉の精霊』なのか？」

「はっ！ 恐らくそうであろうというのが剣聖殿たちの判断であります！」

「よし。ネイキッドたちの提案は却下だ。むしろ速攻で王都に向かうぞ」

「は……？」

怪訝そうな顔をする『スピード・ウォリアー』だが、俺たちは全員で頷いて足を速める。

「お、お待ちください！」

「おい二輪、バイクモードだ。剣士、先行ってネイキッドたちを助けてやれ」

「オレが？」

「お前なら、王都に精霊が居て、即戦力になりやすい。俺が行ってもいいが、エースも一緒に乗らなきゃいけないし、希冴姫が欠ける。お前の方が適任だ」

「そうだな。わかった。任せろ」

「い、いえだからその……」

まだなにか言おうとしている『スピード・ウォリアー』を黙殺して、バイクロイドに剣士が跨る。

「オレは運転できねえからな」

「おう！ 王都まで速達してやらあ！ しっかり掴まっとけよ！」

急加速したバイクロイドが剣士を乗せて王都へと急行する。はた目から見れば剣士が運転しているようにしか見えないが、実際はオートパイロットみたいなものだ。…… AIには酷く不安が残るが。

「俺たちは急いで王都に向かうぞ！」

「はい！」

「み、皆さん……！」

慌てたような『スピード・ウォリアー』に、仕方なく振り向いて教えてやる。

「ここで引き返すと、暖かい食事と風呂に入れられないんだ」

「お腹空いているから、手早く済ませちゃおう！」

「……私はそろそろベッドで眠りたい」

「『終焉の精霊』相手なら、私の力が有効に使える筈ですから」

アテナ以外の理由は実に私利私欲でしかなかったが、どちらにせよ助けに行く意志が変わらないことを『スピード・ウォリアー』に告げる。

「こつちとしちゃ、恩がある上拠点を潰されるのは結構困るんでな。

色んな意味で、ここで救援に行かない選択肢は無いんだよ。諦める」

「……助かります」

「よし。そうと決まれば改めて出発だ。先に向かった剣士だけで終わっていれば何よりだが……万が一のために、グズグズするなよ！」

「おー！」

「はい！」

「任せて」

「剣士さん……！」

全員の士気は高いまま、俺たちは王都への進軍を再開したのだっ

た。

第四期第七話「封じられたカードたち」(後書き)

もしかして予約投稿にして余裕を持って書けば一気にアップ出来たんじゃないかと今更になって気付くアホが一人。

一応、禁止制限無視しまくりのさだめにも理由はあるんだよー、と言っ話。何も考えずに無視してるわけじゃないよーと。それでは、悠でした！

第四期第八話「漆黒の魔王」（前書き）

八話目。ようやくここまで来た。でもまだまだあと五話暗いあ
るんですよ。結構あるなあ……。

第四期第八話「漆黒の魔王」

アルカナ、切り札の騎士」

第四期第八話「漆黒の魔王」

「ヤクザな兄さん、そろそろ着くぜ」

「誰がヤクザだコラ。ジャンクにすんぞ」

人の気になっているところをピンポイントで突いて来やがった二輪に文句を言つて、オレは目の前に広がっている戦の後を眺めた。

「……ちっ、これじゃマジで戦場じゃねえか」

視界の奥に、土埃と雄叫びをあげて戦う戦士族たちが見えてくる。対して相手は、蠢く漆黒。遠目からだと思つ黒な気持が悪い何かがつぞうぞしているだけなんだが、恐らくあれが『終焉の精霊』の団体さんなんだろうな。

「とりあえず、ネイキッドんとこまで連れて行け。そっからはあいつらんとこまで戻つて待っている」

「あいよ！ そりゃあ構わねえが、別に一暴れしちまっても構いやしねえよな？」

「知るか。あとでセツに怒られても知らねえぞ」

妙に血気盛んなポロチャリ（今はバイクだが）を駆り、ネイキッドを探して戦場を走る。

「あの筋肉馬鹿のこつた、どうせ指揮官の癖に最前線にでもいやがるだろうさー！」

「おつよー！」

オレの指示に従って、バイクロイドが戦場を駆ける。すると一角だけ妙に突出しているところが見えた。

「あそこだ！」

「うおおおおおっ！！！」

案の定、というかそこで戦っていたのはネイキッドたち騎士団。

「ネイキッド！」

「剣士！？ クツ、そうではないかとは思っていたが、案の定、我の忠告を聞かなかつたな！？」

「聞くか脳筋！ オレらは仲間を見捨てる程クズじゃねえ！」

「……かたじけない！」

「ネイキッド！ 敵の本丸……大将はどこだ！？」

「セオリーでいけば、最後方だろうな」

「なら話は早い、オレらで大将首取りに行く！ 幸い、足ならある！」

オレはバイクロイドを指して叫ぶ。

「おう！ 邪魔な奴らは、全部俺っちがなぎ倒してやんよ！」

「危険だ、というのは今更か。ならばむしろ、その方が得策か」

「將軍、ここの指揮は我らにお任せを！」

部下からの言葉に頷き、オレに向き直るネイキッド。

「そういうこつた。乗れ！ ネイキッド！」

「応！ 剣士、これを授けておく」

「こいつは……」

「今となつては我も、出し惜しみはしていられまい。全力を以つて、首級しんじを取る！」

手渡されたのはネイキッドのカード。だが、普通のネイキッドとも違う、粗野と言うより神聖な雰囲気すら漂うカード。

「……お前、流れの傭兵將軍じゃなかったのかよ」

「さて、そんなこと言ったか？ 我は自分の経歴に興味がなくてな道理でいつもいつも適当な経歴語っているわけだ。

「まあいい。どちらにせよ、コイツは戦力になりそうだ。ありがた

く受け取っとくぜ！」

「応！ ぜやあつ！」

バイクロイドを駆りながら、襲いかかる敵を一刀両断するネイキッド。

「見えた！ 奴だ！」

ネイキッドの声に反応してそちらを向くと、そこには明らかに他の雑魚とは雰囲気の違いが一体。

「あれは……グレファアー！？ ダイ・グレファアーではないか！」

「ダーク化してやがるな……アイツが指揮官か」

「フハハ……フハハハハハハッハ！」

「グレファアー！ グレファアー！ くっ……我の声も届かんか！」

「知り合いか？」

ネイキッドの声がやけに焦っている。

「……かつての友だ」

「……そうか」

ならば尚更、このままにはしておけないな！

「デュエルだグレファアー！ ネイキッドの友を、終焉の手先になんてしてられるか！」

「剣士……」

それまで嗤っていた『ダーク・グレファアー』が漸くこちらを振り向き、その紅く血走った目をオレに向ける。

「クッククク……いいだろう。デュエル！」

「デュエル！」

「私の先攻、ドロー！ 私は手札から『終末の騎士』を攻撃表示で召喚！ 効果によりデッキから『ネクロ・ガードナー』を墓地に送る！」

『終末の騎士』 ATK1400

「ダーク系のデッキか……？」

タイプとしては、セツの妹のデッキに近い。『ダーク・グレファアー』自身もダークモンスターであることを考えても、その可能性は

高いな。

「私はカードを一枚セット。ターンエンドだ」

「オレのターン、ドロロー！」

オレは手札と相手フィールドを確認する。

「オレは『切り込み隊長』を攻撃表示で召喚！ その効果により、手札から『コマンド・ナイト』を攻撃表示で特殊召喚だ！」

『切り込み隊長』 ATK1200 1600

『コマンド・ナイト』 ATK1200 1600

「バトル！『切り込み隊長』で『終末の騎士』を攻撃！『切り込み十字斬』！」

『コマンド・ナイト』の効果によって攻撃力が1600に上昇した『切り込み隊長』が『終末の騎士』を十字に切り裂く。

「ぐう……」

グレファアーLP3800

「更に、『コマンド・ナイト』でプレイヤーにダイレクトアタック！」

「トラップカード発動！『デメンション・ウォール』！ クク、自らの剣を受けるがいい！」

「なにっ!？」

グレファアーの前方の空間が歪み、歪みに吸い込まれた『コマンド・ナイト』の剣はオレを背後から襲った。

「ぐおおっ!？」

剣士LP2400

『ネクロ・ガードナー』の効果で防ぐ選択肢もあつたから確かめてみたんだが、裏目に出たか。

「オレはカードを一枚セット。ターンエンドだ」

「私のターン、ドロロー！ 私自身を攻撃表示で通常召喚する！」

『ダーク・グレファアー』 ATK1700

グレファアーのフィールドに、姿形が全く同じのモンスターが召喚される。

「更に、私は手札から『ダーク・クルセイダー』を墓地に送ること
で、デッキから『暗黒魔族ギルファア・デーモン』を墓地に送る」
「ギルファア・デーモンだと!?」

「そうだ! 『暗黒魔族ギルファア・デーモン』の効果を発動! こ
のカードが墓地に送られた時、フィールド上に存在するモンスター
一体に装備し、攻撃力を500ポイントダウンさせる! 『切り込み
隊長』に装備!」

『切り込み隊長』 ATK1600 1100

まさかギルファア・デーモンまで使うとは……。

「バトル! 私自身で『切り込み隊長』を攻撃! 『ダーク・グレッ
プ・ソード』!」

「ぐおっ……!」

剣士LP1800

「破壊された『暗黒魔族ギルファア・デーモン』を、効果で『コマ
ンド・ナイト』に装備する!」

『コマンド・ナイト』 ATK1600 1100

『コマンド・ナイト』は、周囲に影が纏わりつき、膝をつく。

「カードを二枚セット。ターンエンドだ」

「オレのターン、ドロー!」

ギルファア・デーモンは予想外だったが……逆に利用させて貰う
ぜ!

「オレは手札から『拘束解放波』を発動! 『コマンド・ナイト』
に装備された『暗黒魔族ギルファア・デーモン』と共に、お前のセ
ットされた魔法・罫を全て吹き飛ばす!」

『おおお……はあっ!』

「なにっ!?!」

『コマンド・ナイト』が、自らに纏わりつく影を伏せカードごと
吹き飛ばす。伏せカードは『炸裂装甲』と『我が身を盾に』。防御
陣を敷いていたらしいが、残念だったな。

「更にオレは『鉄の騎士ギア・フリード』を攻撃表示で召喚! 魔

法カード『拘束解除』！ デッキから『剣聖 ネイキッド・ギア・フリード』を攻撃表示で特殊召喚だ！」

『剣聖 ネイキッド・ギア・フリード』 ATK2600 3000

『グレフアー……』

「オレは更に魔法カード『強欲な壺』を発動！ デッキからカードを二枚ドローする！」

ドローしたカードを確認する。よし。これで決める！

「ネイキッド。行けるな？」

『……ああ！ やれ！』

静かに目を閉じていたネイキッドが、オレの声に反応して目を開く。

「手札から装備魔法『神剣 フェニックスブレイド』をネイキッドに装備！ ネイキッドの効果により、『ダーク・グレフアー』を破壊する！『ウエポン・バツシュ』！」

『眠れ。我が友』

ネイキッドの剣から放たれた衝撃波が、『ダーク・グレフアー』を破壊する。

「バトル！『コマンド・ナイト』でダイレクトアタック！『エンチャント・フレイム』！」

「ぐおっ……！？」

グレフアーLP2200

「ラストだ！ ネイキッドでダイレクトアタック！」

「まだだ！ 墓地の『ネクロ・ガードナー』の効果発動！ このカードを墓地から除外することによりモンスター一体の攻撃を無効にする！」

「読めてるんだよそんなもんは！ リバースカードオープン！『天罰』！」

カウンターはセツの専売特許つてわけじゃねえ！

「手札を一枚捨てることで『ネクロ・ガードナー』の効果を無効にし、破壊する！」

グレファアーを守ろうと立ちはだかった『ネクロ・ガードナー』が、天からの裁きによって消滅する。

『我が剣にて眠れ……グレファアー!』

「ぐ、ぐおおおおおっ!?!」

グレファアーLPO

「ふう。案外大したことは……」

「っ!? 離れる剣士! 奴はまだ生きている!」

「なにっ!?!」

ネイキッドに制止され、慌てて飛び退く。

「お、おおおおお……盟主、殿……この、不甲斐なき私を……今一度拾ってくださいるのですか……おお……!」

「な、なんだってんだ?」

オレとグレファアーの見ている前で、グレファアーは何事もなく、天に向かってその両手を掲げた。

「! 終焉の精霊たちが……」

集まっていく。グレファアーの掲げた両手に。一匹、二匹と終焉の精霊が吸い込まれて行く。

「グレファアー! 一体何を……」

「お、おおお……力が、力が漲る……! 盟主殿、この力、必ずや……!」

「コイツの言っている盟主殿って、やっぱり加藤のことなのか……?」

グレファアーの背後に居る筈の加藤の姿を幻視する。やがてグレファアーはその姿を変質させてオレを見下ろす。

「サア、本当ノ戦イヲ始メヨウカ……」

漆黒の瘴気を纏い、此方を睥睨するその姿はまるで……。

「魔王……!」

「そこまで堕ちたか！ グレフアー！」

ネイキッドが吠える。だが、目の前の魔王はそんなネイキッドには目もくれずにオレを睨み続ける。

「……何だよ。男に見つめられて喜ぶ趣味はねえぞ」

「りたーんまつちダ……デュエルデイスクヲ構エロ」

オレは無言でデイスクを構える。どつちにしろ、コイツをこのままにはしておけねえ。

「デュエル！！」

「今度はオレの先攻だ！ ドロー！」

速攻で決める！

「オレは手札から魔法カード『増援』を発動！ デッキから『切り込み隊長』を手札に加え、攻撃表示で召喚！ 効果発動！ 手札の

『エヴォルテクターシュバリエ』を攻撃表示で特殊召喚する！」

『切り込み隊長』 ATK1200

『エヴォルテクターシュバリエ』 ATK1900

オレのフィールド上に、二体の戦士が現れる。

「更にフィールド魔法『侍の戦場』を発動！ 『侍の戦場』が存在している限り、戦士族モンスターは攻撃力を500ポイントアップさせ、効果によっては破壊されない！ ターンエンドだ！」

『切り込み隊長』 ATK1200 1700

『エヴォルテクターシュバリエ』 ATK1900 2400

「私ノたーん、どろー！ 私は『漆黒の魔王LV4』を攻撃表示で召喚」

『漆黒の魔王LV4』 ATK1000

「漆黒の……魔王？」

さつきオレが、アイツに抱いた感想と同じだ。その攻撃力はたったの1000。悪魔族のアイツには、『侍の戦場』の効果も及ばない。どうするつもりだ？

「私八手札カラ装備魔法『デーモンの斧』ヲ発動！ 『漆黒の魔王LV4』の攻撃力を1000ポイントアップ！ 更ニ速攻魔法『サ

イクロン』ヲ使用シ、『侍の戦場』ヲ壊スル！」

『漆黒の魔王LV4』 ATK1000 2000

「ちっ！」

「ばとる！『漆黒の魔王LV4』デ『切り込み隊長』ヲ攻撃！『瘡
気の剣LV4』！」

「ぐうっ……！」

剣士LP3700

「カードヲ二枚せつと。たーんえんど」

「オレのターン、ドロー！オレは『エヴォルテクターシュバリエ』
を再召喚する！」

『エヴォルテクターシュバリエ』はデュアルモンスター。再度召
喚することによって効果を得る。

「更に、手札から装備魔法『神剣 フェニックスブレード』をシュ
バリエに装備する！」

「サセナイ！かうんたー！畏『八式対魔法多重結界』！もんすた
ー一体ヲ対象トスル魔法ノ発動ト効果ヲ無効ニシ、破壊スル！」

「なに！？」

しまった……シュバリエの効果は装備魔法を墓地に送ってカード
を一枚破壊する効果……その装備魔法が破壊されては効果を発動で
きない。

「更ニ、とらっぷ発動『闇の呪縛』！『エヴォルテクターシュバリ
エ』ノ攻撃力ヲ700ぽいんとだうんさせ、攻撃ト表示形式ノ変更
ヲ禁ズル！」

『エヴォルテクターシュバリエ』 ATK1900 1200

「なに？ どういうことだ……？」

そのカードならば、オレが攻撃宣言した時に発動すれば、シュバ
リエを迎撃で破壊することも出来た筈……それをしない？

「……オレはカードを一枚セット。ターンエンドだ」

「私ノたーん、どろー！私ハすたんばいふえいずニ『漆黒の魔王
LV4』ヲ墓地ニ送ツテ、でつきカラ『漆黒の魔王LV6』ヲ攻撃

表示デ特殊召喚！」

『漆黒の魔王LV6』 ATK1700

「っ！なるほど……そういうことか」

恐らく、『漆黒の魔王』のレベルアップ条件がモンスターの戦闘破壊かなにかなんだろう。だから敢えてシュバリエを倒さず、レベルアップへの布石とした。

「私ハめいんふえいずニ手札カラ魔法カード『大寒波』ヲ発動！」

次ノ私ノターンマデ、魔法・罫ノ発動トせつとヲ封ジル！」

「ちっ……厄介な魔法を」

オレの伏せカードは『鎖付き爆弾』ダイナマイト。発動出来ていれば少なくとも

も相討ちに持ちこむことが出来たんだが……どうやら次のターン、最上級のレベルを呼ばれることは覚悟しなければならぬらしいな。

「ばとる！『漆黒の魔王LV6』デ、『エヴォルテクターシュバリエ』ヲ攻撃！『瘴気の剣LV6』！」

「ぐあっ!？」

剣士LP3200

シュバリエを切り裂いた剣の瘴気が、オレをも蝕む。

「『漆黒の魔王LV6』ハ、破壊シタもんすた！ノ効果ヲ無効ニスル。『エヴォルテクターシュバリエ』ノ効果ヲ無効ニスル！私ハコレデターンえんどダ」

シュバリエは墓地で通常モンスターとして扱う効果を持っているが……無効にされてもそこまで痛くはないな。

「オレのターン、ドロー！」

しかし……マジで『大寒波』は痛えな……装備魔法も強化魔法も、ネイキッドを呼ぶことすらできやしねえ。

「……オレはモンスターを一体守備表示でセット。ターンエンドだ。カードを伏せることも出来ないから、こっするしかない。

「私ノターン、どろー！くくく、遂ニ我ガ新タナ力ガ呼び起コサレル……私ハ『漆黒の魔王LV6』ヲ墓地ニ送り、でつきカラ『漆黒の魔王LV8』ヲ攻撃表示デ特殊召喚スル！出デヨ！我ガ写

「シ身！」

『漆黒の魔王LV8』 ATK2800

それまで『漆黒の魔王LV6』がいたところから、LV6とは比べ物にならない程の瘴気が湧き出し、フィールドを覆う。

「うっ……」

あれは……良くない。直感的にそう感じたオレは、少しだけ後退する。

「更に手札から魔法カード『強欲な壺』！ カードを二枚ドロー！
そして『ダーク・クルセイダー』を攻撃表示で召喚！ 効果により、手札の『ダークジェロイド』と『ネクロ・ガードナー』を墓地に捨て、一枚につき攻撃力を400ポイントアップさせる！」

『ダーク・クルセイダー』 ATK1600 2000 2400

奴のフィールドに、漆黒の騎士が現れ、その力を増幅させる。

「ククク、さあ行け！ 我が写し身よ！ バトル！ 『漆黒の魔王LV8』で、貴様の守備モンスターを攻撃！ 『漆黒の瘴気』！」

「うおっ!?!」

オレのセットしていた『コマンド・ナイト』がドロドロに溶けて行く。

「我がモンスター効果！ 戦闘によって破壊したモンスターの効果を無効にし、ゲームから除外する！」

「くそ……!?!」

「まだだ！ 『ダーク・クルセイダー』でプレイヤーにダイレクトアタック！」

「ぐおおあっ!?!」

剣士LP800

「ターンエンドだ」

「ぐ……!?!」

瘴気と闇のデュエルの衝撃に、思わず膝をつく。こいつは……シヤレになってねえぞ。セツの奴、こんなデュエルしてやがったのか

……!

「っ……オレのターン、ドロー！」

それでも、何とか持ち直し、デッキからカードを引く。

「……オレはモンスターを一枚セツト。ターンエンドだ……！」

「愚かな。守りを固めるか！ 私のターン、ドロー！ 私は『漆黒の魔王LV8』で、守備モンスターを攻撃！『漆黒の瘴気』！」

奴の瘴気が、オレのフィールドを浸食する。だが！

「オレの守備モンスターは『翻弄するエルフの剣士』！ エルは、攻撃力1900以上のモンスターとの戦闘では破壊されない！」

「なに！？」

「どうやら、お前は戦闘での破壊をトリガーとする効果持ちみたいだな……なら、戦闘で破壊できないコイツはお前の効果の対象外だ！」

「ちい……！」

「おまけに、『ダーク・クルセイダー』の攻撃力を上げてくれたからなら……上げなければそのまま倒せたのによ！」

「……私はこれでターンエンドだ」

「オレのターン、ドロー！」

っ来たか！

「オレはたつた今引いた魔法カード、『融合』を発動する！ 手札の『剣聖 ネイキッド・ギア・フリード』と『オネスト』を手札融合！ 来い！『天剣 ネイキッド・ギア・フリード』！」

『天剣 ネイキッド・ギア・フリード』 ATK2800

『うおおおおおっ！！』

「ネイキッドと『オネスト』だと！？」

「コイツは、ネイキッドと天使族モンスターの融合でのみ特殊召喚することができる！ 更に、コイツは装備カードを装備することで、オレの除外されている戦士族を呼び戻すことができる！」

「なんだと！？ いやだが、貴様の手札はゼロ！ 装備魔法など……ハッ！？」

気付いたらしいな……。

「装備カードなら……在る！ オレは墓地の『神剣 フェニックスブレード』の効果発動！ 墓地の戦士族モンスター二体をゲームから除外し、このカードを手札に戻す！」

「しまった……！」

「『神剣 フェニックスブレード』を『天剣 ネイキッド・ギア・フリード』に装備！ 効果により、除外されている『コマンド・ナイト』を特殊召喚する！」

『コマンド・ナイト』 ATK1200 1600

『天剣 ネイキッド・ギア・フリード』 ATK2800 310

0 3500

「まだだ！ リバースカードオープン！ 『鎖付き爆弾』^{ダイナマイト}！ この力は発動後、攻撃力500ポイントアップの装備カードとなり、フィールド上に存在するモンスター一体に装備する！ オレはネイキッドに装備する！」

『天剣 ネイキッド・ギア・フリード』 ATK3500 4000

ネイキッドの効果は一ターンに一度しか発動できないから、この効果ではモンスターを呼び出せない。だが！

「攻撃力は十分……！ 『翻弄するエルフの剣士』を攻撃表示に変更して、バトルだ！ 『天剣 ネイキッド・ギア・フリード』で『漆黒の魔王LV8』を攻撃！ 『ヘヴンズ・ウェポン』！」

「ええい！ 墓地の『ネクロ・ガードナー』の効果を発動！ 相手モンスターの攻撃を無効にする！」

「ならば、ネイキッドのもう一つの効果を発動する！ ネイキッドに装備された装備カード一枚を破壊し、墓地に送ることで、もう一度だけ続けて攻撃することができる！」

「バカな……！？」

「更に、破壊された『鎖付き爆弾』の効果発動！ 『ダーク・クルセイダー』を破壊する！」

『天剣 ネイキッド・ギア・フリード』 ATK4000 3500

『ぬんっ！』

ネイキッドが投げた爆弾が、漆黒の騎士を吹き飛ばす。

「もう一度だ！『天剣 ネイキッド・ギア・フリード』で『漆黒の魔王LV8』を攻撃！『ヘヴンズ・ウエポン』！」

「ぐおおおっ!?!」

グレフアーLP3300

「トドメだ！『翻弄するエルフの剣士』と『コマンド・ナイト』で、プレイヤーにダイレクトアタック！」

「ぐあああああああっ!?!」

グレフアーLPO

「グレフアー！」

今度こそ、力尽きて倒れるグレフアーに、ネイキッドが駆け寄る。

「ぐふっ……ネイキッド」

「グレフアー！ 貴様……やはり途中から！」

「ああ……ある程度の、意識は……な」

グレフアーは、漆黒の魔王としての力が高まった結果、逆に自我を取り戻したらしい。

「だが、力を制御することもできず……このザマだ」

「グレフアー……」

「おいしっかりしろ！ すぐにアテナたちも来るから、そしたら……」

「……」

治療できる。そう思ったのだが、ネイキッドもグレフアーも静かに首を振る。

「無駄だ……その、お嬢さんがどれほどの使い手であろうと……私の身体も魂も、間に侵され過ぎている……最早、どうにもなるまい」

「マジかよ……!」

死ぬ……ってのか？

「何故、お前ほどの男が終焉に!?!」

ネイキッドの問いかけに、グレファアは途切れ途切れの言葉で答えた。悪魔の剣を奪い、しかしその悪魔により弱っていたところで、取り込まれたことを。

「情けない……ネイキッド、お前の盟友ともあるうものが、な……」
「グレファア……」

その言葉を最後に、ネイキッドは黙り込む。代わりにグレファアは、オレの方を向いた。

「……ネイキッドの、マスターの少年よ」

「……なんだ？」

「ネイキッドを……そして世界を、頼む。あの闇は強大だ……放つておけば、世界すら飲み干そう……そうさせてはならぬ。だから……」

「……」

「ああ、任せる。アンタの遺志、確かに受け取った」

今にも消え逝こうとしている命に対し、オレが出来るのは少しでも心安らかに逝かせてやることだけだった。

「そうか……死ぬな、少年……若き命、よ……」

最期にフツ、と深く微笑みを残して、グレファアの身体は闇に溶けて行くのだった。

第四期第八話「漆黒の魔王」（後書き）

一応注釈を入れておくと、剣士には漆黒の魔王の知識がありません。彼にとっては初めて聞くカード。という事です。それでは、悠でした！

第四期第九話「精霊の力」(前書き)

九話目。遂にここに書くことがなくなりました。どうしよ。ちなみに丁度百話目がこの話になります。

第四期第九話「精霊の力」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第四期第九話「精霊の力」

剣士がバイクロイドに乗って先行してから約半刻。やっとのこと
で俺たちは戦場へと辿りついた。

「酷い……」

戦場は正に死屍累々という言葉が相応しい有様で、さだめやアテナはともかく、凜やエリアルたちは息を呑んでその光景を見つめていた。

「とにかく、戦いを終わらせないと……」

「剣士先輩、大丈夫かな……」

不安そうに呟く凜のためにも、早く戦いを終わらせるか剣士と合流しなくちゃな。

「敵は全部『終焉の精霊』……それなら！ セツ、ここは任せてください！」

途中から翼を使って飛んでいたアテナが、腕を構えてそう宣言する。

「本当はこの術、禁呪指定されているんですけど……」

アテナはちらりとさだめを見やる。

「世界の命運、命を懸けた戦いで、下手なルールなんて……！」
アテナの周囲に珠が浮かぶ。

「守っていられませんよね。Ren、Ba、Ka、Sheut、I

b。我、反魂のスピリチュアの魂名に於いて命ず。黄昏の闇に沈みし者よ、転じて暁よりの輝きとなせ。闇は光に、冥は天に、死は生に、狭間にてたゆたう魂魄よ、我が導きに従い希望を宿せ！ 力の在り処は、生と死を司る、天空竜の名の下に！ 反転呪魂の法、O・S I・R I・S I！」

瞬間、アテナの周囲に漂う珠から強烈な閃光と共に天から極光が降り注いだ。

「ええええい！！！」

極光は、アテナの手に従って戦場を蹂躪し、触れた端から『終焉の精霊』を消滅させていく。その上、その輝きは戦場で斃れた戦士たちの何割かにも立て続けに降り注ぎ、蘇らせていく。

「すっご……」

あのさだめが呆然としている。物凄くレアな表情だ。が、気持ちわかる。

「はあ、はあ……これで、どうです!？」

極光が全て消えた後には、ほぼ壊滅状態となった『終焉の精霊』と、いきなりの事態にまだ理解が及んでいないらしく、ポカンとしている戦士族たち。

「っ何をしている！ チャンスだ、一気に殲滅しろ！！！」

最も早く我に帰ったエースが声を張り上げる。その声に反応し、戦士族たちが雄叫びと共に攻め込んで行く。既に大勢は決したと言ってもいいだろう。

「……よし。アテナには『殲滅天使』の二つ名をあげよう」

「その二つ名は駄目だと思えます。なんとなく」

素気無く却下されてしまったが、正しくその表現が相応しいと思う。一撃かよ……。

「こりゃ、剣士を向かわせるよりアテナを先行させた方が早かったか……」

「そう単純にはいきませんよ。そんなホイホイ使える術でもありませんし」

視界には、壊滅状態に陥り撤退していく『終焉の精霊』の一軍と、勝鬨をあげる戦士族たち。その中に、此方へと向かってくる剣士とネイキッドたちが見えた。

「おお！ ルイン殿！ ご無事でしたか！」

「お前ら、今の光はなんだ！？ 敵が根こそぎ吹っ飛んで行きやがったぞ！？」

「剣士先輩！」

無事な剣士の姿を見て、安心したのか飛び付く凜。

「お、おい凜……！？」

「良かったあ……無事で」

「ちっ……」

舌打ちしつつ、満更でもなさそうな剣士。そして……。

「ルイン殿……！」

「……（ひょいっ）」

感極まったのかなんなのか、ルインに抱きつこうとして無言でかわされるネイキッド。杖で追撃まで喰らっている。

「……私に抱きついていいのは彼だけ」

「いやまあ。」

「ゴホン……それで、セツ。先ほどの光は一体……？」

「あ、すみません。あれをやったのは私です」

「貴公が？」

名乗り出たアテナを見て、驚愕を隠せないネイキッド。

「貴女は、精霊？ いやしかし、人間のようにも……」

「えと、先祖返りみたいなのは。元々は、反魂のスピリチュアと呼ばれていました」

「なんと！？ スピリチュア殿が……生きておられたのか」

「正確には、一度死んで転生したんですけど」

「そうでしたか……いや、どちらにせよお元気そうだなにより。我はかつて遠目から見ただけでしたが、実にお美しい姿であったことは記憶しております」

「あ、ありがとうございます」

「あーそっか。アテナのことも知っている精霊はいるんだな。」

「というかネイキッド。節操無いぞ。ルインだけじゃなく、アテナにまで色眼使うな」

「お前にだけは言われたかないだろうよ……」

「……まったくだな。」

剣士のツツコミに、自分の現状を思い返して少し落ち込む。そんな俺に、横合いから聞き慣れた声が聞こえた。

「主様、エース」

「ジャック！ 無事だったのか」

「む、ジャックか」

「ええ、私たちは後方待機組でしたし……なにより、最後の一撃でほぼ殲滅されてしまいましたから。私たちの出る幕はありませんでしたよ」

話しかけてきたのはジャックだった。ところどころ鎧が汚れているが、それほど大きな怪我はないようだ。

「キングは？」

「キング殿も、変わらず壮健ですよ。恐らくすぐに……ああ、来たようです」

ジャックが顔を向けた先、確かにキングがこちらに向かって来ていた。

「おお主、久しいの」

片手を挙げて朗らかに挨拶してくるキングに苦笑を返す。

「言うほど久しぶりじゃないだろ」

何せ、デュエルでもこちらに来る前にも会っているのだ。最後に会ってから二日と経っちゃいない。

「僕の感覚では、ものすごく久しぶりなんじゃよ！ ジジイにも光を！」

「いきなり何叫び出してるんだコイツは……」

「ボケたか？ キング殿」

「わしゃボケとらんわい！　まだまだ現役じゃあああああああ
あい！！」

凄まじい剣幕で突っ込まれる。

「わかったわかった……キングが歳に似合わず肺活量豊富なのはよ
くわかったつての」

「歳ぢやないわい！　言っておくがのう、精霊は見た目と歳が比例
すると思ったら大間違いじゃぞ！　具体的に言えば、僕と希牙姫は
同じ年じゃ！」

「え……」

キングの衝撃発言に、その場に居た全員が固まる。　同い……歳？

キングと、希牙姫が？

「……ジャック」

「ええ、まあ……私も同じく」

言い辛そうにジャックが肯定する。

「不合理だ……」

「……私は彼らより1000歳以上年上。今更」

そう言えばそうか。ルインはそうだったな……。

「いや、それにしたって不合理だ」

「何と言う老け顔……」

「くおら！　誰が老け顔じゃあああああああああああああ
あああああつ！？」

ボソリと呟いたさだめの言葉に激昂してキング。　いやまあ、さだ
めの気持ちもわかるが。

「……お前たち。いつまで戦場で駄弁っているつもりだ」

「テンスか？　ああ、すまん。つい」

「キングさんの出番を少しでも増やしてあげようっていうさだめた
ちの配慮だよ」

「余計な御世話じゃああああああああ有難う！」

「感謝してるし」

まあ、すっかり存在を忘れ去られる前に出てこれて良かったな、

と……。

「兎に角、城に向かいました。お話はそちらで」

「ああ。頼む。結構走ったから、皆くたびれてるしな」

ジャックの言葉に頷き、全員を見やる。皆、やはり顔に疲れが見える。流石にルインとかは大丈夫そうだが……。

「わかりました。それでは、精一杯御持て成しさせていただきましよう」

「ジャックの持て成しなら、安心だな」

「……主様？ 私は騎士なので、そちら方面で安心されるのも複雑なのですが……」

「今更今更」

ジャックの執事素養はこの場にいる誰しもが認めている。

「俺にも手伝わせてくれ。とびっきりのを作らせてもらおうから」

「ええ。お願いします。主様」

そんな会話をしつつ、俺たちは王城へと入城していった。

「……ふう。こんなもんか」

夕方ぶりの立派な厨房に感激し、思わず張り切り過ぎてしまった夕食からしばらく。俺は用意された客間でちょっとした研究をしていた。

「ん〜やっぱり、デュエルエナジーだな……」

コンコン。

「ん？ アテナか、入っていいぞ」

扉がノックされ、そのノック音から誰が来たのかを判断した俺は扉の向こうに声をかける。がちやり、と扉が開いて予想通りの人物が顔を出した。

「……何でセツ、私だってわかつたんですか？」

「さだめならノックはしない。ルインや騎士たちにしてはノックの

位置が低かった。他のメンバーはこの部屋に来る用事が思い付かない。こんなところか」

「……セツ、探偵さんにもなれますよ」

「こんなの、無駄スキルを使うまでもないだろ。で、どうした？」

まだ微妙に納得しきれていない、と言った表情で、アテナは口を開いた。

「えっと、特に何か大切な用事ってわけじゃなかったんですけど……駄目、ですか？」

「駄目じゃないな。それどころか、渡りに船だ」

「えっ？」

驚いたような顔をするアテナに、ちよいちよいと手招きをする。

「ホントは、後でルインが来る筈だったからその時に頼もうかと思っただけだが……アテナが来たなら、アテナに聞こう」

「ルインさんが？ どうして……」

「さあ？ 話があるらしいが……結構、深刻そうだったからな」

ルインの話については、まだ本人から何も聞いていないので何とも言えない。

「そうですか……えっと、それで頼み事ってなんですか？」

「ああ、それなんだが……」

俺はさっきまでの研究内容をアテナに話す。

「要は、お前たち精霊の力と俺の、精霊界に扉を開く力。それと、デュエルエナジーの関係について、だな」

「そういえば……セツの力については詳しいことを聞いていませんでしたね」

希望に聞けば一発でわかるんだろうが……まあそれはいい。

「俺は、さっき言った三つの力、全て根源は同一なんじゃないかと思っているんだ」

そうでなければ、三幻魔の事件の際、封印を解くのにデュエルエナジーを集めたりはしないだろうし、ルインたちが人間界と精霊界を行き来することにも説明がつかない。

「……もしかして」

「ああ。デュエルエネルギーって奴を自分で引き出すことができるなら、アテナたちのように魔法染みたことができるかも……てな」

もちろん、それで戦おうとは思っちゃいない。そんな付け焼刃の術で対抗できるほど、終焉の力は甘くない。

「それでも、もし何かあった時に護身程度にでも術を使えるのと、使えないのでは、天と地ほどにも差があるだろう。一と零なら、一の方が偉い」

「そうですね……」

俺の言葉を聞いて、アテナも何事か悩んでいるようだった。

「恐らく、デュエルエネルギーってのが、ファンタジー用語で言う魔力……特には、魂の力のようなものなんだろう」

思い出すのはやはり三幻魔の事件。デュエルエネルギーによって封印を解かれ、呼び出された三幻魔は、精霊たちから力を吸い取り、その力を増していた。そのことから考えても、デュエルエネルギーは精霊の力と非常に近い性質を持つことが窺える。

後は、サイコショッカーか。人間とのデュエルで復活の力を溜めていた、ということはやはり、精霊にとってデュエルエネルギーは力の源に値する力なのだろう。

「俺たちはデュエルの時、そのデュエルエネルギーを常に少量ながら放出している。それを平素から、自分の意志で取り出せるようになるれば……」

「術が、使える……」

「そういうことだ」

考え込むアテナの表情が、蒼くなったり紅くなったりと忙しい。

「……セツ」

「ん？」

「もしかしたらセツは、私たち精霊すら解明できていなかったこの力の謎を、僅かばかりでも紐解いてしまったかもしれない。ですが……」

言い淀んでしまったアテナに、俺は続きを促す。

「……………続けて」

「ですが、もしセツの推論が的を射ているのであれば、人間がそれを多用するのは危険です。精霊は、生まれながらにしてある程度の力を持っています。だからこそ、息をするように術が行使できるんです。でも人間は……………」

その力を持っていない。或いは、少ない。

「アテナ。俺の推論はまだ途中なんだ」

「え？」

「……………俺はな、このデュエルエネルギー量が、精霊を見ることのできる、ある程度の基準なんじゃないかとも思っているんだ」

「精霊を……………？」

「そうだ。デュエルエネルギーがある程度の基準値に達しているかわかないか。それで、精霊を見える奴と見えない奴がいる。そして、デュエルエネルギーの量は変わり得る。だからこそ、それまで精霊を見ることができなかったデュエリストが、デュエルの力を磨くことで精霊を認識出来るようになるんじゃないか、とな」

俺はこの推論、間違っているとは思えない。恐らく、ある程度正しい認識の筈だ。

「そして恐らく、俺のエネルギー総量は相当に多い。だからこそ、漏れ出したエネルギーが精霊を引きつけ、呼び起こし、精霊界への扉も開くことができる」

俺の推論を聞いていたアテナは、すっかり安心してポカンと口を開いている。少し可愛らしいが、これじゃ話が進まないのでアテナの前で手を振ってみる。

「アテナ〜？」

「……………ハッ！？」

漸く気付いたららしいアテナが、今度は頬を紅潮させ、興奮したように俺に詰め寄ってくる。

「す、すごいです！ セツ、研究者さんです！」

「お、おいおい……探偵の次は研究者か？ 買い被り過ぎだつて」
「そんなことありません！ そっか……そう考えると全て辻褃が……
…何で人間の私が力を使えるのかとか、さだめさんが力を使えるのかとかも、これで説明が……」

そう、それだ。アテナとさだめの存在が、俺たちと精霊にそれほど
どの差はないことを明確に示している。

「だから、渡りに船なんだ。アテナなら、精霊の時と人間の時、両
方で術を行使した経験がある。さだめの事を考えても、終焉の花婿
の事を見ても、どうやら俺は精霊に比較的近いらしいからな。上
手く行けば、護身程度の術なら使えるだろう」

「わかりました！ そういうことなら、お手伝いします！」

「ああ、頼む。だけど、今日はもう遅いし……そろそろルインが来
るころだ。アテナ。今日のところはここまでにして、また手伝つて
くれ」

「はい、もちろんです！」

すっかり興奮してしまったらしいアテナは、何やら上機嫌で部屋
を出て行ってしまった。というか、俺がルインと話すると言ったこ
とも忘れてるっぽい。普段ならまず引つかかるところだったろう
に。

「それにしても……俺の力、か」

人間界と精霊界を繋ぐ力。重宝してはいるのに、今まで気になら
なかったのも不思議な話だ。最初はトリッパーにお約束の力だ、と
か考えていたんだつたか。

「……今となつちゃ、全ての事に意味があると思えなくなつて
きているな」

いや、恐らくそうなんだろう。少なくともこの力とかに関しては、
希望の奴の計画の一端だ。あいつが無駄なことをするとは到底思え
ない。

「……いや、むしろ最初に俺が終焉の花婿になったのも、元々この
エナジーに理由があるのか？」

こちらに来る時にエナジーが増えた、と見るよりも、その方が筋は通っている気もする。

「何にせよ、ルインと話してみないことにはわからないな」

ルインなら、多分俺よりそう言うことに詳しいだろう。終焉の花嫁であった経験もあるし、なにより俺より精霊に関しては博識だ。

「にしてもルイン遅いな……」

コンコン。

「噂をすれば、って奴か。入っていいぞ」

「失礼する」

静かに扉が開き、平素と変わらぬ様子のルインが入室してくる。

しかし、やはりどこかその表情は硬い。

「話があるって言ってたよな？ どうする、ここで話すか？」

「……中庭へ。ここだと、他の人が来るかもしれない」

「聞かれたくない話、か？」

「二人きりが望ましい」

「わかった。行こう。中庭だな？」

「……ありがとう」

ルインは薄く微笑んで軽く頭を下げた。

「ルインも、大分表情豊かになってきたな。いいことだ」

「貴方のお陰。……行こう」

「ああ」

そして俺は、ルインに導かれて、城の中庭へと降りるのだった。

第四期第九話「精霊の力」(後書き)

こんな話を書くと、これからアルカナは能力者バトルものになるのか！？と思われそうですが、そんなことはありません。別にガチバトルはしませんよ。能力つばいのは出てきますが、それでは、悠でした！

第四期第十話「理解者と宿敵」(前書き)

十話目です。ルイン様回。かなりラブ度とシリアス度高し。この回は力入れて書きましたね。結構頑張りました。

第四期第十話「理解者と宿敵」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第四期第十話「理解者と宿敵」

アテナとの話を終え、部屋にやってきたルインに連れられて、俺は城の中庭に。そういえば、ここにはまだ来たことがなかったな。

「へえ、綺麗なもんだな。月明かりだけで、こんなに明るいとは思わなかった」

よく手入れされた庭草や庭木には、小さなホタルのような虫が躍っている。蒼銀の月明かりとのコントラストがとても綺麗だ。

「……………」

ルインは、しばらく無言で庭の草花を愛でていた。

「それで、話つて？」

「……………さっきは、彼女と何を話していたの？」

「さっき？ アテナか。ああそれは……………って、お前の話はいいのか？」

「……………後回し。多分、長くなる」

「わかった。丁度、お前にも意見を聞きたいと思っていたところだからな」

ルインの話は気になるが、急かしてもきつと話してはくれないだろう。なら、先に俺の話をするのもいいか。

「ああ、俺の力とデュエルエナジーに関する話だったんだが……………」

俺は、さっきアテナと話あったことを全てルインに伝えた。

ルインは、やはりしばらく考え込むと、静かに俺の考えを肯定した。

「多分、貴方の考えている通り」

「やっぱりか……」

俺の中にある、巨大なデュエルエナジー。そしてその性質、さだめという相性のいい器の存在。全てが性質の悪い偶然という名の鎖によって繋がれた運命。

「ってことは、曲がりなりにも既にゲートという形で術を行使している俺には、術が使えるのか？」

「それはわからない。使える術には適性がある。私は力の総量が多くて、精霊としての位も高いから、ある程度応用は利く。でも例えば、天使の子の場合、反魂……即ち蘇生術系統についての適性に偏っていて、それ以外は殆ど使えない筈」

「なるほどな……」

RPGで言う、個人個人の属性見たいなものだな。

「……けど、もし貴方の推測が正しければ、貴方は私と同程度には万能に力を使えるかもしれない」

「そうだな。そうなるだろう」

人間である以上、どうしても限界はあるだろうが……。

「後は……貴方は既に、世界を繋ぐ力に目覚めている。恐らく、一番適性があるのはそれ」

「転移や移動、繋ぐ力か」

危なくなったら人間界へ離脱……。

「……ま、今更だけど、つくづく俺は主人公っぽくないよな。いざとなったら逃げるしか脳のない主人公様ですか」

「貴方らしい」

「そりゃどうも」

普通に考えたら褒め言葉とは思えないルインの反応だが、なんとなくその響きに優しげな物を感じた俺は苦笑と共にそう返す。

「……ま、下手に抗う術を持って殺されるより、逃げることで助け

られるならそつちのがいいか」

「……やっぱり、貴方らしい」

「そっか」

しばらく、無言の時間が流れる。静かな闇夜に、風と虫の声だけが響いている。

心地良い、な。

ルインとのこういう時間は、とても気持ちが良い。ある種、ユキちゃんと同じような安らぎも感じる。

「……いつかもあったな。こうやって、ルインと二人きりになったときが」

俺は思い出していた。初めてルインに……他人に自分の心を打ち明けたあの時のことを。

ルインの世界を思い出す。ボロボロに崩れた家屋。陽の差さない空。息吹を感じぬその世界で、俺はルインに心中を語った。

「あの時から、まだ一年くらいか。濃い一年だ」

「本当……」

ルインは頷いて、此方に寄り添う。

「話って、なんだ？」

「……貴方のこと」

ルインは、中庭の中央まで進み出て、此方を振り返った。月光に照らされたその姿は、この白に飾られていたどの名画よりも美しく、幻想的に見える。

そして、ルインは俺を鋭い目で見つめる。その何処か剣呑な輝きに、俺は一瞬怯んだ。

「貴方は、もう限界」

ルインは、強い、咎めるような視線で俺を睨む。

「……限界、か。何を根拠に？」

普段通り、だったはずだ。今のところ、そんな雰囲気は出してない筈。

「……私には、隠せない」

「どうだかな」

俺は歩いて、ルインを通り過ぎる。何故か、今は真正面から顔を見られたくなかった。

「いつか、私の世界でも話した筈。貴方の心は、決して皆が思うようなものじゃない。既に枯れ、壊れ、死んでいる」

「心が死んでいる……か」

改めて言われると……キツイな。

「でも、俺は普段通りだぞ？ 確かに、今日までの強行軍で心身共に疲れちゃいるが、限界だって言われるほど酷使はしていない」

「誤魔化さないで」

「取り着く島もなし、か」

「お互い様」

「確かにな」

やれやれ、だ。

「妹の狂気」

ルインは、肩をすくめる俺には構わず、言葉を続けてきた。

「天使の失踪」

「……」

「終焉の闇、本体の真実」

脳裏に、ユーキちゃんが消えてしまったあの日が思い起こされる。

「お姫様の消滅」

ピク。

「あれがきっかけ。あの時、貴方の被る仮面ヘルメットが、一瞬剥がれた。今も、完全には被れていない」

「……………」
「そして、貴方は自分の父親、家族すらも切り捨てて、今ここに
いる」

「…………やめる」

「一年。たったの一年で、貴方は一体どれだけ傷ついた？ もちろ
ん、彼女たちの存在が、救いになったことは多くある。でも、それ
以上に、貴方は…………」

「やめる…………」

「皆、離れた。貴方のために、貴方の傍から消えて行った。理由は
様々。でも…………」

「やめてくれ…………」

「貴方が好きだから、皆…………」

「やめろって言ってるだろ！」

「貴方は…………」

「うるさい！ それがどうした！？ 例えそうだったとして、何の
意味がある！？ お前は、お前は どうするんだ！？ お前も、ルイ
ンも消えるのか！？ 俺の傍から！ 俺の、ために…………」

爆発し、抑えきれなくなった感情。こんなこと、言いたくもない。
ルインに指摘された俺の心の闇。それを引き出された、ルインへの
怒り。その全てがごちゃごちゃになって、頭の中が掻き回されそう
な気分になる。

フワツ…………。

「私は消えない」

そんな、俺の心を包み込むように、背後からルインに抱きしめら
れた。

「私だけは、絶対に、貴方から離れない。例え、そうすることで貴
方がまた傷つくとしても、絶対に」

「ル、イン…………」

「…………改めて、言う」

ルインは、俺を抱く手を一層強めて、俺の耳元で、宣言する。

「私はルイン。女神ルイン。御堂切を愛し、守り、貴方と一緒に未来を一番に望む」

「ルイン……」

初めて。

「初めて、名前で呼んでくれたな……」

「私は、女神だから。特定の人を名前で呼ぶことはない。でも……」

貴方だけは……。

「貴方だけは、何度だって呼んであげたい。セツ、セツ、セツ……」
想いを込めて。精一杯の愛情で。

「私は、妹のように、貴方の理由にはなれない」

さだめは、俺にとっての生きる理由。心の在り方そのもの。

「私は、天使の少女のように、貴方を支えることもできない」

アテナは、俺の心を支えてくれている。

「騎士たちのように、貴方を守ることできない」

希冴姫やエースは、俺の心と、戦いでは体まで、守ってくれている。

「終焉の少女のように、貴方を癒せない」

ユーキちゃんは、俺の心を癒してくれた。

「だから……」

ルインは……。

「私は、いつでもセツの傍に居て、貴方の心を理解する。貴方の、心の理解者になる」

ルインは、いつでも俺のことをわかってくれていた。俺の心が崩れそうな時、必ず。

「私にしか出来ない、セツへの献身。お願い。私の心が言っているの。貴方は、もう……」

首筋に、滴が流れ落ちた。

俺は、そっと体に回されたルインの腕を掴む。

「……ありがとう。ルイン。でも……」

休めない。

「ルインは、きっと俺自身にもわからないほどの深淵まで、俺のことを理解してくれているのかもしれない。でも、まだ休めないんだって……。」

「今、休んだら……倒れたら、きつともう、立ち上がれない気がするんだ」

一度崩れてしまえば、もう、戻らない。

「だから、倒れるのは、泣くのは、全てが終わってからだ。今はただ、前へ。がむしゃらにでもいいから、前へ……!!」

前へ、進むしかない。

「大丈夫。心も体も、とつくの昔に沸点超えてる。今更どうにかなりやしない」

もう、罅が入っているんだ。俺の……仮面。

「だから、また外したりしたら、今度はもう、被れない」

「それでも……！ それでも私たちは、貴方を愛する！ 守る……！」

初めて聞く、ルインの涙声。俺は、苦笑して言った。

「女の子に守られるなんて、恥ずかしくって駄目だ。憤死しちゃうルインの腕の力が強まった。

「お、おいルイン。少し、苦しいぞ」

しかしルインは、俺の声には答えず、腕の力も弱くはならない。

「私にはわかる。精霊の力、セツは護身術がどうと言っていたけど、本当は……」

「……ああ、そうなんだろうな」

「戦うつもり。いざとなったら、私たちが力で逃がしてでも、一人で」

そう、かもな……。

「それは……私たちは望まない！ 絶対誰も、望まない……！ お姫様のことでわかってる筈……自己犠牲は、ただの自己満足」

「ああ、そうだな……」

だから、俺は希牙姫に一発かましてやらなきゃ気が済まない。そ

れは、身に染みて分かっている。
でも。

「いざそういうことになった時、そうしないでいられる自信がないな」

頭で、理屈でわかっているとしても、どうにもならないことがある。

「希冴姫の気持ち、わかっちゃまうんだよなあ……」

刺し違えても。命を賭けて。そんな陳腐で、どんな世界でも、必ず間違っているその選択を、それでも俺は選ぶだろう。

「ルイン、言ってたよな。決着をつける相手がいるはずだって」

「……」

「終焉の闇とは……ユーキちゃんとは、俺が決着をつける。なに、死んだりはしない。逃げる方法はあるんだ。そんなに心配するな」

「貴方は……セツは、私たちの全てなの」

「ルイン……」

「貴方にとって、私たちはそれぞれ、心の在り方であり支えであり守護者であり癒しであり理解者。でも、私たちにとっては貴方一人が……その全て」

「……」

「貴方は、セツはいなくなっではいけない。それは私たちにとって、全てを失うことと同義。決して許容出来ることじゃない」

「大げさ……じゃ、ないんだろうな」

アテナは、帰って来てから殆ど俺に依存している。今夜部屋に来たのだって、結局はそういうことだろう。ルインも、今の告白を考えれば相当だ。さだめに至っては言わずもがな。アイツは生まれた時から全て俺を中心に世界を回している。

けど……。

「確約は、できないな……」

「セツ……！」

「悪い。でも、わかっているんだろ？ ルイン」

「っ……」

俺の言葉に、唇を噛んで俯くルイン。そう、わかっているんだ。俺を説得することはできないって。

「さだめは……俺の心、その在り方そのものだ」
さつきルインが言った通りに。

「だから、俺はアイツを守るために、世界だろうが終焉だろうが敵に回す。例え、アイツ自身がそれで苦しんだとしても、俺の力の及ぶ限り。……その対象が、広がったんだ。さだめだけでもそうなのに、アテナや、ルイン。お前たちをも守るためなら、俺はきつと躊躇わない」

「……わかっている」

血を吐くような声音のルインの腕を解き、ルインと向き合う。

「泣くな。俺は、涙が見たくてお前に感情を取り戻させたわけじゃない」

それでも涙が止まらないルインを軽く抱きしめ、背中をポンポンと叩いてやる。

「ほら、笑え。泣き笑いでも、ただ泣くよりはずっといいぞ？」

「……そんなの、不細工だから嫌」

「ならこうしてやる。それなら見えない」

「……貴方に見せなきゃ、意味がない」

「なんだ。見せたいのが見せたくないのかどっちだよ」

「……ばか」

「うお、そういう台詞この体勢で言うなよ。破壊力でかいんだからな」

「冗談めかしてそう言うのと、やっとルインは少し笑ってくれた。

「貴方程じゃない」

「なんだよそれ。人を誑しみたい……でも、ま」

「違うの？ みたいな目を向けてくるルインに苦笑しつつ、思う。

「お前たちを笑顔に出来るなら、何でもいいか」

「っ……！！」

「……ルイン？」

「っ貴方は……間違いなく女誑し」

「断言かよ」

「プレイボーイ」

「意味、同じだろ」

「ジゴロ」

「だから、変わらんだる意味」

「鬼畜変態雑食」

「おい待て今のは聞き捨てならん。特に、なんだ雑食って！」

あたりかまわず食い散らかしているようなニュアンスを感じるぞ！

少し軽くなつた空気の中、ルインがまた真面目な表情をして、俺の目を見つめる。

「セツ、貴方は……」

「ん？」

「全て、終わつたら……」

ルインが何か言いかけたその時、強烈な圧迫感が俺たちを襲つた。

「っ！？」

「なんだ!？」

慌てて二人飛び退いて、圧迫感を感じた先を見る。てつきりさだめ辺りが嫉妬してきたのかとも思ったが……状況はそれどころではなかった。

「……いや、さだめとどつちがマシかは微妙なところだが」

「非常時。その比較は後にして」

中庭、城の渡り廊下の向こう。ゆつくりとこちらに近づいてくる

何者かの気配。ガシャン、ガシャンと重厚な鎧を纏つた足音と共に、

“それ”は姿を現した。

「……余の居らぬ間に、何処とも知れぬ男と睦言か？ 女神よ」

「……!」

ルインが目を見開き、続いて顔色を失う。

「貴方は……!？」

「ほう、忘れたわけではなさそうだな」

「……忘れない。忘れるわけがない」

「ルイン？」

「……私にも、決着を着けるべき相手が来たみたい」

まさか向こうから来るとは思わなかった。とルインは苦々しげに吐き捨てる。

いつの間にか月を隠していた雲が、徐々にその姿を消し、鎧を身に付けた相手の姿を、その月明かりで照らし出した。

「お前は……！？」

ガシャン。

その体を、フルプレートアーマーで覆い、その手に長大な槍戦斧を構えた精霊の姿を、俺はよく知っていた。

「デミス……！！」

ルインの、呪詛のような声が齒軋りと共に聞こえる。『終焉の王デミス』。それは、ルインの世界、最後の王。野心に溢れ、終焉と共に世界を滅ぼした、終末の王。

兜をつけて尚感じられるその傲慢な瞳が、俺たちを睥睨していた。

第四期第十話「理解者と宿敵」(後書き)

次回がデュエルになることはわかるとは思いますが、一応注意しておく。次回、とんでもないオリカが出ます。改訂前を見ている人は知っていると思いますが。アルカナにしては珍しい、確実にチートなオリカです。色んな意味で、OCGとか無理な奴。

それでは、悠でした！

第四期第十一話「終焉の花嫁ルイン」(前書き)

十一話目。ここにきてようやく、第二期で張った伏線回収。題名の通りです。

第四期第十一話「終焉の花嫁ルイン」

アルカナへ切り札の騎士へ

第四期第十一話「終焉の花嫁ルイン」

「『終焉の王デミス』……」

「セツ、手を出さないで。奴とは、私が決着をつける」

私は、多少呆然としていたセツを背中に庇い、目の前の男に相対する。

「その男は、我が主が執心の小僧か。まさか貴様までが執心だとは思わなかったぞ。ルイン」

「……もうメロメロ。だから大人しく消えて」

「そうはいかぬ。大人しくするのはルイン、汝の方だ。まさか忘れてたわけではあるまい？ 余との婚約の儀を」

「は？ 婚約？」

困惑したようなセツの声。誤解されては堪らない。私は慌てて反論した。

「貴方が勝手に決めたこと。私は了承した覚えはない」

「ならぬ。余の言葉は絶対だ」

その傲慢な態度に、私は目を細めて殺気を向ける。

「……たかが王ごときが、女神である私の断りなく支配者気取り？ けれど、私の殺気は奴にとっては心地良いだけでしかなかったらしい。喜悦の気配。」

「よい怒気だ。そうとも。如何に女神であろうとも、我が覇道の前

にはただ恭順のみ。もし、立ちほだかると言うならば……」

奴の持つ戦斧が変形し、デュエルディスクとなって左腕に装着される。

「力尽くでも、ひれ伏させるのみ」

「……わかりやすい暴君。こちらは、元よりそのつもり」

私も、自らの手にある杖をディスク型にし、腕に装着する。

「ルイン」

「……大丈夫。任せて」

「わかつてる。俺は、どうすればいい？」

セツの目に、不安の色はない。彼は、信じてくれている。私のことを。なら、言うことはひとつだけ。

「見ていて。私を。私の……戦いを」

「わかった。決して目は逸らさない。見届けるよ。お前の決着を」

彼の言葉に、私は知らず微笑んでいた。ああ、思い出した。いつか、過去に居た私だ。

「……さあ、始めましょうか。昔日の残響、かつての王」

「始めようか。遠からぬ未来、我が妻となりし女神よ」

「「デュエル!!」」

「私のターン、ドロー！ 私は『儀式魔人プレサイダー』を攻撃表示で召喚。ターンエンド」

『儀式魔人プレサイダー』 ATK1800

「余のターン、ドロー。ふん、儀式魔人か……温いわ！ 手札から儀式魔法『奈落との契約』を発動！ このカードは全ての闇属性儀式モンスターの儀式に使用できる儀式魔法。更に、余が贄とするのは『儀式の供物』！ 一枚で闇属性儀式モンスターの贄となるカードよ」

「……来る!？」

私は、奴自身の召喚に対して身がまえた。

「ハッ！ まだ余が出る幕ではないわ！ 余は『破滅の魔王ガールンドルフ』を攻撃表示で召喚だ！」

『破滅の魔王ガーランドルフ』 ATK2500

「っ!？」

フィールドに現れた奈落から、禍々しい姿とオーラを持つ魔王が現れる。

「どうだルインよ。自らと同じく破滅の號を持つ魔王の姿は？ 効

果発動！『破滅の魔王ガーランドルフ』が儀式召喚に成功した時、

このカードの攻撃力以下の守備力を持つモンスターを全て破壊する

！『破滅の囁き』！」

魔王の両腕に集約した闇が、私のプレサイダーを呑みこむ。

「更に、ガーランドルフは破壊したモンスターの数×100攻撃力がアップする！ 行け、魔王よ。ルインにダイレクトアタックせよ

！『破滅の波動』！」

「ぐうあつ……あつ!？」

ルインLP1400

「ルイン！」

「だい、じょうぶ……」

「くくく。余はカードを一枚セットし、ターンエンドだ」

「わ、たしのターン、ドロー！」

流石に、闇のゲームで2600ダメージはキツイ……！

「私は、手札から永続魔法『昇華する魂』を発動。このカードは、

儀式召喚に使用されたモンスターを一体、手札に戻すことが出来る」

「慈悲深いことだ。生贄にされた愚民などを手元に戻すか」

「なんとでも……言えばいい！ 私は『マンジュ・ゴット』を召喚

！ デッキから『エンド・オブ・ザ・ワールド』を手札に加え、発

動！『マンジュ・ゴット』と墓地の『儀式魔人プレサイダー』をリ

リースし、手札から『破滅の女神ルイン』を攻撃表示で召喚！」

『破滅の女神ルイン』 ATK2300

フィールドに、私……違う。かつての私が召喚される。

「『昇華する魂』の効果により、儀式に使用した『マンジュ・ゴッ

ト』を手札に戻す」

「ほう、いつ見ても美しい姿よ。しかし、貴様では魔王の攻撃力には遠く、及ばない」

「……そう遠くもない。魔王の急所は見えている。手札から装備魔法『ダグラの剣』を『破滅の女神ルイン』に装備。攻撃力を500ポイントアップさせる」

『破滅の女神ルイン』 ATK 2300 2800

「む……」

「バトル。『破滅の女神ルイン』で『破滅の魔王ガーランドルフ』を攻撃！」

「この瞬間リバーストラップ『生け贄の祭壇』を発動！『破滅の魔王ガーランドルフ』を墓地に送り、その元々の攻撃力分のライフを回復する！」

デミスLP6500

魔王が祭壇に呑み込まれて行く。私の攻撃はリセットされ、相手の場はガラ空き。

「っ!?!」

「ルインよ。貴様の効果、よもや余が知らぬとも思ったか？どちらにせよ直接攻撃を受けるならば、自らのモンスターを糧とした方が効率的だ」

「……なら、私は『破滅の女神ルイン』でダイレクトアタックする」
「ぐっ!」

デミスLP3700

「そして、私は『ダグラの剣』の効果でライフを回復」

ルインLP4400

これで、序盤のアドバンテージはとった。でも……プレサイダーの効果も無意味になった上、奴のライフは……。

「私はターンエンド」

「フッ、流石に我が女神よ。一筋縄ではいかぬと見える。だが、余とてこれでは終わらぬ！余のターン、ドロー！余は手札から『マンジユ・ゴット』を召喚。効果によりデッキから『エンド・オブ・

ザ・ワールド』を手札に加える」

「っ…………！」

「今度こそ…………来る！」

「儀式魔法『エンド・オブ・ザ・ワールド』。余は『マンジユ・ゴツト』と手札の『終焉の精霊』を生贄に…………」

「っ…………！」

『マンジユ・ゴツト』に、あの忌まわしい精霊の影が取り憑いて行く。その様子が、かつての終焉を思い起こすようである…………

「ルイン！」

「っ…………あ」

「落ち着け。あいつの呪縛から、完全に逃れるための戦いだ。俺もついでに」

肩に、セツの腕が回される。

「…………ありがとう」

肩に乗る手に自分の手を重ねる。セツの温かさが身に染みだ。

「さあ、ひれ伏すがよい！ 余自身、王の降臨ぞ！」終焉の王デミス…………！」

『終焉の王デミス』 ATK2400

中庭の草木が抉り取られ、死滅していく。彼と共に見た、美しい光景が。

「っ…………！」

それが、本当にかつての世界の終焉を彷彿とさせて。

「ルイン…………」

でも、体を感じる温もりが、かつての恐怖をやわらげる。

「効果発動！ ライフを2000ポイント支払うことで、余を除く全てを終焉に！」終焉の嘆き…………！」

デミスLP1700

私のフィールドに存在するかつての私、『ダグラの剣』『昇華する魂』が終焉の力に吞まれ、崩れ去っていく。

「さあ、王の裁きを受けるがよい！」ジ・エンド・カタストロフ…………！」

「！」

「くっああ!？」

「ぐ……!」

ルインLP2000

私の傍にいた所為で、セツまでが闇のデュエルのダメージを負う。でも、私は今更、そのことを非難したりはしない。ありがたく、その支えを享受する。

「ふはは! ターンエンドだ! さあ、大人しく余の寵愛を受けよ! 女神!」

「お、断り……私の、ターン。ドロー!」

く……かなり、体が辛い。奴の一撃は、やはり相当なものだった。回復していなければ、軽く4000超のダメージになるのだから当然だけど。

「ルインよ。王の情けだ。その男と共に我が主の元まで来るがいい。然すれば、今後一切、此方からは手を出さぬ」

「だ、れが……!」

「これは女神のためを思っ言っている。余の目的は女神。そして我が主の目的はその男。余は寛大だ。我が元に来るのならば、その男との交わりとて認めよう」

「……………」

「何も悪いことはない。我が主は、その男のみを望んでおられる。世界を終焉に呑み込むそのお力も、その男がいればそうそう発動させんだろう。世界も救われ、我らの目的も叶う。何が不満だ?」

「……もう」

耐えきれなくなり、怨嗟の音が口から洩れそうになった時、私よりも先にセツが口を開いた。

「もう、黙れよ。お前」

「……小僧。余は貴様に発言を許可した覚えはない」

「黙れって言っただろ。さっきから聞いてりゃ、ルインのためだのなんだのと。……違うだろ? ルインのためじゃない。全部、お前

らのためだ」

「何を言うかと思えば……余の、王の慈悲がわからぬのか。我が主も、何故このような……」

「お前らはいいだろうさ。全て自分の望み通りだ。言うことはない。ただどな、俺たちからすればそんなのは、どれだけ妥協を重ねてもハッピーエンドにやなりやしないんだ」

……そう。セツの言う通り。奴の提案には、何一つ旨みもない。そんな提案に乗れる筈もない。

「何故だ？ 貴様とて、我が主を嫌ってはおるまい？ いや、むしろ少なからず好意も持っていた筈。女神との関係もそのままであり、と言っている。何が不満だ？」

「決まってるだろ。俺が好きだったのは“ユーキちゃん”であって、お前の主、“終焉の闇”じゃないんだから。それに、あの嫉妬深い終焉の闇が、俺とルインの仲をそのまま継続させる？ あり得ないな」

もし、そんなことが許されていれば、彼は元の世界でも、一年前にも、妹の暴走で苦しむことはなかった筈なのだから。

「だから、お前の提案はクソ喰らえだ。ルインはお前と、望まぬ婚姻。俺は姿形だけ似せた“偽物の”ユーキちゃんに囚われ、いずれその不興を買って世界は終焉……ほら見る。お前の提案の先にはバツドエンドしか残ってない」

故に、この交渉に乗る価値はない。

「大体お前、王がどうたらこうたら言っているが、恥ずかしくないのか？ お前、さっきから我が主がどうって、王だなんだと言いながら他者に頭下げてるんだぞ？」

「貴様……っ！」

「……かつての貴方は、野心と傲慢に染まった暴君だった。でも、今はどうやらそうじゃない」

セツの言葉で、私もわかった。今の奴は……。

「今の貴方は、偉ぶっているただの餓鬼。欲しいモノが手に入らな

くて、ダダを捏ねている我儘坊や」

「っ！ ルイン貴様あー！！」

「今の貴方に、私たちは負けはしない」

「くっ……だが、貴様のガラ空きのフィールドで、これ以上何が出来る！？」

「……貴方は、何もわかっていない」

「なんだと！？」

「貴方が嘲笑った儀式魔人が、魂が、私に希望を与えてくれている。私の手札とあなたの手札。それが、全ての命運を別つ鍵となる」

「っ！？」

私の手札は四枚。そして、奴の手札はゼロ。

「……儀式使いなら、手札の温存は基本中の基本。臣民を使い潰すだけの王に、未来はない」

「ぐ……」

「私は、手札から『マンジュ・ゴット』を召喚……デッキから儀式魔法『過去への郷愁』を手札に加える……」

「なんだ、そのカードは……？ 余は、知らぬ！」

「更に手札から魔法カード『死者蘇生』を発動。墓地から『破滅の女神ルイン』を特殊召喚する」

「くっ……なんだ、なんだというのだ！？」

「そして儀式魔法『過去への郷愁』を発動。フィールドから、『破滅の女神ルイン』を含み、レベルの合計が12になるように生贄に捧げる」

『破滅の女神ルイン』と『マンジュ・ゴット』が光の中へと消えていく。

「過去への想いが、私に力を与えてくれる。思い出した過去。それは忌むべきものではなく……。思い出の中の私、『慈愛の女神ルイン』！」

『慈愛の女神ルイン』 ATK2500

フィールドに、純白の衣を纏う私が現れる。

「こ、これは……かつての、女神……?」

「過去の私は慈愛を司る。墓地のモンスター一体につき、ライフを200回復する。墓地のモンスターは二体。よってライフを400回復」

ルインLP2400

「くっ……攻撃力が、余を上回ったか」

それだけで終わると思っているなら……浅はか。

「これは、私の過去との決着。これだけじゃ、まだ決着はつけられない」

そう、まだ……役者が足りない。

「……『慈愛の女神ルイン』の効果発動。ライフを2000ポイント支払い、自分か相手の墓地から、通常召喚可能なモンスター一体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚する」

ルインLP400

これは、乗り越えなくてはいけない再現だから。

「ルイン……まさか、お前!？」

セツが、何かに気付いたように私を驚愕の目で見つめる。

「私が選択するのは……『終焉の精霊』!」

「なんだと!？」

私が、私が呼び寄せた。王は、デミスはその寄り代となっただけ。自らの欲に、野心に付け込まれ、世界を滅ぼす元凶となった。

「私はもう一度、この手で全てを終わらせる!『終焉の精霊』!」

私のフィールドに、あの忌まわしい影の精霊が。震えそうになる腕を、セツが優しく支えてくれる。

「そ、して……私は手札から『融合』を発動……『慈愛の女神ルイン』と、『終焉の精霊』を融合する……」

純白の私に、影が取り憑く。ああ……。

「馬鹿な……これは!？」

今でも、鮮明に蘇る。遠き日の絶望。

「……終焉の鐘の音が……遠く、響き渡る時。破滅の扉は開かれる

……世の落日を見るがいい！ 融合召喚！『終焉の花嫁ルイン』！

『終焉の花嫁ルイン』 ATK2000

漆黒の衣を身に纏い、全てを滅ぼす毒を撒く。

「こ、これが……終焉の花嫁。ルインの……過去の姿。一体、どんな効果が……？」

これで……終わる。全てが。

「私の……『終焉の花嫁ルイン』の効果を発動する」

この、効果は……。

「このカードが融合召喚に成功した時、このカード以外、ゲーム中に存在する全てのカードをゲームから除外する。フィールドも、手札も、墓地も、デッキすら、全てに等しく終焉を……」

「なっ!?!」

「馬鹿なっ!?!? そんな、そんな馬鹿げた効果が……」

「その代わり、このターンのエンドフェイズ時に、私はゲームに敗北する」

それでも……つまりはこの攻撃で終わりにすればいいだけ。

終焉の花嫁の攻撃力は2000……相手の残りライフが2000

以下なら、勝ちが決まる。

「ま、待て……ふざけるな……こんな、こんな終わり方が……」

「遍く全てを終焉せよ! 『アビスフォール・ディザスター』!」

「つつっ!?!」

地べたに座り込み、手を大地に落とした私から、終わりの謳が紡がれた。

「おおおおおおおおおっ!?!」

デミスどころか、全ての存在を巻き込み、崩壊を促す絶対破滅の力。それに抗えるものはいない。

「そして、これで終わり。『終焉の花嫁ルイン』で、プレイヤーにダイレクトアタック。『デイスパー・シャウト』!」

「ぎ……っああああああああああああああああああ!?!」

デミスLPO

「眠りなさい。哀れなる王。過ぎた野心は破滅を招くと、その魂に刻んで」

輪廻の裁きを、座して待つといい。

私は、手の中から消えていく、かつての罪科を眺めつつ、王の最期を看取るのだった。

「っ……く」

「ルイン！」

「大丈夫……ちょっと、肉体的にダメージが大きいだけ」

「脂汗流して言うことじゃないだろ!？」

デュエルの後、崩れ落ちそうになったルインを慌てて支える。

「……ホントに、大丈夫。精神的にはナチュラルハイ」

「……それはそれで、心配になってくるんだが」

ともかく、大事はないようで安心した。

「お兄ちゃん!!」

「ルイン殿!!」

闇のデュエルに気が付いたのか（まあ、あれだけ派手にやっていたれば誰でも気付くか）、さだめたちが駆け寄ってきた。

「……ネイキッド。お前なんでパンツ一丁なんだ？」

「いや、就寝前の筋トレを……って何故揃って引く!？」

「汗臭い。見苦しい。汚らわしい」

「ごふっ!？」

「ルイン、その三段活用は奴には酷だぞ……」

「お兄ちゃん、大丈夫!？ 貞操は無事!？」

「なんで言うに事欠いて真っ先に貞操の確認なんだよ！ まずは怪

我の有無を確認しろよ!」

「だってこんな真夜中にルインと二人きりだったなんて……もう五ラウンドくらい終わっていてもおかしくない……」

「俺はどんだけ早いんだ!?　じゃなくて、お前は心配するベクトルがおかしい!」

「まったくアテナは……夜にお兄ちゃんの部屋に行ったってだけでも許し難いのに、それどころかこんな重大な危機を見逃すなんて……」

「ふう……私だって少しテンパってたんですよ。でなければこんな状況を見逃す筈が……」

「なんてこった。アテナもさだめと同意見なのか。」

「……貴女たちは失礼」

「だってルインだよ!?!」

それが失礼だろう。ちなみに、俺的にはルインのところをさだめに変えるとしつくりくる。

「……でも、そこまで言うのならお望み通り」

「はっ!?　エマージェンシー!?!」

さだめの言葉に何か反応する間もなかった。

「ん……」

「「ああー!?!」」

唐突に、唇に柔らかな感触。アテナとさだめのものらしき悲鳴。間近に迫ったルインの端正な顔。

「……ん、ゴチ」

満足そうなルインの微笑み。膨れ上がる闇と光のオーラ。

「死ねい!」

「何しているんですかあ!?!」

咄嗟に身を引いたルインと俺の間を貫く光の砲撃と闇の爪。

「……危ない。一応闇のデュエル後でグロッキー」

「関係ないよ!」

「不意打ちは卑怯だと思えます!」

そして始まる人外バトル。俺はと言えば……。

「で、何故貴様はそんなに落ち込んでいる」

「……いや、今更不意打ちでキスされたくらいじゃうるたえなくな

っている自分の感性に絶望していた」

「良かったな。これで、名実ともに貴様は誑しで鬼畜王だ」

エースの言葉が胸に突き刺さる。が、コイツにやられっぱなしは性に合わん！

「……言っておくが、お前も原因の一端だからな？」

「な、なんのことだ？ 我は、その……知らん！」

顔を赤くして立ち去るエースに、少し溜飲を下げた俺に、さだめたちから逃げるルインが目線を向けてきた。

『ありがとう。貴方のおかげで、私は過去を乗り越えられた』

声に出さずとも、伝わったその言葉。それに俺は、こっり返すのだった。

『どういたしまして。女神様』

第四期第十一話「終焉の花嫁ルイン」（後書き）

明らかにパワーカードです。が、一応対処法は幾らでもあります。まず出し難い。オリカ紹介を見てもらえば分かると思いますが。そしてライフが2000以上だと負け確定。奈落食らうと終わり。和睦でも終わり。威嚇する咆哮でも終わり。融合召喚にチェインして墓地からネクロ・ガードナーでも負けます。その他諸々。それでも明らかにゲームバランスがおかしくなるのは確定なのでチートです。それでは、悠でした！

特別編「第二回アルカナ人気投票結果発表！」（前書き）

はい！ というわけで、結果発表です！

いや〜今回は中々荒れましたね〜。結果は本文を見ていただくとして……皆さま、人気投票への御協力、ありがとうございました！
改訂により、人気投票に出馬している内数人が登場しなくなりま
した。見たことない名前があって誰それ？ とか思ったら、居なく
なったキャラなんだなーと思って下さい。尚、四期にて登場してい
るキャラも存在します。

特別編「第二回アルカナ人気投票結果発表！」

アルカナ〜切り札の騎士〜

特別編「第二回アルカナ人気投票結果発表！」

さあ、それでは始まりました第二回人気投票結果発表〜！

「どんどん〜ぱふーぱふーにゃ！」

おお、お久しぶりですライムさん。すっかり特別編での出番が定着しあばばば……。

「それもこれも、作者さんがボクを出さないからでしょー！？ お仕置きサンダー！」

あばばばっ！？ と、とにかく結果発表です！ いいじゃないですか今回はライムも票入ったんですから！

「ま、まあね！ やつとボクの魅力をわかってくれる人が現れたんだよ」

……若干同情票っぽくもあつ……いえ、なんでもありません。とりあえず、今回の作者票は……。

一位 さだめ

二位 エース

三位 ルイン

でした〜。

「ありゃ？ ルイン姉さん下がっちゃったの？」

いえ、キャラとしては相変わらずルインが一番好きなんですが…

…今回は、書くときの書き易さに焦点を当てて考えてみました。

「やっぱり、サダコは書き易い?」

ええ……ってなんだそのニツクネーム!? 一文字変えるだけで
とんでもないのになってるんですが!?

「ボク的に、ぴったりなネーミングだと自負していたりするよ!」

いや、まあ……そこら辺はノーコメントで。それはともかく、や
っぱりさだめは書き易いですよ。彼女が出てくるシーンは殆どタイ
ピングが止まりません。殆ど勢いで書くことができます。

「そりやまた……」

同じく、セツとの掛け合い的な意味でエースも書き易い。キャラ
的に気に入っているのもあって、超優遇……というか贖罪しており
ます。

「ボクとはエライ違いだね」

コホン。で、ルインはマイフェイバリットなので三位には少なく
とも入ります。

「なるほどにや〜第一回二回共に作者票の入らないメインヒロイン
(笑)が不憫と言えば不憫にや〜」

それはその、はっはっは……結果発表!

「誤魔化したにや……まさかまた作者さんから始まるなんてふざけ
た展開はないよね?」

どうやらなさそうです。が、ものすっごい形で始まったりはしま
すが。

「そこはかとなく不安」

ではでは、まずは総評から。総投票者数33人(作者込み)!

投票されたキャラ数28人(やっぱり作者込み)! 思いもよらぬ
大盛況となりました今回、まずトップバッターを務めるのは……。

第二十四位 パンタレイ トリプルバインド 幽鬼 遍在する縛鎖 カオティックリベリオアサルトヴェロシティバインドメ
縛鎖 ランコリ 得票数1ポイント 暴風極限 疾風解体 虚無

「って誰にゃ!?!」

左から順に、ネイキッド、アンデット使いのアホA、朱雀、ヴァーミリオン、スピードウォリアーとなっております。(参照:二つ名メーカー)

「凄まじい二つ名! とうか、誰にゃアンデット使いのアホAって! 二つ名カッコイイし!」

ほら、剣士と凜のイベントで出てきた雑魚キャラです。ワーム使いの足を引つ張った拳句、特に何もできずに負けたオベリスクブル一所属のエリート(笑)。

「そんな奴に貴重な票を渡すなあああ!!!」

ほら、アンデット使いと言うところが評価されたいですよ?

「そんなにもんは知らん! そして何故スピードウォリアーとか、一話しか出てきてないような奴が票貰っているの!?!」

速さが足りない! と言わんばかりのマシガントークがお気に召したらしい。

「ミリーも人気落ちてるし……」

出番、少なかつたからなあ……。

「ボクも含めて、そこら辺は要改善だよ」

第十九位 ファンタメンタルベイジカルクレイドル 螺旋結社 サブリミナルスパイク 叛逆密室 バラノイドディスト 埋没する撃発 リックエクリプス 呪機関 リックエクリプス 得票数2ポイント バラン 軀形中毒 リックエクリプス 禁

「で、誰なの?」

左から、剣士、零、ユーキちゃん、火蓮、灼夜です。

「……ユーキにゃん、ボクより下なんだね」

……出番って、偉大ですね。とうか、火蓮と灼夜が同数なのはもう運命なんだろうか……。

「個人的には、火蓮は睡眠中毒だと思う」

それは確かに。……さて、朱雀も含めて、セツ以外のメイン男子はこれで出揃いました。

「前は剣士君にしか入ってないこと考えれば大健闘、といったところかな？」

ですね。ユーキちゃん……。

「出番は何時になるのじゃ？」

いえ、ぶつちやけすぐにでも出番はあるんですが……。くそう、読者の意識からも消失し始めたか！

「本編からしてしてるよ」

第十五位

ブラッディループ
永久叫喚

クレイジーエラフショ
焦熱覚醒 貫通曲鎖

フローズンリバー
水銀肅清

得票数

3ポイント

「で？」

はいはい！ 左から私、マキユラ、ゴーズ、キングです！

「なんでテメエが取得ポイントアップしているにや〜！！」

ぎゃらつぷ！？ し、知りませんよ！ 投票してくれた読者様方

に言ってください！ そして、ライムはもつと上に居るんだから文句言わない！

「……ま、まあ確かに？ ボクは作者なんかよりもつともつと人気があるみたいだから？ 許してあげてもいいかな！」

なんとまあ扱いやすい……。ゴホン。大体ですね。考えてもみてください。冥府の使者と処刑人に挟まれて私。どうしよう！ 死の香りしかしない！ キングは頼りにならないし！

「確かに……。とてつもなく濃厚な死亡フラグの香りがするね」

きつと処刑された後冥府に連れて行かれるコンボですよ！ 死にたくない！ 死にたくない！

第十四位

インフィニティテンベスト
極限惨劇 得票数4ポイント

「さて、次は誰？ すっごくキケンな香りがする二つ名だけど……」
ジャックさんです。

「似合わなっ！」
極限の惨劇ですからねえ……あの執事騎士さんには確かに似合わない。

「あ、何気に初の単独だね」
ですね。二位票を二つ獲得しての4ポイントです。
「流石執事騎士。決して一位票は貰わず、控えめだね」
偶然でしょうが。

第十一位

ライドルームオートマダンシングパラダイスショットガンシャッフル
忘却刻印 電波脳髓 電子絶望 得票数5ポイント

「さてお次は……」

「はいはい真打ち登場！ とばかりにシャルナお姉さんがやって
きましたよー！！」

「帰れにや」

「酷っ！？」

「私、だね。っていうか、電波脳髓でダンシングパラダイスって……
…なんか私、電波拾って頭が逝っちゃった挙句、ラリって踊って
いる危ない人みたい……」

「おおっ！？ 凜の嬢ちゃんと同数か！ こりゃいいぜ、脇役とし
ちゃ、これ以上ない結果って奴だ！」

というわけで、左から順に、シャルナ、凜、バグロスでした！

「おおお……遂にお姉さんにもスポットライトが……」

「ほぼ全て同情票、というか全部三位票のカワイソウな駄女神でしたにゃ」

「そんな言い方ないじゃない！ あたしだって票もらったら嬉しいのよ！？ それに、全部三位票で5ポイントってことは、逆に言えば五人もあたしに票を入れてくれてるってことなんだから！」

シャルナは、アテナに感謝しておきましようね。彼女の同情票云々の台詞がなければまたゼロ票だったかもしれないし。

「あつたり前！ そうでなくとも、アテナには毎度感謝してますとも！」

「さあさあさあ！ こんな駄女神は放っておいて、次次次〜！！」
テンション高いなあ……次に行く前に、凜とバグロスさん、コメントをどうぞ。

「ええつと……ありがとうございます？」

何故疑問形。

「いやその、実感が湧かなくて……」

「俺に投票してくれた猛者たちよ！ 感謝するぜ！ これからも、俺の脇役街道を応援ヨロシク！」

……サイクロイドもそうだが、何故機械族の奴らは人気投票に誰よりもノリノリなんだろう。

第十位 カオティックブラスト
爆撃断片 得票数6ポイント

「にゃふ〜！！ ライムのターン！」

というわけで、第十位はライムで6ポイントでした。次行ってみよう！

「待ってよ！？ なんでボクのターンそんな異常に短いの！？」

いやだって、ライム今回散々出ているじゃん。

「そんなの関係ないよ！ あの駄女神に、一票差で勝利したボク！
ライムのコメントを求めたりとか……」
求めなくても散々コメントしてるでしょうが！

第八位

ウロボロスワールド 呪禁風景 シャドウブレイク 虚無騎士 得票数8ポイント

「誰あの虚無騎士シャドウブレイクつて！ なんかカッコよくない!？」

「す、すみません私です……」

「カイエン!？」

ちなみに、前者は希冴姫です。今回はお休み。死んでますし。

「あの……あっさり死んでいるとか言うのは、どうなんでしょうか
?」

いいんじゃないでしょうか？ 流石に死者までここに引つ張り出すのはちょっと。

「まあその分カイエンさんの出番が増えたってことでいいんでない
? よっ！ 虚無騎士!」シャドウブレイク

「それはやめてください!」

二つ名とか、実際に呼ばれたら恥ずかしいことこの上ないよね。

「そうだね。永久叫喚の悠さん」ブラッディルネ
ぐはっ!？」

第七位

バロックピエロ 頹廢運命 得票数9ポイント

「今回は……」

エリアルさんです。ほらっ！ 物陰に隠れていないで出て来なさい!

「はうう！ ま、待つてください！ あ、あたしなんかがこんな、七位だなんて……ね、姉さんに申し訳なくて出れません！」

ちなみに、エリアはゼロ票。

「妹強っ！ っていうか、まともな出番は土下座の回一度だけだった筈なのに、この順位だよ……」

土下座マイスターってのは、新しい属性かなんかなのでしょう。かし、知りませんよう……あ、でもカイエン様に勝てたんですね。あたし」

はい。土下座マイスター対決は、ギリギリでエリアルに軍配が上がりました。

「それは、少し嬉しいかもです」

土下座対決はまたの機会にお願いしますね！。では、続いて第六位！

第六位 カオスゲート 亡骸 得票数11ポイント

「俺っちが六位！？ おいおい、集計ミスかなんかじゃねえのかい！？ 前回より下がっているじゃねえかい！」

「す、素早い登場……ボクが何か言う前に飛び出してきた……」

ミスじゃないよボロチャリ。大体、サイクロイドが人気投票に参加しているってだけでも異常事態なんだよ！ しかも六位とか、とんでもない大健闘しておきながら何を文句言っているんだ！

「まあ、俺っちはほとんどが一位票。二位票は一つだけ。三位票はなしってところで十分、アルカナのアイドルとしての地位を証明しているってもんよ！」

してねえよ！ 確かに殆ど一位票だったけど！ 少なくともアイドルをサイクロイドに任せるほど、アルカナはキャラに困ってないよ！

「あ、あの〜ボクは……」

「ま、つい最近俺たちの活躍の場を書いてくれたことは感謝するぜ！」

「偉そうだよ！ お前、全キャラの中でトップクラスに偉そうだよ！ 何様だ！？」

「サイクロイド様よ！」

「黙れ二輪！」

「う、うわ〜ん！ サイクロイドが出てくるとボク喋れないー！！」

第五位

ブレデターレクイエム
虚構戦機

得票数15ポイント

「ぐすつ……さて、次は……」

「ブレデターレクイエム 我らが主人公、虚構戦機こと、セツくんです！」

「その呼び名はやめろ！」

「うわ〜んキリリン〜！！」

「ああもうよしよし。くっそう、まさか奴と並びの順位になるとは……悪夢か？ これは」

「憑かれていますね。前回よりは順位が下がってしまいましたが、その辺は？」

「うん？ まあそれは妥当なところだろ。上位四人は流石に、今散々活躍しているしな。別に俺自身の順位はどうでもいいんだ。それより……」

「それより？」

「……上の奴らが、順位のことと揉めてそのとばっちりが来るのが怖い」

「……なるほど。では、その上位四人の発表と参りましょう！ ライムさん、そろそろ復活ヨロ。」

「うう……アシスタントとしての使命は果たすよ……だから、出番

を……」

さ、さあ行ってみましょう第四位！

第四位

ヴォルカニックレクイエム
無双鍵盤 得票数17ポイント

「また物騒な二つ名が出てきたね」

さて、その物騒な二つ名の持ち主は……。

「……私」

今現在大活躍中の、ルインさんです！

「私、また四位……」

いやまあ、いいんじゃないですか？ 前回と比べて、順位に変動ないのはルインさんくらいのもんですし。

「……上位三人は異常」

「天高くそびえ立ってるねえ……こりゃ勝てる気がしないや」

「……彼と並んだのは嬉しい。二つ名も何処か似通っている。満足しておく」

二人してレクイエムですからね。では、一気にポイントが跳ね上がる第三位！

第三位

ハウリングインフェル
幽閉残響 得票数28ポイント

「うっわ。いきなり11ポイントも……」

ルインとの差が凄い。まあ、最近の目立ち方から考えれば、ある意味当たり前ですかね……。

「というわけで、第三位は現在怒涛の活躍をしているエース姐さん」

「貴様まで姐さんはやめろ！」

銀髪、ツンクール、若干M。いい属性だ……。

「黙れ！」

まあ兎に角、前回の4ポイントから凄まじい躍進を経たエースさん。感想をどうぞ。

「……まあ、悪い気はしない。ただ……」

「ただ？」

「これは、その……あれか？ わ、我は完全に、ヒロイン扱いになっっているのか？」

読者の中では、ヒロイン扱いどころかメインヒロイン扱いしている方もいます。

「……それはその、困る」

「ええ〜！ いいじゃんいいじゃんキリリンの嫁だよ〜？」

「よ、嫁ではない！」

友達？

「そ、そうだ」

……ま、そういうことにおきましよう。

「そういうこととはなんだ！？」

さあ！ とうとうやって参りましたアルカナ人気投票第二回のクライマックス！ 最早残っているのは例の二人のみ！ ある意味で因縁の対決となりました！ 最後は二つ名と同時に本名で呼ばせて頂くことにしましょう！ それでは、第一位&第二位は……。

第二位 スバイラルサーフィス 平面理論 御堂さだめ 得票数30
第一位 アリゲイタイシャツフル 暴かれた錯誤 天音アテナ 得票数32

「や……」

「な……」

「やりました〜!!」

「なにいいいい!?!」

はい、ヒロイン二人の、歓喜と驚愕の叫びを聞いていただきました。

「やりました! 遂にやりましたよセツ!」

「ああ、良かったな。アテナ」

「ば、馬鹿な……」

「あー、まあこんなこともある。あんまり落ち込むな。さだめ」

「うう……お兄ちゃん!」

まあ、どうやら投票理由とかを見る限り、さだめは前回一位だし、どうせ票は入るから入れなくてもいいだろう的な……。

「なんつじやそりゃあああああああああ!?! そんな理由でさだめ負けたの!?!」

ええまあ。加えてアテナは、今度こそ一位に! という応援が多々……。

「実力じゃないじゃん! ある意味同情票じゃん! 組織票じゃん!」

「組織票は違うだろ……」

「別にアテナ最近それほど活躍してないじゃん！ さだめ活躍してるじゃん！」

「し、失礼な！ 最近の話ではさだめさんそれほど活躍してませんよ！ マキユラ惨殺したくらいじゃないですか！」

「アテナだって終焉の精霊殲滅しただけじゃん！」

「……なんだろうな。こんな血生臭い会話している二人がツートツプって」

ちなみに、投票者数では、アテナ14人。さだめ13人。エースが14人です。

「さだめさんエースさんにも負けているじゃないですか！」

「量より質だよ人気投票は！」

「どっち道私には負けてます！」

「くっ……このダメっ娘！」

「だ、誰がダメっ娘ですか！」

「シャルナの駄女神っぷりは、流石アテナの精霊だよね！」

「しゃ、シャルナと一緒にしないでください！ いくらなんでも不愉快です！」

「あ、あれ？ なんかお姉さんのところにまで飛び火しているような……っっていうか、とばっちりで一番酷い扱っているのあたしじゃない!? ねえ!?」

「いつまで言い争いしているんだあいつらは……まあ、被害がこっちに来なくて良かったとおこっ」

ですな。

「ところで、アテナが一いつてことは……」

はい。ご褒美短編はアテナになります。おお、これはまともにラブの予感が……。

「ほ、ホントですか？」

「やめて！ お兄ちゃんとさだめ以外の女のラブなんて……」

「残念だったなエース。前回同様三位にご褒美だったらお前の短編だったのに」

「わ、我はそんなもの欲しくもなんともない。大体貴様とのら、ラブなんて……」

「ハッ!? またエースさんがツンデレ発動させている気配!」

「貴様は何だ!? レーダーか!?!」

「お兄ちゃん関係では、衛星すらも超える!」

「私とセツの短編……こ、これはもう……」

「ヤツちゃうしかないわよ。アテナ」

「おいこらその駄女神! アテナに何を吹き込んでいる!?!」

「恋愛成就のおまじないよ!」

「ウソ吐け明らかに13歳に吹き込むには犯罪チックなこと言うてただろ!」

「まあね!」

「なんでも胸張って言えば許されると思うな! いいか、法律的にも精神医学的にも、13歳以下に対する性的接触は犯罪であり、病気として処理されるんだからな!」

「大丈夫! アテナの精神年齢はとっくの昔におばあさんよ!」

「それはそれで問題あるだろう!?!」

「ちょ!?! 誰がお婆ちゃんですか誰が!」

「婆……ぶっ」

「さーだーめーさーん!?!」

さて……どうやらあちらは收拾がつかなくなってきましたね。

「だね。避難して来て良かったよ」

ともかく、今回の人気投票も大盛況の内に終わることができました。本当にありがとうございました。

「ました〜!」

アルカナ自体はそろそろ物語も佳境に近づいてきています。多分ラスボス後にもいくらか後日談として続くとは思いますが……今後

とも、応援よろしくお願い致します。

「します！」

……こらライム。私の言葉を後追いするのはやめなさい。

「ちえ、楽しかったのに。まあいいや。今回は、ボクも結構沢山票が貰えて嬉しかったよ！ また次回もよろしくね！」

まあその次回人気投票があるかはわかりませんが……その時はまた、何卒よろしくお願いします。

それでは、今回の人気投票を司会を務めさせていただきました、作者こと悠と……。

「ライムでした〜！ またね〜！」

特別編「第二回アルカナ人気投票結果発表！」（後書き）

二つ名メーカー……面白い。前から知ってはいたんですが、友人との会話で久々にやってみまして。面白いからアルカナでも出してみようと。ちなみに、作者の本名でやってみたら眼球ハラノイドでした。眼球……眼球って……。

それにしても、まさかアンデット使いのアホAにまで票が入るとは……作者すらも殆ど忘れていましたよ。

ユーキちゃん……（涙）。サイレントしちゃっているなあ……。

あ、それと前回言い忘れましたが、終焉の花嫁ルインの見た目は基本的に黒桜をイメージしていただければ大体伝わると思います。正にそんな感じですから。

それでは、悠でした！

特別編「アテナんち 前編」(前書き)

こんにちは。

アテナの御褒美短編です……が、何やら話が滅茶苦茶に膨らみそうな……前中後編になってしまいそうな予感すらひしひしと……！
タイトルからわかるように、アテナ実家訪問編、どうぞお楽しみに。……あんまり甘くはなりませんでしたすみません(土下座)。

特別編「アテナんち 前編」

アルカナ〜切り札の騎士〜

特別編「アテナんち 前編」

「……悪いアテナ、もう一度だけ言ってくれませんか？」

俺は、目の前で顔を真っ赤にして迫るアテナに、聞き間違いだったという希望を込めて尋ねた。というか、聞き間違いであれ。

「で、ですから！」

しかし、そういった希望は断ち切られるのが世の常なわけで……。

「こ、今度の連休……」

でも、だからって……。

「わ、私の家族に会って欲しいんです！」

これは、いくらなんでもあんまりだ。

「早すぎる……というべきなのかどうなのか……」

いや、よく考えてみたら、俺って実はアテナの家族構成とか、何も知らないな。

「アテナって、家族居たのか」

「い、いますよそりゃあ。ミリーちゃんみたく自然発生したわけじゃないんですから」

「きゅ？」

寮の俺の部屋。アテナの言葉に部屋の隅っこで積木をして遊んでいたミリーが反応してこっちを見る。その瞳は「なあに？ 僕のこと？」とか言いたげだ。

「可愛いです」……」

そんなミリーを、目にハートを浮かべる勢いでアテナが見つめる。相変わらずミリーはアテナのことが苦手のようで、「きゅっ！」とそっぽを向いてしまったが。

「きゅーう？ くあー……きゅーう……ZZZ」

一通り遊んで、ミリーは欠伸を一つしてからコロソと寝転がってしまった。相変わらず自由に生活してるなあ……。

「そ、それでセツ。会ってくれますか？ 私の家族……」

「あー……」

やっぱり話は逸らせなかったか。どうしたもんか……。

「大体、なんで今になって突然？ 何かあったのか？」

「いえっ別に大したことじゃないんですけど……」

「？」

「この間、電話でお父さんと話していた時、ついぼろつとセツのこと話しちゃって……会ってみたいってお父さんが……ごめんなさい」「いや、っていうかもしかして、今まで俺のことか家族に話してなかったのか？」

むしろそつちの方が意外だ。アテナならとつくの昔に話していると思っていた。

「それはその……色々あり過ぎて、そもそも実家に電話やメールをすることすら忘れていたと言いますか……」

「……そついうことが」

そりゃ、父親としては気が気でないだろう。娘が連絡を怠っていた間に悪い虫がついたとあれば……。

「ところで、アテナ失踪とかしてたはずだけど、その時には家族から何か言われなかったのか？」

「あ、それは多分、お父さんたち、失踪の事実自体知らされてないんじゃないかと。希望さんが手を回したらしくて」

「……なるほど。大事になるのを避けたわけだ」

それでも、家族にくらいは伝えるべきだったと思うが。

「今度の連休はお兄ちゃんも帰ってくるから丁度いいだろうってお父さんが」

「マテ。今さりげなく聞き捨てならない言葉を聞いた」

「え？」

「……お兄ちゃん？ 兄がいるのか？」

「あ、はい。言ってませんでしたか？」

「聞いてない」

なんとというか……俺もアテナも、色々と間違っている。そんな基本的なことも知らずによくもまあここまで関係を……。

「大丈夫です！ お父さんもお母さんもお兄ちゃんも、皆優しいですから！」

「はは……」

わかってない。わかってないぞアテナ。その優しさが果たして害虫（俺）にも向けられるかどうかをわかっていない。

「えーと……今更だが、アテナの家族構成とか教えてもらってもいいか？」

「はい。というか、今まで言っていなかったのが逆にびっくりです。俺もだよ。」

「お母さんの名前は天音詩織。お仕事は洋服のデザイナーさんです。服飾デザイナーか。ふむ……。」

「お父さんは天音皐。I & amp; I社で、カードデザイナーをやっています」

デザイナー一家なのか。アテナは。

「そしてお兄ちゃんが天音アポロ。今は本土の大学でプログラミンを学んでいます」

アポロ……また凄い名前だな。

「本当は、私の名前もお兄ちゃんに因んでアルテミスとかにしたかったみたいですけど……流石に日本人の名前でそれはないだろうってことでアテナになったみたいです」

アポロの時点で十分普通じゃないが、確かにアルテミスは日本人

の名前じゃないな。

「……で、今度の連休だったか？」

「はい。えっと……来て、くれますか？」

「……逃げたと思われるのも癪だしな」

気乗りはしないが。何故アテナが勢い込んで誘ってくる時は一々意味深なのか。アテナの部屋でデートしかり、二人っきりで温泉旅行しかり。遂には家族にご紹介とか。

「……重いッ！ アテナのイベントは悉く重いッ！」

「え……わ、私、重いですか……？」

「ああいや違う！ アテナが重いか、想いが重いかそういう意味でなくて！ イベントが重厚過ぎる！」

さだめが、自分のフラグは脆いとか何とか言っていたが、確かに一撃一撃の重さはアテナの方が段違いかもしれん……。

「というか、連休に本土へってことは、泊まりなのか？」

「はい。二泊三日で、家に。ダメですか？」

「いや……うん。とりあえず夜は眠れそうにないなと……」

「え、そ、そんな……」

「顔を赤らめているところ悪いが、そういう意味じゃないんだよ耳年増」

むしろ顔が青くなる話だ。護身用に幾つか持って行くか……。

「そうと決まれば、対策会議だな」

「え？ どういうことですか？」

「アホ。アテナの両親に挨拶するのに無策で挑めるか」

敢えて彼女の、とは言わない。心情的にはその通りだが、一応事実としては違う……事になっている筈だ。

「普通に挨拶するだけでもいいと思うんですけど……」

「……こちら辺はまだアテナも子供か。わかってない。」

「じゃあ聞くが、アテナ。お前父親に俺のことなんて紹介した？」

「えっ？ そ、それはその……」

動揺して目をキョロキョロさせるアテナ。まあ、大体この反応で

わかった。

「……若干関係深めて誇張しただろう」

「うぐ……」

はいビンゴ。

「防弾チョッキはいるだろうか……?」

「いらなと思います。というか、なんでそんなもの持ってるんですか。ウチの家族に拳銃持ってる人はいません!」

「甘い。最近は何に入れようと思って手に入らないものなんて殆どない。現にさだめは持っている」

「持ってるんですか!?!」

「昔撃たれたからな」

「撃たれたんですか!?!」

「マグナムで」

「マグナム!?!」

「翌日の体育がラグビーでな。流石にあれはしんどかった」

「体育でラグビー!?! というか撃たれた翌日になにやってるんですか! 病院は!?!」

「弾は貫通してたし、止血と痛み止めすれば問題ない」

「大アリですよ!」

「俺は撃たれ強いんだ」

「字が違います! というかそんなレベルじゃないですよ!」

「まあそんな過去のことはどうでもいい」

「今の、過去のことってサラッと流していいところでしたか!?!」

「とりあえずは対策だな……」

「ホントに流しちゃうんですね……」

別に、あれ以降防弾チョッキは必需品になっただけのことだ。大した事件じゃなかった。それより対策だ……とりあえず危険を避けるためには気に入られることが第一……。

「だがここで好きなモノをお土産に、なんてあっさりした考え方や死ぬと考えるおこづ」

「あの、マグナムで撃たれても翌日ラグビーするようなセツを殺せるほどウチの家族外れちゃってませんよ？……人から」

「服飾デザイナー……カードデザイナー……よし、それなら……後は兄の方が……」

ぶつぶつと、自分の中で計画を立てて行く。アテナに幾つか質問をして（何故かアテナは疲れ切った表情だったが、何かあったのだろうか？）、とりあえずは解散した。後は俺が頑張るだけか……。

そして、運命の日。

「セツ……」

「ん？ どうしたアテナ」

「かつこいいです……」

「そうか？ なるべく悪印象与えない程度にコーディネートしてきただけだが」

とりあえず第一印象で悪印象を与えるわけにはいかないの、珍しく服装や髪形にも気を使った。別に結婚の挨拶に行くわけでもないし、若者らしいラフな服装だが。

「ま、母親は服飾デザイナーなんだろ？ だったらまず服装で印象は変化する筈だ」

計画の一段階目。とりあえず、与しやすい方からつき崩していく。「セツ、そんなに私の両親に気に入られたいんですね。なんか嬉しくなっちゃいます！」

「……まあ、そういうことにしておいてくれ」
現実自己保身のためだが。

「なんだろう……どちらにせよ俺は墓場に向かうような気が……」
現実の墓場か人生の墓場かは別にして。

その後俺とアテナは定期船でアカデミア島を出発し、本土へ。アテナの道案内に従って、電車とバスを乗り継ぐこと約一時間。

「こつちです。セツ」

「あの、アテナ……俺には、こちら辺が超一級の高級住宅街にしか見えないんだが……」

アテナは思っていた以上にとんでもない家の生まれなのかもしれない。家に着いたらメイドさんが居る勢いだぞこれは……。

「そんなことないですよ。お手伝いさんは一週間に一度くらいしか来ませんし」

「来るのかよ！」

間違いない。アテナは結構お嬢様だ。自覚なしの。

「あ、ここです！」

アテナが案内してくれたのは、周囲の邸宅と比べても何ら遜色ない、というか、大きさ自体はそれほどでもないが、清潔感のある、センスのいい建物だった。

ピンポン。あ、呼び鈴の音はそれほどお屋敷っぽくない。

『はい』

「お母さん？ アテナです。帰って来ました」

『あら、お帰りなさい。じゃあ例の男の子も……』

「はい。連れてきましたよ」

『あらあら……うふふ。入ってらっしゃい。お父さんもアポロも帰って来ているわ』

なんだそのうふふ、は。激しく不安になる笑い声を上げないで欲しい。

「セツ、行きましょう！」

「……ああ」

何だろう。何故かわからんが、既に精神的にかなり崖っぷちだ。

「お帰りアテナ。遠かったでしょう？」

「お帰り。久しぶりだねアテナ。そして……」

アテナ家へと足を踏み入れた瞬間、俺は背中に冷汗が止まらなくなつた。

「いらつしゃい。御堂くん……だったね？ ようこそ我が家へ。歓迎するよ」

ぐ……さだめ相手にプレッシャーには慣れてるつもりだったが、これはなんていうか、そういうのとは質が違う！

「あ、それじゃあ私、お茶入れてきますね」

アテナがそう言って台所に駆けて行く。……さてそれじゃあ、始めようか。元の世界で、演劇部の切り札と呼ばれたこの俺の演技を！
「……始めまして天音さん。お噂は真中会長より伺っております。御堂切です。どうぞよろしく」

「ほう……！ 真中会長というと、あの大財閥の。知り合いかね？」

「極々個人的なものです。少々縁があります。奥様も、服飾ブランドの最大手『Angel』の方で御活躍とお聞きしております」

「あら、ご丁寧に。中々頭の良い子ね」

「それほどでも。ところで……」

ここまでの流れはシミュレーション通り。問題はここからだ。

俺は天音詩織さんに顔を寄せ、一枚の紙を見せる。

「あら、これは……」

「個人的に、娘さんにはこういった服が似合うのではと思い、未熟ながらデザインをさせていただきました。如何でしょうか？」

「……っ！ これは……貴方が？」

「一応。俺には妹が一人いるのですが、どうしようもない我儘娘でして。幼い頃から妹の服は俺が作る習慣だったので、ある程度アテナのような娘に似合う服を考えるのは得意なので」

「……中々強かね。でも確かに、これはいいものだね。後でお話を聞かせてもらっても？ 細かいところまでよく作り込んであるから、試作してみたいわ」

「ご安心を。試作品の方も持参しております」

「本当に準備が良いわね。あからさまなご機嫌とりだけど、悪い気

はしないわ」

「ありがとうございます」

むしろ、こういうのはあからさまなくらいが丁度いい。よし、次だ。

「ふむ、妻の次は私かな？」

「ええまあ。天音さんはカードデザイナーとのものでしたので、このようなモノを」

そう言っただけで俺が取り出したのは何枚かのカード。希冴姫たち三銃士とアルカナ。そして『アテナ』の絵違いカードだ。

「これは……プロキシか？ いやこれは……」

「既存カードの絵違いです。絵のデザインは僭越ながら俺が」

希冴姫たちに手伝って貰い、絵のモデルになって貰ったことは内緒だ。それでも、これをアテナに誘われてから二日で描き上げるのはいくら俺でも至難だったが。

「素晴らしい構図だ。なるほど。随分と優秀なようだな」

「あくまで、学生の趣味程度ですが」

「謙遜することはない。プロでもここまででは描けまい。正直今すぐにもI&Amp;I社にスカウトしたいくらいだ」

「あらあなた。それは私の方も同じよ。素晴らしいセンスだわ」

「ありがとうございます」

よし。まず第一陣は乗り切った！ 演劇部に於いて、衣装のデザイン・作成や道具小道具の細かな模様まで、一手に引き受けた経験がここで生きた。

「……無駄スキルとはいえ、侮れないな」

正直、内心バクバクだが。

「だが御堂君」

「はい」

「例えば君が優秀な能力を持っていたところで、娘に近寄ることが許されるとは 思っていないね？」

「もちろん。ただ、役に立たない無能な小僧が調子に乗るな、と思

われたくなかっただけの唯のプライドですから」

ビビったが。今のはかなりビビったが。なんだこのプレッシャー。

「まあ、どうも話によると言い寄ったのはアテナの方らしいが」

「ええまあ、あれは、かなり衝撃的でしたよ」

出会い頭だったからな。告白は。

「けど、あのアテナがねえ……小学校でもモテていたみたいだけど、悉くバツサリやってたみたいなのに」

小学校……何故だろう。アテナがランドセル背負って集団登校していた光景が目には浮かばない。

「モテる、ということならアカデミアでも変わらないですよ？ 俺と仲が良い所為か、俺の住んでいる寮に顔を出してくれることも多いんですが、俺の寮では女神扱いです。あれは既に信仰の域に達していますよ」

俺の報告に、流石に夫妻はぎょっとしていた。ま、どうせこの辺りアテナは伝えてなかった（というか気付いていなかった）だろうと思っただけ。

「……そんなに？」

「ほら、砂漠で干からびかけている人間に、コップ一杯の水を渡したら神様のように崇め奉られるでしょう？ 女日照りの奴らにとっちゃ、わけ隔てなく優しいアテナは唯一のオアシスなんでしょうね」

「なるほど。確かに、アテナは優しい娘だからな」

徐々に夫妻のオーラが薄れて行く。俺の口調も、気付かれない程度の速度でフランクなモノにしていく。

「学業の方はどうかね？ アテナは頭のいい娘だが、流石に高等部の勉強ともなると、な」

「あー、確かに少し苦労はしているみたいです。とはいえ、平均くらいはいつも必ず取りますし、実技試験の方はまったく文句なしでトップランカーですよ」

何しろ半年くらいの間無敗だったくらいだしな。

「そうか、安心したよ」

「お待たせしました」

と、そこでアテナがコーヒーを入れて戻ってきた。

「セツ、お父さんたちのお話終わりましたか？」

「ああ、大体な。ん……ブルーアイズマウンテンか？」

このネーミングに、社長さんの圧力が感じられる。別に普通のブルーマウンテンなんだがな。

「はい。よくわかりましたね」

「まあなんとなく香りだな。……多少蒸らし時間が長かったな。ちよつと苦味が強い」

「あう……やっぱりセツの舌は誤魔化せません。どうしても上手くいきませんね……」

「前に比べれば格段に良くはなってるぞ？ 以前は蒸らしもせずに超薄っぺらいコーヒー出されて愕然とした記憶がある」

「うっ……それはその、知らなかったもので……」

「ま、最初はそんなもんだよ。意外と不器用なアテナにしちゃ、最近結構上手くなって……」

と、そこで気がついた。すっかり素でアテナと会話していることに。

「セツ？ どうしましたか？」

「いや、その……」

恐る恐る、夫妻の方を見る。

「うふふ」

「え」

「まったく。随分と化けたもんだな。御堂君」

しかし、夫妻の反応は予想していたものとは違い、穏やかなものだった。

「なるほど。今のが君の素か。先ほどの演技とは到底思えない程自然なものだったか……」

「今程生き生きとはしてなかったわね。アテナも」

「え？ はい」

アテナはあまりよくわかってないらしい。

「ふう、まったく……所詮小細工は小細工か」

アテナと話始めたただけであっさり役者の顔が剥がれてしまった。ま、結果的には良かったっぽいけど。

「ところで、先ほどの態度が演技ということはわかったが、このカードやデザインは？」

「あ、それはホントに自分でやりました。特技ですんで」

「やれやれ。特技で済まされるレベルじゃないぞこれは……社のデザイナーが見たら腰を抜かすぞ」

「……それは言い過ぎだ」と

「いや、十分食っていけるレベルだぞ。現役デザイナーの私が言うんだから間違いない」

「はは……」

これはあれか？ 遠回しに勧誘されているのか？

「ところでこの服の試作品は？ 持ってきているのよね？」

「ああ、これです。アテナはパツと見清纯系なので、こういうのが良いかと」

「……セツ、なにか余計な一言がついてませんか？」

「そうね。この娘つては誰の影響だか耳年増に育っちゃって……」

「お、お母さん！」

いえお母様。耳年増以前にそもそもアテナはかなりアグレッシブです。とは流石に言えず、俺は曖昧に笑った。

押し倒された、なんて言えないよなあ……。

「あ、そういえば……」

「どうしました？ セツ」

「いや、何か一人足りないなあ、と……」

そこまで言ったところで、リビングの外から妙に慌ただしい足音が聞こえてきた。

「あら、もしかして……」

「ア~~~~テ~~~~ナ~~~~!!」

ドバンツ！ とリビングのドアを蹴破らん勢いで突撃してきたのは、寝癖で妙にはさばさした長髪を軽く後ろで結んだ、中々のイケメンだった。

「あ、お兄ちゃんです」

その一言で、俺はそういえば居たなあ、とアテナの兄、アポロ氏のことを思い出したのだった。

特別編「アテナんち 前編」(後書き)

というわけで、御両親の陥落は大体終わったので次回は兄を陥落させればアテナとの未来はほぼ障害ゼロです。後二年半の辛抱です。というか、ここまでメインヒロインの家族構成謎にして引つ張った作品これくらいじゃないか……？ しかも、大した意味もなく。突然お兄ちゃん出てきましたし。うん。なんで？ 作者が混乱しています。

それと宣伝。また懲りずにオリジナルファンタジー投稿したんで、よろしければ読んでみてください。

それでは、悠でした！

特別編「アテナんち 後編」(前書き)

というわけで、アテナ短編の後編をお送りいたします。……何故か、ギャグになっちゃうんだよねあ……シリアスラブかギャグラブコメしか書けない……。
と、とりあえずどうぞ！

特別編「アテナんち 後編」

アルカナく切り札の騎士く

特別編「アテナんち 後編」

「ア~~~~テ~~~~ナ~~~~!!」

「あ、お兄ちゃんです」

アテナの気の抜けたような台詞と共に飛び込んできた灰色っぽい長髪を軽く結んだ男は、アテナを見て一瞬破顔し、次いで俺を見て般若の表情を浮かべた。

「アテナ！ 久しぶりだ！ 良く帰ってきた！」

「はい。お兄ちゃんも相変わらずそうですね」

「うむ！ 僕は何時でも元気だとも！」

「あらアポロ。帰って来ていたのね」

「なんだ、それならそれでもっと早く顔を出さんか」

「出したよ！ っていうか帰ってきたの昨日だし！ 一緒に夕飯食べたじゃないか!？」

「む？ そうだったか？ どうにもお前が居た記憶が……」

「また僕のこと忘れてたんだろう!？ 道理でアテナが帰って来ているのに僕に声がかからなかったわけだよ！」

「良く気が付きましたね。お兄ちゃん」

「ちよっとコンビニでも行こうかと思って玄関に行ったらアテナの靴があったからね。……同時に、見慣れない男物の靴も置いてあったけど」

ギンツ！ と俺に鋭い目を向けてくるアポロさん。甘い。普通の殺気ならさだめで受け慣れている。俺は軽く受け流した。

「っていうか、朝食だっけ一緒に食べたし、その時にアテナが帰ってきたら教えてくれって言うておいた筈だろ！？」

「そうだったかな……？？」

「お父さん、歳ですか？」

「がふうっ！？」

アテナ、相変わらずツツコミの威力が致死クラスだな。そして今の一連の流れで大体お兄さんの人物像は掴めた。ズバリ、影が薄くて受難体質。

「しかも！」

ビシイ！ とアポロさんは俺を指差す。

「アテナに付いたヘンな虫まで普通に歓迎してるし！」

凄い。夫妻ですらそこまで直截的な表現はしなかったのに。

「ヘンな虫とはなんですか！ セツは……」

「あーアテナ。落ち着け。多分こじれるだけだから」

まあ、アテナの口撃力なら一撃のもとに再起不能なまで粉碎してくれそうな気はするが、それは余りにも哀れ過ぎる。

「アテナだとう！？ キサマ誰の許可を得てアテナを呼び捨てに！」

アテナの許可だよ。と言ったら身も蓋もないのでやめておく。

「私がそう呼んで欲しいって言ったんですけど……」

だからアテナ。俺の気遣いをトコトン無に帰すな。

「ハッ！？ しかもそのコーヒーは、アテナが淹れたのか！？」

「はい。淹れ方はアカデミアで、セツに教えて貰いました」

アテナ。何故そうまでして波風を立てさせる方向に持って行くんだ。どうせ天然だろうが。

「く……コーヒーの入れ方を知っているくらいでいい気になるなよ……どうやって父さんと母さんを籠絡したかは知らないが、僕はそう簡単には……」

うん。凄く典型的なシスコン兄さんだなこの人。

「セツもシスコンですけどね」

「失礼な。俺はアポロさんとは別タイプのシスコンだ」

「シスコンは認めるんですね」

「とりあえず、さだめに彼氏が出来たりなんかした日にゃあ……」

「セツ以外の彼氏は出来ない気がしますけど。いえ、出来ないですね」

言い直してまで断言するな。良いじゃないかIFなんだから。

「とりあえず俺の語彙の許す限りの罵詈雑言を吐いた後、無駄スキルの限りを尽くして地獄ツアーに案内し、全国の晒し者にした挙句に祝福してやる勢いだ」

「今の台詞の何処に祝福する余地がありましたか。というかこれ以上ないくらいにシスコンですよ」

「ほう、その辺りは気が合うな」

「気が合っちゃうんですか!？」

「恐縮です」

「セツ、気付いてください！ 流れ的に、地獄ツアーに案内されるのはセツですよ!」

おっと、つい。

「というかだな。晒し者といえばお前あれだろ！ 以前アカデミアの入学式で妹と銀髪美女の二股かけてた鬼畜界の英雄だろ!」

「忘れた頃に蘇るあの悪夢!」

畜生、さだめとルインめ、すっかり既成事実の偽装建築に成功してやがる!

「というか、アカデミアのラブコメ担当といい、俺の通り名はホントロクなもんねえな!」

「概ね事実だからじゃ……」

「せめて鬼畜界の英雄の称号は返上させていただきたい!」

いやホントマジで。

「あ、でも他にもありますよ通り名。『御堂切、困った時は、無駄スキル』とか」

「それは一般的に川柳っていうんだよ！　っていうか、やっぱり口くいな内容じゃないし！」

「これは、到底否定できない完全無欠の事実だと思えますけど……」
「くっ……まさか料理が出来る上、ボケツッコミまで完璧にこなすとは……御堂切、恐ろしい奴！」

「ヘンに評価上がった!？」

さ、流石はアテナの兄妹……色々と感性が外れてやがる……。

「アテナ！　何か奴の弱点を知らないのか!?　なんかこう、僕が勝負して奴をコテンパンにとちめてやれるようなやつ！」

「お兄ちゃん、その発想滅茶苦茶カツコ悪いです」

「実は俺、早口言葉が苦手で……」

「はっはっはー！　口を滑らせたな御堂切！　ならば早口言葉で勝負だ！　ガガギゴギガガギゴゴギギヤギャガツ!？」

あ、舌噛んだ。

「ガガギゴギガガガギゴゴギギガガガギゴガガギゴギガガギゴゴギギヤギャガツ」

はい勝利。馬鹿め、口を滑らすほど滑舌がいいなら、早口言葉も

楽勝だと何故わからないのか……。

「セツ、それは違うと思います……」

「まあ、饅頭怖いの応用だな」

「ちよつと大人げないです」

「まさかモロに引つかかるとは……」

流石アテナの兄妹。何処か残念なイケメンさんだった。

「セツ、何か今、凄く引つかかる物言いをされた気がします」

「気のせいじゃないか？」

残念なのは事実だしな。

「ぐぐぐ……」

あ、復活してきた。

「く……まさか貴様の苦手分野でも負けてしまうとは……」

「おいアテナ。お前の兄貴、思いつきり信じてるぞ」

「お兄ちゃん、思い込み激しいので……」

「さすが兄妹」

「どういう意味ですか!」

「ええい妹とイチャつくなあ!」

「え、今のイチャついてる内に入るの!？」

「極々普通のやり取りだったと思うが……」。

「息ぴったりだったものねえ」

「さだめやルインとのやり取りも大体こんな感じなんだが……」。

「さだめさんとのやり取りは、少しレベルが違います。割って入る余地がなくて……ちよつと嫉妬です」

「いや、あんな頭悪い会話に嫉妬されても困るんだが……」
「九割下ネタだし。」

「くっ! こうなったらデュエルで勝負だ!」

「そう来たか」

「ある意味必然の流れだが。」

「うえ……お兄ちゃんのデュエルですか……」

「何故か、アテナが凄く嫌そうな顔をしている。」

「なんだ? そんなにおぞましいデッキを使うのか?」

「いえそうじゃないんですけど……まあ、デュエルしてみればわかります。ホント、セツみたいタイプは凄く嫌がるデュエルだと思いますけど」

「俺が嫌がる……?」

「俺の苦手とするデッキ? いや、どちらかというと俺が嫌いなデ

ッキ……しかし、俺はさだめの影響で大半のデッキは受け入れられるつもりだが……」。

「さあ、さつさとデュエルディスクを構えろ!」

「あーはいはい」

「デュエリスト足るもの、いつでもどこでもデュエルディスクは手放さない。実はアカデミアの外に許可なく持ちだすのはダメなんだが、まあそこら辺はなんとでもなる。」

「デュエル!!」

そしてデュエルが始まった。

「僕のターン、ドロー!」

うわ、先攻奪われた。

「はっはっは! いきなり終わりにしてやる!」

「なに!?!」

まさか、ワンキルデッキか!?

「あーやっぱりお兄ちゃん、デッキ変えてないんですね……」

外野からアテナのうんざりしたような声が聞こえてくる。なんだ、

一体何が来る……?

「僕はモンスターを一枚セットし、マジックカード『太陽の書』を
発動する!」

「リバースモンスターか!?!」

だが、そうだとしても一体何を……?

「さあ、見るがいい害虫! これが僕のフェアリットだ! 『ダイ
ス・ポット』!」

「……………は?」

おい……………ちよつと待て。視界の隅では、アテナがあちゃーと頭を
抱えている。割とレアな光景だったりするが、とりあえず今はスル
い。

「さあ、始めようか! 運命のダイスロールを!」

「ちよ……………おい」

「ん? どうした御堂切! 余りの恐ろしさに怖気づいたか!?!」

「先攻一ターン目に『ダイス・ポット』とかテメエタクティクス舐
めてんのかああ!?!」

戦術も戦略もない。ただ純粋に運だけが勝敗を決する。ライフ4
000なら、特に。

「だから言っただけです。セツが大嫌いなタイプですって!」

なるほど。大半のデッキを許容できる俺でもコイツは許し難い。

別にバーン自体はいいが、まったくただの運頼みなこの戯けたギヤ

だ。

「将棋！」

五分後。

「王手。詰んだ」

「ぐはっ!？」

チェスで惨敗したんだから将棋だつて大差ないとは思わないのか。いやまあ、将棋とチェスじゃ意外と違うけどさ。

「オセロ！」

五分後。

「じゃ、これで俺の勝ちつと」

「盤面が黒一色に!？」

俺もびつくりだよ。弱過ぎる。

「囲碁！」

十分後。

「はいこれで終わり」

「畜生！」

作者がルール知らないので詳細は省略。

「麻雀！」

五分後。

「あ、それロン。四暗刻大三元」

「ダブル役満!？」

ぶち抜いた。

「ええい！ 君は完璧超人か!？ こうなつたらなりふり構つちやいられない！ 格闘ゲーム！」

「別に完璧じゃないっつのに……というか、ほぼ自滅の上どれこれも残念な実力だったし」

「うるさい！ いいからさっさとキャラを選べ！」

「……あの、なんか仲良くなつてませんか？」
「はっはっは！ すっかり親友だなあれじゃ」
「男の子ねえ……」
「だっ！？ なんだその動き！？ システム上不可能だろ！」
「ふははははーっ！ この僕の専攻はプログラミングだ！」
「市販のゲームのプログラム書き換えるなよ！ ええいクソ！」
「ぬあっ！？ く、まだまだあ！」
「お兄ちゃん……」
「大人げないわねえ……それでいて負けてるのもあの子らしいけど」
「確かに……」

「ぎゃあああああ！？」
「はっ！ 汚い手を使うからこうなる！」
「ぐ……ならばトランプで勝負だ！」
「なあ、二人でトランプは虚しいだろ」
「スピードとかポーカーならいいかもしれんが。」
「なら父さんたちにも入つて貰えばいい！」
おいこら味方を増やすな。
「それじゃ俺が人数的に不利だろ。なら俺はアテナを味方につけるが文句ないな？」
「なにい！？ 何故アテナがお前の側なんだ！？」
「他に俺の味方に付く人がいないからだよ！ アテナ！」
「あ、はい。私はセツの味方です」
「アテナ何故！？ お兄ちゃんの味方はしてくれないのか！？」
いやだつて、そもそも俺を連れてきたのはアテナだし。
「く、ダメだ。僕にはアテナを敵に回して戦うことは出来ない！」
「なら二人で出来るポーカーにでもするか？ あ、ちなみに俺の主カデツキは【切り札の騎士】だが」

「勝てる気がしない!？」

実際トランプはめっちゃ強くなったしな。希沓姫たちの加護なのかは不明だが。

「アテナ、セツ君。今日は泊まって行くんだろっ？」

「はい。そのつもりですよ」

「ええまあ。御迷惑でなければ」

「迷惑ではない。が、部屋に見張りくらいは許してくれるな？」

「暗殺者でなければ」

「その案は流石に却下したな」

「あつたのかよ!」

「え？ それじゃあもしかして、夜セツの部屋に行っちゃダメなんですか？」

「当たり前だろアテナ！ 何考えているんだ！ 男は野獣だぞ!？」

「セツに限ってそれはいいですよ。というか、むしろ野獣だったならこんな苦労は……」

どちらかと言えば、襲われてるのは常に俺だしな。

「……ふむ。キミはあれか？ ふの……」

「言わせねえよ!？ っていうか違う！ フルメタルの理性の賜物だ!」

それで尚耐えるのが難しいレベルだが。二回は押し倒されたし。言わないけど。

「アテナ。ダメよ諦めたら。よく言うでしょ？ 押してダメなら押し倒せて」

「あんたの影響か!」

「それは既に実行済みなんですけど……」

「アテナも余計なこと言うな!？」

折角黙っていたのに!

「あら、それでも耐えたの？ 凄い自制心ねえ……」

「あんたそれでいいのか!？」

さっきまでの態度は何処に行った!？

「それで？ 彼とは結局、何処まで行ったの？」

「余計な詮索するなよ！」

「えっと、その……キス、まで……」

「アテナさんちよつと黙ってお願い！」

「セツ君。ちよつとお話しようか……」

「父さん、僕も手伝うぞ」

「全ツ力でお断りします！ お話なら今ここで！」

「キス？ 何回？」

「えっと、二回、です」

「あら、意外と少ない。もつと積極的に行かなきゃダメじゃない」

「そしてそつちはもう黙れ！」

これ以上積極的になられたら流石に自制する自信がない。

「ほら、あの反応。きつと後一息で陥落するわ。お母さんにはわかる！」

「そ、そうなんですか？ よ、よし……！」

「気合入れるな！ 血の雨が降るぞ！？」

物理的にな！

結局、事前の準備はあまり意味を為さず、しかし何やら気に入られたらしい俺は、その後アテナ家での二泊三日も無事（と言っているのかわからんが）乗り切り、心身ともに疲れ果てながらも（いつものことだが）、アカデミアに帰りつくことが出来たのだった。

「……またその内、か。なーんか、嫌な予感するなあ……」

帰り際にかけられた言葉を思い出し、げんなりとする。

「それにしても、良かったです。お兄ちゃんたちがセツを気に入ってくれて」

「あれは……気に入られたと言うのか……？」

思い切りアポロさんには目の仇にされていたが。

「そんなことないですよ。お兄ちゃん、凄く楽しそうでした」

「……そうか。ま、確かにあんな人たちが家族なら、楽しそうではあるな」

自分の家族がアレだから、尚更な。

「はうえっ!？」

しかし、アテナは何を思ったか顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「? どうしたアテナ」

「う、その……せ、セツは……」

「なんだ？」

「セツは、私の家族と、家族になりたい、ですか？」

「? ああ、楽しそうな家族だしな」

「……」

深く考えずにそう答えると、アテナは益々顔を赤くして縮こまる。

「……ん？」

ふと、気付いた。

『私の家族と、家族になりたい、ですか?』

『ああ、楽しそうな家族だしな』

まて……まったく深く考えずに口走ったが……これは、見方によ

っちゃ……。

「ま、待てアテナ。勘違いするなよ? あれは単なる感想というか

……決して深い意味は……」

慌てて否定しようとするが、キツと真っ赤になったアテナに見上

げられ、俺は言葉に詰まった。

「セツは、いつでも思わせぶり過ぎます」

「う……いやその、すまん」

「だ、だから……そんな軽薄な口は……こうして、塞いじゃいます

っ!」

「んむっ!？」

「ん……」

飛びつかれたアテナの唇が、俺のそれを塞ぐ。三回目。相変わら

ず意識がスパークするような感覚。

「っ……あ、アテナ」

「か、覚悟してくださいっ。わ、私この三日間で、お母さんに色々

教わりましたから！」

「な、なに？」

待て、あの母親の教えはまさか……。

「お、押してダメなら……。」

「ま、待てアテナ！」

「押し倒すっ！」

がばっ！ ともう心配になるくらい顔を赤くしたアテナが俺にとびかかって……

「させるかあああああっ！！！」

「きゃふっ！？」

来る直前に、見慣れた小さな影がアテナを思いっきり蹴り飛ばした。

ザバーン！

港でのやり取りだったので、アテナは思いっきり蹴り飛ばされた拳句、海に転落した。

「はあ、はあ、はあ……あ、危なかった。本当に、危なかった……！」

「さ、さだめ？」

満身創痍という言葉が相応しいさだめは、すっかりボロボロだった。

「くっ！ ホントに、油断も隙もあったもんじゃない……まさかシヤルナやゴーズ・カイエンコンビまで持ち出してさだめを妨害に走るとは……ルインの援護がなければ間に合わないところだった……！」

まさか、三日三晩戦い続けてたのか。

「ぶはっ！ さ、さだめさん酷いです！ なにも蹴つとばすことないじゃないですか！？」

「問答無用で消さなかったことを感謝して欲しいくらいだよ……！」

まさかさだめ以外に、こんな港のど真ん中で凶行に及ぼうとする奴がいるとは……！！」

それについては同感。というか、アテナは周りが見えなくなっただけだ。

「もう許さない！ アテナ！」

「私だって！ 今日こそ、決着をつけます！」

「望むところ！」

海からびしょびしょになって這い上がってきたアテナと、ボロボロで満身創痍のさだめがぶつかり合う。見るに堪えないドッグファイトが始まったところで俺は……。

「……帰るか」

全てを放り投げてレッド寮に帰るのだった。

「……お帰り。そしていらっしやい」

「何故ここに居る。ルイン」

「貴方の行動は予測済み」

言葉通り先読みされていたルインと、察知して戻ってきた二人との間に再び戦いが起こるのは、最早語るまでもないことだろう。

特別編「アテナんち 後編」(後書き)

こんにちは。

うん。出さないと行ってあったのに、結局最後はさだめオチ。もはや呪い。いや、むしろルインオチか？ まあ、アテナが暴走したのでさだめを出さなきゃ危なかったのが本音ですが。

そしてやっと使い手が！ ダイス・ポット！ 我が魂のフェイバリット！ ちなみにアポロのやった先攻一ターン目からのダイス・ポットは僕の常套手段と化しております。なんて危険。

それでは、悠でした！

特別編「？アルカナクロスワールド5D・SMI？」（前書き）

やっとこさ完成しました第二回コラボ企画特別編一本目。

というか、数えて見たら結局コラボするの五人になっていましたよ。一人増やして四人になっていたのは知ってましたが、数え間違っていました。やると言ったからにはやりますけどね！

とりあえず、一人目はグッチーさんの 遊戯王5D・s mag
ic illusion から主人公リョウVSセツです。あと、
時系列が完全に滅茶苦茶で、普通に希冴姫が出て来たりしますが、
ご了承ください。そうでもないと現在の本編の状況ではコラボ出来
なかつたので。
どうぞ。

特別編「？アルカナクロスワールド5D・SMI？」

アルカナ（切り札の騎士）

特別編「？アルカナクロスワールド5D・SMI？」

「やあ、セツ。元気でいるかい？」

ある休日、俺が珍しく一人で（これがまたホントに珍しい）デッキ調整をしていると、最近はもう見慣れた金の長髪。

「またか？」

俺の言うまた、とは要するに、最早お馴染となった時空の歪のことである。

「また、だ。それも、今回は少々厄介なことになっているようですね。希望はそう言つと、指を三本立てて見せる。

「three、two、one、zero！」

と、希望が無駄に素晴らしい発音でカウントダウンすると同時、俺の目の前に歪が現れた。

「……で、何が厄介なんだ？」

カウントと同時に歪が出現したことには突っ込まず（コイツに関しては突っ込む意味がない）、俺は先を促した。

「今までの歪は、精々パラレルワールドに飛ばすような空間系でしかなかったんだけどね。今回の歪は、加えて時間すらも超えた彼方に飛ばされる。これも終焉の力が強まっている証拠だろうけど……」

「なるほどな。要するに、いつも以上に万全の態勢で行けっことだろ？」

「まあ、そういうことだね。皆の中でも、突出した柔軟性と適応力を持っているセツだから、それほど心配はしてないけど」

「買い被りだ、とも言えないか。わかった。それじゃあ行ってくる。アテナたちに説明は任せるぞ」

「了解。武運を祈らせてもらおうよ」

「ああ。忠告、ありがとな」

ひらひらと手を振る希望にそう答えて、俺は時空の歪に身体を滑り込ませるのだった。

「っと、着地成功」

もういい加減、歪を通るのにも慣れてしまった。尻もちをついたりすることもなく、しっかり着地する。

「さてと、ここは……」

学校……か？

「見た感じはデュエルアカデミアとそれほどの差はないが……ここはあの島じゃないな」

まず、周囲の風景からして違う。アカデミアの特徴的な火山がないし、何処となく都会っぽい。というか……。

「近未来、だな」

歪を通る前に、希望の言っていた言葉を思い出す。あいつは時間がどうこう言っていたから、これは恐らく、パラレルワールドの近未来に当たるのだろう。

「って、パラレルワールドで近未来もクソもない気がするが」

自分で言っていて苦笑する。

「あれ？ 君は……」

「どうしたの？ リヨウ……って」

「ん？ 見たことない奴だな。転校生か？」

「そんな話は聞いてないけど……」

俺がそれからどうしようかと悩んでいると、アカデミアっぽい建物の方から男女四人組が歩いてきた。……どいつもこいつも、またどっかで見たことのある外見しているな。

「はじめまして、だな。俺は御堂切。お前たちの名前を聞いても良いか？」

「ああ。オレはリヨウ。こっちがアリス」

「よろしく願います」

「俺は石井啓斗だ」

「私は武内由里です。御堂さん」

「セツでいい。みんなそう呼んでるからさ」

いつものように自己紹介とそう訂正を入れてから、俺は四人を眺めた。

「それで、セツはどうしてここに？ アカデミアの生徒なの？」

リヨウと名乗った少年がそう尋ねてくる。

「なるほど。やっぱりここはアカデミアなのか……」

「やっぱりって……知らなかったんですか？」

アリスの疑問に頷く。

「ああ。なにしろこの世界に来たのは初めてだから」

「この世界……？」

怪訝そうな顔をする四人。代表してか、リヨウが俺に質問してきた。

「もしかしてセツは、デュエルモンスターの精霊かなにかだったり？」

「精霊？ 俺が？ はははっ違う違う。確かに精霊のことはよく知っているが、俺は精霊じゃないよ」

その突拍子もない質問に、思わず笑ってしまう。さだめやアテナだったら返答に困る質問だっただろうが、俺は胸を張ってただの人間だと言える。……言えるんだよ何か文句あるか。

「って、そうか。この世界に、とか紛らわしいこと言ったのが悪かったのか」

「精霊世界から来た……ってわけでもなさそうだね」

「ああ。精霊界自体には、何度も行ったことがあるけどな。って、それは別に良い。それよりも、折角ここで会ったんだ。少しデュエルでもしてくれないか？」

もちろん、目的はデュエル自体なので、折角ここで会った云々は関係ないが。

「デュエル？ ええと、それは別に良いけど……」

「……素性も知らない奴に言われて、はいそうですかとデュエルできるか」

啓斗がそう気色ばむ。気持ちはわかる。

「ん〜……一から事情を説明すると長くなるんだが、それでもいいか？」

「あの、そのデュエルはオレたちとしなくちゃいけないの？」

「そうだな。今までのルールの的に考えると、リヨウたちの内誰か。流れからすると、リヨウが妥当なところだな」

「オレが？」

多分、だけどな。どうせなら希望の奴に相手も聞いてくれば良かった。

「それで、その事情って？」

リヨウを指名したからなのかどうかはわからないが、アリスが先ほどより表情を険しくして俺を睨む。

「そう睨むな。えーっとだな。リヨウたちは、平行世界って信じるか？」

「……はあ？」

「……というわけで、俺はデュエルして歪を直し、元の世界に帰らなくちゃいけないわけだ。正直突拍子もない話だし、信じられなくても無理はないが……」

「いや、信じるよ。確かに突拍子もないけど、その古い型のデュエルディスクや、過去のアカデミアの制服。それに、妙に現実味のある話ぶりだったから」

「そうか。それは助かる。それで、どうだ？ デュエル、しよっぜ？」

「ああ。オレで良ければ。オレも、過去のデュエリストに興味があるからね」

「過去のカードプールだからって舐めてかかると、痛い目見るからな。気をつけるよ？」

お互いに挑発的な笑みを浮かべて、いざデュエルを……って、
「ちよつと待った！」

「え！？ な、なんだ？」

「そのデュエルディスク、自動でデッキをシャッフルするのか！？」

「まあ……あ、そうか。そのデュエルディスク旧式だから……」

くっ……これがカルチャーギャップか！……後で俺のも改造しておこう。出来ないこともなさそうだし。

「すまん、ちよつと興味あるから、貸してくれないか？」

「おう、俺のを使えば良い。壊すなよ？」

「サンキュ。じゃあ改めて……」

「デュエル！！！！」

「先攻は譲る。付き合って貰った礼だ」

「サンキュ。じゃあ、オレのターン、ドロー！」

さてと……どんなデッキで来るのやら。

「オレは『マジシャンズ・ヴァルキリア』を攻撃表示で召喚！ ターンエンドだ！」

ATK1600

「マジシャンデッキか……俺のターン、ドロー！」

ふむ。マジシャン使いは、何だかんだで周りに居なかったからな……ブラマジガールとやった時くらいか。

「俺は手札から『切り札の騎士 クイーン』を召喚。攻撃表示だ！」

ATK1500

「切り札の騎士？ って言うかそれ、『クイーンズ・ナイト』じゃあ……？」

「俺のパートナーだ。希冴姫」

『セツ様のパートナーを務めさせていただいております。希冴姫ですわ。他の騎士共々、よろしくお願いしますわね』

「そのカード、精霊か！」

「ああ。お前も精霊持っているんだろう？ とりあえず、先に紹介させてもらったよ」

「……でも、攻撃力1500じゃ『マジシャンズ・ヴァルキリア』には勝てない！」

「なら強化するだけだ！ 俺は手札から装備魔法『アルカナソードダイヤ』を希冴姫に装備！」

『さあ、行きますわ』

ATK1500 1800

「ヴァルキリアの攻撃力を上回ったか！？」

「バトル！ 希冴姫で『マジシャンズ・ヴァルキリア』を攻撃！」

ジエム・ハーツ！」

「ぐっ……！」

リョウLP3800

「更にこの瞬間、装備魔法『アルカナソードダイヤ』の効果発動！ 装備モンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊し、墓地に送った時、デッキからカードを一枚ドロウする！ 俺はカードを二枚セット。ターンエンドだ」

「やるな……オレのターン、ドロウ！ オレは手札から『特攻のマジシャン』を攻撃表示で特殊召喚！ このカードは、相手フィールドにのみモンスターが存在する場合、特殊召喚することができる！

更に、特殊召喚時に、相手フィールドの魔法・トラップカードを一枚破壊する！」

「なにっ!？」

「出た！ リヨウの黄金パターン！」

「オレは右側のカードを破壊！」

破壊されたのは『魔宮の賄賂』か。正直痛いな……。

「良い読みしてるよ」

「お褒めに預かり光栄だよ。それじゃあオレの精霊も見せてあげるよ！ 『特攻のマジシャン』をリリースして『ブラック・マジシャン・ガール』をアドバンス召喚！」

ATK2000

「っ！……ソイツか」

さっきの思考がそのまま的中しているとは。

『こんにちは！ マナです。よろしくね！』

「更に、手札から魔法カード『賢者の宝石』を発動する！ コイツは自分フィールド上にマナがいる時、師匠であるマハード、つまり『ブラック・マジシャン』を特殊召喚することができる！」

「それはさせない！ トラップ発動！」

「なにっ!？」

最初に『マジシャンズ・ヴァルキリア』。この時点で、マジシャンデッキなことは確信していたからな……保険を張っておいて良かったよ。

「カウンタートラップ『マジック・ジャマー』！ 手札のカードを一枚捨てて、魔法カードの発動と効果を無効にし、破壊する！ 俺は手札から『冥幼竜ヴァーミリオン』を捨てて『賢者の宝石』の効果を無効化する！」

『きゅー!』

「くっ……もう一つもカウンタートラップ……絵札の三銃士デッキかと思っていたけど……」

「悪いな。俺のデッキはパーミッションデッキ。今捨てたヴァーミリオン、ミリーにも相応の効果がある」

とりあえず、これで『ブラック・マジシャン』との連続攻撃を受ける危険は消えた。

「さて……『ブラック・マジシャン』の召喚は殆ど魔法頼りの特殊召喚の筈……どうする？」

「……確かにキツイけど、マナの攻撃力はクイーンより上だ！バトル！ マナで『切り札の騎士 クイーン』を攻撃！『ブラック・バーニング』！」

『ファイヤー！！』

『くっ……申し訳ありませんセツ様。一度退きますわ！』

「っ！ すまん希冴姫。だが、この瞬間『アルカナソード ダイヤ』の効果発動！ 装備モンスターが戦闘によって破壊された時、デッキからカードを一枚ドロウする！」

セツLP3800

「オレはこれでターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロウ！ スタンバイフェイズに、墓地の『冥幼竜 ヴァーミリオン』の効果発動！ カウンタートラップのコストとして墓地に送られたこのカードが、自分スタンバイフェイズ時に墓地にある場合、手札に戻す！」

『かつッ！』

「な、なにあの子……か、可愛い」

「名前に、ヴァンダルギオンの幼竜なんだろうが……」

「可愛いね〜」

『きゅ？』

……相変わらず、可愛さには定評があるな。ミリー。

「俺は『切り札の騎士 テンス』を守備表示で召喚。カードを二枚セツト。ターンエンドだ」

「オレのターン、ドロウ！」

さて……どう来る？

「オレは手札から装備魔法『魔術の呪文書』をマナに装備！ 攻撃力が700ポイントアップだ！」

ATK2700

「通す」

「よし！ なら更に『魔導騎士 デイフェンダー』を召喚！ 効果により、デイフェンダーには魔力カウンターが一つ乗る。バトルだ！」

ATK1600

「マナで『切り札の騎士 テンス』を攻撃！『ブラック・バーニング』！」

「ええーい！」

「ぐう……！」

テンスはその大きな身体と剣で俺を守り、倒れる。しかし、その犠牲を無駄にはしない！

「俺はこの瞬間トラップカード『アルカナソード クローバー』の効果を発動する！ 俺の切り札の騎士が破壊され、墓地に送られた時、別の騎士を墓地から復活させる！ 戻れ！ 希沔姫！」

「御意ですわ！」

「だけど攻撃力は……」

「クローバーは発動後、装備カードとなり、蘇生された希沔姫に装備される。攻撃力は700ポイントアップだ」

ATK1500 2200

「くっ…… オレはカードを二枚セット。ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロ！ 俺は魔法カード『壺の中の魔術書』を発動。お互いにデッキからカードを三枚ドロする」

「オレもカードを三枚ドロ！」

よし。これで揃ったな。

「俺は『切り札の騎士 キング』を召喚！ 効果発動！ デッキから『切り札の騎士 ジャック』を特殊召喚！」

「っ！ その流れは……！」

「そういうことだ。手札から魔法カード『融合』を発動！ フィールドの三銃士は、それぞれ『クイーンズ・ナイト』『キングス・ナイト』『ジャックス・ナイト』として扱う効果を持っている！ 来い！ 天位の騎士『アルカナ ナイトジョーカー』！」

ATK3800

「それがセツのエースモンスターか！」

「こ、攻撃力3800……」

「流石に圧巻だな……」

「更に、俺は装備魔法『アルカナソード スペード』を『アルカナ ナイトジョーカー』に装備する！」

「新たな装備魔法……攻撃力が変わらない？」

「ああ、だけどその代わりに、装備モンスターの戦闘によって発生するダメージを倍にするけどな」

「そんなんっ!？」

「それじゃ、もしディフェンダーに攻撃されたら……」

「それは、やらせない! 速攻魔法『サイクロン』! 『アルカナソード スペード』を破壊する!」

「それは、させないな。カウンターの罫『アヌビスの裁き』! 手札を一枚捨てることで、俺の魔法・罫カードを破壊する魔法効果を無効にし、破壊。その後、相手のモンスター一体を破壊してその攻撃力分のダメージを与える! 俺は『ジャム・ウォリアー』を墓地に! 『ジャム・ウォリアー』はカウンタートラップのコストとなった時デッキからカードを二枚ドロウする!」

「なっ!？」

アルカナの剣を破壊しようとする竜巻は破壊される。

「まだだ! 『魔導騎士 ディフェンダー』の効果発動! 魔力カウンターを取り除くことで、魔法使い族モンスターの破壊を無効にする!」

「やるな。だが、これまでだ! バトル! 『アルカナ ナイトジョーカー』で『ブラック・マジシャン・ガール』を攻撃! 『ロイヤルストレートフラッシュ』!」

「トラップカード『ガード・ブロック』! 戦闘ダメージを無効にする!」

「だが、ガールまで守ることは出来ない!」

「きゃあああああつ!?」

「マナっ!」

アルカナの剣は、マナの放つ炎を物ともせずマナを切り裂いた。「マナに装備された『魔術の呪文書』の効果発動! フィールドから墓地に送られた場合、ライフを1000ポイント回復する!」

リヨウLP4800

「俺はカードを一枚セット。ターンエンドだ。さあ、どうするリヨウ?」

「あはは、凄いな……ここまでデュエルがやり難い相手は初めてだ」「パーミツシヨン使いだからな。相手の戦略を妨害するのが得意技なんだ。悪いな」

「いいや、オレだつてまだ負けてないよ。ドロー!」

さて……追い詰めたとはいえ、リヨウの手札は五枚。逆転されるには十分な手札だな。

「オレは手札から装備魔法『早すぎた埋葬』を発動! ライフを800ポイント支払って墓地のマナを復活させる!」

リヨウLP4000

「あいたたた……」

「大丈夫? マナ」

「な、なんとかね、流石にキツかったけど」

「ごめん。もうちょっと頑張ってくれ。僕は手札からチューナーモンスター『マジシャンズ・シンクロン』を召喚!」

「チューナー……! シンクロ召喚か!」

未来であるならば、それがあるのは至極当たり前。今まで使つて来なかったから失念していた!

「オレはレベル6のマナに、レベル1『マジシャンズ・シンクロン』をチューニング! 黒き魔術が交わりし時、新たな絆の幕が開く。

光差す希望と為れ! シンクロ召喚! 舞え! 『SF スターフェザー ブラックマ

ジシャンガール』!」

『行きまーす!』

ATK2400

「更に『マジシャンズ・シンクロン』は、魔法使い族とシンクロ召喚に成功した時、デュエル中一度だけフィールドに戻る！」

「……だが、攻撃力2400ではアルカナに及ばない！」

「これで終わりじゃない！ マナの効果発動！ マナは一ターンに一度、自分の墓地のカード一枚をゲームから除外し、その発動条件を満たしていればその効果を使うことができる！ オレは墓地の『賢者の宝石』の効果を使う！」

「なにっ！？ だが『賢者の宝石』は……」

場に『ブラック・マジシャン・ガール』が存在しなければ使えないはず……。

「わかってるよ。けど『SF・ブラックマジシャンガール』は、カード名を『ブラック・マジシャン・ガール』として扱う！ よってデッキからマハードを特殊召喚！」

「くっ……！」

師弟が揃ってしまった。そしてリヨウの場にはチューナー……これは間違いなく……。

「オレはレベル7のマハードに、レベル1『マジシャンズ・シンクロン』をチューニング！ 黒き魔術が集いし時、新たな光の力が目覚める。光差す希望と為れ！ シンクロ召喚！ 舞い降りよ！」^{スター}「SF^{フェザー} ブラックマジシャン！」

「おおおっ！」

ATK2900

光の輪を潜り抜けたマハードが、白き衣と白銀の翼を持って舞い降りる。

「やっぱりソイツも来たか……！」

マナがシンクロしたことから、まず間違いないだろうとは思っていたが……。

「手札から魔法カード『千本ナイフ』^{サウザンド}！ マハードがいる時に、相手モンスターを一体破壊する！」

恐らく、あのマハードにも、マナと同じくカード名を『ブラック・マジシャン』とする効果があるんだろう。だが……。

「無駄だ！ その効果は対象を取る！ アルカナの効果発動！ 俺は手札から『アルカナソード ハート』を捨てて『千本ナイフ』の効果は無効にする！」

「まだまだあ！ 魔法カード『死のマジック・ボックス』！ オレのディフェンダーのコントロールをセツに移して、アルカナを破壊する！」

「くっ！？」

アルカナの効果は一ターンに一度しか発動できない。何より、今の俺には手札がミリーしかない！

これは、マズいな。俺のフィールドのモンスターは攻撃表示のディフェンダーのみ。伏せカードは一枚あるが……。

「純白の魔術師が二人か……絶景だな」

そうもいってられない状況ではあるが、思わずそう言ってしまふほど、美しい光景だった。

「行くぞ！ マナでディフェンダーを攻撃！ 『スター・イリュージョン・バーニング』！」

『行っけー！』

「ぐああっ！」

セツLP3000

「更にマハードでダイレクトアタック！ 『スター・イリュージョン・マジック』！」

「トラップカード『ガード・ブロック』！ 戦闘ダメージを無効にしてカードを一枚ドロウする！」

「オレはこれでターンエンドだ」

なんて奴だ……一ターンで完全にひっくり返された。だが……。

「ここで諦めるつもりは……ない！ 俺のターン、ドロウ！」

よし、これなら……！

「俺は手札からマジックカード『貪欲な壺』を発動する！ 墓地の

切り札の騎士四体と、アルカナをデッキに戻して二枚ドロー！
来た！

「……俺も大概だな。コイツは……デイスティニードローだ！」
俺はミリーも含めた四枚のカードを見る。

「俺は手札から速攻魔法『アルカナソード ジョーカー』を発動！
ライフを半分と、墓地に存在するアルカナソード、ダイヤ、クローバー、スペード、ハートの全てをゲームから取り除き、自分フィールドに可能な限り切り札の騎士を特殊召喚できる！」
俺のフィールドに、希冴姫たち五人の騎士が揃う。

セツLP1500

「一気に五体の特殊召喚……！？」

「そして更に速攻魔法『絵札の結束』！ ライフを1000ポイント支払うことで、騎士たち全員を融合！ 見せてやる！ 俺の本当の最強騎士を！ 来い！『切り札の騎士帝 アルカナ ロイヤルジョーカー』！」

ATK4500

「攻撃力4500……！？ こんな奴が、一ターンで……！」

リヨウは、アルカナの攻撃力に怯えているが、まだ目は死んでいない。これは、まだ手があるってことか！

「マナの効果を発動だ！ 墓地のカードを除外してその効果を使う！ この効果は相手ターンでも発動することが出来る！ オレは墓地の『千本ナイフ』の効果を使用！」

「そうはいかないな。ロイヤルジョーカーの効果発動！ 手札を一枚捨てて、このカードを対象とした魔法・罫・モンスター効果を無効にし、破壊する！ 俺はミリーを捨てて効果を無効化！」

「まだだ！ マハードは、このカード以外のモンスターをリリースすることで場のカードを破壊する効果を無効にし、破壊する！」

なるほど。流石だ。だが……。

「甘い！ ロイヤルジョーカーの効果は、ルール上スペルスピード3として扱われる！ よってモンスター効果でロイヤルジョーカー

の効果にチェーンすることはできない！」

「なんだって!？」

これが、進化したアルカナの力だ!

「よってマナの効果は無効! ジョーカーの効果で、マナは破壊だ!」

『きゃあああああつ!?!』

「マナ!」

「バトルだ!」切り札の騎士帝 アルカナ ロイヤルジョーカー
でマハードを攻撃!」

「まだ、まだ終わらない……! マハードが倒されても、オレのライフは……!」

「いや、これで終わりだ。俺の最後の手札の効果を発動する。『オネスト』!」

「あ……!」

アルカナの背に、マハードたちと似た光の翼は現出する。

「これでトドメだ!」ファイブ・オブ・オネステイ!」

「ぐあああああああつ!?!」

リヨウLPO

「……参ったよ。ラストのマナとマハードで、完全に決まったと思っただけど」

「ありや反則だろう。シンクロから即蘇生するチューナーってさ」

「あはは、それを言ったら、一度に五体も特殊召喚するあの魔法だつて相当なものだと思うよ」

「ま、そりゃそうか」

俺たちがそうして、全力をぶつけあつたデュエリストとして交流を深めていると、外野で見ていた三人も近寄ってきた。

「よ。セツ、お前強いな。コイツこれでもフォーチュンカップって

いう、デュエルキングを決める大会で優勝してるんだぞ?」

「キング!？」

「やめてっつてば。オレはキングにはならないって言ってるだろ」

「啓斗君も私たちもそれはわかってるって。それくらい強いって言いたかっただけだよ」

「リヨウ、大丈夫?」

「ああ、オレは大丈夫。サイコデュエルでも闇のデュエルでもないからね」

「で、でも凄く激しいデュエルだったから心配で……」

言葉通り、とても心配そうにリヨウに寄り添うアリス。

「ふむ……啓斗、由里、ちょっといいか?」

「あ? なんだ?」

「どうしたの?」

「……あの二人って付き合ってるのか?」

「ああ。まあな」

「あはは、やっぱりわかつちゃうよね」

ま、あそこまであからさまならな。

「ふう、世の中にはキチンと決着してるヤツもいるってのに、俺は駄目だな」

もちろん、事情があることはあるが、それだって決して言い訳にして良いわけじゃない。

「お……」

そうしている内に、俺の身体がいつものように透けて行く。

「せ、セツ?」

「……すまん、これでお別れらしい」

「元の世界に、帰るのか?」

「そういうことだ。ありがとなりヨウ。それに皆。こんな荒唐無稽な話を信じて付き合ってくれてさ」

「いいよ。オレだって、あんな凄いデュエルが出来たんだから、こっちこそお礼を言いたいくらいだよ」

「だな。まあ欲を言えば、俺ともデュエルして欲しかったくらいか？」
「はは、それはまた、いつか来た時にな。尤も、そのいつかが来ない方がいいんだが」

この状態は決して良いものではない。この状態こそが、俺たちの世界が危機に瀕している証拠なのだから。

「それじゃ、またいつか会えたら、その時はよろしくな」

「ああ。元気で」

透けていく手で、最後に握手を交わして、俺はその世界から帰還したのだった。

「……で、これはどういう状況だ？」

「やだなあお兄ちゃん。見ればわかるでしょ？」

「わからん。いや訂正だ。分かりたくもない」

俺が元の世界に戻って真っ先に目に飛び込んできたのは、半裸の妹IN俺のベッド。

「疲れて帰ってくるであろうお兄ちゃんのために……暖めておきました！」

「いらん世話だ！ 畜生、直接的アプローチはむしろ久しぶりで戸惑ってしまった！」

「偶には初心に帰らないとね。お兄ちゃんの布団で致すのはいつものことだし」

「偶には綺麗に締めようという考えはないのかお前には！？ あああ布団濡れてるし！ これ布団干したら俺がこの年になってやつちまったか思われるんだからな！？」

「大丈夫！ 加えて血も少量垂らしておけば……」

「全然全くこれっぽっちも大丈夫じゃねえ！ むしろ誤解が最悪の方向にシフトするだけだろうが！」

「誤解じゃなくすれば……イイんじゃない？」

「帰れ！」

無理矢理服を着せてテントから追い出す。くそ、今回はトラップを解除してから行ったのが裏目に出たか！

「……で、どうすっかなあコレ……」

結局、布団は人知れず焼却することで事なきを得た……と思ったが。

後日。

「せ、セツ……この写真は……」

「あの野郎すっかり写真に残してやがった！」

結局、誤解を解くのに、約二時間を要したのだった。

特別編「?アルカナクロスワールド5D・SMI?」(後書き)

こんにちは。

勝敗については、グッチーさんよりセツを勝たせてやってください、とのことでしたので遠慮なく。初めて最強のアルカナが活躍です。負けフラグとは言わせない!

ちなみに特攻のマジシャン、マジシャンズ・シンクロン、二体のシンクロモンスターについてはグッチーさんのオリカ。同氏の小説内で説明がありますので、わかりにくければそちらで補完しておいでくださいな。

多分次は……遊さん、かな? コラボをお願いされた順で行けば違うんですけど、後の三作品はまだ本編で使われていないデッキだったりするので……書き易さ的な意味もあり、遊さんで行くと思います。

それでは、悠でした!

10/17 『黒魔術のカーテン』による特殊召喚封印効果を修正しました。カーテンを『賢者の宝石』に。それによるライフの不都合は『死者蘇生』を『早すぎた埋葬(禁止カード)』に差し替えることで、ちょっと怪しいですが修正しました。それにより、マナとマハードのシンクロ順など、幾らか変更点があるのでご注意ください。

重要なお知らせ！

いつもアルカナをご愛読いただき、ありがとうございます。作者の悠です。

タイトルにあるお知らせ、というのは、アルカナのプロットの見直しと、大規模な改訂作業を行うことになりましたので、そのお知らせです。

改訂は第二期の中盤あたりから行う予定で、現在第四期中盤辺りまで来ていることを踏まえると、少々改訂に時間がかかり、その間更新が滞ってしまうと思われます。

更に、今回の改訂では、アルカナの登場キャラを数人削るといふかなり大がかりなものとなります。削ることになるのは、二期に入ってから登場した朱雀、零、灼夜とその精霊。剣士の精霊であるエル、フレイ。凜の精霊であるエリア以外の霊使い。希望のメイドであるシャインなど、現在に於いて作者の力不足によりほぼ活躍の場を用意出来なかったキャラクターです。

キャラの削除に関しては、それぞれのオリキャラの作者様方には一応の通知をしてありますが、この場を借りてもう一度、深くお詫び申し上げます。

削除する理由ですが、上記のようにほぼ活躍の場が用意出来なかったこと。この先のストーリーに於いても用意出来そうにないこと。無理に用意したとしても、ストーリーがグダグダと長くなってしまい、作品としての完成度が落ちてしまふと予想されること等です。

他にも、調子に乗ってキャラを増やしすぎた挙句、いい加減キャラの書き分けが困難になってきていることも理由の一つです。上記の間キャラクター等は特に、全員一人称が「俺」であることや口調に

もさほどの差異がないことなどから、これまでの話に於いても混乱してしまつた読者の皆様も多いかと思われます。更に言うならば、全員がそれぞれ魅力的なキャラであるが故、どのキャラも前面に出し過ぎるとセツ以上に「主人公」してしまうキャラクターなことも理由の一つです。

そう言つた諸々の事情により、投稿していただいたキャラクターに対してする仕打ちでないことや、失礼極まりないことも承知の上で悠はキャラクターの削減を決定しました。

キャラの作者様方や、彼らを応援して下さつていた読者の皆様には、悠の見通しの甘さから不快な思いをさせてしまい、本当に申し訳ありませんでした。

……ここからは、少々言い訳染みた教訓になります。

今回アルカナを改訂するにあたり、思い知つたことが多くあります。その中の一つに、遊戯王小説ならではの例えとして、「小説作りはデッキ構築に似ている」というものがありました。

やりたいこと。やりたいコンボを全て詰め込んだり、魅力的なキャラクター、効果だからと言って詰め込み過ぎれば、やはり確実に事故を起こします。

プロットを立てるといふのは、とりあえずデッキを仮組みして、仮想敵（読者）をイメージし、どのようなコンボ（イベント）でダメージ（感動）を与え、どのようにしてデュエルの詰め（クライマックス）に持つて行くのかを想定するものだ。

デッキ構築に於いても、小説の構成に於いても、大事なことはやはりそのデッキ（小説）における「軸」を明確にした上で、何を、どんなコンボ（イベント）を自分でやりたいのか。どんなことを一

番に書きたいのかを絞り、そのコンセプトを定めて行かなければ事
故ります。

今回削ってしまうキャラクターも、それぞれが主人公になれるだ
けの、デッキの中核、エースになれるだけのキャラクターを持つて
いながら、それ故に狙いがバラけてグダグダになるということにな
ってしまいました。

アルカナは、やっぱりセツを軸として、その周囲のキャラクター
との関係を描いた小説です。そのセツと、主人公の役割が被るよう
なキャラクターは、やはり物語としては受け入れがたいことがわか
りました。

キャラの数に関しても、一話、一つのターンで出来ることは限ら
れていて、多すぎても扱いきれない。

今回のアルカナ改訂では、そう言った大切なことに気づけたこと
は収穫でした。遊戯王を通じて、デュエルを通じて、小説の組み方
についての基本を実感出来ました。

アルカナの改訂作業は、恐らく時間がかかってしまうと思います
が、必ず、今よりももっと面白く、良い小説に出来るよう精一杯努
力いたしますので、しばらくの間、本編はお待ちください。

まだ完成していないコラボの方ですが、こちらはとりあえず並行
して作業を進めたいと思います。幸いデュエルの相手はセツやアテ
ナといった改訂中でも問題のないキャラクターなので、こちらの方
は更新もしたいと思います。

それでは、悠でした！

妄想小ネタ（前書き）

こんにちは。

改訂の間、完全に更新が途絶えるのもさみしいので、小ネタで場繋ぎというか、お茶を濁します。

今回のお題は、以前ちよろつと話題に出したアルカナがもし5D・S編まで行ったとしたらどうなるか、というものです。

ちよつとしたお遊びとして考えたら妙に文量多くなりました。キヤラ設定だけなのに。

ではどうぞ！

妄想小ネタ

アルカナ〜妄想小ネタ〜

御堂 みどう レト 19歳 女

・身長 162cm

・体重 黙秘

・3サイズ B82 W53 H80 (公式サイトより)

・使用デッキ 【ハウリングシンクロ】

・キャラ設定

セツとアテナの間に生まれた長女で、一応メインヒロイン。

母親の影響で幼い頃から芸能界に興味を持ち、父譲りの器用さや母譲りの容姿や歌唱力、アイドル性もあって見事に二世アイドルデビューリストとして成功している。これも父親譲りか、大抵のことはこなせる天才肌だが、勉強は苦手らしい。芸名は天音レト。尊敬する母親の旧姓を拝借したもので、本人はとても気に入っている。名前の由来はギリシア神話の女神、レトー。

明るく快活で、活発。裏表の限りなく少ない性格で、瞬く間にトップアイドルの道を駆け上がり、且つ父親譲りの悪意を持たれ難い性質も手伝って、基本的に苦労を知らない子。困難にぶつかったことがあまりないため、逆境には弱い。セツたちとしては、そこが若干気になる点ではあるようだ。

誰に対しても分け隔てなく、例えサテライト住人であっても物怖じせず話しかける大胆さはアテナ譲り。多少スキンシップ過剰で、男子に対しての警戒心が薄い。そんなところもアテナ譲りか？

使うデッキは【ハウリングシンクロ】。ハウリングシンクロというのは、父親の設計・デザインした新しいシンクロ召喚の一つで、

リゾネーターと名の付くチューナーと別のチューナーでシンクロするもの。デッキのモンスターの大半がチューナーで構成されていて、チューナー関係のサポートカードも駆使して戦う。

御堂 流美^{るみ} 17歳 女

・身長 157cm

・体重 できれば内緒で……

・3サイズ B84 W54 H85

・使用デッキ 【天空パーミッション】

・キャラ設定

セツとアテナの間に生まれた次女。姉と比べると非常に内向的で引っ込み思案。代わりに頭は良い。姉よりも打たれ強く、精神的にも脆そうに見えて強固。運動神経はヘツポコだが、どうやらセツの内面の強さと、アテナの残念さを兼ね備えてしまったらしく、日常的にはかなりヘツポコだが、イザという時に強い。姉とは正反対である。名前の由来は姉や母と同じくギリシア神話の女神、アルテミス。

無論容姿は整っているのだが、目立ちたくないらしく、常に伊達メガネをかけている。姉より背は低い割にスタイルは勝っているらしく、本人としてはコンプレックス（姉としてもコンプレックスだが）になっている。

使用デッキは、フィールド魔法『天空の聖域』を最大限利用した、代行者系モンスターとパーミッションを組み合わせたデッキ。両親の影響らしい。切り札は『マスター・ヒュペリオン』。尚、デッキの特徴や本人の運動神経の無さも含めて、ライディングデュエルは出来ない（姉は嬉々としてやる）。

御堂 月ゆえ 10歳 男

・身長 130cm

・体重 回答拒否

・3サイズ 無し

・使用デッキ 【ダークヴァンダルパーミッション】

・キャラ設定

セツとさだめの息子。双子の弟に陽ようがいる。男だが、常に服装はゴスロリ系（父親のデザイン）で、女装している。

理由は、流石にさだめの子であるだけあって、父親であるセツが好きだから。血縁関係や性別、その他諸々無関係でセツに情愛を向ける10歳児。……色々と激しく間違っているが、さだめの息子なのでとりあえず色々納得である。

さだめの息子であるが故、闇のデュエルに近いサイコデュエリストとしての素質を持つ。が、本人は既に克服していて、滅多なことでは力は使わない。その力はサイコと言うよりは精霊の力に近いものようである。

性格はやはりさだめの息子らしく、10歳とは思えない程耳年増且つハイテンション。女の子らしさ（？）を強調するためか「ですわ」や「わたくし」と言った言葉使いでしゃべる。違和感がないのが凄いが。

トップスの自宅にさだめと弟と一緒に暮らしており、近所に住んでいて且つ同い年の双子という縁もあって龍亞や龍可とよく遊んでいる。

常に女装しているだけあって女顔であり、声変りもしていないの
で言われなければ男だとは分からない。弟とも酷似しており、一卵
性で同性であるので、龍亞たち以上に変装すると見分けがつかなく
なる。凄く紛らわしく、色んな人を入れ替わりで騙して遊ぶなど、
子供らしい一面もある。

若干十歳でありながら、既以後戻りできない茨の道（笑）を全力

疾走している少年である。両親は（さだめも）何とかして真つ当にしたいと思っているが、自分たちの境遇が境遇なので上手い言い訳が見つからないようである。

使用するのは、両親の性質を受け継いだダークモンスターとヴァンダルパーミッションを併せたデッキ。手札コスト等で墓地を肥やし、ダムドやヴァンダルギオンでトドメを差す、見事に両親の切り札を混在させている。愛故に。

御堂 陽 10歳 男

- ・身長 130cm
- ・体重 月によって削除されました
- ・3サイズ 無し
- ・使用デッキ 【サイクロイド】
- ・キャラ設定

さだめのセツの息子にして月の双子の弟。こちらは普通に男の子の格好をしているが、女顔である。

さだめ遣伝子の変態性はどうやら陽にも及んでいるらしく、ブラコン。兄（姉？）である月を何よりも愛し、従う。兄に似たのか、性別なぞ最早どうでもいいようである。

その月が父親に懸想していることも知っていて、かといって自分も父親のことは好きだし尊敬しているので恋敵として嫌うことも出せずに悶々としている。兄と同じく、血縁関係や性別、その他諸々無関係で兄を愛する10歳児。やっぱり色々激しく間違っているが、さだめの息子だからやっぱり納得である。

兄と同じく精霊としての力がある。だが、陽の力は殆ど無いに等しく、精々が精霊を感じられる程度である。

兄に関わることになると思えば暴走気味になるが、普段は一応常識人。兄への想いについても、基本的には内々に抑えているのでパツと見

普通の男の子。時々暴発するのを気にしなければ、だが。常にハイテンションな兄と比べると、どちらかと言えばダウナーでテンションは低め。暴走するとすぐにハイテンションだが。

若干十歳でありながら、既に後戻りできない茨の道（笑）を全力疾走している少年である。両親は（さだめも）何とかして真つ当にしたいと思っているが、自分たちの境遇が境遇なので上手い言い訳が見つからないようである。

使用するのはまさかのサイクロイド。決してビークロイドではなく、あくまでもサイクロイドである。切り札としてバイクロイドや、父のデザインしたサイクロイドのシンクロモンスターなども使用する。

御堂 友瀬^{ともせ} 16歳 女

・身長 169cm

・体重 47kg（あっさり答えてくれました）

・3サイズ 不明（此方は頑として答えず。ただし、スレンダー

ー）

・使用デッキ 【X・セイバー】

・キャラ設定

セツとユーキちゃんの娘。以前は、十六夜アキとデュエルアカデミアの同じクラスにて親友の間柄だったが、アキのサイコパワーが引き起こした事件で、建物の瓦礫により頭部を強打。意識不明の重体で病院に入院していた。これは、アキのトラウマの一つになっている。

本人としては、アキを怨むつもりは全くなく、力の暴走つてあるよねーくらいにしか思っていない。恐らく、人外染みた家族の影響だろう。アキの力についても、ウチの家族の方がよっぽど異常。とまったく気にする様子はない。

間違いない、御堂家に於いて一番の常識人且つ一般人。流石にユークちゃんの娘なだけあり成績的にも非常に普通の女子高生。ただ、セツ譲りの肝の据わり具合だけは、いつそ主要メンバーや5D'sメンバーすら比較にならないレベルだろう。

男勝りで、アカデミアには女性ファンが大量に居る。入院した時も、毎日のようにお見舞いが来ていた。一人称はボク。それが尚更ボーイツシュで、女性ファンが増える原因になっている。

変人家族での常識人で女性ファン過多と、周囲の苦勞を一手に請け負う受難体質。姉弟で唯一料理が出来ることなども含め、苦勞が絶えない。

デュエルでは、展開力と高速シンクロ、ハンデスなどを得意とする【X-セイバー】を使う。両親からは、騎士や戦士といったデュエルタイプを受け継いだようだ。ライディングデュエルなども得意で、姉弟たちの中でも屈指の実力を持つ。

御堂 切 ??歳 男

・身長 178cm

・体重 61kg

・3サイズ 男の3サイズに興味ある奴がいるのか？

・使用デッキ 【アルカナパーミッション】

・キャラ設定

『アルカナ』切り札の騎士『』における主人公。現在は五児の父であり一夫多妻状態。様々な仕事を兼業しており、しかも全て手を抜かない状態で且つ、家族との時間も作るという、一体どうやっているのかわからないレベルの働きっぷりを見せている。その甲斐あってか、家はトップスやシテイに幾つか立派なものを持ち、自分用のアトリエなどまで持っている。ぶっちゃけ仕事で成功し過ぎて金は有り余っている状態。利子だけでも十二分に生活できるので、現

在稼いだ金の大半はサテライト復興に充てられているらしい。

兼業している仕事は、プロデュエリスト、カードデザイナー、ファッションデザイナー、アカデミア臨時教師、料理教室、KC研究室長、真中財閥警備部門総括、治安維持局セキュリティ技術部門総括、アテナのマネージャー、レトのマネージャー、俳優など、他にも色々やっているらしい。一体何時休んでいるのか、それでいて家族との時間も確保している辺りが凄まじい。移動はどうやら、マスターした転移術をフル活用しているようだ。だとしても軽減できる仕事量ではないが。そりゃあ金も溜まるわ。噂では、仕事より妻の相手で溜まる疲労の方が大きいらしいが。

年齢は現在不明。見た目だけなら大学生レベルの若さを保っているが、理由としては人外な妻たちの相手をする内、魂が精霊に近づいたためらしい。

ライディングはあまりせず、主にスタンディングでのデュエルを行う。やはりライディングだとアルカナが使い難いためだろう。その代わり、スタンディングでの強さは学生時代から更に磨きがかかり、子供達には一度も負けていないレベルらしい。

御堂 アテナ ??歳 女

・身長 161cm

・体重 軽いです。軽いですつてば！

・3サイズ B85 W55 H83

・使用デッキ 【天使族】

・キャラ設定

『アルカナ』切り札の騎士』のメインヒロイン。念願かなってセツと結ばれ、凜に誘われたアイドルデュエリストとしても活躍。現在は一線を退いて主に主婦業に専念している。時々テレビにも顔を出して、その年齢不詳の美貌を披露してもいるようだ。

天然で残念美少女なのは変わらず、むしろドジっ娘属性には磨きがかかっているようだ。かなり子煩悩なところもあり、さだめによく甘過ぎると叱られている。

テレビでもよく若さの秘訣を聞かれるが、愛想笑いで誤魔化している。(実際は、半精霊のため老化しないだけ)。それでも成長はするらしく、スタイルの良さには磨きがかかるばかりである。

デュエルでは変わらず、重量級天使のハイビート。『虚無の統括者』や『神光の宣告者』などを使ったコントロール系まで使いこなす。子供達に無敗のセツすら軽く一蹴したりすることもあるくらいで、アイドルデュエリストのレベルじゃないとよく言われる。

御堂 運命 ？？歳 女

・身長 162cm

・体重 ……知りたい?(すごく、笑顔でした)

・3サイズ B83 W53 H83

・使用デッキ 【次元ダーク】 【禁止混沌】 【拷問ロックバーン】
他、各種メタデッキ

・キャラ設定

『アルカナ』切り札の騎士』のメインヒロイン。宿願叶ってセツと結ばれた。学生時代に比べ、かなり落ち着いてきている。現在は専業主婦として、子供たちの教育頭として頑張っている。近隣住民からも、教育ママのお手本的存在としてカリスマを得ている。

子供にただ甘になりがちなアテナを諫めたりと、昔と比べると別人じゃないかと思われるくらいの常識人になっている。夢であったセツのお嫁さんになれたことで、色々余裕が出てきたと思われる。ただ、お仕置きとして実の息子たちに闇のデュエルを仕掛けて拷問デッキで心を折るのは色々間違っているが。

子供達は、キレたさだめママには決して近寄らず、目も合わせず、

出来ればシエルターにでも籠って関わらないようにしようと思っ
ているらしい。

学生時代に比べて、大分スタイルが良くなった。それでもアテナ
ヤルイン、ユーキちゃん程までは行かず、コンプレックスは消えて
いない。見た目は例によつてとても若い。終焉の影響により、魂が
ほぼ精霊となつているため不老。

自分と似た境遇の十六夜アキに対しては、AMに居る現在のアキ
に対しては酷い嫌悪感を持っていて、何とか更生してやろうと思
込んでいるらしい。

デュエルでは、相変わらず相手によつてデッキを使い分け、メタ
デッキや禁止デッキで圧殺するえげつない戦い方を好む。主力デッ
キは次元ダーク。フェイバリットデッキは拷問デッキ。

御堂 友紀 ？？歳 女

・身長 165cm

・体重 マナー違反だよー？

・3サイズ B85 W55 H86

・使用デッキ 【サイレント】

・キャラ設定

『アルカナ』切り札の騎士』のヒロイン。順調に進展し、セツ
と結ばれた。アカデミア卒業後は教師の道を志し、二年の就職浪人
をしながらも夢を叶える。先に臨時教師と為っていたセツと共に、
デュエルアカデミアネオドミノ校で教鞭をとる。年齢不詳は皆と同
じで、終焉本体との融合が原因と思われる。噂では、ハイトマン教
頭の学生時代から教師をしているとか。

娘の友瀬、十六夜アキの担任教師として勤務していたが、友瀬の
入院を境にしばし休職し、友瀬の世話にかかりきりになる。とはい
え、学生時代の経験からか、アキに対して嫌悪を向けるようなこと

はしていない。それでもやはり、愛娘の事もあり、多少の蟠りはあるようではある。

セツの子供たちの勉強は基本的に彼女が担当。生活面での教育はさだめがやっつと住み分けは完璧に出来ている。ちなみに、セツが臨時教師をするときは、決まってタツグデュエルの授業になるともつぱらの噂。

デュエルでは、学生時代と変わらずサイレントデッキを操る。ライディングデュエルの流行で『王宮のお触れ』や『人造人間サイコシヨッカー』が禁止カード指定されてしまったので、以前のような【お触れソードマン】ではなく、純粹にサイレントデッキである。

希冴姫 ？？歳 女

・身長 165cm

・体重 乙女の秘密ですわ

・3サイズ B82 W56 H80

・使用デッキ 無し

・キャラ設定

『アルカナ〜切り札の騎士〜』のヒロインで、セツの生涯の相棒兼嫁。精霊なので厳密には籍を入れたわけではないが、似たようなものである。現在はセツの付き人として、主に私生活でのケアを中心に西へ東へと飛び回っているようだ。その仕事柄、セツといる時間は最も長く、他の妻たちには羨ましがられている。

精霊故、セツとの間に子供はいないが、やることはやってる筈。ナニがとは言わないが、同じく子供のいないルインとは仲間意識もある。ただし、ルインの方が懐かれているのでそれは不満らしい。

最近は、くつつきそうでくつつかない団長とセツの仲にやきもきしている。もういい加減こっちは割り切っているのだからさっさとくつついてしまえばいいのにとイライラが募っているようだ。

近頃は殆ど精霊界には帰らず、騎士装束も纏わないので、切り札の騎士としての立場を若干忘れかかっている。

デュエルはしないが、セツの精霊としてセツのデュエルでは必ず登場する。セツの展開の基点として、切り込み隊長的に活躍する。

ルイン ？？歳（少なくとも1000歳以上） 女

・身長 170cm

・体重 47kg（別に隠す程恥ずかしい体重じゃないし。

とのこと）

・3サイズ B87 W57 H85

・使用デッキ 【ルイン】

・キャラ設定

『アルカナ（切り札の騎士）』のヒロイン。セツにとっての相談役兼嫁。希冴姫と同じく、精霊故に籍や子供はないが、セツとの心の距離は最も近い。

仕事は自宅警備員。……こう書くとニートにしか見えないが、本当に警備員である。これまで何度も侵入者を撃退している。もちろん、半ニートではあるのだが。時々ふらりと出て行つては大金をせしめてくる。真の仕事を知っているのはセツ以外に居ない。実は、セツに次ぐ稼ぎ頭。半ニートの癖に。

相変わらず、必要最低限以外の言葉は喋らないが、コミュニケーションはしっかりととれていて、特にセツとは完全にツーカーである。アジテートが上手いのも相変わらず。希冴姫と違い、精霊界にもよく帰っているらしく、やはり精霊界でのモテモテっぷりも変わらない。総じて、昔から最も変わっていないのがルインである。

デュエルでは、儀式魔人を多用し、高速で自らを儀式召喚するのが常套手段。だが、ライディングデュエルは大嫌い。自分たち儀式モンスターが廃れた原因だからである。セツに何度も、ライディン

グデュエル用の儀式をデザインするように求めている。

エース ？？歳 女

・身長 160cm

・体重 聞くな

・3サイズ もつと聞くな。

・使用デッキ 【コストレスポーカー】

・キャラ設定

『アルカナ』切り札の騎士』のヒロイン(?)。希冴姫と同じく、セツの付き人で、主に護衛を担当している。セツとはもう何年も付かず離れずの実にもどかしい関係。どうやらエースの頑固さはセツたちの予想を超えていたらしく、これだけの年月があっても決定的にくつつくことはなかった。セツの頑固さも匹敵していて、お互いにどちらかが言いだすまでは！と意地の張り合いを続けている。尤も、周りから見ればくつついているも同然なのだが。そしてセツの子供たちから最も好かれているのは(母親含め)彼女でありたりするので、母親たちとしては実に複雑である。

上記のように、以前と変わらずセツとの関係は喧嘩友達チックの傍から見ればイヤついているだけの関係。意地っ張りな性格は恐らく一生変わらないと思われる。

デュエルは然程しないが、自身の効果と『ポット』の効果を使ったコストレスデッキ。強力な効果を持つカードのデメリットをメリットにするというかなり強力な戦術で戦う。

妄想小ネタ（後書き）

……以上！ 妄想小ネタとか言いつつ、妙に具体的且つ本格的なキャラ設定を作ってみました。アルカナでの反省も踏まえ、既存の原作キャラとの関わりを多く作った設定になりました……うん。自分で、もしかしてコレ、行けんじゃね？ とか思ったり思わなかったりですが、とりあえずアルカナ自体の改訂作業と完結しないことには話にならないことも理解していますとも。

というか若干ネタバレですしね。まあ、全員とくつつくのはわかっているでしょうし、あるかなっ！ の方でも明記されてるから今更でしょうが。

5D・s 編、やるとしたら龍亞龍可の登場シーンからなるでしょうねえ……というか、さだめ遺伝子すっげえ。

それでは、悠でした！

特別編「？アルカナクロスワールド5D・S遊城を受け継ぐ者？」（前書き）

特別編のコラボ二つ目です。

遊さんの『遊戯王5D・S遊城を受け継ぐ者』より主人公キラVSアテナになります。例によって不憫なアテナですが、どうかよろしく願います。

特別編「？アルカナクロスワールド5D・S遊城を受け継ぐ者？」

アルカナ〜切り札の騎士〜

特別編「？アルカナクロスワールド5D・S遊城を受け継ぐ者？」

その日、アテナはご機嫌だった。

「ふふっ今日は何を着て行きましょうか」

例によってセツとの強制デートである。今回でとうとう九回目。

残すは後一回のみとなっている以上、気合が入らざるを得ない。

「それ以降だと、さだめさんが遠慮なく邪魔してきますからね……」
意外だったのは、さだめが律儀にも邪魔をしない約束を守っていることだ。尤も、嫉妬心が抑えられているわけじゃないらしく、翌日は必ず瀕死になっているが。

「さだめさん曰く『嫉妬心だけで悶死しそう』だそうですしね……」
デートが終わり、さだめにそれを伝えるのは恒例になっているが、最初は驚いたものだ。

「干からびた魚にしか見えませんでしたし」
翌日には確実にストレス性の胃潰瘍になっているくらいなのだから相当だった。

「でも、やめるつもりはありません」
数少ないアドバンテージ源なのだ。

「言うなれば『強欲な壺』！」

むんっ！ と気合を入れ直し、デートの服装選びを再開するアテナ。そこにコンコン、という軽いノックの音。

「？ 誰でしょう。は〜い」

「アテナ、入るわよ」

光の声だった。特に警戒せず、アテナはドアを開けて光を歓迎する。

「今日はどうしたんですか？ 来るのなら、メールでも入れてくれればよかったのに」

「ああ、ごめんなさいね。ちょっと緊急だったから」

「緊急、ですか？」

その言葉を聞いて、アテナは脳裏に暗雲が立ち込め始めたのを感じた。

「ええそうよ。貴女も一度行っているわよね？ 時空の歪がまた現れるそうなのよ。それで、今回はアテナに白羽の矢が立ったってわけなんだけれど……」

「……私、これからデートなんですけど」

「……ごめんね？」

「笑顔で謝らないでください！ っていうか、私じゃなくても……」
そう言ってアテナは遠慮がちに断ろうとする。セツとの貴重なデートを潰されるなんて冗談じゃない、という乙女心が透けて見える。
「アテナじゃなければセツに頼むことになるって希望は言っていたわね」

「意味ないじゃないですか！」

「そ。だからよろしく！」

「い、嫌です！ さだめさんの妨害がないデートは今日合わせて二回しかないのに……！」

「アテナ、知ってるわよね？ 私のモットー」

「……最終的には」

「力尽く、よ！」

ガシイ、とアテナの首元を引つ掴み、同時に現れた歪にアテナを放り投げる。

「ちよっ！？ わ、私まだパジャマで……せめて着替えを〜！？」

服を選んでいるところだったので、未だパジャマにカーディガンという軽装だったアテナが悲鳴を上げる。

「あ、ゴメン。もう遅いわ」

「嫌あああああああゝ!!」

物凄く軽い感じで謝った光の謝罪と、アテナの絶叫が重なる。アテナは何時かと同じく、またしても歪に放りこまれて行くのだった。「……あ、あの子またデュエルディスク忘れてるわ。ま、いつか。まだ歪も消えてないし、一緒に放りこんでおきましょう。あー疲れた後でお詫びくらいはしなくちゃね」

ポイツと消えかかっていた歪に、アテナのデュエルディスクとディスクを放りこんで、光は満足したように肩を回しながら部屋を後にした。

「嫌あああああああゝ!!」

ドサツ!

「うぐえツ!? な、なんだ!？」

私は悲鳴を上げながら落下して、誰かにぶつかってしまいました。「す、すみませんすみません!」

慌てて謝ります。下敷きにしてしまった相手は、私と同年代くらいの少年でした。

「い、いや俺は大丈夫ですけど……君は?」

「あ、私は大丈夫です。御心配をお掛けしてすみませんでした」
落ちたところがどうやらベッドと男の子の上だったので、私にそれほどの衝撃はありませんでした。それより思い切りお腹に尻もちを着いてしまったので、そっちの方が心配です。

「だ、大丈夫大丈夫……ちよつと内臓が出そうになっただけで」

「それ大丈夫じゃないですよね!？」

「というか、私まだパジャマでした! しかも、またデュエルディ

スクとデッキ持ってきてないです！

ゴンッ！

「あうっ！？」

その時、頭の上に何か落ちてきました。

「いたた……あ、デュエルディスク」

それは私のデュエルディスクとデッキでした。多分、光お姉さんが気を利かせて送ってくれたんだと思いますが……。

「……もうちょっと別の気の利かせ方があると思います」

具体的には、あらかじめ着替えとディスクを持つのを待ってから送りだすとか。

「えっと……？」

「あ、すみません。自己紹介が遅れました。私、天音アテナと言います。貴方は？」

「あ、ああ。俺はキラ。遊城キラだ」

「遊城……？もしかして、十代さんと何か……」

「っ！？十代！？ね、ねえ君、父さんのこと知ってるの！？」

「と、父さん！？い、いえ十代さんは子持ちでは……というか学生で！？」

いえ、もしかして既に子供が……。

「……ってないですね。私と同年代の子供を作るのは年齢的に不可能です」

「なあ！」

「あ、ああはいはい。ちょ、ちょっと待ってください！とりあえず少し落ち着いて……」

「キラ？何だか騒がしいけど、何かあったの……って!？」

私は何やら興奮したキラさんに肩を掴まれて問い詰められていると、扉が開いて特徴的な髪形の少女が姿を現しました。

「あつ龍可……」

「き、キラ……何をして、るの……?」

「え、これはその……」

「あー！ キラがベッドの上で見知らぬ女の人とキスしてるー！？」
「はあっ！？」

期せずして、私とキラさんの声が重なりました。爆弾発言をしたのは、少女に続いて現れた、少女とそっくりな男の子。

「ち、違う！ 俺は別に……」

「そ、そうですね！ わ、私には心に決めた人が……」

慌てて釈明しますが、よく考えると勘違いするのも無理ない気がします。両手で肩を掴まれて、ベッドの上で向き合っていたら。

後から現れた二人に、私が問い詰められていただけだと二人で説明し、説得します。男の子の方はなんとか納得してくれたらしく、

「な〜んだそういうことかあ〜」と頷いています。

「私は天音アテナです。よろしくお願いします」

「うん！ オレ、龍亞。こっちでムスツとしてる龍可とは双子だよ

！」

「ムスツとなんてしてないわよ」

「してんじゃん」

「してない！」

「だから龍可、俺とアテナさんは別に……」

あからさまに不機嫌そうな龍可さんに、キラさんが必死で説得を続けています。龍亞君は私に「それで」と更に質問を続けてきました。

「なんでアテナ姉ちゃんはウチにいるの？ しかもパジャマで」

「……パジャマ姿なことは出来れば突っ込まないでください」

それは私としても酷く不本意な事情なので。

「実はですね。説明すると少々長くなってしまうんですが……」

「つまり、アテナ姉ちゃんのところまで戦っている敵の影響で、こっちの世界に飛ばされてきたの？」

「はい、大体そんなところですよ」

「しかも、渦みたいなものに巻き込まれて……」

「いえ、歪ですが」

「それ、俺と似てる……」

「キラさんと……？　いえ、多分違うと思いますが」

「え？」

何か勘違いをしているらしかったキラさんたちに、私はもう一度詳しくお話しします。

「キラさんの事情はよくわかりませんが……私は以前にも、同じように転移してしまっただけがありまして……その時も、デュエルすることで帰ることが出来たので、今回も大丈夫だと思います」

「そ、そうなの？」

「はい。御心配には及びません。なので、キラさん。デュエルの相手をお願いできますか？」

「俺はいいけど……」

キラさんはチラリと私のデュエルディスクを見ました。

「そのデュエルディスク、旧型だから龍可のを借りてやるといいよ。龍可、いいかな？」

「うん。いいわよ。はい、アテナさん」

「ありがとうございます……わ、凄い。シャッフルが……」

借りたデュエルディスクにデッキをセットした瞬間、自動的にデッキがシャッフルされたことに驚きます。

「よし。それじゃあ始めようか。楽しいデュエルにしよう！」

「はい！」

「デュエル……」

「先攻は貰うよ。俺のターン、ドロー！」

先攻をとったキラさんが勢いよくカードをドローします。

「俺は手札から『E・HEROクレイマン』を守備表示で召喚！
カードを一枚セットしてターンエンドだ！」

DEF2000

「E・HERO……やっぱり」

十代さんを父さんと呼んでいたことを考えれば、予想できた答え
ではありません。ですが、それなら！

「私のターン、ドローです！ 私は手札から『ヘカテリス』の効果
を使用します！ デッキから『神の居城 ヴアルハラ』を手札に加
え、発動します！」

「天使族か……」

「はい。私はヴァルハラの効果で、手札から『ジェルエンデュオ』
を特殊召喚します！」

ATK1700

私のフィールドに、双子の小天使が現れます。

「更に『ジェルエンデュオ』は、光属性天使族のアドバンス召喚に
使用する際、二体分のリリースとすることが出来ます！ 私は『虚
無の統括者』をアドバンス召喚！」

ATK2500

「『虚無の統括者』だつて!?!」

「効果は知っているみたいですね。そうです。『虚無の統括者』は、
フィールドに存在する限り、相手の特殊召喚を封じる効果を持って
います！」

キラさんのデッキがE・HEROであれば、ほぼこれで封殺出来
る筈！

「行きます！『虚無の統括者』で『E・HEROクレイマン』を攻
撃！『トリニティ・ヴァニッシュ』！」

「クツ!? クレイマン！」

「私はこれでターンエンドです！」

「俺のターン、ドロー！」

とりあえず、初手としては理想的だと思えますが……油断はでき
ません。何しろ、相手はあの十代さんの息子。逆転の一手を使われ
ることは想定しておかなければ。

「俺は手札から『E・HEROプリズマー』を攻撃表示で召喚！」

効果発動！」

「プリズマー？」

確か、セツが持っているのを見たことがあります。

「プリズマーは、エクストラデッキの融合モンスターを見せることで、その融合素材モンスター一体をデッキから墓地に送ってそのモンスターと同名カードとして扱うことができる！ 俺が見せるのは『E・HEROゼクス・ソードフォーム』！ デッキから『E・HEROゼクス』を墓地に送る！」

「ゼクス……初めて聞くカード名です。それが、キラさんのエースですか」

「ああそうさ！ そしてリバーズカード発動！ 『ヒーロー・プラスト』！ 墓地のE・HEROの通常モンスター一体を手札に戻し、その攻撃力以下の相手モンスターを破壊する！ ゼクスの攻撃力は2500！ ピッタリ丁度『虚無の統括者』を破壊する！」

「っ！」

まさか、本当にあっさり……！

「そしてバトル！ プリズマーでプレイヤーにダイレクトアタックだ！」

「きゃああっ！？」

アテナLP2300

「よし！ 俺はカードを一枚セットしてターンエンドだ！」

「やりますね……私のターン、ドロー！ 私は『神の居城 ヴァルハラ』の効果を発動します！ 手札から『アテナ』を攻撃表示で特殊召喚です！」

ATK2600

「バトルします！ 『アテナ』で『E・HEROプリズマー』を攻撃！ 『デイヴァイン・クロス』！」

「ぐっ！？」

キラLP3100

「この瞬間、リバーズカード発動！ 『ヒーロー・シグナル』！ 俺

の場のモンスターが戦闘によって破壊された時、デッキからレベル4以下のE・HERO一体を特殊召喚する！ 来い！『E・HEROフォレストマン』！」

DEF2000

「では、私はこれでターンエンドします」

「俺のターン、ドロー！ スタンバイフェイズにフォレストマンの効果発動！ デッキから『融合』を一枚手札に加える」

「やっかいな効果ですね……」

ヒーローデッキに於いて『融合』を手札に加えることは非常に有効です。そして『融合』が手札に加わったということは当然……。

「俺は手札から『融合』を発動！ 手札の『E・HEROスパークマン』と『E・HEROオーシャン』を融合し、来い！『E・HEROアブソルトZero』！」

ATK2500

キラさんのフィールドが凍結し、その中心に一体のヒーローが降り立ちます。

「氷のE・HERO……！」

「そして俺は、フォレストマンとアブソルトをリリースし、手札のゼクスを召喚！」

ATK2500

「え！？」

折角召喚した融合ヒーローをいきなりリリース……！？ 一体何を……。

「この瞬間、アブソルトの効果発動！ フィールドから離れた時、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！」

「なっ……！」

「なんて効果ですか……！」

「それはさせません！ 手札から『朱光の宣告者』と『墮天使スペルビア』を捨てて、その効果を無効化します！」

「ちっ！」

あ、危なかつたです……。以前貰っていた『朱光の宣告者』が無かつたらこの時点で負けていました……。

「なら、手札の装備魔法『ゼクター・ハンマー』をゼクスに装備！そしてゼクスをフォルムチェンジだ！『E・HEROゼクス・ハンマーフォーム』！」

ATK2500

「装備魔法との融合召喚！？」

「バトルだ！ゼクスで『アテナ』を攻撃！『クラツシャー・フィスト』！」

「でも、攻撃力は『アテナ』の方が上です！」

「甘いよ！ハンマーフォームの効果発動！一ターンに一度、相手モンスターと戦闘する場合ダメージ計算を行わずに破壊できるんだ！」

「そんな！」

ゼクスのハンマーに『アテナ』……シャルナが叩きつぶされてしまします。

「俺は最後の手札を伏せて、ターンエンドだ」

「くっ……私のターンです！」

私の手札はゼロ。このドローで全てが決まります！

「ドロー！私は手札から魔法カード『壺の中の魔術書』を発動します！お互いにデッキからカードを三枚ドローします！」

「よし。じゃあ俺も三枚ドローだ！」

「手札から速攻魔法『光神化』を発動します！手札の『The splendid VENUS』を、攻守を半分にして特殊召喚します！」

ATK1400

「何故そんな……ヴァルハラがあるのに……」

訝しげに眉をひそめるキラさんに、私は笑みを浮かべて見せます。「ヴァルハラだと、次弾が続かないからですよ！手札から速攻魔法『地獄の暴走召喚』を発動します！攻撃力1500以下のモン

スターが特殊召喚された時、デッキ・手札・墓地から同名モンスターを出来る限り特殊召喚します！ 私はデッキから二体の『The splendid VENUS』を特殊召喚します！」

ATK2800

「なんだつて!？」

「『The splendid VENUS』がいる限り、フィールドの天使族以外のモンスターの攻守は500ポイントダウンします。三体ですから、1500ポイントダウンです！」

「そんな!？」

これで、ゼクスの攻撃力はたったの1000。これなら!

「一体目の『The splendid VENUS』でゼクスを攻撃します! 『ホーリー・フェザー・シャワー』！」

ゼクスの効果は厄介です。ですが、既に自壊が確定しているヴィーナスなら、損失はありません!

「くつ! ゼクスの効果発動! ダメージ計算を行わずに破壊する!」

一体目のヴィーナスが破壊され、ゼクスの攻撃力が1500に戻ります。

「ですが、その効果は一ターンに一度しか使えません! 二体目のヴィーナスで攻撃!」

「くつ!?! ゼクス!」

キラLP1800

「ラストです! 最後の『The splendid VENUS』でキラさんにダイレクトアタックします!」

「リバースカード発動! 『リバース・オブ・ゼクス』! これは、ゼクスと名の付く融合モンスターが破壊された時に発動し、墓地のゼクスを復活させる!」

「っ蘇生カード……!」

「更に、この効果で特殊召喚されたゼクスの攻撃力は1000ポイントアップする!」

ATK1500 2500

「それでも、ヴィーナスの攻撃力の方が上です！『ホーリー・フェザー・シャワー』！」

「うああっ！」

キラLP1500

「……私はこれでターンエンドです」

削りきれませんでした……脳裏に、セツの言葉が蘇ります。

『ヒーロー使いに対して、ギリギリ削りきれなかった状況は最悪だ。確実に次のターン、逆転の一手を引いてくる』

ただでさえ、今キラさんは『壺の中の魔術書』の効果で手札が三枚。次のドローで四枚です。

「俺のターン、ドロー！」

来ます！

「手札から『E・HEROバブルマン』を攻撃表示で召喚！俺のフィールドにカードが存在しない場合、デッキからカードを二枚ドロー！」

十代さんもよく使う、水のヒーローが召喚されます。これで、手札が五枚。

「まだまだ！手札からマジックカード『O オーバーソウル』を発動！墓地のゼクスを再び蘇生させる！」

「くっ……！」

次々と相手フィールドにモンスターが並んでいきます。

「そして手札から速攻魔法『超融合』！手札を一枚捨てて、俺のバブルマンと、アテナさんの『The splendid VENUS』を融合する！」

「ヴィーナスを融合素材に！？」

「このモンスターは、E・HEROと光属性モンスターを融合素材とするモンスター！来い！『E・HERO Theシャイニング』！」

ATK2600 2100

『超融合』の渦の中に、ヴィーナスとバブルマンが吸い込まれて行き、輝きを纏うヒーローが現れます。ヴィーナスが減ったことで、キラさんのヒーローが力を取り戻します。

ATK1500 2000

「そして、手札から装備魔法『ゼクター・ブレイド』をゼクスに装備！ そして、二枚を墓地に送ってゼクスをフォルムチェンジ！『E・HEROゼクス・ソードフォーム』！」

「そのカードは……」

最初に、プリズマーの効果でオープンしたカードです。

「ソードフォームの効果発動！ このカードは、フィールド上のこのカード以外のヒーローの攻撃力分、攻撃力がアップする！」

シャイニングの攻撃力2100が、ゼクスにプラスされて行きます。

ATK4100

「これで終わりだ！ 手札からマジックカード『ラスト・アタック』！ ゼクスと名の付くモンスターの攻撃力を、このターンのみ二倍にする！」

「それじゃあ、ゼクスの攻撃力は……！」

ATK8200

「攻撃力8200……！」

ヴィーナスの効果で下がっていて尚その攻撃力。

「バトル！ ゼクスで『The splendid VENUS』に攻撃！『スラッシュャー・ブレイク』！」

「きゃああああああああああっ!？」

アテナLPO

「ふう………参りました」

「だ、大丈夫？」

「はい。全然平気です。ありがとうございます」

負けはしましたが、これで元の世界に帰れる筈です。

「とても楽しかったです。まさか最後、あれだけやって逆転されるとは思いませんでした」

「俺も楽しかったよ。ありがとうございます」

すう、と私の身体が透け始めます。

「あ……」

「お別れ、ですね」

少し複雑そうな表情のキラさん。

「……帰れますよ」

「え？」

「きつといつか、キラさんは帰れます。でも、それまでは……」
心配そうに、キラさんを見つめる龍可さんを見ます。

「この時代、この場所にも、キラさんにとつての居場所があるんだってこと、忘れないくださいね」

「あ……」

「では、お元気で。またいつかお会いしましょう！」

それだけ言い残して、私は元の世界に帰還しました。

「……ですから、今日私はやむを得ない状況に巻き込まれたので、デートを中止せざるを得なくなっただんです！」

「だとしても、仕切り直しは認めないよ。さだめが今日一日、死ぬ想いで部屋に閉じこもっていたこと知ってるでしょ」

「で、でも私は実際にデートしてないわけで……」

「関係ない。私たちは、今日一日を貴女に与えた。実際にデートが行われたか否かは問題じゃない」

「ルインの言う通りだよ」

「せ、セツ……」

「あー、その……」

「お兄ちゃんは関係ないの。これは、さだめたちの問題だから！」

「いや、俺は思い切り当事者なんだが……」

「そ、そうです！　こういうのは、セツの気持ちが一番大事なんですよ！」

「いいじゃん後一回残ってるんだから！」

「一回しか残ってません！」

「今まで八回もデートしてたでしょ！　その時点でさだめからすれば極刑ものだよ！」

「このデートに関しては、さだめさんも了承済みのはずです！」

「仕切り直しについては認めたくないよ！」

「じゃ、じゃあデュエルで決めましょう！　私が勝ったら仕切り直しです！」

「いいよ。さだめは禁止デッキ使うけど」

「り、理不尽です！」

「これでも精一杯の譲歩だよ！」

結局、禁止デッキに勝つことは出来ず、セツとの強制デートは一回無駄になってしまった……。。

「うう……光お姉さんの馬鹿あ〜！！！」

特別編「？アルカナクロスワールド5D・S遊城を受け継ぐ者？」（後書き）

はい、というわけでキラの勝利です。セツと違い、アテナやさだめは結構負けが込んでますが。セツは殆ど負けませんが、意外とアテナやさだめは負けが多いです。次回のコラボは……誰になるかな。書き易いところから行きます。

さてと、それじゃあ告知です。改訂にあたり、以前の話を三日後の11月6日に削除します。削除するのは、エース編が終わった後、剣士の出てくる話からです。改訂も、そのあたりから行います。とはいえ、剣士のあたりはまだ改訂少ないのであんまり新鮮味はありませんが。よければ、今の内に見返してどこがどう変わったかを見比べて見るのもいいかもしれせん。

それでは、悠でした！

番外編「クリスマス特別編 準備編」(前書き)

さて、世間はクリスマス。というわけで、クリスマス用特別短編です。敢えて前々日にアップする悠スタイル。むしろ三部作の三日連続投稿を目標とした随分とボリューム豊かなクリスマス短編となっておりますので、どうかお楽しみください。

番外編「クリスマス特別編 準備編」

アルカナ〜切り札の騎士〜

番外編「クリスマス特別編 準備編」

「じんぐるべー、じんぐるべー、すっずがーなる〜イエアツ！」
「何時にも増してテンション高いな。さだめ」

飛び跳ねる様にクリスマスのテーマソングを口ずさむさだめを、若干呆れの入った目で見る。しかし、俺のそんな目にもめげず、さだめのテンションはだだ上がりだ。

「そりやもう！ なんせクリスマスだよ、クリスマス！」

「テメエみたいな悪魔の化身が聖夜を待ち望んでんじゃねエよ」

「酷っ！？ ゴース、アンタそれでもさだめの精霊！？」

「生身で精霊オレをぶちのめす女は悪魔の化身で違いねエよ」

……俺の風邪騒動の時か。案外根に持つ奴だな。

「お兄ちゃん喧嘩の腕っ節は弱いからね。お兄ちゃんを守るため、そして邪魔な虫を蹴散らすために、さだめは強くなっただよ！」

「イヤ、ありゃアそういう次元じゃなく、相当に異質な強さだったろうが……」

「まあ、そんなことはどうでもいいよ。今大事なのは、明日がクリスマスというただ一点！」

正確には、イブだな。まあ、大した違いはないかもしれんが。

「クリスマスと言えばデートイベント！ デートイベントと言えば恋人たちの性夜！」

「今、“聖”の発音がおかしくなかったか？」

今更だが。どんな字を当て嵌めたのかも容易に想像できるが。

「どーせ恋人いる奴らはデートして盛り上がってホテル直行なんだから強ち間違っちゃいないよ！」

「謝れ！ 全国の恋人持ちにあやま……いや、謝らなくてもいいか。恋人持ちだし」

そんな奴らはこんなもん読まずにイチャついてやがってたんだ。

「相変わらず、テメエは自分のことを棚上げするのが得意だなアラブコメ野郎」

「捨て置け」

「兎に角、こんな千載一遇のチャンスでさだめがいきり立たないわけがない！ というわけで、さだめとデートするよ！」

「ちよつと待つてください！」

「むっ、出たねアテナ！」

「出ますよ！ そりゃ出ますとも！」

アテナも随分と、いや、常ならぬオーラすら見えるほどにテンションが高い。

「いいですか、クリスマスですよクリスマス！」

「それさつきさだめが言った」

確かに、聞き覚えがある。

「クリスマスと言えば、イエス・キリストの生誕祭です」

「お、随分まとも且つ名目上に過ぎない事実を持ち出してきたな」

「イエス・キリストと言えば、聖人です。いわば天使」

いや、聖人≠天使じゃないだろう。

「そして私は元・精霊且つ天使族『反魂のスピリチュア』です」

まあ、そうだな。

「即ち……セツとデートするのは私です！」

「長々語って貰って悪いけど、その台詞はアテナが出てきた時点で言うまでもなくわかりきってるんだよ！」

「……いやまったくだ」

さだめに同意するのもアレだが。

「ちなみに、私も天使」

「うおっ!？」

にゅっ、と俺の背後からルインが顔を出す。

「しかも女神」

「いや知ってるけど」

「……天使より格上」

「……つまり?」

「わかってる癖に」

ちらっ、とルインが自分の背後を見る。釣られて俺も振り向くと、そこには何か言いたげなユーキちゃんと希冴姫の姿。

「あー……」

「こらそこルイン! お兄ちゃんに抱きつくくな!」

「希冴姫さんたちも……くっ、ライバル多し、です」

噛みつかんばかりの勢いで突っ込んでくるさだめと、苦々しげに歯噛みするアテナ。荒れてんなあ……二人とも。若干現実逃避気味の思考でそんなことを考える。

「……ハン、付き合ってもらえるか。オレは帰んぜ」

「待てゴーズ。せめてさだめだけでも止めていけ!」

「アホ言うな。何が悲しくて一番シヤレにならん奴を引き受けなきゃなんねエンだ」

それはそうだが……。

「オレにだって予定があんだよ。ニンゲンのこたアニンゲンで始末つけるや」

「予定って……まさか!？」

「さアなア。好きに思えや」

「……カイエンか?」

「アホか。何が悲しくて双子の妹みてエなのと過ごさにならん。テメエら兄妹と一緒にすんな」

そりゃそうか。どうも俺の認識は怪しい。

「大体奴は二十四時間三百六十五日仕事だ」

「……それはそれで哀れな」

俺が今も職務に追われているであろうカイエンに哀悼の意を示している、女性陣の話し合いに動きが出てきたことに気が付いた。というか……。

「まあまあ君たち。少し落ち着いて」

「希望さん？」

「何の用？」

「君たちはセツとのクリスマスを望んでいるようだが、知つての通りセツの身体は一つ。君たち五人全員と聖夜を過ごすことは出来ないよ」

「おおそうだ。もっと言つてやつてくれ希望！」

ここに来て、望外の味方だった。

「わかつてるよ。だからさだめはどうかしてライバルを蹴散らそうと戦闘態勢に入っているわけで」

「今だけは、光お姉さんのモットーをリスペクトです」

「最終的には力尽く、だっけ？」

「至言ですわね」

「自然の摂理」

「まったく。光にも困つたものだね。いたいけな少女に悪い影響を与えてしまっている」

やれやれ、と言つた具合に首を振る希望。

「何でも力尽くで解決しようと言つのは、年頃の乙女としては頂けないな」

「まったく。もうちょっと穏やかな解決方法をだな……」

「まあ、確かに君たちの気持ちもわからないでもない。とはいえ、セツの身体が一つということはいかんともしがたい。まさかセツの四肢をもいで五等分するわけにもいかないしね」

「超物騒！」

希望のズブツブな提案に、思わず目を剥く。しかし。

『それだあああああああ！！』

「それなの！？」

まさかの、全力の同意だった。

「両手両足胴体顔で五人分。正に画期的な分配方法……」

「画期的じゃねえよ！ 猟奇的だよ！ そして六人分になってるよ！」

「ふむ、ならエースも参加するかい？」

「……遠慮する」

「当たり前だ！」

「だが」

「だが？」

「パーツに切り分けるのは任せてもらいたい」

「任せねえよ！」

どいつもこいつもパーツに切り分ける前提で話してんじゃねえよ！

「どうする？ さだめとしては、やっぱり胴体が一番の目玉だと思うんだけど」

「そうですね……他のパーツでは特にするつもりありませんし」

「あ、じゃあわたしは左腕でいいから」

「……騙されない。左手薬指は最重要パーツ」

「むう、けど実用性がないよ。例えば指輪が填まっていても、指を斬りおとすなり本体を確保しておくなり方法はいくらでもあるし」

「……ところで、やはり胴体と頭部は分割すべき」

「そうですね。このままだと胴体取得者があまりに得をしすぎますもの」

「むむむ……下半身を取るか頭をとるか……難しい問題だね」

「って既にパーツ分配の話し合いに入ってるっしょ？ やめるよー！」

「ま、マズイです。このままだと両足とかの特に旨みのないパーツを押しつけられることに……！」

「アテナお前もか！ どうしてお前らは俺がバラされることになん

の疑問も抱かない！」

「…………後でくつつける」

「くつつかないよ！ 俺の身体はそこまでの再生能力を有していないよ！」

「え？」

「そこで意外そうな顔をするな！」

「セツなら、再生はおろか切り取ったパーツから増えてもおかしくは…………」

「おかしい！」

何時から俺はアテナたちの中でプラナリア的存在と化した！？

「大丈夫。生きていれば私がくつつける」

「だから死ぬよ！ いくら俺でも四肢もがれたら死ぬよ！ 情け容赦なく完膚なきまでに死ぬよ！」

「大丈夫です。死んでしまっても蘇生させます！」

「まず死なない方向で考えてくれないかなあ！？」

おかしい。何故俺はこんなく当たり前のことを必死になって説いているのか。

「まあ、冗談はこのくらいにしとこうか」

「そうですね」

「十分楽しんだ」

「冗談だったの！？ 俺はかなり本気で言っているように聞こえたんだが！？」

「やだなあセツくん。わたしたちそんな酷いことしないよ」

「そうですね。騎士たるわたくしが、主であるセツ様に手を上げるなど」

「…………え？ 冗談だったのか？」

「一人本気にしている団長がいるぞ。しかも、俺を裁断する張本人が」

「…………エースには、後でよく言い聞かせておきますわ」

頼むぞ、本当に。

「はっはっは。それにしても、やはり君たちは楽しいね。ちよつとネタを一つ投下しただけでここまで楽しめるとは思わなかったよ」

「黙れ元凶。助けが来たかと思えば引つかき回しやがって」

「はは、すまない。お詫びに、少しばかり助言をさせてもらおう」

「助言？」

「ああ。セツ、君たちも聞いて欲しい。君たちはセツと、クリスマスデートを望んでいるんだよね？」

「そうだよ」

「では、よく考えてみるといい。明日はクリスマスイヴ。そして、明後日はクリスマス本番。ほら、少なくともクリスマスデートと呼べるのは二日間もあるじゃないか」

「けど、わたくしたちは五人ですわ」

「そこは、多少妥協して貰わないとね。流石に二十四時間ぶっ続けで一对一デートをするわけでもないだろう？ なら、セツには多少無理して貰うことになるが、一日に二人か三人。時間で割れば良いだろう」

「おお、そうだ。その通りだ。理性的な対応も出来るじゃないか」

まあ、確かに俺は休みなしで相手せにやらんわけだが、そこは俺が頑張るしかないだろうな……。

「むう……でも一日は三人でもう一日は二人なんですよね？ どう考えても二人の方がいいような……」

「君たちは、イブと本番、どちらにデートしたい？」

『イヴ』

「即答かよ」

「なら、二十四日が三人で決定だ。文句はないね」

「むう……」

「不満がない、といえは嘘になりますが……」

「公平ではありませんわね」

「私はそれでいい」

「そうだね。それじゃ、二人の日は空いた時間に皆でパーティだ

ね

「おお……」

「どんどん良心的になって行く。ついさっきまでスプラッタな会話をしていたとは思えない平和な会話だ。」

「希望……助かった」

「ふふ、いやなに。楽しんだ後のアフターケアをただけさ。引っかき回すなら、その後のことも面倒見るのがアジテーターとしてのプライドだからね」

「だとさ、ルイン」

「……何故私に」

「わかつてる癖に」

「なんとというブーメラン。キュンと来た」

「それじゃあ、順番を決めるといい」

「ピイン……っ。」

「……ん？」

「今……なんか張りつめなかったか？」

「……私、最後にしますね？」

「いや待ってアテナ。トリはどう考えても最重要ポジションでしょ」

「あ、じゃあわたし真ん中でいいから」

「……お待ちなさい。真ん中、三番目と言えばイヴのトリでしょう。」

「そんな美味しいポジションは渡せせんわ」

「……要するに、ハズレはイヴの二人目」

「ううん、二日目の一人目も、お兄ちゃんに疲労が溜まってグダグダになりかねないよ。さだめとしては、トップ、三人目、トリが目玉だね」

「じゃあ、そこは私とお姫様と終焉の彼女で」

「ルイン様？」

「あの、その終焉の彼女ってわたしのこと……?」

「ちよっと待ってください！ どうして私たちを省くんですか!？」

「そうだよ！ そんなことしたら……」

「もちろん、わたくしは構いませんわ！」

「わたしもそれで〜」

「くっ!? まさか、敢えてライバルに塩を送ることで味方を増やすなんて……」

「ルインさん……なんでその三人に私も加えてくれなかったんですか!?」

「気分」

「騙されちゃいけないよ二人とも！ ルインは二人なら与し易しと見て選別したに違いないよ！ ナメられたままでいいの二人とも！」

「……まあ多少は癪ですが、貴女方二人を先に排除しよう、というのはわたくしたちの共通認識ですので」

「それに、ルインさんは皆の条件を平等にしてくれようとしてくれているんだから〜」

「ぐ……マズイよ。このままだとハズレを押しつけられかねない！ アテナ、ここは一時休戦して……」

「で、でも向こうはヒロイン三人の連合軍です。私はメインヒロインで二人分だとしても、ギャグキャラのさだめさんではマイナス1にしかなりません！」

「え、何時の間にアテナの中でさだめはマイナス3と化してたの？ ていうか何気にエリート意識高いよアテナ！ ナチュラルに自分をメインヒロインに設定するな！」

「……相手の結束は脆い。今なら容易に打ち崩せる」

「……まあ、所詮恵まれた設定に甘んじているだけの小娘ですものね」

「踏みつけられる雑草は強いよ〜」

「……ねえアテナ。なんでかな、ふつーにさだめ勝てない気がするんだけど」

「くっ、さだめさんがマイナスならマイナスらしくマイナス10くらいだったら……」

「いや別にさだめダークチューナーじゃないし！ ていうかアテナ

「ダークシンク口とかしらないでしょ!」

「珍しくさだめが劣勢且つつツコミに回っているな。少し助言してやるか。」

「さだめ!」

「お兄ちゃん!」

「お前はボケなきや弱い!」

「お兄ちゃんまでさだめをギャグキャラ扱いしないでよ!」

「いやだって、さだめはクリスマスの言えばトナカイだし……」

「トナカイ!?」

「赤鼻の」

「道化! さだめ、お兄ちゃんに道化として見られてたの!?!」

「あ、ちなみにさだめ。お前が俺と話してる間に、向こうは決着付いたらしいぞ?」

「なああつ!?!」

「す、すみません力及ばず……」

「……そう言いながら、さだめに一番のハズレポジションである二人目を押しつけてるのはどこの誰かな? しかも、ちゃっかり自分はトップバッターになってるんだけど? アテナ、戦ってたんじゃないかと交渉してたでしょ。ルインと交渉してたでしょ!」

「なんのことやら、です」

「黒くなったね! 最早清純ヒロインの面影ないよ!」

「まあそれは十中八九さだめの影響なんだが。」

「結局、順番はこのように決まったらしい。」

「トップバッター：天音アテナ」

「二人目：御堂さだめ」

「三人目（イヴ最終）：希冴姫」

「二日目トップバッター：ルイン」

「大トリ：加藤友紀」

「……結局、ユーキちゃんがトリなんだな」

「べ、別に狙ったわけじゃないよ? ホントだよ?」

「イヴで溜まった疲れを癒すのが私たちの役割」

癒し系二人をラスに持つてくるのはいいんだが、ユーキちゃんは兎も角ルインは若干癒されない気もする。

「私は慈愛の女神」

「その台詞回し便利だな」

しかし……。

「イヴが……荒れそうだな」

「セツの中で私たちは一体どういう存在になつてるんですか」

「……察しろ」

別に嫌つてるわけじゃないし、むしろ好きではあるんだが、それとこれとは話が別だ。

「くう……前まではさだめとお兄ちゃん、二人きりのクリスマスが堪能出来たのに……」

「……前は、漏れなく拉致監禁薬物投与のおまけつきだったけどな。聖夜に銃声が響いた家庭はきつと家くらいだ」

「クリスマス特別バージョンということで、拘束具は十字架仕様だったね」

「薬物投与は銀の杯だったか。懐かしい思い出」

「いやその、そんなところでクリスマスっぽさを出さないでください」

「シャンパンタワーくらいは作つたぞ？」

「それも、家で個人的に作るものじゃないよ」

「うう……真昼間のクリスマススイヴデートつてなにすればいいの……？ やっぱり拉致監禁してその後一人占めくらいしか思いつかない……」

「ちょ、その後わたくしの番なのですから、そのようなことはやめてくださいまし！」

「……待つてください。よく考えたら、イヴの早朝とかイヴである利点殆どなくないですか？ ルインさん、ハメましたね!？」

「クリスマス本番の朝なら、私がプレゼント作戦も違和感なく実行

可能」

「いや違和感はあるだろ。バリバリあるだろ」

ぎゃいぎゃいと、一向に止まない喧騒と共に、俺たちは翌日のクリスマスイヴに臨むのだった。

番外編「クリスマス特別編 準備編」(後書き)

こんにちは。

というわけで、明日の短編ではアテナ、さだめ、希冴姫の三人が
主役となります。……いいのか？ 人気トップツーをいきなり二人
とも出していいのか？……まあいいか。どうせその二人ギャグだし
(酷)。

要するに、今回は人気トップな二人を差し置いて残り三人をピツ
クアップする形になります。……と、すると何だかんだで人気四位
のルインが一番得なんですけどね。ルイン、恐ろしい子！ まあな
んだかんだで大トリのユーキちゃんも相変わらずダークホースつて
ますけど。

それでは、なんとか明日アップしたいと思いますので、今回はこ
れにて。

それでは、悠でした！

番外編「クリスマス特別編 イヴ」(前書き)

……こんばんは。

申し訳ありません！ 二十四日投稿に間に合いませんでした！

午前中から妙に用事が重なり、まともに時間が出来たのは夕飯を終えた八時程からでした……。

その分、クオリティを重視したつもりですので、是非お楽しみください！

番外編「クリスマス特別編 イヴ」

アルカナ〜切り札の騎士〜

番外編「クリスマス特別編 イヴ」

その後、結局話し合いにより一人の持ち時間は一律六時間ということに決定し、俺は朝六時から深夜零時まで、ぶっ続けて三人の相手をすることになっていた。

メンバーからして、疲れ果てることは最早規定事項と言って過言ではないので、俺は前日からしっかり寝溜めしておこうと寝袋に包まり（真冬に、テントの中で寝袋に包まると言うこと自体が拷問だったが、もう慣れた）、トップバッターであるアテナの襲撃（比喩表現）をまどろみつつも待ちかまえていた。

「……りー」

「……む。」

「っー」

「この声は……。」

「わん」

「アテ……。」

「ふあいあっ！」

「どばあんっ！」

「なああああっ?!」

瞬間、物凄い音と衝撃に、俺は文字通り飛び起きた。

「な、なんだ!? さだめか!? 空襲か!?!」

「つて、さだめさんと空襲は同格なんですね！」

と、混乱していた俺は、横から聞こえてきた耳触りの良い丁寧語の主に目を向けた。

「……アテナ？」

「はい、アテナです。メリークリスマス、です。セツ」

「あ、ああ。メリークリスマス、アテナ。しかし、何だ今のは？」

「あ、これです。クラッカーです」

そう言つて、アテナは両腕で抱えていたそれを俺の前に差し出した。

「……アテナよ」

「はい、なんですか？」

「これが……クラッカー？」

「……違うん、ですか？」

「あんな、アテナ。それはな……」

「はい」

「バズーカ、つて言うと、思っただ」

「？」

きよとん、と小首を傾げる姿は可愛い。だがしかし、抱えているバズーカ（89mmロケット発射筒 M20改4型）で全てが台無しになっている。

「おめでたいイベントの時にはクラッカーを使うんだって渡されたんですけど……」

「……誰に」

「希望さんに」

「信じるなよ！ あいつ、絶対満面の笑み浮かべてコレ渡しただろ！ 今頃あいつ大爆笑だよ！」

目覚ましバズーカはまあ、聞いたことはある。だが、あんなもん耳元でやられたら鼓膜が消し飛ぶ。今でも頭がぐわんぐわんして非常に気持ちが悪い。

「……いきなりヘビーな一日の目覚めに、俺は早くも心が折れそう

です」

「す、すみません。私、知らなくて……」

「まあ、目覚ましバズーカなんぞ知らなくてもいいが、クラッカーとバズーカの違いくらいは知っておこう。一般常識的に」

「は、はい……」

しょぼん、と肩を落として女の子座りするアテナを、これ以上叱る気にはならないので、手を取って立たせてやる。

「すみません……」

「もういいって。それで、今日はどうするんだ？」

「あ、はい！ その、色々考えたんですけど、やっぱりイヴといえど、こんな朝から見るべきところもそれほどなくて……」

「まあ、それはしょうがないな」

まだ六時だし。

「でもほら、見てください！ 雪です。雪が降ってるんです！」

「おお……ホワイトクリスマス、だな」

テントから出て、外を見ればレッド寮の周りには雪が積もっていた。

「……ところで、バリバリ活火山あるようなこの島で、雪って積もるものなのか？」

「様式美だよ、って希望さんは言っていましたけど……」

「……まさか、こんなくだらないことに世界的な力使ってないだらうなアイツ……」

「それは流石に……」

そう言うアテナも、若干言葉を濁している。言い切れないのだらう。

「それで、雪を使ってなにかするの？」

「はい。私、昔からやってみたいことがあったんです」

いかにもワクワクしてます、という表情でアテナが両手をピトッと合わせる。

「やってみたいこと？」

「はい、雪だるまとか、かまくらを作ってみたいんです！」

問いかけてみると、アテナは満面の笑みでそう言った。

「……じゃ、作るか。一緒に」

「はい！」

俺とアテナは、朝食もそこに（ちなみに、アテナが作った。

相変わらず、そこそこの出来だった）、レッド寮正面の広場で雪をかき集めていた。

「ほう……どうしてお料理、あんまり上達しないんでしょう……」

「あんまり気にするな。普通に食べれるレベルではあるんだからさ」

「でもでも、さだめさんは何気に料理上手ですし、ルインさんは順調に上達してますし……ユーキさんは普通ですけど」

「希冴姫は出来ないけどな」

ちなみに、希冴姫の場合は一切上達しなかった。漫画のように吐いたり倒れたりはないものの、丸焦げだったり調味料の入れ過ぎだったりと、リアルに身体に悪そうな料理しかできない。

「まあ、そんなことはいいだろ。それより、この積雪量とかまくらはちよつと厳しいな」

雪だるまくらいなら、雪をかき集めればできそうだが。

「残念です……」

「ま、あとは雪つさぎとかで勘弁してくれ」

「雪つさぎ……」

アテナの目が輝いた。

「作りたいです！ 雪つさぎ！」

「はは、じゃあ作るうか」

「はい！」

無邪気に満面の笑顔でアテナ。

「……こうしてれば普通に子供なんだがなあ……」
笑顔で雪と戯れるアテナは、その白銀の髪とマツチして非常に絵になる。

「精霊、というか、妖精みたいな感じだよな」

「え？ セツ、何か言いましたか？」

「……いや、何でもない」

改めて真正面から語るのには恥ずかしすぎる。しかし、アテナは納得いかないようで、更に問い詰めてくる。

「いいじゃないですか。もう一度言ってくださいよ」

「いいから、さっさと雪を集めなさい。胴体と頭、どっち作る？」

「うう仕方ないです。私、雪をコロコロするの好きなんです！」

「そっか。んじゃ胴体はアテナに任せた」

「はい！ セツは頭をお願いしますね！」

「おう。土台と合わせて作っておくさ」

「土台……？」

「いや、せつかくだし『スノーマンイーター』っぽくしようかと…

…」

いつかの飴細工ではないが、どうせ作るならデュエルに関係のある形にしてみたい。しかし、アテナは不満なようだ。

「ダメです！ ちゃんと、普通に可愛く作るんです！」

「そうか？」

まあ、アテナがそう言うならそうしようか。

「セツ、雪つさぎさんの目は……」

「ビー玉でいいか？」

「あっ、茶色いです。ダメですよ。赤い眼じゃないと」

「でも、普通のウサギは大抵眼が茶色くて、赤い眼のウサギは珍しいんだぞ？」

「あ・か・い・め・です！」

「……はい」

妙に迫力のあるアテナに押され、仕方なく赤いビー玉を調達してくる。そんな風にして、アテナとのデートは過ぎて行った。

「さだめのターン！」
「ターンエンド」
「テンション低っ！　そして、まだ終わらないよ！　スタンバイフ
エイズにも入ってない！」
「お前はテンション高いなあ……」
「ちよつとお兄ちゃん。アテナとのデートだけで疲労困憊じゃ、先
が思いやられるよ？」
「あの早朝バズーカが効いててな……」
「アテナそんなことしたの？」
「希望の差し金でな」
その後には雪だるまだ。雪遊びつてのは案外体力を使う。
「で、お前のプランを聞こうか。下ネタ禁止で」
「いきなり選択肢を大幅に狭められた！」
「選択肢の大半が下ネタということに、年頃の乙女として何か思う
ところはないのか」
「むしろ、健康な乙女の証拠だと思う」
「男なら兎も角、乙女でその理論は初めて聞くな」
「女の子がエロくないと考える男子は馬鹿だと、さだめは思う」
「見させてやれ。夢を」
「少なくとも、さだめはエロエロです」
「改めて宣言するまでもなく、骨の髄まで知ってるよ」
「で、今日のプランだけど」
「おう、なんだ？」
もうこのナチュラルな流しも慣れてきたな。
「日頃ストレスを溜めているであろうお兄ちゃんのストレス解消に
なればと……」
「珍しく殊勝じゃないか。お前がストレス溜める第一人者であるこ
とに眼を瞑れば、だが」
「雪だるま割りを」
「却下だ」

俺の午前中の頑張り兼アテナとのデートの成果を無にするつもりか。

「えー」

「えーじゃない。俺がその提案を了承すると、本気で思ってるのか？」

「お兄ちゃんなら、雪だるまを作った時に内部に爆破解体用の火薬くらいは用意してるかなって」

「……ハハハ、ソナバカナ」

「片言だよ」

「仕込んでない。自分一人で作るなら兎も角、あんだけ無邪気そうに作られたら、そんな悪戯はちよつとな」

ちよつと考えちゃったりしたのは内緒だ。

「むう、さだめの選択肢から下ネタとライバルへの嫌がらせ、拉致監禁系を排除すると……」

「最後のを、自主的に除外したことは、成長したと褒めてやるう」

「決めた！」

「聞こうか」

「徹底的に甘える！」

さだめはそう言っただけで飛びついてきた。

「おわつと、ととと……」
一瞬何をしてくるか身構えたが、さだめは特に何をすることもなくゴロゴロと猫のように俺に身体を擦りつけてくるのみ。

「お、おい……」

「だいじょうぶ。なんもしないからあゝ」

「だ、だけどな……」

体中を這い回れるのは若干……おっつ！？

「さ、さだめ！ 顔に抱きつくな！」

「いつもなら、このまま股間まで持つてくところだけど……今日は
おっぱいで我慢」

「何が我慢だ！ こらっ！」

顔面にうつすい胸を押しつけてくるさだめを引き剥がす。

「にゃー！ ならごう！」

「うおっ！？」

今度は俺の胸に顔をうずめてくるさだめ。

「これくらい良いでしょ？」

「……まあ、いいか」

胸元のさだめを軽く撫でる。

「むふ〜……………」

「ったく……………」

たまに、コイツのことが分からなくことがある。俺のことを襲い
かねない勢いで迫ってきたり、今のようにただ抱きつくだけで満足
したり……………。

「結局、お前は何を求めているんだ？」

「決まってるでしょ」

俺の呟くような疑問に、さだめはあっさりと答えた。

「さだめが昔から、ただ一番に望んでいるのは……………」

きゅっ、とさだめが俺を強く抱きしめる。

「お兄ちゃんと一緒にの未来。さだめは、それだけを望んでる。例え
お兄ちゃんが、別の誰かと結婚しても、さだめはずっと、お兄ちゃ
んの一番傍でお兄ちゃんと一緒にいるの」

「別の誰か、か……………」

「……さだめも、甘くなつたもんだよね」

昔のさだめなら、例え冗談でも、間違つても言わなかっただろう。

「でもね。なんだか、それが悪くない気分なの。みんなと一緒にの未
来が……………心地いいの」

「……………そっか」

昔では考えられないほどに穏やかな顔で、俺の胸に顔をうずめる
さだめ。

「あっ！ でもでも、第一嫁はさだめだよ！ っていうか、単独だ
と尚良し！ そこんところは勘違いしないでよお兄ちゃん！」

「クツ、ああ。わかってるよ」

「誰かと結婚したからって、さだめも一緒じゃなきゃゼツタイ駄目だからね！」

「ああ」

大丈夫だよ。さだめ。

「……お前のいない俺なんて、想像もつかないからな」

そうして、やがてさだめが寝息を立て始めるまで、俺はゆっくりとさだめの頭を撫で続けるのだった。

「セツ様」

「おう、希冴姫。もうお前の順番か？」

「はい。よろしくお願い致しますわ」

「んじゃ、ちよいと外に行くか。コイツは……」

すっかり寝入ってしまったさだめを見る。

「妹様……寝てしまったのですわね」

「ああ。実はコイツの寝顔はレアだぜ？ よく見とけ。コイツ、寝顔は天使だから」

「赤ちゃんですか……でも、本当ですわね」

元々童顔だからか、さだめが寝てしまうと本当にあどけない顔で寝る。手足を畳んで、首を縮めて、胎児のような姿勢で眠る。

「これだけは、昔から変わらないな……」

「それは、終焉の傀儡であった頃から、ということですか？」

「ああ……こつやって……」

口元に指を持って行く。

「んむ……」

指に反応して、さだめが指を銜える。

「まあ……」

「俺の両親は、前にも言ったかもしれないが、さだめを避けていて

……コイツを寝かしついたり、子守歌を歌ってやるのは俺の役目だった」

今思っても、不思議でならない。殺されかけたり、怖い目にはかり遭っていた筈の当時の俺が、どうしてさだめの面倒を見ていたのか。

「でも……」

「守りたい。……この寝顔は、素直にそう思わせてくれますわね」

「ああ……」

希冴姫が、眠るさだめの頭を撫でる。

「セツ様」

「ん？」

「わたくしが、何故セツ様に惹かれたのか、今やっと、わかった気がしますわ」

「そうか」

「セツ様は……ずっと、妹様の騎士で在られたのですね……。周囲全てを敵に回した、妹様の……」

「……そうだな」

希冴姫の言葉に、俺は頷く。だが……。

「そんなのは、当然だろう？」

俺は、兄なんだから。

「妹の騎士になるのは、兄貴の義務だろう」

誰も、守ってくれなくても。誰もが、眼を逸らしても。

「いや、だからこそ」

俺が騎士であるべきなんだ。兄貴である、俺が。

「だとしたら……皮肉ですわね」

「何がだ？」

「だって……わたくしは、さだめ様の騎士であるセツ様に、惹かれただんですもの」

「ああ……そうか」

「セツ様は、わたくしの知るどの騎士よりも素晴らしい騎士ですわ。」

でもそれも、さだめ様をお守りするその姿勢からくるものであったのですから……」

少し寂しげに希冴姫。

「……なんだ。さだめといい、希冴姫といい。今日は随分と寛容……というか、謙虚だな」

「わたくしにだって、自信のなくなる時くらいありますわ」
肩を落とした希冴姫が、拗ねたようにそう呟く。

「ふうん……」

俺は少し考えて、希冴姫の手を引いて外に出た。

「あ、あの？ セツ様？」

「いいから。来いよ」

戸惑う希冴姫に構わず、俺はレッド寮から離れ、近くの断崖へと向かった。

「セツ様……」

「良い夜だな。希冴姫」

「え？ ええ、その、はい……」

俺の真意が掴めないのか、イマイチ歯切れの悪い希冴姫。

「ちよつと注目」

ポケットからハンカチを取り出す。

「取り出しましたるは、何の変哲もないただのハンカチ」

「せ、セツ様？」

「ですが、私が一つ、念じますと……ワン、ツー、スリー！」

「わ、わたくしの剣……と？」

「エースの剣だな。ま、ちよつとした手品だ」

「いえその……エースが貸したんですか？」

「無論、無断拝借だ」

「……怒られますわよ？」

「アイツとの喧嘩は望むところだ」

どうせ何言っても貸してくれないだろうし。

「んで、希冴姫」

「は、はい……」

「俺と、決闘してくれないか？」

「え、ええ!？」

「もちろん、剣でな」

「そ、そんな……無茶ですわ!」

「いいから、ほら、構えた構えた」

「せ、セツ様？」

「構えないなら、こっちから行くぞ!」

俺は剣を振りかざし、希冴姫に切りかかる。

「くっ!？」

しかし、剣なぞ素人でしかない俺の剣は、希冴姫にあっさりと流される。

「ふっ!」

「うおっ!？」

キーンっ!

そのまま弾かれ、俺の（というかエースの）剣は希冴姫に弾き飛ばされる。

「うわっ!？」

一緒に弾かれた俺は、その場に尻餅を付き、希冴姫に剣を突きつけられる。

「せ、セツ様!？ す、すみませんわたくし……!!」

「い、いや、いい……ただ、やっぱり強いな。希冴姫」

「い、いえわたくしなど……それより、なぜこんなことを……」

「ああ……」

慌てたような希冴姫に、俺は落ち着いて答える。

「希冴姫、俺は……弱いだろ？」

「いえ、そんな……」

「実際に、ほら。希冴姫に負けた」

「それは……わたくしは精霊で、騎士ですもの……」

「ああ、そうだな」

それを、俺はあっさり認める。

「でも、俺も騎士だ。さだめの」

「ええ……」

そう。俺は弱い。腕っ節は特に。

「だからさ。お前が必要なんだよ。俺には」

「あ……」

「俺は、さだめを守るさ。でも、希冴姫。俺は、お前に守って貰いたい。駄目か？」

「だ、駄目だなんて……」

「じゃ、それでいいじゃないか、別に。何を気にすることもない」

「セツ様……」

「騎士に、騎士がいておかしいか？」

「……いいえ」

「んじゃ、それで決まりだ」

「……はい」

「じゃ、戻ろうか。何時までもここに居ても寒いだろ？」

「……いえ」

「ん？」

「セツ様さえよろしければ……しばらく、二二で」

「……是非もないさ」

「はい……」

そのまま、俺と希冴姫は雪の深々と降り積もる断崖の上で、しばしの間寄り添うのだった。

「もう、十二時を回ってしまいましたわね……」

「ああ」

「二二まで、ですか」

「それじゃ、剣を回収して帰るとするか」

「はい」

希冴姫に弾き飛ばされたエースの剣を探す。すると……。

「あ……」

「あ……」

地面に突き刺さったエースの剣は、半ばからポツキリと折れてしまっていた。

「セツ！ 貴様……！！」

その剣をエースに返却した瞬間、即座に切れたエースが飛びかかってきたのは、態々書くまでもないことだろう……。

番外編「クリスマス特別編 イヴ」（後書き）

いかがでしたでしょうか？ とりあえず、ギャグとシリアスの配分は丁度いい配分になったかなと思います。

一人目、アテナはまあ、いつものようにほのぼのと。さだめは前半ギャグ、後半シリアス。希冴姫は全編シリアスで構成しました。読みやすく……なっているとは思いますが、どうでしょうか。

では、明日……というか今日こそは日が変わる前にアップしたいと思います。

それでは、悠でした！

番外編「クリスマス特別編 クリスマス本番」(前書き)

間に合いました！

いやー……良かった。また間に合わないかと思いました。一日更
新、大変だ……よくまあ、初めの頃はやってましたね。一日一話
というわけで、今回のメインはルインとユーキちゃん。ボリユー
ムもそこそこあるので、お楽しみください。

番外編「クリスマス特別編 クリスマス本番」

アルカナ〜切り札の騎士〜

番外編「クリスマス特別編 クリスマス本番」

昨夜の騒動で、眠りに就くというよりは就かされた俺は、心地良い歌声で、徐々に目覚めに導かれた。

「……ルインか？」

「おはよう」

ふわっ、と微笑むルインの手が俺の髪を優しく梳く。これは……

膝枕？

「テーマは癒し」

「はは、そう言えば、そんなこと言ってたな」

「……本当は、妹たちの暴走で疲れた貴方を癒すのが目的だった」

「ああ……まあ、思ったほど疲れなかったな」

珍しく、さだめが然程暴走しなかったし。

「けど、銀騎士の折檻があったから、結果オーライ」

「いや、俺が怪我したことを喜ばれても困るんだが」

それじゃ本末転倒だろう。

「わかってる。「冗談」

「ホントか……？」

まあ……膝枕自体は心地良いから別にいいけどさ。

「そういえば、昨日から思ってたんだが……」

「なに？」

「お前ら、クリスマスっぽいデートをする気ないだろ」

雪遊びはまあともかく（それでも、クリスマスっぽいわけじゃないが）、甘えたり、決闘したり（これは俺が誘った）癒しがテーマだったり……。

「仕方ない」

「なんで？」

「作者が、クリスマスデートなんてしたことないから思い付かない」
「切実だな」

普通のデートもしたことない癖に。

「というか、メタ会話をするな」

「貴方から振った」

「そうだけどさ」

その時、ぐぐ、と俺の腹の虫が鳴った。

「お腹、空いてる？」

「ああ。そう言えば、昨日はアテナの朝飯以外食べてなかった」

さだめは時間になった瞬間に飛び込んできたし、希冴姫とのやり取りから直接エースに眠らされたので、夕食も食ってない。

「任せて」

ルインはそう言つと、俺の頭を優しく下ろして立ち上がった。

「簡単な朝食なら」

「作れるようになったか？」

「ん」

ぐつ、と小さくガツポーズしてルインが胸を張る。

「私は日々進化する」

「そりゃ楽しみだ」

まあ、上達するまでには多くの（例、レッド男子）犠牲があったりしたらしいが、奴らも本望だろう。……多分。

「手伝いは？」

「……お願い」

少し考えた後、ルインはそう言った。

「珍しいな？ アテナだと嫌がる人が多いんだが」

「基本的には私が作る。でも、ミスがあったり指摘するべきところを指摘したりして貰わないと上達出来ない」

「なるほど」

相変わらず、見栄は張らない。向上心もあって尚良し、だな。

「でも、余計な手出しはダメ」

「わかってるよ」

ルインの努力の成果だ。野暮はしないさ。

「……えっと」

ルインは若干たどたどしい手つきながらも、幾つかの器具を動かしていく。

「お、ルイン」

「あ、せいご取らなきゃ」

ルインはあっさりと言いが指摘しようとしたポイントに気付き、自分で鰹のうるこを取り除く。

その後も、ところどころ危なっかしかったが、終わってみれば致命的なミスは一つもなく、立派な朝食を完成させた。

「……どう？」

「うん。中々美味い。立派なもんだよ」

ほんのちよつと前まで器具の名前も覚束なかったことを思えば大進歩だ。

「あーん」

「う……まあ、いいか」

ルインが差し出してきた卵焼きを口に入れて貰う。

「どう？」

「美味しいよ。味付けも前より丁度良くなったし」

以前は薄かったり濃すぎたりと不安定だったのが、随分と安定した味付けだ。

「よかった」

俺が褒めると、ルインは安心したように胸を撫で下ろす。

「……口移し」

「調子に乗るな」

ビシッ、と軽くチョップを入れる。

「……痛い」

「つたく……」

「じゃあ……」

「それよりルイン、この食卓見て、なんか気付かないか？」

また「あくん」とやろうとしていたルインを押しとどめ、俺は食卓を指差した。

「……？」

小首を傾げて食卓を眺めるルイン。

「気付かないか？」

「……わからない」

見当もつかないらしく、不思議そうに俺を見る。仕方ないので苦笑しつつ教えてやる。

「お前の分がないだろ」

「……あ」

初めて気付いたらしく、少し眼を見開いて声を漏らす。

「つたく、俺の分を用意するのに一杯一杯で、自分の分は忘れたのか？」

「……面目ない」

「いや、それだけ俺のこと考えてくれてたんだから、文句はないよ。俺は席を立ててキッチンへ向かう。」

「と、いうわけで、これはお礼だ」

「あ……」

ルインが作っている横で、こっそりと作っていたルインの分の朝食を並べる。

「これ……」

「材料からして、一人分なのはわかったからな。作っておいた」

折角なので、メニューは全く同じ。ご飯に味噌汁。焼き魚に卵焼

き。

「……………ズルイ」

「え？」

喜ばれるかと思っただら、何故か返ってきたのは不満そうに、拗ねたように唇を軽く尖らせたルインの顔。

「貴方は男なのに、気が利き過ぎ」

「えーっと……………」

そんなこと言われても……………。

「……………みまみま」

ルインは俺の作った朝食をみまみま食べて、また一言。

「……………私のより美味しい」

「いや、その……………」

「私のより美味しい」

「あ……………」

「私のより……………」

「いやまあ、ほら。俺はもっと昔からやってたから」

すっかり拗ねてしまったらしいルインの背中に声をかける。

「でも……………」

「ふう……………」

本格的に落ち込んでしまったらしいルインを、後ろから軽く抱きしめてやる。

「口移しは無理だけどな……………」

箸を持ち、ルインの肩越しに卵焼きを口に運んでやる。

「これで、精一杯だからな…………… あ〜ん」

……………この台詞を、自分から素面で言うことになるとは。

「……………あ〜ん」

パクっ、もぐもぐ……………。

「どうだ？」

「……………やっぱり、美味しい」

「そうか？ それな……………」

「？」

「お前の作った卵焼きなんだ」

「……え？」

「パツ、と驚いたように振り向くルイン。」

「ほら」

「俺は皿に残った卵焼きを見せてやる。」

「本当……」

「呆然とした表情で二つの卵焼きを見比べる。」

「こんなもんはな。気の持ちようだ」

「ポンポン、とルインの頭を撫でながら俺は言い聞かせる。」

「ルインの料理、美味かったぞ」

「……嘘」

「嘘じゃない」

「でも……」

「俺は、嘘は吐かない」

「……うん」

「暫しの躊躇いの後、ルインは小さく頷いた。」

「やっぱり、貴方はジゴロ」

「やめてくれ。今のはかなりクサかったって自覚はあるんだ」

「態勢も態勢なので、頬が赤くなる。それだと悔しいので、少しく

らいは反撃させてもらう。」

「ルインだって、結構子供っぽいところあるじゃないか。拗ねてる

ルインは、中々可愛らしかったぞ」

「う……」

「ルインの頬も赤く染まる。二人して顔を赤くしつつ、その後のデザートを楽しんだのだった。」

「最後はユーキちゃんか」

結局、ルインは時間一杯までは使わず、そこそこで自ら帰って行った。

『私は十分楽しんだ。貴方は次の時間まで、ちゃんと休んで』
その気遣いをありがたく受け取り、俺はユーキちゃんが来るまでの束の間の休息を楽しんだ。

「……こういうところで好感度稼いでるんだよな。ルインは」
わかっていても、嬉しいものだ。

「ルインさんは優しいから」
「来たか。ユーキちゃん」

「うん。今日はよろしくお願ひします。セツくん」
ぺこり、と頭を下げてくるユーキちゃん。

「ああ、こちらこそよろしく」
まあ、ユーキちゃんなら大丈夫だろう。ルインに休ませても貰ったし、元々ユーキちゃんは無茶言わないしな。

……と、思っていた時期が、俺にもありました。

「うおおおおおつ!?!」

「御堂〜!!! 覚悟!」

「テメエコラ御堂〜!」

「すまん! ユーキちゃん! もうちよい付き合ってくれ!」

「わ、わかったよ〜!」

ユーキちゃんも俺と一緒に走っていた。確かに、ユーキちゃん自身は特に無茶を言わなかった。だが……。

「いい加減にしるこの男の敵〜!」

「ルイン様の手料理を〜!!!」

「っていつか昨日お前何してた!?!」

ユーキちゃんとのデートは外でしていたのだが、その所為で眼を付けられてしまったのだ……あの、野獣たちに。

「アテナ様は何処だ!? 隠すとタメにならんぞ!」

「知らん! 今日はアテナと会ってない!」

「なら昨日か!? 昨日、俺たちの知らないところでよろしくやってやがったのか!?!」

どうもコイツら、カップル狩りだか何だか知らんが昨日は巡回に出ているらしく、レッド寮前で雪だるまを作っていたアテナの姿は見えていないらしい。しかも、滅茶苦茶早朝から眼を血走らせてパトロールしていたのが裏目に出たのだろう。アテナがレッド寮に来ていたことすら知らなかったらしい。

「だからって、今日来るかコイツら!?!」

「わ、わたし、そんなに、持久走とか、ふう、ふう……得意じゃ、ないよ……」

「くつ、ユーキちゃんが限界か……!」

場所はレッド寮近くの断崖。昨夜希冴姫と決闘した辺りだ。

「……ええい! こうなったら……」

ちらりと後ろに迫るレッド男子(数名イエローやブルーも)に眼を向け……覚悟を決めた。

「ユーキちゃん!」

「ふう、ふう……え?」

「すまん!」

一言謝り、かなり足にきているユーキちゃんを思い切って抱えあげる。

「え、え? きゃあっ!?!」

「でえりゃあああああああっ!」

『なにい!?!』

後ろから、追手の生徒たちが驚愕する声が聞こえてくる。

「せ、せ、せ、セツくん!?!」

腕の中からユーキちゃんのテンパった声が聞こえてくる。

「うおおおおおっ!?!」

俺は断崖を、ユーキちゃんを抱えて滑り降りていた。

「だあああああつ!」

崖の僅かな突起に足をかけ、勢いを殺しつつ、崖を滑り降りる。
「ぬあああああつ!?!」

流石の俺もこんな馬鹿げた行為をしたのは二回目(学校の屋上からエスケープしたことはある)だし、しかも今回はユーキちゃんを抱えているので全く余裕がない。

「ずあつ!?!」

履いていたスニーカーの踵がメリメリツ、と音を立ててちぎれた。
「ぐはつ!?!」

最後は姿勢を崩して、崖下に尻餅をつく。俺はそのままバウンドして、海中に真つ逆さま。最後の意地でユーキちゃんだけは地面に寝かせる。

「きゃわつ!?!」

すまん! ちょっと痛いかもしれんが我慢してくれ!

「ぶはつ!」

ち……。

「さむつ!?!」

ま、真冬の海……舐めていた。

「や、ヤバイ……」

て、手足が悴んで……。

「せ、セツくん手!」

「うくつ……」

震える手をユーキちゃんに伸ばす。

「よい……しよっ!」

ユーキちゃんの手を借りて、海中から上がる。

「す、すまんユーキちゃん……けけけ怪我は……」

「いいから! わたしは大丈夫だからセツくん! 寮に戻らなきゃ

……」

「お兄ちゃん!」

「セツ!」

騒ぎを聞きつけたのか、さだめやアテナたちもやってきた。

「我が運ぼう。人一人運ぶなら、我が一番速かるう」

手足が悴んで動かない俺を、エースが背負う。

「冷たっ!?! うぐ……」

俺の身体が思った以上に冷たかったことにエースが驚く。

「ひゃっ!?! こ、こら! 首筋に唇を寄せるな!」

そんなこと言われても、身体が動かないのでどうしようもない。

「そ、な……」

「う、動くな!?! く、くちっ、唇が!?!」

「こらそこ! こんな状況でなにラブコメってるの!」

「そんな羨ましい状況になるなら、わたくしが運びますわ!」

そんな、相変わらずのメンバーに囲まれながら、俺はレッド寮の希冴姫たちの部屋に運び込まれた。

「仕方……ないよね?」

暗転していく意識の中で、ユーキちゃんのそんな声が聞こえてきた。

「ん……」

運び込まれてすぐに意識を失った俺が眼を覚めたのは、気を失ってから一時間程度経った後だった。

「なんだ……?」

身体があつたかい。海に落ちて冷え切った体を、何かとても暖かいものが包み込んでいた。

「起きた……? セツくん」

「ユーキちゃん……?」

「わっ! こ、こつち見ちゃダメっ!」

耳元から聞こえたユーキちゃんの声に、振り向こうとしたが、慌てたようなユーキちゃんの声と共に顔が正面に固定された。

「ユーキちゃん、なにして……っ!？」

そこで、気づいた。ユーキちゃんの声が、妙に近くから聞こえたことに。そして同時に、身体を包んでいる、この暖かさの正体に。

「ユーキちゃ、まさっ!？」

動揺のあまり、言葉が最後までしっかり発音できなかった。

「しっ、下着! 下着は……着てるから」

「い、いやそれ……」

要するに、下着姿なんだろ……!？」

「だ、だってセツくんすっごく身体が冷たくて……あ、あつためるのは人肌がいいって……だから……っう」

ユーキちゃんの表情はここから見えないが、可哀そうなくらい真っ赤になっているであろうことは容易に想像がつく。そして、それは多分、俺も同じなのだ。

「だからって……これは、不味いだろ……」

素肌に直接感じる以上、俺も半裸なのだ。それくらいは、回転が鈍くなった今の頭でも理解できる。いや、出来てしまう。

「セツくん……」

耳元で聞こえる、ユーキちゃんのこの切なげな声もアウトだ。守護神エクゾードクラスの硬さを誇る俺の理性だって、無敵じゃないんだ……!

「あっそ、そうだ! さだめ、さだめたちはっ!？」

アイツらが、特にさだめが、こんな状況を見過ごす筈がない。両刃の剣だろうが、今はアイツが来てくれることを祈るしか……。

「さだめちゃんは……来ないよ」

「な……」

「なんで……」

「今は……わたしの時間、だから」

「り……」

理由になってない……っ!

「ゆっ、ユーキちゃん! も、もう大丈夫、暖まった! 暖まった

から……!!」

兎にも角にも、この状況から脱しようと、俺はすっかり火照り始めた身体をアピールして解放を促す。しかし……。

「だめっ!」

「だ、だめって……」

思いつめたような声で抱きとめられる。押し付けられる胸。感じる鼓動が俺の理性を溶かしていく。

「セツくん……」

「お、俺はもう暖まったから……だから」

苦し紛れに繰り返したその言葉は、しかし。

「わたしが……寒いの」

「っ!」

あっさりと、跳ね除けられた。

どくん、どくん……。

トクン、トクン……。

鼓動が重なる。混じり合う。寒いと言うユーキちゃんの吐息は、しかし確かな熱を帯びていて……。

「ユーキ、ちゃ……」

「セツ、くん……」

お腹に回されたユーキちゃんの腕が、徐々にその高度を上げて行き……。

「あ j f @ お あ い h ふ あ ひ ゃ づ し あ 「 d ヴ あ s ヴ い で や s h v ~ ~ ~ ~ ~ ! ! ! 」

言葉にならない絶叫に、全ての空気が弾き飛ばされた。

「さ、さだめっ!?!」

「さだめちゃん!?!」

「くあ w s e d r f t g y ふ じ こ ー p ; ; @ :」

相変わらず意味不明の言語で叫び続けるさだめの全身が真っ赤だった。興奮し過ぎて全身の毛細血管が破裂しているのか。

「……さすがにやり過ぎ」

「あ、ルインさん……」

思わず俺と離れたユーキちゃんに、ルインがコートをかけていた。その声には、珍しく険が籠っていて、確かな怒りを感じさせる。

「コー……ホー……」

「か、完全にダークサイドに堕ちてらっしゃる……」

充血し過ぎて赤い眼を光らせて、さだめが深く息をする。

「セツ……」

「あ、アテナ……」

「流石に……それはダメです」

「はい……」

静かに、しかし初めて聞くほどに冷たい声色のアテナに身を縮めて返事をする。スツ、と首筋に冷たい感触。

「……辞世の句を詠むが良い」

「え、エース……さん？」

「は、は、は……破廉恥な……くれいじー、だ」

動揺し過ぎてクレイジー、がひらがなになっている。

「お兄ちゃん……」

「さ、さだめ……」

ようやく多少発音がマシになった（それでも発音し切れてない）さだめがその手を俺に伸ばしてくる。

「うぐっ……」

その手が触れた頬が赤く染まる。掌が血塗れになっていた。

「キ、キキキキキ……」

「さ、さだめさくん……？」

完全に眼がイってらっしゃる我が妹に呼びかける。

「キュケーーーーー！」

「ぎゃああああああつ！ トランクスを剥ぐなああああ！」

イっちゃった眼のまま、唯一の聖域に手をかけるさだめから逃げる。

「くぁwせdrftgyふじこrip:~@……」

またしても意味不明になったさだめの猛攻を掻い潜りながら、俺はやっぱり最後はこうなるのか、と半ば諦観の溜息を吐くのだった。

番外編「クリスマス特別編 クリスマス本番」(後書き)

こんにちは。

本当はこの後に、全員でパーティを書く予定だったんですが、尺と時間の都合で全面カット。非常に残念です。ルインとユーキちゃん
んがスペース取りすぎました。

ちなみに、気付かれた方もいらっしゃるかもしれませんが、今回、書くヒロインにはそれぞれ別々のテーマがありました。まずアテナは「ほのぼの」或いは「ほのラブ」。次にさだめが「ギャグ&シリアス」。希冴姫が「シリアス」。ルインが「甘々」。ユーキちゃんが「お色気」です。ユーキちゃん……。

そして、最後のシーン希冴姫が出てませんが、希冴姫は耐えきれずに気絶してました。ウブなので。

それでは、悠でした！

第四期第十二話「旅立ち……そして現れる終焉」(前書き)

この辺りから、割込じゃなく普通に新規更新枠にしますね。そろそろ良いかな、と思うので。

第四期第十二話「旅立ち……そして現れる終焉」

アルカナ「切り札の騎士」

第四期第十二話「旅立ち……そして現れる終焉」

「よし、つと。こんなもんかな」

俺は荷物を纏めて、旅立ちの準備を整える。

「セツく準備出来ましたか？」

「ああ、アテナ。とりあえずな。アテナの方はどうだ？」

「私は、そんなに荷物とかありませんし……というか、セツこそ、何でそんなに沢山？」

「少しくらいは調理器具とか、非常食とかも持っていた方がいいだろう」

後は、研究資料とかを諸々。まあ、それほどの大荷物ではない。

「そうですね。もしかして、私たちも何か持って行った方がいい物ありますか？」

「いや、大丈夫だ。心配するな。アテナたちは、デュエルディスクとデッキだけ、しっかり忘れなければいい」

「はい。わかりました。それじゃあ行きましょう。みんな待っていますよ」

アテナに促され、荷物を持って城門まで降りる。

「あ、来た来た。お兄ちゃん！」

「おはようさだめ。昨夜は、良く眠れたか？」

「うん。もうバッチリ！」

「……図太いな。お前は」

俺たちとは言えば、実はあんまり眠っていない。その理由は、当然と言えば当然だが、デミスのような大物があっさり侵入してきたもんだから、城の中でもゆっくりは眠れなかったからだ。

「申し訳ありません。主様。それでも、警備は厳重にしていた筈なのです……」

「終焉の前には、儂らの警戒なぞ通用せんと言われたようで腹が立つわい」

「道中は、誰かが寝ずの番だな」

「ああ、我らで交代制にする。一晚につき三人のローテーションが妥当か？」

騎士たちも、そのことには責任を感じて昨夜から徹夜で見回りを行っていたようだ。それでも、傍目には疲れが見えない辺り、流石に騎士だ。

「……おはよう」

「お、来たかルイン」

そして、昨晚の主役、といっても過言ではないルインは、消耗していたのもあって一番の厳戒態勢の中、安心して眠りについていらしい。番についていたのがネイキッドらしいが、むしろそれはネイキッドが危険要素な気がしてならん。

「はっはっはっ！ 案ずるなセツよ。流石の我も、昨夜のようなことがあって尚煩惱に集中を乱されるようなことはない」

「……まあ、実際ルインは無事みたいだし、いいけどな」

ちなみに俺も厳戒態勢だった。主に見回りの騎士の中で手が空いた騎士が見張り。ただし、エース以外。

「……何故だ。我が最も戦闘技術には長けているというのに」

とエースは不満たらたらだったが、さだめが猛反発したので他の連中が見張りをしていらしい。さだめは、

「エースさんは危険だよ……さだめをして、お兄ちゃんへの感情の種類が掴めない。パツと見ライバルにしか見えないけど……でも、

なんか違う。しかもそれを天然でやっているんだから……危険な橋を渡る愚は避けるべきだね」

とかなんとか、訳知り顔で考察していた。

「それじゃ、そろそろ出発するか」

全員揃ったことを確認し、俺は皆にそう声をかけ……。

「何処に行くの？ わたしも連れてってよ。セツくん」

「っな!？」

「馬鹿なっ！ 何時の間に!？」

背後から、抱きすくめられる感触。耳元で聞こえた声は、聞き慣れた、何処か間延びした柔らかな声質。

「ユーキ……ちゃん」

俺の声に、ユーキちゃんはクスリと妖艶に微笑んだ。

「おのれ！」

一瞬惚けていたエースたちが、慌てて剣を抜く。

「待て！」

俺は、今にも飛びだしそうなエースたちを制止する。

「何故だ!？」

「クス、いい判断だよ。セツくん」

そう、ユーキちゃんが言った瞬間、周囲が闇の炎で包まれた。

「こ、これは……」

「闇のゲーム」

誰かの戸惑う声に、全員の中でも、特に顔色の悪いルインが短く答える。

「……このタイミングでの襲撃は、一網打尽が目的か？」

「流石セツくん。一発で見抜いちゃうんだ」

でも、とユーキちゃんは更に言葉を重ねる。

「それだけじゃないよ。どうやら、適当な小物をぶつけても、セツくんたちが強くなって行っちゃうだけみたいだから。わたし、ゲームのラスボスさんみたいに親切設計してないよ？」

「……なるほどな」

ユーキちゃんは、元々結構なゲーマーだったからな。その性質もわかっているわけだ。

「……やっぱりだ。まだ、ユーキちゃんは消えてない。お前の中にいるんだな。終焉の闇」

俺の言葉に、終焉の闇は頬をピクリと動かした。

「当たり前だよ？ わたしは、加藤友紀なんだから」

「そうだな。表面上はともかく、根っこにはユーキちゃんが生きている」

そう言うと、終焉の闇は苛立たしそうに舌打ちを一つ。

「……セツくん。今の状況わかってる？ セツくんたち、もう逃げられないよ？」

「ああ、そうだな。少なくとも、こうやって抱かれてちゃ、俺は逃げられそうにない」

「……俺、は？」

終焉の闇の言葉尻を取った疑問に、俺は笑って見せる。

「ああ。“俺は”、だ」

「っ待って！」

昨夜の会話から、俺が何をするか見当がついていたのだろう。ルインが慌てて制止しようとするが、もう遅い。

「これは……！」

「転送魔法陣？」

「セツ!？」

さだめたちはともかく、アテナたち精霊の知識を持つ者にはわかつたらしい。アテナは悲痛な表情で俺に向かって叫ぶ。

「お兄ちゃん！ 何、何しているの！？ これ何！？」
さだめも、珍しく狼狽した様子で叫んでいる。

「……セツくん」
背後から抱きすくめられているので、ユーキちゃんの表情はわからない。が、冷たい表情をしているであろうことは容易に想像がついた。

「……俺の力は転送とか、繋げることに長けているらしくてな。例え闇のゲームの結界で閉ざされていようが、無理矢理人間界にみんなを送ることくらいはわけないらしい」

俺の説明で、皆もその事実が気が付いたのだろう。声を荒げて迫ってくる。

「おいセツ！ テメエ何考えてやがる！？」

「セツ！ 馬鹿な真似はやめて、これ解いてください！ みんなで戦えば……」

半ば以上涙目のアテナの言葉に苦笑する。

「そっちこそ、馬鹿言え。どちらにせよ、デュエルってのは一対一でやるのが基本だろ。応援なら、傍にいたってできる。それよりも、お前らをこの危険地帯から逃がす方が先だ」

説明しても、アテナはふるふると首を横に振るだけだ。

「お兄ちゃん！」

「さだめ、我儘はなしだぞ」

「違うよ！ これは、我儘なんかじゃない！」

わかってる。でもな、さだめ。

「俺は、お前を守る。昔から、それだけが俺の全てだったんだ」

「っ……」

「その上、この世界にはお前と同じように、守りたい奴らがこんなに増えちまった。なら、やるしかないだろ……！」

アテナたちを包む光が更に強く発光する。

「大丈夫。ここで俺が、ユーキちゃんに勝てば万事解決なんだから。

……人間界で、待ってる」

「待つ……!!」

最後まで言わせず、アテナたちはその場から消えた。

「……ふうん、すごいね。わたしの干渉を物ともせず人間界と繋げるなんて」

「何だかんだ言つて、ユーキちゃん邪魔しないでいてくれたからな。首でも絞められたら出来ないところだった」

「そっか。じゃあそうしておけばよかったね」

俺が逃げないことはわかったのか、ユーキちゃんは俺から離れて俺の正面に立つ。

「でも、セツくんだけ残つたのは下策だね。どうするの？ あの子たち、立ち直れないかもよ？」

「その辺は、頼りになる奴に任せるさ」

「……頼りになる奴？」

「ま、どうせこの状況も想定して動いているような奴さ」

俺の言葉に、終焉の闇は何か思うところがあるのか思案顔になる。「……まあいいや。とりあえずわたしは、ここでセツくんをわたしのものにしちゃうね」

「……どうやら、俺の童貞人生は長く続きそうにないな。無事に帰つても、さだめに力尽くで奪われそうだ」

男としちゃ、喜ばしいことなのかもしれないが、どうにも素直には喜べないな。冗談めかしてそういつた俺に、終焉の闇はユーキちゃんの顔でクスクス笑う。

「セツくん、この状況でも自然体だね。凄いよ。でも……」

終焉の闇の目が、黒く怪しく輝いた。

「どうする気？ 騎士さんたちまで逃がしちゃって。戦えないよ？」

「……俺が、異世界の人間だってことは知っているよな？」

唐突な俺の言葉に、終焉の闇は怪訝そうな顔をする。

「俺の世界じゃ、一人の人間が複数のデッキを使うことなんてありふれていてな。俺はパーミッションだけじゃなく、バーンも、コントロールも、特殊勝利も、ビートダウンだって多少は使っていた」

「それが？」

「……俺が、アルカナだけだと思っなよ」

俺は腰のホルダーからデッキを取り出し、デュエルディスクにセツトする。

「こうなることは想定済みだ。エースたちがいない状況でも戦えるように、別のデッキは組んでおいた」

「フフフ……アハハハハツ！ うん、いいよ。遊んであげる。嬉しいデュエルにしようね。セツくん！」

「愉しませやしない。ここで、全て終わらせる！」

「デュエル！！！」

「待つて！ セツ！」

私が伸ばした腕は、セツに届くことなく空を切りました。

「ここは……レッド寮前か……？」

困惑するみなさんと、脱力し、力なく座り込むことしかできない私たち。

「クソツ！ 馬鹿が！ 主を守らず、逃げ帰る騎士が何処に居る！
？ 自分を犠牲に、騎士を逃がす君主が何処に居る！？ あの、クレイジーがあ！」

エースさんは今まで見たことがないくらいに荒れていて、傍に居るジャックさんやキングさん、テンスさんも、常ならぬ殺気立った様子で拳を握りしめています。

「……す」

「さだめさん？」

「……犯す」

「え」

「犯す。力尽くで奪う。素っ裸にひん剥いて縛りあげて吊るし上げて思っ存分視姦してから凌辱してやる……！ じゃなきゃ、絶対割

に合わない……」

「さ、さだめさん……?」

なんだかこう、聞いちゃいけないくらい物騒というか……危険な言葉の羅列に思わず引いてしまいました。

「……でも、セツ」

気持ちは、わからなくはないです。これは、許せません。

「セツは、ウソ吐きです。離さないって言ったのに……私が離れた時は、無理矢理強引に引き止めてくれたのに……なのに、自分から手放さないでくださいよ……」

「ぐすっ……うっ、えぐっ」

ルインさんは、泣いていました。普段の冷静な面影が見えないくらい、弱々しい姿で、子供のよう。

「わ、わたっ、私は……知ってたのに……彼、がっ……こうする、って……なのに!」

止められ、なかった。そう言って、ルインさんはまた泣いてしまいました。

セツは……あんなこと言ってましたけど。セツのこと、信じてもいますけど。それでもあの状況では、最悪を意識せずにはいられません。エースさんたちもここににいるのに、どうやって抗うつもりなのか、見当もつきません。

「セツ……!」

「まったく。セツにも困ったもんだね。それでも僕は忙しいって言うのにな」

「あ……」

「大丈夫？ アテナ。しっかりしなさい。落ち込んでても、前には進めないわよ」

聞き覚えのある声が背後から聞こえてくると、背中を強めに叩かれるのは殆ど同時でした。

「光、お姉さん。希望さん……」

「雰囲気がい暗いね。まるでお通夜だ」

「しょうがないじゃないですか……」

「負けたから？」

「負けてません」

「どうか。セツ一人を残して逃げ帰ってきたのは、負けじゃないのかな？」

「……」

希望さんの言葉は正論で、私は黙り込んでしまいました。

「まったく、セツにも困ったもんだ。トカゲの尻尾切りで尻尾じゃなく心臓切り捨てたようなもんじゃないか」

溜息を吐きながらそんな風に評する希望さん。

「……うるさいからちよつと黙って」

「おやおや。嫌われているのは承知しているけど、そう邪険にしないでくれ。一応、僕は君たちを助けに……」

「ちよつと黙っててよ！ 今さだめたちは……」

「落ち込んでいる暇が、あると思っっているのか？」

「っ！」

ふいに温度の下がった冷たい声に、当たり散らそうとしていたさだめさんの言葉は遮られました。

「自体は切迫している。詳しくは省くが、今の人間界は破滅の光によって危機が迫りつつある。そして、精霊界では終焉の闇。破滅の光と終焉の闇が同時期に、別々の世界でその活動を本格化しているんだ。正直な話、二つの世界の終わりが近い」

「破滅の……光？」

「希牙姫が消滅したのは破滅の光による影響だ。詳しい話は省く」

希望さんの言葉に、私たちは呆然とするだけでした。

「僕は、破滅の光の影響がなるべく小規模で済むように手を打つので精一杯。君たちに全面協力している暇はない」

「なら、ほつといて」

「放つておいても世界は滅ぶ。だから君たちが落ち込んでいるとか、そんな余計な手間は省略させてもらう。一刻も早く精霊界に戻り、終焉の闇を止めてくれ」

「そんなの、当たり前……」

「ああ、言い方が悪かった。今の君たちでは、どうにも頼りない。君たちは力を得るのが先決だ。だが、今は呑気に冒険の旅に出ている余裕はない」

「じゃあ、どうすれば」

「僕が君たちを、行くべき場所へと直接送ろう。力を使ってね」
希望さんが力を使う。それはつまり……。

「そ、それじゃあ終焉の闇が……」

「ああ、力を増すだろう。だが、悠長に時間をかけて世界が滅びるくらいなら、多少相手の力を割増にしても僕が何とかするしかない」
確かに、破滅の光というものは良く分かりませんが、終焉の闇は既に行動を起こしています。時間はかけられません。

「今は巧遅より拙速を尊ぶ。君たちの精神状態も心配ではあるが、その辺は各自乗り越えてもらうしかない」

「ま、待って！ お兄ちゃんは……」

「セツなら、勝てなかったとしてもすぐには死なない。終焉の花婿でもあり、セツ自身が賢い。下手は打たないさ」

「そうですね……セツを助けるためにも、今は……」。

「……」『倒れるのは、泣くのは、全てが終わってからだ。今はただ、前へ。がむしゃらにでもいいから、前へ……！』彼の、言葉。彼の覚悟」

ルインさんがボソリと呟いた言葉は、私たちの気持ちも奮い立たせてくれました。

「セツ……!!」

「必ず助けるから。お兄ちゃん」

「もし、セツがこのまま勝てばよし。勝てなければ、助け出す。いいね?」

全員、黙って頷きます。

「……本来なら、こんな風に君たちに干渉してしまうのは下策なんだが……手段は選べないからね。すまないけど、世界は任せた。セツを救うついでにでも救ってやってくれ」

最後に冗談交じりのそんな台詞を言って、希望さんは私たちの周りに魔法陣を敷きました。

「当然。世界はともかく、お兄ちゃんは必ず救う。早くしないと、ユーキさんに食べられちゃうし」

「心配するベクトルが違いますけど……セツは、絶対助けます」

「……彼から離れない。そう誓ったから」
「当然だ。希冴姫共々、奴は特別痛い一撃をくれてやらねば気が済まん」

他の皆さんも、その気持ちは同様で、一斉に頷きます。

「ありがとうございます。希望さん。おかげで、何とかかなりそうです」

「……礼はいらない。正直、ロクな手助けができなくて謝りたい気持ちで一杯だよ。さあ、行ってくれ」

セツの時もみた、強い光と共に私たちは再び精霊界へ戻るのでした。

第四期第十二話「旅立ち……そして現れる終焉」（後書き）

改訂前は、確かセツが使うデッキはなんでしょう！ とかクイズ
しましたね。結局、ヒントの出し方が悪かったのか誰も正解者居ま
せんでしたが。今回はすぐに判明しますよ。

それでは、悠でした！

第四期第十三話「輝ける鋼核VS終焉の闇」(前書き)

十三話目です。いやまあ、不吉な数字。流石終焉。狙ったわけでもないのにこんな数字です。明日更新だったら尚不吉でしたね。まあタイトルでセツが使うデッキはわかるでしょう。そうです。あの使いにくいことで有名なあのデッキです。

第四期第十三話「輝ける鋼核VS終焉の闇」

アルカナ〜切り札の騎士」

第四期第十三話「輝ける鋼核VS終焉の闇」

「先攻は譲ってもらっていいか？」

「どうぞ〜」

「んじゃ、遠慮なく。ドロー！」

気楽そうな、それでいて鋭い気配に促され、俺はデッキからカードをドローした。

「俺はモンスターを一体、守備表示でセット。カードを一枚セットしてターンエンドだ」

「……わたしのターンだね。ドロー」

恐らく、俺に先攻を譲ったのは俺のデッキがどういうデッキなのかを確認する意味合いもあったんだろう。裏守備と一枚のリバースカード。これじゃあ、何もわからないに等しい。思惑は外せた。

「わたしは『ジ・エンド・ウルフ終焉の餓狼』を召喚。攻撃表示」

『ジ・エンド・ウルフ終焉の餓狼』 ATK1300

「む……」

しかし、こちらもユークちゃんの初手に首を傾げざるを得なかった。聞いたことのないカードだ。

「攻撃力1300か……」

攻撃力だけなら、それほど脅威は感じない。が、ただのモンスターではないだろうことは、あの『ジ・エンド・スプリッツ終焉の精霊』を彷彿とさせる名前

と外見で容易に想像がついた。

「バトルフェイズ。『終焉の餓狼』^{ジ・エンド・ウルフ}で、セツくんの裏守備モンスターに攻撃。『ジ・エンド・ファング』！」

闇の獣が切り裂いたのは、岩石の化け物。その額の紋章が輝く。

「あれは……！」

「破壊された『コアキメイル・ロック』の効果を発動する！ 戦闘によって破壊され、墓地に送られた時、デッキから『コアキメイルの鋼核』を一枚選択し、手札に加える！」

『コアキメイル・ロック』DEF1000

これで、ユーキちゃんにもわかっただろう。俺の新しいデッキ。

コアキメイルが。

「……やってくれるね。なるほど、わたしに対してはこの上ない選択かもね」

「お褒めに預かり光栄だ」

コアキメイルは、扱いの難しいビートダウンとしての見識が一般的だが、その実光・闇属性に対するメタ効果を持つモンスターを多く擁するテーマデッキ。その上、扱い易い専用カウンター罠まで持っているとなれば、この選択は間違っていない筈。

「以前のわたしはサイレント。つまり光属性主軸。そして今は……」

「終焉の『闇』。少なくともどちらかを使ってくるのは間違いないと思っていたよ」

ちなみにこのデッキなら、アテナ、さだめ、ルインにも有効な、ある意味俺の秘蔵デッキ。みんな結構光と闇に偏っているからな。

「ふふ……まさかわたし用にデッキを組んで来ているとは思わなかったよ。光栄だね。セツくん。わたしはカードを一枚セット。ターンエンド」

「俺のターン、ドロー！ 俺は手札から永続魔法『コア転送ユニット』を発動する！ 手札の『コアキメイルの鋼核』を墓地に送り、デッキから『コアキメイルの鋼核』を手札に加える」

「デッキ圧縮だね」

「そして更に魔法カード『コア濃度圧縮』を発動。手札の『コアキメイルの鋼核』をオープンし、『コアキメイル・フルバリア』を捨ててカードを二枚ドロ―！」

更にデッキを掘り進める。このデッキは特性上、なるべく速攻で決めてしまいたい。

「俺は『コアキメイル・ウルナイト』を攻撃表示で召喚。効果発動！手札の『コアキメイルの鋼核』をオープンし、デッキから『コアキメイル・サンドマン』を特殊召喚する」

コアキメイルの要であるウルナイトと、トラップに対するカウンターモンスターであるサンドマン。どちらも攻撃力は1900以上！

『コアキメイル・ウルナイト』 ATK2000

『コアキメイル・サンドマン』 ATK1900

「バトル！『コアキメイル・ウルナイト』で『終焉の餓狼』を攻撃

！」

「きゃ……………！」

ユークレP3300

「更に『コアキメイル・サンドマン』で……………」

「戦闘で破壊された『終焉の餓狼』の効果が発動。デッキから同名モンスターを特殊召喚できるよ。『終焉の餓狼』を守備表示！」

『終焉の餓狼』 DEF1000

「くっ……………そう簡単にはいかないか。『コアキメイル・サンドマン』で『終焉の餓狼』を攻撃！」

「効果により、デッキから『終焉の餓狼』をリクルートするよ」

『終焉の餓狼』 DEF1000

「……………俺はターンエンドだ。エンドフェイズ時、ウルナイトの維持コストとして手札の『神獣王バルバロス』をオープン。更にサンドマンの維持コストとして『コアキメイル・ガーディアン』をオープンする」

「ふふ、わたしのターン、ドロ―！わたしは永続魔法『加速する終焉』を発動するよ」

「加速する終焉？」

「このカードは、互いのエンドフェイズに自分の手札・ライフ・デッキ・フィールドの内、どれかを選んで終焉を加速するカード。手札なら、一枚を墓地へ。ライフなら800ポイント。デッキなら上から五枚を除外。フィールドなら一枚破壊というように。どれを選ぶかは、ターンプレイヤーの自由だよ」

「……なるほど。そんな厄介なもんは使わせたくないな。カウンター罠『鋼核の輝き』！手札の『コアキメイルの鋼核』をオープンすることで、魔法・罠の発動と効果を無効にし、破壊する！」

「残念。わたしもカウンター罠『魔宮の賄賂』を発動するよ。『鋼核の輝き』を無効にして、セツくんはカードを一枚ドローだよ」

「くそ……」

得意のカウンターにカウンターを返され、俺は苦虫を噛み潰したような顔になっていることだろう。

「手札から速攻魔法『終焉の魔薬』を発動。手札を一枚捨てて、相手モンスター一体の攻撃力をこのターンのエンドフェイズまで0にするよ。私が選択するのは『コアキメイル・ウルナイト』だよ」

『コアキメイル・ウルナイト』 ATK0

「なにっ!？」

「『終焉の餓狼』を攻撃表示に変更。『終焉の餓狼』で『コアキメイル・ウルナイト』を攻撃。『ジ・エンド・ファンク』！」

「くっ……?」

ウルナイトが破壊され、来ると思っていた衝撃がこない。

「あ、言い忘れていたけど、『終焉の魔薬』を使ったターン、セツくんは戦闘ダメージを受けないよ。良かったね？」

クスクスと笑うユーキちゃん。

「うん。それじゃあ『終焉の餓狼』の効果が発動するよ」

「え?」

リクルートだけじゃなかったのか?

「『終焉の餓狼』が相手モンスターを戦闘によって破壊した時、自

分の墓地に存在する『終焉の餓狼』ジ・エンド・ウルフを一体特殊召喚できる。でも、この効果で特殊召喚された『終焉の餓狼』ジ・エンド・ウルフはこのターン攻撃できない」

これ以上の攻撃はない、か。とはいえ、厄介な壁モンスターだ。倒しても再び現れ、攻め込まればその数を増やす。

「終焉は終わらない。終焉を終焉に導くことが出来る者はいないよ。わたしはカードを一枚セット。エンドフェイズに『加速する終焉』の効果でデッキからカードを五枚除外する」

ユーキちゃんのデッキから落ちたのは『終焉の死神』ジ・エンド・グリムリパー『終焉の精霊』ジ・エンド・スベリッツ『終焉の焰』『奈落の落とし穴』『キラー・トマト』の五枚。

「アハハッ！『終焉の死神』の効果発動！このカードがデッキから直接除外された時、自分と相手の墓地に存在するカードを一枚ずつゲームから除外するよ！わたしが選択するのは『終焉の魔薬』と『コアキメイルの鋼核』！」

「なんだと!？」

不味い……ただそれだけが頭にある。要である鋼核が一枚除外され、残るは手札の一枚とデッキに一枚。コアキメイルにおいて、この状況はかなり厳しい。

「ターンエンドだよ。さあ、セツくん頑張つて」

「くっ……俺のターン、ドロー！」

落ち着け……ユーキちゃんのデッキは大まかに言えば多分、除外系の閻属性。今のところは、余り攻撃力の高いモンスターはいない。とはいえ、ビートダウンで押し切れるか……？

「俺は『コアキメイル・デビル』を攻撃表示で召喚！コイツがいる限り、メインフェイズ中光と閻属性のモンスター効果を無効にする！」

『コアキメイル・デビル』 ATK1700

「っ……」

ユーキちゃんが苦々しげに顔を歪める。やはり、コイツの効果は苦しいらしい。

「バトルだ！『コアキメイル・デビル』で『終焉の餓狼^{ジ・エンド・ウルフ}』に攻撃！
「リバースカード『次元幽閉』！ その厄介なモンスターには消えて貰うよ！」

「そうはいかない！『コアキメイル・サンドマン』の効果発動！
このカードをリリースすることで畏カードの発動と効果を無効にし、破壊する！」

デビルの攻撃は止まらない。カマイタチを纏った爪が影の狼を切り裂く。

「くっ………！」

ユーキLP2900

「……俺はこれでターンエンドだ。エンドフェイズに『コアキメイル・デビル』の維持コストとして手札の『クリッター』を見せる」
「それと、『加速する終焉』の効果だよ」

「……ライフダメージを選択する」

周囲の闇が、俺に纏わりついてくる。

「ぐあ………！」

セツLP3200

纏わりつく闇が、俺の身体から体力を奪っていく。

「わたしのターン、ドロー！ 苦しいの？ セツくん。すぐ、楽にしてあげるからね」

「っ………は、余計な心配だよ。ユーキちゃん」

この程度の痛みで音を上上げるはずもない。伊達にさだめの兄を19年もやってない。

「……そう。じゃあ、参ったって言わせてあげる。そんな、使い慣れてない急造デッキでわたしに挑んだ事を後悔しながらね」

「やってみる」

「つわたしは、手札から『闇の誘惑』を発動！ デッキからカードを二枚ドローして、手札の闇属性モンスターを除外する！ 除外するのは『ネクロフェイス』！」

例の不気味な顔の人形が現れる。さだめとデュエルしたときも、

コイツの効果には苦しめられたもんだが……。

「無駄だ！『コアキメイル・デビル』は例外除外された先で発動する効果であっても、閻属性モンスターの効果を無効にする！」

『ネクロフェイス』の効果も、例にもれず無効化する。

ギリツ、とユーキちゃんの口から苛立たしげな歯軋りが聞こえた。

「……生意気」

「なに？」

「生意気。生意気だよセツくんは。わたしと戦う力なんてない癖に。そんなデツキで、わたしに勝てるなんて思っていない癖に。それなのに抗う。無駄な抵抗ばかりして、時間だけ稼いで。そんなにアテナちゃんたちが大事？」

「……大事だよ。そうじゃなきゃ、命なんて賭けるもんか。それに……」

「それに？」

「勝てないと思ってデュエルしたことなんてない。どんな相手でも、どんなデツキでも、俺は勝つための手段を探し続ける。その先にある、勝利を信じて」

「……やっぱり、生意気」

「生意気で結構。いつまでもユーキちゃん……いや、終焉の閻の思惑通りに踊らされて溜まるかよ」

「……わたしはモンスターを一体守備表示でセット。エンドフェイズに『加速する終焉』の効果でデツキからカードを五枚除外するよ」
今回除外されたのは『終焉の精霊』ジ・エンド・スピリッツ『終末の騎士』『キラール・ト

マト』『激流葬』『サイクロン』の五枚。

「ターンエンド」

「行くぞ、俺のターン！ ドロー！ 俺は『神獣王バルバロス』を攻撃表示で妥協召喚」

『神獣王バルバロス』 ATK1900

ウルナイトが倒され、手札に温存しておく必要のなくなったバルバロスを受協召喚する。

「バトルだ！ 『コアキメイル・デビル』で『終焉の餓狼』ジ・エンド・ウルフを攻撃！
『コアデビル・クライ』！」

影の狼が、悪魔の腕に貫かれて消えていく。デッキにはもう、同名モンスターはない。ならこれ以上リクルートされることはない！
「そして『神獣王バルバロス』で守備モンスターに攻撃！ 『トルネード・シエイパー』！」

神獣王の槍が、終焉の場にあるモンスターを襲う。しかし。

「わたしの守備モンスターは『終焉の死霊術師』ジ・エンド・ネクロマンサー。守備力は2000。妥協召喚したバルバロスの攻撃力は1900だから破壊できないよ」

『終焉の死霊術師』 DEF2000

「ぐ……………」

セツLP3100

バルバロスの槍は、闇の結界を張ったネクロマンサーを破壊できず、その余波が俺を襲う。

「…………仕方ない。俺はカードを一枚セット。エンドフェイズに維持コストとして『クリッター』をオープンし、『加速する終焉』の効果で800ダメージを受けてターンエンドだ……………うあー！」

セツLP2300

くそ…………この『加速する終焉』のダメージ…………他のダメージとは質が違う。なんというか、血を抜かれているような感覚だ…………。

「わたしのターン、ドロー。カードを一枚セット。エンドフェイズに『加速する終焉』の効果で800ポイントのダメージを受ける」

ユーキLP2100

「俺のターン、ドロー！俺は手札から『コア濃度圧縮』を発動！手札の『コアキメイルの鋼核』をオープンし、『コアキメイル・ガーディアン』を墓地に送ることでデッキからカードを二枚ドロー！」

よし、来た！

「俺は『コアキメイル・パワーハンド』を攻撃表示で召喚！」

『コアキメイル・パワーハンド』 ATK2100

この『コアキメイル・パワーハンド』は戦闘を行う光・闇属性モンスターの効果を無効にする。デビルと共にコイツがいれば……。

「闇属性モンスターを恐れることはない！バトルだ！『コアキメイル・パワーハンド』で『終焉の死霊術師』ジ・エンド・ネクロマンサーを攻撃！『コアパワークラッシュ』！」

パワーハンドの攻撃が死霊術師を粉碎する。よし、これで壁は消えた！

「行け！『コアキメイル・デビル』で……『リバーズカードオープン』なに！？」

ここでトラップ！？一体何を……っ！？

俺はそこで、終焉の闇からユーキちゃんの表情が抜けていることに気がついた。

「ユーキ、ちゃん？」

憤怒、苛立ち、憎悪。この世の全てを呪わしげに睥睨する狂気的な無表情。

「カウンタートラップ『腐り堕ちる世界』。ジ・エンド『終焉の』と名の付くモンスターが戦闘によって破壊された時、ライフを2000ポイント支払うことで発動」

ユーキLP100

「フィールド上に存在する全てのカードを破壊し、相手プレイヤーに破壊した数×300ポイントのダメージを与える」

「なっ！？」

俺のフィールドには、モンスターが三体と『コア転送ユニット』

の合計四枚。ユーキちゃんのフィールドに『加速する終焉』が一枚。
「……フィールドのカードを全て破壊し、1500ポイントのダメージを受けて貰う」

ドロドロと、世界が崩れて行く。まるで、そう。世界の終焉を見るかのような。

「ぐああっ!? あ……が」

セツLP800

ヤバ……流石に、目が霞んできたな。今度は、それこそ全身が腐り落ちるような、おぞましい感覚のダメージだ。流石に、こんな痛みは初めての経験、だな……。

それでも、膝はつかない。屈しない。

「倒れ、ないぞ……俺は、カードを一枚セット。ターン、エンド」
当初は『コアキメイル・パワーハンド』のコストとしてオープンしようと思っていた『聖なるバリア ミラーフォース』をセットする。くそ……それでも、俺に出来ることは……ここまでか。

「わたしのターン、ドロ。セツくん」

「……?」

なんだ……?」

「……良くデキマシタ」

そう言って、嗤った。ニタリ、と気味の悪い笑顔を、ユーキちゃんの顔で。

「っ終焉ー!」

それが、ユーキちゃんを酷く汚されたような気がして、俺は叫んだ。

「手札から魔法カード『死者蘇生』を発動。『終焉の死霊術師』を特殊召喚。効果発動。一ターンに一度、墓地の闇属性モンスターを除外して、墓地の『終焉の』と名の付くモンスター一体を特殊召喚する。わたしは墓地の『終焉の餓狼』を除外して『終焉の餓狼』を特殊召喚」

フィールドに二体のモンスターが並ぶ。リリース要員か……！？
「その『終焉の餓狼』をリリースして『終焉の夜王』を攻撃表示で召喚。『終焉の夜王』は『終焉の』と名の付くモンスター一体をリリースしてアドバンス召喚することができる。そしてこのカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、フィールドで表側表示のモンスターはその属性を『闇』としても扱う」

『終焉の夜王』 ATK2600

「レベル、7……攻撃力2600……！」

『アテナ』と同じ能力値。だが……！」

「来るなら……来い！」

ユーキちゃんの手札はゼロ。リバースカードを破壊する手立てはない。それなら……！」

そう、思った。

しかし。

「行く必要も、ないのよ」

そう言っつて、また嗤った。ニタリ、と。

「な、に……？」

「『終焉の夜王』の効果発動。このターンバトルフェイズをスキップすることで、フィールドに表側表示で存在する闇属性モンスターの数×600ポイントのダメージを相手に与える」

「……あ

夜の王。ナイトキーパーの持つ杖に、そのエネルギーが増幅されていく。

「フィールドの闇属性モンスターは二体。よって1200ポイントのダメージを与える。『ジ・エンド・ナイト・グロウ』」

目前に迫る“終わり”を見つめ、俺は敗北を確信し……笑う。

まったく……いつも俺は、肝心なところで勝てないな……。

「終わり、だよ」

ああ……そうみたいだな。

もう、痛みは感じない。ただ、体の力が抜けて行く。

「俺の……負けだ」

セツLPO

だけどせめて最後まで、絶望だけは見せずにいよう。デュエルに負けても、せめて絶望にだけは負けずにいよう。

「それが……最後の意地だ」

意識が遠のく。自分が今、何処に立っているのか、それどころか立っているのかさえもわからない。わからない。

「みんな……」

あとは、任せ、た……。

ドサ。

目の前で、セツくんが倒れた。最後に、笑顔と一滴の雫だけ、その頬に映して。

「セツ……くん」

涙が止まらない。大好きなセツくんを、自分の手で傷つけてしまった。それが、わたしの心をどこまでも蝕む。

悲しかった。苦しかった。死にたかった。でも……死ねない。わたしが死んだら、“この子”が一人ぼっちになってしまうから。

最初から、わたしはわたしとしての意識が残っていた。演技をしていたわけでも、一つの嘘もついてない。でも……。

「セツくんなら……本当のこと、話せるかなあ……」

最初から、全部わかってやっていたこと。自分の中に終焉がいて、その所為でアテナちゃんが苦しみ、逃げてしまったこと。

「セツくん……」

うつぶせに倒れたセツくんを、仰向けにして自分の膝に乗せる。ボロボロで、傷だらけで、それでも強さしか感じない、その寝顔。知らず、涙が零れる。

「ごめんね……ごめんね。わたし、悪い子だよ……わかってる。

わかってるよ……でも、でもこの子は……“エンヴィー”は悪くないから……悪いのは、わたしだから……だからセツくん……お願い」
わたしと、一緒に来て。

世界なんて、絶対滅びない。最初から、世界が終焉になんてならないんだよ……。

流した涙が、セツくんの顔に落ちる。慌てて拭いた。わたしの涙なんて、セツくんを汚すだけだから。セツくんの流した一滴の涙を、きつと汚してしまっから。

「絶対、助けるから……！」

傷だらけのセツくんを抱えて飛ぶ。最後は、エンヴィーが暴走して加減が出来なかった。早く手当てしないと助からない。

「死なせない……わたし、死なせないよ……」

この子にも、もう絶対殺させない。

わたしは、胸の裡に眠る闇を押さえて、飛ぶスピードを上げた。

第四期第十三話「輝ける鋼核VS終焉の闇」（後書き）

こんにちは。

というわけで……これにて改訂、終了〜！！

いや〜長い改訂作業でした。ホントに。疲れた……。ラストは一気に全部やってしまいました。ふう、なんとかかりましたね。大抵大規模な改訂作業入れた小説は改訂が遅々として進まず、やがて自然消滅していくことが多かったりするので、悠自身も非常に心配でした。我が事ながら。とどころに新規の話混ぜつつでしたしね。

改訂作業も終わりましたので、重要な話はその内削除します。そうですね、あの章の始まりがズれるのって割込投稿が原因みたいですね。やっとわかりました。またズレてるんで、直しておきます。

次回からは新しい話になります。セツを失ったパーティは、一体どうするのか。

それでは、悠でした！

第四期第十四話「冥界における抗争」(前書き)

改訂終了後、一発目！ 比較的早めにアップすることが出来ました。

今回からは、まあタイトルからわかるかもしれませんが冥界編です。冥界ということで、普段はあまり出てこないゴーズやカイエン、ヴァンダルギオンも総出演となっております。キャラが……減らしたのにまだ多いよう……。

第四期第十四話「冥界における抗争」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第四期第十四話「冥界における抗争」

「私はシャルナでダイレクトアタックします！『ディヴァイン・ク
ロス』！」

『久々の活躍っ！ いつけー！』

「ぐおおおおおっ!？」

地獄戦士LPO

シャルナが嬉々として放った光線が、妙に寸胴で短足な重戦士を
葬ります。

「……ふう、手強い相手でした」

「……そういう台詞は、せめてもっとデュエル描写をしてから言う
べき」

私としては純粋な感想を言っただけなのに、何故かルインさんに
突っ込まれてしまいました。

「いつくよー!」カオスエンペラー(トランプ)混沌帝龍 終焉の使者』の効果発動! 纏めて消
し飛べー!」

『ぎゃあああああああ!??』

雑魚1〜……??人LPO

「……少なくとも、あつちで禁止カード無双しているさだめさんよ
りは、苦戦したと断言出来ます」

「……あれは一体、何対一のデュエルをしているのだ?」

「だって、相手の人数が多ければ多いほど混沌帝龍の効果の威力高くなるし。いやーもうダメージが軽く万を超えたね！」

「酷過ぎる……」

ホクホク顔のさだめさんに、エースさんが頭を抱えていました。気持ちには分かります。

現在私たちは、希望さんから直接冥界に送られて　なんかこう書くと、殺されたみたいですね私たち　冥界における抗争に巻き込まれてしまったようです。

「悪いな。オレらのメンドウごとに巻き込まれてよ」

「いえいえ。私たちとしても、ゴーズさんたちの協力が必要なんですから当然です」

「……にしても、我がマスターはなんでありや。一人で適当に敵陣突ツ込ませりや勝てるンじゃねエのか？」

「……いつそ実行したらどうですか？　お勧めしますよ？」

「ちよつとそこ。勝手にさだめを人身御供にする算段進めないでよ」「いえ。さだめさんなら、無事大将首どころか敵陣壊滅の知らせと共に帰ってくるかと信じているんですよ」

「余計悪いよ！」

今まさに軍団規模の相手を一斉に葬ったのは何処の誰ですか。

「まあ、とりあえず気にしないでください。カイエンさんには、いつもシャルナが迷惑かけている分の借りもありますし」

「え、ええつと……できれば、シャルナ様をキチンと働かせることで返して欲しい気もしますが、ありがとうございます？」

「それは無理。一度染みついた引き籠り根性サボり癖は簡単には消えない」

「ルイン様……」

「そこはかとなく飛んできたあたしへの皮肉が痛い……」

「皮肉を言われないうちに仕事してくださいねシャルナ」

「……最近、マシになったもん」

「ですがシャルナ様。未だにノルマは減るところか増える一方なの

ですが……」

「そもそも仕事が多すぎるのが悪いッ！ おねーさんはそう声高に主張したい！」

「その意見には大いに、心から、誰よりも切実に賛成しますが、そもそも私の仕事が増えている原因であるシャルナ様におっしゃられても信憑性が今一つ」

「あたしの仕事が多すぎるから、あたしはサボる。あたしがサボるから、カイエンの仕事が増える。つまり、カイエンの仕事が多いのはあたしの仕事が多すぎるのが原因！」

結局サボらなければいいだけの話では？

「つていうか、おねーさんの仕事が増えたのも元はと言えば同じ仕事してたアテナがいなくなったことが大きい！」

「そこで私に振るんですか！？ つていうか、私は終焉に……」

「そう！ 要するに原因は終焉！ というわけで終焉許すまじ！ あたしは許して！」

「最後の一言が激しく余計です」

最終的に自分への責任追及を逸らそうとするシャルナを窺めます。油断も隙もない……。

「……しかし、まさかまた冥界にやってくることになるとはな」

多少気分の悪そうなエースさんが、首を振って嘆息しています。

「む、う……これは、ちいとしんどいのう……」

「皆さんは平気ですか？ かなり強烈な重圧がかかっていますか……」

……

そう言うジャックさんやキングさんだけじゃなく、剣士さんや凜さんも大分辛そうでした。ですが、私は首を振って大丈夫だと告げます。

「私なら平気です。本来天使族は冥界に適應できないんですけど……」

……私やシャルナは特別です」

シャルナや、私の前世である『反魂のスピリチュア』は、元々冥界と天界を繋ぐ天使。冥界の空気には慣れていきます。

「ルインさんは？」

「私も平気。私は破滅の女神」

微妙に理由になっていない気もしますが……。

「……死の空気には慣れてる。破滅の名前は伊達じゃない」

「そう、でした。えっと、そう言えばさだめさんは？ 一応、便宜的に、もしかしたら或いは人間だったかもしれないんですけど念のため」

「随分長つたらしく、婉曲にしかも最終的に人外呼ばわりしてくれてありがとうアテナ」

口の端をヒクヒクさせながらさだめさんが私にお礼を言ってきました。

「えっと、それで大丈夫なんですか？」

「……まあ、むしろ気分良いくらいだね。今のアテナの台詞で機嫌は悪くなつたけど」

やっぱり、普通に人外で良いような気がします。冥界の空気で気分良くなる人間がいていい筈なんですし。

「……まあ、それはいいや。それよりゴーズ、説明してくれる？」

冥界で今、何をやっているのか」

「ああ。ま、ぶつちやけ反乱だ」

全員の視線が、一斉にサイクロイドさんへ。

「あ？ ほら、俺うち言つたる？ ここじゃ、国家転覆の反乱なんぞ子供のお遊びだつてよお」

「そりやお前んとこだけだ。修理すりやどつとでもなるからつて暇つぶしに反乱起こさせんなって機械王に言つとけ。冥界でもまあ、過去になかったわけじゃねエが、ここまでデカイのは久々だな」

「……というか、機械族の国では反乱がありふれている、ということころにもつと突っ込むべきだとは思いますが。」

「……そう言えば、サイクロイドさんは平気なんですか？」

「おうよ！ 機械族に死の匂いとか、わかるはずねえしな！」

そう言われればその通りでした。バグロスさんも涼しい顔をして

います。

「……で、首謀者は？」

「お前らも知ってんだろ。ハ・デスのオツサンだよ」

「ハ・デスって……『冥界の魔王ハ・デス』？」

「ああ。今は、お前らも知ってんだろが、ヴァンダルのオツサンが冥界を仕切っちゃいるが、それまでは冥界でもケツコウ色々と派閥があつてな」

「その一つが、ハ・デス様を盟主とする魔王派だったんです。ですが、それもヴァンダルギオン様の派閥が勝利することで収まっていたのですが……」

「よりにもよって、このタイミングで蜂起してきたんですか……」

「どうせ終焉の差し金だろオよ。このタイミングの良さはそれしか考えらんねエ」

確かに。と私たちは一斉に頷きました。

「元より、ハ・デス様は決起の時を狙っていたものと思われまます。きっかけ一つあれば、動かすことは容易かったのかと」

「思いの外、ハ・デスのオツサンに付くアホも多くな。ったく、そこまで戦争がしたいってかヨ。アンデットや悪魔共が争ったところで泥沼になるだけだったのに」

ゴーズさんは、くだらないと態度で示しながら舌打ちしています。

「ま、そういうわけでだ。悪イが、この反乱治めねエ事にやオレらやヴァンダルのオツサンが冥界を離れることはできそうにねエ。そのチビなら問題ねエが、蘇生に関わらせるにや、まだそのチビじゃ心許ねエ」

ゴーズさんは、さだめさんに纏わりついては振り落とされているミリーちゃんに目を向けながらそう答えます。

「そうですね……」

一番早いのは、私たちも鎮圧に協力することでしょうが……。

「いいじゃん。そうすれば」

「さだめさん？」

「お兄ちゃんを助け出すためにも、早いとこ前準備は済ませなきゃならないの。今更巧遅に拘って、何の意味があるわけ？」

「同感。こんなところで、グズグズしている暇はない」

「そうだな。今は拙速の時か……」

「ルインさんやエースさんまで……」

三人や騎士さんたちの瞳には燃え上がる炎。

「でも、焦りは禁物よ？ おねーさんの経験として言わせてもらえば、力はあるても素人のさだめちゃんや、連携の要を欠いて、冥界の空気の中てられている騎士じゃ戦争の役には立たない。他も同様だしねい」

「……………」

全員、無言でシャルナを見つめます。

「あれ、なに？ この沈黙は」

「いえ……」

「シャルナさんって、まともなこと言えたんだね」

「し、失敬な！？ 一応戦女神よ！？」

「自分で一応、とか付けている時点で……」

「う、うるさーい！ いいわいいわよ！ そんなにあたしが信じられないなら好きにすれば！」

またぶんすかと拗ね始めたシャルナ。ですが、その言葉自体は一理あるのも事実です。

「……………」

それでも、私たちは……。

「関係ない。どっちにしろ、グズグズしてお兄ちゃんが死んだりしたら、もう終焉もクソもない。さだめが世界を滅ぼす。或いはさだめが死ぬ」

「同感」

「私も、です」

今更、何を躊躇う必要があるでしょうか。戦争だろうがなんだろうが、セツを助けるための道がそれしかないのなら、迷わず進むだ

けです。

「けどナお前ら……」

「大丈夫です。ゴーズさん。幸い、私がいいます」

「お、珍しいね。アテナがそんなに強気なの」

「はい。ですが、この冥界で、私は無敵ですから」

私は目に自信を漲らせてさだめさんを見ます。事実、私の能力は……。

「……ちイ、しょうがねエな。なら、まずはヴァンダルのオッサンに許可取れ」

「貰えなくてもさだめは行くよ」

「だとしても、せめて報告はしやがれチート娘。勝手に動くなら動くわかってりゃ、こっちとしてもやりようはある」

「……わかった」

不満そうに、それでも納得はしたのかさだめさんがそう答えます。

「どちらにしても、ここで話しこんでいても仕方あるまい。行くなら直ぐに行くぞ」

「……必死」

「……ふん。希冴姫から奴を任されたというのにこのザマだ。せめて奴を早急に救い出さねば、騎士としての名誉に関わる。それだけだ」

それでも、少しだけ顔が赤いエースさんを先頭に、私たちはヴァンダルギオンさんの居城まで向かうのでした。

『……いいだろう。むしろ渡りに船と言ったところだ』

私たちが戦列に加わることに関しては、予想以上にあっさりと許可が出ました。

「おいおい、良いのかよ。んな簡単に決めちまって」

『反魂と戦女神が揃っているなら問題はない。しかし、エース』

「は」

『お前たちが前線に出ることはまかりならぬ。その体では犬死するのみ。駆り手も、己が騎士たちの死を望まぬ』

「……しかし」

反論しようとするエースさんでしたが、反論の言葉が浮かばなかったのか悔しそうに唇を噛んで俯きます。

『そして……駆り手の妹よ』

「さだめは行くよ。なんて止めようが、無駄」

『分かっている。駆り手の妹ならば、一度言いだして聞かぬことぐらひは予想が付く。なにより、文句なしで戦力となるお主を態々止め置く意味はない』

「そういうこと。それに……」

さだめさんは、不意に視線を逸らして外を見ます。

「……呼んでいる気が、するんだ。さだめの、さだめの『敵』が。だから、行かなくちゃ」

その真意はわかりませんが、さだめさんにもいるんでしょう。ルインさんのように、戦うべき相手が。

「……なら、この子たちはあたしが率いる。それで文句ないかい？」

『……いいだろう。戦女神よ。お前ならば文句はない』

「ありがと。流石に、あたしもふざけてられる状況じゃなくなってきたしね」

シャルナも、本当に久々に見る真剣な表情で武器を取ります。

「けどよオ……」

ゴーズさんが、心なしか不安そうにさだめさんや私の顔を覗き込んできました。

「お前ら、本当に大丈夫なんだろうな？ セツのヤロウはいねエし、ホントはお前ら……」

ゴーズさんの言葉に、私たちは顔を少しだけ俯かせます。

「……本音を言えば、大丈夫なんかじゃありませんよ」

それは、当然のこと。私たちにとって、セツは心の支え、パーテ

イの心臓とも言える程に重要な人だったのです。私やさだめさん、ルインさんのように、セツのことが好きなら当然、そうでなくても、セツは私たちの中心で……。

「……でも」

「彼は、言っていた」

ルインさんが教えてくれました。セツの、覚悟を。その、言葉を。『倒れるのは、泣くのは、全てが終わってからだ。今はただ、前へ。がむしゃらにでもいいから、前へ……！』

潰れてしまいそうな心で、痛々しい顔で、セツが戦う。そう、言っただのなら。

「なら、私たちが倒れるわけにはいかない」

「絶望するのは、全てが終わってからでいいんです」

「一番キツイのは間違いなくセツだ。そんな時、我らが膝を屈してどうする？」

「心は張り裂けそうだけど……痛む心を癒してくれるのは、お兄ちゃんしかいないから……」

「だから、私たちは戦います。セツを……取り戻すために」

戦わなきゃ、取り戻せないんです。セツを。私たちにあって、一番大切な、たった一人のヒト。

「……そうかい。心配したオレがバカだったみてエだな」

私たちの言葉に、偽りが無いことを読み取ったゴーズさんは、バィザー越しに表情を緩めました。安心して尚、憎まれ口を叩く辺りは、らしいですけど。

「んじゃ、反乱の常習者としてアドバイスだ。反乱つてのはよ、どつちかがアタマを失ったら終わりだぜ。こつちが少数精鋭だってなら、気付かれねえよう懐に飛び込んでグサリ。これで勝ちだ」

突然口を開いたサイクロイドさんに、全員の視線が集まります。

『……なんだ？ その二輪は』

「……気にしないでください」

『だが、言うことは尤もだ。無論、ハ・デスたちとて似たような考

えは持っているであろう。我も幾度か侵入者を撃退している」

「主に撃退してンのはオレだろオがよ。その凶体じゃデュエルも口々に出来ねエ癖して威張ンなオッサン」

「ご、ゴーズ様あ……」

そういうことなら、突入部隊とヴァンダルギオンさんを護衛する隊に分かれた方がいいわけですね……。

「……私はハ・デスの方へ行きます」

少し考えて、私はそう答えました。

「そうね。あたしが一緒に行くことも考えると、それが妥当ね」

「……私は前線に行く」

「ルインさん？」

「どうせデュエルは一对一。なら、私は前線で引きつけておく。ネームバリエー的に適任」

確かに、破滅の女神の異名と、あとついでにファンクラブ持ちのルインさんが前線に出て行けば、大きな注目を集めるでしょうけど……。

「さだめは……」

「決まってるだろオが。お前はオレらと一緒にだ。ここに残って防衛戦だよ」

「ちよっと待つて！ さだめは……」

「テメエが一番素人なんだよ。神経使う潜入も、危険過ぎる前線にも行かせらんねエ。テメエが死んだらセツのヤツに殺されるんだ。ちったア考えろ」

「……」

悔しそうにさだめさんが俯きます。けど、負けられない戦いであることはわかっているのか、それ以上の反論はしません。

「……流石に、俺っちの出る幕はなさそうだな。素直に引っ込んでくぜ」

「そうしろボロチャリ。チャリンコ乗って戦場なンざアホらしくて泣けてくる」

「……オレはやったんだがな」

ゴーズさんの容赦ない言葉に、つい昨日実際にサイクロイドさんで戦場を駆け抜けた（一応、あの時はバイクロイドさんでしたが）剣士さんが渋い顔をします。

「無論、剣士。お前もここにいろ」

「ネイキッド……わぁつてるよ」

「凜もよ。エリアルと一緒に震えてた方がいいわ」

「ぶるぶる、ぶるぶるっ！」

「……ええと、あんな風には怯えないけどね」

冷めた目のエリアさんと呆れたような凜さんの視線の先で、エリアルさんが部屋の隅っこに蹲って震えていました。

「こ、怖いよう。ど、ドラゴン怖い戦争怖い冥界気持ち悪いクイーンがいる……」

……最後のクイーンって、もしかしてカイエンさんのことでしょうか？ 土下座の。

「けど……クソッ！ 折角ネイキッドから新しい力を貰ったつてのに、いきなり待機組かよ……情けねえ」

「得た力を使いたい気持ちはわからんでもないが、あまり調子に乗れば力に振り回される。気をつける」

「わぁつてる。言ってみただけだよ」

エースさんの忠告に、剣士さんはひらひらと手を振って答える。

「……それより凜、お前大丈夫か？」

「う、うん……なんとか」

冥界の空気は、普通の人間でしかない凜さんには少し、いえ、かなり毒です。心配そうに尋ねる剣士さん自身、顔色が余り良くありません。

「つたく……セツの奴は、こんなところはずっといたつての……」

「正直……二日も居たら倒れちゃいそう……」

『……我が駆り手は、一月以上。それも、我が炎に焼かれながら耐え切った。だが、やはり普通の人間に冥界の環境は厳しいか……力

イエーン』

「は、はい！」

『主が付いていてやね。お前なら多少楽には出来るであろう』

「はい。お任せください。さ、こちらへ……」

「悪い……」

「ご迷惑を……」

「うう……あ、あたしも」

何故か、二人の後にエリアルさんもよろよるとカイエンさんにくつついて行きました。

「あの娘つたら……リチュアの魔鏡で耐性ある分、どう考えても私より楽でしょうに……！ あの根性無し」

そう顔を顰めるエリアさんは、すっかりダウンしているギゴバイトを薄い水の膜で包んでいました。恐らく、結界術の応用でしょう。……皆さんの体調のこともありますし、尚更早く終わらせないといけませんね」

あまり長引かせたら、セツや終焉以前に皆さんの命に関わります。行きましよう、シャルナ。ハ・デスの所に」

「そうね……もうルインなんかはさつさと出て行っちゃったし、そろそろ頃合いね」

言われて見回すと、確かにルインさんの姿が見えません。恐らく、役割を決めた時既に動いていたんでしよう。

「それじゃあ、さだめさん。後のことは……」

「うん、ここは任せて。あ、マツハでよろしく。ワンキルオツケーだから、さつさと終わらせてきてよ？」

「そんなにいつもいつもワンキルなんて出来ませんって……でも、分かりました。出来る限り、手早く済ませて戻ってきますね」

さだめさんらしい激励に頬を緩ませて、私はシャルナと共に戦場へと向かうのでした。

第四期第十四話「冥界における抗争」（後書き）

こんにちは。

というわけで、冥界編はアテナとさだめが主役を勤めます。まあ、普通にメインヒロイン二人なので大きいイベントですね。それも二連続。最初は、多分さだめかと。さだめの話を終わらせて、アテナVSハ・デス。アテナ編では、お待ちかね、アテナのオリカが登場しますので、お楽しみに。

本編とは関係ないですが。今週のアニメは中々良いカードが沢山でましたね。個人的にTGは強いと思ってますし、今回はBFを彷彿とさせる展開力を見せてくれました。そして遊星の方も。ジャンク・サーヴァントとジャンク・バーサーカーの二体は普通に強い。しかも、どちらもOCGだと強化されて出るみたいですし。これは……そろそろリアル遊戯王をやりたくなってきたじゃないですか。くそう。金食い虫だとわかってるのに。

ゾーンの正体については……個人的には、ああやっぱり、とだけ。そんな節はありましたし、要するに士郎とアーチャーですねわかります。みたいな。

それでは、悠でした！

第四期第十五話「想いのヒトカケラ」(前書き)

滅茶苦茶長くなった第四期第十五話をお届けします。切るべき場所が定まらなくて……遂に一万字越えですよ。

今話久しぶりに残酷描写アリなので、その辺に留意しつつお楽しみください。

第四期第十五話「想いのヒトカケラ」

アルカナく切り札の騎士く

第四期第十五話「想いのヒトカケラ」

「むう……」

さだめは、若干不機嫌だった。

「そんなに後詰にされたことが不満か？ マイマスター？」

「……べつにつく」

あと、その全く敬ってるように感じないマイマスターはムカつく。

「お兄ちゃんもいないし、満足に暴れることもできないし……あゝ

！ イライラするゝ！！」

こうなったら、侵入者とか居たら思いっきり禁止デッキで……。

「あゝそれなんだが、マスター」

「なに？」

「あんま、禁止デッキとか使うな。危ねエ」

「なんで？」

どういう意味での危ない、なんだろう。

「マスターたちとくに、マキユラが現れたんだろ？」

「そうだよ。あの時は良かったなあ……」

「このまま禁止デッキとか使い続けているとだな、ソイツらの封印まで解けちまうんだ」

「封印？」

「お前らニンゲンの世界で禁止されているヤツらは、精霊界でもメ

チャクチャスゲエ力を持つてる。その力を危険視されて、封印処理されてるヤツらばかりなんだよ」

「その、封印が解けちゃうから、使つのをやめろって?」

「まア、簡単に言えばそういうこった。精霊世界のバランスを崩す要因、だったか? それになりかねんらしい」

むう……そういうことなら、さだめも自重せざるを得ない。バランスを崩した結果、お兄ちゃんを助け出すのに不都合が起きては本末転倒だし。

「それに、そのデッキにヤオレが入ってねエだろ」

「それが本音か」

まあ確かに、さだめはデッキにゴーズを入れてはいてもあんまり出したことない気もする。単純に機会がないだけんだけど、ゴーズからすれば不満なのかも。

「まーいいけどねー。大体、侵入者がいなけりゃ戦う機会なんてない……」

「言ってる傍から、来たぞ」

「え?」

表情を険しくしたゴーズの視線の先、確かにフードを被った怪しい人影。

「……最近の侵入者ってのは、忍ぶ気がねエのか? 堂々と仁王立ちしやがって」

「さあね。なんにしろ、怪しすぎるよね」

「……………」

視線の先で、ただ静かに佇むそのフードは、さだめたちを確認したのか身体を震えさせる。あれは………歓喜?

「……見つけた」

酷くしわがれた、聞き取り辛い女の声。でも、その声は確かに喜びにあふれていた。そして………憎しみ。

「警備のヤツらは何やってやがった。こんな堂々と侵入されやがって」

「見つけた、見つけた、見つけた見つけた見つけた見つけた見つけたアツ！」

「っ！？」

侵入者は、ゴーズの言葉には一切耳を貸さず、ただ嘍れた声で、濁った眼で、さだめを見ていた。

「あなた……だれ？」

「誰……？ 貴女がそれを聞くのね……！」

酷い、憎しみの感情。さだめが、かつて周囲に向け続けていた、醜い意志。

「デュエルよ……構えなさい。御堂運命」

「っ……！」

フードを被っていて、その姿は見えないけれど、少なくとも確かなことは、さだめたちの敵だということ。さだめもデュエルディスクを構え、相対する。

「『デュエル！』」

さだめLP4000

フードの女LP4000

「私の先攻。ドロー！」

謎のフードは、黒くて醜い、怨霊が凝縮したようなデュエルディスクからカードをドローする。

「私は『インヴェルズを呼ぶ者』を攻撃表示で召喚。カードを一枚セツトして、ターンエンドよ」

『インヴェルズを呼ぶ者』 ATK1700

「インヴェルズ……！？」

さだめは、インヴェルズについてはあまり詳しくなかった。何故なら、さだめがこちらの世界に来たときには、まだ登場したばかりだったから。お兄ちゃんなら、さだめよりは知ってるんだらうけど……。

「さだめのターン、ドロー！」

確か、インヴェルズはアドバンス召喚主体のテーマデッキ。なら、

相手フィールドにモンスターを残しておくのはどう考えても良くない！

「さだめは『ダーク・クルセイダー』を召喚！」

『ダーク・クルセイダー』 ATK1600

「『ダーク・クルセイダー』は、手札から闇属性モンスターを捨てることに、攻撃力を400ポイントアップさせるよ！ さだめは手札から『ダーク・グレファー』と『ネクロ・ガードナー』を捨てて、攻撃力を800ポイントアップ！」

『ダーク・クルセイダー』 ATK1600 2400

「バトル！『ダーク・クルセイダー』で『インヴェルズを呼ぶ者』を攻撃！『クルセイダー・ファントム』！」

「リバースカードオープン！ トラップカード『侵略の手段』！

デッキから『インヴェルズの斥候』を墓地に送り、『インヴェルズを呼ぶ者』の攻撃力を800ポイントアップさせる！」

『インヴェルズを呼ぶ者』 ATK1700 2500

「コンバット・トリックっ!？」

『インヴェルズを呼ぶ者』の攻撃力が、『ダーク・クルセイダー』を上回った。

「くっ!？」

さだめLP3900

「……さだめはカードを一枚セット。ターンエンドだよ」

「やられたね……いきなり手札差をつけられた上、ボードアドバンテージまで取られた。攻撃は迂闊だったかな。」

「私のターン、ドロー」

「オイ、テメエいい加減顔を見せやがれ。どこの誰だよ」

「顔も見せないフード女に嫌気が差したのか、ゴーズがそう呼びかける。」

「……いいわ」

「ゴーズの言葉も聞こえてはいたのか、フードの人影はそのフードを脱ぎ去った。」

「っ！？」

思わず、息を呑んだ。

「ッテメエ……アンデットか？」

ゴーズがそう思うのも仕方ない。フードの下から現れたのは、それはもう醜い身体。傷だらけで、腐ったようなにおいで、爛れたような顔。その中で鈍く輝く濁った瞳が、さだめを憎しみの籠った目で睨みつけていた。

「アンデット？ アンデットね……ええ、貴方がそう思うのも仕方ないわ……けど、違う。私は……ニンゲンよ」

「ナンだと……？」

ゴーズが絶句する。それは、さだめも同じ。フードの下から現れたその姿は、とても生きているニンゲンとは思えないものだったから。

「……私は『インヴェルズを呼ぶ者』をリリース。手札から『インヴェルズ・モース』をアドバンス召喚するわ」

『インヴェルズ・モース』 ATK2400

さだめたちの反応に構わず、女はプレイを続行。現れたのは蛾のような悪魔。

「『インヴェルズ・モース』の効果発動。ライフを1000ポイント支払うことで、相手のカードを二枚まで手札に戻す」

女LP3000

「なっ！？」

これじゃ、さだめのフィールドはガラ空き……！

「更にリリースした『インヴェルズを呼ぶ者』の効果発動！ このカードがインヴェルズと名の付くモンスターのアドバンス召喚のリリースとなった時、デッキからインヴェルズと名の付くレベル4以下のモンスター一体を特殊召喚する。私は『インヴェルズ万能態』を守備表示で特殊召喚！」

『インヴェルズ万能態』 DEF0

「バトルよ！『インヴェルズ・モース』で御堂運命、貴女にダイレ

クトアタック！」

「うあああつ!?」

さだめLP1500

つ効いたあ……でも!

「さだめはこの瞬間、手札から『冥府の使者ゴーズ』の効果発動！
特殊召喚し、受けたダメージと同じ攻撃力・守備力を持つ『冥府
の使者カイエントークン』を特殊召喚！」

『オラ行くぞ!』

『頑張ります!』

『冥府の使者ゴーズ』 ATK2700

『冥府の使者カイエントークン』 ATK2400

「……ふん。私は手札からカードを一枚セット。ターンエンドよ」
『もう一つ聞くぞ！ テメエ、ハ・デスのオッサンの配下か？ ヴ
Андタルのオッサンを殺りにきたってんなら……』

ゴーズが殺気の籠った目で武器を構える。でも、女は全く意にも
介さずさだめを睨み続ける。

「ハ・デス？ ヴАндタル？ 知らないわ。そんな人たち。私はた

だ、その女に用があるだけ」

女は、その爛れた指で、さだめを指差す。

「さだめ……?」

「そつだつ!」

さだめが自分を指差すと、女はガッ！ と血走った眼を見開いて
叫んだ。

「御堂運命……貴様だけは……ここで殺すッ!」

『アンタ……一体ナニモンだ?』

ゴーズが問いかける。でも、さだめはさっきから汗が止まらない。
なんだろう。さだめは、知っている気がする。あの人を。あの、顔
を……。

「覚えてる？ 覚えてるわよね？ 覚えてなきゃおかしい。覚えて
るはず。覚えてないなんて言わないわよね？ お・ぼ・え・て・る・

よ・ね？」

「つつ！？」

詰め寄られた、その顔は。たしかに、覚えがある顔で。

「ねえ……御堂君、元気？」

「っあ……」

その言葉で、完全に思い出した。

「あはっ、思い出したんだ」

「貴女……まさか」

「そう……」

その女は、さだめから少しだけ離れて、笑った。

「っ！」

壊れた笑み。昔のさだめが、よくお兄ちゃんに見せていた笑顔。

「私は、御堂君に憧れていて……貴女に壊された……名前は、なんだったかな？ わからなくなっちゃった」

「っあ……！」

そつだ。間違いない。かつて、終焉に侵されていたさだめが、お兄ちゃんに憧れている女を次々に壊していた。その、最初の被害者。

焼け爛れた顔も、その声も、聞き覚えがある筈だ。だって……。

「一番最初に、一番残酷に、一番冷酷に、一番容赦なく火あぶりにした女だもの……ね？」

「つつ！」

さだめの脳裏に、かつての光景がリフレインする。

『いや、いやあああああっ！』

『このッ……兄さんに擦り寄る薄汚い蛆虫ッ！ その顔が……その顔で、兄さんを誑かそうとするのなら……！』

『なにっ！？ 何をするの！？ いや、やめて、やめてえっ！』

『焼いてあげる。その綺麗な顔、見るも無残に焼け爛れてしまえッ』

「いやあああああああつー！！」

「……………」

さだめの、過去の罪。拭いきれない、穢れそのもの。

「私は、終焉に導かれてこの世界にやってきた。私と同じく、貴女にコワサレタ女たちの無念と憎しみ、その全てを背負って。御堂運命……貴女を、殺すために」

「あ、あ……………」

「正確には、私たち全ての無念が折り重なって形を為した……言っ
なれば、貴女への憎しみの塊。それが私」

「チツ……そっぴいやそうか。スピリチュアに導かれて、マスターや
セツがこつちに來たンなら……………」

「対存在たる終焉にだって、同じことが出来る筈……………」

「私は、私たちは、貴女を殺すため、終焉に力を貰ったの……私た
ちが受けた苦しみを、何倍にもして返してあげる……私たちが
奪われて、貴女だけが幸せになるなんて許さない……絶対、這い蹲
らせて、絶望の中で殺してやる……………」

「辛かった……苦しかった……………」

「どうして……？ 私はただ、遠くから見ていただけで良かったの
に……………」

「許せない……！ 貴女がいたから、全てが狂った」

「許せない……！ 私は貴女に、未来を奪われた」

「許せない……！ 私は貴女に、幸せを奪われた」

「許せない……！ 私は貴女に、全てを奪われた」

「許せない」

「許せない」

「許せない」

「許せない」

「許せない」

「許せない」

「許せない」

「ッ……！」

思わず、膝をついた。フードを被っていた女。その中から聞こえてくる、数え切れない怨嗟の声に。

「オイッ、マスター！」

「さだめさんっ！」

ゴーズたちの言葉も、耳に入らなかった。

「……聞けば貴女、随分と幸せそうね？」

「……」

「御堂君に助けてもらって、友達も出来て、楽しい毎日を送っているそうね？」

「……」

「……許せない」

「っ……！」

「なんで？ どうして？ 貴女は幸せそうにしているの？」

女は、心底から不思議そうに尋ねてくる。

「どうして？ 私たちは泣いているのに、どうして貴女は笑っているの？ ねえ、どうして？」

「……あ……あ……っ……！」

「そうだ、忘れていた。」

「私たちから、全てを……幸せを、未来を奪っておいて……」

さだめは、どうしようもない罪人で。

「ねえ、御堂運命……」

さだめには……。

「貴女、幸せになれると思っているの？」

幸せになる資格なんか、ない。

「　　　ッ　　ッ　　ッ　　ッ！」

声にならない悲鳴が、さだめの口から、こぼれおちた。

『オイツ！　マスター！　クソッ！』

「あら？　もう壊れちゃったの？　案外脆いのね。私たちのことを、あれだけ痛めつけたのに。もう戦意喪失？」

『テメエ……』

「貴方も、そんな犯罪者にこれ以上付き合うことはないのよ？　そんな女、この冥界で朽ち果てて行くのがお似合いだわ」

『オイマスター、言われてンぞ。さっさと立って構えろよ！』

「無駄よ。その女の心は折れた。もうサレンダーすることしか出来やしない」

『違エな』

「なに？」

『ウチのマスターはそんなデリケートな精神持ちじゃないねエよ。見るよ』

ゴーズは、さだめの右手を指差した。

『ウチのマスターは、まだ手札を握ってる。捨てちゃいねエ。まだ』

戦える。そうだろ?」

さだめの手札。バウンスされた一枚のカードが手札にある。さだめは……そのカードをしつかりと握っていた。

『デュエル続行だ。オラ、とっとと立ちやがれ』

「……………」

「無駄だと言っているでしょう。大体、貴方どうしてそんな女の肩を持つのか? 御堂君もそうだった。どうしてそんな犯罪者を……………」

『うるせエよ』

「……………なんですって?」

『うるせエって言ってるんだ。さつきからゴチャゴチャと……………それがどうした?』

「どうした……………ですって?」

『オレのマスターはオレが決める。横からゴチャゴチャうるせエんだよ』

「ゴ……………ズ?」

『ああ、ああ。テメエは辛かったんだらうよ。コイツが悪かったんだらうよ。だが、それがどうした? ここは冥界。暴力沙汰なんざありふれてる。テメエのような顔した女なんてどこにでもいらア。』

『そんなことで引く程、オレは健全な精神を持つっちゃいねエんだ』

『……………それに、貴女の言葉には矛盾があります』

「なに……………?」

『奪われた痛み、憎しみ……………その感情は、確かに産まれてもおかしくない。当然のものであるでしょう。しかし……………』

『やったのはコイツでも、それを仕向けたのは終焉だ』

「そんな、そんなの……………」

『関係ない? ええそうですね。確かに、それはさだめさんの弁護にはなり得ないかもしれせん。しかし……………』

『確実に、終焉はテメエにとって、コイツと同じく……………いや、コイツ以上に仇なんじゃないかねエのか?』

「……………」

ゴーズたちの言葉に、それまで余裕の笑みすら浮かべていた女が、初めて口を閉ざした。

「その終焉に、テメエはあろうことか尻尾を振りやがったんだ。その時点で」

「貴女に、正義を語る資格はありません」

「ッ黙れ！」

女は、それまでの余裕に満ちた口調から一転、激しく動揺した。

「……さだめの、ターン」

「っ!？」

「さだめは、ゴーズで『インヴェルズ・モース』を攻撃。『冥天刃影の太刀』」

「ハッ！なるほどそういうことか……イイゼ。やってやらア！」

「ットラップ発動！『侵略の波動』！『インヴェルズ・モース』を手札に戻し、効果発動！ゴーズを破壊する！」

「ぐっ!？」

モースが去り際に放った波動で、ゴーズを吹き飛ばす。

「勝てよ……マスター！そのためなら、捨て駒役ぐらい大歓迎だ！」

「カイエンで『インヴェルズ万能態』を攻撃。『冥天刃陽の太刀』」

「はあっ！」

カイエンの剣が小さな蓑虫を一刀両断する。

「カードを一枚セット。ターンエンド」

「……なんとか、なんとか言いなさいよ！何よその淡々としたプレイングは!？」

「……」

「は、はは……そう。そういうこと。貴女、結局まだ戦意喪失したままでしょ？ただ惰性でプレイしてるだけ……舐めるなッ！私のターン、ドロー！私は墓地から『インヴェルズの斥候』を特殊召喚！」

『インヴェルズの斥候』 D E F O

「更に『インヴェルズの斥候』をリリースして『インヴェルズ・ギラファ』をアドバンス召喚！ 効果発動！ 相手フィールドのカード一枚を墓地に送り、ライフを1000ポイント回復する！」

『インヴェルズ・ギラファ』 ATK2600

『くっ……！？』

「チエーンしてトラップカード『デストラクト・ポーション』を発動。カイエンを破壊し、その攻撃力だけライフを回復する」

さだめ LP3900

『さだめさん……』

「忘れてた……忘れてたんだ……」

カイエンの精気を、全て吸い取る。

「クツ！ 例えライフを回復しても無駄よ！『インヴェルズ・ギラファ』でダイレクトアタック！」

「墓地から『ネクロ・ガードナー』の効果発動。攻撃を無効にする」

「この……！ 私はカードを一枚セット。ターンエンド！」

「さだめのターン、ドロー」

そう。さだめには……。

「正義の味方なんて、柄じゃない」

自分の精霊すら使い捨て、勝利へと向かう礎にする。モンスターを墓地に捨て、命すらも弄ぶ。

「はじめから、わかってたことだった」

さだめの後ろから、漆黒の鎧竜が姿を現す。

「さだめの墓地に存在する閻属性モンスターの数は三体丁度。よつて、さだめは手札から『ダーク・アームド・ドラゴン』を特殊召喚」

『オオオオオオツッ……！』

『ダーク・アームド・ドラゴン』 ATK2800

さだめには、普通の人間に戻るなんて出来ないって。

「ダムドの効果起動。墓地の『ダーク・クルセイダー』を除外して、

『インヴェルズ・ギラファ』を破壊する」

さだめは、最初から……。

「チエーンして速攻魔法『侵略の一手』！　ギラファを戻してカードをドロー！」

「なら、『ダーク・アームド・ドラゴン』でプレイヤーにダイレクトアタック。『ダーク・アームド・ヴァニッシャー』！」

「ぐああああああつ！？」

女LP200

「さだめは、これでターンエンド」

罪人、なんだ。

「ぐ、くつ……私のターン、ドロー！」

ダムドの攻撃で、女は更にボロボロになっている。それでもその目から憎しみは消えず、相変わらずさだめを睨み続けている。

「私は墓地から『インヴェルズの斥候』を蘇生！『インヴェルズ・ギラファ』をアドバンス召喚し、『ダーク・アームド・ドラゴン』を墓地に送る！」

『インヴェルズ・ギラファ』 ATK2600

オオオオオオオオ……。

『ダーク・アームド・ドラゴン』の身体が崩れて行く。

「そして、私はライフを1000ポイント回復する」

女LP1200

「もう『ネクロ・ガードナー』はいない。喰らいなさい！『インヴェルズ・ギラファ』でダイレクトアタック！」

「ッ……！」

さだめLP1300

「カードを一枚セット。ターンエンドよ」

「さだめのターン、ドロー。さだめは魔法カード『強欲な壺』を発動。デッキからカードを二枚ドロー。更にマジックカード『死者蘇生』。墓地からゴーズを呼び戻す」

『冥府の使者ゴーズ』 ATK2700

『ヤレヤレ。このオレを使い回しかよ』

「文句ある？」

『ねエよ。好きにやれ』

「……………なんで」

「……………？」

「なんで、平気な顔してデュエル出来るの？」

女の声は、怒りに震えていた。

「……………さだめね」

その怒りの炎に、油を注ぐ。

「お兄ちゃんを、守りたい……………って、そう思ってたんだ」

「……………ッ！ 巫山戯ないで！ 私から……………私たちから、幸せを、

未来を、全てを奪った貴女が……………言うに事欠いて“守る”ですって

……………！？ 巫山戯るのも大概にしなさいよ！」

「うん、そうだね」

「……………ッ！！」

ガッ！

カッとなったのか、その場に落ちていた石をさだめに投げつけてくる。さだめの額から血が流れ落ちる。

『ツメエ！ デュエル中に「ゴーズ、いいから」……………チッ』

「わかつてるんだ……………ううん。今までは目を逸らしてた。でも、もう逃げない」

「……………そうよ……………貴女は、貴女なんかに……………」

「……………さだめなんかに……………」

誰かを守ることなんて、出来ない。

「……………」

「……………」

「……………さだめは、色々なものを奪って生きてきた」

「……………そうよ……………貴女は、私たちから、全てを奪ったのよ」

「お兄ちゃんからも、奪い続けてきた。そんなさだめが、誰かを守るなんて、おこがましいにも程がある」

「……………そうよ。……………そうよ……………そうよ！ 貴女は、誰も守れない！ ただ無情に、ただ冷酷に、誰かから何かを奪うことでしか生きていけな

い疫病神だわ！」

「……そんなさだめが、できることは一つだけ」

「ない！ 貴女なんかに出来ることなんて」

「奪うこと」

「っ!？」

「さだめに出来るのは、お兄ちゃんの敵から全てを奪い尽すこと。奪って、焼いて、滅ぼすことだけ」

「な……」

「お兄ちゃんは、アテナたちが守ってくれる。でも、こんなさだめですら受け入れてくれたアテナたちに、敵を殺して焼き尽くすことなんて頼めないから……」

さだめは、俯いていた顔を上げた。

「“敵”はさだめが焼き尽くす。そう、決めたんだ」

もう、さだめは穢れているから。守るなんて、綺麗な言葉は使えない。だから、焼く。敵を焼いて、焼いて、焼き尽くす。アテナたちには出来ない、これは、さだめがやるべきことだから。

「……バトル。ゴーズで『インヴェルズ・ギラファ』を攻撃。『冥

天刃影の太刀』」

『らアッ!』

「ぐっ……あ！」

女LP1100

「この……っ!」

「ターンエンド。さあ、ラストターンだよ」

「ラストターンですって……!？」

「そう。最後。次のさだめのターン、貴女を焼き尽くす」

「ッッ!」

身体が震えていた。やっぱり、炎の記憶はトラウマになっているらしい。

「わ、私のターン、ドロー!」

でも、その恐怖も、ドローしたカードを目にした瞬間にその目か

ら消えた。

「ラストターン……ええ、ラストターンね……ただし、死ぬのは貴女よ！」

自信に満ちた目。自分の勝利に確信を持った目で、彼女は笑う。

「私は手札から『インヴェルズの魔細胞』を特殊召喚！」

『インヴェルズの魔細胞』 ATK0

「このカードは、自分フィールドにモンスターが存在しない場合、特殊召喚することが出来る。そしてトラップカード『侵略の波紋』！ ライフを500ポイント支払い、墓地から『インヴェルズ万能態』を特殊召喚！」

『インヴェルズ万能態』 ATK1000

女LP600

フィールドに二体のモンスター。間違いなくリリース用。最上級モンスター……。

「『インヴェルズ万能態』はインヴェルズと名の付くモンスターのアドバンス召喚に使用する場合、二体分のリリースとすることが出来る！ 私は『インヴェルズ万能態』と『インヴェルズの魔細胞』を三体分のリリースとし……。」

「三体リリース……？」

まさか、神クラスの最上級モンスター……？

「来なさい。最強にして至高のインヴェルズ……『インヴェルズ・グレイズ』！」

『インヴェルズ・グレイズ』 ATK3200

「攻撃力3200……。」

「チツ……またズイブンとデカブツを出して来やがった」

「『インヴェルズ・グレイズ』のモンスター効果発動！ ライフを半分支払い、このカード以外の全てを破壊する！」

女LP300

「なッ……ぐアッ!？」

『インヴェルズ・グレイズ』の攻撃で、ゴーズが吹き飛ばされる。

さだめのフィールドは、空。

「ふ、ふふふふ……さあ、やりなさいグレス。あの女を……叩き潰せえ！」

巨大な角が、さだめを串刺しにしようと迫る。

『マスター！』

『さだめさん！』

その角が、さだめを突き刺そうとした、その瞬間。

ボーン……。

「っ!？」

ボーン……。

『インヴェルズ・グレス』の角が、止まっていた。

まるで時を止められたかのように、ピタリとその動きを止めていた。響き渡る鐘の音が、全ての動きを封殺する。

「……さだめは手札から『バトルフェーダー』の効果を発動。相手のダイレクトアタック宣言時、手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する」

『バトルフェーダー』 DEF0

「くっ……だが、グレスの効果は毎ターン使える。次のターンが来たら……」

「次はない。これが、最後のターン」

「……っ!」

「さだめのターン、ドロー。さだめは手札から魔法カード『闇の誘惑』を発動。デッキからカードを二枚ドローして、手札の『ネクロフェイス』を除外する」

不気味な顔の人形が、闇の中へと消えて行く。

「『ネクロフェイス』が除外された時、お互いにデッキの上からカ

ードを五枚除外する」

お互いに、カードが除外されて行く。除外されたカードがなんであるかは、今となっては関係なかった。

「さだめは魔法カード『カオス・エンド』を発動。さだめの除外されているカードが七枚以上の時、フィールド上に存在する全てのモンスターを破壊する」

「なっ……………」

ボロボロと、『インヴェルズ・グリーズ』が崩れていく。女はそれを愕然とした面持ちで見つめる。

「そんな…………いや。いやあ…………また、また私は…………」

「そう。また貴女は、さだめに全てを奪われるの」

「ッ……………」

声にならない悲鳴が、女の口から洩れる。

「…………そして、さだめはこのモンスターを召喚する。『紅蓮魔獣ダ・イーザ』！」

『紅蓮魔獣ダ・イーザ』 ATK？

「あ、あ……………」

『…………ッ……………』

燃え盛る魔獣が、咆哮する。彼女のトラウマを刺激する、炎の化身。

「ダ・イーザの攻撃力・守備力は、ゲームから除外されているさだめのカードの枚数×400ポイントとなる。さだめの除外されているカードは九枚。よって攻撃力は……………」

『紅蓮魔獣ダ・イーザ』 ATK3600

「……………終わりだよ。『紅蓮魔獣ダ・イーザ』でプレイヤーにダイレクトアタック。『煉獄の業火・インフェルノフレイム』」

「あ、あああああああああああああああああああああああ
っ!?!?」

女LPO

ダ・イーザの炎は、さだめの目の前で、かつてさだめが壊してし

まった少女をまた、焼き尽くした。

「……全部終わったら、まず警察、かな」

いい加減、目を逸らし続けるわけにもいかないんだ。さだめは間違いない、罪を犯したんだから。

「……けど、さだめさんがやったことというのは、元の……ええと、セツ様と同じ、別の世界でのことですよね？」

「関係ないよ。罪は罪。そうでしょ？」

「で、ですがその、この世界でやったことでないのであれば、人間の法制度ではさだめさんを……その、罪に問うことは……」

できない。人間界の法律まで勉強しているカイエンには感心するね。けど……。

「けどそれじゃあ……さだめは、どうやって罪を償えばいいのかな……？」

罪を償わなきゃ、幸せになる資格はない。そう改めてはつきりと言われて、でも罪を償う方法はなくて……。

「……誰よりも、幸せになりゃいいんじゃないか？」

「……え？」

通路の壁に背中を寄り掛かせたゴーズが、面倒くさそうな口調でボソリと言った。

「お前は、アイツらの幸せを奪ったんだろ？ 奪ったのはナ。」

自分の物にする”ってことなんだよ。だから、つまり……」

ゴーズは少し照れくさそうに顔を背ける。

「アイツらの分まで、誰よりも幸せになる。それでいいだろ」

「……」

「ゴーズ様……」

「大体、アイツらが不幸になって、お前も不幸になってたら救いがねエだろ。起きちまったことは変えられねエ。だったら、例え盗人

猛々しいと言われようと、お前一人でも幸せになった方がよっぽどマシだろうが」

「……そう、なのかな」

「そうだ」

「……そっか」

ゴーズの言葉で、少しだけ胸が軽くなった。

「……それでも」

さだめが罪人であることは変わらない。今にも、罪悪感で胸が潰れそうになる。

「お兄ちゃんは、こんなさだめでも、抱きしめてくれるのかな……」
くれるのだろう。わかっていて、そんなことを呟く。

「……だったら」

さだめは、お兄ちゃんの分まで、泥を被ろう。起きてしまった過去は変えられない。だから、未来を変えるんだ。お兄ちゃんに、これ以上の重荷は背負わせない。そのためなら、さだめは……。「
「いくらでも、罪を重ねてあげるから……」
頬を、一筋の雫が流れ落ちた。

それは、きつと……普通の女の子であることを捨てたさだめの……。

「……」

想いの、ヒトカケラ。

第四期第十五話「想いのヒトカケラ」（後書き）

こんにちは。

さだめの過去と、真の意味で決着をつけた、と言っているように。今回の話も少々、以前の決別と同様に言いたいこともあるでしょうが……。

今回インヴェルズを使用しましたが、シンクロのないGX時代の今、インヴェルズめっちゃ強いんです。シンクロある今でもそこそこ強いのに、帝全盛期でもあるGX時代にインヴェルズ。軽くチート気味の強さでした。何しろ、使用するカードをインヴェルズとそのサポートカードに限定して尚あの強さですからね。あれで悪夢再びとかサモン・チェーン、二重召喚だのといったカードを使わせればどんな強さになるやら……。ちなみに、さだめインヴェルズデッキ回収してます。ゴーズだのバトルフェーダーだのダムドだのまで混入したデッキを作る気か。その内使うかもしれません。

今回はゴーズ回でもありましたね。かつこよく書けてるでしょうか？ ぶつちやけ相手がさだめじゃなければ間違いなくフラグものです。

ちなみに現在『CHAOS・HEADらぶChu Chu!』プレイ中。カオスヘッドは猟奇描写が中々良くて参考になります。歌もカッコイイ。なんでいきなりこんなこと言い出したかは、カオスヘッドやったことある人ならピンと来るはず。

今回はアテナ。遂にベールを脱ぐアテナの真の姿にご期待下さい。それでは、悠でした！

第四期第十六話「反魂のスピリチュア」（前書き）

アテナ回更新です。前回のシリアス&ダークとは打って変わり、比較的ほのぼのとした回です。……いえ、反乱を治める回なんですから！

遂にベールを脱ぐアテナの力！ 結構な能力になったので、お楽しみに。

それと、今回あとがきにて読者の皆さまに協力して頂きたいことがございますので、出来ればあとがきの方も面倒くさがらずに読んで協力くだされば幸いです。

第四期第十六話「反魂のスピリチュア」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第四期第十六話「反魂のスピリチュア」

さだめさんに後を任せ、ルインさんに敵を前線に引きつけて貰い、私とシャルナは敵の懐、本拠地へと潜入することに成功しました。

「かなり警備が手薄になっていますね……ルインさんのお陰でしょうか？」

「さてさて……畏つてこともあるからねい」

潜入方法は、当初翼を使って空から……という予定だったのですが、デフォルトで真つ暗な冥界では純白の翼は目立ち過ぎるということで、それは断念しました。で、どうやって潜入したか、ですが……。

「と、ところでシャルナ、この偽装は本当に完璧なんですよね？」

「あつたりまえでしょー。どこぞの傭兵が身を隠す時に常用していた由緒正しき一品よ〜？」

「……ただの段ボールにしか見えませんですけど」

イメージは蛇さんらしいです。モーマンタイモーマンタイによる。

「実際見つかってないんだから無問題無問題」

「それはそうなんですけど……」

珍しく真面目モードだと思いましたが、そうでもない気がしてきました。でも、実際潜入に成功している事実もありますし……。

「……まさかマジでイケると思っただけだ（ボソッ）」

「何か言いましたか？」

「何でもないよん」

怪しいです。また騙されているような気がします。でも上手い
つてますし……。」

「む？ なんだこの箱は？」

「っ！」

や、ヤバいです。遂に見つかりました。というか怪しまれました。
』ど、どうするんですか。遂に見つかっちゃいましたよ（ひそひそ
『！」

『む〜ん……だいじょぶじょぶ。静かに黙ってればバレないって（
ひそひそ）』

「むあっ！？ こ、これは……！」

こ、今度こそバレました！？ こ、こうなったら先制攻撃を……。

「これは、最近発売した新型のモニターではないか！ こ、こうし
てはおれん、可及的速やかにハ・デス様のところへ運ばねば……。」
……へ？

「最近軍備に資金をつぎ込みすぎて買う金などないとおっしゃって
いたのに……流石ハ・デス様！ その様な財政から新型を購入する
資金をひねり出すとは……気に恐ろしきはいんたあねっとおんらい
んという奴か……私のような末端には理解できないものだが」

……えーと。

『……どこから突っ込めばいいのかわかりませんが……御同輩のよ
うですよシャルナ』

『……いやはや、あたしが適当に選んだ段ボールだけど、妙な具合
にハマったもんだねい。道理で誰もこんな段ボールが置いてあって
も不思議に思わない筈だよ』

『……ってちよつと待ってください。やっぱりコレ、悪ふざけだっ
たんですね！？ また私を騙して！』

『ちよつ！？ しーっ、しーっ！……まあまあ、上手く行ったんだ
から結果オーライってことで……』

『つていうかハ・デスってネットゲーマーだったんですか……あ、相
変わらず精霊界は……!』

『まあハ・デスってば明らかに格下の深淵の冥王にしてやられて、
一時期大分腐ってたらしいしねい。落ちぶれた精霊の行き着く所っ
てのは、どいつもおんなじようなもので……』

『落ちぶれたらネットゲ廃人って、妙にリアルな社会形成してますね
精霊界!』

ああもう! 戦争中で潜入作戦中だつていうのにまったくもう!
「しかしっ、重いなこのモニター……!」

『言われてるよアテナ。ダイエツトとかした方がいいんでない?』

『なっ!? 聞き捨てなりませんシャルナ! 大体、どう考えても
体格的にシャルナの方が重たいでしょうに! 生活習慣的にも、ダ
イエツトした方がいいのはどう考えてもシャルナの方です!』

『ところがどっこい。精霊は体格も体重も一生変化なしだったり』
『くっ! これだから見せる相手もないのに無駄にスタイルいい
女は……!』

『ちょ、無駄とはなにさ〜』

『言いたいことがあるならいい加減恋人の一人でも作ったらどうで
す!? 一体何百年一人身でいるつもりですか』

『うわっ、ちよっといいい男捕まえたからって何という暴言。流石に
おねえさん、カチンときちやったよ〜?』

『やりますか!?!』

『やらいでか!?!』

「ん〜? なんか何処から声がするような……」

『……………』

い、一時休戦です。こんなアホな言い争いでバレたら末代までの
恥です。

「しかし……前線にはあのルイン様が現れたつていうのに……なん
で俺は後詰で一人荷物運びなんてしてるんだろっなあ……はあ、俺

もルイン様を見に行きたいよ……」

……それにしても、相変わらず凄い人気ですねルインさん。

「見たかったなあ、ルイン様の戦場生ライブ」

「ってまさかホントにファンクラブ的な意味で引きつけてるんですか！？ 敵ながらなにやってんですか！？ サイクロイドさんじゃないですけど、反乱って子供の遊びじゃないんですよ！？」

「ハ・デス様。お届けモノです」

「貴方は何処の配達員ですか。一応兵士でしょう。」

「む？ それは……」

「……ハ・デス！」

「通路に放置されてたんで、一応お届けに。これ、ハ・デス様がご所望の最新型モニターツスよね？」

「お？ おおおそれは！ 財政難で手に入らんと半ば諦めていたものだが……」

「へ？ ハ・デス様が注文したんじゃないんすか？」

「いや？ ワシも欲しいとは思っておったが……まあよい。大義であつた。下がって良いぞ」

「本当は大義どころか、凶らずも獅子身中の虫となってるんですけどね……」

『今よ！』

『はい！』

シャルナの合図に、私は段ボール箱（最新型モニター）から飛び出し。

「へみやっ！？」

「べちっ！」

……段ボール箱に足を取られて転びました。痛いです。
いそいそと立ち上がり、改めて宣言します。

「反乱軍総大将ハ・デス！ その首貰ったあ！ です！」

「……………」

「……………」

「……あれ？」

「なんでこー、登場シーンすらカツコ良く決まらないのかしらねこの娘は……」

私に続いて段ボールから出てきたシャルナは、何故かよよとばかりにハンカチで目元を拭っていました。

「何の話ですか？ 私は転んだりしていません」

「……」

「……なんですかその沈黙は。あたかも私が残念な娘とでも言いたげですね。」

「……やや！ 怪しい奴！」

「冥界の魔王ハ・デス……今日が年貢の納め時よ！」

「何事もなかったかのように猿芝居を始めないでください！」

「ぬうう……まさかワシの所望していた最新型モニターに扮して侵入するとは……流石は精霊界一の駄目オタニート……アテナよ」

「今はシャルナよん。って！ 誰が精霊界一の駄目オタニートか！」

「いえそれ以前に私をなかつたことにして話を進めないでください！」

ついでに、ハ・デスの言い方だと私が駄目オタニートみたいで嫌です。

「と、兎に角！ ハ・デス！ 貴方の野望はここで潰えるのです！ 私とデュエルです！」

「よかるう……このワシに打ち勝つことが出来れば、我が矜持に懸けて全軍を退かせることを誓おう……」

「……あれ？ 思った以上に聞きわけが……」

ま、まあいいです。全軍を退かせるというならそれに越したことはありません。私はデュエルディスクを構え、ハ・デスと対峙します。

「デュエル！！」

アテナLP4000

ハ・デスLP4000

「ワシの先攻。ドロー！」

ハ・デスである以上、デッキは悪魔族……油断はできません。

「ワシは『クリッター』を攻撃表示で召喚。カードを一枚セツトし、ターンエンド」

『クリッター』 ATK1000

「初手に『クリッター』を攻撃表示……明らかに誘っているとは思えない布陣ですね……私のターン、ドロー！」

それでも、私のデッキは攻めるデッキ。罠を恐れて立ち止まるような私じゃありません！

『相変わらず、顔に似合わず男らしい戦術ね……』

「うるさいです。私は手札から『ヘカテリス』の効果発動。このカードを墓地に捨てて、デッキから『神の居城 ヴアルハラ』を手札に加えます」

私はいつものように、上級召喚のためのカードを手札に加えます。「そして『神の居城 ヴアルハラ』の効果発動。私は手札から『アテナ』を特殊召喚します！」

『アテナ』 ATK2600

『なーんか嫌な予感するのよね……ねえ、攻撃やめない？』

「嫌な予感に関しては私も同感ですが……かといって躊躇っているは勝てません！ バトル！ 『アテナ』で『クリッター』を攻撃します！ 『デイヴアイン・クロス』！」

『あー、はいはい。しゃーないわねーつと！』

「ククク……トラップ発動『ヘイト・バスター』！ 悪魔族に攻撃したモンスターを、その悪魔族ごと道連れにし、その攻撃力分のダメージを与える。我が軍勢に背いた報いを受けよ！」

『ほらやつぱりっ！？』

「きゃああつ！？」

アテナLP1400

「くっ……！」

「更に、墓地に送られた『クリッター』のモンスター効果により、ワシは『死霊操りしパペット・マスター』を手札に加える」

「私はモンスターを一枚セット。ターンエンドです」

『あたた……もうアテナ』』

「ご、ごめんなさいシヤルナ。てつきりミラーフォーアス辺りだと思っただんですけど……これなら追撃用のモンスターも出しておくべきでした」

『ってそれ、結局あたしはやられるじゃないの!』

「うっ……」

それを言われると痛いです。

「ワシのターン、ドロー! ワシは『ニードリユア』を攻撃表示で召喚。バトル!」

『ニードリユア』 ATK1200

「私の伏せモンスターは『スケルエンジェル』! リバーア効果によりカードを一枚ドローします!」

「ワシはカードを三枚セットし、ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー! 私は『ジェルエンデュオ』を攻撃表示で召喚します!」

『ジェルエンデュオ』 ATK1700

「バトルします! 『ジェルエンデュオ』で『ニードリユア』を攻撃!」

「ぬうっ! しかし『ニードリユア』のモンスター効果発動!

戦闘によって破壊され、墓地に送られた場合、相手モンスター一体を破壊する!」

ハ・デスLP3500

『ニードリユア』の瘴気の中であられ、『ジェルエンデュオ』が力なく倒れて行きます。

「それは予想済みです。私はメインフェイズ2にヴァルハラの効果を使い、手札から『光神テテュス』を攻撃表示で召喚します! ターンエンドです!」

『光神テテユス』 ATK2400

「エンドフェイズ時に、我が伏せカード『針虫の巣窟』を発動！
ワシのデッキを上から五枚、墓地に送る」

「墓地肥し……！？」

確か、ハ・デスは蘇生能力に長けた悪魔……そのための布石ですか。

「ワシのターン、ドロー！ ワシは永続トラップ『リミット・リバーズ』を発動。墓地から『クリッター』を蘇生させる」

『クリッター』 ATK1000

三つ目の小悪魔が再び姿を現します。

「そして『クリッター』をリリース！ 手札から『死霊操りしパペット・マスター』を守備表示でアドバンス召喚！ そしてライフを2000ポイント支払い、墓地から『闇の侯爵ベリアル』と『暗黒の侵略者』を特殊召喚する！」

ハ・デスLP1500

『闇の侯爵ベリアル』 ATK2800

『暗黒の侵略者』 ATK2900

「そんなっ……！？」

一瞬で最上級モンスターを二体！？ 二体とも『針虫の巣窟』で墓地に送っていたんですか……。

「しかし、残念なことにこの効果により特殊召喚したモンスターはこのターン攻撃することが出来ぬ。ワシは『クリッター』の効果でデッキから『グレイブ・スクワーマー』を手札に加える」

ほっ……攻撃出来ないのなら、まだ良かったです。ライフもこれで並びましたし、これならまだ……。

「しかし、まだ終わらぬぞ！ 手札から魔法カード『冥界流傀儡術』！ 墓地の悪魔族一体を選択し、そのモンスターと合計レベルが同じになるようにフィールドからモンスターを除外し、特殊召喚する！ ワシが選択するのは『エンド・オブ・アヌビス』！ そのレベルは6！」

「6つてことは……」

「そう！ ワシのフィールドには既に用なしの『死霊操りしパペツト・マスター』が存在する。ワシはパペツト・マスターを除外し、墓地から『エンド・オブ・アヌビス』を蘇生する！」

『エンド・オブ・アヌビス』 ATK2500

「フッフッフ……『エンド・オブ・アヌビス』が存在する限り、墓地への魔法・罫・モンスター効果は無効となる」

「そんなモンスターまで!？」

くっ……まさか一ターンでここまで……！ 魔王の名は伊達じゃないということですか……！ とここで……。

「結局自分自身は出さないんですか？」

「ワシが出るまでもなかるう！ この圧倒的な陣容！ 速攻魔法を封じられ、墓地利用を封じられ、攻撃可能なのはベリアル一人……最早貴様に勝ち目はない！」

「それは、どうでしょうね……！」

「ふん。貴様の手に『オネスト』が存在することなど、見るまでもなく明らかよ！ トラップ発動『マインド・クラッシュ』！ 手札から『オネスト』を捨てい！」

「そんなっ!？」

ハ・デスの読み通り、私は手札に『オネスト』が存在しました。私の手札から『オネスト』が葬られます。

「バトル! 『エンド・オブ・アヌビス』で『光神テテュス』を攻撃」

「きゃああっ!？」

アテナLP1300

「くっ……強いです！」

「当然よ。ワシは冥界の、真なる魔王ぞ！」

ライフはほぼ横並び。ですがボード・アドバンテージは完全に握られました。くっ……。

「どうやら貴様、ボード・アドバンテージを握られると弱いらしい。

この状況、どう覆す？ 戦女神の使い手よ。ワシはカードを一枚セツトし、ターンエンドだ」

「……私のターン、ドロー！」

確かに、状況は相当にマズイです。ボード・アドバンテージは握られ、墓地からの蘇生も不可能。リクルーターによる場つなぎも出られず、速攻魔法を封じられた以上『光神化』と『地獄の暴走召喚』のコンボも使えない……。私の得意とする戦術の殆どを封じられた形です。

「私はモンスターを一枚セツト。カードを一枚セツトしてターンエンドです」

今は、凌ぐしかありません！

「守りに入ったか。しかし、凌ぎ切れるか？ ワシのターン、ドロー！」

フィールドには、三体の上級悪魔。凄まじい威圧感です……。

「バトル！ 『エンド・オブ・アヌビス』でモンスターを攻撃！」

「守備表示のモンスターは『マシユマロン』！ 戦闘では破壊されません！ 更に効果により、1000ポイントのダメージを受けて貰います！」

ハ・デスLP500

「ぬぐつ……！ 耐えるだけでなくダメージまで与えるとは……。

ならばワシはモンスターをセツト。ターンエンドだ」

「私のターン！」

くっ……！ 状況を打開できるカードじゃありません！ 早く、

戦いを終わらせなきゃいけないのに……！

「……カード一枚をセツトしてターンエンドです」

「その逃げ腰、何時まで持つか？ ワシのターン、ドロー！ ワシはセツトされた『グレイブ・スクワーマー』をリリースし、ワシ自身をアドバンス召喚！」

『冥界の魔王ハ・デス』ATK2450

「遂に出てきましたか……」

「更に、墓地に存在する三体の悪魔族モンスターを除外し、『ダークネクロフィア』を特殊召喚！」

『ダークネクロフィア』 ATK2200

「更にモンスターを……！？ しかも、墓地は使えない筈なのに……」

「『ダークネクロフィア』の墓地除外はコスト。よって『エンド・オブ・アヌビス』では無効化されぬわ！」

……本格的に不味くなってきました。相手フィールドには上級悪魔が五体。こちらは戦闘破壊耐性を持ったモンスターで何とか凌いでいる状況……！

「何時までもそんな守りが通用するものか！ ワシは手札から『地砕き』を発動！『マシユマロン』を破壊する！」

「きゃあっ!?!」

「終わりだ！ ワシ自身でダイレクトアタック！」

「トラップカード発動！『和睦の使者』！ このターン戦闘によるダメージはゼロになります！」

「ぬう………またしても耐えたか。しかし、次はない」

「くっ………」

『アテナ、アテナ』

『シャルナ………?』

『なぐにを焦ってるかなこの娘は!』

「たっ!?!」

呆れたような顔のシャルナに、ペシリと軽く叩かれました。

「な、何するんですか」

『何するんですかじゃないわよ。出陣前にさだめちゃんに言われたこと気にしてる? 手早く済ませてきますから〜って』

「そ、それは………」

『ああ、それだけじゃないわね。大方、セツを助けるためにこんなところでグズグズしちゃいられないってところかしらん?』

「う………」

『凶星？ でしょうね。あんたつてばわかりやすいし』

はあやれやれ、とシャルナが首を振ります。

『ホント、アテナつてばセツが居ないとダメになっちゃったわねえ。見ちゃいらんないわ』

「な、なんですか」

『プレイングが荒い、焦り過ぎ慌て過ぎ気圧され過ぎ。あとついでにあたしの扱いがぞんざい！』

「シャルナの扱いが悪いのはいつものことです」

『しゃらつぶ！ お黙り！』

「ひう」

『とにかく！ あんたつてば強いんだから。普段通り、落ち着いて平常心で行けば勝てるのよ。あの程度の陣容、昔のアテナ……ううん。スピリチュアなら簡単に突破できた。違う？』

「それは……」

『あとはアンタ次第。手札はある。ヴァルハラはある。あと足りないのはアテナの力』

シャルナの言葉に、私は心を落ちつけてデッキに手を添えます。

『アテナ自身が言ったことでしょ？ この冥界で……アンタに勝てる奴なんていないのよ』

「……はい！ ドロー！」

来ました！ 逆転の一手！

「ハ・デス！ 終わらせませす！」

「なんだと……？」

私のフィールドにはヴァルハラ一枚と伏せカード。まずは……。

「私も使わせて貰います！ リバースカードオープン！ 『針虫の巣窟』！ デッキの上から五枚、墓地に送ります！」

墓地に送られたのは『墮天使スベルビア』 『The splen did VENUS』 『光神機 桜火』 『光神機 轟龍』 『虚無の

統括者』……見事に上級一色。改めて自分のデッキの滅茶苦茶さを再認識しました。でも、今は好都合です！

「私はヴァルハラの効果を使って、私自身。『反魂のスピリチュア』を特殊召喚します！」

『反魂のスピリチュア』 ATK800

「こ、これは……！ まさか小娘貴様……いや、貴女様は……！？」
「私自身。『反魂のスピリチュア』はその昔、強力さ故封印指定を受けました。その力……存分に思い知ってください！ 効果発動！
フィールドにて輝く翼が、闇を被っていきます。

「第一の効果！ 手札を任意の枚数捨てることにより、その枚数だけ相手フィールドの闇属性モンスターをデッキに戻します！ 私の手札は二枚。よって『エンド・オブ・アビス』と『ダークネクロファイア』をデッキに戻します！」

「ぬうっ!？」

破壊することが危険な『ダークネクロファイア』と、第三の効果을 阻害する『エンド・オブ・アビス』を先に除去します。

「更に第二の効果！ 第一の効果でデッキに戻した数だけ、墓地から光属性モンスターを効果を無効にして蘇生します！ 私は『アテナ』と『The splendid VENUS』を蘇生します！

『反魂呪魂の法、O・S I・R I・S』！

『アテナ』 ATK2600

『The splendid VENUS』 ATK2800

闇に染まりし魂を、反魂の輝きが浄化して、シャルナとヴィーナを蘇らせます。

「まだです！ 第三の効果発動！ 相手の墓地に存在する闇属性モンスター一体を選択してデッキに戻し、私の墓地から光属性モンスター一体を、効果を無効にして蘇生します！ 私は貴方の墓地から『レッサー・デーモン』をデッキに戻し、『光神機 轟龍』を蘇生
！」

『光神機 轟龍』 ATK2900

最初の『針虫の巣窟』で墓地に送られていた悪魔をデッキに戻し、その魂は光輝く機械仕掛けの龍に受け継がれます。

「な、なんという……!?!?」

これが、かつて生と死の境界を侵したとされ、禁忌……封印指定をされた私の力。闇を光に変え、戦場を光に包むこの力は、闇と光の闘争のバランスを崩すとされ、使用制限を出された力です。

「……効果は無効になっているため、シャルナの効果は発動しません。ですが」

フィールドを見る。先ほどとは真逆。最上級天使に支配された私のフィールドに対し、ハ・デスの持つ闇は押し潰されそうです。

「……バトルです。まずは『The splendid VENUS』で『闇の侯爵ベリアル』を攻撃です!」

「くっ……迎え討てい!」

攻撃力は互角。『The splendid VENUS』の効果は無効になっているので、相打ちになるのみ。

「更に『光神機 轟龍』で『暗黒の侵略者』に攻撃!」

「ぬおおっ!」

攻撃力はやはり互角。相打ち。ですが……。

「あたしとアンタじゃ、格が違うみたいねん」

「くっ……!」

「行きます! シャルナで『冥界の魔王ハ・デス』に攻撃! 『デイヴァイン・クロス』!」

「ぜえええいりやあっ!」

「ぐおおおおっ!?!?」

ハ・デスLP350

「……終わりです。『反魂のスピリチュア』で、プレイヤーにダイレクトアタック! 『トライデント・サンシャイン』!」

ソリッドビジョンの私が、その手に持った三又の槍をハ・デスに投げつけました。

「ぐあああああああっ!?!?」

ハ・デスLP0

「では、これで軍を退いていただけますね？」

「……うむ。ワシに二言はない」

「それにしても、嫌に素直ですね。もう少し何かあるかと思いましたが……」

「どこぞの雑魚に敗れるなら兎も角、かの有名な戦女神両名に敗れるなら本望というものよ。何より、死んだと聞かされていたスピリチュア様が存命であったとは……」

「……私はアテナです。今は精霊ではなく、ただの人間ですよ」「そうですか……」

「というか、何で敬語なんですか？ 私、別にハ・デスよりも偉い精霊だった訳じゃないですよ？」

「いやいや！ まさかこのワシが、スピリチュア様を呼び捨てになど出来る筈もあるまい。そう、我が女神たるスピリチュア様を！」

「……はい？」

何だか雲行きが怪しくなってきました。

「かつてスピリチュア様が死んだと聞かされた時には、どれほど嘆き苦しんだことか！ あまりのショックについ不覚を取り、深淵の冥王ごときにやられ、ネットゲームにハマりこむ程で……」

「あらん。あたしとおんなじような理由だったの？ 益々御同輩みたいね」

「見てくださいこの会員証！」

「ええと……『スピリチュアファンクラブ会員No.666』……つてファンクラブ!？」

「ちなみに、あたしも持つてるよ。っていつか会長」

「シャルナ!？」

「ワシの会員番号……三桁台というのは非常に珍しいものでして……」

「いえ、どつちかと言うとその不吉な数字に目が行きますが……そもそもシャルナはシングルナンバーですし」

ってそういうことじゃありません！

「苦節ウン十年……長きに渡る雌伏の時でありました。こうしてはおれん！一刻も早くこの情報をネットに流し、スピリチュア様の復活祭の計画をせねば……シャルナよ！ヴァンダルギオンへの伝言は任せる！今回はワシの負けじゃとな！」

「あいあゝい」

「ちよ、ちよっと待つてください！復活祭ってそんな……」

慌てて抗議しようとしたが、ハ・デスは鈍重そうな見た目に反し、凄いスピードで奥へと引っ込んで行ってしまいました。

「え、え〜つと……」

「ま、何にせよ反乱はこれで終わり。とっとと戻って報告して、希冴姫ちゃんを蘇らせましょ〜やね」

「え、いやあの……こんなあっさりした終わりでいいんですか？」

「こじれるより良いでしょ〜よ。ま、あのレッド寮じゃないけどアテナ信者ってのはどこにでもいるみたいねん」

「……ルインさんのファンクラブといい私のファンクラブといい土下座評論家といい……精霊界はどうしてこう……」

私は呆れ果ててもう何も言えませんでした。まあ兎に角、これで反乱は終わったらしいのでヴァンダルギオンさんに報告してしまうとしましょう。

「はぁ……なんかドツと疲れました……」

シリアスになりきれない自分のキャラ特性が、改めて憎く思った私でした。

第四期第十六話「反魂のスピリチュア」（後書き）

こんにちは。

というわけで、反魂のスピリチュア、その効果は完全なる闇属性アンチ効果でした。うん。ぶっちゃけ闇属性相手ならブリュどころじゃないフィニッシャーですよ。この子。ちなみに、今回は書かれていませんが、制約としてスピリチュアの属性が光属性の時にしか使えません。要するに、DNA移植手術とのコンボは出来ませんということ。出来たらチート甚だしいですね。やけに攻撃力が低いのは、攻守がシャルナの反対だから。故に守備力は2600あります。まあ正式なテキストは例によって活動報告にて。

いやしかし、ハイテンションになりがちなさだめのギャグも書き易いですが、アテナのこういうほのぼのとしたギャグも書いていて心が癒されます。只でさえ最近暗い話ばかりだったし……。最初のスネ　クネタの辺りなんかは、結構ノリノリで書いてました。

そして企画！　実は、あと二週間と経たない内に、アルカナは一度一周年を迎えます！　そこで記念として、アルカナ一問一答！　みたいなことをやるうかと思っっているのですが、その際の質問を募集します！　セツたちに答えてもらいたい質問等ありましたら、遠慮なくお願いします。ネタバレなどの限度はありますが、かなりきわどい質問とかもアリにします。以下は一問一答の例です。

Q：セツの無駄スキル、一番活用機会が多いのはなに？

A：「まあ生活に密着している時点で料理だろうな。ただ、これは無駄スキルの副産物だから……無駄スキルそのものと、やっぱり空気に溶け込む程度の能力、かな？」

Q：アテナ、小学校で浮いてたりしなかった？

A：「……何故か例題に悪意を感じます。別に浮いてはいませんよ。いえ、確かに周りより大人びて見えるということ多少……誰です

か今老けてるって言った人！ 確かによく「アテナちゃんランドセル似合わないね〜」って言われてましたけど、それは老けていたわけではなく（強制終了）」

……まあ今のは一例ですが、こんな感じですよ。なんでも良いので質問がありましたら。もし少ないようなら別のモノを考えるので、絶対とかはいいませんが。ご協力、お願いします。質問の締め切りは、一週間後の二月一日終日です。よろしくお願いします。それでは、悠でした！

第四期第十七話「望まぬ再会」（前書き）

第十七話です。今回で、というか前回で冥界編は終わり、今回は新章に突入です。具体的には……まあタイトルと本編からなんとなくわかるかな？ それでは、風雲急を告げる十七話、お楽しみください！

第四期第十七話「望まぬ再会」

アルカナく切り札の騎士く

第四期第十七話「望まぬ再会」

『……そうか。まったく傍迷惑な……』

私がヴァンダルギオンさんに、反乱終結の経緯を話した際の反応は、大きな溜息でした。まあ、妥当なところだと思います。

「きゅ、きゅー！」

「あーはいはい。遊んであげるから少し落ち着いてっつてば。まったくもう。なんでさだめにばかりこんな懐くのかな」

「かう」

「羨ましいです……」

「ほら、アテナんとこ行けば沢山遊んで貰えるよ？」

「きゃうっ！」

「ミリーちゃんはぶいつ、と顔を背けて拒否。うう、どうして……。

「きゅっ！ きゅきゅー！」

「あゝなんかね。抱き締め殺されそうで怖い、だつてさ。行き過ぎた愛情表現は嫌われるよ？」

「よりもよつてさだめさんがそれを言いますか」

「……だよね」

「さだめさん……？」

先ほどから、どうもさだめさんの様子がおかしいです。普段の明るさがすっかり鳴りを潜め、どこか落ち込んでいる様子です。

「……なんでもないよ」

「私、まだ何も聞いてません」

「……」

明らかにおかしい。それはわかりますが、安易に踏み込むことを躊躇わせるような雰囲気を持っていて、聞くに聞けません。

「別に。ただ……」

さだめさんは寂しそうに笑い、呟きました。

「お兄ちゃんに、会いたいなあ……って、さ」

「……」

今にも泣きだしそうに見えるさだめさんの言葉に、私は何も言えずに黙りこみます。まだ、セツと別れてから一日と経ってはいませんが、それでも私たちの強がりには限界に達しようとしているのが、自分でもわかるからです。

「……元々、強がりという意味で最も強いのはセツだった」

「ルインさん！」

私より一足遅れて戦場から帰還したらしいルインさんが話に加わります。

「今戻った」

「大丈夫でしたか？」

「問題ない」

まあ基本的にファンクラブにサービスしてただけみたいなものですからね……。

「彼の強がりには、完璧だった。誰もそうとは気付かないくらいに」

「でも、ルインさんは気づいたんですよね？」

「私は特別。彼と似たような経験があるから」

だとしても、私としては複雑です。私は、全然気づいていなかった。ただ、セツは強くて、格好良くって、無敵なんだって、盲目的に依存していた。

「……駄目ですね。私」

セツのことを好きだって言いながら、もしかして私は、本当のセ

「ッ自身を見ていなかったんじゃないか。そんなことを思い、私は顔を俯かせます。」

「諦める？ 大歓迎」

「まさか」

「例え、今までの私が浅はかでも、セツへの想いは本物です。」

「知らないのなら、知ればいい。そうですね？」

「……ポジティブ」

「セツと一緒にいると、そうなるんです」

「どんなに辛くても、強がりや悟らせないセツを見ています。」

「こんなところでへこたれちゃられない。そう、思えるんです」

「だけど。だから。」

「セツが居ない今、私たちは強く在れない」

「はい……」

「我ながら、依存してますね……セツに寄りかかり過ぎです。私は、セツを支えたいのに。」

「今のままじゃダメです。もっと、強くならなくちゃ」

「セツを、助けられません。」

「それで？ これで希冴姫を蘇生するのに力を貸してくれるのだからうな？」

「私たちの話がひと段落するのを待って、エースさんがヴァンダルギオンさんに協力を要請します。」

『うむ。しかし、少し時間が欲しい』

「当然のように、頷くヴァンダルギオンさんでしたが、少し歯切れが悪いです。」

「……どうということ？ 反乱は終わったじゃない」

「反乱つてなア戦争だぜ？ 終わった後にも色々あんだよ。戦後処理つつつてなア」

「すみません。出来る限り急ぎますが……私たちの手が空くのは一週間……いえ、五日でなんとか……」

「……シャルナ」

「え〜？ それ業務外労働じゃ……」

「シャルナ！」

「わかってるってばさ。あたしも手伝うって」

「仕方ねエからオレもマジメにやってやらア」

「ああ……この二人が真面目に働くなんて……私、この日をどれだけ渴望したことか……」

「どれだけ不真面目だったんだコイツら……」

奥の部屋から、剣士さんたちも戻って来ました。

「大丈夫ですか？」

「ああ、オレはなんとかな……」

「あ、はは……私はちよつと、キツイかも……」

凜さんの顔色が余り良くありません。

「きゅっ……」

「ほら、シャキツとしなさい！ 凜だつて気をしっかり持っているんだから……貴女精霊でしょうが！」

すっかり目を回しているリアルさんをエリアさんが 名前が

似ていて紛らわしいですね 気つけています。

「では、一度我々の拠点に帰還しましょう。何時までもここにいてはお辛いでしよう」

「そうじゃな。冥界の空気は老体に堪えるわい」

「違うない」

「冗談めかして言うキングさんに、苦笑気味のテンスさんが続きます。

「それじゃあ、私もシャルナたちのお手伝いをしていきますので……」

……

「うん。わかった。さだめたちは城に戻ってる」

私とルインさん、シャルナは冥界で戦後処理を。他のメンバーは拠点に戻って休息を取ることに決め、私たちは一端別れたのでした。

「ねえ、エースさん」

「む？ どうした妹」

さだめは、王城の廊下を歩いていたエースさんに声をかけた。お兄ちゃんになにか言われたのか、以前よりとっつきやすくなっているエースさんは、ぶつきらぼうではあったけど無視することなく答えてくれた。

「このお城、何処かにこう、暴れられるところってないかな？ 訓練施設みたいな」

「戦士族の城だからな。当然あるが……どうするつもりだ？」

「そりゃ、訓練だよ」

「精霊でもないお前が？ 何のために」

「憂さ晴らし」

さだめが簡潔に答えると、エースさんは若干きょんとして固まった。

「ああ……なるほどな。まあ、気持ちはわからんでもない。我も、少し身体を動かしたいと思っていたところだ。案内してやるう」

そう言って歩き出すエースさんの後をついて行く。ちよっどいや。この際はつきりさせておこう。

「ねえ、エースさん。エースさんは、お兄ちゃんのことどう思っているの？」

ピクッ……。

「どういう意味だ？」

「どういう意味って、そのままだよ。もっと直接的に言っなら、お兄ちゃんを恋愛対象として見てるかどうか」

「本当に直球だな……」

「それがさだめだもん」

呆れたようなエースさんに、さだめは胸を張って返す。

「で、どうなの？」

「……さあな」

「このタイミングでの沈黙は肯定と受け取るけど、それでもいいね？」

「……違う」

「嘘ばかり」

「なら何とさえいい？ 結局、我が何と答えようと関係ないのだろっ？」

「そうかもしれない。さだめの視点では、どう見てもエースさんはお兄ちゃんに惚れているから。」

「……結局、さだめは自己中なんだよね。人の事情なんか関係ない。自分の見たいようにしか世界を見てない」

「訓練場に着く。エースさんの返事も聞かず、さだめは闇を展開して薙ぎ払う。」

「だから、忘れてたんだ。さだめから見た世界が、あんまりにも優しいから。あんまりにも幸せだから」

闇を叩きつけ、訓練場の床が陥没する。

「……さだめが、どうしようもなく醜いってことに」

意味もなく、力を振るう。きちんと整えられた訓練場を蹂躪する闇の爪。

ギィンッ！

「……それでも、奴はお前を受け入れた」

さだめが振るった力を、エースさんが剣で受け止めていた。

「相手がいる方がストレス発散にはよかるう。我も、派手に動きたい気分だ」

「……怪我しても知らないよ？」

「素人が。甘く見るなよ」

さだめのお尻から伸びる闇の尻尾が、エースさんを襲う。

「ッふ！」

受け流された。その仕草に焦りは見えない。余裕なんだ。

「……ッ貴様は、幸せにならねばならん」

「……」

剣を交えながら、エースさんはさだめに語りかけてくる。

「醜かるうと卑しかろうと、受け止めてくれる者がいるのだろう！
ならば、貴様は幸せにならねばならん！」

「どうして」

「恵まれているからだ！」

「！」

一瞬、闇の制御が緩んだ。その隙を見逃さず、エースさんが斬り込んでくる。

「どんなに醜くても、卑しくても、それでも受け入れて貰える……
そんな恵まれた女が、幸せにならねば誰がなる！？」

「醜くも、卑しくもない普通の人間を、傷つけたさだめがいるんだ。
反省するでも、罪を償うでもなく、これからも、傷つけ、奪い続け
ると誓ったさだめがいるの！」

「なら奪えばいい！ 傷つければいい！ 奴は……セツはどんなお
前でも好きでいてくれる筈だ！」

「だから！……だから、苦しいの。だから、泣きたくなるの。自分
がどんどん醜くなっていくのが止められない。お兄ちゃんは受け入
れてくれるから。だから、歯止めが利かない ツ！」

闇が渦巻く。さだめの手の中で。さだめの、心の中で。

「それは違うッ！」

光の刃が、闇を断ち切る。飛び込んできたエースさんが、さだめ
に肉薄する。

「奴は、セツは、どんなお前でも受け入れるだろう……だが、間違
うお前を放つてはおかない！」

エースさんが振るう剣を、闇の盾で受け止める。細身の剣なのに、
その剣撃は酷く重たかった。

「奴の人当たりの良さは、貴様のためだ！ 貴様がやがて社会復帰
出来るようにと、その緩衝材になれるようにと、奴が磨いた、お前
のための技能だ！」

連続で振るわれる剣を、なんとか闇を使って捌く。

「どんなお前でも、奴は受け入れる……しかし！ 間違つた道を往く人間を、そのまま見過ごすようなバカではない！ 間違っている物を、間違っていると殴り飛ばせる奴だからこそ、我は　ッ！」

これ以上は捌き切れないと悟つたさだめは、思い切り闇を爆発させてエースさんをつき放す。

「……恵まれているお前は、幸せにならねばならない」

「……罪を犯したさだめは、幸せになっちゃいけない」
一瞬の硬直。

「……………」

「……………」

「ッ！！」「ッ」

激突する。さだめの闇が、エースさんを喰い荒らそうと迫り、その闇をエースさんは突き破る。

「誰にも理解されず、ただ恐怖に精神が摩耗していく時を、貴様は知っているのか!？」

「過去の暴走と罪を、憎しみとしてぶつけられた罪悪感と恐怖が、貴女にわかるの!？」

ただ、ぶつかる。技術も何もない。ただ、想いを込めて。

ビシィッッ！！

訓練場の壁に罅が奔る。暴力的な闇が、さだめから溢れてくるのを感じる。

「この闇が……ニンゲンじゃないっていう証が、自分が自分じゃなくなっていく感覚が、どれだけ怖いかわかってる!？」

「……ああ。わかるさ」

「嘘!」

「嘘じゃない。自分が自分じゃなくなっていく。その恐怖は、我もつい最近、感じているさ……!」

エースさんの剣が、徐々にさだめの闇を貫き始める。同時に、剣自体にも綻びが走る。

「お前にも、わかる筈だ……人を想う、その感情が、自分を自分じゃなくさせて行く、その感覚は……！」

「っ！」

「おかしいんだ！ 我は奴を友だと思っている。友だと思っているはずなのに……それだけでは済まない想いが、我を別の何かに変えて行く！ “我”ではない、別の“私”が顔を出す！」

「エース、さん……！」

闇が、突き破られた。同時に、剣が砕けて崩れ落ちる。

「……だが、勘違いはするな。我は、奴を友人以上の存在にするつもりはない」

「……理解できないね。そこまで明らかな想いを抱えて、自分の中に押し留めるの？」

「それが、我の意地だ」

エースさんは、使いものにならなくなった剣を放り捨てて、さだめに背を向ける。訓練はこれで終わり、ということらしい。

「……さだめ、貴女のこと嫌いだよ」

「奇遇だな。我も良く似た感想だ。だが……」

背を向けたまま、エースさんは首だけさだめに振り向いた。

「お前とは、良い友人になれそうだ」

「奇遇だね。さだめもそう思ってたところ」

嫌いだけど。憎らしいけど。まったく理解できないけれど。

何故か、わかる。この人とは仲良くなれるって、分かりあえるってわかる。

「不思議だね」

「ああ。不思議だ」

一頻り笑い合い、表情を引き締めた。

「奴は救うさ。我の、騎士としてのプライドにかけて」

「お兄ちゃんはお助けするよ。さだめのセカイを守るため」

「……というかだな。貴様は素人の癖にどうしてそう戦いなれた動きをする」

「さあ？ 漫画やアニメの見よう見まねだけど」

「それだけでは説明がつかんぞ……大した格闘センスだ」

「エースこそ、素人のさだめにまったく躊躇なく剣振るってたでしよ」

「躊躇したらやられかねん。実際、かなり本気でやってこのザマだ罅割れた鎧と、砕け散った剣を差す。

「まったく……お陰で新しく剣と鎧を発注せねばならん。もう貴様と模擬戦はせん」

そう言ってエースさんは溜息を吐くのだった。

冥界での反乱騒ぎから五日後。カイエンさんの言葉通り、五日で戦後処理を終わらせた私たちは、全員で希冴姫さんたちの神殿に集まっていました。

「あゝやれやれ。こんな真面目に仕事したん、何時以来かしらね」

「まったくだ。こりゃ、しばらくは全力でサボりだな」

「おゝふゝたゝりゝとゝも……！」

肩こつたと言わんばかりの二人に、カイエンさんが涙目で睨みつけます。でも、何だかんだ言いつつ、二人も今回はかなり頑張ってくれました。

「きゅー！」

「ミリーちゃんも、頑張りましたようね」

「かゝう！」

か、可愛い……。抱きしめたい気持ちを何とか抑え、私は配置に着きます。

「……今更ですけど、本当はセツにも立ち会って欲しかったですね」

「そうだな。奴も、それを望んでいただろうが……」

「仕方ないよ。お兄ちゃんを助けたら、そのまま最終決戦突入でもおかしくないし、その時希冴姫さんがいないとお兄ちゃんも困るもん」

「そうですね。それに、希冴姫さんを何時までも寝かせておくわけにもいきません」

「……アイツには、色々と言いたいこともある。始めてくれ」

「エースさんの言葉に頷き、私はシャルナたちと顔を見合せます。

「まず、手順を確認いたしましょう」

「カイエンさんが、そう言っただけで全員を見渡します。」

「兎にも角にも、まずは肉体……器がないことには始まりません。

これは、私たち冥界の者が担当いたします」

「今回儀式に参加するのはヴァンダルギオンさん、ゴーズさん、カイエンさん。ミリーちゃんは、今回見学です。」

「肉体の再構成が成功したら、アテナ様とシャルナ様で魂の方を」

「はい。わかりました」

「任せといて。あたしがサポートはするし、アテナなら大丈夫」

「気楽に手をひらひら振るシャルナに、カイエンさんはジトつとした目を向けたが、小言は後にしようと思ったんでしよう。咳払いを一つして纏めに入ります。」

「然る後、全員で魂を肉体に定着させます。手順としてはこれだけです。何か質問は？」

「全員首を振ります。手順としては非常に単純なもので、そこに問題はありません。」

「……然らば、まずは我らが騎士の肉体を再構成しよう。ゴーズよ」「わアってるって。マジメにやるっての」

「では……始めましょう」

「カイエンさんがそう言い、今まさに儀式が始まるうとした……その瞬間でした。」

ガシヤアアアンツツ！！

「っ！？」

「何事だ！？」

「入口の方から……」

何か、大きなものが破壊される大音響に、私たちは集中を乱して儀式を中断しました。

「一体何が……」

全員で慌てて神殿の入り口に急ぎます。そこには……。

「……………嘘」

真つ二つに破壊された扉。そして、そこに立つ人影は、格好こそ見慣れぬ鎧姿でしたが、見間違う筈がありません。それは紛れもなく……。

「セ、ツ……？」

私たちが、探し求めていた人でした。

「悪いが……」

見慣れない、簡易的な鎧を身に付けたセツは、聞いたこともないような冷たい声で

「お前たちには、ここで消えて貰う」

私たちに、剣を向けてきました。

第四期第十七話「望まぬ再会」（後書き）

こんにちは。

急展開！ と言いつつ、何人かはこの展開、予想してた人もいるんじゃないかなーと思いつつ。

あ、ちなみに唐突にバトル展開になることはありません。剣を向けたりしてますが、勝負はあくまでデュエルです。遊戯王ですからね。

今回、一番の見せ場はもちろんラストですが、途中のさだめとエースの模擬戦が一番の見どころではありますね。戦闘描写とかはあんまり得意じゃないんですが、会話中心でならある程度書けるかな？ 実質、さだめに関しては闇としか描写してませんし。ただ、さだめとエースの台詞が同じ文字数になるように調整はしました。見栄えというか、対比というか……ああすると綺麗ですよ。読んでみて自画自賛しましたが。時々小説でああいうのがあって、やってみたいなあとは前から思ってたんですが、ようやくすることが出来ました。セツの詩いた伏線も回収出来ました。別名、エースさんお友達化計画。相変わらず、エースとさだめは良いキャラしてるなあ……。書き易い。

次回、敵になったセツ。動揺するメンバー。そんな中、セツは無情にもデュエルディスクを構える。闇の衣を纏う、セツの新たな力とは？

あ、それとアルカナの一問一答、質問の締め切りは今日の午前零時となっております。もしまだ何か質問があるようでしたら、感想辺りにでも書き込んでやってください。

それでは、悠でした！

第四期第十八話「天位の闇騎士」（前書き）

お待たせしました。アルカナ第四期、十八話をお送りします！
敵に回ったセツ。その力とは……？ ということで、内容はセツと
のデュエルになっております。かなりの強力オリカも登場しますの
で、ご注意を。

第四期第十八話「天位の闇騎士」

アルカナく切り札の騎士

第四期第十八話「天位の闇騎士」

「セツ……?」

「お兄ちゃん……?」

目の前に立つた鎧姿の人物を見て、さだめたちは一様に絶句した。それは、あり得ない人間だったから。あり得ちゃいけない人だったから。

「一応、聞いておく。お前たちが、彼女たち……終焉に仇為す敵か?」

その手に漆黒のデュエルディスクを構え、油断なく此方を見据えるその目に、狂気や虚無の気配は感じられない。信じたくない。でも、あれは……。

「セツ……! 貴様、正気か!?」

「正気? おかしなことを聞くな。俺が狂っているとも言いたいのか?」

「でなければ何故!?」

「決まっている。俺にとつての守るべきモノ。それを守るため、俺はここに、こうして立っている。俺は昔から、守るために生きてきた」

「お兄ちゃん……」

呆然と呟いたさだめに、お兄ちゃんはさだめを見て……眉を顰め

た。

「お前は誰だ？」

「ッー!!」

あ……。

「さだめさんっ！」

力が抜けて、崩れ落ちる。隣で、アテナが崩れかかったさだめを支えてくれていた。

「貴様、冗談は程々にしろ！」

「……冗談？ 俺が何時、冗談など言った？ まあ……そんなことはどうでもいい。俺と……デュエルしろ」

お兄ちゃんが、その手のデュエルディスクを構える。

「待って」

「なんだ」

「貴方は……記憶がないの？」

「……」

お兄ちゃん……？

「セツ……今の、ルインさんが言っていたことは本当ですか？」

「……本当だ。だが、関係ない。記憶があるうとなかろうと、俺は俺だ。守るべきモノのため、ただ、ここに在る」

「貴方の守るべきは、彼女の筈。貴方の心、その拠り所は、妹の彼女だった筈」

ルインが、さだめを指差して言う。

「……違うな。俺は、記憶をなくしても尚、覚えている。俺のこの魂に、守るべきモノを。俺の……終焉の花婿としての魂に」

「セツ……」

「セツ、お前は操られていたりするわけじゃ……ねえんだな？」

「想像に任せる。だが、操られていると思うのか？」

「……思わない。さだめだけじゃなく、他のみんなもそれは同意見だったらしい。」

「……恐らく、刷り込み」

「ルインさん？」

「記憶を失った後、終焉に刷り込みを受けた。過去の妹と酷似している終焉本体なら、刷り込みすることもできる筈」

「あ……昔のさだめは、そうか……」

記憶を失って、さだめの雰囲気だけは忘れていなかったとしたら……。

「俺は、守るんだ。世界を敵に回してもいい。ただ一人、あいつだけ守ればそれでいい」

「……記憶がないから、仮面も被れていない。これが彼の……セツの真実」

「究極のエゴイズム……妹の事だけは、何としても守り抜こうというわけか……尤も、守るべき妹を勘違いさせられている奴を見ると虚しいだけだな」

エースさんが、さだめのことをチラリと見、その手にデュエルデイスクを構えた。

「セツ！ 我とデュエルしろ！」

「……いいだろう。裏切りの騎士」

「どちらが裏切りか……その身を持って知るが良い！」

「『デュエル！』」

「私のターン！ セツ、我は友として、貴様を倒す！ ドロー！」

エースさんは、お兄ちゃんから先攻を取り、カードをドローする。

「我は『切り札の騎士 テンス』を守備表示で召喚。カードを二枚セツトし、ターンエンドだ」

『切り札の騎士 テンス』 DEF2000

「俺のターン、ドロー。俺は手札からフィールド魔法『ダーク・ゾーン』を発動する」

お兄ちゃんはあくまで冷静にカードをドローし、珍しくフィールド魔法を使用した。

「セツがフィールド魔法……？ 初めて見ます」

さだめも、お兄ちゃんがフィールド魔法を使うところなんて久し

く見ていない。それも、ただ攻撃力を上げるだけのフィールド魔法なんて、本当に珍しい。

「何を……」

「俺は融合デッキから『アルカナ ナイトジョーカー』を除外する」

「えっ……!？」

「この召喚方法は……まさか!？」

「来い。真なる天位騎士。『Sinアルカナ ナイトジョーカー』」

「!」
『Sinアルカナ ナイトジョーカー』 ATK3800 4300

「なん……だと?」

闇の衣を纏うアルカナが、お兄ちゃんのフィールドに現れる。

「『Sinアルカナ ナイトジョーカー』は、融合デッキから『アルカナ ナイトジョーカー』を除外することでのみ、手札から特殊召喚できる。『Sin』の名を持つモンスターは、フィールドに一体しか存在できず、『Sinアルカナ ナイトジョーカー』以外のモンスターは攻撃が出来なくなる」

それでも、その攻撃力は『ダーク・ゾーン』の効果と合わせて破格の4300。一ターンで、しかも手札二枚から召喚するには、巨大過ぎるモンスターだ。

「エース……お前たちの力は、もう要らない。『Sinアルカナ ナイトジョーカー』で『切り札の騎士 テンス』を攻撃! 『Sinロイヤルストレートフラッシュ』!」

「ッ! トランプ発動『和睦の使者』! このターン、私のモンスターは戦闘によっては破壊されず、ダメージも受けない!」

「……いいだろう。俺はこれでターンを終了する」
カードを伏せない? 唯でさえ用心深いお兄ちゃんが、フィールド魔法を除去するだけで自壊するSinモンスターを出して?

「エースさん、何かあるよ!」

「わかつている! 私のターン、ドロ! 私はテンスをリリースし、我自身をアドバンス召喚する!」

『切り札の騎士団長 エース』 ATK2000

「そしてトラップ発動！『サンダー・ブレイク』！ 手札を一枚捨てることで、フィールド上のカードを一枚破壊する！ 我が破壊するのは『ダーク・ゾーン』！」

「よし！ これなら……」

「アルカナには耐性があつたとしても、フィールド魔法は……」

破壊できる？ お兄ちゃんが、そんなにあっさりと？

「……違う。そんな筈ない」

「そつだ。違つ」

「つ！？」

「俺は『Sinアルカナ ナイトジョーカー』の効果を発動する。

手札を一枚捨てることで、フィールド上のカード一枚を対象とした魔法・罠・モンスター効果の発動と効果を無効にする！『ジャミング・アウト』！」

「なにつ！？ ぐつ！」

エースさんのフィールドから伸びた雷が、アルカナによって跳ね返される。

「……我は自身の効果で、カードを一枚ドロする。カードを二枚セツト。ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロ。俺は手札からマジックカード『おとり人形』を発動する。俺から見て右側のカードを強制発動だ」

「くつ！？ ミラーフォースが……」

「発動条件の正しくないミラーフォースは破壊され『おとり人形』はデッキに戻してシャッフルする。更に魔法カード『サイクロン』。もう一枚の伏せカードを破壊させてもらつ」

「くつ……」

エースさんの伏せカードは『激流葬』。

「なるほど。アルカナの効果を受けない罠を仕掛けていたか。だが、無駄だつたな」

「……無駄ではない」

「どついう意味だ？」

「貴様の手札は消費された」

お兄ちゃんの手札は二枚。あと、無効化出来るのは二回だけ。

「……なるほどな。だが、やっぱり無駄だ」

「!？」

「手札から永続魔法『命削りの宝札』を発動。デッキから手札が五枚になるようにカードをドローする」

「なっ……!!」

「そんな、それじゃあ……!!」

手札を消費させた意味がない。それどころか、手札は更に増強された。

「手札から速攻魔法『トラップ・ブースター』! 手札を一枚捨てることで、このターン俺は手札から罠カードを使うことが出来る」

お兄ちゃんの得意技。このカードは、お兄ちゃんの勝ちパターンだ!

「そして、お前の効果でデッキからカードを一枚ドローする」

「クッ……」

まんまと効果を利用され、歯噛みするエースさん。

「終わらせる。バトルだ。『Sinアルカナ ナイトジョーカー』でエースに攻撃する」

「っ! 手札から『オネスト』の効果を発動する!!」

「上手い! 『オネスト』の効果なら、対象を取りません!」

「無駄だ。俺も手札から『ライアー』の効果を使わせてもらう」

「『ライアー』……? なんだそれは!」

「これは『オネスト』の対。自分の閻属性モンスターが戦闘を行う場合、戦闘する相手モンスターの攻撃力を、自分の閻属性モンスターの攻撃力分ダウンさせる」

「なんだと!？」

『切り札の騎士団長 エース』 ATK2000 0 2000

「切り裂け騎士皇。『墮天の剣』!」

「があっ!?!」

エースLP1700

闇に染まった騎士の剣が、エースさんを切り裂いた。

「がっ、ぐっ……だ、だが私のライフはまだ残っている……まだ、終わっては……!」

「いや、残念だが終わりだよ。手札からトラップカード発動『連撃』! 自分のモンスターが相手モンスターを戦闘で破壊した時、続けて相手プレイヤーがモンスターに攻撃することが出来る」

「な、に……?」

「『Sinアルカナ ナイトジョーカー』で、プレイヤーにダイレクタアタック。終わりだ」

「くっ!?! あああああっ!?!」

エースLP0

「エースさん!」

慌ててアテナがエースさんに駆け寄る。

「すぐに治療を!」

「ぐ……大丈夫だ。心配いらん」

「でも……」

「怪我はしていない筈だ。これは、闇のゲームでもなんでもない」

「セツ……」

「これは、警告だ。これ以上、俺たちに干渉するというのなら……今度は、容赦しない」

「……セツ、それでも私は、私たちは……」

「敵対するのか。わかった。なら、とことんやるっか」

「はい。今度は私が「待つて」さだめさん?」

立ち上がるうとするアテナを制して、さだめはお兄ちゃんの前に立つ。

「お兄ちゃん」

「……何故、お前は俺を兄と呼ぶ。俺に、妹がいた記憶はない」

「忘れてるだけだよ。まさかお兄ちゃんに忘れられるなんて、思

つてもいなかった。でも……すぐに思い出させてあげる。お兄ちゃんが、さだめを忘れるなんて、出来るわけないから」

「そこまで言うなら、いいだろう。デュエルしようか」

「さだめさん……」

「ごめんアテナ。ここは譲れない。お兄ちゃんを守るべきはなんなのか、しっかり思い出して貰わないとね」

さだめは速攻で自分のデッキを改造し、今見た限りでのメタを構築する。

「『デュエル!!』」

「俺のターン、ドロー。俺は手札からマジックカード『テラ・フォールディング』を発動。デッキから『ダーク・ゾーン』を手札に加え、発動する」

再び、フィールドが闇に囚われる。

「行くぞ。俺は融合デッキの『アルカナ ナイトジョーカー』を外し、手札から『Sinアルカナ ナイトジョーカー』を特殊召喚する」

『Sinアルカナ ナイトジョーカー』 ATK3800 4300

「いきなり来たね……」

「俺はこれでターンエンドだ。さだめ……といったか」

「……なに？」

「お前は……いや、何でもない。お前のターンだ」

「……さだめの、ターン。ドロー!!」

大丈夫。お兄ちゃんは全てを忘れてなんかいない。お兄ちゃんは、やっぱり……。

「さだめの、味方でいなきやダメだよ。さだめは『終末の騎士』を守備表示で召喚。効果により、デッキから『ネクロ・ガードナー』を墓地に送るよ」

「……なるほどな」

『終末の騎士』 DEF1200

対象を取る効果じゃない『ネクロ・ガードナー』なら、あのアル

カナ相手でも守りきれぬ。でも、守ってばかりじゃ勝てないのも確か。

「さだめはカードを二枚セット。ターンエンドだよ」

「……お前は、どうやら相手の戦術を見切る力に長けているらしい。このアルカナでは抗し切れないか」

「お兄ちゃんの妹だからね」

さだめが自信を持ってそう言うと、お兄ちゃんは少し表情を歪めた。

「……まあ、いい。俺のターン、ドロウ。カードを二枚セットして、バトルだ。『Sinアルカナ ナイトジョーカー』で『終末の騎士』を攻撃する」

「トラップ発動『聖なるバリア ミラーフォース』！」

伏せカードの破壊もせず突っ込んできたことに違和感を覚えたけれど、発動しないという選択肢は無かった。

「ふっ……」

その笑みに、やっぱりダメか？ と思っただけけれど、意外とあっさりアルカナは破壊されてしまう。

「なんで……」

「お前にこのアルカナでは勝てないと分かったからな。無駄な手札の使用はやめておこうと思っただけだ。何しろ……」

お兄ちゃんは手札の中から一枚、カードを抜き出す。

「まさか……」

「アルカナには、更には上がっているんだからな」

ガシャアアアアアアアアアン！！ と凄まじい雷鳴がとどろき、お兄ちゃんのフィールドが一瞬見えなくなる。

「このカードは、手札が二枚以上の時、『Sinアルカナ ナイトジョーカー』が破壊された場合に、ライフを100にすることと、

他の手札全て、そして融合デッキの『切り札の騎士帝 トランプ・ナイト・ロード アルカナ

ロイヤルジョーカー』をゲームから除外することでのみ特殊召喚することが出来る」

セツLP100

間違いない。コストに使ったカードといい、間違いないのは…。

「さあ、お前たちに見せてやろう。究極のアルカナ。その真なる姿を。遠き深淵の裡より出でよ！」
『Sinアルカナ　ロイヤルジョーカー』

雷鳴を貫く闇が、剣を形作る。雷光が闇色に染まり、漆黒の鎧を組み上げる。

『Sinアルカナ　ロイヤルジョーカー』 ATK4500　5000

「やっぱり、最強のアルカナの『Sin』……。攻撃力5000…。」

「さあ、行くぞ。『Sinアルカナ　ロイヤルジョーカー』で『終末の騎士』を攻撃！」

「きゃ……！」

流星に、ダメージを受けるわけでもないのに『ネクロ・ガードナー』の効果は使わない。でも、流星にあれを突破するのは厳しい。

「……でも、相当なライフコストを要求して、手札もゼロなら勝機は……。」

「悪いが、それは対策済みだ。リバースカードオープン。永続魔法『命削りの宝札』を発動。手札が五枚になるようにデッキからカードをドロウする」

「そんな……っ！」

「これじゃあ、手札コストが五枚も……。」

「俺はこれでターンを終了する」

あのアルカナの上位種であるなら、手札をコストにパーミッションする系統の効果の筈。効果の詳細は分からないけど……。

「さだめのターン、ドロウ！」

お兄ちゃんの手札は五枚。伏せカードが一枚。あれだけの手札コストを払っておきながら、手札は余裕。でも、ライフは風前の灯！

「さだめは『ダーク・グレファア』を守備表示で召喚。効果発動！手札の閻属性モンスターを墓地に送って、デッキから閻属性モンスターを墓地に送るよ！ さだめは手札の『ネクロ・ガードナー』を墓地に送って……」

「悪いが……このアルカナの召喚を許した時点で、お前に勝機はない。『Sinアルカナ ロイヤルジョーカー』の効果発動！ 手札を一枚除外し、魔法・罠・モンスター効果の発動と効果を無効にし、破壊する！」

「なあっ……！？」

「ちょ、ちよつと待って！ なにその反則効果っ！？」

「さだめのフィールドから『ダーク・グレファア』がアルカナの剣に貫かれて消滅していく。一応『ネクロ・ガードナー』を墓地には送れたけれど、これじゃあ……」

「更に言っておくと、この効果はルール上スペルスピード3として扱われる。カウンター罠以外でのチェーンは組めない上、そのカウンター罠に対してもカウンターは可能だ」

「それじゃ対抗策がないじゃない！」

「召喚条件は、その分厳しい。『Sinアルカナ ナイトジョーカー』が破壊された時限定で、手札はこのカードの他に二枚必要。全て除外するから再利用も難しい。ライフコストも凄まじい。『火の粉』一枚で負ける程にな」

「そんなの……！」

「たったの二ターンで召喚されたら、厳しいと思うこともできない！ それに、そんな効果があったらバーン効果なんて……！」

「だが、その分制圧力は圧倒的だ。元々の攻撃力に加え、効果の一切をスペルスピード3でパーミッション出来る、最強の騎士。これが、俺の切り札だ」

「く……」

「マズイ。マズイマズイマズイ！ さだめは既に召喚権を使い、フィールドはガラ空き。墓地には一応ネクロが二体いるけど、お兄ち

やんの手札枚数的に無効化される。

「マジックカード『闇の誘惑』！」

「手札一枚を除外し、無効だ」

「くっ……『おろかな埋葬』！」

「無効だ」

これで、さだめに手札はもうない。さだめの……負けか。

「……一つ聞かせてもらいたい」

「なに？」

「お前たちは何故、彼女を……終焉を敵視する？」

「決まってるじゃん。お兄ちゃんをぶんどったか」「違いますさだめさん」……さだめ的にはそれが一番なんだけど」

「セツこそ、どうして終焉の味方を？ 世界を終焉に導く意志が、セツにあるんですか？」

「……お前たちが滅ぼそうとしている終焉が、何も知らない、無垢な少女であったとしても、お前たちは終焉を滅ぼすのか？」

「何も知らなかった、で済まされるものではないだろう。我は、間接的とはいえ仲間を殺されて黙っていられるほどお人好しではない」

「……そうか。そうだろうな」

エースさんの返答を聞いて、お兄ちゃんは少しの間痛々しい表情で黙り込む。

「……お互いに事情持ちとはいえ、俺はアイツを……エンヴィーを守るため、お前たちを打ち負かす。俺のターン」

さだめには、もう打つ手がない。二枚のネクロじゃ、アルカナの攻撃は受け切れない。

「バトルだ」

アルカナが、さだめに向かって剣を振る。もう、終わりかな。でも……。

「せめて、足掻く！ さだめは墓地の『ネクロ・ガードナー』の効果発動！ 墓地のこのカードを除外することで、戦闘を無効にする

！」

「無駄だ。『Sinアルカナ ロイヤルジョーカー』の効果発動。手札を一枚捨て、モンスター効果を無効にする」

「二枚目！『ネクロ・ガードナー』！」

「無効だ」

「……………」

もう、防ぐ手立てはない。

「まあ、いつか……………」

お兄ちゃんに、殺されるなら。

「今まで、ごめんね……………お兄ちゃん」

迫りくる剣を感じながら、さだめは静かに目を閉じた。

「……………あれ？」

何時まで経っても、ダメージが来ない。さだめはゆっくりと目を開く。

「……………あ」

剣が、目の前で止まっていた。

「……………くっ」

お兄ちゃんが一言呻き、デュエルディスクを仕舞った。

「……………今日は、ここまでだ」

「セツ！ 待つてください！」

「……………俺たちに、もう関わるな」

アテナとルインが手を伸ばすも、お兄ちゃんは唐突にその場から姿を消した。

「転移術……………あんなにあっさり」と

「オイ、マスター。大丈夫か？」

「う、うん……………何ともない」

お兄ちゃんは、さだめを殺せなかった。

「なら、完全に忘れちゃいないんだ」

エースにだって、怪我をさせなかった。きっと、忘れていても心のどこかで覚えてる。さだめたちのことを。なら……。

「……方針に変更はなし」

「だね」

顔を見合わせて頷く。

「セツを取り返す。その方針に変わりはありませんね」

「記憶ごと、な」

さだめたちは、そう言っただけで頷き合う。

「お前ら……大丈夫なのか？」

剣士さんが、複雑そうな顔で聞いてくる。

「ええ。むしろ、セツが元気そうでした」

「お兄ちゃんは死んでなかった。記憶を失っていても、さだめたちを傷つけなかった」

「……なら、落ち込むことは何もない」

そう。今回は負けちゃったけど、お兄ちゃんを倒して、目を覚まさせてやればいい。お兄ちゃんは無事に生きてる。顔も見れた。今は、それでいい。

「なに、取り返す対象が、セツ本人とその記憶になっただけのことだ」

「そのためにも、まずは希沔姫さんを蘇生しましょう」

アテナはそう言って、お兄ちゃんの襲撃によって中断していた儀式を再開するのだった。

第四期第十八話「天位の闇騎士」（後書き）

こんにちは。

というわけで、今回は敗北です。アルカナのSinというのは、実はかなり初期から考えていたもので、セツがダーク化、或いはそれに準ずる事態になった場合には出そうと考えていました。超凶悪なパーミッション効果をもったSinアルカナと、もう一つのオリカ『ライアー』の正式なテキストは、例によって活動報告にて掲載後、オリカ一覧に追加いたします。ちなみに、トラップ・ブースター、命削りの宝札、連撃はどれも原作オリジナルカードです。連撃酷い……。

そして……遂に明日、アルカナは一周年を迎えます。皆さまに協力していただいた企画小説もアップする予定で、現在鋭意執筆中です。お楽しみに。

それでは、悠でした！

アルカナ一周年記念特別編（前書き）

アルカナ一周年記念！ 遂に一周年を迎えました我がアルカナ！
その感謝もこめて、読者の皆様から寄せられた質問にセツ達がつ
っかり答えてくれますアルカナ一問一答の始まりです！

アルカナ一周年記念特別編

アルカナ〜切り札の騎士〜

アルカナ一周年記念特別編

アルカナ、一周年！

「今回は記念として、アルカナ一問一答を企画したよ！」

「今回、突然の募集だったのにも関わらず、多くの質問を提供して頂き、ありがとうございました」

「中には、作者の個人的な理由で答えられなかったりする質問もあつたりするが、出来る限り答えようと努力はしたらしい。勘弁してやってくれ」

「順番は質問順になっていますわ」

「……あれ？ お兄ちゃんと希冴姫さん、なんでいるの？」

「……番外編は時系列無視。深くは考えない」

「そういうことだ。まあとにかく、最初の質問からどんどん回答していきな」

Q：『セツの無駄スキル、本当に無駄なスキルもとい、あまり使われないことがないスキルはありますか？』

A：「……土下座を評価する程度ののうりょくもとい、やっぱり有名な記憶できない能力、だろつな。これはさだめの世話やら他の無駄スキルを磨くの忙碌して、偶発的に取得したスキルだからな。凜と知り合ったことで若干緩和されてるが、あっても意味がないスキルの代表例だな」

Q：『アテナは大きいお兄さん方にナンパされたことはありませんか？』

A：「……お兄さんというか、おじさんに声をかけられたことならあります」

「アテナ、ソイツの身体的特徴を教える」

「ちなみに、どうするつもりですか？」

「アポロさんにチクる」

「やめてください。お兄ちゃんきつと、いえ間違いなく殺しに行きます！」

Q：『アルカナ主要メンバー全員に質問。今まで真面目に行動したのに』「こんな筈じゃなかった！」ということはありますか？』

A：「むしろ最近は常に、私が真面目シリアスに動くときギャグになることが多すぎて、例を一つに絞ることができません」

「さだめは真面目にお兄ちゃんを襲ってるのに、ギャグとしてしか受け止めてくれない」

「え〜と、敢えて言うなら知らない内に『沈黙の闇狩人』の二つ名が広まっていたこと、かな〜……」

「……命を懸けた結果、エースに出演と人気とポジションを奪われましたわ」

「……自分の世界を滅ぼすつもりはなかった」

「後半二人、前半の三人と温度差があり過ぎるな……」

「我は……セツと友になろうとしただけだ。別に、こんな……（フエードアウト）」

「ダチになるうと声をかけたら悲鳴を上げて逃げられた」

「剣士先輩に見つけて貰おうと思って芸能界に入ったのに、まったくの無意味だったこと、かな」

「……誰よりも理性を強く持ち、真面目に生きてきた筈なのに、気づいたら鬼畜界の英雄として祭り上げられてしまったこと」

「おねーさんも真面目に生きてきたつもりなんだけどねい。な〜ぜか駄目オタニート扱いされてるのよねん」

「シャルナ、真面目に生きてたことあるんですか？」
「……………ほら」

Q：『闇丸&邪々丸へ。この世界ではあっさり終わる大事なデュエルなんて無い、と言っていた切君のペアに命がけのデュエルであつさりと勝負を決められたお気持ちをどうぞ！』

A：「……………相手が悪かった」

「……………よく、わかってるじゃないか」

「あの、すみません……………」

Q：『各キャラの好きなものと嫌いなもの』

A：「俺は、カルパッチョとかマリネとか、サラダ系が好きだな。さっぱりしてて、健康にも良い。見た目も綺麗だしな。嫌いなものはない。敢えて言うならインスタントやカップ麺とかのジャンクフードか」

「セツらしいですね」

「そういうアテナは？」

「私は……………」

「いや待て、当てて見せよう」

「わ、わかりますか……………（ドキドキ）」

「ふ菓子だろ」

「なんツですか！？ なんですか！ 敢えてもう一度言いますけどなんでですか！？ 私一度でもセツの前でふ菓子を口にした描写がありましたか！？ いえそれ以前に、アルカナに於いて初めて登場した単語ですよふ菓子！」

「あれ？ 違ったか？ おかしいなあ」

「そこまで絶対的な確信を持ってふ菓子好きだと認定されてしまった私はどうすれば……………」

「まさかアテナがそこまでふ菓子が嫌いだとは」

「嫌いとは言ってますんよ！ というか、ふ菓子がピンポイントで嫌いって言うてる人見たことないですよ！」

「いやさ、アテナってどうも妙なところで渋いところあるから」

「……セツの中で、ふ菓子とは渋いお菓子として認識されてるんですね」

「まあ冗談は兎も角、アテナは何が好きだ？」

「……私は、まあ甘いもの全般、でしょうか」

「ふ菓子が」

「引つ張つてきた！？ いえ確かに甘いですけど！」

「嫌いなものは？」

「うう……甘いものでもそうですけど、あんまり濃い味は好きじゃないです。基本的に薄味が」

「なるほど……ふ菓子だな」

「しつこい！」

「で、さだめは？」

「……今の一連の漫才を、羨ましく思ったさだめがいるよ」

「お前、いつもやってるだろう」

「ガチでもギャグにされる程度にはね。まあ兎も角、さだめの好きなもの……苦いものかな？」

「……苦いものね」

「……主に、下半身的な意味で」

「補足説明いらさないよ！ そしてルイン、何故お前が答える」

「……代弁してみた」

「実到的確だね」

「……で、嫌いなものは？」

「ん、特にないけど、お兄ちゃんの料理になれちゃったから、それ以外はあんまり好きじゃない」

「俺限定かよ。まあいい。ルインは？」

「……おかゆ」

「こないだの看病で味をしめたな」

「ときめいたと言って欲しい。貴方に褒められたから、私の得意料理」

「さりげない好感度稼ぎ……やりますわね」

「地道なフラグ立てがトゥルーへの道」

「……せめて本人のいないところで話せ。で、希冴姫は？」

「わたくしは……それほどありませんが、やはり食べ慣れた城の料理が一番ですわね」

「高級品？」

「まあ、そうなりますわ。実際、レッド寮の料理は多少……セツ様が調理された時は、一切感じませんけれど」

「まあ、お兄ちゃんの料理って、どれだけ節約して豪華に魅せるかを追求してるような所あるしね」

「わたしは、逆に高級食材系は苦手かな？」

「ユーキちゃん、一般庶民だもんな」

「うん。なんか腰が引けちゃって。味がよくわかんないんだ」

「好きなものは、確か俺と同じでサラダ系だったか？」

「うん。あとは辛いものとかも好きだよ」

「ジト〜……」

「ん？ どうしたアテナ」

「……私の好きなものは知らないのに、ユーキさんは……むう〜！」

「いや、前に話したのを覚えていただけだって」

「アテナちゃんと比べて、友達経由で今に至るから。そういう会話も良くしたよ」

「……堅実な積み重ねと、劇的なステップスキップ。どちらが良いとは一概には言えない」

「綺麗に纏めてくれてありがとう。ルイン」

Q:『シャルナ、年にどれくらい仕事してるの?』

A:『そりゃ〜もうジャンジャンバリバリと……』

「シャルナ、正直に」

「……まあ、それでも一応最低限はやってるのよ。うん」

「それならなんで、カイエンさんの土下座スキルが日々上昇してるんですか？」

「いやだつて！ ホントにマジに仕事が多すぎるんだつてばさ！
最近終焉の影響とかでまた更に被害報告とか面倒な書類仕事が回
つて来て……あゝもうネトゲに戻る！」

「つてちよつと待つてください！ シャルナ〜！」

Q：『セツつてどんなアニメ見てるの？』

A：「う〜ん、最近はあるまり見る暇がないが、基本雑食だな。敢
えて分類するとしたら、主人公のタイプがクール系のアニメは結構
好きかもしれん」

Q：『胸が大きく出来るなら、どれくらいまで大きくしたいですか
さだめさん』

A：「……質問に若干含みを感じる。まあいいや。そりゃあやつぱ
り出来るだけ大きく……と言いたところだけど、お兄ちゃんの好
みのにアテナやユークさんみたいな丁度手に収まるくらいがいいな
それがお兄ちゃんの好み」

「それは良いことを聞きました」

「わたしたち有利だね〜」

「……お前は何を勝手に人の性癖暴露してるんだ」

Q：『メインヒロインなのに良い扱いされてないことにどう思いま
すか？』

「……質問に悪意を感じます。そして、そのことについては私も大
いに言いたいことが多々あります」

「大いにと多々が意味被ってるぞ」

「些細なことです。それより問題は、私の扱いについてです」

「アテナの出番量でそんなこと言いだしたら希冴姫辺りが怒るぞ…

……」

「そうですね……つてセツ様？」

「というか私がいい扱いされていないと言つよりは、さだめさんプ
ツシユが強すぎるんですよ！ なんですか第三期終盤辺りからのイ
ベントの数々！ それに比べて、私と言えば番外編ばかりじゃな
いですか！」

「番外編でもスポットの当たらない希冴姫に謝れ！」

「これは、わたくし怒っても良いところですよねえ！？ いくらセツ様といえども……いえ、むしろ怒るべきは作者でしょうか……」

Q：『アテナとさだめへ。魔法少女になるなら、どんなスタイル？』

A：「変わった質問ですね……私は、某管理局の悪魔さんと同じだと思います。デッキコンセプト的に」

「さだめはそうだな、高攻撃力高防御力は同じだけど、肉弾戦主体かな？ パワータイプのフェ トみたいな」

Q：『ねえ三沢君。アルカナでも空気になって今どんな気持ち？』

A：「……俺は、空気じゃない……」 どう考えても空気です。

Q：『セツへ。どんな時でも平常心で居られるコツを教えてください』

A：「簡単だ。自分を騙してしまえばいい。動揺している自分を、平常心でいる自分の仮面で覆い隠す。この時、意識して仮面をつけちゃ意味がない。仮面を被っていることに、自分が気付かないくらい自分を騙す。或いは、動揺している自分を仮面だと思えばいい」

「……もうちょっと一般層に優しい方法を提示してください」

Q：『セツとデートするなら何処に行きたいですか？ 参考にしたいです』

A：「私は、セツとさだめさんの元の世界に行ってみたいです。セツに案内して貰いたいですね。ご友人の方々も紹介して欲しいです」

「ラブホ（検閲的削除）」

「……自宅でのんびりするのがいい。膝枕とか、耳掃除とか、まつたりと」

「精霊界を見て回りたいですわ。セツ様のお力なら移動も楽チンですし、精霊界には名所が多くありますもの」

「ゲームセンター、かなあ？ セツくん、器用だし反射神経いいし、クイズゲームとかも二人で協力したら楽しそうだよ」

「……基本的に、あんまり参考にならなそうな意見ばかりだな。ルインくらいか」

Q：『現在使用しているデッキ以外だと、どんなデッキを使いたいですか？』

A：「そうだな……俺は、元の世界でも使っていた特殊勝利系かな。フルバーンも。特にフルバーンはこの世界だと最強クラスだろう」
「私は、今のデッキ以外のデッキはあんまり使う気にならないですね。あのデッキで満足しています」

「さだめはワンキル。あと無限ループ。っていうかそもそも、この世界では敬遠されがちなデッキをこそ使いたいな」

「……私も今のデッキで満足している。ビバ儀式」

「わたしはそうだね。えっと、次元斬っていうんだっけ？ そういうのかなあ」

「オレはそうだな。六武衆、だな。オレのイメージにもあってるだろうし、なによりコンセプトがオレ好みだ」

「私は霊使いデッキ。エリア以外の霊使いも使いたいよ」

えーつと次の質問は……希望さん、刹那さんに会ってから今まで
のことを……ん？ これ別作品の話ですね。じよが「いいじゃないか。答えてあげよう」いやちよつとまっ

「まずは刹那さんのところでの地獄の修行からだね。あれは今から四千年以上は昔のことです……」

待った待った！ それ話始めるとどれだけかかるかわからないから！

「それもこれも、君が僕たちの物語を書いてくれない所為なのだけだね」

すみませんでした！ というわけで次！

Q：『相手にしたくない苦手なデッキはありますか？』

A：「そうだな……基本的に俺は、苦手なデッキってのはない。どのデッキ相手にも戦えるつもりだ。一番怖いのは自分の手札事故。相手の出方に合わせる以上、適宜応じたカウンターを持っているとは限らないからな」

「さだめも特にないよ。基本的に相手に合わせてメタ組むし。敢えて言うなら、自分でやるのは良いけど相手にメタ組まれたりワンキルされたり無現ループ喰らうのは嫌い」

「特殊召喚メタ。属性的に、セツの使ったコアキメイル辺りは私に刺さる。辛い」

「えーと、悪魔族とかかな？『ダークネクロファイア』で『サイレント・ソードマンLV7』を奪われると、逆にロックされちゃったりするし〜」

「下級の攻撃力が低いからな……どうしようもないって程じゃねえが、苦痛ワンフーとかは辛いぜ」

「私も、特殊召喚メタとかは苦手かな。あとアトランティスデッキなら、フィールド魔法に依存しちゃってるから他のフィールド魔法で上書きとかされちゃうと痛いな」

Q：『エースさん、メインヒロインのアテナさんより目立ってますが、正直な感想を』

A：「いや我は「ちょっと待ってください」……ああ」

「この質問に悪意を感じます！」

「それさっきも言っていたな」

「しかも、質問者まで同じです」

「愛されているではないか」

「そうは思えません！」

「……で、エース。感想を（アテナを羽交い締めにしつつ）」

「……我は別に、目立とうとして目立っているわけではない」

「だろうな」

「嬉しくないとは言わんが……戸惑っているのが正直なところだ」

Q：『エースさんのチャームポイントをセツさん視点でどうぞ！』

A：『ジト〜……』

「……これは、あれか？俺に死ねと？」

「あ、大丈夫さだめたちのことは気にしないで」

「そうです。セツの正直な意見を」

「……参考にするだけ」

「信用できない……まあいい。エースのチャームポイント、だったか？」

「……………」

「（言い難い……）あ……特にない」

「なんだと貴様!？」

「と、まあこうやって些細な挑発にも乗ってくれるところ、だな」

「……は？」

「気持ちいいじゃないか。自分のとった行動に、大きな反応返してくれるとき。エースと話していると楽しいよ。お互いに、生き生きと喧嘩かいわが出来る」

「む、む……………」

「反応も極上だ。顔真つ赤にして怒ったり怒鳴ったりしてくるエースが一番可愛い」

「ああああああも、もう黙れ! それ以上喋るなバカ!」

「お、なんだ照れてるのか? うん、やっぱそのはんの……………」

「だっ、黙れえええええっ!」

「……嫉妬する余地もなかったです」

「やっぱり、ツンデレは強いのか……………」

「……どう見ても痴話喧嘩。少し羨ましい」

「おのれエース……………わたくしのいない間に……………」

「あはは……………うん、なんだろ。すごいね……………」

Q: 『セツへ。ヒロインたちの長所を語ってください』

A: 「……なあ、狙ってるのか? 狙ってこういう質問重ねてきてるのか?」 マジで偶然です。質問は着順で並べてます。

「……まあいいけどさ。アテナからか?」

「は、はいお願いします!」

「……本人いる前でっつのは、若干以上に告白の体をなしているよ
うな……………まあいい。アテナは責任感が強い。努力家だしな。誰より

も“頑張る”娘だ。それに何より、一緒に居て明るい気持ちになれるのが一番だ」

「……はう」

「次、さだめ」

「ばっちこい！」

「……は、いいか」

「なにゆえ！？」

「お前はお前らしくしてる。それが長所だ」

「いえっさー！」

「ルイン」

「……ん」

「表情こそまだ乏しいが、人を思いやる優しさ、慈愛があってよろしい。時々見せる乙女チックなところは可愛らしいと思う。以上！」

「……満足した」

「希冴姫！」

「は、はい！」

「他の奴らみたいにながつついてこないで、一歩引いている奥ゆかしさ。見た目や称号とは正反対だが、大和撫子っぽさは一番あると思う」

「……ありがとうございますわ」

「ユーキちゃん……」

「う、うん」

「一緒に居ると癒される。安心する。何より疲れない！」

「な、何か微妙な……でも、うん。嬉しいよ」

「以上だ！俺は帰って寝る！これ以上は憤死する」

「わ、私たちも若干オーバーヒートしかかっていますが……次、行きましょう」

Q: 『シンク口召喚主体のデッキを作るとしたらどんなデッキを使いますか？』

A: 『お兄ちゃんの方はさだめが代わりに答えるね。お兄ちゃんは

多分、氷結界辺りだと思うよ？ コントロール色の強いデッキが好きだしね。あ、ちなみにさだめは当然インフェルニティ」

「当然なんですか……私は、あんまり考えてませんけど、敢えて言うなら『カオス・ゴツデス 混沌の女神』 辺りを軸に思うと思います」

「『エンシエント・ホーリー・ワイバーン』 主軸のキュアビート」

「オレは……戦士族シンクロだな。不死武士辺りで」

「セツ先輩と被るけど、やっぱり氷結界かな。水属性だし」

「お、次の質問で最後だね」

「け、結構ありましたね」

「本当だね。もう少し少ないと思ってたけど」

「……途中、若干一問一答の体をなしていなかった気がしますわ」

「複数人回答の質問が多かったから」

「それじゃあ、最後のこの質問に答えて、一周年記念作品と言つてとにしましょう！」

「そんな締めを飾るに相應しい(?) 質問は……こちら！」

Q: 『ライムは元気ですかー?』

A: 『……うん。元気』

アルカナ一周年記念特別編（後書き）

こんにちは。

まさかのライムオチ。仕方ないじゃんこの質問で最後だったんだから！ ちなみにセツたちのシンクロ云々ですが、ああ言っただけはいいんですがセツが5D's編で氷結界を使うことはありません。他のメンバーも同じく。シンクロ使うかどうかも未定……というか書くかどうかも未定だしね！

いやー、参りました。何がって、一問一答を面白く答えることが他の一問一答を見ていてこれは面白そうだと思ってやっては見ましたが、一答つてのが案外難しい。本編を見てもらえば分かるように、殆ど一問一答の体をなしていません。話を長くしがちな悠の悪いところでもありますが。

ところで一周年というのは、実は迎えたくなかったというのが正直なところだったりします。本当は年内完結を目指したかった……。一年で百二十話つてことは、大体三日に一話アップしてる計算ですが。途中大改訂を挟んだとはいえ、最初の頃は一日一話だったんですから、落ちたもんですねえ……。頑張ろう。

アルカナはとうとうクライマックスへ向けて一直線な感じですが、そろそろいい加減放置しまくっていたコラボを完成させにや……流石に放置し過ぎました。関係各所に申し訳が立ちません。なので、ちよいと本編はお休みということで、次も番外編行きますね。

それでは、悠でした！

特別編「？アルカナクロスワールド精霊の歌声？」（前書き）

まずは謝ります。すみませんでした！ 以前コラボすると言っ
てから、早五ヶ月……ほぼ半年も延期していたコラボ作品になります。
今回は、HIROさんの精霊の歌声になります。カードはセツと、
盲目の令嬢二階堂詩音さんになりますね。
それでは、お楽しみください。

特別編「？アルカナクロスワールド精霊の歌声？」

アルカナ〜切り札の騎士〜

特別編「？アルカナクロスワールド精霊の歌声？」

「恵方巻きつてさ、エロいよね」

「……さだめよ」

「なに？」

「お前がエロトークするのはいい」

「エロ解禁！？ じゃあ話すよ！？ 超話すよ！？ 運営のメスが
入るくらい話すよ！？」

「残念ながら、本番行為でも描写しない限りは運営のメスは入らな
い。じゃなくてだな」

「さだめはその本番行為をこそ望んでいると言っのに」

「黙れ。話を戻すぞ。お前がエロトークをするのはいい。もういい
諦めた。だがな、するならするでせめてツッコミ易い形でボケてく
れ。『恵方巻き食べてるのを横から見るとモザイク処理されてるみ
たいでエロいよね』とか言われても反応に困るんだ」

「セツ、さだめさんそこまで言ってます。セツ自身の手で補足説
明しないでください」

「バナナとフランクフルトは良く聞くけど、恵方巻きでってのはあ
んまり聞かないし、どんな感じか試してみようか？」

「ツッコミ無視ですか！？」

「許可する」

「許可するんですか!?!」

「俺は見ないが」

「何の意味が!?!」

「さだめの知的好奇心」

「……痴的好奇心?」

「実到的確な表現だ。流石アテナ」

「まったく嬉しくありません」

「……で、この会話のオチは誰が務めるんだい?」

『どっぞどっぞ』

「……残念ながら、僕にダチヨウ倶 部的オチを求めるのはキャラ的に無理があると思うんだ」

麗らかな午後のレッド寮。俺とアテナ、さだめが三人でそんな意味のあるかわからないボーっとした漫才を繰り広げている中、希望は苦笑を携えやってきた。

「で、なんで今更恵方巻き?」

「いやー、節分に何もしなかったから、節分補給?」

「一転して親父ギャグときたか。キミたちの引き出しの多さには、まったく恐れ入る」

「それで? お前が来たってことは、例のあれか?」

「如何にも。遅すぎた節分じゃないけれど、本当はもっと早くに発生する筈だったのだけれどね」

「まあ、そんなことはない。俺が行けばいいのか?」

「それがいいだろうね。中々変わった御令嬢を相手して貰うことになるだろうが……」

「良いよ別に。変わった御令嬢なら慣れ過ぎるくらいに慣れている。

……普通の女子の方が異質に見えるくらいには」

「実に頼もしい。では、いつてらっしゃい」

「夜ごはんまでには帰って来てね」

「忘れ物、ないですか? デュエルディスクにデッキ、差しました? 忘れて行ったら大変ですよ?」

「……アテナじゃないから大丈夫だ。っていつかコイツら、反応がすっかりいつものことになってやがる……」

二人の順応能力の高さに半ば呆れつつ、俺は時空の歪へと身を躍らせた。

ガサガサガサッ！

「……………」

アカデミアの休日。自室で読書をしていた二階堂詩音は、寮裏手の森から“聞こえてきた”物音に首を傾げた。

「なんでしよう……………」

森に住む獣が立てたにしては大きく、無粋な木々の破碎音。何か大きな物体が落ちてきたような。そう例えば……人間のような。

「……………大変っ」

それが本当なら、大怪我をしているかもしれない。そう思った詩音は、慌ててデュエルディスクとデッキを抱えて部屋を飛び出した。

「いってて……………たく、まさか空中に出るとは……………」

俺は身体に付いた枝葉を払い落としながら毒づいた。

「そう言えば、アテナも以前、人の上に落ちたとか言ってたな……………」

そう考えると、俺は木で良かったのかもしれない。華奢で軽いアテナなら兎も角、標準体重とはいえアテナの一・五倍はある俺が、女の子の上に落下なんてしたら潰してしまう。

「しかし……………俺だったから良かったが、下手すると骨折くらいしてるぞ」

幸い、俺はかすり傷程度。落ちた時に枝や葉っぱで切ったくらいだ。

枝葉を払い終え、ある程度身だしなみを整えた俺は、周囲を見渡した。

「ここは……アカデミアか？ ブルーの女子寮っぽいが……」

木々の向こうに見える白い壁と青い屋根は、俺も見慣れた女子寮のものとは相違ない。とすれば、ここはその裏にある森なんだろうが……。

ガサガサ。

「ん？」

物音。草木を除けてこちらに進んでくる。

「誰がいるのか？」

「あ……」

か細い声が聞こえた。そちらに目を向けると、黒い長髪の少女が、ワンピースを葉っぱ塗れにしてこちらを見ている。……いや、見てはいない。

「君は……」

彼女の開かれた黒瞳には、しかし光はない。

「目が……？ いや、でもそれなら……」

どうやって、こんな森の中に？

「私は、目が見えない分、耳が人より良いのです。例えば、反響してくる音で周囲の障害物を認識したり」

そんな俺の疑問に気付いたのか、彼女はそう言って微笑んだ。しかし、それは驚異的なことだ。それはエコーロケーションと言われるもので、例えば蝙蝠など一部の動物は洞窟などの障害物を視覚に頼らず避けるため、自らの発した音の反響してくる到達速度の違いで周囲を“見る”ように“聞く”技術だ。

人間でも不可能な技術じゃないし、生まれつきの視覚障害なら尚更だ。だが、ここは森。森は、そのイメージとは裏腹に、絶えず動植物の音が鳴り響き、多くの木々が音を吸収し、あらゆる場所に音が反響する。そんな中でのエコーロケーション。それは、いくらなんでも相当特殊だ。

「凄いんだな、あんだ」

「いえ、生まれつきのことなので」

そう言って彼女は微笑んだ。視覚障害とか異常聴覚とか、そういったハンデを一切感じさせない微笑みだ。

「そつだ、お怪我はありませんか？ここに落ちてこられたのですよね？」

「ん？ああ、問題ない。多少擦りむいた程度だから」

「ですが……そつだ、これを」

差しだされたのは真新しいハンカチ。縁にレースが施された品の良いハンカチは、新品のように見えた。

「いや、だが……」

「構いません。ハンカチは汚すためにあるんですから」

「……そう言うことなら」

俺はハンカチを受け取って、軽く血の滲んでいた頬を拭った。

「えっと……」

「差し上げます。お近づきの記念に」

「ああ……ありがとうございます」

今まであまり近くに居なかつたタイプのお嬢様で、少々調子が狂う。

「そつだ、名前は？俺はセツ。御堂切だ」

「はい。私は二階堂詩音と申します。セツさん……でいいでしょうか？」

「ああ。俺は……そつだな。詩音でいいか」

年上つぼくはあるのだが、まあ良いだろう。詩音も特に気にしないよううで、はいと頷いている。

「それじゃあ、詩音。不躰で悪いんだが、頼みを一つ聞いて欲しいんだ」

「頼み……ですか？はい。なんででしょうか？」

「俺と……デュエルして欲しい」

俺は、ここに來た理由と、元居た場所に歸るためにはデュエルを

しなくちゃいけないことを話した。疑われるかとも思ったが、詩音はあっさり信じ、快くデュエルを受けてくれた。

「信じてくれるのか？ 結構、突拍子もない話だったと思うが……」
「貴方の声に、嘘の音は聞き取れませんでしたから」

「そうか。そりゃ、嘘は吐けそうにないな」

苦笑して、デュエルディスクを構える。詩音も、俺に倣い、デュエルディスクを構える。

「デュエル！」

セツLP4000

詩音LP4000

「私のターン、ドローです。私は手札から永続魔法『神曲』を発動します」

「神曲？」

俺の知らないカード。恐らくは、彼女独自のものだろう。

「更に、手札から永続魔法『神曲「戦乙女の舞」』を発動します」
流れ出すは戦いの歌。軽やかで、何処か力強い曲。

「この永続魔法は、永続魔法『神曲』が発動している時にのみ発動することが出来る永続魔法です。私の場に『ヴァルキリートークン』を一体特殊召喚します」

『ヴァルキリートークン』DEF1200

「『ヴァルキリートークン』は私の場に『神曲「戦乙女の舞」』が存在している限り破壊されず、戦乙女の舞が破壊された時に破壊されます」

なるほど……破壊耐性を持ったトークンか。あれは……リリース要員か？ それとも……。

「私はこれでターンを終了します」

「俺のターン、ドロー！ 俺は『切り札の騎士 クイーン』を攻撃表示で召喚。このモンスターはカード名を『クイーンズ・ナイト』として扱う。カードを二枚セット。ターンエンドだ」

破壊されない守備モンスターが相手じゃ、攻撃しても意味はない。

とりあえずはこれでいいだろう。あとは、次のターンの詩音の行動次第だな……。

「では、私のターン、ドローです。私は永続魔法『魔法吸収』を發動します」

これは……魔法特化型のデッキか。さっきのターンで發動しなかったことを考えると、今ドローしたカードか。

「私は手札から速攻魔法『カードチェンジ曲調変更』を發動します。私のフィールドの『神曲』と名の付いた永続魔法を破壊して、デッキから別の『神曲』を手札に加えます。私は『神曲「戦乙女の舞」』を破壊し、デッキから『神曲「世界を焼き尽くす炎」』を手札に加えます。そして、永続魔法『魔法吸収』の効果で、ライフを500ポイント回復します」

詩音LP4500

戦乙女が消えて行き、曲調も元に戻る。しかし、まさか彼女のデッキ……。

「私はライフを1000ポイント支払い、永続魔法『神曲「世界を焼き尽くす炎」』を發動します。フィールドに『スルトトークン』を特殊召喚します！」

詩音LP4500 3500 4000

『スルトトークン』 ATK2300

「更に、永続魔法『神曲』の効果を發動します。ライフを500ポイント支払い、墓地の神曲と名の付いた永続魔法一枚を手札に戻します。私は『神曲「戦乙女の舞」』を選択し、手札に戻して發動します」

詩音LP4000 3500 4000

『ヴァルキリートークン』 ATK1300

「おおっ!？」

これは、少々マズイか？ あの神曲……途切れることなく鳴り響く。

「バトルします。私は『スルトトークン』で『切り札の騎士 クイ

ーン』を攻撃します」

「リバーズカードオープン『攻撃の無力化』！ 攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了する！」

流石に、そうそう簡単に攻撃を通すわけにはいかない。スルトトークンがどんな能力を持っているかは分からないが、どちらにしても相当なダメージを受けるのは間違いない。

「……では、私はこれでターンを終了します」

「俺のターン、ドロー！ 俺は『切り札の騎士 クイーン』で『ヴァルキリートークン』を攻撃！『エレガント・ハーツ』！」

『はあっ！』

「きゃっ……！」

詩音LP4000 3800

「っ……ですが『ヴァルキリートークン』は破壊されません」

「なら俺は、手札から装備魔法『アルカナソード ハート』を『切り札の騎士 クイーン』に装備。このカードを装備したモンスター
の攻撃力は500ポイントダウンし、戦闘での破壊と戦闘ダメージを免れる。更に、その時の超過分ダメージは俺のライフを回復させる」

「っ……」

詩音の表情が変化した。どうやら、この装備魔法は苦手なのか？
だとすれば……。

「……はい。私のデッキには、除去カードがあまり入っていません」
「っ！？」

今、心を読まれた？ 聴覚が良いとは言え、まさか心の声まで読み取れるのか？

「はい。確かに私は、心を読めます。いえ、正確には聞こえる心音や呼吸音から推測する、と言った方が正しいでしょうか」

「それは……」

「やはり……卑怯でしょうか？」

不安そうに聞いてくる詩音。だが、俺は特に気にせず否定する。

「いや？ デュエルじゃあ、相手の思考を読むのは当たり前。詩音は、偶然それを得意とするスキルを持つただけだろ？ そりゃ、インチキアイテム使ってするのは良くないが、産まれ持ったモノなら、それはただの才能だ。気にすることはない」

「誰でもすることだ。相手の考えを読み、それに合わせてデュエルする。そこに恥じる要素など何もない。」

「自分の力を全て使って戦うデュエリストを、誰も卑怯とは言えないよ」

「……ありがとうございます」

「ま、そうそう簡単に心を読まれるつもりもないしな。俺はカードを一枚セツト。ターンエンドだ」

さて……相手の場には破壊されないトークンが二体。魔法・罫ゾーンには永続魔法が四枚か……。こりゃ、完全に魔法デツキだな。それにしても、偏った構成だ。

「私のターン、ドロー。私はライフを500支払い、手札から永続魔法『神曲「混乱を起こす悪戯」』を發動します。『ロキトークン』を特殊召喚！」

詩音 LP3800 3300 3800

『ロキトークン』 ATK1200

「『ロキトークン』は手札から魔法カードを一枚墓地に送ることで、相手モンスターの表示形式を変更できます。私は手札から『神曲「不死身の英雄」』を墓地に送り、『切り札の騎士 クイーン』の表示形式を準備表示に変更します」

『切り札の騎士 クイーン』 DEF1600

「……？」

何をするつもりだ？ クイーンは戦闘耐性を持つ上、守備力の方が高い。戦闘破壊が目的とは考えづらい……となると、俺に回復をさせず、戦闘する必要があるのか？

「私は『霧の谷のファルコン』を召喚します。バトルです！」

『霧の谷のファルコン』 ATK2000

「そいつか！」

ファルコンは攻撃時、自分のカードをバウンスしなければ攻撃出来ない。そのセルフ・バウンス能力を使うために……。

「私はファルコンでクイーンを攻撃します！」

ファルコンは希冴姫に攻撃するが、その攻撃は希冴姫の持つ儀礼剣に受け止められ、防がれる。

「この時、私は『神曲「戦乙女の舞」』を手札に戻します。ターンエンドです」

「俺のターン、ドロー！」

しかし……魔法特化となると面倒だ。カウンターデッキの特徴として、同じカウンタートラップに対抗するためのカウンタートラップ……即ち、畏対策カウンターの方が多く積まれる。それら畏対策カードが軒並み役立たずになるわけ……。

「……とはいえ、あのカードが来れば……」

文字通り、一発逆転だ。だが、それまでは耐えるしかない。

「俺はクイーンを攻撃表示に変更し、ターンエンドだ」

「私のターン、ドローします。私は手札から魔法カード『歌姫の宝札』を発動します！ 手札の『神曲「戦乙女の舞」』を墓地に送り、カードを二枚ドロー！」

詩音LP3800 4300

手札交換……いや、神曲は手札に戻せることを考えれば、ほぼ『強欲な壺』だな。

「つ来ました。速攻魔法発動！『サイクロン』！『アルカナソードハート』を破壊します！」

「おっと、そうはさせない。カウンタートラップ発動『マジック・ジャマー』！ 手札を一枚捨てることで魔法カードの発動と効果を無効にして破壊する！」

「そんなんっ!？」

「更に、俺がコストに使った『ジャム・ウォリアー』の効果により、デッキからカードを二枚ドローする」

「くっ……」

「そのデッキ、それ以上除去カード積んでないだろ？『大嵐』だと自分に被害が大きいしな」

「……私は『神曲』の効果でライフを500支払い、墓地から『神曲』『戦乙女の舞』を手札に戻し、ターンエンドです」

詩音LP3800

「俺のターン、ドロー！」

「つと、俺も引いたか。『サイクロン』。だが……」

「まだだな……」

「まだ、使い時じゃない。どうせ、あの永続魔法はどれだけ破壊しても大した意味がない。こんなところで使っても仕方ない。」

「だとすれば……ここは攻める！俺は『切り札の騎士 キング』を召喚！ 効果発動！ 俺の場に『切り札の騎士 クイーン』が存在する時、このカードの召喚・特殊召喚・反転召喚に成功した時、

デッキから『切り札の騎士 ジャック』を特殊召喚する！」

『切り札の騎士 キング』 ATK1600

『切り札の騎士 ジャック』 ATK1900

「つまさかその三体は……」

「その、まさかだ。俺は手札から魔法カード『融合』を発動！ 俺の場の三体の切り札の騎士を融合し、エクストラデッキから『アル

カナ ナイトジョーカー』を融合召喚！」

『アルカナ ナイトジョーカー』 ATK3800

詩音LP3800 4300

「攻撃力……3800」

「回復させるのはあまり得策じゃないが……まあいいだろう。俺は手札から装備魔法『アルカナソード ダイヤ』をアルカナに装備。

攻撃力を300アップさせる」

『アルカナ ナイトジョーカー』 ATK3800 4100

詩音LP4300 4800

「バトルだ。『アルカナ ナイトジョーカー』で『霧の谷のファル

「コン」を攻撃！『ロイヤルストレートスラッシュ』！」

「きゃああつ!?」

詩音LP2700

「ダイヤを装備したモンスターが相手モンスターを戦闘によって破壊した場合、俺はデッキからカードを一枚ドロウする。俺はこれでターンエンドだ」

「私のターン、ドロウ！」

流星に焦れて来たか。声に余裕がなくなってきた。攻撃力4100の壁は相当に大きい筈……。どうやって超えてくるか。

「っ！ 行きます。私は手札から魔法カードを一枚捨て、『ロキトークン』の効果を発動します！ アルカナの表示形式を守備表示に！」

「残念。対象を取る効果は無効化出来る！ 俺は手札から『切り札の騎士団長 エース』を捨てて効果を無効化！」

「なら、速攻魔法『カードチェンジ曲調変更』！ 『神曲「混乱を起こす悪戯」』を破壊してデッキから『神曲「混乱を起こす悪戯」』を手札に加え、発動します！」

詩音LP2700 3200 2700 3200

「ぬっ……」

そうくるか……。アルカナの効果は一ターンに一度。なら、手札コストさえ確保できれば……。そして、あのデッキに於いてそれは……。

「私は『神曲』の効果を使い、ライフを500ポイント支払って『神曲「混乱を起こす悪戯」』を手札に加え、そのままコストとして使用します！」

詩音LP3200 2700

「くっ……。アルカナの効果は起動出来ない」

『アルカナ ナイトジョーカー』DEF2500

「4100には届きませんが……。2500なら届きます！ 私のフィールドに神曲が三枚以上存在する時、このカードは手札から特殊

召喚することが出来ます。私は『清音の歌姫 セイレーン』を攻撃表示で特殊召喚します！」

『清音の歌姫 セイレーン』 ATK2500

「セイレーンは、場にある神曲の数だけ攻撃力を200ポイントアップします。私の場にある神曲は三枚。よって攻撃力は600ポイントアップして3100です！」

『清音の歌姫 セイレーン』 ATK2500 3100

「超えてきたか……！」

「バトルします！ セイレーンで『アルカナ ナイトジョーカー』を攻撃！」

アルカナがセイレーンの放つ歌声に膝をつき、倒れる。だが、ただじゃやられない。

「リバースカードオープン！ トラップカード『アルカナソード

クローバー』！ 戦闘破壊されたアルカナの代わりに『切り札の騎士団長 エース』を蘇生させる！」

『切り札の騎士団長 エース』 ATK2000

「クローバーは、発動後装備カードとなり、蘇生した切り札の騎士に装備される。攻撃力は700ポイントアップだ！」

『切り札の騎士団長 エース』 ATK2700

「更に、戦闘によって破壊されたアルカナの装備していたダイヤの効果で俺はカードを一枚ドロウする」

「他のモンスターじゃ超えられませんか……私はカードを一枚セツトしてターンエンドします。このエンドフェイズ時に、セイレーンの効果が発動します。モンスターを戦闘で破壊した場合、墓地の神曲と名の付いたカード一枚を手札に戻します。私は『神曲「混乱を起こす悪戯」』を手札に戻します」

「俺のターン！」

さて……状況は、正直あまり良くない。が、打開するためのキークードは一枚、か……これは、このドロウにかかってるな。

「……正直、運頼みはあまり好かないんだが……やるか！ ドロウ

！」

「……来たか!？」

「よし! 俺は手札から速攻魔法『サイクロン』を発動! 『魔法吸収』を破壊する!」

「いい加減ウザくなってきたところだ。まずはさっさとそのカードを消しておく!」

「させません。それなら私は、その効果にチェーンして速攻魔法『非常食』を発動します!」

「不要となったカードをライフに変換する速攻魔法。これをされればライフを回復され、サイクロンの無駄撃ちになるわけだが……俺は、ニヤリと口元を歪めた。

「っ!？」

「不穏な気配を感じたのか、詩音がハツとする。だが、遅い!

「使つてくると思ったぞ! そのカード! 更にチェーンして速攻魔法『魔法効果の矢』を発動する!」

「っ!？ そのカードは……!」

「これこそ、俺の待ち望んでいたカード! 永続効果を苦手とするパーミッションの弱点を補うために入れていた、逆転の一矢!

「改めて自己紹介だ。俺はパーミッション使いの御堂切。チェーンの重ね合い、裏の読み合いで、負けるわけにはいかなくてね!」

「チェーン処理の関係で、まずは『魔法効果の矢』が処理され、全ての魔法カードを破壊し、その分だけダメージを与える。

「詩音の場にある表側表示の魔法カードは『非常食』を合わせて四枚! よって2000ポイントのダメージだ!」

「くうっ!？」

「詩音LP700

「次に『非常食』の効果で詩音のライフが1000ポイント回復する」

「詩音LP1700

「最後に、対象の居なくなった『サイクロン』は不発だ」

「まさか……私の『非常食』を読んで……！」

「ああ。『サイクロン』は結構前からドローしてたんだが、ここま
で自重した。『魔法効果の矢』を効果的に使うためにな」

あの『非常食』を『魔法効果の矢』にチェインされていれば、詩
音はライフを4000回復し、俺の『魔法効果の矢』は不発に終わ
っただろう。だが、そうはならなかった。

「『サイクロン』は、囷だよ」

「っ……」

そして、神曲がなくなったことでセイレーンの攻撃力も元に戻る。

『清音の歌姫 セイレーン』 ATK3100 2500

「さて、それじゃあバトルだ。『切り札の騎士団長 エース』で『
清音の歌姫 セイレーン』を攻撃！『リッター・ブリッツ』！」

「きやつ……！」

詩音LP1500

「俺はカードを一枚セットしてターンエンドだ」

「私の、ターン。ドローします！」

さて……俺の予想が正しければ、これで……。

「私は手札から魔法カード『歌姫の宝札』を発動します。手札の『
神曲』混乱を起こす悪戯』を捨てて、カードを二枚ドロー！」
違う。ここじゃない。

「っこれで……！ 私は手札から永続魔法『神曲』を発動します！」

「ここだ！ リバースカードオープン！ カウンター罠『封魔の呪
印』！ 手札から『アルカナソード スペード』を捨てて効果発動
！ 魔法の発動と効果を無効にし、そのカードを封印する！」

「な……」

「これで、もう神曲は流れない」

これが、俺の本当の秘策。サルベージ手段の非常に多い『神曲』
を止めるなら、元を断つしかない。これで、このデュエルで神曲は
使えない。神曲が使えなければ、他の神曲も発動できない。

「そして俺はエースの永続効果でカードをドロー……これは」

そうか……これで終わりか。

「俺は……魔法カードをパーミッションしたことにより、手札から『冥王竜ヴァンダルギオン』を特殊召喚。効果を起動する」

「あ……」

「魔法カードをカウンターした時の効果は……相手ライフに1500ポイントのダメージを与える。これで、終わりだ。『冥王咆哮』」

「！」

「あああっ!?!」

詩音 L P O

「結局、『封魔の呪印』の意味はあんまりなかったな」

「いえ、お陰で私のデッキの弱点がわかりましたから」

「『神曲』、か?」

「はい。私のデッキは、『神曲』がないとどうにもなりません」

「そうだな……ちょっと見せてみ」

許可を得て、詩音のデッキを見させてもらう。

「……うん。やっぱり、除去カードが不足してる。『オオアリクイクイアリ』くらいは入れた方が良いな。神曲系はサルベージ手段が豊富だから、『神曲』が来るまでの戦線維持にもなるし。あとはコストカードか。手札コストに使っても余り影響がないから、そう言うカードを入れるといい。それで大分強くなる筈」

「はい……ありがとうございます」

あれで除去カードが豊富なら、きつともっと苦戦していた。というか、下手すると負けていたかもしれん。神曲系はコストに最適過ぎる。

「おっと、そろそろか……」

徐々に身体が透けて行く。

「じゃあ、俺はこれで帰るよ。ありがとうな」

「いえ、こちらこそ、良い勉強をさせていただきました」

「はは……なんか、悪かったな。いきなりさ」

いきなり現れて、いきなりデュエルを挑んで、遠慮なしに叩く。

正直、微妙に後味が悪い。いや、今までもそうだったっちゃーそんなんだが。詩音の儂げな雰囲気尚更それを強調させていた。

「いいえ。私も、新鮮な体験をさせていただきました。ありがとうございます」

「そっか。なら、いいんだが」

つと、そろそろ限界か。

「じゃあ、またいつか、機会があれば会おう。詩音」

「はい。いつかまた」

最後にそう挨拶して、俺はその世界から帰還するのだった。

「つと」

「あ、お帰りー」

「お帰りなさいです。セツ」

「おー、ただいま。良い子にしてたか？」

「つて、私たちはセツの娘ですか」

「お転婆の、な」

お淑やかな詩音と会ったばかりだから尚更そう思う。

「セツ……」

冗談めかしてそう言うと、アテナは恨めしそうにこちらを睨んできた。

そしてさだめはというと、俺の傍に寄って来てクンクンと何か嗅いでいる。

「……他の女の匂いがする」

「いきなり不穏なことを言いだすな」

「……そのハンカチ、誰の？」

そしてさだめは、俺のポケットから顔を出しているハンカチを目敏く見つけた。

「あ？ ああ、これが。今行ってきた世界でな。少し頬を切ったから、貰ったんだ」

「じゃ、その血はお兄ちゃんの……その部分だけ切り取って捨てるね」

「お前はどこのヤンデレの妹だ、って……」

「そのものズバリじゃないですか」

「……そうだった」

「お兄ちゃん成分補給ー！！」

ハンカチの血をちゅーちゅー吸い始めたさだめを見ながら、俺とアテナは溜息をつくのだった。

特別編「？アルカナクロスワールド精霊の歌声？」（後書き）

こんにちは。

……今回は、特に遠慮という言葉を何処か遠くに旅立たせたようなデュエルでした。終わってから気が付きましたが、セツ無傷です。いやだって、一度通したらそのまま終わりそうだったし……なら負ければよかったじゃないかという声が聞こえてきそうですが。

ちなみに、魔法効果の矢ですが、普段からセツは入れてます。カウター罠は発動済みの永続カードは無効化出来ませんしね。その対策に。

あ、ちなみに詩音さんのオリカですが、詳しい効果はHIROさんまで。基本的に神曲関連の永続魔法は神曲がないと発動不可です。頂いたデッキレシピを拝見しましたが、とりあえずオオアリクイクイアリが非常に欲しい構成でした。ので、セツに言わせときました。あと、神曲サーチするカードも欲しいところ。サルベージは充実してますが。

それと……先日のバレンタイン、本当なら番外編をアップする予定でした。その前日まで友人宅に行っていました。ちゃんと九割方完成していたのですが……。帰宅して、パソコンを起動。結果……データ、飛んでました（泣）。しばらく呆然としました。これまでに書いてたデータも根こそぎだったんで。幸い、今までののはバックアップがあつたんでなんとかなりましたが、まだ書き途中だったバレンタインは……アテナメインだったのに。すまんアテナ。恨むならパソコンにすら嫌われた己の残念さを恨んでくれ。一応、希望があれば時期遅れですが書いてアップします。

それでは、悠でした！

番外編「聖戦再び」（前書き）

物凄く遅れてしまい、申し訳ありませんでした。バレンタインの番外編です。ただその分、ポリウムは過去最高クラスです。いや、五人分のバレンタイン且つアテナをメインに据えようとする、どうしても……。とりあえず、かなり難産だったバレンタイン特別編、お楽しみください。

あ、ちなみに十五禁です（笑）

番外編「聖戦再び」

アルカナく切り札の騎士く

番外編「聖戦再び」

「遂に明日はバレンタインデー……」

ザクザクと、厨房にチヨコを刻む音が響く。

「今年こそは……！」

チヨコを刻むその後ろ姿に、並々ならぬ決意を秘めて、少女は猛る。なんかもー湯煎とかするまでもなくチヨコが溶け始めそうなくらいのオーラを放ちながら。

「待っててください……今年こそ、今年こそは最高のバレンタインチヨコを……！」

ザクッ！！

どう考えてもオーバー過ぎる気合と共に振り下ろされた包丁が、チヨコを刻む。運命の日へのカウントダウンと共に。

「セツくんおはよう！ ハッピーバレンタイン！」

「お、おうおはよう……ユーキちゃん」

朝、目覚めて直ぐにユーキちゃんからチヨコを手渡された。ユーキちゃんにしては珍しく速攻の構えに、思わず目を剥く。

「ありがとう。でも、どうしてこんな朝っばらから？」

「あ、ごめんね〜セツくん。……迷惑だった？」

「いや、そんなことはないけど」

どちらにせよ、そろそろ準備して食堂へ行こうとしていたところだ。

「えへへ〜わたしね、考えたんだ」

ユーキちゃんが得意げに胸を張る。

「いつもわたし、ダークホースがどうのこうのって言われるでしょ？」

「ああ。最早共通認識となってきたるな」

俺が当たり前のようにそう言つと、ユーキちゃんは若干「う……」と呟いた後、改めて胸を張った。

「だ、だからね。どうしてそう呼ばれるようになったのか、考えてみたんだ」

「その結果が、この速攻？」

「そう！ ほら、いつもは出遅れて、皆が自爆or相討ちしたあとでしか動かないから、そんな風に言われるんだって気が付いたの！……なるほど」

確かに、それは言えてるかもしれん。特にさだめとかアテナとかアテナとか。

「つまり〜、みんなが動く前に行動すれば、誰もわたしのことをダークホースなんて呼ばなくなるんじゃないかなって！」

「……ユーキちゃんがこんな速攻仕掛けてくるとは思わなかった。

こいつあとんだダークホースだぜ！」

「……いじわる」

ユーキちゃん、涙目。

「いや、でも多分、そうなるぞ？ まず周囲の共通認識として、ユーキちゃん⇨ダークホース的なイメージが根付いているから」

いつもと違う行動したとしても、イメージが固定されてしまっているところなる。

「うう……」

「……まあいいや。チョコ、ありがとな。開けても良いか？」

「あ、うんもちろん。えへへ、実はあんまり甘いもの得意じゃないから、自信はないんだけど」

「大丈夫だろ。去年だって普通に美味かったし。え〜と、トリュフチョコか？」

「あんまり難しいのは出来なかったから〜」

ユーキちゃんは謙遜するが、見た目も味も中々だ。よく言えば素朴。悪く言えば標準的な味が嬉しい。

「うん。いいじゃないか。残りは、今日の終わりにでも食べさせて貰うかな」

「終わり？」

「ああ……なんというか、ユーキちゃんのは安定して美味いから、色々癒されるんだよ。だから、さ」

間違いなく疲れる一日になるだろうから、胃薬代わりに。そう言うとうとユーキちゃんは苦笑する。

「そう言ってくれるのは嬉しいけど……みんなのチョコ、危ないものみたいに言っちゃだめだよ〜」

「ああいや、そういうつもりじゃなかったんだが……けど、そうだな。折角くれるもの、悪く言うのは駄目だな」

「うん。それじゃあ、わたしはこれで寮に戻るね〜。また学校で〜」

「ああ。また後でな」

ちゃんとチョコが渡せて、安心したのだろう。ユーキちゃんはホッとした表情で女子寮に戻って行った。

「さて……今日も一日、頑張りますか」

波乱の一日になりそうなことは、例によって予想済みなのだ。何でも来い。俺はそう気合を入れ直し、食堂へ向かうのだった。

パサッ……。

「ん？」

教室、机に座ると、俺の席から一通の便箋が零れ落ちた。

「おいセツ、それ……」

「ああ……」

今日と言つ日、ハートマークのシールとベタな便箋。どう考えてもアレなんだが……。

「どうした？」

剣士がそう尋ねてくるのに構わず、俺は溜息を吐いて手紙を読む。『御堂切さんへ。突然のお手紙、申し訳ありません。実は、折り入つてお話と、お渡ししたいものがあります。急な話ではありますが、本日放課後、アカデミア屋上までいらしていただけると嬉しいですよ。まあ、要約すればこんなところだ。』

「どう見てもラブレターだな……」

呆れたように剣士が俺をジト目で見ている。俺は溜息をもう一つ吐いて、それに応じる。

「……ああ、どうみてもさだめだ」

「は？」

「これ、さだめだよ。差出人」

あつさりと言つ俺に、剣士は暫し呆気に取られていたが、慌てて反論する。

「待て待て、なんであの妹がこんな回りくどいことを？」

「大方、新しいシチュエーションプレイの一環だろ。大分意識して筆跡とかも変えてあるけど、俺が見間違うもんか」

一見さだめの字とは違う、普通の女子風の丸文字だが、俺にはわかる。

「実にあいつらしいことだが、文章のそこかしこから抑えきれぬ欲望のオーラの的なものを感じる……」

「……そんなもんを感じとれるお前もどうなんだ」

「あと多分、清純な後輩女子を演じようとしたんだろうな。演技切れなかったっぽい文章の不自然さが如何にもアイツらしい」

あれに清純は無理だ。なんて書けば清純っぽいのかわからなくてそれっぽい言葉を並べてみたって感じた。

「ま、こんなことを書いてあるってことは、今日は放課後まで平和だよ」

ひらひらと手紙を剣士の前で振って見せる。

「つくづくヘンな兄妹だよなお前らは……」

「自覚はしてるよ」

苦笑しつつ、授業のために教室に入ってきた教師の方を向き直るのだった。

「さて……」

昼休みである。さだめ（断定）から指示された時間までは、まだ時間があるものの、俺はそろそろ一波乱、というか、誰かやってきそうな予感に顔を上げた。

「……………」

「うおっ!？」

顔を上げた瞬間、目の前にルインの顔。思わず仰け反る。

「る、ルイン……心臓に悪いからその登場の仕方はやめてくれ」

「ごめんなさい」

ぺこっ、と素直に頭を下げるルイン。

「で、なんでまたあんな心臓に悪い登場を？」

「神出鬼没は私のアイデンティティ」

「……そっぴや前にもそんなこと言ってたっけか」

もしかして、いつも唐突に現れるのはそれを意識してるのか？

「それは、単に私が無口だから」

「自分で言うか」

それに、案外お前は雄弁だ。

「ところで、何の用だ？」

「……今日が何の日か、わからないとは言わせない」

「まあ、な。ルインも、チョコくれるってことでいいのか？」

「……えい」

ドン、とルインが何処からともなく携帯ガスコンロを取り出し、机の上に置いた。

「……ガスコンロ？」

「……そい」

ゴン、と更にその上に置かれる鍋。

「……鍋？」

ルインの意図が見えず、困惑する俺。

「……てい」

最後にトン、と脇に置かれたフルーツやビスケットを見て、漸くそれが何かわかった。

「チョコフォンデュか」

「御明察」

幽かに、蓋の閉じられた鍋からも甘い香りが漂って来ていた。

「最近の私は家庭的」

「……それで、料理とバレンタインチョコを掛け合わせてきたってわけか」

それはいい。実にすばらしい。若干昼食にするには甘ったるすぎる様な気もするが、そこはまあ許容範囲だろう。だが……。

「……ルイン、ここは教室だ」

「……それが？」

「……周りをご覧ください。生徒が沢山居ります」

「……それが？」

「こんな中で、こんな手間暇かけたバレンタイン過ごしている男が居たら、周囲の人間は一体どう思うと思う？」

「あゝん」

「話聞けよ！？なんでよりもよってあゝんとかし始めますか！？ほら周囲！殺意のオーラが半端なくなってきたから！特

になんか、ユーキちゃん辺りのオーラがシャレになってないから！
「だいじょくぶだよセツくん。わたし、皆みたいにセツくんを傷めつけたり暴走したりしないから」

「余計に怖い！ その理性的な笑顔から感じるドス黒いオーラが物凄く怖い！」

「あゝん」

「マイペースだよなお前はホントに！ 神出鬼没よりよっぽどそのマイペースの方がアイデンティティだよ！」

「じゃあ……ん〜（ビスケットを銜えて差し出す）」

「ビスケットでポツキーゲームは無理がある！ というか、あゝんより更にヤバイ！」

「じゃあ……はい」

ルインは指をチョココにつけて、此方に差し出してくる。

「……舐めて？」

「無理だよ！ 少なくとも今ここでそれやったら俺問答無用で縛り首だよ！」

「……火傷した」

「そりゃ熱したチョココに指つければ火傷もするよ！」

「……舐めて？」

「結局そこに行きつくのな！ ケル！ ケア 使えよ！ 使えるじゃんお前回復魔法！」

「…… アルじゃなくて、ホミ」

「そこは良いよ別に！ この際F かドラ エかの違いは些細だよ！ そして俺は F派だ！」

「それが一番些細だろ……」

剣士がげんなりとツツコミを入れてくれたが、とりあえず今は無視だ。

「……教室だからダメ。なら……別室へ」

「行かねえよ！？ この流れでは行けねえよ！ この流れで人気がないところへ移動したらあからさま過ぎるだろ！」

教室は、別室行って何する気だテメ工的な空気に満ち満ちている。あぐん、口移し、指舐めと来て人気のないところ行ったらどうなるのか、想像出来ない程高校生無知じゃない。

「もうちよつとこつ……空気読もうか。ルイン」

「大丈夫」

何がだ。

「読んだ上で、やっている」

「余計悪いわ！ そのアジテーターっぶりも十二分にお前のアイデンティティだよ！ 俺を殺す気か！？」

「……私は破滅の女神」

「わかつてるよ！ その定型句、流石にもう想定内だよ！」

明らかに生きて帰れなさそうな空気になって来ている教室の空気に戦々恐々としつつ、ルインとの昼休みは過ぎて行った。

「ふう……」

放課後である。正直昼休みのルインの一件で、凄まじく精神力を削られたが、少なくともこの後に三人程残っているのだ。そう考えると、若干絶望的な気持ちになる。とりあえず、ユーキちゃんのチョコを食べて体力回復。

「……行くか」

さだめに指定された時間である。既に大分気力が尽きかけているが、行かないわけにもいかない。重い足を引きずりながら、屋上への扉を開く。

「ずっと、お慕い申し上げてございました……」

「いきなりだが、口調が滅茶苦茶ださだめ。もうちよつと勉強してから出直してこい」

「いきなりダメ出しされた！？」

髪を下ろして、少しだけいつもと雰囲気変えてみました的なさだ

めに冷やややかな目で突っ込む。

「ほら、チヨコくれるんだろ。寄せ」

「冷やか！ しかも超めんどくさそう！」

「昼休みのルインで大分疲れててな」

「おのれルイン！」

すっかりキャラ作りする気はなくなったようにいつものさだめに戻る。まあ、やっぱりさだめはこうじゃなくちゃな。

「っていうか、お兄ちゃんノリ悪い！ もうちょっとノッてくれても良いじゃん！」

「……あのさ、バレンタインチョコってのはノリでギャグチックに手渡すもんなのか？」

「む、それを言われると……」

「大体だな。お前の髪を下ろした姿なんて見慣れてるし、あんまりいつもと違う雰囲気は出せてなかったぞ」

「くっ、一緒に居た時間が長いことの弊害が……」

「まあそういうわけで、くれるならさっさと寄せ」

「でもその反応はあんまりじゃないかなあ！？」

む、そう言われて見ればそうかもしれない。仮にもバレンタインチョコだ。

「だが、お前の作った食物は危険だしなあ……」

必ずと言っていい程媚薬だか筋弛緩剤だか睡眠薬だか混入されているわけ。

「今回はそんなことないから大丈夫！ 今までのさだめは闇さだめ。今年のさだめは普通のさだめだから！」

「まあ、それもそうか……」

それでも、一抹の不安は残るが。

「そんなことより、はいこれ。今年のバレンタインチョコ」

「おう、サンキュ……って、なんで二つあるんだ？」

「片方はさだめスペシャル」

「丁重にお返しいたします」

「大丈夫だつて。ヘンなの入ってるわけじゃないから」
「本当か……？」

正直、さだめを信頼していても信用はしていないわけで。

「本当だつてば。ただ単に、さだめ好みの味付けにしてるだけ」

「ということは、相当ビターなんだな」

さだめは苦いもの好きである。さだめ好みと言うことは、それが反映されているのだろう。

「うん。カカオ比率を高めてみた」

「つてお前、まさかカカオから作ったのかこれ」

「まあね。こつちはお兄ちゃん用。粉乳も使つてホワイトチョコ」

サラリとそんなことを言うさだめ。

「つたく、相変わらず、真面目にやれば何でもできる奴だな」

「でも、お兄ちゃんだつてそれくらい出来るでしょ？」

「出来る」

「え？」

「俺はお菓子作りの技術は人並みなんだ。そりゃ、やり方教われれば出来るだろうが、少なくとも現時点では出来ないよ」

「そうなんだ。意外」

「お前、俺を何でもできる完璧超人か何かだと思つてないか？」

「違つたつけ？」

「違つ」

まったくどいつもこいつも……。

「俺は、何処にでもいる一般人だ」

「それは嘘だね」

「……………」

言い切られた。

「お兄ちゃんが一般人なら、この世の全ての人間が落ちこぼれだよ」

「それは言い過ぎだろうといくらなんでも」

「強ち言い過ぎでもないと思つけど……………」

小声で何かしら呟いたさだめに構わず、とりあえずチョコを一粒

取り出して食べる。何か混ぜたりはしなかったので、コイツも成長したってことだろう。

「ふむ……美味しいな」

「あ、そっちは……」

さだめスペシャルの方だ。確かに苦い。苦いが……。

「ただ苦いだけじゃないな。ちゃんと味のバランスは取れてる。口だけでも良いし、完成度高いな。相当手間暇かかっているのもわかる」

「まあね。これでもさだめ、やる時はやるし、手は抜かない主義だから」

「普段からそうしてくれ。ぜひとも」

「でも、それはそれでお兄ちゃん寂しいでしょ？」

「……否定はしないな」

確かに、普段のコイツは滅茶苦茶だが、愉快であることもまた確かなわけだ。

「……ま、とりあえずチョコはありがとな。美味かったよ」

「ホワイトデー、楽しみにしとくね！」

「ホワイトから派生する白いモノはやらんから、そのつもりで」

「超先回られた!？」

收拾つかなくなるので、とりあえずボケは封殺しておいて、俺は屋上を後にした。

「あの……っセツ様！」

「お?」

アカデミアの校舎を出た辺りで、ガチガチに緊張して裏返った声が俺を呼び止めた。

「希冴姫」

セツ様、という呼び方からわかってはいたが、そこに居たのは希冴姫。

「どうした。ガチガチだぞ」

「そ、それはそのつ、このようなことは初めてですので……その、心の準備が、と言いますか……」

希冴姫の顔は真っ赤で、今にもオーバーヒートしそうだった。

「そ、それに……」

「ん？」

希冴姫が唐突に下を向き、落ち込んだように肩を落とす。

「……結局、手作りは出来ませんでしたもの」

そう言っ、希冴姫はその手にある包装されたチョコレートを俺に手渡す。

「なんだ、そんなことか」

「そ、そんなことって……わたくしにとっては、そんなことでは済まされないことなのですわ！ 皆さん手作りのチョコを……なのに、わたくしだけ」

「ジャックに師事したはいいが、結局満足のいくものは出来なかつたってことか」

「……はい」

肩を落とし、すっかり落ち込んだようにしょんぼりする希冴姫。

「今の今までジャックに手伝って貰ったのですけれど、遂にジャックが……」

そこまで言っ、眼を伏せる希冴姫。おい、ジャックがどうした。

頼むから最後まで言っ、くれ。

「……なら、それでいいさ」

「え？」

「……要するに、希冴姫は頑張ったんだろう？ 単に結果がついてこなかっただけで。それに、上手いかなかったからこそ、不本意ながらも失敗作じゃなく既製品を持ってきたわけだ」

「はい……」

「ならそれは、お前の優しさだよ。例え一人だけ手作りチョコじゃなくなっ、たとしても、俺の体調を気遣うことを選択した、お前のな」

「セツ様……」
「ありがとう希冴姫。このチョコ、ありがたく食べさせて貰うよ」
「……はい！」
「あ、それと結局ジャックはどうなったんだ？」
「……それでは、わたくしはこれで！」
「おおい！？ 眼を逸らすな背を向けるな小走りに去って行くな！
ジャック、ジャック！？」

「え〜と、ユーキちゃんにルイン、さだめに希冴姫……」
残るは、アテナか。ん？ そういえば……。
「セツくん」

「？ ああ、ユーキちゃんか。どうした」
「えと、特に用事はないんだけど、見かけたから……だめ？」
「いや、ダメなんてことはないが……」

「そっか、良かった。それで、セツくん、それ皆の？」

「ああ。こつちがさだめ、これが希冴姫の」

「……あれ？ アテナちゃんは？」

「それが、まだなんだ。っていうか、よく考えたら、今日俺アテナと顔を合わせてもいないんだよ」

「え……そういえば、授業もいなかったね。おかしいな。アテナちゃんがこんな日に病欠なんてするとは思えないんだけど……」

「だよな……なんかあったのか……？」

そう考えると、凄く不安になった。ユーキちゃんと二人、暫しその場で考え込む。

「……セツくん、見に行つてあげて」

「え、でも女子寮だろ？ 男の俺が行くのは……」

「それは、セツくんなら今更なんじゃあ……」

……確かに。最近は行くことが減ってたから忘れてたが。

「そうだな。それじゃ、見に行ってみるよ。ごめんなユーキちゃん」
「ううん。わたしのことはいいから、アテナちゃんの所に行っ
て。わたしは、もうちゃんと渡せたから……」
「……ありがとう」

アテナは恋敵の筈なのに、自然にそう気遣ってくれるユーキちゃんにもう一度お礼を言っ
て、俺は女子寮に向かって走り出した。

「おい、アテナー？ いないのかー？」

とりあえず女子寮のアテナの部屋に来てみたが、ノックしても返事がない。

「仕方ない。こういうときは……」

ザ・ピッキング！

「よし、開いた」

所要時間約二秒。そこそこ満足出来るスピードだ。

「入るぞー」

一応、改めて声を掛けてからドアを開ける。

「ん……いないな」

アテナの部屋は整然としていて、人の気配は感じられない。以前に入
った時と然程違いもない。

「けど……まさかアイツ」

一切の乱れがないベッドのシーツ。寒々しい部屋。まさかアテナの
奴、昨夜部屋に戻ってないのか？

「だとしたら……」

調理室か？ 少なくとも、ユーキちゃんの話聞く限り、バレン
タインの準備はしていた筈だ。

「アテナ……！」

慌てて部屋を飛び出し、女子寮の調理室に向かう。調理室に居れば
良い。それならいいが……もし、何かあったら。

「アテナ！」

調理室に着くなり、俺は扉を蹴破るようにして開けた。

「う……セツ？」

電気の点いていない、暗い室内に、果たしてアテナはそこに居た。そのことに安堵しつつも、俺は様子のおかしいアテナに近寄ろうとする。

「セツ……来ないで、ください」

「アテナ……？」

アテナの目は虚ろで、眼の下には隈も出来ていた。一体何があったのか、調理室中に飛び散ったチョコの残骸や、アテナの体中にも飛び散ったホワイトチョコなどもあって、かなり悲惨な状態だ。というか、見た感じ凌辱エンド後のCGっぽくて凄く嫌だ。

「私、私……」

「どうしたんだアテナ。なんか、凄く悲惨なことになってるが……」
そう言うと、アテナは眼にジワっと涙をにじませる。

「う、うう……ごめんなさい。ごめんなさい、セツ……」

「お、おい……ホントにどうしたんだよ」

なんだかとてもなく悲壮感を滲ませているアテナに、思わず俺も声が震える。

「私……」

「なんだ？」

「私、今年こそ、今年こそはって、バレンタイン……」

「あ、ああ……」

「でも、どうしても上手く行かなくて……普通のチョコしか出来なくて……」

「いや……それでいいんだが」

何やら、雲行きが怪しくなってきた。

「ルインさんは、おしゃれなチョコフォンデュとかするみたいだし、さだめさんなんか、カカオから本格的な手作りチョコで……私の、私のチョコなんて……とっても、普通で……」

「いや……ユーキちゃんのチョコも割りかし普通だったけど、そして、その普通さが非常に嬉しかったんだが。」

「ユーキさんは……それがパーソナリティとして確立してるからいいんです。でも、私は……私は、普通のチョコなんかじゃ何のインパクトも……」

「あんなアテナ……」

インパクトとか、そんなんいらんっちゅーのに……。

「それで、私負けられないって……でも、結局私……」
この有様……か。

「はあ……」

俺は溜息を一つ吐いて、アテナに近づく。アテナはすっかり落ち込んでしまっているらしく、がっくりと座り込んだまま顔もあげない。

「アテナはホント、空回るよなあ」

「う……」

自覚はあったのか、小さく呻く。

「去年のバレンタインもそうだったし、普段もさ」

「……」

「その理由、教えてやろうか？」

「……え？」

俺の思いがけない言葉に、アテナは驚いたように顔を上げる。その頬に付いたチョコをはがして食べる。

「あ……」

「うん。美味いじゃないか」

ユーキちゃんと同じく、普通に良く出来たチョコレート。でも、ユーキちゃんのそれとは違う、アテナらしい、一生懸命で優しい味だ。

「お前はな。周りを気にし過ぎなんだよ」

ポンポン、と頭を軽く撫でる。

「アテナは、さだめと似てる」

「さだめさん、と……?」

「まあ、パツと見正反対なんだけどな」

光の天使族使いのアテナ。闇の悪魔族使いのさだめ。性格とかも丸きり正反対に見える二人だが、俺は、きつと二人はそっくりなんだと思ってる。

「思い込んだら一直線。一閃で、暴走しがちで、負けず嫌いで、デユエルでは容赦なくて、結構、我も強い」

本質的なところは、この二人は殆ど同一だ。

「でも、アテナは少し、さだめと比べて周りを気にし過ぎるな」

もちろん、それが悪いことだとは言わない。さだめみたいに、周囲を完全無視して暴走されるのも困ると言えば困る。

「だけどさ、アテナはさだめと似てるのに……自分に自信がないんだろつな」

そこだけが、さだめとは違うところ。あいつは、何だかんだ言っ自分の行動に迷いが無いし、意味不明なまでの自信に溢れてる。けど、アテナはそれがない。

「周り比べて自分はどうか、そういうことを気にし過ぎだ。いいじゃないか。他の奴らなんてどうでも」

「で、でも……」

「いいから」

俺はアテナを抱きしめる。こんなことしかできないのがもどかしいし、これから言う言葉がキザっぽくて恥ずかしく、顔が赤くなるのを見られくないから。

「お前は、俺だけ見てる」

「あ……」

耳元で囁く。

「今日は、バレンタインだ。女の子が、勇気を出して男に想いを告げる日だ。なら……他の人のことなんて気にせずに、まっすぐ、俺にだけ向かって来いよ」

まったく……俺は何様だ? どれだけ自信過剰なナルシストだよ

と思わなくもないが、仕方ない。アテナに、このまま潰れて欲しくない。

「普通のチョコでもいいじゃないか。それに、想いが籠っていれば例え手作りじゃなくたって特別だ。俺は……そこに込められた想いくらい、汲み取ってやる自信はあるぞ？」

「セ、ツ……」

「だから、アテンぶっ!？」

唇に、熱い感覚。喉に流れ込んでいく、とろりとした甘さ。

「あ、アテナお前……んっ!？」

間髪いれずに、また流しこまれるチョコレート。

「……ちょこれーと、型にはめて、冷やしたりする時間はない、ですから……」

チョコ以上にとろんとした眼をしているアテナが、陶然とした面持ちで言葉を続ける。

「わたし、思った通りにします……。この熱くて、とろけて、溢れてしまいそうなくらいのモノ……。型になんてはめません。そのまま、貴方に……」

「ちょ……!？」

いつの間にか、体勢が逆転し、殆どアテナにのしかかれるように抱きつかれている。

「こんなに、熱いのに……冷やしたチョコなんて、ダメです。熱いまま……とろとろで、溢れそうな……セツ」

「あ、あてな……」

そ、そうそうこういうところ！ こういうところもさだめに似てるんだよ！ この、なんというか、押し倒されそうな感じが！

「って、若干酒臭いぞ!? まさか、これ……んむっ」

アテナに絡みつかれながら、俺は横目でキッチンに置かれた瓶のラベルを見る。

“ブランデー”

やっぱり！ チョコにブランデーはまあ、それほどおかしなこと

じゃないが！ “特別なチヨコ”を求道する内、ボンボンに辿りついたのもわからない話じゃないが！

「セツ……」

「ま、待った！ 待ったアテナ！ 酔ってるだろ！？ お前、物凄く酔ってるだろ！」

「酔ってなんて……それに、んっ……そうだとしても、関係ないです……」

「い、いやいやいや！ 関係ないこと……んっ!？」

「や、ヤバい……流石に、くらくらしてきた。い、色んな意味で……」

「セツ、私……」

喰われる!? そう、本気で身の危険を感じた瞬間だった。

ゴンっ！

「ぶっ!？」

アテナの後頭部から鈍い音が響き、そのままずると崩れ落ちた。

「あ、アテナ……?」

「……きゆう」

すっかり眼を回しているようだ。しかし、今は……。

「……流石に、ここまでとは思わなかった」

「る、ルイン!？」

神出鬼没がアイデンティティの女神が、アテナの背後で杖を構えて立っていた。珍しく、その口元は引き攣り、額に青筋を浮かべている。

「お、お前なんでここに……」

「ここは、女子寮だよ……お兄い〜ちゃあ〜ん……!」

調理室の電気がパツと点き、入口には眼を血走らせた（超危険域）さだめの姿。

「セツくん……流石に、これはちょっと……」

その後ろでは、ユーキちゃんも顔を引き攣らせて拳を握っていた。

「こ、このエロ小娘……！ ひ、人気のない調理室でなんと破廉恥な……！」

希冴姫も、今にも抜刀しかねない形相で震えている。

「え、えっと……皆さん、お揃いで……？」

久しく感じていなかった程に濃密な死の気配に、流石の俺も泣きそうです。

「あ、危なかったですわ……嫌な予感に従ったのは正解でしたわ……」

「うん……女の勘って、結構バカにできないね……」
「濡れ場寸前」

「このエロ天使、時折さだめ以上に発情期なんだから……！」

これは……さっきまでとは別の意味でヤバイ。俺かアテナか、どちらかが死ぬ……っ！

「さて……」

「セツ様？」

「はいっ！」

「わたし、今日結構我慢したよ……？」

「さだめも……ちょっと冷たい反応でも我慢したんだけどなあ……？」

アテナ……やっぱり、前言撤回だ。

「代償は……高くつく」

もう少し……他人は気にしようか。

「さ〜てと……」

「じゃないと、どうやら……」。

「何してもらおっかな〜？」

俺が、ヤバイ……！

安らかに眠るアテナの横顔を見ながら、俺はこの処刑場から如何にして逃れるか、それだけを必死で思考するのだった。

番外編「聖戦再び」（後書き）

こんにちは。

というわけで、十五禁です。ラスト辺りが、もうかなり十五禁です。少なくとも悠的には、既にあっぷあっぷです。

基本的には、最後のセツの言葉が書きたくて書きました。アテナとさだめが似てるってことかも、結構書きたかったところです。ちなみに、一番書き易かったところはルイン。あのあたりだけはするする書けました。

このバレンタイン、前回書いたように、一度クラッシュした上、改めて書こうとすると全然書けなくて、仕方なくもう一度全消ししてから書き直したと言う、物凄く難産だった番外編になります。遅れたのはそれが原因……すいません。それだけじゃないです。ゲームしてました。それもあるけど、ゲームが一番の原因です。レディアントマイソロジー、やってました。プレセアの加入タイミングのあまりの遅さに、必死こいてやってました。すいませんでした。

それと、今週は卒業式やら引っ越しやらと、若干忙しい週になりそうです。遅れた分の更新を頑張りたいですが、どうなることやら……。

それでは、悠でした！

第四期第十九話「騎士の憂鬱」（前書き）

皆さまお久しぶりです！ 復活の悠です！ 先日の地震の影響で更新がストップしていましたが、今日から復活です。心配してくださった方々、本当にすみませんでした。そしてありがとうございます。悠はこうして無事です。詳しい事情は活動報告にてアップしておりますので、そちらをご覧ください。

久しぶり繋がりで、久しぶりの彼女が復活です。

第四期第十九話「騎士の憂鬱」

アルカナく切り札の騎士く

第四期第十九話「騎士の憂鬱」

「天と地、生と死、光と闇。境界を司りし我が力を以て、我が神才シリスに願い奉る……傷つき斃れ、力尽きし魂に、今一度目覚めの力を与え給え」

光が猛る。アテナの詠唱と共に踊る光の粒が、ゴーズたちによって再生された希冴姫さんの身体に吸い込まれて行く。その中心に在るのは、エースが持っていた希冴姫さんの魂だ。

「そう……イイ感じよアテナ。細かい制御はあたしに任せて、アテナは……」

「はい……わかってます。このまま……押し込みます！」

光は若干暴力的な動きで以て希冴姫さんの身体に吸い込まれて行く。シャルナが溢れる光を漏らさず制御しているみただけで、凄まじい力技にさだめたちは若干不安になる。

「お、おい……大丈夫なのだろうな？」

「希冴姫……」

「むう……」

「……雑な仕事だ」

騎士たちも、それぞれに不安そうな顔を隠せない。

「まあ……アテナらしくはあるけど……」

「あゝ、心配すんな。そこら辺はシャルナの奴がやってる」

「……むしろ、それが一番不安」

ルインの台詞に、全員で頷く。シャルナの信頼感のなさは相変わらず。

「……仮にも、アレで最上級の天使だ。パワーこそスピリチュアに及ばないが、緻密さであれば奴の方が上だ」

確かに、アテナの効果とシャルナの効果を見る限りそんな感じではある。

「つか、あれって相当力尽くだよね？ アテナってもしかして、昔から結構大雑把で力押し上等の精霊だったわけ？」

「力尽くは力尽くでも、その力尽くで封印指定を受けるレベルのゴリ押し具合でしたか……」

カイエンの言葉に、思わず絶句。アテナって……。

「つくづく、見た目や雰囲気と本質が釣り合っていないよねえ……」

「行きます！ ええええいっ！」

「ちよっ！？ ま、待ってアテナ早い早い！ もっとゆっくり……」

「今調子が良いんです！ だから、勢いで押し込みます！」

「だああっ！ だからその、何とかなるなる行け行けゴーゴー青信

号な姿勢やめてえー！ カイエン、ルイン、制御の手を貸して！

あたしだけじゃおっつかない！」

「は、はいただきます！」

「……世話が焼ける」

ついに泣きが入ったシャルナに、カイエンとルインが手を貸す。

「……おい、もう一度聞くぞ。本当に、大丈夫なのだろうな？ あの小娘は」

「……昔より、更に力押しになってんなア……つか、ニンゲンだからかもしれないが、力にムラがあり過ぎんだろオが。こりゃ、シャルナの奴は相当キツイ筈だぜ」

「最近のアテナ、後先考えないからなあ……」

ジト目で見つめる先、光が徐々に薄くなり、希冴姫さんの顔に生氣が戻ってくる。

「これでっ！ 終わりです！」
「終わってない終わってない！ まだ色々残ってるっ！」
「ぐ、ぐちゃぐちゃですよ！ も、もっと丁寧……」
「…… 適當過ぎる」
「本当にあの小娘、希冴姫を助ける気があるのか!？」
「あゝあ……」
「きゅ〜う……」
一人嬉々として儀式を行うアテナに、さだめはミリと一緒に溜息を吐くのだった。

「ったくもう！ いくら久しぶりだからって無理矢理過ぎ！ あたしやカイエン、ルインのサポートなかつたらとんでもないことになつてたわよっ！」

現在、アテナは珍しくガチなシャルナさんに説教を喰らっていた。口調も普段のおちゃらけたものじゃなく、真面目な仕事口調である辺りに、シャルナさんの本気っぷりが伺える。

「で、でも結果的に上手くいったわけですし……」

「あたしらが居なかつたら折角再構成した肉体が粉々になるか、生きてるだけの植物状態にでもなつてたかもしれんっつーのよ!」

「ひう……」

アテナが怒られている横で、さだめはルインに事情を尋ねる。

「で、どれくらい無茶振りだったわけ？」

「…… 例えるなら、仕切りも区別も見境もなく、煮物やデザート、ご飯を適当に、許容量すら無視してお弁当にぶち込んだミキサー状態」

「最悪だね……」

「わ、私はそういう細かい制御は昔からシャルナ任せでしたし……」
「言い訳しない!」

「はう！」

要するに、カードの効果的にはアテナが一気に不完全状態のモンスターを蘇生して、シャルナさんが一つ一つ調整し直して完全蘇生……みたいな感じなんだろう。きつと。

「事実、あの緻密なコントロールには驚いた。普段の二トとは別人レベル」

「ゴーズ様と同様、真面目にやれば優秀な方なので……」

「大体、あなたが現役時代からあたしの仕事が多かったのもそもそもあなたの雑な仕事のフォローで……」

「ひい〜ん……」

「泣かされてるし……」

「いつもとは立場が逆だなありゃ……」

「そ、それで、当の希冴姫さんはどうしたんですか？ ここにはいないみたいですけど……」

「ああ、エースがこれまでの事情を説明しに行ってるみたいだよ？ まだ眼が覚めたばかりで、少しボーンとしてるみたいだったから、さだめたちは遠慮したけど」

「大丈夫かな……」

「まあ、ジャックさんも付いて行ってるみたいだし、なんかあればどうにかなるでしょ。お兄ちゃんばりの高スペックだし」

「……と、こんなところか。以上が、貴様が眠ってから今までの大まかな経緯だ」

「そう、ですの……」

我が説明している間から、希冴姫は顔を俯かせ、心ここに在らずと言った様子だったが、説明を終え、事態を把握してからは、尚更それが顕著だった。

「どうした。随分と覇気がないが、まだ蘇生の後遺症でも残ってい

るのか？」

「……違いますわ」

「ではなんだ」

「わたくしは……」

希冴姫は一瞬言い淀んでから、ふっ、と自嘲的な笑みを見せた。

「わたくしは……愚かですわね」

「そうだな」

即答してやった。

「主を遺し、勝手な自己犠牲で逝き、真に守るべき時に傍にいることも出来なかった貴様は、騎士として最低で愚かだな」

「……」

「エース……」

「いいのです。ジャック。わたくしは……本当に、愚かで……」

「だが……」

「……？」

「それは、我らとて然して変わらん」

苦々しげな様子の我に気付いたのか、希冴姫が漸くこちらを見る。

「エース、貴女……」

「肝心な時に、守るところか主に逃がされる騎士など……笑い話にもならん」

こいつが……希冴姫が抱いている想いは、我ら全員が共有すべきものだ。我らは揃って、主を守ることが出来なかった。

「奴も……お前も……どちらもバカだ！ 勝手な自己判断で、勝手な自己犠牲で守った気になって！ ふざけるな！ お前らはわかっていない！ お前らが誰かを守りたいと思えば思うほど、お前たち自身を守りたいと思う者がいることに、何故気付かない！？」

「エース……」

「命を懸けてでも、守りたいと思うのは勝手だ……だが、その命を懸けてもいいと思ったほどの存在が、その判断を良しとする筈がないと……どうして、気づかん」

「……申し開きも、ありませんわね」
「そう思うなら……さっさと立ち直れ。いつまでそんな、死んだ目をしていくつもりだ。奴の前に行くのに、そんな目では足手纏い以外の何物でもない」
「ええ……ですが、少し……もう少しだけ、待ってくださいまし」
「……勝手にしろ」
心の整理という奴が、そうそう簡単に着くものだとは思っていない。我はそれだけ言い残し、希冴姫の部屋を出た。

「あ、エース」

「……さだめか。どうした」

「どうしたって、希冴姫さんのことに決まってるじゃん。どうなの？」

「どうもこうも、すっかり死人だ。あれでは、生き返ったのか死体のままなのかわからん」

「そっか……」

ふう、とさだめは溜息を吐いた。

「まったく……しょうがないなあ」

「後は任せる」

「って、さだめまだ何も言っていないんだけど」

「元気づけるつもりだろう？ 任せる」

「……何時の間にそんな敏くなったやら」

「お前ら兄妹は似ている。どちらかを理解出来れば纏めて理解出来る程度にはな」

「へえ。じゃあエースは、お兄ちゃんのことを深く理解したと」

「……友だからな」

目を逸らしてボソツと呟くエースを、ジト目で見つめる。

「白々しいのもここまで来ると清々しいね。まあいいや。それじゃ」

「ああ。煮るなり焼くなり好きにしる」

若干慌てたように去っていくエースを見送った後、さだめは希沓姫さんの部屋の扉をノックした。

「はい……おや、さだめ様ですか」

「ジャックさん」

扉を開けてくれたのはジャックさんだった。にしても、相変わらず背が高い。ちっさいさだめからすると、話すだけで首が疲れる。

「って、誰がちんまいか!？」

「は?」

「ああゴメン、こつちの話」

「はあ……希沓姫の見舞いですか? よろしければ、席を外します
が」

「あ、ごめんね気を使わせちゃって」

「いえ、我らではどうにもならないことですので……立場が近し過ぎるというのも、時と場合によっては考えものですね」

「エースが匙を投げてたしね」

「まったく……エースは少々、短気で困ります。エースも同じく、傷ついているでしょうに……まあ、あちらにはテンスを送ります。彼なら上手くとりなしてくれるでしょう」

「ジャックさんも大概、苦勞人だねえ……」

「はは……すっかりこの立ち位置にも慣れてしまいました。希沓姫もエースも、昔からああでしたからね」

「ん〜……」

さだめはジャックさんの顔をじーっと見つめる。

「なんででしょう?」

「もしかして、さ……」

さだめは、昔から気になっていたことを思い切って尋ねてみることにした。

「ジャックさんって、希沓姫さんのこと、好きだったりする?」

「は……?」

思いがけない言葉だったのか、ジャックさんは一瞬言葉を失ったかのようにポカンと立ち尽くした。

「どうなの？ なーんか、昔馴染みとか、そういうだけじゃないよ
うな気もするんだけど」

それだけじゃ、希冴姫さんの我儘にあれだけ振り回されて尚、従
う理由には弱い気がする。

「そう見えますか」

「見える、かな。よくわからないけど」

「……さて」

ジャックさんが見せたのは曖昧な笑み。

「どうでしょうね。私には、わかりかねます」

「どうして？ 自分のことじゃん」

「さだめ様は、自分に素直で、自分に真正面から向き合える方です
から。私は……私は、それこそ産まれたときから希冴姫と共に在り
ましたから」

ジャックさんは、曖昧な笑みのまま、部屋の方を見つめる。

「……そういった感情は、持ち合わせていません。私にとっては、
それこそ手のかかる妹のようなもので……。我儘も、妹だと思えば、
微笑ましいものでしたから」

「そっか……」

道理で、ジャックさんとお兄ちゃんは何処か似てる感じがするん
だ。時折ジャックさんが、希冴姫さんに向ける感情は、兄が妹に向
ける親愛。慈しみの笑顔。

「ですから、さだめ様」

「うん」

「希冴姫を……“妹”を、よろしくお願い致します」

「おっけ。任されたよ。同じ“妹”だからね。何とかしてみるよ」

「ええ。お任せします」

綺麗に一礼したジャックさんは、最後に少し微笑んで、部屋の前
を離れて行った。

「ジャックよ」

「……キングですか。どうしました？」

「いや。お主も、大概不器用じゃなあ」

「先ほどのことですか。不器用、とは？」

「女としては意識しとらずとも、何より大切な存在で在ったことは事実じゃろうに。あっさり他人に譲ってしまいおつてからに」

「私には、癒せぬ傷だと判断したんですよ。キングだって、だからこそこんなところで覗き見の真似ごとをしているのでしょうか？」

「まあ、そうなんじゃが……」

「……私たちは、切り札の騎士団は、家族でした」

「……じゃな」

「キング、貴方が父。私が長兄。エースが長女、テンスが次男。そして、希冴姫が末娘……そんな、家族」

「エースも含めて、じゃが……皆、末娘を可愛がるもんじゃ。エースは、若干アレじゃが」

「嫉妬していたのでしよう。私たちが、希冴姫ばかり構うものだから」

「じゃな。騎士団として……それを差し置いても主には感謝しとるのじゃよ。“家族”としての、ワシらの絆を取り戻してくれた主には、の」

「そうですね……だからこそ、助けねばなりません」

「うむ。“娘”を悲しませるわけにもいかんしの」

「ええ。“妹”ですから」

「希冴姫さん、入るよ」

ジャックさんが出て行ったあとの部屋に残された希沔姫さんは、なるほどエースの言っていた通り半死人みたいな有様だった。

「あ……妹様」

「いい加減名前前で呼んでよ。さだめでいいからさ」

「さだめ、様……」

「様いらな〜い」

「さだめ、さん」

「さんもいらさないけど、まあいいか。それで？　なにをそんなに落ち込んでるの？」

「それは……」

「あ、ちなみに守れなかった〜とか肝心な時に〜とか、そういうのは知ってるしわかってるから、それ以外のことだね。時間の無駄」
「っ……！」

「凶星、か。やっぱりね。そう言うことじゃないとは思ってた。もちろん、落ち込む要因の一つではあるんだろうけど、そこが本題じゃない。それよりも……」

「……わたくしは、どうして精霊なのでしょう」

「ん〜？」

「皆様は……特に、さだめさんは顕著ですけれど……初めてお会いした時とは比べ物にならないくらいに成長なされました」

「まあ、さだめの場合は特殊だけだね」

「いえ、正気に戻ったとか、そのようなことは度外視したとしても……さだめさんは強く、優しく……とても可愛らしくなりましたわ」
「え〜と、うん。ありがとう？」

唐突に褒められ、首を傾げる。それが何の関係があるのだろうか。

「けれど、わたくしは変わりません。見た目はもちろん、中身も……初めてセツ様とお会いした頃から、全然変わっていませんわ」

「そっかな？　結構変わってるんじゃない？　気付いてないだけ？」
「さ」

「いいえ。蘇生して……エースに会って、さだめさんが慰めに来て

くださって、尚強く思うようになりましたわ。わたくしは、昔から何も変わっていない。今も昔も、愚かな小娘のままですわ」

希牙姫さんはそう言って、自分の手元に視線を落とす。

「この手で、セツ様をお守りしたかった……以前のようには、力不足でセツ様の足手纏いにならないように……それなのに、わたくしは結局」

「すっごい自虐的になってる所悪いけどさ」

このままだと際限なく落ち込んで行きそうだったので、口を挟む。「そのことと精霊であることと、何の関係があるの？」

「……さだめさんやセツ様のような人間は、限りある命の中、わたくしたちからは想像もできない程の速さで成長していきます。初めて出会ってから、たったの二年弱。それだけの期間で、人はここまです変わるものかと……そして、エースも」

「エースは、精霊だよ？」

「ですが、彼女はまるで人間のように苦しみ、人間のように悩み、人間のように成長していきました。今ではすっかり、あの頑なだったエースがセツ様に心開いていますわ」

「デレ期もいとこだよね。ツンなところも残した最高に萌える状態だよ」

しかも、その状態をこのまま維持するつもりみただから油断ならない。

「いつまでも読者をやきもきさせて人気を上げようって魂胆だね。敵ながらあっぱれと言わざるを得ないよ」

くつつきそうできつつかないあの絶妙なデレは相手に対しても効果的な筈。事実、お兄ちゃんも若干意識してる感じが……。

「おのれ孔明……！」

「……それはよくわかりませんが」

おっとと、話が逸れた。

「つまり希牙姫さんは、今よりもっと強く、魅力的に成長したい。けど精霊である自分は中々成長することもできず、愚かな小娘のま

まで嫌になる……と？」

「……はい」

「……アホらし」

「なっ!？」

バツ、とさだめの方に向き直る希冴姫さんに、さだめは急にバカしくなつて姿勢を崩した。

「あゝあ。もつと深刻なもんかと思つてたのに……心配して損した。バツかみたい」

「な、なにを……わたくしは真剣に……」

「尚更アホらしいね。そんなことで悩んでたの？」

「そんなことつて……さだめさん、貴女は……!」

「だって、希冴姫さん十分魅力的じゃん」

「……え？」

さだめの言葉に、希冴姫さんは暫し絶句した後、それだけ小さく絞り出した。

「超豪華な金髪美人だし。スタイルだつて悪くないし。強いし。しかも、老けることもなくその美しさを保ってられるんだよ？ これ以上何を望むんだか」

そりゃ、永遠の美貌なんて求めるほどさだめもバカじゃないけど。それでも、希冴姫さんは十分、人に羨まれるくらいの容姿をしているのも事実。

「成長だつてしてるよ。自分じゃ気付かないだけ。今だつて、成長しようとしてる。人間とおんなじようにさ」

「それ、は……どういふ」

「どういふも何も、人間だつて同じだよ。失敗して、悩んで、苦しんで、立ち直る。成長するつて、そういうことでしょ？ 希冴姫さんは今、失敗して、悩んで、苦しんでる。後はそこから立ち直るだけ。もう八割方成長の段階は踏んでるじゃん」

「……」

「エースだつてそうだよ。失敗して、悩んで、苦しんで、立ち直っ

だから成長して、今のエースになったわけだし。そんなの、さだめよりエースのこと良く知ってる希冴姫さんなら承知の上でしょ？」

「それは、そう……ですわね」

「まあアレだよ。さだめだって、成長がどうとか、そんな小難しいこと良くわかんないけどさ。手っ取り早いのは、真似してみれば？」

「真似……ですの？」

「そ。誰かの真似。それで結構解決することもあるよ。そうだね。

とりあえず、さだめの楽観的でポジティブシンキングなところ、真似てみればいいんじゃないかな？」

「……貴女は、いつも自信满满々ですね」

「そりゃあ、それがさだめの持ち味だから」

「貴女は、悩んだりとか、苦しんだりとかするんですの？」

「そりゃするよ。けど、そのスパンが短いだけ。さだめだって失敗は一杯するし、落ち込むし、悩んで苦しむよ？ けど、時間は有限で、いつまでもそれじゃあすぐ取り返し付かないことになっちゃいかねないし、さっさと立ち直るようにしてるの」

突撃して、失敗して、落ち込んで、すぐ立ち直って突撃再開。それがさだめの行動指針。

「言つとくとね。悩んで悩んで悩み抜いて、それでちゃんとした解決策とか、答えが見つかる人って結構少ないんだよ？ だから、悩んだらその悩みを抱えたまま動けばいい。それでもきつと、得るものはあるから」

「それでまた、失敗したら……？」

「また立ち上がって、動けばいいよ。その内、もっと強くて優しくて、可愛い自分になれるから」

「心が、折れてしまいそうになったら……？」

「慰めて貰えばいいんじゃない？」

「慰めて欲しい人が……今、近くにいないなら？」

「取り戻す。ね？ 答えは出たでしょ？」

「……はい」

そう。それでいいんだ。誰だつて、一人で成長なんて出来ないし、一人で強くなつてなれない。だから……。

「一人で、居たくないんだ。だから、お兄ちゃんは必ず取り戻して見せる。希冴姫さんも、手伝つてね」

「……もちろん、当たり前ですわ」

うん。もう大丈夫だろう。希冴姫さんの目にも、生気が戻つた。

勿論、まだ本調子じゃないだろうけど、それでももう、動けるはず。

「ふふ……」

「ん？ どうしたの希冴姫さん」

「いえ……さっきのさだめさん、まるでセツ様のようでしたわ」

「あ……」

思わず苦笑する。

「そりゃ、まあ、兄妹だから、ね。それに……お兄ちゃんに、いつも慰められてるさだめだから、自然とね」

けど、そうかなるほど。お兄ちゃんはこうして日々好感度を高めてるわけだね。納得。

「それにしても、まさかさだめさんが元気づけてくださるとは夢にも思いませんでしたわ」

「あはは、まあ、さだめも柄にもないことしてる自覚はあるよ。…

…けどさ」

「けど？」

「ほら、好きな人のことで落ち込んでる女の子を元気づけるのは、恋敵つて昔から決まつてるしね」

「そ、そうなんですの？」

「そうなの。けど、アテナは絶賛叱られ中だし、ルインは無口(?)だし、ユーキさんはいないしエースは無理だつて言うしさ。消去法で仕方なく」

「仕方なく、ですの」

「そ。仕方なく」

なんとなく、そのやり取りが楽しくて、お互いに笑顔になる。が、

希冴姫さんは急に真顔に戻って声を嚙めた。

「ところで……ですが」

「なに？」

「……やっぱり、エースも？」

「……だと思っよ。ううん。ほぼ確定」

「……わたくしのいない間にあの娘は……これは、わたくしからも一言物申さなければいけないようすわね」

「そーだねー。エース、希冴姫さんのポジション喰いまくってたし」

「許すまじエース、ですわ」

「まー、これから挽回していけばいいんじゃない？」

「その前に釘の一つも刺しておかなければ」

「皆に刺されてるけどね」

「いっそ針山になるくらい刺されてしまえばいいのですわ」

「あははっ」

そんな会話をしつつ、まあ順当に考えれば刺されるのってむしろお兄ちゃんだよな、とか言いだしそうになるのを寸での所で呑み込むさだめなのだった。

第四期第十九話「騎士の憂鬱」（後書き）

こんにちは。

というわけで、今回は希沓姫復活と、騎士たちをメインに据えたお話でした。え？ 一人いない？……マア、キニスルナヨ（あ

とりあえずこれで希沓姫は復活。次回から、色々と動いていきま
すよー。

それでは、悠でした！

第四期第二十話「その身に抱える、罪」(前書き)

さて、希冴姫も復活し、いよいよ最終局面に向けて加速していく
アルカナ第四期第二十話をお届けいたします！ 今回の話はちよっ
と説明とか多くなってしまうので、その辺を留意してお読みくだ
さい。

第四期第二十話「その身に抱える、罪」

アルカナ（切り札の騎士）

第四期第二十話「その身に抱える、罪」

「どうも。お兄ちゃんがないので、臨時の視点人物を務めている
さだめです」

「……お前、いきなり何をわけのわからんことを言っている？」

「いや、そういえばこういうことは断っておいた方がいいのかな、
と」

「だから、誰にだ」

「そりゃ、画面の前の皆様方に。」

「兎も角、無事に希冴姫さんも復活し、漸く旅立ちの準備が整った
さだめたちは、未だガミられている（ガミガミ怒られているの略）
アテナと、ガミってるシャルナを尻目に、城の会議室に集合してい
た」

「だから、誰に向かって説明してるんだお前は」

「だから画面の前の（ry」

「ソイツのメタ話はまあいいとして……具体的にどうすんだ？ よ
く考えたらオレら、セツたちが何処に居るのかもわからねえんだぞ」
「そうですね……先輩たちの居場所がわからないんじゃ、それこそ
最後まで隠れられてしまえば為す術なく……」

「いざとなれば、あの男も動くでしょう？ 折角こちらには、最大の
情報源が存在するのだし」

エリアの言葉に、さだめたちは頷く。真中希望さん。頼り過ぎると危険そうだけど、全く情報がない今、手っ取り早いのは彼に聞くこと。

「そうだな。一度でも見つけて、交戦さえすれば、そこで勝てずとも事を動かすことは出来よう」

フルプレートアーマー
珍しく全身鎧姿のネイキッドさんがそう言っ腕を組む。

「っていつか、なんでネイキッドさん鎧なの？」

「……筋肉が暑苦しいから、何か着るとルイン殿が」

「……暑苦しいって言われて、着るのが全身鎧なんだ」

それってむしろ……。

フルプレートアーマー
「室内で全身鎧とか、暑苦しいから脱いで」

「ルイン殿おおおおおっ!?!」

「だよねえ……」

「な、ならば潔く……拘束解除おっ!」

「……筋肉が暑苦しい」

「ならどうすれば!?!」

「……普通に服を着りゃいいんじゃないかねえか?」

「漢らしい筋肉の鎧も、鋼鉄の鎧も脱ぎ捨てた我などっ! もつての外だ!」

あんたの趣味かい。

「ならば出て行け。暑苦しい上鬱陶しい筋肉ダルマが。会議の邪魔だ」

「酷いつ!?!」

結局、ネイキッドさんはエースに蹴りだされてしまう。

「さ、流石に酷いんじゃない」

「いいんじゃない? 貴女だって、上半身裸の筋肉男や全身鎧フルプレートアーマーの拘束着けたおっさんがいるより精神衛生上いいでしょう? エリアル」

「え? う、うんまあそうなんだけど……」

「容赦ねえな……」

「他には邪魔な奴はいない? なんなら追い出すわよエリアル」

「え？　じゃ、じゃあヒゲ……」

「出て行きなさいヒゲ面」

「何故じゃああああああああつ！？」

今度は唐突にキングさんが流されて行った。

「あと、潜水艦は流石に邪魔なんじゃ……」

「消えなさいバグロス」

「久々の出番なのに！？」

「バカでかい図体が邪魔だそうよ」

「これがっ、脇役の扱いかあああああああつ！？」

バグロスさんも追い出された。と言うか、よく入れたよね。どう見ても入口より大きいんだけど。

「今もどうやって出て行ったんだろう……」

「ふう、危ねえ危ねえ。コンパクトな二輪で助かったぜ」

「貴様も、どう見ても役に立たなそうだし個人的に嫌いだから出て行け」

「なんじゃそりゃあああつ！？」

最後にサイクロイドがエースに蹴りだされて、会議室は少し広くなった。

「さて、汚物とその他諸々を排除したところで再開と行こう」

「いやホント容赦ねえな！？」

「会議を円滑に進めるためだ」

「いわば必要悪ね」

「オイ待てそこのシスコン精霊使い。最後の方明らかに私怨だろ。というか最初からかなり私怨だろ」

「会議のためだ」

「エリアルのためよ」

「エリアちよつと待て」

「ごめんなさい！　お姉ちゃんがごめんなさい！」

「ぐっ……ゆ、許す」

「ありがとうございます！」

「相変わらず、洗脳染みた土下座だね……」

「流石はエリアル……これは、私もうかうかしてはいられませんね……」

「……オイカイエン。なんで対抗心燃やしてんだお前」

結局、邪魔になりそうな（話を脱線させそうな）メンツを追いだして尚、話が脱線するさだめたち。

「……まあ、いつものことだよな」

さだめがボケなくてもこの調子だ。これでお兄ちゃんが居て、さだめがボケ始めればきつと收拾なんて一切付けられないことになっていたに違いない。我ながら。

「……話を戻すぞ。真中希望にコンタクトを取ろうにも、そもそも我らは奴とコンタクトを取る方法がない。直通ナンバーを知っているのはセツだけだ」

「そうなんだよね」

けど、あの人の能力考えたら、そもそもここで会議している内容すらリアルタイムで把握していて駆けつけてきてもおかしくはない。

「それがないってことは……」

「まだ、あの人が手を貸す場面じゃない、ということでしょうね」

「あ、アテナ。解放されたんだ」

「……ええ。ホントに、偶に真面目になるとああなんですから」

「日頃の鬱憤を晴らす勢いでガミってたしね」

「これで、普段のサボリ癖も治ってくればいいんですが……」

「無理だろうね」

「はい」

あっさり頷くアテナ。実際、あのサボリ魔が早々改心なんてしないだろうしね。

「うあゝ眠いゝ、疲れたゝ休みたいゝネットゲしたいゝビールゝ」

「貴様も放りだすぞ駄女神」

「黙ってますサー！」

「……あの様子じゃ、ね」

「もう……」

それはともかくとして、そうなるやさだめたちには相手の出方を待つ以外に手が無い、ということになる。

「それは、なんとなく癪だね」

「ええ。わたくしとしても、むしろこちらから乗り込んで行きたいくらいなのですが……」

「元気になったとたんアグレッシブだな貴様……」

もしかして、さだめを見習うように、とか言った所為かな……？
さだめが少し不安になった、その時。

「……どうやら、まだ懲りてはいないらしい」

『っ！？』

会議室の扉。そこに寄りかかるようにしてお兄ちゃんが立っていた。

「セツ……！」

反射的に身構えるさだめたちに、お兄ちゃんは手を振った。

「早まるな。俺は今、戦うつもりはない」

「戦うつもりがない？」

「俺の目的は確かにお前たちを倒し、エンヴィーを救うことだが……
お前たちも、何も知らないまま倒されては不本意だろう？ 事情の説明くらいは必要だと思っただまでだ」

「……そりゃ、ありがたいがナ。その上から視線は腹立つからやめるや」

「悪いが、その頼みは聞けないな。これが俺のスタンダードだ」

ゴーズの言葉をにべもなく断るお兄ちゃんは、やっぱりこちらに對する歩み寄りの姿勢を見せてはくれない。

「セツ様……」

「切り札の姫騎士か……どうやら、蘇生させたらしいな」

「セツ様……ええ。わたくしは皆さまのお陰で、こうして無事に蘇ることが出来ましたわ。セツ様。貴方もどうか、こちらに戻って来てくださいますし」

「断る。戻るも戻らないも、そもそも俺には、そちら側に居た記憶もない」

「けど、あたしらがこれだけ言ってるんだから、いい加減こっちに居たことくらい認めてもいいんじゃないの？」

「過去がどうあれ、今の、記憶のない俺に信じられるのは、魂に刻み込まれた守護の記憶。エンヴィーと初めて出会った時に感じた、守護の想いだけだ」

「初めて会った奴を信じるって、アヒルの子じゃねえだろお前は！」
「言い得て妙だな。事実、俺は最初に会った瞬間からエンヴィーを守ることを刷り込まれていると言っても間違いない」

「それがわかっていて、何故？」

「俺はそこに疑問を持っていない。不信感も、不快感も、不自由も抱いてはいない。刷り込まれはしたが、それでも俺は、俺の意志でエンヴィーを守る」

「……その、エンヴィーというのは、終焉の名？」

「そつだ」

エンヴィー
「嫉妬……ですか。その名前、七つの大罪と何か関係が？」

アテナの質問に、お兄ちゃんは直接答えず、さだめたちを一様に見渡した。

「……終焉とは、即ち世界のバランスが崩れた結果、世界が自己崩壊してしまうシステムの一つだ。そして、世界のバランスを崩しているのは、俺たちイレギュラーの存在……ここまでは知っているな？」

「……はい」

「では、イレギュラーをイレギュラーたらしめている物は何か。知っているか？」

「それは……」

知らない。敢えて言うなら、原作に存在しなかったさだめたちが存在することで、正史からずれ、バランスを崩す……くらいのことしか聞いていない。

「……そうか。なら、これがその答えだ」

お兄ちゃんはそう言つと、自分の前髪を軽く掻き揚げた。そこには、見覚えのない痣の様なもの。

「痣……?」

「俺の……終焉の花婿としての証。イレギュラー存在としての刻印。
傲慢の痣だ」

「プライド……」

「なるほど……傲慢か。ただ一人を守れば、他はどうなつても良いというエゴイズム。それがお前の罪か」

エースは何か思うところがあるのか、苦々しげに表情を歪める。

「貴様と我は何処か似ている……そう思つてはいたが、なるほど。そういうことか」

「……待つて」

他のみんなが戸惑う中、一人深刻な表情をしていたルインが、お兄ちゃんに問いかけた。

「貴方は、花婿としての証、そう言つた?」

「そうだ」

「なら……私は……」

「……そうだ。お前も俺と同じだ。怠惰の花嫁」

「っ!」

お兄ちゃんにそう指摘され、ルインは太ももを押さえた。そこに痣が浮かんだのかもしれない。

「……怠惰。そう……」

「他にもいるぞ。憤怒」

「オレか!??」

剣士さんの頬に痣。

「暴食」

「きやつ!??」

凜はお腹を押さえて蹲る。

「そして、お前だ。色欲」

そう言っ指差したのは……。

「つてええ！？ わ、私ですか！？」

アテナ。

「ちょ、ちょっと待ってください！ どうして私がよりもよって色欲なんですか！？ さだめさんでしょうそこは！ 常識的に考えて！」

「いやーアテナ結構エロいじゃん」

「え、えっちくありません！ 誰がえっちいんですか！？」

「アテナ」

「違います！」

アテナは必死に否定しようとしてるけど、まあ正直仕方ない気もする。最近のアテナエロいし。さだめより色仕掛けしてる気がするし。

「お似合い」

「違います違います！ これは何かの間違いです！ 大体、痣の場所が……」

そこまで言っアテナはごにごにごと顔を赤くして黙りこむ。

「あ、そっか。もしかしてこk「きゃああああああっ！」……まあ色欲らしい場所ってことだね」

けど、確かにさだめだっ自分で言うのもアレだけど、色欲に選ばれていてもおかしくないはず。どうしてアテナに？

「そもそも、その娘が大罪に選ばれることはあり得ない」

「え？」

お兄ちゃんはさだめとシャルナを指差す。

「その二人は、終焉の器だ。器に罪は宿らない」

「器……」

「なるほどねい……どーして怠情がおねーさんじゃなくルインに宿ったのかと思えば、そういうことね」

「それ、自分で言う？」

「これでわかったと思うが……」

お兄ちゃんはアテナたちを見渡して言う。

「お前たちは俺たちと同じだ。エンヴィーが、一人で終焉なのではない。俺も、お前たちも、全員が終焉だ。だからこそ、言うぞ。例えエンヴィーを倒したところで解決などしない。俺たちが居る限り、俺たちが新たな終焉になるだけだ」

「っ……………」

それは、つまり……………。

「無駄だよ。お前たちがいくら頑張ったところで、世界は救えない。いやむしろ、お前たちが頑張れば頑張るほど、力を付ければ付けるほど、世界は終焉に向けて加速する」

「オレたちは……………エンヴィーとは違う。世界を滅ぼしたりしない！」

「お前たちがどう思おうと勝手だが……………俺を見ればわかる筈だ」

お兄ちゃんが自分を指差して言う。

「人の意志など、記憶など、実に薄弱なものでしかない。お前たちの知る俺が、どんな俺だったかは知らない。だが、その俺は既に消え、傲慢おれがいる。これが、現実だ」

「……………消えてないよ」

「なに？」

「お兄ちゃんは……………消えて、ないよ」

「そうです。セツは、今でも貴方の中にいます」

「例え記憶は無くされても、わたくしたちの知るセツ様の本質は、決してぶれてはいませんわ」

「……………それは、きつと魂の記憶」

「いつかどこかで、誰かを守ると誓ったお前は……………決して消えはしない」

さだめたちの言葉に、お兄ちゃんは黙りこみ、俯いた。

「俺は俺、か……………あいつも、そう言っていたな」

小さな声で、何かを呟いた。

「お兄ちゃん？」

「……………何でもない。お前たちが、最後まで抗うと言うのなら、いい

だろう。次に会うときは、容赦はしない」

「セツ！」

「……精々、一人で出歩いたりはしないことだな」

「待つ……！」

手を伸ばしても、届かない。お兄ちゃんは、もうその場にはいなかった。

「……………」

届かなかったその手を見つめて、さだめは俯く。

「さだめさん……………」

「ねえアテナ……………こんな感じ？」

「え？」

「お兄ちゃんが、自分以外の誰かを優先して……………遠くに行っちゃうのって……………こんな気持ちなの？」

「……………はい」

「そっか……………」

これは……………辛いな。

「アテナは……………こんな気持ちだったんだ」

「そうですね。以前、さだめさんを理由に振られた時は……………こんなものじゃありませんでしたよ」

「そっか……………それは、耐えられそうにないね」

「でも、大丈夫です」

アテナは、柔らかく微笑んできた。

「セツは、絶対戻って来ますから。あ、これ経験談です」

「……………ぷっ」

思わず笑ってしまった。

「そうだね。お兄ちゃん、さだめのこと大好きだもんね。ちゃんと戻ってくるよね。さだめのところ」

「いえ、そこは、私のところに、です」

「ちよ……………なんでアテナなのさ。お兄ちゃんはさだめの所に戻ってくるって」

「それは、所詮昔の話です。今は、私です。私のところに戻ってきます」

「むか。お兄ちゃんは何時だったさだめ優先。アテナは二の次」

「ですからそれは、昔の話です。さだめさんは、過去の女です」

「むきーっ！ 誰が過去の女か！ このっ……清純の皮を被った淫乱小娘が！」

「だ、誰が淫乱小娘ですか！」

「アテナのことだよ！ この色欲^{ラスト}！」

「そ、それは、何かの間違いで……さだめさんが器じゃなければ、さだめさんに行っていた筈のポジションで……」

「そーだねさだめはエロいよ。でも、アテナもエロい！」

「何を根拠に!？」

「今までの行動！ 色欲の痣！ ロリ巨乳な身体そのもの！」

「ち、違います！ 私、えっちじやありません！」

「いゝやエロいねエッチだね！ そんなアテナは、精々お兄ちゃんの肉 器にでもなっただらいいよ。それくらいなら許可してあげる！」

「に、にくっ!? な、なんて単語を口にしてるんですか!？」

「すぐその意味を理解できる13歳エロい！ 淫乱 学生！」

「そ、それはさだめさんがいつも……」

「はい嘘！ さだめはアテナの前で初めてその単語を口にしましたー！ えっちいことに興味津々なアテナが熱心にお勉強しなきゃ知らない筈の単語ですー！」

「が、ぐ……い、一般教養で」

「はい言い訳に無理が出てきーまーしーたー！ アテナエロ！ エロアテナ！ やーいエロー！」

「小学生男子ですか！ い、いえそうじゃなくて……えと、ぜ、前世も含めれば、私の方が年上なので！」

「なにそれ？ 合法ロリアピール？ それとも淫乱天使アピール？ どっちにしるエローい！」

「い、いい加減にしてください！」

「……キング殿」

「なんじゃね？ ネイキッド將軍」

「またまた。とぼけることはありませんまい」

「……うむ。エロだエツチだと連呼する美少女……こう、くるものがあるのう……」

「でしょう？」

「しかもどちらも年端も行かぬ乙女とくればのう……」

「……そのエロ親父二匹。三枚に下ろして欲しければそう言え」

「「ごめんなさい」」

「……こんな状況で、よくもまあふざけられるなコイツら」

「でも、暗いどよよんとした空気よりはいいですよ？ 劍士さん」

「そりゃまあ、な」

絶望的な真実を知らされながらも、さだめたちは努めて明るく振る舞った。希望を忘れないため。不安を紛らわすため。でも、その一番の理由は……。

「お兄ちゃんは、戻ってくるって信じているから」

だから絶対、諦めたりしないんだ。

第四期第二十話「その身に抱える、罪」（後書き）

こんにちは。

シリアスなハズなのに、比較的コメディタッチな二十話でした。痣とかの設定はちょっと中二っぽいんで出すかどうか迷ったんですが、手っ取り早くイレギュラーの特殊性というか、七つの大罪的特徴を出すために出しました。まあ遊戯王は元々中二っぽい設定多いし、まあむしろらしいかなと。

しばらくデュエル無い回が続いていましたが、次回はちゃんと（？）デュエルあります。そろそろ某蟹さんから「おいデュエルしろよ」的なツツコミが入りそうなので。

それでは、悠でした！

第四期第二十一話「お前が泣くから」（前書き）

久々にデュエルを書いたので（遊戯王小説なのに）結構大変でした。その割にそんなに長いデュエルじゃないですが、文章量自体はいつもと大体同じくらい。会話と心理描写重視に見えました。

第四期第二十一話「お前が泣くから」

アルカナ「切り札の騎士」

第四期第二十一話「お前が泣くから」

「おい剣士、良いのか？ 皆の所を離れて……」
「いいんだよ」

結局話が逸れまくって滅茶苦茶な内に終了した会議の後、オレはネイキッドと共に割り当てられた部屋を抜け出して、城の裏庭へと出てきていた。

「憤怒……ね」

頬に付けられた痣に手を触れる。

「やつかいなもんを科せられちまったもんだ」

「まっただくだな。皆、気持ちこそ切れていないが、状況は最悪と言っ
つていいだろう」

「……いや」

オレはセツの話していたことを思い出し、首を振る。

「そうでもない」

「なに？」

「ネイキッド。あいつの言ったこと、覚えているか？」

「あ？ ああそりゃ………ついさっきのことだからな」

「あいつは………セツはいかにも、オレたちに希望がない、というこ
とを強調してやがった。オレたちを諦めさせて、倒しやすくするっ
ただけならまあ、わからなくもないんだが………」

「だが？」

「……それにしちゃ、あいつは諦めてねえのが気になる」
「む……」

セツは言っていた。エンヴィーを“救う”のだと。オレたちと同じ、終焉である筈なのにも関わらず。

「だとすれば、ある筈だ。オレたちにも勝つ道が。あいつの抱えている希望。それこそが、オレたちにとつても希望である筈だ」

「なるほど……確かに、それは道理だな」

「根拠と言えるものは何もねえ。だが、僅かでもそこに希望の存在を感じられるなら……オレたちは戦える」

「……うむ」

オレがそう言うと、ネイキッドは満足そうに頷いた。

「それでこそ我のマスター。よくぞ言った！」

「だっ！？ 痛ッ、痛えつて叩くな！」

機嫌の良さそうなネイキッドがオレの背中をバンバンと叩く。とんでもなく痛い。

「痛っ……ったく、テメエの平手は威力シヤレにならねーんだからもうちつと手加減しろ」

「はっはっはっ、悪い」

ふう、と一息吐き、辺りを見回す。

「……にしても、人……じゃなくて、精霊が少くないか？」

「うむ……。見回りを強化したはいいが、元々人手不足だ。時折こうして穴が出来ることも……む」

そこまで言って、ネイキッドは目を鋭く尖らせた。

「どうした」

「いや……こうした穴というのが出来てしまう。故に、この時間帯は出来るだけ城の中に居た方が良く、もし今……」

「襲われたら、どうするつもりだったんだ？」

「……！？」

背後からかけられた声に、オレとネイキッドはすぐさま身構える。

ネイキッドに至っては、既にその手に剣を構えていた。

「次に会えば容赦はしない。精々一人にならないことだ。二重に忠告はしておいたつもりだが……伝わらなかつたのか？」

その声の主……セツは、ついさっきとまるで変わらぬ様子で、その場に悠然と立っていた。

「……いいや。伝わったぜ。俺と戦いたければ、その条件を満たせ」ってな

「なるほど……」

セツは僅かに頷いて、冷淡な笑みを見せた。

「馬鹿ではないらしい」

「どうやら、オレの考えは当たっていたらしい。」

「だが、同時に愚かでもある。あれは本心からの忠告でもあったのだがな」

「愚かかどうか……」

ガシャン！ とオレはデュエルディスクを構える。

「試してみるか!？」

「いいだろう……」

セツはその手に持つ剣を逆手に持ち替え、自らの腕に添える。

「闇のゲーム……スタートだ」

添えられた剣は変形し、セツの腕にデュエルディスクとして装着される。同時に広がった黒炎が、俺たちの周りを囲みこむ。

「デュエル!!」

剣士LP4000

セツLP4000

「先攻はオレだ。ドロー!!」

オレは手札を確認する。よし。悪くない。

「オレはモンスターを一体守備表示でセット。カードを二枚セットしてターンエンドだ!」

「俺のターン、ドロー……フッ」

セツはカードをドローし、オレのフィールドを確認して意味あり

気な笑みを見せる。

「……………なんだ？」

「いや、お前はやはり、馬鹿ではないなと思ったただけだ」

「どういう意味だ」

「きちんと対策を練って来ている。この短い間に大したものだ」

「っ……………！」

動揺が表に出ないよう、必死で平静を保つ。だが、それも無意味だったかもしれない。セツの目と口調は、明らかにそれを確信したものだ。だから。

「お前……………」

「下手に誤魔化すなよ。程度が知れる」

「……………お前がどう思うかは勝手だけだな。お前の言う“対策”って奴が、正しいものはわからないぜ」

「だろうな。だが、ほぼ確信はしている」

「そうかい。なら、どうするんだ？」

アイツがオレの戦略を読み切っているんだとすれば、Sinアルカナは出せない。だが、Sinアルカナ抜き総力戦なら、勝ちの目はある。

「残念だが……………お前の目論見は外れる」

「どうだかな。お前の読みが、どれだけ正しいかはわからねえぞ」

「ふっ……………直情的な賢者ほど、御しやすいものはない、ということだ」

「……………なんだと？」

「当ててやろう。お前の伏せカード。一枚は対象を指定しない召喚反応型。もう一枚はフリーチェーンの除去カード。或いはどちらも前者だ」

「……………！」

「だんまりか？ まあ、いい。ついでにもう一つ。守備モンスターは戦闘耐性持ちだ」

「っ……………！」

オレは、身体に震えが走るのを感じた。

恐怖。

ここまで明確に、強く感じたのは、後にも先にもこの時だけだった。それほどに、オレは目の前の男に強い恐怖を感じた。

「お前は……馬鹿ではない。だが、愚かだ。確か俺は、そう言った筈だ」

オレは、セツトされた『翻弄するエルフの剣士』を見る。何故……！？

「お前たちは、俺の大罪（Sin）に拘り過ぎている」

セツの目には、傲慢に相応しい、強い嘲りの色が浮かんでいた。

「何時、誰が、Sinを使うと言った？ Sinが切り札であるとして誰が言ったんだ？」

セツはその場から動いていない。それなのに、オレはセツがゆっくりと近づいてきているような錯覚に陥った。

「あんなものは、俺の手札の一つに過ぎない」

プレッシャーというものが、殺気というものが何なのか、オレは初めて味わった。

「お前たちの前で、態々俺は、手札を晒してやったんだ」

「お前は……セツ、なのか……？」

わかりきったことを、オレは尋ねた。尋ねなければ、いけなかった。

「俺は……^{プライド}傲慢のセツだ」

オレは思わず身構えた。

「身構えることに意味はない。お前のターンは終了している。今は……俺のターンだ」

セツはその手から一枚のカードを抜き出し、デュエルディスクにセツトした。

「俺は永続魔法『悪夢の拷問部屋』を発動。効果ダメージが発生した時、相手に追加で300ポイントのダメージを与える」

「バーンカードだと!？」

全く予想外のカードに、オレは驚愕する。

「Sinアルカナは強力だ。だが、その特性上戦闘耐性を持ったモンスターを突破し辛い……そうだろうか？」

「くっ!？」

確かに、そのことはオレも対策の一つとして考えていた。例え圧倒的な制圧力があるうと、壁を突破されなければ勝てる、と。

「更に、俺は魔法カード『デス・メテオ』を発動。相手ライフに1000ポイントのダメージを与える」

「っ!？」

オレは上空から迫る巨大な隕石を見上げる。まさか……。

「天の嘆きを受けるといい。闇のゲームに於ける1000ポイントがどれほどのものか……知るといい」

「ぐ……あああああああああああっ!？」

剣士LP3000

「がっ!？ がはっ……! ぐ……あ、ちい……」

「追加だ。『悪夢の拷問部屋』の効果により、300ポイントのダメージ」

「がああっ!？」

剣士LP2700

「これも喰らえ。魔法カード『火炎地獄』俺のライフに500ポイント、お前のライフに1000ポイントのダメージを与える……ぐっ!」

「あああああああああああああああっ!？」

セツLP3500

剣士LP1700

「追加で300ダメージだ」

「っ……!」

剣士LP1400

最早声を出すことも出来ずに膝を着く。一瞬、意識が飛んだ。皮肉なことだが、追加ダメージがなければ気を失っていただろう。

「耐えたか。一度に1000ポイントクラスの攻撃を間髪入れずに二度、直接受けたんだ。ライフの有無に関わらず、死んでいても不思議ではなかったんだが」

『貴様……セツ！ 本気で剣士を殺そうとしたな！？』

「何度もそう言っていた筈だ。それとも、俺の言葉をただの脅しとでも考えていたのか？ おめでたいな」

『くっ……………！』

「俺はモンスターを一体セット。カードを二枚セットしてターンエンドだ」

「……………」

『剣士！？ しっかりしろ！ 剣士！』

「……………」

尽きかけた戦意。途切れそうな意識。体中に走る激痛。その中で、オレは最後に見た正気のセツを思い出す。

（アイツは……こんな痛みを喰らったのか）

恐らくは……セツは負けた。あの様子を見る限り、闇のゲームであったことは間違いない。だとすれば、アイツは累計4000以上のダメージを受け、倒れた筈だ。

（そりゃ……………記憶も失うな）

アイツは……何を想って負けたのだろうか。勝たなければ。絶対に勝つ。その想いが打ち砕かれ、事前の対策が無に帰して。全身に絶え間ない激痛が走るその中で。

（ああ……………そうか）

唐突に、理解した。

（後を、託したんだ）

オレたちに。オレたちなら、きっと勝てる。笑顔で負けたんだ。迫りくる死に、絶望に負けず、オレたちを信じて負けたんだ。

「っ……………！」

そう気付いた時、オレは顔を上げた。

（セツ……………すまねえな）

オレじゃ、お前に勝てなかった。

「だけど……っ！」

他の奴らが、お前を絶対止めるから。

「オレの……！」

だから、オレも……。

「タアアッン！」

絶望だけは、しないからよ。

「リバースカードオープン。『仕込みマシンガン』」

「っ……！」

「相手フィールドと手札の枚数×200ポイントのダメージを与える。お前の手札とフィールドのカード合計は七枚。よって1400ポイントのダメージを与える」

「オレ、は……チェーン、してリバース、オープン。『サンダー・ブレイク』……！」

諦めねえ。例え結末が変わらないとしても、最後まで足掻く。それは……。

「オレは、手札を一枚捨てて……セットされた『激流葬』を破壊する……」

オレの、意地だ！

「……チェーンの逆処理で、『サンダー・ブレイク』の効果が先に発動するな。手札とフィールドのカードが一枚ずつ減ったため、ダメージは1000。『悪夢の拷問部屋』の効果と合わせても……1300か」

ジャキン、とオレに向けてマシンガンの銃口が向けられる。

「……放て」

「がっ……ぐああああああああああっ！」

剣士LP100

「無駄なことを……今のお前は、お前たちの行動そのものだな」

「……」

「無駄な足掻き……長引かせているだけだ。痛みを、苦しみを……」

悲しみを。眠ればいいものを、避け得ぬ終焉に向かって、ただ苦痛のみを重ねている」

「避け、たいから」

オレ口は、もう何も考えられなくなっている頭から出る言葉ではなく、ただ想いを紡ぐ。

「避け得ぬ終焉……運命を、覆したいから……戦う」

「覆せない。想いだけでは、何も変わらない」

「例え……覆せないとしても」

「想いだけでは、変えられなくても。」

「戦う……っ！」

オレは手札からカードを抜き出し、デュエルディスクにセットした。

「セット、された『翻弄するエルフの剣士』を……攻撃表示に変更

……っ！」

例え、これが無駄な足掻きでも。

「『鉄の騎士 ギア・フリード』を召喚！」

敗北を、アイツが情けで遅らせているだけだとしても。

『剣士……っ！』

「更に、魔法カード『拘束解除』……ネイキッド……っ！」

『剣聖 ネイキッド・ギア・フリード』 ATK2600

「オレ、は……ネイキッドに『融合武器ムラサメブレード』を、装備……効果により、モンスターを破壊する……っ！」

諦めて……溜まるか！

ネイキッドの剣圧はセットされた『マシユマロン』を一刀両断にする。

『剣聖 ネイキッド・ギア・フリード』 ATK3400

「バトル……っ！」

これが、通れば……！

「そろそろ……いいか？」

「っ……っ！」

「トランプ発動。『ファイアーダーツ』俺の手札がゼロ枚の時、サイコロを三回振って、出た目の合計×100ポイントのダメージを与える」

「……………」

そうか。

「ダイスロール……………」

オレには、無理だったか。

「二回目……………」

無情にも、セツの周りに炎の弾丸が装填されて行く。

「三回目……………」 6。666、合計値は1800。皮肉だな。まさか最大ダメージが出るとは……………」

フル装填された炎の弾丸が、オレに照準を合わせる。

「セ、ツ……………」

「命乞いを聞く気はない。そろそろ……………」

「死ね」

全てが、スローモーションに感じる。脳裏に浮かぶ、これまでの日々。そうか。これが、走馬灯か。

「オレ、は……………」 ここまでだ」

過ぎ去って行く走馬灯。その中に、見たことのない筈の、泣き顔。

「っ……………」

オレは、知らない。アイツが泣いているところを、見たことなんてない。なのに。

「凜……………」

泣いていた。走馬灯の中のアイツは、笑っている筈なのに。

「死にたく、ない……………」

お前が……………」

「お前が……………」

例え、勝てなくても。勝利の可能性は尽きたとしても。

「泣かせない……………」

生への望みだけは、潰えさせない……………」

「あ、あああああああああああ……っ！」

「……穿て。『ファイアーダーツ』」
そして、オレの意識は闇に沈んだ。

「……ネイキッド」

「……ぐっ」

俺は、目の前で炎の楔に身を焼かれ、それでも尚立つ精霊に目を向けた。

「何故、邪魔をした」

「我は……騎士だぞ」

精霊　ネイキッドは苦痛に歪む頬に、それでも誇り高く俺の前に立ち塞がる。

「主を守るのは、当たり前であろう？」

ズキッ……！

頭の中で、なにかが痛んだ。

「デュエルに於いて発生するダメージを肩代わりするなど、精霊と知ってのルールに反する。それだけでも存在の根幹に関わるダメージを負う筈だ。その上に、肩代わりしたダメージは1800……お前、死ぬぞ？」

「……」

ポロボロになったその姿。だが、ネイキッドは笑顔を浮かべる。

「死なぬよ。我の筋肉は、そう薄くない」

そう言う問題ではない。そう言いかけて、やめる。無意味だ。

「それも無駄な足掻きだぞ。ルールだ。俺は、闇のゲームに負けたそいつを殺す。デュエルに負けたそいつの命は奪う」

「させん。我が剣と筋肉に懸けて」

「お前も死ぬ。憤怒も、その傷ではどの道死ぬ」

「助けて見せよう。我が誇りと信念に懸けて」

ズキンッ……！

「っ……………！」

自らのマスターを、命を賭して守るその姿に、俺は何故か……………酷く、頭が痛む。

「……………勝手にしろ」

俺はネイキッドに背を向けた。

「見逃して、くれるのか？」

「……………死まで、そう遠くない。精々、最後まで苦しみ抜くことだ」

「誰も……………殺せぬさ」

ピクッ……………。

「セツよ……………お前には、誰も殺せぬ」

「殺す。殺せる」

「殺せぬ。お前は絶対、我らの誰も殺せはせん……………」

「……………死に損ないが。好きに言ってる」

心と頭に不愉快な痛みを残しつつ、俺はその場を後にした。

「……………死に損ないが。好きに言ってる」

そう言って、セツは我の前から姿を消した。

「……………ぐっ、ふっ」

我は倒れこみそうになるのを、必死で耐えた。ここで倒れれば、剣士は助からん。

「そう……………殺せぬ。殺させは……………せん」

剣士を抱える。満身創痍。死にかけの剣士は、酷く、重たい。

「ぐ……………っ」

筋肉に、力が入らない。剣士の重みを、身体が支えきれない。

「だが……………っ！」

無理を通す。死なせないため。殺させないために。

「お、おおお……………」

一歩一歩。進んで行く。亀のように鈍い歩み。だが、止まるわけ

にはいかない。

「っ……動け、我が身体……我が、筋肉よ……！ 我が主を、守るのだ……！」

我の目に、光が映る。夜闇の中に、一際輝く銀の髪。我が求めてやまぬ、愛しき女神。遙か遠く、城の窓辺に映るその銀に、我は最後の力を振り絞る。

「る……！」

声にならない声を、無理矢理絞り出す。今だけでいい。今だけでいいから……声を！

「ルイン殿おおおおおおおっ……！」

最後の叫びに、ルイン殿が反応したことを確認した瞬間、我の意識も、そのまま闇に落ちて行くのだった。

第四期第二十一話「お前が泣くから」（後書き）

こんにちは。

というわけで、セツのフルバーンにて、剣士敗北。ネイキッド含めどうなったかは次回。セツのデッキについての話も次回。

ちなみに、今回はかなり長くなりそうだと自己判断されておりま
す。普段から短めに見るタイプの悠でさえ、長くなりそうだと感じ
ております。もしかしたら次回のデュエルは前後編になるかも。そ
れくらい。

それでは、悠でした！

第四期第二十二話「俺の勝ちだ」（前書き）

こんにちは。めっちゃスランプ状態な悠です。おかしい。先の展開は大体決まってるはずなのに、何故か書けない。決まってなくて書けないことは良くありますが、何を書くか決まっているのに満足の行く文章が書けないとキツイですね。とりあえず、結局前後編になりました。若干上手く書けた自信がありませんが、どうぞ。

第四期第二十二話「俺の勝ちだ」

アルカナく切り札の騎士」

第四期第二十二話「俺の勝ちだ」

城の医務室。ルインによって運び込まれた剣士さんとネイキッドの治療が、二日経った今も尚行われている。

さだめたちはしっかり見てはいないけど、ルインの様子を見る限り相当ヤバそうだ。

「剣士さん……」

凜などは先ほどから顔を真っ青にして震えている。報告を聞いた時は気を失ったけど、今のところ涙は見せていない。尤も、それも時間の問題だろうけど。……どちらにしても。

「それにしても……フルバーン、かぁ」

剣士さんたちの傷を見て、ルインが判断したのはバーンカードによる直接攻撃、だった。

「フルバーンを相手取るのは厳しいな……。さだめ、セツの奴は、昔からフルバーンを使用していたのか？」

エースの質問に、軽く頷いて答える。

「まあね。こっちの世界に来るまでは、フルバーンを結構多用してたよ」

「なるほど……セツ様の記憶が失われている現在、元の戦法をメインに使ってきたということですね」

「それだけじゃない。多分お兄ちゃんのデッキは、Sinもバーン

も入った混合デッキ。正確にはフルバーンじゃなくて変則ビートバーンだと思う」

これはさだめの推測。けど、強ち間違いじゃないと思う。

「何故そう思う？」

「お兄ちゃんのSinには、必須カードが少ないの。ロイヤルジョーカーのための手札補充くらい。そして手札補充は、フルバーンのコンセプトにも合ってるから……」

「……アルカナをメインにする時は、バーンカードをコストに使うか。なるほどな」

「なら、彼を相手にする場合、Sinとバーン両方に警戒しなくてはいけないのね」

エリアの言葉に、さだめは力なく首を振る。

「どうだか。お兄ちゃん、そんな単純な人じゃないよ」

それくらいの予測は誰でも立てられる。誰でも立てられる予測を、お兄ちゃんが予測してないとは思えない。

「……つまり、全くわからんということだな」

「さだめはお兄ちゃんほど頭良くないしね」

メタデッキを構築する腕ならさだめの方が上だと思う。けど、そもそもその戦術眼というか、相手を見極め、相手に応じた柔軟なプレイングという点で、さだめはお兄ちゃんに大きく劣っている自覚がある。

「だから、正直な話、下手にメタを張るより自分にとっての最高のデッキで、状況に応じて臨機応変に戦うしかないよ」

「……つまり、ぶつつけ本番なるようになれ、か……クレイジーだな」

ガチャ。

その時、医務室のドアが開いてアテナが顔を出す。

「治療、終わりました」

「アテナ！ 剣士さん、剣士さんはどうだったの！？」

案の定、といったところか。凜が真っ先に反応してアテナに詰め

寄った。

「お、落ち着いてください凜さん。い、一応峠は越えました」

峠は越えた。その言葉に安心したのか、凜はほくっと大きく溜息を吐いてその場にペタンと座り込んだ。堪え切れなかった涙がその頬を伝う。

「よかった……剣士さん」

「アテナ、一応つて？」

さだめがアテナに引っ掛かったところを尋ねると、凜もピクツと反応して顔を上げる。

「……意識不明です。とりあえず、峠は越しましたが……意識が戻るまでは、予断を許しません」

「そんな……」

「ネイキッドはどうだ？ 奴も相当な重症だろう」

「そちらも……いえ、ネイキッドさんに関しては、まだ何とも言えません。デュエルのダメージは兎も角……デュエル中にデュエリストのダメージを肩代わりした、所謂“ルール違反”のダメージの方が大きくて……こちらは、単純な傷とは違います。希冴姫さんならわかりますよね？」

「……ええ」

厳しい顔つきの希冴姫さんが頷く。なんでも、デュエル中に実体化するのは精霊としてはタブーらしく、そのルールを犯すと魂レベルでダメージを受けるらしい。

「ですが、不幸中の幸いと言いますか……ダメージが現実のものとなる闇のゲーム中だったため、実体化のルール違反についてもダメージが軽減されています」

なんでも、元々ダメージを与える時に実体化する闇のゲーム内だったからこそ、実体化のリスクが軽かったらしい。これは、本当に不幸中の幸いだ。

「ネイキッドさんはまだ面会謝絶です。剣士さんも……本当はそうなんです……」

そこまで言って、アテナは凜の顔を真剣に見つめる。

「凜さん」

「う、うん」

「何かあれば、すぐに私たちに連絡してください。すぐ近くに居るようにします」

「わ、わかった。約束する」

「では、どうぞ」

アテナが道を開けると、凜はすぐさまドアを開けて医務室の中に入ってしまった。

「剣士さん……」

私は剣士さんの眠るベッドに近づく。そこには、全身に包帯を巻いて眠る剣士さんの姿。どれだけのダメージだったのか、想像することも出来ない。アテナたちが言うには、ダメージが大きすぎて、傷が癒えても目を覚ますには時間がかかるみたい。

「その男が大切か？」

ふいに、背後からその声をかけられた。

「……ええ。例えば友達の想い人だとしても、ちょっと許せないくらいには」

声をかけられたことに、僅かに動揺する。けど、それよりも「あやっぱり」という感じが強いのと、なによりも強い憤りが、暴れ出しそうな心臓を抑えつけた。

「そうか……なら、言葉は要らないな」

ジャキンツ、と背後でデュエルディスクを展開させたらしき音。

先輩が、剣士さんにトドメを刺しにきたのか、それとも最初から私を狙っていたのかは知らない。

「でも……」

カシャン、と私のデュエルディスクも展開させる。

「絶対、負けるもんか」

剣士さんの、ためにも。

「デュエル」

凜LP4000

セツLP4000

「私の先攻。ドロー！」

先輩の表情は、闇に隠されて見えない。私は手札を確認し、私なりに立てた戦略を実行に移す。

「私は『リチュア・アビス』を守備表示で召喚。効果によりデッキから守備力1000以下のリチュア……『イビリチュア・ガストクラーケ』を手札に加えます」

『リチュア・アビス』DEF500

「リチュアか……」

先輩は言葉少なに私のデッキを分析する。

「私は手札から儀式魔法『リチュアの儀式水鏡』の効果を発動！手札の『シャドウ・リチュア』を、その効果により6レベル分のリリースとし、『イビリチュア・ガストクラーケ』を儀式召喚！」

『イビリチュア・ガストクラーケ』ATK2400

「そして儀式召喚された『イビリチュア・ガストクラーケ』の効果発動！相手の手札をランダムに二枚まで選択して確認し、その中から一枚をデッキに戻します！」

「む……」

ピーピングとハンデス効果。割と嫌がられる戦法だけど、さだめなんかはむしろ推奨してくれた。相手のデッキと戦術を見破るのに持ってこいだって。

案の定、先輩は苦々しげに口元を歪めると私が指定した二枚を見せてくる。『シニアルカナ ナイトジョーカー』と『デス・メテオ』……やっぱり、混合デッキ。

「私は『シニアルカナ ナイトジョーカー』を選択します」

「……良いだろう」

よし。とりあえずこれで、先輩のSinは封じた。あとはバーン
戦術だけど……。

「私はカードを一枚セット。ターンエンドです」

「俺のターン、ドロウ」

先輩がドロウした瞬間、私はすかさず動く。

「リバーズカードオープン！『水霊術』『葵』！ 私は『リチュ
ア・アビス』をリリースして発動します！ エリア、お願い！」

『任せなさい』

「っ……」

先輩がまた苦しい表情をする。やっぱり、手札を奪っていけば勝
機はある！

「『水霊術』『葵』の効果です。手札を確認して、その内一枚を
墓地に送ります」

先輩がオープンしたのは『デス・メテオ』『手札抹殺』『聖なる
バリア』『ミラーフォース』『テラ・フォーミング』『ファイヤー・
トルーパー』の五枚。

「……」

厳しい……。手札を減らすことを考えれば、それほど痛くない『
手札抹殺』は無視出来る。『テラ・フォーミング』もSinがない
ことを考えれば除外していい。問題はバーンカードとミラーフォ
ース。現状ミラーフォースを破壊できるカードは手札にないし、か
と言って1000ポイントダメージを二回受けるのはフルバーン相
手には苦しい。

「……私は『デス・メテオ』を選択します」
「わかった」

迷ったけど、結局選んだのは『デス・メテオ』。正直『ファイヤ
ー・トルーパー』と比較してどちらがどうとも言えなかったけど、
どうせなら再利用し難い魔法カードを墓地に送っておく。なにより
『デス・メテオ』は序盤以外の発動は難しい。

「……なら俺は『ファイヤー・トルーパー』を召喚し、効果を発動。

墓地に送ることによって1000ポイントのダメージを受けて貰う」

「っ……………！」

来るっ！ 私は身を縮めてダメージに備える。

「つつっ！？ あっ、ああああああああああっ！？」

凜LP3000

炎の兵隊の特技は、私の身体を容赦なく焼き焦がした。凄まじいダメージ。こんなダメージを2000ポイントも受けていたら……そう考えてぞつとする。剣士さんは、こんなダメージを……。

「っ……………うくっ！」

『凜、大丈夫？』

「な、なん……………とか」

心配そうなエリアに引き攣った笑みを見せる。けど、正直甘く見えた。

「これが……………闇のゲームのバーンダメージ……………」

「洗礼だ。そこで寝ている男は、少なくとも合計で3900のダメージを受けた」

「っ……………！？」

これの……………ほぼ四倍。想像を絶する。

「俺はカードを二枚セット。ターンを終了する」

「わ、たしのターン、ドロー！」

引いたカードは除去カードじゃない。伏せカード二枚の内、一枚は確実にミラーフォース。もう一枚は……………どちらかはわからないけど、ブラフ。どっちにしても除去手段がないんじゃないか見に徹するしかない。

「私は手札から魔法カード『サルベージ』を発動……………墓地から『リチュア・アビス』と『シャドウ・リチュア』を手札に戻し、『リチュア・アビス』を召喚。効果によりデッキから『シャドウ・リチュア』を手札に加えます」

とりあえず、手札は補充出来た。でも、他に出来ることはない。

「……………ターンエンドです」

「……そうか。なら俺のターンだ。ドロ。俺はカードを一枚セツト。ターンエンドだ」

あっさりとしたエンド宣言。引いたカードを元あった手札とシャッフルし、一枚セツトして、先輩はターンを終えた。

「私のターン、ドロ！」

よし、『サイクロン』だ。これで、カードを一枚破壊出来る。でも……。私はちらりと先輩の魔法・罨ゾーンを見る。

候補は三枚。けど、今伏せたカードは可能性が低い。一応シャッフルしてから伏せていたから、ドロしたカードを伏せたのかはわからない。でも、違つとすればさつきは無防備で私のターンを迎えたことになる。それは、流石に考えにくい。とすれば……。

「どうした。何を悩んでいる」

「っ……別に、何でもないです」

仕掛けようとした絶妙のタイミングで声をかけられ、私は動揺した。そして、ふと気付いた。先輩が、真つ正直なプレイングをするとは思えない。敢えて無防備なまま、ブラフしか伏せずにエンドを迎え、次のターンに改めてミラーフォースを伏せる……それくらいはやりかねない。綱渡りだけど、やってやれないことじゃない。

「……くっ」

おかしい。どんなふうに考えても、思考が誘導されているようにしか思えない。手札を見たのは私の筈なのに、たった一声かけられただけで、考えが定まらない。

心が見透かされているような不快感が、汗となって私の頬を伝う。

「わ……私は手札から速攻魔法『サイクロン』を発動。真ん中の……最初に伏せたカードを破壊します！」

惑わされちゃダメ。先輩の言葉は、最初の二枚の内どちらかを守るための誘導！最初に考えた通りに破壊する！

「……ふっ」

「っ……？」

先輩が、ニヤリと嗤った。破壊されたカードは……『手札抹殺』。

「一番つまらんカードを引き当てたな。これが心理誘導だ。ピーピングをするなら少しくらいは嫌らしくなれ」

はめられた。つまりは、単純なこと。ワザと動揺させて、私の視野を狭めてきた。そのまま『サイクロン』を撃たれば、どれが破壊させるかわからなかったから。

「……わ、私はターンエンドです」

「俺のターン、ドロー」

マズイ……折角の『サイクロン』を活用出来なかっただけじゃなく、先輩に猶予を与えてしまった。

「ふむ。俺はモンスターを一体守備表示でセット。ターンエンドだ」「私のターン、ドロー……」

そうこうしている内に壁モンスターも召喚されてしまう。このままじゃ、先輩にバーンカードが揃うのも時間の問題。こんなことから……。

「お前は、一つミスをしたな」

「っ!？」

またしても、心を読んだかのようなタイミングで声をかけられる。しかも、ミスの指摘、という形で。

「最初に攻撃しなかったのが何よりのミスだ。あのときなら、例えばガストクラーケを倒されていても挽回は楽に出来た。いや、ガストクラーケの効果がもう一度使えると考えれば、得をするくらいだ」「ギリッ、と歯を噛みしめる。本当に、その通りだった。

「お前の敗因は、リチュアを使いなれていなかったことだな」

確かに、私はリチュアを使いなれてはいない。さだめたちと、何度かテストデュエルをしたただけだ。

「……まだ、負けてはいません」

そう。まだ負けてない。確かにミスはミスだ。けど、致命的じゃない。

「私はガストクラーケで守備モンスターを攻撃!」

失敗は取り返せばいいだけ!

「……どこまでも素直だな。お前は」

「!?!」

「俺のリバースモンスターは『デス・コア』……お前の手札一枚につき、400ポイントのダメージを与える。お前の手札は五枚。さあ……2000ポイントのダメージを纏めて喰らって生きていられるか……見物だな」

「あ……」

衝撃が、迫る。1000ポイントのダメージでも、意識が飛びそうになるほどののに、その倍のダメージ……?

「あ、あ……あああああああああ……!?!」

『凜ッ!』

『凜さん!』

凜LP1000

意識が保てない。身体を突き抜けた衝撃は、1000ポイントの比じゃなくて……エリアたちの悲鳴のような声を、何処か遠くに感じて……私の意識は闇に落ちた。

『凜! 凜目を覚まして! 凜ッ!』

『凜さん!』

「……………」

倒れ伏した少女に、二人の精霊が必死に声をかけている……が、無駄だろう。それなりに鍛えられた男の剣士ですら、1000ポイントのダメージで瀕死になるレベルのバードダメージを、一度に2000受けたんだ。華奢な少女の身体では受け止めきれない。

「……………決まりだな」

まだ、凜のライフは残っている。だが、これで終わりだ。

「デュエリスト、デュエル続行不可能……いや」

どうだ。見るネイキッド。

「対戦者死亡につき……」

俺は、殺せたぞ。

「俺の勝ちだ」

第四期第二十二話「俺の勝ちだ」（後書き）

こんにちは。

さて……あまり色々は言わないでおきましょうか。次回を待て、ということ。それはともかくリチュア。強いです。ガストクラーケとか何アレ酷い。あれって現環境だとあそこから更に、フィッシュボーグガンナー辺りとシンクロしてトリシユだのグングだの出てくるんですから笑えません本当に。マインドクラッシュとか葵とか織り交ぜたハンデスリチュアとか、普通に作れそうですよ。特に、リチュアは召喚後はほぼバニラなので葵の弾には事欠きません。ガストクラーケで手札を荒らし、ソウルオーガでフィールドを制圧し、マインドオーガスで墓地を封殺し、トリシューラで絶望しますよ。いや、割とマジで。ゼアルのメインキャラが水属性使いですし、水属性大好き悠からしてみれば水属性の大幅強化に期待が高まります。それでは、悠でした！

第四期第二十三話「もう、やめる」（前書き）

こんにちは。

滅茶苦茶お待たせしてしまい、申し訳ありません（汗）。スラン
プ継続中でございます……。この話も、能動的に全消しすること三
回以上……。細かな修正まで含めたら何十回と手直しし、やりすぎて
ぐちゃぐちゃになったから結局全消しし、と滅茶苦茶に難産でした。
それと、若干前回のデュエルを修正しました。時間も経って忘れて
いると思われるほど小さな、しかし無視できない修正箇所ですので、
記憶の補完的な意味でも前話を見直しして頂くことを推奨します。
ホント、すみません。

第四期第二十三話「もう、やめろ」

アルカナく切り札の騎士く

第四期第二十三話「もう、やめろ」

「デュエル続行不可能……いや、対戦者死亡につき、俺の勝ちだ」
俺の言葉に、少女は動かない。微動だにしないその身体には、既に生命の息吹を感じなかった。

「呼吸はない。心臓も……ああ、止まったな。終わりだ」
自慢じゃないが、俺は目も耳もいい。心臓の鼓動や息遣い程度は多少離れていても聞き取れる。

だから、それはあり得ない筈だった。

「……………う」

「っ」

『凜っ！』

背を向けて、今にも去ろうとしていた俺は、背後から聞こえたその声に、信じられないと思いつつも振り向いた。

「っ……………！？」

あろうことか、その声の主は立ち上がるうとしていた。あり得ない。例え奇跡的に蘇生したとしても、一度心臓と呼吸が止まった娘が、すぐに意識を取り戻して立ち上がるなど。

「馬鹿な……………」

「っ……………っふ」

「なんだ……………？」

様子がおかしい。いや、おかしいと言えば立ち上がることも自体が不自然だが、それよりも。

「くふっ……くふふふ」

嗤っている。どうにも堪え切れない。そんな様子で。

「くふふふっ！ くふっ」

不気味。その一言に尽きる。死にかけて狂ったか。そう思わなくもないが、それよりも納得できそうな理由に今、気がついた。

「まさか……死して覚醒したのか？ 終焉としての己に……」

凜の腹部が、ドクン、ドクンと不気味に脈動していた。まるで、動かぬ心臓の代わりと言わんばかりに。

思い返せば、わからない話ではない。死に瀕して蘇生した人間が、特殊能力を得ること自体も在り得る話だし、そもそも俺たちは終焉元より特殊だ。俺だって、一度死にかけたからこそこうして記憶を失い、ここにいるのだ。……そして、エンヴィーも。

「ア、ああアああアああアああアっ！！」

「凜っ！？ 凜っ！！」

「凜さん！ どうしたんですか！？」

彼女の精霊が声をかけているが、恐らくは無駄だろう。今の凜は意識もなく、ただ終焉……^{グレートニ}暴食としての本能に支配されている、一種の暴走状態だ。

「……デュエルは、続行だな」

「くふっ」

俺がそう言った瞬間、凜は笑いながら手札から魔法を行使した。

「手札から魔法カード『強欲なウツボ』。手札の水属性モンスター二体をデッキに戻し、三枚ドロースする！」

手札交換、か。手札が悪いのかそれとも気に入らない手札だったのか……いずれにせよ、利用させてもらう。

「リバースカードオープン。トラップカード『逆転の明札』！ 相手がドローフフェイス以外でカードを手札に加えた場合、相手の手札と同じ枚数になるようにデッキからカードをドロース。お前の手

札は五枚。俺の手札は一枚だから、デッキからカードを四枚ドロ―」
流石に、ハンデスによる弾の不足は無視できない。が、逆を言えば弾さえ確保してしまえば残り1000しかないライフを削ることなど容易い。

「カードを二枚セットしてターンエンド……くふっ」
異様な雰囲気のまま、凜はターンを終了した。さて……この手札なら、このターンで終わりか。

「俺のターン、ドロ―」

「リバースカードオープン。『リチュア・アビス』をリリースして、トラップカード『水霊術』『葵』を発動。手札を見せて」

「……いいだろう」

また手札を晒すことになるとはな。コイツのデッキ、相当底意地の悪い覗き魔の変態の手が加わっているな。

「へっくしゅっ！」 相当底意地の悪い覗き魔の変態。

「うおっ!? どうしたんだ？」

「いや、今お兄ちゃんがさだめのことを噂していたような……」

「……噂されていることはおろか、個人まで特定できるのかオマエは」

「お兄ちゃん限定で」

……今、ヘンなヴィジョンが見えたような。兎も角、俺は凜に手札を晒す。どうせ焼け石に水。一枚程度捨てられた所でどうにかなる手札じゃない。俺は手札の『火炎地獄』二枚と『ファイヤー・トルーパー』『御隠居の猛毒薬』『マシユマロン』『テラ・フォーミング』の六枚。六枚中四枚が1000ポイントダメージ。更に内三

枚は即効カード。一枚くらいであれば何の問題もない。

「……『ファイヤー・トルーパー』を選択」

「良いだろう」

どちらにせよ、意味などない。これで……。

俺は「更にトラップ発動。『マインドクラッシュ』」なに？」

俺の手札から二枚の『^{グラトニー}火炎地獄』が叩き落とされる。ちい……。

「……そういうことか。暴食^{グラトニー}」

簡単な話だった。暴食^{グラトニー}は、暴食らしく俺の手札を貪った。ただ、

それだけのこと。

「そうだとしても、気に食わないことには変わらないな」

結局、即効カードは全て叩き落とされ、出来ることと言えば猛毒薬で800ダメージを与えることくらいか。

「……俺は速攻魔法『御隠居の猛毒薬』を発動。相手ライフに800ポイントのダメージを与える」

凜LP200

「っ……くふっ」

凜は一瞬顔を顰めるも、すぐに元の不気味な笑みに戻る。

「暴食^{グラトニー}に毒は効かんか」

勿論、ライフは減っている。が、俺の本来の目的である殺害には程遠い。終焉に覚醒した際に、与えてあったダメージからは回復してしまったようだし……面倒だ。

「俺はモンスターを守備表示でセット。カードをセットし、ターンエンドだ」

伏せたのは『マシユマロン』と『テラ・フォーミング』。そんなことは向こうも承知しているだろうが、伏せない手はない。

「はアッ！ はあ、があああッ！」

ドクン、ドクン、ドクンと暴食^{グラトニー}の痣が脈打つ。完全に暴走しているようだ。本人の意識や人格が死にかけている以上、当然のことではあるが。

「はア……っ！ ウ……ドロー！」

ギリギリとした飢えた獣のような目をしている。

「醜いな……」

所詮は本能……獣同然の大罪でしかない暴食などこんなものか。

「ギッ!? ぐウ……」
「リチュア・ビースト」を、召喚……効果発動」

『リチュア・ビースト』 ATK1500

凜……いや、もう暴食か。暴食のフィールドに、立派な水かきをもった異形の獣が現れる。全く、今の暴食に相応しい怪物だ。

「ビーストの……召喚に成功した時、墓地からレベル4以下のリチュアを蘇生する。『リチュア・アビス』を蘇生……効果発動」

『リチュア・アビス』 DEF500

「またソイツか……」

若干うんざりする。リチュアのエンジンとなっているあのモンスターを止めなければ、良い様にくると回されるだろう。が、俺のデッキにそれを成すことの出来るカードはない。

「デッキから『ヴィジョン・リチュア』を手札に加え……効果発動。手札から捨てることで、リチュアと名の付いた儀式モンスターを一体、手札に加える。『イビリチュア・マインドオーガス』を手札にサーチカードからサーチカードをサーチする、か。本当に、大した回転力だ。」

「手札から『シャドウ・リチュア』を捨ててデッキから『リチュアの儀水鏡』を手札に加え、発動。フィールドの『リチュア・ビースト』と『リチュア・アビス』をリリースして『イビリチュア・マインドオーガス』を儀式召喚」

『イビリチュア・マインドオーガス』 ATK2500

ビーストとアビスが儀水鏡の中へと吸い込まれ、半人半魚のモンスターと化す。あの人型は……リアルか。

「ウ、うあああああっ！」

『リアル!』

『だ、大丈夫……凜さんの痛みより、絶対マシだから……ッ』

終焉の力とは大分決別したらしく、エリアルが正気を失うことはない。だが、それでも残る終焉の残滓はエリアルを蝕む。尤も……^{グラトニー}暴食がそれを気にするかというところ、そんなことはないようだ。

「効果発動。墓地の『サルベージ』『マインドクラッシュ』『水霊術』『葵』『サイクロン』とそっちの『デス・メテオ』をデッキに戻してシャッフルする」

「なるほど。そう来たか」

『デス・メテオ』は今となっては使い道がない。事故要因を抱え込まされたか。

「だが、それでもお前は攻撃することは出来ない」

『マシユマロン』に攻撃すればそれで終わりだし、そうでなくてもミラーフォースが残っている。攻撃することは出来ないだろう。

「ターン、エンド……」

「俺のターン、ドロー……チッ」

バーンカードではなかった。今となっては『火の粉』ですら倒せるのだが、そう上手くはいかないか。このデッキが本当に純粋なフルバーンであったなら兎も角、特殊な混成ビートバーンではこういうこともある。だが、まあ……。

「どの道、お前に勝ちはない。お前の想うその男と共に、そろそろ眠るといい」

ピクリ、と暴食が反応した。^{グラトニー}

「……殺す」

「なに？」

「殺す。アノ人を傷つけた……アナタを殺す……ッ！」

「……ターンエンドだ」

暴走していても尚、本人の持つ一番強い思いにだけは反応するか。それは……共感しなくもないな。

「殺す。殺す……！ あああああアッ！」

「だが……その想いの強さ故に、暴走がより強まる、か。皮肉だな」
「ああっ！ がああッ！ うぐっ……がアあっ！」

「凜っ！ 落ち着いて凜！ ああもう、どうしてこんな……」
「凜さん……あたしたちの力が足りないばかりに……ごめんなさい」

「ぐっ……うああアッ！ 許さ、ない……！ アノ人を……剣士さん、を……！ ああああああアッ！」

「きゃあああアッ!?」

ズアッ……！ と暴食を包むオーラが一層凶暴なものに変わる。

あれの精霊だろう二人の少女も、堪らず吹き飛ばされる。

「これは……時間の問題だな」

俺がどうこうするまでもなく、このままならいずれ暴走する力に耐え切れず、^{グラトニー}暴食の力は自らを喰らう。そうなれば、待っているのはその身の終焉のみだ。

「案外、俺たちには相応しい末路なのかもしれんが、な」

自らの罪に焼かれるのなら……それが一番良いのかもしれない。俺はそう思い……次の瞬間、見えた光景に、目を見開いた。

「ア、ああアああアああアああアッ……！」

熱い……。お腹が燃えてるような感覚。その熱はお腹から全身に回って、今にも燃え尽きそうな、酷い激痛が体中を包んでいる。

「くっ」

でも……。いいかな。燃え尽きちゃっても。それで、剣士さんの仇が取れるなら。剣士さんを傷つけた報いを受けさせられるなら。

「はアッ！ はあ、がああアッ！」

視界が霞む。目の前で誰かが何かを言っている。あれ……？ そう言えば私、誰と戦ってたんだっけ……？

「殺す。アノ人を傷つけた……アナタを殺す……ッ！」

そっだ……。そんなこと、もう関係ない。

「ぐっ……うああアッ！ 許さ、ない……！ アノ人を……剣士

さん、を……！ あああああアアッ！
私はただ……“敵”を倒すだけ……っ！

「やめる」

「アア、ア……？」

ぐっ、と私の腕が誰かに掴まれた。

「もういい。やめる」

離せ。

「離せ……！」

「お前が……そんなことする必要なんてない」

「離せ……ッ……！」

離せ、離せ、離せ！ 私は、倒すんだ。勝つんだ。殺すんだ。私の大切な人を傷つけた……殺そうとした“敵”を……ッ！

「殺すんだ……！ “敵”を……！」

「アイツは、“敵”じゃない。もう、やめる」

「ウルサイツ！」

「ぐっ……？」

何を言っても離そうとしないその手を、私は“^{グラトニ}暴食”のオーラで跳ねのけた。跳ねのけようとした。

「ぐっ……離さねえ」

その傷だらけの、包帯が巻かれ、今のダメージで出来たと思われる新たな傷口から血を滲ませたその腕は、私を離そうとはしなかった。

「だいじょうぶだ……オレは、もう大丈夫だから……目を、覚ませ」

その声は、私が良く知るもので。

「お前がそんなになってまで……頑張る必要は、ねえんだ」

その顔は、私が守りたかったもので。

「だから……もう、やめる。凜」

その目は、私が焦がれた強い目で。

「剣士……さん？」

その名前は、私は何よりも大切なヒトのもの。

「ああ……おはよう、って言うには、まだ早いかな？」

「遅すぎ……です」

「そうか、悪いな。寝坊したちまつたらしい」

笑い慣れてない剣士さんの笑顔は、包帯やガーゼの所為で更に不格好なものだったけど。

「無事で……良かった」

「お互い様だ」

凄く、安心出来る笑顔だった。

「……お前たちは」

ふいに、その声が響いた。

「お前たちは、どうして死なない？」

「……決まってるんだろ」

困惑した、何処か弱気にも見える先輩に、剣士さんはすっぱりと言い切った。

「まだ、死ねないからだ」

「……うん！」

私も頷く。まだ、死ねない。こんなところで、死んでなんてやれない。だから、死なない。実にわかりやすい、生きる理由だ。

「剣士さん……」

「なんだ？ 凜」

「もう少しだけ、支えてくれる？」

剣士さんの体温が伝わって、凄く心地良い。今なら、何でも出来そうなくらいに。

「……ああ。アテナたちには悪いが、あの馬鹿の目を、オレたちで覚ましてやるうぜ」

「……うんっ！」

私は、デッキに手をかける。私の手札は、『シャドウ・リチュア』と『リチュアの儀水鏡』の二枚。これじゃ、勝てない。

「ツドロー！」

このカードに……賭けるしかない！

「私は『リチュア・デイバイナー』を召喚！」

『リチュア・デイバイナー』 ATK 1200

「『リチュア・デイバイナー』の効果発動！一ターンに一度、カード名を宣言して、デッキの一番上のカードをめくる。そのカードが宣言されたカードだった場合、手札に加えることが出来る！」

「……正気か？ デッキトップの操作もせずに、当てられるとでも？」

「当たるよ」

私は確信を持って言った。剣士さんと目を合わせ、コクリと頷く。「うん。違う。当たるんじゃない。当てるんだ！」

脳裏に思い浮かべるのは、ずっと昔から、私を守って、支えてきてくれたその姿。私の名前のように、凜とした佇まいで、私に勇気をくれたエリアの姿。

「エリア……私に、力を貸して？」

「当たり前でしょう？ ふふ。やっちゃいなさい。凜」

「うん！ 私が宣言するのは……『リチュアルクイーン エル・アリア』！」

ビツ、と私は力強くデッキからカードをドロウした。私が思う、最強のカード。私の切り札。私の……力！

「私がドロウしたのは『リチュアルクイーン エル・アリア』！ よって手札に加える！」

「馬鹿な……！？ 本当に……？」

『良くやったわ。凜』

『あたし、見つけられた気がします。邪悪を超えた、リチュアの本当の力』

「うん。行こう！ 私は手札から儀式魔法『リチュアの儀水鏡』の

効果を発動！ 手札の『シャドウ・リチュア』をレベル分のリリースとして、儀式モンスター『リチュアルクイーン エル・アリア』を儀式召喚！」

エリアが、儀水鏡をその胸に抱く。光が放たれ、その光の中からは、いつもよりずっと成長したエリアが、その手にリアルと同じリチュアの杖を掲げている。

『リチュアルクイーン エル・アリア』 ATK2800

「なんだ、ソイツは……っ!？」

「『リチュアルクイーン エル・アリア』は、リチュアの持つ暗黒面を聖なる力へと転化させた女王……その効果は、イビリチュアを力に変える！ 効果発動！ フィールド上の『リチュアルクイーン エル・アリア』以外のリチュアと名の付いた儀式モンスター一体をリリースする度に、相手の手札・フィールド・墓地のいずれかからカードを一枚選択して、デッキに戻す！」

「なにっ!？」

「私は『イビリチュア・ガストクラーク』と『イビリチュア・マインドオーガス』の二体をリリースして、伏せモンスターとそのカード、ミラーフォースをデッキに戻す！ 『流転の水鏡』！」

『さあ……戻りなさい！ 在るべきところへ!』

「くっ……!？」

「これで……先輩のフィールドはガラ空きです！」

エル・アリアとディバイナーの二体の攻撃力は合計で4000。

丁度倒せる！

「これが、通れば……！ お願い！ 『リチュアルクイーン エル・アリア』で、ダイレクトアタック！」

「行けえっ!！」

『吹き飛んで反省しなさい!』

「『クイーンズ・ミラー・ストリーム』！」

エル・アリアの杖から噴き出した水流が、先輩を呑み込んで行く。

「よっしっ! これ……!！」

「私たちの勝ちだ！」

私たちが勝利を確信した、次の瞬間。

「……………いや」

「えっ!?!」

水流が割れて、その中から無傷の先輩が現れる。

「ど、どうして……………」

「アイツは……………!?!」

剣士さんが先輩の上を睨みつけて戦慄する。

「……………俺はお前の攻撃宣言時に、手札から『バトルフェーダー』の効果を発動した。特殊召喚することで、ダイレクトアタックを無効にし、バトルフェイズを終了させる」

『バトルフェーダー』 DEF0

「そ、そんな……………」

「通らなかつた、のか……………」

「もう一体……………リチュアの儀式モンスターがいれば、やられていたあと一手……………足りなかつたな」

「わ、私は……………ターン、エンドです」

私にもう手札はない。先輩にもないけど……………。

「お前は……………言つたな」

「……………」

「当たる、じゃなく……………引き当てるのだと」

「まさか……………」

「^{グレートニ}暴食。お前に出来て……………この俺に、出来ない筈がないだろう……………!?!」

ガッ、と先輩は鋭い目でデッキトップに手を添える。

「これが……………俺の、お前たちの運命だ! ドロー!」

バーンカードを引かれたら負ける。そしてその確率は、先輩のデッキ構成から言って低くない。けど……………それ以上に。

「もしかして……………」

先輩が口元に笑みを浮かべる。己の傲慢^{プライド}に歪んだ、壮絶な笑み。

「俺はセツトされた『テラ・フォーミング』の効果を発動。デッキからフィールド魔法『ダークゾーン』を手札に加え、発動する」

フィールドが、闇のゲームの闇を更に増幅させる。その光景に、私たちは嫌な予感が止まらない。

「おい……まさか」

「私、一ターン目に、デッキに戻したただけだった……。何度もシャッフルやドローをする内、また引いてもおかしくは……」

でも、まさかそんな、そんなことって……!?

「俺はエクストラデッキから『アルカナ ナイトジョーカー』をゲームから除外し……」

先輩の……大罪(Sin)!

「『Sinアルカナ ナイトジョーカー』を特殊召喚!」

『Sinアルカナ ナイトジョーカー』 ATK3800 4300

「あ、ああ……っ!?!」

「暴食……憤怒……獣の本能レベルでしかない貴様らが、この俺に

……傲慢の終焉に勝てると思うな! バトル! 『Sinアルカナ

ナイトジョーカー』で、『リチュアルクイーン エル・アリア』を

攻撃! 切り裂け騎士皇! 『墮天の剣』!」

『くっ……あああっ!?!』

「きゃあああああああああっ!?!」

「凜っ! ぐあああっ!?!」

凜LPO

エル・アリアを切り裂いた黒の剣圧に、私たちは吹き飛ばされた。

「その身に刻め……傲慢の騎士は、嫉妬を必ず守り抜くと!」

そう言い残して、先輩はその場から消え去った。

「ゴメン。さだめ、アテナ……やっぱり私じゃ、無理だったよ」

最後にそれだけ呟いて、私は意識を失った。

第四期第二十三話「もう、やめる」（後書き）

というわけで、結局セツの勝ち、と。いや、なんでセツといい凜といい、最強カードは出たと思ったら負けるんだ。いや僕の所為なんですけど。

今回出した新オリカは『リチュアルクイーン エル・アリア』のみ。ヴィジョンやダイバイナーは、もしかしたら聞き覚えがないかもしれませんががれつきとしたOCGカードです。最新ですが。おそらく最も早い小説への登場だと信じております。オリカの紹介は例によって活動報告に載せません。

あ、ちなみに『逆転の明札』はアニメオリカです。遊星が使った奴。どう考えてもチートドロカード。黒セツはそんなんばかりです。

リチュアもう書きたくねえ……いや、好きなんだけど。儀式で水属性とか超俺得なんですけど。小説で使おうとすると超大変。くるくるくるくる……把握し切れねえ！ 作者自身がそうなので、読者のみなさんにとってもすっごい読み難いかもです。すみませんでした。

さて次回は……このデュエルの裏側で起きていた、もう一つのデュエルになります。対戦カードは秘密。

それでは、悠でした！

第四期第二十四話「サイレント・ダークホース」（前書き）

お久しぶりです。まずは、滅茶苦茶お待たせしてしまって申し訳ありませんでした。相変わらずスランプモードでバイトも始まったので、色々時間がかかってしまいました。

タイトルからわかると思いますが、今回はお久しぶり。彼女の登場になります。成長した彼女の強さを、どうぞご覧あれ。

第四期第二十四話「サイレント・ダークホース」

アルカナく切り札の騎士く

第四期第二十四話「サイレント・ダークホース」

時は少し遡ります。

剣士さんの看病を凜さんに任せた私は、一人城門の前で物思いに耽っていました。

「セツ……」

以前、セツがユーキさんと戦い、恐らくは負けた場所。私たちが逃がして、セツが一人で戦った地。

守るために、一人犠牲になることが間違っていると、私はセツから学んだ。それなのに、セツは一人で戦い、一人で苦しんで……。

「おかしい、ですよ……セツ」

セツの行動は矛盾しています。他人にするなど言いながら、自分では息をするようにその行動を取ってしまう。

「自己犠牲……誰かのために何かをしたいって気持ちは、どうしてもそこに繋がっちゃうんですかね。その相手が、大切であればある程に。どう思います？ ユーキさん」

「……気付かれちゃってた、か」

物陰から姿を現した、何処か間延びした聞き覚えのある声。

「ユーキさん……」

「アテナちゃん」

以前に会ったのは、セツが居なくなつたあの日。まだそれほど時

間は経っていない筈なのに、随分と久しぶりに感じます。

「久しぶり、だね」

「そうですね」

「……………」

「……………」

お互いに、暫し無言。話したいことは沢山あるのに、どれも喉元に引っ掛かったように出てきません。

「ユーキさん。私、聞きたいことがあるんです。答えて、くれますか？」

「……………内容による、かな」

「ユーキさんやセツは、自分の意志で終焉に味方しているんですか？」

何よりもまず、聞かなきゃいけないこと。

「……………当たり前だよ。勘違いしてるかもしれないけど、エンヴィーに人を操るような能力はないよ。確かに、器としてのわたしが、エンヴィーの意識に引き摺られて暴走することはあるけど……………エンヴィーを守りたいっていうのは、間違いなくわたしの意志。セツくんも、同じだよ」

「記憶を奪ったのに、ですか？」

私のその言葉に、ユーキさんは僅かに唇を噛みます。

「セツの記憶を奪って、さだめさんの居場所を奪って、それでセツの意志？……………違います。それは、ぜったい違います！」

「っ……………！」

それは、セツの意志じゃありません。真っ白にされた人間に、都合のいい目的を植え付けるような……………そんな、歪んだ偽物の意志です。

「ユーキさんが正気なら……………わかる筈です。セツが私や、さだめさんと敵対することのおかしさが」

「……………アテナちゃんは知らないんだよ」

ユーキさんの声は、何処か私たちを憐れむような、寂しげな響き

を伴って、思わず私は乱暴に問いかけます。

「何をです？ 私が知らないなら、教えてください！」

「アテナちゃんの知ってるセツくんこそが、偽物だったこと」

「っ！？」

ズキツ、とユーキさんの言葉に、胸を刺すような痛みが走ったのを感じました。

「どういう、ことですか？」

「気付いてない……なんてこと、ないよね」

「……偽物じゃ、ありません」

そう言っただけです。でも、ちゃんと声になっていたかはわかりません。掠れたような吐息が口から漏れます。

「セツくんの眼、濁ってた。記憶を失って、まっさらになったはずのセツくんの眼が。そういうの、鈍いわたしでもわかったよ。セツくんが、もう根本的に「やめてください！……いいよ。やめてあげろ。でもアテナちゃん。それで、本当にいいと思ってる？」

「私、は……」

「駄目だよ。アテナちゃん。そんなんじゃないわ、セツくんを返してなんてあげられない。アテナちゃんも、さだめちゃんも、希牙姫さんも……全てわかって見ない振りしてたルインさんにも……絶対、渡せない」

ユーキさんの声は、私が今まで聞いたことがない程の怒りと、哀しみに満ちていました。

「……ねえ。セツくんが記憶を失ったのって、何でだと思うの？」

「それは……ユーキさんが」

「うん。闇のデュエルで傷つけたから。それを言い訳するつもりはないよ。でもね……良く考えて？ アテナちゃんたちの知るセツくんは、闇のデュエルで瀕死になったからって、記憶を失ったりするほど柔だった？」

「……じゃあ」

「セツくんはね。忘れたかったんだよ。セツくん自身が、望んだの。」

アテナちゃんたちのことを忘れない。全ての柵しがらみを捨てて、楽になりたいて」

「嘘です！ セツが、セツがそんなこと……」

「思わないって、本当に思う？ セツくんが、どれだけ苦労して、傷ついて、戦い続けてきたか……アテナちゃんだって知ってるでしょ？」

「ッ……」

ユーキさんの言葉に、私は反論出来ません。私が出会ってからだけでも、セツは私やさだめさん。皆のために戦い続けてきました。話だけしか聞いていませんが、さだめさんを守ってきた日々は、私の想像を遥かに超えるものだったでしょう。

「でも、セツは……」

「強い……って、本当にそう思ってる？」

「……」

「強くないよ。セツくんも、さだめちゃんも。話で聞いたただけで、きつとセツくんたちの両親も。みんなみんな弱かったから、セツくんが強がるしかなかった」

「でも、セツ以外の人たちは強がることも出来ませんでした」

「そうだね。でもきつと、それはセツくんが他の人より心が強かったわけじゃない。セツくんが強かったのは、きつと責任感」

兄だから、妹妹のためを守らなきゃ。セツはその一心で、今までずっと強がって生きてきた。

「そしてそれは、きつとアテナちゃんたちに対しても同じ。セツくんは、周りがとってもよく見える人だったから。わかっちゃったんだね。みんな、弱いつて。自分が守らなきゃ、潰れてしまうんじゃないかって。……きつと、それがセツくんの罪の源泉」

強すぎる責任感が、行き過ぎて大きな罪となった。自分が守らなきゃダメなんだ、という傲慢に。

「……今までのわたしじゃ、ダメなんだ。アテナちゃんたちも、そう。セツくんに寄りかかって、依存して……わたしたちが、セツく

んを……」

ユーキさんの目が、苦痛に歪みます。

「セツくんを……罪人フライトにしたんだ」

「っ……！」

私たちが、セツを……。

「セツくんは独りだった。わたしたちみんながいくら傍にいても、継るばかりのわたしたちはどこまでもセツくんの“お荷物”でしか、なかつたんだよ。だから……」

ユーキさんは、自らのデュエルディスクを構え、私を鋭く睨みつけます。強い、強い意志を込めた目で。

「だから、わたしは戦う。セツくんの、本当のパートナーになりたいから。セツくんの隣で、セツくんを守る人になりたいから！」
セツの時とは違って、闇のゲームではなさそうでした。闇の代わりに、ユーキさんからは凄まじい意志の力を感じます。

「闇のゲームなんかしないよ。エンヴィーの力は借りない。わたしは、わたしだけの力で、アテナちゃんと戦う。これは……決闘デュエル、だから」

「決闘……」

「そうだよ。一対一、コンティニューなしの一本勝負。賭けるものベットするは……全て」

「全て……？」

「文字通り、自分の全て。敗者は勝者の言葉に従うの。本当なら、闇のゲームで命そのものを賭けたいところだけど……わたしは、エンヴィーの力は使わないって決めたから。だから代わりに、わたしの全てを、この決闘に賭ける！」

「ユーキさん……」

「だからアテナちゃん。約束して。わたしが勝つたら、もうセツくんには関わらないって。もう……苦しめないって！」

「わ、私はセツを苦しめてなんか……」

「アテナちゃん！」

「っ……！わ、わかり……ました」

「うん。それでいいよ。じゃあ……決闘を、始めようか」
「っ……」

重い……です。今までの……命を賭けた闇のゲームなんかより、よっぽど。ユーキさんの想いも、セツへの罪悪感も、自分自身への後悔も……その全てが、私の心に押し掛かります。

セツは……いつでも私たちを想って、助けてくれました。守ってくれました。セツの行動には、いつも誰かを想う意志があって、私たちは常にその意志に助けられてきました。

「私は……」

私は、どうだったでしょう？ そんなセツに対し、私は？

「ただ逃げて、縋って……苦しめただけ」

だとしたら、私がセツのために戦うと、どの口で言えるでしょう？ 私は、ただ私のためだけに戦っているに過ぎないと言うのに。

「さあ、アテナちゃん。顔を上げて、デュエルディスクを構えて。貴女の言葉、想い、力も全て、完膚なきまでに叩き潰して見せるから！」

「くっ……！？」

それでも……それでも今は、戦うしかありません！

「デュエル！！」

アテナLP4000

ユーキLP4000

「わたしの先攻！ ドロー！」

ユーキさんとデュエルするのは二度目。以前は、まだユーキさんの想いも、タクティクスも固まっていなかった一年生の頃……今のユーキさんとは、何もかもが違い過ぎて参考にはなりません……。

「私はモンスターを守備表示でセット。カードを一枚セットして、ターンエンドだよ！」

「私のターン、ドロー！」

負けるわけにはいきません！ 例え私自身が、戦う意味を見失っ

ていたとしても……私が負ければ、さだめさんたちにも迷惑がかかります。それだけは……。

「嫌、です……！ 私は手札から『ヘカテリス』の効果を発動します！ 手札から墓地に送ることで、デッキから『神の居城 ヴァルハラ』を手札に加え、発動します！」

私の背後に、いつも通りのヴァルハラが出現します。

「私はヴァルハラの効果を発動！ 手札から『The splendid V E N U S』を攻撃表示で特殊召喚します！」

『The splendid V E N U S』 ATK2800

「更に私は『ウイクトーリア』を攻撃表示で召喚します！」

『ウイクトーリア』 ATK1800

「行きますよ！ まずは『ウイクトーリア』でユーキさんの守備モンスターに攻撃します！」

ドラゴンを従える女神の一撃が、ユーキさんの守備モンスターを襲います。あのモンスターは……。

「っ……！ 戦闘破壊された『荒野の女戦士』の効果発動！ デッキから攻撃力1500以下の地属性・戦士族モンスター一体を攻撃表示で特殊召喚するよ！ 私が召喚するのは『ミスティック・ソードマンLV2』！」

『ミスティック・ソードマンLV2』 ATK900 400

「攻撃力たったの400……？」

「ヴィーナスの効果を考えなくとも900。それなら同じダメージを受けるにしても、まだ攻撃力が高く、後続も呼べる『荒野の女戦士』を呼び出した方が良い筈……だとしたら、何か考えが？ でも、攻撃反応型の罠なら『ウイクトーリア』の時に使われていてもおかしくはない筈……ヴィーナスを破壊するために？」

「……それならそれで構いません。私には、攻撃あるのみですから！ バトルします！『The splendid V E N U S』で『ミスティック・ソードマンLV2』に攻撃！『ホーリー・フェザー・シャワー』！」

ヴィーナスの翼から溢れ出た光の奔流が、小さな剣士に容赦なく襲いかかります。

「そうはいかないよ。リバーズカード、発動！ 速攻魔法『チュートリアルバトル』！」

『The splendid VENUS』 ATK2800 0
「速攻魔法！？ ヴィーナスの攻撃力が……！？」

「『チュートリアルバトル』はLVモンスター専用の速攻魔法。LV4以下のLVモンスターの戦闘時、戦闘ダメージを与えない代わりに相手モンスターの攻撃力を0にする戦闘補助魔法だよ」

一気に勢いを失った光の奔流を、小さな剣士はその剣で貫き、ヴィーナスを一刀両断にしまいました。

「くっ……！？ 私はカードを一枚セットして、ターンエンドです」
「相手モンスターを戦闘で破壊したターンのエンドフェイズに、ミスティック・ソードマンはレベルを上げるよ。『ミスティック・ソードマンLV2』を墓地に送って、デッキから『ミスティック・ソードマンLV4』を攻撃表示で特殊召喚！」

『ミスティック・ソードマンLV4』 ATK1900
「っ『ウイクトリア』の攻撃力を……」

上回りました。しかも確か『ミスティック・ソードマンLV4』のレベルアップ条件もLV2と同じくモンスターの戦闘破壊……。

「わたしのターン、ドロー！ わたしは『サイレント・マジシャンLV4』を攻撃表示で特殊召喚するよ！」

『サイレント・マジシャンLV4』 ATK1000
「サイレント……マジシャン！」

私にとっては鬼門とも言えるモンスターです。ドローカードを多用する都合上、その攻撃力はみるみる上昇してしまいます。

「バトル！『ミスティック・ソードマンLV4』で『ウイクトリア』を攻撃！『神秘の剣LV4』！」

「きゃあっ!？」

アテナLP4000 3900

「更に『サイレント・マジシャンLV4』でプレイヤーにダイレクタアタック！」

「さ、させません！ トラップカード『ガード・ブロック』！ 戦闘ダメージを無効にして、デッキからカードを一枚ドロウします！」
「でもそのドロウで、『サイレント・マジシャンLV4』には魔力カウンターが一つ乗るよ！」

『サイレント・マジシャンLV4』 ATK1000 1500

「わたしはカードを一枚セット。エンドフェイズ時に『ミスティック・ソードマンLV4』を墓地に送って、デッキから『ミスティック・ソードマンLV6』を特殊召喚して、ターンを終了するよ！」

『ミスティック・ソードマンLV6』 ATK2300

「私のターン、ドロウ！」

「そのドロウで、『サイレント・マジシャンLV4』にはまた一つ、カウンターが乗るよ！」

『サイレント・マジシャンLV4』 ATK1500 2000

「っ……！」

強い、です……！ リクルーターからのレベルモンスター展開、そしてそのレベルアップに至るまで、とても鮮やかに決められてしまいました。レベルモンスターに、これ以上の時間を与えるのは危険過ぎます。手がつけられなくなる前に、速攻で倒さないと……！
「私はヴァルハラの効果を使い、手札から『光神機 轟龍』を攻撃表示で特殊召喚します！」

『光神機 轟龍』 ATK2900

「バトルします！ 『光神機 轟龍』で『サイレント・マジシャンLV4』を攻撃！ 『ライトニング・バースト』！」

「させないよ！ 速攻魔法『月の書』！ 『光神機 轟龍』を裏側守備表示に変更するよ！」

「ああっ!?!」

サイレント・マジシャンに攻撃を仕掛けた轟龍が、掲げられた書によって姿を消してしまいます。しかも、裏守備表示ということは

……！

「そう。ミスティック・ソードマンの餌食だよ」

「っ……！ わ、私は『ジェルエンデュオ』を守備表示で召喚して、ターンエンドです」

『ジェルエンデュオ』 DEF0

「わたしのターン、ドロロー！ アテナちゃん、戦闘破壊耐性を持ったモンスターだからって、安心しちゃだめだよ」

「っ……どういう意味ですか？」

「……こういうこと！ わたしは手札から速攻魔法『エネミーコントローラー』を発動！表側表示モンスター一体の表示形式を変更するよ！」

「そんなっ!?!」

『ジェルエンデュオ』 DEF0 ATK1700

虚空に出現したコントローラーが、私の『ジェルエンデュオ』を操り攻撃表示へと変更させられてしまいます。

「ミスティック・ソードマンが出てきたら、表側表示にしてくるのはわかってた。アテナちゃんが守備で出すなら、そのモンスターは『ジェルエンデュオ』か『マシユマロン』、後はリクルーターくらいだからね」

そしてそれらの内、『ジェルエンデュオ』以外は裏守備で出せばミスティック・ソードマンの餌食になり、表側だと効果を発揮し辛いモンスター……まさか、そこまで考えて……!?!

「さあ、行くよ！『ミスティック・ソードマンLV6』で裏守備の『光神機 轟龍』に攻撃！『神秘の剣LV6』！」

「くっ……!?!」

轟龍が切り裂かれ、光の粒子を残して消滅していきます。

「『ミスティック・ソードマンLV6』の効果だけど……今回は使わないでおくよ。続けて『サイレント・マジシャンLV4』で『ジェルエンデュオ』を攻撃！『サイレント・バーニング』！」

「きゃああああっ」

アテナLP3900 3600

私が戦闘ダメージを受けたことで『ジェルエンデュオ』は破壊されます。これでまた、私のフィールドは空っぽです。

「わたしはカードを一枚セットしてターンエンドだよ」

またしてもユーキさんはカードを一枚だけセットしてターンを終了します。ですが、そのたった一枚に先ほどから戦況を覆されてばかりの私としては、そのたった一枚に寒気を覚えずには居られませんが。しかも、モンスター自体はデッキからの特殊召喚ばかりで、殆ど手札を消費せずに展開されています。これでは、手札からの大量展開を行っている私の方が先に枯渇するのは明らかです。

「私のターン、ドロー！」

私がドローしたことにより、またしても『サイレント・マジシャンLV4』にカウンターが乗ります。

『サイレント・マジシャンLV4』 ATK2000 2500

もう一刻の猶予もありません。けど、そんな中でも希望はあります。私は先ほどのユーキさんの言葉を思い出します。

『『ミスティック・ソードマンLV6』の効果だけど……今回は使わないでよくよ』

「……………」

『『ミスティック・ソードマンLV6』の効果は、裏守備モンスターを問答無用で破壊する効果と、その効果で破壊したモンスターを、墓地へは送らずデッキトップに戻す効果……。それを使わなかったと言っことは、ユーキさんにとって轟龍はデッキトップに戻したくなかったモンスター……。再利用されることを恐れるモンスターだったと言っことです。』

「轟龍の特徴は、妥協召喚と貫通ダメージ、それに2900の攻撃力……………」

ヴァルハラが存在し、守備モンスターがない以上、轟龍の効果が問題だったわけではありません。だとすれば、問題は攻撃力。2900の攻撃力に対抗する手段がなかったからこそ、ユーキさんは

轟龍をデッキトップに戻さなかった。なら！

「私はもう一度ヴァルハラの効果を使います！ 手札から『墮天使スペルビア』を特殊召喚！」

『墮天使スペルビア』 ATK2900

轟龍と同等の攻撃力を持つスペルビアなら、突破出来る筈です！
「バトルします！」

問題は、どちらのモンスターを狙うべきか、です。まだ成長し切っていないとはいえ、これ以上の攻撃力増加を見過ごしたくはない
『サイレント・マジシャンLV4』か、守りに入ることを許してくれない『ミスティック・ソードマンLV6』か……。個人的にはサイレント・マジシャンを狙いたいところですが……。

「……………」
私はチラリとユーキさんの手札を見ます。二枚……残っています。二枚ある手札の内、どちらかが『オネスト』である可能性も考える必要があります。それなら……！

「行きます！ 『墮天使スペルビア』で『ミスティック・ソードマンLV6』を攻撃します！」

スペルビアの放つ闇の波動が、ユーキさんの『ミスティック・ソードマンLV6』を襲います。この攻撃を凌ぐことは出来ない……
…そう、確信した時でした。

「……………」

「！？」

ユーキさんが、笑いました。

「思った通り、だね。速攻魔法『収縮』！ 『墮天使スペルビア』の攻撃力を半分にするよ！」

『墮天使スペルビア』 ATK2900 1450

「そ……そんな、きゃあああつ！？」

アテナLP3600 2750

スペルビアが切り裂かれるのを、私はただ呆然と眺めていました。
「ど、どうして……？ ユーキさんには、対抗手段がなかったんじ

「……」

だから、効果を使わなかったんじゃない。

「それはねアテナちゃん。アテナちゃんの、勝手な想像、だよ？」

「あ……っ」

確かに……ユーキさんの言葉通りです。ユーキさんに対抗策がないと、勝手に思い込んだ私の……。

「で、でもそれは……」

「わたしが『ミスティック・ソードマンLV6』の効果を使わなかったから、でしょ？」

「……そう、です。まさか……！？」

「うん」

私が瞠目する前で、ユーキさんが人差し指を口元に持って行きま

す。
「ワザと、だよ」

くすり、と笑うその姿に、私は言いようのない恐怖を覚えました。
「アテナちゃんは頭もいいからね。きつと、効果を使わなかった意味を見抜いてくれるって思った。でも、アテナちゃんは頭も良いけど、同時にとっても素直だから……それ以上深くは考えない、そう思った通りだったよ」

くすくすと、まるで悪戯が成功した少女のように笑うユーキさん。
「いい加減カードを一枚セット、じゃあワンパターンだったからね。流石にそろそろ迂闊な攻撃はしてこないと思ったんだ。だから……ちよつとした仕掛けを、ね？」

それが、ミスティック・ソードマンの効果不使用……！ 私はまんまと、ユーキさんの仕掛けた罠にハマり、三度目の迂闊な攻撃を……！？

「二度あることは三度ある……三度目の正直とは行かなくて残念だったね。アテナちゃん」

「くっ……！」

これが、今のユーキさんの実力……！？ 以前とは比べ物に……

いえ、完全に、別次元の強さです。

「……この強さはね、セツくんがくれたんだ」

「セツが……？」

「そう。中学では落ちこぼれで……高等部に入ってからも負け続きだったわたしに、セツくんが教えてくれた……わたしの、たった一つの武器！」

「心理誘導……！」

セツからも、聞いてはいました。ユーキさんが、凄くデュエルに於ける駆け引きに長けている事実。相手の油断を誘い、目に見えない不意の一撃を与える……正に。

「そう、目に見えない不意の一撃。それが、わたしの武器！」

「ッ……！」

「わたしたち、普段からそうだもんね。アテナちゃんのアプローチは、重たくてパワーがあつて、わたしは何時も美味しいところを持つてくからつてダークホースって言われて。……デュエルでも、同じ。アテナちゃんがパワーのある重量級天使を繰り出して戦うのなら、わたしは皆の隙を突いて勝ちを拾うの。皆、同じだよ」

それを、セツが見出した。

「そう。わたしはセツくんと出会って、変わった。誰よりも強い自分を、見つけることが出来たんだ！ だから……！」

ユーキさんは手札からカードを一枚抜き出し、掲げます。

「見せてあげるよ。わたしの得た力、その一つを！ わたしは『ミスティック・ソードマンLV6』がモンスターを戦闘によって破壊したことにより、『ミスティック・ソードマンLV6』をリリースすることで『ミスティック・ソードマンLVMax』を特殊召喚するよ！」

「レベル……マックス！？」

『ミスティック・ソードマンLVMax』 ATK3300

光に包まれた『ミスティック・ソードマンLV6』が、より先鋭的なフォルムの衣装を纏って現れました。

「さあ、アテナちゃん。アテナちゃんにこれから見せてあげるよ。
レベルがカンストしたキャラの強さをね……！」

第四期第二十四話「サイレント・ダークホース」（後書き）

こんにちは。

さてさてお待たせしてしまつてすみません。これからは
スパー・ユーキちゃん・タイム
S Y T です（笑）。

次回からはユーキちゃんとセツの出会いからの出来事を回想して
いく形になるかと。もうしばらく、お付き合いください。

今回登場したオリカは『チュートリアルバトル』と『ミスティック・ソードマンL V M a x』。後者はまだ全貌が明らかになっていませんが、前者については後ほど活動報告にて。そして今まで使っていなかったミスティック・ソードマンにそんなオリカが登場するくらいなので……あとは、言わずともわかるでしょう。尤も、ユーキちゃんの過去話等も間に入るので、このデュエル、かなり長引きそうです。

序盤の今回は、ユーキちゃんの強さがかなり強調されました。セツといいユーキちゃんといい、敵は心理フェイズばかり使ってきます（笑）。そしてセツがカウンター罠ならユーキちゃんは速攻魔法です。エネコンとか使いました。L V モンスターやチュートリアルバトルも含め、ようやくユーキちゃんのゲームー設定が日の目を見ましたね。長かった……。

バイトをしつつスランプな現在ですが、次の話はなんとか早めにアップしたいものです。……五月病に負けないように！

それでは、悠でした！

第四期第二十五話「静寂の始まり・前編」(前書き)

少しだけ更新速度が戻りました。また落ちないようにしたいところですが……はてさて、どうなるやら。

今回はユーキちゃんとセツの過去話ですね。タイトルにもあるように、スーパー・ユーキちゃん・タイムまだ続きます。S Y TですのでW W W

第四期第二十五話「静寂の始まり・前編」

アルカナ（切り札の騎士）

第四期第二十五話「静寂の始まり・前編」

「さあ、アテナちゃん。アテナちゃんにこれから見せてあげるよ。レベルがカンストしたキャラの強さをね……！」

ゴクリ、と息を呑むアテナちゃんを見て、わたしは少しだけ安堵の息を吐く。

（うん。上手く出来てる。ここまでは想定通り、だよ）

レベルモンスターは、効果は強力だけどその性質上強くなるまで時間がかかる。だから、強くなるまでの序盤は魔法・畏を惜しまず使う。レベルが上がるにつれて、場持ちも良くなるからそうなつてからが勝負、だね。

わたしはセツくんの教えを思い出す。セツくんはなんでも教えてくれたわけじゃない。むしろ、セツくんが教えてくれたのは基本的なルールや効果の使い方。それと、わたしが強くなるために必要な取っ掛かりだけ。

（でも、お陰でわたしは強くなれた）

セツくんは、不思議なヒトだった。それは、初めて会った時から同じ。わたしは、少しの間だけ目を閉じて、セツくと初めて会った時のことを思い出していた。

その日は、いつものように実戦形式のデュエルの授業があった。わたしの相手は、同年年のイエロー男子。

「加藤友紀です。よろしくね〜」

「俺はイエローの隼鋼太^{はやぶさ}。よろしく」

お互いに軽く挨拶をしてから、デュエルディスクを構える。

「デュエル！」

ユーキLP4000

鋼太LP4000

「先攻は、シニョ〜ルユーキなノ〜ネ」

相変わらず特徴的なクロノス先生の言葉に従って、わたしはカードをドローする。

「わたしのターン、ドロー」

え〜と……。手札に『サイレント・ソードマンLV3』がいるね。

この子は攻撃力も守備力も一緒だから……。

「わたしは『サイレント・ソードマンLV3』を守備表示で召喚するよ〜」

『サイレント・ソードマンLV3』 DEF1000

守備で出しておいた方がいいよね？

「え〜と……。カードを一枚伏せて、ターンエンドするよ〜」

うん。ミラーフォースも伏せたし、次のターンでレベルアップ出来るよね〜。

「俺のターン、ドロー！俺は『メカファルコン』を攻撃表示で召喚だ！」

『メカファルコン』 ATK1400

「う〜」

『サイレント・ソードマンLV3』の守備力を上回っちゃってるよ〜。けど、ミラーフォースもあるし……。

「速攻魔法『サイクロン』！伏せカードを破壊だ！」

「ええっ!?!」

ミラーフォースが破壊されちゃった!？」

「へへっ、ミラーフォースだったのか。良い勘してるぜ俺！ よしっ! 『メカファルコン』で『サイレント・ソードマンLV3』を攻撃だ! 『ソニック・ダイブ』!」
「きゃっ!」

「よし、俺はカードを二枚セットして、ターンエンドだぜ!」

「わ、わたしのターン、ドロー!」

うう……折角レベルアップ出来ると思ったのに。

「わたしはモンスターをセット。カードを一枚セット!」

と、とりあえず壁と『炸裂装甲』を伏せて……。

「えと、ターンエンドだよ」

「俺のターン、ドロー! 俺は『強化支援メカ・ヘビーウェポン』を召喚! 攻撃表示だ!」

『強化支援メカ・ヘビーウェポン』 ATK500

「更に、手札から魔法カード『機械複製術』を発動! デッキからヘビーウェポンを二体特殊召喚するぜ!」

『強化支援メカ・ヘビーウェポン』 ATK500 x2

「うわわっ!？」

モンスターが一気にならんじやった……。

「そしてヘビーウェポンを『メカファルコン』にユニオンだ」

『メカファルコン』 ATK1400 1900

「バトルだぜ! 『メカファルコン』で守備モンスターを攻撃! 『ヘビー・ソニック・ダイブ』!」

「え、えっとトラップカード『炸裂装甲』!」

「無駄無駄。ヘビーウェポンがユニオンされている機械族モンスターは、ヘビーウェポンを身代わりにして破壊を免れる!」

『メカファルコン』 ATK1900 1400

「少しかだけ攻撃力は下げられたけど……伏せてたのは『華麗なる潜入作業員』で、守備力は1200……全然届かないよ!」

「よっし! 続けて二体のヘビーウェポンでも攻撃だ!」

「きゃあつ!?」

ユーキLP4000 3000

「俺はメインフェイズ2にもう一体のヘビーウェポンを『メカファルコン』にユニオン! ターンエンドだ!」

『メカファルコン』 ATK1400 1900

「うう〜……わたしのターン、ドロー!」

あ、このカードなら……。

「わたしは魔法カード『洗脳 ブレインコントロール』を發動するよ〜!」

ユーキLP3000 2200

このカードなら、強くなった『メカファルコン』を奪い取れるよ〜!

「残念! 永続罨発動! 『レアメタル化・魔法反射装甲』を『メカファルコン』に装備させて、対象を取る魔法の効果を一度だけ無効にするぜ!」

『メカファルコン』 ATK1900 2400

「そ、そんなあ〜……」

折角ライフまで払ったのに……。攻撃力を上げたただだよ〜。

「うう…… 『シャインエンジェル』を守備表示で召喚してターンエンドだよ」

『シャインエンジェル』 DEF800

「よし絶好調! 俺のターン、ドロー! 俺は『メカファルコン』に装備魔法『7カード』を装備するぜ!」

『メカファルコン』 ATK3100

「こ、攻撃力3100〜!?」

ど、どうしよう。そんな攻撃力、わたしのデッキじゃどうしようもないよ〜!

「まだまだあ! 手札から速攻魔法『リミッター解除』発動! このターンのエンドフェイズまで、俺の機械族モンスターの攻撃力は倍になるぜ!」

「ば、倍!？」

『メカファルコン』 ATK3100 6200

『強化支援メカ・ヘビーウェポン』 ATK500 1000

「ろ、ろくせんにひやく……」

え、えつと……詰んだ? う、ううんまだだよ!

「行くぜ! ヘビーウェポンで『シャインエンジェル』を攻撃!」

「じゃ、『シャインエンジェル』のモンスター効果発動! デッキから攻撃力1500以下の光属性モンスターを攻撃表示で召喚するよ! わたしは『サイレント・ソードマンLV3』を特殊召喚!」

『サイレント・ソードマンLV3』 ATK1000

「へっ! そんな雑魚モンスター、俺のファルコンの敵じゃないぜ! 『メカファルコン』で攻撃だ!」

チャンス到来、だよ!

「手札から『オネスト』を捨てて効果発動! 攻撃モンスターの攻撃力分『サイレント・ソードマンLV3』の攻撃力をアップさせるよ!」

「な、なに〜!？」

『サイレント・ソードマンLV3』 ATK1000 7200

「迎え討つて! 『沈黙の剣LV3』!」

「ファルコンツ!？」

鋼太LP4000 3000

「くっ! だが『メカファルコン』はヘビーウェポンを身代わりに破壊を免れるぜ! そしてメインフェイズ2に最後のヘビーウェポンを『メカファルコン』にユニオン!」

『メカファルコン』 ATK6200 6700

「エンドフェイズ時に『リミッター解除』の効果を受けたモンスターは破壊されるが、ヘビーウェポンを装備した『メカファルコン』は破壊を免れるぜ!」

『メカファルコン』 ATK6700 3100 2600

「ターンエンドだ!」

「うう……わたしのターン、ドロー！」

何とか凌いだけど、虎の子の『オネスト』まで使ったのに、結局『メカファルコン』を倒すことが出来なかった……でも！

「このスタンバイフェイズに『サイレント・ソードマンLV3』はレベルアップ！ デッキから『サイレント・ソードマンLV5』を特殊召喚するよ！」

『サイレント・ソードマンLV5』 ATK2300

「更に魔法カード『レベルアップ』を発動するよ！ 『サイレント・ソードマンLV7』を特殊召喚！」

『サイレント・ソードマンLV7』 ATK2800

「うおっ!？」

「更に『ブレイドナイト』を召喚するよ。手札がゼロだから、攻撃力は2000だよ」

『ブレイドナイト』 ATK1600 2000

「反撃開始だよ！ 『サイレント・ソードマンLV7』で『メカファルコン』を攻撃！ 『沈黙の剣LV7』！」

これで倒せば……。

「甘いぜ！ トラップカード発動！ 『ゲットライド』！ 墓地から『強化支援メカ・ヘビーウェポン』を『メカファルコン』にユニオンさせるぜ！」

「えっ!？」

『メカファルコン』 ATK2600 3100

「迎撃だ！ 『ヘビーメタル・ソニック・ダイブ』！」

「きゃああああっ!？」

ユークLP1900

「サイレント・ソードマンが……ターンエンド、だよ」

「俺のターン、ドロー！ よし！ 俺は『強化支援メカ・ヘビーウェポン』のユニオンを解除して攻撃表示で特殊召喚するぜ！」

『メカファルコン』 ATK3100 2600

『強化支援メカ・ヘビーウェポン』 ATK500

「そして、手札から速攻魔法『地獄の暴走召喚』！ 墓地のヘビーウェポンを二体、特殊召喚するぜ。そっちも、他に『ブレイドナイト』がいれば出していいぜ」

「う……『ブレイドナイト』は一枚しか入れてないよ」

「そんなじゃ、特殊召喚した『強化支援メカ・ヘビーウェポン』を『メカファルコン』にユニオンだ！」

『メカファルコン』 ATK2600 3100

「これでトドメだ！『メカファルコン』で『ブレイドナイト』に攻撃！『ヘビー・ソニック・ダイブ』！」

「きゃああああつ！？」

ユーキLP800

「二体の『強化支援メカ・ヘビーウェポン』でダイレクトアタック！」

「ひゃああああつ！？」

ユーキLP0

「そこまで！ シニョールユーキの負けなノ〜ネ」

「うう〜……また負けちゃった」

ガツクリと肩を落としてデュエルリングを降りる。最近はいつもこうだった。

フェイバリットカードの『サイレント・ソードマンLV5』を眺めて、少し涙目になる。わたしのお気に入りなんだけど、上手く扱えた試しがない。

「向いてないのかなあ〜……」

中等部の頃から、勝率はあまり良いとは言えなかった。けど、高等部が上がってそれがますます顕著になってきた気がする。

「はあ……」

溜息を吐きつつ、机にカードを並べて考える。

「う〜ん……」

「……お？」

「え？」

わたしが『サイレント・ソードマンⅠV5』を手に唸っていると、後ろから興味深そうな声が聞こえてきた。

「それ、サイレント・ソードマンだよな」

「あ、うん……」

レッドの制服を着た、親しみやすそうな顔をした男子生徒。わたしは、この人を知っていた。

「えっと……御堂くん？」

「あれ？ 俺のこと知ってるの？」

「うん……入学試験、見てたから」

絵札の三銃士で、カッコ良くワンターニキルを決めていた御堂くんのことは、その時から知っていた。

絵札の三銃士。わたしのサイレント・ソードマンと同じく、あのデュエルキング、武藤遊戯が使っていたモンスター。わたしがサイレント・ソードマンを全然上手く使えないのに対して、御堂くんは凄く上手に絵札の三銃士を操っていた。レッド寮所属なのが、今でも信じられない。

「ああ、あの時か……あの時は、手札が揃い過ぎてただけだよ。完全に運だ」

そう言っただ謙遜する御堂くんだけど、わたしからすれば羨ましい。

「それでも凄いよ。わたし、全然運良くないから」

「そうなの？ え〜と、加藤さん、だったか？」

「うん。加藤友紀。よろしくね。御堂くん」

「ああ。よろしく。あ、そうだ。出来れば、名前で呼んでくれないか？ 妹がいるんで、昔から名前呼びの方がされ慣れてるんだ」

「えっ？ う、うん。じゃあ、え〜と……セツ、くん？」

男の子を下の名前で呼んだことなんて、数えるくらいしかなかったから、思わず疑問形になる。

「ああ、それでいい。ありがとう」

そう言っただセツくんは笑いかけてくれる。最初にも思ったけど、凄く親しみやすい、柔らかい笑顔だった。

「あ、それじゃあセツくんも、わたしのこと名前でいいよ」

「おっけ。ふむ……友紀、いや、ユーキちゃん、だな」

「ふえっ？」

“ちゃん”という聞き慣れない敬称に、少しだけドキツとする。

一方、セツくんはその呼び名が気に入ったのか、満面の笑みだ。

「ユーキちゃん……うん。なんかしっくりくるな。これでいいか？」

「え、えっと……うん」

今更ダメとも言えないし、わたし自身別に嫌なわけじゃなかったから、少しためらった後頷く。

「それで……どうしたの？」

「ん？ ああ、さっきデュエルしてただろ？ サイレント・ソードマン使って初めて見たし、絵札の三銃士とも無関係じゃないしで、少し気になったんだ」

無関係じゃない、というのは、多分デュエルキング・武藤遊戯のことだと思う。ていうか、さっきのデュエル見られてたんだ……。

「あはは……負けちゃって、恥ずかしいけど」

「まあ、誰だって負けることくらいあるし、それくらい何でもないだろ」

セツくんは、そう言って肩をすくめた。その後でブツブツと、「へビーウェポンの使い回しはいいとして……なんで『メカファルコン』にあそこまで拘ってたんだアイツ……」とか呟いていた。確かに……それはちょっと気になるけど。

「うん……でも、負けるの、いつもだから」

負けることもある、じゃなくて、勝てることもある、と言う方が正しい。

「いつも？」

「うん。全然勝てないんだ。高等部に来てからは、まだ一度も」

「……そうなのか？」

セツくんは意外そうな目でわたしを見る。それがなんとなく期待を裏切った気がして申し訳なくて、わたしは目を伏せる。

「そうなの。ごめんね？」

「や、謝られてもな。うん……そうだ！」

セツくんが、何かを思いついたようにパチン、と指を鳴らす。

「ユーキちゃんさえ良ければ、俺にも手伝わせてくれないか？」

「え？ 手伝わって……」

「デツキ構築。カードを並べて唸ってたってことは、今丁度調整中だったんだろ？」

「あ、うん。でも……いいの？」

恐る恐る、と言う感じで聞き返すと、セツくんは苦笑する。

「俺が言いだしたことだぞ？」

「そうじゃなくて……天音さん」

わたしの指摘に、セツくんはうつと息をつまらせた。

天音アテナ。わたしたちの学年なら、知らない人は殆どいないと思う有名な。まだ13歳でありながら高等部に飛び級してくる程の実力と、アイドル顔負けの容姿やスタイル。人当たりも良いから、入学してすぐにアカデミアの人気者になっちゃった凄い娘。その天音さんが、セツくんには思いつきりアプローチをかけていることも、やっぱり有名。

「アテナは……まあいいだろ。別に疚しいことするわけじゃないし、それはそうだと思うけど、それでもきつと天音さんは嫉妬すると思う。」

「じゃあ……お願いします」

それなのに、そう言っただけでセツくんの言葉に甘えたわたしも、ちょっと不思議だった。普通なら、憎からず想っている女の子にアプローチをかけられていながら他の女の子に声をかけるなんてって思はずなのに、セツくんにはそういうことを感じさせない不思議な才ラというか、魅力があった。

「おう。任せてくれ。きつと役に立てると思うから」

笑顔で握手を求めるセツくんの手を、わたしは取った。

その時が、全ての始まりだった。

第四期第二十五話「静寂の始まり・前編」（後書き）

こんにちは。

今回の見どころ：攻撃力6200の『メカファルコン』（笑）。デュエルはちょっとしたネタ兼弱かった頃のユーキちゃんなのですが、思いの外面白い感じで出来ました。使用モンスターが『メカファルコン』なのは、悠が好きだからです。遊戯王を始めた頃に使ってた。貰い物でしたが、イラストが好きだったので良く出して倒されてました（笑）。

一応ヘビーウェポンの使いまわし自体はそこそこ有用です。対象が『メカファルコン』である必要性は皆無ですが。

これは内容と全く関係のない話ですが、先日PSPが壊れました。といっても、使えなくなっただけじゃなく、ゲーム自体は出来ます。充電とかセーブとかももんぢありません。では何が壊れたのか？

……アナログパッドが砕けました。

あ、ありのまま起こったことを話すぜ！『ちょっとディスプレイでデスペラードカオスを使っていたら、アナログパッドが砕けた』
……な、何を言っているかわからん（ry

デスペラードカオス……俺のPSPをよくも（涙）！ 決してゲームが出来なくなっただけでもなく、金もないので買い替える程ではない損傷、というのがまた地味にイラつきます。

それでは、悠でした！

第四期第二十六話「静寂の始まり・後編」(前書き)

お久しぶりです！ いやホント、約三週間ぶりの投稿になります。長かった……。今回は結構、書くことが定まらなかつた感じですね。いつものように言い訳ですが。それでは、例によって難産だった(最近ずっとそう)第二十六話、ご覧ください。

第四期第二十六話「静寂の始まり・後編」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第四期第二十六話「静寂の始まり・後編」

セツくんは、まるで魔法使いみたいだった。

「勝者、オベリスク・ブルー女子、加藤友紀！」

「え……か、勝っちゃ……た？」

セツくんは助言を貰って、自分なりにデッキを改造して……その結果は、余りにもあっけない、あっさりとした勝利。

「すごいじゃんユーキ！ アンタ、いつの間にそんな強くなったのよ！」

「あ、う、うん……えっと〜」

興奮した様子で声をかけてきた友達に、わたしは曖昧な言葉をもらすだけ。正直、自分でも実感が湧かなかった。

一頻り友達と話終わった頃、セツくんが軽い調子で声をかけてきた。

「な？ 言った通りだろ？」

「セツくん……」

セツくんがしてくれたことは本当に僅かだった。デッキ圧縮に回転率。引きたいカードをドロ〜するにはどうするか。そんな、授業でも習うような基本的な知識を、授業より圧倒的にわかりやすく、噛み砕いて説明してくれた。わたしだけじゃなくて、他の誰を教えるにも過不足ない、なんていうか、本当に“先生”だった。

そんなセツくんがわたしにしてくれた“わたし”へのアドバイスは、

『序盤を乗り切れ。たったの二ターンでいい。そこでペースを掴めれば、後は普通にプレイするだけだ』

というだけだった。

『二ターン……』

『あくまで目安だけだな。ユーキちゃんのデッキは速攻型じゃないけど、ある意味速攻型のデッキよりも序盤にペースを掴む必要がある』

その言葉だけを頼りに作ったデッキで、わたしは勝った。

「セツくんの言った通り、二ターン耐えたら後は完封出来たよ〜」

そう。完封。相手に口くな抵抗も許さずに、あっさりと勝つことが出来た。呆気なさ過ぎて、逆に拍子抜けしたくらいだった。

「だろうな。この世界で『サイレント・ソードマンLV7』の封殺力はかなり圧倒的だ。序盤の序盤さえ乗り切れれば、後はそうそうやられないさ」

「この世界？」

ちよつと引つかかる言い回しに首を傾げると、何故かセツくんは少しだけ焦ったように眼を逸らした。

「あ、いや……アマチュアの世界ではってこと。ほら、流石にプロ相手には簡単にいかないだろうし、さ」

「あ、そっか。そうだよな」

その頃のわたしは、その言葉に何の疑問も抱かずに首肯した。まさか、セツくんが別の世界の人間で、その世界ではこの世界以上にデュエルの戦術が研究されている、なんて思いもしなかったから。

「まあ、これで念願の初勝利だな。ほい」

そう言っただけでセツくんが片手を顔の横に掲げる。その意味を察してわたしも手を挙げた。

パァンッ！ と小気味良い音を立てて、わたしとセツくんの手が音を奏でる。

「初勝利、おめでとう。ユーキちゃん」

「うん！　ありがとう。」

「また、何かあれば何でも聞いてくれ。思いのほか、こうやって誰かのデツキ構築手伝うのも楽しかったよ」

「……ありがとう。セツくん。本当に」

嬉しそうに笑うセツくんを見て、漸くわたしにも実感が湧いてきた。

勝ったんだ。

高等部に来てから、一度も勝てなかったわたしが、セツくんの手を借りてとはいえ、デュエルに勝った。その事実が、わたしの涙腺を緩ませた。

「あり、がとう……ありがとう。セツくん」

「あ……」

突然泣きだしたわたしに、セツくんはちょっと困った顔で頬を掻く。当然だ。いきなり目の前で人が泣きだしたら誰でも困惑する。

セツくんの反応はマシな方だ。

「……良かったな」

セツくんは、ただそれだけ言って、わたしの頭にポン、と手を置いた。たったそれだけのことで、わたしは酷く救われた気分になる。

正直。

わたしは物語のヒロインみたいに、友達が居なくて孤独だったとか、負け続けている自分を慰めてくれる友達がいなかったとか、そういうことはなかった。セツくんみたいに声をかけてくれた人も、心配してくれた人も、デツキ構築を手伝ってくれた人もいた。

けれど、結果を出したのはセツくんだけだった。

醜いって思うかもしれない。酷いって思うかもしれない。でも、どんなに優しくされても、どんなに手助けしてくれても、究極の所セツくん以外の人たちは、わたしの悩みを解決出来なかった。勿論声をかけてくれて、心配してくれたことは心の支えにはなった。でも、悩みの根本を解決するきっかけを作ってくれたセツくんとは、

重みが違った。

友達のことを、口だけとか、役立たずとか、そんな風に思いたくはないけれど。声をかけてくれただけの友人たちより、この瞬間セツくんは誰よりも“特別”になった。

その時はまだ、恋でも愛でもなかったけれど、間違いなくセツくんは、わたしの中で特別だった。

この人なら、わたしを強くしてくれる。

この人なら、わたしを助けてくれる。

この人なら、わたしを……。

“特別”に、してくれる。

「……ユーキちゃん？」

「あっ……な、何でもないよ〜」

訝しげなセツくんに、慌てて手を振って誤魔化す。

（今、わたし……）

何を、考えていたんだろう。自分の中に、得体の知れない何かがある。蠢いている。そんな、異常な感覚。

「って、なんか今の、すっごい中二病っぽい……」

何よ得体の知れない何か〜って。ゲームじゃあるまいし。

「ユーキちゃん？」

「あ、ううん何でもないよ〜！」

訝しげな顔を向けてきたセツくんに、慌てて手を振る。危ない危ない。

「それじゃ、俺はこれで。また、何かあったら相談してくれ。あ、別に何にもなくてもいいけど」

「あ、うん。ありがとうセツくん。セツくんのおかげでわたし、まだ頑張れそうだよ〜」

「そつか。それなら、良かった。じゃ、またな」

「うん」

セツくんとは、それから何度か話した。どれもわたしがプレイングに悩んだのを相談してただけだけど、セツくんは毎回親身になって話を聞いてくれて、そのお陰でわたしの成績も右肩上がりになっていった。肝心のアテナちゃんには負けちゃったけど……まあ、アレは性質の悪い夢だった、ということにしたい。

……少なくとも、この時点でのわたしは、セツくんのことを少し気になる男の子、としか意識していなかったと思う。それはきつとセツくんが恩人だという感覚もあつたし、何よりアテナちゃんと張り合うような自信はこれっぽっちもなかったから。だから、アテナちゃんには友達だと言つたし、わたしもそう思つてた。その意識が変わつたのは、きつとあの時。さだめちゃんが現れて、セツくんが突然アカデミアからいなくなつてしまつた後……。

「今日はタッグデュエルのお勉強なノ〜ネ！」

タッグデュエル、と言われても、正直あんまりピンとこなかった。中等部では、ずっとシングルデュエルしかしてこなかったし、デュエルの大会とかも、シングルデュエルの方が多かったから。

「それでえ〜わ、各自決められたパートナーとタッグを組んでデュエルをするノ〜ネ」

「パートナー、かあ〜……」

その時、脳裏に浮かんだのはセツくんだった。けど、アカデミアにいないセツくんがパートナーになる筈もない。わたしのパートナーは、田中くんというブルー男子の人だった。

「キミが、加藤さんかい？ ボクは田中康彦。今日はよろしく」

田中くんは、ブルーの男子にありがちな嫌味っぽい感じはしなくて、第一印象は結構悪くなかつた。

「ボクのターン！ ボクは『D・Dサイレント』を攻撃表示で召喚！」

デュエルも、ブルーに居るだけであつて凄く強かつた。これは後

で友達から聞いたけど、田中くんは女子の間でもそれなりに人気があるらしい。

「そこまで！ なノ〜ネ。田中&加藤ペアの勝ちなノ〜ネ！」

「よし、やったあ！ ボクたちの勝ちだね。加藤さん、フオーア
りがとう。助かったよ」

「そんな、こちらこそ〜。田中くん、強いね〜」

「そんなことないよ。一応ブルーなんだし、これくらいは当然さ」

田中くんはそう言って胸を張る。その姿に、セツくんの笑顔が重
なった。セツくんもそうだったけど、強い人はやっぱり自分の力に
自信を持つてる。それは、純粹にすごいと思う。わたしも徐々に成
績は良くなってきているけど、まだあんまり自信は持てないでいる
から。

「加藤さん」

「え？」

少しわたしが物思いに耽っていると、田中くんが声をかけてきた。
「あの、良かったらまたタッグ組んでくれないかな？ 今日タッグ
を組んでみて、ボクたち凄く相性いいと思うんだ」

「え、え？」

「じゃあ、ボクはこれで。出来れば、今言ったこと、考えておいて
欲しい」

「え、あの……？」

殆ど言うだけ言って田中くんは足早に去って行った。

「そりゃアンタ、あからさまにアンタに気があるんでしょうよ」

アカデミアのお昼休み。初めてのタッグデュエルから、何度かタ
ッグを組んだ田中くんのことを、友達の奈津代ちゃん（通称なっつ
ん）に話してみると、あっさりとその答えが返ってきた。

「……え？」

それでもわたしがきよとん、とすると、なつつんは溜息を吐いた。

「前から思っちゃいたけど、ユーキってばそういつの疎いよね」

「そう、かな〜？」

「そうよ！」

なつつんはダンツ、と力強く机を叩いて立ち上がる。

「わっ!？」

「ユーキ、アンタはあんまり目立つ方じゃないけど、結構可愛いの。わかってる？」

「またまた〜、なつつんってば冗談ばかり〜」

「冗談じゃないっての!」

「可愛いって言うのはほら、アテナちゃんとかのことを言うんだよ〜?」

「それは比較対象が間違ってる!」

「え〜……」

それ、結局アテナちゃんに劣るってことじゃあ……。

「あんな銀髪さらさらロリ巨乳天使な廃スペック美少女を比較に出しちゃダメ!」

「それはそうかもだけど〜……」

それでも、わたしが可愛いっていうのは言い過ぎだと思っ。

「言い過ぎじゃないわよ。ユーキ、アンタ中等部で何回くらいコクられた?」

「え? え〜と……七、八回?」

「ほら見なさい!」

「……………?」

「っだあ〜! やっぱりわかってない! 中等部三年間で七回も八回もコクられてりゃ充分モテよ! リア充よ!」

「そ、そうなの?」

「そうなの!」

「で、でもアテナちゃんとかきつともつと凄いや?」

「だから! あの娘を比較に出さない!」

「う……」

「なんでか、ついアテナちゃんを引き合いに出しちゃう。別に意識してやってるわけじゃないんだけど……。」

「いい！？ アンタは地味だけど、そこそこ容姿も整っててふわっとした雰囲気の癒し系なの！ 男心をくすぐるタイプなの！ 無自覚に男を寝取るタイプなのよ！」

「ね、ねと……？」

「というか、やっぱり地味ではあるんだ……。」

「寝取るタイプよ！ だってアタシが当事者だから！」

「え！？」

いきなりとんでもないことを言われた。なつつんはブツブツと「これだから無自覚は……」とか「何が『お前』といると疲れるんだ」

よ……『加藤の雰囲気が凄く心地良くて』よ……」とか呟いていた。

「そう言えば、なつつん中等部の時……」

「忘れなさい」

「う、うん……」

言いたいことを言って一先ず満足したのか、なつつんは席について、少しトーンを落とした声でわたしを諭し始めた。

「……康彦はアンタに惚れてるわよ。女子の間でも結構噂になってるし」

「そ、そうなの！？」

「そりゃ、毎回タッグデュエルの度に組んでたら噂にもなるわ。アンタの場合、御堂くんとどっちが本命か、とか言われてるし」

「ええっ！？ な、なんでそこでセツくんが？」

「だってアンタたち、仲良かったじゃない。まあ、御堂くんにはアテナちゃんがいたから、アンタと付き合ってる、とまで思ってる人はいなかったでしょうけど」

なつつんの言葉に、わたしは頭の中がグルグルし始めるのを感じた。

「セ、セツくんとわたしが……でもアテナちゃんいるし……セツく

んは特別で、でもそんなんじゃ……」

「……その様子じゃ、御堂くんの方が本命か。茨の道だね。あの怖い妹さんとかもいるし」

「ほ、本命……」

「違うの？」

「……」

何も言い返せなかった。顔が熱くなっているのがわかる。その時までには思いもなかった。或いは、敢えて見ないようにしてたその気持ち。

「はあ……けど、御堂くんは厳しいわよ。レッドだからって敬遠してる子もいるけど、良く見れば顔もイイし、勉強も出来てデュエルも強い。その内ライバルも増えるでしょうね。なにより……」

そこでなつつんは一息ついて、一つの空席を見やる。

「……フラれたみたいだけど、あの一撃必殺天使アテナちゃんが全カアピールしてるわけだしね」

「い、いちげき……？」

「ん？ ああ、アテナちゃんの通り名よ。入学試験からこっち、殆どのデュエルをワンキルかそれに準ずる破壊力で勝ちまくってるから、一部でそう言われてるのよ。アンタも似たような感じだったでしょ？」

「無限ループでね……」

ふっ、と思わず遠い目になる。

「まあ兎に角、そんな比較するのも間違ってるような廃スペック美少女相手に、モテとはいえ地味なアンタじゃ、そうそう勝ち目なんてないわよ？ 康彦辺りで妥協しとけば？」

「だ、妥協って……」

身も蓋もないなつつんの台詞に戸惑う。

「所詮十台の恋愛じゃない。そこそこ好条件の男が言い寄ってくるんならそれでいいじゃないの。態々手痛い失恋することないって」「失恋……」

やっぱり、そうなるのかな……。傍から見ていたセツくんのアテナちゃんは、とても楽しそうで、幸せそうだった。わたしじゃ、セツくんをあんなに楽しそうにしてあげることなんてできそうにない。そんな自信は、ない。

「でも……」

ズキン……。ツ、と胸が痛んだ。確かに、セツくとアテナちゃんはお似合いだ。あの二人が付き合ったら、とても幸せで、素敵な力ツプルになれると思う。

「でも……」

ズキン、ズキン、と痛みが増していく。

「……ま、そうよね」

なつつんはやれやれ、といった感じで苦笑する。わかってるんだと思う。わたしが、意外に頑固だったこと、知ってるから。

「うん……無理だよ」

だって、気づいちゃったから。

「気付いちゃったら……無理だよ」

どうして、何かにつけてアテナちゃんを引き合いに出していたのか。

「だって……」

ライバルだったからだ。同じ人セツくんを想う、乙女ライバルだったから。

「わたしの、初恋……だから」

諦めるなんて、出来ない。

「勝てるの？ あのアテナちゃんに」

「……勝つよ」

今は無理でも。

「絶対に勝つ」

もっともつと強くなって……いつか、必ず。

……それが、始まり。それから、さだめちゃんをはじめとしてライバルは増えたけど、それでもわたしにとって一番のライバルはアテナちゃんだった。

……アテナちゃんは、どうだったかわからない。わたしのことなんて眼中になかったかもしれないし、少なくともさだめちゃんより手強いとは思われてなかったと思う。

「……わたしは、違ったよ」

わたしが強くなれたのは、セツくんのお陰。わたしが強くなろうと思ったのは、アテナちゃん存在。

「感謝はしてるよ。アテナちゃんがいたから、わたしは強くなれた。絶対に負けたくない。そう思ったのは、アテナちゃんが初めてだったから」

「ユーキさん……」

「どうしようもないの。もう、どうしようもないくらい、セツくんのが好きだから……アテナちゃん」

わたしは、全力で……。

「アテナちゃんを……倒すよ」

第四期第二十六話「静寂の始まり・後編」(後書き)

おまけ(笑)

「ところでなつつん。なんで田中くんのこと呼び捨てなの？」

「え？ そりゃ、アタシも田中だもん。紛らわしいじゃない」

「あ、それもそっか」

(危ない危ない……若干天然入ってて助かったわ)

こんにちは。

今回は、時期的には第一期。そのユーキちゃん視点のお話になりますね。色々、後付けな感じの伏線もいくつか。

今回二人程タッグフォーオースキアラ出しました。田中を二人ほど(笑)。康彦くんの方は、まあ情報に敏い人なら知ってるでしょう。タッグフォーオースに於けるユーキちゃんの相方です。ただし、3まで事情は……まあ、調べてみてください。今回の話は大体それに乗っ取ってるんで。これがその理由だったんだよ！ みたいなの。

田中奈津代の方は、別にゲームでユーキちゃんと関わりがあったわけじゃないんですが、同じ田中姓で同じネフロード(正確には、康彦くんの方はその要素もある、というだけ)と、共通点が多かったので選出。中学時代、彼氏をユーキちゃんに寝取られた(笑)にも関わらず、友達やってる良い子。

ユーキちゃん、実は結構モテだった事実発覚。大抵の理由は、傍にいると心地良いから。ちなみに、同じ理由で女子からも嫌われていません。良いポジションニングです。

そしてついに判明したアテナの通り名。一撃必殺天使。人によっては、恐怖の、の枕詞が付きます。主にトラウマになった人が。

次回、恐らくはアテナVSユーキちゃん編クライマックス！ 恐らくは誰もが予想してなかったあのカードが飛び出します。何が出

るかはお楽しみ。
それでは、悠でした！

第四期第二十七話「レベルカンストの恐怖！ アテナの覚悟」（前書き）

早めの更新です。というのも、このデュエルの流れ自体がユーキちゃんの過去話を書くより前から決まっていたおかげですが。

それと、今回のデュエルに例によつて『命削りの宝札』が出てくるのですが……諸事情により、原作のものとはちよつと効果が違います。理由としては、どうやら悠はかなり以前からその効果を間違えて覚えていたらしく、通常魔法ではなく永続魔法になってたりします。ただ、今回のデュエルの流れは変えたくないのです、申し訳ありませんが以下の効果をアルカナ版『命削りの宝札』として認識しておいてください。申し訳ありませんでした。

・『命削りの宝札』 永続魔法

効果

手札が五枚になるようにデッキからカードをドローする。このカードは発動後五ターン目のスタンバイフェイズ時に破壊される。

このカードが破壊された時、自分は手札を全て墓地に送る。

以上です。悠の勝手な勘違いで効果を変えてしまい、本当に申し訳ありませんでした。以降、アルカナに於いてはこのような効果で通しますのでよろしく願います。

第四期第二十七話「レベルカンストの恐怖！ アテナの覚悟」

アルカナ〜切り札の騎士〜

第四期第二十七話「レベルカンストの恐怖！ アテナの覚悟」

「私は……モンスターとカードを一枚ずつセットして、ターンを終了します」

正直ミスティック・ソードマン系列の効果を考えれば、この行為にどれほどの意味があるかはわかりません。ですが、フィールドを空の状態でターンを終了するわけにもいかず、私は仕方なくカードをセットしました。

「わたしのターンだね。ドロロー！」

ユーキさんの手札はこのドロローで二枚。フィールドには攻撃力3300の『ミスティック・ソードマンLVMax』と、攻撃力が2500まで上昇した『サイレント・マジシャンLV4』の二体……純粋な攻撃力だけでも脅威ですが、『ミスティック・ソードマンLVMax』の効果も未知数です。

「わかつてると思うけど……ミスティック・ソードマン相手に裏守備なんて通じないよ。まあ、LVMaxに関しては、表側でも無駄だけだね」

余裕の表情のユーキさん。ですが、ミスティック・ソードマンに仕事はさせません！

「じゃあ……行くよ！」

「させません！ 私はトラップカード『威嚇する咆哮』の効果を使

います！ このターン、ユーキさんは攻撃宣言を行えません！」

「……仕方ないね。わたしはカードを一枚セットしてターンエンドするよ〜」

また、一枚の伏せカード……流石に、ユーキさんも息切れをしてくる頃だと思えますが……。尤も、私の方はそれ以上に酷い状況ですけど。

「私のターン、ドロー！」

「この瞬間『サイレント・マジシャンLV4』にカウンターが一つ乗るよ！」

『サイレント・マジシャンLV4』 ATK2500 3000

引いたのは……『光神テテユス』。私のデッキにおけるエンジンです。でも、この状況ではその効果を有効に使えません。けど！

「私も……」

「？」

「私も、負けるわけにはいかないですよ！ モンスターを反転召喚！」

このデュエルには、文字通り全てがかかっています！ セツのこ
と、終焉のこと、そして何より……。

「ユーキさんのことも、です」

私がこのデュエルに負けたら、私だけじゃありません。ユーキさんだって、大切なものを失う。そんな、気がするんです。戻れなくなる。きつと。だから……！

「私は……勝ちます！ リバースした『魔導雑貨商人』の効果を発動します！」

『魔導雑貨商人』 ATK200

「リバースモンスター……昆虫族!？」

「私は確かに天使族使いです……種族統一デッキと言うわけじゃありません！」

何より『魔導雑貨商人』の効果。デッキからモンスターを墓地に送り、魔法・罫を手札に加えられる効果は、私のデッキと相性が良

いです！

「デッキの上から魔法か罫が出るまでカードをめくり、手札に加えます！」

一枚目『緑光の宣告者』二枚目『虚無の統括者』三枚目『ヘカテリス』四枚目『シャインエンジェル』五枚目『紫光の宣告者』六枚目……。

「来ました！ 私は『命削りの宝札』を手札に加えます！」

「ドローカード……！」

サイレント・マジシャンを成長させてしまいましたが、背に腹は代えられません。

「そして『魔導雑貨商人』をリリースして『光神テテウス』をアドバンス召喚！」

「テテウス……！？ このタイミングで！？」

「そして私は当然、永続魔法『命削りの宝札』の効果を使わせてもらいます！ デッキからカードを五枚ドロー！」

五枚の中に天使族モンスターは……。

「当然、います！ テテウスの効果を発動します！ 『勝利の導き手フレイヤ』をオープンしてドロー！」

「くっ……でも、その前に『サイレント・マジシャンLV4』に最後のカウンターが乗るよ！」

『サイレント・マジシャンLV4』 ATKK3000 3500

これで、サイレント・マジシャンはレベルアップ条件を満たしました。けれど、それは承知の上です！

「一枚目……『コーリング・ノウア』！ ドローします！ 『アテナ』です。ドロー！ 『反魂のスピリチュア』！」

私のカード。ですが、今は正直いりません！

「更にドローします！ 『オネスト』！ ドロー！」

「っ……」

私がオープンしたカードに、ユーキさんが苦しげな顔を見せます。『オネスト』の有効性は当然ユーキさんも知っています。

「これで……！」

攻略の手は整いました！

「ドローを終了します。バトルします！『光神テテユス』で、『ミスティック・ソードマンLVMax』を攻撃します！『ホーリー・サルヴェイション』！」

「『オネスト』で倒そうとするなら無駄だよ！『ミスティック・ソードマンLVMax』の効果発動！ 戦闘を行う相手モンスターの効果を無効にし、ダメージ計算を行わずに破壊することが出来る！……そうだと、思いました」

「！」

「レベルモンスターの効果は、段階的に強力になって行きます。裏守備を問答無用で破壊しつつ、墓地で発動する効果すら発動させないことができるミスティック・ソードマン系列の最高レベルなら、戦闘の時に発生する破壊効果があると……」

「アテナちゃん……」

「ユーキさんが心理誘導してきたとしても、私はそれを超えて見せます！ どれだけ誘導しても、変えられない結果を見せて！ 手札から『朱光の宣告者』パーミリオン・デクレアラの効果が発動します！」

「わたしの知らない……宣告者！？」

そう。この『朱光の宣告者』は、ユーキさんが精霊界に行つてしまつてから手に入れたカード。ユーキさんが知らないのも当然です。「新しいカードを手に入れたのは、ユーキさんだけじゃありません！『朱光の宣告者』パーミリオン・デクレアラは、手札から天使族モンスターと墓地に送ることでモンスター効果を無効にして破壊します！ 私は手札の『シャインエンジェル』を墓地に！」

テテユスに切りかかるミスティック・ソードマンの前に飛び出した『朱光の宣告者』パーミリオン・デクレアラが、朱色の輝きと共にミスティック・ソードマンを呑みこんでいきます。

「きゃ……！」

「まだですよ！ 攻撃対象が居なくなつたことにより、戦闘の巻き

戻しが発生します！ テテユスで『サイレント・マジシャンLV4』を攻撃します！『ホーリー・サルヴェイション』！」

これなら……！

「それは、させないよ！ トランプカード『サイレント・チェンジ』！ 相手の攻撃宣言時、攻撃対象となったモンスターを破壊することで、そのモンスターよりレベルの低いサイレントと名の付くモンスターを特殊召喚してバトルフェイズを終了させるよ！ わたしは『サイレント・マジシャンLV4』を破壊してデッキから『サイレント・ソードマンLV3』を特殊召喚！」

『サイレント・ソードマンLV3』

「っサイレント、ソードマン……」

遂に出てきましたか。ユーキさんのフェイバリットモンスター……しかも、バトルフェイズを強制終了されてしまったので追撃もできません。

「……私はこれでターンエンドです。エンドフェイズに、手札から溢れた『コーリング・ノヴァ』と『反魂のスピリチュア』を墓地に捨てます」

私自身ではありますが、少なくともこのデュエルに於いては真価を發揮できません。

とりあえず、目先の脅威であったレベルカンストモンスターとサイレント・マジシャンを破壊することは出来ました。その上、手札アドバンテージも上回ることが出来ましたし、私の手札にはまだ『オネスト』も残っています。

「これで、形勢逆転です！」

「……そう思うのは、早いよ」

しかし、ユーキさんの表情は変わりません。

「強がっても無駄です！ そんなハツタリはもう、通じません！」

「強がり、かぁ」

私の指摘にも、ユーキさんは一切動揺しません。

「アテナちゃん、わたしがハツタリと心理誘導だけしか出来ない」と

思ったら大間違いだよ」

「え……」

「見せてあげるよ。これが、わたしの切り札だから。ドロ―！」
切り札……？ まさか、ミステイク・ソードマンみたいに……。

「このスタンバイフェイズに『サイレント・ソードマンLV3』を
レベルアップ！『サイレント・ソードマンLV5』を特殊召喚！」

『サイレント・ソードマンLV5』 ATK2300

「更に、これがキーカード！ 永続魔法『チートコード』！」

「ちーと、こーど……？」

「ゲーム得意じゃないアテナちゃんは知らないかもね。チートつ
て言うのは、要するにズルとか、騙すって意味。システムとか、デ
ータを改ざんしたりすることもあるんだけど……この『チートコ
ード』の効果は、一ターンに一度、レベルモンスター一体の効果
を発動条件を無視して発動することが出来るって効果だよ」

「それは、つまり……」

「そう。『レベルアップ！』とは違う、レベルアップモンスターの
正規特殊召喚。例え、スタンバイフェイズやエンドフェイズじゃな
くっても、発動条件を満たしていなくても、正規レベルアップを実
現させるチートコードだよ。『サイレント・ソードマンLV7』を
特殊召喚！」

『サイレント・ソードマンLV7』 ATK2800

「くっ……！？」

一ターンでサイレント・ソードマンが最高レベルまで……！ け
れど、例えテュスの攻撃力を上回っていても、『オネスト』がい
る以上、迂闊に攻撃は出来ない筈……。

「ねえ、アテナちゃん」

「なんですか？」

「永続魔法『命削りの宝札』のデメリット効果、知ってる？」

「……五ターン後に破壊され、破壊された時手札を全て捨てる効果
です。まさか……」

「そのまさか、だよ。わたしのフィールドに、LV5の効果で特殊召喚された『サイレント・ソードマンLV7』が存在する時、そのカードを墓地に送ってこのカードを特殊召喚するよ……来て。わたしの切り札。『サイレント・ソードマンLVMax』！」

『サイレント・ソードマンLVMax』 ATK3800

「レベル……マックス。攻撃力、3800、アルカナクラス!？」

二体目のレベルカンストモンスター……それも、ユーキさんのフエイバリット。一体、どんな効果が……。

「『サイレント・ソードマンLVMax』のモンスター効果。特殊召喚に成功した時、フィールド上の表側表示の魔法カードを全て破壊するよ！沈黙の世界へ！『サイレント・フィールド』！」

サイレント・ソードマンが、その手に持つ剣を地面に突き刺すと私の背後にそびえるヴァルハラが、音もなく崩れ落ちて行きます。

「わたしの『チートコード』。アテナちゃんの『神の居城 ヴァルハラ』と……『命削りの宝札』も、だよ」

「……それじゃあ」

「『命削りの宝札』は、破壊された時全ての手札を失う。アテナちゃん。手札を……『オネスト』を、捨てて貰うよ」

「あ……」

折角の『オネスト』が、使うことなく叩き落とされてしまいました。

「さあ、バトルするよ。『サイレント・ソードマンLVMax』で

『光神テテユス』を攻撃！『沈黙の剣LVMax』！」

「きゃあああああああつ!？」

アテナLP2750 1350

「ターンエンド。それとねアテナちゃん。『サイレント・ソードマンLVMax』が表側表示で存在する限り、アテナちゃんは魔法カードを発動出来ないから、そのつもりでね」

「っ……!」

これが……レベルカンストモンスター!

「ユーキさんの、切り札ですか」

「そうだよ」

淡々と、でも自信に満ちた顔で、ユーキさんは頷きました。それは、以前のユーキさんには見られなかった表情で、それだけ固い決意と覚悟を感じさせます。

「っ……………」

気圧されているのが、嫌でもわかります。こんな人に、私は勝てるのでしょうか。いえ、勝てるかと仮定して、勝っても良いのでしょうか？　こんな、簡単に気圧されてしまう程度の意志しか持たない私が。

「……………ドロー」

それでも。

「私は、モンスターを一体守備表示でセツト。ターンエンドです」
脳裏にちらつくのは、セツの顔。

「……………まだ、やる気だね。アテナちゃん」

どうしたって、諦めきれないものがあります。この戦いに、それが賭けられている以上。

「退くことは出来ません。例え、ユーキさんがどんな強い決意を持っていても。私は、私は……………！」

セツを、諦めない。

「思えば私は、ずっとそれだけしかありませんでした」

セツと出会ってからの私は、比喻でも、大げさでもなく、セツが世界の中心でした。セツに振り向いてもらうため。セツに選んでもらうため。セツを守るため。セツを取り戻すため……………。

「……………もう、セツのいない日々なんてあり得ません。セツを諦めた私は、ただの抜け殻。人形ですらありません」

これが、依存だとしても。これが、セツに負担を強いる行為だとしても。

「今の私は、セツ在っての私です。セツを諦めることなんて、死んでも出来ません」

「……そつ、か。でも、うん。わかるよ。その気持ち。でも、でもねアテナちゃん。いざという時、相手の幸せを想って退く勇氣も、必要なんだよ」

「そうかもしれないません。けど、違う。違うんですよユーキさん。真に相手を想うなら、相手の幸せのために退くんじゃなくて、自分が絶対、誰より幸せに見せる。その気持ち、大切なんだと思うんです」

「アテナちゃん……」

「独りよがりかもしれない。自分勝手な思い込みかもしれない。けど、私はセツと一緒に幸せになりたい。私が一番に、セツを幸せに見せる。今はただ、それだけを望みます」

「……そう」

ユーキさんは、しばらく眼を閉じて、何かを考え込んでいたようでした。そして、次に目を開いた時、その目には変わらず闘志を宿していました。

「なら、わたしと同じ。わたしは、わたしのやり方で、セツくんを支える。例えアテナちゃんたちと決別しても、必ず」

「……安心しました」

「どういうこと?」

「ユーキさんも同じなら、このデュエル。どちらが勝ってもセツは幸せです。誰よりも」

「……そうだね。じゃあ……最後の勝負を、始めようか」

「はい!」

「わたしのターン! ドロー!」

ユーキさんが引いたのが、リクルータークラスのモンスターであれば、私の負けです。いえ、場合によっては、モンスターの時点で負けが決まります。何故なら、私の守備モンスターは『聖なるあかり』……守備力ゼロの、このデュエルでは使い道のない効果しか持たない壁でしかありません。

「……」

「どうです……？」

「……命拾いしたね。わたしはカードを一枚セット。バトルするよ」
「っ……」

思わず、安堵のため息を吐きます。

「バトル！『サイレント・ソードマンLVMax』で守備モンスターを攻撃！『沈黙の剣LVMax』！」

「っ……！」

巨大な剣に貫かれて、淡い輝きは虚しくも散って行きます。けれど、その役目は果たしてくれました。

「『聖なるあかり』……モンスターさえ引いていれば、わたしの勝ちだった」

「……はい」

でも、状況は結局変わっていません。ユーキさんのフィールドには、攻撃力3800を誇る『サイレント・ソードマンLVMax』と、謎の伏せカードが一枚。対して私のフィールドは空で、手札もゼロ……絶望的、ですね。

「ラッキーは何度も続かないよ。魔法も使えず、フィールドにも手札にもカードがなく、墓地肥しやドロ促進で削れたアテナちゃんデッキはもう十枚ちよつと」

「……はい。次が、きつと最後です」

もうこうなつては、ドロ加速も出来ません。ドロカードは大半が魔法ですし、残り少ないデッキに、壁モンスターがどれだけ残っているかは疑問が残ります。

「きつとこれが、最後のドロ……」

眼は閉じて、雑念は捨てます。バクバクと暴れ出す心臓も、無理矢理抑えて、自分のデッキだけに集中します。

「……」

「お願いです。このデュエル、絶対に勝たなくちゃいけないんです。だから……だからお願いです。私のデッキ……」

「応えて……！ ドロー……！」

セツ……！

「……ありがとうございます」

「っ……!?」

「私の、勝ちです。ユーキさん」

瞠目するユーキさん。それもそうでしょう。手札、フィールド共にゼロ。ライフは無傷のユーキさんに対して、私はリクルーターのダイレクトアタックにも耐え切れない。そんな状態での、勝利宣言。「何を……引いたの?」

「……私は」

私はドローしたカードを、高く、高く掲げます。そして、呼び出します。私が引き当てた、勝利のカードを！

「私は、手札から『究極時械神セフィロン』を特殊召喚します!」

『究極時械神セフィロン』 ATK4000

「こ、攻撃力……4000!? そんな、何の前触れもなく、そんな攻撃力のモンスターが……!?」

「『究極時械神セフィロン』は、墓地にモンスターが十体以上存在する時のみ、手札から特殊召喚することが出来る私の扱える最高クラスのモンスター……そして、その効果は」

『究極時械神セフィロン』の身体が眩い光に包まれます。

「一ターンに一度、手札が墓地から、レベル8以上の天使族モンスター一体を、効果を無効にし、攻撃力を4000にして特殊召喚することができます!」

「っ……そ、そんな」

「私は……墓地から『ライトニングキア光神機 轟龍』を特殊召喚します!」

『ライトニングキア光神機 轟龍』 ATK2900 4000

「う、嘘……何もないところから、一瞬で攻撃力4000のモンスターが二体……!? そんな、そんなの……!」

「決めます! バトル! 『究極時械神セフィロン』で、ユーキさんの『サイレント・ソードマンLVMax』を攻撃! 『アカシックストーム』……!」

セフィロンの放つ波動が、サイレント・ソードマンに向かって突き進んでいきます。これで、これで……！

「まだ、まだまだよ……！　まだ、終わってない！　まだわたしには、伏せカードが残ってる！」

「！？」

「トランプ発動！『強制脱出装置』！　これで、フィールド上のモンスター一体を手札に戻す！」

「な、それじゃあ！」

「そう、そうだよ……！　これで轟龍を戻せば、まだわたしのライフは……っ！？」

ライフは残る。そう言おうとしていたユーキさんの目が、大きく見開かれます。そして、唇を噛みしめました。

「わたしは……わたしは……！」

「ユーキさん……？」

ユーキさんは、最後にふっ……と諦めたように、力ない笑みを浮かべました。

「わたしは……『サイレント・ソードマンLVMax』を、手札に戻すよ」

「……え！？」

セフィロンの射線上から、『サイレント・ソードマンLVMax』が音もなく消えて行きます。そして……。

「っ……あぁっ！？」

ユーキLP40000

セフィロンの放った光条は、容赦なくユーキさんを呑みこんで行きました。

「まだ、まだまだよ……！　まだ、終わってない！　まだわたしには、伏せカードが残ってる！」

アテナちゃんの逆転の一手には驚かされたけど、まだわたしには出来ることが残ってる！

「！？」

「トラップ発動！『強制脱出装置』！これで、フィールド上のモンスター一体を手札に戻す！」

一時凌ぎでしかないとわかってる。この攻撃を耐えたとしても、わたしの手札はゼロ。フィールドもゼロで、アテナちゃんのフィールドには攻撃力4000のモンスター……一瞬前とは真逆の状況に立たされてしまう。それでも！

「な、それじゃあ！」

見苦しくても、最後まで足掻いて見せる。そう、思った。

「そう、そうだよ……！これで轟龍を戻せば、まだわたしのライフは……っ！？」

残る。そう、言おうとした。けど。

「わたしは……わたしは……！」

その視界に、攻撃を受けとめようと剣を構えるサイレント・ソードマンの姿が映った時、わたしは思わず唇を噛みしめた。

「ユーキさん……？」

ふっ……と、力のない笑顔が自然に浮かぶ。

そう。そうだよね……。

「わたしは……『サイレント・ソードマンLVMax』を、手札に戻すよ」

「……え！？」

それが、わたしの選択だった。アテナちゃんだけじゃなく、今にも攻撃を受けようとしていたサイレント・ソードマンまでもが、驚きに目を見開いたような気がした。

迫り来る光の奔流。わたしの視界が、白く、白く染まった。

「ユーキさん！」

がくり、と力なく頂垂れているユーキさんの下に、慌てて駆け寄ります。

「ユーキさん、どうして……？」

どうして、サイレント・ソードマンを戻したのか。あそこで轟龍を戻していれば、少なくともあのターンで負けることはなかった。もしかしたら、逆転の可能性だってあったかもしれない。なのに……。

「ダメ、だよ……」

「ダメ……？」

あれだけの決意と覚悟を持って戦っていたユーキさんが、意味もなく諦める筈がありません。いえ、諦めたにしても、サイレント・ソードマンを戻す意味は……。

「勝てたかもしれない……逆転出来たかもしれない。でも……」

ユーキさんは、その手に持ったサイレント・ソードマンのカードを抱きしめます。

「このカードだけは……この、サイレント・ソードマンだけは、破壊させない」

「どうして、そこまで……」

「だって……」

ユーキさんは、サイレント・ソードマンのカードを見つめて、力なく笑いました。

「だってサイレント・ソードマンは、絆だから」

「絆……？」

「セツくんと、わたしを結び付けてくれた、何よりも大切なフェイバリットだから……サイレント・ソードマンを盾にして、生き延びるようなこと、出来ない……」

「ユーキ、さん……」

「ゴメンね……サイレント・ソードマン。わたし、わたし……また、負けちゃった」

涙を流しながら、カードを抱きしめるユーキさん。

「頑張ってくれたのに……裏切るようなこととしてゴメンね……」

そう言っただけで静かに嗚咽を漏らすユーキさんの胸元が、ポウ……と僅かに輝きました。

「あ……」

『……………』

サイレント・ソードマン。沈黙の騎士は、あくまでも静かに、ユーキさんの頭を優しく撫でて、その姿を消しました。

「今のは……精霊？」

「そう、だったんだ……」

ユーキさんは、尚も強くカードを抱きしめます。

「ずっと、見守ってくれたんだよね……」

サイレント・ソードマンは、言葉を発さない。自己主張をしない精霊だったから、わからなかったのでしょうか。その沈黙の騎士が、一瞬とはいえ現れて、ユーキさんを慰めた……。それだけ、強い絆があったから。

「わたし、もっと強くなるよ……貴方のマスターに相応しくなれるように……もっと、もっと……頑張るから……っ！」

「ユーキさん……」

それ以降は言葉にならず、とめどなく流れる涙をそのままに、ユーキさんは泣いていました。

「一緒に、行きましょう」

『……………』

「セツを取り戻して、皆で幸せになるんです。それには……ユーキさんの力が必要です」

「アテナ、ちゃん……」

「デュエルの前に、言いましたよね？ 全てを賭けるって……私が望むのは、それだけです。一緒に戦いましょう。そして、セツを……」

『……………』

「ユーキさん……」

「……わかつ、たよ」

長い沈黙の後、ユーキさんは小さくそう呟きました。

「全部、話すよ。セツくんのこと。エンヴィーのこと。わたしの知
っていること、全部」

「……お願いします」

「でも、でも今は……もうちょっと」

「……はい」

そのまま、ユーキさんはまた、静かに泣き始めました。そんなユ
ーキさんの背を撫でながら、私はより強く、セツを取り戻す意志を
固めるのでした。

第四期第二十七話「レベルカンストの恐怖！ アテナの覚悟」（後書き）

こんにちは。

ええ、まあ何を言いたいかはわかります。皆さんの心の声を代弁して見せましょう。究極時械神出ちゃったよ！

流石にこのカードを使うか否かは悠自身かなり葛藤したのですが……。アテナのデッキに物凄く相性がいいのと、OCG版効果の究極時械神の効果が土壇場からの逆転劇に非常に相応しかったことでの大抜擢です。前回のあとがきで言っていた誰も予想しないであろうカードとはコレのことです。

そして、今回登場したオリカは以下の四枚。『ミスティック・ソードマンLVMax』『サイレント・チェンジ』『チートコード』『サイレント・ソードマンLVMax』。以上四枚は、後ほど活動報告にて。後日オリカ紹介にもアップします。

さて、これでユーキちゃん編が終わり、遂にヒロインが終結します。いやぁ……長かった。物凄く長かった。第二期の最後にアテナが離脱してからというもの、入れ替わり立ち替わり全然揃わなかったヒロインがやっとこさ集まりました。そして次回一話のインターバルを挟み、とうとうセツ編。そしてクライマックスへ……。長かったアルカナも、とうとう終わりが見えて参りました。どうか最後までお付き合いの程、よろしく願います。

それでは、悠でした！

第四期第二十八話「勝たない!？」（前書き）

徐々に更新速度が戻ってきました。といっても、ぽっかり時間が空いたので書く時間が取れたと言っただけなんです。あと、やっぱりさだめ視点は書き易い。

というわけでインターミッションです。タイトルの意味は、ラスト付近にて。今回目立っているのは……ルインかな？

第四期第二十八話「勝たない!？」

アルカナく切り札の騎士」

第四期第二十八話「勝たない!？」

「それでは、今ユーキさんの中に終焉は既にもいないんですね？」

「終焉じゃなくて、エンヴィー」

ユーキさんは訂正してから、アテナの質問に頷いた。

「元々、エンヴィーが器を必要としていたのは失った力を取り戻すためだったみたいだから。ほんの一年ちょっとだけど、アテナちゃんたちが集まってきたことで急速に力は戻って、最近はもう独立してるよ」

さだめたちが集まって、世界の歪みが増した……。

「何か、聞けば聞くほどアテナ元凶だね」

「うっ」

さだめの指摘に、アテナが目を逸らす。

「最初に終焉の花嫁になって？」

「ぐっ……!」

胸を押さえて呻く。

「精霊になってからは取り逃がしてさだめとお兄ちゃんが巻き込まれて」

「うっ……!」

目尻に涙が溜まってきた。

「こっちの世界に引き寄せた挙句ユーキさんを巻き込んで……と」

「う、うう……」

アテナがふるふるすると震えだした。

「うわあ〜っん!!!」

遂に爆発して隅の方で小さくなってしまった。

「……その辺にしておけ」

「はあい」

一頻りアテナをイジメて満足したさだめは改めてユーキさんに向き直る。

「いじめっ子ですわね……」

「あれがコミュニケーションの一種なのだろう。気持ちわかる後ろで何か言ってるけど、とりあえずスルーして質問する。」

「それで、ユーキさん。何よりも聞きたいことがあるんだけど……」

「……うん。なんでも聞いて。さだめちゃん」

神妙な顔でさだめを見るユーキさんに、さだめも真剣な表情で尋ねる。

「お兄ちゃんとヤツたの？」

「ちよつと待て」

「何エース。さだめは今、とてつもなく大事な質問の答えを待っているところなんだけど」

「後にしろ!」

「や、ヤツてないよ!??」

「貴様も答えんない!」

「なら良し。さだめにはもう聞くことがないよ」

「もっと大事なことが他にいくらかでもあるだろうが!」

「はっ!?!? そうか。そうだね……」

「全く、貴様はもう少し……」

「ユーキさん! 記憶を失ってからのお兄ちゃんとの生活について詳しく!」

「もう貴様は黙れ!」

エースが本気で剣を抜きかねないので、エース弄りもこの辺にし

ておく。

「いや、エースは弄ると楽しいね。お兄ちゃんが一々喧嘩売ってた気持ちがあったよ」

「ジャック！ この妹地下牢にでも放りこんで来い！」

「いえエース。さだめ様は正直、私の手には余りません」

「で、結局お兄ちゃんはどうして記憶を失ったの？」

「何事もなかったかのように話を戻すな！」

エースがまだ何か喚いているけど、お兄ちゃん直伝のスルーでユキさんの言葉に耳を傾ける。

「わたし……とエンヴィーとデュエルした時に受けたダメージが切欠になっただんだと思う」

「切欠？ 主原因じゃなくて？」

その質問には、ルインが答えた。

「……元々、彼の精神は限界だった。この世界に来てから……来る前から」

チラリ、とさだめを見てから、ルインは言い直した。

「……お兄ちゃん、さだめのことずっと守ってきたからね。たった一人で」

お母さんも、お父さんも助けてくれなくて……それどころか、守っているさだめ自身からこそ沢山の痛みを受けて。

「……この世界に来てからも、彼の精神はいつも崖っぷちだった。

ここ最近は特に顕著で、心の支えとしていた少女の失踪から始まり、妹の自殺未遂、友人の裏切り、お姫様の死……」

ルインの言葉に、アテナ、さだめ、ユキさん、希冴姫さんの全員が暗い顔で俯く。さだめたちが、どれだけお兄ちゃんに負担を強いていたか、それがよくわかる。

「……私も、全てわかかっていて何も出来なかった。現状の幸せに甘えて、彼を助けてあげられなかった。これがきつと、私の罪」

怠惰。でもさだめは、ルインが決して怠惰に過ごしていたとは思っていない。

「それは違うよルイン。ルインは十分、お兄ちゃんを氣遣つてた」
「……そうですね。思えば近頃は、ルインさんが無意味に煽つて騒動を大きくしたり、セツに負担がかかることをしてはいなかったです」

「……わたくしの看病や、セツ様自身の看病。女神としてのプライドも度外視でセツ様が家事をするのを代わっていたのは知っていますわ」

「……そんなこと、ない」

さだめたちの言葉にも、ルインは首を振る。

「私は、貴女たちにそれを伝えることをしなかった。私たち全員で、彼を休ませてあげることが出来れば、まだ……」

「それは、わたしたちの問題だよ」

「そうです。私たちが、セツに依存し切つて何も見ようとしなかったのが原因です」

「気付いて差し上げることが出来なかった自分自身を棚に上げて、ルイン様を責める様な恥知らずはできませんわ」

お兄ちゃんは皆の中心で、でもだからこそ、独りだった。さだめたちは縋るばかりで、お兄ちゃんの負担になるばかりだった。

「……張りつめて、気力だけで持っていた彼の心が、彼女とのデュエルで切れた。彼は……セツは言っていた。今倒れたら、立ち上がれない……だから今は、どんなに辛くても進み続けるしかない、と」
歯を食いしばって、折れそうな心を無理矢理奮い立たせて、お兄ちゃんに戦つて……。

「負けて、しまったんですね……」

「記憶を失ったセツは、いつもは被っていた人当たりのいい明るい仮面を被れていない。今のセツは、記憶を失っているけれど、限りなく素の彼に近い」

お兄ちゃんは、自分を演じている。そのことは、さだめたちもわかってた。けど、演じているといつてもそれは別に嘘のお兄ちゃんというわけじゃない。けど……。

「……セツくんは、泣いてたよ」

「え……？」

小さく呟いたユーキさんの言葉に、全員が注目する。

「記憶を無くして、全ての柵しかくから解放されて……泣いてた。それが、嬉し涙だったのか、無くした記憶を惜しんでの涙だったのかはわからない。でも……」

ギリ、と下唇を噛んで、ユーキさんは絞り出すように続けた。

「わたしは……っ！ なければいって、思った……！ セツくんを苦しめるような、涙を流させるような記憶なら……なくなつたままでもいいって……そう、思った。だから隠した！ さだめちゃんたちのこと、全部隠して、“ただの”セツくんとして……わたしが。そう、思ったから……」

それが、間違っていたとは思えない。立場が違えば、さだめたちだつて同じことをしたかもわからないから。

「……それでも、彼は守ることを選んだ」

でもルインは、冷静にそう指摘した。ユーキさんはコクリと頷く。「セツくんはわたしを……エンヴィーを守る騎士になった。そんなこと、しなくてもいいのに……アテナちゃんたちと殺し合うセツくんなんか、見たくなかった」

「だから、一人で私と……？」

ユーキさんは頷く。

「アテナちゃんと……さだめちゃんを退ければ、なんとかなるって思った。セツくんがいない今、実力的に一番上だろう二人に勝つて、退かせれば……」

でも、無理だった。多分、ユーキさんもわかってたと思う。例えさだめたちに勝つて、さだめたちを退かせたとして、状況は何も変わらない。

「ねえ、さだめちゃん」

「なに？」

「厳しいことを言うけど、セツくんが苦しんだ一番の原因は、さだ

めちゃんだよ」

「……わかつてる」

言い訳のしようもない。まともじゃなかった、なんて言い訳は、さだめにとってもタブーだ。

「記憶を取り戻せば、セツくんはきつと苦しむよ。もしかしたら、今度こそ心が耐え切れないかもしれない。……それでも、セツくんの記憶を取り戻したい？」

「取り戻したい」
即答した。

「これは、さだめのエゴだけど……お兄ちゃんに忘れられたさだめは、何者でもなくなってしまうから。さだめはさだめのために、お兄ちゃんに記憶を取り戻して貰いたい。それを、誤魔化すことはしない」

「私も……セツには思い出して貰いたいです」

さだめの言葉に、アテナも頷いた。

「それに、それでセツが苦しむのなら、今度こそ私が支えます。セツを……」

「……同意ですわ」

希冴姫さんも、強い目で頷く。

「わたくしは、騎士の本分を果たせませんでしたわ。ですから、今度こそ本当の意味で、セツ様をお守りします。そのためにも、記憶は取り戻して頂かねばなりませんわ」

「……私は、どちらでも構わない」

ルインだけは、少し違った。

「例えどちらでも、彼が彼であることに変わりはない。記憶があるに越したことはないけれど……」

ルインはさだめたちを見渡す。

「……やっぱり、過去のアドバンテージがなくなる分、記憶がないままのほうがいいかも」

「ちよっ!?!?」

「ルインさん!？」

とんでもないことを言いだしたルインに、思わず詰め寄るさだめとアテナ。

「……ふふ」

何がおかしかったのか、ユーキさんが小さく微笑む。

「結局……恋愛バトルなんだね」

「? 当たり前じゃん」

「……私たちは、いつもそう」

「セツとの恋が、何時でも私たちの中心でしたからね」

そう。思えば何時だってそうだった。

一年の頃、さだめとアテナがぶつかったのも。

アテナが失踪したのも。

さだめが自殺未遂しかけたのも。

ユーキさんが終焉になったのも。

希冴姫さんがお兄ちゃんを庇って一度死んだのも。

「……なんだ。結局、お兄ちゃんが全ての元凶じゃん」

「ですね。セツに恋してなければ、色んな騒動がなかったことになりそうです」

今ここにお兄ちゃんがいれば、きっと苦々しげに唸っていたことだろう。

「ま、というわけでお兄ちゃんには色々思い出して貰うよ」

「そうですね。いい加減決着も着けて貰わないとですし」

「それもまた負担にはなるのでしょうが……」

「それは、彼自身が撒いた種」

「皆容赦ないね」

ユーキさんが呆れたように苦笑いする。

「大丈夫! ユーキさんも含めたさだめたちなら、絶対お兄ちゃんを助けられるから!」

「今まで支えて貰った分、お返ししないといけませんしね!」

「さだめちゃん……アテナちゃん……」

ユーキさんは迷っていたみたいだけど、やがて吹っ切れたのか、うんっ！ と大きく一つ頷いて笑顔を見せた。

「じゃあ、考えよっか。セツくんの記憶を取り戻す方法」

その言葉に、全員で頷いた。

が、話し合いを始めたところで全員とあることに気が付いた。代表してさだめが思ったことを口にする。

「と言つても、ぶっちゃけデュエルで勝てばいいんじゃないの？」

「身も蓋もないな！」
だって。

「デュエルで記憶が飛んだなら、デュエルで取り戻すのが筋でしょ。どうせほつともお兄ちゃんは闇のデュエルを仕掛けてくるだろうし、そこで完膚なきまでにメタメタにしちゃえば、それで記憶戻るんじゃないの？……メツタメタにしてやんよ！」

「……そのデュエルで勝てないのが、一番の問題だよ。さだめ」
ネタも織り交せて軽く言うさだめに、呆れたような凜がそう答える。

「セツ先輩、ホントに強いよ。なんて言うか、タクティクスやセンズ、引きもそうだけど、もつとこう……別次元の強さ？」

「そうだな。なんつーか、本能的に“勝てない”と思わせちゃうような強さがあるぜ。探せばいくらも隙はあるんだろうが……それすらも捻じ伏せるような力だ」

実際にお兄ちゃんと闇のデュエルをした凜の剣士さんは揃って勝てないと評する。

「……まあ、ぶっちゃけ主人公補正に加えて強敵&ダーク化補正も付いてるようなもんだしね……」

さだめは皆に聞こえないように、小さくそう呟いた。これだけとことん補正に守られていれば、そりゃ勝てないよ。

「……さだめさんから見て、セツはどうですか？」

アテナのその若干曖昧な質問に、さだめは少し悩みながら答える。
「ん……とりあえず、お兄ちゃんのプレイスタイルは後の先を取

る形で、さだめと同じく相手に合わせたデッキを組んでくることが多いよ。だから、相手するのは結構つらいと思う」

正確に言えば、さだめが相手の弱点を突く攻撃型であることに對して、お兄ちゃんも相手のデッキに對する防禦型のデュエルタクティクスを組んでくる。

「だから、さだめのデッキ程のえげつなさはないけど、付け入る隙はかなり少ないタイプ」

「自分で言いますか……」

「ならば、まずすべきは奴の予想を外すことか。とはいえ……」

「此方も使い慣れないデッキで、どれほどセツ様に対抗できるかは疑問ですわね」

「うん……私も、リチュアを使い慣れてないことが原因で一氣に不利になったし……どうして先輩は、あんなに易々といつもと違うデッキを使いこなせるの？」

「元々さだめもお兄ちゃんも、特定のデッキだけをメインに使ってたわけじゃないからね。デッキを組み換えてもパフォーマンスが落ちないのはさだめたちの特権だよ」

むしろさだめたちからすると、この世界の人たちは自分で使うデッキを限定することで、可能性を狭めているようにも思えるくらい。まあ、この世界には遊戯王ウィキみたいな情報交換サイトとかはないし、一つのデッキを追求するので精一杯なのかもしれないけど。

「じゃあ、セツの相手はさだめさんがするんですか？」

「そうしたいところだけど……」

正直、さだめはお兄ちゃんに勝てる自信がない。そもそも産まれてこの方、ずっとお兄ちゃんに頼り切りの生き方しかしてこなかったから、さだめの中でお兄ちゃんはかなり絶対的なもので、さだめがガチで戦って勝てる、というビジョンがどうしても浮かばない。

「勝てるビジョンが浮かばない、というのは、私だって同じですね……間近でセツのデュエルをずっと見てきましたし……セツは強い、っていう印象が頭にこびりついてますから」

そして、それは全員同じだった。いざ、お兄ちゃんとデュエルして勝つ自信があるか、そう聞かれると、どうしても首を横に振らざるを得ない。それくらい、お兄ちゃんは強い。

「……どちらにしても、凜。お前はやめとけ。怪我は大丈夫だったにしても、ダメージ全部がなくなつたわけじゃねえんだ」

「そんなの、剣士さんも同じです。むしろ、剣士さんの方が……」
確かに、ついさっきお兄ちゃんに殺されかけた二人に任せるのは苦しい。何より、これはさだめたちの手で決着を着けたい。

「とすると……」

さだめとアテナ、ユーキさんにルイン。希冴姫さんはデュエルをする人じゃないから除外するとして……エースもかな？

「……いや、我には荷が重いな。我も所詮、デュエルの精霊でしかない」

「私も……実力的に勝てそうにない」

エースとルインはそう言って辞退した。となると……。

「わたしたち、ですね……」

さだめ、アテナ、ユーキさん。この三人の中から、お兄ちゃんとデュエルする人間を選ぶことになる。当然、さだめだってアテナだって、多分ユーキさんも、自分の手でお兄ちゃんを取り戻したい。けど、事が事だけにこればかりは我儘とか感情で突っ走るわけにもいかないし……。

「……ねえ、ちょっといいかな？」

その時、しばらく黙ってさだめたちの話を聞いていたユーキさんが手を挙げた。

「なんですか？ 何か案が？」

「うん。みんなの話し合いを聞いていて、やっぱりこれしかないかなつていうのがあるから」

これしかない？ つまり、考えがあるってこと？

「それは？」

「うん。みんな、セツくんはどうやって勝つか、そればかり考え

てるけど、結論はもっとシンプルだと思っただ」

「シンプル……とは？」

「簡単だよ」

こともなげに、ユーキさんはピツ、と指を立てて解決案を提示した。

「勝たない。これが、唯一のセツくん攻略法、だよ」

そう言っつて、ユーキさんは自信ありげに微笑んだ。

第四期第二十八話「勝たない!？」（後書き）

こんにちは。

若干いつもより短いですが、まあ所詮インターミッションなのでこのくらいでご容赦ください。

ヒロインが全員揃って会話するなんて、番外除けばいつ以来でしょうか？ いやむしろ、番外くらいでしかなかったような気も……。ついでに、何だかんだ久しぶりのさだめな気がします。二ヶ月ぶりくらい？ うわあ……。

何気にルインはセツの事を気遣って大人しく、且つ労わるように行動していた事実。少なくとも、三期に入って以降、ルインは常に一歩引いて騒動を起こさないように行動していました。例外は入学式。あの時は元気付けるといふ名目だったので。そしてルインだけが、セツを精神的に追い詰めるような行動を取っていないのもヒロインとしてはポイントだと思っています。

ラストに向けて加速してきたアルカナですが、明日から四日間程はバイトの研修があるので更新は難しいかもしれません。ようやくセツとのデュエルだというのに申し訳ない。なるだけ早めにアップ出来るように頑張ります。

それでは、悠でした！

第四期第二十九話「記憶を取り戻せ！ 目指すは敗北！？」（前書き）

こんにちは。

前回あんな書き方をした所為か、みなさん結構色んな予想を立ててくれました。今回はその回答編になります。デュエル自体は、まだほんの触りだけです。

第四期第二十九話「記憶を取り戻せ！ 目指すは敗北！？」

アルカナく切り札の騎士く

第四期第二十九話「記憶を取り戻せ！ 目指すは敗北！？」

「……やはり、来たか」

見渡す限りの闇、闇、闇……。終焉の影響か、一面を闇に包まれた空間に、セツは一人佇んでいた。

「お兄ちゃん……エンヴィーは？」

「ここにはいない」

さだめの問いに、セツは端的にそう答える。

「友紀と連絡がつかなくなった時点で、この場所が突きとめられることはわかっていた。敵が来るとわかっている所に、態々庇護対象を放置するようなバカはしない」

それも当然だろう。普通でもそうするだろうし、用心深いセツのこと、尚更用心して隠している筈だ。

「お前たちに負ける気は微塵もないが、一度に相手できる人数は限られている。何処の誰とは言わんが、俺と誰かを戦わせている間にエンヴィーを狙う……等と言う狡い戦略を立ててくるとも限らんからな」

「……あの、さだめを見ながら言わないでくれる？ さだめ、そこまで小悪党じゃないよ？」

「よく言いますね。実際それを提案してた癖に」

「ぐむっ……」

友紀の“勝たない”という言葉から真つ先にさだめが連想したのがそれだった。別にセツに勝たなくても元凶であるエンヴィーを倒してしまえば解決じゃないか？ と。

「しかし……お前がそちら側に着くとはな……友紀」

「セツくん……」

言葉を向けられた友紀は、僅かに顔を俯かせ、しかしすぐに顔を上げた。

「……ゴメンね。セツくん。でも、わたし「言い訳は良い」……！」

友紀の言葉は、セツに届く前に封殺される。

「……残念だよ。俺が何者か教え、導いてくれた君が、まさか俺の敵に回るとは」

一瞬だけ悲しげに顔を歪め、すぐに目つきを鋭いものに戻す。

「わたしは……！」

「黙れ！ 最早、誰であろうと関係ない！ 俺がエンヴィーを守る障害になるのなら……俺はっ！……全て、排除するだけだ」

元々は一般人だったとは思えないほどに濃密な殺気が周囲を満たす。思わず、全員の頬を冷汗が流れ落ちる。

「コイツ……オレたちと戦った時より更に冷酷さを増してないか？」

「……多分、余裕がないんだよ。水原さんが最後に見せた抵抗とか……自惚れかもしれないけど、わたしがこっちについたことで」

自分が本当に正しいのか。いや、正しくないことくらい、セツはわかっているだろう。それでも、考えてしまうのだろう。困難にぶつかっても尚、乗り越えて見せる凜たちの姿に。自分から離れ、彼らについた友紀に。セツの心は揺れていた。

「もうやめてくださいセツ！ 私たちを排除して、エンヴィーの敵を排除し続けて……その先に何が待っているのか、セツはわかっている筈でしょう!？」

それなら、とアテナが大きく声を張り上げて、説得を試みる。しかし、そんなアテナの悲痛な叫びも、セツには届かない。

「わかっている。ああ、わかっているとも。俺がエンヴィーを守り続けて、そして辿りつく未来。それは……全ての、終わりだ」

終焉。セツにはわかっていた。否、誰にでもわかることだ。終焉たるエンヴィーを庇い続ければ、いつか全てが終焉の闇に沈む。わかってる筈だった。

「じゃあどうして!? 全てを終わらせて……終焉に導いて、それでどうなるんですか!?!」

「始まりだ」

「え……?」

アテナの問いに、セツは静かにそう答えた。

「始まりに終わりがあるように、終わりの後には必ず始まりが待っている。終焉が、逃れ得ぬものならば、俺はその先の始まりをこそ渴望する! 例え世界と共に滅びても、新たに始まる世界で、俺は必ずエンヴィーを探し出す。そして……今度こそ守るんだ。本当の意味で、共に歩む未来を」

絶望の先に、セツは希望を見据えている。いや、未来に絶望しかないからこそ、その更に先に希望を繋ぐしか、彼には残されていないのだから。

「それは……ただの自暴自棄」

ルインが冷静に指摘するが、セツは聞く耳を持たない。

「理想と現実。俺はそのどちらも等しく見据えているだけだ。俺は、俺の理想のために、現実を切り捨てた……それだけだ」

「……らしく、ない」

これ以上答えることはない、とばかりに視線を切るセツに対し、小さく呻くように、さだめが呟いた。

「なに?」

「そんなの、お兄ちゃんらしくない!」

過去のセツを、誰よりも深く知っているが故に。今のセツは、さだめには許せない。

「お兄ちゃんは、確かに何時も理想を追ってた。でも、それは現実

を諦めて追うものじゃなかった！ お兄ちゃんなら、現実いまを変えることで、理想みらいを掴む。現実いまを捨てて理想みらいを掴む？ そんな、妄想でしかないことを叫ぶお兄ちゃんは……らしくないよ」

「黙れっ！」

ドスツ！ と音を立ててセツの持つ騎士剣が床にめり込む。

「今更、そんな言葉で何が変わる！？ 相容れぬ俺たちがわかりあうことなんて出来やしない！ それでももし、わかりあうことがあるとすれば……」

ジャキン、と剣が変形し、デュエルディスクとなってセツの腕に装着される。

「コイツで語れ。決闘者デュエリスト」

言葉は届かない。最初からわかっていたこととはいえ、一同は落胆を隠せない。しかし、そんなことで落ち込んでいる暇はなかった。

「さあ！ 誰が戦う！？ お前たちの意志・覚悟・決意・理想……その全てを砕いて見せよう！」

セツの求めに、一歩進み出る者がいた。

「……私が」

アテナだった。

「私が、貴方の相手です。セツ」

話し合って決まったことだった。セツの相手はアテナがやる。そして、それは……。

「……やはりな」

セツの、予想通り。

「……お前しかいないと思っていた。最早、残っているのはお前だけだ」

エース、さだめ、剣士、凜とは既に戦い、ルインにはセツと戦える程の実力はなく、友紀はセツと戦うには心情的に厳しい。故に、アテナしかいなかった。そうでない可能性も考えられたらうが、それでも可能性としてはアテナが一番高かったらう。

「ええ。そうですね。ですから……」

アテナは決意を秘めた目で、セツを見つめる。

「私とのデュエルに、私たちの命を賭けます」

それは、決着をつけようという宣言だった。このデュエルで負けたら、命を差し出す。その言葉を受け、セツは満足気に笑みを浮かべた。

「それはいい。いい加減、俺も一々削ることが億劫になってきたところだ。このデュエルで……全てが終わる」

そんなセツの言葉に、しかしアテナは首を振る。

「終わりません。終わらせませんよ……絶対に」

それが、アテナの……いや、全員共通の意志だ。

「私たちは殺されることも、セツを殺すことも絶対にしません。必ず、生きて……貴方を」

取り戻す。最後まで語るまでもなく、アテナの目はそう言っていた。

「面白い。なら、見せて貰おうか。お前たちの……最期の悪足掻きを！」

「行きますっ！」

アテナが構えると同時、周囲に闇の炎が巻き起こる。闇のデュエル、そのリングの中心で、アテナとセツ。二人の声が響き渡った。

「デュエル!!」

アテナLP4000

セツLP4000

デュエルが開始されても、セツは動きを見せない。先攻は譲る、という意思表示なのだろう。

「私のターン、ドロー!!」

勢い良くデッキからカードをドローするアテナを見つつ、さだめたちは小声で話し合う。

「……始まったね」

「うん。もう後は、アテナちゃんに任せるだけだよ」

「上手く行きゃいいけどな……」

若干不安気に眉を顰める剣士に、凜がまあまあと宥める。

「アテナを信じましょう。剣士さんだって、信じてないわけじゃないんでしょ？」

「そりゃ、な。けど、事が事だけに慎重にならざるを得ないのも事実だろ」

何しろ、全員の命が懸かっているのだ。安易に楽観視など、出来ようはずもない。

そんな剣士たちの見ている前で、早速アテナは動きを見せた。

「私は……『サイクロイド』を守備表示で召喚します！」

『サイクロイド』 DEF1000

『いやっほおおおうっ！ 行くぜ行くぜえええええっ！』

「な、ん……だと？」

のっけからフルスロットルのハイテンションで召喚されたサイクロイドは、いつも通り変わらぬ様子でセツに語りかける。

『よう兄さん！ 元気かい？ おれっちは何時でもフルスロットルだぜ！』

「貴様……」

しかし、セツはそんなサイクロイドには目も向けず、怒りに燃えた目をアテナに向ける。

「貴様、これは……これは、どういつつもりだ！？」

「どういうもなにも……」

アテナは陽気にデュエルフィールドを走り回るサイクロイドを見やり、当然のように言う。

「命を懸けたデュエル、ですよ？」

「ふざけるなっ！」

アテナの言葉に、間髪いれずに激昂するセツ。

「天使族、それも重量級効果モンスター主軸のビートバーンデッキを使っていたお前が、機械族通常モンスター、それも超軽量級の雑魚を呼び出してどうするつもりだと聞いている！？」

「そんなこと、言うと思いますか？」

「っ……く！」

そう。言う筈がない。例え、アテナにどんな思惑があったとしても、対戦相手であるセツに、その思惑を話す筈もない。だが……。

「だが、これは……！」

セツの顔が怒りに歪む。

「戯あそれている……！」

ギリリ、と憎らしげに齒軋りをする。

「こんな、こんな奴らに、俺は……！　こんなふざけた奴らに、本気を出せと……？　こんな、奴らに……っ！」

そんなセツを見て、さだめたちは見えないように頷き合つ。

「お兄ちゃん、怒ってるね」

「そりゃ、そうだろうな。文字通り、命を懸けた大一番で、単体じゃ役に立たない雑魚を突きつけられりゃ……」

「プライドに傷がつく、でしたっけ？　ユーキさん」

「うん」

今回のデュエルで何をするか、それをほぼ全て一人で立案した友紀が頷く。

「これが、第一段階だよ」

デュエルをする二人を真剣に見詰めつつ、友紀はそう言った。

「勝たない？」

ユーキさんの言った思いがけない言葉に、さだめたちは一様に怪訝な顔をする。

「それって、どういうことですか？」

「うーんと……ねえアテナちゃん。デュエルの決着がつくのって、どんなとき？」

「え？」

突然ユーキさんはそんな極々初歩的なことを尋ねてきた。

「どうして、そんなことを？」

「いいから」。煮詰まった時は、一度基本に戻って考えてみるのも大事だよ」

確かに、それはわかる。どうやらユーキさんは、一言で正解を口に出す気はないらしく、とりあえずユーキさんの言ったことを考えてみる。

「えっと、片方若しくは互いのライフポイントがゼロになるか、デッキが尽きてドローが出来なくなるか……」

「後は『終焉のカウントダウン』みたいな、特殊勝利条件をどちらかが満たすことでも決着はつくよね？」

さだめは自分も使ったことのあるカード名をだして追加する。

「他には？」

「え、えっと……デュエル続行不可能、とかですか？」

ついさつきそうなりかけたからか、恐る恐ると言った感じで凜が聞く。ユーキさんはそれにも頷いて、けど首を振る。

「そうだね」。でも、それはかなり特殊だから、今は置いとこっか。もつと基本的なことだよ」

基本的……？ ライフゼロ、ドロー不可、特殊勝利……。

「あ」

その時、ふとさだめの中に一本の線が繋がった。

「あ、あああ。ああああああああああああっ!？」

「さ、さだめさん？」

「気付いた？」

「も、もしかしてユーキさん、勝たないって……」

「うん。そういうことだよ」

「ちょ、ちょっと待ってください。二人だけで納得されても……」

アテナ抗議を無視して、さだめは一人思考の海へと沈んでいく。

ユーキさんは代わりに、アテナに最初から解説をし始めた。

「アテナちゃん。まず前提として、わたしたちじゃセツくんに勝てない。勝てるとしても、限りなく確立が低い。いいよね？」

「はい」

そこには文句なく、アテナは頷く。

「じゃあどうする？ もう一度言うよ。“わたしたち”じゃ勝てないんだよ？」

「私たち……？」

「……つまり、今のアイツに勝てる奴は誰か、ってことか？」

剣士さんの言葉に、ユーキさんは満足げに頷いた。

「そう。わたしたちじゃ勝てない。なら、誰なら今のセツくんに勝てる？」

「誰、って……」

まだピンと来ないらしいアテナに、先に気付いたルインが助け船を出す。

「……貴女は、誰より大事な仲間を忘れている」

「誰より、大事な……あ」

そこでようやく、アテナは気付いた。

「セツ……」

お兄ちゃんに勝てるのは、お兄ちゃん。目には目を、歯には歯を。つまり……。

「さだめたちの目的は、お兄ちゃんを闇のデュエルで倒すことじゃない。あくまでも目的は、お兄ちゃんの記憶を取り戻してこちら側に戻って来て貰うこと」

「つまり、倒す必要なんてない……」

「デュエルをしながら、セツ様の記憶に語りかけ、記憶を戻すことが出来れば……」

「セツは、自らデュエルを終わらせてくれる……つまり」

全員の視線を受け、ユーキさんはもう一つ大きく頷いた。

「そう。わたしたちが目指すべきは、セツくんの敗北^{サレンダー}。そのために、皆のフェイバリットカードに想いを込めて、セツくんにぶつけるの」

勝敗は度外視。フェイバリットに込められた絆で、お兄ちゃんの記憶に呼びかけて、記憶の扉を紐解くこと。

「それが、セツくん攻略の唯一の方法だよ」

作戦は決まった。けれど、勿論そう簡単なことじゃない。いくら勝ちを度外視するといっても、記憶を取り戻す前に瞬殺されては意味がない。

「それで、私……ですか？」

お兄ちゃんとデュエルする役に選ばれたのはアテナだった。

「うん。実際にデュエルしてみてわかったよ。アテナちゃんには、持って生まれた天運みたいなものがある。それは、元精霊のデュエリストっていうのも関係があるかもしれないけど、兎に角カードの精霊との親和性が高くて、良いカードをドロシーやすい」

「そ、そうでしょうか……？」

「さだめ的には、ご都合主義とかディスティニードローとか補正とか言うんだけど、まあ確かにそんな感じはあるね」

さっきの目には目を、って話じゃないけど、色んな補正かかっているっぽいお兄ちゃんを相手取るには、こっちも多少の補正は考慮しておいた方が良さそう。そりゃ、さだめだって自分の手でお兄ちゃんを取り戻したいって思うけど……。失敗は出来ないんだから、ここは引いておく。

「それに、みんなのフェイバリットを集めてデッキを作ることには、もう一つ意味があるよ」

「もう一つの、意味？」

「うん。それは……」

「それは、お兄ちゃんを怒らせること」

「記憶を取り戻すって言っても、簡単じゃない。ただカードを突き

つけるだけじゃ、今のセツくんは小揺るぎもしない。だけど……」

怒らせて動揺させることで、心に隙が出来る。その隙は記憶を取り戻すために必要なだけじゃなく、上手くいけばプレイングミスも誘発させて、プライド自ら高みから転がり落ちてきてくれる。

「要するに、ハツタリがますってことだよな？ 上回ることが出来るようにないから、向こうから落ちてきてくれるようにさ」

「そうだね。まあ、いつものセツくんならそんなのすぐにお見通しだろうし、プライドのセツくんでも平常時なら効かないと思うよ？ だけど……」

今のプライドは、心に余裕がない。

「それなら、嵌めるのは簡単。プライドを刺激してあげればいい。これは、エースさんの方が良くわかんと思うけど」

「……ああ。我もそうだが、プライドとは高潔さであり潔癖さでもある。本気の相手を、更に上回る実力で叩き潰すこと。それが奴の望みだろうからな」

そう言う人間は、己のプライドにプライドを持つ。

「見限られること。見くびられること。見下されること。それがどうしても我慢ならない。格下相手に全力で戦うことが我慢ならないものだ」

「慢心だね」

「高慢、と言え」

「同じじゃん」

「高、の字が入っているか否かで印象が違う」

「細かいなあ」

「兎も角、奴を怒らせるには、真剣にふざけることが必要なのだ。更に言えば、奴の記憶に語りかけるにも、お前たちの何時もの雰囲気が出る分有効だろうな」

セツがサイクロイドに対し、半ばトラウマ染みた苦手意識を持っているのも、動揺させるには効果が高い、と言える。これは流石に、半ば以上こじつけだが。

視線の先では、セツが鬱陶しそうに走り回るサイクロイドを睨みつけていた。不愉快さを隠しもしないセツを見つめて、立案者である友紀は自信ありげに笑みを浮かべる。

「さあ……ここからだよ」

目指すは……サレンダー敗北。

第四期第二十九話「記憶を取り戻せ！ 目指すは敗北！？」（後書き）

こんにちは。

はい。というわけで、正解はサレンダー。ちなみに、今話のタイトルもミスリードとなっております。あんな引きでこんなタイトル出されたらアテナたちの敗北を考えるだろうという。実際は、セツのサレンダーを目指す、という意味です。アテナたちが自ら負けを目指すと言う意味ではありません。

数ある遊戯王作品の中でも、かなり珍しいとは思いますが。相手のサレンダーを前提にしたデッキ構築。少なくとも悠は見たことがありません。答えが掠ってる云々は、まあこのデュエルを最後まで見ていただければわかると思います。

まさかの初手サイクロイド。どうしてこう、このアルカナはサイクロイドを無駄にプッシュしているのか。いい加減悠にもわからなくなってきました。まさかこの重要な局面で初手サイクロイドはきつと誰も予想していなかったに違いない。予想していた人はおめでとうございます。あなたはエスパーです。

今回ちょっと視点がコロコロ入れ替わるので、少々見辛かったらすみません。一応、少しでも俯瞰的に見られるように三人称視点にして見ましたが（途中はさだめ視点）、どうだったでしょうか？見辛ければ、今後はなるべく控えます。特に問題ないよー、という場合も、あんまりやらないとは思いますが。基本、視点がコロコロするのは書く側としても把握が面倒ですしね。

……信じられるか？ 一話丸々使って、まだサイクロイド出しただけなんだぜ？……次回は、もっとデュエルも進むと思います。予定では、セツ編は後二話です。

それでは、悠でした！

第四期第三十話「皆の心を」（前書き）

さだめ「な〜っにな〜っにな〜っにな〜っ！」

ルイン「今回は、これ」

『レインボー・ライフ』

さだめ「手札一枚をコストに、そのターン受けるダメージを回復に変換しちゃうカードだね」

ルイン「類似カードの『ドレインシールド』と比べると、手札コストが要る代わり、全てのダメージに対応出来てそのターン中は安全になるところ」

さだめ「モンスターを守ることも出来ないけど、フリーチェインなことやバウンドダメージも無効に出来ることを考えると、汎用性では一歩上だね」

ルイン「強大な攻撃力を持つ彼のSinや、バードカードを相手取るには最適のカード」

さだめ「まあ、それはアテナにも言えるんだけどね……」

というわけで、ちょっと始めてみました。今回のキーカード。Mは安定のさだめ&ルイン。主にさだめですね。では、本編の方へどうぞ！

第四期第三十話「皆の心を」

アルカナ〈切り札の騎士〉

第四期第三十話「皆の心を」

一先ずは、成功と言ったところでしようか……。
私は手札を覗き、密かに溜息を吐きます。

(思いつきり事故ってます……)

当然と言えば当然です。あんなデッキ構成で事故らない方がどうかしています。

「行きますよ。私はカードを五枚セットして、ターンエンドです！」
いきなりの五枚セット。ぶつちやけ召喚できるのがサイクロイドさんしかいなかったのはかなり最悪です。

『おうおうおう！ 来いよ兄さん！ 思いつきりなあ！』
張り切っている所悪いですけど、思いつきり来られたら負けるのであんまり滅多なこととは言わないで欲しいです。

「くっ……！ 俺の、ターン！」
不愉快さを隠しもせず、セツはカードをドロします。

「俺は魔法カード『融合』を発動する！」
「融合……！？」

これまでプライドのセツが融合戦術を取ってきたことはありませんでした。あちらも、私とのデュエルに備えてデッキ構成を変更してきたのでしよう。

「俺は手札の『切り札の騎士 エース』と『切り札の騎士 ジャック

ク』を融合する！」

「我ら、だと？ まさか……」

融合素材として使われたエースさんが、愕然とした顔でセツを見る。

「来い。黒の騎士。『切り札の騎士 トランプ・ナイト ブラック・ジャック』！」

『切り札の騎士 トランプ・ナイト ブラック・ジャック』 ATK2100

黒の鎧に身を包んだ騎士が、セツのフィールドに現れる。見たことのないモンスターに、私は警戒を強めます。

「そして『切り札の騎士 エース』が融合素材として手札から墓地に送られたことにより、デッキからカードを一枚ドローする」

融合により失った手札も即座に回復するセツ。流石に、その辺りは激昂していても抜かりはない。でも、それは私にとっても好機！
「リバーズカードオープン！ 『逆転の明札』！ 相手がドローフェイズ以外でカードを手札に加えた時、相手の手札と同じ枚数になるようにデッキからカードをドローします！ デッキからカードを四枚ドロー！」

態々手札を全て伏せたのはこのためです。セツのデッキにドロー加速カードが多いことは、あのSinモンスターの特性から明らかでしたし。

「そんな雑魚は壁にもならんと言うことを教えてやる。『切り札の騎士 ナイト ブラック・ジャック』で『サイクロイド』を攻撃！ 『ハイローラー・オブ・スペイド』！」

『ぬああっ！？ アテナの嬢ちゃん、どうにかしてくれ！』

迫る漆黒の剣に、慌ててサイクロイドが私に声をかけてきました
が、私は僅かに眼を逸らします。

「えと、すみません。サイクロイドさんはその……」

『え……？』

「基本的に出オチ……なので」

『それだけ伏せといてそりゃないぜ！？ ぎゃああああああああっ！？』

何の防御も得られなかったサイクロイドさんがあっさり剣で両断されてしまいます。……えと、すみません。

「更に『切り札の騎士 ブラック・ジャック』がモンスターを戦闘破壊したバトルフェイズ終了時、相手ライフに2100ポイントのダメージを与える！『ブラッディ・ジャック』！」

「なっ！？ と、トラップ発動！『レインボー・ライフ』！ 手札を一枚捨てることで受けるダメージを無効にし、その分だけライフを回復します！」

アテナLP4000 6100

ありがとうございます。サイクロイドさん。貴方のお陰で、ライフに保険が出来ました。

「ふん。バーン対策カードか。当然と言えば当然か。まあいい。その程度のライフ、すぐにでも奪える」

「更に、手札から捨てた『切り札の騎士 エース』の効果で、私もデッキからカードを一枚ドローします」

「貴様……」

再び私のものではないカードを使ったことで、セツの表情が歪みます。が、それも一瞬。すぐにその表情を冷静なものに戻してしまします。

「……ふん。だが、満更ふざけているわけでもなさそうだ。油断は捨てるでしょう」

「……………」

やはり、こんな序盤に『レインボー・ライフ』を使うべきではなかったかもしれない。セツを怒らせて、油断させる目的が、早くも崩れてしまいそうです。

「まあいい。俺はカードを二枚セットし、ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！」

さて……どうしましょうか。手札の総とつかえは出来たので全体的なカード・アドバンテージは稼げましたし、サイクロイドさんの犠牲のお陰でライフ・アドバンテージも得られました。

「ですが……一番大事なアドバンテージが消滅してしまった感じですね」

心理・アドバンテージ。ユーキさんの提唱した心理的な優勢・劣勢のことですが、このデュエルに於いてはある意味最も重要です。

共に負けられないデュエル。初期のモチベーションはどちらもこれ以上なく最高でしょう。しかしそこでセツのプライドを刺激してあげることにより、怒りや油断と言った“雑念”を生じさせ、ミスを誘発させる。ユーキさん曰く「逆裁で言えば“ゆさぶる”だね」

だそうですが、ゲーム知識はあまりないので良く分かりません。そうして生じた隙に、希冴姫さんたちをはじめとしたセツの思い出に呼びかける行為や攻撃を通し、記憶を取り戻す。またまたユーキさん曰く「つきつける”、だね”だそうです。

……私は手札から『ヘカテリス』を墓地に送り、デッキから『神の居城 ヴアルハラ』を手札に加え、発動します！」

どうするか迷いましたが、今は兎に角セツの攻撃を凌ぐ必要があります。何とかしてもう一度、メンタル・アドバンテージを取り戻さないか……！

「ふん。漸く真面目に相手をする気になったか」

「……行きます！ 私はヴァルハラの効果で手札から『アテナ』を攻撃表示で召喚します！」

『アテナ』 ATK2600

『ほいほいセツつちお久〜って、こんな序盤に呼ばれると死にフラグにしか見えないorz』

良くわかってるじゃないですか。

「っていやいやそうじゃありません。シャルナ、私たちがなるべく稼ぎますよ！」

『……時間を？』

「それ以外に何を？」

『結局やられること前提のおねーさん涙目』

「文句言わないでください！ 更に私は『シャインエンジェル』を

攻撃表示で召喚します！」

『シャインエンジェル』 ATK1400

「まずはシャルナの効果で600ポイントのダメージ！」

「考えることは同じらしいな。俺は手札を一枚捨てて、トラップカード『レインボー・ライフ』を発動。このターン受けるダメージは全て回復となる」

「くっ!？」

セツLP4000 4600

「お前のデッキがワンキル特化の高火力デッキであることはわかってた。当然、そのための対策くらいはしている。結果若干俺自身の火力は落ちたが……まあいいだろう。所詮寄せ集めカードのネタデッキ相手だ」

「……そう言っていていられるのも、今の内ですよ」

「だといいがな」

『レインボー・ライフ』が発動している中で攻めるのは悪手ですが、ブラック・ジャックの効果を考えれば長生きさせておくわけにはいきませぬ……。

「バトルします！ シャルナで『切り札の騎士 トランプ・ナイト ブラック・ジャック』を攻撃！ 『ダイヴァイン・クロス』！」

『あゝ、もうどうにでもなれ〜!!』

「リバーカード発動！ 速攻魔法『収縮』！ 『アテナ』の攻撃力を半分にする！」

『げっ……』

「させません！ カウンタートラップ『マジック・ジャマー』！ 手札から『冥幼竜ヴァーミリオン』を墓地に送り、魔法カードの発動と効果を無効にして破壊します！」

『きゅきゅ〜!!』

「なにっ!？」

シャルナを小さくしようとしていた魔力を、ミリーちゃんが身体を張って無効にしてくれます。

「シャルナ！」

『いよつし行くわよ！ せえええいつ！』

「くっ……！」

シャルナの放った十字の極光が、黒の騎士を焼き尽くし、セツまで届きます。

「だが、『レインボー・ライフ』の効果により俺はダメージを回復に変換する！」

セツLP4600 5100

「私はカードを一枚セツト。ターンを終了します」

「俺のターン、ドロー！」

カードをドローしたセツは、私に感心したような目を向けてきました。

「褒めてやろう。そんな狂ったバランスのデッキで、よくも回せるものだ、と」

「……………」

あまり、今の状況では嬉しくありませんね……………。

「だが……………」

感心したような顔から一転、酷くつまらなそうな顔でセツが睨んできます。

「敢えて言おう。下らん」

「なっ……………」

「デュエルにお前らしさがなく、プレイングに精彩を欠く。先を先をと考えるあまり、焦りがお前の心に巣食っ」

「それは……………」

「俺の記憶。俺の心。取り戻したいと願う気持ちに、焦りが余計なノイズを走らせている。そんなザマで、俺の記憶が戻ると思うな」

「セツ……………」

何故、そんなアドバイスの様な……………。

セツはそれ以上何も言わず、デュエルを続行します。

「行くぞ。俺は手札から『融合回収』を発動。墓地の『融合』一枚

と『切り札の騎士 エース』を手札に戻す」

手札補充……！」

「そして『スナイプストーカー』を召喚。効果を使用する」

『スナイプストーカー』 ATK1500

「『スナイプストーカー』……！」

ここでそんなモンスターを……。

「手札から『切り札の騎士 エース』を墓地に捨て、『アテナ』を選択して効果を発動。ダイスロール」

「くっ……おのれ、よくも人をポイポイと捨ててくれる……！」

墓地に対する嫌悪感が拭えないエースさんは歯噛みします。

「出た目は……5。よって破壊は成立だ。消える」

『きゃあっ!?!』

「シャルナ！」

『スナイプストーカー』の持つ光線銃のような武器が、シャルナを狙い撃ちます。

「墓地に送られた『切り札の騎士 エース』の効果で、俺はデッキからカードを一枚ドロウする。手札から『融合』を捨ててもう一度効果を使おう。『シャインエンジェル』を対象にダイスロール……6か。破壊は不成立」

「ほっ……」

助かりました。この上更に『シャインエンジェル』まで破壊されたら折角サイクロイドさんが作ってくれたライフ・アドバンテージまで失うところでした。

「バトルだ。『スナイプストーカー』で『シャインエンジェル』を攻撃。『スナイプショット』」

「リバーズカードオープン！『ガード・ブロック』！ この効果により私はダメージを受けず、デッキからカードを一枚ドロウします！」

「だが、モンスターは破壊される」

「それなら！『シャインエンジェル』の効果を発動します！ デック

キから攻撃力1500以下の光属性モンスター……『サイレント・ソードマンLV3』を攻撃表示で特殊召喚します！」

『……………』

『サイレント・ソードマンLV3』 ATK1000

「サイレント・ソードマン……か」

セツは私の後ろで見ているユーキさんを一瞥し、首を振ります。

「……いや、未練は捨てよう。俺は……」

セツは何かを振り払うように二度、三度と首を振り、此方を見つめてきました。

「俺はカードを一枚セツト。ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー！このスタンバイフェイズに『サイレント・ソードマンLV3』はレベルアップします！ デッキから『サイレント・ソードマンLV5』を攻撃表示で特殊召喚します！」

『サイレント・ソードマンLV5』 ATK2300

「ミリーちゃんも戻って来ます！」

『かう！』

これで手札は四枚。次は……！

「希冴姫さん、お願いします！」

『承知しましたわ！』

『切り札の騎士 クイーン』 ATK1500

「貴様は……」

『セツ様……騎士の務めを、果たしに参りましたわ』

「黙れ。今更貴様に何が出来る。折角拾った命を、無駄に散らすだけだ」

『……そうでも、ありませんわ』

「なに？」

『例えその身が朽ち果てようとも、守るべき存在を守る。その意志に殉じたわたくしだからこそ、確かな実感と共に言えるのですわ。』

セツ様。貴方は間違っています』

「間違い……か」

『刺し違えてでも、等と言う考え方では、守れるものも守れません。死んでも守る、等と言う自己満足では、結局誰も守れません。セツ様、貴方も……』

「だから、どうした？」

『な……』

まったく堪えた様子のないセツに、希冴姫さんが絶句します。

「俺が間違っている？ そんなこと、百も承知だ。世界の滅びを甘んじて受けよう等と言う考え方が、正常である思っているとしても？」

『……では、何故？』

「簡単なことだ」

セツは胸を張り、誇らしげに答えます。

「例えどれほど間違っていようとも、俺は己の意志を通す覚悟をしている。他の何を裏切ろうとも、己の信念だけは己が誇りに懸けて裏切らん、とな」

『セツ様……！』

「だから希冴姫。止めたいのならばかかって来い。俺は言った筈だ。わかり合えるとすれば、デュエルでしかあり得ないと」

「希冴姫さん」

『……わかりましたわ。アテナ、わたくしの剣、一時預けますわよ』
「はいっ！」

希冴姫さんに初めて名前を呼ばれました。それを信頼の証と受け取り、私は動きます。

「行きます！ 『サイレント・ソードマンLV5』で『スナイプストーカー』を攻撃！ 『沈黙の剣LV5』！」

「未練は……断つ！ リバースカード『次元幽閉』！ サイレント・ソードマンをゲームから除外する！」

『………！』

「サイレント・ソードマン！」

ユーキさんが次元の彼方へと消えて行くサイレント・ソードマンを見て声を挙げます。

「貴様らは何の話をしている……」

「うぶっ……」

は、鼻血が……。た、猛々しい……。

『どうしたアテナ殿。我が肉体は無垢な少女には刺激的過ぎたか？』

「貴方じゃありません！」

「無垢でもないだろうな。色欲^{ラスト}」

「と、兎に角！ 私は更に、手札から装備魔法『与奪の首飾り』を
ネイキッドさんに装備します！」

『むう……攻撃力が上がるわけではないが……』

「効果は使えます！ 私はネイキッドさんの効果で、除外されている『サイレント・ソードマンLV5』を特殊召喚します！」

『……………』

『サイレント・ソードマンLV5』 ATK2300

「サイレント・ソードマン！」

無言で生還したサイレント・ソードマンに、ユーキさんがまた声を挙げます。

「このダイレクトアタックが通れば……！」

丁度5100ポイント。サレンダーに頼らなくても、ここで……！

「ネイキッドさんとサイレント・ソードマンでダイレクトアタックをします！」

「させん！ トラップ発動！ 『和睦の使者』！ このターンのダメージを無効化する！」

「くっ……やはり、通りませんか」

「当然だ」

そうは言っても、あの時ドロした一枚がダメージ無効カードだった辺り、セツのドロ力はやはり相当なものです。

「私は、これでターンを終了します」

「俺のターン、ドロー！俺も使わせてもらおう。手札から魔法カード『強欲な壺』を発動。デッキからカードを二枚ドローする」

ドローしたカードを見たセツは、ニヤリと笑みを浮かべて私を見ます。

「そろそろ……潮時だな」

「つまさか!？」

「俺はフィールド魔法『ダークゾーン』を発動。そして、エクストラデッキから『アルカナ ナイト・ジョーカー』をゲームから除外し、来い。『Sinアルカナ ナイトジョーカー』」

『Sinアルカナ ナイト・ジョーカー』 ATK 3800 43

00

「……っ!」

遂に……出ましたか!

「Sin……!」

「まずは、鬱陶しいサイレント・ソードマンを蹴散らす。『Sinアルカナ ナイト・ジョーカー』で『サイレント・ソードマンLV5』を攻撃。『Sinロイヤル・ストレート・スラッシュ』!」

「つと、トラップカード『体力増強剤スーパージ』! 2000ポイント以上のダメージを受ける際、その前に4000ポイントライフを回復します! きゃああああっ!？」

アテナLP 6100 10100 8100

サイレント・ソードマンが漆黒の剣で切り裂かれ、そのダメージが私まで届きます。

「うぐっ……!」

さ、流石に一度に2000ダメージは結構効きますね……!!

「ターンエンド。さあ、足掻いて見せる」

「くっ……わ、私のターン!」

カードをドロ―したアテナを見つつ、さだめはユーキさんに尋ねる。

「どう思う？」

ユーキさんは、目の前でフェイバリットカードが切り裂かれた衝撃から、少し青い顔で答える。

「そうだね……とりあえず、アテナちゃんはあのデッキを良く回せてると思うよ」

「だよ。正直、驚異的だよ」

普通じゃあり得ないような構成で、無茶苦茶なデッキを組んでいるのに、未だに初期ライフを下回っていないなんて普通じゃ考えられないくらい。

「……だけど、ちょっと上手く回し過ぎ、かな？」

「どういうこと？」

それっていいことなんじゃ？

「上手く回し過ぎて、互角の戦いをしちゃってる。これじゃ、セツくんのプライドは刺激出来ないし、セツくん自身も本気で戦いにくっちゃう。そうすると、最初の目的だったサレンダーが難しくなる」

「それは……」

確かにそうだ。お兄ちゃんを本気にさせちゃいけない。それじゃ勝てない。

「それに、アテナちゃん自身もそろそろあのプレイングに耐え切れなくなってきたよ」

「そうだね……」

元々アテナは刹那的っていうか、その場その場で臨機応変……っていうか行き当たりばったりでデュエルを回すタイプのデュエリストだから、今回みたいに先の展望とかを見据えたデュエルは苦手な筈。あのデュエルスタイルはどちらかと言えば、お兄ちゃんやユーキさんのスタイルだし。

「……ただ、それをセツくん自身がアテナちゃんに指摘してきたことが気になるよ」

「そうだね。そんなことしても、お兄ちゃんに不利になるだけだし」
「それこそ、奴のプライドの問題ではないのか？ 本気のアテナを叩き潰そう、という」

「うん。それはそうだと思うんだけど……」

お兄ちゃんは、さっきから希冴姫さんの言葉やサイレント・ソードマンの存在に反応したり、ネイキッドさんの下らない台詞にも一ツツコミを入れたり、以前のプライドからは少し雰囲気が変わって来ている印象を受ける。

「もしかしたら……」

「結構、良いところまで来てるのかもね。お兄ちゃんの記憶」

今はまだ、雰囲気ではない。でも、その内思い出せる筈。だって……。

「お兄ちゃんは、プライドなんかには絶対負けない。必ず、思い出してくれる。だから……」

もう少し、頑張って……アテナ！

第四期第三十話「皆の心を」（後書き）

こんにちは。

シリアス全開の展開のハズなのに、ノリは結構ギャグ風味。これです。こういうのが書きたい。

ちなみに、本来は今回でデュエルは終わっているつもりでした。

……ええ、ご覧の通り、まだお互いライフが4000を割ってません。ちくしょう。思った以上に激戦になりました！ アテナがあるデッキを回し過ぎる所為だ！ 責任転嫁

というわけで、一話伸びます。次回デュエルに決着。次々回セツ編終了。多分。

今回出たオリカ、ブラック・ジャックですが、めっちゃ強そうに見えて一応弱点というか、デメリットはあります。セツは語ってませんが、一応。活動報告にてアップしたのち、オリカ紹介の方にも乗っけときます。

最後のところをちょっと修正しました。

それでは、悠でした！

第四期第三十一話「心を届けて」(前書き)

さだめ「な〜につかなか〜な〜につかなかっ！」

ルイン「今回は、これ」

『ハイパーカーンウル狂戦士の魂』

さ&ル『

.....え?』

.....二人の反応が、全てです。

第四期第三十一話「心を届けて」

アルカナ（切り札の騎士）

第四期第三十一話「心を届けて」

遂に、出てきましたか……。

『Sinアルカナ ナイト・ジョーカー』 ATK4300

「流石に、圧巻の攻撃力ですね……」

元々の私のデッキでは、ヴィーナス暴走召喚でようやく相討ちが取れるレベル。そう考えると、あまりにあんまりな攻撃力ですね……。兎も角、それでも何とかするしかありません。

「私はネイキッドさんを守備表示に変更。更にモンスターを一体守備表示でセットしてターンを終了します……」

それでも、そうそう何とかなるなら苦労はしません。仕方なく、ドロ―したモンスターをセットして守りを固めます。

「ふん。俺のターン、ドロ―」

そんな私をつまらなそうに睥睨して、セツはカードをドロ―します。幸い、『Sinアルカナ ナイト・ジョーカー』のデメリット効果で他のモンスターを展開することは出来ませんから、それだけが救いですね……。

「モンスターが展開出来ないからと言って、安心して貰っては困る。俺は手札から永続魔法『命削りの宝札』を発動する」

「ドロ―強化!？」

マズイ、です。これでアルカナの効果が使えなくなったのみ

ならず、手札にあのカードが行ってしまった可能性も……。

「それだけじゃない。俺は手札から魔法カード『デス・メテオ』を発動する！」

「なっ!?!? きゃあああああああっ!?!?」

アテナLP7100

「ぐっ………そ、ういえば………そうでしたね」

セツには、豊富なバインカードもありました。まだ、ライフに余裕はありますが、身体に蓄積する実際のダメージは馬鹿になりません。正直、今も結構くらくらしています。

「バトルだ。そろそろその暑苦しい筋肉には退場して貰おうか。『Sinアルカナ ナイト・ジョーカー』で『天剣 ネイキッド・ギア・フリード』を攻撃。『Sinロイヤル・ストレート・スラッシュ』!」

『ぐおおおおおおおっ!?!?』

「ネイキッドさん!」

『ぐっ………すまぬアテナ殿! 我では、力不足であった……!』

「そんなことは、ありません。私は『与奪の首飾り』の効果を発動します! 装備したネイキッドさんが戦闘によって破壊され、墓地に送られたことで、私はデッキからカードを一枚ドロウします!」

「ふん。まあいい。俺はターンエンドだ」

「私のターン、ドロウ!」

これは………なんとか、してみましよう。

「私は、何もせずにターンエンドです」

何もせずターンを終了した私を見て、セツが嘲笑を浮かべます。

「遂に事故を起こしたか」

「さあ………それは、どうでしょうね」

「ふん。まあいい。俺のターン、ドロウ」

ドロウカードを見たセツは、愉快そうにニヤリと笑いました。

「ほっ………これは、耐え切れるかどうか、見物だな」

「っ!?!?」

「俺は魔法カード『ハリケーン』を発動する。フィールド上の魔法・罫を全て持ち主の手札に戻す！」

「なっ!?!」

「ハリケーン』だと、フィールド魔法も手札に戻ります。当然、フィールド魔法がなくなつたSinモンスターは自壊するはずですが……。」

「更に、俺はチェーンして速攻魔法『禁じられた聖杯』を発動!」
Sinアルカナ ナイト・ジョーカー』の効果が無効にすることで、
Sinアルカナ ナイト・ジョーカー』は自壊せず、フィールドに残る」

『Sinアルカナ ナイト・ジョーカー』 ATK4300 47
00 4200

「っ……」

これがセツの目的ですか……!

「まだだ。俺は手札から速攻魔法『トラップ・ブースター』を発動。手札を一枚墓地に送ることで、俺はこのターン、手札からトラップカードを発動することができる」

「っ……!」
「トラップ・ブースター』……!」

セツの、黄金パターン……!

「更に、墓地に送つた『切り札の騎士 エース』の効果でカードを一枚ドロウする」

またしてもエースさんを墓地に送り、セツは手札を回復させます。
「俺はフィールド魔法『ダーク・ゾーン』を再び発動し、バトルフェイズに入る」

『Sinアルカナ ナイト・ジョーカー』 ATK4200 47
00

「バトル。『Sinアルカナ ナイト・ジョーカー』でセットモンスターに攻撃。『Sinロイヤル・ストレート・スラッシュ』!」

『リチュア・エリアル』 DEF1800

「きゃあああああっ!?!」

「エリアルさん……ごめんなさい！」

『だ、大丈夫です……それよりも、お役に立てなくてすみません！』
「そんなことはありません！ 私はエリアルさんの効果を発動します！」

「エリアル……効果？」

「『リチュア・エリアル』がリバーズした時、デッキからリチュアと名の付いたモンスターを一枚、手札に加えることができます！」

私が手札に加えるのは……『反魂のスピリチュア』！」

「っ……そういう、ことが」

かなり無理矢理なこじつけですけど、事実名前にリチュアが入っていることには変わりありません！

「だが、それも無駄だ！ 俺は手札からトラップカード『連撃』を発動する！」

「っそ、それは……！」

「Sinの剣……お前の小さな身体で受け止めきれるか？ Sinアルカナ ナイト・ジョーカー』でプレイヤーにダイレクトアタック！ Sinロイヤル・ストレート・スラッシュ』！」

「あ、あああああああああああああああああああっ！
あああああああああああああああああああっ！
？」

アテナLP7100 2400

『アテナ(ちゃん)っ！』

凄まじいダメージに、私の身体は大きく跳ね飛ばされます。

ドンっ！ と吹き飛ばされた身体が、誰かに抱きとめられる感覚。

「あ……？」

『よオ……まだ、死んでねエよな？』

吹き飛ばされた私を受け止めてくれたその精霊は、そう言ってシニカルな笑みを浮かべます。

「と……う、ぜんですよ……ゴーズさん」

『ハッ……。なら、とつとつと立てや』

私はゴーズさんの手を借りて何とか立ち上がり、手札のカードをデュエルディスクにセットします。

「フィールドに……何のカードも存在しない状態でダメージを受けた時、手札から『冥府の使者ゴーズ』と『冥府の使者カイエントークン』をフィールド上に特殊召喚することが出来ます……」

『冥府の使者ゴーズ』 ATK2700

「そして……この効果で特殊召喚されたカイエントークンの攻撃力・守備力は……受けたダメージと同じになります！」

『冥府の使者カイエントークン』 ATK4700

今、私の目の前には圧倒的な存在感を放つカイエンさんが、その手に武器を構えて立ち塞がっています。

『ハッ……漸く、マトモにやれそうじゃねエかヨ。カイエン』

『はい。今の私には、力が漲ってくるようです！』

「ちっ……ゴーズとカイエン。いや、それよりも……」

セツは戸惑うような視線を私に向けます。

「何故……生きている」

4700という破格の戦闘ダメージをまともに受けて、私はそれでも立っています。正直……もうフラフラですけどね。

「それでも……倒れるわけにはいきませんから」

セツに、もう一度……。

「もう一度、貴方に……抱きしめてもらうまで」

私は、倒れません！

「なら……耐え切つて見せる！ 俺は『ファイヤー・トルーパー』を召喚し、リリースすることで1000ポイントのダメージを相手ライフに与える！」

「きゃああああああああつ！？」

アテナLP2400 1400

「ぐっ……あ……う」

熱い……熱い熱い熱い熱い！ でも……！

「負けま、せん……！」

「くっ……この……っ！」

腹立たしげに、セツが齒軋りをします。私は、今にも途切れそうな意識を必死に繋ぎとめ、セツに向かって笑いかけます。

「セツ……セツなら、きつと」

この苦しみにも、耐え切れる筈。だから私も……！

「耐えて、みせますよ……！」

「……俺は、永続魔法『命削りの宝札』を再び発動。デッキからカードを五枚ドローする」

セツの手札が再び増強されます。

「カードを一枚伏せ、ターンエンドだ……」

エンド宣言をしたセツは、何か言いたげに、私を見つめます。

「……どうしましたか？」

「……耐え続けても、辛いだけだぞ」

「え？」

「俺には……わからん。過去・現在・未来……その全てを絶望に彩られて尚、その両足で立つお前の在り方が……。俺は、裏切ったんだろう？ 記憶を無くして、この傲慢プライドに身を任せたとはいえ……お前を。仲間を。それも、お前にとって、誰よりも大切だっただろうこの俺が」

困惑を強めたかのように、セツが首を振ります。その姿が、まるで親とはぐれた子供のように寂しげで……私は、一瞬身体の痛みを忘れました。

「それでも……それでも前に進み続ける。そんな貴方の姿を、私たちは知っているから」

私が強いんじゃないやありません。そんな貴方を取り戻したいから。今の私は、貴方の模倣をしているだけ。

「だから……思い出してください。セツ。貴方なら……きつと」
終焉になんて、負けませんから。

『Sinアルカナ ナイト・ジョーカー』 ATK4700 43

セツのターンエンドと同時に、『Sinアルカナ ナイト・ジョーカー』の攻撃力が元に戻ります。これで、カイエンさんの攻撃力がアルカナを上回りました。

「私の、ターン！ ドロー！」

今は、必ず貴方を助け出します！

「バトルです！ カイエンさんで『Sinアルカナ ナイト・ジョーカー』を攻撃！ 『冥天刃陽の太刀』！」

「行きます……！ やあああああああつ！」

「ぐあつ……！」

セツLP5100 4700

「続けて……！」

「させん！ 『Sinアルカナ ナイト・ジョーカー』が破壊された時、手札全てとエクストラデッキの『切り札の騎士帝 アルカナロイヤル・ジョーカー』をゲームから除外し、ライフを100にすることで、手札から『Sinアルカナ ロイヤル・ジョーカー』を特殊召喚する！」

セツLP4700 100

カイエンさんに切り裂かれた天位の闇騎士が、その鎧と剣に、さらなる力を宿して復活します。

「やっぱり……出てきましたか！」

『Sinアルカナ ロイヤル・ジョーカー』 ATK4500 5000

「攻撃力……5000！」

ゴーズさんどころか、今のカイエンさんですら相手にならない攻撃力。仕方なく、私は攻撃を中断し、メインフェイズ2に入ります。

「手札がない今の内に……！ 私はカードを二枚セツト。『永続魔法』の居城『ヴァルハラ』を発動し、『魔法カード』『貪欲な壺』を発動します！ 私は墓地から『サイクロイド』、『シャインエンジェル』

『サイレント・ソードマンLV3』、『サイレント・ソードマンLV5』、『リチュア・エリアル』の五枚をデッキに戻してシャッフルし、

「二枚ドロ―します！」

「ならば、俺はリバーズカード『逆転の明札』を発動！ お前の手札は四枚。よって俺もデッキから四枚カードをドロ―する！」

「っ……………」

「これで、また手札が……………」

「私は………… ゴーズさんを守備表示に変更してターンエンドです」

「チツ………… コイツは盲くねエな」

「俺のターン、ドロ―！ バトルを行う！ 『Sinアルカナ ロイヤル・ジョーカー』で『冥府の使者カイエントークン』を攻撃！ 『Sinファイブ・オブ・ア・カインド』！」

「あああつ！？」

「きゃあああつ！」

アテナLP1400 1100

カイエンさんが破壊され、私のライフにも更に危険信号が灯ります。流石に………… 余裕がなくなって来ましたね。

「俺はカードを一枚セット。ターンエンドだ」

アルカナの耐性を減らしてでもカードをセットしてきた…………？

あの伏せカード、一体…………。もしかた『連撃』のようなカードであれば…………。

「私のターン、ドロ―！」

これで手札は五枚。けれど、今出来ることは何もありません。危険としてミリーちゃんを守備で出してもいいかもしれませんが…………

「きゅ〜？」

………… いえ、やめておきましょう。もしあのカードが『連撃』であれば、壁は壁としての意味をなしません。

「………… 私は、ターンエンドです」

「俺のターン、ドロ―！ 俺は手札から装備魔法『巨大化』を『Sinアルカナ ロイヤル・ジョーカー』に装備する！」

セツがドロ―したカードをプレイするのを聞いて、私は戦慄します。

「っ、『巨大化』!?」

今、セツのライフは風前の灯……!

「『巨大化』の効果により、アルカナの元々の攻撃力は倍になる!」

『Sinアルカナ ロイヤル・ジョーカー』 ATK5000 9500

「攻撃力、9500……!?」

最早、まともな手段で戦闘破壊することは叶いません。かといって、あの効果を考えれば効果破壊も……!

「これで……終わりにする! 『Sinアルカナ ロイヤル・ジョーカー』で、『冥府の使者ゴーズ』を攻撃! 『Sinファイブ・オブ・ア・カインド』!」

『グツ、オオオオオオオオオオオオッ!?』

天すらも断たんと言うほど巨大な剣で、ゴーズさんが一刀両断されてしまいます。ゴーズさん……!

「俺は……ターンエンドだ」

圧倒的優位に立っている筈のセツですが、その表情は険しい。迷いが断ち切れていないのか、それとも……。

「何故だ……」

それとも。

「何故……そんな目で俺を見る……?」

希望を捨てず、ただ憐れむようにセツを見る私に、困惑しているのか。

「何故……諦めてくれない?」

「……私のターンです」

「答える!」

「ごめんなさいユーキさん。私、作戦は無視します。

「アテナちゃん……?」

「私……勝ちます! この……ターンで!」

今の私なら……出来る筈です!

「セツ……貴方の罪(Sin)を、私が消します!」

「なんだと……?」

私の脳裏に蘇るのは、いつかの光お姉さんとのデュエル。そう、思い出しました。これが、セツのSin攻略の答え!

「私はリバースカード『サンダー・ブレイク』を発動します! 手札一枚をコストに、『Sinアルカナ ロイヤル・ジョーカー』を破壊します!」

「させると思うのか!? 手札を一枚ゲームから除外することで、『サンダー・ブレイク』の発動と効果を無効にして破壊する!」

当然、この『サンダー・ブレイク』は無効にされます。ですが、これで全ては整いました!

「私は、フィールドの『神の居城 ヴアルハラ』の効果を発動します!」

「っ……!」

そう。アルカナの弱点その一は、既に発動済みの永続魔法や罫の効果には干渉出来ないことです!

「私は手札から『反魂のスピリチュア』を特殊召喚!」

『反魂のスピリチュア』 ATK800

「そいつは……お前の……」

そしてここからが……アルカナ最大の弱点!

「私は、墓地から『レベル・ステイラー』の効果を発動します!」

これが……『サンダー・ブレイク』発動の真の意図! 手札コストとして墓地に送った『レベル・ステイラー』!

「なんだと!?!」

セツが息を呑む。当然です。だって『レベル・ステイラー』の効果は……。

「一ターンに、何度でも使えます! 私は『反魂のスピリチュア』のレベルを一つ下げて『レベル・ステイラー』を特殊召喚します!」

「くっ……!?!?」

本来なら、無効にするまでもない効果。でも、アルカナは……。

「強制効果が……！」

『反魂のスピリチュア』レベル7 6

セツの手札が一枚消滅し、残りは二枚。

「もう一度『レベル・ステイラー』の効果を発動！」

「ツ無効だ……！」

『反魂のスピリチュア』レベル6 5

あと、一枚！

「最後です！『レベル・ステイラー』の効果を発動！」

「馬鹿な……！」

『反魂のスピリチュア』レベル5 4

「手札が……！」

これで、アルカナの効果は使えません！

「行きます！ 私は自身の効果、手札を捨ててフィールド上の闇属性モンスターをデッキに戻し、同じ数だけ墓地から光属性モンスターを蘇生します！」

これで……アルカナを戻せば！

「おおお……！ 速攻魔法『神秘の中華なべ』を発動する！」

「えっ！？」

「ここで……こんなところで、あんなデッキに……負けてたまるか！俺は自らアルカナをリリースすることで、その攻撃力分、9500ポイントのライフを回復する！」

セツが……自らSinをリリースした！？

セツLP100 9600

「それでも……！『反魂のスピリチュア』第二の能力！一ターンに一度相手の墓地に存在する闇属性モンスター一体をデッキに戻すことで、墓地の光属性モンスターを、効果を無効にして特殊召喚します！私は『切り札の騎士 ブラック・ジャック』を戻して『切り札の騎士 クイーン』を特殊召喚！」

希冴姫さん……！もう一度、お願いします！

『……感謝、しますわ。わたくしに、もう一度チャンスを与えてく

れて』

「バトルします！ 私自身……『反魂のスピリチュア』でセツにダイレクトアタック！ 『トライデント・サンシャイン』！」

「ぐあっ……アテ、ナ……！」

セツLP9600 8800

「続けて希冴姫さんでダイレクトアタック！ 『エレガント・ハーツ』！」

『セツ様……！』

「希……冴、姫……っ」

セツLP8800 7300

「まだだ。まだ、終わっては……！」

「そう。まだです」

まだ……。

「私のバトルフェイズは残っています！」

「な、に……？」

「この瞬間私は、手札を全て捨てることで速攻魔法『バーサーカーソウル狂戦士の魂』を発動します！」

『……え？』

それまで固唾を呑んで見守っていた後ろの皆から、何故か気の抜けたような声が聞こえました。どうしたんでしょうか？

『……はっ！？ あ、あのアテナ？ もしかしてその、それは……』

「希冴姫さん、お願いします！」

『そ、そんなっ！？ あ、あああああああああああああああああああああ』

あああああっ！？』

狂戦士の力が宿った希冴姫さんが、その剣を構え直します。

「くっ！？」

「まずは一枚目……ドローします！」

引いたカードは……。

「『切り札の騎士 キング』！ モンスターカードです！」

『あああああああああああああああああああっ！』

「ぐああああああっ!?!」

セツLP7300 5800

「二枚目、『切り札の騎士 ジャック』、モンスターカード!」

『やああああああああっ!』

「ぐがっ…………あ」

セツLP5800 4300

希冴姫さんがセツの眼前で、狂ったように剣を振るいます。

「三枚目…………! 『切り札の騎士 テンス』!」

『おおおおおおおおおっ!』

「つ…………が!?!」

セツLP4300 2800

「四枚目…………! 『冥王竜ヴァンダルギオン』、モンスターカードです!」

『…………ッ!』

「ア…………ア…………」

セツLP2800 1300

「これで…………最後です!」

「っ!」

その時、膝を着いていたセツの目が力を取り戻し、ギツ! と睨みつけてきました。

「っ…………! 五枚目は…………魔法カード、です」

その気迫に恐れてしまったのか、私が最後にドロ―したのは魔法カード『光神化』。セツのライフは、1300残りました。

『あ、あああ…………あ?』

瞳から狂気の色が消え、カクンと膝を着く希冴姫さんを、セツが抱きとめます。

「……………」

『せ、セツ…………様?』

「……………おはよう。希冴姫」

『え…………?』

「……ッ」

痛みをこらえるように立ち上がるセツ。その目には……理性の光。私たちの良く知る……穏やかな、セツの顔。

「……いつかのバズーカといい、お前の目覚ましは何時も苛烈だな……アテナ」

「あ……」

セ、ツ……？

「お、お兄……ちゃん？」

「久しぶり……って言えばいいのか？ さだめ。皆も」

「せ、セツ……記憶、が？」

私は、震える手を伸ばし、セツに問いかけます。セツは、悪戯っぽい微笑を浮かべて答えます。

「……誰かさんが、随分強烈過ぎる目覚ましをしてくれたから、な」

「セツ……！」

戻って、来てくれた……！ やっと、やっと……私たちの、セツが……！

『セツ（くん・先輩）！』

「お兄ちゃん……」

中でも、さだめさんは安堵のあまり座り込んでしまっています。

よかった……本当に……。

「セ、セツ……お前、大丈夫、か？」

「剣士か。お前と凛には、悪いことをした。謝っても謝りきれん」

「い、いやオレらのことは別に良い。こうして、何ともなかったんだ。今更蒸し返しやしねえよ。けど……」

「そ、そうですね！ 先輩、身体の方は……」

そうですね。不可抗力とはいえ（強調）、セツの身体は9000近いダメージを纏めて受けてしまっている筈……。しかし私たちの心配を余所に、セツは軽く笑って手を振ります。

「ん？ ああ、大丈夫大丈夫。こんな全然大したことなごぶあつ！？」

「血が!？」

「お、お兄ちゃん……ん!?」

「セツ……!?」

セツが会話の最中に、おびたしい量の血を吐いて蹲ります。え、えと……。

「もしかして……私?」

『もしかなくてもお前の所為だ!』

「ひゃうっ!？」

恐る恐る呟いた私に、皆さんから一斉にツッコミが入りました。だ、だって……。

「ああするしかなかったんですよ! ああでもしないと、セツのライフを削れなかったですし……!」

「限度があるよ!」

「そもそもあんなカード入れんな!」

「う、うう……!」

非難轟々のなか、セツが口元を押さえつつ立ち上がります。

「っ……っ……だ、だいじょうぶ。俺は、平気だ」

「い、いやだってお兄ちゃん! 今、血がビシヤアって!『ごぶあつ!?!』って!」

「『ぐはっ!?!』くらいなら兎も角……!」

「うん……『ごぶあつ!?!』はマズイよ……!」

「血の量も……ボタボタ、とかいう可愛いもんじゃなかっただろ」

「……バケツ一杯分ひっくり返したような音」

「それ、致死量なんじゃ……!」

セツ以外の全員が大慌てでセツの心配をする中、セツ自身は一人だけ冷静に口元の血を拭きます。

「だから、大丈夫だ。俺は、やせ我慢なら昔から得意なんだ」

「ほらやっぱりやせ我慢じゃん! ほらアテナ! さっさとターン終了してお兄ちゃんにターン回して! お兄ちゃんはさっさとサレンドーする!」

「は、はい！ ターンエンドです！ セツ！」

「……俺の、ターンか」

さっきの『バーサーカーソウル狂戦士の魂』では、ギリギリセツのライフを削りきれませんでした。まあそれで記憶は戻ってくれたので、結果オーライとして……。

『ジロツ！』

け、結果オーライとして！ 当初の目的だったセツにサレンダーを促した私たちでしたが、セツは自分にターンが回って来ても中々サレンダーしようとはせず、何かに耐えるように眉間にしわを寄せていました。

「セツ……？」

「すまん。アテナ、皆」

え……と疑問に思うよりも早く、セツはその手をデッキに掛けました。

「え、セ、セツ……？」

「お兄ちゃん……」

それは、どう見てもサレンダーの体勢ではなく……ドローの格好。戦意の籠った眼。困惑する私たちに、セツは悲しげに告げました。

「俺の記憶は戻った。皆のこと、全部思い出した。けど……けど俺は」

喜びの絶頂にあつた私たちを、一気にどん底まで突き落とす、その言葉を。

「それでも俺は……皆の敵だ」

第四期第三十一話「心を届けて」（後書き）

セツ「おれは しょうきに もどった！」

こんにちは。上記の台詞は皆さんご存じの裏切りネタ。……知ってますよね？

……まあ、言いたいことは多々あるでしょうね。主に『狂戦士の魂』とか『狂戦士の魂』とか『狂戦士の魂』とか。

アテナのデッキには、マッチしてるんです。モンスター多めのアテナデッキには。テテユスみたいな感じで。

アテナ王様化計画進行中。あんなバランス崩壊したデッキを回したり『狂戦士の魂』使ったり……一体このメインヒロイン（爆）はどこに向かっているんでしょうか。そろそろ、しゃれにならんぞ……。

内容的には、なんとか主要な精霊は全部出せました。最後無理矢理バーサーカーソウルで出しましたが。それでも枠が足りずに出れなかった精霊もいますが。

最後の締めが、こんなのでいいのだろうか……。

ラストの方で指摘のあった『巨大化』関連の数値間違いを修正しました。

それでは、悠でした！

第四期第三十二話「心を重ねて」（前書き）

さ「な〜っにな〜っにな〜っにな〜っ！」

ル「今回は、これ」

『反魂のスピリチュア』

さ「アテナ自身を象徴するカードだね」

ル「対闇属性だと、圧倒的なアドバンテージ能力を有する退魔の女神」

さ「その分、攻撃力は低いし、闇属性じゃない相手だとただのバニラになっちゃうからかなり相手を選ぶんだけだね」

……遅くなりました！　なんとか、なんとか自分の誕生日には間に合わせました！　今回は妥協せずに書きたかったのと、来る夏の祭典に向けてバイトに明け暮れていたのが原因です。言い訳ですけども。

とにもかくにも、セツ編クライマックスの第四期第三十二話。どうぞお楽しみください。

第四期第三十二話「心を重ねて」

アルカナく切り札の騎士」

第四期第三十二話「心を重ねて」

それでも俺は、皆の敵だ。

その言葉の意味が、まったく理解できなかったのは、どうやら私だけではなかったようです。私の後ろで、今にもセツに駆け寄って行きそうだったさだめさんをはじめとする皆、セツが何を言っているのかわからないといった様子で呆然としていました。

「どういう、こと……?」

「……俺は、記憶を取り戻して尚、エンヴィーの騎士だ。さだめ」
「だから、どうということなの!？」

理解できない、というようにさだめさんが叫びます。

「さだめ……」

セツはさだめさんを見て、苦しそうに唇を噛みしめます。

「……逆に、聞くぞ。俺に……この俺に、エンヴィーを倒せると思
うか? なあ、さだめ。お前なら、わかるんじゃないか？」

「そんなのわかるわけ……っ!？」

殆どムキになって言い返そうとしたさだめさんの勢いが、唐突に止まります。そして、顔が真っ青に。

「ただ、俺を愛して……それ以外には何も要らなくて……遍く全てに嫌われ憎まれ恐れられ……そんなエンヴィーを、俺が」

次にセツは、私に顔を向けます。

「アテナ。お前たちが、俺のためにここまでしてくれたこと、凄く感謝している」

「なん……ですか、それ。まるで、まるで……」

それじゃまるで、お別れの、言葉みたいな……。

「だけど、ここまでだ。アテナ。お前たちは人間界に帰れ。俺のことなんて忘れて、平和に生きてくれ」

「な……」

なにを……。

「何を言ってるんですかっ!? セツを忘れるなんて、そんなこと出来るわけがないでしょう!? 大体、エンヴィーを放って帰ったって、世界が……!」

「俺と一緒に居れば、エンヴィーは安定する。世界の滅びは避けられないかもしれないが……時間は稼げる。皆が、天寿を全うするくらいまで、俺が保たせてみせる」

「っそういふ問題じゃ……!」

反論しようとしてはますが、セツは首を振って私の言葉を遮ります。

「ダメなんだよ。アテナ。俺には、無理だ。俺に、エンヴィーを傷つけることは出来ない」

「お前が……」

それまで後ろで見ていた剣士さんが、拳を握って反論します。

「お前が出来ないっていうなら、オレたちがやる! オレたちだって強くなった! 必ず、お前の代わりにエンヴィーを……!」

「……そうだな」

セツは眼を伏せ、悲しげに答えます。

「確かに、皆は強くなった。例外なく、俺と会った時の皆とは見違えるようだ」

「だったら……!」

「だけど、俺は変わらない。昔から、ずっと俺だけは、一つも成長出来ていない。昔と同じ……バカなままだ」

苦しげに吐き捨てるセツ。

「お前らがエンヴィーを害そうと言うのなら、俺は皆の敵になる。俺には、自分の手でエンヴィーを傷つけることも、エンヴィーが傷つけられるのを傍観することも出来ない」

「どうして、そこまで……」

先ほどから顔を青くして黙ったままのさだめさんも含めて、私には全然わかりませんでした。セツが、変わっていない？ バカなまま？ 一体……。

「……こう言えば、わかりやすいか。アテナ」

セツの目が、スツと細められます。感情の宿らないその目には、見覚えがあります。あれは、あの目は……。

「俺は、エンヴィーのために、お前を振るよ。今度こそ、さよならだ」

「……………あ」

思い、出しました。そう。セツのあの目は……この状況は、あの時と同じ……。

『……………悪い、アテナ。俺がここで、お前の気持ちに答えたら……あいつは、さだめは支えを失って壊れる。俺は……あいつのために、お前を振るよ』

「……………っ！」

私は、頭にカツと血が上るのを感じました。

「ふっ……ざけないください！」

ダンッ、と足を地面に叩きつけて、私はセツを怒鳴りつけます。

「すまない。アテナ。お前が怒るのも当然だ。俺は、お前の気持ちを踏みにじった」

「そんなことはどうでもいいんです！」

「な、なに？」

全然わかっていないセツに、私は更に語気を強めて怒ります。

「私が怒っているのは、セツが嘘をついているからです！ そんな、そんな苦しそうで、泣きそうな顔で振られたって、なんとも思いませんよ！」

「アテナ……」

「もし、例え万が一！ セツが本心から私を振るなら、仕方ありません。散々泣いてまた改めてアタックすることにします！」

後ろから「あ、それでも諦める気はないんだ……」と呆れたような声が聞こえてきましたが、無視します。当然です。私はもう、セツが例え私以外の誰かと一緒になったとしても、一生セツを追いかけ続けます。今度は「ストーカー……」とか聞こえてきましたが、無視します。

「今の私の気分、わかりますか？……最低の告白を受けた気分です」
嘘の“嫌い”は“好き”の裏返し。そんなことは子供でもわかります。

「いいですか？ セツは私が……私たちが好きですよ。間違いありません」

我ながら凄いい台詞です。ですが、今のセツはどう見てもそんなんですから、仕方がありません。

「そんな、ことは……俺は」

「セツ。隠しごとが得意なセツが、そんなにわかりやすい嘘を吐くんです。それくらい、好きになってくれてたんですよね？ セツですら隠しきれないくらいに」

確認、というよりは断定。自分でこんなこと言つのもどうかとは思いますが……。

「……ああ。そうだ」

セツは、やはり苦しそうで、小さく頷きました。

「俺は……みんなが好きだ。愛している。心の底から……狂おしいほど」

……ああ。

「……どうして、でしょうね」

ずっと、待ち望んだ言葉だったはずなのに。

「今は、凄く虚しく響きます」

それは、きつと私たちとセツの心が重なっていないから。すれ違ったまま、どんな言葉を聞いたとしても、それはただ悲しみが増すだけでしかないでしょう。

「貴方の言葉を、心を、聞かせてください。セツ」

「……………」

しかし、セツは静かに首を振り、黙して語りません。

「……………どうしてですか？ どうして、貴方は何も言ってくれないんですか？」

思えば、セツが私たちに弱音を吐いたところなんて、殆ど見た記憶がありません。

「セツは、何時も毅然と、堂々としていて……………」
けれど。

「辛かったんでしょう？ 苦しかったんでしょう？ だったらそう言えばいいんです。助けて欲しいければ、そう言えばいいんです。セツが助けを求めれば、私たちは万難を排してセツの助けになります。なのに……………」

セツは決して、弱音を吐かない。強い自分を私たちにずっと見せていて……………それでも、その裏で一人傷つき苦しんでいる。

「そんな……………そんな、血反吐を吐くまで頑張つて……………どうして、助けを求めなかったんですか」

「……………そんなの、当然だ」

「当然？ どうしてですか？ 私たちは、そんなに頼りになりませんか？ 私たちは、セツの足手纏いでしかなかったんですか？」

「俺は……………！」

キツ、と強い視線を向けてきたセツは、口の端から血が零れるのも意に介さず、強く叫びました。

「どれほど血反吐を吐こうとも、弱音を吐くよりよほどいい……………！」
「セツ……………！」

「血反吐くらい、いくらだって吐いてやる。そんなもんは、精神力でどうとでもなる。けどな……弱音を吐いたら心が死ぬんだ。そうしたら、身体はどんなに健康だったとしても動かない。身体の限界はねじ伏せられても、心が折れれば何も出来ない！」

信念、決意、理想、覚悟……そういつた全ての言葉が霞んでしまふほどに、強い想い。でも、でもそれは……。

「間違ってる。貴方は、それだけ強い想いを抱いていながら、向かうべき道を間違えている」

ルインさんの言う通りです。セツがどれほど正しく強い想いで動いていても、その想いを傾ける先が、世界の終焉なんて……絶対に間違っています。

「セツ、考え直してください！ 私たちと一緒に、終焉を止めましょう！ このままずると終焉に向かうに任せるなんて……そんなのは、エンヴィーだって……！」

「わかってるよ！」

セツは私の言葉を遮って、吐き捨てるように叫びます。

「わかってるんだよ……俺が間違っている。理性でも、感情でも、俺はお前たちと行くのがどう考えても正しい。それを、望んでいる……」

「それじゃあ、なんで」

頭ではわかっている。心も私たちのところにある。なら何が、セツをあちら側に留めているのでしょうか。

「俺の、今まで生きてきた軌跡。俺自身の人生。俺がここでお前らに着いたら、その全てが間違이었다ってことになる。俺には、今まで生きてきた“御堂切”を捨てることは、出来ない」

生きてきた……軌跡？

「わかってるだろう？ 今の状況は、かつてと同じだ。さだめを守りたい俺が、アテナを振った時と。その時だって、今と同じだったんだ。理性では、さだめが間違っていることなんてわかりきってた。感情でも、俺はアテナが好きだった。それでも俺は、拒絶した」

確かに……あの時と状況が似ていることは否定しません。でも……

「同じじゃ、ないよ」

「さだめ？」

「同じじゃないよ。お兄ちゃん」

さだめさんが、今にも泣きそうな、それでも必死に耐えているように……今のセツとそっくりな顔で前に進み出ました。

「確かに、似てはいるよ。さだめの立ち位置に、エンヴィーが居るだけ。でも……」

さだめさんは、大きく手を広げて、私たち全員を指し示しました。

「あの頃とは違う」

「違う……？」

「さだめには味方がお兄ちゃんしかいなくって。お兄ちゃんには、誰も味方が居なかった、あの頃とは全然違う。……見てよ」

もう一度、小さな身体を一杯に広げて、さだめさんは私たちを強調します。

「お兄ちゃんには、こんなに一杯味方がいるじゃない！ さだめにも出来たように、お兄ちゃんにも……トモダチ一杯いるじゃんかあ……！」

「さだめさん……」

最後は完全に涙声で、さだめさんは叫びました。そう。そうです。「セツが……セツ自身が例え、あの頃と変わっていなかったとしても。セツを取り巻く環境は、全く別物になってる筈です」

例え、本人が変わっていなかったとしても。

「全く変わらないものなんてないんです。セツ。あの頃のセツは、さだめさんを救いました。なら、今回だって出来る筈です。エンヴィーを救うことが。……今度は」

私たちと、一緒に。

「……前回は出来たこと。それなら」

セツはギリ、と歯軋りをして、叫びます。

「それなら、また俺一人でやる！ みんなは関係ない！ これは、俺の……！」

「セツ！」

今度は私が、セツの言葉を遮って叫びます。

「セツだけの問題じゃありません！ どうして……どうして一人で全部やるうとするんですか！ 弱音を吐かないというのなら、それでも良いです！ 差しのべられた手を、ただ掴んでくれるだけでいいんです！ なのになんで……！」

「俺が、傲慢プライドだからだ！」

「っ！？」

プライド。セツの罪。セツの、心の闇。

「お前たちが、俺に依存していた。俺は、それを知っていた」

依存……。確かに私たちは、みんな多かれ少なかれセツに依存していました。

「俺は、お前たちが依存してくれることを望んでいた。俺……では生きていけない程に、依存してくれることを」

「せ、セツ……！」

「俺という精神的な支柱を必要とするように。俺と言う存在を、その心の奥の奥まで刷り込むように……俺は、皆と接していた。恐らく、無意識の内に」

私たちの依存心が、セツによって導かれたものだった……？

「俺を頼れ。俺に任せる。俺に委ねろ。俺が守ってやる……お前たちは何もしなくていい。ただ、俺に身を任せていればそれでいい……」

……

セツは自嘲気味に笑い、決定的な言葉を放ちました。

「お前らは、俺が生かしてやる」

「っそれは……！」

あまりにも、傲慢。そう。確かに、誰かを守ってやる、どころではありませんでした。セツの、罪は。

「そんな……見下しているも同然の相手に、助けを求める……？」

不可能だな。俺が例え傲慢プライドでなかったとしても、そんなことは出来やしない」

セツは……。

「俺は、心の底では皆を、仲間とも、味方だとも思っちゃいなかった。……きつと、そういうことなんだろうな」

「セツ、お前……」

「そんな……」

剣士さんたちが、ショックを受けたように頂垂れる。

「……」

「アテナ？」

ですが私は、むしろセツの言葉に、突破口を見つけた気がします。

「……セツ」

「アテナ。これでわかっただろ。俺は、差しのべられた手を掴む、なんてこと出来やしないんだ。傲慢だから。俺が、手を差し伸べる側でしかあり得ないから」

「……それが、セツの心の闇だというのが」

私はセツに、デュエルディスクを突きつけます。

「アテナ……？」

「引いてください。セツ。セツの……ターンです」

「なに……？」

セツが私たちを、対等に見ていないというのが。見下しているというのが。というのなら。

「思い知らせてやればいいんです。セツ。貴方が……決して強くはないことを」

お互いに、ライフは互角。手札も互いにゼロ。フィールドは私の方が有利ですが、攻撃力1500の希冴姫さんと、たった800でしかない私……。アドバンテージと言えるかどうかは微妙です。

「さあ、セツ。引いてください。そして勝って見せてください。できるものなら」

私はあくまでも強気に、セツに迫ります。

「今の状況はわかるでしょう？ セツのドロ―如何で、このデュエルの勝敗が着きます。ですから……」

「俺の、ドロ―次第か」

「はい。ここでセツが、私の残りライフ1100ポイントを削り切れれば、セツの勝ち。セツの好きなようにしてください。でも」

それでも尚、セツが逆転出来なかったなら。私が、このまま勝利したなら。

「……認めざるを得ない筈です。私たちが、決してセツのお荷物ではないことを。セツを支え、共に歩くことの出来る……仲間だということを」

セツが、今までの自分を捨てられないというのなら。

「私が粉碎してあげます。過去のしがらみに囚われて、心でも理性でも動けないのなら、私が無理矢理にでも、力尽くで動かして見せます。だから、だからセツ」

「アテナ……」

「……引いてください、セツ。セツのデッキは、必ず応えてくれます。セツの心に。セツが……本当に望んでいる答えに」

「俺の……」

セツは導かれるように、デッキに指を伸ばします。

「……わかってるのか？ これは、大分俺に有利な賭けだぞ」

「だからこそ、それを乗り越えて勝利することに意味があります。私が、勝ちます」

セツの想い。そして私たちの想い。セツのデッキが紡いでくれる筈です。

「私たちとセツの……未来を」

「……」

セツは暫し眼を閉じて、何事か考え込んでいるようでした。

「……そうだな」

「……」

「どうせ、どんなに押し問答したところで、お互い考えを変えやし

ないんだ。だったら、いつそ身を任せてみようか……運命に」

「じゃあ……！」

「決着を着けよう。アテナ。俺が勝つか、お前が勝つか。このドロ
ーできつと、全てが決まる」

「……はい！」

セツがデッキに指をかけます。その様子を、固唾を呑んで見守る
私たち。誰かがゴクリ、と唾を呑みこむ音。

「俺の……ドロー……！」

ピッ！ と軽い音を立て、デッキから一枚のカードが引き抜かれ
ます。

「俺は……」

セツがそのカードをゆっくりと眺め……フツ、と微笑みます。

「っ！？」

まさか……！

戦慄する私たちに、セツは笑顔で、こう言いました。

「……どうやら、これが俺の、運命だったみたいだ」

「っ何を……！」

セツは引いたカードを、デッキの魔法・罫ゾーンに差し込みます。

「俺は、手札から魔法カード……『火炎地獄』を発動する！」

「火炎……」

「地獄……？」

セツの宣言したカード名に、私たちは暫し頭が真っ白になりまし
た。

「……魔法カード『火炎地獄』は、相手ライフに1000ポイント。
俺のライフに500ポイントのダメージを与えるバーンカード……
俺は」

ゴウツ、と私とセツの周囲に炎が舞います。

「俺は……こうなることを望んだのか。アテナ」

「きゃああああああああああっ！？」

アテナLP1100 100

セツLP1300 800

炎が消え、あとに残ったのは首の皮一枚で繋がった私のライフと……丁度800という数値で止まった、セツのライフ。

「セツ……」

「俺は、ターンエンドだ。……やってくれ。アテナ」

どこかすつきりとした表情で、セツは両手をだらりと下げます。

「残り……800」

私は自分の手を眺め、強く握ります。

「……わかりました。思いつきり行きますよ。セツ！」

「ああ……来い！ アテナ！」

「私の、ターン！」

引いたカードを、今更確認はしません。私がこれからすることは、たった一つ！

「バトル！ 私は、私自身……『反魂のスピリチュア』で、セツにダイレクトアタック！ 『トライデント・サンシャイン』」

「……」

スピリチュアが掲げた槍が、強い輝きを持って投擲されます。セツは、両手を広げて槍を受けとめました。

「ぐっ……おおおおおおああああああっ……」

セツLP800 0

「あっ……が、はっ！」

『セツ（お兄ちゃん）！』

ガクン、と膝を着いたセツに、私たちは駆け寄ります。

「アテナ……」

膝を着いたセツは、それでも倒れることなく私たちを迎えてくれます。

「セツ……！」

「強く、なつたな……」

そして、セツは何処か吹っ切れたように、満面の笑顔でこう、呟きました。

「俺の……負けだ」
セツの頬を、雫が一筋、流れ落ちて行きました。

第四期第三十二話「心を重ねて」（後書き）

こんにちは。

はい。というわけで、ようやくセツ編がこれにて終了しました。そしてついに、次回からは終焉、エンヴィー編に入ることになります！

今回のラスト、前回ちょっと『巨大化』関連で修正したことで、どうなるか心配してくれた人たちもいたんですが、ご覧の通りになりました。当初のプロットでは、ラストセツが『火炎地獄』を使って疑似サレンダーみたいな感じにするつもりでした。もうちょっと前は、『火炎地獄』でアテナとセツのライフが共にゼロ。つまり引き分けて終わらせようかとも考えていたんですが、けがの功名と言いますか、結果的には一番上手く纏まったんじゃないかな、と思います。

以下、没小ネタ。ラストの余韻を壊す確率百パーセントなので、余韻が冷めてから、或いはそれでも読む！ という方のみお進みください。

「私のターン、ドロー！」

引いたカードは……サイクロイドさん。

『ようよう嬢ちゃん、おれっちの攻撃力も丁度800だったりするんだけどそこから辺どーよ!?!』

「……………」
『今のおれっちにはわかる…………! おれっちが皆の旅に着いてきたのは、きつとこのためだったのよ! そう、頑固者の兄さんを、この手でぶっ飛ばして目を覚ましてやるためになあ!』

「さ、サイクロイドさん…………!」
『さあ、やってくれ嬢ちゃん…………! おれっちの…………ラスト・ウィリーを!』

「…………はいつ!」
私はサイクロイドさんのカードデュエルディスクにセットして、高らかに叫びます!

「私は、『サイクロイド』さんを攻撃表示で召喚! バトルします!」

「…………え、あ、アテナ?」
「サイクロイドさんで…………セツにダイレクトアタック!」ラスト・ウィリー!」

『行くぜ兄さん! 受け取れ! おれっちのこの熱き魂の一撃をお!』

「ちょ、ちょっと待っ…………おおおおおおおおっ!?!」
セツLP8000

「私たちの…………勝ちです!」
『目、覚めたかい? 兄さん』

「や、やっぱりお前は…………俺の天敵だ…………」
セツはそう言って、その場に崩れ落ちました。

…………それは、あり得たかもしれない物語。

……こういう展開も、あり得たんだよ！ ちよつと考えちゃったんだよ！ サイクロイドとか、丁度貪欲な壺でデツキに戻ってたし！ 攻撃力丁度800だし！……サイクロイドで始まりサイクロイドで終わる……以前感想で、サイクロイドがフィニッシャーになることを冗談交じりに話題にしたりしたこともありましたが……現実として、あり得た……っ！ ここに来てまさかのサイクロイドフィニッシュ……っ！

それでは、悠でした！

第四期第三十三話「対峙」(前書き)

さ「な〜っにつかな〜な〜につかなっ！」

ル「今回は、これ」

『終焉の餓狼』

ユ「終焉モンスター一枚だよ。まずは小手調べ、みたいなものかな〜？」

さ「え、あのユーキさん……？　ここ、さだめたちの……」

ユ「戦闘で破壊されるとデッキから。逆に戦闘で相手を倒せば墓地から同名モンスターをリクルートすることが出来る高性能なリクルーターだよ〜」

ル「……私たちの、コーナー……」

ユ「効果は強力だけど、一般的なリクルーターに及ばないステータスの低さが一番の問題。一番目の効果は兎も角、二つ目の効果を使うには他のカードで補助してあげる必要があるね〜。あ、詳しい効果はオリカ紹介に載ってるから、そっちも見て参考にしてね〜」

さ&ル「乗っ取られた……！？」

お久しぶりです悠です。なんかさだめとルインのコーナーがユーキちゃんに乗っ取られました。二人は効果を知らないから仕方ありません。

遂に対峙する終焉、エンヴィー。セツたちはエンヴィー相手にどうするのか。アルカナクライマックスです！

第四期第三十三話「対峙」

アルカナく切り札の騎士く

第四期第三十三話「対峙」

「ぐっ……」

俺は、痛み悲鳴を上げる身体を無理矢理動かし、立ち上がる。

「……無理しちゃだめ」

「痛っ……悪い、ルイン」

すぐに駆け寄ってきたルインが俺の身体を癒してくれる。それだけじゃ精々が応急処置にしかないが……十分だ。

「まずは……ありがとう。みんな。こんな、バカな男のために、手間をかけさせた」

「そんな……いいんですよ。それより、私こそすみません。その……大丈夫ですか？」

全て終わって、漸く散々に痛めつけた事実を思い出したのか、アテナがビクビクと、聞き辛そうに聞いてきた。

「……大丈夫だ、と言ったら、また嘘になるな」
「はう……」

尤も、俺としてはそんなアテナの様子に微笑ましさをすら感じているのだが……これは惚れた弱みかね。

しょんぼりと肩を落とすアテナに笑みを浮かべる。

「心配するな。確かにもう強がりでも大丈夫だとは言えないが……助けて、くれるんだろう？」

「あ……………」

俺の言葉に、俯いていたアテナはパツと顔を上げて、満面の笑顔を浮かべた。

「は、はい！」

そんなアテナの、輝かんばかりの笑顔に、今の俺はただ愛しさしか感じない。…………駄目だな。認めた途端、思考が色ボケしている。

「お兄ちゃん……………」

そんな自分自身に苦笑していると、おずおずといった様子でさだめが近寄ってきた。

「…………さだめ。お前にも心配かけたな」

本当に、コイツにとっては死ぬより辛い時間だった筈だ。自惚れでも何でもなく、さだめにとって俺は世界の中心であったはずなのだから。

「ほら。さだめ」

涙目になっっているさだめを、軽く手招きする。それだけで、さだめには十分だったようで、勢い良く飛びついてくる。

「お兄ちゃん…………お兄ちゃん、お兄ちゃんお兄ちゃん！ う、うああああああああああああああああああああん！」

「…………悪かったな。俺は今度こそ…………本当の意味で、お前を守るから……………」

今までの俺はただ、さだめを“飼って”いただけだ。自分に都合のいい、俺だけを求めるペットとして。自分の所業に、我ながら反吐が出る。

「守るなんてどうでもいい！ さだめは、さだめはただ、お兄ちゃんが傍に居てくれるならなんでもいいの！ だから、だから……………」

「ああ…………俺はもう、居なくなったりしないよ」

胸の中で泣き続けるさだめを抱きしめながら、俺は希冴姫に顔を向けた。

「セツ様……………」

「希冴姫。良かった。お前が生きていてくれて」

「そんな……わたくしは、わたくしは結局、騎士としても女としても、貴方を守ることが出来なかった……無意味に死んで、不必要な悲しみを、貴方に背負わせてしまいましたわ」

「それは違う。お前の死が、無意味だったわけじゃない」

そう。希冴姫は決して、無意味に一度死んだわけじゃない。

「ですが……結局わたくしは、セツ様を守れませんでした」

「違う。お前の死が無意味だったわけじゃなく……俺が、無意味なものにしてしまったんだ」

今こそこうして希冴姫と話すことが出来ているが、もしかしたらもう話せなかったかもしれない。

「……今だからわかる。誰かの死を、意味あるもの出来るかは、生きている奴にかかっているんだ。俺は……お前の死を、無意味なものに変えてしまった。本当に、すまない」

「セツ様……」

俯いてしまった希冴姫から顔を動かし、ルインを見る。その顔は、いつものように無表情で、しかし何処か安堵したものだった。

「……無事で良かった」

「ルイン。ありがとうな。そして、すまない。ルインの忠告を、もつと俺がすっかり聞いていれば、きっとこんなことにはならなかった筈なのに」

「……そんなこと、ない。私は……貴方を止められなかった」

俺のことを、良く理解してくれていたルインだからこそ、一番辛かっただろう。

「俺は……バカだな」

「……うん」

言葉少ななルインに対して、俺も一言に色々な意味を込めてそう呟く。ルインには、それでも十分伝わった様で、微笑んで頷いてくれた。

「ホント、馬鹿だ。こんなに深く、自分を理解してくれる奴がいるのに、俺は……」

俺自身が、誰も信用しようとしなかった。

「貴方は、もつと手を抜くことを覚えるべき」

「……だな」

手を抜く、か……確かに、殆ど考えたことなかったよ。

「……貴方は不思議。普段は頭が柔らかいのに、そんなところだけ頑固で生真面目」

「う、まあなんとというか……歪なんだろうな。我ながら」

頭が柔らかく、融通の利く表人格と、自分の立てた誓いのためだけに生きる頑固な本質と。長いこと表人格のまま生きてきたから、どちらが本物とも言えなくなつて、結果全体的に歪な人格構造になつてしまつているんだろう。

「自分のことなのに、随分他人事みたいに分析するね」

「ユーキちゃんか」

彼女にも、色々と謝らないといけない。俺はユーキちゃんに向き直り、軽く頭を下げた。

「ゴメン。ユーキちゃん。君を巻き込んだ」

「違うよセツくん」

「え？」

スパッと即否定されて、思わず間抜けな声を上げてしまう。それがおかしかつたのか、ユーキちゃんはクスリと笑つた。

「わたしはね。巻き込まれたかつたの。セツくん」

「巻き込まれたかつた……？」

オウム返しに聞き返す俺に、ユーキちゃんは微笑んで頷く。

「わたしは、セツくんが好き。好きな人が傷ついて、苦しんでいる時に、一人何も知らないままのほほんと過ごすなんて出来ないよ」

「む……」

相変わらず、ユーキちゃんからの告白、というものには弱い。思わず目を逸らす。

「それに……わたしは、エンヴィーのお姉ちゃんだから」

「……そっか」

もう他人事じゃない、つてことか。

「辛いことも沢山あった。一杯泣いたし、一杯苦しんだ。それでもわたしは、セツくんに会えて強くなれたし、少しだけだけど、自信も持てるようになった。大切なもの、一杯くれたの。だから、わたしは後悔なんてしてないよ」

「……ホントに、強くなったんだな。ユーキちゃん」

「ユーキちゃんを、普通の女の子、という枠に当てはめて考えるのは、もう逆に失礼なんだろうな。」

「ねえ、お兄ちゃん」

「そんな時、もぞもぞと腕の中でさだめが動いて声をかけてきた。」

「ん？ どうした、苦しかったか？」

「ううん。もつと強くてもいいくらい。そうじゃなくて」

「さだめはチラ、と俺の顔を見上げる。」

「お兄ちゃん、その血なんだけど……」

「え？ ああ、そうだな。何時までも血を垂らしてもみつともないよな。今拭いて」

「舐めていい？」

「良くねえよ！ なに！？ なんでこのタイミングでボケ！？ 脊髄反射的に突っ込んだけど、今漫才するタイミングじゃねえだろ！」

「いや、割かし真剣マクで」

「余計悪いわ！」

「さつきからこう、その血溜まりに顔突っ込んで血を啜りたくて身体が疼いてしょうがないんだけど」

「今日び吸血鬼でももつとエレガントに血を嗜むわ！」

「ちなみに首から吸うのもエレガントじゃないらしいが。……輸血パックからならいいんだろうか？」

「ワイングラスなら用意するよ？」

「どこから！？ つかさういう問題じゃない！」

「うん、わかった。じゃあ口移しで」

「さも妥協案のごとく極論持ちだすのはやめような？」

すっかり空気をブレイクされてしまい、やれやれと溜息を吐く。
対するさだめは何が嬉しいのか、にっこにっこ満面の笑みだ。

「いやーやっぱりお兄ちゃんのスツコミは心地良いね！ エースとかのも悪くないけど、下ネタ系だとノリノリで突っ込んでくれるのがアテナくらいしかいなくてさ」

「わ、私だつてノリノリで突っ込んだりしてないですよっ!？」

「その猫被り、いい加減誰も信用しなくなってるからね。エロ〜アテナエロ〜」

「さだめさん！」

「……俺がいない間、世話をかけたな。エース」

「……まあ、この我が不覚にも貴様を尊敬しそうになったことは否めないな」

「そりゃ相当だな。」

「ん？」

「ちよいちよい、と肩を突かれて、そちらに顔を向けると、ルインが声を潜めて語りかけてきた。

「……ああは言っているけど、貴方が居ない間、彼女はあんまりボケてなかった。むしろ……」

「みんなのこと、気遣ってくれてたんだろ？ 俺の、代わりに」

「こく、と頷くルインに、思わず苦笑する。つたく、あいつは……。」

「さっきのやり取りだつて、俺を含めてみんなを元気づける行動の一環だろうしな。いつからそんな気遣い出来るようになったんだか」

「流石、貴方の妹」

「ははっ」

自分がそこまで大した奴とは思っちゃいないが、さだめが誰にも誇れる、立派な妹に成長してくれたことが素直に嬉しい。何だかんだ、さだめのお陰で場の雰囲気は大分明るくなった。

「さて……」

俺は気を取り直し、全員の顔を順番に見やる。

「……行こう。エンヴィーのところに」

「でもセツ、身体は……」

「正直、大丈夫じゃないけどな。完治するのを待つ時間は正直、もう残っていない」

ユーキちゃんが去り、俺すらもいなくなったことにエンヴィーが気付けば、その時点で暴走が始まってもおかしくない。いや、十中八九始まるだろう。それくらい、エンヴィーは危うい。

「……だから、行くしかない。行って、エンヴィーに伝える。今の、俺の気持ちを」

「わたしも……」

ユーキちゃんが、真剣な目で俺を見つめる。

「わたしも、伝えないと。今、わたしはこんなにも満たされてるってこと。エンヴィーだって、絶対に今よりずっと幸せになれるんだってこと。伝えなきゃ」

「まさかまた、私たちを置いて行く、なんて言いませんよね？」

「……ああ」

本心を言えば、置いて行きたい。どうせ、向こうに行ってもデユエルするのは俺一人。皆を連れていく必要はない。だが……。

「もう、離れない。俺たちは、ずっと一緒だ」

同時に、離れたくない。ついて来て欲しいと心から思う。俺だけじゃ、きつと負けてしまふんだろうと思う。皆と一緒に行けば……。きつと、伝わるって信じてる。伝えるためには、みんな一緒じゃないとダメなんだ」

ひどく、穏やかな気分だ。気負うこともなく、ただ静かに、希望を持って未来を見れる。傲慢が心に巣食っていたときには、考えられない程に。

「さあ、準備は良いか？　あとは、クライマックスまで一直線だぞ」
『もちろん！』

全員の返事に満足し、俺はエンヴィーの居る所まで皆で跳んだ。

「あつ！ セツ帰って来……た……」

エンヴィーの居る所まで跳ぶと、俺の帰りをそわそわとしながら待っていたエンヴィーがパツ、と笑顔を見せて駆け寄り……表情を凍らせた。

「……誰。なんで、セツ以外の人たちが居るの」

一瞬で無表情になったエンヴィーは、そう言って後ずさる。

「エンヴィー、これは……」

「聞いて欲しいの。わたしたちは……」

「嫌ッ！」

俺とユキちゃんが代表してエンヴィーに話しかけたが、エンヴィーは更に一步後ずさって自分の身体を抱きしめた。

「セツ……？ どうして、その人たちがいるの……？ セツ、セツ

も……ボクを捨てるの……？」

「違う、エンヴィー俺は……」

「やめて！ ボクを……ボクを捨てないで！」

エンヴィーの言葉は、俺に問いかけているようで、全て自分の中で完結してしまっている。既に、俺の言葉に耳を貸す様子もない。

「エンヴィー聞いてくれ！ 俺はお前を……」

「煩い！ 煩い煩い煩い！ やっぱり、そうだ。みんな、ボクを捨てるんだ……ボクが、^{ボク}終焉だから……ボクは、独りぼっちなんだ」

エンヴィーの目は、既に焦点を失い、俺たちを見ていない。

「セツ……その、エンヴィーは……」

「……正直、エンヴィーは俺以上に追い詰められてるからな。しかし、俺以外の人間を見るだけでこうなるほどとは……思ってなかったが。俺のミスだな」

アテナたちを振り切つてでも、一度俺だけ、或いはユキちゃんと二人だけで話してみるべきだったかもしれない。けど、こうなつてしまつてはもう仕方ない。

「嫌だ……嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ！ ボクは……ボクは……」

頭を抱えて、髪を振り乱すエンヴィーに、俺は諦めずに声をかける。

「エンヴィー！」

「どうして……？ セツは、ボクを守ってくれるって言った！ 愛してくれるって言った！ 抱きしめてくれるって言ったのに！ どうして、そっちにいるの！？」

「守るために、愛するために、抱きしめてやるために！……俺はお前を救わなきゃいけない。救われないまま守っても、愛しても、抱きしめても。……意味がないことを知ったから」

「いらない！ 救いなんていらない！ だって、救いって死ぬことでしょうか？ ボク、知ってるよ。ボクの救いは死ぬことなんだって死ぬことが、ボクにとって一番の救いなんだって！」

「違う！ 死ぬことが救いだなんて、そんなことがあってたまるか！」

「煩い！……もう、いい。ボクを愛してくれないなら……ボクを、守ってくれないなら……みんな、みんな……」

「エンヴィー……！」

「みんな……死んじゃえ！」

エンヴィーが叫ぶと同時に、エンヴィーの腕に闇のデュエルディスクが出現し、周囲を闇が覆う。

「くそ……やるしかないのか」

「聞く耳持たないって感じだね。というか、持てないって言った方がいいのかな？」

さだめの言う通り、今のエンヴィーは周囲の言葉に耳を貸す余裕がない。多少荒療治にはなるが、一度落ち着かせるためにもデュエルするしかないだろう。

「……エンヴィー。絶対、助けてやるからな。デュエル！」

セツLP4000

エンヴィーLP4000

「ボクの、ターン。ドロー！」

闇色のデュエルディスクから、エンヴィーはカードをドロウした。
「ボクは『終焉の餓狼』を攻撃表示で召喚！ カードを一枚セットしてターンエンド！」

『終焉の餓狼』 ATK1300

「俺のターン、ドロウ！」

終焉モンスターか……。

以前ユーキちゃんが使ってきた時には負けてしまったことを思い出す。

「けど、今度は違うぞ」

使っていたのがユーキちゃんという事実。そして何より切り札の騎士の助力を得られる今は、そう簡単に負けはしない。

「俺は『切り札の騎士 クイーン』を攻撃表示で召喚！ バトルだ！」

『切り札の騎士 クイーン』 ATK1500

「希冴姫で『終焉の餓狼』を攻撃！ 『エレガント・ハーツ』！」
『行きますわ！ はあああああつ！』

希冴姫の振るう剣によって、闇色の獣が斬り伏せられる。

エンヴィーLP4000 3800

「やりました！ 先制です！」

「いや……」

無邪気に喜ぶアテナだが、終焉はそう簡単に終わらない。

「つ……『終焉の餓狼』が戦闘によって破壊された場合、デッキから同名モンスターを特殊召喚するよ」

『終焉の餓狼』 ATK1300

「リクルート効果持ち……！？」

「……俺はカードを二枚セット。ターンエンドだ」

前回の戦いから、餓狼の効果はわかっていた。だが、それでもあえてダメージを与えることを選択したのは……。

「かふつ……！？」

「セツ！？」

「血が……」

「……正直、あんまり長く立つてられそうにないな」

今も、視界が揺れてしょうがない。デュエルディスクを構えるだけでも一苦勞だった。

「そんな……!?」

「さだめが代わる！ お兄ちゃん、デュエルディスク貸して！」

「駄目だ。闇のデュエルがもう始まってしまっている以上、選手交代は出来ない」

「セツ、まさか……！」

「……俺の生きてきた二十年は、たった一度の負けですっかり変わるほど、軽いものじゃなくなってるな」

すまない、とは思う。結局、俺はまた無駄な自己犠牲でこの場に立っている。そのことに、酷い自己嫌悪すら覚える。だが……。

「それだけじゃない。どうあれ俺は、エンヴィーと決着を着ける役目を、他の誰にも任せはしなかった」

それに、考え方が全く変わらなかったわけでもない。

「でも……！」

「だから」

尚も不満そうにするアテナたちに、俺は微笑みかけた。少しでも安心して貰えるように。

「だから、アテナ。みんなも、頼む。俺を……支えてくれ。最後まで俺が、倒れることのないように」

「……………あ」

俺の言葉に、しばらくポカンとしていたアテナたちだが、すぐにその顔を苦笑に変えた。

「……全く、仕方ないね。お兄ちゃんも」

「ん〜でも、少しは改善の兆しあり、だよ〜？」

「……改心への道のりは遠そう」

『そこは、時間をかけるしかありませんわね』

「そのためにも、ここで負けて貰うわけにはいかんな」

スツ、と俺の背中にアテナの手が添えられる。

「……支えます。今はまだ、それだけしか出来ませんから。でも、きつといつか……」

いつか、俺がみんなを本当に頼れるようになったなら。

「……ああ。いつになるかはわからないけど、な」

俺はアテナたちに頷きを返し、改めてエンヴィーと向き合っていた。

第四期第三十三話「対峙」（後書き）

こんにちは。

なんか、ユーザTOPにアルカナがなくなっていてよもや削除されたか……！？ と激しく戦慄した悠です。その時の悠の動揺っぷりは凄かったです。え、ここまで来て！？ みたいな。また一から評価ポイントとか溜め直しかと思いましたが。そこまでポイントに拘っちゃいないですが、流石にここまで読者のみなさんと一緒に書き上げてきたアルカナが無に帰すとか、考えたくないですね。

ともあれ、なんとか更新自体は出来て何より。以下、内容補完です。

ようやくセツを本当の意味で取り戻したアテナたちですが、セツの本質自体はまだ改心しきってはいらないようです。でも、それも仕方ないです。セツも言ってますが、二十年間生きてきた価値観とか考え方が、コロツと変わるわけがないのですから。これから先続いていく未来で、ゆっくりと癒していくしかないでしょう。そのためにも、ここで負けるわけにもいきません。まだデュエルは始まったばかりですが、応援よろしくお願いします。

ところで、新しい禁止・制限……開闢が解禁されましたね。さだめ大喜び。ルインはorzです。そしてサイクロン無制限、だ……！？ 大嵐制限復帰といい、どうしてそれも永続カードを排斥するのか。永続は元より、フィールドも装備もユニオンとかすらも始めっから日陰ってたのにますます日陰になっていく……可哀想に。それでは、悠でした！

第四期第三十四話「俺に出来ること」(前書き)

さ「な〜っにつかな〜な〜っにつかな!？」

ル「今回は、これ」

『魂吸収』

さ「除外を条件に発動する、ライフゲインカードの中でも屈指の回復効率を誇るカードだね」

ル「『ネクロフェイス』や『大火葬』辺りと併用すると凄い」

さ「一番は『ヘルテンペスト』とのコンボかな？ 発動条件の所為でダメージがかさむ『ヘルテンペスト』だけど、まとめて回復出来るしね」

お久しぶりです！ お待たせしました！ エンヴィー戦の中編をお届けします！ 尚、今回はかなりオリカ祭りとなっておりますので、何かわからないことがあれば遠慮なく感想辺りでお尋ねください！

第四期第三十四話「俺に出来ること」

アルカナ（切り札の騎士）

第四期第三十四話「俺に出来ること」

「……ボクのターン。ドロ―」

俺たちのやり取りを見ていたのか見ていないのか、幾分激情は収まったエンヴィーがカードをドロ―する。

「ボクはモンスターを一体守備表示でセット。『ジ・エンド・ウルフ終焉の餓狼』を守備表示に変更してターンエンド」

『ジ・エンド・ウルフ終焉の餓狼』 DEF1000

激情の収まったエンヴィーは嫌に慎重だ。いや、焦らずとも、俺が自滅する可能性の方が高いのだから当たり前か。

「俺のターン、っ……ドロ―！」

カードをドロ―する度、体中を激痛が走る。だが、これくらいは今更だ。気にしちゃいけない。

「俺は『切り札の騎士 キング』を攻撃表示で召喚！ 効果によりデッキから『切り札の騎士 ジャック』を特殊召喚する！」

『切り札の騎士 キング』 ATK1600

『切り札の騎士 ジャック』 ATK1900

『主よ、無理をしないでぞ』

『貴方が死んで元も子もありません。くれぐれも、（ご）自愛を』

「ああ、わかつてる。俺は『アルカナソード ダイヤ』をジャックに装備。バトルだ！」

『切り札の騎士 ジャック』 ATK1900 2200

『終焉の餓狼』はリクルーター。倒しても次の餓狼が出てくるが、三銃士による波状攻撃なら全て討ち取れる！

『まずは希冴姫で『終焉の餓狼』を攻撃！』『エレガント・ハーツ』！』

『はあああああああつ！』

希冴姫の剣が闇の狼を切り裂く。

『無駄だよ。』『終焉の餓狼』はもう一体居る』

『終焉の餓狼』 DEF1000

『もう一度！ 今度はキングで『終焉の餓狼』を攻撃する！』

『わしを、老骨と侮るでないぞ。おおおおおつ！』

キングの剣は力強く狼を切り裂く。これで三体だ。これ以上は召喚されない！

『そしてジャックで守備モンスターを攻撃だ！』

『……御免ツ！』

ジャックが切り裂いたのは『終焉の精霊』と似た顔を持つ小さな闇の塊。

『終焉の僕』 DEF0

『あれは……』『終焉の僕』？』

『ユーキちゃん、知ってるのか？』

『うん。』『終焉の僕』は、戦闘で破壊されたとき、除外することでデッキからカードを一枚ドロウ出来るドロウ強化モンスターだよ』

『ユーキちゃんの言葉通り、エンヴィーはカードを除外して一枚ドロウしている。俺も『アルカナソード ダイヤ』の効果でカードを一枚ドロウする。』

『それに……』『終焉の餓狼』を三体とも倒しちゃったのは、ちょっとマズイよ』

『……どういうことだ？』

『ボクのターン！』

ユーキちゃんに詳細を尋ねる間もなく、エンヴィーがカードをド

ローする。

「ボクは、手札から永続魔法『魂吸収』を発動」

「『魂吸収』？」

『魂吸収』はカードが除外される度、一枚につき500ポイントライフを回復するゲインカード。前回のユーキちゃんとのデュエルでも思ったが、やはり除外軸なのか。

「ここで『魂吸収』！？ マズイよ。一気に回復されちゃう！」
「なに？」

ユーキちゃんが蒼白な顔で叫ぶ。エンヴィーが動く。

「ボクは墓地に存在する三体の『終焉の餓狼』を墓地融合する！」

「墓地融合！？」

墓地の『終焉の餓狼』が除外され、その魂がエンヴィーに吸収されて行く。

エンヴィーLP3800 5300

「……地獄に落ちた三匹の餓狼。互いにその屍肉を喰らい、混ざり合い、その身は一つ、三つ首を持つ魔獣へと変わる……『終焉の餓狼』は、墓地にリクルーターでありながら、墓地に溜まることを警戒しなくちゃいけないモンスター。『融合』の魔法カードを使うまでもないの。……出てくるよ。三頭狼が」

「ケルベロス……！？」

「融合召喚……！ 『終焉の三頭狼』！」

『ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！』

『終焉の三頭狼』 ATK1300

「な、なんだ……名前の割に攻撃力は『終焉の餓狼』と同じじゃん。希冴姫さんよりも低いし、脅かさないですよ」

安堵したようなさだめの言葉に、しかしユーキちゃんは首を振った。

「『終焉の三頭狼』は戦闘では破壊されない上、モンスターがいる限り一ターンに三度まで攻撃出来る効果を持つてる。それだけなら、単なるリクルーター潰しのモンスターだけど……」

なにか、あるのか。コンボカードが。

「ボクは手札から魔法カード『終焉思想』を発動」

「っ……やっぱり！」

聞き慣れぬカード名に、ユーキちゃんを見る。ユーキちゃんは俺たちに説明、というよりは自分で確認するように説明してくれた。

「……魔法カード『終焉思想』は、簡単に言えば『ジエノサイド・ウォー』の除外版。戦闘を行ったモンスターを、バトルフェイズ終了時に除外するの」

「除外か……！」

マズイ。希冴姫たちを除外されれば、アルカナが……！ それに『魂吸収』がある時にそんなに大量に除外されれば……。

「バトル！『終焉の三頭狼』ジ・エンド・ケルベロスで、セツの騎士を攻撃！『ヘル・エンドフアング』！」

「くっ……迎撃するしか！」

希冴姫たちは剣を構え、『終焉の三頭狼』ジ・エンド・ケルベロスを迎撃する。

「う……っ」

エンヴィーLP5300 3900

エンヴィーにダメージが入るが、『魂吸収』のゲイン効果の前ではあまり意味を為さない。

「全部……奪ってあげる。セツの大事なモノ……全部、全部……そうすれば、また抱きしめてくれるよね……？ ボクだけを見て、ボクだけを愛してくれるよね……？」

「ぐっ……きゃあああああっ！？」

「っ、これは……！？」

「ぬっっ！？」

「希冴姫っ！ ジャック！ キング！」

三銃士の足元から闇が這いより、希冴姫たちを呑みこんで行く。くっ……！

「エンヴィー……！」

座り込んだまま、ブツブツと呟くエンヴィーの目に、光はない。

希望も、ない。

「…………『終焉思想』の効果で、『終焉の三頭狼』ジ・エンド・ケルベロスを含めたモンスターは除外される。『魂吸収』の効果により、ボクはライフを2000ポイント回復する」

エンヴィーLP3900 5900

「全部、呑み込んであげる…………みんなみんな、ボクのモノになればいいんだ…………優しい闇の世界に抱かれて…………みんな、消えていく」

「…………それは、優しさじゃない。それは、絶望と諦観に満ちた終焉だ。終焉なんだよ。エンヴィー」

「わからない。わからないよセツ…………ボクには、なにもわからない」「いつかきつと、わかる日が来る！ だから、エンヴィー」

「煩い！ ボクは、ボクは一人だけいればいい。セツ、セツが一緒に居てくれるなら、他にはなにも、なにもいらない。いらないんだ…………！」

「エンヴィー！」

「ボクは『終焉の魔術師』ジ・エンド・マジシャンを攻撃表示で召喚！ カードを一枚セツトしてターンエンド」

『終焉の魔術師』 ATK1700

「気を付けてセツくん。『終焉の魔術師』ジ・エンド・マジシャンはカードが除外される度に、相手ライフに500ポイントのダメージを与えるモンスター。今のセツくんじゃ、何発も受けられない」

「…………ああ。わかったよ。ありがとうユーキちゃん」

幸い、ユーキちゃんが終焉モンスターを知っているお陰で情報は不足しない。

「俺のターン、ドロー…………っ!？」

「セツ！」

一瞬よろけた俺を、アテナが慌てて支えてくれる。くそ…………流石にキツイ。ドローを一回する度に魂ごと持って行かれそうになる。

「…………俺はカードを一枚セツトしてターンエンドだ」

今は、耐えるしかない。正直長引くと厳しいが、手がない以上は

仕方がない。

「ボクのターン、ドロー！」

エンヴィーも、墓地アドバンテージを大分失った。すぐに攻めてくるとも思えないが……。

「ボクはトラップカード『針虫の巣窟』を発動。デッキの上から五枚を墓地に送る」

「くっ……！？」

エンヴィーのデッキから五枚が墓地に送られる。送られたカードは『終焉の僕』、『終焉の死霊術師』、『腐り堕ちる世界』、『終焉の死神』、『終焉の夜王』の五枚。

「四枚がモンスターカード……これは」

「更に『終焉の精霊』を召喚。魔法カード『ブラック・ホール』！」「なっ！？」

「ぶ、『ブラック・ホール』！？」

「た、確か『終焉の精霊』の効果は……」

ことここに至って、アテナたちも終焉モンスターの特性を理解したようだ。

「墓地と除外ゾーンをフル活用した変則的な除外デッキ……！」

今、エンヴィーの除外ゾーンには五体の終焉モンスター。そして墓地に四体。フィールドに二体の計十一体。これが全て、エンヴィーの墓地に集まる……！？

「ユーキちゃん……教えてくれ。この状況で、一番不味い展開を」

「……………」

顔を悪くしていたユーキちゃんは、恐る恐る顔を上げて俺を見る。

「……間違いない。出てくるよ。わたしの知ってる中で、一番危険なモンスター……」

「切り札クラスか……！」

「名前は……」

ユーキちゃんがその名前を告げようとした瞬間、エンヴィーは墓

「ぐっ……ああああああああああっ!?!」

「きゃああああああっ!?!」

セツLP4000 3400

アルカナを貫通した混沌獣の咆哮が、俺を支えているアテナたちごと吹っ飛ばした。

「ぐっ、がはっ!?!」

「お兄ちゃんっ!」

たった600。それだけのダメージですら、今の俺には致命的な激痛を与えてくる。思わず膝をつきそうになる俺を、さだめが支えてくれた。

「……ボクはこれでターンエンド。エンドフェイズに除外されている三体の『ジ・エンド・ウルフ終焉の餓狼』と『ジ・エンド・ナイトキーパー終焉の夜王』、『ジ・エンド・ネクロマンサー終焉の死霊術師』を墓地に戻す」

……まさかとは思うが、次のターン二体目が出てくるとか言わないよな？

「くすっ! 安心してよセツ。混沌獣は強すぎる……ボクでも制御出来るのは一体だけ。これ以上従えることはできないから」

そいつは何より。とはいえ、一体だけでも相当キツイことに変わりはないが。

「俺の、ターン! ぐ……ドロー!」

まずは、兎に角あの化け物を倒さないことにはどうにもならないな……。

「……いや、だがそううつろたえる必要はないな」

沢山の効果を持つモンスター。確かにそれだけ聞けば強そうだが、決して倒せないレベルじゃない。

「冷静になれ。怪我も、痛みも、今はどうでもいい……」

大事なのは、今だ。

「俺はモンスターを一体、守備表示でセツト」

「守備表示……」

「けど、混沌獣は……」

貫通効果持ち。だが、仕方がない。今は、なんとかして耐えなければ。

「カードを二枚セットして、ターンエンドだ」

攻略する。あの凶獣を。救って見せる。エンヴィーを。

「ボクのターン、ドロー。バトル！」

「来るか！」

「シ・エンド・カオティック・キメラ」

「『終焉の混沌獣』で、セツの守備モンスターを攻撃！『カタスト

ロフ・スクリーム』！」

『主！』

俺に迫る混沌獣の咆哮を、テンスが身体を張って受け止める。

『ぐっ……おのれ！ ぐおおおっ！？』

「テンス！ くっ……トラップカード『ガード・ブロック』！ 戦

闘ダメージを無効にし、デッキからカードを一枚ドロウする！」

テンスを吹き飛ばした咆哮は、ギリギリ俺の眼前で結界によって受け止められる。

「ごぶっ……あ」

ダメージこそ防げたが、結界ごしに届くちよつとした振動だけで目の前が暗くなる。

くそ……目の前が、暗い……だが、負けん！

「俺、は……リバースカード『アルカナソード クローバー』を、発動……！ 切り札の騎士がやられたことで、『アルカナ ナイト ジョーカー』を、復活させる！」

『アルカナ ナイトジョーカー』 ATK3800 4500

「や、やった……！ 混沌獣の攻撃力を上回った！」

「けど、セツくん……！」

「だ、大丈夫……まだ、やれるさ」

嘘だ。もう目の前が霞んで殆ど見えない。今、ユーキちゃんの呼びかけに応えられただけでも奇跡的だった。

「……ボクは、カードを一枚セット。ターンエンド」

「お、れの……ターン。ぐっ……」

「しつかりしやがれ！ ドロー！」

「け、んじ……か？」

「お前、もう死にかけじゃねえか！ 本当はデュエル自体を代わってやりたいところだが……それは納得しねえだろうしな。せめて、ドローくらいは代わってやるよ」

「サンキュ、な……」

「礼は良い。兎に角、お前は死ぬな。いいか、絶対だぞ」

「わ、かってるよ……」

剣士からドローしたカードを受け取る。

「まずは……カードを一枚セットする」

カードをセットして、俺は混沌獣をキツと睨みつける。

「バトル……！ 『アルカナ ナイトジョーカー』で、『ジ・エンド・カオティック終焉の混沌獣^{キメラ}』を攻撃……！ 『ロイヤル・ストレート・スラッシュ』！」

「なにをやっても……無駄なんだよお！ 手札から『ライアー』を捨てて効果発動！ 戦闘を行う閻属性モンスターの攻撃力分、相手モンスターの攻撃力をダウンさせる！」

「そんなんっ!？」

「この効果が通つたら……！」

「通す、かよ……！ リバーズカードオープン！ カウンタートラップ『天罰』！ 手札の『ジャム・ウオリアー』を捨てることで、相手モンスター効果を無効にし、破壊する！」

「っ……！」

混沌獣の背に生えようとしていた墮天使の翼が、天からの裁きによつて粉碎される。俺は『ジャム・ウオリアー』の効果でカードを二枚ドローし、これで手札は三枚。

「これで、終わりだ……！ 混沌獣！」

「うっつ！」

エンヴィール LP 11400 11300

ダメージは微々たるものだが、これでなんとか混沌獣を倒すことも出来た。

「よし……！ 俺は、これでターンエンドだ」

「……………」

「エンヴィー？」

エンド宣言をしても、動きを見せないエンヴィーに、俺は声をかける。

「……………」

「え……？」

「終わったと……思った？」

「なっ……っ！？」

「ボクのターン、ドロー！」

不気味に呟くと、エンヴィーは勢い良くカードをドロウする。

「くっ……俺はリバースカードオープン！ 『サンダー・ブレイク』

！ 手札の『アルカナソード ハート』を捨てて『魂吸収』を破壊する！」

エンヴィーがどう動くにしろ、終焉デッキの特性上カードを除外する。なら、いい加減『魂吸収』をこれ以上残しておくことは出来ない。

「ボクは墓地の三体の『ジ・エンド・ウルフ終焉の餓狼』をゲームから除外して『ジ・エンド・ケルベロス終焉の三頭狼』を融合召喚！」

『ジ・エンド・ケルベロス終焉の三頭狼』 ATK1300

「今更三頭狼……？ もしかして、また『終焉思想』を……」

「いや、これは……………」

「更に手札から魔法カード『死者蘇生』！ ボクの墓地から『ジ・エンド・ネクロマンサー終焉の死霊術師』を守備表示で特殊召喚！」

『ジ・エンド・ネクロマンサー終焉の死霊術師』 DEF2000

「そして『終焉の死霊術師』のモンスター効果。墓地から闇属性モンスター一体を除外することで終焉モンスターを一体特殊召喚できる。ボクは『ジ・エンド・ナイトキパー終焉の夜王』を除外して『ジ・エンド・カオティック・キメラ終焉の混沌獣』を特殊召喚

！」

『ジ・エンド・カオティック・キメラ終焉の混沌獣』 ATK0

「モンスターを三体……！まさか、これは……！」

「ボクは、フィールド上に存在する三体の終焉を生贄に……」

「うそ……わたし、知らない。知らないよ……」

「ジ・エンド・ダイクネス『終焉の真闇』を召喚する！」

『ジ・エンド・ダイクネス終焉の真闇』 ATK6500

エンヴィーのフィールドに、闇が溢れた。

「攻撃力、6500……！」

「……お兄ちゃん」

「……ああ。わかってる」

「ヤバい、な」

剣士の言う通り、膝が震えそうになるほどのプレッシャーを感じる。

「だが、俺にはこうするしか出来ない」

「お兄ちゃん……？」

訝しげに声を上げるさだめたちから少し離れ、俺はエンヴィーの前で手を広げる。

「セツ!？」

「なにを……！」

「来い、エンヴィー。それが、お前の深淵……心の闇だとするなら、俺はその全てを受けとめてやる」

「セツ……？」

戸惑うように声を漏らすエンヴィー。俺は構わず続ける。

「言葉じゃ、何も変えられないから……」

「どれだけ言葉を尽くしても、人を信じることをやめてしまったエンヴィーには、きっと届かない。」

「けど、ただ力尽くで叩きのめしたって、当然なにも変わらない」

もし俺が、エンヴィーをこのデュエルで倒したとしても。エンヴィーの心を救わなければ意味がない。それは、ただエンヴィーを苦しめるだけだから。

「だから……」

俺には、これしかない。

「約束してくれ。エンヴィー。俺が、お前の全てを受けとめて……それでも尚、ここに立っていられたのなら……」

俺を、信じてくれ。

「……むり、だよ」

俺の言葉を聞いたエンヴィーは、いやいやと首を振る。

「むりだよ……セツ、死んじゃうよ……」

「死なない」

「死んじゃうよ！ 終焉は……ボク、は……世界だつて殺すんだ！ ただの人でしかないセツに耐え切れるはず、ない！」

「それでも、耐える。耐えて見せる。だからエンヴィー。お前の心に溜まった淀み……もやもやを、全部纏めてぶつけて来い！」

「セツ、いくらなんでも無茶です！」

「そうだよ！ 唯でさえセツくんは、さっきまでのデュエルでボロボロなのに……」

後ろからアテナたちも叫んでいるが、それでも俺は体勢を変えない。

「それでも……俺には、これしかないから」

昔から、そうだった。俺がさだめにしてやれたことってなんだろう。俺が、さだめを救えたとしたら、その理由はなんだろう。

「ずっと、考えてきた」

俺は、さだめの全てを受けとめた。どんな痛みも、苦しみも、屈辱も。全てこの身体で受け止めて、やっとあいつを救えた。なら……

…。

「お前も同じだ。エンヴィー。かつてのさだめと同じ……全部、俺が受け止めてやる。だから……」

「うるさい！ むりだったらむりなんだよ！」

「だったら、試してみれば良い！ 俺は、死なない……！」

全部、全部受け止めて……必ず、お前を救うから。

「さあ、来い！ エンヴィー！」

「う、ううわあああああああああああつ、バトルツツ！」
エンヴィーの宣言と同時に、フィールドが闇に包まれた。

第四期第三十四話「俺に出来ること」（後書き）

こんにちは。

まずはもう一度お詫びを。お待たせしてしまつてすみませんでした。かろうじて九月中には間に合いましたが、一ヶ月以上間が空いてしまったこと、深くお詫び申し上げます。理由は、仕事が忙しくなってきたのもありますが、クライマックス故に妥協したくなかったことと、あとは……すみません、九月はゲームが一杯で（爆）。お馴染みタッグフォースとかテイルズとか英雄伝説とか。精神と時の部屋が欲しいです……。

今回の終焉モンスター。この終焉シリーズがもしOCGにあった場合、間違いなくダムドが禁止になります（笑）。まさにダムド無双になりますから。使いまわしウマー。とりあえず、数が多いので若干時間を頂きますが、例によって活動報告とオリカ紹介にアップしておきます。

次回、エンヴィー戦クライマックス！ 圧倒的なエンヴィーの闇に、セツは耐えきれぬのか。そして、エンヴィーの心は……？
それでは、悠でした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7516j/>

アルカナ～切り札の騎士～

2011年10月1日03時17分発行